頂を目指す者

あちゃべ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
頂を目指す者

【Ｎコード】
Ｎ４８９８Ｊ

【作者名】
あちゃべ

【あらすじ】
これは、とある街に住む一人の青年『西条拓夜』の物語。
きっかけとなった幼なじみからの一言。

「ねぇ、拓夜もデュエルやらない？」

これは、そんな一言から始まった。
西条拓夜のデュエリストとして成長していく物語。

一枚のカード

キーンコーンカーンコーン

校内、そして教室中に終業のチャイムの音が響き渡る。
本日最後の授業が終了し、それと同時に訪れる放課後を生徒達は各人、各々の時間を過ごす。

「あぁ～っ！よく寝た……」

教室の窓際の席で大きく背伸びをする一人の男子学生。
彼の名は『西条拓夜』。

ここ、東区にある東区第七高等学校の三年生である。

背伸びをし終えた西条はノロノロと机の中のノートを鞄の中に仕舞い込む。

それを終えた西条は、教室の窓から見える東区の街並みを眺める。

遠くに見える他の地区との交差点の巨大な一本のタワー。

その周りにある商店街から頭を覗かせるビルや広告のバルーン。

少し中に入ると住宅街が広がっており、そのまま今自分が居る高校

へと道が続いている。

空は夕焼け色。

グランドの周りや街中に植えられた木々は少しずつ、秋の色を見せ始めている。

もうしばらくすればあっという間に日は沈むだろう。

西条は今度は教室の中を見渡してみる。

今は夏休みも終了し、９月に入って一週間が経った頃である。

高校三年生のこの時期は、大学や専門学校へ進学する為に受験勉強に勤しむ者や、就職活動に励む者と大きく分かれるのが主だ。だが、西条はそのどちらにも属さない。

西条は高校を卒業したら家の手伝いをする事になっているのだ。彼の家は東区にある商店街の小さなおもちゃ屋を営んでいる。

とりあえず進学するつもりも無ければ余所に働きに出るつもりも無い西条は再び机に俯せ、ボソッと呟いた。

「……ハァ、暇だな…」

すると次の瞬間、バスンッと西条の後頭部に何かが叩きつけられた

様な衝撃が走る。
そして完全無防備だった西条の鼻は机にメリッとめり込んだ。

「ぬゅあっ！！な、何しやがる！？」

西条が顔をあげると、そこには肩までの長さのある薄い茶色い髪の女の子が立っていた。
女の子は西条の前の席にあった椅子をこちらに向け、そこに座ると足を組みながら西条に話しかける。

「な～にが暇よ、この教室でそんな事を言ってるのはアンタだけよ？」

「何だ葉月か……珍しいな、お前から話しかけてくるのは」

「ま、そんな時だってあるわよ」

「お前…こんな所で油うってて良いのか？今日は塾の日じゃなかったか？」

「まぁ…確かに塾の日ではあるけど……ねぇ今夜、西条の家に行っても良い？」

「ん？…別に構わねーよ」

西条の返事を聞き、葉月と呼ばれた少女は「ヨシッ！！」と、小さくガッツポーズを作る。

「じゃ、塾が終わったらアンタの家に寄らせてもらうわ！」

葉月は椅子から立ち上がり、時計の針を確認する。

「げ、もうこんな時間！？」

慌てた様子で自分の鞄を掴み、葉月は駆け足で教室から出ていこうとする。

余程慌てていたのか、教室のドアを開けた後、葉月は西条に向き直り、大きな声で西条に告げた。

「遅くなったらゴメ～ン！！」

そしてそのままバタバタとその場から走り去って行った。

そんな葉月の様子を見て西条は「相変わらず慌ただしい奴…」と呟いた。

「さて、と……俺もぼちぼち帰りますか」

西条も自分の鞄を掴み席を立つと、教室にいた西条の友人の『結城雅一』が声をかけてきた。

「西条ちゃん、いつの間に葉月さんと仲良くなったんだ!?」

「え……何時の間にって、俺とあいつは昔からの付き合いだけど…？」

「昔から?」

「そう、昔からのご近所さん」

西条と結城はお互いに下校しながら話を続けた。

「ちょ、待ってくれよ西条ちゃん！昔からのご近所って…それって幼なじみって奴か！？」

「……そうか」

西条は階段の途中で立ち止まり、少しぼ～っと考えた後

「……俺とあいつって幼なじみだったんだ」

「西条ちゃん、それは絶対に葉月さんの前で言うなよ……しかし西条ちゃんがもうフラグが立ってたなんて…」

「フラグって…言っておくが俺と葉月はお前が思っている様な仲じゃねぇぞ？」

再び歩き出す2人。

「い～な～、幼なじみ…それも葉月さん、あんな可愛い子が幼なじ

みって……」

ジト目で西条を見る結城。

西条は照れるでもなく結城の視線に困った顔で返した。

「そんな目で見られてもなぁ…」

校舎を出て校門にさしかかった所で突然結城は「そうだ、今日は本屋に寄ろうと思っていたんだ！」と、用事を思い出したのかそこで二人は分かれた。

西条は一人になり、先の放課後での葉月の事を考えた。

『烏丸葉月』、東区の住宅街に住む女の子。

西条も葉月も、親同士が昔からの友人だったらしく、小さい時からちょくちょくお互いに遊んだりしていた。

小学校、中学校、そして高校と葉月とは一緒の学校に通ってはいたが、葉月はモテた。

まず容姿が良い。

そして行動力がある。

更にそんな中に時折見せる汐らしさがある。

勿論、成績も優秀だ。

人付き合いも良い方で、休み時間とかは誰かと必ず一緒に話している姿を見る。

そんな葉月は男女問わずに人気があった。

学校の男子達が言うにはそういう事らしい。

小学校の頃はよく一緒に帰ったりしていたが、中学校に入ると廊下ですれ違っても余り言葉を交わす事は少なくなった。

別にお互いがお互いを避けていた訳ではない。

ただ他の友達を見つけて、そいつ等と一緒に過ごしていただけだ。

そんな状態は高校に入ってからも続いた。

先の結城とは高校に入ってからの友人で、こいつはなかなか面白い。

話していても感情豊かに、話の内容を表現してくれる為、聞いていても飽きないのだ。

ちなみに、どうやらこの結城も葉月の事が好きらしい。

まぁ前に結城本人がそう言っていたのだが。

「っと、話を戻そう」

今言った様に、葉月はモテるのに誰かと交際しているといった話は全く聞かない。

それどころか、今まで言い寄って来た男達を全て粉砕、玉砕、大喝采しているらしい。

「まさか…この俺からの告白を待っているから、他の男子とは付き合わないのか？」

西条は口にした後、思わず自分に突っ込んだ。

「んな訳ねぇって……大体俺自身が、あいつの事を恋愛対象として見てねぇからな」

西条は頭をポリポリと掻き、信号で停まる。

そういえば今日あいつ来るって言っていたよな、部屋を掃除しておくか？

そして信号が赤から青に変わり、進み出す。

目の前には『おもちゃ屋サプライズ』の看板が見えてきた。

おもちゃ屋サプライズ。

そこは、西条の家でもあるのだ。

※

「ただいま～」

店の扉を潜り中に入ると、中には小さい子供達が今日も沢山来ていた。

そしてレジの所から「お帰りなさい」と母さんの声が聞こえた。

それだけ聞くと、西条は店の奥にある階段を登り、二階にある住居へと向かった。

自分の部屋に着くなり西条はベッドに体を横たわらせ、目を閉じる。

そしてしばらくした後、もぞもぞと起き上がり、部屋に散らかったゴミや本等を片付け始めた。

「……そういえば……」

両手に本を抱えながら西条は思った。

あいつ、一体何の用事があって俺の家に来るんだろ？

「まぁいっか、っと掃除掃除！」

掃除を再開した西条が一番苦労した事は、エロ本をどこに隠そうか？という事だった。

※

夜の九時を過ぎ、時計の長針が３０分を過ぎた頃……

ガンガンガンッ！！

店のシャッターが叩かれる音がした。

西条はその音でガバッとベッドから飛び起きた。

「誰だよ…ったく」

部屋から出て一階の店に向かうと、そこには西条の両親に囲まれて世間話をしている葉月の姿があった。

「おぅ、いらっしゃい」

シャッターの鍵を開けておくのを忘れていた事は敢えて言わずに、西条は片手を挙げる。

すると葉月はスタスタと西条に寄り、西条の頭を手刀で見事に割ってみせた。

「こらぁ！！あたしは来るって言っておいたのに、何で鍵が掛かっているのよ！！」

「んな事いってもお前、何時に来るか分からなかったからしょうがないだろ」

「ん、確かにそうだけど…」

二人の話を聞き、西条の父親『西条茂』は腕を組ながら葉月に尋ねる。

「何だ、葉月ちゃんが来ると知っていたなら、まだちゃんと店を開けておいたのに」

そして横に立つ母親の『西条智恵子』はあらあらと腰に手を当てて息子に対して

「そういう事はちゃんと言っておきなさい！」

「うっ……」

三人に睨まれた西条は、たじろぎながら頭を下げた。

「ご……ゴメンナサイ」

※

お茶は？お菓子は？と何かと葉月を構う両親に、葉月はそれを笑顔でやんわりと断った。

今、一階の店には西条と葉月の二人だけである。

葉月はさほど広くない店の中を歩きながら西条に話しかける。

「お店の中、結構……変わったね…」

西条はレジに用意してある椅子に座りながらそれに答えた。

「おもちゃ屋も毎日が戦争だよ、子供は絶えず新商品に目を光らせるし……人気がある商品とない商品とかなり分かれるからな」

「そうだね、子ども心って難しいもんね…」

店の中を一通り周り終えた葉月はレジにもたれかかり、懐かしむ様な目で店内を眺めている。

「…所でさ、今日はどうしたんだ?」

「何が?」

「何がじゃねぇよ、突然ここに来ても良いか…って、何かあったのか?」

「ん、ちょっと…ね」

葉月を見ると、彼女はある商品の欄をじっと見ているのに気が付いた。

西条もそちらを見ると、そこはカードゲームのコーナーが設置してある場所だった。

「ねぇ…拓夜、笑わないで聞いてくれるかな？」

「は？…何だよ、急に改まって……」

「……笑わないでよ」

更に念を押された西条は、いつもと様子の違う葉月を見て

「……分かった、笑わねぇよ」

「うん、実はね……あたし大分前からハマってる事があってね…」

「ハマってる…何に？」

「……カードゲーム」

一瞬、葉月が何を言っているのか理解出来なかった。

「え？」

「だからっ……カードゲームよ！」

カードゲーム……葉月が？

西条は葉月がカードゲームにハマってる事に対し、笑いよりもまず驚いた。

「……カードゲームか…」

「そ、そうよ！！悪い！？」

「いや別に悪くねぇだろ、それよりも何のカードゲームをやってんだ？」

「へ？」

西条の反応が自分の予想と違っていた為か、キョトンとした顔になる葉月。

「カードゲームって言ったって、色々な種類があるだろ？」

「え、えぇ…って、ちょっと待ってよ!!普通は引くでしょ!?あたしみたいな女の子がカードゲームなんかにハマってるなんて言われたら、多少なりとも驚いたりするでしょ!?何であんたはそんなケロッとしてるのよ!?」

顔を真っ赤にしながらレジカウンター越しに西条に詰め寄る葉月。

「んな事ねぇって、驚いたよ」

「そんな無表情で棒読みな言葉で言っても信用できないわよ!!」

「ハァ……」

西条はやれやれて溜め息を吐くと、葉月に対して問いかけた。

「あのなぁ、お前は一体何しにここに来たんだよ?」

「何しにって……」

「俺に、自分は今カードゲームにハマってますと言いに来ただけか?違うだろ、俺にその事を受け止めて欲しいから、言いに来たんじゃねぇのか?」

「うっ……」

「俺は構わねぇよ、お前が何してようが受け入れてやる…お前が楽しいんならそれで良いじゃねぇか」

「拓夜……」

少しの間、二人だけの空間をシンとした静寂が包み込む。

その静寂を破ったのは葉月の言葉だった。

「だって、恥ずかしいじゃない…年頃の女の子が、カードゲームをやってるなんて……」

「まぁ、クラスの他の女子達を見ても…カードゲームをやってそうな奴は居ないわな」

「本当は…もっと早くに拓夜に言いたかったんだよ……拓也と一緒に楽しめれたらって、ずっと思ってた……」

「別に言ってくれても良かったんだが…」

「だって拓夜、中学に入ってからあたしの事を避けてたでしょ？」

「は？」

「確かに中学の三年間は、拓夜と一度も同じクラスにはならなかったけど、廊下ですれ違った時とかあたしに声をかけてくれても良かったじゃない！？」

「おいおい…そりゃ誤解だぞ葉月、俺は別に避けてたつもりはねぇって！！…それに避けてたのはお前もそうじゃねぇか？」

「な、何でそうなる訳！？…あたしはそんな事ないわよ！！」

「……何かこの話を互いに言い合っても埒があかない気がする…」

「き、奇遇ね…あたしもそう思ってた所よ」

西条は立ち上がり、店内のカードゲームコーナーが設置してある場所まで行くと、葉月を手招きして呼び寄せる。

「んで、お前は何のカードにハマってんの？とりあえずウチにはこれらだけ取り扱ってるけど？」

葉月はガラスケースに展示されているカードのパックを見るや「これ」と速攻で一つのパックを指差した。

「これ……遊戯王カード、あたしはこれをずっとやってる」

「へぇ、結構メジャーな奴をやってんだな」

「うん……ねぇ、拓夜の店ではカードのシングル販売はしてないの？」

「シングル販売？……あぁ、確かこのカードゲームのシングル販売だけはしてあったはずだな…見たいのか？」

「うん、ねぇ見せて☆」

「おぅ、ならレジの所に来てくれ…確か奥の引き出しに……」

二人はレジカウンターまで移動すると、西条はレジ下の棚から数冊のカードファイルを取り出した。

「とりあえず……」

ドサッ

「ウチで扱ってんのは……」

ドサドサッ

「これ位だな」

レジカウンターに計１０冊のカードファイルが置かれる。

葉月は目をキラキラと輝かせながら「ありがとう」と言うと同時に、早速一冊のファイルをパラパラとめくり始めた。

パラパラパラパラ……

「……」

パラパラパラパラ……

「……」

パラパラパラパラ……

「……」

葉月はもの凄いスピードで次々とファイルに目を通していく。

その表情はとても楽しそうで、それを見ている西条はなんとなく嬉しかった。

それがつい、表情に出ていたのか葉月は西条の表情に気が付くと、その手を止めて尋ねてきた。

「あんた…何ニヤニヤしてんのよ」

「いや、何か嬉しくて…つい」

「嬉しい……？」

「あぁ、葉月の新しい一面を見れたと思うとな」

西条のその一言で葉月は顔を真っ赤に火照らせる。

「な、なな…何言ってるのよ！？」

「しかし、よっぽど好きなんだな…そのカードゲームが」

「え？」

「お前の表情がさ、何かこう…ファイルを見てる時の表情が凄く輝

いていたんだよ…何か新鮮で結構可愛かったな」

「……」

「んで、何か欲しいカードはあったのか？」

「……」

「お～い、人の話を聞いてるか～？」

葉月は顔だけでなく、首から指先まで真っ赤になりながら口をパクパクさせている。

「おい、大丈夫か？」

少し落ち着いたのか葉月は一度、深呼吸をしてから再び次のファイルを手に取り、それを捲り始める。

そして、その手が再び止まった。

「ちょっ！！拓夜、何これ！？」

「ん～？」

西条は葉月が開いているファイルのページを覗き見る。

そのページは米国版のカードファイルだった。

「このカード！！何でこんなに安いのよ！？」

「どれ？」

「これよ、これ！！米国版ウルトラレアの『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！このカードが６００円なんて安すぎよ！！」

「え、そうなの？」

「誰がどう見てもそうよ、普通だったら軽く１０００円は超えてるわ、はい！！」

そう言うと葉月はいつの間にか西条の前に６００円を出していた。

「へ？」

「買うわ、この『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

葉月さん、興奮しすぎで何か目がヤバいです。

…マジ怖いです。

「ま…まいど」

西条は葉月の気迫に気圧されながらレジ精算をして、葉月にそのカードを渡した。

「やったぁあ！！思わぬ収穫だわ！！」

「とりあえず落ち着け」

※

購入したカードを鞄の中に仕舞い込んだ葉月は、興奮覚めやらぬ感

じで西条に尋ねてきた。

「ねぇ、拓夜も決闘（デュエル）やらない？」

「え、……決闘？」

「絶対に楽しいよ！！一緒にやろ！？」

西条の手を取り、目をキラキラと輝かせる葉月。

そう言えば…さっき一緒にカードゲームをやりたかったと言ってたな……

「いいよ、やってみるわ」

「本当！？」

「とりあえずルールは一応理解してるし、ただ……」

「ただ……？」

「俺はカードを一枚も持ってない！」

「……」
「……」

あれ…俺…何か変な事言ったか？

「あんた…おもちゃ屋の人間なのに…持ってないの？ルールは知ってるのに持ってないの？」

「ルールはガキ共に教える為に覚えた、けど俺はカードは買った事ないしやった事もない！どうだ！？」

西条はエッヘンと腕を組み、誇らしげな態度を作る。と、葉月から本日二度目の手刀が西条の頭を割った。

「何誇ってんのよあんたは！！」

「痛っ！」

「あんた、今お小遣い残ってる？」

「え？あるけど…」

「じゃあそのお金で、何かパックかストラクチャーデッキを買いなさい！！」

「え、今！？」

「そうよ、今日が拓夜の決闘者（デュエリスト）デビューよ！！」

「デビューか、へへ…」

「まぁ最初は誰でもそうなんだけど、始めたばかりの頃はどうしてもデッキに必須なカードが不足しがちだわ、でも西条は大丈夫ね」

「は、何で？」

「あたし結構カードが余ってるのよ、少し位なら分けてあげるわよ」

「サンキュー、流石に店の人間だからって、店の商品をいじくる事はできないからな…」

「とりあえずどうする？ストラクチャーデッキを買ったらそのままの状態でも直ぐにデュエルができるわよ」

「ん～」

「逆にパックだと、１５０円のと３００円のがあるけど、それだけ買ってデッキを作るとなると難しいわ…必ずしも欲しいカードが中に入っているとは限らないからね」

「へぇ…そうなのか、難しいんだな」

「皆そうよ、そうして沢山あるカードの中から選び抜いたカード達がデッキになって、世界に一つだけ…自分だけのデッキが組みあがるの」

「……凄いな、葉月は」

「え？」

「今までそんな事、考えた事もなかった…そうか、自分だけのデッキか……」

西条はそう言うと、一つのパックに手を伸ばした。

「そのパックを買うのね、中に何が入ってるのか楽しみじゃない？」

楽しみ……？

そうか、この胸の高鳴りは……

西条は１５０円を自分で精算し、ハサミで丁寧にその封を切った。

楽しみなんだ…俺が初めて買ったパック！！

その中に入っているカード達との出会い！！

そして、二人でパックの中のカードを確認してみた。

１５０円のパックなので、中には５枚のカードが入っていた。

一枚目……

二枚目……

三枚目……

四枚目……

そして……

「お、この最後の一枚……文字が金色だ」

「凄いじゃない拓夜！たった１パックでウルトラレアを当てるなんて！」

「え、これが…ウルトラレア……」

「やったわね、拓夜！」

「このカードは…えぇっと……どらぐーんDえんど？」

この瞬間、西条拓夜の中での最強カードが決まった。

「決めた、俺…こいつを主軸としたデッキを作りたい…いや、作るぜ！」

「良いわね、そのモンスターの効果は強力よ！」

「へへ…楽しみだ……何か今、すっげぇワクワクするよ…でも、このどらぐーんDえんどは融合モンスターなんだよな？」

「そうよ、融合モンスターを召喚する為には、その融合素材となるモンスター達とそのモンスター達を融合させるカードが必要になるわ」

「って事は…こいつ単体じゃ出す事すら出来ない訳か」

「そうね、まだまだ集めなくちゃいけないカードが沢山あるわね」

「ん～」

西条は腕を組み、頭を悩ませる。

「フフ…結構悩むでしょ？」

「分からねぇ…どうやってコイツを生かす為のデッキを作れば良いのか……」

「とにかく、今の拓夜はカードを集める事から始めなくちゃ」

「だな……今夜はもう遅いし、ここまでにするか」

「え～」

「え～じゃねぇだろ、見ろよ」

西条は店の壁に付いている時計を指差した。

時刻は夜の１０時を過ぎていた。

「ウソ！？もうこんな時間だったの！！」

「今の内に親に電話をいれとけよ？とりあえず、今日は俺が家まで送ってやるからさ」

「うん、そうする…」

葉月は鞄から携帯電話を取り出して、電話を始めた。

その間に西条は、親に「葉月を送ってくる」と一言伝えて、自転車を出しに外へ出た。

ガチャン！

自転車の鍵を外し、自転車を引いて店の前に行くと、葉月がこちらに駆け寄ってきた。

「ありがと、…よっと！」

自転車の荷台に座る葉月。

西条はサドルに跨り、力強くペダルを漕いでいく。

「アハハハハ！！」

「？」

急に笑い出した葉月に西条は「どうした？」と、少し息を切らしながら尋ねる。

「拓夜と二人乗りって久しぶりかも！」

「小学校の時…以来だな…っ」

「あの頃は拓夜はまだチビ助だったもんね～」

「そうだったな、チビなりにっ…よくお前を後ろに乗せて…っ公園とか行ってたもんな」

二人を乗せた自転車は下り坂に入り、そのスピードが徐々に勢いを増していく。

「しっかり捕まってろよ！こっから東区一番の下り坂に突入するぞ！！」

「うん！！」

「いくぞ～…」

「ぁ……」

西条の腰にしがみついた葉月は、思わず声を漏らしかけた。

（拓夜の背中……大きくなってる……）

（……それに…あったかい……）

二人を乗せた自転車は、長い長い下り坂を一直線に駆け抜けていった。

西条の家から葉月の家まで、自転車で大体１０分程の時間で着く。
今、西条は葉月を自宅まで送った所であった。

「今日はありがとね、久しぶりに話せて楽しかった！」

「そうだな、俺もだ」

そう言うと西条は自転車に跨り、帰ろうとペダルを漕ごうとした時

「待って！？」

急に葉月に呼び止められた。

「何だ？…あぁ、挨拶してなかったな…じゃ、お休み～」

「うん、お休み～じゃない！！」

「うぉっ!?ちょ…葉月、そんな大声は近所迷惑になるぞ」

「あんたがそうさせたんでしょ」

全くもう…と、腕を組む葉月。

「ハハ…悪ぃ悪ぃ、んで…どうした?」

「ん、ああのさ…っ大した事じゃ…ないんだけど…」

大した事じゃないんなら帰る、とか言うと、それこそ葉月に殺されかねないと思った西条は、黙って話の続きを聞いた。

「また…拓夜の家に…行っても良いかな?」

顔を真っ赤に火照らせる葉月。

だが暗がりのせいか、西条からはその事が分からなかった。

「ああ、構わねぇよ。いつでも来たい時に来ればいいじゃん…昔みたいにさ」

屈託のない笑顔でそれに答える西条。

「うん、…ありがと」

「じゃ、お休み。また明日学校でな！」

「…うん！！」

葉月も笑顔でそれに応え、手を振り、西条を見送った。

どこまでも、どこまでも…

西条の姿が見えなくなるまで…

葉月は手を振り続けた。

※

ＰＰＰＰＰＰ……！！

翌朝、よく晴れた良い天気であった。

７：３０。

西条は眠たい目をこすりながらベッドからもぞもぞと這いずり出た。

ギャン！！

ベッドの下に置いてあった目覚まし時計を思いっきり叩きつける。

「あ～眠い、眠すぎる…」

西条はボソボソっと呟くと、再び布団の中に潜り込んだ。

昨夜、葉月を送ってから自宅に戻った西条は、葉月に誘われたカードゲームについてインターネットを使いずっと調べていた。

「このDえんどを上手く使っていくには……何のカードが必要なんだよ…」

デュエル初心者の西条にとって、この作業にはかなり頭を使った。

ルールは理解している。

だがそこから生まれてくる戦術までは知らなかった。

その為、見る情報(もの)全てが新鮮に感じて他ならなかったのだ。

その為、気が付いたらもう朝日が昇っていた…

「お休み、太陽…」

そして今に至る。

まぁ一言で言えば夜更かしだ。

再度、ベッドの上で布団にくるまった西条はそのままゆっくりと微睡みの中に沈んでいく…

…が

現実はそう甘くはない。

西条が二度寝している時、その部屋に向かってズンズンと地鳴りするような足音が近付いてきた。

その足音の主は西条の部屋の前で止まると、遠慮無しにドアを開き、部屋の中に入ってきた。

「…んごっ」

西条は部屋に誰かが入ってきたのにも気が付く事なく、普通に鼾をかいている…

「…だめだって…」

ゴロンと寝返りをうち

「…そんなに…」

はだけた布団から露わになるお腹をポリポリと掻き

「…アハ☆…」

「なぁにが『アハ☆』じゃい、このドラ息子ォオ！！！！」

部屋中に怒号が響き渡り、おもちゃ屋サプライズが大きく揺れる。

「ぅあ！？な、何だ？ほぇ？」

「ようやく起きたか拓夜、お前一晩中…部屋の明かりが点いていたが、一体なにをしとったんじゃい！！」

「へ？お…親父？何？何かあったのか？へ？は？」

物凄く惚けた表情と声で答える寝起きの西条拓夜。

彼のそんな様子に父親である西条茂は物凄く頭を悩ませた。

「さっさと顔を洗ってこい！！」

頭半分寝ぼけている西条は、「あれ、親父が何か言ってる？」みたいな気持ちで起き上がると、覚束ない足取りで洗面所へと向かっていった。

「全く…あんまり待たせるんじゃないぞ！？」

「ぁ～」

親父から何を言われたのか理解していない西条は、曖昧に返事をしてそのまま顔を洗った。

「ん、親父…何か言ってたか？……まぁいっか」

顔を洗い終えた西条はリビングへ向かい、その扉を開ける。

「おはよ～サン…ふぁぁ」

扉を開けるなり豪快に欠伸をする西条に、その場に居た家の面々はそれぞれに朝の挨拶をする。

「拓夜、さっさと朝ご飯を食べちゃいなさい！」

「ようやく顔を洗ってきたか」

「おはよ、拓夜」

「うぁ…ん、おはよ…」

西条はボケーッとしながら椅子に座り、テーブルに置いてあった菓子パンを手にとって、もふっとそれにかじりつく。

「真っ先にメロンパンに手を伸ばすなんて、相変わらずあんたはそれが好きね～」

「ん～、……っはぁ！？何で葉月がここに居んの！？」

え、どうして？

西条は両親の顔を見るが父親『西条茂』と、母親『西条智恵子』の二人は、別にそれがどうした？みたいな表情を作る。

「こら拓夜、人を指差さないで」

「お…悪ぃ、って…葉月、どうしてお前が朝の西条宅に居るわけ？寝起きのワタクシめにも分かる様にご説明をお願いします」

「別に…たまには一緒に登校してあげても良いかなって…思っただけよ」

「…は？」

「な、何よその表情（かお）は！？良いじゃない、もう高校生活もそんなに残ってる訳でもないんだし！少しはあんたにも華を持った高校生活を送らせてあげようとしてあげ」

「あ～はいはい、分かった分かった」

西条は葉月の言葉を軽く手を振って中断させると、手にしていたメロンパンにもふっとかぶりつく。

「く…あんたから話を振ってきたってのに…なんであんたがその話を勝手に終わらせてるのよ…」

葉月は握り拳がプルプルと震えているのを落ち着かせる為、用意されていたコーヒーを一気に飲み干した。

※

「拓夜のバカッ！！」

ガタっと席を立った葉月はそのまま外へと飛び出して行った。
へ？と唖然となる西条は一瞬、どうして葉月が飛び出して行ったのかが理解できなかった。

「何だ…あいつ」
「こぉのどアホォォオ！！！！」

ボコォ！！と強烈な拳骨が西条の頭に炸裂する。

「痛ってぇ！？…な、何すんだよ親父！？」

「さっさと葉月ちゃんの所へ行って謝ってこんかぁぁあ！！」

そのままの勢いで外に放り出された西条は、殴られた頭を片手で押さえながら、空いたもう片方の手で、自分の鞄と葉月の鞄を持った。

家の正面にある横断歩道まで行くと、反対側に葉月の姿が見えた。

葉月は西条と目が合うと、ぷいっと顔を逸らしてそのまま一人、走り去っていった。

「あ、ちょ…待てよ葉月ー！？」

横断歩道を渡ろうにも、赤信号なので直ぐに追いかける事も出来ず。

西条の目の前を車の群れが右に左にと通過していく。

西条は軽く溜め息を吐き、前を見ると、遠く離れた電柱の陰に葉月

が隠れる姿が見えた。

ちらちらとこちらの様子を窺う葉月の姿に西条はやれやれともう一度、軽く溜め息を吐いた。

「ったく……何がしたいんだよ、あいつは」

信号が赤から青に変わったのを確認した西条は、そのまま葉月の所へと真っ直ぐに進んだ。

※

それから学校に到着するまで二人の鬼ごっこが続いた。

西条の接近に葉月が気が付くと、葉月は全力で西条から離れる。

すると西条は葉月を追い掛けようと彼も懸命にその後を追う。

「ハァ…ハァ…ハァ……」

「ゼェ…ゼェ…ゼェ……」

校門の前で二人は両膝に手を突いて立ち止まる。

西条はぶっきらぼうに葉月の鞄を彼女に突きつけながら

「ゼェ…なんで…ゼェ…逃げてんだよっ」

鞄を受け取った葉月は校門にもたれ掛かって、鞄の中からハンカチを取り出し、汗を拭う。

「べっ別に…ハァ…ハァ…逃げて…ないっ」

「ゼェ…ま、いいけどさ…何だって…ふぅ」

西条は中庭にある水道まで歩き、そこの水を勢いよく飲んでいく。

水を飲み終えた西条は「ぷはぁ～、生き返った～！！」と、口元の水を拭いながら安堵の息をつく。

葉月も西条の側に寄り、彼と同じ様な仕草で水道水を飲みだした。

「ぷはぁ～！！うん、おいしぃ！！」

顔を上げた葉月は、西条が自分を見ている事に気づき、「な、何よ！？」とほんのりと頬を赤らめながら尋ねた。

「いや、今朝お前…俺の家に来てたじゃん？」

「うん」

「なんで？何かあったのか？」

「それ、あんた最初に聞いてきたでしょ？」

もう忘れちゃったの？と言われた西条だったが、彼は「確かにそうだけど」と言葉を続ける。

「いや何、まだ何か俺に言い忘れた事とかあったのかな？と思っただけだ」

「へ？特にないわよ……あ、いや、ちょい待った！！」

コロコロ表情が変わる葉月は西条の側まで寄ると、小声で内緒話するかの様に、踵をあげて話し出した。

「（私がカードゲームをやってるって事は、皆には内緒にしておいて！お願い！）」

西条は葉月の顔を見ると、顔を真っ赤にしながら上目遣いでこちらを見つめる葉月にドキッとした。

（うぉっ！？い…一瞬でもこいつを可愛いと思ってしまった！！）

西条は一歩後ろに下がると、顔を逸らして

「い、言わねえよ」

と言い、葉月をチラッと見てみる。

すると、西条の言葉を聞いた葉月は嬉しそうな笑顔を浮かべながら

「ありがとう」と笑った。

「おぅ、それよりさっさと教室に入ろうぜ？早く椅子に座りたい…」

西条に言われ、二人は同じ教室へと歩いて行った。

※

教室に入る前に西条はふと呟いた。

「じゃ、学校の中じゃカードの話は無しだな」

「ん～、基本的にはそうなっちゃうわね」

葉月の返事を聞いた西条は「了解」と簡単に答えると、教室の扉を開けて中に入っていった。

一時間目……

二時間目……

三時間目……

四時間目……

そして昼休みが訪れた。

「葉月ちゃん、一緒に食堂に行こうよ？」

「うん、ちょっと待って」

クラスの友人に誘われ、鞄の中から弁当箱を取り出した葉月は、チラッと西条の方を見やる。

「ＺＺＺＺ……」

「……ハァ、全く…」

葉月は軽く溜め息をつくと、誘ってくれた友人に「ごめん、先に行ってて！」と言うと、西条の席へと向かっていった。

「……ＺＺＺＺ……」

「ちょっとあんた、一体いつまで寝てるつもりよ？」

「……ＺＺＺＺＺ…」

返事はない。

「さっさと起きないと、蹴飛ばすわよ？」

「ＺＺＺＺ……ＺＺＺ……」

やはり返事はない。

葉月はノーモーションで机から飛び出した西条の足の臑を思いっきり蹴飛ばした。

ゴッ！！！！
「ぎゃあっ！？」
ガシャァン！！！！

思わず飛び上がる西条。

そしてバランスを崩し、今度は座っていた椅子に足を引っ掛けてしまい、そのまま転んだ。

「うぉっ！？」
「何だ何だ？」
「大丈夫か？」

教室に居たクラスメイト等が一斉にこちらを向き、注目する。

西条はむくりと起き上がり、目の前で呆れた顔をする葉月を見た。

「やっと起きたの？」

「お前かぁ、俺の足を蹴ったのは！？」

「あんたが起きないから悪いんでしょ？それに、転んだのもあんたが勝手に転んだんじゃない」

「くそぅ、俺の貴重な睡眠時間を…」

「それよりあんた、お昼ご飯は食べなくていいの？」

「は、昼？」

「…まぁいいわ、好きにしたら…じゃあね」

葉月はそのまま教室を出ていった。

まだ臑に痛みが残る西条は財布を取り出し、中に入っている小銭を確認していく。

（１００…２００…５０…く…２５０円しか入ってねぇ…！！）

ここの購買に売っているパンやおにぎり、紙パックのドリンクは全て一個１００円だ。

西条は苦い表情をしながら購買部へと向かった。そして向かいながら考える。

（ん～、パンにするかおにぎりにするか……ドリンクは諦める、水は外の水道で我慢するしかねぇ……）

西条は普段は家から弁当を持って来ている。

だが今日は忘れた。

朝、いきなり家に葉月が来ていて、葉月を怒らせたら親から「追いかけて謝ってこい」と言われ、自分の弁当を持ち出す間もなく家から飛び出して行った為、財布の中の小銭の確認すらも忘れてしまっていた。

（くそぅ…昨日の１パック１５０円がなけりゃ、財布の中が４００円になってたのに…そしたらパン３つにジュースを買って、飯に困る事にはならなかったんだ…！！）

購買部に到着すると、そこは生徒達の群れがうねうねとひしめき合っていた。

「うっわ…何だこの人数は……」

思わず人の造る群れに唖然とする西条。

そしてその西条の目の前を無事にパンやおにぎりを購入する事ができた結城が、ホクホク顔で両手いっぱいに抱えた袋を持ち、群れの中から出てきた。

「ゆ、結城!?」

「お、西条ちゃん?珍しいな~西条ちゃんが購買に来るって」

「あぁ、今日は弁当を忘れちまってな…それより購買っていつもこんな混み合ってんのか?」

「いや、今日は特別だぜ?何たって今日は全品半額だからな」

「なに!?ぜっ全品半額だとぉお!!!!」

「あぁ、毎月のこの日は購買は全品半額なんだぜ……もしかして、知らなかった?」

「あぁ、俺はずっと弁当だったしな……」

「ま、そんな訳で…今日はいつも以上に混んでるよ、もうそんなに商品も残ってなかったしな」

「な、なにぃ！？」

「もうこの群れの中に入っても遅いと思うけど…頑張れ、西条ちゃん！」

じゃ、とその場から離れようとする結城を西条は光の速さでその腕を掴む。

「まて結城、その袋の中身にある大量のパンやおにぎりを俺に売ってくれ！！」

「…な」

「今からあの購買の群れに突っ込んでも商品が残っている可能性は低い！なら、お前から買った方が断然早い！！」

「じゃあこの卵サンド、一個３００円で」

「むり、ってかその値段おかしいだろ！！明らかに買値より高いじゃねぇか！！」

「西条ちゃん、俺から買う商品が購買の商品と同じ値段だと思った

ら大間違いだ！！」

どごぉおん！！と後ろから爆発音が聞こえるかの様な勢いで結城は西条に話す。

「いいか、一見同じ卵サンドに見えるだろうが、そもそも他の店でも卵サンドは卵サンドでも値段が同じとは限らないだろ？例えばスーパーの５００ミリリットルのペットボトルのジュースが一本８８円なのに対し、コンビニだと１４８円だったりする…つまりはそういう事だ！！」

「そりゃ経営している会社の規模の違いだろ！？そんなもん値段の違いが出て当然だ！！ってか今ここでそんな事情を当てはめるな！！」

「仕方がない、じゃあ葉月さんとデート一回で」

「は～い、本日の購買は全品売り切れにて終～了～！！」

結城が言い終える前に購買のおばちゃんの声が響き渡る。

そしておばちゃんの声を合図に、購買部に群れていた生徒達がそれぞれ散り散りにその場から去っていく。

「お…終わった…購買が…」

西条の残った手は3つ。

1：結城から何としてでもご飯を譲ってもらう。

2：お昼ご飯は諦める。

3：食堂へ行って皆のおこぼれを頂戴する。

（？はない、？はやっちゃいけない…やった時点で俺の中の何かが崩れる。？は体がきっと保たない、朝飯もロクに食べる事なく家を出ちまったからな……残るは……）

「結城、頼む……一つだけでもいいから…」

（うわぁ…西条ちゃんからもの凄くひもじいオーラを感じるぜぃ…）

結城は西条のそんな様子に折れたのか、西条の前に袋を広げてみせた。

「しょうがないな、ほら、好きなの一個持ってけ」
「じゃこれを」
そう言うと西条は一目散に袋の中からメロンパンを取り出した。
「それで良いのか？」
「あぁ、メロンパンは大好きなんだ……と、はい、１００円」
メロンパンを片手に西条は財布の中から取り出した１００円を、結城が広げる袋の中に入れた。
「金は別にいいってそれに今日は５０円だぜ？」
「いいんだよ、その超過した５０円は感謝料として受け取ってくれ」
まぁいっか、と結城は納得し、その場を後にした。

西条はメロンパンを片手に外にある中庭へ向かい、歩いていった。

※

「ぷはぁ～、いや～やっぱりメロンパンは最高だ！」

西条は中庭の水道が設置してあるコンクリートにもたれ掛かりながら、結城から購入したメロンパンを平らげた。

「ここ購買のメロンパンはパンから香るメロンの味は薄かったけど、総合的には７０点って所だな、うん」

西条は一人満足そうに頷くと、起き上がって水道水をごきゅごきゅと飲みだした。

「っぷぅ～、ご馳走さん」

口元を拭うと、お腹の音が「まだ俺の腹は満たされてないぜぇ？」と言わんばかりにぎゅるるる～と鳴った。

「うぅ…やっぱ育ち盛りの男子学生が、メロンパン一つで足りる訳ねぇよなぁ…」

西条は空を見上げてぼんやりと考える。

（学食に行っても一番安くて３００円、か……今の俺の財布の中には小銭１５０円だけ……）

「ハァ……」

軽くため息をつき

（それに学食なんかに行ったら料理の香りで余計に腹が減る気がする…もう一個結城から買っておけば良かったかな）

「ハァ……」

更にもう一度ため息をつき

（水道水をのんで空腹を満たすのもなんかなぁ～、お腹壊しそうで怖いよな）

「ハァ……」

それでもまだため息をつき

（教室に戻っても弁当を食ってる奴らなんかもう全部平らげちまってるだろうし…）

「……ハァ……駄目だ、全っ然良い案が思い付かない」

教室にもどろうとしたその時、西条の後ろから声がかけられた。

「さっきから何回ため息ついてんのよアンタは？」

へ？と振り返るとそこには、葉月が立っていた。

「なんだ、葉月か…」

「な、なんだって何よ！？ったく…で、アンタはこんな所で何やってるのよ？」

「俺か？いや…腹が減ってな…金もそんな持ってきて無かったから買うものも買えずに困っている西条さんなんですよ」

「お腹が減ったって…アンタ、いつも弁当じゃなかったっけ？」

「忘れた」

「へ？」

「持ってくるの忘れた、つーか持ってくる余裕は無かったな…今朝の出来事で」

「うっ…」

（今朝の出来事って……何、ひょっとして私のせい？あぁでもそうとしか考えられないじゃない！？…何かちょっと責任感じるわね…

でもあの時あいつが私の機嫌を損ねる様な発言をするから…いや、
でもやっぱこっちも急に押し掛けたりしたからやっぱその分私にも
責任ある訳で…あ、いやでも～）

うーん、と唸り続ける葉月をぼーっと見ている西条。

「お～い、どうした？」

西条が声をかけるも葉月はまだ脳内で自問自答を繰り返していた。

（あーもーしょうがないわね、全く…いつまでも世話が妬けるんだ
から！！）

「拓夜！！」

「は、はいっ！？」

急に大きな声で呼ばれた為、びっくりして思わず声が裏返りそうに
なる西条。

「仕方がないから学食で私が何か奢ってあげるわよ」

「何っ！？」

「少なくとも、アンタがお弁当を忘れちゃった原因は私にもあるし…お詫びと言っちゃあなんだけど…って、え！？」

西条は葉月の話を聞きながら、葉月の手をギュッと握った。

「え！？な、なな何よ！？」

「…葉月」

西条の普段より真剣な声が葉月の思考を麻痺させる。

「お前…良い奴だな…」

「と、当然でしょ！？」

「じゃ、早速学食に向かうぞ！！」

「え、あ、ちょっと!?」

西条は葉月の手を引っ張りながら食堂へと向かっていった。

そんなこんなで食券機の前に到着した二人。

葉月は千円札を中に入れて「好きなのを選びなさい」と西条に告げる。

「全部」

「そんなに食べれる訳ないでしょ」

「仕方がない、じゃあ…」

P!…ガーッ……
P!…ガーッ……
P!…ガーッ……

４００円、３００円、３００円と食券を買った西条はいきなり葉月に頭をど突かれた。

ガスッ!!

「痛っ!?」

「アンタ、買いすぎだっつぅの!!」

手にした食券を受け付けのおばちゃんに渡した西条。

「あいよ、４００円のは何にするんだい?」

「ラーメン!!大盛!!」

勢い良く叫ぶ西条が気に入ったのか、おばちゃんは気前よく「元気がいいねぇ、よしっ!チャーシューも一枚追加してあげるよ!」

「え、本当!?ありがとうございます!!」

「じゃあ次に、３００円の二枚は何にするんだい?」

「えっと、一つはチャーハン!!もう一つは…」

チラッと席を取りに行ってくれた葉月を見る西条。

「おばちゃん、何かデザートって無いかな?」

西条の視線に気が付いたおばちゃんは顔をニヤリとして

「何だい?あの子に奢ってあげるつもりなのかい?」

良いねぇ良いねぇ、と肘で西条をつつきだすおばちゃん。

「いや、この食券はあいつの金で買った奴でさ、何か全部俺が使うってのもあれだし…アイスとかあったら食べてもらいたいなぁ〜と」

「そうかいそうかい、よし!!待ってな、あたしが腕に寄りをかけて最高のデザートを作ってあげるよ!!」

「あ、ありがとうございます！！」

「じゃ、出来上がったらこの番号で呼ぶから、早く彼女の所へ行ってあげな！！」

「はい！！」

西条は番号札を受け取り、葉月が待つ席へと向かう。

その途中でふと思った。

（ん？彼女？）

※

西条は葉月が陣取ってくれた席に座り、ふぅ、と軽く息を漏らす。

「葉月、ありがとな」

「な、何よ急に！？」

「本当、助かったぜ、まさか誰かに奢ってもらえるとは思って無かったからさ」

「い、良いわよ別に」

「んでさ、埋め合わせって言っちゃあ何だが、俺が何かしてやれる事ってないか？」

「へ！？」

キョトンとなる葉月。その表情はまさか拓夜の口から「埋め合わせ」なんて言葉が出てくるとは思わなかった、とでも言わんばかりの表情だ。

「そ、そうね…じゃあ今日の放課後に付き合ってよ」

「放課後？お前…塾は？」

「ふっふ～ん、今日は塾はお休みよ！」

ふ～ん、と頷く西条に後から食堂のおばちゃんが声をかけてきた。

「あいよ、兄ちゃん！ラーメンにチャーハンだったね？」

「あ、すいません！ありがとうございます！！」

「それから…あんたの彼女には『特製デザート』だったね！？」

「ぶゴッ！？」

グラスに汲んである水を飲んでいた葉月が急に噎せた。

「…どうしたんだい急に！？」

「大丈夫か？」

「ケホケホッ！！なっ、かっかかカノ…ジョ……！？」

噎せたのもあるが、それとは別の要因で顔を真っ赤にする葉月。

「おやおや、顔を真っ赤にしちゃって…よっぽどウブなんだねぇ」

「おばちゃん、俺と葉月はそんな仲じゃないですよ？」

「おや、そうなのかい？」

「そうです！！誰がこんな奴の彼女になんか、彼女いない歴＝年齢のクセして」

「……」

それを言ったらお前も彼氏いない歴＝年齢じゃねぇか、と思った西条であったが、言ったら言ったできっと口論になると思ったので辞めておいた。

「とりあえずその話は置いといて、葉月…このデザートなんだが、おばちゃんがお前の為に作ってくれた特製デザートなんだって」

「え…そうなの？」

「気に入ってもらえると嬉しいねぇ」

「あ、ありがとうございます…」

「じゃんじゃん食べておくれよ、それじゃ、あたしは失礼させてもらうよ」

おばちゃんが厨房に戻っていき、残された二人の間に微妙に気まずい空気が漂う。

「と、とりあえず……いただきます！」

西条は誤魔化す様に思いっきりラーメンを頬張った。

「がつがつっんむしゃむしゃっごくっむぐ……」

ラーメン→チャーハン→ラーメン→エンドレスと次々と胃袋の中に収めていく西条。
葉月はそんな西条の様子を見てぼーっとしていた。

西条は誰かに見られている様な感覚を覚え、箸を止め辺りを見渡してみる。

（ぬを！！）

西条は思わず口の中に含めたラーメンやチャーハンを吹き出しそうになる。
食堂に残っていた男子生徒達からの突き刺さる様な視線が西条に全て向けられていたからだ。

（ななな何で俺見られているの？あっれー？何か恨まれる様な事したっけなー？）

などと思っていると、向かいに座っていた葉月が机に身を乗り出し、ハンカチで西条の口元を拭きだした。

「何やってんのよ、そんな沢山口の中に入れるから、急に苦しくなるのよ」

「ちょ、はうい！まっはまっは！？（ちょ、葉月！待った待った！？）」

「？」

西条は自分に向けられた視線の理由が嫌という程分かった。

（そうかよ…全員こいつが目当てかい…）

西条は目だけで葉月を見る。

葉月はモテるのだ。

何でもこの学校では男子生徒の間で『葉月ファンクラブ』なるものが結成されているらしいのだが、あくまで噂で聞いただけで本当にあるのかどうかは分からない。

だが、今の西条は葉月の事を狙う男子生徒達からすれば、さぞ美味しいポジションにいる事には違いない。

（く…今はこの視線に耐えるしかない…）

そして改めて葉月の顔を見てみる。

整った顔立ち。髪色は落ち着いた感じの薄い茶髪のセミロング。軽く化粧してある様だが、その軽くという感じがポイントだ。少しの手入れで化粧映えするというのは、素の顔でも綺麗に見えるという事だからだ。

西条がまじまじと見てくるので、葉月は顔を真っ赤にしながら「な、何みてるのよ!?」と顔を逸らした。

「いや、お前も早くデザートを食ったら?…アイス溶けてるぞ?」

「え!?…あ～!!」

お皿の上に綺麗に盛り付けられたアイスのデザートはドロドロに溶けていた。

「休み時間も残り少ないし…急ぐか」

「…うん…」

葉月は残念そうに一部無事な部分のアイスを食べ始める。

西条は早くこの視線から逃れたいが為、全力で仕上げ（ラストスパート）に入った。

集うカード。完成『俺だけのデッキ』

キーンコーン…と放課後の鐘が鳴る。

今日も一日学校が終了し、クラスの皆はそれぞれ賑わっていた。

葉月は席を立つと、西条の席へと向かう。

葉月は気分がルンルンだった。理由としては昼休みに西条と一緒に出かける予定をしていたからだ。

（よぅし、今日は拓夜と一緒に買い物するぞぉ～）

買い物と言っても買うのは服やアクセサリーではない。

葉月はクラスの皆には、自分がカードゲームをしている事は内緒にしているのだ。

ただ一人、西条拓夜を除いて…

そんな訳で西条の所へ向かい、葉月は逸る気持ちを抑えて西条に声をかけた。

「拓夜、行くわよ！！」

「へ？」

ぼーっとしていた西条は突然、声をかけられた為か、何、何ですか一体？と、惚けた表情をみせる。

「ほら、今日は放課後に買い物に付き合ってくれる約束でしょ？」

「あぁ、そうだっ…！？」

西条の声が途中で止まる。
原因はクラスの男子からの突き刺さる視線だった。
西条は首筋から冷や汗を滝のように流しながら、あれ～、なんか似たような感覚を昼休みにもあった様な気がするんですけどー！！と、心の中で叫んでみる。

葉月は西条が皆からの怨念に晒されている事には全く気づく様子もなく、「早く行きましょ」と笑顔で誘う。

（西条ぉお！！）
（何でお前なんだぁ！？）
（俺とポジション変わりやがれやー！！）

「ぅ……！？」

一瞬、頭の中にクラスの男子達からの心の声が聞こえてきた様な気がする。

西条はガタッと勢い良く席を立ち、葉月の手を捕まえて「とりあえずここから出るぞ！！」と叫び、教室から全力で飛び出した。

「え、ちょ、拓夜？どうしたのよ！？」

「今は教室から出ることが優先だ！！でないと…」

クラスの皆に俺が殺される！！

（ちっくしょお…朝からこいつ（葉月）に振り回されっぱなしじゃねぇか）

西条は葉月の手を引き、一気に校門まで駆け抜けた。

「ちょ、ちょっと拓夜！？何なのよ一体！？」

「はぁ…はぁ…ここまで来れば…だ…大丈夫…！！」

「だからっ…何がなのよっ！？」

「……」

二人は息を切らしながらゆっくりと歩き出す。

西条は顎に手を当ててもの凄く悩んだ。

（うわ～、明日学校に行ったら絶対に葉月との関係とか聞かれそうだよな～）

「ちょっと拓夜、聞いてるの！？」

（でも葉月と付き合ってる訳じゃねぇし、こいつの気持ちは知らねぇけど、俺はそんな気はねぇし…）

「ねぇ、ねぇってば、拓夜!?」

（まぁ何を聞かれても俺の本当の気持ちを言えばいいか、うん、そうだな）

「拓夜!!」

「ん、なんだ?」

「なんだじゃないわよ、一体どうしたのよ!?急に走り出して!!」

「……わからないか?」

「あのねぇ、分からないから聞いてるのよ」

「……」

西条は思った。

（こいつ……無自覚かよ?）

しょうがねぇ…と西条は溜め息をつき

「あのな、昼休みの時もそうだったんだが…放課後に男子達からの殺気混じりの視線を感じなかったか?」

「へ、何それ?」

「やっぱり俺だけか…」

西条はガクッとうなだれた。

「ねぇちょっと、どういう事かもっと分かりやすく説明しなさいよ！！」

「ん～、分かりやすくねぇ…」

西条は歩きながら少し考えた。

「分かりやすく…分かりやすく……ん～一言で言うと…」

「言うと？」

西条は葉月の顔を見つめながら自然に言った。

「お前はモテるって事だな」

「……へ？」

キョトンとなる葉月。

「へ、じゃねぇよ」

「ねぇねぇ、もっかい言って！？」

ニヤニヤとした表情に変わった葉月に西条は溜め息をついてスタスタと先に歩いていった。

「…二度も言いたかねぇよ」

「あ、ちょっと!?ねぇ待ってよ〜!!」

先を行く西条を追いかける葉月。

二人は商店街にある一つの大きなショッピングモールへと向かって行った。

「ちょっと拓夜、私が行きたいお店はそっちじゃなくてこっち!!」

「え?」

西条は振り返ると、少し後ろの方で葉月が進行方向とは別の方角を指さしていた。

「全く、私の買い物に付き合ってくれるはずのアンタが、勝手に行っちゃ駄目じゃない!?」

「あぁ、悪ぃ…」

慌てて葉月の所へと向かう西条。葉月は「もうあと少しの距離だから」と、やや上機嫌な雰囲気で西条の手を引いて進んでいった。

大通りから少し中道に入った所に一件の小さな店が立っていた。
葉月はその店を指差し、歩くペースを早くする。

「ほら、あそこよ！」

「ぇと…『カード専門店…きみ…まろ』？」

立て掛けられたボロボロの看板を何とか読み上げる西条。

「ここの店はね、シングルカードの販売してる数が半端じゃないのよ！レアカードからノーマルのカードまで全部取り扱ってるわ！」

「へぇ、そいつは凄いな…」

「しかも値段も安いときた！！」

「……」

西条は思った。
同じおもちゃ屋を営む者として経営はどのようにしているのか？
また、取り扱うカードの仕分け等はどのように管理されているのか？

そして、一人のデュエリストとしてどの様なカード達が自分を待っ

ているのか？

「楽しみだよ、すっげーワクワクする！！」

「でしょ？」「ただ…」

すかさず西条が話し始める。

そしてそれは、買い物をする上で最も重要な事であった。

「お金を引き出してこないと…俺…買い物できないぞ……」

「なっ…！？」

（そういえば昼休みの時に私が昼ご飯を奢ったんじゃないの！？拓夜がお金を持ってない事すっかりわすれてたぁ～！？）

「あ、お金なら大丈夫よ！確かそこの曲がり角の所にＡＴＭが置いてあるわ！」

葉月が指をさした道を曲がると、確かにＡＴＭが設置してあった。

「へぇ、こんな所にあるんだ」

「これでお金の事を心配する必要もないわね！」

「そうだな…よし、ちょっと待っててくれよ」

西条は一人、ＡＴＭに入っていき、カードを使用して現金を引き出した。

「暗証番号……ポチポチポチポチっと、んで…金額は…」

少しして、西条がＡＴＭから出てきた。
葉月は西条を出迎えると「じゃ、『きみまろ』に出発ー！！」と、やけにハイテンションな様子で西条の手を引き、歩き出した。

ガラガラガラ…

汚れたガラスの扉をスライドさせる葉月。

「ごめんくださ～い！！」
「お邪魔しまぁす」

葉月と西条は店の中に入ると、すぐ横のレジカウンターの所から無愛想な声が二人を出迎えてくれた。

「……らっしゃぃ」

葉月は「こっちが遊〇王カードのコーナーよ！」と西条の手を引き、ガラスケースに展示されているカードの所まで向かう。
西条は初めて訪れる店の中をぐるりと見渡した。

入って真っ直ぐの所には遊○王カードのコーナーが、その右側は別のカードゲームのコーナーが、そして左側にはまた別のカードゲームのコーナーが設置されている。

「……すげぇや……」

西条は店内を見渡しながら呟いた。
自分の店とはまた違う雰囲気に新鮮さを感じたせいかもしれない。
次に西条は葉月がのぞき込んでいるガラスケースの棚を見てみた。
どうやらこのガラスケースの中には新しいパックに入っているレアカードが並べられているようだ。

葉月はそれらを食い入る様な目でじっと眺めている。

「お～い、葉月～」

「ちょっと黙ってて！！……むむむ…このカードが５００円か、ん～このカードを使っていこうと思ったら『二重召喚』がデッキに三枚は欲しいわね……」

「……？」

西条は葉月が何を言っているのか、この時はまだ理解出来なかった。
とりあえず西条は自分の欲しいカードを探す為、横の棚にあったカードファイルを開く。

（どらぐーんＤは融合モンスター、その為…デッキには自然と『Ｄ－ＨＥＲＯ』が入る…まずは素材となるＤを探さないとな…）

パラパラとファイルをめくっていく西条。
デュエル初心者の西条はどのパックにどのカードが入っているのか全く知らない。
あれ～？全然Ｄのカードが見当たらないぞ～と首を傾げていると、いつの間にか横で一緒にファイルをのぞき込んでいた葉月が声をかけてきた。

「アンタ、一体何のカードを探してんのよ？」

「うぉ！？いつの間に！？」

「さっきから居たわよ、で、アンタは何のカードを探してんの？」

西条はファイルを片付け、また新しいファイルを取り出しながら「Ｄ－ＨＥＲＯ」と一言告げる。

「Ｄ？だったらそのファイルじゃないわよ」

葉月は「確かＤは…」と呟きながら一冊ファイルを取り出し、西条に渡した。

「このファイルに載っているパックは、『Ｄ－ＨＥＲＯ』ばかり収録されている奴なのよ、そのパックはもう絶版だから、そのファイルから単品買いした方がお得だわ」

「そ、そうなのか…」

「とりあえず、この間アンタが当てたＤエンドの融合素材モンスターはそのファイルに一体載っているはずだから、絶対に買いなさい」

西条は葉月と一緒にファイルをめくっていく。

「あ、あった！これか？」

「そう、そのモンスターカードよ！」

「よ～し、とりあえずこいつは買いっと…で、葉月…もう一体のモンスターは？」

「もう一体はパックには収録されてないわ、『Ｄ－ＨＥＲＯ・ＢＬＯＯ－Ｄ』はゲームの攻略本に付録されているの」

「何っ！？遊○王カードって本にも付いてるのか！？」

「そうよ、本だけじゃなく、ゲームにしか付いてないカードとか、雑誌の応募でしか手に入らないパックとか色々よ？でも『Ｄ－ＨＥＲＯ・ＢＬＯＯ－Ｄ』はゲーム攻略本の付録カードだから、比較的手に入れ易いカードね」

「ふ～ん、凄いな……」

「とりあえず、アンタはデッキを作る為のカードを集めなくちゃね、もうデッキの構成とかは出来ているの？」

「あぁ、あれからどらぐーんＤえんどを主軸としたデッキレシピを色々と考えててさ、もう頭の中では完成してる」

「凄いじゃない！？だったら後は必要なカードを集めるだけね！！」

「あぁ、今ファイルをざっと見てたけど、この中からもうデッキは作れたも同然だぜ」

「よし、じゃぁ」

葉月は店に置いてあった紙とペンを西条に渡した。

「このカード購入書に、拓夜の欲しいカードとその枚数、一枚辺りのカードの値段を書いて、この紙を店員さんに渡せば、そのカードが買えるわ」

「なるほど、よし！じゃぁ早速書くとするか！？」

西条は受け取った紙に、ファイルに載っているカードを次々と書いていく。

「次はこのファイルの……」

更に別のファイルを取り出して、自分の必要なカードを書き上げる。

「次は……」

葉月は楽しそうにカードを書いていく西条を見て微笑んだ後、一人レジに向かって自分の買い物を済ませた。

「……よし、後は……葉月が言ってた『Ｄ－ＨＥＲＯ・ＢＬＯＯ－

D』だけだな！！」

（確か書籍付録カードのファイルがあった筈……えと……あ、これだ！）

西条の探していたカードは直ぐに見つかった。

西条はそのカードを紙に書くと、逸る気持ちを抑えてレジへと持っていった。

「すいませーん、この紙に書かれたカードをお願いしまーす！！」

西条が少し緊張しながら紙を出すと、少し窶れた感じの店員さんがその紙を受け取った。

「はい…おや、沢山書いてあるね…少し時間が掛かるけど……いいかな？」

「はい、お願いします！！」

店員は店の奥へと商品のカードを探しに向かった。
西条はそわそわしながらレジの前をウロウロとしている。
「ちょっと拓夜、少しは落ち着きなさいよ」
「あぁ、そうだな…でもこれでさ、初めて自分のデッキが作れると思うとすげぇワクワクしてきてさ！！」
「そうね、私も初めてデッキを作った時はそんな感じだったわ」
「だろ？そうだろ！？」
すると店員さんが店の奥から沢山のカードを抱えながらレジまでやって来た。
「ふぅ、お待たせ～…とりあえず、不足が無いか確かめてくれるかい？」
「は、はい！！」
西条は積まれたカードを一枚一枚確認していき「大丈夫です」と答える。
「なら良かった…それじゃ、お会計……８６００円になります」
「え？」

「８６００円になります」

「……はっせん……ろっぴゃくえん？」

「はい、８６００円です」

「……」

西条は財布を確認する。

（高い……いくら何でも８６００円なんて予想外だ……良かった～、ＡＴＭから一万円卸しといて…）

西条は顔をひきつらせながら福沢諭吉を店員に渡す。

店員は至って普通に「はい、ありがとうございまーす」と会計を済ませ、お釣りを西条に渡した。

「ど…どうも……」

「やったわね拓夜、これでデッキが作れるね！！」

後ろから葉月が嬉しそうに声をかけてくる。

西条は購入前のハイなテンションはぶっ飛び、やや下がり気味のテンションでそれに答えた。

ガラガラガラガラ……

店を出た二人は夕焼け空の下、とある場所を目指し歩いていった。

「おじさん、アイスキャンディのオレンジとメロンを下さい」

「あいよ～、二本で２００円だよ」

西条は屋台のおじさんからアイスキャンディを受け取ると、お金を払い、ベンチに座っている葉月の所へと向かった。

「はい、オレンジ味」

「あ、ありがとう」

西条はアイスキャンディを渡すと自分もベンチに座り、早速アイスキャンディを食べ始める。

二人はカードショップを出た後、自宅近所の公園へと来ていた。

これは葉月のリクエストによるもので、何でも久しぶりに行ってみたいと言い出した葉月は西条の手を引き、一直線にこの公園にやって来たのだ。

空はすっかり夕焼け空。沈みゆく太陽の反対側にはうっすらと月の姿が見え隠れしている。

二人はそんな空を眺めながらアイスキャンディを食べていた。
すると葉月が西条に話しかけてきた。

「ここのアイスキャンディは変わらないね、すっごく美味しい！」

「そうだな、俺達が小さい頃は…お互いに１００円ずつ持って、ここでこのアイスキャンディを食ってたんだよな……」

「拓夜、今日は付き合ってくれてありがと」

「は？何でお前が礼を言うんだ？今回買い物してたのは俺の方で、何かお前の方が付き添いって感じになっちまってたけど」

「いいのよそれで、私としては早く拓夜とデュエルしたい訳なんだし」

「う～ん……」

（ま、葉月がそれでいいってんならいいか）

西条は食べ終え、残ったアイスキャンディの棒を屑籠の中に放り込

み、ベンチから立ち上がる。
そして葉月の方を見ながら話しかけた。
「もうどこか寄る所は無いのか？無いなら家まで送っていくぞ」
葉月はアイスキャンディの棒を屑籠の中に入れると、西条に向き直り話し出す。
「寄る所はあるよ、拓夜の家」
「は？」
「だって、今日集めたカードでデッキが組み上がるんでしょ？だったらデュエルしようよ！」
屈託のない笑顔を魅せる葉月。
夕焼け空を背景に映すその姿に少し見とれた西条は、少し視線を泳がせた後「…じゃあやるか」と一言いい、自宅へと向かって行った。
西条の自宅『おもちゃ屋サプライズ』の店の扉を開ける。
「あら、お帰り」
開けると同時にレジの所にいた母親、西条恵美子は息子の姿を見る

なり出迎えてくれた。

「ただいまー」

「お邪魔します」

店の中に入ると今日も子供の姿がチラホラと目に入る。
西条は店の奥の階段を登って自室へ行こうとした時、「あら、葉月ちゃんじゃないの～」と母親が葉月に声をかけた。

「あ、今朝はすいませんでした、何か色々とバタバタさせてしまって…」

ぺこりと頭を下げる葉月に、母親の恵美子は「いいのよ別に、あれは家の子が悪いんだから」と穏やかな表情で話す。

「葉月ちゃん、拓夜に襲われそうになったら、大声を出して助けを呼ぶんだよ!?私が葉月ちゃんを守ってあげるからね!?」

「え、だ…大丈夫ですよ!?」

「おい、母さん…そりゃ一体どういう意味だよ…」

西条は話がややこしくなる前に葉月を部屋の中へと連れて行った。

（ったく、子供のお客さんの前で急に何を言い出すんだよ……）

西条は部屋に入ると軽く息を漏らす。

「ふぅ…あ、適当に座っててくれ、茶を用意してくる」

「うん、ありがとう」

西条が部屋から出ていき、葉月一人が部屋に残る。
葉月は床にペタンと座り、ぐるりと西条の部屋を見渡す。

（随分と変わっちゃったな…拓夜の部屋……）

昔はゲームや玩具がゴロゴロとそこらに転がっていた印象が強かったが、今の西条の部屋はとても質素な感じがした。

勉強机、ベッド、本棚、テレビ、部屋の中央には小さな机が一つ……

葉月はその中でふと、ベッドに目が止まった。

「男の子の定番よね……」

そう呟くとベッドの下を覗いてみる葉月。

「……やっぱり」

一冊二冊三冊……

葉月は顔を上げ、やれやれと溜め息をつく。
すると、葉月の後ろから「やれやれはこっちだっつぅの」と西条が話しかけてきた。

「うわっ!?アンタ、ノック位しなさいよ!!」

「ここは俺の部屋だっつぅの…はい、麦茶」

西条は部屋の真ん中に置いてある小さな机に葉月と自分の分の麦茶を置いた。

「さて、早速カードを……」

鞄の中から先程買ったカードを机の上に広げる西条。

「そんでもって……引き出しの中に入れておいた…」

そして腕を伸ばし、勉強机の引き出しから一枚のカードを取り出し、それを見つめる。

「拓夜」

「ん?」

葉月は西条を呼ぶと、一つの紙袋を差し出した。
西条はそれを受け取り、袋の中を出してみる。

「これは…?」

「デッキケースとカードスリーブよ、カードスリーブはカードを傷や汚れから守る為のもの、デッキケースはデュエリストの必需品ね」

「葉月……」

「拓夜の初デュエル祝いよ、早速カードスリーブを付けて、デュエルしましょ？」

「あぁ、ありがとう葉月！」

二人でスリーブの中にカードを入れていき、あっという間に４０枚のデッキが組み上がる。

「できた……俺の…初めて作ったデッキ…！！」

「準備は良い？」

「あ、ちょっと待ってくれ！？」

西条は一枚のカードを取り出し、それを見つめる。

（『Ｄｒａｇｏｏｎ・Ｄ・ＥＮＤ』……頼むぜ！！）

そのカードをエクストラデッキの位置にセットした西条は「ＯＫだ」と答える。

葉月もデッキとエクストラデッキを用意し、二人の準備が整った。

今、西条拓夜の初デュエルが始まる！！

初めてのデュエル

「拓夜、ルールは理解しているのよね？」

「あぁ、だが…実際にプレイしてると間違ってる所があるかもしれないからな…ま、そん時は言ってくれ」

「ふふ…了解、それじゃ始めましょうか？いくわよ、拓夜！？」

「あぁ、いくぜ葉月！！」

二人はそれぞれデッキをシャッフルして机の上にセットする。

「「デュエル！！」」

「拓夜、アンタはまだ初心者なんだから先攻は譲るわ！」

「へっ、その余裕綽々ぶりを一気に覆してやるぜ！！まずは手札となるカードを五枚ドローして……いくぜ、俺の先攻ドロー！！」

先攻　西条　ＬＰ８０００
後攻　葉月　ＬＰ８０００

西条は手札を確認して「よし、良い手札だ」と呟く。

「手札から魔法カードを発動『デステニー・ドロー』！！」

【デステニー・ドロー】
魔法カード
手札の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカードを1枚捨てて発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「俺は手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を捨てて、デッキからカードを2枚ドロー！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星6　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
効果
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

西条は『デステニー・ドロー』の効果で手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を墓地に捨て、デッキからカードを2枚ドローした。
そのプレイを見ていた葉月は楽しそうな表情で西条を見つめる。

「さらに、手札から魔法カード『おろかな埋葬』を発動！！」

【おろかな埋葬】
魔法カード
自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「俺はこのカード効果で……デッキから……ぅんと、えっと……」

どのモンスターを墓地へ送るか迷う西条。
葉月は西条の立場になって、自分ならどのようなプレイに繋げるか考えた。

（今、拓夜の墓地にはディアボリックガイがいる…私ならレベル2のチューナーモンスター『ゾンビキャリア』を墓地に送り、それぞれの効果を発動して…レベル8のシンクロモンスターをシンクロ召喚するわね……）

そんな中、西条はカードが決まったのかデッキを手にした表情が変わった。

「よし、決まった！俺はデッキから『ダンディライオン』を墓地に送る！！」

【ダンディライオン】
星3　地属性　植物族

ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
効果
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

西条のデッキから『ダンディライオン』が墓地に送られた。

「墓地に送られた『ダンディライオン』の効果発動……って…葉月、これは出来るか？」

「えぇ、『ダンディライオン』の効果は強制効果よ、問題ないわ」

「そっか、なら俺のフィールド上に『綿毛トークン』が２体守備表示で特殊召喚される！！」

西条はトークンの代わりに鞄の中から消しゴムとリップクリームを取り出し、机の上に並べた。

「そして、墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』の効果を発動する！墓地のこのカードをゲームから除外して、デッキからもう一体の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を…俺は守備表示で特殊召喚する！」

西条の墓地からディアボリックガイが除外され、デッキからもう一体、ディアボリックガイが特殊召喚された。

「えっと…俺はまだ、この『綿毛トークン』も『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』も特殊召喚しただけであって、まだルール上の通常召喚は行ってないよな？」

ゾクリ……！！！？

葉月の背中に寒気が走る。
葉月は自分の目を、頭を疑った。

（デュエル初心者にはありがちな通常召喚と特殊召喚の違い…拓夜はそれを熟知している！？それに…僅か手札二枚を消費しただけでフィールド上に三体のモンスターを並べた……！？）

葉月は机越しに対峙する西条を再び見つめる。

（僅か１ターン目でのプレイング…でもそのプレイをする為の拓夜のデッキ構築……拓夜、アンタ……本当に初心者なの！！！？）

葉月の懸念を余所に、西条はプレイを続けた。

「手札からモンスターカード『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』の効果発動!デッキの一番上のカードを確認する…」

西条がデッキの一番上のカードをめくる。
そのカードは

「……あれ?通常魔法だったけど…『終わりの始まり』か、とりあえずこのカードはダイヤモンドガイの効果で墓地に送られる」

「お、『終わりの始まり』ですって!?」

【終わりの始まり】
魔法カード

自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができる。自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「まだ墓地に闇属性モンスターは5体も揃っていないし、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られても、このカードの発動は出来ないか…」

残念そうな表情になる西条。
だが葉月は信じられない様な口調で西条に助言をした。

「そんな事はないわ、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた通常魔法は、そのカードのコストや発動条件を満たす必要はないし、誓約効果も適用されないわ!!」

「へ?……どういう事?」

「つまり、『終わりの始まり』の“墓地に7体以上の闇属性モンスターが存在する時に発動する事ができる”という発動条件も!“墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で”というコストも払う必要はないのよ!!…この場合、拓夜は次のターン…無条件でデッキから3枚のカードをドローする事が出来るのよ!!」

「え……そ、そうなのか!?」

西条は自分のフィールド上に置かれたダイヤモンドガイを見つめる。

（お前……凄い効果を持ってるんだな…）

西条の先攻１ターン目。

西条の場には『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』が守備表示で１体。
『綿毛トークン』が守備表示で２体。
『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』が攻撃表示で１体存在している。

互いにライフポイントは８０００のまま。

西条の手札は４枚。

相手をする葉月は高ぶる高揚感を抑えるのに必死だった。
僅か１ターンでここまでのプレイを見せた西条に対し、葉月は不思議と期待していた。

“まだとんでもないプレイをしてくれるのか！？”と。

そして……西条は葉月の期待を裏切らなかった。

「葉月、この『綿毛トークン』ってのは、こいつが特殊召喚されたターン、こいつ等はアドバンス召喚の為のリリースにする事は出来

ないんだよな？」

「えぇ…そうだけど……っ！？」

（まさかっ！？）

葉月の言葉を聞き「そうか、なら…」と、手札の一枚に手を伸ばす西条。

「俺は自分フィールド上の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』と、『綿毛トークン』二体をリリースし、手札から『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を特殊召喚！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
星８　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　３４００
ＤＥＦ　２４００
効果
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを含むモンスター３体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。この特殊召喚に成功した場合、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時に相手ライフを半分にする。

西条のフィールドに最高クラスの攻撃力を誇るモンスターが攻撃表示で現れた。

「ドグマガイですって!?」

（凄い、凄いよ拓夜!!）

「えっと…確か先攻1ターン目は、攻撃する事はできないんだもんな、俺は魔法・罠カードゾーンに、カードを一枚伏せて…ターン終了!!」

西条がエンド宣言をし、葉月のターンに移った。

「拓夜、凄いよ!!アンタ本当に初心者なの!?」

「あぁ、俺なりに昨日一晩…死に物狂いでこのデッキ構成を考えてたんだ、何度も頭の中でプレイしてプレイして…その度にメモしたデッキレシピを書き直して…ん?葉月、どうした?」

葉月は西条の話を聞き、目を閉じる。

（何よ拓夜…その話が本当なら、アンタのデュエルセンスってのはずば抜けて高いじゃない…なら、私はアンタを初心者として見ない、私は本気で勝ちに行くわ!!）

葉月のターンに移り、葉月はデッキトップに指を添える。

「それじゃ、私のターンね…ドロー！」

葉月のドローフェイズが終了し、スタンバイフェイズに移った。そして…

「葉月、お前のターンのスタンバイフェイズ時に、俺のモンスター『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』の効果が発動するぜ！！」

「えぇ、その効果によって私のライフは半分になるわ」

西条のモンスター、ドグマガイの効果により、葉月のライフポイントが一気に半分になった。

西条　ＬＰ８０００
葉月　ＬＰ８０００→４０００

「流石ドグマガイね…その攻撃力だけじゃなく、嫌らしい効果を持ってるじゃない…」

「へへっ、そんな褒めるなよ」

葉月は手札を確認し、西条に告げた。

「拓夜、私の名前は“烏丸葉月”…その名に恥じぬデュエルを“魅せて”あげるわ！！」

「っ！？」

葉月の雰囲気が一変する。
その瞬間、見えない重圧が西条の上から押し潰す様な錯覚さえ覚える。
西条は葉月から目を逸らす事が出来なかった。

「いくわよ、私のメインフェイズ…手札から永続魔法『黒い旋風』を発動！」

【黒い旋風】
永続魔法
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のつくモンスターが召喚された時、自分のデッキから、そのモンスターの攻撃力より低い攻撃力をもつ「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

「何だ…その魔法カードは……！？」

「私は手札から『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚するわ！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００

効果
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。1ターンに1度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

「な、何で星5の上級モンスターをリリースなしで召喚してるんだよ!?」

「『ＢＦ－暁のシロッコ』のモンスター効果、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、リリースなしで召喚できるのよ」

「す…凄いカードだな…」

「私はシロッコの召喚をしたけど、拓夜はこの召喚に対してカードの効果を発動したりしない?」

「ねぇよ」

「なら、私の場の永続魔法『黒い旋風』の効果を発動!このカードは「ＢＦ」と名のついたモンスターの召喚に成功した時、そのモンスターよりも攻撃力が低い「ＢＦ」と名のついたモンスター1体をデッキから手札に加える事ができるのよ」

「って事は…『ＢＦ－暁のシロッコ』の攻撃力は２０００だから…それよりも攻撃力の低い「ＢＦ」をデッキから手札に加える事ができるんだな？」

「そう、その通りよ…私はデッキから『ＢＦ－月影のカルート』を手札に加えるわ」

【ＢＦ－月影のカルート】
星３　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

葉月はデッキから『ＢＦ－月影のカルート』を西条に見せ、互いに確認した後、それを手札に加えてデッキをシャッフルした。

「そして私は手札から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を攻撃表示で特殊召喚！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「このモンスターは、黒槍のブラスト以外の「ＢＦ」が自分フィールド上に存在する場合、手札から特殊召喚する事ができるのよ！」

葉月は淡々とシロッコに続けて、ブラストを特殊召喚する。

「更に私は、手札の『ＢＦ－疾風のゲイル』を攻撃表示で特殊召喚！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　８００
効果／チューナー
このカードは、自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の

「ＢＦ」と名のつくモンスターが表側表示で存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、フィールド上のモンスター１体の攻撃力と守備力を半分にする事ができる。

そして同じようにモンスターを特殊召喚してきた。

「こいつも『ＢＦ－黒槍のブラスト』と同じ特殊召喚モンスターなのか…！？」

「えぇ、自分フィールド上にゲイル以外の「ＢＦ」が存在する場合、手札から特殊召喚できるモンスターよ、そして私はゲイルのモンスター効果を発動するわ！」

「！？」

「疾風のゲイルは、モンスター１体の攻撃力と守備力を半分にする事ができる！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』の攻撃力と守備力を半分にするわ！！」

「な、何だその効果！？」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
ＡＴＫ　３４００↓１７００
ＤＥＦ　２４００↓１２００

「これでドグマガイの攻撃力は並みの下級モンスタークラスにまで落ちたわ…拓夜、覚悟はいい？」

葉月さん、目が怖いです…と西条は思いながら、もう一度フィールドを確認した。

（俺のフィールドには攻撃力と守備力が半減したドグマガイと、攻撃力１４００のダイヤモンドガイ…そして一枚の伏せた魔法・罠カード…この一枚で葉月の攻撃を凌ぎきれるかな……！？）

「いくわよ！まずは『ＢＦ－暁のシロッコ』で、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』に攻撃よ！」

（あ、今のが…俺のモンスターに向かって攻撃宣言したって事になるんだよな……！？）

西条は自分のリバースカードを確認し、よしと軽く頷く。

「葉月、お前のモンスターの攻撃宣言時に…俺はこの伏せたカードを発動するぜ！！」

「っ！？」

そう言うと西条は手にした魔法・罠カードを相手に見せた。

「俺は罠カード『Ｄ－カウンター』を発動！」

【Ｄ－カウンター】
罠カード
「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のつくモンスターを攻撃対象とする相手攻撃モンスター1体を破壊する。

「このカードの効果で、葉月の『ＢＦ－暁のシロッコ』を破壊するぜ！」

「『Ｄ－カウンター』か…Ｄ－ＨＥＲＯ専用のカードね、攻撃モンスターを破壊する罠カード…」

葉月はそう言うと、シロッコをフィールドから墓地へと送った。

「やったぜ！葉月のモンスターを破壊できた！」

喜びの声をあげる西条。
葉月は構わずに次の攻撃を宣言した。

「まだ私のターンのバトルフェイズよ、黒槍のブラストで、ダイヤモンドガイに攻撃！」

「えっと…ブラストの攻撃力は１７００で、ダイヤモンドガイの攻

撃力は１４００…その差は３００ポイントって事は…！？」

「この場合、ダイヤモンドガイは戦闘破壊されて、その攻撃力の差分だけ攻撃を受けたプレイヤーのライフを削るのよ」

西条　ＬＰ８０００→７７００
葉月　ＬＰ４０００

西条は破壊されたダイヤモンドガイを墓地に送った。

「さて、疾風のゲイルじゃドグマガイには勝てないからね、私はバトルフェイズを終了してメインフェイズに移行するわ」

「……」

「私はレベル４の『ＢＦ－黒槍のブラスト』と、レベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング！」

「シンクロ召喚って奴か！？…この場合は、レベル４＋レベル３…レベル７のシンクロモンスターが飛んでくるって訳だな！？」

西条はルールを確認する様に口ずさむ。

「私はレベル７モンスター『ブラック・ローズ・ドラゴン』をシンクロ召喚！」

【ブラック・ローズ・ドラゴン】
星７　炎属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　２４００
ＤＥＦ　１８００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。１ターンに１度、自分の墓地に存在する植物族モンスター１体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター１体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を０にする。

葉月はエクストラデッキから『ブラック・ローズ・ドラゴン』を取り出した。

「あっ…そのカードはっ！？」

「そう…昨日の夜、拓夜の店で買ったカードよ」

葉月の取り出した『ブラック・ローズ・ドラゴン』は、名前の文字が金色の英語で書かれており、カードテキストも全て英語で書かれ

ていた。
西条は少し感動したのと同時に、ふと疑問に思った事を口にしてみる。

「英語ってだけで…日本人から見るとなんかカッコ良く見えるな…
…何書かれてるかサッパリ分からないケド……」

「大丈夫よ、このカード効果のテキストは覚えてるから」

「さっすが葉月！」

「じゃ、早速…『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果発動！」

「へ！？」

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊する！！」

「な、何だそりゃ！！！？」

ブラック・ローズの効果により、フィールド上はスッカラカンになってしまった。

「うわぁ…凄い効果だな……こんなカードが三枚もエクストラデッキにあるかと思うとゾッとするなぁ」

「安心して、『ブラック・ローズ・ドラゴン』は私はエクストラデッキには一枚しか入れてないから」

「そ、そうなのか……」

「さて、私はリバースカードを一枚セットして、ターン終了よ」

葉月がエンド宣言をし、西条のターンに移る。

「よぅし俺のターン、ドロー！」

西条はカードを一枚引き

「俺は墓地の『終わりの始まり』の効果を発動！デッキからカードを三枚ドロー！」

更にカードを三枚引いた。

西条は手札を確認しながら葉月のフィールドを見る。

（今の葉月のフィールドには、あの伏せカードが一枚だけ……そして俺の手札は六枚もあるんだ、ここはこのカードで…！）

西条は手札のカード一枚をフィールドに出した。

「俺は魔法カード『戦士の生還』を発動！」

【戦士の生還】
魔法カード
自分の墓地の戦士族モンスター1体を選択し、自分の手札に加える。

「俺は墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を選択し、手札に加える！」

西条は墓地からドグマガイを手札に加えた。
そこから更に

「魔法カード『融合賢者』を発動！」

【融合賢者】
魔法カード
自分のデッキから「融合」魔法カード１枚を選択し、自分の手札に加える。

「デッキから『融合』の魔法カードを手札に加える！」

西条はデッキから『融合』を葉月に見せて、手札加える。

「あんた…まさかっ！？」

「俺は『Ｅ－ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚！」

【Ｅ・　ＨＥＲＯエアーマン】
星４　風属性　戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
効果
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』の効果発動！デッキから『ＨＥＲＯ』と名のつくモンスター一体をサーチする……俺はデッキから『Ｄ・ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を選択し、手札に加える！」

西条はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を取り出し、手札に加えた。

「これでカードは揃ったぜ！！」

得意気になる西条。
葉月は余裕の表情でそれに答える。

「拓夜、ついに出すのね？」

「あぁ、このターンで終わらせてやるぜ！！」

「さぁ、そう上手くいくかしら？……掛かってらっしゃい、拓夜！！」

最高の戦士！！　【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】

「じゃあ遠慮なしでいかせてもらうぜ！？手札から魔法カード『融合』を発動！」

【融合】
魔法カード
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を融合！！」

西条はエクストラデッキから自分にとっての最強カードを取り出し、フィールドに叩きつけた。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を融合召喚！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
融合／効果

「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

「どうだ葉月！？これが俺のデッキ最強モンスターだぜ！！」

西条は自分が最初に当てたカードが出せれた為か、いつもより興奮していた。

「いくぜ、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』のダイレクトアタック！」

高らかに攻撃宣言をする西条。
葉月はそんな西条に「ごめんね」と舌をペロッと出すと、自分の場の伏せカードを発動した。

「罠発動『サンダー・ブレイク』！」

【サンダー・ブレイク】

罠カード
手札を1枚墓地に送る。フィールド上のカード1枚を破壊する。

「私は手札を一枚墓地に送って、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を破壊するわ！」

葉月は手札一枚を墓地に送ると、西条のカードにバイバーイと手を振った。

「そ、そんなぁ～」

西条のカードは破壊され、互いのフィールドには何も残ってはいなかった。

「だけど、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』は次の俺のターンに蘇るんだ！伏せカードを二枚出す！」

西条はそれぞれのカードを自分フィールド上にセットし

「俺のターンは終了！」

エンド宣言をした。

そして移った葉月のターン。

「私のターン、ドロー！拓夜、アンタ…エアーマンで何で攻撃してこなかったのよ？」

「あ…Ｄ・ＥＮＤが破壊されたショックですっかり忘れてた…」

葉月はドローしたカードを確認する。

（良い引きだわ、拓夜…ごめんね）

「私は墓地の『ＢＦ－大旆のヴァーユ』の効果を発動！」

【ＢＦ－大旆のヴァーユ】
星１　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　０
効果／チューナー
このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードとチューナー以外の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついたシンクロモンスター１体をエクストラデッキからシンクロ召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「私は墓地のヴァーユと、シロッコをゲームから除外し、エクストラデッキから『ＢＦ－アームズ・ウィング』をシンクロ召喚！！」

【ＢＦ－アームズ・ウィング】
星６　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１０００
シンクロ／効果
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「墓地でシンクロ召喚だって！？それに…ヴァーユなんていつの間に墓地に…」

「『サンダー・ブレイク』で手札から墓地に送ったカードが、ヴァーユだったのよ」

「な、なる程…」

「じゃあ私のターンのバトルフェイズ、『ＢＦ－アームズ・ウィング』で、拓夜のエアーマンを攻撃！」

「くっ…」

西条　ＬＰ　７７００→７２００
葉月　ＬＰ　４０００

西条はエアーマンを墓地に置くと

「エアーマンが戦闘破壊された時、俺はこの罠カードを発動『デステニー・シグナル』！」

【デステニー・シグナル】
罠カード
自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊された時、自分のデッキまたは手札からレベル４以下の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「俺はデッキから…『Ｄ－ＨＥＲＯ　デビルガイ』を攻撃表示で特殊召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯデビルガイ】
星３　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
効果
このカードが攻撃表示で存在する場合１ターンに１度、相手フィールド上に存在する表側表示のモンスター１体をゲームから除外する事ができる。そのモンスターは相手ターン数えて２ターン後、フィールド上に戻る。この効果を発動したターン、バトルフェイズを行い事はできない。

「やるわね、モンスターが破壊されても次への布石を用意しているなんて…」

「へへ…どうする葉月？」

「私はこのままターン終了よ」

「よし、じゃあ俺のターン、ドロー！」

西条は引いたカードを確認し「よし」と頷く。

「手札からフィールド魔法「ダークシティ」を発動！」

【ダークシティ】
フィールド魔法
「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のつくモンスターが攻撃する時、相手モンスターの攻撃力が攻撃するモンスターの攻撃力よりも高い場合、攻撃する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のつくモンスターはダメージステップの間、攻撃力が１０００ポイントアップする。

「俺はフィールドのデビルガイをリリースして、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ』をアドバンス召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ】
星６　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１０００
効果
このカードは特殊召喚する事はできない。このカードはバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。このカード破壊された次のターンのスタンバイフェイズ時に「ダブルガイトークン（星４　闇　戦士族　攻／守１０００）」２体をフィールド上に特殊召喚する。

「ダブルガイ…2回攻撃が可能なモンスターね、でも『ダークシティ』の効果を得られたとしても、ダブルガイの攻撃力は２０００、私の『ＢＦ－アームズ・ウィング』の攻撃力２３００には届かないわよ！？」

「へへ、その点は大丈夫だ！俺はこの伏せカードを発……ぁ…！？」

「？」

何かを思い出したかのように自分の墓地を確認する西条。
そして自分の墓地から一枚のカードを取り出し慌てた様子でそれを葉月に見せた。

「しまったぁ！！スタンバイフェイズ時に墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ Ｄ・ＥＮＤ』を復活させるのを忘れてた！！」

「ちっ…（思い出しちゃったか）」

「なぁ、巻き戻しちゃあ駄目か？」

「何言ってるのよ、そんなのは認められないわよ」

「え～、ケチ」

「ちゃんとルールに乗っ取った上でデュエルしなきゃ、仮にもし巻き戻して拓夜が勝ったにしても、それで納得できる？それにアンタはこのデュエルが最初のデュエルなんだから、きちんと流れを覚える為にも、このまま続行した方が良いと思うけどなぁ」

「う…そうやって言われると…仕方ない、次のスタンバイフェイズまで休んでな、Ｄ・ＥＮＤ！」

西条は『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ・ＥＮＤ』のカードを墓地に戻すと、自分の場の伏せカードを発動させた。

「ならこの状況はこのカードで切り抜ける！罠発動『Ｄ・チェーン』！」

【Ｄ・チェーン】
罠カード
発動後、このカードは自分フィールド上の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの装備カードとなる。装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。このカードを装備したモンスターが相手モンスターを破壊した時、相手ライフに５００ポイントのダメージを与える。

「『Ｄ・チェーン』をダブルガイに装備させて、攻撃力を５００ポイントアップさせる！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ】
ＡＴＫ　１０００→１５００
ＤＥＦ　１０００
（【Ｄ－チェーン】装備）

「これで葉月のアームズ・ウィングに攻撃すれば、フィールド魔法『ダークシティ』の効果でダブルガイの攻撃力は２５００になる！バトルフェイズ突入だ、ダブルガイでアームズ・ウィングに攻撃！！」

「やるじゃない拓夜！」

「そして、ダークシティの効果発動！ダブルガイの攻撃力を１０００ポイントアップさせる！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ】
ＡＴＫ　１５００→２５００
ＤＥＦ　１０００
（【Ｄ－チェーン】装備＋【ダークシティ】効果）

葉月はクスリと笑うと、手札のカード一枚を西条に見せた。

「じゃあ私はダメージステップ時に、手札の『ＢＦ－月影のカルート』の効果発動！」

「カルート？確か『黒い旋風』の効果で手札に加えたカード…」

「手札からこのカードを墓地に送る事で、自分フィールド上の戦闘を行う『ＢＦ』と名のつくモンスターはエンドフェイズまで攻撃力が１４００ポイントアップするわ！」

「なっ！？」

葉月は手札のカルートを墓地に送った。

これにより、戦闘を行う葉月の『ＢＦ－アームズ・ウィング』の攻撃力は１４００ポイントアップし、攻撃力が３７００となった。

【ＢＦ－アームズ・ウィング】
ＡＴＫ　２３００→３７００
ＤＥＦ　１０００
（【ＢＦ－月影のカルート】効果）

「残念でした拓夜、ダブルガイは返り討ちよ」

「ちっくしょぉ…」

西条はダブルガイが破壊されてフィールドには壁となるモンスターがいなくなってしまった。

西条　ＬＰ　７２００→６０００
葉月　ＬＰ　４０００

「くっ…」

西条は手札を見つめ、次なる作戦を考える。

（モンスターは召喚しちまった、手札には葉月のモンスターを破壊できるカードはねぇ…かといって攻撃を防ぐ事ができるカードもねぇ…ちっくしょぉ！！）

「俺はターン終了…」

（次のスタンバイフェイズ…墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ・ＥＮＤ』を復活させて、反撃してやるぜ！！）

葉月のターンに移り、葉月はカードをドローする。
すると葉月は西条に話しかけた。

「拓夜、今のアンタの残りライフはいくつ？」

「ぇっと…６０００だ…」

「そう、後少し届かないか…」

少し悩む様な仕草をする葉月に西条は何かと尋ねてみた。

「届かないって…？」

「ん？…そんなの決まってるじゃない」

「……」

「アンタのライフを０にする為のダメージが、よ」

「っ！？」

ゾクリ……っ！？

西条の背筋や額から嫌な汗が流れる。

葉月の視線がまるで自分の心臓を射抜いたかの様な錯覚さえ覚える。

（あれ……これって……カードゲームだよな……）

カードゲームなのにこの重苦しく自分にのし掛かる見えない圧力に、今にも押しつぶされそうな気持ちの西条は何も考える事ができなかった。

「ぅ……ぁ……」

葉月は西条に構う事なく、自分のプレイを続ける。

「私は『ダーク・アームド・ドラゴン』を特殊召喚！」

【ダーク・アームド・ドラゴン】
星７　闇属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　１０００
効果
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する闇属性モンスターが３体の場合のみ特殊召喚する事ができる。自分の墓地に存在する闇属性モンスター１体をゲームから除外する事で、フィールド上のカード１枚を破壊する事ができる。

「『ダーク・アームド・ドラゴン』は、墓地の闇属性モンスターが３体の場合のみ特殊召喚する事ができるモンスターよ…私の墓地の闇属性モンスターは『ゲイル』、『ブラスト』、『カルート』の３体！」

「攻撃力…２８００…！？」

「いくわよ拓夜？『ダーク・アームド・ドラゴン』で、ダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　６０００→３２００
葉月　ＬＰ　４０００

「そして、『ＢＦ－アームズ・ウィング』もダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　３２００→９００
葉月　ＬＰ　４０００

「そんな…一気に、残りライフが９００に…！？」

「私はターン終了よ…拓夜、抗ってみなさい！？」

「お、俺のターン…ドロー！」

（こ…このカードは…！？）

西条はドローしたカードを手札に加える。そして墓地にあるカードを手にとり、その中のカード一枚を葉月に見せた。

「俺は墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ・ＥＮＤ』の効果発動！墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ』と名のつくモンスター1体をゲームから除外し、このカードを蘇生させる！」

「流石に今回は忘れなかったわね」

「俺は墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　デビルガイ』をゲームから除外し…」

西条がデビルガイのカードを除外した時、葉月が「待って！」と制止の声をあげる。

「私はそのＤ・ＥＮＤの効果にチェーンして、手札の『Ｄ・Ｄ　クロウ』の効果を発動！」

「『Ｄ・Ｄ　クロウ』？」

【Ｄ・Ｄ　クロウ】
星１　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１００
効果

手札にあるこのカードを墓地に捨てる事で、相手の墓地にあるカード1枚をゲームから除外する事ができる。この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「『Ｄ・Ｄ　クロウ』の効果、このカードを墓地に捨てる事で、相手の墓地にあるカード一枚をゲームから除外する！」

「え…！？」

「拓夜の墓地から『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ・ＥＮＤ』を除外！」

葉月は『Ｄ・Ｄ　クロウ』を手札から墓地に捨て、西条のＤ・ＥＮＤを除外した。

「これで拓夜の最強カードは封じたわ！」

「くっ…まだだ！墓地のダブルガイの効果発動！このカードが破壊された次のターンのスタンバイフェイズ時に、『ダブルガイトークン』を二体特殊召喚する！」

西条はフィールド上に攻守１０００のトークン二体を守備表示で出した。

「そんな攻守１０００のトークン二体を出しても、守りに徹するしかないわね」

葉月がクスリと笑うと、西条もそれに対し笑みで返した。

「それはどうかな？」

「！？」

「葉月はこのターン、俺のＤ・ＥＮＤを封じたつもりでいるだろうけど…この状況を打破するカードをたった今引いてたんだぜ？」

「何ですって！？」

「手札から装備魔法『Ｄ・Ｄ・Ｒ』を発動！」

【Ｄ・Ｄ・Ｒ】
装備魔法
手札を１枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。そのモンスターがフィールドから離れた時、このカードを破壊する。このカードがフィールドから離れた時、そのモンスターを破壊する。

「『Ｄ・Ｄ・Ｒ』ですって！？」

「手札を一枚捨てて、ゲームから除外されている『Ｄｒａｇｏｏｎ Ｄ・ＥＮＤ』を特殊召喚！」

西条は手札を一枚捨て、見事に『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ・ＥＮＤ』を蘇らせた。

「Ｄ・ＥＮＤの効果発動！バトルを放棄する代わりに、相手モンスター1体を破壊する！『ダーク・アームド・ドラゴン』を破壊！」

「そんな！？」

西条　ＬＰ　９００
葉月　ＬＰ　４０００→１２００

「Ｄ・ＥＮＤは自身の効果で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与えるぜ！？」

「…もうくらったわよ」

「へへ…どうだ葉月！？次のターンでアームズ・ウィングも破壊しちゃえば、俺の勝ちだぜ？」

「……」

「…どうした、葉月？」

険しい表情でフィールドを見つめる葉月に西条は尋ねた。

「何か俺…間違ってる所あったか？」

葉月は「え？」と我に返ると

「ううん、大丈夫よ…」

「そうか、なら俺はこのままターン終了だ！」

葉月は今の西条のフィールドを見つめていた。
そして思った。

（負けていた…）

葉月はゆっくりとデッキからカードをドローする。
その手はいつも以上に嫌な汗の感触がまとわりついていた。

（もしあの時、拓夜がエアーマンで攻撃するのを忘れていなかったら？）

葉月は一旦目を閉じた後、ドローしたカードを確認する。

（……でも…まだ私のライフは残っている、それは紛れもない事実！…このターンで決める！！）

「私はチューナーモンスター『ＢＦ－銀盾のミストラル』を召喚！」

【ＢＦ－銀盾のミストラル】
星２　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１８００
効果／チューナー
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、このターン自分が受ける戦闘ダメージは０になる。

「チューナーモンスター？新たなシンクロ召喚をする気か！？」

「レベル２の銀盾のミストラルと、レベル６のアームズ・ウィングをチューニング！」

葉月は二体のモンスターを墓地に送り、レベル８のシンクロモンスターを召喚した。

「レベル８シンクロ召喚、『ダーク・エンド・ドラゴン』！！」

【ダーク・エンド・ドラゴン】
星８　闇属性　ドラゴン族

ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　２１００
効果／シンクロ
チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
１ターンに１度、このカードの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

「『ダーク・エンド・ドラゴン』……」

「ぁ……！？」

声を漏らす葉月。
西条は「どうした？」と声をかけ、首を傾げた。

（……負けちゃった…）

葉月の手札は０枚、フィールド上には先程シンクロ召喚した『ダーク・エンド・ドラゴン』のみ。

一方、西条のフィールドには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』と『ダブルガイトークン』が二体守備表示でいる。
（ダーク・エンドの攻撃力じゃＤ－ＥＮＤにはかなわない、効果を発動してＤ－ＥＮＤを墓地に送って、トークンを攻撃しても、拓夜にダメージを与える事ができない…そして次の拓夜のターン、墓地

のＤ－ＥＮＤが自身の効果で蘇生し、ダーク・エンドを破壊…私はその攻撃力分のダメージを受けて敗北……）

少しの間、部屋の中は沈黙した空気に包まれる。そして葉月は意を決したかの様に、プレイを始めた。

「私は『ダーク・エンド・ドラゴン』の効果発動！攻守を５００ポイントダウンし、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を墓地に送る！」

ダーク・エンド・ドラゴン
ＡＴＫ　２６００→２１００
ＤＥＦ　２１００→１６００

「何っ！？」

西条はダーク・エンドの効果に驚きながらもＤ－ＥＮＤを墓地に送った。

「まずい…このままトークンも墓地に送られたら……」

「大丈夫よ、ダーク・エンドの効果は１ターンに１度だけよ」

「そ、そうか…」

「そしてダーク・エンドで、守備表示のダブルガイトークン一体を攻撃！」

葉月はトークン一体を戦闘破壊すると、そのままターンエンドをした。

「俺のターン、デッキからカードをドロー！」

西条のターンに移り、ドローからスタンバイフェイズに移る。西条は墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を取り出し、葉月に見せた。

「俺のスタンバイフェイズ、墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動、墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ』をゲームから除外し、このカードを特殊召喚！」

再び西条のフィールドに現れる『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』。

「葉月の残りライフは１２００、Ｄ－ＥＮＤの効果発動！『ダーク・エンド・ドラゴン』を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

葉月は言われるままにダーク・エンドを墓地に送り、ダメージを受けた。

葉月　ＬＰ　１２００→０

「私の負けだわ拓夜」

葉月はどこか吹っ切れた様な表情で西条に笑いかける。
それを見た西条は思わずガッツポーズをとり「よっしゃあ！！」と全身で喜びを露わにした。

「初めてのデュエルで…俺…勝ったんだ……」

「意外とやるわね拓夜、途中…本当に初心者なのか？って疑っちゃったわよ」

「へへ、正真正銘本物の初心者だよ」

ザクッ

その言葉が葉月のプライドを貫いた。
顔は平常心を装ってはいるが、内心はめちゃくちゃ悔しがっていた。

（クソ～、油断もあったけど…序盤の私のプレイングミスも敗因の一つ、次は負けない…このデュエルで拓夜のデッキ構成は大体把握できたわ）

葉月は自分のデッキケースからサイドデッキを取り出すと、西条には見えない様に机の下で超高速でデッキ編集を始めた。

そしてそのまま西条に再戦を申し込む。

「拓夜、このままもう一回デュエルしよ？」

「おう、いいぜ！？」

超高速でデッキ編集を終えた葉月は再び机の上にデッキを置いた。西条もデッキをシャッフルし終え、机の上にデッキを置く。

「私が負けたから、今度は私が先攻を頂くわ」

「あぁ、掛かってこい」

そして二人はその日、遅い時間までずっとデュエルを続けていた。

西条拓夜の苦悩

「え、何だって？」

「だから～」

西条は今、トイレで用を足していた。
その西条の横で友人の結城雅一も用を足している。

「俺は葉月さんとデートしたいんだって言ってるの！西条ちゃん…セッティングしてくれないか？」

「は…葉月とデート？」

「頼むよ…」

二人は手を洗いトイレから出ると、自分等の教室へと向かって歩き出す。

「デートねぇ…」

西条は歩きながら腕を組み頭を捻った。この様な事は今に始まった事ではない。

烏丸葉月は学年ではかなりモテる。しかも特定の彼氏もいないときた。
そして西条拓夜はその烏丸葉月の幼なじみ。その二人の関係を知った友人知人等から葉月を紹介してくれ、もしくは今回みたいにデー

トに誘いたいから仲介役をしてくれ等といった事には今まで結構な数あった。

「別にセッティングするのは構わないケド…」

その言葉を聞いた結城は西条の手を掴むと満面の笑みで「ありがとう西条様！！」と頭を下げた。

「いや、そこまでオーバーなリアクションされても…」

二人は教室に入り、窓際にもたれ掛かった。

「んでさ、仮にデートするとしても…何かリクエストしたい場所とかあるのか？」

西条は結城に尋ねると「ラブホ」と即答で返事が返ってきた。

「アホか、夢見すぎだ」

「分かってる、冗談だって～」

ヘラヘラと浮かれている結城に西条は軽く溜め息をつき、再度同じ質問をしてみた。

「で、デートしたい場所とかあんのか？」

「ラブホ」

「……ハァ……」

西条は大きく溜め息をつくと、ゆっくりその場を後にする。

「あれ？西条ちゃん？ちょっ…待ってよ、冗談だって冗談！？」

結城は慌てて西条の後を追いかけた。

「西条ちゃん、冗談だって冗談」

「分かってる…ちょっと待て」

西条は自分の鞄から何やら一つのチケットを取り出し、それを結城に渡した。

「これは？」

「カラオケ、ルーム代金３０％ＯＦＦ券…これ使いなよ」

「おぉ、良いのかよ！？」

「いいよ、その券…まだ家に束で残ってるから」

「……そう、か」

「で、葉月は俺が誘えばいいのか？」

「ああ！！頼むぜ、西条ちゃん！！」

キーンコーン……

予鈴が鳴り二人はそれぞれの席につき、次の授業の用意を始めた。

西条は準備をしながら教壇の前の席に座る葉月を見る。

「烏丸葉月…ねぇ…」

（人のこと言えた身じゃねぇけど、アイツ…早く彼氏作れよな…アイツに関わる恋愛事に付き合わされるのはもうこりごりだぜ…）

その日の授業中の西条のノートは結城と葉月のセッティング内容で５ページ分埋め尽くしたのであった。

「お～い、葉月～」

放課後、西条は席を立ち帰ろうとする葉月を呼び止めた。

「ん、何よ？」

葉月は相手が西条と知ると、自分の席でダルそうに座っている呼び主の所へて向かう。

西条は葉月が自分の前に来ると頭をポリポリとかき、視線を窓の外

へと泳がせながら「あ～…と」と言葉を探す。
そんな西条の様子にどしたの？と葉月は首を傾げた。
「あのさ…今週の土曜日って…お前、暇か？」
「えっ！？」
「いや…あのさ、遊びにいかねぇかなぁなんて…思ってさ」
西条はそう言って誘った直後に思った。
（あ、何かこの誘い方って俺が葉月をデートに誘う感じになってんじゃねぇか！？しまったな…とりあえずここから、結城が葉月を誘ってるっていう感じに話をもっていかないと…！？）
「ええとだな、結「いく！！」
「え？」
「行くわ、楽しみにしてる」
西条はまさか即答されるとは思ってもみなかった。
それも「行く」と言われるとは。
（即答かよオイッ！？しかもこいつ、顔をほんのりと朱色に染めやがって…）
「で、拓夜…時間は？」

「あ、あぁ…そうだな…１１時半頃に東区駅前の噴水に着てくれよ」

「１１時半に駅前の噴水ね、分かったわ、楽しみにしてる！」

ニッコリと微笑む葉月に西条はそれ以上何も言えずに、ただ「あぁ」と頷く。

葉月は自分の鞄を持ち直すと

「じゃ、私これから塾があるから…またね拓夜！」

手を振り教室から出ていった。

葉月の姿を見送った西条は机にうつ伏せた状態になり、大きく溜め息をついた。

（さて…後は俺の采配次第…いや、結城がどんなアクションを起こしてくれるか…だな）

土曜日　午前　１０：００

おもちゃ屋『サプライズ』二階のとある一室にて。

「う〜ん、このカードはデッキに三枚入れないと…あれ？あの魔法カードどこいった！？」

西条拓夜は自室でデッキ調整をしていた。

葉月とのデュエル後、カードゲームの面白さに魅了された西条はその後ちょくちょくとカードを買い集めていた。

気が付いたら部屋の床半分はカードで覆い尽くされている。

そして今、西条は散らばったカードの中から新たに組み直そうとしているデッキに必要なカードを探している最中であった。

「あれ〜…『テラフォーミング』ドコだ〜？」

ガサガサと散らばったカードをかき分けていくが探し物は一向に見つからない。

そうしている内に時間はどんどんと過ぎていくのであった。

目の前を沢山の人達が通り過ぎていく。その中には若い男女のペアもいれば、スーツを着て駅に向かう会社員もいればと東区駅前は今日も人混みで溢れていた。

その駅前の噴水広場で烏丸葉月はベンチに座りながら建てられた時

計を見る。

現在１０：４５分。

（そろそろ来てくれても良いんじゃないの？）

どこかソワソワしながら時間を潰す為に携帯電話を開いた。

丁度その頃、結城雅一は東区駅前到着のバスから降りた所だった。

いつもより気合いの入った服装で、ポケットの中には先日西条から貰ったカラオケルーム代金３０％ＯＦＦ券が入っている。

（葉月さん…ちゃんといるかな…？西条ちゃん、上手くやってくれよ…！？）

心の中で祈る様に念じた結城は、葉月がいるであろう噴水広場に向かって歩いていった。

（とりあえず、最終確認だ…俺が葉月さんを見つけたら、俺から西条ちゃんに見つけた事を伝えるメールを送る…そしてそのメールを見た西条ちゃんは、葉月さんに自分は行けなくなった事を伝えるメールを送る…んで、後は俺の腕次第…）

そんなこんな考えている内に、葉月の姿は直ぐに見つける事ができた。

ドクン…！！

途端に自分でも顔が真っ赤になるのが分かる結城雅一。葉月を見て思った事は、まず素直に綺麗だという事だ。

結城はゆっくりと携帯電話を開き、手筈通りに西条へと連絡を入れた。

ヴゥー…ヴゥー…ヴゥー…

「ん？メールだ…」

西条は部屋の中でカードを触りながら自分の携帯電話を開いた。メールの相手は結城雅一。

「結城から…あ、そっか…もうそんな時間か」

携帯電話に表示されている時間を見ると１１：１０になっていた。葉月に言っておいた時間は１１：３０だからもうアイツは噴水広場にいるだろうと思った西条は葉月のアドレスを開き、彼女に一つのメールを送った。

「……送信完了っと、さて…二人の様子でも見に行きますか」

西条は立ち上がると葉月に申し訳ないと思う気持ちを抑えながら、部屋を後にした。

少し離れていた所から結城は葉月を見ていた。

（そろそろ西条ちゃんから葉月さんにメールが送られて来る頃…）

すると葉月に西条からメールが届いたのか、葉月の表情がパッと明るくなった。

ズキンッ

結城はその表情がとても綺麗に見えた反面、少し悲しくなった。

（…よし、今だ……行くぜ！男を見せろ！！結城雅一！！）

意を決した結城は真っ直ぐに葉月の所へと向かった。

（拓夜からメールが来たっ！！）

葉月は開いていた携帯画面に移る「西条拓夜」の文字を確認するとそのメール内容を確認する為、ボタンを操作していく。

（もう時間だし、少し遅れるとかって内容なんでしょ、アイツの事だから）

そう思い送られてきたメール本文を読むと、葉月の表情は固まった。

（え…？…何ですって！？）

携帯電話を握る手がぷるぷるて震えている。

（『急に行けなくなった』ってどういう事よ！？もうっ！！）

葉月は西条へメールの返事をしようと電話をかけようとした時、

「ねぇ、ちょっといいかな？」

と、声をかけられた。

葉月は「ん？」と顔をあげると、そこには見知らぬ一人の男が立っていた。

金髪の長髪で、顔には派手なサングラス。

耳にはピアスがゴチャゴチャと飾られており、指にもリングがゴチャゴチャとはめられている。

一言で言えば、悪い言い方をすれば『チャラ男』だ。

逆に良い言い方が思いつかない程に、一目見ただけでこの男の事が余り好印象が持てなかった。

「キミ結構カワイイね～、一人こんな所で何してるの？」

馴れ馴れしく話しかけてくるこの男は、葉月を逃がさない様に自然な動作で正面に立った。

葉月は右、左と視線を向けるがなかなか上手くすり抜けられそうも

ない。

（この男…もしかして結構ナンパ慣れしてる？どうしょう…逃げ場がない…！？）

葉月は仕方ないと軽く溜め息をつき、男に向かってやんわりと答えた。

「ごめんなさい、今友達と待ち合わせしてるの、邪魔されたくないから話しかけないでもらえるかな？」

「ええ～そうなの？じゃあさ、その友達が来るまで一緒に話でもしようよ？」

それでもなお、引き下がろうとしないこのチャラ男に葉月は怖いと感じた。

見えないサングラスの奥から感じる視線、手や足の動きが自分という餌を狩るハンターにも見える。

（怖いよ…助けて、拓夜…拓夜…っ！！）

「あれ？」

結城雅一は葉月の所へ向かおうとして、その動きが止まった。

（誰だ…あの男…？）

目の前で見知らぬ男が葉月に何やら話しかけている。
チャラチャラした服装の如何にもガラの悪い男だ。

（もしかして葉月さん…あのチャラ男にナンパされてる？）

葉月を見ると、本当に嫌そうな感じでいるのが一目見て分かった。
周りの行き交う人々は、ガラの悪いチャラ男には関わりたくないと言わんばかりに二人から遠ざかり、見て見ぬ振りをしている。

そんな中、結城はふと思った。

（あれ、待てよ…ナンパされている葉月さんを颯爽と救い出す俺…ってなシチュエーションになる様に…西条ちゃんが仕掛けたのか？これって？）

そう思うと何だか目の前のガラの悪いチャラ男の事が全然怖くなくなっていった。

（凄ぇよ西条ちゃん！！まさかここまで手の込んだイベントを用意しているなんて…打ち合わせの時にはそんな話は全く出てなかったのは、俺の度胸を試す為なんだな…へへ、大丈夫だぜ西条ちゃん…葉月さんは、俺が守る！！）

実際、西条はそんな事まで予定には入れてなかったのだが、都合良く勘違いして熱血の入った結城はズンズンと魔王（チャラ男）に捕らわれているお姫様（葉月）を救いに行く為に動き出した。

（拓夜…怖いよ…助けて…！！）

じりじりと迫り来るチャラ男。

葉月は今までナンパはされた事はあったが、こんなガラの悪い人から声をかけられた事はなかった。

恐怖で頭がパニックに陥ったその時、チャラ男の後ろからまた別の声が葉月に声をかけてきた。

「ごめんごめん、待たせちゃったな」

「え…！？」

「ァアン？」

葉月とチャラ男は同時にその声の方を向くと、そこには同じクラスの結城雅一がこちらに寄ってきた。

（え…ゆ、結城くん…？）

結城はチャラ男を押しのけ、葉月の手を取ると

「悪いな待たせて、じゃ…行こうぜ」

そう言って葉月を連れだそうとした。

が、

「オィ、待てや！」

案の定、チャラ男がそれを引き止めた。
チャラ男は自分の標的を横取りされたのが気に入らない様子で、濃い色をしたサングラスの奥から結城を睨みつける。

「お前、なに勝手にその娘を連れ出してんだよ？」

パンツのポケットに手を突っ込みながらゆっくりと二人に迫り行くチャラ男。

結城はそんな中でも西条ちゃん、手が込みすぎだぜ！！と超プラス思考に勘違いをしていた。
葉月はチャラ男の方に振り向くと

「何なんですか？私、言いましたよね？友達を待ってるって…その友達が来たから行くんです、迷惑ですからもう来ないで下さい！」

と、正面きってチャラ男に言いつけた。

だがチャラ男はそんな事で、はいそうですか～分かりました～と引き下がる奴ではなかった。

「じゃあさ、俺も一緒させてよ？君みたいな可愛い娘ともっと仲良くなりたいし」

「私はなりたくありません、行こ、結城くん！」

「ぁ…あぁ」

チャラ男から逃れようとしたその時、チャラ男は葉月の手を無理やり掴んだ。

「やっ…！？」

「そんな連れない事言うなって、せめて昼ご飯だけでも一緒しない？」

余りにもしつこいチャラ男に結城は葉月からチャラ男の手を引き離し

「しつこいぞアンタ！！行くぞ、葉月さん！！」

「う、うん！！」

結城は葉月の手を取り、その場から走って逃げ出した。

「待てよ！！ォイコラァ！！」

チャラ男は二人の後を追いかけようとしたその時、チャラ男の肩に手が置かれた。

「ァアン？誰だ！？」

結城と葉月はどれほどの時間走りつづけたか分からなかったが、気が付くと後ろにはチャラ男の姿はなかった。

「ハァ…ハァ…葉月さん…大丈夫だったか？」

肩で息をする結城、それは葉月も同じだった。

「う、うん…ハァ…ハァ…ありがとう、結城くん…」

二人は学校近くの河原に来ていた。

辺りには人気がなく、秋の少し乾いた風が二人の汗を撫でていく。

「本当にありがとう、結城くん…あの男にスッゴい困ってたんだ…」

「みたいだね…でも、無事で良かったよ」

葉月の笑顔に思わず顔を逸らす結城。

（うっわ～！！葉月さんと手を繋ながら長いこと走っちゃったぜ！！…笑顔も最高に可愛いよー！！）

「あのさ…結城くん、お礼がしたいんだけど…お昼、一緒に食べない？」

「あぁ……え？」

結城は耳を疑った。

まさか葉月の方から食事を誘われるとは思ってもみなかった。

結城の頭の中はもう嬉しいやら嬉しいやら嬉しいやらでいっぱいだ

った。

「あ、無理ならまた今度でも…」

「いや、大丈夫だけど…え?…俺なんかで良いのか?」

「良いも何も、結城くんは私の恩人だもん…私こそ、私で良かったらってな位なんだから」

(……夢みたいだ…葉月さんから恩人だなんて言われるなんて…)

「ありがとう、じゃ…昼ご飯たべに行こうか?」

「うん」

「あ、そうそう…この間美味しい店を見つけたんだ」

「え~本当に!?」

「本当本当、案内するよ」

「スッゴい楽しみ~!!」

二人は互いに笑いあいながら歩いていった。

負傷した右手

時刻は夕方の１７：００頃…

西条は一人、自室で右拳に包帯が巻かれた手で今朝、組み上げたデッキをシャッフルしていた。

「イツツツ…」

（やっぱりこっちの手は使いものにならねぇか…何か指先まで紫色になってきたし）

西条はシャッフルする手を止め、デッキを机の上に置くとベッドへゴロンと寝ころんだ。

「ふぅ…結城や葉月には悪い事したな…」

西条は目を閉じ、昼間に起きた出来事を思い返していた。

西条は結城から、葉月を見つけたとのメールを受けて、葉月に自分は行けなくなったとメールを送った。

事前に結城と打ち合わせをした通りならば、一人になった葉月を結城が遊びに誘い、二人の時間ができあがるといった予定になる筈だった。

一応、上手く事が運ぶかどうか気になった西条は二人の展開を遠く

から見ておこうと思い、自分も駅前の噴水広場に向かった。

向かったのだが、そこで予期せぬトラブルが起きた。

葉月がガラの悪いチャラ男にしつこくナンパされていたのであった。葉月の側には結城もいて、二人はチャラ男からしつこく迫られていたのだが、結城が葉月の手を引いて二人一緒に走り出した。

さすがに葉月に断った手前、なかなか出ていこうにも出ていけなかった西条…すると二人がチャラ男から逃げた事で躍起になったチャラ男が二人を追いかけようとした。

すかさず西条は飛び出して、チャラ男の肩を掴んだ。

「ァアン？」

チャラ男が振り向いたと同時にそのチャラ男の顎に全身の力を込めた右ストレートを叩き込んだ。

「ガッ…！？」

大きくよろめくチャラ男に、西条は何も言わずに一度殴りつけた顎に再び右ストレートを叩き込む。

ゴキッ！！ベキャッ！！

「アガァ！？」

二度目のストレートで顎が外れたのか、チャラ男は両手で顎を抑え、無防備な体制をとる。

西条はそんなチャラ男の顔面の鼻に目掛けて渾身の右ストレートを放った！

ゴキャッ！！

殴った衝撃が右拳にビリビリと伝わってくる。
チャラ男は鼻血を撒き散らしながらそのままヨロヨロと座り込んだ。

殴られた弾みで外れたサングラスを踏みつけながら、西条はチャラ男の顔面を思いっきり蹴り上げる。

ガッ！！

「ゴェッ！！」

チャラ男は道端のド真ん中で気絶した。

流石に土曜日の真っ昼間から駅前広場で殴りつけたとなっては騒ぎになる。

チャラ男が完全にノビた頃には誰かが通報したのか警察官が二人程、自分達に向かって迫ってきているのが見えた。

（やべ…やりすぎた）

西条は警察から逃げる様にその場を全力で走り去った。

「ハァ…ハァ…ここらまで来れば…警察も追っては来ないだろ…」

西条は東区にある神社の鳥居の前まで来ると、その鳥居の足にもたれ掛かる様にして座り込んだ。

かれこれ一時間は走っただろうか、全身から感じる疲労感は生まれて初めて感じた。

（まさかここまで頭が真っ白になって殴りかかるなんて…自分でも信じれない位だ…）

空を見上げると、秋風が自分を包み込む様に強く吹き荒れた。

（心臓がまだバクバクしてる…いいか、よい子の皆は絶対に無闇な暴力はいけないぞ！！殴られた方は体が痛むけど…殴った方は心が痛むんだ…！！）

自分に言い聞かせた西条は、チャラ男を殴りつけた右拳を見つめる。

その手は少し動かしただけでも半端ない痛みが走った。

（痛っ…！！）

そしてふと、自分が警察から逃げた事を思い出した西条は、携帯電話を取り出し、家に電話をかけた。

電話に出た母親は、まだ自分の息子が何をしたかは知らない様で、

『今日は晩御飯は家でたべるの？』と聞いてきた。
西条は、出来ればこの事は知られたくないと願った。

それからしばらくして家に帰った西条は、家に着くなり携帯電話に一本の着信が入った。
左手で携帯電話を掴み画面を開くと、相手は結城からであった。

（結城…？）

「はい、もしもし？」

『西条ちゃん、今日は本当にありがとな！！』

「あ、あぁ…その様子だと上手く葉月を誘えたみたいだな？…今は葉月と一緒じゃないのか？」

『あぁ、昼飯を一緒に食べた後…葉月さんは自分の服を買いたいらしくてさ、今…店の中に入っていったから、外には俺一人』

「そうか、今こうして俺と電話なんかしてる事はバレるなよ？」

『分かってるって、とにかくお礼が言いたかっただけだよ、じゃ…また今度』

「あぁ、楽しんでくれ」

ピ、

通話を終了した西条は冷蔵庫から湿布を取り出すと、自分の部屋へと向かった。

「拓夜〜、拓夜〜？」

「っ！？」

いつの間にか眠ってしまったのであろう、西条は母親の呼ぶ声にハッと目が覚めた。

徐にベッドから起き上がろうとすると、右手に激痛が走る。

「ぐぁっ！？」

恐る恐る右手の包帯と湿布を剥がし皮膚を見てみると、右手は真っ黒に腫れ上がっていた。

（うわ…こりゃもう完全に折れてるね）

『拓夜〜？』

再度、母親からの呼び声で我に返った西条は部屋のドアを開けると、その場で「何〜？」と大きく返事をする。

すると母親から返ってきた返事は西条の予想外の言葉だった。

「葉月ちゃんよー！」

「っ！？」

（葉月！？…あぁ、きっとドタキャンした事だな…まぁ、俺が悪いっちゃあ悪いんだし…素直に謝ろう）

「あぁ…上がってもらってくれー」

そう言うと西条は急いで右手に湿布を張り直し、その箇所に再び包帯を巻き付ける。

そして包帯姿の右手を見られない様に、上着の右腕の中に包帯巻きの右腕を隠した。

（何となく…これは見られたくない…）

すると、階段を葉月が上がってくる姿が見えた。

葉月は階段を登りきると、部屋の入り口の前で立っている西条の方を向いた。

「……」

葉月はジト目で西条を睨みつけてきた。
やはり急なドタキャンしたせいだろう、無言の圧力が半端なく怖いと西条は思う。
しかし黙っていては何も始まらない。
西条は葉月に対し、素直に謝った。

「葉月…今日はごめん」

「……」

（あれ？それでもまだ無言…ぅぅん……どぅしょぅ）

少し焦った西条は部屋のドアを開け

「立ち話もなんだから…部屋に入ってくれ」

葉月を促すと、彼女は無言のまま彼の部屋へと入ってきた。

部屋の中央にある小テーブルを挟み、互いに向き合う形で座る二人。

「ぁ…」

（葉月の服…昼に見た時のままだ…そっか、結城と…楽しんでもらえたかな？）

「あの…葉月さん、今日の事は本当にごめん、俺も今日は急に外せない用事が…」

「……馬鹿」

葉月は顔に影を作り、俯きながら震える声で少しずつ話し出した。

「拓夜の…馬鹿」

「……」

「今日…拓夜の事を待ってたら…知らない変な男に言い寄られてきて…私…怖かった！」

（…あの時か）

西条は葉月に見えない様にテーブルの下で自分の右拳をさする。

「途中何度も何度も拓夜の事を考えたんだよ…」

「……ごめん」

「結局…たまたま通りがかった結城くんが…助けてくれたから良かったけど…」

「そぅ…なのか…」

（まぁ、その現場は俺も見ていたけど…お手柄だな、結城！）

「アンタ…一体何やっていたのよ！？」

葉月の声に力が入る。

その目にはうっすらと涙を浮かべていた。

（…本当に怖い思いをさせちまったな）

「…ごめん、その頃…俺は用事で家にいなくてさ」

「……」

ジッと西条を見てくる葉月。

その葉月に隠し事をしている西条にとって、自分の発言ひとつひとつが棘となって自分の胸に刺さってくる。

「とにかく…俺からも結城にはお礼を言っておかなくちゃな…」

「……アンタ」

「？」

「体…どっか悪いの？」

「っ！？…別に、どこも」

「アンタは昔から直ぐに顔に出るから…自分でも分かってないと思うけど…アンタ、今…顔色が物凄く悪いわよ」

葉月は立ち上がり西条の側まで寄ると、西条の額に自分の右手を当てた。

「っ！？アンタ、凄い熱じゃない！？」

「え…」

「とにかく、まず布団で寝て！！」

「あ、ちょっ！？」

葉月は徐に西条の右腕を掴み、それを引き上げた。

その瞬間、西条の右手に激痛が走った。

「イダダダッ！？」

「っ！？アンタ…何よこの手…！？」

葉月は西条の服の裾から出る包帯巻きの手を見て驚いた。

指先は赤黒く変色しており、いつも見る指や手の太さではなく明らかに異常な程、西条の右手は腫れ上がっていた。

「離せっ！！」

無理やり葉月の手を振りほどく西条。

そのまま西条はベッドに座り、右手の包帯の上を左手で添えた。

「どうしたのよその右手、何やったのよ！？」

「……」

（チャラ男を殴って折れたなんて言えない……あぁクソ！？）

「電柱に思いっきり殴りつけた時に…」

「はぁ？何下手な嘘ついてるのよ！？アンタ、病院は行ったの！？」

「まだ、まさか俺も自分の手がこんな事になるなんて思ってなかったからな…さっきまで寝てたし」

「とりあえず、今すぐに病院に行くわよ！！ほら、立って！？」

「ぁ…あぁ」

西条は葉月に言われるまま立ち上がり、病院へ向かう支度を始めた。

母親が息子の右手を見た時の表情はその時、西条に強く印象づけられた。

店は一時閉店、母親の運転する車に西条と葉月は乗り込み、東区にある病院へと向かっていった。

…パシャ

病院の診察室のモニターに右手のレントゲン写真が貼り付けられる。

そのレントゲンを見た先生は至って普通に

「うん、第二指から第四指…あとは手首ですね…折れてます」

「…そんなにも？」

「手先の骨は小さな骨と骨が密集している場所ですから、衝撃とかには弱いんですよ」

「そ…そうなんですか」

「一体どうしたんです？何かに思い切りぶつけたんですか？」

先生が事情を尋ねてくると、同席していた母親と葉月が口を揃えて西条に対し追及してきた。

「拓夜、アンタ一体何をやったの？」

「『電柱に殴りつけた』なんて下手な嘘はもう通らないわよ」

「わ、分かってるよ…！！」

西条はモニターに貼られた自分のレントゲン写真を見つめながら短刀に話した。

「…今日の昼に不良に絡まれて、ソイツを殴りました…多分その時だと思います」

半分本当、半分嘘…

殴ったのは本当だが、別にチャラ男から西条に絡んできた訳ではな

い。

「絡まれたって…アンタ、何をやってたのよ!?」

「別に何もしてねぇよ、それより」

西条は先生の方を向き、完治するにはどれ程の時間が掛かるのかを尋ねてみた。

「そうだね、まぁ半年以内には治りますよ、また君が殴ったりとかしなければ、だが」

先生は冗談っぽく笑みを浮かべながら西条の右手を持ち上げる。

「イダダダッ!?殴りませんって!!」

「とりあえず、手先を固定する為にギプスを作るから…治療室まで移ろうか?」

先生に案内され、ギプスを右手に装着された西条。

病院を出る頃には夜の九時になろうとしていた。

「骨折かぁ…初めてだな」

病院のロビーで椅子に座っていた西条は自分の右手に装着されたギプスを見て軽く溜め息をついた。

今にして思えばこの怪我は結城が葉月とデートしたいという依頼で、たまたま起きたアクシデントに巻き込まれた為にできてしまったもの。

（うっわ、そう考えると結局は葉月の恋愛絡みによる怪我じゃねぇか…）

そう思うと何だかかなり落ち込んでくる。

（もう知らね、コイツに関わる恋愛事なんか…また紹介してくれ、とかセッティングとか頼まれても絶対にしてやらない！！）

「ねぇ、拓夜…大丈夫？」

「ん、心配いらねぇよ…確かに利き手が使えないのは辛いけどな…それより結城とはどうだった？」

「え、結城くん？」

「あぁ…お前が結城に助けてもらってからは知らないけど…アイツと一緒に遊んでいたんじゃねぇのか？」

「なに、気になるの？」

含んだ笑みを見せる葉月に、西条は欠伸をしてから

「元は俺からお前を誘ったんだから、気にしてやらなきゃお前に申し訳ねぇだろ」

「ふ～ん、まぁ良いけどね…結城くんかぁ、洒落じゃないけど…結城くんって勇気あるよね」

「ナンパ男から颯爽とお前を助けたんだからな、俺も結城が友達で本当に良かったと思ってるよ」

「うん、話してても面白い事ばっかり喋ってくれるし…拓夜には悪いけど、今日は楽しかったよ」

「…そうか」

葉月の笑みを確認すると、何となく寂しい気持ちになる西条。
だがそれと同じ位、結城におめでとうと祝福したい気持ちにもなった。

すると会計から西条の名が呼ばれた為、西条は立ち上がり精算所へと向かう。

お金を支払い終えた西条が戻ろうとした時、ロビーの端の方に設置されている自販機に目が止まった。

その自販機には、松葉杖を突きながらジュースを買っている女の子がいた。
見た目、自分と同年代だろうか…
その女の子は片足が包帯で巻かれており、その足が使えない様であった。

（あんな女の子でも…不自由なりに頑張ってるんだな）

自分の右手を見つめ直した西条は

「俺も…早く治せる様に頑張らないとな…」

そう呟くと、自分を待つ葉月と母親の元へと向かって行った。

成瀬花穂との出会い

翌日、西条は右手の痛みによって目が覚めた。
時刻は１０時を少し過ぎた頃で、そのまま洗面所へと向かい、顔を洗う。

「うぅ…不便だ…！！」

歯を磨く時に片手しか使えないのは意外と辛い。
いつも通りならば右手に歯磨き粉を、左手に歯ブラシを持つのだが、今はそれが出来ない。
顔を拭く時も片手しか使えない。
西条は片手一つでここまで不便になるとは思ってもみなかった。

顔を洗い終えた西条は部屋に居てもする事が無い為、日曜日の東区の商店街へと向かった。

「しかし…やる事がないと暇だな」

一人道を歩く西条はそうポツリと呟いた。
今年で学校を卒業し、そのまま進学はせずに家の店を手伝う事になってる予定の西条にとって、入試の為の受験勉強や就職活動は行う必要性を感じない。
それよりも同じ区内にある他の店の人達との横の繋がりを得る為に、

東区内にある商店街の色々な店の人達と仲良くなっておく必要がある。

人と人とのコミュニケーション、持ちつ持たれつといった昔ながらの環境というのは意外と馬鹿にできないのだ。

昔から西条は小さい頃から区内の集会には父親に連れられて何度も顔を出している。

その為か商店街に昔から建っている店の人達とは顔が利き、道ですれ違う程度でも気さくに話す様になった。

「あら、西条さん宅の拓夜ちゃんじゃないかい？」

「あ、蕎麦屋のおばちゃん、こんにちは！」

「どうしたんだい、その右手は？」

「ハハ…、ちょっとやらかしちゃいまして」

「ふぅん、片手が使えないと何かと不便だろ？」

「はい、予想以上に…顔を洗うにしても服を着るのにも手間取って」

「だろう？ウチの旦那なんかこの間…」

……

「それじゃ、頑張りなよ～！」

「はい、ありがとうございま～す！」

２０分くらいは続いたであろう蕎麦屋のおばちゃんの話が終わり、西条はその場を後にした。

（ハァ……長かった…）

ブラブラと歩いていると、西条は昨日の夜に診てもらった病院にたどり着いた。

「別に今日は受診日じゃないし…そろそろ帰るか…いや待て、ジュースを買ってから帰ろう！」

そう思ったら行動あるのみ。

病院の中に入ると空調が効いているのか、エアコンの少しひんやりとした風が全身を包み込んだ。

「売店売店～、ん？」

売店に向かう途中で床に一枚のカードが落ちていた。

何だろうと思い、そのカードを拾ってみると

「何だ…これ、…遊〇王カード！？」

何で病院に！？と不思議に思い、辺りを見渡してみるが、このカー

ドの持ち主らしき人物が見当たらない。

（カードスリーブに入ってるから…きっと誰かが使っているカードなんだろうけど…）

西条はそのカードをポケットに入れ、とりあえず売店でジュース一本を購入した。

ここの病院の売店で買うと、値段が定価よりも１０円ばかり安いのだ。

（少しでも安く…ってね、さて…ロビーの椅子に座ってゆっくりと飲みますか）

売店を出て直ぐの所にある椅子に座り、先程購入したジュースを飲んでいると、一人の女性が目に入った。

（あ…あの子）

その女性は片足が包帯とギプスで固定されており、両手で松葉杖をついて玄関ホールを落ち着きなくウロウロしている。

その姿はまるで床に何か落ちていないか探し物をしているかの様だった。

（あの子…確か昨日の帰りに見た…松葉杖の子だよな）

西条はポケットに入れた一枚のカードを取り出し、その松葉杖の子とカードを見比べる。

（もしかして…このカードの持ち主が…あの子?…ぅおっ!?この

カード…ホログラフィックレアじゃねぇか！？）

ホログラフィックレアとは今現在の遊〇王カードの中で一番レアリティが高いカードだ。
確か自分の店でもいくつかこのカードを取り扱ってはいた筈だが、他のカードと比べて値段が高く、ほとんど売れていないカードだ。

（凄いな…商品以外での実物なんて初めて見た…あ、でももしこのカードがあの松葉杖の子のだったら…きっとあの子にとって宝物だよな？帰してあげなくちゃ）

西条は立ち上がり、松葉杖の子の所へと向かった。
松葉杖の子は西条が近づいているのにも気が付いた様子もなく、床を見ながら懸命に探し物をしている。

「どこ…全然見つからないよ…」

「あの…ちょっといいかな？」

西条が松葉杖の子に話し掛けると、松葉杖の子は立ち止まり「？」と西条の方を向いた。

「何か探し物でもしているのか？」

西条は尋ねると松葉杖の子は「ええ」と軽く頷く。

「カードを探してるんです…あの、すいませんがどこかでカードを見ませんでしたか？」

（カード…やっぱりこのカードはこの子のか）

西条は松葉杖の子にスリーブに入ったカードを差し出した。

「もしかして…これ？さっき床に落ちていたんだけど」

西条がカードを差し出すと、落ち込んだ雰囲気の彼女の表情がパァッと明るくなる。

「これです！あのっ、ありがとうございます！！」

カードを受け取ると、松葉杖の子はペコペコと頭を下げてきた。

（松葉杖ついてるのにそんな慌ただしい動きをしたら…）

そう思ったら案の定、松葉杖の子は体がグラッと傾き、そのバランスを崩し転びそうになる。

「あ…！？」

「危ないっ！？」

思わず両手を使い、その子の体を支えた西条は顔を思いっきりしかめた。

（しまった…右手を思わず使っちまった…！？）

「だ、大丈夫か？」

西条は尋ねると、西条の腕の中で抱えられた松葉杖の子は「は、はいっ」と顔を真っ赤にしながらそれに答える。

「あの…」

「ん？」

松葉杖の子は体勢を立て直し、近くの椅子に座ると、再び西条に頭を下げた。

「本当にありがとうございます、あの…私…成瀬花穂って言います」

「え、あ…あぁ成瀬さん…ね、俺は西条拓夜」

いきなり自己紹介された為、西条も思わず自己紹介をした。

そこで西条は気になった事を尋ねてみる事にした。

「あのさ、初対面でこんな事を聞くのもなんだが…成瀬さんはその…遊〇王カードをやるの？」

西条の問いに成瀬は躊躇う事なく、手にしたカードを見つめてそれに答えた。

「はい、私…入院生活が長いものですから、カードは丁度いい時間潰しになるんです」

「へぇ、病院の中でもデュエルできる相手がいるのか…」

「いませんよ」

「へ？」

「いませんよ、デュエルしてくれる人なんか…いつも私一人で一人二役みたいな感じでやってるんです」

西条は成瀬花穂の話しを聞き「そう」とポツリと呟いた。

「あのさ、俺で良かったら…相手しようか？」

「え？」

成瀬は思わず西条を見上げる。

「俺…最近になってデュエルを始めたんだけどさ、俺で良ければ喜んで相手になるよ」

「ほ、本当ですか？是非お願いしたいです！！」

ペコペコと頭を下げる成瀬に、西条はその肩に手を置くと

「じゃあ俺…家までデッキを取りに行ってくるからさ、成瀬さんは病室で待っててよ」

「はい、分かりました！あ、私の病室は…三階の３１５号室です」

「うん、分かった…じゃ待っててくれ」

西条は病院を抜けると全力で自宅へと向かっていった。

西条が走って自宅に向かうと、家の前に葉月の姿があった。

「あ、拓夜…」

西条は葉月の前で止まると、葉月は西条に「ドコ行ってたの?」と尋ねてきた。

「ん…病院、んで、これからまた病院」

「え?ちょっとアンタ今日はまだ受診日じゃないでしょ?」

葉月が話している最中に西条は自分の部屋へと入っていった。

ポツンとその場に一人残される葉月。

「…人が話している最中に…拓夜ァア!!」

叫ぶと直ぐに西条は店から出て来た。

その手にはデッキが握られており、これからデュエルしに出掛けてきますと言っている様なものであった。

「アンタ、病院に行くのに何でデッキがいるのよ?カードはカードでも、保険証か診察券の間違いじゃないの?」

「いや、病院で入院してる子にデュエルしてる子が居てさ、その子…デュエルする相手がいないって言うもんだから俺が相手になるって事になってな」

「ふ～ん…ねぇ、私も一緒に行っても良いかな？」

葉月はそう言うと手にしていた鞄の中からデッキケースを覗かせた。

「今日、本当は拓夜とデュエルするつもりで来たんだけど、話を聞いたら私もその子とデュエルしたくなっちゃった」

「良いんじゃねえか、じゃあ一緒に行くか」

「うん！」

二人は並んで病院へと向かった。

その途中で…

「ねぇ拓夜、その子ってどんな子なの？」

「あぁ、成瀬花穂って言って、松葉杖を使っている子なんだ」

（成瀬花穂…名前からして女！？なら尚更、私も一緒に行かないと駄目ね）

「その子、松葉杖を使ってるって…足がどこか悪いの？」

「さぁ？まぁ確かに足にはギプスが巻いてあったけど…それ以外はまだあんまり詳しくは知らないなぁ」

「……その子、可愛いの？」

「あぁ、可愛いよ」

「っ！？」

（即答ですって！？）

「長いこと入院してるらしくてさ、髪が背中にまで伸びててさ…きっとあれ、手入れしたら凄く綺麗な子になると思うよ…ってあれ、葉月？どうしたんだ？」

葉月を見ると、なんだか黒いオーラが一瞬みえた気がした。

「フフフ…何でもないわよ、さぁ、早く行きましょう？」

含みがある笑みを浮かべる葉月。

西条は何故かそんな葉月が少し怖いと感じた。

二人は病院に着くと成瀬に言われた病室、３１５号室へと向かった。

３１５号室の扉の前で西条は軽く深呼吸をしてから扉をノックすると、「どうぞ～」と返事が返ってきた。

「失礼しま～す」

「お邪魔します」

病室に入ると中は以外と広く、ベッドの上にオーバーテーブルが用

意してあり、その上でデュエルできるスペースがあった。
そしてベッドの上で西条が来るのを心待ちにしていた成瀬は、笑顔で西条を出迎える。

「いらっしゃい、西条さん！…と…」

言葉を詰まらせる成瀬に、西条が葉月の紹介を始めた。

「あぁ…こいつは烏丸葉月、俺の昔からの知り合いなんだ」

葉月は成瀬の前に出ると鞄の中からデッキケースを取り出して自己紹介を始めた。

「あなたが成瀬花穂さんね…拓夜から話は聞いたわ、私は烏丸葉月、私もデュエルをやってるの…あなたも私と一緒にデュエルしましょ？」

「え…いいんですか！？」

「えぇ、宜しくね」

「よし、じゃあ成瀬さん！早速俺とデュエルをしようぜ！？」

「うん、宜しくお願いします！！」

度重なる召喚術

ベッドの上にあるオーバーテーブルを挟み対峙する西条と成瀬の二人。

成瀬はデッキをシャッフルした後エクストラデッキを用意し、手札となるカードを五枚引いた。

「準備は出来たわね、私は二人のデュエルを口出しせずにじっくりと観させてもらうわ」

葉月は病室にあった椅子に座り、足と腕を組んだ。

西条は片手な為、葉月にデッキをシャッフルしてもらった後にカードを五枚引き、成瀬には手札を見られない様に自分の側へとそれぞれ一枚ずつ伏せる。

「よし、じゃあ先攻後攻を決めようか」

西条が成瀬に尋ねると、成瀬ははにかんだ笑顔で右手を出した。

「うん、じゃあいくよ～…ジャンケン、ポン！！」

成瀬の手の形はチョキ、対する西条の左手はグーを出していた。

「お、俺が勝ったか…じゃ、先攻は俺がもらった！！」

先攻　西条　ＬＰ　８０００
後攻　成瀬　ＬＰ　８０００

「「デュエル！！」」

二人はデュエル開始宣言をし、先攻である西条はデッキからカードをドローする。

「よし…葉月あれから改良を加えた俺のデッキを見てろ！？…名付けて『Ｄ－ゲート』！！」

「仮面ライダー？」

「違ぇよ！！」

西条は手札となるカードを一枚一枚捲って確認し、プレイを始めた。

「よし、行くぞ…俺はモンスターカード『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

西条はダイヤモンドガイを召喚すると、デッキの一番上に指を添え

「ダイヤモンドガイの効果を発動！デッキの一番上を確認し、それが通常魔法だった場合墓地に送る」

そう言いデッキの一番上のカードを捲ると、そのカードは通常魔法であった。

「よし…一番上のカードは通常魔法『トレード・イン』だ、墓地に送る！」

【トレード・イン】
通常魔法
手札のレベル８のモンスターカードを墓地に送り発動する。デッキからカードを２枚ドローする。

「ダイヤモンドガイの効果でこのカードが墓地に送られた事によって次のターン、デッキからカードを２枚ドローする事ができる！」

成瀬はうんうんと楽しそうに西条のプレイを見つめる。

「そして俺は伏せカードを一枚セットして、ターン終了！」

西条は一枚の魔法・罠カードを伏せて、ターンを終了させた。

「西条さんは【Ｄ－ＨＥＲＯ】デッキですね！？なかなか面白そうです！！」

成瀬は笑顔で「じゃあ私のターン、ドロー！」と、デッキからカードを引いた。

「実戦は余りやった事がないから、どこまで通用するか分からないけど…西条さん、行きますよ？」

楽しそうに話す成瀬に西条も笑顔でそれに答えた。

「あぁ、かかってきな」

「ふふ、じゃあ行きますよ～」

そう言うと成瀬は手札の一枚のカードに手を伸ばした。

「私は手札から『Ｅ－エマージェンシーコール』を発動！」

【Ｅ－エマージェンシーコール】
通常魔法
自分のデッキから「Ｅ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「私はこのカードで、デッキから『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』を手札に加えます！」

成瀬はデッキからモンスターカード『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』を取り出し西条に見せた後、デッキをシャッフルした。

「成瀬は【Ｅ－ＨＥＲＯ】デッキって訳か？」

「ふふ…どうでしょう？私のこのデッキの【Ｅ－ＨＥＲＯ】は手段のひとつにすぎません」

「？」

含みある台詞に首を傾げる西条。

そんな西条にデュエルを観ていた葉月が自分の考えを口にする。

「『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』はデッキによっては別に【ＨＥＲＯ】に固まる様なカードじゃないわ…その効果故、融合を主体とするデッキやテーマデッキといった様々な使い道があるカードよ」

「そ、そうなんだ…」

「私は先ほど手札に加えた『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』を召喚！」

【Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー】
星４　光属性　戦士族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　１１００
効果
エクストラデッキから融合モンスター１体を相手に見せる。その融合モンスターの融合素材モンスターとしてカード名が記されているモンスター１体を自分のデッキから墓地へ送る事で、このカードはエンドフェイズ時まで墓地に送ったモンスターと同名カードとして扱う。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

成瀬はプリズマーを召喚した後、エクストラデッキから一枚のカードを西条に見せた。

「プリズマーの効果発動、エクストラデッキから融合モンスターを相手に見せて、その素材モンスターの片割れをデッキから墓地に送る…私は『超魔導剣士－ブラック・パラディン』を見せて、デッキからその素材モンスターである『ブラック・マジシャン』を墓地に送ります」

【超魔導剣士－ブラック・パラディン】
星８　闇属性　魔法使い族
ＡＴＫ　２９００
ＤＥＦ　２４００

融合／効果
「ブラック・マジシャン」＋「バスター・ブレイダー」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、手札を１枚捨てる事で魔法カードの発動を無効にし、それを破壊する事ができる。全てのフィールド上と全ての墓地のドラゴン族モンスター１体につき、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

【ブラック・マジシャン】
星７　闇属性　魔法使い族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２１００

成瀬はデッキから『ブラック・マジシャン』のカードを墓地に送った。

「この効果でこのターン、プリズマーのカード名はエンドフェイズ時まで『ブラック・マジシャン』として扱う事ができます！」

「へぇ…カード名を変える事ができるモンスターか、面白い効果なんだな」

「……」

葉月は成瀬のカードを観て、自分なりの戦略を考える。

（やはりプリズマーを使用しての融合特化型の戦略…？いや、でも『ブラック・マジシャン』や『青眼の白龍』、『真紅眼の黒竜』、『Ｅ－ＨＥＲＯ　ネオス』はそれぞれの専用カードがある…当然、プリズマーの効果でカード名をそれらのモンスターに変える事が出来たら、そのモンスター各自の専用カードを使う事もできる…まだこの成瀬って子の戦略は読めないけど、拓夜…油断しちゃ駄目よ）

「私はこのままバトルフェイズに入ります！プリズマーでダイヤモンドガイに攻撃！」

「えっと…プリズマーの攻撃力は１７００で…ダイヤモンドガイの攻撃力は１４００、って事は、俺は３００ポイントの戦闘ダメージを受けて、ダイヤモンドガイは戦闘破壊されるんだな？」

西条はまだデュエルを始めて間もない初心者な為、自分でも間違えない様にルールを声に出して確認していく。

西条　ＬＰ８０００→７７００
成瀬　ＬＰ８０００

ダイヤモンドガイは破壊され、ダメージを受けた西条のフィールド上には一枚のリバースカードが伏せてあるのみ。

成瀬はバトルフェイズを終了し、メインフェイズへと移った。

「私はリバースカードを一枚セットして、ターン終了です！」

西条のターンに移り、西条はカードをドローする。

「俺のメインフェイズ、墓地の魔法カード『トレード・イン』の効果発動！デッキからカードを二枚ドロー！」

更にデッキからカードを二枚ドローする西条は、それぞれ手札を確認して「よし！」と、力強く頷いた。

「行くぜ成瀬さん、これが俺が見つけた「D」の力だ、まずはフィールド魔法『フュージョン・ゲート』を発動！」

【フュージョン・ゲート】
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、「融合」魔法カードを使用せずに融合召喚をする事ができる。この際の融合素材モンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。

「更に俺は場の伏せカードを発動！『チェーン・マテリアル』！」

【チェーン・マテリアル】
罠カード
このカードの発動ターンに融合召喚を行う場合、融合モンスターカードによって決められたモンスターを自分の手札・デッキ・フィールド・墓地から選択してゲームから除外し、これらを融合素材とする事ができる。このカードを発動したターン攻撃をする事はできず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「チェーン…マテリアル？」

成瀬は何ソレ？といった感じに首を傾げる。
葉月は西条の発動したそれぞれのカードを見て「それはっ！？」と、驚きの声をあげた。

「『チェーン・マテリアル』を発動したターン攻撃はできないが、手札・フィールド・デッキ・墓地と、あらゆる場所から融合をする事ができる！！」

西条はそう言うと、自分のデッキに手を伸ばしたその時、成瀬は「待って」と声をかけた。

「西条さん、『チェーン・マテリアル』を使うのは良いケド、このターンまだ『融合』のカードを使用してないよ？」

成瀬は首を傾げたが、西条は自分フィールド上にあるフィールド魔法を指差し、それに答えた。

「『融合』の魔法カードは使ってなくても、このフィールド魔法『フュージョン・ゲート』がある…このカードはフィールド上に存在するだけで、融合ができるフィールド魔法なんだ！」

「なるほど、だから『Ｄ・ゲート』なんだね！！」

「そういう事、俺はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』をゲームから除外し、エクストラデッキから『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を融合召喚！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
融合／効果
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに

1度だけ相手フィールド上のモンスター1体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

西条のフィールドに西条のデッキ最強のモンスターが召喚された。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！厄介な相手が出てきたね、さて…どう対処しようか…」

目を輝かせる成瀬に西条は「まだだ！！」と言い放ち、プレイを続ける。

「このターン、俺が発動した『チェーン・マテリアル』の効果はまだ適用されている！」

「！？」

そう言うと西条はデッキから更にもう二枚ずつの『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』をゲームから除外

した。

「Ｂｌｏｏ－ＤとドグマガイがＤ、デッキに三枚も！？」

そして、西条のフィールドに計三体の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が並んだ。

「攻撃力３０００のモンスターが一気に三体も…凄いよ、西条さん！！」

「……」

葉月は西条のプレイを観て思わず声をあげそうになった。

（拓夜…こんなデッキをいつの間に…！？）

西条は三体のＤ－ＥＮＤを並べると、それぞれの効果の説明を始めた。

「『チェーン・マテリアル』を発動したターン攻撃する事はできず、エンドフェイズ時にこの効果で融合召喚されたモンスターは破壊される…」

「何だ、戦闘を行えないんじゃ怖くないよ」

「だが、モンスターの効果を使う事はできる！『Ｄｒａｇｏｏｎ

Ｄ－ＥＮＤ』一体目の効果発動、成瀬さんのプリズマーを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「あいたっ！！」

成瀬はプリズマーを墓地に送り、ダメージを受けた。

西条　ＬＰ　７７００
成瀬　ＬＰ　８０００→６３００

「これで成瀬さんの壁となるモンスターは破壊できた…俺は手札から魔法カード『奇跡の発掘』を発動！」

【奇跡の発掘】
魔法カード
自分のモンスターが5体以上ゲームから除外されている場合、その内3体を墓地に戻す。

「このカードは、自分のモンスターが5体以上ゲームから除外されている場合、その内の3体を墓地に戻す事ができるカード、ゲーム

から除外されている俺のモンスターは…Ｂｌｏｏ－Ｄとドグマガイの計六体！俺は除外されている『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を三体墓地に戻す！」

（うまい、これでＤ－ＥＮＤの蘇生に繋げられる……）

西条は除外されていたドグマガイ三体を墓地に戻し、魔法・罠カードゾーンに伏せカードを一枚セットした。

「俺はターン終了、そしてエンドフェイズ時、Ｄ－ＥＮＤは破壊される…」

西条のターンが終了し現在、成瀬のターン。

西条　ＬＰ　７７００
成瀬　ＬＰ　６３００

成瀬は「私のターン、ドロー！」と元気いっぱいにカードをドローした。

「う～ん…どうしよう、次の西条さんのターンになったら墓地からＤ－ＥＮＤが三体もやってきちゃう…」

手札とフィールド上を交互に睨めっこする成瀬に、葉月は口にはしないが同情はした。

確かに攻撃力３０００のモンスターが一度にフィールドに並ぶその

姿は圧巻だ。
一気に場を制圧するそれはまさしく、「ＥＮＤ」と言うだけあって凄まじい…

成瀬は、う～んと首を傾げながら手札から一枚のカードを出した。

「私はモンスターをセット、リバースカードを一枚セット…ターン終了かな」

成瀬のエンド宣言を聞いて西条は尋ねた。

「オィオィ…俺の場にモンスターはいないのに…攻めて来なくても良いのか？」

「大丈夫です、今はまだ”その時”じゃないですから…それに…」

「？」

「それに…次の西条さんのターン、西条さんこそ”今の内に私にダメージを与えれるだけ与えた方が良いですよ”？」

「へへ…言ってくれるじゃないの成瀬さん、じゃぁ…やってやろうじゃないの！？」

西条は自分のターンに移り、カードをドローする。

「スタンバイフェイズ時、墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』

の効果を発動！自分の墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ』と名のついたカード一枚をゲームから除外する事で、特殊召喚する事ができる…俺は墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』三体をゲームから除外し、墓地から三体の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を特殊召喚！！」

再び、西条のフィールド上に三体の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が並ぶ。

「今度は自身の効果による完全蘇生だ、エンドフェイズ時に破壊はされない！」

「ふふふ…西条さん、さてどうします？攻撃してきますか？それとも効果発動してバトルを放棄しますか？」

「そんなの決まってる！成瀬さんのモンスターを戦闘破壊して、残った二体でダイレクトアタックをした方がダメージが大きい！！」

西条は左手でそれぞれのカードを指差して、攻撃宣言を行った。

「バトルフェイズに入る！まずは左端の一体で、成瀬さんの裏側守備モンスターに攻撃！」

すると成瀬は「甘過ぎです！」と、先程伏せたカードを発動させた。

「私は西条さんの攻撃宣言時に、このカードを発動『聖なるバリア－ミラーフォース』！」

【聖なるバリアー ミラーフォース】
罠カード
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上の攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「ミラーフォース…な、何ぃ!?」

「ミラーフォースは、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊します!」

西条のフィールドには攻撃表示のＤ－ＥＮＤが三体のみ。

西条のフィールドは、成瀬が発動したミラーフォースによってモンスターが全滅してしまった。

「くっそぉ…何で都合良くミラーフォースなんて伏せてあるんだよぉ…」

葉月は激しく落ち込む西条の肩に、ポンッと手を置き

「拓夜…よくある事よ」

と意味深に語った。

現在、西条のフィールドにはフィールド魔法『フュージョン・ゲート』と一枚のリバースカード。

成瀬のフィールドには裏守備のモンスターが一体と一枚のリバースカード。

西条は手札を確認し、次の戦略をたてる。

（成瀬さんのミラーフォースで俺のモンスターは全滅してしまったが…それに俺の手札には、召喚できるモンスターがいない…）

「ここは耐えるしかない…」

（今の俺の墓地には「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカードは『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』しかいない…次のターン、墓地のダイヤモンドガイを除外して…Ｄ－ＥＮＤ一体を蘇生させてやる…）

「俺はターンを終了する！」

西条はエンド宣言をし、ターンは成瀬へと移った。

「私のターンです！カード、ドロー！」

成瀬はカードをドローすると

「私は場のモンスターを反転召喚『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』！」

成瀬のフィールドにプリズマーが再びその姿を現した。

「もう一体プリズマーを持っていたのか…こんな高価なカードをよく集めたな…」

「えへへ…それだけ私がデュエル大好きな証拠だよ、んで、プリズマーの効果を発動！」

成瀬はエクストラデッキから一枚のカードを取り出し、西条に見せた。

「私は『Ｅ－ＨＥＲＯ　グラン・ネオス』を見せて、その融合素材の片割れである『Ｅ－ＨＥＲＯ　ネオス』を墓地に送ります！」

【Ｅ－ＨＥＲＯ　グラン・ネオス】
星７　地属性　戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
融合／効果
「Ｅ－ＨＥＲＯ　ネオス」＋「Ｎ・グラン・モール」
自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻した場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚が可能（「融合」魔法カードは

必要としない）。相手フィールド上に存在するモンスター1体を持ち主の手札に戻す事ができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。エンドフェイズ時にこのカードはエクストラデッキに戻る。

【E－HERO　ネオス】
星7　光属性　戦士族
ATK　2500
DEF　2000

成瀬はデッキからネオスを墓地に送り「これで準備完了ー！」とガッツポーズを作る。

成瀬のフィールドにはプリズマーと一枚のリバースカードのみ。
西条はここから成瀬がどう展開してくるのか、自分フィールド上の一枚のリバースカードに指を添えて相手の動きを待った。

「準備完了…って…」

（一体何が…？）

西条は何か嫌な予感をしながら成瀬のプレイを待った。
成瀬は自分の墓地を一枚一枚確認していき

「私の墓地には通常モンスター『ブラック・マジシャン』と『E・

ＨＥＲＯ　ネオス』の計二体います…よって、手札から『樹海の射手』を特殊召喚します！」

【樹海の射手】
星３　地属性　獣戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１３００
効果
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に通常モンスターが２体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。このカードをリリースする事で、自分のデッキからデュアルモンスター１体を手札に加える。

成瀬のモンスターの特殊召喚を見た葉月は思わずその目を見開いた。

（『ウッドランド・アーチャー』！？…そうか、成瀬さんのデッキは！！）

「何だ…そのモンスターは？」

成瀬は『樹海の射手』を手に取り、カードの説明を始めた。

「このカードは通常召喚できません、墓地に通常モンスターが２体以上存在する場合のみ特殊召喚ができるモンスターです」

「だからプリズマーで墓地に通常モンスターを送っていたのか…」

「その通りです、そしてこのカードをリリースする事で、デッキからデュアルモンスター1体を選択して手札に加える事ができます！」

成瀬は『樹海の射手』をリリースし、デッキから一枚のカードを取り出して西条に見せた。

「私はデッキから『エヴォルテクター　シュバリエ』を手札に加えます！」

【エヴォルテクター　シュバリエ】
星４　炎属性　戦士族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　９００
効果・デュアル
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●自分フィールド上に表側表示で存在する装備魔法カード1枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

「そして私は『エヴォルテクター　シュバリエ』を召喚！」

成瀬はモンスターを召喚した。

西条は自分のリバースカードに添えた指に力が入る。

（さぁ、沢山モンスターを並べて攻撃してきな！俺の伏せカードも『聖なるバリアーミラーフォース―』…同じ手で返り討ちにしてみせる！）

「私は手札から装備魔法『スーペルヴィス』を発動、『エヴォルテクター　シュバリエ』に装備！」

【スーペルヴィス】
装備魔法
デュアルモンスターにのみ装備可能。装備モンスターは再度召喚した状態になる。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択して特殊召喚する。

「『スーペルヴィス』を装備したデュアルモンスターは、再度召喚した状態になります！」

「再度…召喚した扱い…！？」

成瀬はシュバリエを手に取り、西条に見せながらプレイを続けた。

「『スーペルヴィス』を装備し、デュアル状態の『エヴォルテクター　シュバリエ』：効果発動！私のフィールド上の装備魔法カード、『スーペルヴィス』を墓地へ送る事で、相手フィールド上のカード一枚を破壊します！私は西条さんの場の伏せカードを破壊！」

「なっ！！！？」

西条が指で添えていたカードが破壊され、西条を守るカードがフィールドから消えてしまった。

「破壊したのはミラーフォースでしたか…うん！このまま押していきます！」

次に成瀬は墓地に送った『スーペルヴィス』を手に取り

「続いて墓地に送られた『スーペルヴィス』の効果発動！表側表示で存在していたこのカードが墓地に送られた時、墓地から通常モンスター一体を特殊召喚します！」

「な、なんだって！？」

「私は墓地から『Ｅ－ＨＥＲＯ　ネオス』を攻撃表示で特殊召喚します！」

成瀬のフィールド上に、ネオス…シュバリエ…プリズマーが並ぶ。

（ヤバい…かなりヤバい事になってきてる…やっぱりミラーフォースが破壊されたのがデカい…）

「行きます！『Ｅ－ＨＥＲＯ　ネオス』でダイレクトアタック！！」

壁となるモンスターがいない為、西条は相手モンスターの攻撃力分の戦闘ダメージを受けてしまった。
その為、西条のライフが一気に削られる。

西条　ＬＰ　７７００→５２００

「続いて『エヴォルテクター　シュバリエ』もダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　５２００→３３００

「ヤバい…！！」

「そして『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』もダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　３３００→１６００

「これで私と西条さんのライフは大きな差がつきました…私はこのままターンを終了します！」

「お…俺のターン、ドロー！」

西条はカードをドローすると、墓地に眠る『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を手に取り

「スタンバイフェイズ、墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動！！墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』をゲームから除外し、特殊召喚！！」

再び現れる『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に成瀬は思わず呟いた。

「またＤ－ＥＮＤですか…こうも倒しても蘇られると、メンタル的に厳しいですね」

「成瀬さん…メンタル的に厳しいかもしれないが、状況は俺の方が不利なんだよ？」

「さぁ、まだ分かりませんよ？デュエルは一枚のカードで試合がひっくり返る事だってありますから」

「ふぅん…さて、ここからどこまで攻めれるか…」

西条は手札を確認し、その中の一枚に手を伸ばした。

「手札から速攻魔法『異次元からの埋葬』を発動、たった今引いたカードだ！！」

【異次元からの埋葬】
速攻魔法
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

「俺は除外されているドグマガイを三枚選択して、それぞれ墓地に戻す！」

（ドグマガイが墓地に戻った事で、次の拓夜のターン…再び『Ｄｒ

ａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が現れる、か…確かに何度も蘇られるとキツい相手ね…）

葉月はじっくりと西条のプレイを観察している。
そんな葉月にはお構いなしに、西条は今自分ができる最高のデュエルをしようと必死になって考えていた。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動！『Ｅ－ＨＥＲＯネオス』を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「ネオスを破壊…ですか…」

成瀬はネオスを墓地に送り、攻撃力分のダメージを受けた。

成瀬　ＬＰ　６３００→３８００

「西条さん、今の内に言っておきます…」

自分の手札とフィールドを見つめる成瀬は、不意に西条に話しかけてきた。

「？」

「今の内に自分を守るカードを用意していないと…西条さん、次のターンで終わらせますよ？」

「次のターンで…終わる…？」

「はい、さぁ西条さん…どうしますか？」

西条は手札を見つめ、成瀬の言う自分を守る為のカードを探す。

（守る為のカードったって…俺の手札には融合代用モンスターの『沼地の魔神王』と『ＨＥＲＯ』回収効果を持つ『Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン』、『フュージョン・ゲート』に『デステニー・ドロー』…『チェーン・マテリアル』だけ…）

次に西条はフィールドを見つめた。

（俺のフィールドには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』とフィールド魔法の『フュージョン・ゲート』…成瀬さんのフィールドには『Ｅ－ＨＥＲＯ　プリズマー』と『エヴォルテクター・シュバリエ』…そして一枚の伏せカード…）

そして再び手札を確認する西条。

（身を守るカードがないじゃねぇか！！成瀬さんはあんな事を言ってきたんだ…恐らく『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を攻略する為のカードが手札にあるんだろうよ…壁となるモンスターを出すしかないのか？）

西条は手札のモンスターカード一枚に手を伸ばすと、そこでふと、何かを思いついた様に閃いた。

（あれ？…手札の『沼地の魔神王』と『Ｅ－ＨＥＲＯ　オーシャン』……ＨＥＲＯと水…あ、これは…！！）

「俺は…フィールド魔法『フュージョン・ゲート』の効果を発動する！」

「！？」

西条は手札のカード二枚を成瀬に見せ

「手札から『沼地の魔神王』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン』を融合！」

それらのカードをゲームから除外し、エクストラデッキから融合モンスターを特殊召喚した。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』を融合召喚！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】
星８　水属性　戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
効果
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

西条のフィールドにアブソルートＺｅｒｏが出された。

「……Ｚｅｒｏですか」

「アブソルートＺｅｒｏの効果は強力だ、こいつがフィールドから離れたら、成瀬さんのフィールド上のモンスターは全て破壊されるぜ！？」

「むむ…」

考え込む素振りを見せる成瀬に、西条は「ターンエンド」と告げた。

成瀬花穂は西条のターンの終了を聞き、デッキからカードをドローした。

「私のターン、ドロー！」

ドローカードを確認し、成瀬花穂は確信した。

（このデュエル、私の勝ちです！）

成瀬　ＬＰ　３８００
西条　ＬＰ　１６００

「成瀬さん…本当にこのターンでデュエルを終わらせる事ができるのか？」

アブソルートＺｅｒｏという強力なモンスターを召喚した西条は得意になって成瀬に尋ねる。
しかし、成瀬は落ち着いた雰囲気でそれに答えた。

「はい、終わらせますよ…西条さんの手札の中に『クリボー』がいたら話は別でしけどね？」

クスッと笑みを浮かべる成瀬。
西条は伏せてある手札をチラッと見て、額から一筋の汗を垂らした。

（『クリボー』！？何だそりゃ…そんなカード知らないし、デッキに入ってねぇよ…）

「では私のターン、いきますよ？」

「っ！？」

「私は手札からもう一枚の『スーペルヴィス』を発動！『エヴォルテクター　シュバリエ』に装備します！」

『エヴォルテクター　シュバリエ』に装備魔法『スーペルヴィス』が装備された事で、シュバリエは再びデュアル状態となった。

「そして『エヴォルテクター　シュバリエ』の効果発動！装備魔法を墓地に送る事で、フィールド上のカード一枚を破壊します！」

成瀬は『スーペルヴィス』のカードを墓地に送り、西条のモンスタ

ー『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』を指差した。

「効果でアブソルートＺｅｒｏを破壊します！」

「…くっ…！？」

アブソルートＺｅｒｏのカードを墓地に送った西条のフィールドには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』のみとなった。

「私は墓地に送られた装備魔法『スーペルヴィス』の効果発動、ですがそれにチェーンが組まれる形で、破壊された『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』の効果が発動されます！」

成瀬は西条の墓地にあるアブソルートＺｅｒｏを指差しながら

「アブソルートＺｅｒｏがフィールドから離れた時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊します、よって私のフィールド上のモンスターは全て破壊されます！」

自分フィールド上のモンスターを全て墓地に送った成瀬は、墓地から一枚のモンスターカードを手にとって西条に見せた。

「そして『スーペルヴィス』の効果…墓地の通常モンスター一体を特殊召喚します…私は墓地から『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』を攻撃表示で特殊召喚します！」

成瀬のフィールドにネオスが現れた。
今、成瀬と西条のフィールドにはそれぞれモンスターが一体ずつ並んでいる。

「ネオスか…だがネオスの攻撃力は２５００、俺のＤ－ＥＮＤには届かない！」

「そんな事は承知です…私は墓地から光属性モンスター『Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー』と闇属性モンスター『ブラック・マジシャン』を除外して『カオス・ソーサラー』を特殊召喚します！」

成瀬はそれぞれのモンスターカードをゲームから除外し、『カオス・ソーサラー』を特殊召喚した。

【カオス・ソーサラー】
星６　闇属性　魔法使い族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　２０００
効果
このカードは通常召喚できない。自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体をゲームから除外する事ができる。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「何だ…そのモンスターは…？」

「『カオス・ソーサラー』は自分の攻撃を封じる代わりに、相手フィールド上の表側表示モンスター一体をゲームから除外します！」

「な…何ぃ！？」

驚く西条に対し、葉月は成瀬のプレイングを冷静に観察していた。

（『カオス・ソーサラー』か…確かにプリズマーの効果でブラマジを墓地に送り、プリズマーが破壊され墓地に送られたら召喚条件は簡単に整うわ…墓地に通常モンスターを送りつけ『カオス・ソーサラー』を狙うも良し、『スーペルヴィス』と『エヴォルテクター・シュバリエ』を使って破壊・蘇生していくも良し…成瀬さんのデッキ構成は大体把握できたケド…この子…強いわ…）

成瀬は西条のＤ－ＥＮＤをゲームから除外した。

これにより西条のフィールドには壁となるモンスターは全て消えた。

もう明らかに勝敗は決してした。

「私のターンのバトルフェイズ、ネオスで西条さんにダイレクトア

タック！！」

西条　ＬＰ　１６００→０

「ぁぁ～ぁ…負けちまったか…」

ガクッとうなだれる西条に対し、成瀬は「やった！！」と喜びを露わにする。

成瀬はうなだれる西条に右手を差し出した。

「ん？」

何だ？と差し出された手を見る西条に、成瀬は屈託のない笑顔でお礼を述べた。

「ありがとうございます、西条さん！とっても楽しいデュエルでした！」

（楽しい…デュエル……）

西条は成瀬の言葉を聞き、左手を差し出した。

「あぁ！楽しかったよ、またやろうな！？」

「ぇ？…左手？」

自分が差し出した手は右手なのにどうして？と首を傾げ、成瀬は「あっ！？」と声を洩らす。

「そういえば西条さん…右手は使えないんでしたよね…すいません！！」

そう言い左手を差し出し、ガッチリと握手を交わした。

「残念だったわね、拓夜」

横から葉月が西条のデッキを整えて、渡してきた。

「成瀬さん強かったよ、でも楽しかったな…葉月も成瀬さんとデュエルするか？」

西条の問いかけに葉月は「もちろん」と答えると、西条に場所を譲ってもらい、成瀬と向かい合わせに座った。

「成瀬さん、次は私とデュエルしましょ？」

「はい、えっと…葉月さん！よろしくお願いします！」

「えぇ、此方こそ」

そう言うと二人は互いのデッキをシャッフルし、デッキからカードを五枚ドローして、いつでもイケると言わんばかりに両者、睨み合った。

「じゃ、俺は二人のデュエルを見てようかな？」

西条は葉月が座っていた椅子に座り、二人のデュエルを見学した。

三人のデュエルはその日の夜まで続いた…

度重なる召喚術（後書き）

今回のデュエルを書いていて自分で思った事は、如何にして『西条拓夜』のデュエル初心者らしさを出すか、にありました。

今回は『西条拓夜』が発動した速攻魔法『異次元からの埋葬』のシーン。

丁度その時は、墓地にある『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果を発動した時です。

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』はスタンバイフェイズ時に発動する効果ですが、丁度その時にドローしたカードが速攻魔法『異次元からの埋葬』だったのなら、その効果にチェーンして『異次元からの埋葬』を発動していれば、除外されていた青血やドグマが墓地に戻り、結果３体の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』をフィールドに並べる事ができたはずです。

ですが、そこは初心者!!　と言わんばかりにすっぽかしてデュエルを進めて行く『西条拓夜』…。

デュエルをしていれば、初心者ではなくても初歩的なミスは誰にでもあります。

僕もこの作品を書いている上で自分で色々と気づかされていく事があります。

この作品を呼んで下さり、ありがとうございます。

まだまだ物語は続いていきますので、また足を運んで下されば幸いです。

長々と失礼しました。

初めての喫茶店

「う〜ん…違うなぁ、何か違う…」

日曜日の晴れた午後の一時（ひととき）、おもちゃ屋『サプライズ』の二階のとある一室で一人の若者が頭を悩ませていた。

「…あ！？この食材とこの食材なら案外安く経費を…！？」

用意したメモ用紙にカリカリっとペンを走らせ、カタカタっと計算機を指で弾いていき

「だ…駄目じゃん！！これでもまだ高いっ！？」

ぬぁぁあ…と頭を抱えては料理の本をペラペラと捲っていく。

この悩める一人の若者の名前は西条拓夜、『東区第七高等学校』に通う生徒で、おもちゃ屋『サプライズ』の一人息子だ。

今、西条は必死になって学校のとある行事について悩んでいた。

それは昨日の土曜日の出来事に遡る。

土曜日でも学校の授業があるこの東区第七高等学校。
だが授業時間は午前中のみであり、午後からは主に部活動に勤しむ生徒等が残る程度であり、その他生徒等にとっては午前中のみの授業に出席しなければならない為、ややウンザリしがちな日でもある。

もちろん、信号機の前で赤から青に変わるのを欠伸をしながら待っている高校生、西条拓夜もその一人である。

西条は今、学校へ向かう道とは別の道を歩いてきていた。
それは右手に巻かれたギプスを外す為に、予約していた病院へと向かう為だ。
右手を骨折してから早一カ月半程になる今日、主治医の先生から

「では次の受診にギプスをはずそうか」

と言われたのだ。

手の様子は概ね良好であり、痛みもほとんどなくなっていた。

「午前授業なんて面倒くさい…受診時間を朝一番にしておいて良かったぜ…」

一人、横断歩道を歩きながらそう呟く西条。
今日の授業は全てホームルームなのだが、あまり学校の行事とかに興味がない西条は、正当な理由が付ける遅刻をする為に、午前中の朝一番に病院の受診を希望したのだ。

「しかし…あれだな…」

西条は歩きながらふと思った。

（今、俺は受診の為に病院に向かっているが…これが学校が休みの日とかだったら病院に行くのが面倒くさく感じるのに…授業がサボれる日となると病院に行くのが楽しく感じるのは…）

「いや～悪知恵が働くね～！世の中、学校で習う事ばかりが勉強じゃないんだ、上手く予定を立てて行動していくのが、賢い奴なのさ」

うんうんと頷く西条。

上手く予定を立てて行動していくのが賢い奴、と言うのには理解できるが、今の西条がとっている行動が世間から見て正しい行いであるかどうかは考え物である。

しばらくして、向かいの建物の中にこれから向かう病院が見えてきた。

時刻は午前１０時を過ぎた頃…

東区第七高等学校の四階のとある教室の教壇に一人の女の子が立っていた。

「じゃあこれから第七高等学校文化祭、通称『第七祭』の催しを決めたいと思います！」

「葉月さん、『第七祭』の催しなら俺やりたい奴があるんだけど！？」

葉月と呼ばれた女の子は積極的に挙手をし、意見を述べようとする少年、結城雅一に「はい、結城くん」と起立を促す。

起立した結城は腕を組み

「色々と案だけは考えていたんだけど、ベターに『喫茶店』とかどうかな？」

「『喫茶店』…ね」

葉月は黒板にチョークを刻みよく走らせていく。

「皆、他にはないかな？」

振り向きながら更に意見を求める葉月に、クラスの皆から次々と催し物の案を出していく。

「演劇とかどう？」

「あたしバンドしたぁい！」

「クラスの皆で合唱とか？」

「屋台とか駄目かな？」

様々な案が出て賑わうクラスを葉月は「は～い、皆、少し落ち着いて！」の一言で制していく。
一通り出た案を一瞬の内に黒板に書き上げていった葉月は、案の一つ一つを確認していった。

「『屋台』に関しては、それぞれの部活からやってもらう事になってるから、残念だけど別の催し物にしなくちゃね…」

そう言い黒板に書いた『屋台』の文字を消し、次の案に取り掛かる。

「『合唱』ね、これはクラスの皆で取り組めるから良い案だと思うわ、とりあえず候補として残しておくわね…で、次に『バンド』か…これは個人でやる分と思えば良い案だと思うわ、とりあえずこれも候補として残しておくわね」

葉月の意見を聞き、『バンド』の意見を出した生徒は「やった！」と、喜びの声を挙げた。

「次は『演劇』ね、これは部活動の中に演劇部があるから…多分、生徒会から許可が出そうにないわ…意見を出してくれて有り難いけど…ごめんね」

そう言うと葉月は『演劇』を候補から消していった。

「さて、残りは『喫茶店』ね…本当にベターね、結城くん」

「へへ」

「『喫茶店』も良いと思うわ、その為には色々と準備しなきゃいけ

ない物とかあるけど…」

「まぁね、でも祭は準備をしてる時も楽しいし、実際やっても楽しいしと思うし！」

「ふふ…そうね、じゃあこれも候補に残しておきましょうか」

葉月は黒板の方に向き直り、チョークを握り直した。

「色々と案が出たけど…皆、まだ他にないかな？」

ざわめく教室。

だがそのざわめき方はクラスの皆が『第七祭』の催し物に関する事をそれぞれに話し合うざわめきであり、葉月はこういったクラスのまとまりが好きだった。

「……」

そんな中、葉月は一つの空席の方をチラッと伺った。

クラスの皆が揃って話し合いをしている中に、その席に本来いるはずの生徒が来ていない事に、葉月は少し寂しさを覚えた。

（アイツ…まだ来ないのかな？）

アイツとは今現在、病院でギプスを外している最中の西条拓夜の事である。

西条の事を色々考えると、何だか色々と文句ばかり頭に浮かんできた。

（早く来ないと、催し物が決まっちゃうわよ……にしてもわざわざ授業時間に被る様に病院に行くなんて…別に授業が終わってからでも良いじゃないのよ！？）

パキャッ！！

握っていたチョークに亀裂が入り、そのままチョークは折れて落ちてしまった。

「ふぅ…何か右手がムズムズする…かゆい…」

右手のギプスを外してもらった西条は、次回の受診（リハビリ）の予約を終えて学校へと向かう所であった。

少し違和感のある右手を撫でながら、病院玄関のホールを出ようとすると、後ろから自分を呼ぶ声が聞こえた。

「西条さ～ん！」

ん？と後ろを振り返ると、そこにはゆっくりとこちらに向かって歩いてくる成瀬花穂の姿があった。

「あぁ、成瀬さん…って…え、その制服っ！？」

西条は成瀬が着ている制服を見て驚き、一瞬言葉に詰まった。

成瀬が身に纏っている制服は、西条や葉月等と同じ『東区第七高等

学校』の物だったからだ。

前に会った時は、成瀬は入院中でパジャマ姿しか見たことがなかった為、学校の制服を着ている成瀬の姿は、西条にとって新鮮そのものであった。

（成瀬さん…やべっ！？何かむっちゃ可愛いんですケド！？）

西条がそんな事を思っていると、西条の前にたどり着いた成瀬は、笑顔で西条に挨拶をしてきた。

「おはようございます、西条さん！」

「あぁ、成瀬さん…おはよう」

「えへへ、西条さん！聞いて下さい！今日から私、退院して学校に通える様になったんです！」

「みたいだな…その格好からして、成瀬さんも『第七』？」

（※『第七』…「東区第七高等学校」の略）

「はい、第七の一年生です！」

「そうか…」

「西条さんは今日はどうされたんですか？」

西条は右手を前に出し、その手をゆっくりとグーパーと動かして

「俺はこの右手のギプスを外しに来たんだよ…後はもう少しの間、右手のリハビリをしなくちゃいけないらしい」

成瀬はパァァっとその表情を明るくし、西条の右手を掴むと

「わぁぁ…良かったですね、西条さん！おめでとうございます！」

「ちょっ、成瀬さん！？今の俺の右手はギプスを外したばっかりだから…その…匂いとか…！？」

「大丈夫です！でも良かったですね、西条さん！」

右手のギプス一つでここまで喜んでくれる成瀬に、西条はとても嬉しく思った。

「ありがとう、成瀬さん」

「西条さんはこれからこのまま学校へと向かうんですよね？」

「あぁ、そのつもりだよ」

成瀬は「そうですか…」と少し考えた後

「じゃあ、学校まで一緒に行きませんか？」

と、お誘いの言葉を掛けた。

「え、良いけど…成瀬さん…今日退院なんだろ?荷物とか家に持って帰らなくて大丈夫なのか?」

「はい、大丈夫ですよ!パパとママが今、車に荷物を乗せてくれてますから!」

「そうか」

すると、西条の後ろにある玄関の自動ドアが開き、そこから「花穂!」と呼ぶ声がした。

「あ、パパ!ママ!」

西条は「へ?」と後ろを振り返ると、そこには成瀬の両親と思われる夫婦が立っていた。

「花穂、こっちはもう準備ができたぞ」

「うん、ありがとうパパ!」

パパと呼ばれた男性はウム、と頷くと、その横に立っていた成瀬ママらしき人が、娘に西条について尋ねた。

「花穂、こちらの方は?」

「あ、うん!紹介するね、この人”が”西条さん!」

西条は成瀬からの簡単な紹介を聞き少し疑問に思った。

（ん？…この人『が』って…？）

すると成瀬パパは西条の両肩をガシッと掴むと

「ほぅ、君が花穂の言っていた『西条拓夜』くんか？」

「は、はい！」

成瀬パパの風貌はガッチリとした体格の人で、両肩に乗せられた手から、成瀬パパの筋力とは別に何か見えない父親という力ものしかかり、その手が異常に重く感じた。

「貴方が西条拓夜さんね、花穂から話は聞いています…花穂の入院中に色々と相手にしてくれたとか、ありがとう」

横に立っていた成瀬ママが温和な笑みで頭を下げてきた。

「い、いえ！？そんな大層な事はしていませんよ！！」

たじろいでいる西条の横から成瀬は成瀬パパと成瀬ママの二人に

「ねぇパパ、ママ、私今日は西条さんと一緒に学校に行くね！」

と、どこか照れる様に話した。

成瀬パパと成瀬ママの二人は互いに顔を見合わせると、二人して再び西条の方を見て

「わかった、西条くん…花穂をよろしくな」

「二人とも気を付けて行ってね」

と言ってくれた。
西条は成瀬パパからの威圧感ある視線を真正面からビリビリと受け止めながら「はいっ！」と返事をしながら思った。

（成瀬パパさん…そろそろ両肩に乗せた手を離してもらうと嬉しいんですが……正直…そろそろ痛いです…！？）

西条と成瀬は成瀬パパとママに見送られながら病院を出た後、ゆっくりと学校へと歩いていった。
成瀬は足のギプスが外れ、今日までに歩行のリハビリは行っていたが、まだ本調子ではなく、歩くペースがゆっくりだった。
その為、西条は自然と成瀬の歩くペースに合わせていた。

「成瀬さんさ、どうして車で学校に行かなかったんだ？」

「え？」

「だって、まだ退院したばかりで足もすっかり元通りって訳じゃないんだろ？だったらお父さんに車で学校まで乗せて行ってもらえば良かったじゃないか？」

「まぁ確かにそうなんですけど…でも、足がまだ本調子じゃないといっても、やっぱり動かして行かなきゃ」

「まぁそれもある意味リハビリか…」

「そうです！」

「ふ〜ん、まぁ…無茶はするなよ？転んだりしたら大変だからな？」

西条がそう言うと、成瀬は西条の右腕の裾を掴んできた。

「？」

「大丈夫ですよ…危なくなったら、西条さんが私を助けてくれますから！」

ニコッと微笑む成瀬に、西条は「うっ…」と少したじろいだ。

（そこまで頼りにされてもな…）

西条は裾を掴んでいる成瀬の手を取り、自分の右手でその手を繋いだ。

「え？」

その行為に少し驚きの声を挙げる成瀬に、西条は

「まぁその…学校まではこうやって行こうぜ？途中で本当に転ばれても困るし、それに成瀬さんの両親からよろしく言われたし…だから…その…」

（あれ…何言ってんだ俺…えっと…）

途中から言葉に詰まった西条に、成瀬は繋いだ手にギュッと力を込めて返事をした。

「ふふ…じゃあ学校までこのまま行きましょう！西条さん、エスコートを宜しくお願いします！」

「あ、あぁ…宜しく頼まれました」

二人はそうして手を繋ながら学校へと向かった。

キーンコーンカーンコーン…

東区第七高等学校の二時限目が終了し、残す授業は三時限目だけとなっていた。

つまるところ１０分間の休み時間になる今現在の西条の在籍する教室で、烏丸葉月は窓際に立ち、窓から見える校門をじっと眺めていた。

「……」

その途中、横に置いてある一つの空席をチラッと視界に入れてはまた、校門へと視線を戻す。

（アイツ…本当に今日学校に来るのかしら？）

まだ見ぬ生徒、葉月は先の授業の途中から西条の事ばかり考えていた。

葉月としては、自分達にとって高校生活最後を迎えるこの第七祭を一緒になってやっていきたい所だ。

まぁその他の理由もあるだろうがそれは葉月自身、言いたくはなかったから考えない様にしていた。

「後…五分……」

時計を確認すると、休み時間終了まで残すところ五分となっていた。次第に葉月の中でイライラが募ってくる。

（アイツ…今日は学校をサボる気でいるんじゃないでしょうね!?もしそうだとしたら……あぁ!!もう!!イライラする!!こんな風にアイツの事でイライラするんだったら、事前に私がアイツの付き添いで学校が終わってから一緒に病院に行く様に話しをしておけば良かった!!）

そんなこんな考えていると、校門を潜る二人の生徒が姿をあらわした。

「……ん!?」

葉月はその生徒の姿を見て、眉をひそめた。

その生徒二人は自分の知る人物であり、その内の一人は先程から首を長くして待っていた生徒でもあった。

「あれは……ん!?」

（拓夜と……え!?成瀬さん!?…っていうかあの二人…!?）

西条と成瀬の二人の様子を遠巻きに見て、葉月の表情が徐々に強張っていく。

（二人して…手を繋いで一緒に登校してくるなんて…っ！？それに何、あの二人を包み込む様な雰囲気は！？…あれじゃまるで恋人同士じゃない！！！？）

葉月は自分でも知らぬ間に、教室から走り出ていった。

「ようやく到着しました…！」

成瀬は校門を潜ると、西条の方を向き、ニコッと微笑んだ。

「ご苦労さん、足…大丈夫だったか？」

「えぇ、平気です…西条さん、ありがとうございました！」

成瀬はそう言い西条と手を話すと、軽く小走りして西条の方に振り返った。

「あのさ、成瀬さん…」

「はい？」

「言うのが遅くなっちまったけど…退院おめでぅぅぇえっぐぇ！！？？」

西条が言葉を全て言い終える前に、西条の体は超高速で接近してきた何者かに真横に引っ張られ、成瀬の前から姿を消した。

「えっ？さ、西条さんっ！？」

成瀬は急ぎ、西条が引っ張られた方を振り向くが、そこには既に西条の姿はなかった。

「……？」

一人残された成瀬はとりあえず、西条が連れ去られていった方へと向かい、歩いていった。

玄関に降りた烏丸葉月は校門に到着した西条拓夜を視界に捉えると

（ようやく来たわね、拓夜ァア！！）

と心の中でそう叫び、ターゲット目掛けて一目散に走り出した。

校庭に植えられた木々の影を縫うように走り、僅かな隙間から二人の間に割って入ったその瞬間、ターゲットの襟首を掴むと反対側の植えられた木々の中に再び身を隠し、葉月は捉えた獲物を引きずりながら校舎の中へと入っていった。

そして自分達の教室の前へ到着した葉月は西条の襟首を離すと、肩

で大きく息を切らせた。

「ハァ…ハァ…ハァ…」

「な、何だ…何かここに来るまでに滅茶苦茶な設定で来ちまったケド…し、死ぬかと思った……」

廊下でグッタリとうなだれる西条に、葉月は「さっさと起きなさい！」と一発、軽く蹴りをいれる。

「痛っ！？…って、葉月！？お前…一体どういうつもりだよ？」

西条はよっこらせと体を起こし、自分をここまで引きずってきた張本人を見やる。

その張本人、烏丸葉月は睨んできた西条に負けず劣らずの勢いで、西条に話した。

「どうもこうも、アンタ来るのが遅すぎよ！！」

「仕方ねぇだろ！？病院の予約を朝一番にしちまったんだ！！その事は先生に前もって言ってあるぞ！？」

「何ソレ！？受診の予約なんて別に学校が終わってからの時間でも良かったじゃない！？その前に今日は第七祭の催し物を皆で考えて決める日だって言ったでしょ！！」

「仕方ねぇだろ！！病院の先生の都合で、この時間しか空きが無かったんだ！！」

「だったら別の日にすれば」

「うるせぇな！！お前にそこまでとやかく言われる筋合いはねぇ！！」

「っ！？」

西条の叫びが葉月の言葉を全て遮った。
気が付くと二人の言い争いはかなりの音量だった様で、いつの間にか周りには沢山の生徒達が集まっていた。

「ったく、お節介が過ぎるんだよお前は！！」

西条はそう言うと、周囲の皆の間をすり抜けて、一人教室へと入って自分の席へと座った。

「……」

すると、廊下から葉月の泣く声が聞こえてきた。

「……ちっ」

一瞬にして、西条はクラスの中で浮いた存在になってしまった。

三時限目の授業が始まった。

しかし、教室には西条と葉月の姿はなかった。
二人は先の休み時間での言い争いについて、担任の教師に連れられ

て生徒指導室にいた。

今、第七祭の催し物については抜けた葉月の代わりに結城雅一が教壇に立ち、司会を進めていた。

「二人いないけど、この授業時間の間に催し物とそれの細かな役割分担を決めちゃいたいと思います！皆、良いかな？」

結城の問いかけに残ったクラスの皆から「異議なし」の返事を受ける。

結城は早速、黒板に書かれた催し物の案に線を引き、クラスメイト等の方に振り向いた。

「じゃあ今挙がっている案の中から、多数決で催し物を決めるぞ！まずは『喫茶店』だ！！これをやってみたい奴は挙手をしてくれ、ちなみに俺も喫茶店がぃい！！」

結城が体を仰け反る勢いで手を挙げると、クラスの過半数の生徒達が一斉に手を挙げた。

ちなみにその殆どが男子生徒達だ。

「よし、ちょい待ってくれよ！？いま数を数えているからな…」

結城は黒板にその数を書き終えると、次の案に移った。

「じゃあ次、『合唱』が良いと思う人！？…三人ね、はい…」

余りの人数の少なさに当初の勢いを落とした結城は、黒板にひらがなで『さん』と書いた。

「じゃあ残った奴が『バンド』って事になるが…皆、結果は見て明らかだぁ！！」

バァァアンッ！！

教壇を強く叩きつけて勢いを増した結城は、高らかに宣言した。

「俺達『３－Ｄ』のクラスは『喫茶店』に決定だぁあ！！」

ッシャァァア！！と、クラスの大半の生徒達が一斉に歓喜の声をあげた。

主に男子生徒達だが…

結城は黒板に『喫茶店』の文字だけ残すと、次の議題へと話を進めていった。

（とりあえず『喫茶店』にする事には成功した…予めクラスの男子生徒達に根回ししておいて正解だったぜ…）

自分達のクラス『３－Ｄ』の教室に向けて、二つの足音が近付いてきた。

一つ目の足音の主、西条拓夜はややご機嫌斜めな感じに荒い歩き方をし、スタスタと歩を進めていく。

そしてもう一つの足音の主、烏丸葉月はしょぼしょぼと歩き、西条のやや後ろを付いていく様な感じで歩を進めていく。

二人は生徒指導室を出た後、互いに無言だった。

（…なんで…こんな風になっちゃったんだろ…？）

葉月は床を見ながら一人考える。

（拓夜が学校に来るのが遅れた理由は…聞いてても納得できる仕方ない理由よね…でも…）

視線を床から目の前に見える西条の背中に移し

（でも…そこで私も突っかかり過ぎたのがいけなかったのよね……でも…あれ？）

葉月は自分の頬に熱い雫が流れるのを感じ、その歩を止めた。

「うっ…うっ…」

（でも…何でだろ…拓夜が成瀬さんと一緒に手を繋いでいるのを見たら…頭が…真っ白になって…前は…そんな…そんな事なかったのに…変だよ…変だよ私…！！）

その場で立ちすくみ、小さな声を出して涙を流す葉月。

少し前を歩いていた西条は葉月の涙声に気が付き、後ろを振り返ると、葉月が立ちすくみながら自分の顔に手を当てている姿が見えた。

（……俺…そんなキツい事言ったか？）

西条は少し考えた後、上着のポケットからタオルハンカチを取り出

し、葉月にそれを差し出した。

「…葉月」

「？」

呼ばれた葉月は真っ赤な顔をしながら、差し出されたハンカチと西条の顔を交互に見やる。

「…俺もキツく言い過ぎた、悪い…とりあえずこれを使って洗面所で顔を洗って来いよ…」

「…ぁ…」

葉月は自然な動作で拓夜のハンカチを受け取り

「じゃ、俺…先に戻ってるから」

そして先に教室へ戻ろうとする西条の服の裾をガシッと掴んだ。

「？…どうした？」

「……あたしも…ごめん…」

それだけ言うと葉月は掴んでいた服の裾を放し、近くの洗面所へと駆け込んでいった。

西条は先に教室に向かって再び歩き出した。

（一度泣くと、なかなか泣き止まない所…昔っから変わらねぇな…

あいつは…）

教室にたどり着いた西条はドアをガラガラっと開ける。
開けると同時に結城の声が西条の耳に入ってきた。

「じゃあ最終確認をするぞ～、皆、聞き漏らしの無いように！！」

結城の言葉を聞き

（お、もう第七祭の催し物は決まったのか…）

と、西条はそのまま自分の席に着き、机に肘をついた。
そして、次の結城の話しを聞いて机についていた肘がガクッと外れた。

「喫茶店のオーナー兼、総取締役は西条拓夜！！」

「なっ！？」

驚く西条を余所にクラス一同は盛大な拍手で同意の意を表した。

「ち、ちょっと待て結城！！何で俺なんだよ！？」

慌てて結城に問いただす西条。
だが結城は至って普通に返事をした。

「ん？西条ちゃん、適材適所って言葉は知ってるか？」

「は?そんなのあれだろ?その役割に相応しい奴がその役割をするって意味だろ?それとどういう関係が」
「じゃあ西条ちゃん、因果応報って意味は?」
西条が全て言い終える前に、結城は西条に聞いてきた。
「因果応報…悪いことしたら後で必ず罰があたる…だったか?それが」
「西条ちゃんはさっき女の子を泣かせたよね?」
「っ!?だからあれは」
「まぁそれは西条ちゃんの言い分が正しいから良いんだけど…クラスで喫茶店をやる分には西条ちゃんが適任なんだよ?」
「っ!?だからその理由をさっきから聞いてるだろ!?」
「いゃぁ〜このクラスで、自営業してる奴って西条ちゃんだけだったし」
「俺は喫茶店のバイトしてる奴がいたらそっちをお勧めするが?」
「いなかったもん」
「そ、そうなのか…」
「それに、西条ちゃんなら東区の商店街の店に顔が効くじゃん?」
「顔が効くって…確かに商店街の集会には出てるけど…あんまり無茶な事は頼めないぞ?」

「でもそう考えると、商店街の方々に代表して言って貰うのはヤッパリ西条ちゃんが適任なんだよ」

「く…クラス委員は？」

「そのクラス委員でもある葉月さんを泣かせたのは？」

「……」

「西条ちゃん、クラス一同からのお願い！！」

「……」

（ぁぁあっ！！糞ったれ！！）

「……わかった、その役…引き受けた…でもな」

「？」

「やるからには絶対に成功させるぞ！！皆、良いか！？」

西条の問いかけにクラス一同がこれまた拍手で賛同の意を表した。

話は冒頭に戻り、第七祭の催し物で喫茶店を開く事になった西条は、喫茶店のメニューやその材料、必要な器具やそれらに掛かる経費を一人悶々と悩んでいた。

「だぁあ！！ちっと休憩だ休憩！！」

ぐだぁ～っと体をベッドに預け、西条は窓の外に広がる日曜日の昼の空を眺めた。

「喫茶店…ねぇ…」

（そういや喫茶店って…名前はよく聞くけど、実際に俺って喫茶店の中とか余り行かないから知らねーんだよな…）

ゴロンと体を寝返らせ手を伸ばし、床に落ちていた財布を拾い上げ、中身を確認する。

（…１０００円あれば十分だろ）

西条はベッドから起き上がると、財布をポケットの中に押し込み、机に置いてあった携帯電話を手にとって部屋を出た。

「行ってきまーす」

家を出た西条は商店街にある喫茶店へと歩いて向かった。

喫茶店に関して無知な西条は、視察と食べ損なった昼飯を済ませるつもりでいた。

その喫茶店へと向かう道中にも、第七祭の事で頭を悩ませ続ける西条。

（喫茶店ってコーヒーを飲むイメージしかないんだよな…後は昔、親父に連れられて朝のモーニングにしか…）

腕を組み頭を捻りながら歩き続ける西条は目の前の信号が赤に変わったのをチラ見して確認し、立ち止まる。

（俺…あのモーニングに付いてくるゆで卵が嫌いだったんだよな～、パサパサして口の中で黄身の苦味が…ま、今は大丈夫なんだが…）

「…西条さん？」

（ん？って事は喫茶店のメニューの中には『ゆで卵』とかもあるってのか！？だとすると喫茶店って…！？）

「あの～、西条さん？」

「わからねぇ…」

（ゆで卵一個で値段いくらなんだよ…ん～、まぁそれはないな、うん、ないない！！）

「西条さん！！」

「…ん？うぉっ！？」

耳元で突如、大きな声で呼ばれた西条は驚き、そちらを振り返った。

「何を考え込んでるんですか？西条さん？」

「な、なんだ…成瀬さんか…びっくりした…」

成瀬は下から覗き込む様な仕草で西条に話しかけてきた。

「西条さん、さっきから何を悩んでいるんです？私、さっきからずっと西条さんの名前を呼んでいたのに、全く気が付いてなかったですよね？」

「ん、そうだったのか？悪かったな」

信号が赤から青に変わり、西条と成瀬は一緒にその横断歩道を渡る。

「朝からずっと第七祭でやる喫茶店の事で考えていてさ、俺…喫茶店って余り行かないから、これから行ってみる所なんだ」

「西条さんのクラスは喫茶店をされるんですか？あ、西条さん！私も今から西条さんと一緒に喫茶店に行っても良いですか？」

「ん？別に良いけど…成瀬さん、何か予定とかはないのか？」

「いえいえ、私は歩く練習のつもりでぶらぶらしてただけてすから…」

そう言うと成瀬は西条の横に立ち並び、西条の手を握ると

「それじゃ、西条さん！今から私と喫茶店へデートです！！」

と、嬉しそうに微笑んだ。

「へ！？」

（デート！？あれ？喫茶店に視察のつもりが、何でデート！？え？）

西条は成瀬に引き連れられる様な形で、喫茶店へと進んでいった。

「いらっしゃいませ、二名様でよろしいでしょうか？」

「はーい♪」

「それではこちらにどうぞ」

店員に案内され、窓際のテーブル席に座る西条と成瀬の二人。

二人は商店街にある喫茶店『コ○ダ珈琲』に来ていた。

西条は早速メニュー表を開き、喫茶店にはどのようなメニューがあるのか確認をする。

そんな様子の西条にお構いなしに、成瀬は楽しそうに西条に話しかけた。

「西条さん、何か喫茶店のメニューで使えそうなものとかはありますか？」

「…へぇ…喫茶店ってただコーヒーだけじゃないんだな、デザートやパン、パスタなんかの一品料理なんかもあるんだ…」

「そうですね、それにコーヒーと言っても色んな種類がありますよね…」

「あ、本当だ…これは豆が違うのかな？」

「そうみたいです…あ、西条さん！このデザート美味しそうです！」

成瀬は自分の見ていたメニュー表のページを西条に見せてきた。

「パフェか…うん、確かに美味しそうだな」

「決めました！私はこのパフェを注文します！」

「じゃ、注文するか…俺も決まったしな」

注文ボタンを押して店員を呼んだ西条は、それぞれ店員に注文をし、料理の到着を待った。

「お待たせしました、なんたらパフェをご注文のお客様？では続いてウィンナー珈琲のお客様？…ご注文のお品はこれでお揃いでしょうか？…はい、ではごゆっくりどうぞ」

注文してから数分後、西条等が頼んだメニューがそれぞれに届いた。

成瀬は大きなグラスに溢れる位に盛りつけられたパフェ。

西条はコーヒーの上に生クリームが乗っているウィンナー珈琲だ。

「西条さん、そのウィンナー珈琲ってどうやって飲むんですか？」

成瀬は西条の前に置かれたウィンナー珈琲を見て首を傾げた。

だが西条は成瀬のそれ以上に首を傾げていた。

「どうやってって…このまま飲んだら鼻に生クリームがベッタリと付くのは確実だし…っ！？そうか、スプーンで生クリームを！！」

西条は傍らに置いてあったスプーンを手にし、生クリームをすくおうとする。

『チャプ…』

「あれ？」

『チャプ…チャプ…』

生クリームをスプーンで刺すと、生クリームはクルッと回転し、スプーンがコーヒーの中に沈んでしまう。

「……思わぬ強敵だ…どうやって飲むんだよ、これは…？」

「フフ…そうやって悩んでる西条さんの姿、見てて面白いです」

「ちゃ、茶化すなよ…照れるじゃん」

西条はスプーンに付いた生クリームを食べる。

「っ！？こ、これは…！！」

「どうしたんです？」

「生クリームに付いたコーヒーで…絶妙な甘みと苦味が交わって…これは美味い！！」

「え、わ、私も少し貰っても良いですか？」

成瀬はパフェに付いてきた長いデザートスプーンで西条のウィンナー珈琲をすくって、一口食べてみる。

「…あ、本当だ…何か大人の味って感じかな？美味しいです！」

「もしかしたら…このコーヒーはこうやって楽しみながら飲むのかもしれないな…」

「きっとそうですよ！」

「…これ…第七祭のメニューに使えないかな？俺…これ好きになったわ」

「フフ…来て良かったですね、西条さん！」

「あぁ、本当に…」

その後二人はしばらくの間、喫茶店の中で過ごした。

ありがとうございました～、と店員に見送られて店を後にする西条と成瀬の二人。

「西条さん、私行きたい所があるんですけど…付き合ってもらっても良いですか？」

成瀬は店を出ると西条にそう聞いてきた。

「構わないよ、どこなんだ？」

「えっとですね…ここの近くにカードショップがあるって聞いたんですけど…西条さん、知らないですか？」

「ここの近く…？」

西条は辺りをぐるっと見渡してみて、ふと気が付いた。

（あ…あの道って…前に葉月と来た…）

西条は以前、葉月に連れられて来た事のあるカードショップ『きみまろ』を思い出した。

（あの店…確かここらの筈だったよな）

「カードショップね…確かにあるな、外見がボロボロだったけど」

「じゃあそこに行きませんか？私、欲しいカードがあって！」

「よし、じゃあ行ってみようか」

西条の案内で二人が次に向かったのは、カードショップに決まった。

カードショップ『きみまろ』には直ぐに着いた。

喫茶店を出て、裏路地を曲がって直ぐ目の前に建っていたからだ。

二人は店の前に立つと、成瀬が思った事を素直に言った。

「ボロボロですね…営業してるんでしょうか？」

「してる筈…前に来た時もこんな感じだったし…とりあえず入ってみるか」

「はい」

ガラガラっと店のドアを横にスライドさせ店内に入ると、すぐ横のレジカウンターにいた店員が「いらっしゃい」と業務的にぶっきらぼうに挨拶してきた。

「確かカードはファイルに書かれている奴を注文用紙に書いて渡す仕組みになってたはず…ってあれ？成瀬さん？」

西条はさっきまで横にいた筈の成瀬がいない事に気が付き、辺りを見渡してみると、成瀬はもう既に店の奥で遊〇王のカードファイルを漁っていた。

（は…早ぇぇ…）

「成瀬さん、何のカードを探してるの？良かったら手伝うよ」

西条は成瀬の隣に立ち、ファイルを一冊手にとった。

成瀬は自分が見ていたカードファイルを閉じ、それを片付けて

「今…新しいデッキを作ろうと思って…その主軸とするカードを探してるんです」

「そのカードは？」

「えっと…『ガーディアン・エアトス』ってカードなんですが…」

「エアトス…エアトスねぇ…」

「はい、エアトスは限定カードなので、通常パックのカードファイルには載ってはいないですよ？」

「え？」

西条は自分の見ていたカードファイルが通常パックのカードファイルである事に気付き、それを棚の中に片付けた。

「限定カードってなら、ファイルじゃなくてガラスケースの中に無いかな？ほら、あそこ」

西条が指差した所に遊〇王カードがガラスケースの中に沢山張り付けられていた。

成瀬はそれを見た途端に食いつくようにして、ガラスケースの中を覗く。

「あった！ありましたよ西条さん！」

「良かったな、成瀬さん！」

「はい！じゃあ早速買いますね！すいませ～ん！」

成瀬は店員を呼びに行きその場を離れ、西条は成瀬の欲しがっていた『ガーディアン・エアトス』のカードを眺めた。

（綺麗な絵だな…エアトス…か、ん？）

西条はカードイラストを眺めた後、値札を見て溜め息をついた。

（一枚１０００円か…高いな…今の俺の財布の中じゃ足りねぇし…ん？）

横を見てみると、小さなダンボール箱の中に沢山のカードが置かれていた。

そのダンボール箱には『傷あり値下げ商品』と書かれていた。

（傷ありか…何が入ってるのか…）

西条はその箱の中から束でカードを掴み、一枚一枚確認していく。

箱の中にはスーパーレア以上のレアリティのカード達ばかり入っていた。

値段は１００円前後のものばかりで、中にはカードが折れ曲がって

いるのもあった。

（…酷い傷だな…前の持ち主はどんな扱い方してたんだよ？）

そう思いながら西条は一枚のカードを目にすると、ピタッとその手が止まった。

「これ…」

（この魔法カード…）

「…５０円か」

（使ってみようかな…何か面白そうだし）

西条はそのカードをレジに持っていき、５０円でそのカードを購入した。

西条がカードを購入すると、既にエアトスを購入していた成瀬が西条の側までやってきた。

「西条さんは何のカードを買ったんですか？」

尋ねてくる成瀬に、西条は店員から受け取った紙袋を成瀬に渡した。

「中を見てみ」

成瀬は袋の中から入っていた一枚のカードを取り出した。

「これは…魔法カード『オーバー・デステニー』…でも、なんか凄い傷モノですね…」

成瀬が手にしたカードは、表面全体についた擦り傷が酷く、裏側には誰かに踏まれたのであろう、靴の痕が残っていた。

「西条さん…どうしてこんな傷だらけのカードを?」

カードを紙袋に入れ直し、西条に返す成瀬。
受け取った西条は成瀬を連れて店の外にでてその訳を話した。

「成瀬さんさ…このカードを見て、どう思った?」

「え?」

「このカードは…今ここに来る前はさ、きっと…とてもずさんな扱いを受けてきたんだよ…でなきゃ裏側なんかに靴の痕なんか普通残らない…」

「……」

「だから…俺が使ってやるんだ…ちゃんとした形で…デュエルで…カードとして…それがこのカードへの労りかと思ったら、買っていた」

「…西条さん…凄いです」

「え?」

「一枚のカードにそこまで親身になって考えてあげる事なんて…普通できませんよ…西条さん、とても優しいんですね」

自分の思った事を素直に言ったのであろう。

成瀬は西条に優しく微笑んでいた。

「そう…かな？」

その成瀬の笑みに照れくさそうにする西条は

「そろそろ帰るか、秋は夜が冷え込むからな…」

「そう…ですね、西条さん！今日はありがとうございました！私、とても楽しかったです！」

「そうか…此方こそ…あ、帰りは送っていこうか？」

「大丈夫ですよ、それじゃ西条さん…また明日、学校で！」

ペコッと軽くお辞儀をすると、成瀬は小走りで自身の帰路へと向かっていく。

西条は軽く手を振ると、自分も帰路へと向かっていった。

何の喫茶店？

家に帰った西条は早速、机に向かい第七祭の喫茶店で使えそうなメニューを書きまとめていった。

「今日は喫茶店へ行って正解だったな…っと、よし！これで完成だ！」

出来上がったメニューを見て、ふぅ…と軽く溜め息をつく西条に、携帯電話の着信が入った。

「ん？…結城から…はいもしもし」

電話にでると、受話器の向こうからやけに賑わしい音楽と共に結城の声が聞こえてくる。

「西条ちゃん？今から遊べるか？」

「え？何？お前今どこにいるんだよ、周りの音がうるさくて聞こえないって！」

「あ～なら仕方ない…また後で掛け直すわ」

「え？何？」

ＴＵ～、ＴＵ～、ＴＵ～、ＴＵ～

西条からすれば、何を言われたか分からないまま一方的に電話を切

られた為、しばし呆然としていた。

（…何だったんだ…一体？まぁいっか）

気を取り直して、次に必要な器具を考えようと新しくルーズリーフを取り出した所でまた、携帯電話に着信が入った。

「……」

着信相手を確認すると、相手はまた結城からであった。

西条はかったるそうに電話を耳に当てて

「今度はなんだ？」

『お、西条ちゃん！今度はちゃんとこっちの声が聞こえるか？』

場所を変えたのであろう、結城の声は前よりもハッキリと聞こえてきた。

「あぁ、聞こえる…で、何か用か？」

『これから一緒に遊べるか？今、葉月さんと隣のクラスの桜さんと一緒にいカラオケにいるんだけどさ』

「へぇ、両手に花じゃん？そんなんで俺なんか呼んでも良いんか？」

『いやぁ桜さんがさ、西条ちゃんとも遊びたいって言ってさ』

「桜さんが？俺に？…悪いけど今日は止めとくわ」

『そっか、じゃあそう言っておくよ』

「あぁ、悪いな…これから第七祭の喫茶店の事で色々とまとめていかなくちゃならんし」

西条がそう言うと、結城は何か思い出したかの様に、西条に一つのお願い事をしてきた。

『あ、西条ちゃん！喫茶店で一つお願いしたい事があるんだけど！！』

結城からの提案に何か嫌な予感がした西条だったが、「言ってみ」と促した。

『喫茶店での女の子達の制服をさ、メイドにしないか？『第七メイド喫茶』！！どうだ！？』

結城からの提案に西条は大きく溜め息をついた。

（そんな事だろうと思ったよ…）

「どうせあれだろ？葉月のメイド姿でも見たいってオチだろ？」

『当たり前じゃないか！？喫茶店を決める時にぶっちゃけクラスの男子生徒の大半を買収するのに使ったのが、葉月さんのご奉仕メイド服だったからな！！』

「却下だな」

『えぇぇえ！！何で！？どうして！？』

「お前さ、仮にもしメイド喫茶をやったとしてだ…葉月がお前以外の相手に…『お帰りなさいませ、ご主人様』とか言ってる姿を想像してみ？」

『……』

西条からの問いかけにしばしの間、沈黙した空気が受話器を通して伝わってくる。

そして、西条の受話器から結城の痛烈な叫び声が聞こえてきた。

『うわぁぁぁあ！！それは嫌だぁぁあ！！』

「起立、礼！」

本日、最後の授業が終了して放課後が訪れた。
クラスの生徒達はそれぞれに帰り支度をしながら友達同士で喋りあったりしている。

そんな中、西条はルーズリーフ数枚を持って一人教室から出ていった。
向かうは職員室にいる担任の教師の所だ。

昨日の内に第七祭で行う喫茶店について、大まかな内容を記した書面に目を通してもらう為だ。

徹夜で仕上げた喫茶店のプランには西条は自信があった。
その為か、職員室のドアを丁寧に三回ノックして「失礼します！」と大きな声で堂々と職員室の中へと入室した西条は、一直線で担任の所へと向かうと、手にしたプランを担任に渡した。

「先生、クラスでやる喫茶店のプランを組んできました！確認をお願いします！」

担任の教師は「おぉ、早いな…どれどれ…」と西条から書類を受け取ると、一枚一枚丁寧に確認していく。

（どうだ先生…店内の配置、使う調理器具の種類や人員の数、さらにはメニューやそのメニューに書かれた料理の作り方、接客マニュアル！！一晩徹夜して作ってやったぜ！！）

担任がそれらを確認していくその横で、西条はやりきったー！と言

わんばかりに清々しい顔をしていた。

そして、全てを確認し終えた担任の教師からの言葉は

「西条…お前凄いな…短時間でよくここまで作り上げたもんだ！」

「はいっ！！ありがとうございます！！」

「内容はともかく、先生はお前のこの案を通すぞ」

（ん？…内容？）

一部疑問が残る西条だったが、案を通すと言われた為にその疑問はあっさりと頭の中で処理して

「ありがとうございます！！」

とお辞儀した。

そして担任の教師はどこかぎこちない笑みを浮かべながら書類を返した。

「期待してるぞ…『メイド喫茶』」

「はいっ！！」

……

……

……

「はぁ！？」

（メイド喫茶！？何じゃそりゃ！？俺はそんな案は出した覚えは…）

自分の手にした喫茶店のプランを確認する西条の目に最初に移ったのは、一枚目の用紙に書かれていた『喫茶店』の文字の横にいつの間にか書かれていた『メイド』の文字だった。

「な…なんじゃこりゃぁぁあ！！！！」

夕方の東区第七高等学校の職員室に西条の悲惨な叫び声が響き渡った。

一方その頃、

「と、いう訳で…喫茶店の女子の制服はメイド服にする事にしたんよ」

「おぉぉ！！さすが結城！！」

「悪知恵だけは働くな！！」

「こりゃ期待できそうだな、今年の第七祭は」

「ムフフ…メイド…オラ…御主人様…グフフ！！」

教室では男子生徒等が集まり、結城を中心として第七祭で催す喫茶店について話していた。

「しっかし西条ちゃんには悪いが…西条ちゃんが休み時間に居眠りしてる間にコッソリと計画書に一部修正を加えておいたのよな！店名だけならあの堅物先生、和尚さんはメイド喫茶を却下するだろうが、西条ちゃんが組み上げてくれた計画書の内容は完成度がズバ抜けて高かった…あの大仏さんはそういう中身を重視する傾向にあるから、メイド喫茶はガチで実現する可能性があるのよな！！」

「イェーイ！！」と結城を囲む男子生徒等がそれぞれに喜びの雄叫びをあげる。

そんな賑やかな教室に、賑やかとは別にドドドドド（怒怒怒怒怒）

と慌ただしくも威々しい足音が入ってきた。

バンッ！！！！

ドアが外れる位の勢いで開かれる。

教室中の生徒等が驚き、そちらを見やると、そこには肩で息を切らしている西条の姿があった。

「結城ィ～、ドコだぁぁあ？」

ゆらり、ゆらりと教室に入ってきた西条は残虐な笑みを浮かべながら確実に男子生徒等に囲まれた結城の所へと近づいてくる。

（や、ヤバいぜ…西条ちゃん…あれはもしかしてかなり怒ってる！？）

結城がその場から離れようとすると、その結城の手をガシッと何かが掴む。

「ッ！！」

結城がそちらを振り向くと、顔に影ができあがった西条がそこにいた。

「さ、西条ちゃん…」

「結城…お前だよな？メイド喫茶の言い出しっぺは…」

「い、言い出しっぺはな…でも、それがどうかしたのあ痛っ！！」

結城を握る手に万力の様な力が入る。

「お前には一本とられたよ…まさか人が徹夜して必死で作り上げた計画書があんな形で修正されてるなんてな…」

「はは…」

「筆跡も俺の字を真似て…内容はそこまで弄る事がなかったにしても良い計画書だよ…このメイド喫茶」

「はは…」

「お陰様であの先生は俺がメイド喫茶を提案したと思い込んじまった…先生もこの計画書を見てすっかりやる気だしな…」

西条のその発言は、クラスの催し物がメイド喫茶で決定したと言ったも同然だった。

それを聞いた二人を取り囲んでいる男子生徒等は再び喜びの声を挙げた。

「あ、決まったんだメイド喫茶って痛い痛い!?西条ちゃん、ギブギブ!!」

「結城…お前、昨日の電話で『それは嫌だ』と言ってなかったか?いやぁ俺の聞き間違いかな?」

「いだだだ!!き、聞いてくれ西条ちゃん!!実はあの後にここに居る皆にメイド喫茶の件を聞き直したんだよ!!」

「ふ～ん…で？」

「…た…多数決でメイド喫茶続行に…あぃだっ！？」

西条からのダイレクトアタックを受けた結城は、後頭部に見事なたんこぶを作りその場で消沈した。

「…これ位で勘弁しといてやる」

西条はそう言うと帰り支度をし、教室から出ていった。

「ん…あれ？ここは？」

結城が目を覚ますと、真っ暗な教室の中にいた。

「え？あれ？学校？な、皆は？」

辺りを見渡すも人一人残っておらず、壁に掛けられた時計は夜の８時を指していた。

「えぇぇえ！！だ、誰も起こしてくれなかったのかよ！！そりゃないわぁぁあ！！」

その日の夜、西条宅のインターホンが鳴り響いた。

この日はたまたま両親揃って出かけており、家の中には西条拓夜しかいなかった為、仕方なしに店のシャッターを開ける。

「は～い、どちら様ですか？」

シャッターの外には制服姿の烏丸葉月が立っており、その表情は穏やかな笑みとはかけ離れた、鬱憤をため込んだ様な感じだ。

「なんだ葉月か…こんな時間にどうしたんだ？」

「…クラス委員として、第七祭でやる喫茶店の責任者のアンタに話があって来ました。」

（話…ま…まさか…）

「あがっても良いかしら？」

淡々とした口調の葉月に気圧され、西条はただ「あぁ」としか言え

ない。

（多分あれだろ…あれしかねぇよなぁ…メイド喫茶）

葉月を自分の部屋に通した西条の頭には昼間、結城がやらかしたメイドの件についていっぱいだった。

「んで、話って？まぁ大体察しはつくけど…」

自分の部屋に置いてある小テーブルに向かい合わせに座る二人。

西条が話を促すと、相変わらずの口調で葉月は淡々と話し出した。

「喫茶店の事だけど…女子の制服をメイドにするっていうのは本当なの？」

「はは…やっぱりその話か、俺もその事で頭を悩ませていたんだよ」

「…？どういう事？」

訝しむ葉月に西条は鞄の中から、喫茶店についての計画書を取り出して、それを渡した。

「初めは俺はメイド喫茶なんてやるつもりはなかったよ…けど俺が休み時間に居眠りしてる最中にメイド喫茶をやりたがってた連中にそれを修正されてな…」

西条がいきさつを説明している間に葉月は（メイド）喫茶店の計画書に目を通していく。

「まぁ最後に確認せずにそれを先生に提出した俺が悪いんだが…何か先生もその案に賛成しやがってな」

「…アンタ…もしかして一人で一晩でこれだけの案をまとめ上げたの？」

「徹夜もんだよ、お陰様で今日の授業は寝てばっかりで殆ど聞いてなかった…」

「……」

（凄い…メイドはともかく…店内の配置や使う調理器具や食器の種類…人員や接客する上でのマニュアル…料理のメニュー…学生が行う喫茶店って規模を考えて、ちゃんとお手軽なものばかりにしてある…）

「でも…いくら先生が良いって言っても…そのメイド服を着るのが嫌って女子もやっぱいるだろ？何せ男子が勝手にやっちまった奴だしな…」

「それはそうでしょ…」

「で、葉月…お前はどうなんだ？」

「…え？」

「もしメイドが嫌ってんなら…しっかりと皆で話し合う場を設けよ

う。何せ男子達が一方的に決めちまった事だしな…」

「うん…」

「でも…もしお前やクラスの女子達もメイド喫茶でも良いってんなら…このままメイドで通す…」

「……実はね…ここに来る前に…クラスの女子達で集まってたのよ」

「…うん」

「もちろん集まった理由（ワケ）は男子達が勝手にメイド喫茶にしたっていうからよ…」

「はは…噂は回るのが早いな…」

「で、女子の皆で話し合った結果…私に全てを委ねてくれたわ…つまり、私の言葉がクラスの女子達の言葉よ！」

クラスの女子達の言葉。

西条の胸に葉月の言った言葉が突き刺さる。

「私の言葉が女子達の総意…か、大きく出たな…」

西条は砕けた姿勢を正し、真剣な眼差しで葉月の…クラスの女子達の言葉を受け止める覚悟をした。

「聞こうか、女子達の…そして…葉月、お前の言葉を…！！」

「…拓夜、私とデュエルしなさい！」

「…デュエル？」

「そう、私が勝ったらメイドは無し！！拓夜が勝ったらメイド喫茶！！」

「……葉月…お前…」

「もう後戻りはできないわよ、もしこのデュエルを受けない場合は拓夜の負けとし、メイド喫茶は無しという事にしてもらうわ！！」

鞄からデッキケースを取り出した葉月の目は覚悟に満ちていた。
それを真正面から受け止めた西条は

（う～ん…俺も勝手にメイド喫茶にされて憤りを感じる被害者の筈なんだけどなぁ…まぁ、女子達が良かったらメイド喫茶をやるって言っちまったし…ってかもう一度クラス全員で話し合う場を…したらクラスの中で男子と女子とで溝が深まるのは確実か…葉月の話から察するに…女子の連中は葉月が決めた事なら従うって事なんだろ？その葉月はデュエルする気満々っと…なら、やる事は一つ…！！）

西条は勉強机の引き出しの中から自分のデッキケースを取り出し

「そのデュエル…受けよう…」

「手加減は無しよ…全力で来なさい拓夜！！私は、私の背中に背負った皆の気持ちに応える為に、勝ちに行く！！」

「…お前相手に…手加減なんかできるかよ！！」

二人はそれぞれにデッキ、エクストラデッキを用意してデッキをシャッフルする。
お互いに手札を五枚引いて、熱い（？）デュエルを始めた。

「「デュエル！！！！！」」

黒翼の脅威

先攻　西条　ＬＰ　８０００
後攻　葉月　ＬＰ　８０００

先攻をとった西条は「俺の先攻、カードドロー！」と、デッキからカードをドローする。

（葉月のデッキはＢＦ…あの鳥達の展開力は馬鹿にならない…油断したら、一撃でやられる！？）

西条は手札の一枚を手に取り、そのカードをフィールドに出した。

「手札の魔法カード『トレード・イン』を発動！」

【トレード・イン】
魔法カード
手札のレベル８のモンスター１体を墓地に送って発動する。デッキからカードを２枚ドローする。

「俺は手札のレベル８モンスター『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を墓地に送り、デッキからカードを二枚ドロー！」

拓夜の墓地にドグマガイが置かれ、デッキからカードを二枚ドローした。

（っ！？このカードは、あの時に買った…『オーバー・デステニー』…早速使わせて貰うぜ！！）

「更に手札から魔法カード『オーバー・デステニー』を発動！！」

【オーバー・デステニー】
魔法カード
自分の墓地に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターのレベルの半分以下のレベルの「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体をデッキから特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたモンスターは、エンドフェイズ時に破壊される。

「『オーバー・デステニー』の効果で、墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を選択！ドグマガイのレベルは『８』…『オーバー・デステニー』は墓地の選択したモンスターのレベルの半分以下の『Ｄ－ＨＥＲＯ』一体をデッキから特殊召喚する！俺はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を守備表示で特殊召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

ダイヤモンドガイを特殊召喚した西条は、デッキトップに指を添えて

「ダイヤモンドガイの効果発動！デッキの一番上のカードは…」

デッキの一番上のカードをめくり、そのカードを確認する。

「よし！通常魔法『戦士の生還』だ！このカードを墓地に送り、次のターンに発動させる！」

【戦士の生還】
魔法カード
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択し、手札に加える。

『戦士の生還』を墓地に送った西条は、プレイを続けた。

「俺は伏せカードを一枚セットし、手札から『E・HERO エアーマン』を召喚！」

【E・HEROエアーマン】
星4　風属性　戦士族
ATK　1800
DEF　300
効果
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から1つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「HERO」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「HERO」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える。

「エアーマンの効果発動！デッキから『ＨＥＲＯ』と名のつくモンスター一体を手札に加える…俺はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を手札に加える！」

西条はデッキからＢｌｏｏ－Ｄのカードを手札に加え、ターンエンドを宣言した。

「俺のエンドフェイズ時に『オーバー・デステニー』の効果で特殊召喚されたダイヤモンドガイは破壊される…葉月、お前のターンだ！」

西条はダイヤモンドガイを墓地に送った。

「私のターン、ドロー！」

葉月はドローをすると六枚の手札の内、その一枚を手に取り

「私は速攻魔法『サイクロン』を発動！拓夜のリバースカードを破壊！」

【サイクロン】

速攻魔法
フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。

「なっ！？」

『サイクロン』の効果によって西条の伏せカードが破壊され、墓地に送られた。

「破壊したのはミラーフォースだったか…よし」

「くっ…」

葉月は西条の魔法・罠カードゾーンに他にリバースカードが無いのを確認すると

「拓夜…アンタのデッキには自身を守る罠カードは『聖なるバリアー ミラーフォース ー』と『激流葬』だけ…そして今破壊したのはミラーフォース…もうアンタを守る罠カードは『激流葬』一枚のみ！そうと分かってれば、私は遠慮なく攻撃に専念できる！！」

（チィッ！！葉月は俺のデッキには自身を守る罠カードは『聖なるバリアー ミラーフォース ー』と『激流葬』だけ…そして今破壊したのはミラーフォース…もうアンタを守る罠カードは『激流葬』一枚のみ！そうと分かってれば、私は遠慮なく攻撃に専念できる！！」

（チィッ！！葉月は俺のデッキ構成を把握してやがる…前と大して変わってない今の俺のデッキじゃ…戦術が筒抜けだ…！？）

西条は自分の手札を見て歯噛みした。
葉月からすれば、相手するデッキ内容が変わってないと分かったのなら、相手の伏せカードの種類や次のターンに繰り出されるであろ

う召喚まで予測し、事前にとれるべき対処や対策を張る事ができる。
一方西条からすると、今みたいに自分の張り巡らせた戦術や罠が次々と去なされていってしまい、絶望感を覚えてしまう。
中途半端に対戦相手の戦術が分かっているから尚更だ。

わずか一枚のカードを破壊されただけで、西条はワンサイドゲームを味わうかの様な絶望感に襲われた。

「私は手札から永続魔法『黒い旋風』を発動！」

【黒い旋風】
永続魔法
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のつくモンスターが召喚された時、自分のデッキから、そのモンスターの攻撃力より低い攻撃力をもつ「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

（きやがった…『黒い旋風』！？あのカード一枚あるだけで…葉月のＢＦ達は凄まじい展開力をしてくる！！）

「手札から『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００
効果
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

（っ初手にシロッコ…！？）

「シロッコの召喚により、私のフィールド上の永続魔法『黒い旋風』の効果発動！召喚に成功した『ＢＦ』と名のつくモンスターの攻撃力よりも低い攻撃力の『ＢＦ』一体をデッキから手札に加える！私はデッキから『ＢＦ－黒槍のブラスト』を手札に加えるわ！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１７００

ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

デッキからブラストのカードを手札に加えた葉月は、そのプレイングを更に圧巻という名の旋風を巻き上げていく。

「私は手札に加えた黒槍のブラストを攻撃表示で特殊召喚！！」

葉月のフィールド上に攻撃力２０００と１７００のモンスター、二体が並ぶ。
だが、これで終わる葉月ではなかった。

「手札から魔法発動『洗脳－ブレイン・コントロール』！」

【洗脳－ブレイン・コントロール】
魔法カード
８００ライフポイントを払い発動する。相手フィールド上の表側表示モンスター１体を選択し、エンドフェイズ時までそのコントロールを得る。

「拓夜、アンタのフィールド上の『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』をいただくわ！」

「なっ！？」

西条のフィールドに唯一壁として残っていたエアーマンが葉月のコントロール下におかれ、西条を守るカード達は全ていなくなり、文字通り「丸裸」状態であった。

「更に私は手札から『ＢＦ－疾風のゲイル』を攻撃表示で特殊召喚！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　８００
効果／チューナー
このカードは、自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のつくモンスターが表側表示で存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、フィールド上のモンスター１体の攻撃力と守備力を半分にする事ができる。

「チューナーまで！？」

「いくわよ拓夜…バトルフェイズ！まずは暁のシロッコで拓夜にダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　８０００→６０００

「くっ！？」

「続けてエアーマンでダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　６０００→４２００

「更に黒槍のブラストでダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　４２００→２５００

「ぅっ…」

「とどめ！疾風のゲイルでダイレクトアタック！！」

西条　ＬＰ　２５００→１２００

「ぁ…っく…！？」

たった一度のバトルフェイズで合計６８００ものダメージを受けた西条の表情は青ざめていた。

手札を握る手だけでなく、体という体中から嫌な感触の汗が吹き出してくる。

葉月はバトルフェイズを終了させ、メインフェイズ２に移ると

「私はエアーマンと、疾風のゲイルをチューニング！」

西条に更に追い討ちをかけるかの様に、シンクロ召喚を行った。

「私はレベル７のシンクロモンスター『ＢＦ－アーマード・ウィング』をシンクロ召喚！」

【ＢＦ－アーマード・ウィング】

星７　闇属性　鳥獣族

ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１５００
シンクロ／効果
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで０にする。

「アーマード…ウィング…！？」

（確かあのモンスターは、戦闘破壊されないモンスター…破壊するには、カード効果によって破壊するしかない！？）

葉月は残った自分の最後の一枚の手札をチラッと見た後

「私のターンは終了よ」

と、ターンエンドを宣言した。

西条　ＬＰ　１２００

葉月　ＬＰ　７２００

「くっ…俺の、ターン…」

西条は自分のデッキトップに指を添えて、手札を確認する。

（今…俺の手札にあの葉月のＢＦ達を破壊できるカードはない…それに俺のデッキは『融合』魔法カードが無ければ話しにならない…その『融合』のカードも手札にない…引き当てろ…引き当てろ…俺っ！！）

「ドロー！！」

祈るようにドローし、そのカードを確認した西条は

「…っよし！！イケる！！」

「っ！？」

一枚のキーカードを引き当て、西条は早速そのカードを発動させた。

「まだ俺の希望は潰えない！手札の『沼地の魔神王』の効果発動！！」

【沼地の魔神王】
星３　水属性　水族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１１００
効果
このカードを融合素材モンスター１体の代わりにする事ができる。その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。また、このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから『融合』魔法カードを手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

「このカードを手札から墓地に送る事で、デッキから『融合』を手札に加える！」

西条はそう言いデッキから『融合』のカードを葉月に見せ、手札に加えた。

（拓夜…アンタの狙いは分かっている、このターン…アンタがやる事全てが通用すると思ったら…大間違いよ！！）

続いて西条は自分の墓地から一枚のカードを取り出し、葉月にそれを見せた。

「俺はダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた『戦士の生還』の効果発動！墓地の戦士族モンスター１体を手札に加える！」

（拓夜は前のターン、エアーマンの効果で『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏ

ｏ－Ｄ』を手札に加えた…そして先程、『沼地の魔神王』の効果でデッキから『融合』魔法カードも手札に…で、墓地発動の『戦士の生還』で…拓夜は必ず『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を手札に加え…融合モンスター『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を融合召喚してくる！！）

「墓地に眠る『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を手札に…」

西条がドグマガイのカードを拾い上げたその時、葉月が「待った！」と、静止の声を出す。

「っ！？」

「アンタがドグマガイを手札に加え、融合召喚を狙っている事は最初から分かっていたわ！私は『戦士の生還』の効果にチェーンして、手札の『Ｄ・Ｄクロウ』の効果発動！」

【Ｄ・Ｄクロウ】
星１　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１００
効果
手札のこのカードを墓地に送る事で、相手の墓地に存在するカード１枚を選択し、ゲームから除外する。この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「D…D…クロウ…！？」

「このカード効果で、拓夜のドグマガイを除外！！」

葉月の発動した『D・Dクロウ』の効果により除外されてしまったドグマガイ。

西条の『戦士の生還』は空振りに終わった。

「っ…『D・Dクロウ』…厄介だぜ…」

西条は手札を確認して次の策を練った。

（今の俺の手札は『融合』と『D－HERO Bloo－D』『ミラクル・フュージョン』に『異次元からの埋葬』と『奇跡の発掘』…手が無い訳じゃないが…葉月の手札は0枚か…ここでプレイングを誤ったら即、敗北だ…よし、いくぜ！）

「手札から魔法発動『ミラクル・フュージョン』！」

【ミラクル・フュージョン】
魔法カード
自分フィールド上または墓地から「E・HERO」と名のつく融合モンスターの素材となるカードをゲームから除外し、エクストラデッキからその融合モンスター1体を特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』と『沼地の魔神王』をゲームから除外！『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』を除外融合召喚！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】
星８　水属性　戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
効果
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「アブソルートＺｅｒｏ…で、それからどうするつもりかしら？」
西条のフィールドに強力モンスターが現れたにも関わらず、葉月は余裕の表情でそれを言う。
西条はその葉月の言葉を真に受け、葉月の手札とフィールドを確認し直した。

（何だ…葉月のあの余裕な態度は…？くっ…今の葉月のフィールドは暁のシロッコとアーマード・ウィング、黒槍のブラスト、それに永続魔法『黒い旋風』だけ…葉月の手札はない…つまり、葉月は身を守るカードはないって事だ…）

そして今度は自分の手札とフィールドを確認する。

（対して…俺のフィールドにはアブソルートＺｅｒｏだけ…手札は『融合』、『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』、『奇跡の発掘』、『異次元からの埋葬』……）

そして自分のエクストラデッキを確認して、西条はある事に気がついた。

（ん？…こ、これなら！？葉月のモンスターを一掃しつつ、ダメージを与える事ができる！？…やってみるか）

西条は手札から一枚のカードを発動させた。

「手札から魔法カード『融合』を発動！！」

【融合】
魔法カード
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「『融合』…っしまった!?その手が!?」

（アブソルートＺｅｒｏ…とんでも効果よね、本当に!!）

西条は手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』取り出し

「フィールドのアブソルートＺｅｒｏと、手札のＢｌｏｏ－Ｄを融合し、『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』を新たに融合召喚！」

手札とフィールドからそれぞれのモンスターを墓地に送り、エクストラデッキからもう一枚のアブソルートＺｅｒｏを召喚した。

そして西条は融合素材として墓地に送ったアブソルートＺｅｒｏを指さし

「そしてこの瞬間、フィールドから離れたアブソルートＺｅｒｏの効果発動!相手フィールド上のモンスターを全て破壊する!」

「っ!?」

葉月は悔しそうな表情をしながら自分フィールド上のモンスター達を全て墓地へ送った。

「これで葉月を守る壁はなくなった…いくぜ葉月!アブソルートＺｅｒｏで、ダイレクトアタック!」

葉月　ＬＰ　７２００→４８００

「私のモンスター達が…っ、冗談じゃないわ…」

一気に形勢を逆転された葉月の表情は険しかった。

今の葉月のフィールドには永続魔法『黒い旋風』しかなく、手札もない。

そして西条のフィールドには、強力な破壊効果を秘めたアブソルートＺｅｒｏ。

「俺のターンは終了だ、葉月！」

西条はターンエンドし、葉月のターンに移る。

（負けられない…負けたくない…負けたらメイド…メイド…くっ…勝つ…勝つ、勝つ、勝つ、勝つ、絶対に勝つ！！）

西条　ＬＰ　１２００
葉月　ＬＰ　４８００

「私のターン…ドロー！！」

負けたくない想いを募らせ、鬼気迫る勢いでカードをドローする葉月。
そのドローしたカードを確認すると、葉月の口元がニヤリとした笑みを浮かべる。

「本当…『黒い旋風』様々よね…」

「っ！？」

葉月の呟きが聞こえた西条の脳内に警報（アラート）が響き渡る。

（引きやがったのかっ！？たった手札一枚で、この状況を打破するカードをっ！？）

葉月はドローしたそのカードをフィールド上に叩きつけた！

「私はモンスターカード『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚！！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】

星４　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
効果
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

西条は葉月の召喚したモンスターを見て首を傾げる。

「シュラ…だがシュラの攻撃力と効果じゃ、アブソルートＺｅｒｏは…？」

葉月はシュラを召喚すると、自分のデッキを手に取り

「シュラの召喚が成功した事で、私のフィールド上の永続魔法『黒い旋風』の効果発動！！」

「っしまった！？まさか…それで疾風のゲイルを手札に！？」

「いいえ、『ＢＦ－疾風のゲイル』は制限改定によって、デッキには一枚までになっているわ…私はもうゲイルはデッキには入っていない」

葉月の言葉を聞き、内心ホッとする西条だったが

「変わりに私が手札に加えるモンスターは『ＢＦ－月影のカルート』よ！！」

【ＢＦ－月影のカルート】
星３　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

「カルート…っく…！？」

（ＢＦめ…お前等ちょっとは効果を自重しやがれってんだ！！）

カルートを手札に加えた葉月は躊躇う事なく、攻撃宣言をした。

「バトルフェイズ！！『ＢＦ－蒼炎のシュラ』で、アブソルートＺｅｒｏに攻撃！！」

「っそこでっ…くっ！？」

「そしてダメージステップ時に、手札の『ＢＦ－月影のカルート』の効果発動！カルートを手札から捨てる事で、このターンのエンドフェイズ時まで、シュラの攻撃力を１４００ポイントアップさせる！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
ＡＴＫ　１８００↓３２００

攻撃力２５００であるアブソルートＺｅｒｏではその攻撃力に太刀打ちできず、破壊され墓地に送られた。

西条　ＬＰ１２００↓５００

「…っだが、フィールドから破壊され墓地に送られたアブソルートＺｅｒｏの効果は発動する！相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「構わないわよ」

葉月は先とは違って、その言葉に余裕を持たせていた。

お互いのフィールド上にモンスターはいなくなった。

葉月の手札はなくこのターン、葉月は手は打ち尽くした状態だ。
葉月とは違って手札が残っている西条だが、西条の手札には召喚できるモンスターがいない。

この事からして西条が次に引くカードが、文字通りこのデュエルの勝敗を分かつ事になる。

「私のターンは終了よ…拓夜、アンタのそのドローで…私にどれだけのダメージを与える事ができるか…アンタもデュエリストの端くれなら”魅せて”みなさい!!」

「っ!?」

葉月の言葉が胸に刺さる。
西条はゆっくりと自分のデッキトップに指を添えた。

（このターンでモンスターを引かなきゃ、モンスターを引かなきゃやられる…）

指先がチリチリする。
鼓動が高鳴る。

「っ俺の…ターン」

そんな西条の様子に葉月は腕を組んで静かに口元に笑みを浮かべていた。

葉月は何となくだが、確信していた。

（このターン、きっと拓夜はモンスターを召喚してこない…拓夜のデッキは融合主体、それに特化させた分、通常召喚できるモンスターが余りにも少ない！！きっと拓夜の今の手札にも通常召喚できるモンスターはいない…このターンは…”拓夜は何もできない”！！）

見えない重圧が西条を取り巻く。

（くっ…何でこんなカードを引くのに…カードを引くのに嫌なビジョンが頭にっ！？）

西条は目を閉じ、力任せにカードを引き抜いた。

「俺のターン、ドロー！！」

ドローしたカードを確認する。

【チェーン・マテリアル】
罠カード
このカードの発動ターンに融合召喚を行う場合、融合モンスターカードによって決められたモンスターを自分の手札・デッキ・フィールド・墓地から選択してゲームから除外し、これらを融合素材とする事ができる。このカードを発動したターン攻撃をする事はできず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊され

る。

（…っ『チェーン・マテリアル』！？…駄目だ、このカードだけじゃ…『融合』のカードがないと…どうする…次の葉月のターンを凌ぐ為には…っこれしか方法はない！？）

西条はドローしたカードを確認し終えると、そのカードを魔法・罠カードゾーンにセットした。

そして…

「俺のターンは終了だ！さぁ葉月、”モンスターを召喚するなら召喚してきな”！？」

「っ！？アンタ…まさかそのカード…！？」

西条の言葉に動揺する葉月。

（まさか引き当てたとでも言うの…！？拓夜のデッキに残る、唯一の迎撃罠カード『激流葬』を！？）

そう思うと途端に葉月の立場が危うくなる。

仮にもし、あのリバースカードが『激流葬』でなかった場合はそれ程の脅威とは捉えなかったであろう。

葉月は西条のデッキを知り尽くしている。

なので、攻撃宣言に反応する『炸裂装甲』や『次元幽閉』がデッキに入っていない事は知っていたし、モンスターの召喚に関して発動

する罠カードと言えば『激流葬』しか入っていないのも知っていた。

（召喚するなら召喚してきな…って…明らかに『激流葬』じゃない！？）

「くっ…私のターン、ドロー！！」

葉月はドローし、そのカードを確認する。

【ＢＦ－極北のブリザード】
星２　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　０
効果／チューナー
このカードは特殊召喚できない。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

（極北のブリザード！！…こんな場面でこのカードを引く事ができるなんてっ！？でも…）

葉月は西条の伏せた一枚のリバースカードを睨みつける。

（でも…あの『激流葬』のせいで、ブリザードを召喚しても無駄に

なる…セットしても、守備力は0だし、そこから反転召喚しても、ブリザードの効果は使えない！！…拓夜…くっ…）

「……私は…くっ…このままターンを終了するわ」

「えっ！？」

悔しそうにエンド宣言をする葉月に西条は驚いた。
まさかのハッタリが通用するとは思わなかったからだ。

（おいおい…これは良い予想外だ）

「なら…俺のターン、ドロー！！」

西条がドローカードを確認すると、そのカードをすかさず発動させた。

「俺の反撃開始だぜ！手札からフィールド魔法『フュージョン・ゲート』を発動！」

【フュージョン・ゲート】
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、「融合」魔法カードを使用せずに融合召喚をする事ができる。この際の融合素材モンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。

葉月は西条の発動させたカードを見て、ハッと、その両目を大きく開く。

「そんな…『フュージョン・ゲート』、って事は!?」

「そう、葉月が『激流葬』と思い込んでいたカードはこいつだ!!罠カード発動『チェーン・マテリアル』!!」

「そ、そんなっ!?」

「俺はデッキ、墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を三体ずつ除外し、エクストラデッキから三体の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を融合召喚!!」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
融合／効果
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用

したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

西条のフィールドに三体のＤ－ＥＮＤが並ぶ。

「っだけど！！『チェーン・マテリアル』の効果で特殊召喚された融合モンスターは攻撃する事はできないし、今私のフィールドにはモンスターはいないから、Ｄ－ＥＮＤの効果を発動する事もできない！！それにエンドフェイズ時に破壊されて、私のターンにはアンタのフィールドは空っぽじゃない！！何が反撃よ！！」

吼える葉月に対し、西条は冷静な態度で対応する。

「確かに葉月、お前の言うとおりだ…さっきのターンは『チェーン・マテリアル』をブラフに使った位だからな…だが、切り札ってのはこういった時に使うもんだろ？」

「っ！？」

西条は手札からすっと、一枚のカードを取り出すと、そのカードを魔法・罠カードゾーンにセットし、ニヤリと笑みを浮かべた。

「っそんなハッタリ、そう何度も通用するもんですかっ！！」

「分かっている、葉月…お前のそういった性格とかも…よく知って

いる。葉月なら、この状況で迎えたターン…”必ず攻撃してくる”とな！」

「っ！？…分かってて…そんな見え見えの罠を張る！？無駄なターンを消費させて、更に自分の敗北を惨めにしてる事に気が付かないのっ！？」

熱くなる葉月。
だがそれでも西条は冷静な態度を崩さなかった。

「確かにさっきのターンは自分が生き延びる為にあんな姑息な手をした…だけどな、俺だって馬鹿じゃない…俺は言ったぜ？”反撃開始”だと…その中には当然、次のお前のターンを凌ぐ術があるから、堂々と言えるんだぜ？」

「…っ」

「俺のターンは終了だ、後は…葉月、お前に掛かっている…」

西条はそう言うと、自分フィールド上のＤ－ＥＮＤ達を墓地に送った。
これで西条のフィールドにはフィールド魔法『フュージョン・ゲート』と一枚の伏せカードのみとなった。

「っ……」

西条のフィールドを見つめる葉月。

葉月は迷っていた。
普通に考えるならここはモンスターを召喚し、ダイレクトアタック

をするだろう。
だが、西条の言うとおりあれが本当に『激流葬』なら？

（私は…私は……何でこんなに迷ってるの？普通にモンスターを召喚して攻撃すれば良いじゃない！？拓夜のライフは残り５００なんだもの！！っでも…でもっ）

震える拳をギュッと握り締める。

（私は…拓夜を…拓夜を…っ）

葉月の頭の中はもう、ぐちゃぐちゃになっていた。

「……」

西条は手に汗握る思いで葉月を見ていた。
今伏せたカードもブラフ…
伏せたカードは速攻魔法『異次元からの埋葬』。
つまり、実際には西条の身を守るカードなどなく、葉月が繰り出すモンスターの攻撃を受ければ即敗北という崖っぷち状態だ。

（葉月…お前にとっては不本意だろうが、今は言葉で翻弄しないとお前を押さえれそうにない…頼む、攻撃しないでくれっ！？）

対する葉月は手を震わせながらデッキからカードをドローする。

（……駄目、このカードじゃ…拓夜の『激流葬』を破壊できない…）

そして手札を確認する。

（極北のブリザードと…今引いた『精神操作』…これじゃ駄目……
私…あれ？私…何でこんな頭が廻らないの？あれ？何で…え？どう
して？…分からない…相手が拓夜だから？…いつもの大会とかなら、
こんな事なかったのに…駄目…こんなんじゃ…駄目…）

「…すぅぅっ」

葉月は目を閉じ、大きく息を吸い込むと

バチィィィッ！！！！

「っ！？」

自分の両頬を思いっきり叩いた。
その突拍子な行動に挙をつかれた西条。

「～ふぅ、目が覚めたわ…」

…ギンッ！！

葉月の瞳に漆黒の輝きが灯る。

（っまずい！？終わった…）

葉月の目を見た瞬間、西条は悟った。

自分の敗北を…

「拓夜、終わらせるわよ…このデュエルを！！」

「ちっ！？」

「手札から『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚！！」

モンスターを召喚した葉月はそのままの勢いで西条に向かって

「ブリザードの効果はあえて使わない！！このまま拓夜を叩く！！
ブリザードで、拓夜にダイレクトアタック！！」

拳を思いっきり突き出し、攻撃宣言をする葉月。

その拳は身を乗り出して突き出したせいか、西条の予想以上に伸びて、西条の顔面にめり込んだ。

「あぃだっ！？」

西条　ＬＰ　５００→０

鼻を押さえて俯せる西条。
そんな西条を見て葉月は「ヨッシャ！！」と、ハイテンションにガッツポーズを決めた。

デュエルは葉月が勝利し、西条が敗北という結果に終わった。

「私の勝ちよ、拓夜！これでメイド喫茶は無しよ！！」

「ぁ～鼻痛ぇ…っちくしょぅ…負けちまったか」

西条は鼻を押さえながらティッシュを求めて部屋の中を這いずり回る。
そしてティッシュを一枚取り出してはちぎり、それを片方の鼻の穴に詰め込んだ。

「あれ？拓夜…ぁ、ごめん！？鼻、大丈夫！？」

「お前熱くなりすぎ…」

西条はそう言うと壁にぐでぇっともたれ掛かる。

「ごめんね拓夜、でも…メイド喫茶は無しにしてもらうわよ」

「…ハァ」

西条は大きく溜め息をついた。

そして

「メイドかぁ…うん、負けたからしょうがないけど…確かにアイツの言うとおり、葉月のメイド姿…見てみたかったかもな…」

「へっ!?」

ふと洩らしたその言葉にキョトンとなる葉月。

みるみるうちに顔を真っ赤に火照らせていく。

「まぁでも約束は約束だからな…よっと」

西条は立ち上がるとふと気が付いた。

葉月が顔を真っ赤に火照らせ、口をパクパクしているその姿に…

「ん?」

(な、どうしたんだ葉月の奴?)

第七祭・前編

午前８時５０分…

黒のタキシードに蝶ネクタイをした姿の西条が「皆、聞いてくれ！」と、クラスメイト等に呼びかける。

「第七祭開始まで後１０分といった所だが…皆の協力もあって無事に喫茶店を開く事ができた…ありがとう」

西条の言葉を聞いて、それぞれ作業をしていた生徒等は手を止めて西条に向き直る。

今、教室の中は第七祭で催す喫茶店に飾られていた。
そして生徒等の姿は基本制服だが、店員の役をする生徒等はエプロンをそれぞれ身に纏っている。
西条はこの喫茶店の店長という扱いでタキシード姿なのだが、その姿は何故か浮く事なく、クラスメイト等からすればかなり様になっているとの事だった。

「とりあえず、皆には平等に第七祭を楽しんでもらいたいから、打ち合わせした通り、シフトは時間厳守でよろしく頼む…途中、何らかの事情で遅れたりする場合には必ず俺の携帯電話に連絡をいれてくれ」

淡々と注意事項を述べていく西条に、結城が「西条ちゃん」と声をかけてきた。

「そんな事は言われなくても皆わかってるから大丈夫だよ、それよ

り別にさ、皆が盛り上がる様な開店の宣言をしてくれよ」

「うっ…そうだな…」

西条はコホンと咳払いを済ませると、大きく息を吸い込んで

「第七祭！！俺達で盛り上げていこうぜぇぇえ！！」

オォォォオオオ！！！！！

「ナポリタン１つ！」

「雪だるまシャーベット１つ」

「ねぇ、注文したのにまだ～？」

「申し訳ございません！只今お持ちしますー！」

開店早々、西条のクラスの喫茶店は大繁盛していた。

長蛇…とまではいかなくとも結構な人数が廊下にまで列んでおり、

店内は満席状態だ。

「ふぃ～、何だよこの人数は…めちゃくちゃ忙しい！！」

厨房で料理の盛り付けをしている結城が手を動かしながら愚痴る。
そんな結城をホールから戻ってきた店長の西条が宥める。

「まぁそう言いなさんな…商売繁盛ってのは有り難い事さ、んじゃオーダー入りま～す」

「ぇぇえぇ…！？」

「2名様でミルクティー1つとコーラ1つ、んでチョコレートパフェお願いしまーす！」

「ぅぅぅう…」

「結城、返事？」

「はい畏まりましたー！」

それを聞いた西条は長いこと注文した料理を待っているお客さんの所へ急いで料理を運んで行くのであった。

「雪だるまシャーベット1つとナポリタン1つ完了ォ！」

結城が調理完成の声を挙げると「はーい」とホールから声が聞こえてくる。
そして結城の前に制服エプロン姿の葉月が姿を現した。

「おっ、葉月さん！」

「お疲れ結城くん、結城くんって料理上手なんだね」

「ありがと、そう言って貰えると嬉しいよ！」

葉月からの褒め言葉に思わず、嬉しそうにデレデレした顔になる結城。

（くぅぅ…！！葉月さんから褒めてもらう為に、今日まで料理の練習をみっちりやっておいて良かったぜぇ！！）

そして結城は葉月の制服エプロン姿を見る。

ピンク色の小さめのエプロンの下から見える足が男心を刺激する。

くるっと後ろに回れば制服のスカートと一緒に靡くエプロンはある意味、メイド姿よりも良いとも言える。

初めはメイド喫茶が無しになった事に落胆した結城だったが、葉月のこの制服エプロン姿を見て「こ、これはぁ…！？」と衝撃を受けたものだ。

俯き、脳内で葉月から褒められた事に感動していた結城は、勇気を振り絞って葉月の服装を褒めようと顔を挙げた。

「…っ葉月さんのその姿もっ…て？」

顔を挙げたはいいが、もうそこには葉月の姿はなく、結城は手にしたフライパンに向かって話していた。

「……ウォオ！！何だってんだよぉぉお！？」

フライパンに向かって叫ぶ結城。

だが当然、フライパンからの返事はない。

客の入りも落ち着きだした所で、西条達に余裕ができてきた。

そろそろ交代の時間だ。

西条は次に交代に入るクラスメイトにそれぞれ声をかけていった。

「葉月、ちょっとこっちに来てくれ」

呼ばれた葉月は「？」と首を傾げて西条の所へと向かう。

西条と葉月は客席からは見えない厨房に入る。

「えっと…結城、ちょいちょい」

「？」

結城も呼び出し、西条は葉月と結城の二人に話しかけた。

「もう３０分位で二人のシフトは終了するだろ？」

「あぁ」「えぇ」

「賄い食って訳でもないが…客足が落ち着いた今の内に、好きなメ

ニューを二人して食べておいてくれ」

「おぉ！！西条ちゃん！！」「ん、分かったわ」

そう言うと西条は結城に近づき、内緒話しでもするかの様に結城の耳元で小声で話す。

（後はお前次第だからな、頑張れよ）

「おう、分かった！」

二人のやり取りを見て不思議に思った葉月は「何話してるのよ？」と西条に尋ねてくる。

「ん？いやぁ…できればあまり食材は使いすぎるなよって言っただけさ」

ハハハハハ…とぎこちない笑みを浮かべながら西条は

「じゃ、交代の人が来たら引き継ぎだけはちゃんとしておいてくれな、それじゃ！」

と言いホールへと出て行った。

客の入りが少なくなったとはいえ、それでも新たな客はやってくる。客が来店すると同時に西条は「いらっしゃいませー！」と元気に挨

拶をして迎えた。

「ご注文がお決まりになりましたら声をお掛け下さい。」

西条はこの接客業が、自然と楽しくなっていた。
客からのたった一言の「ありがとう」が何故かとても嬉しく感じれるからだ。

（今のところ順調だな…）

そう思っているとまた新たな客が入ってきた。

「っと、いらっしゃいま…せ」

西条の言葉が一瞬つまる。
入ってきた客は西条を見るや西条の方に寄ってきた。

「…久しぶりだね西条くん」

「は、はい…ご無沙汰してます、成瀬さんのお父さん…」

成瀬パパはウムと頷くと西条の肩にズンと手を乗せ

「花穂から聞いてね…何でも君が喫茶店をやっていると言うものだから見に来てみれば…なる程、なかなかその服装も様になっているじゃないか」

西条の肩に置かれた手に力が入る。

（な…成瀬パパ…何か怖いよ…）

西条は肩の痛みをこらえて、とりあえずの接客をする。

「ありがとうございます、それより立ち話も何ですから…っと、こちらのお席にどうぞ」

「ウム」

西条の案内で誘導された席に座る成瀬パパ。

西条は「ご注文がお決まりになりましたら声をお掛け下さい」と言い、その場を後にした。

そして成瀬パパから見えない位置に移動すると、ブワっと全身から異様な汗が噴き出した。

（緊張した…めっちゃ緊張した…何だろ、何か成瀬パパって怖いイメージがあるんだよな…）

そう思いながらチラッと成瀬パパを見やる。

（まぁ理由はあの体格だよな…成瀬さんはきっとお母さん似なんだ…だって成瀬パパ…体ゴッツいもん、それにあの色付きメガネ…坊主頭…怖っ！？）

端から見れば成瀬パパのその姿は『ちょい悪オヤジ』なんて枠組みを普通にはみ出している怖いおじさんだ。

西条は軽く溜め息をつくと、残っていた他のクラスメイトに声をかけられた。

「なぁ西条」

「ん、どうした？」

「今のお客さん、お前の知り合いか？めちゃくちゃ怖そうな人じゃん！？」

「まぁ確かに見た目は怖いよな…」

「俺さ、あの人の接客する自信ないわ…西条、いや店長、頼んだ！！」

「な…何ぃぃ！？」

物陰からそんなやり取りをしていると、「すいません」と成瀬パパが注文をしようと声をだした。

「西条くん」

（なっ！？）

あろうことか、成瀬パパは西条の名前を指名してきた。

物陰からその声が聞こえた西条はガクッと肩を落とし、反対にそれを聞いたクラスメイトは西条に「頑張れ！！」と、いかにも他人ごとの様な顔で言ってくる。

「ぅぅ…行ってくる」

西条は落胆した顔から瞬時に営業スマイルに表情を切り替え、成瀬パパの所へと向かう。

「失礼します、ご注文はお決まりになられましたか？」

「ウム、君のお勧めの飲み物をいただこうか？」

「？…俺…ぁ、いや、僕のお勧めですか？」

「そうだ、何かないかね？」

「そう…ですね…」

西条は少し考えた後、「では、僕が気に入ったコーヒーをお持ち致します。少々お待ち下さい」
と言い、店の奥へと入って行った。

「うん、結城くん！このパスタ美味しいよ！」

「ありがとう、めっちゃ嬉しいよ！」

厨房の奥で結城と葉月の二人は一緒に食事をしていた。
今、二人が食べているのは結城が作ったパスタ。
その麺には明太子がびっしりとついており、更にはバターの香りも合わさり濃くもまろやかな味わいを作り出している。
更には細かく刻み、焼いてある牛肉からはほのかにカツオ出汁の味付けがされており、主役が明太子パスタなのに肉という不釣り合いな組み合わせを見事に調和させている。

「いや～、美味しいって言ってもらえて良かった…今日みたいな日に失敗したらマズいじゃん、毎日練習しておいて良かったよ」

「そうね、文化祭当日になって『料理できません』って事になったら大変だもんね」

二人はあっという間にパスタを食べ終えてしまった。
二人の交代の時間まで残り１０分といった所か…

「さて、ご馳走さまでした結城くん！」

「あぁ、お粗末様でした」

葉月は二人分の食器を片付けると、再びエプロンを身に纏った。

「ん？あれ…葉月さん、まだ働くの？」

「うん、だってまだ交代まで時間あるでしょ？それに拓也はまだ働いてるし、私達も手伝ってあげましょ」

（西条ちゃん…か…）
「そうだな…あ、そうそう葉月さんあのさ」

「なに？」

振り返る葉月に、結城は思い切って

「この後さ、よかったら俺と」

「ぬぅぅう…！！」

デートに誘おうとしたのだが、いきなり厨房に難しい顔して入ってきた西条によって阻害されてしまった。

「ちょっ…西条ちゃん！？」

物言いたげな結城だったが、西条は構うことなくコーヒーの用意を始めた。

「これしかない…あの時に飲んだ…これしか…」

「さ、西条ちゃん？」

いつもと様子の違う西条に戸惑う結城と葉月。

西条はカップにコーヒーを煎れると、ケーキのデコレーション用の生クリームを取り出し、そのコーヒーの上に乗せていく。

「西条ちゃん、何を作ってんだ？」

「それ…ウィンナーコーヒーね」

「ウィンナー…コーヒー…名前だけなら聞いた事はあったけど、へぇ…これが」

生クリームを乗せ終えた西条は「うっし!!できた!!」と意気込み、ウィンナーコーヒーをお盆に乗せて厨房からさっさと出て行った。

「……なんだったんだ…一体?」

「…さぁ、お客さんの注文でしょうけど…」

結城と葉月の二人は西条の後を目で追うと、そこには厳つい顔で色眼鏡の体格の良いおじさんが座っていた。

「なっ!?」「えっ!?」

(何だあのオッサン!?見た目ヤーさんじゃねぇか!?)

(拓夜…)

二人が見守る中、西条はヤーさんと勘違いされている成瀬パパの所へと向かうと、手にしていたお盆からウィンナーコーヒーを差し出した。

「お待たせしました、こちらが僕のお勧めするものです」

成瀬パパは「フム」と頷くとカップを手に取り、スプーンで軽やか

にクリームを混ぜ合わせていく。

「ウィンナーコーヒーか、なる程…花穂が言ってた通りだな」

「え…！？」

何のことか分からないでいると、成瀬パパは思い出すかの様に話し出した。

「なぁに、前に家で花穂が嬉しそうに話してたんだよ…君と喫茶店に行って、そこで頼んだウィンナーコーヒーを君が気に入ったと」

「ぁあ、その事でしたか…」

「フム…どれ、味の方は……」

「っ！？」

（味…どうだ…成瀬パパの口に合うか？）

緊張する西条。

成瀬パパはコーヒーを一口二口と飲むと、ゆっくりとカップを皿に戻した。

「……フム、まぁまぁだな」

「…っそうですか…」

「学生が催す文化祭にしてはかなり上出来だ、店の雰囲気、品数、よくやっているな…西条店長」

「あ、ありがとうございます！」

「フム…なかなか楽しませてもらった、私はそろそろお暇させてもらおう」

そう言うと成瀬パパは席を立ち、精算すると店から出て行った。

「あ、ありがとうございましたー！」

成瀬パパを見送り終えた西条は「はぁ…」と大きく溜め息をついた。

「緊張した…何か知らんがめっちゃ緊張した…」

「うぅぅ…分からないです…西条さんの喫茶店は一体どの教室なんですか…」

大勢の人混みで賑わう第七祭。

その校舎の廊下をあたふたしながら成瀬花穂は歩いていた。

手には第七祭のパンフレットが握られていたが、余りの人混みにパ

ンフレットを立ち読む事が難しく、そんな事をしようものなら人の流れに流されていってしまいそうだった。

「と、とりあえず…っどこか落ち着ける場所にぃっ！！」

人混みを分けて進み、成瀬は廊下の端っこへとたどり着く。
そして手にしていたパンフレットを開け、現在位置を確認する。

「えっと…今の私は三階の廊下の…ここですね、で…西条さんの教室は……あれ？」

そこで成瀬はふと思った。

（…そう言えば私…西条さんの教室って知らないです…むむむ…、これは致命的な…）

成瀬は、うわ～私は一体いままで何をやっていたんですか～、とげんなりしながら再びパンフレットに目を通していく。

（西条さんは学年は三年生で間違いないです…三年生のクラスはこの校舎の三階…つまり、今私がいるこの場所のどこかに…西条さんはいる訳ですねっ！？）

成瀬はパンフレットを折り畳み、スカートのポケットの中にしまい込むと再び人混みの中へと進んでいった。

（こうなったら…この階の教室を全て見て回ります！！名付けて『下手な鉄砲も数撃ちゃ当たる、いや、お願いします、当たって下さい』作戦です！！）

そして一番近くの教室のドアを小さく開けて、その隙間からこそっと中を覗いてみる。

（……いないです…そもそもこの教室は喫茶店なんかじゃなく、ただのお化け屋敷みたいですね…次です、次っ！！）

目的の教室じゃなかった為、成瀬は次の教室へと向かう。
そして次の教室の入り口の前でも同じ様に、こそっと覗く成瀬。

（……っここはただの空き教室ですかね？…次です、次っ！！）

周囲の『何アレ？』という不信な視線など気付く事なく、成瀬の探検は続く。

「じゃあ西条ちゃん、お先！」
「拓夜、頑張ってね！」

「おぉ、お疲れさま！二人で楽しんでってくれ！」

成瀬花穂が西条の教室を探している最中、結城と葉月の二人は自分達のシフトが終了し、教室もとい喫茶店を出て行った。

二人を見送った西条は店に戻り、ガラリとした店内を見渡してみる。開店当初の大賑わいが嘘の様に、店内は客の姿が減っていた。

（まぁ看板っ娘である葉月が抜けりゃこんなもんだわな…開店直後は主に男子生徒が多かったからな…あいつ等ほとんどが葉月目当てだったって事だな…）

そう思うともっと葉月のシフトを入れれば良かったかもしれない。西条はそんな事を思いながら店内を軽く掃除してまわった。

成瀬花穂は未だ、西条の教室を探していた。

三階の教室も残す所あと一つ…

（へ、下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるとは言いますけど…よりにもよって一番最後に当たるだなんて…）

成瀬は軽く溜め息をつき、まだ見ぬ最後の教室を覗く。

（消去法で考えたら西条さんは必ずこの教室にいるはず…あ、いた！！）

ドアの隙間から西条の姿を発見した成瀬は「西条さん！！」と言うと同時に、覗いていたドアをガラリと開けた。

「っ！？って、な…成瀬さん？」

突然呼ばれた為か驚きながら振り返る西条。
だが、その瞬間…

ガシャァーン！！！！

と、何やら割れ物の音が店内に響き渡った。

「へ？」

ドアを思いっきり開けた成瀬は、恐る恐る自分の下を確認する。

どうやら成瀬が開けたドアは店内からすれば裏口だったらしく、そこに置かれていた食器やら調理器具が揺れて落ちたらしい跡が残っていた。

「なっ！？とりあえず成瀬さんはそこを動くなよ！？」

西条は急ぎ成瀬の所へと向かうと、そこには散乱した食器が床に落ちていた。

「ちょっと何の音だよ!?」

「やだ、割った～!?」

店内に残っていたクラスの連中が集まってくる。

成瀬は自分がやらかしてしまった事にショックを受けて、真っ青な顔をしていた。

（成瀬さん……っしょうがない…）

そんな成瀬の様子を見た西条は、集まってきたクラスの連中に

「皆、大丈夫だから!!ここの始末は俺がやっておくから、皆は持ち場に戻ってくれ!!」

西条の言葉にクラスの皆は納得し、それぞれ自分の持ち場に戻っていく。

西条は青ざめた表情の成瀬の頭に手をのせ、優しく撫でながら尋ねた。

「成瀬さん、怪我はないか?」

「はっはいっ…あああのっ…」

「驚かせて悪いな、とりあえず床に落ちた食器を洗わなくちゃな…成瀬さん、手伝ってくれるか?」

「はっはいっ！」

二人して落ちた食器を拾っていく西条。
西条は拾いながら、プラスチック製の食器で良かった～と、安堵の息を洩らした。

食器を片付け終えた西条はクラスメイトに店の事を任せると、成瀬の手を引いて、隣の空き教室へと連れ込んだ。

空き教室には西条と成瀬の二人だけ。
成瀬は怒られると思い込み、ビクビクしながら空いている席に座った。

西条は適当にそこらの机に座り、腕を組ながら軽く溜め息をつく。

「っ！？」

西条のその仕草だけでもビクッとなる成瀬。

（成瀬さん…何かめっちゃビクついてるな…こっちはそんな怒るつもりはないんだけどな…）

西条はそんな成瀬の緊張を解す為、優しい口調で話しかけた。

「大丈夫だよ成瀬さん、俺は君を叱る為にここに連れてきたんじゃ

ないから」

「え…!?」

西条の言葉に顔をあげた成瀬の目には、うっすらと涙が溜まっていた。

「もう十分反省したんだろ?俺は反省した奴を叱る様な真似はしないよ」

「ぅぅ…あの、ごっごめんなさい…」

ペコリと頭を下げる成瀬。

西条はそんな成瀬の頭に手を置き、優しく撫でながら尋ねた。

「でもどうしたんだ?突然裏口から入ってきて…」

「ぁう…その…西条さんを探していて…ドアの隙間から西条の姿を見つけれたから…それが裏口とは知らなくて…つい思いっきり開けちゃって…」

バツが悪そうにあらすじを話す成瀬。

「俺を探していた…って、何か用事でもあったか?」

「あ…はいっぁあのっ!!い…一緒に…第七祭を見てまわりたいと思って…」

「お、俺と…か?」

「…はい！」

成瀬からの誘いを嬉しく思う西条だったが、ふと思った事を聞いてみる事にした。

「自分のクラスの友達とかは？成瀬さん可愛いんだし…その…男子達がほっとかないだろ？」

「ん～…私、つい最近になって退院したじゃないですか？」

「あぁ」

「で、退院してきた時にはクラスの出し物が決まっていて…そこに…私の名前はなかったんですよ…」

「名前がなかったって…どういう事？」

「えっと…ですね…出し物の係りの中に、私の名前がなかったってだけなんで、今日の私は一日自由の身なんです…まぁ他にも同じように、係りがなく、今日一日自由な人も結構いますけど…」

「へぇ…そっか…でも…俺なんかで良いのか？聞いてたら何か…それこそクラスの連中と一緒に行った方が…っ」

西条の言葉を遮る様に、成瀬は西条の目をジッと見つめる。

「…西条さん、私じゃ駄目ですか？」

ドキッ…！！

思わず「うっ」と声を洩らす西条。
そんな西条の顔は、自分でも抑えきれない程に真っ赤に火照っていた。

「西条さん…」

上目づかいで同じように顔を真っ赤に火照らす成瀬は、西条からして言葉に言い表せない位に可愛かった。

「…俺で良かったら…是非…」

緊張する中、ようやく口に出せた言葉がそれだった。
成瀬はその言葉を聞くと笑顔になり、西条の手をギュッと握って

「よ…良かった～」

と、安堵の息を洩らした。

「まぁ一緒に見てまわるって言っても…まだ俺は店を離れる事はできないから…交代の時間まで待ってもらう事になるけど…いいかな？」

「そっか…西条さんは今、店長さんですもんね…あ、何だったら私もお手伝いしても良いですか！？」

「え、手伝いったって…良いのか成瀬さん？給料が出ないアルバイト…じゃなくって、ボランティアだぞ？」

「いいですよ、西条さんと一緒なら、きっと楽しいです！」

二人きりの教室で見つめ合う二人…

「あ、ありがとう…じゃあ、よろしく頼むよ」

「はい！こちらこそ！」

互いに握手を交わし、互いに笑いかける二人。

そんな時、教室のドアがバァン！！と、何かにぶつかった様な音がした。

ビクッと肩を上げる二人は、恐る恐るそのドアを開けると…そこには

「……オマエ等…何やってんの？」

「ハハハハハ…」

そこには店に残っていたハズのクラスメイト等が転がっていた。

どうやら二人の様子をずっと覗いていたらしい…

（え？もしかすると…見られてた？ずっと？見られてた？見られてたよな？えぇ見られてたに違いない…うっわぁぁぁあ！！コイツ等…ウッゼェェエ…！！）

そう思うと滅茶苦茶腹が立ってきた西条は、床に転がるクラスメイト等に向けて思いっきり怒鳴った。

「っテメェ等さっさと持ち場に戻れや！！」

「葉月さん、今度はこっちに行ってみようよ！」

「あ…うん、今いくー！」

シフトを終えた結城と葉月の二人は第七祭を一緒に見てまわっていた。

今、二人は校舎の一階…一年生の廊下を歩いている。

葉月は結城と一緒に歩きながらふと、とある教室が気になった。

（ん…あの教室…？）

その教室には小さな子ども達が集まり、それぞれ席に座って何かをしていた。

更に、その教室から聞こえてきた言葉が葉月を刺激する。

「ドロー！」

（ドローですって！？）

「ダイレクトアタック！！」

（ダイレクトって…これ、え？）

まさかとは思い、手にしたパンフレットを確認してみる。

（あの教室は…『１－Ｂ』ね…１－Ｂは…『子ども遊戯室』…）

「お～い、葉月さん！」

「あ、うん！ごめん！今いくー！」

結城に呼ばれ、その場を後にする葉月。

中を覗いて見たかったのだが、葉月はそんな素振りを見せずに結城の所へと向かった。

「え～っと…紹介します、俺達の喫茶店を手伝ってくれる事になった成瀬花穂さんだ」

「成瀬花穂です、先ほどは皆さんに御迷惑をかけてしまいましたが、精一杯頑張ります！よろしくお願いします！」

ペコリと丁寧に頭を下げる成瀬。

喫茶店の中では成瀬を囲むように生徒等が集まり、それぞれに「よろしく」「こちらこそ」と挨拶を交わしていた。

「さて、挨拶も済んだらさっさと仕事に戻る戻る！」

パンパンッ！と両手を叩きながら皆を促す西条は、成瀬にやってもらう仕事内容を説明した。

「とりあえず成瀬さんはウエイターをやってもらおうかな？お客さんから注文をとって、料理を運ぶ仕事だ、いいかな？」

「はい！頑張ります店長！」

「うん、元気があってよろしい…お、早速お客さんが来たぞ？成瀬さん、出番だ」

「はい！いらっしゃいませー！」

成瀬はトテトテ～と入ってきた若い男性のお客さんの所へと向かい

「お一人様ですか～？はい！じゃあこちらにドゾ～！」

笑顔でお客さんを席に案内する。

（へぇ…よく出来てるじゃないか、これなら問題ないな）

少し心配していた西条だったがそれも杞憂に終わりそうだ。

そんな感じで成瀬の様子を見ていると

「じゃあ御注文がお決まりになりましたら…え、決まった？はい、何でしょう？……え…私…ですか？」

（ぶっ！！？）

思わず吹いてしまいそうになった。

（い…今時そんな事を言う奴、初めて見た…）

「う～ん、でも私は商品じゃないので…申し訳ございませんが…え？携帯番号ですか？それはちょっと…」

予想外のお客さんからの質問に戸惑う成瀬は、チラチラと西条を見てきた。

（おいおい…あの客、ウチはそれ系の店じゃねぇんだぞ…）

「ったく…」

西条は成瀬が対応している客の所へと向かった。

（文化祭だからって…ハメを外しすぎるなっつぅの…）

西条は成瀬の所へと向かい「失礼します」と言って間に入った。

「西条さん！」

「っ！？」

（西条…ちゃん…へぇ、なる程な…）

「お客様、それ以上の行為は当店への営業妨害と見なして、然るべき場所へとお連れする事になりますが…？」

そう言い、成瀬を困らせていた客を睨みつける西条。

「ああ悪かったよ、俺も度が過ぎたな…ごめんごめん」

客の男はそう言うと席を立ち、店から出ていった。

「すいません、西条さん…」

「別に成瀬さんが謝る事じゃないよ」

「西条さん…あの、さっきお客さんに言ってた…然るべき場所って…？」

「あぁ、口からでた出任せってやつ。実際にどうしようとか無いよ。」

「そ、そう…ですか…私、警察とか呼ぶのかと思いました。」

「ハハ…穏便に済ませるに越した事はないさ」

店内で西条と成瀬が話している間、先程店を出た男は階段の壁にもたれかかり、ポケットの中から携帯電話を取り出した。

「…おっ、白石さんか?…あぁ、やっぱ西条ちゃんが言ってた通りだったよ。……大丈夫だって、変な騒ぎなんか起こしてないって!で、白石さんはいつこっちに…あぁもう着いたのか、じゃあ校門の所で待っててくれよ、俺もそっちに向かうからさ…」

男は携帯電話を仕舞うと、揚々としながら階段を降りていった。

東区第七高等学校の校門では、大きな体格の男が一人で立っていた。
彼は携帯電話をポケットの中にしまい込み、ぐるっと辺りを見渡してみる。

人、人、人

どこを向いても大勢の人が行き交う校門で、彼は少しうつ伏せだ。

（……ぅっ、人の波に酔ったのは初めてだ…き、気持ち悪い…）

今度は空を見上げ大きく深呼吸、これをするだけでも少しは気が楽になる。

ような気がする。

（しかし何だこの人混みは…たかだか一、学校の文化祭でこうも人が混み合うとは思えん…）

そう思うと確かに不思議だ。
少し動こうとするだけでも行き交う人にぶつかってしまいそうになってしまうこの状態は少し異常である。

（あいつ…俺の所まで来ると言っていたが…大丈夫なのか？）

ふぅと溜め息をつくと「お～い！」と、彼の良く知る人物の声が聞こえてきた。

「ん…あ、来た来た…」

「ふぅ、白石さんお待たせ！」

白石と呼ばれた大きな体格の男は腕を組んで

「全く…来るのが遅いぞ結締！」

「だって凄い人混みだったんだもん、仕方ないじゃん」

結締はそう言うとポケットの中から携帯電話を取り出して白石に見せる。

「それよりさ、やっぱ西条ちゃんが言っていた通りだったよ、ほらこいつ」

結締が見せた画面には先程、店を出た時にこっそりと撮影しておいた西条拓夜が写っていた。

「ふぅん…こいつか」

白石は結締から携帯電話を受け取ると、カチカチと操作し始めた。

「あ、ちょっ！？白石さん！！」

「ん、誰だこの子？結構可愛いじゃん」

「か、勝手に観るなよ…あぁ、この子な」

白石から携帯をぶんどった結締は携帯を操作しながら答えた。

「”こっちの西条ちゃん”を撮るついでに撮ったんだよ、いゃぁ…名前とか携帯番号とか聞こうとしたんだけどさ、”こっちの西条ちゃん”に邪魔されちゃって…」

「ふぅん、ま…”こっちの西条”が邪魔しなくても聞き出せそうにないと思うぞ？お前ナンパとかした事全然ないだろ？」

「そんな事はない！”こっちの西条ちゃん”が邪魔しなけりゃ、きっと今頃俺はハーレムな人生を！！」

「…どう話が飛躍してハーレムなんかになるんだ？すまんな、色々とツッコミ所ありすぎて俺は理解してやれそうにない…」

白石はやや俯きながら携帯電話を操作する結締に言葉を続けた。

「まぁお前の言うハーレムはこの際どうでもいいとして、これからどうする？」

「白石さん、俺の夢であるハーレムをどうでもいいと言ったな？そんな事を言っていられるのも今の内だ！この俺の真の力を見て、おののくがいい！！」

「ハイハイ、で…西条から連絡はあったのか？まだ俺の所にはきてないんだが…」

白石からの質問に、それまでおちゃらけた雰囲気だった結締の様子が変わる。

「いや、俺の所にもきていない…しっかし白石さん、これをどう思うよ？」

「どう…とは？」

「今日この人混み具合だよ」

「あぁ…それは俺も気にはなっていた…何かあるのか？」

「あぁ、それがな…何でもここの学園祭は、生徒達によるバンドがあるらしいんだがな…さっき廊下で壁にこんなものが貼ってあったから一枚頂戴してきた」

結締はどこからか一枚の紙を取り出して、それを白石に渡した。

「ん…お、『大塚愛』が来るだってぇぇえ！！！？？？」

「何でもそのバンドの後に『大塚愛』が来て、歌ってくれるらしい、そりゃ物凄い人数になるわな」

「場所は…体育館か…結締！！今から体育館に急ぐぞ！！」

「え…早くない？歌が始まるのは夕方の５時からだぜ？まだ１時だぞ？」

「早く行かないと、良い席が取れないだろぅが！！」

「し、白石さん…今行っても体育館は演劇部が劇をやってるぞ？」

パンフレットを見ながらスケジュールを確認していく結締。

「演劇部…くっ…俺は演劇なんぞに何の興味もない！！」

「何でも今回の劇は『宝塚』と共演するらしい」

「よし、体育館に行くぞ結締！！」

「…白石さん、さっきさ、今さっきさ…演劇なんぞに何の興味もないって言ってなかったか？」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

しばしの沈黙が流れる中、その沈黙を断ち切るかの様に、白石が唐突に叫んだ。

「知らん！！」

「うぉっ、言い切りやがった！？ちょっと画面を上にスクロールさせるだけなのに、それを面倒くさがって『知らん』の一言で済ませるなんて…」

「ハハッ、俺は過去は振り返らない質なんでな！」

「そんな爽やかに言っても嘘だってバレバレだからな」

「ええぃ、とにかく俺は体育館に向かう！こんなビッグイベント、逃してなるものかっ！」

そう言うと白石はけたたましい雄叫びと共に走っていった。
その場にポツンと残った結締は白石が走り去った方を見ながら

「白石さん……体育館はそっちじゃなくてあっちなのに…」

（このままの方が面白いから黙ってよっと）

結締は白石を見送ると、携帯電話を取り出した。

「さて、白石さんが戻ってくるまでに西条ちゃんに電話いれときますか」

Ｔｒｕｒｕ…

「おっ、西条ちゃん？うん、今どこらへんに居る…あぁもうこっちに向かってるんだ……そうそう、西条ちゃんが言ってた”こっちの西条ちゃん”見てきたよ、うん…あいつが西条ちゃんが言ってた『ＤＥＲＯ』使いなんだよな？……へぇ、そんな強いんだ…まぁ話は西条ちゃんがこっちに来てからだな、あ…こっちは凄い人混みだぞ……あぁ、白石さんは演劇を見にどっか行った、うん、今俺一人……もう直ぐ着くんだ…おぅ、え…マナちゃんも一緒に来てるの！？っ西条ちゃん！！早く連れてきてよ！！うん、じゃあ着いたら

校門の所で待っててよ!!俺はそれまでに白石さんを捕まえておくから…うん、じゃあ…」

結締は携帯電話を閉じて辺りをぐるっと見渡した。

どこを見ても人、人、人

「白石さん…体育館とは逆方向に走っていったもんな…今どこにいるんだよ?」

結締は大きな溜め息をつくと後ろから「ここだ」と声がした。

「横腹つ~ん!」

「ギャァァアッ!?しっ白石…」

急に横腹をつつかれた結締はその場に崩れ落ちる。

そんな結締にはお構いなしに、白石は腕を組んで大きく仰け反りながら

「ふん、これは罰だ!俺に嘘の体育館の場所を教えた事による粛清だ!」

「は?嘘の場所?…俺…体育館の場所については何も言ってないぞ?…演劇やライブは、体育館でやるとは言ったけど…場所は…」

「……ふん!」

「ギャァァアッ!?ま、またっ!?また横腹をっ!?」

再び横腹をつつかれた結締は体勢を崩す。

「ならサッサと体育館の場所を教えろ！宝塚だぞ宝塚！？」

「ま、まてって…もう直ぐ西条ちゃん達がこっちに来るんだ、西条ちゃん達が来るまで一緒に待っててやろうぜ？」

「達って？西条の他に誰が来てるんだ？」

「マナちゃん！！」

「…お前、マナちゃんの事になると途端に元気だな…分かりやすいっつぅか何というか…」

プシュー…

東区第七高等学校前にバスが停まる。

そのバスが開き、中から次々と乗客等が降りてくる。その中から一人の女の子がバスから元気良く飛び降りた。

「んしょっ…と、とおちゃぁく！」

女の子は降りると、目をキラキラと輝かせながら歓喜の声をあげる。

「うわぁぁ…凄い凄い！ねぇさいじょおさいじょお！お祭りだよお

祭り！」

すると呼ばれて出てきたかの様に、バスから一人の青年が降りてきて、その女の子の横に立った。

「ねぇさいじょお！ほらほら、屋台がいっぱいだよ！今の私なら、この屋台を全て制覇できる自信があるんだよ！」

「お前が自信あっても無理だからな、全て制覇しようにも俺のお財布の中身の自信がない」

西条と呼ばれた青年は携帯電話を取り出すと簡単に操作してそれを耳に当てる。

「今から結締に電話すっからマナ、少し待っててくれ」

「うん、わかった！」

マナと呼ばれた少女はこれまた元気に返事をした。

「お、結締？」

『西条ちゃんか、もう着いたのか？』

「あぁ、今…校門の前に居る」

『ＯＫ、じゃあ今から迎えに行くよ！マナちゃんを』

「ハイハイ、俺ももれなく付いてくるからな～、忘れるなよ～」

『え、そんなオマケはいらないよ？』

「おぃおぃ、所で白石は見つかったか？」

『あぁ、今一緒に居るよ…じゃあそこで待っててくれ』

「了解」

西条が電話を終えると、隣にいたマナが話しかけてきた。

「ねぇさいじょおさいじょお」

「ん？」

「結締くんと白石くんも来てるんだよね？」

「そうだ、だからここで二人が来るのを待つ事になりました」

「私、あのたこ焼きが食べたい！」

「……」

マイペースなマナの態度に軽く溜め息をつく西条。

「あのな、ここで大人しく二人が来るのを待つの！」

「だから、二人が来るまでにあのたこ焼きを食べるの！ってか食べたいの！」

「無理、絶対に無理だから！お前あの屋台に建てられている旗を見て見ろ？」

「旗…？あ、『超・巨・大たこ焼き』……」

「どれくらいの大きさか知らないけど値段も１０００円と高めだし、それにあの手の料理ってのは…あれ？マナ…？」

気が付くとさっきまで横にいた筈のマナが居なくなっていた。

西条は辺りを見渡すと、彼女の姿は直ぐに見つける事ができた。

マナはそのたこ焼き屋台の前に立ち…

「この『超・巨・大たこ焼き』をいっこ！！」

と、満面の笑みで注文していた。

「あざぁーっす」と店員は手際良くたこ焼きをパックに詰めていく。

「あんの野郎…人の話を…おい、マナ！！」

西条はマナの所に駆け寄ると、マナは何食わぬ顔で西条に言った。

「さいじょお、一緒にたべよ？」

「たべよって…お前なぁ…」

溜め息をつく西条に、屋台の店員はたこ焼きの入った袋と右手を差し出して「１０００円でーっす」と言ってきた。
クイックイッと動かす右手からは「早よ金だせや金」と言っている様にも見える。
西条の財布から早速、紙のお金一枚が消えていった。

「ほらほら、さいじょおさいじょお！見て見て、おっきぃたこ焼きだよ！」

パックの中には握り拳位の大きなたこ焼きが六個入っていた。
確かに大きい。
普通のたこ焼きの大きさは、せいぜいゴルフボール位のサイズだろう。

確かに大きい。

確かに大きいのだが、西条の口から出た言葉は「高い…」だった。

「それじゃ早速、いっただっきまぁす！」

マナはその場で封を開けて、たこ焼き一つを食べてみた。

「…俺も一個食べてみるか…はむっ…」

ムシャムシャ……

「あれ…おかしいな…何かしょっぱいや…」

「泣きながら食べてるからだよさいじょお、うん、あんま美味しくないね」

ガーーン！！

と、目の前でたこ焼き屋台の店員がショックを受けたのがわかる。
西条はしばらくの間、涙が止まらなかった。

無駄にデカく、無駄に高い値段のたこ焼きがあと四個も残っているのだ。

「なぁんで買ったんだろ？ねぇ、涙が止まらないよ…くっ…」

「無駄な買い物だったね…さいじょお、次いこ」

「無駄って分かってるなら最初から買うって言うなー！！」

とりあえずこのたこ焼きの処分をどうするか…
捨てるのは駄目、食べ物を粗末に扱ってはいけません。
店員にこの余ったたこ焼きを返すか？
それはいけない。只でさえマナからの不味いという言葉にショックを受けているのに、さらにそこに不味いと言われたたこ焼きを突き

返す事は死者に鞭打つ事になってしまう。
それらの考えは西条の道徳心が抑え込んだ。
（でも…これどうするよ）
悩みに悩んでいる最中、西条とマナを呼ぶ声がした。
「お～い！西条ちゃぁん、マナちゃぁん！」
見るとそこには結締と白石の二人がこちらに向かってきた。
悩みに悩んで行き着いた先の答えを、西条は見いだした。
「世の中…何かと犠牲はつきものなのだよ…」
「へ？さいじょお、何か言った？」
「いや、別に…さてマナ、あいつ等の所に行くぞ」
「うん！」
手に超・巨・大たこ焼きと言う名の『ダーク・ダイブ・ボンバー』を持って、二人は歩いた。

「お待たせ」

結締と白石の二人に西条は声をかけた。

「おぅ」と返事をする白石に対し、結締は西条の隣に立っていたマナの手を取り笑顔で出迎えた。

「久しぶりマナちゃん！元気だった？」

「うん、結締くんは相変わらずだね！」

「結締、待たせて悪かったな」

西条が結締に声をかける。

「あれ？西条ちゃんいたの？」

「…白石、こいつ一発やっちゃって良い？」

「あぁ、全力でいけ」

「わぁっと、冗談だよ冗談！！」

とりあえず四人揃った事で、西条は手にした袋を結締に渡した。

「結締に白石、はい…これ」

受け取った結締は「何これ？」と袋の中を覗いてみる。

白石も同じ様に袋の中を覗いてみると、中には『超・巨・大たこ焼き』が入っていた。

「たこ焼きじゃん！！」
「食ってもいいのか？」

尋ねてくる二人に西条は笑顔で答えてあげた。

「あぁ、マナからの差し入れだよ…俺はもう食べたから、お前等で二個ずつ食べてくれ」

「そうなのか、マナちゃん有難う！！」

「う…うぅん、いぃのいぃの気にしないで！？」

どこかぎこちない返事をするマナに気付く様子もなく、結締は早速『超・巨・大たこ焼き』にかぶりついた。

「それじゃ…いただきま～す！！」

「じゃ、俺も」

二人は同時に食べると、途中結締だけピタリと動きを止める。
その結締の様子に西条は思った。

（ダーク・ダイブ・ボンバーの効果発動…ってか）

結締は口の中いっぱいにボンバーを詰め込みながら「お…おいひぃれふ…ま…まぶくあぃれふ…」と、とても苦しそうにしながらも懸命に食べ続けた。

「うん、美味いな…なかなかだ」

「なっ!?」「えっ!?」「ふぁっ!?」

ただ一人、黙々と食べ続けた白石はボンバーを二つ、あっという間に完食させた。

「俺はこれ位のボリュームがあった方が好きだな、ん…皆、どうした?」

(嘘だろ…あの味がないたこ焼きを…)

(白石くんって…)

西条とマナはそれぞれに驚いていた。

「ん…どうした結締?苦しそうだな…そんな美味しいからって一気に口の中に詰め込むからだ…最後の一個、俺が貰っても良いか?」

「ふごっ!?」

助け舟がキター!!と思った結締だったが、西条が「結締、マナからの差し入れなんだからさ、食べてあげるよな?」の一言で舟は見事に沈没した。

「ありがとうございましたー！」
「いらっしゃいませ！」
「お待たせしましたー！」
「オーダー入りまーす！」

西条拓夜が営む喫茶店は再び物凄い人数の客でごった返していた。
成瀬花穂が手伝ってくれる様になってから一気に客足が増えだしたのだ。

「コーヒー二つ出ま～す！」

西条はコーヒーを運ぶ成瀬の姿を見る。
西条は忙しくなっても愚痴の一つも零さない成瀬が凄いと思う反面、不思議にも思った。

（何で…だろうな、成瀬さん…何でここまでして俺達に付き合ってくれるんだろ？そろそろ俺も交代しなきゃいけないから、成瀬さんにも言っておかないとな…）

西条がそんな事を考えていると、クラスメートの一人が声を掛けてきた。

「西条～、なぁに見とれてるんだよ？」

「なっ！？べ、別に見とれてなんか…」

「へへっ、隠すなって…そんな赤面した顔で言われても説得力はねぇよ」

「えっ！？」

「まぁお前にもようやく春が訪れた訳だ、もう直ぐ交代の時間なんだろ？あの成瀬って子と一緒にあがれよ」

「一緒に…ねぇ…本来ならとっくに帰してあげなくちゃいけない筈なのにな…」

「まぁそうカタいこと言うなって…あ、いらっしゃいませ！」

クラスメートは新しく入ってきた客の接待に向かっていった。

そして西条は再び成瀬花穂の姿を見る。

（……見とれてる…か…）

まだこの時、西条は気付く事はなかった。

自分の奥底にある、自分の気持ちを。

「ご…ご馳走様でした…っ」

震えながらも『超・巨・大たこ焼き』を完食した結締智恭にマナは「すごーい！」と褒めていた。

「お…漢、結締智恭は…女性からの贈り物は大切にする事にしてんだ…」

「おぃおぃ…」

結締智恭の言ったことに「それはないだろ？」とは敢えて言わないでおいた西条亨は、パンフレットを見てソワソワしている白石にふと気が付いた。

「白石、何見てるんだ？」

「これか？この学園祭のパンフレットなんだが…俺は今すぐにでも体育館に行って『宝塚』が観たい！！」

「は？宝塚って…あの劇団で有名な？」

「そう！その劇団で世界的にも有名な宝塚だっ！そしてその後に行われるバンドのラストには『大塚愛』が来る！」

「な、何だってぇーーー！！？」

「俺は…大塚愛のコンサートで歌われる『さくらんぼ』で、もう一回！！と声を大にして叫びたい！！」

「俺も叫びたい！！」

「さすが西条！！分かってるじゃないか！！なら今から一緒に体育館に向かうぞ！！まずは宝塚、そして夕方からは大塚愛だ！！」

気合い十分な白石だが、西条からの返事は

「え、俺は宝塚にはあんま興味ないし…大塚愛まで余所で時間潰そうぜ？」

と、淡白に答えた。

「な、何ィィ！？俺一人で行けと言うのか！？」

「いや、そうとは言ってねぇから…話はちゃんと聞こうぜ…それより結締、西条拓夜くんはどうだった？」

「あぁ、もう一人の西条ちゃんね…よく分からん」

「は？よく分からんって…お前会ってきたんじゃなかったのか？」

「いやぁ～その何というか…かくかくしかじかな訳でな、そんな事があったんだよ！そりゃそんだけで分かる訳がない！！」

「いやいやいや、かくかくしかじかって何？何かしたのお前？」

「会ってきたって言っても、軽く言葉を交わした程度だし、主に俺が言われた位だし、俺は別に話すことなかったし」

「あぁはいはい、何となく分かったからいいよ…そうだよな、話すことったって特にないよな…」

「そんな事よりこれからどうする？」

白石がこれからの行き先を尋ねると、マナがハイハーイ！と手をあげた。

「私、ここの屋台を全部食べたい！！」

「だからお前は金を持ってないだろ！？」

「えっ！？」

西条のツッコミにキョトンとなるマナ。

「いつもみたいに、さいじょおがお金を出してくれるんじゃないの？」

「あれ？俺最初に言ったよな…そこまで金は持ってきてないって」

西条の言葉を聞き、がーん!?とショックを受けたマナは

「そんなぁ!?楽しみにしてたのに…」

しょぼん…と落ち込んだ。
それに味方する様に結締や白石は西条を責め立てた。

「この西条亭の甲斐性なし!!」
「なってねぇな、女性への気配りって奴をお前は!!」

「は!?何で俺そんな事を言われなくちゃいけないの!?普通に考えてみろよ、全部の屋台の料理を食べるなんて無理だろ!?それに祭りの値段って結構馬鹿にならないんだぞ!?今月だって電子レンジが壊れるわポットが壊れるわで西条宅の家計は火の車なんです!!今日だって貯金を下ろして来てるんです!!もう切羽詰まってるの俺!!だから甲斐性なしとか言わないでー!!」

余りの悲痛な西条の叫びにうわぁ…と同情してしまう結締と白石。

「大丈夫だよさいじょお、また困った事があったら私が協力してあげるから!」

屈託のない笑顔でマナは西条に微笑む。

(電子レンジも…ポットも…お前が壊したんだろうがっ!!って言ってもなぁ…ありゃこいつも悪気があった訳じゃねぇし…くっ…でも何か…何かこいつには言われたくねぇ!!)

「あ、そういえばさいじょお…昨日さいじょおがお出掛けしてる間

に、ポットのお湯がまた出なくなっちゃったんだよ」

「……は？」

「中にはちゃんとお湯が入ってたんだけどね？私ちゃんと確認したんだよ、でもポットの蓋の画面に何か訳の分からない文字がぶわぁぁあって出てるし、ボタン何を触っても動かないし…」

「…お前…ポットにお湯を入れただけだよな？」

「うん、初めは線までちゃんと入れたんだけど、もちょっと水が入りそうだったから、入れ物いっぱいに入れといたよ！」

マナの話を聞き、西条の中で何かがガラガラ…と音を立てて崩れて行く。

「それだぁぁあああ！！水は線までしか入れちゃ駄目なの！！普通それ以上入れるかよ！？」

「えっ！？だっていっぱい入れた方がお湯たくさん出来るでしょ？」

「ここでそんな天然キョトンはいりませぇん！！ちゃんと説明書きを守れぇえーー！！」

「ひゃいっ！？」

西条宅の余りの悲惨な日常に、同情を通り越して言葉も出なくなる結締と白石であった。

「拓夜ァ、交代の時間だぞ～」

「おぅ、分かった…じゃあ後の事は頼んだ」

西条拓夜はクラスメートに後の仕事を任せると、店内で皿やカップ

を磨いている成瀬花穂に声をかけた。

「成瀬さん、俺達もそろそろあがろう」

「あ、西条さん！もう仕事はおしまいですか？」

「あぁ、だからその…一緒に第七祭をまわろう」

「はい！行きましょう、西条さん！！」

ニコッと笑いかける成瀬の表情に見とれていた西条は、クラスメートからの「見せつけてんじゃねぇよ」との野次を受けてハッと我に返る。

「い、行こう！」

慌てて成瀬の手を取り教室から出ていく西条。

「さ、西条さん！？」

西条に引っ張られる形で、成瀬も教室から出ていった。

二人が出ていった後…

教室に残っていたクラスメート等は皆、同じ事を思った。

（西条にも遂に彼女ができたか…）

西条亨、マナ、結締智恭、白石直也の四人は校舎の一階の廊下を歩いていた。
現在、体育館で行われている演劇に共演する宝塚や、夕方に行われるバンドのラストにゲストとして来る大塚愛の影響が強いせいか、第七祭に訪れる客の数がとても多かった。

四人が喋りながら歩いていると、どこからか「僕のターン、ドロー！」という声が聞こえてきた。
それも複数の声だ。

「え…ドローって…」

思わず歩を止める西条は辺りを見渡した。
同じように辺りを見渡す結締にもそれは聞こえてきたようで

「まさかどこかで…デュエルが…？」

「やってるみたいだな…あそこの教室から聞こえたが？」

白石が少し離れた教室を指さすと、マナは小走りでその教室まで向かい、中を覗いた。

「わぁぁあ…さいじょおさいじょお、みてみて！！」

「何だ？」

三人はマナの所へと駆け寄り、教室の中を覗いた。
すると中では沢山の向かい合わせのテーブルに、デュエルを楽しんでいる子ども達の姿があった。

「ここは…なる程、『子ども遊技室』か…」

教室名をパンフレットを見ていた白石が言う。

「へぇ、皆…なかなか楽しそうにやっているじゃん！！」

「あぁ、見てる俺達も…ついデュエルしたくなってしまうな」

「そうだね、あ…私たちも中に入ろうよ！？」

マナからの提案に一同賛成し、教室に入った。

西条拓夜と成瀬花穂の二人は三階から一階まで一気に駆け降りる。

二人は一階の廊下の壁にもたれ掛かりながら軽く息を切らせていた。

「西条さんっ早いですっ…！？」

「ご、ごめんっ…あ…」

その時西条は、まだ成瀬の手を引いたままだった事に気が付いて、慌ててその手を放した。

「わ、悪いな…手…引っ張っちゃって」

「いえ、でも…これからどこに向かいましょう?」

「ん〜そうだな…夕方5時から体育館でバンドがあるからそれを見たいな」

「でも…まだ5時まで時間がありますよ?」

成瀬は自分の腕時計を確認して「今は丁度1時です」と呟いた。

「成瀬さんはどこに行きたい?」

今度は西条から質問をした。

成瀬は顎に指を当てながら「そぅですね〜」と少し考えた後、

「ご飯もまだですし…何か食べませんか?」

「そうだな、じゃあ外の屋台に向かおうか?今日は店を手伝ってくれたお礼に何か奢らせてもらうよ」

「ふふっ、ありがとうございます!」

そう微笑むと、成瀬は西条の放した手を繋ぎ直した。

「こんどは引っ張らないで…優しくエスコートして下さいね、西条さん」

成瀬の微笑む顔を見るだけで熱い何かが込み上げてくる。

（何だ…本当に…めっちゃくちゃ胸がドキドキする…！？）

理解できない感情を胸に抱きながら、西条と成瀬は外へと向かっていった。

遊技室へと入った四人は空いている席にそれぞれ座った。

丁度四人それぞれが向き合える形で座り、白石は「ようやく座れたか…」と軽く溜め息をついた。

「まぁ座ったのは良いけど…何する？」

西条からの質問に結締が答えた。

「そんなのデュエルに決まってるじゃん」

「え…今日俺はデッキを持ってきてないぞ」

西条のその発言を聞き、結締は「はぁ～？」と驚きの声をあげる。

「マジかよ西条ちゃん…ありえねぇ…」

「いや、ありえねぇ事ねぇよ！？普通文化祭にカード持って来ないだろ！？」

「俺達は何だ？…決闘者と書いてデュエリストだぞ！？」

「いくら決闘者でも普段からデッキぶら下げる様な習慣はないぞ…」

「かぁ～～～情けない、情けないぜ西条ちゃん！？」

「えぇ～…なんでそこまで言われなくちゃいけないの？そういえば白石は持って来たのか？」

西条が白石に話を振ると、白石は上着のポケットからススス…チラッとデッキを見せた。

「…フッ、当然だ…」

「嘘っ！？お前もかっ！？お前もなのかっ！？うっわぁぁあ～、普

通に文化祭を楽しむつもりで来たのに、何かこの場で俺だけ蚊帳の外なんですけどー！！」

白石はデッキを取り出しながらも西条に同情した。

（まぁ俺も持ってくるつもりは無かったんだがな…事前に結締から「デュエルしたいからデッキを持ってきてよ」って言われなかったら持ってくる事は無かったしな…ってか結締…）

「結締…お前、西条にはデッキを持ってくる様に言わなかったのか？」

白石が結締に尋ねると、結締はさも当然の様に

「白石さんが言ってくれてると思ってて全く気にしてなかったよ」

「…えっ！？何ソレ…二人は事前に打ち合わせていたのか…そっかそっか…」

西条はそう言うと席を立ち上がって廊下の方に進んでいく。

「あ、さいじょお！？」

「西条ちゃん！？」「ふぅ…」

「ちょっと気分転換しにぶらついてくるわ、俺が今ここに居ても意味ねぇし…」

「あ、待ってよさいじょお！？私も行くよ～！！」

マナが西条の後を追う様に教室から出て行った。
残された結締と白石はそれぞれに互いに気まずくなり、少し遅れてから教室を出て行った。

「待ってよ、さいじょお！」

教室を出た西条は、同じく教室から出て来たマナに呼び止められた。

「どうしたマナ？」

「一人でドコに行こうとしてるの？私も一緒に行くよ！」

「マナ…そっか、じゃあ屋台でもまわってくるか？」

「うん！」

そうして西条とマナの二人は外に並ぶ屋台の列へと向かった。

「いらっしゃーい！」
「焼きそばいかがっすかー？」
「味にこだわりのある黒いたい焼きあるよー？」

外に着くとそこには大勢の人が溢れていた。
グランドを囲む様にして並ぶ屋台それぞれが、料理の宣伝をしており、その風景は賑やかの一言だ。

「いっぱいあるね！さいじょおさいじょお、やっぱり私、今なら全部食べれる自信があるんだよ！！」

目をキラキラと輝かせながらマナは建ち並ぶ屋台を眺める。

「だ～か～ら、そんなに金は持ってきてないの！とりあえずお前が一番たべたいのはどれ？」

西条の問いかけにマナは少し考えてから

「あっ！？あの屋台がいい！！」

言うや否やマナはダッと駆け出してベビーカステラの屋台の前で止まった。

「すいませ～ん、カステラ一つ下さ～い！！」

「ありがとうございま～す」と、屋台の生徒が袋にカステラを詰めていく。
マナはその動作を見て楽しんでいた。

「はい、一個５００円になりまーす」

「さいじょおさいじょお、５００円だって５００円！」

「えっ！？な、何？」

「ふぇ？」

マナは自分の知らぬ声が返事として返ってきた為、驚き、そちらを振り返る。
そこには一人の男子生徒が「なに？」という困惑した表情で立っていた。

「あれ？さいじょおじゃない…」

「いや、俺は西条だけど…アンタ誰？」

男子生徒が尋ねるとマナは、彼が自分の言う西条とは違う西条である事に気が付き

「ぁと、その…ごめんね、人違いだった！」

「は、はぁ…」

（もぅ～さいじょおったら、ドコに行ったのよ～！！）
と、マナが思ったその時、「悪い！？待たせたな」とマナの良く知る声が後ろから聞こえてきた。

「さいじょお！遅いよ！５００円だよ５００円！！」

「分かったからちょい待てっ…あ…」

マナに急かされながら西条亨は財布からお金を取りだそうとした時、
マナの横に立つ男子生徒を見てその動きを止めた。

「……拓夜くん？」

「えっ…！？」

西条亭は再度確認するかの様に、目の前の男子生徒に質問する。

「君は…西条拓夜くんだよね？」

「は…はい、そうですけど…アナタは一体…」

不信がる様子の拓夜を見て、西条亭は「やっぱ覚えてないか…」と呟く。

何のことだか分からない西条拓夜は更に困惑した表情になる。

（この人…俺の事知ってるっぽいけど…一体誰なんだ？）

拓夜が疑問に感じていると、隣に立っていたマナが拓夜の思考を遮るかのように西条亭に言った。

「そんな事より、さいじょお！５００円だよ！！５００円！！」

「おっと、そうだったな…はい、５００円玉」

西条亭は屋台の人に５００円を払うと、マナはベビーカステラの入った袋を大事そうに抱えながら

「えへへ、さいじょお！ありがとう！」

「いいって、さてと…拓夜くん、自己紹介が遅れたな…俺は西条亭、こいつはマナ」

「よろしくね、たくや！」

「は、はぁ…？」

「君に話しがあるんだ、少しだけ時間いいかな？」

「え？…その…いま俺も待たせてる人がいるんで、すいませんが…」

頭を下げる拓夜に、亨は「そっか…じゃあこれを」と、財布の中から二枚のカードを取り出し、拓夜に差し出した。

「え…これ…？」

カードを受け取ると、それは名刺だった。

「ＯＣＧ研究会…西条亨…と、こっちは…同じ研究会に…マナ…さん？」

（すげ…二枚とも裏が遊〇王カードの柄になった名刺だ…）

「拓夜くん、明日は予定でもあるかい？」

急に聞かれた為、拓夜は思わず「いえ…特には…」と答えてしまった。

「そうか、なら明日の朝１０時に俺の名刺に載っている番号に連絡を入れてくれないか？」

「この番号に…ですか？」

「そう、じゃあこれで！連絡待ってるからな！」
「たくや！またね！」
西条亨とマナの二人は言うだけ言うと、拓夜の前から去っていった。
その場に呆然と佇む西条拓夜はしばらくの間、受け取った名刺を眺めていた。

「成瀬さん、お待たせ！」
西条拓夜はグランド中央に建てられた矢倉で待つ成瀬の所へと向かった。
「時間が掛かって…悪い」
「いえいえ、買いに行って下さって…こちらこそ、ありがとうですよ！？」
西条拓夜は成瀬花穂の横に並ぶように座ると、手にしていた屋台の品を渡した。
「はい、これだけが成瀬さんの分ね」
「アハッ、この黒いたい焼き！ちっちゃくてとても可愛いです！」
「何でも…イカ墨を使ってその色になったらしいんだが…」

「こっちはベビーカステラですね、私これ好きです！」

「遠慮せず食べてよ、じゃあ…いただきます！」

「はい、いただきます！」

二人は仲良く料理を食べた。

途中お互いの事を話したり、何気ない事で笑ったり、と…西条拓夜はこの時間がとても充実した時間であると感じた。

またそれは、同じ様に話し、笑い、喜ぶ感情を露わにする成瀬もそうだった。

「あ、そういえば…成瀬さんはこの…『ＯＣＧ研究会』って知ってるか？」

「『ＯＣＧ研究会』っ！？それって…まさかあの…！？」

拓夜の口から出た『ＯＣＧ研究会』という言葉に驚く成瀬。

拓夜は（あ、成瀬さんはこれがどんなのか知ってるっぽいな）と思い、先程出会った西条亨から貰った名刺を出した。

「何かさっきさ、『西条亨』って人からこんな名刺を貰って」

「み、見せて下さい！？」

成瀬は拓夜から二枚の名刺を受け取ると

「凄いです西条さん！！西条さんはこの『ＯＣＧ研究会』ってのが

どういったものかご存知ないんですか！？」

興奮する成瀬に驚きながら、拓夜は「あぁ」と返す。

「この研究会は、デュエリストにとって憧れの存在なんです！インターネットとかでサイトがあるので、パソコンがあると分かりやすいんですが…えっと…この研究会では、遊〇王カードのデッキレシピを紹介したり、色んなカードにまつわる伝承とか、それの繋がりなんかも紹介しています！更にこの研究会の人達の日記なんかも個性豊かに書かれてますし…それに今は、新しい感覚でデュエルをする事が出来る為に、日夜開発作業をしてるとか！とにかく、この研究会の人達はカードに対する情熱が凄いんです！！」

「な…何か…聞いてるだけでも凄いな…ＯＣＧ研究会…」

余りの成瀬の興奮っぷりに『ＯＣＧ研究会』の偉大さを何となく理解した西条拓夜は、成瀬から名刺を返してもらうと、先ほど西条亨から言われた事を言ってみた。

「そのＯＣＧ研究会の名刺に載っている『西条亨』さんからさ、明日その番号に連絡してほしいって言われたんだ」

「エェェェエーーーッ！！！？」

「ちょっ、そんな驚く事なの！？」

「当然です！西条さん、連絡する時に、私も一緒にいても良いですか！？」

「え…？別に良いけど…」

「やった！？ありがとうございます！！」

何か今日一番の喜びを見せる成瀬を見て、西条は首を傾げた。

（ＯＣＧ研究会……どんな所なの？）

「結城くん、私そろそろバンドの打ち合わせがあるから…行くね」

校庭で結城と一緒にベンチに座って話していた葉月は立ち上がるとそう告げた。

「もうそんな時間か、葉月さん！バンド見に行くから、頑張ってくれよ！！」

「ええ、今日は一日ありがと」

結城に見送られて葉月は校庭を後にし、体育館へと向かった。

体育館の場所は一度、校門へと出て校舎の前を進み、グランドの角に建っている。

葉月は校庭へと出てそのまま校庭の前の道を進む。

（…流石に大物歌手をゲストで呼んでいるだけあって、凄い人数ね…）

屋台が並ぶグランドを見ると、そこには人が沢山いて、今年の第七祭の規模のデカさを表していた。

そのグランドの中央に組み立てられた矢倉。第七祭の最後は、その矢倉を取り囲む様にしてフォークダンスをするのが、第七祭の習わしだ。

何でもこのフォークダンスを一緒に踊った男女二人は、永遠の恋人同士になれるとか。

（ありきたりなジンクスよね…でも…）

ありきたりなジンクス。

それでもそこに夢を見てしまうのが人の性（さが）。

（もしも…誘ったら…一緒に踊ってくれるかな？）

葉月は立ち止まり、矢倉を見つめながら一人の少年の事を想う。

（拓夜…今なにしてるかな？）

西条拓夜の事を考えれば考える程、葉月は自分の顔が熱くなっていくのが分かった。

そして、ふと…矢倉の所で見知った顔を見つけた。

（ん？…あれは…拓夜！？）

見間違えるハズなかった。

拓夜の姿は店で着ていた店長姿なのだ。

葉月は思わず、先程想っていた西条拓夜の所へと向かって歩き出す。

（今の内に…そう、今の内にフォークダンスを誘おう）

「ねぇー、たく……や…」

だがその瞬間、葉月は体が硬直した。

目が、脳が、指先が、足が、体中全てに電流が走った様な錯覚に陥った様にも感じられた。

葉月の目の前で、西条拓夜は葉月に背を向ける格好で何かを抱くような姿勢をとっていた。

そして…拓夜の体が少し動くと、そこから成瀬花穂の顔が見えた。

（……え……うそ……）

葉月の目の前で見つめ合う二人。

体中ガクガクと震えだすのが分かる。
葉月は懸命に後ろを振り返り、走った。

目の前の現実から逃れようと

俯き、歯を食いしばり、嗚咽を堪え、目から流れ落ちる涙を撒き散らし、

葉月はその場から逃げ出した。

「成瀬さん、大丈夫だったか？」

「す、すいません西条さん…立ち上がったら急にクラッときて…」

「ずっと座ってて急に立ったんだ…立ちくらみしたんだな」

「はい…でも、西条さんが居てくれたお陰で助かりました！ありがとうございます！」

「ど…どういたしまして」

矢倉の前で成瀬を支えながら西条は顔を横に向けた。
自分に向ける成瀬の笑顔に照れてしまった為、その照れ隠しのつもりだった。

「そ、そういえば…成瀬さん、新しいデッキはどうなった？前に一緒にカードを買いにいったよね？」

「はい、『ガーディアン・エアトス』ですね！完成しましたよ！！」

「そっか、俺も…デッキを変えてみるかな…と、その前に、どこか落ち着いて話せる場所に移動するか？」

「そうですね、あ…西条さんのクラスでどうです？喫茶店でお茶しながら！」

「いや駄目だ、絶対に駄目だ！クラスの連中に絶対にいじられる…！！」

「そ、そうですね…すいません」

「そぅだな…お、アソコのベンチにでも座ろうか？」

西条拓夜が指差した場所に、誰も座っていないベンチがあった。
成瀬はそのベンチを確認すると、西条拓夜の手を握ってきた。

「わかりました！西条さん、行きましょう」

「あぁ」

二人はごく自然な雰囲気で手を繋ぎながら歩いた。
その姿は周りから見れば、とても幸せそうな二人に見えた。

結締智恭と白石直也の二人は校庭に来ていた。
二人は辺りをキョロキョロと見渡しながら

「西条ちゃん、マナちゃん…二人ともどこに行ったんだ?」

と結締は少し不安げに白石に尋ねる。

「さぁな…携帯で呼び出しても出ないし…へ、返事もないから…西条の奴、相当怒ってるんだろ?」

白石からの言葉に結締は「うぅ…」と力ない声を発する。

「確かに西条ちゃんにだけ連絡をしなかった俺達が悪いんだけど…それでも電話には出てほしいぜ…」

「ま、西条の事だ…ちゃんと…許してくれるさ、それより結締…少し休憩しないか?」

「休憩って…白石さん、っ!?白石さん、顔が真っ青だぞ、一体どうしたんだ!?」

先を歩く結締が振り返ると、白石の真っ青な顔が目に入った。

「ひ…人に…人混みに酔った…」

かなり辛そうな表情をする白石に結締は辺りを見渡すと、少し行った場所に誰も座っていないベンチがあった。

「白石さん、あそこのベンチまで頑張って歩けないか!?あそこで休憩しよう!!」

「わ…分かった」

白石と並びながら歩く結締。

そして目的のベンチまでたどり着くと「あっ!?」という声が目の前から聞こえた。

「ん?」

結締がそちらを向くとそこには西条拓夜と、成瀬花穂が立っていた。

「お、こっちの西条ちゃんに…えと、名前しらねぇや…あの時の可愛い子じゃん」

結締の顔を見て成瀬は「あっ!?あの時の!?」と驚きの声をあげる。

「こっちの西条ちゃん達、ここのベンチに座るつもりだったのか?」

「そうですけど…」と西条拓夜が答えると、結締は

「だったら悪いが俺達に座らせてもらえないか?相方が調子悪いんだ」

そう言い、白石をベンチに座らせた。

既に座ってしまった人に「どいて下さい」と言えるハズもなく、西

条拓夜と成瀬花穂は「どうぞ…」と言うしかなかった。

「成瀬さん、仕方ないから別の場所に行こうか？」

西条拓夜はそう言うが、成瀬花穂は「ちょっと待って下さい」と拓夜に促す。

成瀬はベンチに座る結締と白石の前に立つと

「あの、つかぬ事をお伺いしますけど…そっちの人、さっき西条さんに”こっちの”と仰いましたよね？」

結締に対し、話しかける成瀬に、結締は

「ん…あぁ…そんな事言ったっけ？」と、はぐらかす様に惚けた仕草をみせる。

「いえ、確かに言いました。…あの、こちらの西条さんが先程『ＯＣＧ研究会』の西条亨さんと名乗る方にお会いしたんですが…もしかしてあなた方はその西条亨さんとお知り合いの方なんですか？」

成瀬からの質問に結締は少し驚いた表情を見せながら答えた。

「なんだ、もう西条ちゃんに会ったんだ…なら隠す必要はないな」

「やっぱり！」

「俺は結締智恭、んでこっちの体調不良なのが白石直也、俺達も西条ちゃんと同じ『ＯＣＧ研究会』のメンバーさ」

「よ…よろしく…」

話を聞いていた白石は俯きながら挨拶だけはした。

「うわぁぁ！！西条さん！私達、今日だけで研究会のメンバー全員に会う事ができましたよ！！」

はしゃぐ成瀬にたじろぎながら、西条拓夜は「分かったから成瀬さん、少し落ち着いて！？」と宥める。

「ところで俺達は自己紹介したけど…君達は？」

結締からの言葉にピタリと動きを止める西条拓夜と成瀬花穂の二人。

「すいません、えと…西条拓夜です」

「成瀬花穂です、『ＯＣＧ研究会』の大ファンです！」

「そっか、サイト見てくれてるんだ…白石さん！俺達初めてファンだと言ってくれる人に会えたな！？」

「あぁ…そうだな…む、結締…背中さすってくれ…」

「はいはい」

そんな様子の二人に西条拓夜は「あの…」と声をかけた。

「俺…西条亨さんに明日連絡してほしいって言われて、名刺をもらったんですけど…二人は何か聞いてないですか？」

「明日？…あぁ…もしかしたらあれかな？」

「…そうとしか考えられないな…」

「え？…な、何かあるんですか？」

尋ねてくる拓夜に、白石は顔をあげて答えた。

「実験だろ…俺達が新しく開発した…あのゲームの」

「だな」

「開発した…ゲーム…ですか？」

「多分な、まぁ詳しい事は今ここじゃ言えないけど」

結締達からの話を聞いて、西条拓夜は不思議に思い、質問してみた。

「あの、気になってる事があるんですけど…何で俺なんですか？」

「…？」

「西条亨さんは…俺の事を知っていて…声をかけてくれましたが…

でも、何で俺なんですか?ゲームの実験って事なら俺以外にも…」

拓夜が言うと、白石がゆっくりと体を起こしてそれに答えた。

「さぁな、詳しい事は俺や結締に聞くより、西条…いや、亨本人に聞くんだな…」

「…わかりました」

西条が渋々納得すると、入れ替わる様に今度は成瀬が話しだした。

「あの、明日のその実験に…私も参加してもいいですか!?」

「ん~どうするよ?白石さん」

「別に…構わんだろ?あれはいずれ公開する予定なんだ…」

白石の言葉を聞き、成瀬は両の目を爛々と輝かせながら「アハッ☆ありがとうございます!!」と喜んでいた。

「それにしても…」と結締が白石の方を向いて話し出す。

「白石さん…人混みに酔ったのによく体育館に『宝塚』を見に行こうとしたな?しかもバンドのラストにある『大塚愛』まで…些か無謀すぎないか?」

「ぅ……」

結締の言葉を聞いて、拓夜と成瀬の二人は「えっ!?」と驚いた表情を見せる。

「仕方ないだろ…折角の機会なんだ…」

「まぁそうは言ってもな…今の時間は…あぁ、劇はもう終わったか…残念白石さん、『宝〇』は諦めよう」

結締の言葉にガクッと肩を落とす白石。

「なら…バンドだけは…バンドだけは必ず…っ！！」

「はいはい、バンドも良いけど…しっかりと体調治してからな」

「……分かった」

空の色が夕日色に染まる時間帯。
体育館やその周囲には大勢の観客が訪れていた。

体育館の周囲やグランドの端や校舎の壁に建てられた巨大モニターや、教室のテレビには体育館の中の様子が映し出されていた。

これから体育館のステージで第七の生徒によるバンドが始まるのだ。
そしてそのバンドの後には大物歌手『大塚愛』のライブがある。

この大勢の観客の内、ほとんどが『大塚愛』が目当てだった。

西条亨とマナ、そして彼等とは別行動をとっていた結締智恭と白石直也、西条拓夜と成瀬花穂は、何とか体育館の中に用意された椅子に座る事ができた。

体育館のステージ裏から見える大勢という言葉では言い表す事のできない観客席の人の群。
葉月のバンドメンバーである桜明美は、ステージ内部を隠している暗幕の隙間から観客席の様子を見て、一瞬頭が真っ白になった。

桜明美の趣味は音楽で、よくカラオケに行き歌いもすれば、ライブ

ハウスでバンドメンバーと一緒に歌い、演奏したりもする。

だがこれは何だ!?

今までの自分のバンドなんかにここまで大勢の客が敷き詰めあった事など一度もない。

これ程の人数になった理由は分かっている。

未だこの体育館に姿を現していない大物歌手『大〇愛』を見たいが為に、なった結果だ。

桜明美はステージ裏に急ぎ戻ると、椅子に俯せて座っている烏丸葉月に声をかけた。

「葉月!大変だよ!まさかとは思っていたけど、観客席はもう凄い人数だよ!外もパンク状態!葉月、アンタ大丈夫なの…そんな様子で?」

葉月は小さく「大丈夫…」と答える。

桜明美はそんな葉月の仕草にとても不安を覚えた。

リハーサルの為、葉月が会場入りした時…

葉月は両目を真っ赤に腫らしながら泣いていた。

どうしたのかと尋ねても答えてはくれないし、実際リハーサルを行っても葉月のソロで歌う部分が、葉月の声が出ない状態になってしまい、練習らしい練習が殆ど行えていなかった。

「…ほんと…どうしたっていうのサ、いつもの皆を引っ張っていくリーダー気質のアンタがそんなんじゃ…アタシ達まで調子狂っちゃうよ…」

今のこの状況で葉月をステージの上に立たせても良いのか？

桜明美は俯く葉月を見て、真剣に考えた。

薄暗いステージ裏で椅子に座っていた葉月は、鞄から携帯電話を取り出した。

「……拓夜…」

携帯電話の画面には西条拓夜の番号が表記されていた。

（……いつからかな…こんなにも拓夜を意識する様になったのは…）

考えれば考えるほどこみ上げてくる西条拓夜への想い。

小学校に上がるよりも前。

小さい時に近所の公園で遊んでいた時、足がもつれて転んでしまった事があった。

もちろん私は大泣きした。

だってしょうがないじゃない。痛かったし、私もまだ子供だったし。

そんな時に声をかけてくれた男の子がいた。

「大丈夫か？」

「ぇ？」

「お前ドジなんだな、俺の目の前で盛大に転けてさ」

「な…何よアンタ！？」

「ハハハ！そんな顔に泥つけた奴が怒っても怖くないもんねー！悔しかったらここまで来てみろ！」

その男の子はそう言うと近くに植えられていた木にスルスルっと登っていった。

「何よ！このチビ！チビにできて私にできない事なんかないんだからー！」

私はそう叫び、悪戦苦闘しながらもその男の子の所にたどり着く事ができた。

「どう、来たわよ！」

「おお、お前！女の癖にやるな～！！」

「ふん、チビのアンタに出来るんだもん！私にだって出来るわよ！」

その後…お互いにきの枝に座り、公園を一望しながら色々とお喋りした。

そして帰る頃、一緒に木から降りて私は尋ねた。

「ねぇ、チビ！」

「チビって言うな！俺には『西条拓夜』って名前があるんだ！」

「ふ～ん、たくや…か、でもチビね！だってチビだもん！」

「う、うるせぇ！そういうお前は？名前は何なんだよ？」

「私は『烏丸葉月』！」

「ふ～ん、生意気な葉月な、覚えたぜ！」

「な、生意気じゃないもん！私、ちゃんといい子だもん！」

「ハハハ！じゃあな葉月、また遊ぼーぜ！」

「あ、ちょっと！」

その男の子『西条拓夜』は私に手を振りながら走っていった。

これが私と拓夜の最初の出会い。

そう、そしてこれは…

私の拓夜に対する想いの一部のきっかけ。

それから拓夜とはよく会う様になって、一緒に遊ぶ事も多くなった。
その日、公園には私と拓夜の二人しかいなくて、殆ど私達二人の貸し切り状態だった。
砂場で一生懸命に山を作っている拓夜に私は尋ねた。
「ねぇ、チビってさ…将来は何になりたいの？」
「将来か？」
拓夜は山を作る手を止めて私に振り向き
「よくわからねぇや、でも俺、一番になりたい！」
目をキラキラさせて言ってくる拓夜に私は「何それ～？」と少し呆れた。
「とにかく、何かで一番になるの！」
「ふ～ん、一番って事は、会社だと社長さんだね！チビは社長になりたいんだ！」
「な～んか違うけど…葉月はどうだ？将来の夢？」
「私？私はね、もちろんお嫁さんよ！」
「アハハハハ！！」

盛大に笑われた。

いいじゃない、私だって女の子なんだもん。そういった夢があったって。

「なんで笑うのよ！私がなりたいのは、ただのお嫁さんじゃないわ！」

「おっ？どんなのだ？」

「そうねぇ、旦那さんは背が高くて…カッコ良くて…とっても優しくて…頼りになって…お金持ちで…」

「おぉ！そいつ凄ぇな！」

「ふん、どうよ！将来の夢ってのはデッカくなくっちゃ！」

結局…その後は結婚の約束とか、そんなのはなかったけど……

小学校に入学して…中学校に進学して…私達は今までが嘘の様にお互いに話さなくなった。

中学校のある日、私は男子生徒から告白された。

その人は学校の女子達の間でかなりの人気がある先輩で…

でも、私はその告白を断った。

先輩は、なぜ?って聞いてきたケド…
だって…

「拓夜じゃないし…ね」

その告白を機に、私は少しずつ拓夜を異性の男として気になってきた。

でも、私の想いとは裏腹に、拓夜からのアプローチは中学時代は一切なかった。

高校に入ってからも、そんな状態が続いた。

このままじゃ駄目だ…って思った私は、拓夜をデュエルに誘った。
もの凄く緊張したけど…拓夜はそれを受け入れてくれた。

その事だけでも…私はとても嬉しかった。
拓夜との繋がりが持てた。

でも、私は出遅れた。
拓夜との繋がりを持てたという事に安堵した私は…成瀬さんに先を越された。

別に、成瀬さんが悪いって訳じゃないわ。

ただ…私が遅かっただけ…

先に進むのが怖かった。

もし拓夜が私を受け入れてくれなかったら?と思うと…怖くて怖くてしょうがなかった。

「拓夜……」

「ねぇ、葉月さん…拓夜って、西条拓夜の事だよね?」

不意に話しかけられて、驚いた葉月は顔をあげる。

そこには心配そうに覗き込む桜明美の姿があった。

「え…あれ…桜さん、何の事?」

「惚けても無駄だよ、アンタさっきから『拓夜』ってずっと呟いていたじゃないか?」

「えっ!?嘘っ!?」

「何だい、アンタ西条拓夜の事が好きだったのかい?」

「えっ…そ…そんな事…」

それでも惚けた様子を見せる葉月。

「もしかして…アレかい?アンタが会場入りした時に泣いていた理由って…まさか西条の奴が原因かい!?」

桜明美の言葉に、それまで狼狽えていた葉月の態度が一変した。

「拓夜を悪く言わないでっ！！！！」

「っ！？」

「拓夜は悪くないっ！！私が出遅れただけなのっ！！私一人のっ…気持ちの空回りなだけだよっ！！」

「葉月さん…」

「そうよ…私は…私は拓夜がずっと好…」

葉月の言葉を桜明美が口を塞ぎ、遮った。

「葉月さん…アンタの気持ちはよく分かったよ…ここに来る前に…アンタに何があったのかも…大体分かった。」

「…桜さん」

葉月の目から再びポロポロと雫が落ちる。

「西条の奴は今…この会場に居るのかい？」

「…わからない…でも、私がバンドで歌うってのは知ってる…」

「そっか…じゃあ葉月さん！今からアンタがやる事は一つだ！」

「えっ…？」

「決まってんでしょ？」

桜明美は床に落ちていたマイクを葉月に手渡し

「歌だよ！！歌でアンタの気持ちをぶつけるんだよ！！」

「桜…さん…」

「アンタなら出来る！それに、アンタが惚れた男だ！きっと受け入れてくれる！」

「もうすぐ…か…」

西条拓夜は椅子に座りながら、ステージに掛けられた暗幕を見つめていた。

「西条さん、このバンドで誰か知り合いの方でも出られるんですか？」

隣に座る成瀬花穂が質問する。

「あぁ…葉月が歌うんだ」

「そうだったんですか!?でも葉月さん…これ程大勢の前で歌うのって、大丈夫でしょうか？」

「さぁな…でも、葉月なら大丈夫だよ…俺はこのライブ…『大〇愛』よりも『烏丸葉月』見に来たんだ」

「そうですね…それを聞いたら、私も葉月さんの歌う姿が気になってきちゃいました！」

話す二人の会話を聞いていたのか、西条拓夜の隣に座る結締智恭が声を掛けてきた。

「拓夜ちゃん、葉月って誰よ？」

「俺の…幼なじみです」

「ふぅん…幼なじみねぇ…いや久しぶりに『幼なじみ』なんて単語

を聞いたわぁ」

「は、はぁ？」

ブーーーーーー…

体育館内にブザーが鳴り響く。

それまでざわついていた館内が一気にシーン…と静かになった。

そして遂に、ステージを隠していた暗幕が開き、そのステージに立つバンドメンバー等が姿を現した。

手前にボーカルの葉月。

奥にはドラムの桜。

そしてベースにギター、キーボード。

「…葉月……」

ステージ衣装に身を包んだ葉月がペコリと一礼し、その手にマイクを握った。

そして…ゆっくりと静かな。

美しい音色が流れ出した。

パチパチパチパチ……！！

館内に拍手と歓声が湧き上がる。
西条拓夜は唖然としていた。

この大勢の観客が見守る中、西条拓夜は烏丸葉月からの視線をずっと感じていた。
後ろの方の席だったにも関わらず、葉月はずっとこちらを見ていた様に感じた。

「…葉月」

「…すげ」

「大したもんだ…お前の幼なじみって奴は…」

隣に座っていた結締智恭や白石直也の二人も感銘を受けていた。

その二人だけではない。

この体育館内、そして体育館を取り囲む人達からの拍手や声援。それらが全てを語っていた。

すると、西条拓夜の隣に座っていた成瀬花穂が、膝の上にギュッと自分の手を握りながら話しかけてきた。

「葉月さん…凄いです……凄すぎですよ…」

その声は微かに震えていた。

「どうした…成瀬さん?」

「…西条さんは…今の葉月さんの歌から…どう感じました?」

真剣な表情で聞かれた為、西条は思わず「えっ!?」と声をだした。

「葉月さんから…何を感じましたか?」

「…いゃ、ただ凄いと思ったよ…この大観衆の中であれだけ「私が聞きたいのは、っそんな答えじゃないです!!」

「っ!!」

大声で叫ぶ成瀬の声に西条だけでなく、周囲の人達がびくっと驚いた。

「…本当に…何も感じませんでしたか?…葉月さんが歌っている最中、葉月さんはずっと誰を見つめていたと思ってるんですか!?」

「え…っ!?」

(まさか…そんな…)

「私にはよく分かりました。葉月さんの気持ちが…とても痛い位に!!…西条さん…今すぐに、葉月さんに会いに行って下さい!!」

「…嘘…だろ…?」

「早くっ!!私も行きますからっ!!私も…葉月さんに用がありますっ…!!」

成瀬に急かされ席を立った西条は、成瀬に押される形で体育館のステージ裏へと向かった。

残された結締と白石の二人。

白石は「拓夜と成瀬の奴…ドコに行ったんだ?」と結締に尋ねる。

結締は二人が向かった先を見ながら

「けじめをツケに行ったんだろ…」

「みんなー！！…今日はありがとー！！」

イェェェエエィ……！！！！

体育館中が、そして体育館の周り、グランドや校舎に建てられたモニターを見ていた者、教室中が葉月の歌を聞き熱く、燃え上がって

いた。

何曲か歌った葉月はものの数分で、第七高等学校では知らぬ者はいないと言われる程に注目を浴びていた。
それは今現在、ステージの上に立つ葉月に対して送られてくるエールが物語っていた。

葉月は一礼し、チラッと観客席のとある場所を確認する。

（……っ！？…い…ない…）

一曲目を歌っている最中は確かに居たはずの西条拓夜の姿。もちろんその隣には成瀬花穂の姿もあったが、その二人の姿が居なくなっていた。

（二人して…居なくなっちゃった…）

葉月が後ろを振り向くと、ドラムやキーボード、ギターが演奏し始める。そして暗幕が再びステージを包み込んだ。

葉月達のバンドは、その役割を終えたのだ。

「葉月さん、お疲れ！」
「やったね！葉月！」
「ライブ大成功ォ！」
「超燃えたよー！」

自分達のライブが終了し、それぞれのメンバーが葉月に駆け寄ってくる。

「みんな…ありがとね！」

葉月はそれぞれメンバーに頭を下げる。
すると、ドラムを担当していた桜明美が「葉月さん」と声を掛けてきた。

「アンタにはまだ、やらなくちゃいけない事があるだろ？ほら？」

「えっ！？」

桜明美がステージ裏の出入り口を指差すその先に

「葉月……」
「……」

「たく……や……」

西条拓夜が立っていた。
その後ろには成瀬花穂もいた。

「葉月さん、今がその時だよ…逃げちゃ駄目だ！」

桜明美が葉月の背中を押す。
そして拓夜の後ろに立っていた成瀬も「西条さん…」と言い拓夜の背中を押した。

暗幕が掛けられたステージ裏で見つめ合う西条拓夜と烏丸葉月。

「……」

「……拓夜……」

西条拓夜の前には烏丸葉月が立っている。
ステージ衣装に身を包んだその姿はお世辞抜きにしても『綺麗』の一言に尽きた。

「ライブ…凄く良かったよ、思わずお前に見とれてた」

「あ、ありがと…」

顔を真っ赤に染める葉月。

緊張した空気が二人の周囲を包み込む。

「拓夜…私ね…歌に私の気持ち全てを詰め込めて歌ったんだ…拓夜…貴方に向けて」

「……うん」

「でも、今度はちゃんと口にして言うね…私は、烏丸葉月は…ずっとずっと…西条拓夜の事が好きです。」

「…っ！！」

葉月の告白に、周りで二人を見守っていた連中が思わず息を飲んだ。

「…葉月」

「私は今までに何度か他の男性から…告白されてきた…でも私はその全てを断ってきた。…それは…拓夜じゃなかったから…」

「……」

「…もう一度言います。私、烏丸葉月は…西条拓夜の事が大好きです。…私と…お付き合いして下さい！」

そう言い葉月は拓夜に向けて頭を下げ、右手を差し出した。

（…俺は…俺は今まで…葉月、お前の事が好きだっていう奴等の手助けをしてきた。）

中学校の頃からそれは始まった。

『葉月さんとデートしたいからセッティングしてくれ！西条、お前葉月さんと幼なじみなんだろ？』

『西条、葉月さんの好きなものって知らないか？』

『西条、葉月さんの番号教えてくれ！』

『葉月さんの』『葉月さんの』『葉月さんって』『葉月さん』『葉

月さん』『葉月』『葉月』『葉月』……

目まぐるしく西条拓夜の脳内を走馬灯の様に駆け巡る今までの思い出。

（俺がその事を引き受けて来たのは…俺が葉月の事を意識していなかったからだ…でも…）

でも今。

今、自分の目の前にいる葉月は…

（俺の事を好きだと言ってくれた……）

それは…

（それはとても勇気ある行動だと思う…葉月は勇気を持って、俺に好きだと言ってくれた…今度は…俺の番だ…！）

そして西条は、ゆっくりとその口を開いた。

「…ありがとう、葉月…」

そう言い西条拓夜は烏丸葉月の差し出した手を掴み、自分に引き寄

せて葉月の体を抱き締めた。

「えっ！？」
「わぁぉ…！！」
「…っ！！」

周りがそれぞれの反応を見せるが、西条拓夜の目には映らない。

抱き寄せられた葉月は顔を上げ「拓夜…」と呟く。
その目には嬉し涙が漂っていた。

至近距離で見つめ合う二人。
そして西条拓夜の口から出た言葉。

「お前の気持ちは…確かに受け取った……けど…」

「……ぇ…？」

（けど…？…ぇ……？）

葉月の顔が、体が硬直する。

たった一言、「けど…」というその言葉に、葉月は頭の中が真っ白になった。

「…けど……ごめんな…葉月、俺…遅すぎたわ、お前がこんなにも魅力的な女性だったって事に…気付くのが遅すぎた…」

「た……くや…」

葉月を掴む西条の手に一層の力が籠もる。

「お前には悪いけど…今はお前とは付き合えない…今の俺には…いや、今の俺にも……好きな人が…大切にしたい人がいるから……」

「…ぅぅっ……っ」

西条の言葉を聞き、ボロボロと涙を流す葉月。
西条はそんな葉月の顔を自分の胸に再び抱き寄せ、小さく震えるその頭を優しく撫でた。

「……ごめんな……葉月……」

「ううううっっ！！」

「そして…ありがとう……こんな俺の事を…好きだと言ってくれて…」

「ウァァアアアァアアア……」

葉月は泣いた。

西条拓夜の…大好きな人の胸に抱かれて

思いっきり泣いた。

烏丸葉月の人生初の告白は、失敗に終わった。

拓夜は葉月を放すと、ステージ裏の出入り口へと向かった。

その途中、成瀬花穂が俯きながら立ちすくんでいた。

拓夜は成瀬の横で止まると、成瀬にだけ聞こえる位の小さな声で囁いた。

「…後で矢倉に来てくれないか」

「…はい…」

「…大事な話がしたい」

「……わかりました」

拓夜は成瀬からの返事を聞くと、一人その場を後にした。

（葉月さん……）

成瀬はバンドメンバーに囲まれている葉月を見つめる。そして自分もその場へと向かい、葉月に声をかけた。

「…葉月さん」

「っ…成瀬さん…っ」

拓夜がステージ裏から出ると、物凄い熱気が拓夜を襲った。

『葉月！！』『葉月！！』『葉月！！』『葉月！！』

熱烈な葉月コール。

ものの数分の間で、烏丸葉月は第七のアイドルと化していた。

だが今の拓夜にとって、館内から送られる葉月コールは胸にザクリと突き刺さった。

「……やっぱ凄いよ…お前は…」

拓夜は誰に言うでもなく、一人そう呟くと体育館から出て行った。

（葉月…ありがとな、お前のおかげで…俺も勇気を貰えたよ……今度は…俺が勇気を示す番だ！！）

夕日が沈みかける赤紫色の空の下。グランドの中央に建てられた矢倉にもたれ掛かる格好で西条拓夜は待っていた。

近くに建てられた大型モニターからは大〇愛のステージが映し出されており、学校中が熱い熱気に包まれていた。

「……」

腕を組み、目を閉じる拓夜。

頭の中には先程、体育館のステージ裏での出来事が蘇る。

（…葉月…お前からの告白で、俺にも気付く事ができた…この胸の奥底から溢れ出す、言葉なんかじゃ言い表す事のできない莫大な感情が一体何なのか…）

そして拓夜は、一人の女性を想う。

（俺は…俺はいつの間にか、成瀬花穂に恋をしていたんだ…）

「西条さん…」

声を掛けられた拓夜が目を開くと、そこには自分の想い人…成瀬花穂が立っていた。

「成瀬さん…」

西条は成瀬に近づき「来てくれてありがとう」と、まずはお礼を述べた。

「いえ…それに、来てくれって言ったのは西条さんの方ですよ？」

「あ、そうだったな…」

「そうですよ」

誤魔化す様に「ハハハ…」と軽く笑う拓夜だったが、上手く言葉が出てこない。
ただ自分の感情を素直に伝えればいいだけのハズなのに、それがなかなかできない。
告白というのはこうも難しいものなのか…！？

（ハハハ…葉月…お前凄いわ…本当）

「…西条さん、大事なお話なんですよね…私からも…聞いてほしい大事な話があります…」

拓夜が上手く言葉が見つからない中、成瀬が先に口を開いた。

「っ！？」

「西条さん、私ですね…「待ってくれ成瀬さん！！」

思わず拓夜は成瀬の言葉を遮る。

当然だ。

男から「大事な話がある」と言っておきながら、誘った女から「じゃあ私が言います」なんてカッコ悪すぎる。

「ごめん成瀬さん…俺から言わなくちゃいけないんだ…思ってもみなかったよ、人に自分の想いを伝えるのが…こんなにも難しいなんて…」

「…難しくないですよ」

「成瀬さん…」

「難しく考えるから、言葉が頭の中で詰まっちゃうんです…聞かせてください、西条さんの想いを…」

（俺の…想い……か）

知り合ったきっかけは、病院で拾った一枚のカード…
当時成瀬さんは右足首を骨折していて、松葉杖をつきながらそのカードを探していた。
そんな成瀬さんに声をかけたのが…俺の想いの始まり。

病院での成瀬さんとのデュエル…初心者だった俺には、成瀬さんとのデュエルが新鮮で…楽しかった。

その後…俺の右手のギプスが外れた日に、たまたま病院で一緒になった成瀬さんと…初めて一緒に登校した。

『優しくエスコートして下さいね』

その言葉に、とても緊張したのを今でも覚える。でも…一緒に手を繋いで登校しながら、話したり笑ったりするのが…とても楽しかった。

第七祭の催し物で喫茶店を開く事になって…喫茶店がどんな所か知る為に、俺は近くの喫茶店へと向かった。
その途中、リハビリ目的で散歩していた成瀬さんと会って、今から喫茶店に行く事を話したら、一緒に行くと言ってくれた。
しかも照れくさそうに笑いながら『デートです』と言っていた。

その何気ない一言が…今になってとても嬉しく思う。

そして今日、成瀬さんはわざわざ俺を探しに教室まで来てくれた。
それに喫茶店まで手伝ってくれた。
途中、成瀬さんにちょっとしたアクシデントがあったけど…そんな些細な出来事でも俺は成瀬さんに不安を与えたくなかった。

『一緒に第七祭を周りたい』って言ってくれた。

自分のクラスの連中とは?と、俺は聞き返したけど…それでも成瀬さんは俺を選んでくれた。

凄く恥ずかしがった…いや、照れたけど…その分…俺は嬉しかったんだ。きっと…

周りの連中に冷やかされたから思わず否定していたけど……

知り合ってまだ間もないけど……

俺は……

成瀬花穂に惚れたんだ……

矢倉の前で、見つめ合う西条拓夜と成瀬花穂。
周りには大勢の人が溢れていたが、大衆は設置された大型モニターに映る大〇愛に釘付けで、辺りはスピーカーから流れる彼女の曲で盛り上がっていた。

西条拓夜と成瀬花穂。
その二人だけが、お互いの世界に入り込んでおり、もう周りの状況がどうとか、そういったものには全く目に、耳に入ってこなかった。

「…成瀬さん…」

「……はい…」

ただ聞こえてくるのは、お互いの声だけ。

だけ見えているのは、お互いの姿だけ。

「俺は……君が好きだ！」

「……西条さん」

君が好きだ！の言葉が西条の喉に詰まった栓を抜いて、溜まりに溜まった感情が一気に溢れ出した。

「俺は…成瀬花穂が大好きだ！」

短絡的な言葉。

だが中身に込めた想いは、西条拓夜にとってとても深く、大きかった。

心臓の鼓動が高鳴る。

バクバクしているのが外に漏れそうな位だ。

西条拓夜は、張り裂けそうな想いを伝え、成瀬からの返事を待った。

（西条さん…）

西条拓夜からの告白に、成瀬花穂は目に涙を浮かべた。

「私も…西条さんが好きです。」

ニコッと西条拓夜に微笑む。
すると西条拓夜は成瀬花穂に抱きついた。

「ありがとう…成瀬さん…」

「西条さん…」

「俺…凄く嬉しいよ…」

「私もです…生まれて初めて…好きな人から告白されました」

どれ位の時間が経ったのか分からない。
西条と成瀬は互いに抱き締めあったまま話しをした。

「フフ…西条さん、さっきから心臓の音が凄い鳴ってます」

「…そっちだって」

二人は体を放し、再び互いに見つめ合った。

「成瀬さん…もう一度言う。俺は君が好きだ…俺の恋人に…俺の彼女になってくれ！」

真剣な面持ちで聞いてくる西条に、成瀬は「何を言ってるんですか」と言い、西条の顔に自分の顔を近づける。

鼻と鼻がぶつかる位の超至近距離で

「拓夜さんはもう…私にとって世界一の彼氏です」

そう言って成瀬は軽く背伸びをした。

重なり合う唇と唇。

夕日は沈み、空を月が照らし出した時…

西条拓夜と成瀬花穂は恋人同士になった。

新たなる舞台（ステージ）

第七祭の翌日。

学校は振替休日なのだが、西条拓夜はいつも学校がある時間と同じ位の時間に起きた。

昨夜は余り眠る事が出来なかった。

昨日だけで、西条拓夜の身のまわりに色々な変化がありすぎた。

幼なじみである烏丸葉月からの告白。

それを断った拓夜は、成瀬花穂へ自分の思いを打ち明けた。

想いは通じた。

成瀬花穂は西条拓夜を受け入れ、二人は恋人同士になる事ができた。

それは喜ばしい事だ。

興奮が冷め止まぬまま布団に入っても、なかなか眠れる筈がない。

気が付いたらいつの間にか朝日が登っており、拓夜が部屋の時計を確認した時には午前六時を過ぎていた。

「おはよう母さん」

「おはよう、あら…拓夜、アンタ今日は学校お休みじゃなかった？早起きなんて珍しいわね」

朝早く、西条家の朝食の準備をする西条拓夜の母親、西条智恵子はフライパンを振るいながら息子に話しかけた。

「まぁ学校は休みだけど…眠れなかったんだよ、余り」

「ふぅん…アンタ昨日は文化祭だったんでしょ?楽しかった?高校最後の文化祭は」

智恵子の言葉を聞いて拓夜は思った。

「そっか…もう最後だったんだ…」

拓夜はお茶を汲み、ゆっくりと飲む。

「そうよ~、なんだかんだで高校生活なんてあっと言う間なんだから…ハァ…懐かしいわぁ…お父さんと私の高校時代…」

懐かしむ様な口調で母親、智恵子は一人で語り出した。

「お父さんと私は同じ高校でね…お互い高校最後の文化祭で、お父さんから告白されたのよ」

「ぶっ!!!??」

聞いて思わずお茶を吹いてしまった。

「ちょっと拓夜!?アンタ何やってんの一体?」

「いや…ごめん、母さんの話しを聞いていたら…その…血は争えないな…と」

「……っ!?アンタ…まさか…昨日の文化祭で誰かに告白したの!?」

フライパンを握る手を放し、智恵子は息子の拓夜を捕まえて床に正座させた。

「ちょっと母さん!?」

「相手は誰!?葉月ちゃんね?そうでしょ?分かってるわよ〜、葉月ちゃんならお母さんは何も言うことはないわ!葉月ちゃんなら安心ね☆」

「ちょっ…人の話しを聞けー!!」

暴走する母親を押さえ、拓夜は話を聞いて貰うように懇願する。

「葉月じゃねぇって、落ち着いてくれよ母さん!」

拓夜の言葉を聞き、智恵子はキョトンとした表情になる。

「えっ!?…葉月ちゃんじゃないの!?アンタ…葉月ちゃん以外に女の子の知り合いなんていた?」

「失礼な…今日その子がウチに来るから」

「うえええっ!?ちょっ…」

「葉月とじゃなくて…成瀬花穂って子なんだけど、俺…成瀬さんと付き合う事になったから」

「お…お父さーん!?事件よ事件!!」

智恵子はドタバタとまだ寝ている父親、西条茂雄の所へと向かいギャーギャー騒いでいた。

今日も朝から西条宅は賑やかです。

部屋に戻り、拓夜は机の上に置いてある二枚のカードを手に取った。

裏の柄は遊戯王カードそのものなのだが、表は違う。

表側は名刺になっており、そこには『ＯＣＧ研究会』と書かれてい

た。

「西条…亨さん……それに…マナさん…か」

昨日偶然出会った拓夜は、西条亨からこの名刺をもらった。

「今日の十時に…この番号に連絡…か…」

（成瀬さんからの話によると…ＯＣＧ研究会ってのはなかなか有名な人達らしい…研究会の結締さんと白石さんはゲームとか言ってたけど…それで何で俺に用があるんだ？）

考えれば考えるほど分からなくなってくる。

拓夜は布団に横たわりながら考えていると、いつの間にか微睡みの中に沈んでいった。

午前９時頃、成瀬花穂は『おもちゃ屋サプライズ』の前に来ていた。

店はまだ開いておらず、シャッターが閉まっている。

そのまま入るのは何となく気まずく思った成瀬は拓夜の携帯電話に着信をいれた。

Ｔｒｕｒｕｒｕ…Ｔｒｕｒｕｒｕ……

おもちゃ屋サプライズの二階の窓から拓夜の携帯電話の着信音が聞こえてくる。
だが一向にその着信音が鳴り止まない。

（……拓夜さん、寝ているんでしょうか？）

着信を切ると、二階から聞こえていた拓夜の着信音も聞こえなくなった。

「うぅ…できれば拓夜さんに出迎えてほしかったんですけど…仕方ないですね」

成瀬花穂はそう呟くと、店のシャッターを軽くノックした。

ガンガンガンッ！！

「ん…誰だ、まだ店は開いてないぞ…」

西条拓夜の父親、西条茂雄は一階の店内で掃除をしていた所だった。
が、外のシャッターから何やら物音がする為、茂雄は掃除をする手を止めて、外のシャッターを開けた。

「は～いはいはい、一体どちらさん？」

西条茂雄がシャッターを開けると、そこには可愛らしい格好をした成瀬花穂が立っていた。

「……どちらさん？」

茂雄が口にくわていえたタバコを外し、成瀬に尋ねる。

「あ、朝早くからすいませんっ…あのっ私、成瀬花穂と申します！」

「成瀬…さん？……？」

茂雄は少し考えた後、あ…と何かを思い出したかの様に

「あぁ、拓夜が言ってた成瀬ちゃんって彼女は君かぁ！！」

「あ、はい…拓夜さんとお付き合いさせて頂いてます…あの…拓夜さんは今ご在宅ですか？」

丁寧な口調の成瀬に茂雄は

「いいよいいよ成瀬ちゃん、そんな堅苦しい言葉遣いじゃなくても！拓夜なら部屋にいるから、とりあえず家にあがんな！」

「はい、じゃあお邪魔します！」

ペコリと頭を下げる成瀬。

頭を下げると同時に、長い黒髪のツインテールが風に靡いた。

店内に入ると成瀬は「うわぁぁ…」と珍しいものでも見るかの様に店内をぐるりと見渡した。

拓夜からはおもちゃ屋とは聞いていたが、普段あまりそういった店に行く事が無かった成瀬からすれば、西条宅は新鮮だった。

「成瀬ちゃん、こっちこっち！ほら、あがんなって」

西条茂雄に手招きされ、成瀬は「あ、はい！」と言い西条宅の中に上がっていった。

店内から奥に入り、階段を登ると、西条宅のリビングへと案内された。

「母さん、お茶を出してくれ！」

「はいはい、ってあら？あなたは？」

西条拓夜の母親、西条智恵子が成瀬の顔を見て尋ねる。

「初めまして、私、成瀬花穂と言います。息子さんの拓夜さんとお付き合いをさせて頂いてます。」

「あら、礼儀正しい子じゃないの」

「いえ…そんな…」

「拓夜の彼女には勿体ないな！どうだ成瀬ちゃん、オジサンの彼女

にならないか？」

「いえ…ごめんなさい、それはちょっと…」

「お父さん…」

西条智恵子が睨みを効かせて西条茂雄を黙らせる。

「な、何だよ～、冗談だっての！」

しばらく成瀬は拓夜の両親と話していた。

「あの…拓夜さんは…？」

「あぁ、そこの角の部屋に居るから入って行きな」

「は、はい…分かりました」

成瀬は茂雄が指差した部屋に入った。

「拓夜さーん、入りますね」

ガチャリ、とドアを開けると拓夜はベッドの上で目を閉じていた。

「拓夜さん…やっぱり寝ていましたか…」

何となく分かっていた事だけに、落ち着いて部屋に入った成瀬は、

寝ている拓夜の顔を覗き込み。

「拓夜さ～ん、起きて下さ～い！」

と、拓夜の体を揺さぶってみる。

が、そんな事で起きる西条拓夜ではない。

「むむむ…起きないですね…こっこうなったら…」

成瀬は拓夜の耳元で

「起きないと拓夜さんに……」

自分で言おうとしてかなり恥ずかしくなった成瀬は途中で言葉を止めた。

「……いざ実践しようと思うと…恥ずかしすぎます…」

視線を移すと、拓夜の寝ている横にＯＣＧ研究会の名刺が落ちている事に気が付いた。

「あ…これって……」

名刺を拾い上げる成瀬。

「確か朝十時に…西条亨さんに連絡をいれるんでしたよね…」

誰に言うでもなく、成瀬は口にして確認する。

時間はもう十時になろうとしていた。

「拓夜さ～ん、私が連絡しちゃっても良いですか？良いですよね、寝てますもんね、じゃあ連絡しちゃいます！」

成瀬は自分の携帯電話を取り出すと、西条亨の名刺に書かれていた番号に電話をかけた。

もちろん、西条拓夜は今も夢の中　。

「ねぇ、さいじょお～！電話鳴ってるよ～？」

西条亨が暮らすアパートの一室でマナが言う。

「おぉ…悪い、取ってくれ！」

西条亨は机の上に広げていた資料を鞄の中にしまい込むと、マナから携帯電話を受け取った。

「はい！きっとたくやからだよ！」

「だろうな、そろそろ言ってた時間だしな…」

携帯電話を開くと液晶には知らない番号が写し出されていた。

「さいじょおの携帯電話に登録されてない番号なんだし、たくやだよ！」

「あぁ……はいもしもし、西条です」

西条亨が電話にでると、受話器からは西条亨の知らない女性の声が聞こえてきた。

『あ、西条亨さんでよろしいですか？』

「…？」

誰？と一瞬困惑した西条亨だったが、とりあえずそのまま話を進めてみる。

「はい、そうですけど…どちら様ですか？」

「あれ？たくやじゃないの？」

西条亨の言葉を聞いて、側にいたマナは首を傾げた。

『あ、突然ですいません…私、西条拓夜の代理でお電話させてもらいました、成瀬花穂と申します！』

「…成瀬…」

その名前には聞き覚えがあった。

確か昨日の夜に白石と電話で話している時に出てきた名前だ。

「あぁ、君が成瀬花穂さんか…拓夜くんは今電話に出られるかな？」

『あの…その拓夜さんなんですが…私の横で今寝ておりまして…』

「そっかあ…拓夜くん達に来てもらいたい場所があったんだけどな」

『ぁぅ～、スイマセン…』

西条亨は少し考えた後

「成瀬さん、今から君らが居る所に迎えに行っても良いかな？」

『えっ！？わざわざ迎えに来て下さるんですかっ！？ありがとうございます！私達は今、東区商店街のおもちゃ屋『サプライズ』にいます！』

「分かった、もう少ししたら車で迎えに行くから…それまでに拓夜

くんを起こしておいてくれないか？」

『分かりました！何から何までありがとうございます！』

「いいよ、じゃあ近くに着いたら…この番号にこちらから連絡をいれるから」

「はい、分かりました！ではお待ちしております！道中、お気をつけて…」

「ありがとう」

西条亨は電話を切ると、側に立っていたマナを見る。

「？」

ナニ？といった感じに微笑むマナ。

西条亨はマナと先程電話をしていた成瀬花穂の態度を比べた。

（こいつももう少し礼儀正しい言葉遣いってのを覚えてくれねぇかな…）

「マナ、準備しろ！今から拓夜くんを迎えに行くぞ」

「うん、デッキデッキ！」

西条亨は資料が詰まった鞄を、マナは自分と西条亨のデッキを入れた鞄をそれぞれに持ち、アパートを出た。

駐車場に停めてある車に乗った二人はおもちゃ屋サプライズに向けて前速前進した。

一方その頃、おもちゃ屋サプライズの二階にある西条拓夜の部屋。

「拓夜さん!!起きて下さい!!」

と、成瀬花穂が寝ている西条拓夜の体を強引に起こした。

「ふぁ…」

「拓夜さん!!」

成瀬からの再三の呼びかけにようやく意識が戻ってきた西条拓夜。

「……っ!?あれっ!?成瀬さん、何で俺の部屋にっ!?」

目が覚めたら目の前に成瀬花穂がいた為、西条拓夜は驚いた。

「拓夜さんのお父様に言って、ちゃんと挨拶はしてきましたよ?それより拓夜さん!先ずは顔を洗って、服を着替えて下さい!」

「えっ!?ちょっ!?」

何が何だか分からない西条拓夜は成瀬花穂に押されて洗面台へと向かう。

「いいから早く！！」

二人のそんな様子を物陰からコッソリと覗いていた西条茂雄は

「……拓夜のやつ、成瀬ちゃんの尻に敷かれてやがるな…成瀬ちゃんがしっかりとしてる子で本当良かった…」

西条茂雄がそんな事を言っていると、その後ろから西条智恵子が西条茂雄の襟首を掴んでズルズルと引き摺っていく。

「いいからお父さんは仕事しなさい！！もうとっくに店を開く時間ですよ！！」

顔を洗い寝癖を直し、服を着替えた西条拓夜は成瀬花穂と一階にある店内で時間を過ごした。

成瀬花穂は遊〇王のカードファイルを読み漁りながら

「拓夜さんのお店はカードも取り扱っているんですね」

「ああ、でも流石に俺が店の商品に手を出す事はあんまりないけどな」

「あ、拓夜さん！私このカードが欲しいです！」

成瀬花穂はそう言って見ていたファイルのページを西条拓夜に見せる。

「どれ……っ！？」

成瀬花穂が指差していたカードはホログラフィックレアの『レッドデーモンズ・ドラゴン／バスター』、一枚２５００円のカードだった。

「駄目」

「ぇえ～、何でですか？」

「何でじゃないっしょ！？高いよこれ、普通にウルトラレアで良いじゃん！！」

「ホログラフィックレアだから意味があるんですよ拓夜さん、それに拓夜さん…拓夜さんが寝ている間に…」

「えっ！？な…ナニ！？」

（俺が寝ている間に一体ナニがっ！？ま…まさかっ！？あ～んな事や、こ～んな事を成瀬さんは俺にしてくれていたとかっ！？）

西条拓夜の妄想が膨らむ中、成瀬花穂は

「お布団の下に隠してあったエッチな本は、括って捨てさせてもら

いました！」

「ぇぇぇえええ！！！？」

店内で二人で過ごしていると、成瀬花穂の携帯電話の着信音が鳴る。

「あ、きっと西条亨さんからです！」

「えっ…何で亨さんから成瀬さんの携帯に？」

「拓夜さんが寝ている間に、私の携帯から亨さんに連絡を入れたんです」

「……何かスイマセン、俺、寝ちゃっててスイマセン…」

西条拓夜が謝っている間に成瀬花穂は電話に出て話しだす。

「はい、成瀬です」

『お、成瀬さんか？西条亨だけど…今、店の前に着いたから二人で出て来てもらえないかな？』

「はい、分かりました！じゃあこれから其方に向かいますね！」

成瀬花穂は携帯電話を鞄の中にしまい込むと、側にいた西条拓夜の手を引いて

「拓夜さん！亨さんが到着したみたいですよ！デッキは持ちました？携帯電話は？お財布は？」

「大丈夫だって、成瀬さん落ち着け」

二人が外に出ると、そこには一台の軽自動車が停まっていた。
その車の運転席の窓が開き、そこから西条亨が二人を出迎えた。

「ようこそ」

「あ、亨さん…おはようございます」

「わざわざ車を出して下さって、ありがとうございます！」

それぞれに挨拶する二人に西条亨は「とりあえず後ろに乗ってくれ」と促す。

「じゃあ、お邪魔します」

二人は後部座席に座り、ドアをロックする。
すると助手席に座っていた女性が、後ろを振り向いて二人に話しかけた。

「おはよう二人とも！たくやには昨日会ったよね？こっちの子は？」

「えと…はじめまして、成瀬花穂です」

「よろしくね、かほ！私はマナだよ！」

「マナ…さん？よろしくお願いします！」

「二人とも今日はデッキを持ってきてる？」

「あ、はい…それは準備してあります」

「うん、なら良かった！ねぇさいじょお」

「はい、何でしょうか？」

「あ、たくやじゃないの！ごめんね、さいじょおさいじょお！車まだ走らせないの～？早く行こうよ～！」

マナに言われて西条亨は軽く溜め息をつく。

「…どうでもいいケド、皆…シートベルトを締めてくれ」

東区の駅裏には西条亨や結締智恭、白石直也が通う大学がある。

その大学の敷地内に一際大きなドームが建てられている。

このドームの中では、野球ができたり、サッカーができたり、テニスができたりバスケットができたりと、様々な設備が整えられている。

だが今現在、ドームの中にはバスケットのフィールドが広がっていた。

ドームの官制室にいる白石直也は、目の前に沢山並ぶ電子機器のボタンを手馴れた手つきで操作する。すると、

ガチャン！！ウィィィィィィ……

何と、バスケットのフィールドが横二つに割れてスライドしていく。

そしてドームの床は何もなくなってしまった。

官制室からその様子を見ていた、いや、正確に言えばそれを操作していた白石直也は

「よし、次に…」

と呟くと、再び電子機器のボタンを操作していく。

ウィィィィィ……ゴゴゴゴゴ……ドォォォオン…！！……ウィィィィガコンッ！！

円形に穴の開いたドームの床の奥底から、新たなドームの床が現れる。

その新しく現れた床の中央には巨大な四角い台座が設置してあり、その四つの角には何かを映し出す投影機の様な機械と大型のスピーカーが設置されていた。
更にはその台座の両端にはそれぞれ向き合う様に机らしきものが設置してある。

その新しく現れたフィールドを確認した白石直也は「よし、準備は整った」と言い近くにあった椅子に座る。

「お～…こうして見ると感動すっな～！」

白石直也が椅子に座ると同時に官制室の扉が開き、そこから結締智恭が入ってくる。

「俺たちで完成させたんだ…感動して当然だ」

「あぁ、俺たちのデュエルフィールド…あ、そうそう、白石さん」

「ん？」

「西条ちゃんからさっき連絡が入ってさ、もうすぐ到着するみたいだぜ？」

「そうか」

結締智恭は腰に下げていたデッキケースを軽く叩きながら

「白石さん、西条ちゃん達が到着する前に、デュエルフィールドの起動実験を兼ねて俺とデュエルしないか？」

「そうだな、…このデュエルフィールドでの第一戦は、俺の圧倒的な勝利で飾らせるのも悪くないな」

白石はそう言って立ち上がり、鞄から自分のデッキを取り出した。

「いやいや、勝つのは俺だって」

二人は部屋から出ると、設置されたデュエルフィールドへと向かった。

OCG研究会のデュエル

デュエルフィールドに着いた二人は向き合う様に設置された机の前にそれぞれ立つと、デッキをその机の右側に置いた。

ヴィィィン…

すると、デュエルフィールドの四隅に設置された投影機から七色に輝きだし、デュエルフィールドの中央にソリッドビジョンのデュエルフィールドが映し出された。

それを確認した結締は

「ここまでは順調だな」

「あぁ、後はデュエルを始めていかないとな…結締、準備はいいか!?」

「あぁ、いつでもいけるぜ!」

二人は同時に机の側面に設置されたボタンを押した。

ガコンッ!!ヴヴヴヴ……ン

すると二人が立っていた場所のみが高さ1メートル程上昇した。

「よし、いくぞ結締!!」

「来い、白石さん！！」

そして二人は同時に叫んだ。

「「デュエル！！」」

先攻　白石直也　ＬＰ　８０００
後攻　結締智恭　ＬＰ　８０００

白石直也は手札を五枚引き、「オレのターン、先攻ドロー！！」と声を大にしてカードをドローした。

（…フッ、良い手札だ）

白石直也は手札を確認し、自信に満ち溢れた笑みを浮かべる。

「オレは、手札からっ」

白石直也が言うと同時に、デュエルフィールドの入り口のドアがガチャン！！と開かれる。

そこから

「お～動いてる動いてる」

「ワァァ…ッ！！」

「すげ…」

西条亨とマナ、西条拓夜と成瀬花穂の四人が姿を現した。

「よう二人とも、デュエルフィールドの起動実験の最中だったか？」

二人を見上げながら西条亨は尋ねる。

「あぁ、今始めたばか「凄いです、拓夜さん見て下さい！デュエルフィールドですよデュエルフィールド！！」

結締智恭の言葉を興奮する成瀬花穂の声がそれを遮る。

「分かったから成瀬さん、落ち着けって！！」

目をキラキラと輝かせる成瀬花穂を宥めながら、西条拓夜は西条亨に尋ねた。

「亨さん、俺達に見せたかった物ってのは…このデュエルフィールドですか？」

「そう、俺達ＯＣＧ研究会が独自に作り上げた特設デュエルフィー

ルド…これを君に体験してもらいたい」

「俺に…ですか？」

「あぁ、とりあえず今は俺の話よりも…二人のデュエルを見学しようじゃないか、拓夜くんに成瀬さん、ついて来て」

西条亨は二人を観客席へと案内した。

「あ、さいじょお待ってー、私も行くー！」

観客席に着いた四人はそれぞれ椅子に座り、中央のデュエルフィールドを見る。

「中断させて悪かったー！デュエルを再開してくれー！」

白石直也と結締智恭の二人に対して叫ぶ西条亨。

「研究会の二人のデュエルを間近で見られるなんて…私、感激ですっ！！」

「二人とも、頑張れー！！」

それぞれに二人に向けて声を出す成瀬花穂とマナ。

西条拓夜はゴクリと生唾を飲み込み、二人のデュエルを見つめていた。

「いくぞ結締！俺は手札から「サファイア・ドラゴン」を召喚！」

【サファイア・ドラゴン】
星４　風属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　１６００

白石直也が手札のカードを机に設置すると、デュエルフィールドの四隅の投影機がそれぞれに光り出し、白石直也のフィールドにサファイア・ドラゴンがソリッドビジョンとして現れた。

『ガルルルル…ッ！！』

「凄いですっ！！モンスターが立体化して現れました！！」

「…ソリッドビジョンか…凄い…」

映し出されたソリッドビジョンに感動する西条拓夜と成瀬花穂の二人。

「良かった、ちゃんと作動してるね、さいじょお！」

「あぁ、モンスターの動きに合わせて音声プログラムもマッチしている！」

西条亨とマナはデュエルフィールドがきちんと作動している事に、喜びを露わにした。

「先攻の1ターン目は攻撃をする事ができない、オレはリバースカードを1枚セットし、ターンエンド！」

白石直也が机の魔法・罠カードゾーンにカードをセットすると、ソリッドビジョンシステムが作動し、白石側のデュエルフィールド上に一枚の伏せカードが現れた。

「おぉ…正面から対峙すると凄い迫力だな」

結締智恭は正面に対峙するソリッドビジョンのサファイア・ドラゴンを見てそう呟いた。

「じゃあ俺のターンだな、ドロー！！」

結締智恭はデッキからカードをドローし、手札を確認する。

（良い手札だ…確かに良い手札なんだが、最初から飛ばしすぎると後がキツい…ここは…）

結締智恭は手札の一枚のカードに手を伸ばして、そのカードを発動

させた。

「俺は手札の魔法カード『Ｅ－エマージェンシーコール』を発動！」

【Ｅ－エマージェンシーコール】
通常魔法
自分のデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

結締智恭が発動した魔法カードがソリッドビジョンとしてフィールド上に映し出される。

「このカードの効果で、デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくカードを手札に加える！俺はデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯアナザー・ネオス』を手札に加え、こいつを召喚！」

【Ｅ・ＨＥＲＯアナザー・ネオス】
星４　光属性　戦士族
ＡＴＫ１９００
ＤＥＦ１３００

効果　デュアル
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードはフィールド上で存在する限り、カード名を「Ｅ・ＨＥＲＯネオス」として扱う。

結締智恭のフィールドにアナザー・ネオスが出現する。

「わぁ…！！ちっちゃいネオスっ、可愛いです！」

「結締さんのアナザー・ネオスの攻撃力は１９００、白石さんのサファイア・ドラゴンの攻撃力も１９００…」

互いに同じ攻撃力のモンスターが並ぶフィールドで、結締智恭は「バトルフェイズに入る！」と高らかに宣言する。

「アナザー・ネオスで、サファイア・ドラゴンに攻撃！」

結締智恭のアナザー・ネオスが白石直也のサファイア・ドラゴンに向かい突進していく。

その様子を見ていた西条拓夜は

「攻撃力は互角、結締さんは相殺するつもりなのか！？」

すると隣に座っていた西条亨が、西条拓夜の発言に対し

「いや、それは違う…」

「え…でも…！？」

「拓夜くん、結締のデュエルをよく見てみるんだ…」

アナザー・ネオスがサファイアドラゴンに殴りかかる瞬間、結締智恭は手札の一枚のカードを取り出した。

「アナザー・ネオスのダメージステップ時に、手札の『オネスト』の効果発動！」

【オネスト】
星４　光属性　天使族
ＡＴＫ　１１００
ＤＥＦ　１９００
効果
自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時

にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

結締智恭の発動した『オネスト』を見て対峙する白石直也は「ふん…」とつまらなさそうに鼻で息をはいた。

「『オネスト』を手札から墓地へ送る事で、アナザー・ネオスの攻撃力はエンドフェイズ時まで、サファイアドラゴンの攻撃力の数値分アップする！」

【Ｅ・ＨＥＲＯアナザー・ネオス】
ＡＴＫ　１９００→３８００

互角だった攻撃力が途端に跳ね上がり、アナザー・ネオスがサファイアドラゴンを殴りとばした。

ドォォォォ…ッ！！

殴り飛ばされたサファイアドラゴンは粉々に砕け散り、白石直也は

ライフポイントにダメージを負った。

白石直也　ＬＰ　８０００→６１００

その戦闘を見ていた西条拓夜は

「凄い…『オネスト』…何て強力なカードなんだ…」

「全てのデュエリストに当てはまる訳ではないが…今の環境じゃ、光属性モンスターと戦闘を行うには細心の注意を払わなければならない…こちらがどんなに高い攻撃力のモンスターを従えていても、たった一枚の『オネスト』に殴り負けてしまう恐れがあるからだ…」

隣に座る西条亨が解説するかの様に語る。
そんな中、結締智恭は手札を確認し、

「俺はターンを終了する…」

（今はまだ…このカードを使う時じゃない…アナザー・ネオスだけじゃ心許ないが、何とか耐えてみせるっ！）

白石直也　ＬＰ　６１００
結締智恭　ＬＰ　８０００

白石直也のターンに移る。

現在、白石直也のフィールドには一枚のリバースカードのみ。
白石直也は「ふん…オレのターン、ドロー！！」と、デッキからカードを引く。そのカードを確認した白石は

「結締よ、戦闘では無類の強さを誇る『オネスト』を１ターン目から使うとは…その手札、余程腐っている様だな！！」

「っ…何をっ！？」

「手札というのは強力なカードが集まりすぎても、それが各状況において最も効果的なカードでなければ、その力も大半の意味を失う！！」

「っ！？」

白石直也の言葉が結締智恭を貫く。
結締智恭の現在の手札は四枚。
一枚目は『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』、二枚目は『Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー』、三枚目は『融合賢者』、四枚目は『究極宝玉神　レインボー・ドラゴン』だった。

確かに『融合賢者』を発動し『融合』の魔法カードを手札に加え、手札の『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』と『究極宝玉神　レインボー・ドラゴン』を融合して『レインボー・ネオス』を融合召喚する手もあった。

だが相手が一枚の攻撃表示モンスターと一枚の伏せカードだけの１ターン目の状況で、これらの戦法を採るだろうか？

結締智恭の答えは否！！

初手に多量の手札消費をし融合召喚を行った所で、返しの相手のターンに速攻で融合モンスターを除去されてしまってはこちらのディストアドバンテージが大きすぎるのだ。

結締智恭はこの融合召喚は中盤での切り札として使うつもりでいた為に、序盤から形勢をこちらに向かわせるつもりで『Ｅ・ＨＥＲＯアナザー・ネオス』に『オネスト』を使ったのだ。

白石直也は言うだけ言うと、自フィールド上に伏せてあった一枚のカードを発動させた。

「お前が躊躇する様なら、オレは全力でお前を叩く！！罠カード発動『レベル変換実験室』！！」

【レベル変換実験室】
罠カード

自分の手札のモンスターカードを1枚選択して相手に見せ、サイコロを1回振る。1の目が出た場合、選択したモンスターを墓地へ送る。2～6の目が出た場合、このターンのエンドフェイズ時までこのモンスターは出た目のレベルになる。

「『レベル変換実験室』…？」

今度は成瀬花穂が何ソレ？といった感じに呟く。
今回、解説役に徹する西条亨は

「あのカードはサイコロを振り、手札のモンスター1体のレベルをサイコロの出た目と同じにする事ができるカードだ…その主な用途としては手札の最上級モンスターのレベルを下げ、簡易的に召喚する為に使われる…」

「な、なる程…！！」

白石直也な手札のモンスターカードを結締智恭に見せた。

「オレが選択するモンスターは『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！！」

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】
星１０　闇属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２４００
効果
このカードは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター１体をゲームから除外する事で特殊召喚する事ができる。１ターンに１度だけ、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

白石直也の選択したモンスターを見て驚愕する結締智恭。
そしてそのデュエルを観戦していた４人も驚きを露わにした。

「サイコロを振らせてもらう…ダイスロール！！」

白石直也が机に設置されたボタンを押すと、フィールドにソリッドビジョンのサイコロが降ってきた。

カコンッ…ゴロゴロゴロ……ピタッ

サイコロの出た目は『３』だった。

「フハハハハァ！！これで手札の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』のレベルは１０から３へとなった！！オレはレベル３の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を召喚！！」

ズドドドドド…ッ！！

白石直也のフィールドにブラックメタルの鎧甲を身に纏った真紅眼の黒竜が出現した。

「ダークネスメタルっ！？レベル変換に成功するなんてっ！？」

苦の表情を見せる結締智恭。だが、白石直也はこれで終わる様な漢（オトコ）ではなかった。

白石直也は続け手札のカードに手を伸ばし

「更にオレは、魔法カード『トレード・イン』を発動！！」

【トレード・イン】
魔法カード
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「俺は手札のレベル８モンスター『青眼の白龍』を捨て、デッキからカードを二枚ドロー！！」

白石直也はカードを二枚ドローすると、更にその勢いを増していく。

「更に手札から永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』を発動！！」

【未来融合－フューチャーフュージョン】
永続魔法
融合デッキから融合モンスター1体を選択する。デッキから、その融合素材モンスターを墓地に送る。発動から2ターン後、選択した融合モンスターを特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）このカードがフィールドから離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「未来融合の効果でオレが選択する融合モンスターは『Ｆ・Ｇ・Ｄ』（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）！！」

【Ｆ・Ｇ・Ｄ】
星１２　闇属性　ドラゴン族
ＡＴＫ５０００
ＤＥＦ５０００
効果
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。ドラゴン族モンスター５体を融合素材として融合召喚する。このカードは地・水・炎・風・闇属性モンスターとの戦闘によっては破壊されない。（ダメージ計算は適用する）

「『Ｆ・Ｇ・Ｄ』の融合素材はドラゴン族モンスター５体、俺はデッキから『ミンゲイドラゴン』、『真紅眼の飛竜』を２体、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』、『伝説の白石』の計５体を墓地へ送る！！」

白石直也はそれぞれのカードをデッキから墓地へと送る。
そして墓地に送った『伝説の白石』のカードを手に取り

「そして墓地に送られた『伝説の白石』の効果…デッキから『青眼の白龍』を１枚、手札に加えるぅ！！フハハハハァ！！」

【伝説の白石】
星１　光属性　ドラゴン族
ＡＴＫ３０００
ＤＥＦ２５００
効果　チューナー
このカードが墓地に送られた時、自分のデッキから『青眼の白龍』
１体を手札に加える。

白石直也はデッキから『青眼の白龍』のカードを加え、高笑いをした。

白石直也のテンションは今や頂点に達した。

「イクぞ結締っ！！『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果発動！！１ターンに１度、手札か墓地に存在するドラゴン族モンスター１体を特殊召喚するぅ！！」

「っ飛ばして来たな、白石さんっ！？」

「俺は墓地から、『青眼の白龍』を攻撃表示で特殊召喚させるぅ！！我が元に…来いっブルーアイズ！！ッホワイトドラゴン！！！！」

白石直也の叫びと共に、フィールド上に青き瞳を宿した白銀の龍が降臨した。

【青眼の白龍】
星８　光属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２５００

白石直也のフィールドに攻撃力３０００と２８００のモンスターが並ぶ。

青き瞳と紅き瞳…
白銀の龍と漆黒の竜…

光と闇…それぞれが相対する力を放ちながら、眼前の敵である結締智恭に圧倒的な雄々しき雄叫びをあげる。

『グォォォオオオオ！！！！』

「くっ……っ！！！？」
（大ダメージは免れない…っ！？）

結締智恭は目の前の双龍に歯噛みする。

白石直也の２体の圧巻的な龍を前に、観客席からそれを見ていた西条拓夜と成瀬花穂は言葉を失っていた。
普段カードとしか見ていなかったゲームが、ソリッドビジョンとして映し出されたデュエルが、如何に迫力があるか…

僅か数分の間に、２人は魅了されていた。

「更にオレは手札から永続魔法『一族の結束』を２枚発動するぅ！！」

【一族の結束】
永続魔法
自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が１種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。

「オレの墓地には現在、ドラゴン族モンスターしかいない！！よってオレのフィールド上のドラゴン族モンスターの攻撃力は、２枚発動により１６００ポイントアップするぅ！！」

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】
ＡＴＫ　２８００→４４００

【青眼の白龍】
ＡＴＫ　３０００→４６００

「バトルフェイズ！！まずは『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』で、『Ｅ・ＨＥＲＯアナザー・ネオス』に攻撃！！ダークネス・テラ・フレイム！！」

ダークネスメタルドラゴンの放つ漆黒の炎がアナザー・ネオスを一瞬の内に消し炭にした。

結締智恭　ＬＰ　８０００→５５００

「『青眼の白龍』で、結締にダイレクトアタック！！滅びのバースト・ストリーム！！」

ブルーアイズの口から青白く迸る閃光が結締智恭に襲いかかる。
モンスターのダイレクトアタックを受けた結締智恭のライフポイントは残り僅かとなってしまった。

結締智恭　ＬＰ　５５００→９００

「グァァッ！！」

「結締さん！？」

西条拓夜は白石直也が操るモンスターを見つめながら

「凄い…攻撃力４６００の『青眼の白龍』、それに攻撃力４４００の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』…どちらも攻撃力が高すぎる…このままじゃ結締さん…」

「……」

白石直也は「ターンエンドだ！！」と宣言し、結締智恭のターンに移った。

「白石さん…後悔するぜ、俺にトドメを刺せなかった事になっ！！いくぜ、俺のターン、ドロー！！」

結締智恭はドローカードを確認し、

「手札から魔法カード『融合賢者』を発動！」

「っ！？」

【融合賢者】
魔法カード
自分のデッキから「融合」魔法カード1枚を手札に加える。その後、デッキをシャッフルする。

「『融合賢者』の効果で、俺はデッキから『融合』の魔法カードを回収する！」

【融合】

魔法カード
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

結締智恭のデュエルを観ていたマナが西条拓夜と成瀬花穂に言う。

「くるよ、二人とも…」

「え？」「くるって…何が？」

そして西条亨が腕を組ながら二人の質問に答えた。

「よく観ておけ二人とも…始まるぞ、結締の反撃が…！！」

『融合』の魔法カードを手札に加えた結締智恭は

「俺は『E・HERO　プリズマー』を召喚！」

【E・HERO　プリズマー】
星4　光属性　戦士族

ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　１１００
効果
エクストラデッキから融合モンスター１体を相手に見せる。その融合モンスターの融合素材モンスターとしてカード名が記されているモンスター１体を自分のデッキから墓地へ送る事で、このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「そして、プリズマーの効果発動！エクストラデッキから融合モンスター『レインボー・ネオス』を見せて、デッキからその融合素材モンスターである『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』を墓地に送る！」

【レインボー・ネオス】
星１０　光属性　戦士族
ＡＴＫ　４５００
ＤＥＦ　３０００
融合／効果
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋「究極宝玉神」と名のついたモンスター１体
このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。１ターンに１度だけ以下の効果から１つを発動できる。
●自分フィールド上のモンスター１体を墓地に送る事で、相手フィ

ールド上モンスターを全てデッキに戻す。
●自分フィールド上の魔法または罠カード1枚を墓地に送る事で、相手フィールド上の魔法または罠カードを全てデッキに戻す。
●自分のデッキの一番上のカード1枚を墓地に送る事で、相手の墓地のカードを全てデッキに戻す。

【E・HERO　ネオス】
星7　光属性　戦士族
ATK　2500
DEF　2000

デッキからネオスを墓地に送った事で、このターンの間プリズマーはネオスとして扱う事ができる。
結締智恭は手札のカードに手を伸ばし

「魔法カード『融合』を発動！俺は手札のネオスと、レインボー・ドラゴンを融合！」

結締智恭のフィールドにネオスとレインボー・ドラゴンが現れ、互いに眩い光を放ちながら一つになっていく。

「輝け！！究極のHERO、『レインボー・ネオス』を融合召喚！！」

そして結締智恭のフィールドに、白く巨大な翼を身につけた究極のネオスが降誕した。

「『レインボー・ネオス』…攻撃力４５００、ふん…だが俺のフィールドのブルーアイズの攻撃力は４６００！！結締よ、些か力不足なようだな！？」

「そんな事は分かっている…」

結締智恭はフィールド上のレインボー・ネオスを指差し

「『レインボー・ネオス』の第一の効果発動！！自分フィールド上のモンスター１体を墓地へ送る事で、相手フィールド上のモンスターを全てデッキに戻す！俺は自分の場のプリズマーを墓地に送り、白石さんのモンスターを全てデッキに戻す！ビヨンド・ザ・レインボーホール！！」

「な、何ィィイッ！！！？」

レインボー・ネオスが翼を大きく広げると、目の前に巨大な亜空間が広がる。白石直也のフィールドのモンスター達はその亜空間に吸い込まれる様に消えていった。

「お…おのれぇぇ、オレのモンスター達を…」

レインボー・ネオスの効果により、白石直也の場のモンスターは全ていなくなった。そして結締智恭は残った一枚の手札を翳し

「更に手札から魔法カード『貪欲な壺』を発動！！」

【貪欲な壺】
魔法カード
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「俺は墓地のオネスト、アナザー・ネオス、レインボー・ドラゴン、ネオス、プリズマーをデッキに戻し…シャッフル…そして、デッキからカードを2枚ドロー！！」

結締智恭はドローしたカードを確認する。

（一枚目は…『E・HERO　アナザー・ネオス』…二枚目は…っ装備魔法『インスタント・ネオスペース』！？よし！！）

「更に俺は手札から、装備魔法『インスタント・ネオスペース』を発動！『レインボー・ネオス』に装備させる！！」

【インスタント・ネオスペース】
装備魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」を融合素材とする融合モンスターにのみ装備可能。このカードを装備した融合モンスターは、エンドフェイズ時にデッキに戻る効果を発動しなくてもよい。装備モンスターがフィールド上から離れた場合、自分の手札・デッキ・墓地から「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」１体を特殊召喚する事ができる。

「いくぜ、俺のバトルフェイズ『レインボー・ネオス』で、白石さんにダイレクトアタック！！レインボー・フレア・ストリーム！！」

白石直也に衝撃が走る。
攻撃力４５００のダイレクトアタックを受け、白石直也のライフポイントは大ダメージを負った。

白石直也　ＬＰ　６１００→１６００

「おのれぇぇ…」

「俺のターンは終了だ！！白石さん、アンタのターンだ！！」

「凄い…まだデュエルが始まってそんなにターンは経っていないのに…どちらも高火力モンスターのオンパレードだ…！！」

「白石さんはドラゴン族を主軸とした高火力デッキ…結締さんは『Ｅ・ＨＥＲＯ』の融合デッキ…どちらも良い勝負をしています！！」

「あぁ、どちらも強い…自分のターンに、手を詰まらせない…必ず何か行動を起こし、次に繋げている…」

「観ていて、とても参考になります！」

白石直也と結締智恭のデュエルを観て、西条拓夜と成瀬花穂の二人は目を輝かせていた。

「あの二人は強いよ、どちらも自分のデッキに誇りを持っている」

「亨さん…」

「そして同じ位にカード達を信じている。想いが強い分、デッキもそれに答えてくれる事を知っているんだ…あいつ等は」

「…亨さんも、ＯＣＧ研究会のメンバーなんですから、白石さんや結締さん等と同じ位の実力者なんですよね？」

「…そうだと良いけどな」

西条亨は含みのある笑顔を作ると

「さぁ、二人とも…今度は白石が結締を追い込む番だ…」

「追い込むって…でも、白石さんの手札は…『伝説の白石』の効果で手札に加えた八つ星の通常モンスター『青眼の白龍』だけ…フィールドには未来融合と、一族の結束が二枚あるだけ…どうやって…

「おいおい拓夜くん、君は白石のデュエルの何を観てきたんだ?」

「え?」

「ちゃんとあいつは準備はしていたよ…手札のブルーアイズを召喚する為のキーカードを」

「オレの…ターンッ!!ドロー!!」

白石直也はデッキからカードをドローする。

(…ふぅん、ミラーフォースを引いたか…!!)

白石直也の手札は『青眼の白龍』と『聖なるバリアーミラーフォース－』の二枚。
そしてフィールド上にはモンスターはなく、魔法・罠カードゾーンには『未来融合－フューチャー・フュージョン』と『一族の結束』が二枚のみであった。

（結締よ…俺のブルーアイズとレッドアイズを同時に除去した事は褒めてやる…だが、所詮はその程度！！俺のドラゴンは止まらない…！！）

「オレのターンのスタンバイフェイズ、墓地に眠る『ミンゲイドラゴン』の効果が発動される！！」

「っ！？…『ミンゲイドラゴン』だと！？」

【ミンゲイドラゴン】
星２　地属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　２００
効果
ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは２体分のリリースとする事ができる。自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果は自分の墓地にドラゴン族以外のモンスターが存在する場

合には発動できない。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「墓地にドラゴン族しか存在せず、自分フィールド上にモンスターも存在しない場合、墓地からこのカードを攻撃表示で特殊召喚する！来いっ『ミンゲイドラゴン』！！」

白石直也のフィールドに南米の文化が色濃い、変わった姿のドラゴンが現れる。

「更に『ミンゲイドラゴン』の効果、こいつはドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、2体分のリリースとする事ができる！！」

「な、何だって…っ！？」

「オレは『ミンゲイドラゴン』を2体分のリリースとし、手札から『青眼の白龍』をアドバンス召喚！！」

ドドドドドドド…ッ！！！！！

白石直也のフィールドに、青き瞳を輝かせて最高の攻撃力を誇る伝説の龍が召喚される。

「更にブルーアイズの攻撃力は、オレのフィールドの『一族の結束』の効果により、１６００ポイントアップする！！」

【青眼の白龍】
ＡＴＫ　３０００↓４６００

「攻撃力がっ…『レインボー・ネオス』を超えた！？」

「ふぅん…結締よ、先のターンで俺のモンスターを戻すのではなく、俺の魔法・罠を戻しておくべきだったな！！」

「くっ…しまった！？」

「フフフ…オレのターンのバトルフェイズ！！いけぇ、ブルーアイズよ！！結締の最強のＨＥＲＯを粉砕せよ、滅びのバースト・ストリーム！！」

轟ッ！！

ブルーアイズのバースト・ストリームが、結締智恭のレインボー・

ネオスを打ち破った。

結締智恭　ＬＰ　９００→８００

「くっ…『レインボー・ネオス』に装備された『インスタント・ネオスペース』の効果発動!!」

「っ!?」

「装備モンスターがフィールドから離れた場合、自分の手札・デッキ・墓地から、ネオスを1体特殊召喚する!俺はデッキから…頼む、ネオス!!」

結締智恭のフィールドにネオスが守備表示で現れる。

「ふぅん…しぶといＨＥＲＯだ…オレはリバースカードを1枚セットし、ターンエンド」

白石直也のターンが終了する。
そして結締智恭のターンに移った。

「凄いです…どちらもモンスターが絶えません！！」

「あぁ…必ず逆転の一手を備えている…白石さんに結締さん、本当に強いよ…！！」

西条拓夜は鞄から自分のデッキを取り出し、それを見つめる。

（俺のデッキで…俺の組み上げた戦術で…俺はこの人達に勝てるんだろうか？）

不安を覚える西条拓夜…だがそれを払拭させるかの様に、マナが西条拓夜に言った。

「たくや、大丈夫だよ」

「…え？」

「不安なんでしょ？自分のデッキであの二人に勝てるのかどうかが」

「…白石さんに結締さん、観ていて本当に凄いと思うよ…だから…余計に不安に思うんだ…俺で勝てるのか？って…」

「拓夜さん…」

「たくや、さいじょおも言ってたでしょ？自分のカードを思いやれば、カードはそれに答えてくれるって、だからたくやも信じてあげなくちゃ！そしたらきっと答えてくれるよ！あなたのデッキなら…ね？」

ニコッと微笑むマナ。

西条拓夜は再び自分のデッキを見つめ、

「…そう…ですね、ごめんな、不安がらせる事を言って」

そう自分のデッキに話しかけた。

結締智恭は焦っていた。

白石直也のフィールドには攻撃力４６００の『青眼の白龍』。
更に永続魔法『一族の結束』が二枚も張ってあり、『未来融合－フューチャー・フュージョン』も１ターンを経過している。
このままでは次の白石直也ターンに、融合モンスター『Ｆ・Ｇ・Ｄ』が特殊召喚されてしまう。
更に気になるのは魔法・罠カードゾーンにある一枚の伏せカード。
モンスターの召喚に反応する罠カードなら終わりだ。

結締智恭の手札は一枚。
それはモンスターカード『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　アナザー・ネオス』。
デュアル召喚させる事で、カード名を「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」にする事ができるカードだ。

だがそれでは攻撃力４６００のブルーアイズには勝てない。

（…確かに今のこの状況はヤバい、けど…俺は最後まで諦めない！！このドローで、流れを変えてみせる！！）

「行くぜ、俺のターンだ！！…カードドロー！！」

結締智恭がドローカードを確認する。

（…っ！？『Ｎ・グラン・モール』…）

【Ｎ・グラン・モール】
星３　地属性　岩石族
ＡＴＫ９００
ＤＥＦ３００
効果
このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わず相手モンスターとこのカードを持ち主の手札に戻す事ができる。

（グラン・モールは戦闘を行う事で自身と相手モンスターを手札に戻す事ができる強力なカード…今の俺のフィールドにはネオスがいる…今ならグラン・モールとコンタクト融合して、『Ｅ・ＨＥＲＯ　グラン・ネオス』を融合召喚する事ができる…けど、コンタクト融合をすると融合素材モンスターは墓地へは行かず、デッキに戻ってしまう…今の俺の手札にはアナザー・ネオスしか…どうする…どうするよ…）

悩みに悩んだ結締のとった行動は

「俺は…『N・グラン・モール』を召喚!!」

両肩にドリルを装着した可愛らしいモグラが召喚された。

「グラン・モール…だとっ!?」

「俺は…くっ…!!」

「どうした結締よ?お前の得意のコンタクト融合はしてこないのか?それともグラン・モールで攻撃してくるか?」

白石直也が挑発気な発言で結締智恭を煽る。

白石直也の伏せカードは『聖なるバリアーミラーフォースー』。

相手モンスターの攻撃がトリガーとなる強力な迎撃カードだ。

(白石さんはグラン・モールの召喚に対し、何もアクションを起こさなかった…白石さんもグラン・モールが強力なカードだという事を知っているにも関わらず…だ、つまりあの伏せカードは召喚に対する罠ではなく…攻撃に対する罠!?)

更に結締智恭は考える。

（今のこの状況でグラン・モールが除去されれば、俺の負けは確定してしまう…このままターンを終了しても…パワー差がありすぎる白石さんのモンスターが俺のネオスを破壊するのは目に見えている…くっそぉぉおっ！？）

「俺は…ターンを終了する…」

「オレのターン、ドロー！！」

白石直也のターンに移り、カードをドローする。そしてスタンバイフェイズ時…

「未来融合の効果発動ぉ！！エクストラデッキから『F・G・D』を融合召喚！！」

白石直也のフィールドに五つの首を連ねる竜が出現する。

「っ遂に来たか…ファイブゴッド…っ！？」

「フハハハハァッ！！『F・G・D』もドラゴン族！！『一族の結

束』の効果により、その攻撃力を１６００ポイントアップさせる！！」

【Ｆ・Ｇ・Ｄ】
ＡＴＫ　５０００→６６００

「攻撃力っ６６００！？」

「ふぅん…ここで厄介なのがグラン・モールといった所か、…俺のフィールドにモンスターは2体、このまま2体で攻撃すればブルーアイズかファイブゴッド…どちらか1体がバウンズされ、お前に戦闘ダメージを与える事はできない…」

「……っ」

結締智恭に緊張が走る。

「だが結締よ…俺がモンスターを引き当てる、といった考えは浮かばなかったのか？」

「っ！？」

白石直也の発言に結締智恭の目は大きく見開かれる。

「オレは特殊召喚しただけであって、まだモンスターを通常召喚していない…オレは手札より『ミラージュ・ドラゴン』を召喚！！」

【ミラージュ・ドラゴン】
星４　光属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　１６００
ＤＥＦ　６００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、相手はバトルフェイズ中に罠カードを発動する事はできない。

「ミラージュ…ドラゴンッ！！」

「ふぅん、これで決める！！まずは『ミラージュ・ドラゴン』で、グラン・モールに攻撃！！」

白石直也のドラゴンがグラン・モールに襲いかかる。

「くっ…グラン・モールの効果発動！！戦闘を行う互いのモンスターを手札に戻す！」

フィールドにグラン・モールとミラージュ・ドラゴンが居なくなり、

白石直也は勝利を確信する。

白石直也の猛攻は止まらない。
続けて自分フィールド上のモンスターに指示を送る。

「『F・G・D』！！ネオスに攻撃ダァァ！！」

『F・G・D』それぞれの首がネオスを捉え、一斉に攻撃を加える。

『グォォッ！！』

「ネオスッ！？」

ネオスが消滅し、結締智恭のフィールドには何もなくなってしまった。

「フハハハハァッ！！『青眼の白龍』よ、結締にダイレクトアタァック、滅びのバースト・ストリーム！！」

そしてトドメと言わんばかりにブルーアイズの攻撃が結締智恭を直に襲った。

「うわぁぁあっ！？」

結締智恭　ＬＰ　８００→０

「フハハハァッ！！オレの圧倒的勝利だ！！」

「ちっくしょぉ…負けちったぜ…」

勝ち誇る白石直也と、ガックリとうなだれる結締智恭。

二人のデュエルが終了し、二人を乗せていた台がゆっくりと下に降りていく。

観客席で二人のデュエルを観戦していた西条拓夜等４人は、白石直也と結締智恭の下へと向かう。

「二人とも、お疲れさん」

「良いデュエルだったよ！」

西条亨とマナからの言葉に、勝者である白石直也は「いやぁスカッとしたぜ！」と満足そうな笑みを浮かべる。

「結締さん、残念でしたね」

「観ていてとても楽しかったです！」

西条拓夜と成瀬花穂の二人もそれぞれに声をかけた。

「ありがとな、二人とも！」

返事をする結締智恭の表情は、デュエルに負けた悔しさなど忘れてしまったかの様な清々しい顔だった。

「今度はこのデュエルフィールド、拓夜くんや成瀬さんが使ってみるかい？」

西条亨は二人に尋ねてみる。

「えっ！？」

「良いんですかっ！？私やりますやります！是非やらせて下さい！！」

嬉しさの余り、ぴょんぴょんと飛び回る成瀬花穂。

「じゃあ拓夜くんと成瀬さんで使ってみなよ」

西条亨は西条拓夜に声をかけると、西条拓夜は

「あの、すいませんが…亨さんがデュエルしてもらっても良いですか？…俺、さっきの白石さんと結締さんのデュエルを観てて、自分のデッキで一つ思い付いた事があったんで…その間にデッキ調整をしたいんです」

西条拓夜からの言葉に、西条亨は「そうか」と呟くと、成瀬花穂に向かって

「じゃあ成瀬さん、俺とデュエルだ！」

「はい！よろしくお願いします！」

西条亨と成瀬花穂はそれぞれデュエルフィールドに設置された台に立つと、二人を持ち上げるかの様にその台が上昇していく。

残った四人は観客席へと移り、対峙する西条亨と成瀬花穂を見守る。

「成瀬さん、高い所は大丈夫か？」

対戦者である西条亨は成瀬花穂に聞いてみる。

「はい、大丈夫です！」

「そうか…」

西条亨と成瀬花穂は手にしていたデッキをそれぞれ机の上にセットし、お互いにデュエルがスタンバイされる。

そんな中、観客席に座る西条拓夜が白石直也に質問した。

「あの…白石さん」

「ん、何だ？」

「西条亨さんって…二人みたいにデュエルは強いんですか？」

西条拓夜からの質問に白石直也は腕を組み、少し悩みながら答える。

「別に俺達は特別、デュエルが強いという訳じゃない…お前が俺達に何をどう期待してるかは知らないが、何だ…お前はデュエルが強

くなりたいのか？」

「…それもあります…けど、どうしたら強くなれるのか…」

西条拓夜の反応に、白石直也は

「ただ勝ち続ける事だけが…デュエルが強いという事じゃない」

「…？」

「これは俺の経験論だがな…ただ闇雲にデュエルをして、ただそれに勝ち続けた所で…得られるモノは大した事はない」

「え…？」

白石直也の言っている事がどういう事なのか西条拓夜には理解できない。

「目的を持ったデュエル…いや、互いにやって楽しいと思えるデュエルをする事ができる奴が、俺は本当の強さだと思う…とは言っても、”こっち”じゃそれは当てはまりそうもないが…」

含みのある白石直也の言葉にますます困惑する西条拓夜。

「互いに楽しいと思えるデュエル…？」

「まぁ…そう言った意味じゃ西条のデュエルは観ていて参考になるだろうな、お前がデュエルで何の強さを求めているかは知らんが、他人のデュエルから学べるモノは大きい…」

「はい」

西条拓夜は返事をすると、デュエルフィールドで向き合う西条亨と成瀬花穂を見つめる。

（成瀬さんは…前のデュアル召喚を主軸としたデッキじゃなく、新しいデッキだと言ってた…亨さんのデッキはどんなのかは知らないけど…このデュエル、俺にとって…見逃す訳にはいかない！！）

西条亨と成瀬花穂は互いに手札を五枚引き、そして

「「デュエル！！」」

デュエルを開始した。

先攻　西条亨　ＬＰ８０００
後攻　成瀬花穂　ＬＰ８０００

「先攻は俺がもらう…俺のターン、ドロー！」

西条亭はカードをドローし、そのカードを確認すると「…そうか、お前が出てくれるか…」と、まるでカードと話す様な仕草をする。

「俺はモンスターを一体セットし、ターンエンド！」

西条亭のフィールドには裏側守備モンスターが一体のみ。
成瀬花穂は西条亭のエンド宣言を聞き、

「では、私のターンですね！ドロー！」

元気な声でカードをドローした成瀬花穂はドローしたカードを手札に加えて少し考えた。

（う～ん…えっと…まずはどれから出していこうかな？）

二人がデュエルをしている最中、観客席に座っていたマナは

「さいじょお～、かほ～、頑張ってー！！」

と、手を振りながら声援を送る。
マナの隣に座っていた結締智恭はマナに尋ねた。

「マナちゃん、今回は西条ちゃんと一緒に行かなくて良かったのか？」

「…？」

結締智恭の言葉を聞き、西条拓夜はそちらを向く。

（一緒に…って？）

だがマナや結締智恭は西条拓夜の様子に気づく事なく話しを進める。

「さいじょおは、『今回はお前は応援していてくれ』って、だから今回のデュエルは私はお休みだよ！」

「って事は…今回の西条ちゃんのデッキには『ブラック・マジシャン』は入ってないのか…」

（『ブラック・マジシャン』？…何でマナさんと『ブラック・マジシャン』が関係しているんだ？）

「そうだね、今回さいじょおが使うデッキには『お師匠サマ』は入ってないよ」

「おいおい…大丈夫なのか西条ちゃん？今まで西条ちゃんが『ブラック・マジシャン』を入れてないデッキを使うなんざ滅多に無かったってのに」

「まぁ…私はさいじょおが使っているデッキは知ってるから、余り詳しくは言えないケド…でも大丈夫だよ！どんなデッキでも、さいじょおは自分のカード達を信じてるから！」

屈託のない笑顔で話すマナ。

結締智恭は「そうだな」と答え、デュエルをする二人に向き直った。

（亨さん…マナさん…いや、この研究会の人達って…一体？）

西条拓夜の中で、疑問は膨れ上がるばかりだった。

成瀬花穂は「決めました！」と声を出しモンスターを召喚する。

「私は『Ｄ．Ｄ．アサイラント』を召喚します！」

【Ｄ．Ｄ．アサイラント】
星４　地属性　戦士族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊された時、そのモンスターとこのカードをゲームから除外する。

成瀬花穂のフィールドに巨大な剣を手にした女戦士が現れる。

「ワァァァ…！！凄いです！この机にカードをセットする事で、そのカードを机が認識してソリッドビジョンが映し出されているんですね！！」

成瀬花穂は自分の召喚したモンスターに更に感激し、興奮覚めやらぬ様子でデュエルを続行する。

「いきます！アサイラントで、亨さんのセットモンスターを攻撃！」

成瀬花穂のモンスターが西条亨の裏側守備表示モンスターを攻撃し、破壊した。

「フッ…戦闘破壊された俺のモンスター『ジャイアントウィルス』の効果を発動！」

【ジャイアントウィルス】
星２　闇属性　悪魔族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１００
効果
このカードが戦闘によって墓地へ送られた時、相手に５００ダメージを与える。さらにデッキから同名カードをフィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚してもよい。その後デッキをシャッフルする。

西条亨のフィールドに黒い靄が漂う。

「『ジャイアントウィルス』が戦闘破壊され墓地に送られた時、相手ライフに５００ポイントのダメージを与える！」

成瀬花穂　ＬＰ８０００→７５００

黒い靄が成瀬花穂を覆い、成瀬花穂のライフポイントを削る。

「キャァッ！？『ジャイアントウィルス』でしたか、という事は…っデッキから！？」

「そう、そしてデッキから『ジャイアントウィルス』を2体、攻撃表示で特殊召喚する！」

西条亨のフィールドに漂う靄が二つに分離し、フィールド上に二体の『ジャイアントウィルス』が並ぶ。

「う～ん…何かこのままだとマズい感じがします…ケド、私は諦めません！私はリバースカードを一枚セットして、ターン終了します！」

成瀬花穂がエンド宣言をし、西条亨のターンに移行する。

「なら…いくぜ！俺のターン、ドロー！」

西条亨はデッキからカードをドローする。

すると成瀬花穂は…

「亨さんの手札は六枚、私は今このタイミングでリバースカードを発動します！罠カード『ダスト・シュート』！」

【ダスト・シュート】

罠カード

相手の手札が４枚以上ある時に発動する事ができる。相手の手札を確認してモンスターカード１枚を選択し、そのカードを持ち主のデッキに戻してシャッフルする。

「『ダスト・シュート』！？成瀬さん、なかなかやらしいカードを使うじゃないか？」

「このカードは相手の手札が４枚以上ある時に発動できます！相手の手札を確認し、その中にモンスターカードがある場合そのモンスター１枚を選択し、デッキに戻します！さぁ亨さん、手札を見せて下さい！」

「フッ…」

西条亨は軽く笑みを浮かべ、ソリッドビジョンを利用して成瀬花穂に手札を公開した。

西条亨の手札

ジャンク・シンクロン
クイック・シンクロン
ボルト・ヘッジホッグ
マシュマロン
増援
停戦協定

「う〝っ…今この状況でチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』は厄介です…仮に『ジャンク・シンクロン』をデッキに戻しても、手札の魔法カード『増援』が『ジャンク・シンクロン』をサーチしてしまいます…亨さん！ズルいです！こんな良い手札！」

「えぇぇっ！？んな事言われても…」

「うぅぅ…こうなったら手札の『クイック・シンクロン』をデッキに戻して下さい！」

「フッ…わかった」

西条亨は手札の『クイック・シンクロン』をデッキに戻した。

「亨さん、私に『やらしいカードを使うじゃないか』って言いましたケド、亨さんの手札の方がやらしいじゃないですか！」

「ハハハ…まぁその…何だ…成瀬さんの期待に答えてあげるよ…俺、最近優しいから」

「ヒィッ！？」

西条亨は手札のカードに手を伸ばし

「俺はチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

【ジャンク・シンクロン】
星３　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　５００
効果／チューナー
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動！このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル２以下のモンスター１体を守備表示で特殊

召喚する！墓地から『ジャイアントウィルス』を守備表示で特殊召喚！」

最初に破壊された『ジャイアントウィルス』が現れ、西条亨のフィールドに計四体のモンスターが並ぶ。

（手札の『停戦協定』…せめて初手に引くことができていれば、このターン成瀬さんに大ダメージを与える事ができたのにな…でも、こいつは切り札だ…）

西条亨は手札を確認し終えると

「俺は守備表示の『ジャイアントウィルス』に『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

西条亨のフィールドのモンスター達が星になり、新たなモンスターが現れる。

「集いし想いが、新たな力を呼び起こす！光指す道となれ！シンクロ召喚、いでよ『ジャンク・ウォリアー』！！」

【ジャンク・ウォリアー】
星５　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１３００
シンクロ／効果

「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

西条亨のフィールドにシンクロモンスターが現れる。
そして西条亨は『ジャンク・ウォリアー』を指差し

「『ジャンク・ウォリアー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、こいつの攻撃力は、自分フィールド上のレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！」

「亨さんのフィールドにはレベル2の『ジャイアントウィルス』が2体…って事はっ！？」

「そう、『ジャンク・ウォリアー』の攻撃力は２０００ポイントアップする！」

【ジャンク・ウォリアー】
ＡＴＫ　２３００→４３００

「いくぜ、俺のターンのバトルフェイズ！『ジャンク・ウォリアー』で『Ｄ．Ｄ．アサイラント』に攻撃！」

西条亨のモンスターが成瀬花穂のモンスター目掛けて突進する。

「スクラップ・フィスト！！」

『ジャンク・ウォリアー』の拳が『Ｄ．Ｄ．アサイラント』を襲い、破壊した。

成瀬花穂　ＬＰ　７５００→４９００

「ダメージが大きいですっ…ケド、ここで『Ｄ．Ｄ．アサイラント』の効果を発動します！」

成瀬はアサイラントのカードを手に取り

「このカードを戦闘破壊したモンスターとこのカードをゲームから除外します！」

「フッ…厄介なモンスターだ…」

西条亨と成瀬花穂は互いのモンスターをそれぞれゲームから除外する。

「だがまだ俺のフィールドには『ジャイアントウィルス』が２体残っている！いけ、ウィルス２体でダイレクトアタック！」

西条亨の『ジャイアントウィルス』２体が成瀬花穂に攻撃し、成瀬花穂のライフポイントは大幅に削られた。

成瀬花穂　ＬＰ　４９００→２９００

「くぅぅ…キツいです…」

「俺はリバースカードを一枚セットして、ターンエンド！」

西条亨はエンド宣言し、成瀬花穂のターンに移る。

「亨さん、強いです…攻撃力が上昇したシンクロモンスターは除去できても…まだ手札に次の一手が残ってましたし、そのリバースカードもダメージを与える『停戦協定』ですよね？…こんな状況、一体どうすれば…」

デュエル開始時より、明らかにテンションが下がっている成瀬花穂。

西条亨はそんな成瀬花穂に声をかけた。

「成瀬さん、諦めては駄目だ！」

「ぅぅ…」

「自分のカード達を信じるんだ！大丈夫…そのデッキ、いや…そのカード達はきっと成瀬さんに応えてくれる！」

「亨さん…」

「さぁ、成瀬さん！キミのターンだ！」

成瀬花穂は自分のデッキを見つめ直し、

「お願い…私の気持ちに応えて、私のターン！！ドロー！！」

カードをドローする。

そしてドローカードを確認した成瀬花穂は

「…っ！？…いきますよ、亨さん！」

「…カード達が応えてくれたか、来い！！成瀬さん！！」

成瀬花穂はドローしたカードを早速使用した。

「私は永続魔法『次元の裂け目』を発動します！」

【次元の裂け目】

永続魔法

墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。

成瀬花穂の発動した永続魔法の効果で、デュエルフィールドの足下の空間が割れはじめた。

「『次元の裂け目』…っ!?墓地へ送られるモンスターをゲームから除外する永続魔法っ!?」

「そして私は…手札から『ガーディアン・エアトス』を攻撃表示で特殊召喚します!!」

成瀬花穂が掲げたカードが光り輝く。

そして、成瀬花穂のフィールドに白き羽が舞い、成瀬花穂を守護するモンスターが光臨した。

【ガーディアン・エアトス】
星８　風属性　天使族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
効果
自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地に送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを3体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター1体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

「ガーディアン…エアトス…！？」

「っ！？あのカード…」

西条拓夜は成瀬花穂が召喚したモンスターを見て嬉しく思った。

（あの時、買いに行ったカード…成瀬さん）

「成瀬さん、頑張れーっ！！」

観客席に座る西条拓夜からの声援を受けて、成瀬花穂はとても嬉しそうな表情で

「はいっ！！拓夜さん、観ていて下さい！！一緒に頑張ろ、エアトス！！」

『ハッ！！』

成瀬花穂の呼びかけに答える様に、その翼を大きく広げるエアトス。

白き守護者の羽が舞うフィールドで、二人のデュエルは更なる熾烈な戦いを迎える。

「私は手札から装備魔法『黒いペンダント』を発動！エアトス、受け取って！！」

【黒いペンダント】
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。このカードがフィールドから墓地に送られた時、相手に５００ポイントのダメージを与える。

エアトスの首に黒いペンダントが装着される。

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００→３０００

「攻撃力を増やしてきたか…」

西条亨は成瀬花穂のプレイングを観察している。

「そして、エアトスの効果を発動します！エアトスに装備されている装備魔法カードを墓地に送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを3体までゲームから除外します！！聖剣のソウル！！」

「何っ！？」

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　３０００→２５００

「そしてゲームから除外したモンスター1体につき、エアトスの攻撃力はエンドフェイズ時まで５００ポイントアップします。」

西条亨の墓地から魂となった『ジャンク・シンクロン』と『ジャイアントウィルス』の2体がエアトスの下へと集う。
そして2体のモンスターの魂は、エアトスに吸収されていった。
更に『黒いペンダント』の効果で、西条亨に５００ポイントのダメージが与えられた。

西条亨　ＬＰ８０００→７５００

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００→３５００

「くっ…俺はこの瞬間、リバース罠を発動！『停戦協定』！」

【停戦協定】
罠カード
裏側守備表示モンスターを全て表にする。この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。フィールド上の効果モンスターの数だけ５００ポイントのダメージを相手に与える。

「『停戦協定』は、フィールド上の効果モンスターの数だけ相手に５００ポイントのダメージを与える！今のフィールド上には三体の効果モンスター！よって成瀬さんに１５００ポイントのダメージを与える！」

成瀬花穂　ＬＰ　２９００→１４００

「くぅっ…痛いです…ケド、今ならへっちゃらです！亨さん、覚悟っ！！」

「っ！？」

「『ガーディアン・エアトス』で、亨さんの『ジャイアントウィルス』に攻撃！精霊のオペラ！！」

エアトスの放った攻撃が攻撃表示のウィルスに直撃し、西条亨はライフポイントを削られた。

西条亨　ＬＰ７５００→５０００

「くっ…永続魔法『次元の裂け目』により、俺のウィルスの効果が適用されないっ！？」

西条亨のライフポイントは５０００。
成瀬花穂のライフポイントは１４００。

成瀬花穂はデュエルの流れが変わりだした事を感じながら「私のターンは終了です！」と、エンド宣言した。

「フッ…どうやらその『ガーディアン・エアトス』が成瀬さんのデッキのエースの様だな…」

「はい、この子は私にとって特別な子です！」

（私が初めて、拓夜さんと一緒に買ったカードだから…）

「なかなか良い効果だ…だが、俺は諦めない！俺のターン、ドロー！」

西条亨はデッキからカードをドローする。
そしてドローしたカードを早速発動した。

「俺は手札から『光の護封剣』を発動！」

【光の護封剣】
魔法カード
相手モンスターは全て（相手ターンで数えて）3ターンの間攻撃できない。このカードを発動した時、裏側守備表示で存在する相手モンスターを全て表側表示にする。

「更に俺は、モンスター1体をセット！『ジャイアントウィルス』を守備表示に変更し、ターンエンド！」

成瀬花穂のターンに移る。

「私のターンです！ドロー！」

成瀬花穂はドローしたカードを手札に加え、フィールドを見る。

現在、西条亨のフィールドには2体の守備モンスターと光の護封剣

が存在し、こちらから攻撃を仕掛ける事ができない。

「では私も、手札からモンスター1体をセットします！」

成瀬花穂のフィールドに裏側守備表示のモンスターが現れる。

「私のターンは終了です、さあ次は亨さんのターンです！」

「フッ…なら…いくぜ、俺のターン！」

西条亨がデッキからカードをドローする為に、デッキトップに触れた時、

キィィィィィィ……ン…

「…っく！？」

西条亨は一瞬、苦い表情を作ったが直ぐに素に戻し、カードをドローした。

「ドローッ！！……っ！？」

西条亨はドローしたカードを見て、驚いた表情を見せる。

「お前が…来てくれたのか？……そうか、さっきのドローの時の耳鳴りは、お前が呼んでいたんだな…」

西条亨が自分の手札と話している姿を見て、対戦者である成瀬花穂は首を傾げた。

（亨さん…一人で何やってるんでしょうか？素であんな事やっているんだとしたら…流石に私も引いちゃいますよ…）

「ふぅん…エアトスか、相手の墓地のモンスターをゲームから除外し、自身の攻撃力を増加させる効果…更に永続魔法『次元の裂け目』により、互いのモンスターは墓地へは送られず、ゲームから除外される……なる程な、これが【次元エアトス】と言われるデッキか…」

観客席からデュエルを観戦していた白石直也が、成瀬花穂の戦術を観てそう呟く。

「次元…エアトス…ですか？」

隣に座る西条拓夜が白石直也の言葉に反応する。

「そう、エアトスは自分の墓地にモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚する事ができるモンスター、これをサポートするには、自分の他のモンスター達は除外するに有利なカード達を選出し、魔法・罠カードもそれらを補うカード達で構成されているデッキの事だ…」

「…つまりは、除外デッキって事ですか？」

「一応その部類に入る、だが成瀬の今までの展開を観ていると…ま

だその力を存分に発揮できていない様だ…」

「デッキを組んだばかりと言ってましたからね…」

「ふぅん…だが、それでも西条の奴を苦しめているのは確かだ」

「ええ、亨さんのデッキは戦闘破壊され墓地に送られた時に発動する効果モンスター達、そして、墓地から特殊召喚するモンスター達…それらを合わせてシンクロ召喚していくデッキみたいです…除外されたら、対策カードがない限り、ジリ貧に終わってしまう…」

「あぁ…さて、西条の奴がここからどう動くか、観させてもらうぞ」

白石直也と西条拓夜がそれぞれの意見を口にする。
それを聞いていたマナは

「終わっちゃう…」

「え？」「？」「何がだ？マナちゃん？」

結締智恭、白石直也、西条拓夜はマナの呟く様な声を聞き、マナに質問する。

「終わっちゃう…って、どういう事ですか？」

マナはデュエルフィールドに立つ西条亨を見つめながら

「さいじょおが…勝つよ、このターンで…」

「何っ!?」「おぃおぃマジかよ!?」「そんな…っ!?」

三人はデュエルフィールドの方に向き直る。

（さいじょお…引いたんだね……三幻神を…）

西条亨は自分フィールドと手札を見つめる。

現在の西条亨のフィールドには守備表示の『ジャイアントウィルス』とセットモンスター『マシュマロン』、そして魔法カード『光の護封剣』。

手札は3枚…

『ボルト・ヘッジホッグ』

『増援』

そして、ドローして引き当てたカード『オベリスクの巨神兵』。

西条亨は目を閉じ、これからの戦局をシュミレートする。

（手札の魔法カード『増援』を使い、デッキから戦士族モンスター『マジック・ストライカー』を手札に加え、自身の効果で特殊召喚…そして3体のモンスターをリリースし、手札から神を召喚!そして成瀬さんのエアトスに攻撃すれば……だが…）

対する成瀬花穂は現在のフィールドを確認する。
攻撃力２５００を誇る『ガーディアン・エアトス』、そしてセットモンスター『異次元の戦士』、永続魔法『次元の裂け目』。

成瀬花穂は対峙する西条亨をチラッと見る。
目を閉じ、少し顔を俯けるその姿は何か迷っている様にも感じられた。

（亨さん…どうしたんでしょうか？さっきの様子からして、キーカードを引いた感じでしたけど、もしかしたら私…このターンで負けちゃいますかね？）

成瀬花穂は自分のモンスター『ガーディアン・エアトス』を見る。

（この子を主軸としたデッキを組んではみましたが、やっぱり上手くデッキが回転していかないです…もっと色んな手段があるはずなんですが、まだデッキの完成度は低いみたいです…）

「亨さん！」

成瀬花穂は考え込む西条亨に声をかける。

「？」

「亨さん、このターンでデュエルを決めてみて下さい」

「っ！？…成瀬さん、何を…！？」

「亨さんとデュエルしてみて何となくですが分かりました…まだまだ今の私じゃ、エアトスを使いこなす事ができない…」

「…成瀬さん」

「だからといって、エアトスを諦める訳じゃないです…このデュエルを期に、私とエアトスはもっともっと強くなってみせますから！！」

ニコッと微笑む成瀬花穂。
そんな成瀬花穂と意を同じくしたのか、ソリッドビジョンで映し出されたエアトスも頷いた。様に西条亨には見えた。

「…そうか、成瀬さん…なら俺のデッキ最強を誇るカードで、このデュエルに終止符を打つ！！いくぞ、成瀬さん！！」

「はいっ！！」

西条亨　ＬＰ　５０００
成瀬花穂　ＬＰ　１４００

「まずは手札の魔法カード『増援』を発動！！」

【増援】
魔法カード
自分のデッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加える。

「俺は『増援』の効果でデッキからレベル３の戦士族モンスター『マジック・ストライカー』を手札に加える！」

【マジック・ストライカー】
星３　地属性　戦士族
ＡＴＫ　６００
ＤＥＦ　２００
効果
このカードは自分の墓地に存在する魔法カード１枚をゲームから除外し、手札から特殊召喚する事ができる。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。

「そして俺は…墓地の魔法カード『増援』をゲームから除外し、手札に加えた『マジック・ストライカー』を特殊召喚する！」

西条亭のフィールドに小さな戦士が現れる。
これで西条亭のフィールドには3体のモンスターが並んだ。

観客席の西条拓夜は、西条亭のプレイングを観察しながら

「『マジック・ストライカー』…亨さん、このターンでどうやって勝負を決めるんだよ…？」

そんな西条拓夜に答える様に、隣に座る白石直也や結締智恭が言う。

「西条ちゃんのフィールドに…3体のモンスター、更に西条ちゃんはこのターン…まだモンスターの召還を行っていない！！」

「あぁ…間違いない、マナちゃんの言うとおりだ、もし引いたカードがあれなら…」

「あれって？」

「…観ていれば分かる、いいか拓夜…よく観ておけ…神の姿を！！」

「っえ！？」

「……さいじょお…」

「さぁいくぞ、『ジャイアントウィルス』『マシュマロン』『マジック・ストライカー』の3体をリリース!!」

西条亨の3体のモンスターがそれぞれ巨大な渦に呑まれる。
ソリッドビジョンではあるが、辺りに荒々しい暴風が巻き起こる。

「キャァッ!?」『っ!?』

轟ッ!!!!!

「顕現せよっ!!、大地の神!!『オベリスクの巨神兵』!!!!!」

【オベリスクの巨神兵】
星10　神属性　幻神獣族

ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　４０００
効果
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター3体をリリースして召喚しなければならない。このカードの召喚は無効化されない。このカードが召喚に成功した時、魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にできない。このカードは特殊召喚した場合エ

ンドフェイズ時に墓地へ送られる。自分フィールド上のモンスター2体をリリースする事で、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃宣言できない。

ドドドドドドド……ッ！！！！

「…ァ…っ！？」

「な…何だよ…あのモンスターは…っ！？」

「モンスター…いや、それは違うぞ、拓夜」

「あれが…世界で三枚しか存在しない内の一つ、神のカード『オベリスクの巨神兵』…っ！！」

成瀬花穂の前に、成瀬を見下ろす様にして超が付く程の巨大な体格をした巨神が顕現した。

その体から発せられる覇気、闘気ともとれる威圧感がフィールドを包み込む。

「成瀬さん…これがデ○エルモンスターに存在する三幻神の内の1体、オベリスク！！」

『ゴァァアア！！！！！』

「…ァ……ァァ……」

成瀬花穂はオベリスクを見上げ、言葉を失う。
手が、足が震える。竦む。

「オベリスクの攻撃力は４０００、成瀬さんのフィールドのモンスター『ガーディアン・エアトス』の攻撃力は２５００…その差は１５００！！」

成瀬花穂のライフポイントは１４００、もしオベリスクの攻撃がエアトスに炸裂すれば、１５００のダメージが入り西条亨の勝利に終わる。

西条亨は腕を組み、怯える成瀬花穂を見ながら

「成瀬さん…サレンダーしろ」

「……っ！？」

「ソリッドビジョンとはいえ、神の攻撃は成瀬さんの想像を上回る…」

「わ…私は…だ、大丈夫ですっ…大丈夫ですから…」

怯えながらも、あくまでデュエルを続行する姿勢を見せる成瀬花穂に、観客席にいたマナが声をあげた。

「駄目っ！！かほ、サレンダーして！！」

「っ！？…マナ…さん」

「神を侮らないで！！さいじょおの言う通り、神の攻撃はかほの想像している以上に精神にくるダメージが大きいのっ！！再起不能なんてザラじゃないんだよっ！！」

「成瀬さん…」

「かほ、サレンダーして！！」

デュエルフィールドに立つ成瀬花穂は自分フィールド上の『ガーディアン・エアトス』を見つめる。

「エアトス…」

するとエアトスが成瀬花穂の前に立ち、その手と翼を広げた。
その姿はまるで、成瀬を守護する構えを現している様にもみえた。

「エアトス…」

西条亨は主を守り、貫く姿勢を見せるエアトスを見て

「そうか…エアトス、お前…守ってくれるんだな」

『ハッ！！』

ガーディアン…

主を絶対の名の下に守護する存在。

成瀬花穂はエアトスの姿勢を見て、観客席のマナに向かって言う。

「マナさん…大丈夫です、私の事はエアトスが守ってくれますから」

「かほ…」

「エアトス、お願い」

成瀬花穂の呼びかけに、エアトスはコクリと頷いた。

「亨さん、きて下さい！」

「…分かった、いくぞ！オベリスク！！」

オベリスクの右腕が、右拳が大きく仰け反る。

（エアトス、頼むぞ…）

「『オベリスクの巨神兵』で、『ガーディアン・エアトス』に攻撃！！」

そして、神の奮う破壊の拳がエアトスに叩き付けられた。

「『ゴッドハンド・クラッシャー』！！！！」

ドグォォォオオオ……！！！！！

「成瀬さん！！」
「っ！！」「くっ！！」
「かほっ！！」

成瀬花穂　ＬＰ　１４００→０

オベリスクの拳が成瀬花穂が立っていた場所に深々と突き刺さる。

二人のデュエルは、西条亨の勝利に終わった。

ソリッドビジョンが消え、西条亨と成瀬花穂が立つデュエルフィー

ルドがゆっくりと降りてくる。

ウィィィィ…ガコォン…！！

「成瀬さん！！」

西条拓夜は急ぎ、成瀬花穂の下へと向かい走り出した。

白石直也、結締智恭、マナ等も西条拓夜に続き成瀬花穂の所へと向かう。

「成瀬さん！！大丈夫かっ！？」

成瀬花穂の所へとたどり着いた西条拓夜は、成瀬の肩を掴みガクガクとその肩を揺らす。

「い、痛いですよ拓夜さん！？」

「っ…ご、ごめん！？あ、いや…体は大丈夫なのか？怪我とかは？」

慌てふためく様子の西条拓夜に成瀬花穂は「フフフ…」と軽く笑みをこぼした。

「大丈夫ですよ拓夜さん、心配してくれてとても嬉しいです…でも、私は大丈夫ですから…ね？」

ニコッと微笑み、西条拓夜の手を取る成瀬花穂。

西条拓夜は「良かった…」とホッと胸を撫で下ろした。

「かほーっ！！大丈夫だったーっ！？」

マナがそう言い、結締智恭や白石直也も一緒になって駆け寄ってくる。

「マナさん…大丈夫です、ちゃんと私は無事です」

「良かった～…」

成瀬花穂の様子を見て安堵の息をつくマナ。

「しっかし流石は神だよな…『オベリスクの巨神兵』、やっぱり迫力が違いすぎるぜ！？」

「あぁ…ソリッドビジョンとはいえ、あの『神』の攻撃を正面から立ち向かうとは…成瀬、よく頑張ったな！」

『神』。

その単語を聞いて西条拓夜は、ハッと向かいのデュエルフィールドに立つ西条亨を見る。

西条亨は丁度こちらに向かって歩いて来ている所だった。

「亨さん…っ」

「成瀬さん、よく耐えた…」

「いえ、凄いデュエルでした…貴重な経験ができて、良かったです！」

「そうか…」

西条亨は成瀬花穂が持つデッキに目を落とす。

（エアトス…ありがとな）

「…亨さん」

不意に西条拓夜が西条亨に声をかけてきた。

「…ん？」

「亨さん…俺とも、デュエルをしてくれませんか？」

西条拓夜は編集し直したデッキを取り出し、西条亨に宣言した。

「倒してみせます…亨さんを、そして『神』をっ！！」

西条拓夜の新たなる山札

西条拓夜は真っ直ぐに西条亨を見る。

先のデュエルで西条亨が魅せたカード。『神』。

（あの『神』ってモンスター…あれが亨さんのデッキの最強モンスター、『神』がどんな能力を秘めているかは知らないケド…ケド、試したい！！成瀬さんを圧倒した『神』を、俺は倒したい！！）

西条拓夜の熱い視線を受けた西条亨は

「連戦…か、……」

そう言い自分の手にしていたデッキを見つめる。

（『神』を倒す…か、俺達にもあったな、そんな時期が…）

「いいだろう拓夜くん…君の力、見せてもらう」

「えぇ、望む所ですっ！！」

PiPiPiPiPiPiPi……

すると突如、西条亨のポケットの中の携帯電話が鳴り始める。

「ん？…悪い、少し待ってくれ」

西条亨は取り出した携帯電話を耳に当て、話し始めた。

「はいモシモシ…はい、…えっ！？理事長室にっ！？…今からですか？…ハァ？……分かりました、では今からそちらに伺います。」

Ｐｉ！とボタンを押し、通話を切る西条亨は、西条拓夜に

「ごめん、呼び出し食らった！」

「えっ！？」

「悪いな、しばらく戻ってこれそうにないわ」

いやぁごめんごめん、と頭を下げる西条亨に西条拓夜はガックリとその肩を落とす。

「そ…そんなぁ～」

「ん～、マナ！」

「ほぇ？」

西条亨は手にしていたデッキをマナに渡し

「マナ、俺の代わりに拓夜くんとデュエルをしてあげてくれないか？」

「えっ！？でもさいじょお、私には『神』は…っ！！」

「なら抜いてデュエルすればいい…悪い、もう時間ないんで俺いくわ！」

西条亨はそう言うと走りながら「また戻ってくるからな～」と言いデュエルフィールドから離れていった。

「えっと…たくや、今回は申し訳ないケド…『神』のカードは無しで、私のデッキとデュエルしようよ！」

マナが西条拓夜の方を振り返り、そう尋ねる。

「え…まぁ亨さんが行っちゃったし、別に構いませんケド…でも、『神』のカードは無しって…それにさっきマナさん、『私には『神』のカードは…』…あれって一体どういう意味なんですか？」

「う…えっと…その…」

矢継ぎ早に質問する西条拓夜にどう説明したら良いか悩むマナ。しかし、白石直也がマナの代わりに口を開いた。

「どうもこうも、そのままの意味だ…マナに、『神』のカードを扱う事はできない」

「っ！？」「えっ！？」

白石直也の言葉を聞き、驚きと同時に疑問が西条拓夜と成瀬花穂に浮かぶ。

「マナさんには使えない…意味が「マナちゃんだけではない！」

西条拓夜の言葉を今度は結締智恭が遮る。

「マナちゃんだけじゃない…俺や白石さんにも、『神』のカードを従える事はできない…今この場で、『神』を従い操る事ができるデュエリストは、西条亨だけだ！」

「…だから…どうしてっ！？」

研究会の話を聞き、益々疑問が膨らむ西条拓夜と成瀬花穂。

「ごめんね、二人とも…今はまだ話せない…とにかく、デュエルだよデュエル！！」

それまで漂っていた不審な空気を払拭させるかの様に、マナは西条拓夜にデュエルを促す。

「えっ！？あ、はい…」

「えへへ…たくやと私じゃ初めてのデュエルだね！手加減は無しだよー！」

「は、はぁ…？」

マナと西条拓夜はそれぞれデュエルフィールドに立ち、スイッチを入れ足場を上昇させる。

「さぁて、俺達は観戦でもしますか！戻ろうぜ、白石さん、成瀬さん！」

「あぁ」
「は、はい！」

結締智恭と白石直也、成瀬花穂の三人は観客席へと戻っていく。

（何か…誤魔化されちゃいましたね…）

成瀬花穂はデュエルフィールドに立つマナを見つめながら

（さて、拓夜さんの相手はマナさんですね…二人とも、一体どんなデッキなんでしょうか…？）

「たくや、準備は良い？」

マナはそう言い、デッキをデュエルテーブルにセットする。
西条拓夜も自分のデッキをデュエルテーブルにセットし、マナに答えた。

「はい、いつでもいけます！」

「うん、じゃあデュエル開始だね！」

西条拓夜とマナは互いに手札を五枚揃えて宣言した。

「「デュエル！！」」

先攻　西条拓夜　ＬＰ　８０００
後攻　マナ　ＬＰ　８０００

西条拓夜とマナ、二人のデュエルが始まった。
先攻をとった西条拓夜はデッキトップに指を添え、カードをドローする。

「俺のターン、ドロー！」

ドローカードを手札に加え、六枚となった手札を確認する西条拓夜。
手札には…

・『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』
・『ローンファイア・ブロッサム』

・『デステニー・ドロー』
・『サイクロン』
・『E・HERO　エアーマン』
・『ワン・フォー・ワン』

（…よし！良い感じの手札だ…まずは）

西条拓夜は手札のモンスターカードに手を伸ばし

「俺は…『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！！」

【ローンファイア・ブロッサム】
星３　炎属性　植物族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１４００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリリースして発動する。自分のデッキから植物族モンスター１体を特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

西条拓夜のフィールドに爆弾の様な芽をつけた植物が生えた。

「そして『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動！！」

「っ！？」

「自分フィールド上の植物族モンスター1体をリリースし…デッキから新たな植物族モンスターを特殊召喚する！まずはフィールド上の『ローンファイア・ブロッサム』をリリースし…」

西条拓夜のフィールドのローンファイアが光となって消えていく。

「デッキからもう1体…『ローンファイア・ブロッサム』を特殊召喚！！」

西条拓夜のフィールドに2体目のローンファイアが出現する。

「そしてもう一度、『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動！！こいつをリリースし…デッキから『椿姫ティタニアル』を攻撃表示で特殊召喚！！」

西条拓夜のローンファイアの芽が弾け飛び、そこに巨大な椿が生えた。

【椿姫ティタニアル】
星８　風属性　植物族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２６００
効果

自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター1体をリリースして発動する。フィールド上に存在するカードを対象とする魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

「1ターンから攻撃力2800のモンスターっ!?」

驚きの声をあげるマナ。だが西条拓夜は自分のプレイを続けていく。

「更に俺は…手札の魔法カード『デステニー・ドロー』を発動!!」

【デステニー・ドロー】
魔法カード
手札の「D－HERO」と名のつくカード1枚を捨て、デッキからカードを2枚ドローする。

「手札から『D－HERO ディアボリックガイ』を捨て…デッキからカードを2枚ドロー!!」

西条拓夜の墓地にディアボリックガイが送られ、デッキからカードを2枚ドローした。

「俺は伏せカードを1枚セットして、ターン終了！！」

西条拓夜のターンが終了し、マナのターンに移る。

「ひゃぁ…『椿姫ティタニアル』…たくや、強力なモンスターを出してきたね！」

「へへっ、俺のデッキは椿姫だけじゃないですよ？」

「ふふっ、楽しみにしてるよ！…私のターン、ドロー！！」

マナはデッキからカードをドローし

「モンスター1体をセット！」

マナのフィールドに裏側守備表示でモンスターカードが出現する。

「う～ん…あとは…リバースカードを3枚セット！」

更にマナのフィールドの魔法・罠カードゾーンにリバースカードが3枚伏せられる。

「ターンエンド！さぁたくや、掛かっておいで！！」

「マナさんは明らかに迎撃する構えを見せています…拓夜さんはどう攻めていくつもりなんでしょうか？」

互いの1ターン目を終えた所で観客席で2人のデュエルを観戦する成瀬花穂がそう言う。

隣に座る結締智恭は

「拓夜ちゃんの手札に『大嵐』があるなら使うだろうな、まぁ無くても俺なら攻撃していく」

結締智恭に続いて白石直也も自分の意見を述べる。

「だがマナもそんな事は予測しているだろう…だが拓夜のデッキが、ただ殴っていく『ビートダウン』のデッキだとしたら相性が悪い…」

「だな、マナちゃん…可愛い顔してデュエルはいやらしいからな…」

西条拓夜のターン。西条拓夜はデッキからカードをドローする。

「俺のターン、ドロー！！」

ドローしたカードを確認した西条拓夜は、そのカードを手札に加えた。

（…今マナさんのフィールドには伏せカードが3枚、確実に罠が潜

んでいる…でもここは自分のプレイを貫き通す！！）

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
星４　風属性　戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
効果
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から一つを選択して発動する事ができる。●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

西条拓夜のフィールドにエアーマンが現れる。

「エアーマンの効果発動！！デッキから『ＨＥＲＯ』と名のついたモンスター１体を手札に加える！…俺はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を手札に加える！」

西条拓夜はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を手札に加え、デッキをシャッフルする。

「そして手札の魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！！」

【ワン・フォー・ワン】
魔法カード
手札からモンスターカード1体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「このカードコストで、手札からモンスターカード『Ｄ－ＨＥＲＯ ダッシュガイ』を墓地に送って…デッキからレベル1モンスター『サイバー・ヴァリー』を守備表示で特殊召喚！！」

【サイバー・ヴァリー】
星1　光属性　機械族
ＡＴＫ　0
ＤＥＦ　0
効果
次の効果から1つを選択して発動する事ができる。●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを1枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。●このカードと自分の手札1枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード1枚をデッキの

一番上に置く。

西条拓夜のフィールドに小型の機械竜が出現した。

西条拓夜のフィールドに三体のモンスターが並ぶ。

「いくぜっ、俺のターンのバトルフェイズ！！まずはエアーマンで、マナさんのセットモンスターに攻撃！！」

エアーマンがマナのセットモンスターに攻撃し、マナのモンスターは戦闘破壊された。

「ふふっ、戦闘破壊された私のモンスター『素早いモモンガ』の効果発動だよ！」

【素早いモモンガ】
星２　地属性　獣族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１００
効果
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、１０００ライフポイント回復する。更にデッキから同名カードを自分フィールド上にセットしてもよい。その後デッキをシャッフルする。

「『素早いモモンガ』…っ！？」

「モモンガは戦闘破壊され墓地へ送られた時、ライフポイントを１０００回復する！」

マナ　ＬＰ　８０００→９０００

「そしてデッキから同名カードを任意の枚数、フィールド上にセットする！」

『ウキッキィーッ！！』

マナのフィールドに『素早いモモンガ』が２体セットされた。

「ふふっ、たくや！まだ攻めてくる？」

挑発気に尋ねるマナ。西条拓夜は「当然！」と即答し

「椿姫！！セットモンスター『素早いモモンガ』に攻撃だ！！」

椿姫の足元に生えていた椿の花弁が宙に舞い、その花弁一枚一枚がまるで意志を持ったかのように飛び交い、セットされたモモンガに

襲いかかる。

「エアーマンは通しても、流石に椿姫は駄ぁ目！罠カード発動『ドレインシールド』！！」

【ドレインシールド】
罠カード
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

椿姫の攻撃から守る様に、セットモンスターの前に輝く盾が出現する。

「このカードは、相手モンスターの攻撃を無効にして、そのモンスターの攻撃力分だけ私のライフポイントを回復する罠カード！！さぁたくや、どうする？」

（椿姫の攻撃力は２８００、って事はマナさんのライフが２８００回復するって事かっ！？……確かに椿姫の効果を発動すれば『ドレインシールド』を無効にして破壊できる…でも、そうすると椿姫自身をリリースしなくちゃいけない！！…ま、このままでも大丈夫だろ…その分マナさんにダメージを与えれば良いだけのこと…今は壁となるモンスターを残しておく！！）

「…俺は何もしない！」

「じゃあ椿姫の攻撃は無効だね！そして私のライフポイントは椿姫の攻撃力分回復する！」

マナ　ＬＰ　９０００→１１８００

椿姫の攻撃がドレインシールドに全て吸収された。

西条拓夜は構わず次の行動に移す。

「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ！『サイバー・ヴァリー』の効果を発動！！」

「っ！？」

「『サイバー・ヴァリー』は自身と自分フィールド上の表側表示モンスター1体をゲームから除外する事で、デッキからカードを2枚ドローする事ができる！！俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』と『サイバー・ヴァリー』をゲームから除外！！」

西条拓夜のヴァリーとエアーマンが亜空間に呑まれる。

「そしてデッキから…カードを2枚ドロー！！」

新たに手札を増強した西条拓夜は

「俺は伏せカードを1枚セットし、ターン終了！！」

エンド宣言をした西条拓夜。続いてマナのターンに移る。

「じゃあ私のターンだね！ドロー！！」

2人のデュエルを観戦していた白石直也と結締智恭は

「ふぅん、拓夜の奴…完全にマナのペースに嵌っているな…」

「あぁ、拓夜ちゃん…あそこで椿姫を残したのは…まぁ戦略的に正しいっちゃあ正しいんだが、如何せん…マナちゃんのが一枚上手だな」

2人の話を聞いて成瀬花穂は首を傾げながら2人に質問した。

「あの…どういう事なんです？確かにこれからターンを迎えるマナさんにチャンスはありますケド…でも、拓夜さんのフィールドには攻撃力２８００の『椿姫ティタニアル』がいるんですよ？」

「まぁ…その…あれだ、マナちゃんからすれば『それがどうした？』って感じなんだよなぁ、あの罠カード『ドレインシールド』だって確信犯だろうし…」

「成瀬…マナは強いぞ？俺や結締はおろか、西条だってあまり勝った試しがないんだ」

「えっ！？」

「拓夜のデッキも強いのは観ていて分かる…奴は様々なプレイをしていながら、手札が余り減ってないんだ…手札はデュエリストにとって銃に例えると弾丸、その弾丸が途切れないという事は、必ず何らかの手段を持っているという事だ…」

「確かに…そうですね、手札が無かったら何もできません！」

「つまり…このデュエル、拓夜ちゃんが如何に手札を補充してマナちゃんに対抗するかが、勝負の分かれ目だな！」

マナはデッキからカードをドローし

「えへへ…じゃあ私も、たくやと同じ魔法を使うよ！『ワン・フォー・ワン』を発動！！」

「っ！？」

「私は手札のモンスターカード『ボルト・ヘッジホッグ』を墓地に送って、デッキからレベル１モンスター『サニー・ピクシー』を特殊召喚！！」

【サニー・ピクシー】
星１　光属性　魔法使い族

ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　４００
効果・チューナー
このカードが光属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分は１０００ライフポイント回復する。

マナのフィールドに愛くるしい妖精が召喚される。

「そしてモンスター達を反転召喚！」

マナのフィールドにセットされた『素早いモモンガ』２体が表側攻撃表示になる。

「そして墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』の効果発動！」

【ボルト・ヘッジホッグ】
星２　地属性　機械族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

「私のフィールドにチューナーがいる場合、墓地からこの子を特殊召喚できる！あ、チューナーはこの子『サニー・ピクシー』ね！？」

ピクシーは「はぁい、私、チューナーでぇす！」とアピールするかの様に宙でクルッと回りポーズを決める。

（かっ…可愛ぇぇえ！！）

西条拓夜がそんなこんな思っている間に、マナのフィールドに計４体のモンスターが並ぶ。

「皆、お願い！力を貸して！！」

マナからの呼び掛けにマナのモンスター達はそれぞれコクリと頷き、高く跳躍する。

「っ！？」

「レベル２『素早いモモンガ』２体と『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル１『サニー・ピクシー』をチューニング！！」

『サニー・ピクシー』が星の輪となり、その輪をモモンガとヘッジホッグが潜り抜ける。

「交わりし想い、盟友の力よ…輝ける栄光の階（きざはし）へ駆け上がれ！！」

マナのフィールドに一本の巨大な光の柱が降り注ぐ。

「シンクロ召喚！！私に力をっ！『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』！！」

【エンシェント・ホーリー・ワイバーン】
星７　光属性　天使族
ＡＴＫ　２１００
ＤＥＦ　２０００
シンクロ／効果
光属性チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分のライフポイントが相手より上の場合、その数値だけこのカードの攻撃力はアップする。自分のライフポイントが相手より下の場合、その数値だけこのカードの攻撃力がダウンする。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、１０００ライフポイントを払う事でこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

マナのフィールドに白く輝ける翼竜が光臨する。

『ギャァァァアアア…ッ！！』

「エンシェント…ホーリー・ワイバーン？」

マナは墓地から『サニー・ピクシー』のカードを取り出し

「この子が光属性のシンクロ召喚に使用された時、私のライフポイントは１０００回復する！！」

マナ　ＬＰ　１１８００→１２８００

（またライフポイントを回復っ！？）

「そして『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』の効果…私のライフポイントがたくやより上の場合、そのライフ差だけこの子の攻撃力はアップする！！」

「何っっ！！！？」

【エンシェント・ホーリー・ワイバーン】
ＡＴＫ　２１００→６９００

「マナさん…まさかこの為にライフポイントを回復していたんですかっ！？」

「そういう事だ、まぁこのシンクロ召喚時に拓夜の奴が何かしらの

アクションをしないと…キツいぞ…っ！！」

（ワイバーンの攻撃力は６９００…なら、今このカードを発動するしかないっ！？）

西条拓夜は自分の場に先程伏せたカードを手に取り

「マナさん、俺はそのシンクロ召喚成功時に…このカードを発動する！！」

「っ！？」

「罠カード発動『奈落の落とし穴』！！」

【奈落の落とし穴】
罠カード
相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

「このカードは攻撃力１５００以上のモンスターが特殊召喚された時、そのモンスターを破壊してゲームから除外する！これでマナさんの『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』を破壊する！！」

「『奈落の落とし穴』っ！？」

西条拓夜の罠の発動に驚きの声をあげるマナ。

「やりました！！拓夜さん！！これでマナさんの強力モンスターを破壊する事ができます！！」

成瀬花穂は喜びの声をあげるが、隣に座る白石直也と結締智恭は

「さぁて、そいつはどうかな？」

「えっ！？」

「マナの奴がこれで終わる様なら…俺達も苦労はしない…」

「たくや、残念だけど私も罠を発動するよ！リバース罠『トラップ・スタン』発動！！」

【トラップ・スタン】
罠カード
このターン、このカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「このカード効果で、フィールド上のこのカード以外の罠カードの効果を無効にするよ！」

「なっ！？しまっ…っ！？」

西条拓夜は歯噛みし、手札を見つめる。

手札には罠カード『激流葬』があった。

先のターン、『奈落の落とし穴』だけでも十分対処できるだろうという考えが甘かった。

（クソっ！！こいつも一緒に伏せていれば良かった…）

西条拓夜の発動させた『奈落の落とし穴』は、ソリッドビジョンで煙をあげて消滅していった。

「いくよたくや！私のターンのバトルフェイズ、『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』で、『椿姫ティタニアル』に攻撃！！」

ワイバーンの放った光が椿姫を包み込み、巨大な爆発音が鳴り響いた。

ドゴォォォオオオッ！！！！

「くっ…こうもあっさり…っ！？」

西条拓夜　ＬＰ　８０００→３９００

西条拓夜のライフポイントが大きく削られる。
マナは『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』を指差し

「たくやのライフポイントが減った事で、私とたくやのライフ差が広がった！その差分、『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』の攻撃力はアップする！！」

西条拓夜　ＬＰ　３９００
マナ　ＬＰ　１２８００

【エンシェント・ホーリー・ワイバーン】
ＡＴＫ　２１００→１１０００

「攻撃力がっ！？…１万を超えたっ！？」

「ふふっ、私はモンスター１体をセットして、ターン終了だよ！」

マナのターンが終了し、西条拓夜のターンに移行する。

「うわぁ…マナちゃん、拓夜ちゃん相手でも容赦ないな…」

「ふぅん、ここからが拓夜の腕の見せどころだな…」

「…拓夜さん」

「っ…俺のターン、ドロー！！」

西条拓夜はドローカードを確認する。

（『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』…）

ダイヤモンドガイを手札に加えた西条拓夜は、５枚となった手札を確認する。

（今の俺の手札には…『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』『サイバー・ヴァリー』『ゾンビ・キャリア』『闇の誘惑』『激流葬』…そして俺のフィールドには伏せカード『サイクロン』１枚のみ…）

そしてマナのフィールドを確認する。
現在マナのフィールドには、攻撃力１１０００の『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』に裏側守備表示のセットモンスター１体。
そして１枚の伏せカード。手札はない。

西条拓夜は考える。

（俺のライフは残り３９００、あのワイバーンの攻撃を受けたら…一撃でやられる!?ここは壁となるモンスターを…だけどその前にっ!!）

「俺は伏せカードを発動!!速攻魔法『サイクロン』!!」

【サイクロン】
速攻魔法
フィールド上の魔法または罠カード１枚を破壊する。

「このカードでマナさんの伏せカードを破壊する!!」

マナのフィールドに伏せられたリバースカードが粉々に打ち砕かれた。

「エェッ!?」

「これでマナさんの伏せカードはなくなった！！俺は墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』の効果を発動！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
効果
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する。自分のデッキ「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地のディアボリックガイをゲームから除外し、デッキからもう１体のディアボリックガイを、守備表示で特殊召喚！！」

西条拓夜のフィールドにディアボリックガイが現れる。

「そして俺は…手札からチューナーモンスター『ゾンビ・キャリア』を召喚！！」

【ゾンビ・キャリア】
星２　闇属性　アンデット族
ＡＴＫ　４００

ＤＥＦ　２００
効果・チューナー
手札を１枚デッキの一番上に戻して発動する。墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

西条拓夜のフィールドにチューナーモンスターと上級モンスターが並ぶ。

「拓夜さん、シンクロ召喚する気ですっ！！」

「レベル２とレベル６…つまりはレベル８シンクロ召喚か」

「丁度、属性が闇属性で揃っているんだ…俺ならあのモンスターをシンクロ召喚するが…」

観客席の三人は西条拓夜のシンクロ召喚を予測しながら話す。

だが、西条拓夜は

（…葉月、お前ならここでレベル８シンクロモンスター『ダークエンド・ドラゴン』をシンクロ召喚するんだろうが、俺はそのカードを持っていない…だからこのターンは、こいつで凌ぐっ！！）

「レベル６のディアボリックガイに、レベル２のゾンビ・キャリアをチューニング！！」

西条拓夜のフィールドのモンスターが星となって一つに合わさり、その光の中から新たなモンスターが現れる。

「屈強なる戦士の魂、団結せし力をその身に宿し、燃えたぎれっ！！シンクロ召喚、高ぶれっ『ギガンティック・ファイター』！！」

【ギガンティック・ファイター】
星８　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　１０００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードの攻撃力は墓地に存在する戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする。このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター１体を選択し自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

西条拓夜のフィールドに大きな体格の戦士が参上した。

「『ギガンティック・ファイター』は墓地の戦士族の数だけ、攻撃力が１００ポイントアップする！」

現在、墓地に戦士族は『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』の２体。

【ギガンティック・ファイター】
ＡＴＫ　２８００→３０００

「攻撃力３０００…でも、私の『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』の攻撃力は１１０００！！残念だけど、その子じゃ私のワイバーンは倒せないよ！？」

マナは得意気になって言う。

「そんな事は分かっている、俺は『ギガンティック・ファイター』を守備表示にする！！」

ギガンティックは守りの構えを見せて、西条拓夜の前に立つ。そして西条拓夜は手札のカード１枚に手を伸ばし

「…伏せカードを１枚セットし、ターン終了…っ！！」

西条拓夜のターンが終了し、マナのターンに移った。

「ふふっ、私のターン、ドロー！」

マナはドローしたカードを確認して

「リバースカードを1枚セット！」

（攻撃力３０００の『ギガンティック・ファイター』…でも守備表示、あの子の守備力は１０００…大抵の下級モンスターでも戦闘破壊できる！！）

「いくよ、たくや！」

「っ！？」

「私はモンスターを反転召喚、『メタモルポット』！！」

【メタモルポット】
星２　地属性　岩石族
ＡＴＫ　７００
ＤＥＦ　６００
効果
リバース：互いのプレイヤーは手札を全て捨て、その後それぞれ手札が５枚になる様にデッキからカードをドローする。

「『メタモルポット』のリバース効果発動！互いのプレイヤーは手札を全て捨て、デッキからカードを5枚ドローする！！」

「な、なにっ！？」

西条拓夜は手札を全て捨て、デッキからカードを5枚ドローした。
マナは元々、手札は0枚だった為、そのままカードを5枚ドローする。

「くっ…っ！？」

西条拓夜はフィールドとマナを見やる。

（マナさんの手札が0枚だったから油断していた…もしあの5枚の手札の中に『ギガンティック・ファイター』を破壊するカードがあるなら…下手すりゃこのままやられちまう！？）

西条拓夜　ＬＰ　３９００
マナ　ＬＰ　１２８００

互いの手札は５枚。
マナは早速、補充した手札の１枚を手に取り

「残念だけど…たくや、このターンでおしまいにするよ！！手札から魔法発動！『サイクロン』！！」

「なっ！？」

「このカードで、たくやのリバースカードを破壊！！」

西条拓夜の伏せられたカードが破壊される。
拓夜は歯噛みしながら、そのカードを墓地へと送った。

（クソっ…俺の『激流葬』が……裏目に出てばかりだ…っ！！）

現在西条拓夜のフィールドには、守備表示の『ギガンティック・ファイター』のみ。

対してマナのフィールドには、攻撃表示の『メタモルポット』と、攻撃力１１００の『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』。
そして１枚のリバースカード。

西条拓夜は自分フィールドの『ギガンティック・ファイター』を見ながら、今後の展開を予測する。

（今の『ギガンティック・ファイター』じゃ、マナさんの強力モンスター『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』を倒す事はできない。でも、コイツは戦闘破壊され墓地へ送られた時、墓地の戦士族モンスター1体を蘇生させる効果がある！それに『ギガンティック・ファイター』自身も戦士族！墓地へ送られ、戦士族であるコイツを蘇生させるというループする事ができる強力なモンスター！例え『激流葬』が破壊されたとしても、しばらくはコイツを壁として残しておく事ができる！！…ハズ！！）

諦めない闘志をその目に宿す西条拓夜。
そんな拓夜の様子を観客席から観ていた、成瀬花穂・結締智恭・白石直也の3人は…

「拓夜さん…大丈夫でしょうか？」

「さぁな…『ギガンティック・ファイター』は戦闘破壊によって、墓地から戦士族モンスターを蘇生させる効果を持っているが…でも、マナちゃんだってそんな事は知っている…」

「それにしてもマナ…やらしいタイミングで手札を増強してきたな、もしあの手札の中にモンスターを破壊するカードや、コントロールを奪取するカードがあったら…拓夜の奴、やられるぞ…っ！！」

「たくや…良い目だよ、デュエルを諦めないその目！」

「…マナさん…」

「でもね、さっき言った様に…このカードでオシマイ！！手札から魔法発動『強制転移』！！」

【強制転移】
魔法カード
お互いに自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択し、そのモンスターのコントロールを入れ替える。そのモンスターはこのターン、表示形式を変更する事はできない。

「『強制転移』っ！？」

「このカードは、互いのモンスター1体のコントロールを入れ替える事ができるカード、私がたくやのフィールドに送るのは…攻撃表示の『メタモルポット』！！」

「そっ…そんな…っ！？」

西条拓夜のフィールドには守備表示だが『ギガンティック・ファイター』1体のみ。
他に送りつけるモンスターは存在しなかった。

「ふふっ…たくやの『ギガンティック・ファイター』と、私の『メタモルポット』を表示形式はそのままで交換だよ！！」

マナがそう言うと、互いのモンスターはそれぞれ入れ替わり、マナのフィールドに『ギガンティック・ファイター』が…西条拓夜のフィールドに『メタモルポット』が移った。

「…そんな…っ！？まさか…こんな方法で…っ！？」

（ＯＣＧ研究会……皆、デュエル滅茶苦茶強いじゃねぇか…っ！！…ちっくしょぅ…）

「ふふっ…いくよ、私のターンのバトルフェイズ！『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』で、攻撃表示のメタモルポットに攻撃！！」

ワイバーンから光の閃光が放たれた。

「くっ…っ！！」

メタモルポットは戦闘破壊され、その超過したダメージが西条拓夜のライフポイントを０にした。

西条拓夜　ＬＰ　３９００→０

結局…西条拓夜は、マナのライフを一度たりとも削る事ができなかった。

「…失礼します」

理事長室の部屋の扉を開け、中に入る西条亨。
そんな西条亨を出迎えたのは、ドスの効いた低い声だった。

「待ってたわよぅ、西条ちゃぁん！」

その声の主は席から立ち上がり、西条亨の所まで歩み寄る。

「中島さ、…ぃゃ、理事長、何の用件でしょうか？」

「堅っ苦しい呼び名は此処ではナッスィングよ、西条ちゃぁん？」

「ぅっ…はい、中島さん」

中島と呼ばれたこの、オカマ口調の大柄な体格の理事長は、西条亨やマナ、結締智恭に白石直也等がここ東区の大学に入学する時に色々と世話をしてくれた人で、以前は西条亨等が住んでいた地域でカードショップを営んでいたのだ。

「まぁまぁ、とりあえず座りましょ？」

「はい」

二人は来客用に用意されたソファーに座った。
そして向き合う中、先に口を開いたのは西条亨だった。

「それで…中島さん、話って何ですか？」

知れた仲とはいえ、西条亨は学生…そして中島は大学校を統括する

理事長。

多少なりとも緊張してしまう。

だが中島の方は、そんな事はお構い無しかの様な独特の口調で言葉を放った。

「西条ちゃぁん、アメ○カに行かない？」

「……」

「……アメ○カよ」

「あの…言ってる意味がわかりません」

中島の放った言葉（メダ○ニ）が西条亨の頭を混乱させる。

何故アメリカ？何故にアメ○カなん？

「あら？分かり易く直球で用件を言ったのにぃ～、西条ちゃぁん…アメ○カに行きなさい！理事長命令よ！！」

「だから意味が分からないって言ってるでしょ！！どういった理由で、俺がっ、アメ○カに行かなくちゃいけないんですか！？」

「西条ちゃぁん、新設したデュエルフィールド…あれの開発には私のコネを使って、各企業や資産家から莫大な開発費用や人件費を用いたのは知ってるわよね？」

「…はい」

「それでねぇ、ア○リカのニュー○ークにある大学の教授が、このデュエルフィールドを是非ともこちらにも作ってくれないか？って言ってきてるのよ～」

「……」

「で、このデュエルフィールドの開発に携わった研究会のメンバーの代表として、西条ちゃぁん！はいオメデトウ！！」

「オメデトウ！！じゃネェェェエエエ！！！！」

ドーム内に広がるデュエルフィールドの上で、西条拓夜とマナは互いに握手を交わした。

「楽しかったよ拓夜、またデュエルしようね？」

「はい、次は必ず勝ってみせます！」

観客席から降りてきた成瀬花穂と結締智恭、白石直也の3人は2人を取り囲み、それぞれの話題に盛り上がる。

「それにしても、ＯＣＧ研究会の皆さんは高火力で戦闘を行う方ばかりですね」

成瀬花穂が研究会の3人に向かって、先のデュエルの感想を述べる。

「白石さんは、『青眼の白龍』をサポートするカードで高火力ドラゴンを展開していくデッキ…」

「あぁ！」

「それに、結締さんの『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』を主軸とし、『レインボー・ネオス』での高火力ダメージを狙うデッキ…」

「おぅ！」

「マナさんは、自分のライフポイントを回復しながら、その効果を

最大限利用した『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』…」

「うん！」

「そして…今ここには居ないですケド、『神』のカードを操る西条亨さん…」

成瀬花穂の感想に西条拓夜も頷き、同意する。

「そうだな、どれも皆…攻撃力が４０００近いモンスターばっかりだ…皆さんが強い理由って、やっぱり高火力モンスターを使うからなのかな？」

「いや、拓夜…それは違うな」

西条拓夜の意見を白石直也が否定する。

「確かに相手にダメージを与える上で、カード効果によるダメージよりも、モンスターでのダイレクトアタックの方がダメージは大きい…これは今も昔も大して変わらない」

「はい」

「だが例えどんなに強力なモンスターを出したとはいえ、そのモンスターが除去されてしまっては意味がない！その高攻撃力をダウンされては、パワーが生かせない！そのモンスターのコントロールが相手に奪取されてはこちらが一気に窮地に立たされてしまう！」

「た、確かに…」

白石直也の言葉に続いて結締智恭が言う。

「つまりは、たまたま今回は俺達が勝ったけど、決して俺達が強いとか…そういった事じゃない、って事だな！どんなデッキにも相性があるし…もし次にまたデュエルしたら、今度は俺達が負けるかもしれないしな！」

※

西条拓夜や成瀬花穂、そして結締智恭に白石直也、マナがデュエルフィールドで立ち話をしていると、ドームの出入り口が開いた。

「ふぅ…ただいま…」

「あ、お帰り！さいじょお！」

やや落ち込んでいる雰囲気を漂わせながら、西条亨がやってきた。手には資料らしきプリントの束を抱えている。

そんな様子の西条亨に、結締智恭や白石直也は尋ねてみた。

「どうした、西条ちゃん？」

「理事長から何か頼まれ事でもされたか？」

西条亨は「あぁ…」と小さく返事をし、

「明後日…アメリカに行く事になった」

「……へ？」
「……ハァ？」
「……え？」
「……アメリカ…ですか？」

皆が皆、それぞれの反応をみせる。

そしてマナだけが

「アメリカ？さいじょお、外国に行くの！？　良いなぁ…！私も行きたい、行きたい！！」

ハシャぐマナに、西条亨は軽く溜め息を漏らしながら

「遊びに行くんじゃねぇんだって、何でも…向こうの会社の社長が、このデュエルフィールドについて色々と聞きたい事があるみたいなんだよ」

そんな西条亨の言葉を聞いて、白石直也が

「ふぅん…別にお前が行かなくても、ネットでのメールや国際電話とか使えば良いじゃないか」

「俺もそれは理事長に言ったんだよ…まぁ友好関係やら何やらで駄目だしされたけどな」

「ま、理事長には理事長の理由があるって事か…」

「みたいだな…で、明後日の昼に出発する事になって、理事長から『研究会のメンバーの中で俺ともう一人を連れて行く』って言われてさ」

西条亨の理事長からの言伝に、結締智恭と白石直也の二人は途端にバツが悪そうになった。

「あ、明後日は俺はどうしても取得しなくちゃいけない単位があったんだ!!」

「ふぅん…俺はその日、どうしても抜けられないイベントがあってな」

そんな二人の反応を見て、西条亨は

「まぁお前等がそういった反応するのは何となく予想してたから別に良いよ」

「じゃあ、さいじょおさいじょお!私が一緒に行くよ!」

すぐ横でマナは瞳を爛々と輝かせていた。

（…何かお前と一緒だと、向こうに着いた時にそこはかとなく不安なんだが…）

「…じゃあマナ、明後日な？よろしく頼んだぞ？」

「うん！！えへへ…さいじょおと初めての旅行だぁ！！」

「だから遊びに行くんじゃねぇんだっての！！」

「あの…亨さん…！！」

西条拓夜が徐に口を開く。

「ん？」

「そろそろ…教えてくれませんか？俺をここに呼んだ…本当の理由をっ！！」

「そうだな…」

西条拓夜の真剣な面持ちに西条亨は、真っ直ぐに西条拓夜を見据えて話した。

「拓夜くん、君もＯＣＧ研究会に入らないか？」

「…やっぱり、そうでしたか」

何となく予想がついていた。

だが、なぜ自分なのか？

それが分からない為、西条拓夜は再び質問をした。

「でも…なんで俺なのかが、イマイチよく分からないんです…そこの所を教えてもらえませんか？」

その質問には西条亨ではなく、マナが答えた。

「たくや、忘れちゃってると思うケド…たくやは前に一度、さいじょおと出会ってるんだよ？」

「…えっ？」

「もちろん文化祭の時よりも前に…だよ？その時たくやは、さいじょおとデュエルしたんだよ？」

「……あの、全く覚えがないです」

「だろうな、…ん～、どう説明すりゃいいかな？」

西条亨は少し悩んだ後…

「…夢の中で、拓夜くんに会ったんだ。」

「夢…？」

「そして夢の中で拓夜くんと俺はデュエルして、その時に思ったんだ…一緒にこの研究会をしたいって」

「…あの…夢って……亨さん、俺をおちょくっているんですか？」

「…ごめん、そんなつもりは無いんだ…でも拓夜くん、今日このデュエルフィールドを体験してどうだった？」

「…それは…楽しかったですよ！また体験したい位に」

「その気持ちだけじゃ…駄目かな？」

「？」

「楽しい、嬉しい、またやりたい…だったら俺達と一緒にやらないか？ただ一緒に楽しみたい…その気持ちだけじゃ駄目かな？」

「一緒に…楽しみたい…か」

西条拓夜は目を閉じ、ただ自分の素直な気持ちを感じ取る。

（ＯＣＧ研究会…皆、それぞれ…楽しみたいからここに集まっているんだ、今日やったこのデュエルフィールド…確かに楽しかった、またやりたい！…だったらまた集まればいい！…俺は、またこの人達とデュエルしたい！！……なら、これ以上悩む必要なんかないじゃないか…）

そして目を開き、研究会のメンバーを見渡しながら

「俺でも入って…いいんですか？」

「さっきから誘っているじゃないか？」

「じゃあ…あの、皆さん！よろしくお願いします！！」

「拓夜さん、いいなぁ…あのっ！！私も一緒に、研究会に入れてもらえないでしょうか！？」

西条拓夜の横で、事の経緯を見ていた成瀬花穂が申し出た。

すると、結締智恭が清清しい笑顔で前に進み出る。

「成瀬ちゃんなら大歓迎さ！！」

「キャァッ！！やった、ありがとうございます！！」

それに続けて白石直也は一歩前へ出て

「なら、今日はこれから2人の歓迎会だな」

「だな、丁度昼飯の時間だし…2人共!安心して鱈腹食いな!今日は全部、西条ちゃんの驕りだからなっ!!」

「ちょっ!?」

「キャァッ!!本当ですか!?今日は亨さん、何もかもありがとうございます!!」

「亨さん、太っ腹ですね!ゴチになります!!」

結締智恭の放った一言で、研究会新メンバーの2人は目をキラキラと輝かせている。

「……くっ…」

2人からの熱い視線のダイレクトアタックを受けて、西条亨はポケットの中の財布の中身を確認する。

(……結締めぇっ…只でさえ今月は電子レンジやらポットやらで金が無いってのに…しかも外食だと俺は自然とマナの分まで金を払わなくちゃいけないってのに……ん?)

そこまで考えて西条亨はふと気が付いた。

（あ……待てよ、別に外食じゃなくてもいいじゃん！スーパーに行って、肉や野菜を買い込んで、鍋をすりゃいいじゃねぇか！？それに鍋じゃなくても、すき焼きとか…焼き肉とか……あ、鍋の方が何か安くなりそうだな…となると何の鍋にする…キムチ鍋辺りが無難かな？となると、鍋の後始末用にうどんも買って……おぉっ！？これで明日の朝までの飯はもつな！！…いゃあ外食だけが歓迎会って訳じゃないんだよ、うんうん！！鍋だ、時代は鍋なんだ！！）

長いこと考えて、考えて、考え込んだ事を西条亨は口にした。

「よしっ！！決まった！！鍋を食べに行こう！！」

西条亨からの提案に皆が「おぉぉ～っ！！」と絶賛した。

「鍋ですか！！私、鍋大好きです！！」
「良いですね、これからの季節にぴったりだ！！」
「さいじょおさいじょお！何の鍋？何の鍋？」
「ふぅん、鍋に関しては俺に任せろっ！！鍋奉行は俺がやらせてもらう！！」

「よぅし、西条ちゃん！！フグ鍋だフグ鍋！！最高級素材をたっぷｒ「結締、お前はちょっとコッチに来い」

結締智恭は、無表情の西条亭に外に連れられていった。

※

一同は車に乗り込み、大学を出た。

西条亭の車には西条亭とマナ、西条拓夜の3人が。

結締智恭の車には結締智恭と白石直也、成瀬花穂の3人が乗り込み、先を走る西条亭の車を追いかける形で行った。

数分後……

行き着いた場所は東区の商店街にある一件のスーパーだった。

車から降りた結締智恭が放った一言。

「あれ？…鍋は？」

「ん？ここで鍋の材料を買うんだよ、んで、我が家で鍋パーティーだ！」

「ふぅん…なる程な、ここで皆がそれぞれに好きな具材を買い集め、

お前の部屋で闇鍋をするという事か」

「おい、闇鍋じゃねぇって…それぞれに好きな具材を買い集めって所までは合ってるのに、何で真っ昼間から闇鍋なんだよ！？」

「ねぇ、さいじょおさいじょお！結局、どんな鍋にするの？」

「ん？…無難にキムチ鍋にしようと思ってな、お前は好きだろ？」

「うん！！」

キムチ鍋と聞いて皆が了解した所で、早速店内に突入した。

皆がそれぞれ、自分の好きな食材を探しに店内に散らばる。

西条拓夜は、自分にとって鍋の必需品である『白菜』を探した。

白菜は直ぐに見つかった。

近くには西条亨が、買い物篭いっぱいに『キムチ鍋の素』やその具材を入れ込んでいた。

西条拓夜は、他に何か面白くて美味しそうなモノは無いのか探してみる事にした。

店内を彷徨いていると、生活用品コーナーで佇む白石直也と結締智恭の姿があった。

「2人共、具材は何にするか決まりました？」

2人の後ろ姿に声をかけ、2人の手にした買い物篭に視線を落とすと

「…っえ!?え、…何ですかコレは？」

「何…って、鍋の具材だよ」

「いや、これ具材じゃないし!?これ入浴剤のバ○だし!?」

「まぁそれは結締の私物だ、鍋の具材ではない」

「それは…って、他も色々とおかしいですって!!ほら、これっ!!」

西条拓夜は2人の篭から別のとある物を掴み出す。

「ふぅん、シャンプーの詰め替えパックだな」

「こんなのを出汁にするつもりですかっ!!」

「いや、これも結締の私物だ」

「じゃあコレはっ!?」

「ふぅん、タワシだな…これも結締の私物だ」

「なら…っ、これはっ！？」

「ふぅん…トイレ洗浄剤だな、これも結締の私物だ」

「アンタ等、真面目に買い物しろよぉぉお！！！！」

※

それぞれに買い物を終えた研究会一同は、西条亨が暮らすアパートへと向かった。

アパートに着いてからは西条亨やマナの手によって、あっと言う間にキムチ鍋は出来上がり、皆で美味しく頂いた。

全部食べ終え、皆がそれぞれくつろいでいる所へ、成瀬花穂が西条亨に尋ねてきた。

「亨さん…私、不思議に思った事があるんですケド、聞いても良いですか？」

「ん…何だい？」

「えっと…亨さんが理事長さんの所に行っている間に聞いたんです

ケド…神のカードは、何で亨さんにしか扱えないんですか？」

「っ！？」「…」「かほっ！？」「…成瀬っ！？」

「それに…亨さん達、研究会のメンバーは他にも何か私や拓夜さんに隠している事がありませんか？」

成瀬花穂からの質問に、その場の全員が息を飲む。

西条亨は「…そうだな」と呟き

「皆…もう拓夜くんも成瀬さんも俺達の仲間なんだ…話せる事、話すよ？」

「あぁ」「うん」「えぇ」

白石直也、結締智恭、マナの３人は頷き、同意する。

「じゃあ…拓夜くん、成瀬さん…今から…とある一つの物語を話すよ…」

そう言い、西条亨はゆっくりと語りだした。

※

ある街に、一人の高校生デュエリストがいた。

彼はいつも通り学校へ行き、勉強したり友達とデュエルしながら遊んだり、普通の毎日を過ごしていた。

そんなある朝、彼はカードから出てきた一人の少女と出会った。

カードから出てきた少女は彼に助けを求めてきた。

「今、私の世界が滅亡の危機に晒されています！どうか助けて下さい！」

彼は半信半疑なりに彼女の話しを承諾し、しばらくの間、一緒に行動を共にした。

カードから出てきたのは『ブラック・マジシャン・ガール』。

彼女の話しによると、彼女の住んでいる世界…『精霊界』が、邪神に乗っ取られようとしているらしい。

今の精霊界には邪神に対抗する術がなく、こうして少年が住む世界…『人間界』に助けを求めてきたという事だった。

いきなりそんなマンガやアニメみたいな展開に巻き込まれながら、邪神の手は、確実に少年の住んでいる世界『人間界』にも影響を及ぼしてきた。

人間界に助けを求めてきたマジシャン・ガールを消す為に、精霊界から次々と送り込まれてくる邪神の手下達。

少年はマジシャン・ガールを守りながら、その邪神の手下達をデュエルで倒してきた。

そして、ある日…少年はマジシャン・ガールに言った。

「精霊界に行って、邪神を倒そう！」

少年は、同じデュエリストで友人である2人の少年にこの事を話し、強力を得た。

マジシャン・ガールは、少年等3人と自分を精霊界に送り込んだ。

精霊界に着いてからは、少年等は早速離れ離れになってしまった。

少年の友人2人はマジシャン・ガールに連れられて、彼女の仲間達と行動を共にした。

そして少年は、1人精霊界の森の中をさまよっていると、1人のデュエルモンスターと出会った。

そのデュエルモンスターの名は『風霊使い　ウィン』。

ウィンはとある変態モンスターに襲われそうになっていた所を、偶然に通りがかった少年に助けられ、少年は右も左も分からない精霊界で、ウィンと行動を共にする事にした。

精霊界に到着して早速、邪神の手下達が少年達に襲いかかってきた。

少年達はそれぞれにデュエルし、今自分達が居る所に住んでいるデュエルモンスター達を守っていった。

そして少年は友人等と再開し、束の間の安息を得た。

だが、その束の間を打ち破る事件が起きた。

遂に邪神自身が、少年達が居る街に攻め込んできたのだ。

少年は街に住むデュエルモンスター達を守る為、邪神と1対1のデュエルを挑んだ。

だが邪神は卑怯な手を使い、少年を苦しめた。

邪神とのデュエルは命をかけた特別なデュエル。

その性質はライフポイントがそのまま、プレイヤーのデュエリストの命という事だ。

つまり、ライフポイントが0になれば、そのデュエリストの死を意味する。

邪神は自分の体の代わりに、少年の学校の先生を盾としてデュエルをしてきたのだ。

邪神のライフポイントが減る度に、少年の先生の体が傷つき、命が削れていく。

デュエルの腕や心理的に追い詰められながらも、少年はデュエルの途中に何とか先生の救出に成功する。

そしてデュエルの状況は逆転し、少年の攻撃が邪神のライフポイントを0にしようとしたその時

今度は邪神はウィンを盾にしてきたのだった。

少年からすれば、ウィンは精霊界に来てからの初めて出会った相手。

結局、少年は邪神に攻撃する事が出来ず、邪神に負けてしまった。

敗北した少年は邪神に連れられ、彼等の部下となってしまった。

その間に、少年の友人等は精霊界の各国を周り、次々と邪神の勢力を打ち破っていった。

その途中…

友人等は、邪神の手に堕ちた少年と出会った。

友人等は少年に対し、こちらに戻ってくる様に説得をするが、少年は何も語る事なく、その場を去っていった。

次に彼等が出会ったのは、友人等が属する勢力の『王の間』での事だ。

闇に堕ちた少年は、マジシャン・ガール等の王を拉致し、彼女との別れ際に少年はこう言った。

「神々が眠る塔…そこでお前達を待っている」

精霊界には一本の巨大な塔が建っている。

その塔は精霊界にとって神聖な場所で、そこには三幻神が封印されている。

だが現在、塔は三邪神によって占領されており、神聖とはかけ離れた場所となっていた。

少年が言っていた『神々が眠る塔』。

マジシャン・ガールと友人等は、その塔に向かった。

塔に着くと、入り口には三邪神が待ち伏せていた。

友人等は早速、三邪神とのデュエルを挑もうとするが、その時、塔の扉がひとりでに開いた。

扉の奥から現れたのは、闇に堕ちた少年だった。

少年は三邪神に、マジシャン・ガールや友人等をデュエルで倒すと

宣言し、三邪神等はその場から姿を消した。

対峙する少年とマジシャン・ガール。その友人達。

自分が助けを求めた相手。そして、幾度となく自分を邪神の手先から守り抜いてくれた相手。

そんな少年の相手を、マジシャン・ガールは自ら進み出て、宣言した。

「私はいつも、アナタに助けられてばかりだった…だから、今度は私の番！今度は私が、アナタを助けてみせる！」

少年とマジシャン・ガールのデュエルが始まった。

2人の攻防は、次第に激しさを増していく。

マジシャン・ガールの前に立ちはだかる、彼女にとっては師匠にあたる『ブラック・マジシャン』。

少年のエースモンスターとマジシャン・ガールのエースモンスター『エンシェント・ホーリー・ワイバーン』。

激しい戦いを制したのは、心から彼を想うマジシャン・ガールだった。

「…亨さん、その話し…っ……て…」

西条拓夜は、思わず西条亨に尋ねる。

「…フッ、続きを話そうか…」

しかし西条亨は拓夜に構わず、目を閉じて再び語りだした。

マジシャン・ガールとのデュエルにより、邪神の楔から解き放たれた少年は、再び友人達やマジシャン・ガールと合流。

敵として立ちはだかった自分を受け入れてくれた友人達に、少年は心の底から感謝と謝罪の言葉を述べた。

素の鞘に収まった少年等メンバーは、邪神が待ち受ける塔に入り、上を目指した。

途中、少年は邪神に捕らわれている仲間…ウィンを助ける為に、一人別行動を取った。

友人等は途中、邪神の手先の者達と出会うが、その者達は少年によって説得され、自分達の見方をしてくれると申し出た。

友人達は新たに加わった精霊界の仲間達と共に、遂に邪神と対峙した。

一方その頃、少年は塔の地下深くに幽閉されているウィンを救出す

る事に成功した。

しかし救出した瞬間、ウィンは突如現れた邪神の手の者によって重傷を負わされてしまった。

怒りに狂った少年は、その邪神の手下とデュエルを行った。

だがそのデュエルの途中、突如乱入してきた邪神は、デュエルを中断させ、少年を連れ去ってしまう。

友人等が邪神とデュエルを始めようとしていたその時、辺りを闇が覆いだし、その中から少年が放り出された。

再び三人となった少年達。

彼等を迎え撃つ為に集結した三邪神。

精霊界の命運を決める戦いが始まった。

精霊界、…デュエルモンスター達が住まう世界。そこには様々な種族のモンスター達が住んでいる。

彼等を守護し、精霊界を光ある世界として導いてきた『三幻神』。

天空の神『オシリスの天空竜』、大地の神『オベリスクの巨神兵』、太陽の神『ラーの翼神竜』。

そしてその三幻神の対となる存在にして、『三邪神』と称される神。

『邪神イレイザー』、『邪神ドレットルート』、『邪神アバター』。

現在、精霊界はこの三邪神によって支配され、三幻神は三邪神達により封印されてしまっていた。

その三幻神が封印されている塔の頂上で、三人のデュエリストと三邪神とのデュエルが始まった。

友人の一人は『邪神ドレットルート』に。
もう一人の友人は『邪神イレイザー』に。
そして少年は『邪神アバター』とのデュエルに挑んだ。

暗雲が立ち込める中、三人はそれぞれに熾烈な戦いを繰り広げた。

友人の一人は『青眼の白龍』の一撃で『邪神イレイザー』を葬り、
もう一人の友人は『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』の力で『邪神ドレットルート』を破り、

そして少年は『ブラック・マジシャン』『ブラック・マジシャン・ガール』と共に『邪神アバター』を消滅させる事に成功した。

少年達の功績により、精霊界には再び平和が訪れた。

少年や友人等は精霊界のモンスター達から、世界を救ってくれた『英雄』と称された。

そして、少年達は自分達の住まう世界に帰って行った。

「そして、その少年達はそれまで以上に遊〇王カードを大切にする様になった。それに…まだデュエルを知らない人等に知ってもらおうと思った。…結果、少年等はある一つの愛好会…いや、研究会を作るに至ったんだ…」

西条亨の語った物語はそこで終わった。

話を聞いていた西条拓夜は、西条亨に質問した。

「…その話、本当の出来事なんですか？」

西条拓夜は信じられなかった。

カードから実際にモンスターが現れた？

精霊界？邪神？

確かに話を聞く分には夢があって良いと思う。

しかし…だからこそ、西条亨が語った内容が信じられなかった。

西条拓夜からの質問に、西条亨の替わりにマナが答えた。

「信じられない…よね、普通は…。でもね、さいじょおが言ってた事は本当だよ？」

「……」

「あのっ…私からも良いですか？」

今度は西条拓夜に続いて、成瀬花穂が質問した。

「あの…今の話が、仮に本当の事だったとして…その少年っていうのは……西条亨さん、ですよね？」

「……」

「そして、その少年の友人達……『青眼の白龍』使い、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』使いっていうのは…白石さんに結締さん、なんですよね？」

「……」「……」

指名された三人はそれぞれに顔を見合わせて

「あぁ、成瀬さんの言う通りだ…俺や白石や結締。この三人の事で合っている」

「だったらっ…！！」

西条拓夜はマナを見て声をあげる。

「だったら…マナさんって一体何なんですか！？…亨さんの話からすれば、亨さん達はその精霊界って出来事の経験から、『ＯＣＧ研究会』を立ち上げたんですよね！？」

「あぁ」

「……マナさんって…もしかして…亨さんが言っていた…カードから出てきた……デュエルモンスターなんですか…？」

「……」

マナは俯かせた顔を上げ、西条拓夜を真っ直ぐに見つめて

「…そう、私は…こちらの世界の人間じゃない。…私は、精霊界の住人で、さいじょおの契約者…私は貴方達の言う『ブラック・マジシャン・ガール』です。」

マナはそう言うと、首のチョーカーに飾られた宝石に軽く指を触れた。

すると…

パァァァァ……！！

その宝石からピンク色の眩い光が放たれ、辺りを包み込む。

「うっ！？」
「きゃっ！？」

西条拓夜と成瀬花穂は思わず目を閉じた。

そして、その光が収まり、ゆっくりと目を開くとそこには…

「…っマナ…さんっ！？」

「…わぁぁ…！！」

2人の目の前に、遊○王カードでよく知られたデュエルモンスター。

ブラック・マジシャン・ガールがそこにいた。

「この姿では…はじめまして、だね。」

ニコっと微笑むマジシャン・ガールに、西条拓夜はその姿に見とれながら

「……は、はいっ！！」
「…拓夜さん…」

成瀬花穂はそんな西条拓夜の腕をギュッと抓った。

「痛っ！？」
「拓夜さん、なに見とれているんですか？」

成瀬花穂から放たれる威圧感に、西条拓夜は「ゴホンッ」と軽く咳払いして気を取り直す。

「拓夜くん…成瀬さん、俺達の今までの不信だった点は理解してもらえたかな？」

西条亨は2人に尋ねた。

「…えぇ、こんな事…とても公に言える様な話しじゃないです。変に疑ったりして、スイマセンでした！」

「あ、でも…あと一つだけ良いですか？」

成瀬花穂は手を挙げて発言する。

「白石さんや結締さんが言ってたんですケド…『神』のカードは亨さんにしか使えない…って、それはどうしてなんです？」

成瀬花穂の質問に、西条亨はデッキから3枚のカードを取り出した。

「それは……この3人の中で、俺だけが…精霊界の加護を得ているからなんだ…」

「…精霊界の加護？」

「かほ、さいじょおはね…私やお師匠サマ、そしてウィンちゃんと契約してるの。私たち精霊界では、この契約者には精霊界の加護を得るって言い伝えがあるんだよ。」

「へぇぇ…何か素敵ですね、憧れちゃいます！」

その後、研究会のメンバーはそれぞれに話し、笑い、楽しいと思える一時を過ごした。

気が付けば、時間は１９時を過ぎて３０分になろうとしていた。

「そろそろ拓夜くんと成瀬さんを送って行かなくちゃな…」

時間を確認した西条亨はそう呟くと、結締智恭が

「じゃあ帰りは白石さんを送っていくついでに、2人も乗っけていくよ」

「え、良いんですか？」

「結締さん、ありがとうございます！」

「悪いな、結締」

結締智恭は「いいって」と、軽く手を挙げて車の鍵を取り出した。

「西条ちゃんはア○リカに行く準備をしないといけないだろ？」

「っ！？」

結締智恭のその一言に、思い出したくない事を思い出した西条亨はガックリと首や肩を落とし、大きな溜め息をつく。

「…そだな、準備は早めにしておくに越した事はないな…」

途端にテンションが下がった西条亨に、成瀬花穂は

「あのっ！！今日はありがとうございました！！ア○リカ、頑張っ

て下さいね！！」

「ぁ、ぁぁ…」

それに続き西条拓夜も

「亨さん、今日はありがとうございました！！ア○リカ行き、お気を付けて！！」

「…ぅん」

更に白石直也も

「西条、今更だが少しでも英語を話せる様にしておけ」

「……切実な問題だ…」

そして最後に結締智恭が

「西条ちゃん、ちゃんと土産を買って来いよ！！あ、俺への土産は米国版シクレアのダムドとブリュとカタストルな！！ちゃんと3枚ずつだぞ！？」

「うん……ん？おぃちょっと待て？」

何かムチャクチャな注文をされた様な気がした西条亨は再び結締智恭を外に連れ出して、熱い友情の拳を送りつけた。

※

空は黒く、地を照らす月や星が天上に浮かぶ街並みを一台の車が駆け抜ける。

その車の後部座席に座る西条拓夜の横で、成瀬花穂は窓から外の夜空を仰ぎ見ながら歓喜の声を出す。

「わぁぁ…拓夜さん、見て下さい！今日は星がスッゴい綺麗に輝いてます！」

自分の彼女にそう言われ、拓夜も窓の向こうの星空を眺める。

「あぁ、綺麗だな…（でも…）」

でも…、そう思い、隣に座る成瀬花穂を見つめる。

「でも、君の方があの星よりも綺麗に輝いているよ……と、思っただろ？拓夜？」

「えっ！？」

西条拓夜はドキッと心臓を跳ね上がらせて、助手席に座る白石直也を見る。

白石直也はバックミラー越しに、後ろに座る2人を見ながらニヤニヤとしていた。

「ちょっ！？白石さんっ！？」

慌てふためく拓夜の様子に白石は

「ふぅん、若くて初々しい2人のカップルを弄るのは中々に楽しいな…そう思わないか、結締？」

「ですよね」

運転中である結締智恭は、バックミラー越しに2人の姿をチラッと見たあと、直ぐに視線を進行方向に集中させる。

「結締さんまでっ！？」

勘弁して下さい！と言わんばかりの拓夜の様子に、隣に座る成瀬花穂はそっと西条拓夜の手を握る。

「拓夜さん、良いじゃないですか！お二人はきっとヤキモチを妬いているんです。私と拓夜さんの仲をもっと見せつけちゃいましょう！」

「な、成瀬さん…っ！？」

「成瀬さん、じゃないです！私は付き合いだしてから、今まで『西条さん』だったのを『拓夜さん』って呼んでるんです、だから拓夜さんも、私の事をファーストネームで呼んで下さい！」

「成瀬さ……いや、花穂、そうだな…俺達の事を2人に見せつけてやろう！」

「はいっ！！」

笑顔で頷く成瀬。

そんな2人のイチャイチャ振りをバックミラー越しに見て聞いていた白石と結締は、窓から顔を出しながら

「おうぅぇっ！！」

「あ～、何か今すぐ降ろしてぇ…」

と、それぞれの反応をしていた。

※

「ところで2人共」

白石直也は今度は後ろを振り返りながら話し出す。

「来週の土曜日に研究会主催のデュエル大会を開く事になっているんだが…2人には出場選手として参加してもらうぞ」

「デュエル大会…ですか？」

「良いんですか？私たち、皆さんのお手伝いをしなくても」

運転する結締が赤信号で車を停車させ、それに答える。

「今回は2人はデュエルを楽しんでもらいたいから良いんだよ、こっちはまぁ…何とかなるし」

結締からの話しを聞いて、成瀬花穂は

「わぁぁ…！！実は私、まだ一度も大会とかには参加した事が無かったんです！！当日はデュエルを頑張っちゃいます！！」

と、嬉しそうにはしゃいだ。

西条拓夜は成瀬とは対照的に「大会……か」と、少し考える様な仕草をみせる。

「ん？どうした拓夜？」

「いえ、その大会って…どれ位の規模になるんですか？」

「ふぅん、とりあえず東区の大会という名義だからな…東区のデュエリスト達が上級者から初心者にかけて集まってくるだろう」

「…凄い人数になりそうですね」

そう言い、拓夜はふと、昔のとある出来事を思い出した。

『ねぇ、チビは将来は何になりたい？』

『そぅだなぁ…俺は…一番になりたい！』

『一番？何の？』

『何のって…何でもいいよ、とにかく、何かで一番になりたい！』

多少の言葉の違いはあるかもしれないが…昔、まだ自分が小さかった頃に、葉月に聞かれて答えたそれが、頭の中に蘇る。

（一番……か、そうだな…）

「……俺…目指しますよ、東区で…いや、東区だけじゃない！世界で一番と言われる程のデュエリストに！！」

むかし誓ったあの約束…今は隣にいるのは葉月じゃないけど、そんなのは関係ない。

一番になる。

西条拓夜はこの日から、自分の中の何かが変わり始めていた。

学校が終業し帰路についていた西条拓夜は、目の前で信号待ちをしている見知った後ろ姿を見つけた。

（…葉月……）

葉月を見て、拓夜は思わず歩みを止めてその場で立ち止まってしう。

葉月とは第七祭での出来事以来、まともに話せていなかった。

顔を合わせても、お互いに直ぐに距離をとる様に離れていってしまう。

拓夜は葉月からの告白を断った。

だけど、それで葉月との関係を終えたくなかった。

（…今まで通りって訳にはいかないけど…せめて話くらいは…っ！！）

そう思った拓夜は、葉月の後ろ姿に声をかけた。

「葉月！」

拓夜が呼び掛けると、葉月は両肩をビクッと跳ね上げて、その場から立ち去ろうと動き出した。

「あ、おい！？ちょっと待てって！！」

拓夜は走り去ろうとする葉月の手を何とか掴んだ。

「ぁっ！？」

「逃げんなよ…お前は俺とは話したくねぇかもしれねぇケド…俺はお前と話したいんだ！」

「……アンタ、成瀬さんはどうしたのよ？」

葉月は拓夜の姿を見ると、拓夜の彼女である成瀬花穂がいない事に気づき、尋ねた。

「花穂は今日は一緒じゃない…家の用事とか言って、親と一緒に行ったよ」

拓夜の話を聞き葉月は

「ふ、ふん！じゃあ少しくらいなら…別にいいわよ！」

と目を反らしながら言った。

「そうか…なら公園に行こう、葉月に聞いてもらいたい話があるんだ」

「う、うん…」

自宅近所にある公園に着いた拓夜と葉月の２人。

拓夜は公園の隅で売られていたアイスキャンディを2本買い、ベンチに座る葉月にその片方を差し出した。

「ほら、オレンジ味」

「…ありがと」

戸惑いながらも受け取った葉月を見て、拓夜はベンチに腰を下ろしてアイスキャンディを食べた。

「ふぅ、メロン味最高〜！」

「…ねぇ、話って何なの？」

アイスキャンディを食べている拓夜に葉月は尋ねる。

「ん…とりあえず先にコレを食べようぜ？いくら冷える時期でも、溶けてそれが制服に付いちまったら、クリーニングに出すの面倒くさいだろ？」

「……まぁ…そうだけど…」

葉月はゆっくりとアイスキャンディのオレンジ味に口をつけて、味わいながら食べ出した。

「ふぅ…寒い時期にアイスキャンディってのも美味いな」

「…そうね、私は好きよ?冬にアイスとか食べるのは」

「へぇ、じゃあ逆に暑い時期に鍋は?」

「考えられないわね…今の時期ならともかく、夏に鍋は私の家じゃやらない」

「言ってみただけだって…本気になんなよ」

アイスキャンディを食べ終えた2人はいつの間にか自然と話していた。それまでのギクシャクした関係が嘘だったかの様に。

お互い喧嘩をしていた訳ではないので当然といえば当然である。

「ところでアンタ、休みの日とか…ちゃんと成瀬さんをデートとかに誘ってあげてるの?」

「まぁな、そこの所はちゃんとやってますよ」

拓夜は答えると、鞄の中から一枚の紙を取り出した。そしてその紙を葉月に差し出す。

「…何、コレ?」

「今日の本題、お前と話しをしたかった訳」

葉月はその紙を受け取り、読んでみた。

「…『ＯＣＧ研究会主催・東区デュエル大会』…デュエルをやって

いるアナタ、一度足を運んでみてはいかがですか？…東区の皆様と楽しいデュエルをしましょう…大会優勝者には豪華商品が送られます…」

「そう、そのデュエル大会に出場しないか？」

「ふ～ん…大会…ね、別に良いけどアンタ、私を誘っても良いワケ？」

「ん？どうして？花穂との事なら心配ないぞ、花穂にはちゃんと「そうじゃなくって！」

葉月にとって見当違いな発言をした拓夜に、葉月は言葉を遮る。

「成瀬さんとの事じゃないわよ、誘うって事はアンタもこの大会に出場するって事でしょ？」

手にした大会の紙をヒラヒラさせながら葉月は尋ねる。

「あぁ、そうだけど？」

「私さ、今まで東区内のデュエル大会には何度か出場して優勝経験もあるから言わせてもらうケド…拓夜、アンタ…前までのデッキじゃ絶対に上位にすら入り込めないよ？」

「…そんな事は分かってる、今は最後にお前とやった時のデッキじゃないよ…ちゃんと改良してあるし」

「ふ～ん…そっか…」

2人して公園から見える夕焼け空を眺める。
紅から紫色に染まる冷たい空気に触れながら、2人はカードについて話し込んだ。

「葉月は『ＯＣＧ研究会』って知ってるか？」

「知ってるわよ、たまにサイトとか覗かせてもらってるし」

「俺と花穂な、研究会のメンバーになったんだ！」

「へ？」

葉月は拓夜が突然何を言い出すのか？と目を丸くする。

「この間さ、研究会の人にスカウトされて…あの人達が完成させたデュエルフィールドで一緒にデュエルしてさ！」

「え、何ソレ？…ちょ、どういう事よ？アンタ…研究会の人と知り合いだったっけ？」

拓夜は葉月に、自分が研究会に入った事の経緯を話した。もちろん、メンバーの秘められた過去は話さなかったが…

「…という訳でさ、今週の土曜日のデュエル大会には俺と花穂も選手として出るからさ！」

「ふ～ん…そんな事があったんだ」

葉月は一瞬、どこか寂しそうな表情を作るが、直ぐにいつもの表情に切り替える。そして

「話しはそれだけ？」

「あぁ」

「じゃぁ私はそろそろ帰らせてもらうわ、これからまた塾があるから」

「そっか、ありがとな！話しを聞いてくれて！」

ベンチから立ち上がる葉月に、拓夜は笑顔でそう言った。

「昔ここの公園でさ、お前に言ったよな？」

「？」

「将来何になりたいか？って聞かれて…俺は『一番になりたい』って言った」

「拓夜…」

拓夜の言葉に思わず目を見開く葉月。

（アンタ…あの時の事…覚えて…っ！？）

「何の一番とか、その時には言えなかったけど…まず俺は、東区で一番のデュエリストになる！！」

「……」

「この大会はきっかけだ…俺が上を目指す為の、だから葉月！この大会で俺とデュエルする事になったら、俺は全力でお前を倒しにいく！！」

拓夜からのデュエリストとしての挑戦を受けた葉月は振り返り、拓夜を見つめながらそれに答えた。

「望む所よ、私も全力で戦うわ！」

～デュエル大会当日～

場所は東区の大学にある巨大なドーム。
そこにはＯＣＧ研究会が作り上げた巨大なデュエルフィールドが設置されていた。

会場内には出場選手や観客等が大勢詰め掛けており、中にはテレビ局のカメラまでもが動いている。

拓夜はこの会場内の雰囲気に「うわ…ぁ…」と唖然としていた。すると

「拓夜ちゃん！」

後ろから自分に向かって声をかけられた拓夜は振り返り、

「む、結締さん！何か人が凄い位にいますケド…」

「まぁな、俺達もここまで人が集まるとは予想外だったんだよ…まぁでも普通に考えたら当然っちゃ当然だよな？」

「え？何でですか？」

「だってお前…知らないか？このソリッドビジョンシステムは大きさ、質共に世界一なんだぞ？」

「えっ！？そうなんですか！？」

「あぁ、何かテレビ局の奴らも来てるケド…あっちは大方、理事長

が呼んだんだろ？」

「まぁ…世界一なら…自慢したくなっちゃいますよね？」

「所で拓夜ちゃん、今日は調子はどうだ？」

「え？まぁどこも悪くないですよ？至って普通です」

拓夜の答えた言葉に結締は「違ぇよ」と言い

「お前の体の事じゃなくてデッキの方だよ、ちゃんとここに来る前に、色々と確認してきたか？」

「そ、そっちですか？」

拓夜は鞄からデッキケースを取り出し、それを見つめながら

「大丈夫ですよ、今日はコイツ等と一緒に優勝を目指しますから！！」

「へぇ…自信満々だな、まぁ今日のお前や成瀬ちゃんは研究会の人間じゃなく、一人の選手だ！こっちの手伝いとかは良いから、今日の大会はしっかりと楽しんでいってくれよ！」

「はい！！」

「拓夜さ～ん！」

結締と別れて会場内を歩いていると、前から成瀬花穂が手を振りながらこちらに寄ってきた。

「花穂！」

「拓夜さん、お早うございます！」

丁寧にペコリと頭を下げて挨拶してくる成瀬に釣られ、拓夜も思わず頭を下げながら

「お、お早うございます！」

と、挨拶してしまう。

「拓夜さん！今日は私達はライバルです！！拓夜さんもでしょうケド、私は優勝目指して勝ち抜いて行きます！！」

いつもよりも気合い十分な成瀬の様子に拓夜も気合い十分といった感じで答える。

「それはこっちも同じだ、花穂、俺も全力で勝ちに行くぜ！」

「フフ…拓夜さんならそう言うと思ってました。」

その後、しばらく2人で話しながら過ごしていると、会場に白石直也の声でアナウンスが入った。

『ふぅん…東区のデュエリスト諸君！今日はよく集まってくれた！』

突如響き渡るアナウンスに会場内はざわついた雰囲気から、ピタリと静寂した雰囲気に変わった。

『今日は諸君等デュエリストだけでなく、多くの東区市民等も応援に駆けつけてくれたり、テレビ局までもが取材に来てくれている！』

デュエルフィールドに立つデュエリスト達は辺りをぐるりと見渡した。

前回、観客席として自分達が座っていた場所には大勢の人が並び、座っていた。

「……っ！！」

『つまり、今回の諸君等が魅せるデュエルは、全国で放送される仕組みになっている！初心者だろうと、上級者であろうと…この大会に出し惜しみは不要！！全力で挑み、勝ち進んでもらいたいっ！！』

ヴィィィィ……

すると、会場内のデュエルフィールドとは別の場所に設置されていたソリッドビジョンシステムが作動し、会場内に『青眼の白龍』が3体出現した。

『グォォオオオ！！』
『ギャァァアア！！』
『グァァアアア！！』

それぞれの青眼は宙を舞うように飛び交い、一つの場所へと集う。

会場内の観客席の一部に設けられた実況・解説ゾーンに集まる青眼。

そこからマイクを手にした白石が、手に拳を作りながら高らかに宣言した。

『これより、我等ＯＣＧ研究会による東区のデュエル大会!!【イースト・デュエル・カップ】開催を、ここに宣言するぅ!!!!』

白石の開催宣言に、会場が歓喜の声と共に揺れた。

ワァァアアア……!!

会場内がヒートアップする中、白石は司会を進めていく。

『ふぅん…さて、本日のデュエル大会の進行内容だが、デュエリスト諸君等は入場の際、一枚のカードを手渡されただろう?』

白石の言葉に、デュエルフィールドに立つ拓夜や成瀬等デュエリストは、手にしていた封に入ったカードを見る。

拓夜は封からカードを取り出して確認すると、そこにはアルファベットで『Ｏ』の文字が書かれていた。

「……『O』？」

首を傾げる拓夜。隣に立つ成瀬もカードを取り出し

「私は…『C』みたいです」

それぞれがカードを確認していると

『ふぅん…諸君等の手元にあるカードは…これだっ！！』

白石が会場内に設置されていたスクリーンに向かって手を翳す。

すると、スクリーンにトーナメント方式でアルファベットが書かれていた。

『この表を見れば分かると思うが…このトーナメント表にはそれぞれ『A』～『P』までのアルファベットが並べられている。『A』のカードを所持しているデュエリストは『B』のカードを所持しているデュエリストと…『C』のカードは『D』のカードと…といった具合に進めていく！！』

白石の説明を聞き、成瀬は拓夜に

「と…言うことは、私と拓夜さんは決勝でしか戦えないんですね」

「そうみたいだな」

拓夜は辺りをキョロキョロして見渡した。
今日のデュエル大会に誘った烏丸葉月の姿が、先程から見当たらないのだ。

（どこ行ってるんだ…葉月の奴）

心配する拓夜を余所に、白石は司会を進行していく。

『では早速、この大舞台で最初のデュエルを行うデュエリストを紹介しよう、まずは『A』のカードの所持者…『豚屋淳（とんや）』！！』

『豚屋』と呼ばれた男はブヒヒ…と返事をし、前へと進む。

（うっわ…マジで豚みたいだ…デブで汗がダラダラ流れてるし…）

拓夜は『豚屋』を見ながらそんな事を思っている中、白石は次のデュエリストを呼んだ。

その時……トンッと拓夜の背中が誰かに押された。

「っ！？」

拓夜の背中を軽く押した人物は拓夜の横を通り過ぎ、前へと進む。

薄い茶色のセミロングの髪を靡かせ、着こなした制服のスカートを翻しながら、そのデュエリストは前に出て、こちらを振り返った。

『続いて『B』のカードの所持者…『烏丸葉月』！！』

「葉月……っ！！」
「…葉月さんっ！！」

拓夜と成瀬は、葉月の登場に思わず声をあげる。
葉月は拓夜を見たあと、顔を司会の白石の方に向けた。

『ふぅん…両者出揃った様だな、では残りのデュエリスト諸君は、観客席に設けられた選手用の席に座れ！豚屋と烏丸の2人はデュエルフィールドに設置されたデュエルゾーンに向かって、デュエルをスタンバイしろ！』

ワァァアアア……！！

会場が盛り上がる中、各選手は用意された席に座り、デュエルフィールドに立つ2人のデュエリストを見た。

デュエルフィールドに立つ豚屋淳と烏丸葉月。
豚屋はブヒブヒ言いながら葉月に寄り

「は、葉月たんとデュエルできるなんて…ゆ、夢みたいブヒ！」

変に興奮している豚屋に対し、葉月は冷え切った対応をする。

「あら、私の事を知ってるの？」

「ブヒ！…東区のデュエル大会で、上位入賞者の中でも、こ、紅一点の、は…葉月たんは、ぼ、僕の憧れなんだブヒ！」

「ふ～ん、憧れとか何かはどうでもいいケド、それ以上近寄らないでね、アンタ、かなり汗臭いわよ？」

「ブピィッ！？は、葉月たんに言葉責めされちゃった…ブヒヒッ、も、もっと！！もっと！！」

「き、きしょいっ！！何なのよアンタ！！」

葉月は逃げる様にデュエルフィールドに設置されたデュエルテーブルに向かった。

「ブヒヒ…！！」

気色悪い笑みを浮かべながら豚屋も自分のデュエルテーブルへと向かう。

両者対峙した所で、２人が立っている場所が数メートル上昇し、いつでもデュエルＯＫな状態になった。

司会・実況を務める白石と結締は、その状態を確認すると

『ふぅん…両者準備が整った様だな』

『一人はキング・オブ・豚肉店の一人息子、豚屋淳！！そして対するは東区第七高等学校のアイドル、烏丸葉月ちゃん！』

『…結締、どこからそんな情報を集めてきたんだ？』

『細かい事は気にするな、さぁ白石さん！開始宣言を頼むぜ！！』

『ふぅん…ではこれより、第一回戦を開始する！！』

白石の合図により、豚屋と葉月は手札を五枚それぞれ引き、高らかに宣言した。

「「デュエル（ブヒ）！！」」

先攻　烏丸葉月　ＬＰ　８０００
後攻　豚屋淳　ＬＰ　８０００

先攻を取った葉月はデッキに手を伸ばし

「私のターン、ドロー！！」

カードをドローし、手札を確認する。

『さぁ始まりました、第一回戦！烏丸ＶＳ豚屋のデュエル、実況・解説はわたくし、ＯＣＧ研究会の結締智恭と白石直也でお送りしていきます。さて白石さん？』

『ふぅん…』

『この第一回戦、今回の大会のレベルを知る良い機会になるとわたくしは思うんですが、如何でしょう？』

『ふぅん…是非とも美少女には勝ってもらいたいものだ！』

『美少女は日本の宝…ですね、分かります。』

『まぁどちらにせよ、今回はソリッドビジョンによる大迫力というインパクトが売りの大会だ。両選手共に、健闘してもらいたい！』

結締と白石の実況が一区切りした所で、葉月は手札のカード１枚を手にとり

「私は、リバースカード１枚をセットして、ターンエンド！」

「なっ！？」
「えっ！？」

葉月の行動に驚く拓夜と成瀬。

『なっなんとっ！？葉月選手は、たったのリバースカード1枚だけで、ターンを終了してしまったァ！？まさか初手が手札事故かぁあ？』

結締の実況により会場中がざわつき始める。

「ブヒヒ…今が絶好の攻め時ブヒね…！？」

対する豚屋は、葉月を見ながらブヒブヒと鼻息を荒くし

「じゃあ僕ちんのターン、ドロー！！ブヒッ！！」

豚屋は手札を確認しながら葉月のフィールドを見比べる。

（ブヒヒ…今引いたのは『サイバー・ドラゴン』ブヒ。このモンスターは、相手フィールドにモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合に特殊召喚できる上級モンスターブヒ…でも今、葉月たんのフィールドにはモンスターがいないから、自身の効果で特殊召喚できないブヒ…）

豚屋は更に鼻息の勢いを増していく。

（ブヒヒ…こうなったらこのモンスターで大ダメージを与えるブヒッ！！）

「ぼ、僕ちんは、手札から『ゴブリン突撃部隊』を召喚ブヒッ！！」

【ゴブリン突撃部隊】
星４　地属性　戦士族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　０
効果
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更できない。

豚屋のフィールドに棍棒を手にしたゴブリンの集団が現れる。

「凄いブヒィィッ！！本当にモンスターが現れたブヒィィッ！！」

オォォォオ……！！！！

ソリッドビジョンにより映し出されたモンスターに、会場中がざわめく。

「行けぇ！！『ゴブリン突撃部隊』！！葉月たんにダイレクトアタックブヒィィッ！！」

豚屋の指示でゴブリン達は葉月に向かって走り、取り囲んだ。

「ちょっ…な、何よっ！？」

取り囲まれた葉月は狼狽えるが、逃げ出す事などできずにその場に立ち尽くす。
そしてゴブリン達による集団リンチがソリッドビジョンにより行われた。

ぼこぼこぼこぼこぼこぼこぼこぼこぼこ……！！！！！

「キャャァアアッ！？な、何なのよぉぉお！！」

ソリッドビジョンのため痛みはないが、葉月はダイレクトアタックを受けてライフポイントが大幅に減った。

烏丸葉月　ＬＰ　８０００→５７００

集団リンチを終えたゴブリン達は豚屋のフィールドに戻ると、それぞれ皆、頭を抱えてしゃがみ、縮こまった。

「ブヒヒ…『ゴブリン突撃部隊』は攻撃したターンのバトルフェイズ終了時に守備表示になるブヒ！ぼ、僕ちんのターンはこれで終了だブヒ！」

豚屋のターンが終了し、葉月のターンに移った。

『葉月選手、早速ダイレクトアタックを受けてライフポイントが減ってしまったぁ！！ここから挽回できるのでしょうか！？白石さん、如何でしょう？』

結締が隣に座る白石に尋ねると、白石は握り拳をブルブルと震わせながら

『おのれぇぇ…っ！！この豚野郎、美少女に集団リンチによるダイレクトアタックを…この罪、万死に値するっ！！』

『美少女は日本の宝…ですね、分かります。』

烏丸葉月　ＬＰ　５７００
豚屋淳　ＬＰ　８０００

葉月のフィールドには魔法・罠カードゾーンにリバースカードが1枚のみ。
豚屋のフィールドには守備表示の『ゴブリン突撃部隊』のみ。
それらを確認し、葉月はデッキからカードをドローする。そして…

「…司会の白石さん？」

葉月は唐突に司会進行を務める白石を呼んだ。

『…どうした？』

「確かこの大会、テレビ中継で全国に放送されるんですよね？」

『ふぅん…その様に言ったハズだ、ちなみに、今この会話もカメラはしっかりと捉えているぞ』

「そう…ですか」

葉月はそう言うと、肩に掛かる髪を軽くかき揚げて

「なら、全国に魅せつけてあげる！烏丸葉月の全力のデュエルをっ！！」

『っ！？』
『っ！？』
「ブヒッ！？」

葉月の目に力が宿る。
葉月は矢継ぎ早に手札からカードを発動していった。

「手札から永続魔法『黒い旋風』を2枚発動!!」

【黒い旋風】
永続魔法
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが召喚に成功した時、自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ「ＢＦ」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

葉月のフィールドに2枚の『黒い旋風』が発動された。更に続けて

「更に私は、フィールド魔法『ダークゾーン』を発動!!」

【ダークゾーン】
フィールド魔法
全ての闇属性モンスターの攻撃力は５００ポイントアップし、守備力は４００ポイントダウンする。

フィールド魔法の発動により、会場内の天井に暗雲が現れ、青白く光る雷が落ちてくる。

「このターンで終わらせる、行くわよ！！私のフェザー達！！」

「手札から『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚！！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００
効果相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

葉月のフィールドに黒い翼を広げた鳥獣が現れる。

「シロッコの召喚により、私のフィールドの永続魔法『黒い旋風』の効果発動!!デッキからシロッコの攻撃力よりも低い『ＢＦ』と名のついたモンスターを手札に加える!!」

「ブヒッ!?今はシロッコはフィールド魔法『ダークゾーン』によって、こ、攻撃力は２５００だブヒッ!?それに旋風が2枚あるって事は、デッキから2体の『ＢＦ』を、て、手札に加える事ができるブヒッ!!」

焦りを隠せない豚屋。
そんな豚屋に構わず、葉月は自分のプレイを続行していく。

「私はデッキから『ＢＦ－暁のシロッコ』と『ＢＦ－黒槍のブラスト』を手札に加えるわ!!」

葉月はそれぞれのカードをデッキから手札に加える。

「そして、リバースカードオープン!!永続罠『血の代償』!!」

【血の代償】
永続罠
５００ライフポイントを払う事で、モンスター1体を通常召喚する。
この効果は自分ターンのメインフェイズ及び相手ターンのバトルフェイズのみ発動する事ができる。

「ブヒィッ！？」

「『血の代償』の効果発動！！ライフポイントを５００払い、手札から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を召喚！！」

烏丸葉月　ＬＰ　５７００→５２００

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「黒槍のブラストの召喚により、再び2枚の『黒い旋風』の効果発動！！私のデッキから『ＢＦ－大はいのヴァーユ』と『ＢＦ－月影のカルート』を手札に加える！！」

【ＢＦ－大旆のヴァーユ】
星１　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　０
効果／チューナー
このカードがフィールド上で表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードとチューナー以外の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついたシンクロモンスター１体をエクストラデッキからシンクロ召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

【ＢＦ－月影のカルート】
星３　闇属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

葉月はそれぞれのカードをデッキから手札に加える。そして

「永続罠『血の代償』の効果！ライフを５００払い、ヴァーユを召喚！！更にライフをもう５００払い、ヴァーユをリリース！２体目のシロッコをアドバンス召喚！！」

烏丸葉月　ＬＰ　５２００→４２００

葉月のフィールドには、攻撃力２５００となった暁のシロッコが２体。攻撃力２２００の黒槍のブラストが並ぶ。

「シロッコの召喚により、私の『黒い旋風』の効果が再び発動される！！」

「プギィィッ！！！？」

『烏丸葉月選手！！凄いっもぉの凄い展開だぁぁあっ！？豚屋選手はさっきから、「プギィィッ！！！？」しか言えていないぞぉっ！！』

『ふぅん…「ＢＦ」シリーズ…群がる知恵ある烏の如く、この鳥達の効果のシナジーは怖ろしい位にマッチしている…それをここまで巧みに操るとは…この美少女、ただ者ではないな！！』

葉月は止まらない。永続魔法『黒い旋風』の効果で、デッキから『ＢＦ－月影のカルート』と『黒槍のブラスト』を手札に加えた。

「そして永続罠『血の代償』の効果！ライフ５００を払い、手札に加えた『ＢＦ－黒槍のブラスト』を召喚！！」

烏丸葉月　ＬＰ　４２００→３７００

葉月のフィールドに2体目のブラストが召喚される。
『ＢＦ』と名のついたモンスターの召喚に成功した為、永続魔法『黒い旋風』の効果が再び発動した。

「『黒い旋風』の効果で私はデッキから、『ＢＦ－月影のカルート』と『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に加える！！」

爆発的にデュエルを進めた発動。

現在の葉月のフィールドには

・フィールド魔法『ダークゾーン』
・暁のシロッコ　ＡＴＫ　２５００

・暁のシロッコ　ＡＴＫ　２５００
・黒槍のブラスト　ＡＴＫ　２２００
・黒槍のブラスト　ＡＴＫ　２２００

「プギィィ…！！」

葉月の立ち並ぶモンスター達に唸る豚屋。

「いくわよ！！暁のシロッコの効果を発動！！『ＢＦ』と名のつくモンスター1体を選択し、選択したモンスター以外の『ＢＦ』と名のついたモンスターの攻撃力の合計分の数値だけ、攻撃力をアップさせる！」

発動は自分フィールドの黒槍のブラストを指差し

「黒槍のブラストに、ありったけの力を込める！！」

葉月の指差したブラストに、周りのＢＦ達からエネルギーが送られる。

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
ＡＴＫ　２２００　↓　９９００

ザワザワザワ…！！

黒槍のブラストの攻撃力に会場中がざわめく。
葉月のプレイを観客席にて観ていた拓夜と成瀬は息を飲む。

「…葉月さん…！！」

「決まったな、このデュエル…『黒い旋風』と『血の代償』が並んだ時点で…葉月の勝ちパターンだ」

「私のターンのバトルフェイズ…黒槍のブラスト！！」

名を呼ばれたブラストは手にした槍を構えて、低い姿勢をとった。

「あの臆病者のゴブリン達を抹殺しなさい！！黒槍のブラスト！！」

葉月の指示でブラストは構えた槍を突き立て、ゴブリン突撃部隊へと向かって一直線に突っ込んでいった。

ドゴォォォオオオ……！！！！！

「プギィィィッ！！！？」

黒槍のブラストの攻撃が炸裂し、大きな爆発が起こる。

豚屋　淳　ＬＰ　８０００→０

豚屋のライフは一撃で０となった。

『ウィナー！！烏丸葉月ィィ！！』

白石が高らかに勝者を名乗り上げる。

刹那、

会場中に大歓声が巻き起こった。

『まさかまさかのワンターンキル！！烏丸葉月選手、第一戦目から飛ばしてキターーーー！！』

観客だけでなく、実況を務める結締もヒートアップしながら話す。

『さぁ白石さん！！』

『はい』

『順調に勝ち進んだ烏丸葉月選手ですが、使用するデッキが「ＢＦ」！！これは今大会の優勝候補とみて間違いないと思われますが、如何でしょう？』

『ふぅん…当然だ、美少女には是非とも！！是非とも優勝して欲しいものだ！！』

『美少女は日本の宝、ですね、わかります』

第一回戦を勝利で飾る事ができた葉月は堂々と、選手達が座っている控え席に向かった。そんな葉月を観客達や控え選手達が盛大な拍手で迎え入れる。

『葉ー月ッ!!葉ー月ッ!!葉ー月ッ!!』

「やったな、葉月っ!!」
「おめでとうございます、葉月さんっ!!」

拓夜や成瀬等も拍手で葉月を迎え入れる。

「拓夜…成瀬さん…ふふっ、ありがとう!」

葉月はそう言い、成瀬の隣の席に座る。
そこで、司会の白石と結締が次の対戦者の名前を挙げていった。

『さぁてぇ〜、試合も盛り上がりを見せていった所で次の試合に移りたいと思います!!』

結締がそう言うと、会場に設置された大型モニターに次の対戦者達

の名前とＬＩＶＥ映像で顔が表示された。

【Ｃ　成瀬花穂　ＶＳ　Ｄ　斉藤慎吾】

「…あ、私ですっ！！私が移ってますっ！！」

映し出された自分に驚きながらも成瀬は立ち上がり、スタンバイする。

『早速出ましたぁ！！対戦者は「Ｃ」のカードを持つ第七高等学校の成瀬花穂選手っ！！』

ワァァアアア……ッ！！

『続いて「Ｄ」のカードを持つ世界の自動車産業ト○タに勤めて早５年、今はまだ平社員だけど夢はでっかく営業係長になりたい斉藤慎吾選手っ！！』

ワァァアアア……ッ！！

名を呼ばれた斉藤慎吾はメチャクチャ恥ずかしそうに顔を真っ赤に

しながら席を立ち、デュエルフィールドに向かう。

「なっ……何あの紹介のされ方…っ！？」

結締の紹介を聞いた拓夜は顔をひきつらせながらボヤく。
それには葉月も意を同じにした。

「良かった…私のはまだマトモで良かった…っ！！」

「いや…葉月、お前も何気にアイドルとか言われてたんだぞ？そこは照れるか恥ずかしがるかじゃないの？」

「い、良いのよっ！！第七祭のライブの時に、あの大勢の前で歌った時の事を思えばまだマシだわっ！！」

どこかテンパった様子の葉月だが、拓夜は

（いや…第七祭の時は確かに大勢の客の前で歌ったけど…今回はテレビの全国放送だぞ？今回の方が規模がデカいんだぞ？）

と思ったが、あえて黙っている事にした。

成瀬と斉藤はデュエルフィールドに設置されたデュエルテーブルにデッキを置いた。
すると2人の立っていた場所が上昇し、デュエルフィールドの四隅

に設置されたソリッドヴィジョンが作動する。

『さぁ、互いに準備が整った所でデュエルに移りたいと思いますっ！！』

結締のアナウンスに成瀬と斉藤は向き合い、デッキに手を添える。

そして

「「デュエルっ！！」」

互いに手札となるカードを5枚ドローした。

先攻　斉藤慎吾　ＬＰ　８０００
後攻　成瀬花穂　ＬＰ　８０００

「先攻は僕からいかせてもらうよ！僕のターンっ！！」

斉藤はデッキからカードをドローし、手札に加える。

既に戦術が決まっていたのか、斉藤がとった行動は早かった。

「永続魔法『機甲部隊の最前線』を発動！」

【機甲部隊の最前線】
永続魔法
機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同じ属性の機械族モンスター1体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「更に永続魔法『マシン・デベロッパー』を発動！」

【マシン・デベロッパー】
永続魔法
フィールド上に表側表示で存在する機械族モンスターの攻撃力は200ポイントアップする。フィールド上に存在する機械族モンスターが破壊される度に、このカードにジャンクカウンターを2つ置く。このカードを墓地へ送る事で、このカードに乗っているジャンクカウンターの数以下のレベルを持つ機械族モンスター1体を自分の墓地から選択して特殊召喚する。

「そして僕は…モンスターカード『グリーン・ガジェット』を召喚！」

【グリーン・ガジェット】
星４　地属性　機械族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　６００
効果
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

斉藤のフィールドに緑色の歯車モンスターが召喚された。

【グリーン・ガジェット】
ＡＴＫ　１４００→１６００
（マシン・デベロッパー効果）

「『グリーン・ガジェット』が召喚に成功した事により、その効果を発動する！デッキから『レッド・ガジェット』１体を手札に加える！」

斉藤はデッキから『レッド・ガジェット』のカードを取り出し、対戦者である成瀬に見せ、手札に加えた。

「僕は伏せカードを1枚セットして、ターン終了！」

斉藤のターンが終了し、成瀬のターンに移った。

『白石さん、斉藤選手は見たところ機械族モンスターを主軸としたデッキみたいですが？』

『ふぅん…展開されている『機甲部隊の最前線』、そしてガジェットモンスター…一見地味に見えるがガジェットモンスターのステータスの低さを補う様にして『機甲部隊の最前線』、戦闘破壊されても機械族モンスターを展開し、戦闘破壊されていけば『マシン・デベロッパー』の効果でモンスターを特殊召喚…機械族モンスターがガジェットというのが鍵だな…自身の効果で、モンスターが尽きる事がほぼないと言っても良いだろう…！！』

『なる程、斉藤選手…手ごわい相手の様ですね…』

迎えた成瀬のターン。

（なる程…相手はガジェット効果を利用した機械族デッキですか…）

成瀬はデッキからカードをドローし、作戦を練る。

（あの永続魔法『機甲部隊の最前線』は、モンスターを戦闘破壊して“墓地”へ送ったら発動する効果…要するに相手モンスターを“墓地に送らなければいい”って事です！）

成瀬の打つ手は決まった。早速、手札のカード1枚に手を伸ばし、それを発動する。

「私は手札の永続魔法『次元の裂け目』を発動します！」

【次元の裂け目】
永続魔法
墓地に送られるモンスターは墓地へは送られず、ゲームから除外される。

成瀬の発動したカード効果によりソリッドヴィジョンが作動し、デュエルフィールドの足下に亀裂が入り、その空間が裂け、亜空間が広がった。

成瀬の発動したカードに、控え席に座る拓夜は

「よし！上手いぞ、これで相手モンスターを戦闘破壊しても墓地に送られないから、『機甲部隊の最前線』の効果を発動できない！」

葉月は成瀬のプレイングを黙って静かに観察する。

（…『次元の裂け目』…確か以前、成瀬さんとデュエルした時にはあんなカードは入ってなかった…デュアル召喚のデッキから新しいデッキに変えたみたいね…どんなデッキか見せてもらうわ！）

「へぇ…君のデッキは除外デッキかい？可愛い姿して、意外とやらしいデッキを使うんだね…」

成瀬の対戦者である斉藤慎吾は、はにかみながら口ずさむ。

「そして私は『ライオウ』を召喚！」

【ライオウ】
星４　光属性　雷族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　８００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事はできない。また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事で、相手モンスター１体の特殊召喚を無効にし破壊する。

成瀬のフィールドにモンスターが召喚された。

そして成瀬はそのままバトルフェイズに入り

「いきます！『ライオウ』で『グリーン・ガジェット』に攻撃！」

ドシュゥッ！！

『ライオウ』が『グリーン・ガジェット』に向けて、胸の核（コア）から電磁砲を放った。

「なら僕は君の『ライオウ』の攻撃宣言時に、このカードを発動させてもらうよ！」

「っ！？」

斉藤は自分フィールド上の魔法・罠カードゾーンに伏せられた1枚のカードを発動させた。

「速攻魔法『サイクロン』！これで君の永続魔法『次元の裂け目』を破壊する！」

【サイクロン】
速攻魔法
フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択し、破壊する。

「えっ！？」

ドゴォッ！！

突如、天井から一本の雷が落ちる。
その雷は成瀬の永続魔法『次元の裂け目』を貫き、破壊した。
そしてその間、成瀬のモンスター『ライオウ』は『グリーン・ガジェット』を戦闘破壊し、『グリーン・ガジェット』は墓地へと送られた。

斉藤慎吾　ＬＰ　８０００→７７００

「さて、僕のモンスターが戦闘破壊され“墓地へ送られた”事により、永続魔法『機甲部隊の最前線』の効果と『マシン・デベロッパー』の効果が発動される！」

「そんな…『次元の裂け目』で『機甲部隊の最前線』を封じたと思ったのに…っ！！」

落胆の色を隠せない成瀬。だが斉藤は淡々と自分のプレイを続けていく。

【マシン・デベロッパー】
ジャンクカウンター×２

「『機甲部隊の最前線』の効果で、僕はデッキから『レッド・ガジェット』を特殊召喚する！」

斉藤のフィールドに赤い歯車モンスターが召喚される。

【レッド・ガジェット】
星４　地属性　機械族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　１５００
効果
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから『イエロー・ガジェット』１体を手札に加える事ができる。

【レッド・ガジェット】
ＡＴＫ　１３００→１５００
（マシン・デベロッパー効果）

「機械族モンスターが破壊された為、『マシン・デベロッパー』にジャンクカウンターが2つ乗る…そして特殊召喚された『レッド・ガジェット』の効果発動!デッキから『イエロー・ガジェット』1体を手札に加える!」

斉藤はデッキから『イエロー・ガジェット』を取り出そうとしたその時

バリバリッ!!

「なっ!?…これはっ!?」

突如、斉藤のデッキからスパークが迸った。

「い、一体なんだっ!?…このデュエルテーブルの故障かっ!?」

驚く斉藤に成瀬は「フフフ…故障なんかじゃないですよ?」と可愛らしい笑みを浮かべながら説明しだした。

「あなたの『レッド・ガジェット』の効果が発動できないのは、私のモンスター『ライオウ』のモンスター効果によるものです!」

「なにっ！？」

「『ライオウ』はフィールド上に表側表示で存在する限り、互いのプレイヤーはドロー以外の方法で、デッキからカードを手札に加える事ができません！これであなたのガジェットモンスターの展開は封じましたっ！！」

ワァァアアアア…！！

会場がより一層の盛り上がりをみせる。
斉藤は成瀬の説明を聞き、「なる程ね…」と呟き

「なかなかやるね！」

「フフフ…ありがとうございます！」

成瀬はバトルフェイズを終了させ、メインフェイズ２へと移った。
手札のカード１枚を手に取り

「私はリバースカードを１枚セット！ターン終了です！」

ターンを終了終了した。
続いて斉藤のターンに入った。

『ふぅん…成瀬は『ライオウ』の効果に助けられたな…』

司会を勤める白石が言う。
その白石と同じく、実況を勤める結締もコメントをした。

『『ライオウ』のデッキサーチを封じる効果は強力だな、しかも攻撃力は１９００…普通に考えて優秀なアタッカーですね！』

『あぁ…斉藤にとってあの『ライオウ』はかなり厄介なハズだ…このターンでどう動くのか…観させてもらうとしよう』

成瀬花穂　ＬＰ　８０００
斉藤慎吾　ＬＰ　７７００

「いくよ、僕のターン！ドロー！」

斉藤はデッキからカードをドローする。
現在、成瀬のフィールドには『ライオウ』と魔法・罠カードゾーンに１枚の伏せカード。

斉藤のフィールドには『レッド・ガジェット』と魔法・罠カードゾーンに永続魔法『機甲部隊の最前線』と『マシン・デベロッパー』。

斉藤は手札からモンスターを召喚した。

「僕は『起動兵士デッドリボルバー』を召喚！」

【起動兵士デッドリボルバー】
星４　地属性　機械族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　２０００
効果
自分フィールド上に「ガジェット」と名のついたモンスターが表側表示で存在する限り、このカードの攻撃力は２０００ポイントアップする。

斉藤のフィールドに新たな歯車モンスターが出現した。

「『起動兵士デッドリボルバー』の攻撃力はたったの０…だがこいつは他のガジェットモンスターが自分フィールドに存在する時、抑えられていたリミッターが解除される！」

【起動兵士デッドリボルバー】
ＡＴＫ　０→２２００
（マシン・デベロッパー効果）

「攻撃力が…一気に２２００にまで上昇しましたっ！？どうしてっ！？」

思わず声をあげる成瀬。
斉藤は『起動兵士デッドリボルバー』を指しながら

「こいつは自分フィールド上に『ガジェット』と名のついたモンスターが表側表示で存在する時、攻撃力が２０００ポイントアップする効果を持っている！今の僕のフィールドには『レッド・ガジェット』がいる！更に場の永続魔法『マシン・デベロッパー』の効果で、攻撃力が更に２００ポイントアップしている！」

軽々と成瀬のモンスターの攻撃力を上回ってきた斉藤は、そのままバトルフェイズへと入った。

「いくよ、まずは『起動兵士デッドリボルバー』で『ライオウ』に攻撃！」

斉藤の歯車モンスターが成瀬のモンスターに向けて迫ってくる。

「させません！リバースカード、オープン！罠カード『次元幽閉』を発動しますっ！！」

【次元幽閉】
罠カード
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「なにっ！？」

斉藤の『起動兵士デッドリボルバー』は、突如現れた亜空間に飲まれ、消滅した。

斉藤のモンスターの攻撃を去なした成瀬は、「やった！」と可愛らしくガッツポーズを決める。

その反面、斉藤は「チィっ…」と軽く舌打ちをし、バトルフェイズを終了させ、メインフェイズ2へと移った。

「僕は『レッド・ガジェット』を守備表示に変更し、ターン終了だ！」

斉藤のターンが終了し、成瀬のターンに移る。

「私のターンです！ドロー！」

ドローカードを手札に加えた成瀬。

成瀬はフィールドを見つめながらデュエルの流れを感じ取っていた。

（…今のこの状況は…きっと『ライオウ』の効果が斉藤さんに効いているんですね、この子のおかげで斉藤さんはデッキからカードを手札に加える事ができません…ガジェットモンスターは召喚しても手札にモンスターを補充できるのが最大の強み！それを封じている今、私が今成すべき事は…『ライオウ』を守りながらこのデュエルに勝つ事っ！！）

「いきますっ！私はっ……！！」

成瀬の手は決まった。

成瀬が手札の１枚に手を伸ばしたその時

…パァァアアア……！！

それまで盛り上がりを見せていた観客達の声援がピタリと止んだ。

観客達だけではない。

控え席で2人のデュエルを見ていた選手達も、思わず言葉を失った。

選手達だけではない。

対戦者である斉藤慎吾は言葉を失うどころか、目の前の成瀬の姿に思わず見とれてしまっていた。

「…なっ…成瀬さん？」

声を搾り出す様にして何とか口にする葉月。

手札を手に取る成瀬の背中には、白い大きな翼が広がっていた。

その翼は大きく広がると、辺りに白い羽を舞わせる。

（……花穂…まさかそのカードは…っ！？）

「…エアトス……」

成瀬の背中の白い翼は色褪せて消えていく。

そして、手札のカードを成瀬は空に翳し

「私はっ…『ガーディアン・エアトス』を特殊召喚しますっ！！来て、エアトスッ！！」

成瀬の呼びかけに応える様にデュエルフィールドを舞う白い羽はその数を増し、天上より光輝く聖剣がデュエルフィールドに突き刺さった。

ザンッ！！

そしてその聖剣から放たれる聖なる光が具現化し、１人の守護者（ガーディアン）がその姿を現した。

【ガーディアン・エアトス】
星８　風属性　天使族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
効果
自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地に送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを３体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

『ガーディアン・エアトス』と『ライオウ』。
２体のモンスターが成瀬のフィールドに並ぶ。

「手札から装備魔法『黒いペンダント』を発動します！エアトス、受け取って！」

【黒いペンダント】
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、相手ライフに５００ポイントダメージを与える。

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００→３０００
（黒いペンダント装備）

エアトスの首に『黒いペンダント』が飾られる。
そして成瀬は

「いきます！私のターンのバトルフェイズですっ！！」

成瀬はそう言うと、斉藤のフィールドの守備モンスター『レッド・ガジェット』を指差し

「『ライオウ』で、『レッド・ガジェット』に攻撃！」

ドシュゥッ！！

『ライオウ』の胸の核から放たれた電磁砲が『レッド・ガジェット』を貫通する。

【マシン・デベロッパー】
ジャンクカウンター×４

「くっ！？」

歯車モンスターを破壊された斉藤の表情が曇る。
斉藤のフィールドには壁となるモンスターがいなくなってしまった。

「いきますっ！！『ガーディアン・エアトス』で、ダイレクトアタック！！フォビドゥン・ゴスペル！！」

聖剣を構えたエアトス。
エアトスはその聖剣の切っ先を斉藤に向けると、聖剣の先から強力なエネルギーが斉藤に向けて放たれた。

「うわぁぁあああっ！？」

斉藤慎吾　ＬＰ　７７００→４７００

ダイレクトアタックを受けた斉藤のライフが大幅に減少する。

「これで斉藤さんとのライフ差が広がりました！でも、まだここからですっ！いくよ、エアトス！」

成瀬のターンのバトルフェイズが終了し、メインフェイズ２へと移る。成瀬は自分フィールドの『ガーディアン・エアトス』に向かって指示を出す。

「エアトス、あなたの力を解放してっ！」

『ハッ！』

『ガーディアン・エアトス』が宙に浮かび上がり、手にした聖剣を翳す。

「『ガーディアン・エアトス』の効果を発動します！エアトスは装備されている装備魔法カードを墓地に送る事で、相手の墓地に存在

するモンスターを3体までゲームから除外する事ができます！エアトスに装備された『黒いペンダント』を墓地に送って、斉藤さんの墓地に眠る『レッド・ガジェット』と『グリーン・ガジェット』をゲームから除外しますっ！！聖剣のソウルッ！！」

「なにっ！？」

エアトスの効果に驚愕を露わにする斉藤。

斉藤の墓地に眠る『レッド・ガジェット』、『グリーン・ガジェット』の2体のモンスターの魂が、エアトスの手にした聖剣に取り込まれていった。

【ガーディアン・エアトス】
・ＡＴＫ　３０００→２５００
（黒いペンダント→墓地）

・ＡＴＫ　２５００→３５００
（エアトス効果）

斉藤慎吾　ＬＰ　４７００→４２００

斉藤は唖然とフィールドを見つめた。

自分のフィールドにはモンスターが無く、永続魔法『機甲部隊の最前線』と『マシン・デベロッパー』があるだけだった。
『マシン・デベロッパー』にはジャンクカウンターが４つ乗っており、次の自分のターンに墓地からモンスターを特殊召喚するつもりであったが、エアトスによって墓地にもモンスターがいなくなってしまった。

（…僕の戦術が…ことごとく封じられていくっ！！…それにあの時に見えた白い翼…あれは本当にソリッドビジョンだったのか？）

斉藤が思っている最中（さなか）、成瀬は自分のプレイを続けていく。

「私は最後に、リバースカードを１枚セットして、ターンを終了します！」

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　３５００→２５００

「くっ…っ！？ぼ、僕のターンッ！！」

斉藤のターンに移り、デッキからカードをドローする。

（僕のガジェット達が…ことごとく封じられている…でも、今引いたこのカードならっ！？）

斉藤は手札のカード１枚を成瀬に見せた。

「僕は手札の『マシンナーズ・フォートレス』の効果を発動する！」

【マシンナーズ・フォートレス】
星７　地属性　機械族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が８以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して１枚捨てる。

「手札の機械族モンスター『レッド・ガジェット』と『イエロー・ガジェット』を捨てて、このカードを特殊召喚する！」

斉藤は手札のモンスター２体を捨てる。

そして、斉藤のフィールドに重戦車をイメージさせる機甲兵が召喚された。

「『マシンナーズ・フォートレス』…？」

「『マシンナーズ・フォートレス』も機械族、よって僕のフィールドの永続魔法『マシン・デベロッパー』の効果を受け、攻撃力が２００ポイントアップする！」

【マシンナーズ・フォートレス】
ＡＴＫ　２５００↓２７００
（マシン・デベロッパー効果）

「これで君のエアトスの攻撃力を上回った！いくよ、『マシンナーズ・フォートレス』の攻撃！目標は…『ガーディアン・エアトス』だっ！！」

エアトスを指差す斉藤。
フォートレスの左肩に取り付けられた砲芯が、ギギギギ…と音を立てて、その射角を調整していく。そして…

…ギチィィンッ！！

エアトスを完全にロックオンしたフォートレスは、その砲芯にエネルギーを溜めていく。

「…っテーーッ！！」

ボゴォォォオオオッ！！！！！

『マシンナーズ・フォートレス』の砲撃が『ガーディアン・エアトス』に向けて射出された。

迫り来る砲撃。
だが成瀬は慌てること無く、それに対象した。

「そうはさせません！リバースカードオープン！『次元幽閉』を発動しますっ！！」

成瀬は2枚目となる罠カード『次元幽閉』を発動させた。

「なっ！？」

「フォートレス、次元の彼方へと消えて下さいっ！！」

斉藤の『マシンナーズ・フォートレス』の足元の空間がパックリと割れる。
足元の重心が崩れたフォートレスはそのままバランスを崩し、亜空間へと真っ逆さまに落ちていった。

砲撃はフォートレスがバランスを崩れた事で射軸がズレ、エアトスを大きく外していった。

「そんなっ！？…僕のデッキ最強のモンスターがっ！？」

ことごとく除外されていく斉藤は焦りを隠せない。
成瀬はワザと、そんな斉藤に追い討ちをかける様に、笑顔で話す。

「斉藤さん、次はどんな機械を見せてくれるんですか？」

「……っ僕はバトルフェイズを終了し、場の永続魔法『マシン・デベロッパー』の効果を発動する！」

斉藤は『マシン・デベロッパー』のカードを墓地へと送った。

「ジャンクカウンターが4つ乗っているこのカードを墓地へ送る事で、このカードに乗っていたジャンクカウンターの数以下のレベルを持つ機械族モンスター1体を自分の墓地から特殊召喚する！僕は墓地から『レッド・ガジェット』を守備表示で特殊召喚！」

斉藤のフィールドに赤色の歯車モンスターが現れる。

「…僕のターンは終了だ…っ」

成瀬花穂　ＬＰ　８０００
斉藤慎吾　ＬＰ　４２００

「良い感じです…私のターン！」

成瀬のターン。
デッキからカードをドローし、手札が2枚となった成瀬は、斉藤に精神的なだけでなく、現実的にも更に追い討ちをかけていく。

「いきます！手札の魔法カード『精神操作』を発動します！」

【精神操作】
魔法カード

このターンのエンドフェイズ時まで、相手モンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

「このカード効果で、斉藤さんの『レッド・ガジェット』のコントロールはエンドフェイズまで、私のものになります！」

「そんなっ！？」

斉藤の『レッド・ガジェット』が成瀬のフィールドに移った事で、斉藤のフィールドには壁となるモンスターがなくなってしまった。

「いきますっ！バトルフェイズですっ！！」

意気込む成瀬は、まず『ライオウ』に指示を送る。

「『ライオウ』で、プレイヤーへダイレクトアタック！！ライトニング・キャノン！！」

『ライオウ』の放った電磁砲が斉藤に直撃する。

斉藤のライフポイントは大幅に減少した。

斉藤慎吾　ＬＰ　４２００→２３００

「くぅっ！！？」

そしてこのデュエル最後の一撃として、成瀬の『ガーディアン・エアトス』が手にした聖剣を振り上げた。

『…ハァァッ！！』

「最後の一撃…覚悟っ！！『ガーディアン・エアトス』！！」

成瀬は上に挙げた右腕を振り下ろし、力の限り叫んだ。

「フォビドゥン・ゴスペル！！！！」

『タァァアアッ！！』

成瀬の振り下ろす動作に合わせて、エアトスも手にした聖剣を一気に振り下ろした。

その振り下ろした衝撃、剣圧ともとれる一撃が、斉藤に直撃する。

ドゴォォォオオオッ！！！！

「うわぁぁああっ！？」

斉藤慎吾　ＬＰ　２３００→０

その瞬間、試合終了の合図として実況の結締が高らかにそれを叫んだ。

『ウィナーッ！！成瀬花穂ォッ！！』

「……勝っちゃいました…」

そう呟くと、それまで張り詰めていた自分の中の緊張の糸がプツリと切れたのか、成瀬はその場に座り込んだ。

辺りを見渡せば盛大な拍手喝采が自分を包みこんでいる。
成瀬は自分が初めて出場した大会で貴重な白星をあげる事ができた。

ヴィィィィ……

デュエルが終了した為、足元のデュエルゾーンがゆっくりと降下してきく。

（やりましたっ！！まずは一勝、次もこの調子でっ）

「っ！？」

立ちあがろうと成瀬は足に力を入れるのだが、その足に力が入らない。

「……え？…あれ？」

どれだけ脳が足に立つ様に命令しても、その足が言うことを聞かない。

（……あれ？…どうして？……なんで？）

痺れている訳ではない。痛い訳ではない。だるい訳ではない。

足の感覚がない。

その事が一瞬のうちに成瀬の脳内に不安という名の渦が巻き起こる。

その時

「花穂！！」

拓夜はいつまでたっても座り込んでいる成瀬の所へと駆け寄った。

「花穂、一回戦おめでとう！」

そう言い、拓夜は座り込んでいる成瀬に向けて手を差し伸べる。

「拓夜さん…私っ…」

涙目で拓夜の手を握る成瀬。
だがその時、今まで無かった足の感覚が戻った。

（えっ！？）

何事もなかったかの様に、自然な動作で立つ事ができた成瀬。

（あれ？…足の感覚が…戻ってる…）

自分の足元を見てキョトンとしている成瀬に、拓夜は話しかける。

「花穂、よっぽど勝てたのが嬉しかったのか？涙目になってるぞ？」

「え？…アハハッ、そうみたいです！ヤッパリ勝てたのは嬉しいですよ？」

成瀬はどこか誤魔化す様に笑い、拓夜と手を繋ぎながら控え席に向かって歩きだす。

（…さっきまでの……あの足は一体…？）

どれだけ拓夜と楽しく話していても、あの時の足の違和感の不安が拭える事はなかった。

初心者の底力

控え席に戻った拓夜と花穂の2人。
そして葉月を交えた3人は他の人が行うデュエルを見て楽しんでいた。

「おっ！？…あの人も『Ｄ－ＨＥＲＯ』を使ってる！？」

「わぁ…っ！あのモンスター、ちっちゃくて可愛いです！」

「詰めが甘いわね…あそこは先にあのカードを発動してから攻めるべきだわ…」

それぞれのデュエルに3人がそれぞれの感想を口にする。
そして今現在、自分達の目の前で行われていたデュエルが終了した。

デュエルが終了し、司会を務める白石が次のデュエルを始める為に選手達を促した。

「ふぅん…さて、第一回戦も残すところあと1試合のみ…両選手共に前へ！！」

会場の巨大なスクリーンに選手達の顔と名前が表示される。そこに

は…

【『O』　西条拓夜　ＶＳ　『P』　棗　絵里香】

「っし！やっと俺の出番が来たか！！」

自分の出番がようやく訪れた事に張り切る拓夜。そんな拓夜を成瀬と葉月の２人は応援した。

「拓夜さん！ファイトですっ！！」

「ビシッと決めてきなさい！！」

２人からの声援に拓夜は「あぁ、任せとけ！！」と、気合い充分に答えてデュエルフィールドへと降りていく。

拓夜がデュエルフィールドに到着すると、既に対戦者である棗が立って、拓夜を見ていた。

拓夜は棗の前に立ち、簡単に挨拶をした。

「西条拓夜だ、よろしく！」

そう言って右手を差し出す拓夜。

棗は腕を組み、拓夜を真っ直ぐに見ながら話しかけてきた。

「貴方が西条拓夜…そぅ、ねぇ貴方…遊〇王カードを始めてどれ位になるの？」

棗は黒髪のセミロングの髪を片手で簡単に払い上げながら淡白に尋ねた。

「ん～、まだ始めてから半年も経ってないけど？」

「……そぅ、アイツも何でこんな奴を…自分でやれば良いのに…」

拓夜からの返事を聞いてボヤく棗。

棗が何を言っているのか分からない拓夜は「？」と、首を傾げた。

（この棗って人…何を言ってるんだろ…？）

とやかく気にしても仕方ないと思った拓夜はデュエルテーブルが設置してあるデュエルゾーンへと向かう。

デッキをテーブルに置き、準備が整った拓夜のデュエルゾーンが上昇し、ソリッドビジョンシステムが作動する。

対する棗も準備が整ったらしく、拓夜と同じ様にソリッドビジョンシステムが作動した。

「…へへっ！わくわくしてくるな…！！」

気が高ぶる。

拓夜は早くデュエルを始めたい気持ちでいっぱいだった。

棗は「ふぅ…」と軽く溜め息を吐きながら、どこかかったるそうな雰囲気を醸し出していた。

『ふぅん…2人共準備が整った様だな、では…思う存分！デュエルを行えぇ！！』

白石が気合いの入った言葉でデュエルを促した。

それが火蓋となり、拓夜と棗は同時にデッキからカードを5枚ドローし、デュエルを開始した。

「「デュエルッ！！」」

先攻　西条拓夜　ＬＰ　８０００

後攻　棗絵里香　ＬＰ　８０００

「先攻は貰った！！俺のターン！！」

拓夜は勢い良く、デッキからカードをドローする。
手札を確認した拓夜は「…よしっ！」と頷き、プレイを開始した。

「まずは手札の魔法カード『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
魔法カード
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚を捨てる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「このカードコストで、手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を捨てて、デッキからカードを2枚ドローする！」

拓夜は手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を墓地に捨て、デッキから2枚のカードをドローした。
ドローしたカードを確認する拓夜。

（『薔薇の刻印』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』のカードか…ならっ！）

「俺は『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚！」

拓夜のフィールドにダイヤモンドに身を包んだ運命の戦士が現れた。

Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「ダイヤモンドガイの効果発動！デッキの一番上を確認し、それが通常魔法だった場合墓地に送り、違うカードだった場合はデッキの一番下に戻す！…一番上のカードは…」

拓夜はデッキトップのカードをめくり、確認した。

「…『椿姫ティタニアル』…コイツはモンスターカードな為、デッキの一番下に戻す…」

デッキの一番下にカードを戻した拓夜は、手札のカード１枚を伏せ

た。

「俺は伏せカード1枚をセットして、ターンエンド!!」

拓夜のターンが終了し、棗のターンに移行する。棗は拓夜をぼーっと見つめながら

「ふ〜ん、何かパッとしないわね…気合い充分みたいな感じだったから、初手から飛ばしてくると思ったのに…」

「焦るなって、掛かって来いよ!?」

拓夜からの返事を聞き、再び軽く溜め息を吐く棗はデッキトップに指を添えて

「ふぅ…私のターン、ドロー」

シュバッ!!

棗は鮮やかにキレのあるドローを見せ付けた。
そんなキレのある棗は早速、手札のカードを発動する。

「手札の魔法カード『調和の宝札』を発動」

【調和の宝札】
魔法カード
手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「調和の…宝札？何だそのカード？」

首を傾げる拓夜に棗はまたまた再び軽く溜め息を吐いた。

「貴方知らないの？…ハァ…このカードは、手札の攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて、デッキからカードを2枚ドローするのよ」

「へぇ…何か俺の『デステニー・ドロー』みたいだな！そんなカードもあるんだ！」

「…私は手札の『ドラグニティ－ファランクス』を墓地に捨てて、デッキからカードを2枚ドロー」

棗は『ドラグニティ－ファランクス』を墓地に捨てて、デッキからカードを2枚ドローした。

「そして手札の速攻魔法『サイクロン』を発動、貴方のリバースしてあるカードを破壊」

【サイクロン】
速攻魔法
フィールド上の魔法・罠カード1枚を選択し、破壊する。

棗の魔法効果によって、拓夜の伏せてあった『奈落の落とし穴』が破壊された。

「俺の奈落がっ！？」

棗は更に手札のカードに手を伸ばす。

「私は『ドラグニティ－ドゥクス』を召喚」

【ドラグニティ－ドゥクス】
星４　風属性　鳥獣族
ＡＴＫ　１５００
ＤＥＦ　１０００
効果
このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「

ドラグニティ」と名のついたカードの数×２００ポイントアップする。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

棗のフィールドに、鳥の衣装を身に纏うモンスターが召喚された。

「ドゥクスのモンスター効果発動、ドゥクスが召喚に成功した時、墓地の『ドラグニティ』と名のついたレベル３以下のドラゴン族モンスター１体を装備する…私は墓地の『ドラグニティ－ファランクス』を装備させる」

棗は墓地から『ドラグニティ－ファランクス』のカードを取り出し、『ドラグニティ－ドゥクス』に装備した。

「そしてドゥクスは、フィールド上の『ドラグニティ』と名のついたカードの数だけ、攻撃力を２００ポイントアップさせる」

【ドラグニティ－ドゥクス】
ＡＴＫ　１５００→１９００

「っ！？…一気に下級アタッカー並の攻撃力になった！？」

驚く拓夜に対し、棗は淡々とプレイを続けていく。

「私は装備カードとなっている『ドラグニティ－ファランクス』の効果を発動」

「っ！？」

【ドラグニティ－ファランクス】
星２　風属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１１００
効果／チューナー
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「装備カードとなっているファランクスは、１ターンに１度…モンスターカードゾーンに特殊召喚する事ができる」

「何だその効果っ！？…しかもそいつは…確かチューナー…っ！？」

棗のフィールドに２体のモンスターが並ぶ。棗は拓夜を冷たい眼差

しで見つめながら

「一瞬で消えないでよ初心者？…私を楽しませなさい」

と、小さく呟いた。

「レベル４『ドラグニティ－ドゥクス』に、レベル２『ドラグニティ－ファランクス』をチューニング」

棗のモンスター達が高く跳躍し、ファランクスにドゥクスが乗る様な形になって眩い光を放ちながら上から急降下してくる。

「疾風の刃、吹きすさぶ嵐の槍となりて敵を撃つ！シンクロ召喚、貫け！『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』！」

【ドラグニティナイト－ゲイボルグ】
星６　風属性　ドラゴン族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　１１００
効果／シンクロ
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター１体以上
このカードが戦闘を行うダメージステップ時に１度だけ、自分の墓

地に存在する鳥獣族モンスター1体をゲームから除外して発動する事ができる。このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、ゲームから除外したそのモンスターの攻撃力分アップする。

棗のフィールドに白き竜に跨った竜戦士が舞い降りた。

「ドラグニティ…ナイト…っ!?」

観客席から2人のデュエルを見ていた葉月は身を乗り出して唐突に叫んでいた。

「拓夜っ!?気をつけて!!迂闊にそのモンスターを攻撃しちゃ駄目よっ!!」

そんな葉月の様子に隣に座っていた成瀬は尋ねる。

「は、葉月さん?どうされたんです?」

「…あの棗って人…どこかで見た事があると思ったら…あのモンスターを見て思い出したわ!間違ってなければ…あの棗は…東区の人間じゃない!?」

「えっ!?どういう事なんです?…この大会の出場権は東区のデュエリストだけですよ?」

「どうしてかは私も分からないわよ！…けど…あの棗って人の強さは折り紙付きよ！…何も知らない拓夜じゃ勝てない！！」

「っ！？…葉月さん、あの棗って人…一体何者なんですか？」

「…棗は…北区のデュエリストの中でもトップクラスの実力を持つ竜使い、そして…北区のデュエリスト達のチーム『フィアーズ』に所属するデュエリストよ…私も大会とかで彼女のチームのデュエルを見た事があるけど…どいつもこいつも化け物揃いのチームだったわ…っ！！」

「……でも、拓夜さんだって只ではやられませんよ」

「…成瀬さん？」

「拓夜さんは確かに初心者ですけど…でも、拓夜さんも私も、ＯＣＧ研究会の人間です。私達は相手がどんな強敵だろうと、絶対に諦めません！絶対に最後までカード達を信じます！」

拓夜の前に立ちふさがる『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』。棗は腕を組み、素っ気ない言葉で指示を出した。

「ゲイボルグでダイヤモンドガイに攻撃」

『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』は手にした槍をダイヤモンドガイに投げつけた。

ドシュッ！！

「ダイヤモンドガイっ！？」

拓夜の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』はゲイボルグの槍を受け、破壊された。

西条拓夜　ＬＰ　８０００→７４００
棗絵里香　ＬＰ　８０００

「私はリバースカードを１枚セットして、ターンを終了する」

棗のターンは終了し、拓夜のターンに移った。

「やるな…だけど俺も負けてられない！俺のターン！！」

拓夜はドローし、そのカードを手札に加える。
そして戦略を練る。
今の自分の手札で、如何にしてデュエルの流れをこちらに向けるか

を。

『ふぅん…『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』か…』

司会の白石が呟く。

その言葉に、隣に座って実況を務める結締が白石に尋ねた。

『白石さん、やはり棗はこのターンに『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』の効果は使ってきませんでしたね』

『当然だな…ゲイボルグは戦闘を行う際に、墓地の鳥獣族モンスターをゲームから取り除き、そのモンスターの攻撃力分、自身を強化させる効果…今の棗の墓地に鳥獣族モンスターは『ドラグニティ－ドゥクス』のみ、返しのターンに効果を発動出来ずにやられてしまっては元も子もないからな…』

『ですよね！まぁ拓夜ちゃんはきっと『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』の効果自体知らないだろうから、このターンでどう立ち回るのかが気になる所ですね！』

（…よし、この手札なら…棗さんのモンスターを除去できる！）

拓夜は早速、手札のカードを発動した。

「魔法カード『精神操作』を発動！」

【精神操作】
魔法カード
このターンのエンドフェイズ時まで、相手モンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

「っ！？…私のゲイボルグを…っ！？」

「この効果で『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』は、ターン終了時まで俺のコントロール下におかれる！」

棗の『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』は、拓夜のフィールドへと移った。
そして再び手札を確認する拓夜。

（『精神操作』で『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』を奪ったのはいいものの、俺の手札にはアタッカーとなるモンスターや、チューナーはいない…だけどこのカードならっ！！）

「俺は…『サイバー・ヴァリー』を召喚！」

【サイバー・ヴァリー】
星１　光属性　機械族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
効果
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを１枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。●このカードと自分の手札１枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード１枚をデッキの一番上に置く。

西条のフィールドに小型の『サイバー・ドラゴン』が出現した。

「『サイバー・ヴァリー』の第２の効果を発動する！『サイバー・ヴァリー』と、自分フィールド上の表側表示のモンスター１体をゲームから除外する事で、デッキからカードを２枚ドローする！」

「……」

「俺は『サイバー・ヴァリー』と『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』をゲームから除外！！」

拓夜のフィールドのモンスター達が亜空間へと消えていく。
そして、モンスター効果により、拓夜はデッキからカードを2枚ドローした。

そのプレイを観ていた成瀬と葉月は

「良いです！『精神操作』は攻撃とリリースを封じられていますケド、除外する分には問題ないです！」

「…相手モンスターを除去しつつ、自分は2ドロー…」

（…拓夜…アンタはまだデュエルを始めてから半年も経っていない初心者…なのにこのコンボ…手札を消費した分だけ、ドローする事によって消費分は帳消しにして、尚且つ相手モンスターを除外…）

葉月は拓夜のプレイングに恐怖を感じた。

（…前の拓夜のデッキには『サイバー・ヴァリー』なんて入っていなかった…。前の拓夜のデッキ『Dゲート』も、決して弱い訳じゃない…ただ融合主体軸のデッキというのは手札事故が起きやすい為に、大会とかでは上位に入り込む事すら難しい…でも確かに『Ｄｒａｇｏｏｎ－Ｄ・ＥＮＤ』は強力なモンスターだったケド……今回

のデッキに『Ｄｒａｇｏｏｎ－Ｄ・ＥＮＤ』は入ってるの！？…この流れからして…入っているとは思えないケド…拓夜…）

互いのフィールドにモンスターはなく、棗のフィールドにリバースカードが1枚セットしてあるだけの状況。
拓夜はモンスターを召喚した為、次のモンスターを召喚する事は許されない。

「俺は伏せカードを1枚セットして、ターン終了だ！」

「…私のターン、ドロー」

棗のターン。棗はデッキからカードをドローする。
現在、互いのフィールドにはモンスターはなく、リバースカードが1枚ずつセットしてあるだけ。

（私の『ドラグニティナイト－ゲイボルグ』を除去した事は誉めてあげる…だが、これならどう？）

棗は手札に手を伸ばし

「私は『サイバー・ダーク・ホーン』を召喚」

【サイバー・ダーク・ホーン】
星４　闇属性　機械族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
効果
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下のドラゴン族モンスター１体を選択してこのカードに装備カード扱いとして装備し、その攻撃力分だけこのカードの攻撃力をアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが戦闘によって破壊される場合、代わりに装備したモンスターを破壊する。

棗のフィールドに黒い骨の様な姿をした機械竜が出現した。

「『サイバー・ダーク・ホーン』の効果…召喚された時、墓地のレベル３以下のドラゴン族モンスター１体を装備し、装備したモンスターの攻撃力分の数値だけ、『サイバー・ダーク・ホーン』の攻撃力はアップする」

棗の説明を聞き、拓夜は

「レベル３以下のドラゴン族モンスター…っ！？…まさかっ！？」

棗は自分の墓地からカードを１枚取り出し、拓夜にそれを見せた。

「私は墓地からレベル2ドラゴン族モンスター『ドラグニティ－ファランクス』を選択…『サイバー・ダーク・ホーン』に装備する」

棗の『サイバー・ダーク・ホーン』に『ドラグニティ－ファランクス』が装備された。

『サイバー・ダーク・ホーン』は『ドラグニティ－ファランクス』の攻撃力分、その攻撃力を上昇させた。

【サイバー・ダーク・ホーン】
ＡＴＫ　８００→１３００
（ドラグニティ－ファランクス装備）

「くっ…ファランクスの効果がっ!?」

拓夜の苦い表情を見た棗はこの時、感情らしい感情を初めて、その表情に表した。

「フフフ…『ドラグニティ－ファランクス』の効果発動、装備カード扱いとなっているこのカードを、フィールド上に特殊召喚する！」

棗のフィールドに再び現れる『ドラグニティ－ファランクス』。棗は不敵な笑みを浮かべながら

「レベル４『サイバー・ダーク・ホーン』に、レベル２『ドラグニティー ファランクス』をチューニング！」

棗のモンスター達が星となり、シンクロモンスターがその姿を現した。

「氷結は終焉…せめて刹那にて砕けよ！シンクロ召喚、凍てつけ冷気よ！『氷結界の龍　ブリューナク』！！」

【氷結界の龍　ブリューナク】
シンクロ・効果モンスター
星６　水属性　海竜族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１４００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分の手札を任意の枚数墓地に捨てて発動する。その後、フィールド上に存在するカードを、墓地に送った枚数分だけ持ち主の手札に戻す。

拓夜の前に立ちはだかる氷の龍。
その全身から放たれる白く輝く冷気が煌き、その姿がより一層、秘めたる力の恐ろしさを表している様であった。

「…ブ、ブリューナク…？」

（攻撃力は２３００と大したことない様に感じる…だが何だ？このモンスターからは何か嫌な感じがする…！？）

「フフフフ…ブリューナクの効果発動、手札を任意の枚数捨てる事で、捨てた手札の枚数分だけフィールドのカードを持ち主の手札に戻す。私は手札を１枚捨てて、貴方のリバースカードをバウンズする！」

「なっ！！？」

棗は手札のカード１枚を墓地に捨てた。その瞬間、ブリューナクの翼が大きく羽ばたき、フィールドを凍てつく冷気が覆いつくす。

ビュオオォォォ…！！！

「くっ！？」

冷気が治まると、拓夜のフィールドに伏せてあった１枚のリバースカードが消えていた。

それにより拓夜のフィールドはがら空き状態になってしまっていた。

「いくわよ、私のターンのバトルフェイズ、『氷結界の龍　ブリューナク』の攻撃！エターナル・ブリザード！！」

ドシュゥッ…！！！！

ブリューナクの口から青白く輝くレーザーが放たれる。
拓夜はダイレクトアタックを受けて、そのライフポイントが大きく削られてしまった。

「ぐぁぁっ！！？」

西条拓夜　ＬＰ　７４００→５１００

「フフフ…私のターンは終了よ、貴方もアイツに認められたデュエリストなら、この状況を打ち破ってみなさい」

棗のターンが終了し、拓夜のターンに移る。

「アイツに認められた？…棗さん、アンタ一体何を言っているんだ？」

「…ふん、私に勝つ事が出来たら…教えてあげるわよ。私達は弱いデュエリストには用はないのよ」

淡白に答える棗。拓夜はそんな様子の棗に不信を抱きながら自分のプレイを始めた。

「俺のターン、ドロー！」

カードをドローした拓夜は、ドローしたカードを確認すると、そのカードを発動させた。

「魔法カード『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
魔法カード
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚をすてて発動する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「俺は手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を捨てて、デッキからカードを2枚ドロー！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ】
星６　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　２１００
ＤＥＦ　１０００
効果
１ターンに１度、自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースする事で、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。このカードが墓地に存在する限り１度だけ、自分のドローフェイズ時にドローしたモンスター１体をお互いに確認し特殊召喚する事ができる。

デッキからカードをドローした拓夜。
拓夜は交換した手札を確認すると、その中の１枚に手を伸ばし

「俺は『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！！」

【ローンファイア・ブロッサム】

星３　炎属性　植物族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１４００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリリースして発動する。自分のデッキから植物族モンスター１体を特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

拓夜のフィールドに爆弾の種子を宿した植物が咲いた。
その爆弾植物『ローンファイア・ブロッサム』を指差し

「『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動！自身をリリースし、デッキからもう１体の『ローンファイア・ブロッサム』を守備表示で特殊召喚！」

『ローンファイア・ブロッサム』はその種子を爆発させると、フィールドに新たな『ローンファイア・ブロッサム』が咲いた。
更に拓夜は『ローンファイア・ブロッサム』の効果を発動させていく。

「そして新たな『ローンファイア・ブロッサム』の効果を発動させる！自身をリリースし、デッキから『椿姫ティタニアル』を攻撃表示で特殊召喚する！！」

【椿姫ティタニアル】
星８　風属性　植物族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２６００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリリースして発動する。フィールド上に存在するカードを対象とする魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

拓夜のフィールドに巨大な椿のモンスターが召喚された。
その拓夜のプレイを見ていた対戦相手の棗は顔色１つ変える事なく呟く。

「…攻撃力で上回っても、私を倒せるとは限らないわよ？」

拓夜は手札のカードに手を伸ばして、つまらなそうに自分を見る棗に声をかけた。

「…棗さん、アンタの期待に応えるつもりはないけど…いくぜ、これが今の俺にできる最高のプレイングだ！」

「っ！？」

「手札の装備魔法『薔薇の刻印』を発動！」

【薔薇の刻印】
装備魔法
自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動する。
このカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得る。
自分のエンドフェイズ時に装備モンスターのコントロールを相手に移す。
自分のスタンバイフェイズ時に装備モンスターのコントロールを得る。

「このカードの発動コストとして、墓地の『ローンファイア・ブロッサム』をゲームから除外し、アンタのシンクロモンスター『氷結界の龍　ブリューナク』のコントロールを得る！」

「…なんですって！？」

そのカードの発動により、このデュエルで褒は初めて驚きの表情をみせる。

拓夜は墓地の『ローンファイア・ブロッサム』を除外すると、褒のブリューナクの額に薔薇の模様をした黒い刻印が刻まれ、拓夜のフィールドに移動した。

拓夜のフィールドに並ぶ『椿姫ティタニアル』と『氷結界の龍　ブリューナク』。だが拓夜は止まらない。更に手札に手を伸ばし、今の自分にできる最高のプレイを続けていく。

「手札の装備魔法『Ｄ・Ｄ・Ｒ』を発動！」

【Ｄ・Ｄ・Ｒ】
装備魔法
手札を１枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。そのモンスターがフィールドから離れた時、このカードを破壊する。このカードがフィールドから離れた時、そのモンスターを破壊する。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を捨て、ゲームから除外されている『ローンファイア・ブロッサム』を守備表示で特殊召喚！」

再び現れる爆弾植物『ローンファイア・ブロッサム』。
拓夜が1つ1つのプレイを重ねる度に、棗の背中に流れる嫌な汗の量が増えて行く。

「そしてフィールドに現れた『ローンファイア・ブロッサム』の効果発動！自身をリリースし、デッキからもう1体の『椿姫ティタニア』を攻撃表示で特殊召喚！」

拓夜のフィールドに並ぶ高火力モンスター達。
その状況を見て棗は思わず後ずさる。

（…そんな…こんな事って…！？）

棗は硬直する自分の視線を自分のフィールドに伏せられている1枚のリバースカードに向ける。

（このリバースカードは『炸裂装甲』…相手攻撃モンスター1体を破壊する罠カード…でもこのカードはテキスト通り、相手が攻撃してこなければ発動する事が出来ないカード。今アイツのフィールドには私から奪ったブリューナクがいるっ！！それにアイツの手札はまだ2枚も残っている…っ！？）

棗の不安を具現するかの様に、拓夜はデュエルを続行する。

「『氷結界の龍　ブリューナク』の効果発動！手札を1枚捨て、棗さんの伏せカードを手札に戻す！」

ブリューナクの翼が大きく羽ばたき、棗のリバースカードを吹き飛ばした。
それにより、今度は棗のフィールドはがら空きになってしまった。

（攻撃力２８００の『椿姫ティタニアル』が2体と…攻撃力２３００の『氷結界の龍　ブリューナク』…その攻撃力の合計は７９００ッ！！！？？…でも私のライフはまだノーダメージの８０００ッ！！コイツ等の一斉攻撃を受けても、まだ私は生きているッ！！？？）

残りライフ１００。

その計算が、その現実が、崖っぷちに立たされた棗の唯一残された希望だった。

だが

「俺は墓地に眠る『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』の効果を発動！」

（・・・・・・・・・・え？）

「墓地のディアボリックガイをゲームから除外し、デッキからもう１体の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を、攻撃表示で特殊召喚するっ！！」

拓夜のフィールドに現れる『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』。

「このモンスター達の一斉攻撃が決まれば、その総合ダメージは８７００！！このターンで決める！！」

この瞬間、棗は敗北した。
初心者という理由で西条拓夜を舐めていたのが、その驕りが敗因に繋がった。

拓夜も馬鹿ではない。
ライフの計算、そしてそのライフをいかに0に近づける為にどの様なプレイを行えば良いのか？

ある意味、西条拓夜はエリートデュエリストと言える存在だろう。
デュエルを始めたきっかけは、デュエル熟練者でもある烏丸葉月からの誘いによるもの。
その葉月と幾度となくデュエルを行ってきた拓夜は、熟練者である葉月のプレイを一番間近で見てきたのだ。

葉月だけではない。

先日のＯＣＧ研究会の人達とのデュエル。
拓夜は負けはしたものの、デュエルから様々な事を学んだ。

その１つ１つの積み重ねが、今の西条拓夜なのだ。

当然、そのことは対戦者である棗は知らない。

大歓声に包まれながら、拓夜は高らかに勝利の攻撃宣言をした。

次に備えて

『さぁっ！これで第１回戦全てが終了したぁ！』

西条拓夜のデュエルが終了し、実況を勤める結締がアナウンスを入れる。

『ここで一旦、１０分間の休憩時間をとりたいと思います。その間に次の自分の対戦相手の事を考えて、デッキ編集をするも良し、デュエル中にトイレに行かなくても良い様に、今の内にいくも良し！』

『お前もな』

結締の説明に隣に座る白石がツッコミを入れるが結締は気にしない。

『そういう訳で、俺は今からトイレに行ってくるから・・・白石さん、後は任せたぜ！』

『ちょっ！？おまっ！！？』

結締はそう言うと「うぉぉぉっ、漏れる漏れるぅぅ！！」と言いながら、割りと必死な形相でその場を後にした。

もちろん、マイクのスイッチは入りっぱなしであり、その結締の割と切羽詰った必死な声は会場中にダダ漏れであった事を、結締は知らない。

ちなみにそんな結締の様子をテレビカメラはしっかりと捕らえていた事など、結締は知る由もなかった。

「拓夜さん！1回戦突破、おめでとうございます！」

「ありがとう、花穂」

選手控え席に戻った拓夜は成瀬に出迎えられて、笑顔で応えた。

「・・・アンタ、いつの間にあんなデッキに変えたのよ？」

その成瀬の隣に座る葉月が、難しい顔をしながら拓夜に声をかける。

「前のアンタのデッキは『フュージョン・ゲート』と『チェーン・マテリアル』を組み合わせたデッキだった筈でしょ？」

「あぁ、前にお前にも言っただろ？今は別のデッキで戦ってるって。それにしても…」

拓夜は成瀬と葉月の二人の顔を見ながら、今の自分の気持ちを素直に話した。

「なんだかんだで…俺たち3人共、無事に1回戦突破だな」

「はい！」

「当然でしょ？」

それぞれが笑顔で頷きあう。だが葉月は椅子に置いてあった自分の鞄を掴むと

「それじゃ、私はちょっと行ってくるわ」

とその場から離れようとした。

そんな葉月を拓夜は「どうした葉月？お前も結締さんと同じ様にトイレか？」と何気なしに尋ねると、隣にいた成瀬に足を思いっきり踏みつけられた。

「ぐがぁっ！？」

「拓夜さん、デリカシーを持って下さい…女性にそんなストレートに聞くものじゃありません」

そんな様子に葉月はやれやれとした仕草をすると、鞄の中にあるデッキを取り出して

「トイレじゃなくて…次のデュエルに備えてデッキの見直しよ」

「何だ・・・ん?別にデッキ編集ぐらい、俺たちと一緒に・・・」

拓夜の的外れな意見を聞き、葉月は今度はため息を吐いた。

「はぁ・・・アンタねぇ、それワザと言ってるの?なんで敵の前で自分の手の内を晒さないといけないのよ?」

「・・・あ」

拓夜は自分の言った事の場違い的な状況を実感し、「あははは・・・」とぎこちなく誤魔化す様に笑う。

「もぅ、拓夜さん・・・忘れてますね?次は私と葉月さんのデュエルなんですよ?」

成瀬と葉月のデュエル。

それを聞いて拓夜は一瞬とまどった。

成瀬と葉月・・・一体自分はどちらを応援すれば良いのか?と。

だが拓夜の答えは決まっていた。

拓夜は成瀬の肩に手を置き

「そうだったな、今度は2人のデュエルだったな・・・花穂、頑張れよ！応援してるぜ！」

拓夜の笑顔を見て、成瀬も笑顔で拓夜に答えた。

「はい、拓夜さん！私、頑張ります！！」

棗絵里香はデュエルが終了すると、会場を出て近くの柱にもたれ掛かった。

「・・・まさか私があんな初心者に負けるなんて」

先ほどのデュエルで棗は拓夜から一斉攻撃を受け、結果1ターンキルされてしまった。

侮っていた。それだけの理由が、今の彼女の心を苛立たせる。棗はポケットから携帯電話を取り出し、電話をかけた。

電話は直ぐに繋がった。受話器からコール音が消え、代わりに幼い声が棗の耳に入ってくる。

『初戦敗北。それも、相手は初心者デュエリスト』

第一声がそれだった。

棗は歯を食いしばり、会場内では見せなかった苛立たせた声で、相手に返す。

「うるさい！私はアンタに言われた様にやっただけよ」

『そうね、とりあえず貴女はそこに居て…もう直ぐ私達もそちらに着くわ』

電話の相手はそう言うと、棗に構わずに一方的に通話を切った。

「…くっ」

ガスッ!!

この苛立ちをどう発散すれば良いのか分からず、棗はもたれていた柱を思いっきり叩いた。

天空の翼　ＶＳ　漆黒の翼　（前書き）

更新が大変遅れてしまいました。

他の作品なども読んで、勉強していたら・・・あらら、という感じに・・・

所詮は言い訳ですね、はい。

ごめんなさい。

天空の翼　ＶＳ　漆黒の翼

ワァァァァ…！！

大歓声が包み込む中、第２回戦が始まろうとしていた。

デュエルフィールドには対峙する２人の姿があった。

烏丸葉月と成瀬花穂だ。

２人はこれが初対戦ではない。

まだ成瀬が足首を骨折し、入院している最中に何度かデュエルをしている。

その時の成瀬のデッキは今のデッキではなかったが、葉月は先の成瀬のデュエルを観て、対成瀬用のデッキを組み上げていた。

だがそれは成瀬も同じだった。

この大会の初戦で葉月が魅せた１ターンキル。

それを阻止する為に、葉月に対しあらゆるメタを組み込んでみた。

互いに手の内を読み合うこの状況は、ある意味ではもう既に、デュエルが始まっているのと同じであった。

「……成瀬さん」

「……葉月さん」

互いのデッキを手渡し、それぞれにシャッフルする。

「……魅せてくれる？あなたのデュエルを！」

「はい。葉月さんの大空を舞う黒い翼……私のエアトスで堕としてみせます！」

互いのデッキをシャッフルし終えた2人は、互いにデッキを返し、デュエルゾーンへと移る。

デュエルテーブルに互いのデッキを設置した2人は、これでいつでもいける！と、準備万端な状態になる。

激しく盛り上がりを見せる会場。
そのトイレで、結締はまだ頑張っていた。

「…出ない……お腹が痛いのに、う○こが出ねぇぇえええッ！！」

そして実況・放送席では、白石が苛立ちながら足をガタガタと貧乏揺すりしていた。

「…遅い」

手元にある司会進行の台本には、もう既にデュエルを開始してもおかしくない時間になっていた。

だが相方の結締が一向にトイレから戻ってこない。

「結締の奴は何をやっているんだッ！？実況が試合に遅れるなど…ッ！！」

苛立ちが募っていく最中、白石の背後から自分を呼ぶ声が聞こえた。

「白石？」

「…なんだッ!!俺は今ッ「結締の奴はどうしたんだ?」

白石が振り向くと、そこにはアメリカに行っていた筈の、同じOCG研究会の西条　亨とマナことブラック・マジシャン・ガールがいた。

「西条…それに、マナ…お前等、アメリカに行っていたんじゃ?」

西条とマナの2人は、大学の理事長である中島に連れられ、前々日からアメリカに行っていたのだ。

西条は向こうで余り良い思い出がなかったのか、表情にどこか影を作りながら返事をした。

「アメリカか……大変だったよ、流石……中島理事長の友人だと思ったよ……」

「ホント、大変だったんだから!」

2人が余り多く語らないという事は本当に大変だったのだろう、と白石は長年の付き合いで感じ取っていた。

「西条、帰ってきて早々にすまない……結締の代わりに実況をやっ

てもらえないか？マナでもいい、このままでは大会が進まないんだ！！」

白石は必死に西条等にお願いをした。

自分が司会、兼実況をこなせば済む話だが、実は白石は話すのが苦手だ。

白石が持っている台本には、ビッシリと何やら『人前で上手く話せる方法』とか『ピンチがチャンス』とか『明後日はイベント！逃すな！』とかもう訳の分からない事でいっぱい埋まっていた。

西条は「……分かった、手伝うよ」と言い、結締の席に座ると、マナも

「あ、さいじょおがやるなら私もやるー！」」

と言い、実況を2人でやる事になった。

「すまない……結締には大会を進めながら粛正してやらねばな！！」

「まぁまぁ、落ち着け白石……それよりも早く、試合を始めよう」

「そうだよ！早く早く！」

結締がトイレで頑張っている間にも、大会は進んでいく。

『皆の者、待たせたな！！』

ワァァァァ…！！

司会者である白石の声が会場中に響き渡る。

『こちらの事情で2回戦の開始が遅れてしまった事は詫びよう、実況の結締がトイレに行ったきりで戻って来なくなったのでな…』

白石の説明に続いて、新たに実況の席に着いた西条が話し出す。

『そういう訳で、結締に替わりましてＯＣＧ研究会の西条が、実況を務めさせて頂きます！』

『はいは～い！さいじょおと同じく私、マナも頑張って実況しまーす！』

『ふぅん…デュエルフィールドに立つ2人のデュエリスト、烏丸に成瀬…準備は良いか？』

白石が尋ねると、2人のデュエリストは同時に頷き

「当然ッ！！」
「いつでもイケます！！」

気合い充分だった。
もうここからは余計な言葉はいらない。
白石は高らかに、デュエル開始の宣言をした。

『それではこれより、烏丸葉月　対　成瀬花穂のデュエルを開始するッ！！』

ワァァァァ…！！

大歓声に包まれながら、2人のデュエリストは同時にプレイを始めた。

「「デュエルッ！！」」

先攻　成瀬花穂／ＬＰ　８０００
後攻　烏丸葉月／ＬＰ　８０００

２人のデュエルが始まった。
成瀬はデッキからカードをドローし、先攻プレイを始めた。

「先攻は私のターンです、ドロー！」

ドローしたカードを手札に加えた成瀬。
成瀬は手札を確認し、対葉月の戦略を練っていく。

（今までの葉月さんのＢＦは、永続魔法『黒い扇風』があって初めて廻るタイプです……でしたら、先ずはそれを封じさせてもらいます！）

「私はモンスターカード『ライオウ』を召喚します！」

【ライオウ】
星４／光属性／雷族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　８００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、お互いにドロー以外の方法でデッキからカードを手札に加える事はできない。また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地に送る事で、相手モンスター１体の特殊召喚を無効にし破壊する。

成瀬のフィールドに、斉藤のガジェットデッキを苦しめたモンスター、『ライオウ』が召喚される。

「『ライオウ』がいる限り、互いのプレイヤーはドロー以外の方法で、デッキからカードを手札に加える事ができません！これで葉月さんの『黒い扇風』は封じました！」

「『ライオウ』…」

葉月は動揺する訳でもなく、落ち着き払った様子で成瀬のプレイを

観察する。

「よし、良いぞ成瀬さん！」

観客席に設けられた選手控え席で成瀬の応援をする拓夜。

拓夜が見守る中、成瀬は自分の場に1枚の伏せカードをセットした。

「これで私のターンは終了です！」

成瀬は自分のターンを終了させ、葉月のターンへと移行する。

「私のターン、ドロー！」

葉月はドローしたカードを手札に加える。

そして相手のフィールドを確認する。

（成瀬さんのフィールドには攻撃表示の『ライオウ』が1体と、リバースカードが1枚……まだ初戦で使用してきた永続魔法『次元の裂け目』を使用してきてないという事は、まだ手札にないと見て間違いない……）

更に葉月は成瀬の戦術を予測していく。

（初戦では成瀬さんは相手のモンスターを除外していた……恐らくあのリバースカードは、私のモンスターを除外してくるカードと思ってもいいわね……『次元幽閉』か『奈落の落とし穴』辺りかしら？……ここはひとまず、このカードから使っていくわ！）

葉月は手札のカードに手を伸ばし、1枚のカードを発動させた。

「手札より、魔法発動！『闇の誘惑』！」

【闇の誘惑】
魔法カード
デッキからカードを2枚ドローして、手札の闇属性モンスター1体

をゲームから除外する。手札に闇属性モンスターが無い場合は手札を全て墓地へ送る。

「このカードはデッキからカードを2枚“ドロー”して、手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外するカード、この効果は“ドロー”扱いの為、『ライオウ』の効果で防ぐ事は出来ないわ」

「…流石です、葉月さん……」

葉月はデッキからカードを2枚ドローすると、手札のカードを1枚除外した。

「……面白いカードを引いたわ。成瀬さん、最初から全開でいくわよ！！」

「ッ！？」

葉月の発言に戸惑う成瀬。

（……私のフィールドには、ドロー以外の手札増強を封じる『ライオウ』がいます、それにこの『ライオウ』は、チェーンに乗らない

モンスターの特殊召喚を無効にして破壊する効果もあります！よって葉月さんのシンクロ召喚は封じたも同然…それに私の伏せカードは、攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し、除外する『奈落の落とし穴』……そう簡単にやられたりしません！！）

『ふぅん……美少女め、何かキーカードを引き当てた様だな』

白石がポツリと漏らしたのを、隣に座る西条とマナは聞き逃さなかった。

『ああ、そうみたいだな……って、え、美少女？』

『白石くん……どうしちゃったの？』

驚く２人に対し白石は至って冷静に答えた。

『どうした……って、言葉通りの意味だが？』

『いや、とりあえず聞いてる俺達が恥ずかしいからさ……普通に名前で呼んであげて下さい！しかもこれ全国放送だよね？お前、全国にスッゲェ恥ずかしい事を喋っているんだぞ！？』

『えぇい、うるさい！！お前と違って結締はちゃんとノッてきたぞ！！』

『ちょ、おまえ等……ちゃんと司会や実況しろよ！！』

『しているわ！！お前も俺にちゃんと合わせろ！！でないと俺が変人みたいに見えるだろうが！？』

『いや、もう充分に変人な発言をしてるからな？今から弁明したところで、ただの言い訳にしか聞こえないぞ？』

『ふ、２人とも！！カメラがこっちに向いてるよ！！全国に観られてるよ！？』

なんかもう色々とぐだぐだだった。

選手控え席からその様子を見ていた西条拓夜は、ポカーンと開いた口が閉まらなかった。

（な、なにやってるんだ……あの人達）

葉月は手札のカードを手に取り、プレイを始めた。

「速攻魔法『サイクロン』を発動！成瀬さんの伏せカードを破壊する！」

【サイクロン】
速攻魔法
フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

「そんな！？」

成瀬の場に唯一伏せられていたカード『奈落の落とし穴』が破壊さ

れた。

「奈落か、予想通りね……」

「くっ、でも……まだ私の場には『ライオウ』がいます！そう簡単に戦闘破壊されません！」

成瀬の場にはまだモンスターカード『ライオウ』が攻撃表示で残っている。

しかし、葉月はそれを鼻で笑った。

「じゃあ、その『ライオウ』を戦闘破壊してあげるわ！『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
効果
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、

自分のデッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

葉月のフィールドに攻撃力１８００のモンスターが召喚された。

しかし、対する成瀬の『ライオウ』の攻撃力は１９００。

このままでは『ライオウ』に勝てない。

葉月がそんな初歩を忘れる筈がない。何かしてくる筈だ。

成瀬はそんな状況を見て、思わず目を見開く。

「ま、まさか……！？」

「バトルフェイズに入るわ！蒼炎のシュラで、『ライオウ』に攻撃！」

シュラが大きく羽ばたいた。

ダメージステップに入り、葉月は更に手札から一枚のカードを取り

出した。

「ダメージステップ時に、手札のカルートの効果を発動！」

【ＢＦ－月影のカルート】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
ＡＴＫ　１８００　↓　３２００
（『ＢＦ－月影のカルート』効果）

攻撃力が跳ね上がった蒼炎のシュラは、成瀬のモンスターを難なく

破壊した。

成瀬花穂　ＬＰ／８０００　↓　６３００
烏丸葉月　ＬＰ／８０００

「やっぱり……カルート」

「『ＢＦ－蒼炎のシュラ』が相手モンスターを戦闘破壊し、墓地へ送った時……デッキから攻撃力１５００以下の【ＢＦ】を特殊召喚する！来なさい、『ＢＦ－疾風のゲイル』！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　４００
効果・チューナー
自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

葉月のフィールドに、蒼炎のシュラに続いて疾風のゲイルが現れた。
葉月はそのまま、バトルフェイズを続行させる。

「疾風のゲイル、成瀬さんにダイレクトアタック！」

成瀬花穂　ＬＰ／　６７００　→　５４００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

「きゃッ、ここでゲイル……」

ダイレクトアタックを受けた成瀬はライフが大きく減少する。
葉月はメインフェイズ２へと移行した。

「いくわよ、成瀬さん」

葉月のフィールドに、天上から漆黒の羽が無数に舞い落ちてきた。
それを見た成瀬に戦慄が走る。

「レベル４蒼炎のシュラに、レベル３疾風のゲイルをチューニング！」

葉月のそれぞれのモンスターレベルが交わる。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！」

漆黒の羽が吹き荒れる。
その中から、漆黒の翼を羽ばたかせた葉月のエースモンスターが姿を現した。

「シンクロ召喚、舞い上がれ！『ＢＦ－アーマード・ウィング』！」

【ＢＦ－アーマード・ウィング】
星７／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１５００
シンクロ／効果
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで０にする。

葉月のシンクロモンスター、アーマード・ウィングは戦闘破壊されないモンスターだ。

葉月はそのまま得意気に手札を一枚、魔法罠カードゾーンにセットした。

「カードを一枚セット、私のターンは終了よ」

葉月のターンが終了した。

ここで司会進行の白石が吼えた。

『ふぅん、流石は美少女だ！成瀬の用意したモンスターや罠を退け、シンクロ召喚するとはな！』

『アーマード・ウィングは戦闘破壊されないから、どうしても除去にはカード効果を使うしかないね……かほはどう出るのかな？』

白石にマナが実況をする中、西条亨は一枚のカードを見ていた。

（葉月さんが『闇の誘惑』で除外した“あのカード”……あれがこのデュエルの鍵となるか……）

そして、成瀬のターンが訪れる。

成瀬は手札を確認していた。

今の自分の手札には『異次元の女戦士』がある。葉月のシンクロモ

ンスター『ＢＦ－アーマード・ウィング』を倒す事はできるが、攻撃を行えば自分が受ける大ダメージは免れない。

だが、ここは攻める。

成瀬はカードをドローし、プレイを始めた。

「負けません、私のターン！」

ドローしたカードを確認し、成瀬は手札の魔法カードを発動した。

「魔法カードを発動します！『死者転生です！』」

【死者転生】
魔法カード
手札を１枚捨てて発動する。自分の墓地に存在するモンスター１体を手札に加える。

「私は手札を一枚捨てて、墓地のモンスター『ライオウ』を回収します！」

成瀬は手札のカード一枚を墓地に、そして墓地から『ライオウ』のカードを手札に加えた。

そして、成瀬はモンスターを召喚した。

「『異次元の女戦士』を召喚します！」

【異次元の女戦士】
星４／光属性／戦士族
ＡＴＫ　１５００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、相手モンスターとこのカードをゲームから除外する事ができる。

成瀬のフィールドに女戦士が召喚された。

「バトルです！『異次元の女戦士』で、葉月さんのアーマード・ウィングに攻撃です！」

女戦士が果敢に剣を振るう。

成瀬は戦闘の余波を受け、女戦士とアーマード・ウィングをゲームから除外した。

成瀬花穂　ＬＰ／　５４００　→　４４００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

葉月とのライフ差が半分近く開いてしまった。

だが、成瀬は諦めない。

「リバースカードを一枚セットして、ターンエンドです！」

「じゃあ、私のターンね……カードドロー！」

葉月のターンに移行し、デッキからカードをドローする。

ドローしたカードを見て、葉月は口元に笑みを浮かべる。

「来たわ……永続魔法『黒い旋風』を発動！」

【黒い旋風】
永続魔法
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが召喚された時、自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

「『黒い旋風』！？」

「成瀬さん、私への対策カードを用意してきたみたいだけど、私にはそんな小細工は通用しないわ！」

「そんなっ！」

「私を恐れるあまり、あなたは自分のデュエルができていない……魅せてあげるわ、私のデュエルを！」

葉月の声色が強みを帯びる。

「『ＢＦ－黒槍のブラスト』を召喚！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

葉月のフィールドに、螺旋状にねじれた刃の長槍をもつモンスターが召喚された。

「黒槍のブラストが召喚された事で、永続魔法『黒い旋風』の効果が発動される！私はデッキから黒槍のブラストよりも低い攻撃力を持つモンスター、攻撃力１１００の『ＢＦ－そよ風のブリーズ』を手札に加える！」

【ＢＦ－そよ風のブリーズ】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１１００
ＤＥＦ　３００
効果・チューナー
このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。このカードをシンクロ素材とする場合、「ＢＦ」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

葉月は、そよ風のブリーズを手札に加えた。

その効果により、そよ風のブリーズは自身の効果を発動する。

「そよ風のブリーズ。魔法・罠・効果モンスターの効果によってデッキから手札に加わった場合、特殊召喚する事ができる！」

「えっ！？」

葉月のフィールドに、黒槍のブラストとそよ風のブリーズが攻撃表示で並ぶ。

対する成瀬のフィールドにはモンスターはなく、一枚の伏せカードがあるのみであった。

「このまま叩くわ！そよ風のブリーズで、ダイレクトアタック！」

成瀬花穂　ＬＰ／　４４００　↓　３３００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

「きゃああ！」

成瀬のライフが更に減少した。

そして、葉月は追撃として黒槍のブラストに攻撃命令を出した。

「行きなさい、ブラスト！ダイレクトアタックよ！」

黒槍のブラストが、長槍を手に成瀬へと迫る。

「花穂！」

会場でデュエルを見ていた西条拓夜は、思わず成瀬の名を叫んだ。

「……そうはさせません！墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果を発動します！」

【ネクロ・ガードナー】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　６００
ＤＥＦ　１３００
効果
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

成瀬は墓地から『ネクロ・ガードナー』のカードを取り出した。
成瀬の前に『ネクロ・ガードナー』の幻影が現れ、黒槍のブラストの攻撃を防いだ。

「『ネクロ・ガードナー』。この子を墓地から除外する事で、葉月さんの黒槍のブラストの攻撃を無効にします！」

「『ネクロ・ガードナー』ですって！？　いつの間に墓地に……」

葉月はこれまでの成瀬のプレイを思い出していた。

……あった。

一つだけ、『ネクロ・ガードナー』を墓地に送る事ができたタイミングが。

「……そう、魔法カード『死者転生』のコストとして、手札から墓地に送ったカードが、『ネクロ・ガードナー』だったのね？」

「私だって、ただ一方的にやられている訳じゃありません！」

会場中から歓声が沸き起こる。

拓夜はホッと胸をひとなでし、安堵の息をついた。

『ふぅ、危ないところだったね……かほは上手にコストを利用したんだね！』

『ふぅん……だが、成瀬と美少女とのライフ差は大きく開いてしまっている。それに、そよ風のブリーズはチューナーだ……美少女は恐らく』

白石が言うと同時に葉月が動いた。

バトルフェイズを終了させ、メインフェイズへと移行する。

「やるじゃない、成瀬さん……でもね……私の黒き翼は、何度でも蘇る！」

「っ！？」

「レベル４、黒槍のブラストに、レベル３、そよ風のブリーズをチューニング！」

葉月のフィールドに再び漆黒の羽が舞い落ちる。

そして、葉月のフィールドに二体目のシンクロモンスターが現れた。

「シンクロ召喚、『ＢＦ－アーマード・ウィング』！」

「そんな……二体目……！？」

再び現れたアーマード・ウィング。

成瀬は苦い思いで、そのモンスターを見つめた。

「私のターンは終了よ、さぁ……成瀬さん、あなたのデュエルを、私に魅せなさい！」

成瀬は自分の二枚の手札を見つめる。

一枚は『死者転生』で、墓地から回収した『ライオウ』。

もう一枚は『アームズ・ホール』だ。

成瀬は手が震えた。

（……私は……葉月さんに勝てるんでしょうか？）

大きく開いたライフ差。

そしてフィールドの状況。

葉月から発せられる威圧感。

それらが重なり、成瀬の思考をぐるぐるとかき混ぜる。

成瀬の頭は混乱していた。

その瞬間（とき）だ。

「花穂！」

成瀬の耳に、自分の名を呼ぶ声が聞こえた。

その声の方角に顔を上げる。

そこには――

「……拓夜さん……！」

「花穂！　頑張れ！」

成瀬の視線の先には、最愛の彼がいた。

拓夜は必死になって、自分を応援してくれていた。

拓夜が見てくれている。

拓夜がついていてくれる。

その事が、今の成瀬には大きな力になった。

「……ありがとうございます、拓夜さん」

そう呟く成瀬の表情は笑顔だった。

自然と手の震えも治っていた。

今なら引ける。

引くことができる！

成瀬は高ぶる想いと共に、デッキに指を添えた。

「いきます！私のターン！」

デッキに触れる指に熱い脈動が流れる。

成瀬はデッキから、思い切ってカードをドローした。

「ドロー！」

瞬間。

フィールドを覆い尽くさんばかりに、純白の羽が雪のように舞い落ちる。

「こ、これは……！？」

対戦者である葉月は自分の目を疑った。

一瞬ではあるが、確かに見えたのだ。

成瀬の背中から、光り輝く翼が、大きく広がったのを。

「……いくよ、エアトス」

成瀬は感じた。

カードに触れた瞬間、それが何なのかハッキリと感じた。

（私には、拓夜さんと一緒に……この子がついてます！）

成瀬はドローしたカードを、自信を持ってフィールドに召喚した。

「私の墓地にモンスターが存在しない場合、天空よりその守護者が降臨します！お願い、『ガーディアン・エアトス』！」

【ガーディアン・エアトス】
星８／風属性／天使族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
効果
自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを3体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター1体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

天空より、女神の聖剣を携えた守護者が、成瀬のフィールドに降臨した。

背には純白の大きな翼。

放たれる神々しい威光。

成瀬は、自身の信ずるフェイバリットカードを特殊召喚した。

『ふぅん……エアトスを引き当てたか』

『大空を舞う漆黒の翼……そして、天空の白き翼……』

『アーマード・ウィングに、エアトス……すごいね』

実況も、会場も、その光景に目を奪われていた。

皆が皆、成瀬や葉月に見とれていた。

彼女の思いに呼応するように現れし、天空の守護者。

対する葉月の、我が道を行かんとする、大空を舞う漆黒の翼。

『成瀬さんに葉月さん、両者のエースモンスターが対峙したか……』

『ふぅん、魅せてくれる……』

役者は揃った。

成瀬花穂と烏丸葉月。

両者のエースが、今ぶつかる。

成瀬花穂　ＬＰ／　３３００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

『ガーディアン・エアトス』を特殊召喚した成瀬は、葉月のモンスター『ＢＦ－アーマード・ウィング』を見つめる。

アーマード・ウィングは戦闘破壊されないモンスター。

攻撃力もエアトスと並び２５００、このまま叩いてもエアトスが一方的にやられてしまう。

しかし、成瀬の手札にはそれを攻略するキーカードが眠っていた。

成瀬はそのカードを手に取り早速、発動する。

「いきます！手札の魔法カード『アームズ・ホール』を発動します！」

【アームズ・ホール】
魔法カード
自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送って発動する。自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を手札に加える。このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

「このカードは、デッキの一番上のカードを墓地に送り、デッキか墓地から装備魔法カードを手札に加える事ができます！」

「『アームズ・ホール』ですって！？」

成瀬はデッキの一番上のカードを墓地へ送った。

墓地へと送られたのは魔法カード『封印の黄金櫃』だった。

「花穂は一体、何の装備魔法を……？」

拓夜は期待に胸を膨らませて成瀬のプレイを見守る。

「私はデッキから、『レインボー・ヴェール』を手札に加えて、それをエアトスに装備します！」

【レインボー・ヴェール】
装備魔法
装備モンスターが相手モンスターと戦闘を行う場合、バトルフェイズの間だけその相手モンスターの効果は無効化される。

「受け取って、エアトス！」

エアトスの翼から虹色の光が発せられる。

「このカードを装備したエアトスとバトルを行う相手モンスターは、効果を無効化されます！これでアーマード・ウィングの戦闘破壊耐性はなくなりました！」

「成瀬さん、まさか……相殺狙い！？」

メインフェイズ1を終了し、バトルフェイズへと移行する。

「エアトス、いくよ……」

『ハッ！！』

成瀬の想いにエアトスが応える。

エアトスはその手に握る女神の聖剣の切っ先を、アーマード・ウィングに向け、純白の翼を大きく広げる。

「やってやろうじゃないの……！」

対する葉月はそう呟き、アーマード・ウィングに指示を出す。

「迎え撃ちなさい、アーマード・ウィング！」

『ハッ！！』

葉月のアーマード・ウィングも、両の拳にありったけの力を込める。

「バトルです！エアトス！」

「アーマード・ウィング！」

瞬間、両者のエースが激しくぶつかり合った。

エアトスの剣とアーマード・ウィングの拳が鍔迫り合い、激しい閃光が迸る。

「エアトスっ！？」

「アーマード・ウィングっ！？」

閃光がおさまり、視界が元にもどると、そこには両者のエースの姿はなかった。

「これで、葉月さんのアーマード・ウィングは倒しました。だけど、私のバトルフェイズはまだ終わってません！」

「くっ……使うしかないわね！」

成瀬と葉月。

二人のデュエリストは、自分の場に唯一伏せられていたカードを同時に発動した。

「追撃です！」「やらせない！」

「「リバースカード、オープン！！」」

二人が同時に発動したカード。それは……

「「『リビングデッドの呼び声』！！」」

【リビングデッドの呼び声】
永続罠
自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

二人はそれぞれ、自分の墓地からエースカードを手にとる。

「お願い……！」
「舞い上がれ……！」

「エアトス！！」
「アーマード・ウィング！！」

ズドドドドドド……！！

再び相まみえる両者のエースたち。

会場は暑くヒートアップし、大歓声が沸き起こっていた。

ワアアアアア……！！

「……リビングデッドを、葉月さんも……！？」

成瀬の頬に一雫の汗が流れる。

「言ったハズよ、私の黒き翼は……何度でも蘇るって」

『すごい……すごいよ、さいじょお！！』

実況を務めるマナは興奮し、隣に座る西条亨の肩を激しく揺さぶった。

『あばばば……ちちょっ！？や、やめ……！？』

『流石だ美少女……惜しくも成瀬は、形勢逆転ならずだな。頼みの綱である装備魔法『レインボー・ヴェール』は墓地に……そして、通常召喚は『アームズ・ホール』の効果によって、このターンは封じられている』

成瀬はこのターン、為す術がなかった。

残りの手札一枚も、『死者転生』で回収した『ライオウ』のみ。

これが速攻魔法『サイクロン』だったら、とも思ったが、現実は無情であった。

成瀬は何もできない悔しさに唇の端を噛みしめる。

「……私のターンは、終了です……！」

成瀬のターンが終了した。

葉月のターンに移行し、葉月は自分のプレイを開始する。

「私のターン、ドロー！」

カードをドローした葉月は、鋭い眼光を成瀬に向ける。

「成瀬さん、このターンで決めるわ……せめてもの情け……私の翼を、私の全力を魅せてあげる！」

葉月の怒涛ともいえるデュエルが始まった。

「チューナーモンスター『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚！」

【ＢＦ－極北のブリザード】
星２／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　　０
効果・チューナー
このカードは特殊召喚できない。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地からレベル４以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「極北のブリザードのモンスター効果、自分の墓地からレベル４以下の【ＢＦ】１体を表側守備表示で特殊召喚する！来なさい、『ＢＦ－黒槍のブラスト』！」

葉月のフィールドに、極北のブリザードと共に黒槍のブラストが並ぶ。

「レベル４黒槍のブラストに、レベル２極北のブリザードをチューニング！」

葉月のモンスターレベルが交わり、レベル６のシンクロモンスターが姿を現した。

「漆黒の力！大いなる翼に宿りて、神風を巻き起こせ！　シンクロ召喚、吹きすさべ『ＢＦ－アームズ・ウィング』！」

【ＢＦ－アームズ・ウィング】
星６／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１０００
シンクロ／効果
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントアップする。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

葉月のフィールドに二体のシンクロモンスターが並ぶ。

しかし、葉月はまだ止まらない。

残り一枚の手札を、容赦なく発動させた。

「更に速攻魔法『異次元からの埋葬』を発動！」

【異次元がらの埋葬】
速攻魔法
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

「『異次元からの埋葬』！？」

「このカード効果で、除外されているモンスターを墓地に戻すわ！私が墓地へと戻すのは、『ＢＦ－アーマード・ウィング』と『ＢＦ－大旆のヴァーユ』よ！」

葉月はそれぞれのカードを成瀬に見せ付ける。

それらのカードを見て、成瀬は驚きの声をあげた。

「そんな・・・・・・『ＢＦ－大旆のヴァーユ』・・・・・・・いつの間に除外を・・・・・・・・」

その様子をみていた実況の西条亨は「やはり・・・・・・・」と、呟いた。

『葉月さんの最初のターン、『闇の誘惑』の効果で除外したカード・・・・・・あれがヴァーユだったのか』

それぞれ二枚のカードを墓地に戻した葉月は、早速その効果を発動してゆく。

「これで墓地の条件は整ったわ！墓地に眠る『ＢＦ－大旆のヴァーユ』の効果を発動！」

【ＢＦ－大旆のヴァーユ】

星１／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　０
効果・チューナー
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついたシンクロモンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「このカードと、墓地の、『ＢＦ－アーマード・ウィング』を除外！」

葉月はそのモンスター達を再びゲームから除外する。

そして、彼女のフィールドに突風と共に漆黒の羽が無数に舞い上がる。

「吹き荒べ嵐よ！鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ！シンクロ召喚！『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』！」」

【ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド】
星８／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２０００
シンクロ／効果
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する、このカードの攻撃力よりも低い守備力を持つモンスターを２体まで選択して破壊する事ができる。この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。また、相手のターンに１度だけ、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターは戦闘では破壊されない。

ズドドドドドドドド・・・・・！！

吹きすさぶ嵐を裂き、漆黒の刀を携え、漆黒の翼を大きく広げるそのモンスター、シルバー・ウィンドが姿を現す。

計三体の【ＢＦ】シンクロモンスターが並んだ。

圧巻の一言である。

葉月は腕を組み、高らかに宣言する。

「成瀬さん・・・・・・これが私の、【ＢＦ】たちの力よ！！」

成瀬は思わず言葉をなくしていた。

・・・・・・強い・・・・・・。

ただ単純に強い。

成瀬花穂は、唖然と天上を見上げた。

そして、目に涙を溜め込みながらポツリと呟いた。

「・・・・・・ごめんね、エアトス・・・・・・」

「バトルフェイズに入るわ！シルバー・ウィンドで、エアトスに攻

撃！！」

成瀬のエアトスがシルバー・ウィンドの一閃により両断される。

成瀬花穂　ＬＰ／　３３００　→　３０００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

成瀬の場のカードが全て消えた。

そして、葉月の場にはまだ、二体のモンスターの攻撃が残っている。

「トドメよ、行きなさい！！」

アーマード・ウィング、アームズ・ウィング。

二体のモンスターのダイレクトアタックが、成瀬に炸裂した。

成瀬花穂　ＬＰ／　３０００　↓　　０
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

成瀬のライフが０になる。

二人のデュエルは、葉月の圧勝という形で幕を閉じた。

デュエルが終了し、成瀬はすぐに会場から出ていった。

成瀬はいま、会場の外に設置されていたベンチに一人で座っていた。

手には先ほどまで一緒に戦っていたデッキが握られている。

「負けちゃいました・・・・・・みんな、ごめんね」

何となく謝りたかった。

デュエル中、葉月に言われた事を思い出す。

自分のデュエルができていない・・・・・・。

確かにそうだ、葉月さんを意識するあまり、その対策に追われていて、自分らしさが出せれていなかった。

「・・・・・・まだまだだなぁ、わたし・・・・・・・」

空を見上げると、蒼く澄んだ大空が広がっていた。

すると、一人の青年が自分の前に立った。

西条拓夜だ。

「拓夜さん・・・・・・」

「花穂・・・・・・・」

「・・・・・・私、負けちゃいました・・・・・・」

「・・・・・・・」

「葉月さんに・・・・・・・たった1ポイントのダメージを・・・・・・与える事も・・・・・・・できずに・・・・・・・」

成瀬の声が震えていた。

顔は真っ赤になっていた。

潰れるくらい必死に閉じた瞼から、ポロポロと大粒の涙が溢れていた。

「花穂・・・・・・・」

「・・・・・・わた・・・・・・・私・・・・・・・・今日ほど、デュエルで負けて・・・・・・・悔しいと・・・・・・・・こんなにも悔じぐっ、思った事は・・・・・・・・・!!」

見ていられなかった。

耐えられなかった。

拓夜は目の前で悔し涙を流す成瀬を力一杯に抱きしめた。

「花穂・・・・・これからなんだ。俺達はまだ、これから強くなっていくんだ」

「たく・・・や・・・・・・さん」

「今だけでもいい。今の内でいいから・・・・・思いっきり泣け」

拓夜は抱きしめる腕に更に力を込める。

「俺も一緒に背負うよ、花穂の想いを・・・・・」

蒼天の空の下。

成瀬は、盛大の涙を流した。

だが、その涙は決して無駄にはならない。

その涙は、明日（つぎ）の成長に繋がる涙なのだから。

天空の翼　ＶＳ　漆黒の翼　（後書き）

ＢＦ・・・・・圧倒的すぎたかな？

今回のデュエルで思った事などございましたら、ご意見をお聞かせください。

色々と皆様のご意見が参考になりますので。

では、今回はこれにて。　失礼します。

最強の【王】と、最強の【D】

デュエル大会は進み、次の試合は西条拓夜が控えていた。

拓夜は会場の外に設置してあるベンチで、成瀬花穂と一緒にデッキを見直していた。

成瀬は葉月との試合に敗れ、今大会ではもう出番はない。

なら、少しでも拓夜の力になりたいとの事で、一緒に拓夜のデッキを見直しているのだ。

「よし、こんな所だろ」

「何とか間に合って完成しましたね、拓夜さん！」

隣に座り、にっこりと微笑む成瀬。

その目にはもう、涙は消えていた。

一緒にデッキを触る事で、幾分か気分転換できたのであろう。

成瀬の顔に涙が消え、笑顔が見られた事に、拓夜は嬉しく感じた。

「花穂、サンキューな……俺のデッキ編集に付き合わせて」

「いえ、拓夜さん……お礼を言うのは私の方です」

成瀬は拓夜のデッキを手に取り、自分の思いを語りだした。

「いま私が、こうして笑っていられるのは、拓夜さんが付いててくれたおかげですし……さっきのデュエルの最中にだって、私は拓夜さんから力を貰ってましたから」

「……力……？」

いつ？それに何の事？

と言いたげな表情で首を傾げる拓夜。

だが成瀬は確かに、拓夜から力を貰っていた。

あの時に『ガーディアン・エアトス』を引き当てる事ができたのは、

間違いなく拓夜のおかげだと、それに、拓夜の声援があったからこそ、自分はあのデュエルフィールドに立つ事ができたのだと。

「拓夜さんは、思った事がすぐに顔に出ちゃうみたいですね」

「へ？あれ、俺……どんな顔してた？」

「えへへ……見ていて楽しいので、教えてあげません」

悪戯っぽく笑顔を作る成瀬を見て、もう大丈夫だなと拓夜は思った。

そろそろ自分の次の試合が始まる時間が迫ってきている。

拓夜はベンチから立ち上がり、成瀬に手を差し伸べた。

「そろそろ時間だ……花穂、デッキを」

「はい、……あ、ちょっと待って下さい！まだこのデッキにやり忘れている事がありました！」

やり忘れている事？

何の事だか拓夜は分からなかった。

デッキ枚数も４２枚、エクストラデッキもちゃんと用意している。

まだ何か足りないだろうか？

拓夜が不思議に思っていると、成瀬は大事そうに両手で拓夜のデッキを握り、目を閉じた。

その姿はまるで、祈りを捧げるかのように……。

「皆さん、拓夜さんに力を貸してください……」

「……花穂」

成瀬の健気な姿に思わず見とれる拓夜。

そして成瀬は、最後に……、と言い、拓夜のデッキに軽い口付けを

した。

「……っ！？　か、花穂！？」

「ふふ……、私からのおまじないです。あれ、拓夜さん……ひょっとして、自分のデッキを相手に妬いちゃいました？」

悪戯っぽい笑みを浮かべる成瀬に、拓夜は顔を真っ赤にした。

成瀬が自分のデッキに口付けをしてくれた事に嬉しくもあり、しかし自分にキスをしてくれても……と、多少なりとも複雑ではあったが、何より成瀬のその姿が本当に綺麗だと感じた。

拓夜は気を紛らわす為に軽く一回、咳払いをして、成瀬からデッキを受け取った。

「花穂……サンキュー、このデッキには俺だけじゃなく、花穂の想いも加わった訳だ……今なら誰が相手だろうと、負ける気がしないぜ！」

「ふふ……、頑張ってください、拓夜さん」

成瀬も立ち上がり、拓夜と共に会場の中へと向かい歩きだす。
その途中、ふいに成瀬が拓夜に告げた。

「拓夜さんへのキスは、このデュエルで勝つまでお預けです」

「なっ！？」

負ける訳にはいかない！！

拓夜の中に、何としても勝たなければならない理由が一つ増えた瞬間であった。

「いやぁ～、お待たせお待たせ」

そう言いながら実況席に姿を現したのは結締智恭だ。

彼は成瀬と葉月とのデュエル開始前からトイレへと向かい、それっきり姿を全く見せなかったのだ。

実は結締、トイレにて用は比較的早く済ませることはできたのだが、その処理をする為に必要な『トイレットペーパー』がない事に、終わってから気が付いた。

恥を捨て、大声を出してトイレットペーパーを持ってきてもらおうとしたが、いくら叫んでも応答はない。

その頃はデュエルが始まっており、皆が皆、デュエルに夢中でトイレどころではなかった。

個室から出て、トイレットペーパーを取りに行くという手もあった。

しかしその案は羞恥心が勝り、とても実行できそうにない。

結局、トイレの個室内でうめき声をあげている結締を助けたのは、掃除に来た業者のおじさんだという事だ。

しかし、そんな事を会場にいた白石や西条亨やマナが知るよしもない。

そして早速、白石が結締に対して吼えた。

「貴様ァア！！　今までドコで何してた！！」

「ちょっ、白石、落ち着け！」

「そうだよ白石くん、でも結締くん、どうしてこんなにも遅くなったのかな？」

「いやホント、遅れてスマン！　……実は……その……」

言うのが少し恥ずかしいのか、結締はそっぽを向いて答えた。

「……紙が……なくてさ……」

『……』

「あ、そういえば……ねぇ、さいじょおさいじょお」

何かを思い出したかのようにマナが亨の腕を引っ張る。

「どうした？」

「うん、私とさいじょおがここに来る前に、確かさいじょお……トイレに寄ったよね？」

「ああ、寄ったな……ぅっ！？」

返事をし、何かを思い出したように声を漏らす亨。

（いや……まさかな……）

亨の脳裏に一抹の不安がよぎる。

そんな亨に、まさかという疑問を感じながら、結締が尋ねた。

「……西条ちゃん、まさか……トイレの個室を使ったのか？」

「……結締、偶然ってあるんだな……」

西条は確信する。

「ごめん、トイレットペーパーを使い切ったあと、補充するのを忘れてた」

「お前が原因かァア！！」

西条の話を聞き、思わず叫ぶ白石。

結締がトイレから出られなくなった原因は、亨がトイレットペーパーを使い切り、その後の補充をしなかった為であった。

「西条ォ！貴様ァ！後に使う者の気持ちを考えろォ！男がトイレの個室を使う時は、切羽詰まっている状況なんだぞォオ！！」

「ぅあ、す……スマン結締！まさか次にお前が使うなんて」

「西条ちゃん……トイレみたいに水に流してやりたいが、今は西条ちゃんの道徳心を疑うぜぃ」

結締が言うと、白石はいきなり西条を背後から羽交い締めにし、ガッシリとホールドする。

そして結締は身動きが取れない亨に対し、両手をわきわきと動かしながら一歩、また一歩と迫る。

「ちょっ、道徳心って……、ホントごめんなさい！！まさかトイレットペーパー1つで運営に支障をきたすなんて思ってもみなくて、って言うか何と言うか、まさか結締がそのトイレを使うなんて思ってもみなくて、とにかくぇぇっとアレですよね？俺が全ての元凶なんですよね？だからそのスイマセン！ゴメンナサイ！だからその手をわきわきしながら近づかないで！それに今はオンエア中だよ？本番だよ本番？生放送だぜ？ちょっ、だからそにょギィィャァァアアアアア！！！！」

亨の悲惨な叫び声が会場中に木霊する。

そんな彼らの様子はテレビカメラがバッチリと捉えていた。
それも生放送である。
ちなみに言うと、下手なデュエルの間よりも、彼らの他愛ない話の方が視聴率は良かったりもする。
そんな彼ら、ＯＣＧ研究会のメンバーを見ながら、選手控え席に座る葉月は溜め息をついた。
「ハァ……、早くデュエル始めなさいよ……」
選手控え席にて、携帯電話を手に取り、ジッとその画面を見つめる１７歳くらいの女性選手がいた。
その画面には、初戦での西条拓夜のデュエルのムービーが映し出されていた。
無表情で拓夜のデュエルのムービーを眺めるその女性、名を『天野雪』と言う。

天野は拓夜の次の対戦相手であった。

拓夜のデッキ構成を把握し、対策を立てるためなのか。

天野は何度も拓夜のデュエルムービーを見直していた。

「……椿姫……ヴァリー……Ｄ－ＨＥＲＯ……」

拓夜が召喚していくモンスターを呟く天野。

すると天野の耳に、司会を務める白石の声が聞こえてきた。

『ふぅん……待たせたな、皆の衆！』

その声に会場中が反応し、大きな喝采が沸き起こる。

次のデュエルが始まると知り、観客たちが興奮を抑えきれないのだ。

『余計な言葉は不要だな、只今より！二回戦の最終戦！【Ｍ】のカードを持つ天野雪と、【Ｏ】のカードを持つ西条拓夜のデュエルを

開始する！！』

沸き上がる歓声、口笛、拍手。

それらが会場中を包み込む。

会場中央に設置されたデュエルフィールドには、既に西条拓夜が向かっていた。

近くから「拓夜ー！落ち着いて、しっかり！」と、声が聞こえた。

天野がチラリと目だけでそちらを向くと、そこには準決勝に進出した烏丸葉月がいた。

「……」

天野は特に何も感じる事なく席を立ち、自分もデュエルフィールドへと向かい、歩きだす。

その手には携帯電話と一緒に、天野が使用するデッキが握られていた。

（……西条……拓夜……）

ムービーで何度も見た。

彼は第一回戦では1ターンキルを見せてきた。

だが、そんな偶然は何度も続く訳ではない。

デュエルとは、そんな甘っちょろいものではない。

だが、油断はできない。

相手は1ターンキルが出来る程の実力者であると分かっているのだ。

だが……。

「……関係ない。勝つのは……」

目の前にはデュエルフィールドに立つ西条拓夜。

天野は表情を特に変える訳でもなく、自分もデュエルフィールドへと上がる。

そう、関係ない。

相手が誰であろうが、私は私のデュエルをするだけ。

そう、相手は関係ない。

勝つのは……。

「……私」

西条拓夜と天野雪。

二人のデュエルが今、始まろうとしていた。

「君が天野さんか……俺は西条拓夜だ、よろしく！」

拓夜が天野に挨拶し、握手を求めて右手を差し出した。

「……よろしく」

天野は呟くように言うと、自分もとりあえず握手に応じた。

『さぁて、トイレから復活しました！結締智恭が実況をしていくぜぃ！さぁ拓夜ちゃんに雪ちゃん、デュエルスタンバイだ！』

結締の声と共に二人のデュエリストは所定の位置に着き、デュエルテーブルを起動させる。

『よしよし、準備は整ったみたいだな……二人共、いくぜ！』

結締のその声が合図となった。

拓夜と天野は互いに視線を交差し、同時に言い放った。

「「デュエル！！」」

先攻　天野　雪　ＬＰ／　８０００
後攻　西条拓夜　ＬＰ／　８０００

「先攻は私……ドロー」

天野の先攻。

彼女はデッキからカードをドローし初手の手札を確認する。

そしてカードを一枚掴み取り、プレイを始めた。

「……スタンバイフェイズ、終了……メインフェイズへ移行。モンスターカードセット、リバースカード三枚セット。ターン終了」

天野のターンが終了した。

彼女のフィールドに伏せられた三枚のリバースカード。
拓夜はそのカード達を不気味に感じながら、自分のターンを開始した。

「俺のターンだな、ドロー！」

ドローしたカードを手札に加える拓夜。
そして再び、天野のフィールドを確認する。
モンスターが裏側守備表示で一体。
その背後には伏せカードが三枚。
明らかに守りの姿勢に入っている。

（あの三枚の伏せカードが恐いな……『大嵐』もなけりゃ『ハリケーン』も手札にない……）

すると拓夜の耳に、一人の女性の声が聞こえてきた。

「拓夜さーん！ファイトです！」

声の方を向くと、そこには自分の彼女である成瀬花穂がいた。

成瀬は一生懸命に声を出し、自分の事を応援してくれていた。

（花穂……、よし！ビビってる場合じゃねえよな！俺は……このデュエルに勝って……）

拓夜は意を決し、自分のプレイを開始した。

「いくぜ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】

星４／風属性／戦士族

ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
効果
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から一つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

拓夜のフィールドに攻撃力１８００のモンスター、エアーマンが召喚された。

拓夜はエアーマンを指差し、その効果を発動させる。

「エアーマンが召喚に成功した事で、その効果が発動される！デッキから【ＨＥＲＯ】と名のついたモンスター１体を手札に加える！」

拓夜はデッキの中から一枚のカードを取り出し、天野に確認させた。

「俺が手札に加えるのは、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』だ！」

「……【Ｄ－ＨＥＲＯ】……」

拓夜はディアボリックガイのカードを手札に加えると、続けて手札から魔法カードを発動した。

「そして手札の『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
魔法カード
手札の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカードを1枚捨てて発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』をコストに、デッキからカードを2枚ドロー！」

デッキからカードを二枚ドローする拓夜。
選手控え席からその様子を見ていた葉月は「よし！」と頷く。

（いいわ、これまでの拓夜のプレイはいつも通り……。デュエルとは、如何に自分のプレイを貫けるかが、勝利への鍵となる！……でも……）

拓夜はメインフェイズを終了し、バトルフェイズへと突入する。

「バトル！エアーマンで、天野さんのセットモンスターに攻撃！」

エアーマンの背中に装着されていたウイングから強烈な風が巻き起こり、天野の裏側守備表示モンスターを破壊した。

「戦闘破壊され、墓地に送られた『クリッター』のモンスター効果、発動……！」

【クリッター】
星３／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　６００
効果
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える。

天野は『クリッター』のモンスター効果を発動し、自分のデッキに手を伸ばす。

「デッキから……攻撃力１５００以下のモンスター、『バトルフェーダー』を手札に……」

「……バトル……フェーダー？」

拓夜は『バトルフェーダー』がどの様なモンスターなのか知らなかった。

疑問には思ったが、今は自分のターンである。

自分のプレイを行おう、と、拓夜はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ２へと移行した。

「リバースカードを一枚セットして、ターンエンド！」

拓夜のターンが終了した。

そこで実況を務める結締が口にした。

『ん～、どうやら二人共……まだまだ小手調べって段階か？』

『ふぅん……だが、その状況もすぐに崩れだす！』

白石が言うと同時、天野は自分のターンを開始した。

「私のターン……ドロー、スタンバイフェイズ……終了、メインフェイズ……」

天野は呟くように言うと、手札から一枚のカードを掴みあげた。

「……これで……っ！！　『神獣王バルバロス』を召喚……」

【神獣王バルバロス】
星８／地属性／獣戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　１２００
効果
このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。その場合、このカードの元々の攻撃力は１９００になる。３体のリリースでこのカードをアドバンス召喚した場合、相手フィールド上のカードを全て破壊する。

天野のフィールドの大地を砕き、そこから神々に仕える者の王、バルバロスが姿を現した。

そのバルバロスの召喚、攻撃力３０００の召喚に、拓夜は驚きの声をあげた。

「なっ！？　なんでレベル８のモンスターを、リリースなしで……！？」

「バルバロスは、リリースなしで通常召喚する事ができる……。その場合、バルバロスの元々の攻撃力は１９００になる……」

【神獣王バルバロス】
ＡＴＫ　３０００　↓　１９００
ＤＥＦ　１２００

（攻撃力１９００……それでも、俺のモンスター『Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン』の攻撃力よりも高いじゃねえか！？）

拓夜は天野のモンスターに動揺しながらも、自分の場に伏せてある一枚のカードを発動させた。

「厄介なモンスターには、早々に退場してもらうぜ！リバースカード、『奈落の落とし穴』を発動する！」

【奈落の落とし穴】
罠カード
相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

「『奈落の落とし穴』は、召喚された攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し、除外する！これでバルバロスを破壊する！」

拓夜の発動した『奈落の落とし穴』を見て、控え席にて観戦する葉月は目を細める。

（『奈落の落とし穴』……確かに強力なカードだけど、その実、意外と回避する方法は多才にある……これが決まるかしら？）

不安に感じる葉月。

案の定、葉月の不安は的中した。

天野は拓夜の発動した『奈落の落とし穴』にチェーンし、手札のカードを発動させた。

「……甘い、速攻魔法『我が身を盾に』を発動」

【我が身を盾に】
速攻魔法
相手が「フィールド上モンスターを破壊する効果」を持つカードを発動した時、１５００ライフポイントを払う事でその発動を無効にし破壊する。

天野　雪　ＬＰ／　８０００　→　６５００
西条拓夜　ＬＰ／　８０００

「『我が身を盾に』……？」

「モンスターを破壊するカード効果を無効にし、破壊する……これで、奈落は無効」

１５００のライフポイントを払い、『奈落の落とし穴』を破壊した天野。

拓夜のフィールドには『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』だけとなっていた。

自分の罠カードが無効化され、軽く舌打ちする拓夜。

何だか自分が発動する『奈落の落とし穴』や『激流葬』のカードは、今まで成功した試しがほとんどないのではないか？

一瞬そんな事を思ったが、拓夜は目の前の状況に集中した。

「メインフェイズ、終了……。バトルフェイズ……！！」

バトルフェイズへと突入する天野は、自分の場に伏せられていた三枚のリバースカードの内、一枚を発動させた。

「永続罠『スキルドレイン』、発動」

【スキルドレイン】
永続罠
１０００ライフポイントを払って発動する。このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

天野　雪　ＬＰ／　６５００　→　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　８０００

天野のライフがカードコストにより減少する。
拓夜は『スキルドレイン』の効果が分からず、険しい表情を作る。

（何だ……あのカード？　何か嫌な予感がする……！）

「バルバロスで、エアーマンに攻撃」

天野の攻撃宣言。

それと同時に、バルバロスが手にした槍をエアーマンに突き刺し、破壊した。

ズゴゥッ！！

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　８０００　→　６８００

「なっ！？　ダメージが……！？」

拓夜は自分が受けた戦闘ダメージに驚いた。

確かバルバロスは妥協召喚された為に、元々の攻撃力は１９００だったはずだ。

エアーマンの攻撃力は１８００。

自分が受けるダメージはたったの１００ポイントではないのか？

拓夜の疑問に答えるように、司会・実況の白石や結締が声を出した。

『やはり来た！スキドレバルバ！！』

『ふぅん……永続罠『スキルドレイン』は、フィールド上の表側表示で存在する効果モンスターの効果を無効にする罠カード……。更に、バルバロスは妥協召喚により、自身の効果で攻撃力が１９００になるはずだが……その効果を『スキルドレイン』で無効にし、本来の攻撃力に戻し、叩く戦術。』

【神獣王バルバロス】
ＡＴＫ　１９００　↓　３０００
ＤＥＦ　１２００

「『スキルドレイン』……そんな……効果モンスターの、効果を……っ！？」

拓夜はその言葉を聞いて唖然となる。

【スキドレバルバ】。

もし、天野のデッキにバルバロスが三体投入されていようものなら、後二体のバルバロスが控えている事になる。

しかも、『スキルドレイン』の影響下により、拓夜は効果モンスターの行動を限定されている。

拓夜のデュエル開始時の意気込みは、みるみるうちに萎んでしまいそうだった。

「私はこのまま、ターンを終了」

自分ターンの終了を宣言する天野。

拓夜は自分のターンに移り、頬に冷や汗を垂らした。

天野のフィールドには、攻撃力３０００のバルバロスが。

その背後、永続罠『スキルドレイン』に、二枚の伏せカードが。

拓夜は自分の手札を見つめ、この状況を打開する為の策を、必死になって考える。

（今の俺の手札は……）

・【ローンファイア・ブロッサム】
・【薔薇の刻印】
・【おろかな埋葬】
・【戦士の生還】
・【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】

（どうすりゃ良い……『ローンファイア・ブロッサム』の効果で、デッキから『椿姫ティタニアル』を特殊召喚しても、その攻撃力は２８００……バルバロスには届かない……ん！？）

試行錯誤していると、拓夜は手札の一枚のカードに気が付いた。

（『薔薇の刻印』……！？それに、ライフは……！？）

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　６８００

天野の残りライフを確認して、拓夜はイケると判断した。

（これが決まれば……俺の勝ちだ！！）

再びデュエル開始時の熱い気持ちが蘇る。

そして拓夜は、自分のデッキからカードをドローした。

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを確認する拓夜。

そのカードを見て、更なる可能性を広げようと、拓夜はドローしたカードを発動した。

「手札から魔法カード『トレード・イン』を発動！」

【トレード・イン】
魔法カード
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「このカードは、手札のレベル８モンスター１枚を捨て、デッキからカードを２枚ドローする効果を持つ！　俺は手札のレベル８モンスター『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を捨てる！　そして……２枚……、ドロー！！」

『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』のカードを捨て、カードをドローする拓夜。

そのドローしたカードを確認し、拓夜は勝利を確信した。

（……『融合』に『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』！？　決まった！

これで花穂のキスはいただきだ！！）

自分のドローが信じられない位に引きが良い。

もしかすると、これは花穂からのおまじないの効果かもしれない。

拓夜は踊る心を必死に抑え、反撃に出た。

「手札から魔法発動！『戦士の生還』！！」

【戦士の生還】
魔法カード
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択して手札に加える。

「このカード効果により、墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を回収する！」

墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を手札に加えた拓夜は、次の行動に移った。

「そしてモンスターカード『ローンファイア・ブロッサム』を召喚！」

【ローンファイア・ブロッサム】
星３／炎属性／植物族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１４００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリリースして発動する。自分のデッキから植物族モンスター１体を特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

拓夜のフィールドに、爆弾の芽を生やした植物が現れる。

そして拓夜は、『ローンファイア・ブロッサム』のモンスター効果を発動した。

「ローンファイアの効果発動！自身をリリース！そしてデッキから……『椿姫ティタニアル』を、攻撃表示で特殊召喚！」

拓夜の行動に会場中からどよめきの声があがる。

「なぁ、何で『ローンファイア・ブロッサム』の効果が発動できるんだ？」

「そうよね、今は永続罠『スキルドレイン』によって、フィールド上の表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化されているはずよ？」

「あの拓夜ってヤツ、ルール間違ってんじゃねぇのか？」

観客達はそれぞれに自分の思いを口にする。

だが、それを聞いた葉月や成瀬はそれぞれに思った。

（いいえ、拓夜は間違ってなんかいない……！）

（上手いです、拓夜さん！『スキルドレイン』の盲点を、しっかりと突いてきました！）

そして観客達の疑問に答えるかのように、白石や結締はコメントをする。

『ふぅん、拓夜め……気付いていたか。『スキルドレイン』の穴を！』

『ああ、『スキルドレイン』はフィールド上の効果モンスターの効果は無効化するが、“墓地に送られて発動する効果”は無効化できない。今回、拓夜ちゃんは『ローンファイア・ブロッサム』自身をリリースした。もちろんこれは、“自身をリリース”して、墓地へ送られるからこそできる事だ。効果を発動する『ローンファイア・ブロッサム』は、効果解決時にはフィールドにではなく、墓地にあるからな！』

そして拓夜のフィールドに、大輪の花を咲かせた椿の姫が現れた。

【椿姫ティタニアル】
星８／風属性／植物族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２６００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリリースして発動する。フィールド上に存在するカードを対象とする魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

『椿姫ティタニアル』の攻撃力は２８００。

『神獣王バルバロス』の攻撃力３０００には届かない。

「そんな攻撃力、……バルバロスの敵じゃない」

天野は椿姫を見つめ、ポツリと呟く。

だが、拓夜は「そんな事は分かっている！」と言い、更に手札のカードに手を伸ばす。

「そんな高攻撃力のモンスター、倒す事が出来なければ、操るまでだ！！」

「っ！？」

天野の目が見開かれる。

そして拓夜は、手札に眠る鍵となるカードを発動させた。

「装備魔法『薔薇の刻印』を発動！バルバロスに装備させる！」

【薔薇の刻印】
装備魔法
自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動する。このカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得る。自分のエンドフェイズ時に装備モンスターのコントロールを相手に移す。自分のスタンバイフェイズ時に装備モンスターのコントロールを得る。

「コストとして、墓地の植物族モンスター『ローンファイア・ブロッサム』をゲームから除外し、バルバロスのコントロールを得る！！」

バルバロスの体に黒薔薇の刻印が刻まれる。

そして、拓夜のフィールドにバルバロスが移り、天野に刃を向けた。

「……」

「椿姫、そしてバルバロス！二体の強力モンスターが俺のフィールドに並んだ！」

椿姫の攻撃力は２８００。

そしてバルバロスは３０００。

拓夜のフィールドにはこの二体のモンスターが。

対する天野のフィールドには壁となるモンスターはなく、永続罠『

スキルドレイン』。
そして二枚の伏せカード。

二枚の伏せカードが気掛かりではあったが、ここに来て、攻撃を躊躇う訳にはいかない。

この二体のモンスターの攻撃、ダイレクトアタックが決まれば、拓夜の勝利なのだ。

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　６８００

……ドクンッ！……ドクンッ！……。

拓夜の鼓動が激しく高鳴る。
敵を倒せと轟き叫ぶ。

「バトル！！」

熱い鼓動に導かれ、拓夜はバトルフェイズに突入した。

「『椿姫ティタニアル』！天野さんに、ダイレクトアタック！！」

椿姫が背後に大輪の花を咲かせる。

その花弁、一枚一枚がひらひらと宙を舞い、一斉に天野へと襲いかかった。

「……甘い」

天野が呟いた瞬間、彼女のフィールドに振り子のようなモンスターがいきなり出現した。

そしてそのモンスターが現れた途端、椿姫は攻撃を止め、バトルフェイズが終了してしまった。

「なっ！？　……一体、何が起きたんだ？」

訳が分からない拓夜。

すると天野は至極、冷静な態度で説明を始めた。

「……あなたの直接攻撃宣言時、手札のモンスターカード『バトルフェーダー』のモンスター効果を発動させた」

【バトルフェーダー】
星１／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
効果
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「バトルフェイズを……強制的に終了させる効果だって！？」

何だそりゃ！？

ムチャクチャ効果じゃねえか！！

このターンで勝負を決める事が出来なかった拓夜。

その内心は穏やかではなかった。

（最初の『クリッター』の効果の時に手札に……。ヤバい……この天野って人、ムチャクチャ強い！！）

拓夜は手札を確認する。

・【おろかな埋葬】
・【融合】
・【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
・【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】

（今の手札には…融合モンスター『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を召喚する為のカードは揃っている……だが、こいつは俺の切り札！こうなったらフィナーレは、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』で決める！）

そしてフィールドを確認する。

次の天野のターンになれば、『薔薇の刻印』で操っている『神獣王バルバロス』は天野のコントロールに戻ってしまう。

そうなれば、自分のフィールドには『椿姫ティタニアル』しか残らない。

些か不安に感じた拓夜は、墓地のモンスターカードを取り出し、効果を発動した。

「俺は墓地の……『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』のモンスター効果を発動する！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】

星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
効果
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

（こいつの効果で、デッキからもう一体の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を特殊召喚し、手札の魔法カード『おろかな埋葬』で、デッキからチューナーモンスター『ゾンビキャリア』を墓地に送る……、そして墓地の『ゾンビキャリア』の効果を使い、シンクロ召喚だ！！）

戦術は決まった。

拓夜は墓地から取り出した『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』をゲームから除外した。

「このカードを墓地から除外する事で、デッキから……」

拓夜がデッキに手を伸ばした瞬間、天野の言葉が、それを遮った。

「無駄。……罠カード『おジャマトリオ』を発動」

【おジャマトリオ】
罠カード
相手フィールド上に「おジャマトークン」（獣族・光・星２・攻０／守１０００）を３体守備表示で特殊召喚する（アドバンス召喚のためのリリースはできない）。「おジャマトークン」が破壊された時、このトークンのコントローラーは１体につき３００ポイントのダメージを受ける。

ポンッ！ポムッ！ドテッ！？

拓夜のフィールドに黄・緑・黒、それぞれの色をした『おジャマトークン』が守備表示で特殊召喚された。

それにより、拓夜のフィールドはモンスターカードゾーンが全て埋め尽くされてしまった。

これでは拓夜は、ディアボリックガイを特殊召喚する事ができない。

「くッ……ジャマだぁぁああ！！」

拓夜の悲痛な叫びが響き渡る。

拓夜の予定はかなり狂ってしまった。

『ふぅん……『おジャマトリオ』。ジャマだな……』

『ジャマだねぃ……』

思わず白石や結締の二人も声を漏らす。

更には会場中からは「ぉお～！」と、感心するような声が聞こえた。

周りからすれば、それだけ天野の『おジャマトリオ』の発動タイミングは絶妙だったのだ。

「……やってくれるじゃねぇか、天野さん」

拓夜の表情に影ができる。

しかし、その口元は笑っていた。

「天野さん……君がジャマする為に発動した『おジャマトリオ』のトークン……、逆に利用させてもらうぜ！！」

拓夜の確信を持った強気な発言に対し、驚きの表情を作る天野。

（どうやって？……このターン、あなたの召喚権はもうない。それに特殊召喚しようにも、モンスターカードゾーンは全て埋め尽くされている。）

天野は考え込む表情で、拓夜がとるべきだろう行動を予測していく。

（『おジャマトリオ』のトークンは、アドバンス召喚の為のリリー

スにはできない……。ッ！？）

そこに来て、天野は自分の考えの中から疑問を抱く。

（確か……西条拓夜は……【Ｄ－ＨＥＲＯ】を使う。確か……【Ｄ－ＨＥＲＯ】の中には、三体のモンスターをリリースして……特殊召喚するモンスターがいた筈……ァッ！？）

天野の脳裏によぎる拓夜のプレイ。

確か彼は手札に加えていた。

『トレード・イン』の効果で墓地へと送り、その後『戦士の生還』の効果で墓地から手札へと加えた“あのカードが”！！

『このカード効果により、墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を回収する！』

天野は驚愕の表情で拓夜を見つめる。

「まさか……そんな……ッ！？」

「いくぜ……『神獣王バルバロス』！そして、『おジャマトークン』二体をリリースし……」

それぞれ三体のモンスターが大きな渦に飲み込まれる。

そして拓夜のフィールドに、血色の翼を広げた、血塗られた【Ｄ】が姿を表した。

「血風（けっぷう）を巻き起こせ！　来い！　『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　６００
効果
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモン

スター3体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる。このカードの攻撃力は、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードが自分フィールド上で表側表示で存在する限り、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果は無効化される。

「Ｂｌｏｏ－Ｄは特殊召喚モンスターだ！天野さんが俺のフィールドにモンスターを展開してくれたおかげで、特殊召喚する事ができたぜ！」

「……くっ！？」

大歓声が会場中を、フィールドを包み込む。

更に拓夜は、手札のカードを掴み、天野に告げる。

「バトルフェイズが終了してるのが残念だ……けど、天野さん……魅せてやるよ！　俺のデッキ、最強のモンスターを！！」

最強のモンスター？

天野は思わず「……なに？」と、それは一体どんなモンスターなの？と、聞き返すように呟いた。

「いくぜ、手札の魔法カード『融合』！」

【融合】
魔法カード
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「フィールドのＢｌｏｏ－Ｄと、手札のドグマガイを融合し……」

拓夜のそれぞれのモンスターが混ざり合い、爆発がおきる。

轟ッ！！

「っ！？」

「圧倒せよ！！　来たれ、究極の【Ｄ】！！　融合召喚、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
融合／効果
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
星８　闇属性　戦士族
ＡＴＫ　３４００
ＤＥＦ　２４００
効果
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを含むモンスター３体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。この特殊召喚に成功した場合、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時に相手ライフを半分にする。

拓夜のフィールドに現れし、最強の【Ｄ】。

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』。

血色の翼は更に力強く、右手の大剣は凄まじい覇気を発し、左手の竜の顔は全てを粉砕せんばかりの威圧感があった。

「……凄い……拓夜、アンタってやつは……」

「流石です！拓夜さん！」

『融合召喚！やっぱいつ見ても、融合はカッコいいぜぃ！！』

『『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』……あれが、拓夜の最強モンスター……』

「俺はターンを終了する。さぁ、天野さん！全力で掛かってきな！俺のＤ－ＥＮＤが、相手になってやる！！」

天野　雪　ＶＳ　西条拓夜。

二人のデュエルは、更なる熾烈を極めていく。

最強の【王】と、最強の【D】　（後書き）

この作品を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話に登場した天野雪についてです。

この人物は以前、この作品を読んで下さったＣＨＡＩＮさんからのリクエストキャラクターです。

ＣＨＡＩＮさんのご期待に添えたかどうか、多少の不安がありますが、楽しんで頂けたなら幸いです。

「性格はクーデレで！」

と、言われていたのですが、最初は余り理解できていませんでした。

クーデレって何？

クールにデレ？

何となく、アニメや漫画ではそれっぽいキャラクターは観たことがありましたが、いざ自分が書こうとすると、なかなか上手くいきませんでした。

表現力がまだまだだと、自覚した上に、大変勉強にもなりました。

ちなみにこの天野雪。

しゃべり方や動作は、とあるアニメキャラクターをモデルに書かせていただきました。

分かる方は分かると思いますが、ここでは敢えて、その名前はだしません。

皆様方それぞれに、キャラクターや背景などを想像しながら読む。

それが小説の醍醐味でもあり、それが小説ならではの楽しさでもあると、僕は思います。

皆様方のご意見、ご感想をお待ちしております。

なお、作品によるリクエストが御座いましたら、遠慮なく仰って下さい。

皆様方と一緒に作品を作る。

それが小説を書く上での、僕の楽しみでもあります。

それでは、今回はここで・・・失礼しました。

現実

天野雪と西条拓夜のデュエル。

二人のデュエルから沸き起こる歓声は、会場の外にも響き渡っていた。

会場の外ではＯＣＧ研究会のメンバーの一人、西条亨が大きなビニール袋を片手に、地面に転がっているゴミを拾っては袋に入れていた。

これは別に、亨が慈善作業に目覚めた訳ではない。

結締に迷惑をかけた西条は彼からの罰ゲームで、会場付近のゴミ集めを言い渡されたのだ。

普段あまり気にすることがなかったが、地面の至る所にゴミは落ちている。

拾っても拾ってもキリがない。と、亨は溜め息をついた。

「さいじょお、たくさん集めたよー！」

亨が顔をあげるとマナも同じように袋を手に、亨へと駆け寄ってき

た。

手にした袋にはいっぱいにゴミが詰められていた。

「ほら！」

「悪いな、マナ。お前にまで付き合わせて……」

「ううん、気にする事ないんだよ、さいじょお」

マナは自分から進んで、亨のゴミ集めに協力してくれたのだ。

「一人でやっていたら、日が暮れちゃうんだよ」

「だろうな。お前が集めてくれたゴミ……もう袋いっぱいだもんな」

マナの持つ袋には、もう何も入りきらない程にゴミが詰められていた。

亨は「よっこらしょ」と言い、自分のゴミ袋の蓋をして、マナの持つゴミ袋を預かる。

「じゃあ俺はこれを捨ててくるから、お前は先に戻って皆の手伝いをしてきてくれ」

左右それぞれの手にパンパンに膨らんだゴミ袋を持つ亨。

マナは親切心から、亨の持つゴミ袋の内一つを掴もうと手を伸ばした。

「え、いいよ、さいじょお！私も最後まで手伝うよ！」

「あ、ちょっ！？」

マナが亨から袋を取った時、そのゴミ袋の底がパックリと割れた。

ドサドサッ！！

亨とマナ。

二人の間に集めたゴミが散らばる。

それと同時に悪臭も漂う。

「……」

すっかり薄っぺらく、そして軽くなったゴミ袋をヒラヒラさせながら、マナはぎこちない表情で「あはははは……」と、力なく愛想笑いをする。

そして、すっかり空となったゴミ袋を亨に渡し、一歩二歩と後ずさる。

「じゃ、じゃあ私……さいじょおが言うよおに、皆のお手伝いをしてくるね？　さいじょお、頑張って！」

「あ、ちょっ！？」

亨が制止の声を出すよりもかなり早く、マナはその場から逃げるように一目散に走り去っていった。

「って早!?　マジシャン・ガール、待てコラ!!」

だが既にマナの姿はなく、そこには亨ひとり残されているだけであった。

ひゅ〜……。

現在の亨の心境を現すかのように、乾いた風が彼の前を横切った。

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　６８００

大歓声に包まれる会場。

その中央にて向き合う二人の決闘者、天野に拓夜。

現在、拓夜のターンが終了し、天野のターンへと移行した所である。

天野のフィールドには、モンスターは『バトルフェーダー』が守備表示で１体。

永続罠『スキルドレイン』が発動しており、更に１枚の伏せカード。

手札は１枚。

天野は表情に冷静さを取り戻し、自分のプレイを開始していく。

「私のターン、ドローフェイズ……。ドロー」

デッキからカードをドローした天野は、拓夜のフィールドに並ぶモンスターを確認した。

拓夜のフィールドには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』と『椿姫ティタニアル』。

攻撃力３０００と２８００の強力モンスターだ。

そして守備力１０００の『おジャマトークン』が1体、守備表示でいる。

それらと自分の手札を確認し、天野はプレイを続けていく。

「スタンバイフェイズ……終了、メインフェイズ……」

そして手札の1枚を掴み、モンスターを召喚した。

「『神獣王バルバロス』を召喚」

「なッ！？　……早速2枚目のバルバロスを引いたのか！？」

天野のフィールドにバルバロスが妥協召喚される。

しかし、永続罠『スキルドレイン』の効果により、妥協召喚されてもバルバロスの攻撃力は３０００。

拓夜は天野の召喚したバルバロスを見て、表情を引き締めた。

「バトルフェイズ……。『神獣王バルバロス』で『椿姫ティタニアル』を攻撃」

バルバロスの手にした槍が、拓夜の椿姫を貫き、破壊した。

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　６８００　→　６６００

「ぐっ……！？」

「……椿姫は、邪魔……」

拓夜のライフが減少し、フィールドから『椿姫ティタニアル』が消滅した。

天野はバトルフェイズを終了し、メインフェイズへと移行する。

「メインフェイズ……。カードを1枚セットして、ターンエンド……」

「くっ、……俺のターン！」

拓夜のターンに移り、デッキからカードをドローする。

（天野さんのフィールドには『神獣王バルバロス』と『バトルフェーダー』。バルバロスとＤ－ＥＮＤの力は互角……、ここは無難に『バトルフェーダー』に攻撃をするか？だが、次のターンにバルバロスを強化されたら、俺のデッキで勝てるモンスターはいない……。ここはバルバロスと相殺するか？　Ｄ－ＥＮＤは墓地に存在するスタンバイフェイズ、……墓地の【Ｄ－ＨＥＲＯ】をゲームから除外する事で、Ｄ－ＥＮＤは何度でも蘇る事ができるからな……よし！）

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』には相手モンスター1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果がある。

しかし現在、永続罠『スキルドレイン』によりその効果は封じられている。

拓夜はＤ－ＥＮＤをバルバロスと相殺させる狙いで、そのままバト

ルフェイズへと突入した。

「バトルフェイズに入る！いけ、Ｄ－ＥＮＤ！バルバロスに攻撃だ！」

『おおっと～、拓夜ちゃんが攻撃対象をバルバロスにした！？という事は、バルバロスと相殺する事が狙いかぁ！？』

拓夜の攻撃宣言により、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』は右手の大剣を構え、バルバロスに突進する。

実況の結締が叫び、会場から歓声が湧き起こる中、バルバロスを操る天野はポツリと呟いた。

「……無駄、ダメージステップ時、速攻魔法、発動……『収縮』」

【収縮】
速攻魔法
モンスター1体の元々の攻撃力をエンドフェイズ時まで半分にする。

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
ＡＴＫ　３０００　↓　１５００
ＤＥＦ　３０００
（『収縮』効果）

バルバロスに向かうＤ－ＥＮＤの体が縮こまり、その力が半減された。

「なっ……Ｄ－ＥＮＤが！？」

「バルバロスの……迎撃」

相殺するはずだった拓夜の狙いは叶わず、Ｄ－ＥＮＤはバルバロスに迎撃され、拓夜はライフポイントに大きなダメージを受けてしまった。

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　６６００　↓　５１００

「ぐっ……！？」

Ｄ－ＥＮＤが破壊され、拓夜のフィールドには守備表示の『おジャマトークン』１体のみ。

拓夜はすかさずバトルフェイズを終了し、メインフェイズ２へと移行。

手札のカード１枚に手を伸ばした。

「ちっ、リバースカードを１枚伏せ、ターン終了だ！」

拓夜のターンが終了した。

控え席に座り彼のデュエルを見守る成瀬は、両手を握りあわせ、ポツリと彼の名を呟いた。

「……拓夜さん」

『さぁ、拓夜ちゃんのターンが終了して、雪ちゃんのターンに移った！雪ちゃんはここから、どう拓夜ちゃんを追い込んでいくのか！？』

『ふぅん……スキドレバルバ。単純な戦略ほど効率かつ、その威力は凄まじいものがある……。拓夜のやつはどう凌ぐ……』

実況の結締や白石が呟く中、天野は自分のターンに移りプレイを始めていた。

ドローフェイズ、スタンバイフェイズ、そしてメインフェイズに移行し、天野はバトルフェイズへと突入した。

「バトルフェイズ……、そして、私は……このカードを発動させる」

天野が言うと、彼女が最初のターンに伏せたカード1枚を指差し、そのカードを発動させた。

それは……。

「永続罠……『最終突撃命令』」

【最終突撃命令】
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在するモンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

「最終……突撃命令……？」

拓夜が呟くと、彼の場に守備表示で存在していた『おジャマトークン』が、その表示形式を攻撃表示へと変更させた。

【おジャマトークン】
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　１０００

「なっ！？　これは……！？」

その様子に驚きの声をあげる拓夜。

その様子を見ていた天野は、その訳を淡々と説明する。

「『最終突撃命令』は、全てのモンスターを攻撃表示へと固定させる永続罠……」

「俺の場には、『おジャマトークン』だけ……。だが、その攻撃力は……」

ゼロ。

そして天野のフィールドには攻撃力３０００のバルバロスに、攻撃力は０だが『バトルフェーダー』が。

拓夜の頬に一滴の汗が流れ落ちる。

（ちょ、オィオィ待てよ！？　……このままじゃ、俺は……）

そして天野は容赦なく、バルバロスに攻撃命令を出した。

「バルバロス……『おジャマトークン』に、攻撃」

バルバロスの攻撃が『おジャマトークン』に炸裂した。

そして拓夜は、その超過ダメージをダイレクトに受けてしまった。

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　５１００　→　２１００　→　１８００

３０００のダメージだけでなく、更に３００ポイントのダメージを受けた拓夜。

「ぐぁあっ！な、なぜ……３００のダメージが……」

「『おジャマトークン』は……破壊されると、３００ポイントのダメージを与える」

「拓夜！？」

「拓夜さん！！」

大幅なライフの減少に、控え席や観客席でデュエルを観戦していた葉月や成瀬が思わず声をあげる。

拓夜のライフはあと１８００ポイント。

対する天野のライフは５５００ポイント。

たったの一撃で逆転されたライフに、会場からは大歓声が巻き起こる。

『おぉっとーー！！　雪ちゃんの攻撃が、拓夜ちゃんを捉えたぁあ！！』

『ふぅん……あの天野とか言う女、バルバロスのパワーを最大限利

用するようにデッキを組んである……』

天野のプレイを実況・解説の席から観察していた白石は目を細め、拓夜のフィールドを眺める。

拓夜のフィールドにはモンスターはなく、１枚の伏せカードのみ。

手札は１枚。

（状況は拓夜が不利に見えるが……まだ拓夜のライフは１８００も残っている。更に、拓夜の墓地には……）

天野はバトルフェイズを終了させると、スカートのポケットから携帯電話を取り出した。その画面には、カメラモードで写されている険しい表情をした拓夜があった。

「……西条拓夜、あなたはここでオシマイ。あなたも、私の記録にしてあげる」

「く……俺は諦めない、絶対に！」

拓夜の言葉を聞き、天野は携帯電話を再びポケットにしまい込む。
そして、残った手札1枚を魔法・罠カードゾーンにセットした。

「バトルフェイズ……終了、メインフェイズ……、カードを1枚セット、ターンエンド」

「おお……盛り上がってるな」

ゴミ集めを終えた西条亨は選手控え席の通路に立っていた。
実況・解説席の後ろには、先に戻っていたマナの姿が見える。
そして視線をデュエルフィールドに向けると、そこには西条拓夜がデュエルをしている姿があった。

「……拓夜くん」

どうやらこれから拓夜のターンを迎えるようだ。
拓夜は自分のデッキトップに指を添えて、カードをドローする姿勢をとっていた。

（……相手のフィールドには『スキルドレイン』に『最終突撃命令』に1枚のリバースカード、そして『神獣王バルバロス』に『バトルフェーダー』か……。拓夜くん、君はどう戦う……？）

亨が思う最中、拓夜は自分のプレイを開始した。

「……俺のターン、ドロー！」

デッキからカードをドローし、そのカードを確認する拓夜。
そしてスタンバイフェイズ、拓夜は墓地に眠る1枚のカードを取り出した。

「墓地に眠る『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』のモンスター効果！墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を除外することで、墓地から

Ｄ－ＥＮＤを特殊召喚する！現れよ、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

拓夜のフィールドに再び現れた『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』。

だがその瞬間、対戦者である天野がポツリと呟いた。

「Ｄ－ＥＮＤは、これでオシマイ……」

そう呟いて、天野は一枚の伏せカードを発動させた。

「罠カード『奈落の落とし穴』、発動……」

「なっ！？」

『奈落の落とし穴』は召喚・反転召喚・特殊召喚された攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し、除外するカード。

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の攻撃力は３０００。

このままではカード効果により破壊、除外されてしまう。

「拓夜！？」

「拓夜さん！！」

控え席や観客席に座る葉月や成瀬は、思わず拓夜の名を叫んだ。

だが、拓夜は天野の発動した『奈落の落とし穴』を見て口端をつり上げる。

拓夜は不敵な笑みを浮かべて、天野に言い放った。

「……この瞬間を待っていた……！！」

「っ！？」

拓夜はそう言うと、自分の場に伏せてあった1枚のリバースカード

を手に取る。

「ライフポイントのコストは痛いけど……いくぜ！カウンター罠『盗賊の七つ道具』を発動！」

【盗賊の七つ道具】
カウンター罠
ライフポイント１０００払い発動する。罠カードの発動と効果を無効にし破壊する。

天野　雪　ＬＰ／　５５００
西条拓夜　ＬＰ／　１８００　→　８００

拓夜の発動した『盗賊の七つ道具』により、天野の『奈落の落とし穴』が消滅した。

これにより、拓夜の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』は何とか破壊を免れた。

「……っ！？」

「へへ……どうだ、天野さん！」

一発かましてやったぜ！と言わんばかりに得意気になる拓夜。

そして拓夜は自分のプレイを続行していった。

「俺のターンのメインフェイズ、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
効果
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１

ターンに1度しか使用できない。

拓夜のフィールドに新たな【Ｄ－ＨＥＲＯ】が召喚された。

だがダイヤモンドガイの効果も、永続罠『スキルドレイン』の効果によって発動できない。

効果を発動できないのは辛いが、この状況ではそうも言ってられない。

拓夜にとって効果云々よりも、攻撃力３０００のバルバロスをどうにかする事の方が重要であった。

「このままバトルフェイズに入る！行けッ、ダイヤモンドガイ！」

拓夜のバトルフェイズ、ダイヤモンドは天野の『バトルフェーダー』に向かって飛び込んだ。

「ダイヤモンドガイで、『バトルフェーダー』を攻撃！ダイヤモンドナックル！」

「くっ……！？」

天野　雪　ＬＰ／　５５００　→　４１００
西条拓夜　ＬＰ／　８００

ダイヤモンドガイの攻撃が天野のモンスターに炸裂し、ダイレクトアタックと同じダメージを与えた。

そして拓夜は続けざまに攻撃宣言を行う。

「まだ俺には、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の攻撃が残っている……！！　Ｄ－ＥＮＤ、バルバロスに攻撃だ！！」

「っ！？」

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が『神獣王バルバロス』に対し、右手の巨大な剣を振り下ろす。

それと同時に『神獣王バルバロス』も、手にした槍を『Ｄｒａｇｏ

ｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に向かって突き刺した。

ドゴォォオオッッ！！

「Ｄ－ＥＮＤ！？」

「……」

フィールドに立ち込める煙が晴れると、そこには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』と『神獣王バルバロス』の姿はなかった。

『おおっと！？　遂に『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』と『神獣王バルバロス』が相打ちとなったァー！！』

『ふぅん……、だがその代償は高かったようだ。拓夜は『盗賊の七つ道具』のコストにより、ライフを１０００も失ってしまった。』

『残りライフも僅かに８００……拓夜ちゃん、次の雪ちゃんのターンを凌ぐ為の策はあるのか？』

『天野のデッキの火力は総じて高い……生半可なモンスターでは……』

白石や結締の解説を聞き、拓夜は背中から嫌な汗が溢れ出した。

正直、次のターンの事など考えてもいなかったからだ。

フィールドに残るダイヤモンドガイの攻撃力は１４００。

そして手札には、魔法カード『おろかな埋葬』の１枚のみ。

仮に『おろかな埋葬』を使い、デッキからモンスターカードを墓地に送ろうにも、有効なモンスターなどない。

拓夜のデッキには『ダンディライオン』がいるが、その効果から特殊召喚される『綿毛トークン』の攻守は０。

現在、永続罠『最終突撃命令』によって強制的に攻撃表示となってしまう為に壁となる意味がない。

成瀬の持つモンスター『ネクロ・ガードナー』ならば、相手モンスターの攻撃を防ぐ効果があるために、この場では有効な手段だが、そのカードは持っていない。

「……」

天野のフィールドにモンスターはない。

手札もない。

つまり、天野は次のターンにモンスターを引けなければ敗北となる。

今の拓夜には、その事に賭けるしか方法がなかった。

「……拓夜……」

「拓夜さん……」

それぞれに拓夜を見守る葉月と成瀬。

拓夜は少しでも可能性を繋ぐ為に、一つの行動に出た。

「……カードを1枚セット、ターンエンドだ……」

拓夜は残った手札1枚、『おろかな埋葬』のカードを場に伏せて、ターンを終了させた。

もし、天野がこのカードを警戒して攻撃を躊躇するようであれば勝機に繋がる。

以前、葉月とデュエルした際に使った手だ。

あの時、葉月は拓夜の伏せた『チェーン・マテリアル』を『激流葬』と勘違いし、動くことができなかった。

あの熟練者の葉月をも惑わした作戦だ。もしかしたら、天野相手にも通じるかもしれない。

「……さぁ、天野さん！かかってきな！」

「……」

あえて挑発するような発言をする拓夜。

それに対し、天野は拓夜の表情をじっと見つめていた。

視線が交差し、拓夜は思わず瞳が揺らいだ。

（……頼む……モンスターを……）

「……私のターン、ドローフェイズ……ドロー」

天野は拓夜を見つめながら、ゆっくりとカードをドローした。

そしてドローしたカードを確認し、プレイを始めた。

（……モンスターを……引かないでくれ！！）

「……」

クスリ……、と天野が口元に笑みを浮かべた。

ようにもみえた。

「スタンバイフェイズ……終了、メインフェイズ……」

フェイズが切り替わる毎に生唾をゴクリと飲み込む拓夜。

そして天野は、ドローしたカードをデュエルテーブルにセットした。

「……『可変機獣　ガンナードラゴン』を、召喚……」

【可変機獣　ガンナードラゴン】
星７／闇属性／機械族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２０００
効果
このカードはリリースなしで召喚する事ができる。その場合、このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

天野のフィールドに星７の機械竜が召喚された。

『雪ちゃん！この状況で、ななななんと、ガンナードラゴンを召喚したァア！！』

『ふぅん……、『可変機獣　ガンナードラゴン』は、『神獣王バルバロス』と同じく妥協召喚ができるモンスター……。その場合、自身の効果で攻撃力・守備力が半分となるが……』

半分となるが現在、天野のフィールドには永続罠『スキルドレイン』が発動している。

その効果により、フィールド上の効果モンスターの効果は打ち消されてしまう。

自身の効果で半減された攻撃力・守備力は、『スキルドレイン』の効果により無効。

つまりは……。

「……妥協召喚して攻撃力２８００……」

デュエルを観戦していた亨はポツリと呟いた。

それと同時に、拓夜の目は大きく見開かれた。

視線の先には天野のモンスター、『可変機獣　ガンナードラゴン』の姿があった。

「……くっ……！！」

モンスターは召喚されはしたが、もしかしたら攻撃をしてこないかもしれない。

自分の場に唯一伏せられた『おろかな埋葬』のカード。

このブラフが通用するかもしれない。

以前は葉月にだって通用した。

あの葉月にだって通用したんだ！と、拓夜は藁にもすがる気持ちでガンナードラゴンを見つめた。

自分の場に壁となるモンスターはダイヤモンドガイ。

もし、ガンナードラゴンの攻撃を受けてしまえば、その超過ダメージは１４００。

そうなれば自分は敗北だ。

（攻撃するな……攻撃するな……攻撃するな……攻撃するな……）

「……メインフェイズ、終了……バトルフェイズ……」

「ッ！！」

（するな……するな……するな……するな……）

ドッ、ドッ、ドッ、ドッ……。

自分の心臓の鼓動が激しく脈打つのがわかる。

自分はいま、どんな顔をしているのだろうか？

きっと驚愕に満ちた、それともどこか怯えた感じに？

しかし、拓夜はそんな事すら考えられるほど、今の気持ちにゆとりはなかった。

「……『可変機獣　ガンナードラゴン』で、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』に……」

（するな……するな……やめろ……やめてくれ……）

そして次の瞬間

「……攻撃」

２つの砲身から放たれる砲弾がダイヤモンドガイを直撃した。

爆炎に包まれながら、拓夜のデュエルは幕をおろした。

現実　（後書き）

ようやくログインできた・・・（汗

なかなかマイページにアクセスできずに、ログイン画面で躓いてました。

何度自問自答したことか・・・

さて、報告ですが・・・

別作品の小説【決闘者の道】ですが、都合により更新が遅れます。

作品は最後まで書き上げるつもりではおりますので、長い目で見守っていただければ幸いです。

更新ペースに関しては遅くなりました事を、重ねてお詫び申し上げます。

頂上への挑戦

優勝者は葉月だった。

現在、デュエルフィールドには表彰台が設置され、そこには西条亨が表彰状と一緒に一枚のカードを葉月に手渡しているところであった。

「烏丸葉月さん、優勝……おめでとう」

「ありがとうございます」

表彰状を受け取る葉月。

そんな葉月を後ろから、西条拓夜は成瀬花穂と一緒に並んで拍手を送っていた。

決勝戦でも、葉月は一方的だった。

決勝戦での対戦者は、拓夜を下した決闘者……天野雪だった。

先攻は葉月。

後攻の天野の伏せカード『スキルドレイン』を即座に破壊し、怒涛とも言える展開力とラッシュで一気に勝負をつけた。

文字通り、天野は葉月に対して手も足も出なかったのだ。

「それから烏丸選手には優勝商品として、まずはこのカードを」

「あ、はい……ありがとうございます」

葉月は早速、受け取ったカードを確認する。

「……このカード」

「そのカードは、ＢＦを使う烏丸さんにこそ相応しいと思ってね。きっと、烏丸さんの力になってくれるよ」

西条亨の微笑みに緊張しながら、葉月は亨の顔と受け取ったカードを交互に見比べた。

目の前には憧れのＯＣＧ研究会の人間が。

しかも自分は、そのＯＣＧ研究会が主催するデュエル大会で、優勝をしてしまった。

夢であるなら覚めてくれ！と言わんばかりに、葉月の内心は浮かれていた。

『そして優勝者である烏丸選手には、カードの他に優勝商品として……ジャカジャン！！』

実況・解説席に座る結締が言うと会場ゲートが開き、そこからマナが大きなテレビを持って現れた。

『トリティニーグループの最先端技術を駆使して作られた液晶大型３Ｄテレビ！！もちろん地デジ対応だ！！』

会場から更なる拍手喝采が沸き起こる。

葉月は緊張のあまり「あ、ありがとうございます」しか言えず、顔は真っ赤に染まっていた。

『ふぅん……美少女よ、栄えある第一回目となるＯＣＧ研究会東区デュエル大会にて、見事優勝を決めた訳だが……優勝者として何かコメントを頂きたい』

白石の言葉に応じ、亨は葉月にマイクを手渡した。

とりあえずマイクを受け取ったは良いが、何を言えばいいか思い付かない。

葉月が言いあぐねていると、その様子を見ていた拓夜と成瀬は葉月の名を呼んだ。

「葉月！」

拓夜からの呼びかけに我に返った葉月は、思わずそちらに目を向ける。

「葉月さん！頑張れ！」

「……拓夜……成瀬さん……」

落ち着きを取り戻した葉月は、大きく一回、深呼吸をする。

私は決闘者。

そして、目の前には憧れのＯＣＧ研究会の決闘者がいる。

私はそのＯＣＧ研究会が主催するデュエル大会で優勝した。

だったら、優勝者として……

「少しくらい……我が儘を言っても良いよね？」

そう口ずさむ葉月の口元は笑っていた。

そして目は輝いていた。

葉月は亨に向き直り、優勝者としてのコメントを言い始めた。

「……正直、今でも信じられません。私が優勝できたことが……」

「ハハ……でも、夢じゃないよ」

「ええ……。あの……西条亨さん」

「？」

葉月は真っ直ぐに亨を見つめる。

亨は彼女が何を言い出すのか、軽く首を傾げて葉月の言葉を待った。

「あの……優勝者として、私の我が儘を聞いてもらえませんか？」

「我が儘……？」

「はい」

葉月は一拍おいて、軽く目を閉じる。

そして再び目を開いた彼女の表情は、一人の女性としての顔ではなかった。

「……」

その表情は、一人の決闘者として。

「私は……優勝者として、ＯＣＧ研究会に挑戦したい……。私は……西条亨さん……あなたに、デュエルを申し込みます！」

その一言に、会場中に火がついた。

沸き起こる歓声。

沸き起こる拍手。

葉月の挑戦を聞いた結締に白石は、ニヤニヤしながら亨に尋ねた。

『西条ちゃん、どうするぜよ？』

『ふぅん……西条！！　この俺と変われ！！　俺が美少女とデュエルをする！！』

今にも飛びかかりそうな白石だったが、そこは結締が必死になって押さえていた。

「亨さんと……葉月さんの……デュエル……」

「葉月……」

それぞれに呟く拓夜に成瀬。

葉月の真っ直ぐな視線を受け止めながら、亨は軽く頷き、それに応えた。

「光栄だね……君みたいな可愛い子からデュエルを申し込まれるなんて」

亨は腰のベルトにセットしてあったデッキを取り出す。

取り出したデッキを見つめながら、亨は言葉を続けた。

「そのデュエル……受けて立つ！」

亨の一言で会場中が熱気に包まれた。

拓夜はただ唖然としながら、目の前の表彰台に立つ葉月と亨を見つめていた。

『西条ォオ！！　貴様ァア！！　このッ、俺とッ、変わッヌォオ！？』

『ハイハ～イ、白石さんの意見は置いといて、西条ちゃんと烏丸選手の合意は得られた！』

結締が熱く語りながら白石を完全に足で押さえ込み、言い放つ。

『予定にはなかったが、只今より！【西条亨】ＶＳ【烏丸葉月】の、エキシビジョンマッチを開始するぜぃ！！』

ワァァァァ……！！！！

「拓夜さん、凄いですよ！葉月さんと亨さんのデュエルですよ！」

「あ、あぁ……」

呆気なとられていた拓夜だったが、直後に一抹の不安がよぎる。

それは以前、成瀬が亨とデュエルをした時の事だ。

拓夜や成瀬は間近で見たのだ。

世界に三枚しか存在しない、デュエルモンスターの神々。
西条亭にしか操る事を許されない、伝説のカード。

「……オベリスク……」

「え……？」

思い立った瞬間、拓夜は葉月の元へと駆け出していた。
その拓夜を追う形として成瀬も走り出す。

「葉月！」

「ッ！？　た、拓夜……！？」

「葉月、気をつけろ！　亭さんは、神のカードを持っている！」

拓夜の発言に葉月は思わず目を見開いた。

神のカード……。

トリティニーグループにより管理され、そのテキストが解読不明な為に世に出回る事がなかった、その存在すら幻とさえ呼ばれていたカード。

「……なら、尚更……面白いじゃないの……！！」

葉月の口端がつり上がる。

「神のカード……？　上等じゃない！　相手にとって、不足はないわ！」

「……葉月」

「相手が神だろうが何だろうが、私は私のデュエルをするだけ……」

葉月は亨に向き直り、宣言する。

「亨さん、魅せてあげるわ！　烏丸葉月の……本気のデュエルを！！」

エキシビジョンマッチの開始が決定され、その準備の為に少しではあるが空き時間ができた。

デュエル大会に出場していた選手達は選手控え席へと移動し、これから始まろうとするデュエルを観戦しようと、観客達と同様に声を張り上げていた。

拓夜に成瀬もこの席に移動し、デュエルフィールドに立つ葉月の姿を見守っていた。

「葉月さん……大丈夫でしょうか？」

先に呟いたのは成瀬だ。

成瀬は直に経験している。

西条亨の操る神のカード、オベリスクの力を……。

その攻撃力は４０００。

生半可なモンスターは返り討ちにあうどころか、まず勝てない。

だが……。

「……大丈夫だ……」

拓夜は成瀬の呟きに答えるように話し出す。

「俺たちはＯＣＧ研究会の人間だ……、けど……俺たちは葉月のデュエルを良く知っている。　花穂も知ってるだろ？　葉月は強い」

「……拓夜さん」

「研究会の先輩である亨さんの強さは……知ってはいるが、俺の中では……葉月が負ける姿なんか想像がつかない」

「……そうですね……、あれ？　そういえば……葉月さんはデュエルフィールドにいるのに、亨さんの姿が見当たらないです」

「ん……？」

拓夜も視線をさまよわせると、確かに亨の姿が見当たらなかった。

これから葉月とのデュエルが始まるのに、一体どこへ行ったのか。

「……亨さん」

デュエルフィールドへと直に続く人気のない通路。

そこには西条亨とマナの姿があった。

二人はいま、向き合う形になって見つめ合っている。

亨の手にはデッキが。

亨はマナを見つめながら、優しく微笑んだ。

「マナ……出番だ。お前の力を貸してくれ」

「……さいじょお」

「烏丸さんは強い。そして彼女は、本気で俺に挑むと言ってきた……なら俺は決闘者として、彼女に本気で応えてあげなくてはならない」

「でも……いいの？　私なんかで？」

不安げな表情を作るマナに、亨は握っていたデッキをマナに向けて差し出した。

「このデッキの枚数は３９枚……最後の１枚は、お前だ。俺のデッキは、お前が入ってこそ初めて完成する……」

「……さいじょお」

「昔も言ったろ？　お前は、俺の最高のパートナーだ」

優しく微笑みかける亨にマナは目をまん丸くし、次第に沈んでいた表情を笑顔に変える。

「そうだね……私とさいじょおは、ずっとずっと……パートナーなんだもんね！」

「ああ」

マナはそう言うと、差し出されたデッキに手を乗せた。

「私も、全力で戦うよ！　さいじょおと一緒に！！」

烏丸葉月は一人デュエルフィールドに立ち、自分のデッキと先ほど手渡されたカードを見つめていた。

（このカード……ホログラフィックレアの『ブラックフェザー・ドラゴン』……）

このカードは未だ自分が持っていないカードだった。

自分が持っていないカードを手に入れる事ができた事には素直に嬉しく思うが、かといってそれが実際に自分のデッキに入るかどうかは考え物である。

（私がブラックフェザーを使うから、このカードが景品になったのかしら？）

確かにこのカードを渡す時に、亨がそんな様な話しをしていたかもしれない。

葉月は少し考えた後、とりあえずそのカードをエクストラデッキに投入した。

「何が起こるか分からないからね……なにせ」

相手はＯＣＧ研究会の西条亨だ。

デュエリストの端くれである自分は、デュエルを始めた当初から彼らが運営するサイトにはお世話になっていた。

自分がデッキを構築するうえで、彼らの考察は大変参考にもなった。

更には彼らがデュエルをする動画では何度観ても、彼らの織り成す熱いデュエルに心躍らされた。

拓夜には言ってはいなかったが、葉月自身はＯＣＧ研究会のファンだった。

最初、拓夜と成瀬の二人がＯＣＧ研究会に入った事を聞いた時、驚いたと同時にショックを受けたが、今は自分をこの大会に誘ってくれた拓夜に感謝していた。

あのＯＣＧ研究会と、デュエルができる！！

今の葉月には、憧れのＯＣＧ研究会とのデュエルが実現した事に、喜びに打ちひしがれていた。

葉月の準備が整い、視線をデッキから外して顔をあげると、一瞬。

そう……一瞬だったが、通路の奥で何かが光ったような気がした。

「……？」

葉月がそちらを見ると、その通路の奥から一人の人影が見えた。

その人物はゆっくりと自分に向かって歩いてくる。

そして、通路の影からその姿を現した人物は……。

長年、自分が憧れていた人物。

ＯＣＧ研究会、そのデュエリストの一人。

そして、今の自分の対戦相手でもある。

「……西条……亨……」

「待たせたな、烏丸さん……」

「ええ、待ちました……ずっと、この時を……ＯＣＧ研究会との、

本気のデュエルを！」

意気込む葉月だがそれに対し、亨は軽く笑みを浮かべてデッキを差し出した。

「あまり熱くなりすぎず冷静に、な？」

「え？……あ、はい！」

顔を赤くし、慌てふためく仕草を見せる葉月。

その姿には会場中の男性達は思わず見とれてしまった。

（葉月のやつ……あんな表情もするんだ……）

緊張しながらも目を輝かせる葉月の表情に、拓夜も思わず見とれてしまっていた。

もちろん、それに気付いた成瀬が嫉妬心から拓夜の足を思い切り踏

みつけた。

「えい！」

「あ痛ッ！？」

そんなこんなしている内に、デュエルフィールドでは亨と葉月は、互いのデッキをシャッフルし終え、それぞれのデュエルテーブルにスタンバイした。

そして、二人の準備が整った所で、実況を勤める結締が声をあげた。

『エブリバディ！！　大変長らくお待たせしました！！　予定には無かったが、テレビ局との打ち合わせも何とか無事に終え、生放送を延長させてお送りしていくぜぃ！！　実況はお馴染み、ＯＣＧ研究会の結締と』

『ＯＣＧ研究会だが、美少女を全力で応援する白石でお送りしてやる……西条、負けブォッ！？』

『余計な一言は無しだぜぃ、白石さん……』

白石の台詞を、結締が見事なボディブローで制止させる。

『あ～、只今よりエキシビジョンマッチ【西条亨】対【烏丸葉月】のデュエルを開始するぜぃ！！』

結締の合図と共に会場中が歓声により爆発した。

大喝采に包まれる中、亨と葉月の二人は互いに手札を五枚揃え、同時に叫んだ。

「「デュエル！！」」

西条　亨

西条亨と烏丸葉月のデュエルが始まった。

亨は挑戦者である葉月に対し、軽く微笑みかけながら話す。

「烏丸さん、先攻は譲るよ」

しかし、亨からの言葉を葉月は首を横に振り答える。

「いえ、折角ですが……私は後攻を選びます。だから先攻は、亨さんからでどうぞ！」

「……フッ、そうか……」

【ＢＦ】シリーズは後攻からのスタートの方が、一気に攻めに入りやすい傾向がある。

先攻をとれば、安全にモンスターを展開できる為、召喚をする上でのアドバンテージが稼げるのだが、葉月は攻めに行く姿勢を見せて

きたと言っても良いだろう。
亨は口元に軽い笑みを浮かべながら、デッキトップに指を添えた。

「ならば、先攻は俺が頂く……俺のターン！」

【先攻】西条　亨　ＬＰ／　８０００
【後攻】烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

デッキからカードをドローした亨は手札を確認する。
その初期手札はこうだった。

【マジシャンズ・ヴァルキリア】
【デブリ・ドラゴン】
【グローアップ・バルブ】
【ワン・フォー・ワン】
【ブラック・マジシャン】
【ディメンション・マジック】

手札１枚１枚をじっくりと見て、その中の１枚に手を伸ばし、プレイを始めた。

「手札の魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！」

【ワン・フォー・ワン】
魔法カード
手札からモンスター１体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル１モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「手札のモンスターカード『グローアップ・バルブ』を墓地へ送り、デッキからレベル１モンスター『チューニング・サポーター』を特殊召喚する！」

【チューニング・サポーター】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ　１００

ＤＥＦ　３００
効果
このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル２モンスターとして扱う事ができる。このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

亨のフィールドに小さな機械のモンスターが出現した。

そして亨は墓地へと送ったモンスターカード『グローアップ・バルブ』を手に取る。

「そして墓地のチューナーモンスター『グローアップ・バルブ』のモンスター効果を発動する！」

【グローアップ・バルブ】
星１／地属性／植物族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１００
チューナー・効果

自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

「デッキトップのカード1枚を墓地へ送り、墓地のこのカードを特殊召喚する！」

「……なかなか優秀な効果ね」

亨の効果説明を聞き、胸が高鳴る葉月。

そして亨は『グローアップ・バルブ』のカードコストとして、デッキの一番上のカードを墓地へと送り、墓地の『グローアップ・バルブ』を特殊召喚した。

「フッ、コストとしてデッキから墓地へと送られたカードは……『ダンディライオン』、よってその効果が発動する！」

「なッ！？」

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
効果
このカードが墓地へと送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

「『ダンディライオン』が墓地に送られた時、自分フィールド上に２体の『綿毛トークン』を守備表示で特殊召喚する！」

更に亨のフィールドに２体のモンスターが並ぶ。

僅か手札消費２枚で、亨のフィールドにはトークンを含め、計４体のモンスターが並んだのだ。

「……凄いです、亨さん……」

「花穂とデュエルをした時は……本気じゃなかったのか？」

観客席で観戦する拓夜に成瀬は思わず呟く。

そして亨は挑戦者である葉月に対し、容赦なくプレイを続けていく。

「いくぞ……レベル１『チューニング・サポーター』に、レベル１『グローアップ・バルブ』をチューニング！」

「レベル２の……シンクロモンスターですって!?」

それぞれ２体のモンスターの星（レベル）が一つになり、新たなシンクロモンスターが姿を表す。

「集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！　シンクロ召喚、希望の力！　シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』！」

【フォーミュラ・シンクロン】
星２／光属性／機械族
ＡＴＫ　２００
ＤＥＦ　１５００
シンクロ／チューナー・効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

緑色に輝く光の柱から、Ｆ１のレースに登場するマシンを胸に装着したロボットが出現した。

「フォーミュラ……シンクロン……！？」

「『フォーミュラ・シンクロン』がシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを１枚ドローする！」

亨はカード効果により、デッキからカードをドローする。

更に……。

「そしてシンクロ素材として墓地へ送られた『チューニング・サポーター』の効果により、デッキからカードをドロー！」

再びデッキからカードをドローする亨。

その手札は再び6枚へと戻っていた。

その様子に葉月は思わず言葉を失った。

それも当然だ。

（まだ亨さんは……通常召喚を行っていない……！！）

そんな葉月の気持ちを見透かすように、亨は更に手札に手を伸ばしていく。

「そして俺は、チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！」

【デブリ・ドラゴン】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　２０００
チューナー・効果
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

亨のフィールドに小型のドラゴンモンスターが召喚され、その効果が発動する。

「『デブリ・ドラゴン』の効果発動！　このカードが召喚に成功した時、墓地の攻撃力５００以下のモンスターを特殊召喚する！　蘇れ、『ダンディライオン』！」

墓地より特殊召喚された『ダンディライオン』。
これで亨のフィールドには5体のモンスターで埋め尽くされた。

「レベル1『綿毛トークン』1体と、レベル3『ダンディライオン』に、レベル4『デブリ・ドラゴン』をチューニング！」

亨の掛け声と共に、それぞれのモンスターが高く跳躍し、その星を一つに交わせる。

「集いし願いが、新たに輝く星となる……、光さす道となれ！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！　飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！」

【スターダスト・ドラゴン】

星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

眩い星屑の粒子を放つ『スターダスト・ドラゴン』が、亨のフィールドに舞い降りた。

葉月だけでなく、観客達も思わずその姿に見とれてしまっていた。

「……綺麗……」

「シンクロ素材として墓地へ送られた『ダンディライオン』の効果により、俺のフィールドに『綿毛トークン』２体が特殊召喚される」

再び２体のトークンが出現し、亨のフィールドは再び５体のモンス

ターが並んだ。

「……」

葉月はただ唖然とし、亨のフィールドを見つめた。

そして同時に感じた。

（……凄い……）

圧倒的なモンスターの展開力。

もしかしたら、先攻を譲ったのは失敗だったかもしれない。

守備表示で3体並ぶ『綿毛トークン』。

攻撃表示で立ちふさがる『フォーミュラ・シンクロン』、そして『スターダスト・ドラゴン』。

西条亨の主力モンスターの内、その一体が1ターン目から現れたのだ。

その事に興奮していると、亨から声をかけられた。

「……烏丸さん」

「あ、は、はい！」

「見とれているのは良いが、気を抜くなよ？」

「と、当然！」

葉月のどこか慌てた返事にクスリと笑みを浮かべ、亨は手札のカードに手を伸ばした。

「フッ……、リバースカードを1枚セットし、ターンエンド」

亨のターンが終了し、葉月のターンへと移行する。

会場中はヒートアップした観客達やその声で埋め尽くされ、凄まじ

い熱気に包まれていた。

「亨さん、凄いです！　デッキをまるで、自分の手足のように操っているみたいです！」

「あれが……『スターダスト・ドラゴン』……」

『西条ちゃん、初手からいきなり飛ばしてキター！！』

『ふぅん……西条のヤツめ……。美少女よ、俺はお前を応援するぞ！！　西条のヤツなんぞ、蹴散らしてしまえ！！』

大歓声に包まれながら、葉月は自分のプレイを開始した。

「私のターン、ドロー！」

カードをドローする葉月は、手札の1枚のカードを掴み取る。

「いくわよ、私のフェザーたち！！」

「……来い、烏丸さん」

そして葉月は、掴み取ったカードをデュエルテーブルに叩きつけた。

「相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、手札の『ＢＦ－暁のシロッコ』は、リリースなしで召喚する事ができる！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００
効果
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力

の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

葉月のフィールドにシロッコが召喚された。

だがこれで終わる葉月ではない。

【ＢＦ】のモンスターの展開力はトップクラスなのだ。

「そして手札の『ＢＦ－黒槍のブラスト』は、自分フィールドにこのカード以外の【ＢＦ】が存在する時、手札から特殊召喚する事ができる！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦

闘ダメージを与える。

更に葉月のフィールドに【ＢＦ】が現れる。

（『綿毛トークン』の攻・守は０……いつでも破壊できる……。』フォーミュラ・シンクロン』は、シンクロチューナーとか言っていたわね……、攻撃力５００のモンスターを攻撃表示で残しておくって事は、攻撃をわざと誘っているという事なのかしら？）

亨のフィールドを観察しながら、葉月は自分なりの戦略を組み立てていく。

（初手に『黒い旋風』がないのが痛いケド……、どうする？　今の私の手札には、特殊召喚できるモンスターはゲイルしかいない……）

ゲイルを特殊召喚すれば、葉月は３枚の手札を消費する事になる。

もしそれで亨を圧倒できるのであれば、何ら問題はないのだが、亨

から放たれるプレッシャーが、葉月のプレイングにノイズを走らせる。

（『フォーミュラ・シンクロン』の攻撃力は５００……、『スターダスト・ドラゴン』の攻撃力は２５００……）

『ＢＦ－疾風のゲイル』は相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半減させる効果を持つ。

仮にその効果を『スターダスト・ドラゴン』に対し使用すれば、攻撃力は２５００から１２５０にまでダウンする。

その数値ならば、攻撃力が１３００の疾風のゲイルでも充分に対処する事ができる。

そうなれば、シロッコ・ブラスト・ゲイルの3体の攻撃で、亨の展開するモンスターの半分以上を破壊する事ができる。

葉月の手は決まった。

「手札の疾風のゲイルは、自分フィールド上にこのカード以外の【ＢＦ】が存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　８００
チューナー・効果
このカードは、自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のつくモンスターが表側表示で存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、フィールド上のモンスター１体の攻撃力と守備力を半分にする事ができる。

葉月のフィールドに並ぶ３体の【ＢＦ】。

「疾風のゲイル……か」

葉月のモンスターを見て呟く亨。

葉月は自分の戦術を繰り出そうと、そのプレイを開始していった。

「いくわよ！『ＢＦ－疾風のゲイル』の効果発動！　相手モンスター1体の攻撃力・守備力を半分にする！　対象は、『スターダスト・ドラゴン』！」

疾風のゲイルが大きく羽ばたき、黒い突風をスターダストに浴びせる。

『おおっと！これで西条ちゃんの『スターダスト・ドラゴン』のステータスは、半分になってしまったぞォオ！？』

『ふぅん……、疾風のゲイル……、相変わらずの反則クラスの効果だ……』

会場中が盛り上がる中、亨は葉月に対して不敵な笑みを浮かべる。

「フッ、読んでいたよ」

「えっ……！？」

その一言に思わず目を見開く葉月は、亨の場に伏せられた1枚のリバースカードに視線を向ける。

（まさか……、私のモンスター効果に対しての……罠を……！？）

「いいや……俺はこの瞬間、『フォーミュラ・シンクロン』のモンスター効果を発動させる」

「えっ……！？」

リバースカードではない！？

予想が外れた事もそうだったが、相手ターンにもチェーンを組む形で効果を発動できる『フォーミュラ・シンクロン』に対し、葉月は思わず唖然となる。

（一体……どんな効果を……？）

「『フォーミュラ・シンクロン』は相手ターンのメインフェイズ時、自分フィールド上に存在するこのカードをシンクロ素材として、シンクロ召喚をする事ができる」

「……そんなッ！？」

そう言うと亨は、自分フィールドの『フォーミュラ・シンクロン』と『スターダスト・ドラゴン』に手を翳し、言葉を紡いだ。

「さぁ……いくぞ、アクセルシンクロ！！」

その瞬間、疾風のゲイルの効果を避けた『スターダスト・ドラゴン』と『フォーミュラ・シンクロン』が、眩い光に包まれた。

「レベル８『スターダスト・ドラゴン』に、レベル２『フォーミュラ・シンクロン』をチューニング！」

相手ターンにシンクロ召喚を行うその行為に、デュエルを観戦していた拓夜に成瀬はただただ、その成り行きを見つめる事しかできなかった。

「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く……光さす道となれ！！」

カッ……！！

「アクセルシンクロ！　生来せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】
星１０／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３３００
ＤＥＦ　２５００
シンクロ／効果
シンクロモンスターのチューナー１体＋「スターダスト・ドラゴン」以下の効果をそれぞれ１ターンに１度ずつ使用できる。
●自分のデッキの上からカードを５枚めくる。このターンこのカードはその中のチューナーの数まで１度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。
●フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。

●相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

眩い光の中から、新たな境地に達したスターダストもとい、1体のモンスターが亨のフィールドに生来した。

「シューティング・スター……ドラゴン……!?」

自分にとって未知のモンスターを召喚され、動揺する葉月。

疾風のゲイルの効果は避けられてしまった。

更に『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃力は3300。

その攻撃力に対抗するには……。

『西条め……、アクセルシンクロだと……!?』

『それだけ西条ちゃんも本気だって証拠だぜぃ!!』

葉月は思考をフルに回転させる。

『シューティング・スター・ドラゴン』は『スターダスト・ドラゴン』との関係が強いと思われるカード。

ならば、カード効果破壊に対する耐性があるとみて間違いない。

暁のシロッコのモンスター効果を使用すれば、『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃力を超えられるが、あのリバースカードが気がかりだ。

ならば……。

「……私の……とるべき行動は１つ！」

葉月の次の手が決まった。

葉月は亨のモンスターに対抗するべく、そのプレイを開始する。

「亨さんがシンクロでくるなら、私もシンクロモンスターで勝負を

かけるわ！！」

「……」

「レベル５『ＢＦ－暁のシロッコ』に、レベル３『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング！」

葉月の掛け声と共に、それぞれのモンスターが宙に舞う。

「大いなる闇の力、その力を解放し、かの者を終焉へ導け！」

カッ……！！

「シンクロ召喚！いでよ、『ダークエンド・ドラゴン』！！」

【ダークエンド・ドラゴン】
星８／闇属性／ドラゴン族

ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　２１００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
１ターンに１度、このカードの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

葉月のフィールドに現れし『ダークエンド・ドラゴン』。

葉月は優先権により、早速その効果を発動させる。

「ダークエンドのモンスター効果！１ターンに１度、攻・守を５００ポイントダウンし、相手モンスター１体を墓地へと送る！　対象は……『シューティング・スター・ドラゴン』！」

【ダークエンド・ドラゴン】
ＡＴＫ　２６００　↓　２１００
ＤＥＦ　２１００　↓　１６００
（【ダークエンド・ドラゴン】効果）

「ダークエンドの効果は、破壊ではなく墓地へ送る効果！　いくら破壊耐性があったって……！！」

言葉の端に懇願するかのような雰囲気を漂わせる葉月。

そしてダークエンドの効果は、亨のシューティング・スターに見事炸裂した。

ズゴゥ！！

「フッ、やるじゃないか……烏丸さん」

（『シューティング・スター・ドラゴン』の弱点を見事に突いてきた……。烏丸葉月……やはりこの子は強い）

ダークエンドの放つ漆黒の炎に包まれ、シューティング・スターはフィールドからその姿を消した。

「……やった！」

効果の成功に喜びを露わにする葉月は、フィールドの状況を再確認する。

亨のフィールドには『綿毛トークン』が3体守備表示で存在し、その背後には伏せカードが1枚。

それに対して自分は『ＢＦ－黒槍のブラスト』と『ダークエンド・ドラゴン』が。

「いくわよ、バトルフェイズ！！」

葉月がバトルフェイズへと突入し、亨に対して総攻撃をかける。

「まずは黒槍のブラスト！　『綿毛トークン』１体を攻撃！」

葉月の攻撃宣言により、黒槍のブラストがトークンに襲いかかる。

そして、攻守０のトークンはあっさり戦闘破壊された。

西条　亨　ＬＰ／　８０００　→　６３００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

「黒槍のブラストは守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ戦闘ダメージを与えるわ！」

先制ダメージを与え得意になった葉月は、続けてダークエンドに攻撃の指示を出した。

「次ッ！　ダークエンドで同じく、トークンを攻撃！」

ダークエンドの攻撃により消滅するトークン。

亨のフィールドに『綿毛トークン』は残り1体となってしまった。

「私はこのまま、ターンを終了するわ！」

葉月がターンを終了し、亨のターンへと移行する。

『おおっと！　先制ダメージを与えたのは、なんと烏丸選手だったァア！』

『ふぅん……、流石だ美少女よ……それでこそ、俺の嫁にふさわしい』

白石が何やら危ない発言をしているが、会場の人達はあえてスルーしていた。

「流石……葉月さんです。亨さんのシンクロモンスターを、ああも簡単に……」

「……」

成瀬の隣に座る拓夜は黙って二人のデュエルを見ていた。
その頬からは、一粒の汗が光っていた。

（……葉月……亨さん……）

視点は亨に移り、亨はデッキからカードをドローし、プレイを始めていく。

「俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを手札に加え、亨は口元にうっすらとした笑みを浮かべる。

「さぁ……反撃の狼煙をあげようか」

「ッ！？」

「手札より魔法発動！　『貪欲な壺』！」

【貪欲な壺】
魔法カード
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「墓地に眠る5体のモンスターをデッキに戻し、シャッフル……」

※【墓地からデッキへと戻したモンスター】
？『シューティング・スター・ドラゴン』
？『スターダスト・ドラゴン』
？『フォーミュラ・シンクロン』
？『デブリ・ドラゴン』
？『ダンディライオン』

「そしてデッキから、カードを2枚ドロー！」

カードを2枚ドローした亨。

そのカードを確認すると、亨の表情（かお）にある変化が訪れた。

それは……。

彼の右目の瞳の色が、青く澄んだ瞳の色へと変色し、輝いていたのだ。

「……いくぞ、お前たち」

その一言と共に、亨の反撃が始まった。

亨は再び手札に手を伸ばし、カードを発動させていく。

「更に手札の魔法カード、『洗脳ーブレインコントロール』を発動！」

【洗脳ーブレインコントロール】
魔法カード

８００ライフポイントを払い、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターのコントロールを得る。

西条　亨　ＬＰ／　６３００　↓　５５００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

「ブレインコントロールですって!?」

「頂くぜ……烏丸さんの、ダークエンドをな!」

ダークエンドは魔法効果により、西条のフィールドへと移動する。

葉月は悔しそうな表情を浮かべながら、ただ見ていることしかできなかった。

「烏丸さん……俺は遠慮なく、ダークエンドの効果を使わせてもらうぜ」

「……くっ、しまった……！！」

「ダークエンドの効果発動！　攻・守を５００ポイント下げ、黒槍のブラストを墓地へと送る！」

【ダークエンド・ドラゴン】
ＡＴＫ　２１００　↓　１６００
ＤＥＦ　１６００　↓　１１００
（【ダークエンド・ドラゴン】効果）

ダークエンドの効果により黒槍のブラストが消滅し、葉月のフィールドにはカードが１枚もなくなってしまった。

がら空きの相手フィールド。

もちろんそのチャンスを亨が逃すはずがない。

「俺は、『ダークエンド・ドラゴン』をリリースし……！」

葉月のダークエンドが渦に包まれる。
そして、亨のフィールドに彼の主力モンスターの2体目がその姿を現した。

「現れよ、『ブラック・マジシャン・ガール』！！」

【ブラック・マジシャン・ガール】
星６／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　１７００
効果
自分と相手の墓地にある「ブラック・マジシャン」と「マジシャン・オブ・ブラックカオス」の数だけ、攻撃力が３００ポイントアップする。

『ここでキターーーッ！！　西条ちゃんの『ブラック・マジシャン・ガール』！！』

亨のフィールドに現れたマジシャン・ガール。

その姿を見て、拓夜に成瀬は思わず声をあげる。

「えッ！？　あれって……まさか！？」

「ま……マナさん……！？」

会場が盛り上がりを見せる中、亨はバトルフェイズへと突入していく。

「バトル！　マジシャン・ガールで、烏丸さんにダイレクトアタック！　ブラック・バーニング！！」

亨の攻撃宣言と共に、マジシャン・ガールは葉月にダイレクトアタックを決めた。

それにより葉月のライフは大幅にダウンする。

西条　亨　ＬＰ／　５５００

烏丸葉月　ＬＰ／　８０００　→　６０００

「きゃッ！？」

葉月のライフが亨とほぼ並ぶ。

亨はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ２へと移行し、手札の１枚のカードを掴みあげる。

「リバースカードを１枚セット、ターンエンド」

「くっ……、あれが亨さんの……『ブラック・マジシャン・ガール』……」

葉月は亨のフィールドに立つマジシャン・ガールを見据える。

そして同時に思う。

（……残すは、１体……）

ＯＣＧ研究会の人間が扱うデッキは、テーマデッキが多い。
これは彼らが運営するサイトに、彼らが使うデッキの紹介をしているが為に知っている事だ。

白石直也は、『青眼の白龍』に『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を主軸としたドラゴンデッキ。

結締智恭は、『Ｅ－ＨＥＲＯ』を主軸とした融合デッキ。

そして西条亨は、シンクロ召喚と魔法使い族モンスターを混合させた、クセの強い独特なデッキ。

そのデッキの中の代表とも言える3体の……。

彼の主力カードは、『スターダスト・ドラゴン』、『ブラック・マジシャン・ガール』、そして……。

（……『ブラック・マジシャン・ガール』は、墓地にとあるカードがなければ、特に効果を持たない低ステータスのモンスター。私の手札には、あれを倒す手段はいくらでもある！！）

葉月は攻める気持ちを奮い立たせて自分のターンを開始していく。

「私のターン、ドロー！　チューナーモンスター、『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚！」

【ＢＦ－極北のブリザード】
星２／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　　０
チューナー・効果
このカードは特殊召喚できない。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「極北のブリザードのモンスター効果！　召喚に成功した時、自分の墓地から、レベル４以下の【ＢＦ】１体を守備表示で特殊召喚する事ができる！　来なさい、黒槍のブラスト！」

葉月のフィールドに2体のモンスターが並ぶ。

「レベル4『BF－黒槍のブラスト』に、レベル2『BF－極北のブリザード』をチューニング！」

4＋2＝6

葉月のフィールドにレベル6のシンクロモンスターが召喚された。

「シンクロ召喚、蹂躙せよ！　『ゴヨウ・ガーディアン』！！」

【ゴヨウ・ガーディアン】
星6／地属性／戦士族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２０００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、そのモンスターを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

葉月のフィールドに凶悪と名高い『ゴヨウ・ガーディアン』が現れた。

「いくわよ、バトルフェイズ！！」

葉月がバトルフェイズへと突入し、『ゴヨウ・ガーディアン』に指示を出す。

「『ゴヨウ・ガーディアン』で、『ブラック・マジシャン・ガール』に攻撃よ！！」

『ゴヨウ・ガーディアン』がマジシャン・ガールに向けて、手にした武器を投げつけた。

（さいじょおっ！！）

「ああ……、ならば俺は、リバースカードオープン！　『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！」

【聖なるバリアー ミラーフォース ー】
罠カード
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する。

亨は最初のターンに伏せてあった1枚のリバースカード、ミラーフォースを発動させた。

その効果により『ゴヨウ・ガーディアン』の攻撃は、マジシャン・ガールに届くことなく破壊された。

「そ、そんな……！？」

再び自分の場ががら空きになってしまった葉月は、愕然となる気持ちを何とか堪えて前を見る。

亨のフィールドに並ぶ『ブラック・マジシャン・ガール』と、守備表示の『綿毛トークン』。

そして1枚のリバースカード。

（くっ……、私のモンスターが……ことごとく……）

このままターンを終えてしまっては次のターン、自分のがら空きの場に攻め入られてしまう。

ダイレクトアタックは2度目は絶対許さない。

「リバースカードを1枚セットして、ターン終了！」

「俺のターン、ドロー！」

葉月のターンが終了し、亨はすぐさま自分のターンを開始する。

それは勢いに乗った今の流れを更に増す為の、葉月に対して更なるプレッシャーを与える為の亨なりの戦術であった。

「バトル！　いくぞ、マジシャン・ガール！　烏丸さんにダイレクトアタック！」

亨のマジシャン・ガールは、手にした杖の矛先を再び葉月に向ける。

このままでは再びダイレクトアタックが決まってしまう。

「そうはさせないわ！！　速攻魔法発動、『スケープ・ゴート』！！」

【スケープ・ゴート】
速攻魔法
このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。自分フィールド上に「羊トークン」（獣族・地・星１・攻／守０）４体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

ポポポポンッ！！

葉月のフィールドに４体の『羊トークン』が守備表示で並ぶ。

「『スケープ・ゴート』か……」

（モンスターの召喚に反応する罠かと思いこのターン、モンスターを召喚しなかった事が裏目に出たか……）

予測は外れはしたが、このターン亨が攻撃する事には変わりない。

「マジシャン・ガール！　『羊トークン』に攻撃だ！」

マジシャン・ガールの攻撃が『羊トークン』に炸裂し、その数を３体に減らす。

バトルフェイズを終了した亨は手札の中から１枚のカードを取り出した。

「リバースカードを1枚セットし、ターンエンド」

亭のフィールドに伏せられた2枚のリバースカード。

そして立ちはだかる『綿毛トークン』と『ブラック・マジシャン・ガール』。

対する葉月のフィールドには、3体の『羊トークン』のみ。

ここで一歩でも戦術を誤れば、下手をすれば一気に窮地に立たされてしまうかもしれない。

息が詰まりそうな状況下で、葉月は自分なりの打開策を練り上げていた。

『西条ちゃんの場には、リバースカードが2枚……、明らかに烏丸選手に対して罠を仕掛けてますね。白石さん、烏丸選手はどう立ち回ってくれるでしょうか？』

『俺は常に美少女の味方だ！　しかし……おのれ西条め……、あんなあからさまな罠を仕掛けられては、美少女にくる心理的プレッシャーは相当なものだぞ……！！　アレをどうにかする為のカードを、美少女が引き当てる事ができるかどうかが、勝敗を分かつ鍵となり

そうだ……！！』

控え席にてデュエルを観戦している成瀬は、両手を握り合わせてハラハラしながら眺めていた。

「葉月さん……大丈夫でしょうか……」

「……」

隣に座る拓夜は、先程の亨の行ったプレイを考えていた。

あの時、亨は葉月の『ゴヨウ・ガーディアン』に対し、『聖なるバリアーミラーフォースー』で対抗した。

あのカードは、亨が最初のターンに伏せていたカードだ。

更に言えば、『ゴヨウ・ガーディアン』が攻撃する前のターンに、亨は葉月から『ダークエンド・ドラゴン』と『ＢＦ－黒槍のブラスト』の２体からの攻撃を受けていた。

なぜ、その時に『聖なるバリアーミラーフォースー』を発動しなか

ったのか？

逆を言えば、その時に『聖なるバリアーミラーフォース―』を発動していれば、今のゲーム展開は作れていない。

下手をすれば、『ダークエンド・ドラゴン』や『ＢＦ―黒槍のブラスト』を破壊していれば、次のターンに『ゴヨウ・ガーディアン』によってモンスターコントロールを奪われていたかもしれない。

（……凄い……）

拓夜はそう思うと同時に、自分の中に悔しさが込み上げてくるのを感じる。

あの二人のデュエルが始まる時、自分は何と言っただろうか？

葉月が負ける姿が想像できない。

だが実際にデュエルが始まった今、その葉月はどうだろうか？

明らかに亨に圧されているではないか。

拓夜が不安に感じる中、葉月は自分のターンを開始していった。

「くっ……わ、私のターン……」

現在、葉月の手札は2枚。

【ダーク・バースト】
【BF－大旆のヴァーユ】

亨の場にはリバースカードが2枚。

あの中には、恐らくモンスター破壊効果を含むカードが入っているに違いない。

だけど、それらのカードを破壊する事ができるカードを引く事ができたら？

葉月はそのカードを引き当てる事を願い、デッキトップに添える指に力を込めて、カードをドローした。

「私のターン……、ドロー！！」

力強くドローした葉月は、そのカードを確認する。

そのカードを確認した葉月の目は一筋の輝きを放っていた。

「……来た！！」

（ッ！？　……何か引き当てたのか……！？）

亨は葉月の表情の変化を見逃す事なく、表情を引き締めて葉月の出方を伺う。

「いくわよ！！　手札の魔法カード『大嵐』を発動！！」

【大嵐】
魔法カード
フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。

葉月が引き当てたカードは『大嵐』だった。

『大嵐』はフィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する制限カード。

現在の状況では葉月のフィールドには魔法・罠カードはなく、亨のフィールドにのみ魔法・罠カードが存在する。

となれば、亨のカードのみ一方的に破壊できる事になる。

「このカード効果で、亨さんのリバースカードを全て破壊するわ！！」

ソリッドヴィジョンではあるが、デュエルフィールドに凄まじい勢いで暴風が巻き起こる。

それは、今の葉月の勝ちたいという気持ちを具現化しているようでもあった。

その葉月の『大嵐』が、うねりをあげて亨に目掛けて襲い掛かる。

ズゴゥッッ！！

「……リバースカード、オープン」

「……えっ！？」

『大嵐』が亨を巻き込もうとしたその瞬間、亨は2枚セットされたリバースカードの内、その1枚を発動させた。

「煌めけ、『スターライト・ロード』！！」

【スターライト・ロード】
罠カード
自分フィールド上に存在するカードを2枚以上破壊する効果が発動した時に発動する事ができる。その効果を無効にし破壊する。その後、「スターダスト・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

亨のフィールドに光輝く粒子が溢れ出し、葉月の『大嵐』の効果を打ち消した。

「そんな……ッ、私の……『大嵐』が……！？」

「『スターライト・ロード』は、複数のカードを同時破壊する効果を無効にし、破壊する」

葉月の『大嵐』は失敗した。

だが、亨のフィールドにはまだ光の粒子が奔流し続けており、その勢いを増している。

「『スターライト・ロード』の効果は、それだけじゃない」

「スターライト……！？　ま、まさか！？」

葉月が驚愕の表情で亨のフィールドを見つめる。

彼のフィールドに奔流する粒子が集まり、ある1体のモンスターの輪郭を作り上げているのだ。

「カードを無効にし、破壊した後……エクストラデッキから『スターダスト・ドラゴン』1体を特殊召喚する事ができる！　飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！！」

亨のフィールドに再び姿を現した『スターダスト・ドラゴン』。

自分が一つのプレイを行う度に、亨はどんどんモンスターを展開してくる。

「くっ……、でも……！！」

だが、葉月にはまだ手は残されている。

葉月は次に繋げる為に、残された2枚の手札の内、1枚を掴み取り、発動した。

「まだよ！　更に手札から、魔法カード『ダーク・バースト』を発動！！」

【ダーク・バースト】
魔法カード
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を手札に加える。

「この効果で、墓地から闇属性で攻撃力１５００以下のモンスター、『ＢＦ－極北のブリザード』を手札に加える！　そして手札に加えた、極北のブリザードを召喚！！」

葉月がチューナーモンスター『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚した。

そして、極北のブリザードは自身のモンスター効果を発動させる。

「極北のブリザードの効果発動！！　墓地からレベル４以下の【ＢＦ】１体を、守備表示で特殊召喚する事ができる！　来なさい、黒槍のブラスト！！」

再び現れる黒槍のブラスト。

葉月のフィールドには、一気に5体のモンスターで埋めつくされたのだ。

「いくわよ！！　レベル1『羊トークン』3体と、レベル4『BF－黒槍のブラスト』に、レベル2『BF－極北のブリザード』をチューニング！！」

1＋1＋1＋4＋2＝9

「シンクロ召喚！！　忘却の彼方へ、『氷結界の龍　トリシューラ』！！」

【氷結界の龍　トリシューラ】
星9／水属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２７００
ＤＥＦ　２０００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター2体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド

上・墓地のカードをそれぞれ1枚までゲームから除外する事ができる。

葉月のフィールドに三つ首の龍、トリシューラが召喚された。

「トリシューラだとッ!?」

「トリシューラの効果発動!! このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ1枚までゲームから除外する事ができる!!」

トリシューラの三つ首、それぞれの目から鋭い眼光が発せられる。

『ふぅん……トリシューラか、その効果は相手の全てを消し去ると言っても過言ではない……』

トリシューラは相手の『手札』・『フィールド』・『墓地』のカードを1枚ずつ除外する効果を持つ。

デュエリストにとって、『手札』とは未来を意味し、『フィールド』とは現在を意味し、『墓地』とは過去を意味する。

それら全てを蝕むその効果は正に白石の言う通り、相手の全てを消し去ると言っても過言ではない。

トリシューラが効果を発動する瞬間、亨の選択は余儀なくされた。

彼がとるべき行動とは……！？

「・・・・・そう簡単にはやらせない」

「……え……っ！？」

トリシューラの効果が直撃する瞬間、亨はその効果にチェーンし、

1枚のリバースカードに手を伸ばした。

「確かにトリシューラの効果は強力だ。　だが、俺には信ずる仲間がいる！　仲間との絆がある！　今それを見せてやる！　リバースカードオープン、『ディメンション・マジック』！！」

【ディメンション・マジック】
速攻魔法
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。その後、フィールド上のモンスター1体を破壊する事ができる。

亨のフィールド最後の『綿毛トークン』が渦に包まれてその姿を消した。

そして手札から、一枚のカードを取り出し……。

「『ディメンション・マジック』は、自分の場にマジシャンが存在する時、モンスター1体をリリースして、手札から新たな魔法使い

族モンスターを特殊召喚する事ができる！」

「『ディメンション・マジック』……新たな魔法使い！？　そんな……そのカードは……っ、まさか！？」

『綿毛トークン』を媒体とし、西条亨のフィールドに彼の信ずるエースモンスターがその姿を現した。

「いでよ、我が最強たるしもべ！！　最上級魔術師『ブラック・マジシャン』！！」

【ブラック・マジシャン】
星７／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２１００

『遂に並んだァア！！　西条ちゃんのエースモンスター！！　『ブラック・マジシャン』に『ブラック・マジシャン・ガール』、そして『スターダスト・ドラゴン』！！』

「凄いです。あれが……亨さんの、エースモンスターたち……」

「……ブラック……マジシャン……」

『ブラック・マジシャン』の登場により、会場内の観客達のテンションが最高潮と言わんばかりに白熱する。

そして亨は、『ディメンション・マジック』のもう一つの効果を発動した。

「『ディメンション・マジック』……それは、魔術師弟の連携攻撃により、どんなモンスターでも確実に破壊する事ができる！！」

「ぁ……ぁぁ……」

「破壊しろ……トリシューラを」

『ブラック・マジシャン』。そして『ブラック・マジシャン・ガール』の二人が互いに杖を合わせて、連携魔術を解き放った。

その一撃は葉月のトリシューラを捉え、トリシューラは爆発と轟音と共に姿を消した。

トリシューラは破壊された。

しかし、トリシューラの放つ効果は残っている。

亨の未来（手札）・現実（フィールド）・過去（墓地）に、トリシューラの力が襲い掛かる。

「……くっ、私は……亨さんのフィールドから『スターダスト・ドラゴン』、手札は残った一枚、そして墓地からは『チューニング・サポーター』を除外するわ……！！」

トリシューラを破壊された葉月のフィールドには、何も残されていなかった。

亨のフィールド・手札・墓地から、カードを除外する事には成功したが、今ではそんな事も大した意味を成さなくなってしまっていた。

手札もヴァーユの1枚のみ。

このターン、葉月は既に通常召喚を行ってしまっていた為に、手札

のヴァーユを壁として出す事もできない。
このターン、葉月に残された行動はただ一つ。

「……私は……ターン……終了……」

それは、自分のターンの終了宣言をする事だけであった。

「……俺のターン、ドロー！」

亨は自分のターンを開始し、デッキからカードをドローする。
そして……。

「『魔導戦士　ブレイカー』を召喚！」

【魔導戦士　ブレイカー】

星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１６００
ＤＥＦ　１０００
効果
このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを１個乗せる（最大１個まで）。このカードに乗っている魔力カウンター１個につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。また、魔力カウンターを１個取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する。

亨のフィールドに魔導師の戦士が召喚される。
彼のフィールドに並ぶ魔術師達。

・【ブラック・マジシャン】
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２１００

・【ブラック・マジシャン・ガール】
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　１７００

・【魔導戦士　ブレイカー】
ＡＴＫ　１６００　↓　１９００
ＤＥＦ　１０００

（魔力カウンター×１）

西条　亨　ＬＰ／　５５００
烏丸葉月　ＬＰ／　６０００

勝敗は決した。
亨はバトルフェイズへと突入し、葉月に対し攻撃宣言を行う。

「バトル！　『魔導戦士　ブレイカー』で、ダイレクトアタック！」

「きゃっ！？」

西条　亨　ＬＰ／　５５００
烏丸葉月　ＬＰ／　６０００　→　４１００

「『ブラック・マジシャン・ガール』！　ダイレクトアタックだ！
ブラック・バーニング！」

「きゃあっ！？」

西条　亨　ＬＰ／　５５００
烏丸葉月　ＬＰ／　４１００　→　２１００

「これで決める！　いくぜ、『ブラック・マジシャン』の攻撃……。
黒・魔・導（ブラック・マジック）！！」

魔術による黒い雷が葉月を襲う。

葉月の力は西条亨には届かず……。

葉月の【ＢＦ】はその翼で大空を羽ばたく事ができず……。

葉月の挑戦は、敗北の結果に終わってしまった。

西条　亨　ＬＰ／　５５００

烏丸葉月　ＬＰ／　２１００　→　０

「……」

拓夜は唖然と観ていた。

烏丸葉月が負けた？

拓夜の中での強いデュエリストは、身近な存在である葉月がそれに当てはまっていた。

自分も今ではＯＣＧ研究会の人間だが、なったのはつい最近の事。

彼等ともデュエルをしたこともあったし、彼等とのデュエルで自分や成瀬は負けはしたが、それでも……。

……葉月が負けるとは思ってなかった。

「……なんだよ……」

「……拓夜さん？」

「一体……なんだよ……あの人達……」

ＯＣＧ研究会……。

今回、亨は神のカードを使ってこなかった。

それどころか、葉月をことごとく翻弄し、華麗に勝利を納めてしまった。

今の自分の実力では、成瀬にも葉月にも、下手をすればＯＣＧ研究会の中で一番弱いのではないか？

拓夜の中に悔しさがマグマの如く込み上げてくる。

「ＯＣＧ研究会……」

「拓夜さん……」

自分はＯＣＧ研究会の人間だ。

だが今の自分には、そんな枠組みなんて関係ない。

見つけた……。

自分が倒すべき相手……。

いつか言ったあの言葉。

『一番になる』

いま、その方法が見つかった。

あの人達に勝ってこそ、デュエルで勝ってこそ……。

俺はデュエリストとして、一番になれる！

「負けない……」

「……え？」

「……次は負けない……、あの人達にも……自分自身にも……」

この瞬間、西条拓夜はデュエリストとしての明確な目標を手に入れる事ができた。

この大会で拓夜が得られたことは、優勝なんかよりも彼にとって必要な気持ちであった。

西条　亨　（後書き）

拓夜・・・一応主人公なのに・・・

なんか空気？

そんな事はない！！

今後は拓夜がきっと活躍するはず！！

今度からあとがきに、その話に登場したデッキのレシピを載せようかな？

皆様のご意見、感想、お待ちしております。

福引から始まる物語（前書き）

前回の話『西条亨』のデュエルの感想に、トリシューラの効果処理についての指摘がありました。

スイマセン（汗

いつもなら執筆時に『遊戯王Ｗｉｋｉ』を読んで確認してから執筆していたのですが、今回に限りそれを怠っておりました。

まだ修正できておりませんが、話の流れは葉月の敗北という形で進めていきます。

なお、デュエル内容に関しては、修正が完了しだいアップさせて頂きます。

まだまだ未熟な身ですが、そういったご意見を聞かせて頂けて、本道に嬉しく思います。

これからも宜しくお願いします。

福引から始まる物語

西条拓夜は夕日色に染まる東区の商店街を歩いていた。

その隣には拓夜の彼女である成瀬花穂も一緒に歩いている。

二人は本日の授業を終え、寄り道しがてら一緒に帰宅している途中であった。

成瀬の手には、紙袋が下げられている。

その中身は化粧品。

これは拓夜が成瀬の買い物に付き合い、彼女が欲しいと言っていた化粧品が入っている。

遡ること数分前……。

普段、化粧品売り場に赴く事がない拓夜にとって、そこでは驚かされる事ばかりであった。

女性特有の華やかな香りに、見慣れない小道具。

店内での成瀬は乙女の顔で商品を漁っており、拓夜は一人置いてけぼりをくらっていた。

適当に視線をさまよわせ、一つの商品を手に取り値段を確かめると

「……にせんえん……」

高い。

女性とは一つの化粧品にこうもお金をつぎ込んでいるのかと思うと、とても自分には真似できないと思った。

とりあえず自分はリップクリームとボディスプレーを購入し、後は成瀬の品定めに付き合う事になった。

「拓夜さん、見て下さい！これを付けると私、どうですか？」

成瀬の手には『スプリングハート　アイラッシュ』と書かれているハート型の小さな化粧品が乗せられていた。

どうやら『つけまつげ』らしい。

「へぇ……、つけまつげってこんな形してるんだ」

「はい！私、顔の割に目がちっちゃいので……もうちょっと目を大きく見せたいなと思って……」

成瀬の顔と手に乗せたつけまつげを交互に見る拓夜。

小さく愛らしい目も可愛いのだが、これを付けた成瀬の姿も見てみたい気がする。

いや、見たい！！

拓夜は自分の中から溢れ出す押さえきれない欲情のままに、成瀬からつけまつげを取りあげる。

「これを付けた花穂を見たいから、これは俺からプレゼントさせてくれないか？」

「え、いいんですか！？」

まさか拓夜から買ってもらえるとは思ってなかった為、成瀬は驚きながらも笑顔を作った。

「ありがとうございます！拓夜さん！」

そんなこんなで現在、拓夜の隣で歩く成瀬の顔は朗らかな笑顔である。

「本当にありがとうございます、拓夜さん！」

「いいって、俺も花穂のオシャレしてる姿は見たいしな」

無自覚なバカップル振りを周囲に振りまきながら歩いていると、拓夜の耳にとある声が聞こえてきた。

「らっしゃい、らっしゃーい！福引きの抽選会場はこっちだよー！」

聞こえてきたのは東区の商店街が催す福引きの客寄せの声だった。

この福引きはつい最近、東区商店街の経済効果を高める為に行われているものだ。

東区商店街の店で買い物をした客には、千円につき一枚の福引き券が貰える様になっている。

先ほど拓夜は、成瀬の為に値段が千円近くするつけまつげを購入した。

彼の制服のポケットには、その時購入した際に貰えた福引き券が一枚入っていた。

拓夜はポケットから一枚の福引き券を取り出してみる。

「あ、拓夜さん……、それって？」

「ああ、さっきの買い物の時に貰えた福引き券さ。場所はすぐ近くみたいだし……やってみようぜ？」

「そうですね、行きましょう！」

二人は手を繋いで、早速その福引きの会場にまで足を運ぶ事にした。

場所は本当にすぐ近くだった。

むしろ一目瞭然だった。

現在二人の前には、福引きの順番を待つ大勢の人が並んでいたのだ。

二人は一緒に並び、順番を待つ事にする。

その間、景品がどの様な物が揃えられているのか、拓夜に成瀬は頭を動かして会場テントに張り出されたそれを確認する。

「一等……一等は……？」

「一等……あ、凄いですよ！一泊二日宿泊付きで、更に富士急ハイランドの招待券みたいです！」

「す、凄い……のか？どうせなら海外旅行とかにしようぜ」

「二等は……あ、どうやら草津温泉の一泊二日の旅行券みたいですよ？」

「……何気に二等の方が一等よりも豪華にみえるのは気のせいか？」

「……三等、三等は……東区商店街商品券一万円分だそうです」

「しかも東区商店街限定かよ！？　余所じゃ使えないし！！」

拓夜が景品に対して突っ込んでいると、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「オッシャー！！　やってやるぜぃ！！」

「ふぅん……、この俺が全ての景品をかっさらってやる」

拓夜と成瀬の二人はまさかと思い、これから福引きを行う二人の姿を確認する。

「おっちゃん、俺たち二人で二回分頼むぜぃ！」

「あい、二回ね」

「ふぅん……まずはこの俺からやらせてもらおうか」

そこに居たのはＯＣＧ研究会の結締に白石だった。

白石は福引きの取っ手を掴むと、凄まじい雄叫びをあげながら箱を回し始めた。

「ふんぬぉぉおお……！！」

ガラガラガラガラ……、とけたたましい音をあげながら、箱を回す白石。

その形相、その声、その気迫、その勢い。

箱はガタガタと壊れそうな勢いで揺れ、係のおじさんは「ヒィッ！

？」と小さな悲鳴をあげる。

ちなみに、白石の隣に立っていたはずの結締は、いつの間にか白石から3メートルは離れていた。

3メートルは離れていた。

そして遂に、箱の中から一つの玉が飛び出した。

カツンッ！！

「ぐげッ！？」

勢いよく飛び出した玉は、3メートルは離れていた結締の眉間にダイレクトアタックを決めた。

誰もが唖然とする中、白石は結締に悪びれる様子もなく、飛び出した玉を拾い上げ、係のおじさんに手渡す。

「さぁ、高らかに宣言するがいい……、俺が引き当てた、この玉を……！！」

係のおじさんは白石が手渡す玉を受け取ると、台に用意してあった鐘を取り出し、盛大に鳴らした。

「お……大当たりィイ！！」

おおお……。

辺りから白石に向けて盛大な拍手が贈られる。

拍手喝采をその身に受けながら、白石は満足そうに景品を受け取った。

「ど、どうぞ……」

「ふぅん……、有効に活用させてもらうぞ」

眉間を押さえながら、結締は白石とポジションを変更する。
次は結締が箱を回す番だ。

「だ、大丈夫かい？」

心配そうに尋ねる係のおじさん。

結締の眉間には、相当な勢いで直撃したのであろう玉の痕が、くっきりと残っていた。

「し、心配はいらないぜぃ……、まだ俺のライフは残っている」

「は、はあ……？」

そして取っ手を掴み、ゆっくりと箱を回し始める結締。

「……いくぜ、俺のターン！！」

ズガガガガ……ッ！！

初めはゆっくりだったペースが、突如激しく箱を回し始めた結締。

そして箱の中から飛び出した玉は……。

「ぬおッ！？」

勢いよく飛び出した玉は、受け皿を勢いよくスライドしながら跳ね上がり、箱を回す結締の顎にダイレクトアタックを決めた。

「ああ、お客さん！？」

係のおじさんが心配する中、結締は自らが打ち出した玉を拾い上げ、その玉を渡す。

「へへ……、おっちゃん……、高らかに宣言してくれよ……、この俺が……くッ、命を賭けて……、引き当てた……玉を……」

「あ、はい、ハズレですね。　じゃコレ、タワシをどうぞ」

「……」

タワシを受け取った結締は真っ白に燃え尽きながら、白石と共に帰っていった。

「……なんか、存在が嵐みたいな人達だな」

「ははは……そ、そうですね」

渇いた笑みを浮かべながら拓夜に成瀬は二人の姿を見送った。

そして遂に拓夜たちの順番がやってきた。

拓夜は手にした福引き券を係のおじさんに手渡す。

「おじさん、一回分お願いします」

「あいよ、って……、西条さんトコの息子さんじゃないか！」

係のおじさんは拓夜を見るなり朗らかに話しかけてくる。

成瀬は拓夜の腕を引っ張り、尋ねた。

「あの～、拓夜さん。お知り合いの方なんですか？」

「ん、ああ……。商店街の集会でよく顔を合わせるんだよ。おじさん、一回分お願いします」

拓夜がそう言い、箱の取っ手を掴むと、隣に立つ成瀬が感嘆の声を漏らした。

「わあ～、福引きって、箱はこんな形をしているんですね！　私、初めて見ました！」

「……」

「……」

え、なに？

今なんと仰いましたか？

と、言わんばかりに拓夜の手が止まる。

「……花穂、それ……マジ？」

今までに東区商店街では福引きは何度か行われている。

商店街に住む拓夜からすれば、見慣れた福引きの光景なのだが、どうやら成瀬は違うらしい。

拓夜は取っ手から手を離し、成瀬を自分の前に押し出した。

「えっ、あの、拓夜さん？」

「見たことがないんなら、やったこともないんだろ？　じゃあ、花穂がやってみなよ」

「え、良いんですか？」

キョトンとする成瀬に頷く拓夜。

すると成瀬の表情はみるみると笑顔になり、嬉しそうに箱の取っ手を掴んだ。

「ありがとうございます！拓夜さん！」

意気揚々と、成瀬は福引きの箱を回しだす。

無邪気な子供のように笑う成瀬。

拓夜はそんな成瀬をどこか微笑ましく見守っていると、遂に箱の中から一つの玉が飛び出した。

カラッ、コロコロコロ……。

「おっ」

「……おお……」

「……この色は……？」

呟き、玉を拾い上げる成瀬。

玉の色は金。

おじさんは用意した鐘を振り上げ、声を大にして叫んだ。

「お、大当たりィイ！！」

周りから拍手喝采が起きる中、成瀬はキョトンとしながら拓夜に振り返る。

どうやら自分が大当たりを出した事に、余り実感が持てないらしい。

「あの、拓夜さん……これって……」

「凄いじゃないか、花穂！大当たりを出したんだ！一等だよ、一等！」

「えっ！？」

たった一回の福引きで、生まれて初めての福引きで一等を当てる。

それがどれだけ運が良い事か、拓夜に言われて徐々に実感が湧いてきた成瀬は、嬉しさや恥ずかしさが入り混じり、顔を真っ赤に染め上げながら景品を受け取った。

「はい、嬢ちゃん！一等の景品だよ！」

「あ、ありがとうございます！」

景品を受け取り、列から離れて、拓夜に成瀬は一等の景品を確認した。

確か一等は、富士急ハイランドの招待券だったはずだ。

「花穂、凄いよ！」

「はい！自分でも信じられないです！」

封筒を開け、中に入っているチケットを確認すると、富士急ハイランドの招待券一枚と、宿泊先のホテルの宿泊券一枚が入っていた。

「えっと……両方ともこのチケット一枚で、三名までご利用できます……って書かれてます」

「三名……か」

拓夜は頭の中で妄想、もとい想像する。

成瀬と二人で楽しくアトラクションを巡り、夜にはホテルで同じ部屋で過ごす。

美味しいディナーを食べた後、できれば混浴を希望だがとりあえずお風呂に入って汗を流す。

もちろん、二人で一緒の夜景を眺めながら……。

そしてこれからが本番!!

うら若き男女が一つの部屋で一夜を共にするのだ!!

二人が風呂から出て部屋に戻ると、そこには一枚の布団が敷いてある。

もちろん枕は二つ!!

『花穂……』

『拓夜さん……』

そして二人は遂に……。

「おお……、凄い……、何てロマンティック！！　何て男の夢！！　何か無駄にスッゲー興奮してきた！！」

いきなり高ぶる拓夜に、若干後退りながら成瀬は苦笑いを浮かべた。

「拓夜さん、何を考えているのか……顔に出てますよ？」

成瀬の様子に気付き、ハッと我に返る拓夜。

いささか自分勝手な妄想だった。

誤魔化すように軽く咳払いをし、券の使い道を尋ねてみる事にする。

「ゴホンッ、と、とりあえず……確か花穂は三人家族だったよな？　なら、親子水入らずで家族旅行にでも行ってくるか？」

成瀬には姉妹がいない。

これは花穂と付き合いだして初めて知った事だ。

成瀬が当てた景品だ。

だったら成瀬の好きなように使わせてあげたい。

拓夜はそんな気持ちで成瀬に提案をしたのだ。

「う〜ん……それも良いんですが……」

「？」

言い倦ねる成瀬。

「でも私、パパやママとはよく一緒に海外とか旅行には行きますから、この券は拓夜さんと一緒が良いです」

「へ？」

成瀬の発言にキョトンとなる拓夜。

よく一緒に海外に旅行に行く？

（俺は……まだ修学旅行でしか県外に出たことしかねーぞ！？）

更に成瀬はどう言ってきた？

（それに……俺と一緒に行きたいだって！？）

神よ、俺は今……、生まれて初めて、貴方に感謝します！！

拓夜の思考は先程の妄想が蘇り、その先はとても表現できるようなものではなかった。

「あの～、拓夜さん？」

「ッ！？」

再び成瀬からの呼びかけに我に返る拓夜。

すると、彼の後ろから二人の男性の声が聞こえてきた。

「拓夜ちゃん、一旦落ち着こうぜぃ？」

「ふぅん……興奮するのは構わんが、少しは場を弁えろ」

「ッ！？　ぅえっ！？」

勢いかぶって振り返ると、そこにはいつの間にか結締に白石の二人が立っていた。

どうやら成瀬はとっくに気づいていたらしく、至って普通に挨拶をした。

「結締さん、白石さん、こんにちは！」

「おう、成瀬ちゃん！今日も相変わらず可愛いねぃ」

いつの間にか自分の後ろに立っていた二人に驚きを隠せない拓夜は、思わず結締と白石に尋ねてみた。

「えっ、あの……二人は一体、何時の間に？」

「ふぅん……、お前が店の化粧品を手にとって『高い……』と呟いていた辺りからだ」

「アンタ等もおったんかい！？」

思わず声を荒げてツッコミをいれる拓夜。

そんな拓夜を白石は「まぁ落ち着け」と言い、片手でアッサリと拓夜の首を締め上げ、押さえ込む。

「ところで拓夜よ、お前たちは一等の富士急ハイランドを当てたのだろう？」

「それは……俺じゃなくて……花穂が当てたヤツって、痛い痛い！白石さん、首締まるって首！！」

「成瀬だろうが拓夜だろうがこの際どちらでも良い！！　俺に協力してくれないか？」

場所は変わって、ここはファミレスの店内。

テーブル席で向かい合わせに座るように、拓夜に成瀬、そして結締に白石が座っていた。

「それで、協力してほしいことって……一体なんです？」

「ふぅん……拓夜よ、よくぞ聞いてくれた！」

いや、話を振ってきたのはそっちだし……と、内心思う所があったが、拓夜はあえてスルーした。

そんな拓夜の気持ちを余所に白石は、いつになく真剣な面持ちで拓夜に話す。

「実はな……お前たちも知ってると思うが、俺たちも先程の福引きで、一等を当てた」

「はい、お二人の様子は後ろの列から見ていましたから……」

成瀬が相槌をうつように話すと、白石に代わり結締が説明を始める。

「俺たちや拓夜ちゃん、ＯＣＧ研究会のメンバーがそれぞれに同じ旅行券を当てたんだ。だからさ……お互いの券を合わせて、ＯＣＧ研究会の旅行にするってのはどうだ？」

「ＯＣＧ研究会の旅行……か」

結締の提案に、拓夜は少し考える。

先程、自分が成瀬に券の使い道について話していると、自分と一緒に旅行がしたいと言っていた。

仮にＯＣＧ研究会の旅行という場合でも、自分と成瀬は一緒に居られることには変わりない。しかし、それだと二人っきりの旅行ではなくなる。

「ん～、結締さんに白石さん……。花穂が当てた福引きは、花穂が初めてやったヤツで……俺は花穂の好きなように使わせてあげたいと思っているんですよ。二人の言う旅行も、スッゲー楽しそうなのは分かるんですが……、俺は花穂の意見を尊重してあげたい」

「拓夜さん……」

自分の思いを真剣に告げる拓夜。

だが対面に座る結締に白石は、それぞれにボケーッとしてみせたり、メニュー表を凝視していたりと……。

「ん、何だって拓夜ちゃん？」

「ふぅん……大方、ＯＫの返事だろう……。俺はミラノ風ドリアと若鶏のディアボラ風と……チョリソーだな」

全く話を聞いていなかった。

「ちょっ！？　そっちから話を振っといて、何なんすか！！」

「拓夜さん、私は良いですよ？」

憤る拓夜に成瀬は笑顔で話しかける。

「拓夜さんが私のことを想って言って下さったことは、凄く嬉しいです。でも、私と拓夜さんだけの旅行はこれから先、きっといくらでも行けますよ」

「花穂……」

「ですから、今回はＯＣＧ研究会の旅行ということにしませんか？　ＯＣＧ研究会の皆さんと一緒に行く旅行だって、めったに出来ることじゃないと思うんです」

成瀬の言うことにも一理ある。

それに、最初に成瀬と二人っきりでの旅行だと、緊張して上手く話せないかもしれない。

あまり旅行慣れしていない自分にとってＯＣＧ研究会での旅行は、後々成瀬と二人きりで行くであろう旅行の、良い予行演習になるかもしれない。

拓夜の返事は決まった。

「分かったよ。花穂がそう言うなら、そう使おう」

「さっすが成瀬ちゃん！」

「ふぅん……それでこそ、ＯＣＧ研究会だ」

とても分かりやすい性格をした二人の先輩に、拓夜は軽く溜め息を

つきたくなった。

だがしかし、旅行は旅行である。

どんな旅行になるのか、旅先では一体どんな光景が待っているのか考えると、今からでも十分にワクワクしてくる。

旅行券は成瀬と白石のを合わせて二枚。

一枚で三名が有効と記載されているため、自ずと旅行メンバーは六人となる。

一人目、西条拓夜
二人目、成瀬花穂
三人目、結締智恭
四人目、白石直也

あとの二人分は、西条亨にマナだろう。

拓夜がそう思っていると、再び白石が真剣な面持ちで拓夜に話しかけてきた。

「ところで拓夜よ、そろそろ本題に入らせてもらうぞ……」

「え、さっきのが本題じゃなかったんですか？」

思わず聞き返してしまうが、白石はそんなことはお構いなしに話し始める。

「この前、俺たちが主催したデュエル大会で優勝した美少女……、確か烏丸と言ったな？」

「は、はい……あの……、葉月がどうしたんですか？」

「うむ……、実はだな……」

言葉のキレが悪くなる白石。

顔はほんのりと赤く、その表情はどこか照れているような恥ずかしがっているような仕草が見られた。

一体どうしたのだろうか？

葉月のことで何か言いにくいことでもあるのだろうか？

少し考えて拓夜はある一つの結論を見いだした。

「まさか、白石さん……」

「……」

「白石さん……まさか……葉月を今回の旅行に……誘いたい、と」

「……ポッ／／／」

白石は思わず両頬に手を添えて、恋する漢を表現する。

「うわ、その仕草気持ちワルッ！？」

隣で水を飲んでいた結締が白石の仕草にドン引きしていた。

まあ、分からなくもない。

拓夜に成瀬はあえてスルーした。

「ええい、うるさい！！　こんなキャラは俺の性分に合わないこと位、百も承知だわ！！　ただこの本に、『可愛い系の男子は女性ウケが良い』と書いてあったから、俺はァア！！」

どこからともなく白石が取り出した本には、『必勝！！これでアナタもモテ男☆』と書いてあった。

「こ、これって……」

「白石さん……」

まさか白石がこんな本を読んでまで葉月の事を気に入っているとは思わなかった。

これには拓夜も成瀬も思わず唖然となってしまった。

むしろ、どう白石に声をかければ良いのかが思い浮かばない。

「ん～、白石さんや」

結締が白石の取り出した雑誌をパラパラとめくり、真剣な声色で呟いた。

「……この本、今度貸して？」

「ふぅん……、良いだろう。好きなだけ読むがいい。俺は既に、内容は全て把握している」

どうやら結締もモテ男☆に魅了されたようだ。

すると白石は拓夜と成瀬の手を取り、鬼気迫る表情で拓夜に懇願した。

「頼む拓夜、そして成瀬！　お前たちから、美少女を今回の旅行に誘ってくれないか！？　この通りだ！！」

東区にある大型のショッピングモール。

烏丸葉月はそこの靴屋に来ていた。

そして一つの商品を手にとり唸るような声を漏らす。

「……」

葉月が手に取り、凝視している商品とはブーツだ。

革製の生地で、膝下だいたい5センチ程の長さだろうか。

明るい茶色の柄のそれは、シンプルだが気品に溢れていた。

（……欲しい）

一目惚れだった。

欲しいのなら買えば良い。

と思うのだが、葉月の財布の中には１８００円入っている。

そしてブーツに貼り付けられた値札には１００００円の数字が……。

高校生でこの値段の買い物は、おいそれと出来ることではない。

この１００００円のブーツ。

秋の特別感謝セールということで普段より値引きされているは良いが、それでも葉月の手持ちでは購入することはできない。

「い、いいのよ……どうせ今回は……買うつもりは……」

そう呟き、名残惜しくブーツを棚に戻す葉月は、肩を落としながら靴屋から離れた。

またお小遣いを貯めなきゃな～と考えていると、彼女の前に見知った一人の男の姿があった。

この大型ショッピングモールは二階建てで、一階の一番端の場所には食品売り場が設けられている。

そこで葉月が目にしたものとは……。

『え～只今から、卵１パックの半額セールを開始します！　お一人様１パックまで！　早い者勝ちですので……』

「この時を待っていた！！　うおおおって、ちょっ、入れない！？　おばちゃんたちに妨害されて入れないって！？」

葉月の前で世間の主婦たちの荒波に揉まれながら声をあげていたのは、先日、自分を倒したＯＣＧ研究会の一人、西条亨だった。

「……ぇ……」

デュエルを行っている時のクールな表情とは裏腹に、亨は必死になって何とか卵を確保しようとおばちゃんたちの群れに突っ込んでいく。

ＯＣＧ研究会の意外な一面を見ることができた葉月だったが、何故かその場所から動くことができずに立ちすくんでいた。

「ハァ……ハァ……な、何とか……取れた……」

すると再び彼女の前に、今度は卵のパックを大事そうに抱えて現れた亨。

その顔は達成感に満ち溢れていた。

「……」

葉月がポケーッとしていると、亨と思わず目があった。

「……あ」

「……えと、確か……烏丸葉月さん、だったよね？」

亨からの質問に首を縦に振って答えると、亨は急に葉月に卵のパックと５０円を手渡した。

「え、ちょっ！？」

いきなり卵と５０円を渡されて、どうしたら良いのか分からずに狼狽える葉月。

すると亨は真剣な表情で葉月に頼んだ。

「烏丸さん！俺の代わりにその卵を買ってきてくれ！お一人様１パック限りなんだ！」

「え、あの……ちょっと……」

「頼んだぞ！」

言うだけ言うと亨は再び卵のコーナーに向かってしまった。

「買ってこいったって……」

葉月は溜め息混じりにレジに並び、亨に一方的に頼まれた卵を購入したのだった。

店から出ると、太陽はすっかり沈んでいた。

西条亨と烏丸葉月の二人は並んで歩き、それぞれの帰路についていた。

「ありがとう烏丸さん。　おかげで卵を2パックも買うことができたよ」

「いえ、別にそれは良いんだけど……」

亨の表情はホクホクと上機嫌だった。

対する葉月の心境は少しモヤモヤしていた。

西条亨。

葉月は彼にデュエルで負けた。

実際にデュエルをして感じたことは、やはりＯＣＧ研究会は強かったということだ。

できるなら、もう一度この人とデュエルをしたい。

しかし、急にデュエルを申し込んでも相手は迷惑なだけではないだろうか？

でも相手はＯＣＧ研究会の人間だ。

もしかしたらデュエルを快く受けてくれるかもしれない。

リベンジだ。

葉月はそう心に決め、やや前を歩く亨に話しかけた。

「……あの、亨さん！」

「ん、何だい？」

亨が立ち止まり葉月に振り返ると、葉月の視界に自転車に乗ってこ

ちらに向かってくる人の姿がみえた。

その人は前を見ておらず、携帯電話で電話中なのか、前方の亨に全く気がついていない。

むしろ亨も、すぐ後ろに迫る自転車に全く気付いていない。

「あ、危な……」

グシャッ！！！？

「グェッ！？」

「ンガァ！？」

葉月は危険を知らせようとしたが、時既に遅く……。

亨は自転車によって吹っ飛ばされ、自転車に乗った人はそのまま亨をひき逃げて、夕闇の中に消えていった。

「あ、あのっ、大丈夫ですか？」

「痛たた……ぁ」

体を起こす亨がまるで石像のように固まる。

「……？」

どうさたのかと思った葉月だったが、その理由は一瞬で理解した。

彼の視線の先には、彼の手荷物である買い物袋が地面に転がっていたのだ。

袋の中からは、黄色い何かがドロリと溢れ出している。

「……そんな……」

「あ、あの……亨さん？」

その場で風化して石灰のようになる亨はガックリと膝をついた。

「せっかくのタイムバーゲンが……2パックも買えたのに……」

グスンと鼻を啜り、泣くのを堪えながら、亨はひしゃけて飛び散った食材を集めだす。

「袋も黄身でベトベトだし……3秒ルールも通用しそうにないし……ハァ……」

ズーンと沈んでいると、葉月は地面に転がっているジャガイモを拾い、それを亨に差し出した。

「あの、亨さん……元気出して下さい」

「……烏丸さん」

ジャガイモを受け取った亨は葉月にお礼を言い、「よっこらしょ」と立ち上がった。

亨の背中を見つめる中、今度は葉月の方も気持ちが沈みそうだった。

（すっかり……タイミングを逃しちゃった……）

デュエルを申し込もうとしたが、さすがに今はそれが言えるような状況ではない。

ＯＣＧ研究会の知り合いには友人である西条拓夜に成瀬花穂がいるが、今自分がデュエルをしたい相手とは西条亨だ。

今日はたまたまだったが、次いつ会えるか分からない。

やっぱり言おうかな？

葉月がそう思っていると亨は葉月に歩み寄り、彼女の手を取って微笑んだ。

「今日はありがとう、烏丸さん」

「へっ！？」

何がありがとうなのか、何故自分がお礼を言われるのか理解できない葉月は、思わず裏声になってしまっていた。

「卵は潰れてしまったけど、突然だったのに買うのを手伝ってくれたし、それにジャガイモも拾ってくれたしな」

「は、はぁ……？」

曖昧な返事をすると、亨の口から葉月にとって思いがけない言葉が飛び出してきた。

「そこでさ、何かお礼をしたいから……何かご馳走させてくれないか？」

「……えっ？」

まさかの亨からの誘いに、思わずキョトンとなる葉月。

これなら、また彼に合う約束を取り付けられるかもしれない。

亨からの誘いに対し、葉月からの返事は……。

「は、はい！　是非……」

思わず承諾した葉月だったが、直後に一つの懸念が浮かび上がる。

亨はご馳走させてくれないかと聞いてきた。

つまりは料理と思ってもいいだろう。

料理……？

（え？……まさか、そのひしゃけた食材で？）

福引から始まる物語　その二

昼休みのチャイムが鳴り響く。

東区第七高等学校は、訪れた休み時間に喜びの声をあげる生徒たちで賑わっていた。

そして三階にあるとある教室で烏丸葉月は自分の席に座り、携帯電話の画面をボーっとしながら見つめていた。

その目はどこか憂いを帯びており、頬をほんのりと朱に染めながら、感慨深そうに息をつく。

そんな葉月の姿を見て、拓夜を除くクラスの男子たちは皆々、葉月の姿に見初められていた。

「た、拓夜ちゃんよ……葉月さんは一体どうしたんだ?」

尋ねてきたのは拓夜の友人で、ここのところ出番が全くなかった結城雅一。

結城はひそひそと拓夜の耳元で言葉を続ける。

「朝から葉月さん、ずっとあんな調子だし……あんな恋する乙女ような顔をして……ハッ！？」

「？」

自分の発言に何を思ったのか、結城はわなわなと手を震わせながら一つの答えに辿り着く。

「まさか……葉月さん、遂にこの俺の魅力に気付いたに違いないんよ！！　あの携帯画面も恐らくこの俺の写真に違いない！！」

「ぜってーに違うとおもう」

結城の可哀想な発言はとりあえず置いといて、と拓夜も教壇の前の席に座る葉月を眺めみる。

確かに、いつもの葉月らしくない。

昨日の時点では普段と何ら変わりなかったのだが、何かあったのだろうか？

「……あ」

葉月のことを考えて、拓夜は昨日の自分のことを思い出した。

それは白石に頼まれた内容……。

ＯＣＧ研究会の旅行に、葉月を誘って欲しいということだ。

葉月に関する恋愛事にはもうウンザリしていたので一度は断ったのだが、そんな理由で折れる白石ではなかった。

まるで滅びのバースト・ストリームのダイレクトアタックをされたかの如く、白石は拓夜を言葉と気迫によって自分の意見を押し通したのだ。

あの人たち（結締に白石）には逆らわない方がいい……。

昨日は成瀬と共にそう実感した。

とりあえず、葉月に声を掛けなければ話は始まらない。

「あ、おい、拓夜ちゃん？」

結城をその場に置き、拓夜は自分の世界にトリップしている葉月へと歩んでいった。

「……」

葉月は携帯電話を閉じ、軽く溜め息をつきながら天井を見上げた。

そして再び手にした携帯電話に視線を向ける。

（……番号……交換しちゃった……）

その相手とは昨日の夕方、たまたま一緒にいた西条亨のことだ。

ＯＣＧ研究会。

それはデュエリストにとっては憧れの存在。

自分がデュエリストになってから間もなく、インターネット上で彼等の存在を知った。

当初は雲の上のような存在であったが、遂に自分は彼等のうち一人と知り合い、携帯電話の電話番号を交換するまでに至ったのだ。

分かり易く言えば自分の好きな芸能人、有名人と番号交換をしたと思えばいい。

更には近い内に一緒に食事をしないか？と誘われたのだ。

これにはもう舞い上がらない訳にはいかない。

もちろん、デュエルで負けた事に対するリベンジも忘れてはいない。

様々な思考が飛び交う中、後ろから自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おーい、葉月」

「……ん、拓夜？」

そういえば拓夜とはＯＣＧ研究会のデュエル大会以来、あまり話せてないかもしれない。

葉月がそんなことを思った時、拓夜は葉月に手招きしながら言った。

「ちょっと、こっち来てくれねーか？　大事な話……」

「……？」

拓夜が学校でそう言ってくるということは、大抵カード関係の話だろう。

以前、学校ではその話はするなと言っておいたのだが、忘れてしまっているのだろうか？

葉月がそのことを言おうとした時、拓夜は既に廊下に出ており、葉月が来るのを待っていた。

「何なのよ、一体……」

仕方がない……と葉月は席を立ち、拓夜に着いていった。

「えっ？……俺の出番、たったこんだけ？」

教室に取り残された結城は、訳も分からずに右往左往していた。

拓夜と葉月の二人は校舎の屋上に来ていた。

普段の屋上は立ち入り禁止なのだが実はこの学校、屋上に出る為の扉の鍵が壊れており、常に扉が開いている状態なのだ。

秋の乾いた風に吹かれ、葉月は横髪をたくしあげながら、拓夜に尋ねた。

「で、拓夜……話って一体何なのよ？」

「あぁ、実はさ……ＯＣＧ研究会の皆で旅行に行くことになってさ」

ＯＣＧ研究会の皆で旅行？

それが自分に何の関係があるのだろうか？

「ふ～ん……それで、何かお土産でも期待して良い訳？」

「おいおい、話は最後まで聞けって……。実はな、その旅行に是非お前も来てほしいって言われててさ、俺や花穂と一緒に旅行に来てくれないか？」

「えっ……私も一緒に！？」

拓夜の言葉に驚く葉月。

まさか自分にお誘いの声が掛かるとは思ってなかった。

「え、良いの？　私なんかが……アンタ達の旅行に着いていっても」

葉月の表情は何かを期待するような目をしている。

そんな葉月に『実は白石さんがお前にゾッコンでさ』なんて言える筈がない。

言おうものなら確実に絶対に１００パーセント拒絶されるに決まっている。

今まで葉月に玉砕された男どもは全て、過激なアプローチをした為でもあるのだ。

拓夜は慎重に言葉を選び、空を見上げながら葉月に答えた。

「ええっと……実は、お前がデュエル大会で優勝してから……お前のことが研究会の中で話題になってさ」

「う……うん……」

「で、旅行の話が出た時に……お前も一緒にどうかって話が出てさ、優勝者だしその……俺や花穂の知り合いだしさ」

「……」

嘘ね、と葉月は思った。

拓夜は気付いていないが、彼は思ったことが表情に出るのだ。

先ほども誘う理由を説明している時に、どこか目が泳いでいた。

と言うよりは、彼が何か隠しごとをしている時は、まず人の顔を見

て話さない。

拓夜の説明には虚偽が混じっている。

葉月はそう思いながら、とりあえず自分が聞いておきたいことを聞いてみることにした。

「拓夜、これだけは聞いても良いかしら？」

「な、何だよ……？」

ＯＣＧ研究会の旅行……。

ならきっと、あの人も一緒に来るに違いない……！

「ねぇ……亨さんも、その旅行には参加してるのよね？」

「えっ？　と、亨さん……？」

意外な名前が出たことに挙を突かれる拓夜。

対して葉月の顔は真剣だ。

葉月の真意は分からないが、一応はＯＣＧ研究会の旅行だ。

白石や結締との話の中には亨の名前は出ていなかったが、多分参加はすることになっているだろう。

恐らく今頃、結締や白石から今回の話を聞かされているかもしれない。

拓夜はそう思い、相槌を打つように答えた。

「そりゃ、ＯＣＧ研究会の旅行だからな……」

「そう……」

拓夜の返事を聞き、嬉しそうな笑みを浮かべて葉月は言った。

「じゃあ、私も参加させてもらうわ。アンタ達の旅行に……！」

葉月は思う。

そして願う。

もう一度、あの人とデュエルがしたい。

そして、勝ちたい。

そう、私は勝ちたい。

今回の旅行に参加すれば、自ずと西条亨と接触できる機会が増えるだろう。

その数だけ、彼とデュエルをすることが出来るチャンスが増える。

自分の気持ちにそう言い聞かせ、葉月は秋の空を見上げた。

「ふ～ん、旅行ねぇ……」

大学の食堂で西条亨はお手製の弁当を頬張りながら、結締や白石の話を聞いていた。

「そうだぜぃ、白石さんに成瀬ちゃんが福引きで見事、一等を当てたんだぜぃ」

「ふぅん……、拓夜に成瀬は既にこのことを知っている。　後は西条、お前がマナを誘えば人数は揃う」

「ふ～ん……ん!?　ちょっと待てよ……？」

食事をしていた亨の箸がピタリと止まる。

白石に成瀬が当てた招待券は計二枚。

一枚につき、有効は三人

つまり参加人数は六人ということになる。

二人からの話を聞くと、今回の旅行メンバーはＯＣＧ研究会の人間……。

（つまりは俺にマナ、白石に結締、拓夜くんに成瀬さん……それから、烏丸さん……）

あれ？

何か一人多くない？

「なぁ白石……、何か一人多い気がするんだが……ってそれよりも、ＯＣＧ研究会の旅行なのに何で烏丸さんが入ってるんだ？」

「あ～、西条ちゃん……それは」

「ふぅん……、この俺が気に入ったからだ！！」

えっ、そんだけの理由で……？

まぁとやかく言っても白石は我を押し通すことは目に見えている。

亨は葉月のことに関してはそれ以上のツッコミはせず、もう一つの疑問を尋ねてみることにした。

「でも招待券は計六名なんだろ？　あと一人は全部実費じゃねえか……」

まだ高校生である拓夜に成瀬、葉月にはそんなお金を使わせたくない。

そんな理由からこの三人は券を使えばいい。

白石は今回の券を当てた功労者だ。

彼も当然省かれる。

残りは……。

「俺に西条ちゃん、そしてマナちゃん……」

「あぁ……消去法でいけばそうなるな……」

亨と結締の視線が交差する。

それと同時に、両者の間に重苦しい空気が流れ出す。

「……」

「……」

出来ることなら、自分はお金を使いたくない。

だがしかし、マナに全額負担ということは避けてあげたい。

結締はマナが可愛い女の子だからそう思った。

亨は、マナが使うお金は結局自分の財布から飛んでいく為に、それだけはなんとしても避けたかった。

亨が狙うは自分とマナの二人が、招待券を使うことだ。

だが結締も招待券を狙っている。

両者が一歩も退けない状況に陥った時、二人は同時に右手を前に出した。

「……結締……どうしても退くつもりは無いのか？」

「へへっ……愚問だぜぃ、西条ちゃん……！」

ゴクリ、と隣に座る白石は思わず息を飲む。

（何だ……二人から発せられるこの異常なパワーは！？）

白石は右目にセットしてあるスカウターを操作し、それぞれの戦闘力を計測する。

（１８万……１９万……にッ、２０……馬鹿なッ、まだ上昇するだとォオ！？）

地球人の常識的な戦闘力を、明らかに超越しているではないかッ！？

白石が歯をガチガチと鳴らした瞬間、亨と結締の二人は同時に動いた。

「最初はグーーーッ！！」

「ジャン、ケン、ポンッ！！」

亨と結締、それぞれの手のひらから凄まじい闘気が迸る。

「こッ……これはァア！？」

両者の激しい気に当てられながら、白石は二人の戦いを凝視する。

結果は……ッ！？

亨が『パー』。

結締が『グー』だった。

「あ、」

その瞬間、亨の後ろを通った学生が足を躓かせ、お盆に乗せたラーメンを亨の頭上にひっくり返らせた。

ビチャッ!?　ドバドバッ!!

「う熱ィィイア!!!!」

一体何が起きたのか理解できない亨は思わず飛び上がる。

「さ、西条ッ!?」

「うわぁあ、ご……ゴメンナサイ！」

転んでラーメンをひっくり返した学生は、自分が引き起こした事故に相当慌てていた。

白石は辺りに零れたスープや麺を拭き取るために、雑巾を取りに行く為に席を立つ。

「な、何が起きたんだ……つか痛い、顔がめちゃくちゃヒリヒリする！！」

「西条ちゃん、とりあえず落ち着こうぜ？」

結締に言われ、とりあえず溜め息混じりの深呼吸をする亨。

そして彼がふと、結締を見ると……。

「ま、災難続きで気は重くなるだろうが……西条ちゃん、頑張れよ！」

「……へ？」

そう言う結締の右手は『チョキ』。

あれ？

結締って『チョキ』出したっけ？

「そう言う訳だから西条ちゃん、悪いな！」

いかんせん、ラーメンのせいで結締の出したジャンケンがどうだったか思い出せない。

「そ……う、嘘だァァアア！？」

取り乱して発狂する亨に背を向け、結締は今日一番の狡猾な笑みを浮かべていた。

時刻は午前5時を少し過ぎた頃。

葉月は自宅リビングにいた。

彼女の横には小さめの旅行カバンが一つ置いてあった。

今日はこれから、ＯＣＧ研究会のメンバーとの旅行に向かうのだ。

予定としては、早朝に出発して夕方には宿泊先のホテルに到着。

その日の夜はそのままホテルに泊まり、翌日は一日賭けて富士急ハイランドで遊ぶことになっている。

ちなみに葉月は富士急ハイランドには今まで一度も行ったことがない。

おかげで昨夜はインターネットで富士急ハイランドについて調べまくり、殆ど眠れていない状態だった。

しかし、自然と眠気はない。

むしろ緊張や興奮が入り混じって、目がギンギンに覚めているのだ。

それには一緒に行くメンバーが関係している。

それは、ＯＣＧ研究会のメンバー。

葉月はそのメンバーの内一人、西条亨をターゲットとしていた。

ターゲットと言っても、意味合いとしてはデュエルの相手という意味だ。

何としてもリベンジし、勝ちたい。

今の葉月の頭の中には、その事が半分を占めていた。

残りはただ純粋に、今回の旅行を楽しみたいと思っている。

時計を見上げると、針は十五分を回った所だった。

すると、葉月の携帯電話に一通のメールが届いた。

慌てて内容を確認すると、相手は拓夜からであった。

どうやら家の前に彼らが到着したらしい。

耳を澄ますと、外から車のエンジン音が聞こえる。

「……よし！」

意気揚々とカバンを掴み、葉月は踊る気持ちを少しだけ抑えながら、外へと踏み出した。

富士急ハイランドへ　前編

葉月が外に出ると、そこには西条拓夜と成瀬花穂が待っていた。

「お早うございます、葉月さん！」

「おはよーさん、朝早くに悪いな」

それぞれが葉月に挨拶をし、出迎える。

「お早う二人とも。成瀬さん……目一杯、拓夜と楽しみなさいよ」

「はい！」

「拓夜も、ちゃんと成瀬さんを引っ張ってかないと駄目よ！分かってるわよね？」

「分かってるよ、まぁとにかく車に乗ろうぜ？　中に皆が待ってる

からさ」

拓夜に促され車のドアを開ける。

すると、中には残りのＯＣＧ研究会のメンバー全員が揃っていた。

「お、来た来た！」

「ふぅん、よく今回の話に乗ってくれた……」

「あ、貴女がはづきだね！」

「お早う、烏丸さん」

それぞれが一斉に声をかけてくる。

憧れのＯＣＧ研究会メンバーを前に、葉月は笑顔でそれに答えた。

「はい！　今日は、よろしくお願いします！」

一台のエスティマが早朝の高速道路を走り抜ける。

その車内には七人の人影が見受けられる。

車を運転するのは西条亨。

そして助手席にはマナが座り、地図を片手にナビに付いているＣＤから流れる曲に、鼻歌交じりでリズミカルになっていた。

ナビがあるのに地図を持っていても……と思っても、決して口にしてはいけない。

マナ曰く、助手席に座り、地図を持ってナビゲートをするのを一度やってみたかったらしい。

後部座席には残りの五人、白石に結締、拓夜に成瀬、そして葉月が座り、それぞれに話していた。

その会話内容は主に、葉月に関することばかりだった。

白石が葉月に対し、やや興奮しながら今日の旅行について話しており、結締は白石が興奮し過ぎるとブレーキをかける役目になっている。

拓夜に成瀬は最後尾に座り、一緒に旅行の本を読みながら楽しんで

いた。

そして視点は運転手である西条亨に移る。

葉月に挨拶した時は笑顔で対応したが、今の彼の表情は明け方の曇り空のごとく沈んでいた。

（結局……今回の旅行は俺だけホテル代も入場料も払わなくちゃいけないのか……）

結締とのジャンケンに負けた事になった亨は、招待券組から一人外れる羽目になったのだ。

旅行の参加を辞退しようにも、白石から今回の旅行の話を聞いたマナから辞退を全力で断られた。

さいじょお、私コッチの世界で、さいじょおとの思い出をいっぱい作りたいな！

などと言われては……。

そんなこんなで溜め息が出そうなのを抑えていると、マナが亨に話

しかけてきた。

「ねえ、さいじょお、さいじょお！　朝ご飯はドコで食べるの？」

「あ～、とりあえず次のサービスエリアに着いてからだな」

「次の、だね！　あとどれ位で着くの？　出掛ける前にいちごジャムを塗った食パンしか食べて来なかったから、私はお腹が空いたんだよ！」

「はぁ！？　お前が食った食パンって、丸ごと一斤だろうが！　もう腹が減ったって……、お前どんな胃してんだよ」

「ムゥ……、さいじょお、女の子に向かって、そんな発言はしちゃイケないんだよ？」

ムスッとした表情をするマナに、亨はポケットから一つの小さな包装紙に包まれたお菓子を取り出し、マナに渡した。

「とりあえずコレでも食べてなさい」

「わぁぁぁ……ハイチュウだぁぁ……！！」

これで少しは空腹も満たされるだろうと一息ついた亨だったが、これで終わるマナではない。

「ねえ、さいじょお、さいじょお！も一個ないの？」

「は？」

食うのが早すぎる……。

それにポケットの中にはもうハイチュウは入っていない。

昨日のうちにお菓子はある程度買ってきたが、それはカバンの中に入っており、取り出そうにも後部座席の後ろにあるトランクを開けなければならない。

我慢しろと言っても、こうなったマナは止められない。

西条宅の食費の七割は、マナの食費でもあるのだ。

（くっ、どうする……！？）

亨のポケットの中にはハイチュウはもう無いが、上着の内ポケットには未開封のシゲキックスが入っているのだ。

これは自分が運転中、眠くなったら眠気覚ましに食べるつもりなので、できることならコレはマナに渡したくない。

それか最後尾に座る拓夜に、カバンを取ってもらうように頼むか？

（拓夜くんには悪いが、俺のカバンを取ってもらうか……）

亨がそう思ったその時、マナが亨の胸元に顔を近付け、クンクンと匂いを嗅いできた。

「む！？　さいじょおのココらへんから、何やらお菓子の匂いがするんだよ」

「なッ！？」

まだ未開封なのに……！？

コイツの嗅覚は一体どうなっているんだ！？

「こ、コレは駄目だ、眠気覚ましの為に用意してあるヤツだから、っておい！　コッチに身を乗り出すな！　ってむむ胸元をまさぐるな！　っちょちょ、マナ！！」

運転席の様子に気が付いた結締に白石に葉月。

亨やマナの様子を見て、結締に白石はやれやれと息をつく。

「あ～マナちゃん、また始まっちまったぜぃ」

「え、始まったって……？」

結締に白石からすれば、亭とマナのやり取りはもう日常茶飯事らしい。

しかし、葉月からすればそうは見えない。

運転する亭にマナが迫り、亭にベッタリとくっついているようにも見える。

「ふぅん……、気にすることはない。　何時ものことだ……」

「えっ……い、いつも！？」

何やら誤解を与えそうな白石の発言は、見事に葉月を誤解させた。

（いつも……あんなに……くっついて……！？）

それは絶対に有り得ないのだが、葉月はもしや、もしやと妄想を膨らませる。

そして遂に……！？

「あった！　ココだね！　ムゥゥ……あ、シゲキックスだぁぁ！！」

「ダァァア、チクショウ！遂に見つかっちまった！取り返そうにも高速道路でのよそ見運転なんて自殺行為だし……って、あ、封を開けやがった！　こうなったら……マナ！　一粒俺にくれ！　あ、いや、下さい！　元はといえばそれは俺のお菓子って、ギャァァアア！？　一気に全部食いやがった！？」

「ひゃぅぅぅ……ゴクン、うん！　酸っぱくて美味しかったんだよ、さいじょお」

「さ、最悪だーーーー！！！！」

サービスエリアに到着し、亨がマナに最初に言ったことは

「お前は後ろの席で皆さんと遊んでなさい」

「え～」

であった。

浜名湖サービスエリアに到着した旅行メンバー達は、トイレ休憩がてら朝食を摂ることにした。

拓夜は浜名湖が一面できる広場へと足を運び、その壮大な光景に思わず言葉を失う。

凄い……。

ただ単純にそう思える。

風によって靡く水面、水平線から浮かび上がるように煌めく太陽、その太陽から放たれる日差しが水面を反射し、煌びやかな演出を魅せる。

「うわぁ！凄い綺麗です！」

同じように感嘆の声をあげながら成瀬は拓夜の隣に立ち、一緒に浜名湖の風景を眺める。

自分たちが住む街には、これほどの湖は存在しない。

ほのかに香る潮風を体中で浴びながら、二人はその場から動くことができなかった。

いや、動きたくなかった。

普段、あまり見ることのできない風景をその目で見て、一つずつ思い出を重ねていく。

それが旅行の醍醐味でもあるのだ。

「あ、拓夜さん、見て下さい！水鳥の親子ですよ！」

成瀬が指差す先には水鳥の親子らしき群れが泳いでおり、先頭を泳ぐ親鳥の後を必死になって泳ぐ子供の姿があった。

「本当だ……あんな鳥、テレビでしか見たことねぇや」

「私もです！あ、ボートもあるみたいですよ？」

「みたいだな。でも乗っていく時間はないし……また来ようぜ？そして一緒に乗ろうよ」

拓夜からの提案に成瀬は迷うこと無く頷いた。

すると、拓夜と成瀬の二人に結締が後ろから声を掛けてきた。

「お二人さん……ここも良いけど、俺はアッチに行くことをお勧めするぜぃ？」

口端をニヤリと釣り上げて結締は広場の奥を指差した。

そこには案内板が設けられており、二人はその板に書かれている名前に思わず注目した。

「こ……『恋人の聖地』！？」

何だそりゃ！？

鐘のマークが描かれているが、その聖地とやらには何があるのか？

拓夜がそう思うと、どこからか鐘が鳴り響く音が聴こえてきた。

まさか……と思うと、成瀬は拓夜の手を取り、案内板の示す方へと向けて足を動かす。

「拓夜さん！行きましょう！何としても行きましょう！絶対に行きましょう！」

「うわぁって花穂！？　ちょっと落ち着けって！」

拓夜を引っ張る成瀬は止まらない。

結締は恋人の聖地へと突撃する成瀬と、それに引っ張られる拓夜を見送り、ニヤニヤ顔で手をヒラヒラとさせていた。

「行ってらっしゃ～い」

「あ、結締さん」

結締は名を呼ばれた為そちらを振り向くと、そこには烏丸葉月と白石直也がいた。

二人は結締に寄り、浜名湖の風景を眺めながら話し出す。

「ふぅん……この景色を眺めながらのコーヒーは格別だな。まるでこの俺の為に用意されたステージだ」

「いやいや、それは無いぜぃ？この場所が白石さんのモノになっちまったら、あの鴨は怯える毎日を過ごさなくちゃならない……ほら？」

結締が指差した先を、白石は缶コーヒーを一口飲みながら見つめてみる。

そこには水鳥の親子がこの場を離れようと、必死になってバタ足をし、水面に水しぶきをバチャバチャとあげていた。

「何故だ!?　何故、俺が来た途端に逃げ出すんだ!!」

「獰猛な捕食者の餌食には誰にもなりたくないぜよ?」

「俺が一体、何をしたァア!?」

吠える白石だったが、葉月は辺りを見渡しながら結締に尋ねてみる。

「あの、他の皆さんは一体……?」

「さっき拓夜ちゃんに成瀬ちゃんなら、あの看板の先に向かったぜぃ」

結締が指差す先には『恋人の聖地』なる文字が見られた。

ああ、はいはいご馳走さまでした。

葉月は拓夜と成瀬の行動に引きつった笑みを浮かべると、肩に手を置かれた。

「へ？」

「ふぅん……、なに……案ずることはない。俺たちもゴールインの鐘を鳴らそうではないか」

「……はぁ？」

何やら先走りすぎている白石は、優雅に葉月の手を引きながら恋人の聖地へと進み出す。

「え、し、白石さん!？　あのっ!？」

「フハハハハッ!!　さぁ行くぞ美少女よ!!　拓夜たちに先を越されたのは不本意だが、奴らと俺たちで、ワン・ツー・フィニッシュどぅぁあ!？」

いきなり雄叫びをあげながらその場で崩れ落ちる白石。

彼の背後には葉月が肩で息をしながら立っており、どうやらその構えからして白石の背中に肘打ちを決めたらしい。

「ハァ……ハァ……！」

「む……無念……」

ガクッと白石が倒れたと同時に、どこからか鐘の音が響き渡る。

その正体は拓夜に成瀬が鐘を鳴らしている訳だが、結締から見れば葉月が白石をＫＯした終了の鐘にも聴こえた。

それと同時刻。

西条亭にマナは、外に並んでいるお土産品の数々を物色していた。

立ちこめる美味しそうな料理の匂いに引き寄せられて、マナが一向にこの場所から離れないのが原因だ。

一応トイレ休憩は済ませてあるが、余り長居をしてもいけない。

もしかしたら他のメンバーが車で待っているかもしれないからだ。
マナは美味しそうな煙をあげる屋台の前に立ち、喚起の声をあげる。
そこには、

「う～～な～～ぎ～～！！」

目を輝かせ、口から今にもヨダレを垂らしそうにしながら、マナは亨にねだった。

「さいじょお、さいじょお！うなぎだよ！私は今すぐにコレが食べたいんだよ！と言うか、うなぎが私に『食べて☆』って言っているんだよ！」

「言ってない、言ってない。って言うか、お前まだ食べれるのか？さっきそこでサンドイッチ食べたばっかじゃねーか」

呆れかえる亨だったが、マナは微動だにしない。

「うなぎさんのお弁当なんだよ？お弁当だから車の中でも食べられるし、焼きたてだし、ご当地の特産品なんだよ？絶対に美味しいに決まってるんだよ！」

余程このうなぎを食べたいのだろう、マナはうなぎ弁当を一つ掴み、離そうとしない。

店員のおじさんはマナにうなぎ弁当を売る気満々なようで、既に袋と箸を用意しながらニカッと笑い、白い歯を光らせている。

しかし確かに良い匂いだ。

そう考えると自分もつい欲しくなってしまいそうだ。

まぁ一箱くらい買ってやっても良いかな～、なんて思い、亨はポケットから財布を取り出す。

「すいません、おいくらですか？」

「へい毎度、一箱８００円だよ！」

高い……。

しかし、ご当地品ならばこれ位の出費は許せよう。

亨は財布の中から千円札を取り出し、店員のおじさんに渡そうとすると

「これは私の分で……こっちは、さいじょおの分！」

「へい毎度！お会計、１６００円だよ！」

いつの間にか増えていた。

「ダァァアア！？　一個で十分だっつーの！！　あ、おじさん！袋に積めないで！？　二個も袋に積めないで！！」

浜名湖サービスエリアのとある一角でも、亨の声が木霊した。

しばらくして旅行メンバーを乗せたエスティマが走り出す。
今回は助手席には烏丸葉月が座り、マナは後部座席にてうなぎ弁当を堪能していた。

「えへへ……、いっただっきま～～す！」

「……凄い……うなぎの匂いが……」

助手席に座る葉月が思わず声を洩らす。

確かにマナが食べるうなぎ弁当の匂いは強烈で、このままではレンタカーの車内に匂いが染み着いてしまう。

車を運転する亨は「換気するぞ～」と言い、パワーウインドを操作して運転席と助手席の窓を開けた。

窓を開けると時速１００?で走る車内に、凄まじい突風が吹き荒れる。

ブバババババ……！！

「お～お～、風が気持ちいぜぃ」

「ふぅん……俺はいま、風になっている……！」

後部座席に座る結締に白石も、前の席と同じように後部座席の両側の窓を開ける。

だが、そこで事件は起きた。

ブバババババ……！！！！

後部座席も窓を開けたことで、車内には更に風が吹き込んでくる。

すると、最後尾に座る拓夜に成瀬は思わず悲鳴に近い声をあげた。

「う、うわぁぁあ！？」

「キャァア！？　何なんですか、これ！？」

飛び交うご飯粒。

マナの持つうなぎ弁当、そのご飯粒が吹き込んでくる風に飛ばされ、車内で暴れるように四散したのだ。

もちろん、うなぎ弁当を手に持つマナは悲惨なことになっており、顔や服がうなぎのタレが染み込んだご飯粒まるけになっていたのだ。

そんなマナを見た結締に白石は慌てて窓を閉め、マナから距離をとる。

「ご、ごめんマナちゃん！？」

「だ、大丈夫か……？」

思わず条件反射的に誤る結締に白石。

マナは肩を小刻みにプルプルと震わせ、ゆっくりと運転席に座る亨

に迫りゆく。

「さ～～い～～じょ～～お！！」

「どうしたマナ……って何だお前、その顔！？　どんな食い方したら顔中ご飯粒まるけになるんだよ？　せっかくのご当地品なんだから、もっと味わってだな～」

「そ・れ・を……さいじょおが言うなーー！！！！！」

「ヌォォオ！？　揺らすな！！　頼むから揺らすな！！　お、俺が何かしたってのかよーー！？」

暴れるマナを何とか押さえつける結締に白石。

助手席に座る葉月はＯＣＧ研究会の様子に、ただただ唖然とするばかりであった。

高速道路を降りた旅行メンバーは宿泊先のホテルを目指し、湖沿い

の道を走っていた。

空は夕焼けに染まっており、後少しで日も暮れだす頃だろう。

一同は湖の近くに車を停め、少しの間休憩をすることにした。

「うぉお！この桟橋、波に揺られてて面白いぜぃ！」

「凄いです！まるで筏（イカダ）に乗ってるみたいです！」

「本当だ！やべっ、超楽しい！」

「ふぅん……なかなかの揺れだ」

「キャハ！さいじょおにはづきもおいでよー！」

結締に成瀬、拓夜に白石、そしてマナの五人は、タイヤで作られた湖の足場に乗りながら楽しくはしゃいでいた。

亨に葉月の二人は、それを見守りながら近くの砂浜に立ち、水面が揺れる湖を眺めていた。

「……烏丸さん」

亨は湖を眺めながら、隣に立つ葉月に話しかける。

「楽しめているか？　途中、余り喋ってなかっただろ？」

気遣うような言葉に、葉月はどこか慌てた仕草で返事をする。

「い、いえ……そんなことはないんです。ただその……皆さんに、驚かされることばかりで」

本当、驚かされることばかりだ。

ＯＣＧ研究会のメンバーは拓夜や成瀬は除いて、葉月にとっては未知の相手ばかりだった。

名前は知っていても、性格までは知らない。

ネット上でブログが載っていても、その人の普段の言動までは知らない。

葉月にとって、今回の旅行は始まったばかりであったが、彼らＯＣＧ研究会の素顔を見れた貴重な体験ができた。

だからこそ、その驚きが顕著に現れてしまい、上手く話すことができなかったのだ。

「ＯＣＧ研究会の皆さんって、思っていたよりも賑やかで、凄く……楽しくて……。そこに拓夜や成瀬さんもいるんだ……って思うと、少し羨ましくて」

「……だったら」

亨は足元に落ちていた小石を掴み、湖の向こう岸目掛けて思い切り投げつける。

「“だったら、葉月も入れば良い。ＯＣＧ研究会に”」

「えっ……！？」

葉月は思わずドキッとする。

亨の自分に対する呼び方が変わったことに、思わず胸の鼓動が高鳴る。

亨は振り返り、葉月を見ながら笑顔を作った。

「拓夜くんや成瀬さんなら、きっと君にそう言うと思うよ」

「……」

確かに亨が言うように、拓夜に成瀬ならそう言うだろう。

入れるのであれば自分もその輪に加わりたい、と葉月は思う。

しかし、それと同時に別の思いも膨らんでいく。

本当に自分も、その輪の中に入っても良いのだろうか、と。

亨はこう言った。

“拓夜くんや成瀬さんなら”と。

では、亨自身はどう思っているだろう?

ＯＣＧ研究会のメンバーを増やすことを良しとしてくれるだろうか？

そう思った葉月は思わず、その気持ちの断片を洩らした。

「私は……その……ＯＣＧ研究会に……」

そこまで言って、葉月はふと思い出す。

そうだ……私は……。

この人と……もう一度……。

「……デュエルをしたい」

そうだ。

私は、この人にリベンジして勝ちたい。

だからこの旅行の話にも乗った。

だからこの人と、こうして二人になるチャンスを待った。

「デュエルか……」

葉月の言葉を聞き、亨は葉月に尋ねてみた。

「それは、また俺とデュエルがしたい……という意味かな？」

亨の質問に葉月は迷うことなく頷いた。

すると亨は「そうか……」と言い、顔を俯けて表情に影をつくる。

「……君は」

「？」

「君は、この間のデュエル……どんな気持ちで戦っていた？」

「え……？」

予想外の質問に挙を突かれた葉月。

葉月はとっさにあの時の自分のデュエルを振り返り、思ったことを述べた。

「あの時は……勝ちたい……。そう、勝ちたいと思ってた。私の全てをぶつけてでも、亨さんに勝ちたいって……」

「……そうか」

亨はそう言うと、真っ直ぐに葉月を見つめた。

その視線に吸い込まれるように、葉月も亨を真っ直ぐに見つめる。

そして亨はゆっくりと口を開き、自分の思いを口にした。

「君が俺を目標にするというのなら、俺は君の期待に応えよう。」

「……えっ、それって……！？」

目標、それは西条亨を倒すこと。

そして期待に応えるということは、葉月とのデュエルを引き受けると見ても良いだろう。

葉月が徐々にそのことを理解し始めた時、葉月は頬を赤らめてとびっきりの笑顔で頷いた。

「あ、ありがとうございます！亨さん！」

亨は葉月の再挑戦を受け入れた。

受け入れられたことに気が緩み、ホッと胸をひとなでする葉月。

「胸のわだかまりは取れたみたいだな」

亨はそう言い、葉月を皆のいる方へ押し出す。

「ほら、烏丸さんも皆と一緒に楽しんでこい！折角の旅行なんだからさ」

しばらく湖で休みがてら楽しく騒ぐ旅行メンバー。

ホテルに到着した頃には、もう夜になっていた。

「部屋には俺がいっちばーん！！」

そう言ってベッドにダイブするのは結締。

結締はバネの効いたふかふかベッドの上でポンポンと跳ね上がる。

そして結締に続いて、残りの男性メンバーがゾロゾロと部屋に入ってきた。

「ふぅん……なかなかの部屋だ」

「うわぁ……スッゲー！ホテルなんて、学校の修学旅行でしか来たことねぇや！！」

「……」

なかなかに豪華な部屋の造りに感極まる白石に拓夜。

亨は一人、財布の中を見て溜め息をついていた。

「あれ、ベッドって……三つしかないみたいですけど？」

部屋を眺める拓夜は用意されていたベッドの数に疑問を抱く。

男性メンバーは四人。

ベッドの数は三つ。

明らかに一台足りない。

「あ～拓夜ちゃん、それはしょうがないぜよ？」

左端のベッドで寝転ぶ結締がニヤニヤしながらその訳を話す。

「元々、用意されていたチケットには三名までとなっているぜぃ？
そこにイレギュラーとして追加された西条ちゃんの分のベッドは、
当然のこと在るわけないんだな～」

「つ、追加されたって……そんな言い方は……」

「気にすることはないぞ拓夜。ちゃんとホテルの係員が布団を敷き
にくるだろう……西条の奴は、普段は押入で寝ているからな。ベッ
ドだろうが布団だろうが、奴にすればここはパラダイスだろう」

「え……？」

拓夜はキョトンとしながら亨を見ると、彼は部屋にある押入を開けて

「うわ、ちょっと狭いな～。これじゃ足を曲げなきゃ寝れないじゃんか」

「……」

どうやら押入で寝る気満々だったらしい。

拓夜は特に何も言わないであげることにした。

誰がどこで寝ようが、個人の自由なのだ。

「みんな～、押入には俺が寝るから、誰も場所とるなよ？」

「取らねーぜよ」

ホテルの一室にて、不敵な笑みを浮かべた結締が自分のカバンを漁っている。

別に自分のカバンを漁ることはどうと言うことはない。

問題はその理由にあるのだ。

「ふぃ～、見つけたぜぃ！」

そう言い結締がカバンから取り出した物とは

「……聴診器？」

「そう……お医者さんが患者さんの胸や背中に当てて、患者さんの呼吸状態を把握する為の医療器具だぜぃ！」

それは言われなくても分かってはいるが、なぜこの場に聴診器が必

要なのか？

一体、誰の呼吸状態を知りたいのだろうか？

拓夜がその使い道について尋ねようとすると結締は早速、行動に移した。

「コレをこうして壁につけて～♪」

壁に聴診器を当てる結締。

壁から一体、何が聞きとれるのだろうか？

しばらくしてニヤニヤ顔の結締は聴診器を外すと、

「白石さん、そろそろ頃合いみたいぜよ？」

結締が声をかけると、それまでベッドで寝転がり仮眠をとっていた白石はパチリと目を覚ました。

「……そうか……、ならば早速、作戦を開始するとしよう」

「……作戦……？」

一体、何のことだろう？

起き上がり、ビデオカメラを用意する白石に、拓夜は聞いてみることにした。

「あの……白石さん、それに結締さんも……これから一体、何が始まるんですか？」

拓夜の質問に二人の動きがピタリと止まる。

「そうだな……拓夜もついてくるか？」

「え？」

「拓夜ちゃんも一緒に、夢を追いかけようぜぃ」

「だから、ドコに……？」

拓夜を連れ出そうとする結締に白石。
すると押入の戸が開き、中から亨が顔を出した。

「止めとけ拓夜くん……」

「と、亨さん……！」

静止の声をかけるということは、亨は二人のこれからの行動を知っているということなのだろう。

「覗きは良くないぞ……大抵、失敗するのがオチだ」

・・・・・・・・・・

「……えっ！？」

覗き？

一体どういうことなのか？

訳も分からない拓夜に、結締は説明を始める。

「さっきの聴診器で、隣の部屋を使っている女性陣の会話を聞き取った結果、どうやらこれから露天風呂に向かうことが判明したぜよ！」

「よって俺たちは、美少女たちを覗きの魔の手から守る為に、自ら進んで見張り役をやろうということだ！」

何とまあ、頼もしいことで……。

「ふぅん……拓夜、誤解されがちだが……俺たちはただ純粋に美少女たちの身を案じて行動するだけだ。決して、他意はない！」

力説する白石だったが、拓夜は冷めた視線を彼が持つビデオカメラに向けて質問する。

「見張り役に、そんなもの（ビデオカメラ）なんて必要なんすか？」

「あぁ……覗きとやらの犯人をこのカメラで捉え、犯行現場を証拠として残す為の、“必須アイテム”だ！！」

「……」

覗こうとしている危険な人物なら、既に二人ここにいる。

拓夜が二人に静止の声をかけようとすると、白石に代わって結締がまくし立てるように話しかけてきた。

「まぁまぁ拓夜ちゃん……この際、覗き云々は良いとして」

「いえ、良くないですよ」

「話は最後まで聞くもんだぜぃ？　拓夜ちゃんは気にならないのかな～～？　自分の彼女の一糸纏わぬお姿を！！」

「そ、それは……っ！？」

「気になるよな～？　気になってくるよな～？　でもそれが男って生き物なんだぜぃ……。衝動的な欲求に襲われることだってある、でもそれが男って生き物なんだぜぃ……」

「でも、例え好きな娘がいるからって……仮にもし、覗いていることがバレたら」

「バレる？　何を言っているのかな～～拓夜ちゃんは」

結締は不敵な笑みを浮かべながら、部屋に用意してあったメモ用紙にペンを走らせ、一瞬の内に何かの見取り図を描きだした。

「こ、これは……！？」

「ただの女性用露天風呂の見取り図と、その周囲の地図だぜぃ！」

一瞬の内に書き上げることもそうだが、一体いつの間に女性用露天風呂の見取り図や、その周囲の地図を覚えたりしたのだろうか？

拓夜がそのことを尋ねると

「ンなもん、夕食後に寄り道しがてら下見に行ってきただけだぜぃ？」

抜かりはなかった。

何とかして引き止めたい拓夜だったが、結締が言った成瀬の一糸纏わぬお姿というのも見てみたい。

……いや、見たい！！

その間にも結締はメモ用紙に書いた見取り図に周囲の地図を広げ、段取りを説明する。

「一つ目のポイントはこの竹の柵の微妙な割れ目に、小型のスコープを刺して覗くって訳だ。ちなみにこの位置だと、最低二人まではＯＫだ。それ以上の人数になると足場の竹が折れてしまう可能性があるぜぃ」

「ふぅん……足下が用水路になっていて、そこに足場となる竹板が敷いてある訳か……なる程な、ところで結締よ、まだ他にポイントはあるのか？」

「当たり前だぜぃ？もう一カ所は……ここだぜぃ」

結締が指差すポイントに男性陣全員が注目する。

拓夜だけでなく、いつの間にか亨までもが結締に寄り、作戦を聞いていた。

「最初に言ったポイントとは間逆の位置になるが、ここにはかなりの高さの木が植えてある。」

「おい結締、まさか……」

結締の話を聞き、亨が恐る恐る尋ねる。

「まさか……この木に登って、上から眺めるってのが、第二ポイントなのか？」

「その通りだぜぃ、西条ちゃん！ちなみにここは一人だけだ。それ以上の人数で登ると、明らかに木が不自然な揺れをしちまうからな……」

「結締さん、まだ他に……覗きポイントはあるんですか？」

興奮する気持ちを何とか抑えながら、拓夜は身を乗り出して尋ねる。

「拓夜ちゃん……言っても良いのか？　この話を最後まで聞いちまったら、もう拓夜ちゃんは無関係じゃ居られなくなっちまうぜぃ？」

「構いません！」

拓夜はキッパリと断言する。

そして潔く、自分の欲望をぶちまけた。

「俺は……見たいんです！花穂の一糸纏わぬ姿を！　この気持ちに嘘は……嘘はつけません！！」

「よくぞ言った、拓夜ァア！！」

拓夜の気持ちを聞いた白石が吼えた。

そして結締は、そんな拓夜の為にとっておきのポイントを教えたのだ。

「拓夜ちゃん、耳を貸すんだ。本当は俺が使う予定だったこのとっておきのポイントを、拓夜ちゃんにだけ教えてやる！」

その場所とは……！？

男性陣一同は女性用露天風呂を覗く為の所定の位置に到着した。

結締に白石の二人はポイント1、つまりは柵の隙間に小型のスコープを突き刺し、中の様子を伺う作戦だ。

そして亨はポイント2、つまりは木によじ登り、高い位置から双眼鏡で中の様子を伺う作戦。

そしてとっておきの場所にポジションを置く拓夜、その場所とは……。

「……」

拓夜は息を殺しながら、植えられた茂みの中をゆっくりと進む。

茂みの枝葉が腕や足、体中を引っ掻くが、そんなことに痛みの声をあげる訳にはいかない。

このまま先に進めば、新天地……パラダイスが待っているのだ！！

結締が言うとっておきの場所とは、まさしく女性用露天風呂、その中！！

この女性用露天風呂の構図は、周りを竹でできた柵で囲んでいる。

だが、一カ所だけ柵が設置されていない場所があるのだ。

この露天風呂は、大きな石垣が建てられており、その石垣の頂上から滝が流れ落ちるように源泉が流れ落ちている。

結締が言うとっておきとは、正にこの石垣の頂上なのだ。

頂上は結構な高さで、下から見上げても頂上はとても小さく見えてしまう。

更に時間帯が幸いしており、夜の闇は黒い服を着ていけば、おいそれと発見される確率はグンと減少する。

茂みを進む拓夜は、目の前に巨大な石垣が積み上げられている場所へ出た。

拓夜は積み上げられた石垣を見上げ、ゴクリと唾を飲み込んだ。

手には白石から託されたビデオカメラが。

最高のポジションで見ることになった拓夜には、ビデオ撮影という仕事を任されたのだ。

（……この石垣を登れば……！！）

意を決し、石垣の窪みに手と足を掛けてロッククライミングを開始する拓夜。

（……登りきれば、そこは……！！）

視点は変わり、亨の状況。

亨は現在、双眼鏡を首に掛けて、極太の大木をよじ登っていた。

木登りなんて、まさかこの歳になってするとは思わなかった。

しかし、この大木を登りきれば、彼にはユートピアが待っている。

「くっ、……ふっ、……！！」

少しずつよじ登りながら、亨はここに至るまでの経緯を思い出していた。

外に出ると、亨に拓夜は結締からそれぞれ一つの袋を渡された。

袋の中は、黒いロングコートが入っていた。

『時間帯は夜。黒色の服を羽織れば、向こうから発見される可能性は少しは減るはずだぜぃ？　西条ちゃんに拓夜ちゃんは、必ずこのコートを羽織ってから、ミッションを開始してくれ！』

何とまあ、準備が良いというか……。

途中に生えている枝を足場に、どんどん登っていく亨。

まだ叫び声が聞こえないということは、恐らくまだ見つかっていないということだろう。

目的の高さまで、もうあと少しだ。

亨は湧き上がる欲望を活力に、ラストスパートをかけた。

更に更に視点は移り変わり、結締に白石の状況だ。

彼ら二人のポイントには、拓夜や亨よりも比較的早くに到着できた。

結締は竹の柵の隙間にプラスドライバーを差し込み、ほんの少しの

隙間を作り上げる。

もちろん、ここで物音を立ててはいけない。

不審な音を立てようものなら、一瞬でバレるだろう。

幸いドライバーを差し込んだ程度では、まだ感づかれてはいないようだ。

次に結締は小型スコープの先端を、ドライバーで作った隙間にゆっくりと差し込んだ。

白石も結締と同じように、別の場所に小型スコープを差し込み、互いに頷きあい、準備ができた事を知らせる。

（どうやらバレてはいないみたいだぜぃ、白石さん）

（ふぅん……では早速、俺は美少女の美体でも拝むとしよう）

（うへへ、俺はマナちゃんのダイナマイトバディを、この網膜に焼き付けてやんぜぃ！！）

それぞれが設置したレンズに目を当て、息を殺しながら中の様子を覗き見る。

「……あれ？」

「ムゥゥ……ッ！？」

険しい表情で唸る結締に白石。

その訳とは……。

（……白い……モヤが……あれ？）

（ゆ、湯気で何も見えないではないかァア！！）

スコープを引き抜いてレンズを拭こうものなら、引き抜いた際に確実に物音がし、バレてしまうだろう。

湯気のように、結締と白石の二人に絶望感が立ち込める。

二人のミッションは、失敗に終わった。

「っっと、な……何とかたどり着いたか……」

目的の高さにまで大木を登りきった亨は、やや太めの枝に座り、大きな溜め息を吐いた。

登る途中で手のひらに棘が刺さり、止めようかなとも思ったが、今は登りきったことによる達成感が大きい。

その理由としては不純ではあるが……。

亨のポジションは、女性用露天風呂からはやや離れており、少しくらい声を出してもバレることはそうないだろう。

「ふぅ……さて、俺も楽しませてもらうかな～？」

亨はそう言い、首に掛けてあった双眼鏡を取り、両の目にレンズを当てる。

「……あれ？」

思わず素っ頓狂な声をあげる亨。

その理由としては、確かに首に掛けてあったはずの双眼鏡が、いつの間にか無くなっているのだ。

「え、無い？　何で？　一体……ッ！？」

辺りをキョロキョロと見渡し確認するが、かなり高い位置にいる為に、もし途中で落としたのであれば、また地上まで降りなければならない。

「うわぁぁあ……馬鹿だオレ……絶対に途中で落としたんだ……」

地上まで降りて、再び登るという案は亨の中になかった。

体力が保たない。

……絶対に。

「ハァ……ま、所詮はこんなもんだろ。悪いことすると、罰は当たるってもんだ……ハァ……」

亨は溜め息を連発しながら夜空を見上げる。

ああ、今日は満月が綺麗だ。

一方その頃……。

旅行メンバーの男性陣がお馬鹿なことをしているとはいざ知らず、成瀬に葉月、そしてマナの三人は、ゆったりと湯船に浸かっていた。

「はぅぅ……気持ちィ……」

「露天風呂、やっぱり最高よね～」

「はい、そうですね……」

三人はそれぞれに感嘆の声を漏らす。

旅先での露天風呂。

温泉でないのが残念だが、それでも充分にリラックスできる最高の時間だ。

「あ、そういえば……かほって、たくやと付き合っているんだよね？」

「あ、はい……そうですが……」

マナからの発言に答える成瀬だったが内心、心臓がドキンと跳ね上がった。

その理由としては、隣で一緒に湯船に浸かる葉月だ。

思い起こせば、拓夜と付き合うことになったのは第七祭でのことだ。

あの時、拓夜は葉月からの告白を断り、成瀬と付き合うことになった。

いつの間にか三角関係だった状態が、その均衡を崩したのだ。

拓夜と付き合いだしてからは、成瀬は葉月に申し訳なさを感じていた。

葉月から拓夜を奪った泥棒猫みたいだ、と……自分でも思ったこともあった。

しかし、葉月は特に何か嫌がらせをする訳ではなく、むしろ自分たちを祝福し、応援してくれた。

凄く、強い女性だなと、成瀬は思った。

しかしいざ、こうして本人を前にして言われると、多少は後ろめたい気持ちが出てくる。

そんな成瀬の気持ちを察したのか、隣で浸かる葉月は成瀬の肩を突っついた。

「良いわよ成瀬さん……私はもう、吹っ切れたから」

「……葉月さん」

葉月の優しさに改めて心打たれる成瀬。

マナは二人の詳しい関係は知らないが、その様子に何か感じるものがあった。

「あ、う、……何か……聞いちゃマズかったかな？ゴメンね」

「い、いえ……」

慌てて返事を返す成瀬だったが、このままでは折角の露天風呂での雰囲気が台無しになってしまう。

葉月は話を変えるつもりで、マナに尋ねてみた。

「あの……マナさんは、亨さんと……付き合っているんですよね？」

葉月の質問に対し、マナからの返事は葉月にとって予想外なものだった。

「う～ん……私たちの場合……付き合ってるって言うより……」

「そうですよね……だってマナさん、亨さんと長いこと一緒に棲んでいるんですもんね？」

「ぶっ！？　え、い、一緒に棲んでるですって！？」

成瀬の発言を聞き、思わず吹き出し、滑りそうになる葉月。

マナはぎこちない笑みを浮かべ、彼女らの質問に答えた。

「そうだね……さいじょおが高校生の時からだから……もう三年になるかな？」

「さ……三年も……」

思わず唖然とし、ガックリと肩を落とす葉月。

つまりは自分だけなのだ。

彼氏がいないのが。

そんなことを感じていると、今度はマナから葉月に質問された。

「所で、はづきには彼氏さんとか居ないの？」

「え、彼氏……は……いないです」

「ウソっ！？　はづきって可愛いのに……あ、じゃあ……好きな人とかはいないの？」

「え、好きな人……」

尋ねられ、葉月は改めて自分自身を観察してみる。

昔は拓夜が好きだった。

しかし、成瀬と拓夜が付き合うようになってからは、自分はキッパリ拓夜を諦めることにした。

しかし、自分の心が空洞になっている時間はそう無かった。

頭の中にぼんやりと浮かんでくるその人……。

夜空に浮かぶ満月を見上げながら、葉月は最近になって少し気になる男性のことを想ってみることにした。

すると……。

「……えッ！？」

月を見上げる視線の途中、葉月は思わず目を見開いた。

（と……亨さん……よね？）

人違いだろうか？

見上げる過程での遠くに見える木の枝に、亨らしき人物も同じように月を見上げているように見えたのだ。

（まさか……あんな危ない所に……！？）

普通ならいる筈無いだろう。

葉月は目を擦り、もう一度、亨らしき人物がいた場合を眺め見る。

（……あれ？）

再び確認してみると、もう木の所には人影は見当たらなかった。

目の錯覚だろうか？

それとも……。

自分が知らず知らずの内に、マナに言われて亨のことを想ってしまったのだろうか？

（……亨さん……あたし……まさか……）

「……葉月さん？」

「え……はづき、はづき！？」

成瀬やマナが何やら自分のことを呼んでいるようにも聞こえるが、体に力が入らず、返事を返すこともできない。

葉月の意識は、いつの間にか微睡みの中へと沈んでいった。

「つ……着いた……！！」

拓夜は必死の思いで、何とか石垣の頂上に到着した。

途中、濡れた足場に何度転び落ちそうになったことか……。

（……しかし、そんな苦渋も……全ては……！！）

全ては成瀬の裸の為！！

手にしたビデオカメラのバッテリーは満タンだ。

カメラの位置取りも完璧、よし、イケる！！

「……ミッション、スタート」

拓夜はカメラを露天風呂内部に向けて、録画を開始する。

しかし、ここで思わぬアクシデントが発生したのだ。

カメラを向ける拓夜だったが、そこには

「……だ、誰もいねぇ！？」

一体どういうことなのか？

まさかもう、お風呂から上がってしまったのだろうか？

（……そんな……俺の……ここまで来た茨の道って……一体……ん？）

拓夜がうなだれていると、ガラガラッと戸が開く音がした。

どうやら誰かが入って来たらしい。

（チャンスだ！！　きっとまた露天風呂に入りに来たんだ！！　こうなったら花穂じゃなくても、マナさんでも葉月でも良い！！　このカメラに、その美体を……）

その瞬間、拓夜は一瞬の内に凍り付いた。

別に拓夜がバレた訳ではない。

問題はカメラに映すモデルが問題すぎたのだ。

（ま……マツコＤＸ並みの……デブ……）

嘘せかえるような吐き気を覚えつつ、拓夜はそのまま後ろへと転がり落ちていった。

結果、男性陣の野望は全て、失敗に終わったのであった。

富士急ハイランドへ　覗き編　（後書き）

次話よりデュエルを始め・・・れるのか？

デュエルを楽しみにしている方々には申し訳ないですが、これは次のデュエルに繋げる為の布石だと思って・・・ね？

富士急ハイランドへ　決闘編　序　（前書き）

今回は後書きにデッキレシピを1つ載せてみました。

このデッキレシピを元に、自分なりのデッキを組んでみては？

って何様のつもりだって話ですね、スイマセン・・・

ただ、このレシピを見て思った事、こう改良したほうが、参考になった事などありましたら、ドシドシご意見ください。

富士急ハイランドへ　決闘編　序

目が覚めると、そこはホテルの自室のベッドの上だった。
どうやらお風呂に浸かっている間に逆上せてしまったらしい。
まだ気だるい感じはするが、寝てばかりもいられない。
葉月はそう思い、ゆっくりと体を起こしてみた。
すると、

「はづき！」
「葉月さん！」

体を起こした途端、部屋に居たマナと成瀬にいきなり抱きつかれた。

「ま、マナさん!?　成瀬さんまで!?　ちょ、苦しいって……」

抱きつく二人はどこか涙ぐんでおり、肩が小刻みに震えていた。

「葉月さん……目が覚めて……ホントに良かった！！」

「どうなるかと心配したんだから……」

「……ごめんね」

自分だってまさかこんなことになるとは思わなかった。

余程、マナに質問されて想像したことに自分が興奮していたのだろう。

すると部屋のドアが開き、そこに旅行メンバーの男性陣が入ってきた。

「お、目が覚めたみたいぜよ！？」

「ふぬぉオ！！　美少女よーー！！」

「葉月！！」

結締に白石、そして拓夜が駆け寄り、それぞれに心配の声をかけた。

そして……

「気分はどうだ、烏丸さん？」

「……あ」

亨が水の入ったペットボトルと、アイスノンを持って話しかける。

露天風呂で、自分が無意識の内に想い描いた人物を前に、葉月は顔を真っ赤にしながら

「ご、ゴメンナサイ……迷惑をかけて……」

俯く葉月。

だが確実に少しずつ体力は戻ってきたようだ。

起き上がった時よりも着実に筋の力が少しずつ戻ってきているのが何となくわかる。

しかし、まだ頭がボーっとしているようで、思っていることが上手く言葉として表れない。

「烏丸さん、まだ横になっていた方がいい」

亨は葉月に寝るように良い、頭部と両手、両足にアイスノンを当てがった。

「ぁ……気持ちぃ……」

少しずつ冷静さを取り戻した葉月。

今の気持ちは皆への申し訳なさでいっぱいだった。

ここに来るまでの間、元気がないことを心配され、仕舞には風呂でのぼせてしまう羽目に、そしてまた心配をかける。

（……良いことないな、今日の私……）

そんな事を考えながら、葉月の意識は再び暗闇の中へと沈んでいった。

次に目を覚ました時、部屋の中は真っ暗だった。

まだ目が慣れないが、自分の周りに皆がいるのは分かる。

近くから拓夜に成瀬、マナに白石や結締の寝息が聞こえてくる。

次第に目も暗闇に慣れだした為、体を起こして辺りを確認する。

自分のベッドの周りには、ＯＣＧ研究会の皆が集まって眠っていた。

「……みんな……」

本当に迷惑をかけてしまったな、と改めて感じる葉月。

それと同時に感謝の気持ちも溢れ出してくる。

今まで特に深い繋がりがあった訳でもない研究会のメンバー。
今まで自分のことに、こうまでして接し、心配してくれる人なんて
そうもいなかった。

「何だ、目が覚めたのか？」

いきなり声を掛けられ、ハッとなる葉月。
そこにはベランダから部屋に入ってきた亨がいた。

「もう大丈夫なのか？」

亨は皆を起こさないように静かに部屋の中に入ってくる。
葉月は気恥ずかしさの余り、うずくまりながら、自分に掛けられた
タオルケットで顔を隠す。

「す、すいませんでした……ご迷惑を、おかけして……」

「良いって、元気になって何よりだ。……それより」

亨は自分の腰に装着してあったカードホルダーを取り出し、それを葉月に見せる。

「また直ぐに寝ろって言っても眠れないだろ？　どうだ？　時間潰しに俺とデュエルをやらないか？」

「え……っ！？」

まさかの亨からのデュエルの誘いにキョトンとなる葉月。

このタイミングでデュエルに誘われるなんて思ってもみなかった。

「それか……シャワーを浴びてからにするか？　よく寝てたから、寝汗かいてるだろ？」

「は、はい……そうさせてもらいます……」

男性陣が使用する筈の部屋だが現在、人一人もいない。

理由としては皆が葉月の心配をし、全員で看病している間に寝てしまった為である。

葉月は隣の部屋でシャワーを浴びた後、ホテルの浴衣に着替えて戻ってきた。

「お、お待たせしました……」

戻ってきた葉月を見て、亨は思わず少しの間だが見とれてしまった。

そして同時に思う。

（……白石なら、確実にアウトだな……放送禁止的な意味で……）

風呂上がりの艶のある肌に、しっとりと濡れた肩まである綺麗な茶色をしたストレートな髪。

浴衣の隙間からみえる露出した肌からは多少なりとも色気を感じずにはいられない。

とにかく見とれていても話は進まない。

「それじゃ、始めるとするか」

「はい、よろしくお願いします！」

二人は部屋の隅に移動し、それぞれのデッキを用意する。

葉月が自分のデッキをシャッフルしていると、不意に亨が尋ねてきた。

「烏丸さんのデッキは、今回もブラック・フェザーなのかい？」

「はい、私はずっとこのデッキで戦ってきましたから……亨さんのそのデッキは、前と同じデッキなんですか？」

「いや……今回は違うよ」

「……え？」

前回と同じデッキじゃないことを聞き、驚きの声を漏らす葉月。

葉月にとって今回の亨とのデュエルは、前回敗北したことへのリベンジが目的であった。

ならば、その時に戦ったデッキでなければ、フェアとは言えないだろう。

そんな葉月の気持ちを察してか、亨はどこか申し訳なさそうに話しだす。

「すまないな、烏丸さんからすれば納得いかないかもしれないが、先ずはこのデッキとデュエルをしてくれないか？　コイツがどうしても、君と戦いたいって聞かなくてさ……」

「コイツって……そのデッキのことですか？」

「ああ。何ならこのデッキでのデュエルの後、君の望むデッキでデュエルをしようじゃないか」

亨からの提案にとりあえず葉月は納得した。

あの時のデッキと再びデュエルができるのであれば問題ない。

準備が整った両者は互いに見つめ合い、同時に宣言した。

「さあ……始めようか」

「はい、よろしくお願いします！」

『デュエル！！』

「先攻は俺から貰うぜ……カードドロー！」

先攻　西条　亨　ＬＰ／　８０００
後攻　烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

亨と葉月、真夜中のデュエルが始まった。

先攻をとった亨はデッキからカードをドローし、先攻プレイを開始した。

「モンスターを一体セットし、リバースカードを一枚セット。ターンエンド」

「え……！？」

葉月は亨のプレイに思わず声を漏らしてしまった。

理由としては、たったそれだけ？ということだ。

前回のデュエルでは、亨は先攻１ターン目から凄まじい勢いでモンスターを展開してきた。

今回もそれに匹敵するくらいのプレイを魅せてくれるのかと期待していた葉月だったが……。

（前とデッキが違うから、仕方ないと言えば仕方ないか……でも）

ある意味これは攻めるチャンスだ。

伏せられた一枚のリバースカード、相手が相手なだけに油断はならないが、攻めなければ相手のライフを削ることはできない。

葉月のターンに移行し、葉月は自分のプレイを開始した。

「ドロー！　私は手札の永続魔法『黒い旋風』を発動！」

【黒い旋風】
永続魔法
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のつくモンスターが召喚された時、自分のデッキから、そのモンスターの攻撃力より低い攻撃力をもつ「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

「そして手札から、黒槍のブラストを召喚！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　８００
効果
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

黒槍のブラストを召喚した葉月は、永続魔法『黒い旋風』の効果を発動する。

「黒槍のブラストが召喚に成功したことで、デッキから、月影のカルートを手札に加えるわ！」

デッキから月影のカルートを手札に加える葉月。
そして葉月は、そのままバトルフェイズへと突入する。

「バトル！　黒槍のブラストで、亨さんのセットモンスターを攻撃！」

ダメージステップに入り、亨のセットモンスターが表側表示になる。
そのモンスターは……、

「俺のモンスターは『ガスタ・イグル』だ。確か黒槍のブラストには、貫通効果があるんだったな？」

【ガスタ・イグル】
星１／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２００
ＤＥＦ　４００
チューナー・効果

このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからチューナー以外のレベル４以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

黒槍のブラストの攻撃力は１７００、『ガスタ・イグル』の守備力は４００。

亨はその数値差分だけの戦闘ダメージを受けた。

西条　亨　ＬＰ／　８０００　→　６７００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

（ガスタ……！？　聞き慣れないモンスターね）

【ガスタシリーズ】は確かつい最近、市場に出回り始めたばかりのカードだ。

まだ関連するカード枚数も多くなく、更には葉月の周りにはそのカードを使用する者がいなかった。

葉月にとって、ほとんど未知の相手だと言っても良いだろう。

亨のモンスター、『ガスタ・イグル』を戦闘破壊し、先制ダメージを与えた葉月。

だが『ガスタ・イグル』は効果モンスター。

亨は早速、その効果を発動した。

「『ガスタ・イグル』が戦闘破壊され墓地へ送られた時、デッキからチューナー以外のレベル４以下の【ガスタ】一体を特殊召喚する。……こい、『ガスタの巫女　ウィンダ』！」

【ガスタの巫女　ウィンダ】
星２／風属性／サイキック族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　４００
効果
このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する事ができる。

亨はデッキから『ガスタの巫女　ウィンダ』を攻撃表示で特殊召喚した。

その時だ……。

（……お兄ちゃん……）

「えっ……なに!?」

（……お兄ちゃん……）

葉月は辺りを見渡した。

しかし、周りには旅行メンバーが眠っているだけであり、誰も“お兄ちゃん”などと呼ぶような者もいない。

では、いま自分の頭の中に響いてきたあの声は、一体何なのだろうか？

「今の声……一体……!?」

「……烏丸さん、まさか……！？」

亨は葉月の様子に、思わず目を見開いた。

そして思わず尋ねてみた。

「今の声が……聞こえたのか？」

「今の声って……あの、お兄ちゃんって……」

「ッ！？」

ドクンッ！！　と、亨は心臓が跳ね上がったような気がした。

まさか聞こえるとは思ってなかった。

まさか自分以外の人間に、この子の声が届くなんて思ってもみなかった。

「……烏丸さん」

「は、はい……」

「君は、カードにも心があるって……信じれるかい？」

「心……ですか……？」

いきなりの質問に少し考える葉月。

カードに心。

そして先ほど、頭の中に響いてくるように聞こえてきた声。

お兄ちゃん……と。

その声は亨があのカードを特殊召喚してからだ。

そのカードとは……

「……まさか……そのカードの……！？」

葉月は驚愕の目で、一枚のカードを見つめる。

そのカード、『ガスタの巫女　ウィンダ』を手にとり、亨は葉月にとって信じられないような話を始めた。

「信じられないかもしれないがな……このカードには俺たち人間と同じように心があるんだ。いや、このカードだけじゃない……全てのカード、と言っても良いかな」

「……」

「詳しく話せば長くなるから省略させてもらうが……どうやらこの子と烏丸さんの波長が似ていることから、この子の声が聞こえてきたんだ」

「波長……え……？」

亨の話で訳が解らなくなる葉月。

更にその間にも、亨が言うカードからの声が頭に響いてくる。

「な、何なのコレ……！？」

パニック状態になりそうな葉月。

とにかく落ち着こうと、葉月は目を閉じて大きく深呼吸を一回。

そして手札の一枚を掴み、気を紛らわすようにプレイを続けた。

「か、カードを一枚セットして、ターン終了！」

葉月はターンを終了し、亨のターンへと移行する。

「俺のターン、ドロー」

亨はデッキからカードをドローし、葉月を見る。

どうやら自分の言葉に大分動揺しているらしい。

すると、亨の頭にも声が響いてきた。

（ビックリしたね、お兄ちゃん！）

（ああ、まさか烏丸さんにもウィンの声が聞こえるなんてな……）

（あのお姉ちゃん、強いの？）

（ああ、強いよ……とてもな）

（そう……なんだ……）

頭に響いてくるウィンダの声は、一拍置いてから元気な声で響いてきた。

（お兄ちゃん、それからお姉ちゃんも、頑張ってね！）

「ッ！？」

その声にハッとする葉月。

今度は完全に聞こえた。

ハッキリと、元気な明るい声で。

葉月は頬を抓るが、ただ痛いだけ。

どうやら夢じゃないらしい。

そんな事をしていると、亨から声をかけられた。

「烏丸さん」

「……あ、はい！？」

「烏丸さんにも聞こえただろ？　ウィンの応援する声が……」

ウィンの応援する声、それは先程、頭の中に響いてきた声……。

「……は、はい……私と……亨さんに、頑張れって……」

「そうだ。だから烏丸さん、精一杯楽しもう！　このデュエルを！」

亨の言葉に吸い寄せられるかのように、葉月は亨を見つめる。

仮にもし、デュエルモンスターズに精霊と呼ばれるカードが存在するとしたら？

仮にもし、その精霊と意思疎通できる者が存在するとしたら？

仮にもし、その者が今現在、自分の目の前にいるとしたら？

葉月は思う。

（私は今、そんな相手とデュエルをしている……）

面白いではないか。

よくよく考えてみれば、相手はＯＣＧ研究会の一人、更にはカード

の精霊の応援付き。
これがデュエリストにとって燃えない訳がない。

「……いです……」

「？」

「楽しいです、亨さん！全力で掛かってきて下さい！私が返り討ちにしてやるんだから！」

葉月の笑顔を見て、亨は口端を軽く吊り上げ、小さな笑みを浮かべる。

「フッ……ならば俺は、全力で挑ませてもらうぜ！　烏丸さん！」

富士急ハイランドへ　決闘編　序　（後書き）

今回、作中に登場したデッキのレシピ

【ガスタデッキ】

デッキ枚数４０枚

【モンスター】１８枚
風帝ライザー　×２
ガスタの賢者　ウィンダール
ガスタの静寂　カーム　×３
ガスタの巫女　ウィンダ　×３
ガスタ・サンボルト　×２
ガスタ・イグル　×３
ガスタ・ガルド　×３
メンタルマスター

【魔法】１２枚
サイクロン
大嵐
ハリケーン
洗脳－ブレインコントロール
緊急テレポート
精神操作
強制転移　×２
ガスタの交信

テラ・フォーミング
脳開発研究所　×２

【罠】１０枚
リミット・リバース　×３
ゴッドバードアタック
転生の予言
奈落の落とし穴　×２
リビングデッドの呼び声
聖なるバリアーミラーフォース－
激流葬

【デッキコンセプト】

エクストラデッキは各人の自由で……。

ガスタの特徴は以下の点が強みであり、弱みでもあります。

『長所』

・下級モンスターの殆どがリクルーターであり、リクルーター同士のシナジーが高い。

・上記のリクルーターは、その殆どがリミリバによる蘇生が可能である。

・ウィンダやカームの絵柄がマジで可愛い。筆者視点ではあるが、特にウィンダの可愛さは異常。

・条件が整えば、カームの効果で疑似無限ドローが可能。

『短所』

・リクルーターが多いので、デッキを回そうとしても基本、相手頼み。相手によっては全く機能しない。

・低ステータスモンスターが多い為、貫通効果に弱い。

・リクルーターが多い為、除外に弱い。弱すぎる。

・低ステータスモンスターが多い為、ワンフーにやたら苦戦する。

・ウィンダやカームが可愛すぎる為、相手にゴヨウされた時、本気で相手をデストロイしたくなる。

などなど……。

今回のレシピは、脳開発研究所とメンタルマスター、そしてカームによる疑似無限ドローを狙ったデッキにしてあります。

ドロー系をカーム様に全て託すデッキです。

こちらはリクルーターが多い為に、相手によっては直ぐに墓地肥や

しができます。

ある程度墓地にガスタが溜まったら、反撃開始です。

疑似無限ドローとは、脳開発研究所でサイキック族のライフコストを調和して、メンタルマスターの効果でカーム様を使い回す事を指します。

途中のドローでカーム様を引いたら失敗です。

だから疑似とあえて付けました。

良かったら皆様からのご意見を！

お待ちしております！

富士急ハイランドへ　決闘編　破　（前書き）

今回、烏丸葉月のデッキレシピを載せようとしたのですが、九月より制限改定があります。

なので今のデッキを載せても意味ないんじゃね？

と思い、今回は・・・・・・

富士急ハイランドへ　決闘編　破

ホテルの一室にて。

時計の針が夜中の十一時を周った。

部屋の中央らへんに設置されたベッドを囲むように拓夜に成瀬、そしてマナ、白石に結締の五人は静かに寝息を立てていた。

そして部屋の隅にある四畳半の畳の上では、烏丸葉月と西条亨のデュエルが繰り広げられていた。

西条　亨　ＬＰ／　６７００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００

「さて……どうするかな？」

現在は亨のターン。

彼のフィールドには、攻撃表示で『ガスタの巫女　ウィンダ』が一

体。

バックにはリバースカードが一枚伏せられている。

対する葉月のフィールドには、『ＢＦ－黒槍のブラスト』が一体。

そしてバックにリバースカードが一枚と永続魔法『黒い旋風』が張られている。

（葉月さんは黒槍のブラストを召喚した際に、旋風の効果でカルートを手札に加えていたな……）

【ＢＦ－月影のカルート】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
効果
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

『ＢＦ―月影のカルート』はダメージステップ時に、手札から捨てることで、フィールド上の【ＢＦ】の攻撃力を１４００ポイントアップさせる効果を持つ。

【ＢＦ】が戦闘面で無類の強さを誇る理由の一つだ。

（手札にカルートがあると分かっていれば、迂闊にこちらから攻撃できないな……）

黒槍のブラストを上回る攻撃力で戦っても、月影のカルートの効果を発動されては無駄死にだ。

更に黒槍のブラストには、守備表示モンスターを攻撃した際の貫通効果を持っている。

亨が扱うデッキ【ガスタ】は、リクルーターの多くが低ステータスのモンスター。

貫通効果を持つ黒槍のブラストとの相性は、余り良いとは言えないだろう。

（でも、気弱にばかりなってられないな……。ウィンが応援してくれているんだ……お前の力、借りるぜ！）

亨の手は決まった。

手札の中から一枚のカードを掴み、そのプレイを開始していく。

「チューナーモンスター、『ガスタ・ガルド』を召喚！」

【ガスタ・ガルド】
星３／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　５００
チューナー・効果
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル２以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

亨のフィールドにウィンダとガルド、二体のモンスターが並ぶ。

「レベル2『ガスタの巫女　ウィンダ』に、レベル3『ガスタ・ガルド』をチューニング！」

『レベル2』＋『レベル3』＝『レベル5』

亨は二体のモンスターを墓地へと送り、エクストラデッキから一枚のシンクロモンスターを取り出した。

「集いし想いが、悠久の風を作り出す……光指す道となれ！　シンクロ召喚、羽ばたけ！『ダイガスタ・ガルドス』！」

【ダイガスタ・ガルドス】
星5／風属性／サイキック族
ＡＴＫ　２２００
ＤＥＦ　８００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター1体以上
1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して破壊する。

巨大化した『ガスタ・ガルド』に『ガスタの巫女　ウィンダ』が飛び乗ったようなモンスター、『ダイガスタ・ガルドス』。

亨はあえて優先権を行使せず、葉月に尋ねてみた。

「烏丸さん……君はこのシンクロ召喚に対して、何かカードの効果を発動するか？」

「いいえ、私は何もしないわ……」

「フッ、そうか……」

葉月からのアクションは無かった。

もしかしたら葉月の場に伏せられた一枚のリバースカードに何かやられるか？　と思っていたが……

亨はそう思いながらも、それぞれのカード効果を順に発動していく。

「まずはシンクロ素材として、墓地へ送られた『ガスタ・ガルド』の効果を発動！」

「っ！？」

「このカードがフィールドから墓地へ送られた時、デッキからレベル2以下の【ガスタ】一体を特殊召喚する。……現れろ、『ガスタ・イグル』！」

守備表示で特殊召喚される『ガスタ・イグル』。

更に今度は、『ダイガスタ・ガルドス』のモンスター効果を発動していく。

「そして、『ダイガスタ・ガルドス』のモンスター効果を発動する」

「っ！？」

「墓地に眠る【ガスタ】（モンスター）を二枚デッキに戻す事で、相手フィールド上の表側表示モンスターを一枚破壊する。　俺は墓地の『ガスタ・イグル』と『ガスタの巫女　ウィンダ』をデッキに

戻す」

亨は墓地から二枚のカードを取り出し、デッキに戻した。

そして葉月のフィールドには、表側表示で存在するモンスターは一体。

「……そして私の黒槍のブラストを破壊、か……」

葉月は黒槍のブラストを墓地へと送った。

これにより、彼女のフィールドには壁となるモンスターは居なくなった。

バックには一枚のリバースカードと『黒い旋風』。

ここで亨がでる行動とは……。

「バトルフェイズに入る！　『ダイガスタ・ガルドス』で、烏丸さんにダイレクトアタック！」

亨の攻撃宣言。

しかし葉月は何も反撃することなく、そのままダメージを受けた。

西条　亨　ＬＰ／　６７００
烏丸葉月　ＬＰ／　８０００　→　５８００

（……リバースカードを発動しないか。　次のターン……何かあるな）

葉月の行動をみて、先を考える亨。

彼は手札の一枚に手を伸ばし、

「リバースカードを一枚セットし、ターンエンド」

ターンを終了した。

そして葉月のターンへと移行する。

「私のターンね、ドロー！」

カードをドローし、手札に加える葉月。

現在、亨のフィールドにはモンスターは二体。

攻撃表示で『ダイガスタ・ガルドス』に、守備表示で『ガスタ・イグル』が。

そしてリバースカードが二枚。

（あのリバースカードが気になるわね……でも）

葉月がドローしたカードは魔法カード『ハリケーン』だ。

このカードはフィールド上の魔法・罠カード全てを持ち主の手札に戻すカード。

（前のデュエルでは、『大嵐』を使ったら裏目にでたケド、こっち

はバウンズ。　同じ鉄は踏まないわ！！）

葉月の手は決まった。

そしてその第一手となるカードを発動する。

「まずは手札から魔法カードを発動！　『ハリケーン』！」

【ハリケーン】
魔法カード
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「まずはこのカードで、全ての魔法・罠を一掃よ！」

ここから快進撃を始める。

そう意気込んだ瞬間、亨は自分の場の一枚のリバースカードに手を

伸ばした。

「ならば俺は『ハリケーン』にチェーンして、永続罠『リミット・リバース』を発動！」

【リミット・リバース】
永続罠
自分の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「『リミット・リバース』っ！？」

「そう……このカード効果で、墓地から攻撃力１０００以下のモンスター、『ガスタ・ガルド』を特殊召喚する！」

亨のフィールドに三ツ星のチューナーモンスター、『ガスタ・ガル

ド』が特殊召喚された。
そして葉月が発動した『ハリケーン』の効果が適用され、全ての魔法・罠カードは手札に戻った。

「『リミット・リバース』が場から離れたことで、この効果で蘇生した『ガスタ・ガルド』は破壊される」

「しまった……っ！？」

思わず舌打ちする葉月。

『ガスタ・ガルド』は、フィールドから墓地へ送られた時に効果を発動するモンスターだ。
そして当然のように、亨はその効果を発動する。

「『ガスタ・ガルド』が墓地へ送られた為、その効果を発動！　デッキから『ガスタの巫女　ウィンダ』を特殊召喚！」

亨のフィールドに守備表示でウィンダが現れる。

亨は相手ターンでありながら、モンスターを展開してきた。

（くっ、ある程度予想はしてたケド……）

改めてそのプレイングに脱帽する。

前回のデュエルでも、亨は悉く葉月のプレイにチェーンし、モンスターを展開してきた。

（モンスターが……尽きない……！！）

それはデュエルを行う上で、大きなアドバンテージとなる。

しかし、この展開は葉月は予想しなかった訳ではない。

相手モンスターが三体に増えはしたが、攻めなければ亨の布陣を破ることはできない。

【ＢＦ】は相手を戦闘破壊してこそ初めて勝つことができるデッキ。

いわゆる典型的なビートダウンだ。

相手の壁モンスターは増えてしまったが、このターン、葉月がすべきことは只一つ。

「永続魔法『黒い旋風』を発動！そして手札から『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
効果
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「蒼炎のシュラが召喚に成功した為、永続魔法『黒い旋風』の効果発動！デッキから攻撃力１１００のチューナー『ＢＦ－そよ風のブリーズ』を手札に！」

【ＢＦ－そよ風のブリーズ】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１１００
ＤＥＦ　３００
チューナー・効果
このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。このカードをシンクロ素材とする場合、「ＢＦ」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。
魔法効果によってデッキから手札に加わった『ＢＦ－そよ風のブリーズ』。
このモンスターはカード効果によってデッキから手札に加わった時、特殊召喚できる効果を持つ。

「そして手札に加わったそよ風のブリーズを、特殊召喚！」

葉月のフィールドに攻撃表示でシュラとブリーズが立ち並ぶ。
対して亨のフィールドには三体のモンスター。

葉月はバトルフェイズへと突入し、攻撃を仕掛けてきた。

「バトルフェイズ！　蒼炎のシュラで、『ダイガスタ・ガルドス』に攻撃！」

『ダイガスタ・ガルドス』の攻撃力は２２００。

蒼炎のシュラの攻撃力は１８００、このままではシュラは返り討ちに遭うが……。

「……ここで、手札のカルートか」

「ええ……ダメージステップ時に、手札のカルートの効果発動！」

月影のカルートの効果が発動された。

これにより、戦闘を行うシュラの攻撃力は１４００ポイントアップし、『ダイガスタ・ガルドス』の攻撃力を大きく上回った。

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
ＡＴＫ　１８００　↓　３２００

西条　亨　ＬＰ／　６７００　↓　５７００
烏丸葉月　ＬＰ／　５８００

亨の『ダイガスタ・ガルドス』は戦闘破壊され墓地へと送られた。
そして蒼炎のシュラは、自身の効果を発動する。

「シュラの効果発動！　モンスターを戦闘破壊した時、デッキから攻撃力１５００以下の【ＢＦ】を守備表示で特殊召喚する。　来なさい、ヴァーユ！」

【ＢＦ－大旆のヴァーユ】
星１／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　０
チューナー・効果

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついたシンクロモンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

（……ヴァーユを、特殊召喚する……だと？）

葉月の特殊召喚したモンスターに戦慄を感じる亨。

しかし、その間にも葉月は残ったモンスターで亨のモンスターに攻撃を仕掛けてくる。

「次っ！！　そよ風のブリーズで、『ガスタの巫女　ウィンダ』に攻撃！」

ウィンダは戦闘破壊され墓地へ、そしてモンスター効果を発動する。

「ウィンダが戦闘破壊され墓地へ送られた時、デッキから『ガスタ』と名のついたチューナーを特殊召喚する。　俺は『ガスタ・ガルド』を守備表示で特殊召喚！」

亨のフィールドに守備表示で二体のモンスターが立ち並ぶ。

『ガスタ・イグル』に『ガスタ・ガルド』。

モンスターが尽きない。

そのことに葉月は内心で軽く舌打ちしながら、バトルフェイズを終了し、メインフェイズへと移行した。

「リバースカードを一枚セットして……蒼炎のシュラに、そよ風のブリーズをチューニング！」

レベル４　＋　レベル３

葉月はレベル７のシンクロモンスターを召喚してきた。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚、『ＢＦ－アーマード・ウィング』！」

【ＢＦ－アーマード・ウィング】
星７／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１５００
シンクロ／効果
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで０にする。

葉月のフィールドに現れしアーマード・ウィング。

そして守備表示のヴァーユ。バックには一枚のリバースカードに永続魔法『黒い旋風』。

「私はこのまま、ターン終了！」

どこか自信に満ちた目でエンド宣言をする葉月。

亨は葉月のフィールドを観察しながら、自分のターンを開始していった。

「……俺のターン、ドロー！」

亨は手札にカードを加えながら葉月のプレイを予測していく。

アーマード・ウィングは戦闘破壊されない強力モンスター。

その為、除去するにはカード効果を使うか、効果を無効化するしか方法はない。

だがしかし、亨が懸念しているカードはソレではない。

その隣に守備表示で存在するヴァーユ。

（アーマード・ウィングは今の俺の手札からすれば、大した脅威じゃない。問題はヴァーユだ……。ヴァーユは墓地に送られた時に真

価を発揮する特殊なチューナー……迂闊に墓地へ送ることは、返って自分の首を絞めることになってしまう……）

更に亨は、葉月の場に伏せられている一枚のリバースカードに着目する。

もしあのリバースカードが……

（もしあのリバースカードが“アレ”ならば、烏丸さんは俺のモンスター召喚と同時に撃ってくるに違いない……、俺なら、そうするだろうしな……！！）

葉月の狙いが予測通りなら……。

亨は口元に軽く笑みを浮かびあげる。

（……フッ、面白い……なら、あえて相手の策に乗るのも一興か……！！）

亨は手札に手を伸ばし、プレイを開始する。

「まずは手札から、『テラ・フォーミング』を発動！」

【テラ・フォーミング】
魔法カード
自分のデッキからフィールド魔法カード１枚を手札に加える。

「この効果で、デッキからフィールド魔法『脳開発研究所』を手札に加える。　そして『ガスタ・イグル』をリリースし、『風帝ライザー』をアドバンス召喚！」

【風帝ライザー】
星６／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２４００
ＤＥＦ　１０００
効果
このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード１枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

「……風帝っ！？」

「ライザーの効果発動！烏丸さんのアーマード・ウィングを、デッキの一番上に戻す！」

シンクロモンスター相手にバウンズ効果は非常に強力である。

シンクロモンスターはエクストラデッキに戻る為、通常のデッキでドローすることはできない。

再び召喚しようとするならば、再度シンクロ召喚しなければならない為、その分手間が掛かるのだ。

そのライザーの効果が発動し、葉月はそれに対して自分の場のリバースカードに手を伸ばした。

（……使うか、ゴッドバードを……！？）

「くっ！？　なら……リバース罠を発動！　『ゴッドバード・アタック』！」

【ゴッドバード・アタック】
罠カード
自分フィールド上の鳥獣族モンスター1体をリリースする。フィールド上のカード2枚を破壊する。

「コストとして、アーマード・ウィングをリリースし、亨さんの『風帝ライザー』と『ガスタ・ガルド』を破壊！」

「……フッ、やはりな」

亨の『風帝ライザー』の効果にチェーンし、『ゴッドバード・アタック』の効果で亨のモンスターを全滅させた葉月。

しかし、葉月は苦虫を噛み潰したような表情をみせる。

その訳とは……。

「これでも、『ガスタ・ガルド』の効果が発動するのね……」

「そう、『ガスタ・ガルド』は“フィールド上から墓地へ送られた時”に発動する効果だからな。俺はデッキから、『ガスタの巫女ウィンダ』を特殊召喚！」

再三にわたりフィールドに現れる亨のモンスター。

下級モンスターとはいえ、亨はこれまでモンスターフィールドをがら空きにしたことは一度もない。

現在、葉月のフィールドにはヴァーユが守備表示で一体。

バックには永続魔法『黒い旋風』のみ。

そして亨のフィールドにはウィンダが攻撃表示で。

更にはまだ亨のターンのメインフェイズ1。

葉月は懸念する。

（……このまま攻撃してターンを終わらせるような相手じゃない。きっと何か、何かしてくるに違いない……！？）

そんな葉月の予測は的中した。

亨は不敵な笑みで、更にプレイを続けていく。

「フィールド魔法『脳開発研究所』を発動！」

【脳開発研究所】
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、通常召喚に加えて1度だけサイキック族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。この方法でサイキック族モンスターの召喚に成功した時、このカードにサイコカウンターを1つ置く。また、自分フィールド上に存在するサイキック族モンスターが効果を発動するためにライフポイントを払う場合、代わりにこのカードにサイコカウンターを1つ置く事ができる。このカードがフィールド上から離れた時、このカードのコントローラーはこのカードに乗っているサイコカウンターの数×1000ポイントダメージを受ける。

「このカードは、サイキック族モンスターに限り、通常召喚に加え

てもう一度だけ、サイキック族モンスターを召喚することができる。
　まぁしかし、今の俺の手札にはサイキック族モンスターはいないけどな？」

「……でも、何か手があるんでしょ？」

葉月の問いに、亨は答える。

「当然だ。手札より速攻魔法『緊急テレポート』を発動！」

【緊急テレポート】
速攻魔法
自分の手札またはデッキからレベル３以下のサイキック族モンスター１体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

「『緊急テレポート』……っ！？」

「デッキからチューナーモンスター『メンタルマスター』を特殊召喚！」

【メンタルマスター】
星１／光属性／サイキック族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　２００
チューナー・効果
８００ライフポイントを払い、自分フィールド上のサイキック族モンスター１体をリリースして発動する。自分のデッキからレベル４以下のサイキック族モンスター１体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する。

「『メンタルマスター』の効果発動！自分フィールドのサイキック族モンスター、『ガスタの巫女　ウィンダ』をリリースし、デッキからレベル４以下のサイキック族モンスター、『ガスタの静寂　カーム』を攻撃表示で特殊召喚する！」

【ガスタの静寂　カーム】
星４／風属性／サイキック族

ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　１１００
効果
１ターンに１度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター２体をデッキに戻す事で、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

【脳開発研究所】
サイコカウンター　×１

「……カーム……！？」

目まぐるしくモンスターを召喚する亨。

葉月は亨のプレイに引き寄せられるように、ただただ唖然とする。

「カームのモンスター効果を発動する。　墓地に眠る【ガスタ】と名のつくモンスターを二体、デッキに戻し、カードを一枚ドローする。　墓地の『ダイガスタ・ガルドス』と『ガスタ・ガルド』をデッキに戻し、カードドロー！」

カードをドローした亨。

しかし、これだけで終わる亨ではない。

「更に『メンタルマスター』の効果！　『ガスタの静寂　カーム』をリリースし、デッキから二体目のカームを特殊召喚！」

亨のフィールドに二体目のカームが現れる。

【脳開発研究所】
サイコカウンター　×２

「そしてカームの効果、墓地のカームとウィンダをデッキに戻し、カードドロー！」

更にデッキからカードをドローする亨。

「再び『メンタルマスター』の効果発動！」

【脳開発研究所】
サイコカウンター　×３

「カームをリリースし、デッキからもう一度、カームを特殊召喚！
そしてカームの効果、墓地のカームとガルドをデッキに戻し、カードドロー！」

同じ手順を繰り返す亨。
それを見て葉月は愕然となる気持ちを何とか持ち直し、そして呟く。

「……まさか、無限ドロー……！？」

「いや、墓地に【ガスタ】が途切れたら終わりだ。無限と言うには少し語弊があるな」

更に亨は手順を繰り返す。
そして遂に……。

【脳開発研究所】
サイコカウンター　×７
西条　亨　ＬＰ／　５７００
手札　９枚
メインフェイズ１
フィールド
『メンタルマスター』
『ガスタの静寂　カーム』
『脳開発研究所』

「さて、長いこと待たせたな……烏丸さん」

「……っ！？」

思わず身構えるように体を強張らせる葉月。

亨の９枚の手札。

更にはまだメインフェイズ１。

更に更には『脳開発研究所』の効果によって、亨はサイキック族モンスターをもう一度だけ通常召喚することができる。

「『メンタルマスター』の効果発動、カームをリリースし、デッキから『ガスタの巫女　ウィンダ』を特殊召喚！」

【脳開発研究所】
サイコカウンター　×８

亨のフィールドにウィンダが現れる。

（お姉ちゃん、覚悟してね！）

「っ！？」

「そして俺は『脳開発研究所』の効果により、メンタルマスターをリリースし……サイキック族モンスター、『ガスタの賢者　ウィンダール』をアドバンス召喚！」

【ガスタの賢者　ウィンダール】
星６／風属性／サイキック族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　１０００
効果
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「更に手札の魔法カード『強制転移』を発動！」

【強制転移】
魔法カード
お互いが自分フィールド上モンスターを１体ずつ選択し、そのモンスターのコントロールを入れ替える。選択されたモンスターは、このターン表示形式の変更はできない。

「きょっ……『強制転移』！？」

「この効果で、互いのモンスターのコントロールを入れ替える。烏丸さんのフィールドにはヴァーユのみ……当然、俺はそれを戴くが、俺がコントロールを移すカードは……コイツだ」

「っ！？」

亨が葉月に手渡したカード。

それは……。

（お姉ちゃん、やっほー！）

「……ウィンダ……」

葉月のフィールドに攻撃表示で移るウィンダ。
そしてヴァーユは亨のフィールドに守備表示で。

「バトルフェイズ、ウィンダールで、ウィンダに攻撃！」

西条　亨　ＬＰ／　５７００
烏丸葉月　ＬＰ／　５８００　↓　４８００

ウィンダが戦闘破壊され、葉月は１０００ポイントのダメージを受ける。

「この瞬間、ウィンダールの効果を発動！　このカードが戦闘破壊した時、墓地のレベル３以下の【ガスタ】一体を守備表示で特殊召喚する！更にその効果にチェーンし、戦闘破壊され墓地へ送られたウィンダの効果、デッキから【ガスタ】と名のついたチューナーを一体特殊召喚する！　来い！『ガスタ・ガルド』、『ガスタの巫女ウィンダ』！」

デッキから『ガスタ・ガルド』が攻撃表示で、そして墓地から『ガ

スタの巫女　ウィンダ』が守備表示で特殊召喚される。

「『ガスタ・ガルド』で、ダイレクトアタック！」

西条　亨　ＬＰ／　５７００
烏丸葉月　ＬＰ／　４８００　→　４３００

「くっ！？」

「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ……ウィンダとガルドをチューニングし、『ダイガスタ・ガルドス』をシンクロ召喚！」

亨のフィールドに再び現れし『ダイガスタ・ガルドス』。
そして墓地へ送られた『ガスタ・ガルド』の効果が発動する。

「ガルドの効果、デッキからレベル２以下の【ガスタ】を特殊召喚する。　来い、『ガスタ・イグル』！」

亨のフィールドにチューナーモンスター、『ガスタ・イグル』が特殊召喚された。

「レベル６『ガスタの賢者　ウィンダール』に、レベル１『ガスタ・イグル』をチューニング！」

６＋１＝７

「シンクロ召喚、来い『ダイガスタ・イグルス』！」

【ダイガスタ・イグルス】
星７／風属性／サイキック族
ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　１８００
シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター１体以上
１ターンに１度、自分のエンドフェイズ時に自分の墓地から風属性

モンスター1体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に裏側表示で存在するカード1枚を選択して破壊する。

亨のフィールドに並ぶ【ガスタ】のシンクロモンスターたち。

亨は七枚の手札の中から

「俺はリバースカードを四枚セットし、ターンエンド」

長い長い、長い亨のターンが終了した。

葉月はターンを迎え、自分のデッキトップに指を添える。

「くっ……私のターン、ドロー！」

カードをドローし、そのカードを確認する葉月は思わず目をキョトンとさせる。

（……え、……これって！？）

亨のフィールドを確認する。

場には『ダイガスタ・ガルドス』に『ダイガスタ・イグルス』、そしてヴァーユ。

そのバックにはリバースカードが四枚も伏せられている。

更にはフィールド魔法『脳開発研究所』。

迂闊に攻めれば、まず確実に返り討ちであろうこの状況。

しかし……。

（……亨さんのライフは……５７００）

そして自分がドローしたカード。

葉月は確信した。

「……凄いですね、流石、亨さんです」

「何が凄いか分からないが……烏丸さん、何かキーカードでも引けたのかい？」

葉月の雰囲気の変化に何を感じ取った亨。

「【ガスタ】……なかなか面白いモンスターたちだったわ。条件が整えば、凄まじい勢いでのドロー……でも、弱点が露呈しすぎているわ！」

葉月は一枚の手札を取り出し、語りだす。

「亨さんのそのコンボは、どれか一枚でも欠けたら意味を成さない！特にそのカードを破壊されたらね！」

「っ！？　まさか、引き当てたのか！？　このタイミングで！？」

「行くわよ、手札の速攻魔法『サイクロン』を発動！」

【サイクロン】
速攻魔法
フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

「このカードで、拠点となる『脳開発研究所』を破壊！」

「……くっ！？」

葉月は亨の表情を窺う。

その表情は、一瞬だけ悔しそうな面を見せたものの、直ぐに穏やかな表情に戻った。

そして、『脳開発研究所』のカードを掴み、墓地へと送った。

「『脳開発研究所』……このカードがフィールドから離れた時、こ

のカードのコントローラーはサイコカウンターの数だけ１０００ポイントのダメージを受ける……」

「亨さんのライフは５７００。　そして、乗っていたサイコカウンターの数は……８」

１０００　×　８　＝　８０００

つまりは亨はこのターン、自滅ダメージを８０００も食らってしまったのだ。

西条　亨　ＬＰ／　５７００　→　０
烏丸葉月　ＬＰ／　４３００

亨は敗北した。

自らの策に溺れ、自らの効果で自滅した。

「……呆気ない幕切れになってしまったな。　すまない、烏丸さん」

いきなり誤りだす亨に少し驚きながらも、葉月は自分の素直な感想を伝えた。

「いえ、そんなことないです。亨さんの使う【ガスタ】……最後は、残念な結果に終わっちゃいましたけど、あのドローには本当にビックリしましたよ！」

「そうか、そう言って貰えると……助かる」

はにかむ笑顔にドキドキしながら、葉月は落ち着く為に大きく深呼吸をする。

そして自分のデッキを掴み、

「あ、あのっ！」

葉月が声をあげると、隣のベッドの周りからムクリと誰かが起き上がった。

「ん～何だ、まだ夜中か……って！？　ヌォ！？　美少女よ、目が覚めたのか！！」

葉月の声で目を覚ました白石は、部屋の空きスペースで起きている葉月と亨に気が付き、飛び込むように間に入った。

「きゃっ！？」

「お、白石。目、覚めちゃったか」

「ふぅん……デュエルをしていたのか。面白い、美少女よ！今度はこの俺とデュエルだ！」

葉月の浴衣姿に大興奮する白石。

やはりその声の音量は大きい。

そして案の定、彼の声に気が付き、次々と旅行メンバーが目を覚ましていった。

「何だよ、白石さん……うるせーぜよ……って、葉月ちゃん、目ェ覚ましたか！」

「ん～、どったの……」

「……何の騒ぎなんです？」

「さいじょお……おはよ～」

いつの間にか自分たちの周りに集まった旅行メンバー。

そして葉月の隣で大興奮する白石は、何処からかいつの間にか自分のデッキを取り出してデュエルする気満々だった。

「あ～あ、みんな起きちゃったか……」

「お、何だ何だァ白石さん！デュエルをする気か！？」

「わぁ、白石さん！葉月さん！　頑張って下さい！」

「葉月～、白石さんは強いぞ」

「よぅし！今日は皆で、朝までデュエル三昧なんだよ！」

一気に盛り上がる場の雰囲気に驚く葉月。

だが、この雰囲気こそがＯＣＧ研究会なのだ。

「あの、白石さん。私、その……まだ亨さんと」

「西条なんぞ、関係ないわ！　美少女よ、今は俺だけを見ていろ！いくぞ、デュエルだ！！」

「え、ちょ……もう、仕方ないなぁ……」

真夜中だというのに、まるでお祭り騒ぎを見せる旅行メンバー。

この日、彼らは本当に朝までデュエル三昧だった。

富士急ハイランドへ　決闘編　破　（後書き）

今回は載せないつもりでしたが・・・・・・

来月の新禁止・制限・準制限に沿ってレシピを載せたいと思います。

【葉月・墓地型フェザー】

デッキ枚数４０枚

［モンスター２１枚］

ＢＦ－暁のシロッコ　×２
ＢＦ－漆黒のエルフェン
ダーク・アームド・ドラゴン
ダーク・グレファー　×３
ＢＦ－蒼炎のシュラ　×３
ＢＦ－黒槍のブラスト　×３
ＢＦ－疾風のゲイル
ＢＦ－極北のブリザード　×３
ＢＦ－大旆のヴァーユ　×２
ＢＦ－月影のカルート　×３

［魔法カード１０枚］

サイクロン　×2
ハリケーン
精神操作
闇の誘惑
異次元からの埋葬
おろかな埋葬
増援
死者蘇生
黒い旋風

［罠カード9枚］
聖なるバリアー ミラーフォース ー
激流葬
奈落の落とし穴　×2
ゴッドバード・アタック　×3
デルタ・クロウ ー アンチ・リバース
リビングデッドの呼び声

エクストラデッキには各【BF】のシンクロモンスターは最低2枚ずつは必須です。

コンセプトは、ダグレで墓地にヴァーユと上級フェザーを送り、速攻墓地シンクロ。

ゴトバはワザとヴァーユを召喚して、コストで墓地に送るのもアリ。な為に3枚に。

下手すりゃダムドは要らない子になるかも・・・？
直ぐに墓地が肥えそうで出せない状況が多々ある気が・・・

さて、今回のデュエルの内容。

自分でもアッサリさせすぎたと思ってます。
が！？

が！？　しかし、あえてあんな終わらせ方にしました。

なぜなら、あのガスタデッキは、ホント・・・ああされたらオシマイなデッキですから。

書いてて思ったのが、ガスタ何たら、ガスタ何たら・・・

似た名前や効果が多すぎて、把握できない！！

まぁウィンダちゃんや、かーむ様は別ですけどね

デュエルに関して、又は物語の内容に関して、ご意見があれば是非ともご連絡下さい。

出来る限り見るようにはしてますし、観想の返事も出来るだけ早くに返していきますので。

よろしくお願いします。

富士急ハイランドへ　最終章　（前書き）

この話で長かった旅行編も終わりです。

富士急ハイランドへ　最終章

入場口を通ると、そこには１００メートルを超えるであろう長蛇の列ができていた。

それ以外にも大勢の来場客で賑わう富士急ハイランド。

かなり大きなテーマパークで、よく有名人等が訪れたり、イベントがあるなどして知られるこの富士急ハイランド。

いまここに、西条亭を除くＯＣＧ研究会のメンバーと、烏丸葉月が来ていた。

人混みが激しい入り口付近で辺りをぐるりと見渡した後、結締が白石に声をかけた。

「白石さん、大丈夫か～？　いつぞやの学園祭の時みたいに、『ひ……人混みに……うぷっ、酔った……』な～んてことないか～？」

冗談混じりに話す結締だったが、白石は一向に自分の方に振り向かない。

それどころか、真剣な眼差しで１００メートルを超えるであろう長蛇の列の先頭に見えるテントを眺めている。

「お～い、白石さ～ん……何を見てんだって……？」

結締も白石と同じテントに目を向ける。

そこには大きな文字でこう書かれていた。

「ん～どれどれ、『ＡＫＢ４８』……特別グッズ……？」

なるほど、と結締は軽く溜め息を吐いた。

おそらくこの長蛇の列に並びたいであろう白石だが……。

今は西条亭との合流をする為にわざわざ入り口付近にて待機している状態である。

団体旅行な為、初めからあまり勝手な行動はできない。

「まぁ白石さん、諦めなって。あんな長蛇の列に今から列んだ所で、順番が回ってきた頃にはめぼしい商品なんか残ってないぜよ？」

「ふぅん……結締よ、この俺がいつ、アソコに列びたいと言った！？」

「白石さん、顔が動いてない。目があっち向いたまんま」

口で言っても根は正直な白石である。

二人が話していると、同じＯＣＧ研究会の成瀬花穂が声をかけてきた。

「白石さん、結締さん、最初に乗りたいアトラクションとかありますか？」

成瀬の手にはパンフレットが広げられていた。

園内を表す地図には既に赤ペンで印と名前が付けられており、どうやら誰が何処に行きたいのかチェックしているようだ。

「へぇ、皆いろいろ書いてるな～。　じゃあ俺はこのお化け屋敷に

するぜぃ！」

「お化け屋敷ですね。白石さんは、何処が良いですか？」

結締から聞き終えた為、今度は白石に尋ねる成瀬。

白石からの返事は、

「ふぅん……この俺は美少女と一緒ならば、どこでも構わん。所で成瀬よ、美少女は一体どのアトラクションを希望している？」

「え、葉月さんですか……？」

成瀬はパンフレットに書かれた葉月の希望するアトラクションを確認する。

「えっと、葉月さんは『ドドンパ』です」

「どどん破？　この富士急には桃印の暗殺者でもいるのか？」

「白石さん、それ以上は踏み込めないぜぃ……」

『ドドンパ』とは富士急ハイランドのアトラクションの一つで、いわゆる絶叫マシンだ。

その特徴としては打ち上げ花火の如く、筒（トンネル）の中からいきなり打ち上げられる花火の如く、マシンがゼロスタートする仕組みになっている。

なかなか人気があるアトラクションの一つだ。

「だってさ、白石さん」

「……絶叫マシン……だと……！？」

眉がヒクヒクと動く白石。

成瀬はどうしたのかと思い、尋ねてみる。

「あの、白石さん。顔色が徐々に悪くなってきてますけど……大丈夫ですか？　もしかして、絶叫マシンとかあまり得意では……」

「そ、そんな事はない！！」

声を張り上げて答える白石。

しかしその表情はとても素直だ。

「絶叫マシンが苦手となると……後はお化け屋敷が有名ですよ。どうですか？」

「あ～成瀬ちゃん、白石さんは心霊とかお化けとか駄目なんだぜぃ」

「……」

結締の発言に思わず固まる成瀬。

その話が本当なら、白石はここのアトラクションの大多数が乗れないことになる。

「白石さん、一体ここに何しに来たんです？」

「グヌゥ……普段、大人しい雰囲気の成瀬に言われると……ダメージが……」

「もう……とにかく、絶叫マシンやお化けが苦手な事は、葉月さんには黙っててあげますから。葉月さんの前では、今みたいな顔しちゃ駄目ですよ？」

「……はい」

年下である成瀬に説教され、白石は渋々と返事をするのであった。

轟ッ！！　と、けたたましい音が鳴り響く。

旅行メンバーがまず最初に乗る事になったのは、葉月が希望する『ドドンパ』である。

到着した頃には既に長蛇の列ができており、看板には二時間待ちと書かれていた。

「もぉ、こんなにも待たなくちゃいけないのは、さいじょおが遅れたせいなんだよ！」

列びながら愚痴を零すマナ。

その隣に立つ亨は軽く溜め息を吐きながら

「仕方ないだろ。俺だけ入場券を買わなくちゃいけなかったんだし。それに結構な人数が列んでたからな」

「ぶぅ、私はここのアトラクション全部を制覇するつもりだったのに……出鼻を挫かれた気分なんだよ、さいじょお！」

「いやいや、全部制覇は無理だからな。たとえ俺が早く来れたにしても、どこも二時間待ちだし……時間的に絶対に無理だからな」

二人が話している後ろでは葉月に白石が列んでいた。
白石は一歩、また一歩と前へ進む度に、その動きがどこかぎこちないものになっている。
そんな白石の様子に気付いた葉月は

「あの……白石さん、どこか具合でも悪いんですか？」

「ム、な……何ともない。それより美少……あ、いや……烏丸はこういった絶叫マシンは好きなのか？」

「ええ、昔からよく。遊園地とかに来ると、必ず乗ってました」

「そ、そうか……」

そんな二人のやり取りを聞きながら、後ろに並ぶ拓夜に成瀬、そして結締は心の中で必死に白石を応援していた。

「白石さん、大丈夫なんですかね？」

「ああ、見るからに真っ青な顔色してるし……乗る前からああじゃ、乗ったら一体どうなっちまうんだ？」

心配する拓夜に成瀬だが、「そこは何とかなるもんだぜぃ？」と結締が答える。

「何とかなるって……結締さん、一体どういうことなんですか？」

拓夜が尋ねると、結締は内緒話をするように二人を自分に寄せながら、小声で話しだす。

「実はここに並ぶ前に、白石さんにはとある魔法の言葉を掛けておいたんぜよ」

「魔法の……」

「……言葉？」

「まぁ、見ていれば分かるって。その時は、二人にも一仕事しても

らうけどな」

「？」

何だかろくでもない予感がする。

拓夜に成瀬は二人してそう思った。

二時間という長時間を経て、遂に順番が回ってきた。

今、旅行メンバーの前には『ドドンパ』のマシンがドアを開けて、乗客を待っている。

「私とさいじょおが一番前なんだよ！これは誰にも譲れないんだよ！」

「ちょ、マナ！引っ張るなって！？」

一番前の席にはマナと亨が座る。

「遂に順番が来ましたね、拓夜さん！」

「ああ、俺たちも座ろうぜ」

前から三列目の席には拓夜に成瀬が。

「じゃあ俺は一番後ろで、皆の絶叫っぷりをこのハンディカムのカメラで……って、はい？　あ、カメラ駄目ですか。あ、はい、スイマセン……」

カメラを没収された結締はテンションをややダウンさせながら前から四列目の席に座った。

そして前から二列目に葉月が座り

「さ、白石さん。早く座って下さいよ」

「……ムゥゥ……」

葉月に呼ばれているが、なかなか最後の一歩が踏み出せない白石。

彼の顔からは尋常じゃない程の汗が流れている。

（……美少女が……俺を呼んでいる……しかし……っ！？）

白石は絶叫マシンが苦手だ。

どうしてかは分からないが生まれつきなのか。

昔からこの手のアトラクションというのは苦手だった。

迫り来る風圧により喋る事もままならなければ、心臓がひっくり返されたかのような感じ。

あれは何度体験しても慣れない。

手が震える。

足が竦んで前に進まない。

すると……。

「白石さん！」

その声にハッとなり我に返る白石。

「白石さん、ご褒美が欲しくないのか！？」

「む……結締……」

結締からの言葉に、白石の気持ちに力が籠もる。

（……そうだ。奴は言っていたではないか……この殺人マシンに乗り、無事に生還することが出来たなら……）

一歩。

そしてまた一歩。

白石は着実に足を前に進め、遂には葉月の横にある席に座り込むことに成功した。

そして『ドドンパ』は発信の合図と共に、ゆっくりと車体を前へと進めていく。

ガチャン！！

車体が発進位置に到着し、一旦その動きを止める。

全員が緊張感に包まれる中、白石は声を絞り出して隣に座る葉月に話しかけた。

「び……か……烏丸よ」

「？」

「本当に……俺がこの絶叫マシンを制覇することが出来たら……俺

に……キッッガナァァアアッッッ！！！！？？」

白石が話している途中に急発進する『ドドンパ』。

「ーーーーッッ！！？？」

声にならない声をあげて、白石を乗せた殺人マシンは超高速でレールの上を駆け抜けていった。

冷たい感覚がおでこに伝わる。

ぼんやりする視界が徐々に明確になり、体を動かそうとすると……。

「あ、白石さん。気が付いたんですね」

「……び……美少女……」

白石の顔を覗き込むように見つめる葉月。

白石は今、ベンチに座りながら頭にお絞りを当てられている格好をしていた。

どうしてこうなったのか記憶がない。

ということは、自分は『ドドンパ』に乗って気を失ってしまったらしい。

「ふん……情けない姿を晒してしまったな」

お絞りを外し、空を見上げながら話す白石。

葉月は、そんな白石の隣に座り話を聞いた。

「美少女よ、お前から見て……俺がこんな絶叫マシンに弱いとは思わなかっただろう？」

「ええ……だって、白石さんは体格が大きくて、常に自信に満ちた発言ばかりだったし……苦手なものなんて、無いんじゃないかって

思ってました」

「人は見かけによらない。の良い例だ……。ところで、他の連中は……？」

今更ながら気付いたのだが、今ここには白石と葉月しかいない。

「他の皆は丁度、お昼ご飯を買いに行ってる所ですよ。」

「そうか……」

その時の経緯を簡単に話せば、気絶した白石を亨と結締の二人が此処まで運び、拓夜に成瀬が葉月にお願いして、白石に付き添うように話したのだ。

（……ふん、結締のヤツめ……）

『ドドンパ』に乗る前、結締からはこう言われた。

“白石さんがこの絶叫マシンを無事に制覇する事ができたら、葉月さんからキスしてもらえるぜぃ！嘘かもって思うかもしれないが、この話は白石さんにとって絶対に美味しい話になる筈だぜぃ？”

現在、白石は葉月と二人っきり。

葉月に付き添って看病してもらえるとは思ってもみなかった。

（……キスは流石にないが、確かに……悪くない）

少し離れた所で、買い出しに向かった連中の声が聞こえてきた。

どうやら買い出しを終えて戻ってきたらしい。

確かに白石は、ある意味のご褒美を貰い、出迎える為の手をあげた。

一つのアトラクションにつき約二時間待ち。

そんな様子が続けば、夕方までに乗れる回数というのはせいぜい限られてくる。

時刻は昼の四時を過ぎた辺り、旅行メンバーに残されたアトラクションはあと一つとなってしまっていた。

「しっかし、どこもかしこも一時間から二時間待ちがザラだぜぃ？　正直待つのには飽きたぜよ……」

しゃがみ込み、愚痴を零す結締。

「確かにそっすね、折角の機会だからあれだけの時間を列んで待つけど、流石に他の乗り物も全部がそんなだと、ちょいとキツい……」

拓夜も結締の隣に立ち、彼の意見に同意する。

現在、旅行メンバーは時間の残すところ、最後となるアトラクションに列んでいた。

そのアトラクションの名は『トンデミ～ナ』。

回転する円盤に設けられた椅子に座り、その円盤が回転しながら振り子のように揺れるマシンだ。

この『トンデミ～ナ』に列んでから一時間半が経過しようとしていた。

徐々に前へと進み、搭乗口前へと辿り着く旅行メンバー。

今回、白石だけはこの『トンデミ～ナ』は辞退した。

一番最初に乗った『ドドンパ』で失神した白石には、流石にこれ以上の負担は掛けられない。

もう直ぐ自分たちの順番が近付く為か、マナは外で待つ白石に向かって手を振ろうとして、ギョッと驚いた。

「え、さ……さいじょお、さいじょお！外が凄いことになってるよ！？」

マナの隣に立つ亨は腕を引っ張られながら、マナの言う方を振り向いて

「ん、どうしたんだ……って、なっ！？」

流石に亨もそれには驚いた。

自分たちが列びだした頃には、この『トンデミ～ナ』の周りにはチラホラとしか客の人数はいなかった。

しかし今、自分たちの目の前には、この『トンデミ～ナ』を取り囲み、埋め尽くすかのような人垣が出来上がっているのだ。

「な、何だこの人数は！？」

「一体どうなっているのか分からないんだよ！？」

二人の様子に気付き、残りのメンバーも同じように見ると

「何じゃこりゃ！？」

「うわっ！？」

「え、え、なな何なんです！？」

「……凄い人混みね……！？」

余りの人数に、最早白石がどこに居るのかも分からない。
すると、集まりだした連中からドッという歓声が湧き起こった。

「うわっ、何か凄い盛り上がりなんだけど！？」

拓夜が驚きの声を出すと、この盛り上がりを作り上げる原因が後ろから聞こえた。

『皆さーん！こんにちはー！！』

ワァァアア……！！！！

一体何なのか分からず、声のした方を振り返る旅行メンバー。
搭乗口の先には、いつの間にか黒服のいかにも警護の人が数人立っており、その中央に可愛らしい衣装を身に着けた女の子が立ってい

た。

「……誰？」

「……さぁ？」

拓夜に亨が呟くと、結締が

「バッキャロゥ！！」

と言い、拓夜と亨に制裁を与える。

「イデッ！？」

「ギャッ！？」

「この西条ズ、あの子を知らないのか！？　あのＡＫＢ４８の……」

途中で言葉に詰まる結締。
結締はマナに葉月、成瀬の顔を見て

「……ＡＫＢ４８の……誰？」

「しらない」

「さぁ？」

「ごめんなさい、分からないです」

「テメェだって分からねェじゃねぇかコラァ！！」

「くっ！？　無駄に人数が多すぎるから、ファンじゃない俺が分かる訳ないぜよ！とりあえず、あの子の名は……よし、高橋みなみちゃんとしておくぜよ！」

とりあえず自分の覚えている名前を挙げた結締。
しかし……。

『ＡＫＢ４８の、岩佐美咲です！』

「完全に人違いじゃねぇか！！」

「う、うるせぇ！！俺だって詳しくねーと言ってるだろう！！」

とりあえずアイドルの登場にヒートアップする観客たちだが、結締と亨だけは別の意味でヒートアップしていた。

「あ……拓夜さん、あれっ！」

「ん？」

「あそこを見て下さい！あんな所に、白石さんが！」

結締と亨を余所に成瀬は拓夜を呼び、ＡＫＢファンの群れの一部を指差した。

そこには、白石が両手を挙げて吼えている姿が垣間見えた。

「ウォォオオ！！岩佐ちゃァアん！！」

「……」

人混みに埋まり見失ったのではなく、白石は至って普通にファンの群れにとけ込んでいた。

「……何をやってるんだ、あの人は……」

「そういえば、入り口の所にあったグッズ売り場を何かと気にしてましたからね……もともとファンだったのかもしれないです……」

話している間にも白石は周りのファンの人達と一緒になってカメラを構えたり、声をあげたりしている。

何だか今日一番の良い笑顔の白石。

拓夜たちはそのまま、白石をそっとしておく事にした。

遂に自分たちが『トンデミ～ナ』に乗る番がやってきた。

白石を除く旅行メンバーは、それぞれに円盤に設置された椅子に座り、シートベルトを締める。

後は円盤が動きだすのを待つだけである。

プルルルルル……。

開始の合図が鳴り、旅行メンバーは緊張しながら、今か今かと心待ちにしている。

すると……。

『どうも！皆さん、ＡＫＢ４８の、岩佐美咲です！』

ワァァアア……！！

『トンデミ～ナ』の制御室から、岩佐美咲が出てきて何やら話し始めた。

『今回は、私がこの『トンデミ～ナ』のスタートの合図をやらせてもらいます！皆さん、宜しくお願いしま～す！』

ワァァアア……！！

ちょっとしたイベントに、外野のファンの連中の歓声が聞こえてくる。

椅子に座り、シートベルトに締め付けられている結締は、左隣に座る亨に話しかけた。

「……西条ちゃん……」

「……何だ……結締？」

「……地味に……日差しが暑くない？」

「ああ、暑い……」

「何かさ……あの子、今さ……夕方にあるライブの宣伝を喋ってるけどさ、そんなことよりも……」

「早く発進して欲しいよな……」

結締たちが愚痴っている間にも、ＡＫＢの何とやらは未だライブの話を続けている。

『私もそのライブで、精一杯頑張りますので、応援宜しくお願いします！』

ワァァアア……！！

どうやら話も一区切りついたらしく、その事にホッと胸を撫でる結締に亨。

『実は私、富士急のアトラクションの中でも、この『トンデミ～ナ』が好きで……』

「って、まだ話続くのかよ!?」

「ちょ、こんなフェイントは要らねーぜよ!!」

そんなこんなで騒いでいる結締と亨の隣の席では、マナに葉月が座っていた。

彼女たちも気持ちは結締や亨と同じであったが、彼らのようにそれを口には出さない。

そんな気分を紛らわす為か、彼女等は世間話をしてやり過ごすことにした。

「あの、マナさん」

「な～に?」

「アイドルって、やっぱり可愛いですよね」

「そうだね。はづきは、ああいうアイドルになりたいの？」

「いえ、芸能界には入ろうとは思ってないです。ただ男の人って、ああいったアイドルがタイプなのかな？って」

「あ～～、なる程ね～～。参考に、直ぐ近くの意見を聞いてみよっか？　はづき、さいじょお達の話に耳を傾けてみて？」

葉月は結締と亨が話している内容に聞き耳をたてた。

まず聞こえてきたのは結締の声だ。

「西条ちゃん、西条ちゃん的には、あの子はタイプなのか？」

「いんや、確かに可愛いけど……俺にゃ勿体無いわ」

「つまりは興味なし、って事か……」

「結締は？」

「俺も」

「……」

「だってさ、はづき」

彼らの話を聞いて、ホッとする葉月。

なぜホッとしたのか自分でも良く分からないが、何故だかそう思えた。

視点は更に隣に移り、拓夜に成瀬が座る席。

拓夜に成瀬は、ＡＫＢの何とやらの話は聞いておらず、デュエルについて話していた。

「そういえば拓夜さん、知ってました？」

「何が？」

いきなり知ってました？と聞かれても何のことだかサッパリ分からない。

「来月から、遊戯王カードの禁止・制限・準制限のカードが更新されるんですよ」

「へぇ、制限改定か……」

「はい、その年に流行した強力なカードを制限化することによって、カードゲームバランスを一定に保つ為に行われた、所謂政策です」

「って事は、またデッキを全面的に見直さなくちゃいけない訳か……。ちなみに花穂は何のカードが制限されたか知ってるのか？」

拓夜の問いに対し、成瀬は「はい」と頷く。

『それでは、お待たせしました！『トンデミ～ナ』発進しま～す！』

「葉月さんが苦しいと思いますが、【ＢＦ】シリーズに関しては『

黒い旋風』が制限カードに指定されましたし……」

「えっ!?　あのカードが……デッキに一枚まで……!?」

葉月のデッキコンセプトは、所謂【旋風フェザー】。

永続魔法『黒い旋風』が発動した時に、真の力が発揮されるタイプのデッキだ。

ちなみに、拓夜と成瀬が話している間にもこのアトラクション『トンデミ～ナ』は振り子のように大きく揺れながら、円盤はグルグルと回転している。

ゴォォォオオオ……!!!!!

「って事は、葉月の時代はオシマイだな!『黒い旋風』が使えなけりゃ、葉月は何も出来ずに……」

「いえ、それはないと思いますよ?」

拓夜に被せるように成瀬が言う。

「葉月さんが使う【ＢＦ】にも、色々な型があります。今回弱体化したのは、『黒い旋風』を使うタイプのデッキですが、あのシリーズには【墓地型ＢＦ】というのがあります」

「【墓地型】……？　って事は、葉月はその型のデッキにしてくる可能性がある訳か……！？」

「そうですね。アレはアレで強力なデッキですからね……。やっぱ【ＢＦ】は壊れです！」

「ハハ……」

最後の成瀬の愚痴も同意できる。と拓夜は思った。

キャァアア……！！
ォォォオオオ……！！

二人が話している間にも、『トンデミ～ナ』はまだまだ回り続ける。

「他にも禁止カードからは、フィールド上の全てのモンスターを破壊する『ブラックホール』が、禁止から制限カードに復帰しましたし……」

「何だその効果!?　問答無用でモンスターを全破壊って……なんでそんなカードが復帰するんだよ!?」

「今の環境でも、このカードなら何ら対策が出来つつあるから……ではないでしょうか？」

「対策……あ、例えば！亨さんが使ったあの罠カード!?」

「はい、『スターライト・ロード』……。カードを二枚以上破壊する効果を無効にして、破壊するカードです。他にも、シンクロモンスターの『スターダスト・ドラゴン』や、速攻魔法『我が身を盾に』など……」

「なる程な……花穂、他に改定カードはないのか？」

周りの連中は風圧や、Ｇの変化に絶叫しているのだが、拓夜に成瀬は構わずに話を続ける。

「他に禁止カードからは、魔法カード『死者蘇生』です。このカードは墓地のモンスター、一体を特殊召喚するカードです」

「単調テキストは強力カードの証……だな。きっと皆、デッキに入れるんだろうな……。なぁなぁ、俺や花穂が使うカード関連で、何か改定はないのか？　例えば、【Ｄ－ＨＥＲＯ】とか！？」

期待を込めて尋ねる拓夜。

現在、【Ｄ－ＨＥＲＯ】はそこそこの規制を受けている。

禁止・制限カードには、ドロー加速の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディスクガイ』や、『デステニー・ドロー』。

準制限カードには『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』。

どれも単調テキストにして強力な効果、更には当時の環境故に規制されてしまったカードだ。

「そうですね……Ｄに関しては、特に変化は無かったと思いますよ

？」

「そうか……新しいデッキを考える楽しみが……」

「……」

少し落胆したように見える拓夜。

そんな拓夜を見て、成瀬はある一つの案を思い付いた。

「あ、拓夜さん！新しいデッキを作るのなら、私に提案があるんですケド……」

提案？と拓夜は思い、成瀬に言うように促す。

「提案、と言いますか、参考と言いますか……。拓夜さんの直ぐ近くには、【ＨＥＲＯ】デッキの先輩がいるじゃないですか！」

「【ＨＥＲＯ】デッキの……先輩……っ！？」

成瀬に言われて頭に思い浮かんだ人物。

その人物は……。

「ウヒョョォォオオッ！！　風がきぼぢぃぜ～！！」

「うわっ！？　ちょ、結締！！　唾が飛んできた！！　お前の唾が、俺の顔にっ！？」

「ええっ！？　なに西条ちゃん、ぎごえないぜぃ！？」

「……結締さんか……」

「はい！」

視線を結締に向ける拓夜。

確かに成瀬の言う事には一理ある。

【ＨＥＲＯ】デッキには様々な種類があるが、どれも共通して言え

る事は、『融合』のカードが使えるという事だ。

デッキによっては入らないが、『融合』から生まれる【ＨＥＲＯ】は強力効果が多い。

結締は使う【ＨＥＲＯ】は、俗に言う【Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタル）】だ。

拓夜の使う【Ｄ－ＨＥＲＯ（デステニー）】とはタイプが違う。

しかし、融合モンスターに関しては共通して特殊召喚できる強力モンスターがいる。

種類こそ違うが、確かに参考になる話を聞くことができるかもしれない。

「……そうだな……よし、やってみっか！！」

その目に新たな希望の光を宿しながら、『トンデミ～ナ』に乗ってグルグル回る拓夜だった。

空に浮かぶ夕日は沈み、満天の秋の夜空の下……。

帰りの高速道路の社内では、沢山の寝息が聞こえてきた。

最後列に座る拓夜に成瀬は、互いの肩に頭を預けるように静かな寝息を立てており、真ん中の列に座る結締、白石、マナもそれぞれに目を閉じ、休んでいる。

そして運転席の亨の隣、助手席に座る葉月は、そんな秋の夜空を見上げながら、今回の旅行を思い返していた。

サービスエリアでの事や、湖での会話。

ホテルでのデュエルや、富士急での思い出。

思い返せばキリがない。

すると、運転する亨が話しかけてきた。

「烏丸さん、眠たくないか？　まだ当分停まらないから、休める時に休んだ方が良い」

「……いえ、大丈夫です……」

今回は本当に、この旅行に参加して良かったと葉月は思った。

今までは雲の上の存在のように思っていたＯＣＧ研究会。
その彼らとの旅行で、自分は少しでも彼らに近付けたような気がした。
特に……

「亨さん、あの・・・・・・湖でその・・・・・・・」

「……湖……？」

彼の反応からして、余り覚えていないようだ。
少し気持ちは沈んだが、葉月は言葉を続けた。

「“なら、葉月も入れば良い……。ＯＣＧ研究会に……”」

葉月の言葉を聞いて亨は「あぁ……」と、どうやら思い出したようだ。

「拓夜や成瀬さんなら、きっとそう言うって……あの時、私は亨さんにデュエルを申し込んだけど、あの……」

「……入りたいか？　俺たちのグループに？」

「っ！？」

言いたい事を先に言われた事。

それを言うのにとても緊張していた事。

色々な気持ちが入り混じって、少し顔を赤く染めながら

「……はい。私も皆さんと一緒に、デュエルをやりたい。今回の旅行で……そう思ったんです」

「……」

「あのっ、……だ、駄目……ですかね……？」

少し車の速度を落としながら、亨は葉月の顔を見てニカッと笑った。

「君は面白い子だな。拓夜くんや成瀬さんから聞いてた話だと、もっと堂々とした発言をする子だって聞いてたけど」

「なっ！？　」

（あの馬鹿っ、一体何を喋ったのよ！！）

亨の発言に思わず硬直する葉月。

拓夜に成瀬は、普段の葉月の言動を知っている。

彼らからしたら、今回の旅行での自分の言動は、どこかぎこちなさが混じっていたのは筒抜けだっただろう。

「まぁ相手が年上ばかりだし、緊張とかするよな。でも、俺たちにはもっと気楽に接してくれても良いんだよ？」

「は、はは……」

ぎこちない笑みを浮かべながら葉月は思う。

（拓夜ァ……、絶対にブッ潰す！！）

「で、君が俺たち、ＯＣＧ研究会に入るかどうかだけど……」

「っ！！」

いきなり本題に入り、ドキッとする葉月。

話をコロコロと転がされている感じで、どうも落ち着かない感じがするが、今はそんな事を言ってられなかった。

ドキドキと胸を高鳴らせる葉月。

亨からの返事は……。

「俺は大歓迎だ。むしろ、こっちからお願いしたい位だよ」

「……」

大歓迎？

俺は？

むしろ？

こっちからお願いしたい位！？

ある意味、葉月にとって待ち望んでいた亨からの言葉が、葉月の頭の中を何度も何度もリピートする。

「ん？　烏丸さん？」

亨が尋ねるが、葉月は心ここに在らず……といった感じに、その表情は上の空だ。

「……お～い？」

葉月の目の前で手を振る亨。

しかし、反応はない。

やれやれと亨は軽く息をついて、車を走らせていった。

東区の商店街、そこに在る拓夜の家。

おもちゃ屋サプライズに到着したのは夜の8時頃だった。

一同は車から降り、円陣になって喋っていた。

「さてと……皆、大事な話があるんだが」

亨がそう言うと、それぞれの会話がピタリと止み、皆の視線は彼の隣に立つ一人の少女に向けられる。

「今日はここで解散になるが、その前に報告しとかなきゃいけない大事な話がある。今日、俺たちＯＣＧ研究会に、新たなメンバーが加わった」

亨がそう言うと、隣に立っていた少女は一歩二歩と前へ進み、自分を取り囲む皆を見渡しながら口を開いた。

「今更かもしれないけど、改めて自己紹介させてもらうわ。私は、烏丸葉月！今日付けで、このＯＣＧ研究会のメンバーになりました。よろしくお願いします！」

軽く頭を下げる葉月。

「……葉月！」

「葉月さん……！」

「へっ……ホント、今更だぜぃ。だってさ、白石さん？」

「ふヌォオオ！！　美少女よォオ！！　遂に、遂に俺の女にィイ！！」

「いや、なってない……なってないからな白石さん」

それぞれが歓迎の声をあげる。

新たなメンバーを加え、更なる盛り上がりを見せるＯＣＧ研究会のメンバー。

この日を境に、拓夜たちのデュエルは、新たな展開を迎えていく事を、この時の彼らはまだ知らない。

「ねぇ……さいじょお、さいじょお」

「な、何でしょうかマナさん……何か黒いオーラが見えてるんですが……？」

「何か今回の私、えらく空気だった気がするんだよ？これは一体どういう事なのか説明して欲しいんだよ、さいじょお！」

「ぇえっ！？　それ俺って関係あるかぁ！？　それにどっちかって言ったら、白石なんかファンに混じって吼えてただけだぞ？　それに比べたら……ってマナさん、止めて！　道に落ちてる石は投げち

や駄目だって！　当たったらぁィタァアッ！！」

富士急ハイランドへ　最終章　（後書き）

さて、本格的に小説に掲載するデッキを構成しなくては・・・！？

しっかし、制限改定め・・・・・・

サイドラ解除って、またサイバーの時代が！？

って、いうか！？　インフェルガンが制限！？

まぁ最速禁止を叩き出したあのカード・・・

《キャノン・ソルジャー》というカードがある。

モンスター1体をリリースすることで相手に５００ポイントのダメージを与えるという、いわば「射出」系の元祖と言えるカードだ。

だがシンクロ召喚というものは、過去を省みずに、進化を求めすぎた……。

レベル４のキャノン・ソルジャーに、レベル３のブラック・ボンバーをチューニング！

世界の平和を守るため、

勇気と力をドッキング！

シンクロ召還、

愛と正義と破滅の申し子、

ダーク・ダイブ・ボンブゥァァアア！！

足りない何か　（前書き）

今回は、あとがきに西条拓夜のデッキレシピを掲載したいと思います。

実を言うと、拓夜のデッキは、実際に僕自身が使用しているデッキです。

ちょいと恥かしいですケドね？

足りない何か

北区と東区の街並みはそんなにも大して変わらない。

これは北区や東区だけに言える事ではなく、東西南北それぞれの地区は、方角こそ違うが、建ち並ぶ風景はそう変わりはない。

北区には、地下街がある。

一応は他の地区にも地下街はあるのだが、北区の地下街にはゲーム、アミューズメントが栄えていた。

他の地区の地下街では、北区とは別に飲食店が栄えていたり、はたまた洋服店が並んでいたりと、それぞれの地区によって、それぞれの特色が出ている。

そんな北区の地下街の一角には、とあるカードショップが開いていた。

まだ土日の昼間なのだが客入りが少ないのか、店内には賑わう客の声が聞こえて来なかった。

ガランと空けた店内。

店のドアには午前１１時に開店と書かれている。

店内の時刻は正午の１２時。

とうに開店時間は一時間も過ぎているのに、店内には客は誰一人としていない。

店の経営状況が怪しまれる中、その店の店長である一人の少女は特に何をするでもなく、店内に用意されたパイプ椅子に座り、足を長テーブルの上に置きながら、優雅にタバコを吹かしていた。

そんな時間が３０分は続いただろうか。

すると店の扉がガチャリと開き、そこから一人の少女が来店してきた。

「ごめん、遅れた……って、何よこの部屋!?　タバコ臭っ!?　ちょっと結衣！　貴女、換気扇くらい回しなさいよ！　只でさえ地下街の店なんだし！」

「フー…っ、棗さんの到着が遅れたからでしょう?」

「ソレとコレは話が別よ！　大体、貴女はまだ１７歳！　未成年でしょ!?　今の御時世、未成年はコンビニは愚か、自販機なんかじゃタスポが無くちゃタバコは買えないわよ?　一体どうやってそう……」

棗の言葉を遮るように、結衣と言われた未成年の少女はポケットから一つのカードを取り出した。

「このタスポ……親のを少々拝借しましたの。それに、コンビニや自販機なんか行かなくても、手元に収集する方法なんていくらでも在るんですのよ？　何なら教えて差し上げましょうか？　初心者に負けた棗さん？」

「ぐッ、何時までも古傷をネチネチと……！！」

険悪な雰囲気の二人。

一人は棗絵里香。

以前、東区にて行われたＯＣＧ研究会主催のデュエル大会にて拓夜とデュエルをし、敗北した【ドラグニティ】を使役する、北区のデュエリストチーム【フィアーズ】に所属するデュエリストだ。

そしてもう一人。

この店の店長として居る少女、如月（きさらぎ）結衣。

彼女もまた、棗とチームを同じくする【フィアーズ】のデュエリストだ。

「それにしても、私もあの後会場に到着して、あの初心者のデュエルをご覧になりましたけど……彼は【Ｄ－ＨＥＲＯ】をお使いになりますのね？　ま、どちらにしても戦術は悪くありませんでしたけど……、流石はあの御方が目を付けただけありますわ」

「……どうでも良いけど結衣。貴女、足を机に乗せてるせいで、さっきからミニスカートが捲れて下着が丸見えよ？」

あら？と一瞬だけ首を傾げる如月だが、彼女はその後、だからどうした？とでも言うように、その姿勢を崩さない。

「別に、棗さんに見せる為にこんな姿勢をしている訳ではありませんの。私の全ては、あの御方のもの……。今身に付けているこの下着だって、意の一番にあの御方にご覧になって頂く為……」

「……ハァ、もう良いわ」

変態丸出しな如月につべこべ言うのは止めにした。
変態的唯我独尊の精神を持つ彼女には、昔から何を言ってもこうなのだ。

「あ、言い忘れてたわ。　結衣、残念だけど、リーダーは遅れて来るわよ？」

「エ　ゞ！？」

「うん、家から来る途中にメール来た」

棗は携帯を開き、その画面をヒラヒラとさせながら如月に見せる。
それを見た如月は、女狐の表情を一変させ、なまはげの面のような表情にしながら、棗の携帯電話を引ったくった。

「みみ見せて下さいまし！！」

「あ、ちょっ！？」

何度も何度も目線を液晶に走らせて、棗の携帯を握る手をプルプル

と震わせる如月。

「な、何故ですの!?　何故こんな初心者にも負けるようなヘタクソにはメールを送って、この私にはメールを送って下さらないの!?」

「ちょ、結衣!?　そんな強く握ったら、私の携帯壊れる!」

「そんな事は知ったこっちゃねぇですのムキィーーー!!『バキャ』」

「あーーッ!!わ、私の携帯が……っ!?」

とある北区の地下街の一角にて、女同士の激しいリアルファイトが始まった瞬間であった。

西条拓夜は、東区にある自宅近所の公園に来ていた。

今彼は、ＯＣＧ研究会の先輩である結締智恭を待っていた。

その理由としては、以前成瀬に言われたことだ。

遊戯王カードにおける新たなる制限改定、それによるデッキの見直しについて、同じ【ＨＥＲＯ】デッキを使う結締の意見を聞く為であった。

同じ【ＨＥＲＯ】デッキと言っても、拓夜と結締が使う【ＨＥＲＯ】は違う。

拓夜の【ＨＥＲＯ】は、【Ｄ－ＨＥＲＯ】。

闇属性モンスターで構成された、様々な特殊効果を持つ【ＨＥＲＯ】だ。

それに対し、結締の使用する【ＨＥＲＯ】は【Ｅ・ＨＥＲＯ】。

エレメンタルの名の如く、様々な属性の【ＨＥＲＯ】で、『融合』を駆使して戦うデッキだ。

一見すると違う戦術のデッキ内容だが、ある一部分だけにおいては、共通する部分が存在する。

それは、

「……融合……か」

そう、『融合』だ。

【ＨＥＲＯ】の中の融合モンスターには、融合条件が比較的緩いモンスターが在る。

その一例として、【ＨＥＲＯ】の融合モンスターを挙げると、【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】というカードが在る。

このモンスターの融合条件としては、【ＨＥＲＯ】と名のついたモンスター1体と、水属性モンスター1体。

これならば【Ｄ－“ＨＥＲＯ“】だろうが【Ｅ・“ＨＥＲＯ”】だろうが、水属性モンスターと融合してしまえば、それだけで条件が整ってしまう。

それならば、その様にデッキを構成すれば良いのだが……。

「オィ～ッス拓夜ちゃん！」

「あ、結締さん……」

考え事をしていたら、大分時間が経っていたようだ。

ベンチに座っていた拓夜は立ち上がり、結締に挨拶を交わした。

「待たせちまったみたいだな。で、相談って何ぜよ？」

「はい、あの……結締さん、今月から遊戯王カードの制限改定があるって、知ってますよね？」

「当～然。俺はもうそれに合わせて、デッキは作り直したけど、拓夜ちゃんはもう出来上がったのか？」

結締が尋ねると、拓夜はバツが悪そうに顔を俯かせ

「一応は作ったんですが……どうカードを詰めれば良いか、一人じゃ自身がなくて……」

そう言い鞄から一つのデッキケースを取り出し、中を取り出す拓夜。

「結締さんからも、確認して貰えないですか？　同じ【ＨＥＲＯ】デッキを使う結締さんなら、何かこうした方が良いって言うアドバ

イスが聞けるかもって思って……」

「ふ～ん……」

えらく消極的な意見だな、と結締は思ったが、結締は拓夜からデッキを受け取り、一枚一枚確認していく。

「……どう、すかね？」

「……」

無言のまま一通りデッキ内容を確認した結締は、拓夜の手のひらに、彼のデッキを返した。

そして

「……分からん」

「え？」

「分かるかっちゅーの、ンナもん。とりあえず、拓夜ちゃんのエースモンスター【Ｄｒａｇｏｏｎ－Ｄ　ＥＮＤ】が出せるように、ブルーＤやドグマガイ、そんで『融合』が入ってる事くらいしか分からねーけど、そっから俺のどんな意見を求めてんだ？」

「え、え……？」

自分にとって予想外の返事が返ってきた為、思わず何も言い返せない拓夜。

「いいか拓夜ちゃん、デッキって言うのはな……俺たちデュエリストにとって、言わば自分の分身なんだよ……」

「分……身……」

「そうだ。自分の代わりにカード達が戦い、戦い、戦って！　そんなカード達と息を合わせて、魔法や罠を駆使して激戦を潜り抜けて！　そして初めて勝利を掴み取る事ができる！！」

熱く語る結締は視線を拓夜に移し、何時になく真剣な眼差しで向き合った。

「確かに他人からのアドバイスによって、強くなる事も出来る。けど、悪いが拓夜ちゃん。今の拓夜ちゃんにはアドバイスなんて出来ない」

「そ、そんな……何でなんスか！？　何もそんな一方的にっ！！」

声を張り上げる拓夜は、思わず結締に突っかかるような勢いで立ち上がった。

「俺は、そんな事を言われる為だけに来たんじゃない！！　ちゃんと俺なりに考えて、戦略を練って、練って！！　それでも足りない何かを補いたいから、同じ【ＨＥＲＯ】使いのアンタにお願いしたんだ！！」

そうだ。

自分はそんな事を言われる為だけに来たのではない。

拓夜の目標は、ＯＣＧ研究会の先輩たちだ。

倒すべき目標、その一人に自分のデッキをさらけ出すなんて、ある意味無謀、というよりも馬鹿と言われても仕方のない行為だ。

しかし、デッキを組む上で不安でもあったのだ。

このデッキで、この人達と互角に渡り合える事が出来るのだろうか？

同じ【ＨＥＲＯ】使いならば倒すべき目標とはいえ、何か意見をくれるのではないだろうか？

しかし結締からの意見は、拓夜にとって理解し難い内容だった。

自分が求めた意見は、そんな投げやり的な意見なんかじゃない。

自分が求めた意見は、もっと強くなる為の、どんな些細な一言でも良かったのだ。

自分が求めた意見は……

意見は……

「……ったく、世話が焼けるぜぃ」

結締はボソッと、拓夜に聞こえない位に小さな声で呟いた。

「熱い、熱いねぃ拓夜ちゃん」

「ぐっ、何を！！」

「そんだけ熱を込めたデッキなんだろ？　なら、闘ってみるのが一番じゃねぇか？」

「えっ！？」

結締の発言にキョトンとなる拓夜。

先程まで頭に登っていたのが嘘かのように、サーッと熱が引いていくのが分かる。

「やってみるって……結締さん……」

「ンナもん、デュエルに決まってんじゃねぇか？　やろうぜ拓夜、俺とのデュエルを！」

ＯＣＧ研究会の事務所、兼、西条亨宅。

東区にある三柱付属大学の近くに建つアパートの一室にて、西条亨と白石直也の二人は向き合うように胡座をかいて座っていた。

その二人の間にはダンボール箱が一つ。

その箱には『トリティニーグループ』の表記がされており、その大きさはエアコン位のサイズだ。

そしてそれを見つめる二人の表情は、クリスマスにサンタさんからプレゼントを貰えた子供のような表情になっていた。

「遂に来たな、西条……」

「ああ、理事長……あ、いや、中島さん……遂にやったんだ……！」

そう言い、二人は同時にダンボール箱をがむしゃらに開け、中に入っていたブツを取り出した。

「おお……！！」

「これが……新世代型の、決闘盤（デュエルディスク）！！」

二人はダンボール箱に入っていた決闘盤を取り出し、様々な角度から眺め見る。

亨や白石、そして結締の三人は高校時代、三上市という場所に住んでいた。

三上市はデュエル発祥の地であり、遊戯王カード販売を取りまとめる大企業、『トリティニーグループ』本社が建っている。

その街で生まれ育った彼らは、『トリティニーグループ』が運営するデュエリスト養成機関に通っていた。

その三上市に限り、決闘盤は一般流通していた。

その訳としては、ソリッドヴィジョンに関係している。

何故、決闘盤にカードをセットすれば、ソリッドヴィジョンとして目の前に映し出されるのか？

その原理としては、まず『トリティニーグループ』には、カードデータを詰め込んだスーパーコンピューターが存在する。

決闘盤にカードをセットすれば、カード右下に埋め込まれているＩ

Cチップからその情報を決闘盤が読み込み、『トリティニーグループ』本社にあるスーパーコンピューターに伝えられる。

そしてそのスーパーコンピューターが超超高速で演算処理をし、その情報が送られてきた決闘盤に送り返され、決闘盤を装着したデュエリストの前にソリッドヴィジョンとして映し出されるといった構成なのだ。

三上市限定というのは、決闘盤とスーパーコンピューター。

その送受信する為の情報電波の有効範囲を指している。

三上市から一歩でも出て決闘盤を使用しても、もちろん電波など届かず、ソリッドヴィジョンが起動する事はない。

以前、この東区の三柱付属大学にて、ＯＣＧ研究会の彼等がデュエルフィールドなる物を開発した事がある。

ＯＣＧ研究会と三柱付属大学の理事長である中島が、共同開発したこのデュエルフィールドは、『トリティニーグループ』からの依頼で、この新世代型決闘盤を開発する為のモデルケースだったのだ。

ＯＣＧ研究会主催のデュエル大会、それは新たな決闘盤を作り上げる過程でのサンプリングと言っても良いだろう。

「ふぅん……各地方の『トリティニーグループ』……その支社にス

ーパーコンピューターの中継地点、又はそのコピーを設立し、全国各地でこの決闘盤を利用できるようにする……か」

「ああ、この東区はその第一歩だ……。これで、全国各地で更にデュエルが普及する。俺たちの夢に、また一歩近付いたんだ……！！」

感慨深く決闘盤を見つめる二人。

それだけ彼等にとって、この決闘盤というのは思い入れがあるのだ。

「ふぅん……この決闘盤が、この東区にて一般販売されるのは、来週辺りと理事長の中島さんから聞いている。西条よ、どうだ？　俺たちでまずこの決闘盤を使って、デュエルをしないか？」

「ああ、待ってたぜその言葉！俺も余り時間は残ってないし……いっちょやりますか！」

白石に亨が決闘盤を掴み、立ち上がったその時……。

「ちょっと待ったーーッ！！」

勢いの良い声が響き渡る。

白石に亨が振り向くと、限界のドアを開けて結締に拓夜の二人が部屋に入ってきた。

「白石さん、それに西条ちゃん。　その決闘盤を使ったデュエル、俺と拓夜ちゃんに譲ってくれないか？」

真剣な表情の結締。

しかし……。

「なぁ結締、土足で上がって来るのはマジで勘弁して？」

「おっと、こりゃ失礼……」

その場で靴を脱ぎ、玄関にキチンと整頓してから再び白石に亨に向き直る結締。

「ちゃんと皆の靴を揃えるなんて、何て几帳面なんだ……って思っただろ、拓夜ちゃん？」

「いや、土足で上がった時点でそれは無い……」

拓夜がツッコミを終えると、話を聞いていた白石が尋ねた。

「しかし……、どうした結締？　何時になく、良い目をしているな……」

「ああ、己を高めようとする拓夜ちゃんに……ちょっとな」

東区の商店街ではマナ、成瀬花穂、烏丸葉月の三人が、揃って買い物に来ていた。

買い物袋をぶら下げるマナ。

その袋の中は大量の食料品が詰められており、見るからにズッシリとした重量感があった。

「色々と回ってたら、結構な量になっちゃいましたね……」

成瀬はマナの持つ買い物袋を見て思わず呟く。

一緒に歩く葉月は

「あの……マナさん、本当に持つのを手伝わなくても良いの？」

「え？　大～丈夫、大丈夫！ちょっと魔法を使えば、これ位は楽勝だよ？」

「え？　……魔法？」

葉月には何の事だか分からず不可思議な顔をするが、成瀬は「なる程！」と納得していた。

その理由としては、葉月はまだ知らないのだ。

マナが自分達とは違う、ただの人間ではないという事を……。

商店街入り口を通り過ぎ、市街地を歩きながら、三人の少女達はＣＧ研究会の事務所兼、西条亨宅へと向かっていた。

「マナさん、こんなに沢山の食材を買い込んで、マナさんは何の料理を作るんです？」

「あ、それは私も気になってた！」

葉月も成瀬と同じく、マナが大量に買い込んだ食材から、一体どんな料理が出来上がるのか気になっていたようだ。

ニンジン、玉ねぎ、ナス、カブ、白菜、ジャガイモ、大根、キュウリ、トマト、鶏もも肉、牛肉、キャベツ、レモン汁、豆腐、ワカメ、本だし、鰹節、食パン、牛乳、ポテトチップス、ケロッグチョコワ……

袋の中をチラッと覗き見たマナは、二人にとって信じられないような発言をした。

「ん～…、知らない」

「えっ……？」

「知らないって……だって、マナさんが料理する為に買っていたんじゃないの！？」

「チ・チ・チ……それは所謂、先入観というヤツなのだよ、はづきワトソンくん？」

どこぞの名探偵になりきるマナは、人差し指をピョコピョコと動かす。

「ワトソンくん……ですか？」

「え、私！？　ちょ、成瀬さんまでコッチ見ないでよ！？」

「この買い物は、さいじょおに頼まれて買ってきた、ただのお使いだよ？　それに私は料理は作れないからね～」

「あ、私も実は……お料理は苦手なんです……葉月さんはどうです

か？　お料理！」

成瀬はある意味の期待を込めた目で、葉月を見つめた。

（私にマナさん、そして葉月さんの三人揃って、お料理できませんグループ……）

「多少はできるわよ？　簡単なヤツなら」

「えっ！？」

「うわぁ！！　はづきって凄いね！！　得意料理は何？　フレンチ？　イタリアン？　それとも全国各地の郷土料理とか！？」

「いや、郷土料理って……」

思惑が外れた成瀬はその表情に一瞬、落胆の色を見せるが、それは直ぐに治まった。

「じゃあ今日のご飯はさいじょおじゃなくて、はづきに作って貰おうかな？」

「あ、マナさんって、亨さんにいつもお料理を作って貰っていたんですね！　料理が出来る人って良いな～。　ハッ、そういえば……拓夜さんはお料理はどうなんでしょうかね……？」

「……」

葉月は成瀬の言っていた『亨が料理をする』事を、頭の中でアレンジしながら想像してみる事にした。

台所に立つ亨は、慣れた手つきでトントン……と、包丁の音を軽快にたてていく。

その隣では葉月が味噌汁を作っており、丁度出来上がった所だった。

『アナタ、味噌汁が出来たわ。味見、してみる？』

『お、良い香りだな……』

『ほら、アーンして？』

小皿に浸けた味噌汁を、亨の口に含ませる葉月。

互いにドキドキしながらも、葉月の作った味噌汁を飲んだ亨はこう言うのだ。

『うん、美味い！』

『ホントに？　フフ……嬉しい！』

「エヘッ……えへへへへ……ヤだもう、そんな褒めても、胸はこれ以上出ないわよぉ～」

「……」

「……」

見事に妄想がダダ漏れだった。

「葉月さん……何だか最近、壊れ気味みたいです……」

「そう、なんだ……。最近知り合ったばかりだから、コレがはづきの素なんだと思ってたよ……」

葉月だってまだ女子校生。

まだまだ夢見るお姫様でいたい年頃なのだろうか？

マナに成瀬の二人はしばらくの間、葉月をソッとしてあげる事にした。

「アハハ、やだもう、アナタったら～～……っっ！！？？　え、えっ！？　何、マナさん……成瀬さん……！？」

「……いえ……」

「何でもない。何でもないんだよ……」

外に出た結締に拓夜等は、近くの河原に来ていた。

結締と拓夜の左腕には、それぞれに新世代型決闘盤が装着されている。

向き合う二人を見守るように、亨に白石の二人は近くに落ちていた岩の上に座った。

「拓夜ちゃん、準備はできたか？」

「はい……何時でもいけます！」

「良い返事だぜぃ」と呟いた結締は、決闘盤を起動させる。

拓夜もスイッチを入れ、決闘盤を起動させて構えた。

「ふぅん……どういった経緯かは知らんが、今日の結締はヤケに気合いが入っているな……」

「ああ、それに拓夜くんも……並々ならぬ闘志を感じる……」

二人を見守る亭に白石が呟いた瞬間。
結締に拓夜、二人の決闘（デュエル）が始まった。

「「デュエル！！」」

互いにデッキから手札となる5枚のカードを引くと、結締が口端を吊り上げるような笑みを浮かべて言った。

「拓夜ちゃん、先攻は譲るぜぃ？　持てる力をぶつけて来な！！」

「なら、遠慮なく行かせてもらうぜ！　俺のターン！！」

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／８０００

【後攻】結締智恭
ＬＰ／８０００

カードをドローした拓夜は、６枚となった手札をじっくりと確認する。

今、自分が繰り出せる戦術をシュミレートし、拓夜は行動を開始した。

「先ずはコイツだ！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
【効果】
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。
それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。
通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「ダイヤモンドガイの効果を発動！デッキの一番上のカードは……よし、通常魔法の『トレード・イン』だ！」

拓夜は『トレード・イン』のカードを結締に見せ、墓地へと送った。

「ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた魔法カードの効果は、次の自分のターンのメインフェイズ時に発動できる！　俺はカードを1枚セットして、ターンエンド！」

拓夜のターンが終了し、結締のターンが訪れる。

「ダイヤモンドガイで『トレード・イン』が落ちたか……。良いねぃ拓夜ちゃん！面白くなりそうだ！　俺のターン！！」

結締は楽しそうな笑みを浮かべて、カードをドローした。

すると、二人のデュエルを見守る亨や白石に、後ろから声が掛かってきた。

「あ、おーい！　さいじょおーー！」

「ん、あぁ……マナか」

買い出しを終えたマナ達三人は、亨や白石と合流した。

「ちゃんと頼まれたのを買ってきたよ、さいじょお！　……って言うか、今あそこでデュエルをしているのって……結締くんに、たくや？」

尋ねてくるマナに、亨は「ああ」と頷いた。

「白石さん、あのお二人が腕に装着している機械は、一体何なんです？」

マナと一緒にやって来た成瀬が、不思議そうな顔をして白石に質問

する。

「あれは『トリティニーグループ』が新たに開発した、新世代型の決闘盤だ」

「新世代型って……亨さん、アレってもう市場に出たの？　開発に成功した事は、こないだのニュースで見ましたけど……？」

白石の話を聞いて、同じくマナと一緒に来た葉月が質問した。

「いや、市場に出されるのは来週からだ。だが俺たちＯＣＧ研究会は、実は『トリティニーグループ』とある関係を持っていてね……。俺たちの人数分だけ、アレを譲って貰えたんだ」

話を聞いて葉月は改めて、このＯＣＧ研究会に驚いた。

『トリティニーグループ』と言えば、世界有数の大企業である。

そんな大企業とただの学生が、一体どの様な関係を持っているのか気になる所ではあったが、それらを通り越して、葉月はただただ、凄いと感じていた。

「たくやに結締くんのデュエルか……どうなるのか、気になるね！」

マナが言い終えると同時、結締は自分のターンのプレイを開始していった。

「手札の魔法カード、『Ｅ－エマージェンシーコール』を発動！」

【Ｅ－エマージェンシーコール】
【魔法カード】
自分のデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

「この効果で、俺はデッキからエアーマンを手札に加えるぜぃ！」

デッキからモンスターカードを手札に加える結締。

「そして、手札に加えたエアーマンを召喚！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
星４／風属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
【効果】
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から一つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

結締のフィールドに、エアーマンが召喚された。

そして結締は優先権を使い、エアーマンの効果を発動させる。

「エアーマンのモンスター効果、デッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー』を手札に加える！」

結締はデッキからプリズマーのカードを手札に加えた。

そして……。

「行くぜぃ拓夜ちゃん！　エアーマンで、ダイヤモンドガイに攻撃だ！」

エアーマンの攻撃が拓夜のダイヤモンドガイに炸裂し、破壊した。

その攻撃力の超過分のダメージを受けた拓夜のライフポイントは、微弱ながら減少した。

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００　↓　７６００

【結締智恭】
ＬＰ／８０００

「くっ！？　ダイヤモンドガイ……」

デュエルを見守る成瀬は、思わず「あっ！？」と声をあげる。

今、なぜ結締と拓夜がデュエルを行っているのか？

見守るメンバーの中で、成瀬だけが拓夜の気持ちを理解していた。

「俺はこのまま、ターンを終了するぜぃ！」

「くっ、俺のターンッ！！」

拓夜のターンに移行し、デッキからカードをドローする。

結締のフィールドには、攻撃力１８００のエアーマンのみ。

拓夜はフィールドを確認し、そして手札を確認して自分のプレイを開始する。

「前のターン、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた『トレー

ド・イン』の効果を発動する！　デッキからカードを2枚ドロー！！」

更に手札を増強し、戦術の幅を広げた拓夜。

彼が次に繰り出した戦術とは……。

「手札の魔法カード『精神操作』を発動！」

【精神操作】
【魔法カード】
このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

「この効果で、結締さんのエアーマンのコントロールを得る！」

結締のフィールドに居たエアーマンが、拓夜のフィールドに移る。
これで結締のフィールドはがら空きになり、ダイレクトアタックのチャンスに繋がった。

（これで結締さんのフィールドはがら空き状態、攻めるなら今なんだが……）

しかし、拓夜の6枚ある手札の中にモンスターカードは、たったの2枚しか無かった。

（手札のモンスターは、『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『サイバー・ヴァリー』のみ……こうなったら！！）

「更に魔法カード『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
【魔法カード】
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚を捨てる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を捨てて、デッキからカードを２枚ドロー！！」

来いッ！！

強く念じ、デッキからカードをドローした拓夜。

彼が引き当てたカードは、『融合』の魔法カードと『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』のカードだった。

（……このカードが来たか、ならば！！）

「俺は、『サイバー・ヴァリー』を召喚！」

【サイバー・ヴァリー】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
【効果】
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。

●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを1枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。
●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。
●このカードと自分の手札1枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード1をデッキの一番上に置く。

拓夜のフィールドに小型の機械竜が出現する。

（ヴァリーだと？……拓夜ちゃん、まさか……？）

拓夜の召喚したモンスターを見て、結締はどこかで見た事がある光景だと思った。

そう思ったのは、結締だけではない。

二人のデュエルを見守るメンバー達も、同じ気持ちだった。

その光景というのはデュエル大会にて、拓夜が棗とデュエルをした時の事だ。

その時の拓夜は、棗のシンクロモンスターのコントロールを『精神操作』で奪い、ヴァリーの効果を発動して、見事に棗のモンスターを除外してみせた。

そして今回も、

「ヴァリーのモンスター効果を発動!!　俺のフィールドに存在する結締さんのエアーマンと、ヴァリー自身をゲームから除外し、俺はデッキからカードを2枚ドロー!!」

結締のエアーマンを巻き添えに、更に手札を増強させる拓夜。

しかし、またしてもモンスターカードを引く事ができなかった。

だが、手札は揃った。

（……『増援』に『戦士の生還』!?　なら、今の内に……!!）

拓夜は7枚の手札から1枚のカードを掴み取り、自分の全力のプレイを魅せつけていった。

「魔法カード『戦士の生還』を発動！」

【戦士の生還】
【魔法カード】
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択して手札に加える。

「この効果で、コストとして墓地に在る『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を手札に加える！」

『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』のカードを手札に加えた拓夜。

「Ｂｌｏｏ－Ｄのカードを手札に加えて、一体どうする気ぜよ？拓夜ちゃんはこのターン、既に通常召喚は行っている。Ｂｌｏｏ－Ｄを呼び出そうにも、リリースするモンスターが居なけりゃ、話にならないぜぃ？」

結締の発言は確かにそうだ。

現在、拓夜のフィールドには1枚のリバースカードがあるだけで、モンスターは1枚もない。

このままではＢｌｏｏ－Ｄを特殊召喚するなど、絶対にできない。

しかし……

「そんな事は、言われなくても分かっている！」

「……っ！？」

拓夜の狙いは、Ｂｌｏｏ－Ｄ召喚ではない。

「確かに俺はこのターン、モンスターはもう召喚できない。だがな……」

拓夜の狙いは……

「融合召喚は、特殊召喚扱いだ！！」

「……っ！？　まさかっ！？」

「手札から魔法カード『融合』を発動！！」

【融合】
【魔法カード】
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を融合し、俺の信じる最強モンスター！　『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を、融合召喚！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】

星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
【融合／効果】
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

拓夜のフィールドに、彼の最強モンスターが降臨した。

「へっ、やるじゃないの……！！」

（ドローフェイズを除いて、あんだけ一気に６枚もドローしたんだ……手札が揃って当たり前っちゃ、当たり前か……っ！！）

「行くぜ、結締さん……バトル！！」

バトルフェイズに突入する拓夜。

この一撃に自分の持てる力を注ぎ込んで、拓夜は高らかに攻撃宣言を行った。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』で、ダイレクトアタックだ！！」

ズゴゥッッ！！！！

「グァアッ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／７６００

【結締智恭】
ＬＰ／８０００　→　５０００

一気にライフを削られた結締。

拓夜の圧倒的な一撃が、デュエルを見守るメンバー達の心を激しく揺さぶらせた。

「ふぅん……やるな、拓夜め……！！」

「たくや、強くなってる……前よりも、確実に……」

「拓夜……」

「……さて、結締がどう立ち回るか……楽しみだな……」

そんな中、成瀬だけは他のメンバーとは違った気持ちで見つめていた。

成瀬は知っている。

拓夜の思いを。

（……拓夜さん……）

以前、拓夜と自分がＯＣＧ研究会に入ったばかりの頃、拓夜は言っていた。

『俺は、一番になりたい……デュエルで、一番になりたい！』

しかし、後のデュエル大会では、拓夜は敗北してしまった。

その後の亨と葉月とのデュエルで葉月が敗北した時、彼は成瀬の隣で呟いていた。

そしてその時に彼にとって、倒すべき目標が明確になった。

それは……

（ＯＣＧ研究会……。拓夜さんは、敢えて仲間たちである、ＯＣＧ研究会の先輩たちを倒すべき目標としました。でも……）

デュエル初心者であった拓夜は彼ら先輩たちと違い、根本的に足りない何かがあった。

丁度良い機会だったのが、富士急ハイランドへの旅行の最中だった。

最後のアトラクションに乗った時、成瀬は拓夜に制限改定の話を振ってきた。

制限改定によって、必然的にデッキを見直さなくてはいけない。

そこで成瀬は、拓夜にある提案をした。

『【ＨＥＲＯ】デッキを作るのでしたら、丁度良い『ＨＥＲＯ』デッキの先輩が居るじゃないですか！』

狙いは結締だった。

実際に成瀬は、結締と拓夜がデュエルをする事になるのではないかと、ある程度の予想はしていた。

そして現在、拓夜は結締とデュエルをしている。

その経緯は何であれ、拓夜はコレを乗り越えなくてはならない。

拓夜には無くて、他のメンバーに在るもの。

それを拓夜はこのデュエルで、自身に身に付けなくてはならない。

（私が教えても良かったんですけど……、結締さんはああ見えて、結構な策士ですからね……）

成瀬はその役を自分ではなく、敢えて結締にお願いしてみる事にし

た。

無論、その事は結締には一切伝えてはないが、結締ならば、きっと拓夜を上手く導いてくれると……。

成瀬は、確信にも似た思いがあった。

（拓夜さん……拓夜さんは、自分では気付いてないだけなんです。結締さん……お願いします！）

「俺はターンを終了する。　さあ、結締さんのターンだ！！」

結締のターンが訪れたが、彼は真っ直ぐに拓夜を見据え、自分の思いを口に出した。

「……拓夜ちゃん、強いじゃねぇか」

「っ！？」

拓夜にとって唐突に言う結締に、拓夜は一瞬、彼が何を言っているのか理解できなかった。

「お前、自分の作ったデッキに自信がないからって、俺にデッキを見せてきたよな？」

「そ、それは……同じ【ＨＥＲＯ】デッキを使う結締さんから、もっと強くなる為の……アドバイスが欲しくて……」

「何で自分のデッキに自信が持てない？　実際にやってみなくちゃ、分からねーじゃん？　俺が拓夜ちゃんに何が言いたいのか、分かるか？」

「……そ、それは……」

言い倦ねる拓夜。

苦悶に満ちたその表情から、結締は彼の気持ちを察しながら話を続けた。

「拓夜ちゃんがまだデュエルを始めて、そんな期間が経ってない事

は知ってる……だけどな、俺は正直に認めるぜぃ？　拓夜ちゃんの実力を」

「……えっ！？」

「“お前は強い”！！　それは何故か？　お前がそのカードを信じているからだ。だからカードもお前に応える」

「……俺は……ッ！！」

「組み上げたばかりのデッキなんざ、誰だってやってみなけりゃ、どうなるのか分かる訳ないぜぃ？　でも、拓夜ちゃんは……そんな状況の中でも、ソイツを召喚する事に成功してるじゃねぇか？」

「……」

「前にも言ったが、俺から拓夜ちゃんに教える事はねぇよ！！　自分のデッキの真髄ってのは、デュエルの中で、自分で見つけていくしかねぇんだ！！」

「……デュエルの……中で、見つける……」

「ああ、そうだ。……拓夜、行くぜ？　この俺のターンを凌ぎ、自分自身に、そして自分のデッキに足りない何かを見つけ出せ！！俺のターン！！」

結締はデッキからカードをドローし、拓夜のフィールドを確認する。

彼のフィールドには、融合モンスターの『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が１体。

そしてリバースカードが１枚伏せられている。

そして結締がドローして引き当てたカードは……

（行くぜ、ネオス！　拓夜ちゃんに教えてやろうぜ？　お前の力でな！！）

足りない何か　（後書き）

前書きに述べたように、西条拓夜のデッキレシピを掲載したいと思います。

【シンクロＤ－ＥＮＤ】４３枚

《モンスター》２２枚
Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ　２
Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ
Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ　２
Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ　２
Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
サイバー・ヴァリー　３
ダンディライオン　２
沼地の魔神王　２
墓守の偵察者　２
墓守の番兵
深海のディーヴァ　２
ゾンビキャリア
クリッター

《魔法》１６枚
トレード・イン
融合　２
未来融合－フューチャー・フュージョン

戦士の生還
デステニー・ドロー
精神操作
貪欲な壺
増援
サイクロン　２
おろかな埋葬
賢者の聖杯
ワン・フォー・ワン
闇の誘惑
死者蘇生

《罠》５枚
奈落の落とし穴　２
聖なるバリアー ミラーフォース ー
激流葬

エクストラデッキには【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】と【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】は必須です。

墓守でモンスターを展開、ディーヴァの効果でディーヴァをデッキから特殊召喚。
ディーヴァはチューナーとしてだけでなく、時には融合素材としてＺｅｒｏ様を出します。

使用すると、何気にそこそこ戦えるデッキになってます。

まだまだ改良の余地は多々あると思いますが、って言うか、絶対にあるんです！

宜しければ参考にしてもらえたら、幸いです。

さて、物語の内容なのですが、以前感想ページで質問された内容にお答えする様な話になりました。

『どうして、前の時代である【決闘者の道】ではデュエルディスクはあるのに、この作品ではないのか？』

少しおかし説明部分があったかもですが、そういう理由という事にしておいて下さい。

今回の拓夜の行動。

その真意としては、デュエリストである方なら恐らく一度は経験していると思います。

組み上げたばかりのデッキに対する自身、不安、期待・・・

それはデュエルだけに言える事ではありません。

人生、生きていく中で、例えば上司から責任が重い仕事を任された時・・・

例えば、彼女にプロポーズをする時・・・

どんな状況であれ、そこには必ず一人の人間の中に、様々な思想が存在します。

テーマを決めて執筆しても、なかなか上手い事文章が書けず、いっつも四苦八苦しております。

上手く伝わればいいな・・・。

それが僕の不安でもあり、希望でもある。と言えますね。

ダイヤの原石

※

【西条拓夜】
ＬＰ／７６００

【結締智恭】
ＬＰ／５０００

新たな決闘盤（デュエルディスク）を装着し、デュエルを繰り広げる結締に拓夜。

そのデュエルを見守るＯＣＧ研究会のメンバー達はゴクリと息を飲み、２人のデュエルの成り行きを見守っていた。

結締との会話によって露呈した拓夜の弱点。

それは

「ふぅん……なる程な。結締は拓夜に自信を付けさせたかった訳か……」

「ああ。結締の話からして、拓夜くんはデッキ構成について悩んでいたみたいだが……」

白石に亨が話す中、二人の会話を聞いていた葉月が口を挟んだ。

「でも、アドバイスなんて簡単に……例えば、あのカードを入れたら、こう戦略の幅が増えるとか、何かちょっとした言葉があっても良かったんじゃ……」

「その必要が無かったとしたら？」

葉月の言葉を遮るように、亨は話しだす。

「仮にもし、拓夜くんのデッキを見た結締が、拓夜くんのデッキをこれ以上変更する必要性がないと判断していたら？」

「えっ！？　それって……」

メンバー等が話している間に、結締は自分のプレイを開始していく。

「行くぜぃ！フィールド魔法、『フュージョン・ゲート』を発動！」

「っ！？」

【フュージョン・ゲート】
［フィールド魔法］
このカードがフィールド上に存在する限り、「融合」魔法カードを使用せずに融合召喚をする事ができる。この際の融合素材モンスターは墓地へは行かず、ゲームから除外される。

「手札の『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』と、『究極宝玉神レインボー・ドラゴン』を除外し、『レインボー・ネオス』を融合召喚！！」

【レインボー・ネオス】
星１０／光属性／戦士族
ＡＴＫ　４５００
ＤＥＦ　３０００
【融合／効果】

「E・HERO　ネオス」＋「究極宝玉神」と名のついたモンスター1体
このモンスターの融合召喚は上記のカードでしか行えず、融合召喚でしか特殊召喚できない。1ターンに1度だけ以下の効果から1つを発動できる。
●自分フィールド上のモンスター1体を墓地に送る事で、相手フィールド上モンスターを全てデッキに戻す。
●自分フィールド上の魔法または罠カード1枚を墓地に送る事で、相手フィールド上の魔法または罠カードを全てデッキに戻す。
●自分のデッキの一番上のカード1枚を墓地に送る事で、相手の墓地のカードを全てデッキに戻す。

結締のフィールドに、七色の輝きを放つネオスが光臨した。

（……来た、結締さんの……最強モンスターがッ！！）

結締はレインボーネオスに手を翳し、早速その効果を発動する。

「『レインボー・ネオス』の効果発動！　デッキの一番上のカードを墓地へ送り、相手の墓地のカードを、全てデッキに戻す！！」

「なッ！？」

ネオスの背中から生える羽から、眩い七色の光が放たれる。

拓夜は慌てて、自分の場に伏せられていた1枚のリバースカードを発動した。

「クソッ！！　だったら……罠発動！！　『奈落の落とし穴』！！」

【奈落の落とし穴】
［罠カード］
相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

拓夜の発動した『奈落の落とし穴』により、結締の『レインボー・ネオス』は破壊され、ゲームから除外された。

しかし、拓夜は『レインボー・ネオス』の効果を受けて、墓地のカ

ードが全てデッキに戻されてしまった。

（『レインボー・ネオス』は破壊できたが……俺の墓地はスッカラカンになっちまった……！？）

その事に拓夜は悔しそうに歯噛みする。

現在、拓夜のフィールドには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』のみ。

結締は『レインボー・ネオス』が破壊され、除外されたにも関わらず、その表情は闘志に満ちていた。

「ヤッパ奈落だったか……読んでたぜぃ、拓夜ちゃん？」

「ッ！？」

「俺はまだモンスターを融合召喚しただけで、まだ通常召喚はしてないぜぃ！！　プリズマーを召喚！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー】

星４／光属性／戦士族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　１１００
【効果】
エクストラデッキから融合モンスター１体を相手に見せる。
その融合モンスターの融合素材モンスターとしてカード名が記されているモンスター１体を自分のデッキから墓地へ送る事で、このカードはエンドフェイズ時まで墓地へ送ったモンスターと同名カードとして扱う。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

結締のフィールドにプリズマーが召喚され、その効果が発動する。

「プリズマーの効果発動！　エクストラデッキのジ・アースを見せて、デッキからオーシャンを墓地へ送るぜぃ！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　プリズマー】
↓（Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン）

プリズマーのカード名が変更された。

更に結締は手札のカードに手を伸ばし……

「更に、手札の魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動!!」

【ミラクル・フュージョン】
［魔法カード］
自分フィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「E・HERO」という名のついた融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「『ミラクル・フュージョン』は、フィールドか墓地にいるモンスターを除外し、【E・HERO】と名のついた融合モンスターを、融合召喚する!!」

結締は墓地のカードを取り出し、融合素材としてカードを除外した。

「墓地のオーシャン、そして同じく墓地から、アナザー・ネオスを

除外！」

「なッ！？　アナザー・ネオスなんて、何時の間に墓地に！？」

結締の墓地から取り出したカードを見て驚く拓夜。

それを見て、デュエルを観戦する成瀬はポツリと呟く。

「きっと、『レインボー・ネオス』の効果コストの時です……」

そして結締はエクストラデッキから1枚のカードを取り出し、自分フィールドに特殊召喚した。

「輝け、光の結束の力！『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング』！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング】

星８／光属性／戦士族

ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　２１００
【融合／効果】
「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター　＋　光属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、ゲームから除外されている自分の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数×３００ポイントアップする。このカードがフィールドから墓地へ送られた時、ゲームから除外されている自分の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを2体まで選択し、手札に加える事ができる。

結締のフィールドに白く、金色の輝きを放つヒーローが参上した。

「シャイニング……！？」

一体、どういうモンスターなのか知らない拓夜は、怪訝な表情でシャイニングを見つめる。

「シャイニングは、ゲームから除外されている自分の【Ｅ・ＨＥＲＯ】1体につき、攻撃力が３００ポイントアップする！　よってシャイニングの攻撃力は、３８００！！」

「なッッ！！？？」

【結締の除外されているモンスター】
［Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン］
［レインボー・ネオス］
［Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス］
［究極宝玉神　レインボー・ドラゴン］
［Ｅ・ＨＥＲＯ　オーシャン］
［Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス］

【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング】
ＡＴＫ　２６００　↓　３８００
ＤＥＦ　２１００

爆発的に力を得たシャイニングの攻撃力は、拓夜のフィールドの『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の攻撃力を上回った。

拓夜の頬に冷や汗にも似た感触の雫が、ポタリと流れ落ちる。

「バトルフェイズに突入だ！！　シャイニング、拓夜ちゃんの『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を攻撃だ！！」

シャイニングの放つ光線が、拓夜の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に直撃し、爆発を起こした。

ズゴゥッ！！

「ぐぁっ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／７６００　↓　６８００

【結締智恭】
ＬＰ／５０００

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が破壊され、拓夜のフィールドはがら空きになってしまった。

そこへ結締のプリズマーが、追撃として攻め入った。

「そしてプリズマーで、拓夜ちゃんにダイレクトアタック！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／６８００　→　５１００

【結締智恭】
ＬＰ／５０００

「ぐっ！？　ライフ差が……殆どなくなった……！！」

「俺はターンエンドだぜぃ」

結締はターンを終了し、拓夜のターンへと移行した。

自分の左腕に装着された決闘盤を見て、拓夜は奥歯を噛み締める。

がら空きの自分のフィールド。

手札の４枚は全て魔法・罠カード、モンスターはない。

更に墓地には『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』１枚しかなく、このターンのスタンバイフェイズに復活する事もできない。

思わず拓夜は、決闘盤にセットされた自分のデッキを見つめる。

（引き当てれるのか？　この状況を打開する為の……キーカードを……！！）

一気に不安感に包まれる。

どうすれば結締のモンスターを倒せるのか？

どうすれば上手く立ち回れるのか？

もし、ドローしたカードが無意味なカードだったら？

そんな拓夜の様子を見て、結締は大声で

「拓夜ァアッッ！！！！」

「ッ！？」

「俺は言ったはずだぜぃ？　お前は強い、とな。もっと自分に自身を持てよ？　もっとカード達を信じてやれよ？」

「む、結締さん……」

拓夜の脳裏に、デュエル前に結締が言っていた事が蘇る。

『デッキってのはな、言わば自分の分身なんだよ……』

『自分の代わりにモンスターが戦って、戦って、魔法や罠を駆使して戦い抜いて、そして初めて勝利を掴み取る事ができる！』

曖昧な言葉だが、確かにデュエルの芯を捉えた言葉ではないだろうか？

デュエリストがデッキを組み上げる時、そこには自ずとデュエリストの思考が詰め合わさり、一つの形（デッキ）となって現れる。

言わば、自分の分身だ。

モンスターが戦って、戦って……

戦闘を行ったり、効果を発動したり……

魔法カードや罠カードを使用し、戦い抜いて……

行動を起こさない限り、決してデュエルに勝てる訳がない。

気持ちが負けている限り、最高のプレイなどできる訳がない。

「……分かった……気がする……」

拓夜は顔をあげ、正面に対峙する結締を真っ直ぐに見据える。

「結締さん、分かった気がする。　何で結締さんが、あんな態度で俺のデッキを返したのかが……」

あの時『分からん』と投げやりな言葉を発した結締だったが、なぜそんな態度だったのか？

「最初から俺が、自分のデッキを信じてなかったから……強くなりたい理由を良いように使って、自分で考える事を怠ったから……ですよね？」

「やっと気付いたか、拓夜ちゃん。別に自分で考える事を怠ってるとは思ってねぇけど、最初からあんなビクビクした態度じゃ、こっちだって言う気にゃなれないぜぃ？」

「そう……っすね、でも……」

拓夜はその表情に、その目に輝きを宿しながらデッキトップに指を添える。

「覚悟は良いですか、結締さん！　このデュエル、俺はコイツ等と一緒に絶対勝つ！！　俺のターン！！」

※

ＯＣＧ研究会の二人がデュエルをしているのを観ていたのは、何も残りのＯＣＧ研究会メンバーだけではなかった。

やや離れた位置に、一人の長身で細身の男がいた。

ウェーブがかった黒髪に、大きな黒いサングラス。

黒い革ジャンを羽織り、タバコを吹かしているその男は、河原沿いの堤防の斜面に寝転がりながら、口元をニヤリと釣り上げる。

「ククッ、流石はＯＣＧ研究会の結締だァ。最強のヒーロー使いってのは伊達じゃあないなァ……」

その距離、ゆうに１００メートル離れたその場所で、男は視線を結締から拓夜に移す。

「西条拓夜ァ……魅せてやれ。最強のヒーロー使いに、お前の真の実力をなァ」

期待を込めた視線を送る男。

すると、彼が加えていたタバコの灰が風に煽られ、自分の顔面に降り掛かった。

「ウアっチィャアッツ！？」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／５１００

【結締智恭】
ＬＰ／５０００

「ドローッ！」

拓夜のターンが開始した。

デッキからカードをドローし、手札に加えた拓夜は手札をじっくりと確認する。

［ワン・フォー・ワン］
［おろかな埋葬］
［貪欲な壺］
［増援］

［ダンディライオン］

「行くぜ！手札の魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！」

【ワン・フォー・ワン】
［魔法カード］
手札からモンスター１体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル１モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「手札からモンスターカード『ダンディライオン』を墓地へ送り、デッキからレベル１モンスター『サイバー・ヴァリー』を特殊召喚する！」

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
【効果】
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トーク

ン」（植物族・風・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚の為のリリースはできない。

拓夜のフィールドに、デッキから『サイバー・ヴァリー』が守備表示で姿を現す。

そして墓地に送られた『ダンディライオン』の効果が発動し、『綿毛トークン』２体も守備表示で特殊召喚された。

「ヴァリーの第二の効果を発動！『綿毛トークン』１体と自身を除外し、デッキからカードを２枚ドローッ！」

モンスターを除外し、ドローしたカードを手札に加えた拓夜。

（『トレード・イン』に『ゾンビキャリア』！　良し、イケる！）

「更に手札の魔法カード『おろかな埋葬』を発動！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「この効果で、デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を墓地に！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
【効果】
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

「更に魔法カード『増援』！」

【増援】
［魔法カード］
デッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加え、デッキをシャッフルする。

「デッキからエアーマンを手札に加え、チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚！」

【ゾンビキャリア】
星２／闇属性／アンデット族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　２００
【チューナー・効果】
手札を１枚デッキの一番上に戻して発動する。墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「そして墓地のディアボリックガイの効果発動！このカードを墓地から除外する事で、デッキから2体目のディアボリックガイを特殊召喚する！」

拓夜のフィールドに現れたディアボリックガイ。

拓夜のフィールドには、計3体のモンスターが立ち並んだ。

「良い目になったじゃねぇか拓夜ちゃん！　すげーよ、すげー楽しいぜぃ！」

「へへっ。行くぜ！　レベル1『綿毛トークン』と、レベル6『D－HERO　ディアボリックガイ』に、レベル2『ゾンビキャリア』をチューニング！」

『1』＋『6』＋『2』＝『9』

拓夜の場のモンスターレベルが一つになり、レベル9のシンクロモンスターが姿を現す。

「シンクロ召喚！吹き飛ばせ！『ミスト・ウォーム』！」

【ミスト・ウォーム】
星９／風属性／雷族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１５００
【シンクロ／効果】
チューナー　＋　チューナー以外のモンスター２体以上
このカードのシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを３枚まで持ち主の手札に戻す。

拓夜のフィールドに紫色の凱甲を身に纏った、巨大な虫のようなモンスターが現れた。

「『ミスト・ウォーム』ッ！？　マズいッ！？」

「『ミスト・ウォーム』の効果発動！このカードのシンクロ召喚成功時、相手フィールドのカードを３枚まで手札に戻す！　結締さんのフィールドにカードは、シャイニングとプリズマー、そしてフィールド魔法『フュージョン・ゲート』のみ！」

「くッ！？」

『ミスト・ウォーム』の体にある突起物がプクリと膨れ上がる。
その瞬間、膨れ上がった突起物から、凄まじい勢いで紫色の霧が噴き出された。

「結締さんのカードを全て、手札に戻す！バウンズミスト！」

『ミスト・ウォーム』の効果が炸裂し、結締のフィールドはがら空きになってしまった。

「バトル！『ミスト・ウォーム』で、ダイレクトアタック！」

ズドドドド……！！

「のわぁぁああッ！！」

ソリッドヴィジョンではあるが、結締は『ミスト・ウォーム』の巨

体に擦り潰されてしまった。

【西条拓夜】
ＬＰ／５１００

【結締智恭】
ＬＰ／５０００　→　２５００

「良し、あと少し！！　俺はターンを終了だ！！」

※

『ミスト・ウォーム』の一撃を受けた結締。

二人のデュエルを観戦していたメンバーの表情は驚きに満ちていた。

「やるな、拓夜め……！！」

「凄いね、たくやは本当に強くなってるよ。かほ？」

マナは隣に座る成瀬に話しかける。

成瀬が振り返るとマナは、ニコッと笑顔で話した。

「良かったね。たくやの迷いが消えて」

「……マナさん」

「結締くんがデュエルの相手で良かったね」

「……はい！」

その隣では、葉月は信じらんない物を見るような顔をしていた。

その心境はとてもではないが、穏やかではなかった。

「嘘……でしょ？　あの拓夜が、ここまでやるなんて……！？」

ある意味の恐怖感が葉月を襲う。

成長速度が早すぎる。

ついこないだデュエルを始めて、デュエル大会では途中で負けはしたが……。

「あの大会の時より、強くなってる……！？」

「いや、一概にはそうとは言えない」

「えっ……！？」

隣に座る亨の発言に驚く葉月。

一概にはそうとは言えないとは、一体どういうことなのか？

「もともと拓夜くんは、かなりの実力を秘めていたんだ。それは彼をデュエルに誘った烏丸さんも、身に覚えがあるんじゃないのかな？」

「……あ、」

始めて葉月と拓夜がデュエルを行った時、始めて組んだデッキで、拓夜は初心者とは思えないデュエルを行ってきた。

次には病院で、拓夜は成瀬とデュエルを行った。

その時の拓夜のデッキは、初心者ではまず思い付かないだろうデッキを組み上げてきた。

それから何度か、拓夜のデュエルを見てきた。

確かに亨が言うように、拓夜は初心者とは思えない程に、ポテンシャルが高い。

「今の拓夜くんが、大会より強いと感じられるのなら……それは結締のおかげだな」

「……デッキを、自分を信じること……」

「ああ、拓夜くんはそれに気付いたんだ。デュエルってのは、自分だけが戦っているんじゃない。デッキも、俺たちと一緒に戦っているんだ」

「……そうよね。うん、そうだよね！」

「だが……授業はここで終わりみたいだな」

亨の視線の先には結締。

「授業がオシマイって……！？」

「始まるぞ。結締の本気のデュエルが……！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／５１００

【結締智恭】
ＬＰ／２５００

半分近くのライフ差が開いた結締のターン。
結締はデッキからカードをドローし、拓夜に言い放った。

「ホント……やるじゃねぇか拓夜ちゃん！」

「今の一撃、結構効いたでしょう？」

「ホント……ホントだぜぃ。じゃあ俺も、こっからは本気でやらせてもらうぜ？」

「ッ！？」

ゾミッッ！！

結締の眼力が拓夜を射抜く。
すると、拓夜の全身からぶわっと、滝のような汗が流れ出した。

（な、何だ……今の!?　汗が……汗だけじゃない!?　か、体が……ブルってる!?）

足が、腕が、結締から発せられるプレッシャーに脅えている。

拓夜が気をとられている間に、結締は自分のプレイを開始する。

「魅せてやるよ、拓夜!!　『Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック』を召喚!!」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック】
星４／光属性／雷族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１５００
【効果】
このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、ゲームから除外されている「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

結締のフィールドに召喚された雷のヒーロー。
結締はそのままバトルフェイズへと突入した。

「バトルフェイズに入るぜぃ！！　ボルテック！！　『ミスト・ウォーム』に攻撃だ！！」

「えっ！？」

結締の行動が理解できずに驚く拓夜。

「そんな！？　『ミスト・ウォーム』の攻撃力は、ボルテックよりも上……。自分よりも攻撃力が高いモンスターに攻撃するなんて……！？」

絶対におかしい。
結締程のデュエリストが、そんな初歩の初歩を忘れる筈がない。
ならば、何か策があるのか！？

「そうでもないんだな～～コレが」

「ッ！？」

ダメージステップに入り、結締は４枚の手札の中から１枚のカードを取り出し、拓夜に見せた。

「ッ！？　そ、それは……！！」

「ダメージステップ時、手札から『オネスト』の効果を発動！！」

【オネスト】
星４／光属性／天使族
ＡＴＫ　１１００
ＤＥＦ　１９００
【効果】
自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそ

のモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック】
ＡＴＫ　１０００　↓　３５００
ＤＥＦ　１５００

ボルテックの攻撃力が『ミスト・ウォーム』の攻撃力分アップした。
ボルテックの放った雷は『ミスト・ウォーム』を貫き、蒸発させた。

バリバリバリバリッ！！

「うぁっ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／５１００　↓　４１００

【結締智恭】
ＬＰ／２５００

戦闘の超過ダメージを受けた拓夜。
その瞬間、ボルテックの力が解放される。

「この瞬間、ボルテックのモンスター効果発動！！」

「っ！？」

「ボルテックが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、ゲームから除外されている【Ｅ・ＨＥＲＯ】１体を特殊召喚する事ができる！！」

「つ、追撃！？」

結締はゲームから除外されている、自身のフェイバリットカードを掴み取る。

「現れろ！！　最高のヒーロー！！　これが、【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス】だ！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス】
星７／光属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００

『フュージョン・ゲート』の効果により、ゲームから除外されていたネオスが空間を砕き、虚空より参上した。

「……これが、ネオス……！！」

「行け、ネオス！！　ダイレクトアタックだ！！」

ネオスの一撃が拓夜を襲う。

「ラス・オブ・ネオスッ！！」

ズゴゥ！！

「ガァアッ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／４１００　↓　１６００

【結締智恭】
ＬＰ／２５００

一気にライフが逆転された拓夜。

まさかボルテックにそんな効果があるとは知らなかった。

その為の『フュージョン・ゲート』。

そしてボルテック。

そんな発想は自分にはなかった。

（……楽しい……）

いつの間にか体の震えは止まっていた。

（やべぇよ……楽しい、超楽しい……！！）

いつぞや、デュエルフィールドが出来た時に、白石が言っていた。

これが、楽しいデュエル！！

自分が追い込まれているのにも関わらず、拓夜はワクワクしていた。

（まだ俺の知らない戦術がある……まだ俺の知らないカードがある！！　知りたい！！　見たい！！）

「結締さん、すっげぇ楽しいです！！」

「そいつは何よりだぜぃ。だが拓夜ちゃん、最後に……究極の融合を魅せてやるよ」

結締はそう言うと、残り3枚の手札から1枚のカードを取り出し、発動した。

「行くぜぃ、拓夜ちゃん！！　コレが、【融合】の究極の形だ！！
速攻魔法『超融合』を発動！！」

【超融合】
［速攻魔法］
手札を1枚捨てる。自分または相手フィールド上から融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「融合の……速攻魔法！？」

「手札のプリズマーをコストに、フィールドのネオス！　そしてボルテックを融合！！」

2体のモンスターが一つになり、光の力が超圧縮されていく。

カッッ！！！！

「今回はお前がフィニッシャーだ！！　光のヒーロー！！　『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング』！！」

結締のフィールドに再び光のヒーロー、シャイニングが出現した。

【Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニング】
ＡＴＫ　２６００　↓　３５００
ＤＥＦ　２１００

「コイツの一撃でトドメだ！！　行くぜぃ！！　シャイニングで、ダイレクトアタック！！」

シャイニングの一撃をその身に受け、拓夜と結締のデュエルは幕を閉じた。

【西条拓夜】
ＬＰ／１６００　→　０

【結締智恭】
ＬＰ／２５００

※

「チッ、負けちまったかよ……」

離れた場所で二人のデュエルを観戦していた男はつまらなさそうに舌打ちし、ヨッコラセと言いながら立ち上がる。

「負けはしたが……あの状況からの『ミスト・ウォーム』……まるでダイヤの原石だなァ……クックッ！！」

うっすらと口元に笑みを浮かべながら、男はＯＣＧ研究会のメンバーが集う場所へと足を踏み出した。

※

「お疲れ様、二人とも！　スッゴい良いデュエルだったよ！」

マナが結締と拓夜の二人に労いの声をかける。

「うわッ！？　マナさん？　それに皆も……一体何時の間に……」

「よっぽど煮詰まってたみたいだな、拓夜ちゃんは」

どうやら拓夜だけ気付いてなかったようだ。

他の皆も集まり、それぞれに声をかける。

「拓夜さん。もう大丈夫ですよね？」

「花穂……」

「負けちゃいましたけど……自信、持てました？」

「ああ、最後はウダウダ悩んでた自分が恥ずかしくなっちまったよ。本当に……」

拓夜はそう言うと結締に向き直り、右手を差し出した。

「結締さん、今日は本当に有難うございました！！」

「ま、最後は柄にもなく熱くなりすぎちまったがな……。　拓夜ちゃん、最後に餞別だ。ほれ」

結締は握手の代わりに一枚のカードを差し出した。

何かと思い、受け取る拓夜は、早速そのカードを確認する。

「……Ｖ（ヴィジョン）・ＨＥＲＯ……？」

拓夜にとって、聞いたこともなければ見たこともないカードだった。

「それも、融合の一つの可能性だ。使いこなしてみな？」

「……はい！やってみます！！　次は絶対に負けませんよ！！」

「そぅ～そぅ、その意気だ。西条拓夜」

「ッ！？」

自分の背後から知らぬ声が掛けられ、思わず驚いて振り返る拓夜。

そこに立っていたのは、黒いウェーブがかった黒髪に、デカく黒いサングラス。

黒い革ジャンを羽織った細身の長身の男が、タバコを吹かしてニヤニヤしていた。

「良かったぜ～、西条拓夜ァ。お前のデュエルポテンシャルは流石、この俺が見込んだだけはある」

一人愉快に語る怪しい男に、拓夜は一歩後ろに下がり

「……アンタ、一体誰だ？」

「おお？　そぉ言やァ自己紹介がまだだったなァ」

男はそう言うと掛けていたサングラスを外し、鋭い目つきで拓夜を見据える。

「俺はァ月影陽一ってんだ。北区でデュエリストのチーム、【フィアーズ】の頭を張ってる」

「……ッ！！　チーム……フィアーズ……！？」

チーム【フィアーズ】。

そね名には葉月や成瀬から聞かされた事がある。

デュエル大会にて、初戦で激突した相手。

【ドラグニティ】使いの棗が所属するチームだった筈だ。

この目の前に立つ月影陽一。

チーム【フィアーズ】の頭と言っていたが……

「そのフィアーズのリーダーが、俺に何か用なんスか？」

「ああそりゃ勿論だ……お前、コッチに来ないか？」

「……え？」

月影陽一は手を差し出し、更に言葉を続ける。

「俺のチームに入れよ、西条拓夜？　俺なら、お前の事をもっと強くしてやる事ができるぜ？」

ダイヤの原石　（後書き）

この作品を読んで頂き、本当にありがとうございます。

さて、今回のデッキレシピはコチラ！！

【結締ゲート・ヒーロー】

〔上級〕
ネオス×２
虹龍

〔下級〕
エアーマン
アナネオ×２
プリズマー×２
オーシャン×２
ボルテック×３
オネスト×２

〔魔法〕
Ｅコール×３
奇跡融合×３
ハリケーン
増援
ブラホ
ししゃしょしぇい

強欲謙虚×２
超融合×２
サイクロン×２
未来融合
ゲート×３

〔罠〕
ヒロブラ×３
神の宣告
神の警告

〔ＥＸ〕
虹ネオス
宇宙騎士（ネオス・ナイト）×２
チートゼロ×３
ダサイニング×３
トルネード×２
三沢大地（ガイア）×２
アース（フリーザ様）
波動竜騎士

初手にプリズマーとヒロブラがあればうはうは！

様々なモンスターからの融合ができ、属性的にダサイニングが頻繁に活躍しそうなデッキです。

融合素材が被るネオス・ナイトとは差別化を計りたい所。

あちらはダメージは入りませんが、二回攻撃できる利点があり、相

手モンスターを蹴散らす事ができます。

ちなみに裏話になりますが、この結締デッキは僕の友人の許可を得て使用させて頂きました。

ちなみにその友人が、結締智恭のモデルその人であり、今回掲載したのは正真正銘モノホンの結締デッキです。

実際、彼が使うこのデッキと勝負しましたが、やはり強かった……。

僕は負けました（T＿T）

宜しければ、皆様からもこのデッキに関して御意見を下さい。

よろしくお願いします。

番外編【夢】（前書き）

今回の話は、まだ西条拓夜がデュエルを始めたばかりの頃の話です。

ちなみに、今回の話の禁止・制限カードにつきましては、２００９年の８月の時点での作品になりますので、２０１１年９月現在の禁止・制限カードとは異なる部分がございます。

ご了承下さい。

番外編【夢】

※

その日、西条拓夜は自室でテレビを観ていた。

『ロリカル♪マジカル☆』

画面には中間管理職の白い親父が華麗にペンを走らせ、次々と書類の山を片づけている。
黙っていればそれなりにカッコ良く見えるのに、口ずさむそれが全てを台無しにしている。

『課長、お茶が入りました』

『うん、ありがとうフェイコちゃん☆』

画面には中間管理職の白い課長の部下らしき金髪の美しい女性がお茶をお盆に乗せて現れた。

だがそれはとても異様な光景だった。

フェイコと呼ばれた女性の背には血塗られた斧が背負ってあるのだ…

しかも服装はスーツ姿ではなく、黒いスクール水着に黒いハイソックス……。

拓夜は何も言わずにテレビの電源を消した。

「……何コレ（・―・）？」

テレビ番組はなかなか面白そうなものがなかった為、拓夜はテレビ台の戸棚を開き、

「気を取り直してゲームでもするか…」

再びテレビのスイッチをつけ、ゲームを起動する。

チャラ～ラ～ラ～…

オープニングの戦闘シーンで、敵のボスに向かって主人公パーティがそれぞれに果敢に攻めてはいるが、それら全てを敵のボスはことごとく避けては去なし、隙あらば嵐の様な攻撃を加え、主人公パーティを全く寄せ付けない。

『く…強い…！！』

『グレス、どけっ！！タイツは俺が倒す』

『いいやジェスチャー、タイツは僕が倒す！』

『いいや、タイツは俺が』

『いいや、僕が』

主人公パーティが言い争っている中、敵のボスである全身黒タイツ姿の通称タイツは、構えた手から強力な魔法攻撃を放った！

『くらえ、タイツレーザー！！』

『ぐわぁぁあ！！』

『く…タイツめ…強すぎだ…ろ…』

「……」

拓夜は何も言わずにゲームの電源を消した。

「……何コレ（・―・）？」

拓夜は部屋のベッドに体を預け、目を閉じた。

「あ～……暇だ。やることねぇとスッゴい暇だ……」

テレビも訳分からない番組やってるし……ゲームはタイツが強すぎだし……

「何だよタイツレーザーって、ただタイツをたくさん飛ばしてるだけじゃねぇか……」

ふぅ……と軽くため息をつき、机の上に置いてあるデッキを眺めながら、拓夜は微睡みの中へと沈んでいった。

※

「さいじょお、さいじょお!!　大変だよ!!　事件だよ!!　一大事なんだよ!!」

マジシャンガールはドタバタと走りながら、勉強している西条　亨の背中を揺さぶった。

「何だよ?……今俺は勉強しているの、明日テストの追試なの、ヤバいの、必死なんです!」

「ヤバいのはこっちもそうなんだって!」

何故か非常に焦っているマジシャンガールを不思議に思った亨は、

ペンを止めてマジシャンガールの方を向いた。

「一体どうした……なっ……！？」

亨の視線はマジシャンガールの奥に見える台所に向かった。

冷蔵庫の下から水がドクドクと溢れてきているではないか……

「み、水漏れ！？っていうかどうなってんだ！？」

「だから大変だって言ってるじゃない！！」

二人は台所へ向かったが、台所へ入った途端にベシャベシャとまるで水たまりの上を歩いている様な感覚になる。

「どうなってんだよコレは……！？」

亨は冷蔵庫の扉を開けると、冷蔵庫の中からムワァっとした生暖か

い空気が漂った。

「ま…まさか…」

冷凍庫の扉を開けると、そこから水が滝の様に流れ落ちてくる。

「うわっ！？」

「きゃあっ！？」

余りの悲惨な光景に言葉をなくす二人……。
西条亨宅の台所の床は辺り一面、水浸しになっていた。

結局、台所の掃除に一日を費やした亨は勉強をする余裕がなかった。

「なぁ、マジシャンガール」

呼ばれたマジシャンガールはビクッと肩を上げて「な、なにカナ？」とぎこちない笑顔を作る。

「昨日……この部屋の大掃除をしたのは……お前だよな？」

「う、うん……」

「『台所は任せて！さいじょおが、お料理しやすい様にピッカピカにするね！』……って言ったのも、お前だよな？」

「う……うん……」

亨は冷蔵庫のコンセントを辿り、その先端を持ってマジシャンガールに突きつけた。

「さて、これは何でしょうか？」

「えっと……あ、コンセント☆」

「正～解～！！」

「ヤッタァ☆」

「ヤッタァ☆じゃねぇよ！！　昨日から一晩中コンセントが刺さってなけりゃ、そりゃ水漏れもするわ！！　お前だよな、これ刺し忘れていたのは！？」

「……ごめんなさい」

シュンと悄げて謝るマジシャンガール。

亨は軽くため息をつき、マジシャンガールの頭にポンと手を乗せた。

「でもまぁ、お前が自分から掃除するって言ってくれたのは嬉しかったからさ、またお願いするよ」

「え……？」

顔をあげるマジシャンガールが見たのは照れくさそうに顔を横に反らした亨の顔。

「冷蔵庫はともかく……他はすごい綺麗になってたからな。ただし、次は同じミスをすんなよ？」

「うん、任せてよ！またさいじょおの為に私、頑張るから！」

※

夜になり、晩御飯を外食で済ませた亨とマジシャンガールは学生寮の自室へと戻った。

明日の追試を諦めた亨は、寮に着くなりデッキを調整し始めた。

するとマジシャンガールは亨に寄り添いながら話しかける。

「ねぇさいじょお、きょうのお詫びに……これから面白い所に連れて行ってあげようか？」

マジシャンガールの言葉にデッキを触る手を止めた亨は

「…は？何言ってんの？」

「えっとね、デュエルしない？」

「誰と？」

「誰かは分からないよ」

「？」

マジシャンガールの言っている意味が分からない亨は再びデッキ調整に勤しみだした。

「あ、ちょっと！無視しないでよ！？」

「いや、だってお前が言っている意味が分からないし……誰とデュエルするか分からないし、面白い所って何？精霊界か？」

「えっとね、この間……精霊界で新しく覚えた魔法なんだけどね？異次元空間を通って、もう一つの新しい世界に行くの」

「……そこでデュエルするのか？」

「うん」

「パス」

「えぇ～、なんでぇ～？」

「新しい世界って……意味分からん」

「むぅぅ……とにかく新しいは新しい世界なんだよ！　それ以外に言いようが無いんだもん！」

ぷくぅ～っと頬を膨らませるマジシャンガール。

亨はしばらく考えた後、マジシャンガールに向き直り

「まぁ、少し覗くだけ覗いてみるか」

「え、いいの！？」

「少しだけな、長居はしねぇぞ」

マジシャンガールは西条の一言に喜びの表情を作ると、亨に飛びついた。

「ヤッタァ☆じゃあ早速いこうよ！！」

「だぁあ！！　そんなに引っ付くな！！　か、カードの束が崩れる！？」

※

拓夜が目を覚ますとそこは自分の全く知らない場所だった。

辺りには虹色の霧がかかっており、自分以外何も確認できない状態である。

「何だ……これは……？」

（確か寝る前は自分の部屋にいた筈なのに……）

拓夜はとりあえず前へ前へと歩き出した。

全く自分の知らない世界だが、自然と不安な気持ちにはならなかった。

何故だか分からないがこの先にとても楽しい出来事が自分を待って

いる様な気がしてならないのだ。
その何とも言えない不思議な気持ちを胸に抱き、拓夜は歩き続けた。

※

「さいじょお、準備できたよ！」

寮の一室で西条亨とマジシャンガールの二人は、マジシャンガールが作り上げた魔法陣の前に立っていた。

「一応確認しておくぞ。向こうに着いたら、そこで待ってる奴とデュエルをすればいいんだよな？」

「うん、そうだよ☆」

「ルールとかは俺達の世界と一緒なのか？」

「……さぁ？そこまでは……」

「ぉい、もし相手が俺達からする禁止カードを使っていたら、それ

だけでかなり不利なんだが……」

「ん～大丈夫だと信じようよ、それにさいじょおは相手がどんなデッキだろうと負けないもん」

「……」

（負けないもんって…一体どこから来るんだ、そんな根拠が……）

亨はデュエルディスクに装着されたデッキに手を添えて、それに語りかける。

「……頼んだぜ、俺の相棒達……！！」

それを見たマジシャンガールはカードの姿に変わり、亨のデッキに入っていく。

『いつでもいいよ、さいじょお！』

デッキから聞こえてくるマジシャンガールの声を聞き、亨は魔法陣

の中へと進んでいった。

※

西条拓夜が歩いていると、目の前に急にピンク色に輝く魔法陣が現れた。

「な、何だ？」

思わず立ち止まりその魔法陣を見つめていると、魔法陣が急に強く光を放ち始めた。

「うぁっ……本当に何なんだよ！？」

思わず目を瞑りその光をやり過ごす。

光が収まりゆっくりと目を開けるとそこには、一人の男が立っていた。

「……ぇ……！？」

（何だ、この人……一体、どこから……？）

拓夜が驚きのあまり言葉に詰まっていると、目の前に現れた男がこちらに近づいてくる。

「……」

「……」

自分の前に立つ男に、拓夜は思い切って声をかけてみた。

「あ、アンタは一体……誰なんだ……？」

目の前の男を睨みつける拓夜。

だが、その男は落ち着き払った様子で、警戒心を剥き出しにする拓夜に話しかけてきた。

「俺は西条　亨って言うんだ。そうか……君が俺のデュエルの相手か……」

「西条……亨？ぇ、それに……デュエル？」

拓夜は目の前の亨と名のる人物が何を言っているのか理解できなかった。
そんな様子の相手に亨は、自分がここに来た経緯を説明し始めた。

「俺はマジシャンガールに連れられて、そこで待つ相手とデュエルする様に言われたんだ、君もデュエリストだろ？」

「ぇ、まぁ一応そうだけど……」

「そうか……。所で君の名前は？」

「……西条……拓夜」

「へぇ、君も『西条』なんだ……よろしくな！」

拓夜は自分に向けて差し出された右手と、目の前に自分に向けて右手を差し出す亨を交互に見比べる。

「あぁ……よろしく」

一応礼儀だと思い、差し出された右手に握手で応じた拓夜。

だが、拓夜の頭の中は訳の分からない事だらけであった。

※

拓夜は自分にとって訳の分からない今の状況について、一つずつ尋ねてみる事にした。

「えと……亨さん？」

「ん……？」

「俺……目が覚めたら一人ここにいて、今どういった状況なのかサッパリ分からないんですけど……？」

「なる程……俺がマジシャンガールから聞いた話によると、ここは新しく見つかった世界なんだってさ」

亨の話を聞いて益々わからなくなってくる拓夜。

「マジシャンガールから聞いたって？……マジシャンガールって……カードですよね？……それに新しい世界って？」

あたふたする拓夜に亨は落ち着く様に宥める。

「まぁ驚いたり慌てたりするのも無理はないか……ちょっと待ってくれ」

そう言うと亨は自分の腕に装着されたデュエルディスクから一枚の

カードを取り出し、デュエルディスクにセットする。

「ブラック・マジシャン」

すると、ソリッドビジョンでブラック・マジシャンの姿が現れた。

「ブラック・マジシャン、この世界について何か知ってないか？」

亨のソリッドビジョンに尋ねる姿に唖然とする拓夜。

（この人…ソリッドビジョンなんかに話しかけてる。……ソリッドビジョンなんて只の映像に過ぎないのに……）

そう思った拓夜だったが次の瞬間、更に拓夜は驚いた。

『この世界は私達、精霊界の者が修練に使うアナザースペースです。マジシャンガールにはそう伝えたのですが……どこでどう履き違え

たやら……』

「ハハハ……ヤッパそうか。でもさ……この人、拓夜くんは目が覚めたらここにいたって言うんだけど？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？」

「？」『？』

拓夜は思わず二人の会話を制止せずにはいられなかった。

「どうした？」

「どうした？じゃないでしょ！？　何でソリッドビジョンと会話ができるんすか！？」

当然の疑問に対し、亨は至って普通に答えた。

「ソリッドビジョン？……あぁ、これは確かに映し出された映像だけど……」

亨はブラック・マジシャンを指しながら話を続ける。

「こうやって会話が出来るのは、俺がブラック・マジシャンと契約を交わしているからなんだ」

「契……約……？」

（何を言っているんだ……この人は？）

「そう、契約……」

『契約とは……デュエリストと私達、精霊界の者が互いに認め合った者のみが契る事ができる。一種の儀式です』

「そういう事……あ、別に皆が皆そうって訳じゃないからな？」

「は、はぁ……？」

「で、この拓夜くんがここにいた理由って……分からないかな？」

『確かに今まで精霊界の者以外で、この空間に現れた者の報告は受

けています。……拓夜くんの話では……目が覚めたら、と仰っていましたね？』

「ぁ、あぁ……目が覚めたら俺一人でここにいて……確か自分の部屋で寝たはずなのに……？」

拓夜の話を聞き、ブラック・マジシャンは『なる程……』と一人頷いた。

「ブラック・マジシャン、どういう事だ？」

『簡単な答えです。拓夜くんの今あるその体は……言わば【精神体】です』

「「精神体……？」」

西条二人は思わず、声を揃えて口にした。

『精神体にも色々な言われ方があると思いますが……今、私の言った精神体とは、夢の中での肉体……という意味です』

「夢の中での…体…？」

拓夜は自分の手や体をまじまじと見つめる。

手の感触や足の感触といった感覚はある。

記憶だってちゃんとある。

拓夜にはブラック・マジシャンの言った事がにわかには信じられなかった。

「本当に……これは俺の見ている夢なのか？」

そんな様子の拓夜に亨は声をかけた。

「夢の世界か……俺、思ったんだけどさ。夢なんて現実に戻れば大抵忘れてしまう……それに、夢の中だからこそ出来る事もある」

「……亨さん」

「拓夜くん、君が夢から覚めてしまう前に……俺とデュエルしないか？」

亨からのデュエルの申し込みに対し、拓夜は

「デュエルって言ったって……亨さんみたいに今カードも持ってなけりゃ、デュエルディスクも持ってないし……。こんな状況でデュエルなんて……」

『できますよ』

拓夜の疑問に答えたのはブラック・マジシャンだった。

『ここは拓夜くんの夢の世界であると同時に、私達、精霊界の者が使う修練場と言ったでしょう?』

「……どういう事?」

『自分の腕に念じてみて下さい、拓夜くんのデッキを……拓夜くんの信じるカード（パートナー）を……!』

拓夜は自分の左腕を見つめた。

「俺の……デッキ……」

（俺が信じるカード……）

すると、拓夜の左腕が輝きだした。

「うわっ！？」

「っ！？」『……』

光が収まると、拓夜の左腕にデュエルディスクと、それにセットされているデッキが現れた。

「……マジ……かよ！？」

「やったな、拓夜くん！」

拓夜はデュエルディスクにセットされたデッキを取り出し、一枚一枚確認していく。

「……間違いない、このデッキは前の日に組み直したデッキ……」

再びデュエルディスクにデッキを装着した拓夜は、亨を正面にし、デュエルを申し込んだ。

「亨さん、やりましょう！俺達のデュエルを！」

「あぁ、そう来なくっちゃな！行くぜ、拓夜くん！」

互いにデュエルディスクを構えた西条拓夜と西条亨。

二人は同時にデュエル開始の宣言をした。

「「デュエル！！」」

※

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／８０００
【後攻】西条　亨
ＬＰ／８０００

互いに手札が5枚になった所で拓夜が先攻を取り、カードをドローした。

「俺の先攻、ドロー！」

そして改めて手札を確認する拓夜。

今の手札を見て拓夜はやる事が決まった。

「俺は手札から魔法カード『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
［魔法カード］
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をすてて発動する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「このカードは、手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ』と名のついたカード１枚をすてて、デッキからカードを２枚ドローする！」

（初手に手札交換カード……なかなか展開が早そうなデッキだな）

亨は拓夜のプレイをじっくりと観察していた。

「俺は手札から『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を捨て、カード２枚ドロー！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２１００

ＤＥＦ　１０００
［効果］
１ターンに１度、自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースする事で、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。このカードが墓地に存在する限り１度だけ、自分のドローフェイズ時にドローしたモンスター１体をお互いに確認し特殊召喚する事ができる。

拓夜は手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を捨て、デッキからカード２枚ドローした。

「更に伏せカードを２枚セット」

『ヴィィン…』とデュエルディスクから音が鳴り、拓夜のフィールドにソリッドビジョンによって２枚の伏せカードが映し出される。

「モンスターをセット！俺のターンは終了だ！」

（まずはこいつで様子見だ……！）

「俺のターン、ドロー！」

亨のターンに移行する。

亨はカードをドローして、手札とフィールドの状況を確認した。

（拓夜くんのフィールドにはリバースカードが２枚……俺が攻撃を仕掛けた時に発動する罠や、召喚に対する罠がある可能性が高い……）

「俺はリバースカードを１枚セット、そして『魔導戦士　ブレイカー』を召喚！」

【魔導戦士　ブレイカー】
星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１６００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを１つ乗せる（最大１個まで）。このカードに乗っている魔力カウンター１個につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
また、魔力カウンターを１個取り除く事で、フィールド上の魔法・

罠カード1枚を破壊する。

亨のフィールドに赤い鎧を身に纏った魔法剣士が召喚された。

「『魔導戦士ブレイカー』は召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを1つ乗せる、そして乗っている魔力カウンター1つにつき、攻撃力が３００ポイントアップする！」

【魔導戦士ブレイカー】
ＡＴＫ　１６００↓１９００
（魔力カウンター　×１）

亨のブレイカーが手にしている剣にオーラが宿る。

「そして、ブレイカーのもう一つの効果を発動！」

「っ！？」

「自身に乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上の魔法・罠1枚を破壊する！」

亨は拓夜のリバースカードを指差して、ブレイカーに指示を出した。

「拓夜くんから見て、右側のリバースカードを破壊しろ！」

【魔導戦士ブレイカー】
ＡＴＫ　１９００↓１６００
（魔力カウンター）×０）

ブレイカーの持つ剣の切っ先から拓夜のリバースカード目掛けて魔弾が放たれる。

魔弾は拓夜のリバースカードを貫き、破壊した。

「く……っ！？」

「このままバトルフェイズに入る！ブレイカーで拓夜くんの裏守備モンスターに攻撃！」

ブレイカーが拓夜のモンスターに切りかかり、破壊した。

「くっ…戦闘破壊された『キラー・トマト』の効果発動！」

【キラー・トマト】
星４／闇属性／植物族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１１００
［効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「『キラー・トマト』が戦闘破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる、だが俺は『キラー・トマト』の効果にチェーンして、罠カード発動『デステニー・シグナル』！」

【デステニー・シグナル】
［罠カード］
自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。自分の手札またはデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する。

「『デステニー・シグナル』は、モンスターが戦闘破壊された時、手札またはデッキから【Ｄ－ＨＥＲＯ】と名のついたレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する事ができる…デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を守備表示で特殊召喚！更に『キラー・トマト』の効果で、デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を攻撃表示で特殊召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通

常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

拓夜のフィールド上にそれぞれ二体のモンスターが並ぶ。

「モンスターを倒して数を減らした筈が、逆に増やす羽目になるなんて……」

（拓夜くん……君のデッキは面白いな！）

「さぁ…これからどうする、亨さん！？」

亨は手札を確認し、エンド宣言をした。

「俺のターンは終了だ」

亨がエンド宣言をした事で、拓夜のターンに移る。

「俺のターン、ドロー！」

拓夜はドローするとダイヤモンドガイを指差し、効果を発動した。

「『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』の効果発動、デッキの一番上のカードを確認し、それが通常魔法カードだった場合墓地に送り、違うカードの場合はデッキの一番下に戻す……」

拓夜はデッキの一番上のカードを捲ると

「……よし、一番上のカードは通常魔法『テラ・フォーミング』だ、墓地に送る……」

拓夜は『テラ・フォーミング』のカードを亨に確認させた後、墓地に置いた。

「俺はフィールド上の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』をリリースし、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ』をアドバンス召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
このカードは特殊召喚できない。このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。このカードが破壊された場合、次の自分のターンのスタンバイフェイズ時、自分フィールド上に「ダブルガイ・トークン」（戦士族・闇・星４・攻／守１０００）を２体特殊召喚する事ができる。

拓夜のフィールドにスーツ姿の痩せた男が姿を現した。

「俺は伏せカードを1枚セットして、ターン終了」

亨のターン。

「俺のターン、ドロー！」

（拓夜くんのフィールドには、守備表示のダイヤモンドガイと攻撃表示のダブルガイ……そして1枚のリバースカード）

亨は手札を確認しながら戦略を立てる。

（拓夜くんはわざわざ攻撃力が低いダブルガイを攻撃表示のままターン終了した。明らかに俺の攻撃を誘っている……あのリバースカードか？）

「俺は『見習い魔術師』を召喚！」

【見習い魔術師】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　２００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上で表側表示の魔力カウンターを乗せる事ができるカード１枚に魔力カウンターを１個乗せる。このカードが戦闘で破壊された場合、デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を選択して自分フィールド上にセットする事ができる。

「『見習い魔術師』は召喚に成功した時、魔力カウンターを乗せる事ができるカード１枚に魔力カウンターを１個乗せる事ができる！『魔導戦士ブレイカー』に再び魔力カウンターを１個乗せる！」

『見習い魔術師』から魔力を受け取った『魔導戦士ブレイカー』は、再びその攻撃力と効果を得た。

【魔導戦士ブレイカー】
ＡＴＫ　１６００↓１９００

（魔力カウンター　×１）

「またブレイカーに魔力カウンターが乗った！？……という事はっ！？」

「そう、再び『魔導戦士ブレイカー』の効果発動！拓夜くんのリバースカードを発動する！」

【魔導戦士ブレイカー】
ＡＴＫ　１９００→１６００
（魔力カウンター　×０）

再びブレイカーの手にした剣から魔弾が発射され、拓夜のリバースカードを貫き、破壊する。

「くっ…さっきから罠が……っ！？」

「手札から永続魔法『魔法族の結界』を発動！」

【魔法族の結界】
［永続魔法］
フィールド上に存在する魔法使い族モンスターが破壊される度に、このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大４つまで）。自分フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスター１体とこのカードを墓地へ送る事で、このカードに乗っている魔力カウンターの数だけ自分のデッキからカードをドローする。

『魔法族の結界』を使用した事により、亨の足下を中心に地面に魔法陣が展開された。

「いくぜ、拓夜くん！『魔導戦士ブレイカー』で『Ｄ－ＨＥＲＯダブルガイ』に攻撃！」

亨の指示により、ブレイカーはダブルガイに向けて、剣を振り上げた。

だがその時、拓夜は自分の手札１枚を取り出し、亨に見せた。

「甘いぜ、亨さん！『Ｄ－ＨＥＲＯ』には手札から効果を発動できるカードがある！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダガーガイ』の効果発動！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダガーガイ】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　６００
［効果］
手札からこのカードを捨てる。自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターは、このターンのエンドフェイズ時まで攻撃力が８００ポイントアップする。この効果は相手ターンのバトルフェイズ中のみ使用する事ができる。

「ダガーガイを手札から捨てる事で、このターンのエンドフェイズ時まで『Ｄ－ＨＥＲＯ』と名のついたモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ】
ＡＴＫ　１０００→１８００

ダブルガイはブレイカーの懐に素早く潜り込むと、手にした杖でブレイカーを貫き、破壊した。

【西条　亨】
ＬＰ／　８０００　→　７８００

「くっ！？……やるな、拓夜くん！」

すると、亨の足下に展開された『魔法族の結界』が淡い輝きを放つ。

「『魔導戦士ブレイカー』が破壊された事で、俺のフィールドの『魔法族の結界』の効果発動、魔法使い族モンスターが破壊された時、結界に魔力カウンターを１つ乗せる！」

【魔法族の結界】
魔力カウンター×１

「……魔力カウンターが貯まると……一体何が？」

疑問に思う拓夜を余所に、亨は自分のターンのプレイを続けた。

「俺はこのターン、リバースカードを1枚セットして、ターンを終了する！」

亨がターンを終了した為、拓夜のフィールド上の『Ｄ－ＨＥＲＯ』達はダガーガイの効果を失い、攻撃力が元に戻った。

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ】
ＡＴＫ　１８００→１０００

「俺のターン、ドロー！」

拓夜のターンに移り、カードをドローする。

拓夜は早速、前のターンに墓地に送ったカード『テラ・フォーミン

グ』を取り出して、その効果を発動させた。

「前のターン、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた『テラ・フォーミング』の効果発動！」

【テラ・フォーミング】
［魔法カード］
自分のデッキからフィールド魔法カード１枚を選択し、手札に加える。

「この効果で俺はデッキから、フィールド魔法『幽獄の時計塔』を手札に加える！……そしてそのまま『幽獄の時計塔』を発動！」

【幽獄の時計塔】
［フィールド魔法］
相手ターンのスタンバイフェイズ時に、このカードに時計カウンターを１個乗せる。時計カウンターの合計が４個以上になった場合、このカードのコントローラーは戦闘ダメージを受けない。時計カウンターが４個以上乗ったこのカードが破壊され墓地へ送られた時、手札またはデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ」１体を特殊召喚する。

拓夜のフィールド魔法の発動により、辺りの景色が一変した。

空は黒く漆黒の闇が広がっており、拓夜の後ろには巨大な時計塔が建っている。

そして、その時計塔と2人を囲う様に、周りにまるでどこかの屋敷の中庭をイメージさせる景色だった。

「これは……？」

「フィールド魔法『幽獄の時計塔』……【Ｄ－ＨＥＲＯ】が戦う為の舞台さ」

拓夜はそう言うと、フィールド上のダイヤモンドガイに向かって指示を出した。

「ダイヤモンドガイ、効果発動！デッキの一番上のカードを確認し、それが通常魔法カードなら墓地へ送る！」

拓夜はデッキの一番上のカードを捲る。

「……よし！デッキの一番上は通常魔法『終わりの始まり』だ！ダイヤモンドガイの効果により、墓地に送られる！」

【終わりの始まり】
［通常魔法］
自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができる。自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「俺は手札から『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント』を召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　７００

［効果］
このカードが召喚に成功した時、「幽獄の時計塔」に時計カウンターを1つ置く。このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する事ができる。

拓夜のフィールドにモンスターが召喚された。
拓夜は召喚した『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント』を指差し

「ドレッドサーヴァントの効果発動！このカードが召喚に成功した時、『幽獄の時計塔』の針を進める！」

ドレッドサーヴァントが手にした杖を掲げると、時計塔の針が１５分程進んだ。

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「…何も起きない？……『幽獄の時計塔』、一体どういった効果が？」

不思議に思う亨に、拓夜は「すぐに分かるさ」と告げ、フィールドのダイヤモンドガイを攻撃表示に変更し、バトルフェイズに入った。

「いくぜ、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダブルガイ』で『見習い魔術師』に攻撃！」

ダブルガイは見習い魔術師を杖で叩きつけて破壊した。

【西条　亨】
ＬＰ／７８００　→　７２００

「くっ！？……戦闘破壊された『見習い魔術師』の効果発動！デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体をセットする！……俺はもう１体の『見習い魔術師』をセット！」

再び『見習い魔術師』が亨のフィールドに現れた。

【魔法族の結界】
魔力カウンター×2

「ダブルガイ、続けて攻撃だ！」

「なッ！？1度の戦闘で2回攻撃ができるモンスターだったのか！？」

ダブルガイの顔が紳士的な顔から凶悪な笑みを浮かべた顔に豹変し、手にした杖を引き抜いた仕込み刀で見習い魔術師を破壊した。

「『見習い魔術師』の効果発動！デッキから最後の『見習い魔術師』をセット！」

【魔法族の結界】
魔力カウンター×3

「ダイヤモンドガイ、セットされた見習い魔術師に攻撃！」

ダイヤモンドガイの拳が見習い魔術師に炸裂し、見習い魔術師は呆気なく破壊された。

「くっ！？……『見習い魔術師』の効果、デッキから『執念深き老魔術師』をセット！」

【魔法族の結界】
魔力カウンター×４

「俺はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ！伏せカードを１枚セットして、ターン終了」

拓夜のエンド宣言により、亨のターンに移行する。

「俺のターン、ドロー！」

「おっと、亨さんのスタンバイフェイズ時に『幽獄の時計塔』の効果発動！時よ、進め！」

時計塔の針が進み、１５分から３０分の位置に移動した。

（また針が進んだ？……だが、拓夜くんのフィールドや俺のフィールドにも特に変化は見られない……）

亨は手札を確認すると、セットしてある自分のモンスターを反転召喚させた。

「俺はセットされた『執念深き老魔術師』を反転召喚、そのリバース効果を発動！」

【執念深き老魔術師】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４５０
ＤＥＦ　６００
［効果］

リバース：フィールド上の相手モンスター1体を破壊する。

「老魔術師はリバースする事で、相手モンスター1体を破壊する！
老魔術師よ、ダイヤモンドガイを破壊しろ！」

老魔術師はダイヤモンドガイに向けて呪文を唱えると、ダイヤモンドガイは破裂した。

「くっ……！？ダイヤモンドガイ……」

そして亨は自分フィールド上にある『魔法族の結界』を指差し

「俺のターン、フィールド上の永続魔法『魔法族の結界』の効果を発動！」

「っ！？」

（一体どんな効果が……？）

「『魔法族の結界』と、自分フィールド上の魔法使い族モンスター1体を墓地へ送る事で、結界に乗っていた魔力カウンターの数だけデッキからカードをドローする事ができる！」

「何っ！？」

「結界に乗っていた魔力カウンターの数は4つ……よってデッキから、カード4枚ドロー！」

一気に手札強化ができた亨は攻めに入った。

「俺は手札から、チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！」

【ジャンク・シンクロン】
星3／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　５００
［チューナー／効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動！墓地からレベル２以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する！俺は墓地から『執念深き老魔術師』を特殊召喚！」

『ジャンク・シンクロン』が手を掲げると、そこから『執念深き老魔術師』が現れた。

「来るか、シンクロ召喚！？」

「レベル２『執念深き老魔術師』に、レベル３『ジャンク・シンクロ』をチューニング！」

２体のモンスターが１つになり、新たなモンスターがフィールドに現れた。

「集いし思いが新たな力を呼び起こす、光指す道となれ！シンクロ召喚、いでよ『ジャンク・ウォリアー』！」

【ジャンク・ウォリアー】
星５／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１３００
［シンクロ／効果］
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

「いけ『ジャンク・ウォリアー』、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント』に攻撃！スクラップフィスト！」

『ジャンク・ウォリアー』が拓夜の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント』に目掛けて近いてくる。

拓夜は自分フィールド上の１枚の伏せカードを発動させた。

「『ジャンク・ウォリアー』の攻撃宣言時、俺はこの罠カードを発動する！『エターナル・ドレッド』！」

【エターナル・ドレッド】
［罠カード］
「幽獄の時計塔」に時計カウンターを2個乗せる。

すると時計塔の針が３０分の所から一気に周りだし、０時の所で止まった。

ゴォーン…ゴォーン…ゴォーン…

だがその間に、『ジャンク・ウォリアー』は『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドサーヴァント』を破壊した。

「よし、これでライフポイントは逆転した！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００　→　８０００

【西条　亨】
ＬＰ／　７２００

「っ！？……なぜ拓夜くんのライフポイントが減らない！？」

驚く亨に、拓夜は時計塔を指差して説明した。

「今『幽獄の時計塔』には時計カウンターが４つ乗っている！こいつにカウンターが４つ以上乗っている場合、俺は戦闘ダメージを受けない！」

「っ！？……なる程な、そんな効果があったのか……」

（今、拓夜くんのフィールドには『幽獄の時計塔』と『ＤＩＥＲＯ　ダブルガイ』のみ、手札も無い……次のターンで勝負の流れをこちらに向けなくては……！！）

「俺はターンエンド！」

亨はエンド宣言し、ターンは拓夜に移った。

「俺のターン、ドロー！」

拓夜はドローすると、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた魔法カード『終わりの始まり』を取り出した。

「ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた『終わりの始まり』の効果を発動！デッキからカード３枚ドロー！」

（なッ！？　一気に手札０から４枚に……！？）

「俺は伏せカードを２枚セット、モンスターをセット……」

次々とフィールドが埋め尽くされていく。

拓夜は明らかに守備に徹する行動を取った。

「ダブルガイを守備表示に変更し、ターン終了！」

「ならば、俺のターン！ドロー！」

亨のターンに移り、カードをドローする。

（『幽獄の時計塔』が効果を適用しているにも関わらず……拓夜くんは守備表示でモンスターをだした……恐らく、リバース効果モンスター）

「俺はリバースカードを2枚セット……」

（今はできるだけ拓夜くんのモンスターの数を減らしていく！）

「俺は『熟練の黒魔術師』を召喚！」

【熟練の黒魔術師】
星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　１７００
［効果］
自分または相手が魔法を発動する度に、このカードに魔力カウンターを1個乗せる（最大3個まで）。魔力カウンターが3個乗ってい

る状態のこのカードをリリースする事で、自分の手札・デッキ・墓地から「ブラック・マジシャン」を1体特殊召喚する。

「黒魔術師で、ダブルガイに攻撃！」

ダブルガイは呆気なく破壊された。

「続いて『ジャンク・ウォリアー』で、セットモンスターに攻撃！」

すると拓夜は、伏せカードの1枚を発動させた。

「そいつの攻撃は阻止する！罠カード『炸裂装甲』を発動！」

【炸裂装甲】
［罠カード］
相手攻撃モンスター1体を破壊する。

『ジャンク・ウォリアー』の攻撃は、拓夜のモンスターに届く事なく破壊された。

「その守備モンスターを守ったか……次のターン、何か仕掛けてくるな？」

亨は拓夜のフィールドを見ながらそう呟くと

「なら、亨さんの望み通りに動いてあげましょうか？」

と、拓夜は挑発的な言葉で返してきた。

「フッ……、なら楽しみにしてるよ、拓夜くん？俺のターンは終了だ」

亨はエンド宣言をし、拓夜のターンに移る。

「俺のターン、ドロー！」

拓夜がカードをドローすると拓夜のフィールドに『ダブルガイトークン』が2体現れた。

「ダブルガイは破壊された次のターンのスタンバイフェイズ時に、トークンを2体残す……そして……！！」

拓夜は手札2枚を魔法・罠カードゾーンにセットした。

「まさかっ！？」

「いきますよ、亨さん！俺はモンスターを反転召喚『メタモルポット』のリバース効果発動！」

【メタモルポット】
星２／地属性／岩石族
ＡＴＫ　７００
ＤＥＦ　６００
［効果］
リバース：互いのプレイヤーは手札を全て捨て、その後それぞれ手札が５枚になる様にデッキからカードをドローする。

亨と拓夜はそれぞれ手札を全て捨て、手札が５枚になる様にドローした。

「これで俺の手札は整った……。全力でいくぜ、亨さん！」

「っ！？」

拓夜は５枚の手札の中から１枚を取り出し

「『ダブルガイトークン』２体と『メタモルポット』をリリース！」

「3体のモンスターをリリースするだとッ!?」

拓夜はその1枚のカードを力強くデュエルディスクに叩きつけた。

「来い!!『D－HERO　Bloo－D』!!」

【D－HERO　Bloo－D】
星8／闇属性／戦士族
ATK　1900
DEF　600
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。1ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる。このカードの攻撃力は、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードが自分フィールド上で表側表示で存在する限り、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果は無効化される。

拓夜のフィールドに血色の大きな翼を持つ戦士が舞い降りた。

「何だ……このモンスターは……！？」

「『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』は、３体のモンスターをリリースした場合のみ特殊召喚ができるモンスターだ！」

（３体のリリースで特殊召喚するモンスター、攻撃力は１９００…上級モンスターにしては、攻撃力が低すぎる……恐らく厄介な効果を持っているに違いない！！）

亨は身構えると、拓夜はＢｌｏｏ－Ｄに指示を送った。

「『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』の効果発動！相手モンスターを吸収せよ！」

「何っ！？」

Ｂｌｏｏ－Ｄが翼を大きく広げると、亨の場にいた『熟練の黒魔術師』はＢｌｏｏ－Ｄの血色の翼に吸い込まれてしまった。

【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】
ＡＴＫ　１９００→２８５０

「黒魔術師！？」

「Ｂｌｏｏ－Ｄは吸収したモンスターを装備し、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分だけ攻撃力を上昇させる！」

「攻撃力……２８５０か」

「いくぜ亨さん、『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』でダイレクトアタック！！」

Ｂｌｏｏ－Ｄが上空からその翼を大きく広げると、無数の血の弾効が亨に目掛けて放たれた。

「っ！？リバースカードオープン『鳳翼の爆風』！」

【鳳翼の爆風】
［罠カード］
手札を1枚捨てる。相手フィールド上のカード1枚を選択して、デッキの一番上に戻す。

亨は手札を1枚墓地に捨てた。

「『鳳翼の爆風』は手札1枚をコストに、相手フィールド上のカード1枚を持ち主のデッキの一番上に戻す！俺は手札の『救世竜セイヴァー・ドラゴン』を捨てて、Ｂｌｏｏ－Ｄよ、デッキに戻れ！」

Ｂｌｏｏ－Ｄが真紅の炎に包まれたその時、拓夜は伏せてあった1枚のカードを発動させた。

「そんな罠は通用しない！俺はカウンター罠『トラップ・ジャマー』を発動！」

【トラップ・ジャマー】
［カウンター罠］
このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。罠カードの発動と効果を無効にし破壊する。

「『トラップ・ジャマー』で、亨さんの『鳳翼の爆風』を無効にし破壊する！」

「くっ！？」

炎の中から再びＢｌｏｏ－Ｄが姿を現し、亨に目掛けて血の雨を降らせた。

【西条　亨】
ＬＰ／　７２００　→　４３５０

「ぐぁっ！？……やるな、拓夜くん」

拓夜はダイレクトアタックが成功した事に「ヨシ！」とガッツポー

ズをとる。

「俺はこのままターン終了！」

亨は拓夜のフィールドを眺めた。

現在、拓夜のフィールドには『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と2枚のリバースカード、そしてフィールド魔法『幽獄の時計塔』。

対して亨のフィールドにはモンスターはなく、３枚のリバースカード。

ライフポイントも大きな差が広がってしまった。

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【西条　亨　】
ＬＰ／　４３５０

（このままでは俺は拓夜くんにダメージを与える事はできない……まずはあのフィールド魔法『幽獄の時計塔』か、拓夜くんのモンス

ター『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を何とかしなくては……！！）

亨はデッキトップに指を添えて、目を閉じた。

（カード達よ……俺に力を貸してくれ！）

亨は目を開き、カードをドローした。

そしてドローしたカードを確認すると

（……っよし！）

「俺は『マジシャンズ・ヴァルキリア』を召喚！」

【マジシャンズ・ヴァルキリア】
星４／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１６００

ＤＥＦ　１８００
［効果］
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手は他の魔法使い族モンスターに攻撃する事はできない。

亨のフィールドにマジシャンの少女が現れる。

「そんな低レベルのモンスターを召喚しても無駄だ！『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』は相手モンスターの効果を無効にする力を持っている！」

得意気にＢｌｏｏ－Ｄの効果を言う拓夜。
だが亨はそれに構わずプレイを続行する。

「別に俺は『マジシャンズ・ヴァルキリア』の効果を狙った訳じゃない！俺の狙いは、これだ！リバースカードオープン！！『ディメンション・マジック』！！」

【ディメンション・マジック】
［速攻魔法］
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合のみ発動する事ができる。自分フィールド上のモンスター1体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。その後、フィールド上のモンスター1体を破壊する事ができる。

「『ディメンション・マジック』は、自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合のみ発動する事ができるカード……モンスター1体をリリースして、手札から新たな魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する！」

「新たな魔法使い族モンスター……！？」

「『マジシャンズ・ヴァルキリア』をリリースし、手札から『ブラック・マジシャン』を特殊召喚！」

【ブラック・マジシャン】
星7／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２５００

ＤＥＦ　２１００

亨のフィールドに亨のデッキのエースが登場した。

「『ブラック・マジシャン』！？　……だがそいつの攻撃力では、『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』には届かない！」

「フッ……、そいつはどうかな？」

「っ！？」

「『ディメンション・マジック』の効果、フィールド上のモンスター１体を破壊する！行け、『ブラック・マジシャン』！」

ブラック・マジシャンはＢｌｏｏ－Ｄに向けて杖を構えると、Ｂｌｏｏ－Ｄの背後に現れた棺から鎖が飛び出した。

「Ｂｌｏｏ－Ｄっ！？」

鎖に捕らえられたＢｌｏｏ－Ｄは、そのまま棺の中に閉じ込められ、その棺が爆発した。

ドゴォォオ……！！

「これでＢｌｏｏ－Ｄは破壊できた……今度は俺の番だ、拓夜くん！」

亨は手札のカードに手を伸ばし

「更に手札から魔法カード『黒・魔・導』を発動！」

【黒・魔・導（ブラック・マジック）】
［魔法カード］
自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する。

「『黒・魔・導』？……『ブラック・マジシャン』の攻撃名と、同じ名前……」

「『黒・魔・導』は、『ブラック・マジシャン』がフィールド上に表側表示で存在する時に発動する事ができる、相手フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「何っ！？」

ブラック・マジシャンの杖から放たれた攻撃が拓夜の魔法・罠カードを全て破壊した。

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「よし、拓夜くんのフィールド魔法『幽獄の時計塔』も破壊できた！これで拓夜くんに戦闘ダメージを与える事ができる！」

亨が意気込むと、拓夜はニヤリと不敵な笑みを浮かべる。

「『幽獄の時計塔』が破壊された時、時計塔の封印が解き放たれる！」

「っ！？」

拓夜の後ろに建っていた時計塔が崩れ落ち、その瓦礫の上に1体のモンスターが立っていた。

「時計カウンターが4つ以上乗っているこのカードが破壊された時、手札またはデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ』を1体特殊召喚する！俺はデッキから、ドレッドガイを特殊召喚！」

瓦礫の上に立っていたモンスターは大きく跳躍すると、拓夜を守る様に『ブラック・マジシャン』の前に立ちはだかった。

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　？
ＤＥＦ　？

［効果］
「幽獄の時計塔」の効果で特殊召喚した場合、自分フィールド上の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター以外の自分のモンスターを全て破壊する。その後、自分の墓地から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを2体まで特殊召喚する事ができる。このカードが特殊召喚されたターン、自分フィールド上の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターは破壊されず、コントローラーへの戦闘ダメージは0になる。このカードの攻撃力・守備力は、自分フィールドのこのカードを除く「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの元々の攻撃力を合計した数値になる。

「『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ』の効果発動！墓地から2体の『Ｄ－ＨＥＲＯ』を特殊召喚する！来い『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』！！2体共攻撃表示だ！！」

拓夜のフィールドに計3体のモンスターが並ぶ。

「ドレッドガイの攻撃力と守備力は、ドレッドガイ以外の『Ｄ－ＨＥＲＯ』の元々の攻撃力を合計した数値になる！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドレッドガイ】

ＡＴＫ　？　↓　３５００
ＤＥＦ　？　↓　３５００

「まさか時計塔にそんなモンスターが封印されていたなんてな……だがドレッドガイのその攻撃力も、他の『Ｄ－ＨＥＲＯ』がいなかったら大した問題じゃない！　バトルフェイズに入る！」

亨は拓夜のダイヤモンドガイを指差し、ブラック・マジシャンに指示をだした。

「『ブラック・マジシャン』でダイヤモンドガイに攻撃！ブラック・マジック！！」

ブラック・マジシャンが杖から黒い雷を放つが、その攻撃はダイヤモンドガイに当たる直前で弾き飛ばされた。

「なッ！？　……ブラック・マジシャンの攻撃が……っ！？」

驚く亨に、拓夜は腕を組みながらその種を明かした。

「無駄です！ドレッドガイが特殊召喚されたターン、『ＤＥＲＯ』達はいかなる場合によっても破壊されず、戦闘ダメージも０になる！」

「ちっ！？　厄介な奴らだ……！！」

思わず舌打ちしてしまう亨。

「俺はリバースカードを１枚セットして、ターン終了……！！」

「俺のターン、ドロー！」

拓夜はカードをドローして、ダイヤモンドガイの効果を発動させた。

「ダイヤモンドガイの効果発動！デッキの一番上のカードを確認する……ちっ、罠カードか……こいつはデッキの一番下に戻す」

拓夜はカードをデッキ下に戻すと

「このままバトルフェイズに入る！まずはドレッドガイで『ブラック・マジシャン』に攻撃！」

ドレッドガイが高く跳躍し、亨のブラック・マジシャンに襲いかかる。

その時、亨は先程伏せた1枚のカードを発動させた。

「リバースカードオープン！『聖なるバリアー ミラーフォースー』！」

【聖なるバリアー ミラーフォースー】
［罠カード］
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「ミラーフォースだとッ！？」

ドレッドガイはブラック・マジシャンの前に展開されたバリアに弾かれて爆散した。

そして拓夜のフィールド上のダイヤモンドガイとダッシュガイも、聖なる光に当てられて消滅した。

「ドレッドガイの破壊耐性は特殊召喚されたターンのみだ！」

「チィッ、……まさかこうも早くドレッドガイがやられるなんてな……！？」

「さぁどうする、拓夜くん？」

拓夜は手札のカード1枚を発動させた。

「ドレッドガイが破壊されたなら、次は俺のデッキ最強モンスターを出すまで！手札から『戦士の生還』を発動！」

【戦士の生還】
［魔法カード］
自分の墓地から戦士族モンスター1体を選択して、手札に加える。

「俺は墓地から『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を手札に加える！」

墓地からＢｌｏｏ－Ｄを取り出し、亨に確認させた後、手札に加えた。

（Ｂｌｏｏ－Ｄ召喚には3体のリリースが必要な筈……拓夜くんは一体何を狙っているんだ？）

拓夜のフィールドには何のカードもない状態である。

亨は自然と拓夜の言う最強モンスターがＢｌｏｏ－Ｄであると思い

込んでいた。

「いくぜ亨さん、今から俺のデッキ最強モンスターを見せてやる！」

「っ！？」

「手札から魔法カード『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を融合、現れよ『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［融合／効果］
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

拓夜のフィールドに血塗られた竜の鎧を身に纏った屈強な戦士が現れた。

「こいつが拓夜くんの最強モンスター……！？」

「そぅ……『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』こそ、最強にして最後の『Ｄ』！！そして、俺が一番最初に引き当てた……俺が一番信頼するカードだ！！」

自分の誇りだ！と言わんばかりの勢いで語る拓夜。
亨はそれを見て、素直に思った。

（凄い……拓夜くんはあのカードを本当に大切に思っている……！）

亨はフィールド上のブラック・マジシャンを見ながら

「そうか、そいつが拓夜くんのエースカード……なら俺はデュエリストとして、拓夜くんの『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を倒す！」

「受けて立ちます、亨さん！俺のターンは終了です！」

亨のターンに移り、カードをドローする。

「俺のターン、ドロー！」

（……こいつは！？）

亨はドローしたカードを確認すると、そのカードをデュエルディスクに叩きつけた。

「俺はチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！」

【デブリ・ドラゴン】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　２０００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地から攻撃力５００以外のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

「『デブリ・ドラゴン』が召喚に成功した時、墓地から攻撃力５００以下のモンスター１体を特殊召喚する！来い、『執念深き老魔術

師』！」

亨のフィールドに老魔術師が現れる。

続けて亨は、墓地から1枚のカードを取り出した。

「更に墓地の『ボルト・ヘッジホッグ』の効果発動！」

【ボルト・ヘッジホッグ】
星2／地属性／機械族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
［効果］
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

「こいつはフィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、墓地から特殊召喚する事ができる！」

「いつの間に……そうか、俺の『メタモルポット』の効果で！？」

「いくぞ！レベル２『執念深き老魔術師』と『ボルト・ヘッジホッグ』に、レベル４『デブリ・ドラゴン』をチューニング！」

それぞれのモンスターの星が一つになり、新たなモンスターが空に舞った。

「集いし願いが、新たに輝く星となる、光指す道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ『スターダスト・ドラゴン』！！」

【スターダスト・ドラゴン】
星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェ

イズ時、この効果を発動する為にリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

亨のフィールドに星屑の煌めきを放つ竜が現れる。

「スターダスト……？　だがスターダストの攻撃力では、俺のＤ－ＥＮＤには届かない！」

「……確かに、スターダストでは攻撃力が足りない……俺は手札から『光の護封剣』を発動！」

【光の護封剣】
［魔法カード］
相手フィールド上に存在する全てのモンスターを表側表示にする。このカードは発動後（相手ターン数えて）３ターンの間フィールド上に残り続ける。このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上モンスターは攻撃宣言を行う事ができない。

「このカードで凌いでみせる……俺はターン終了！」

拓夜のターンに入る。

「俺のターン、ドロー！」

拓夜はドローすると、Ｄ－ＥＮＤに向かって

「いくぞ、Ｄ－ＥＮＤ！効果を発動しろ！！」

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果！？」

「Ｄ－ＥＮＤはそのターンのバトルフェイズを放棄する代わりに、相手モンスター1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

Ｄ－ＥＮＤは腕に装着された大剣を構える。

「お前の最強の力で、亨さんの『ブラック・マジシャン』を破壊しろ！！」

そして、ブラック・マジシャン目掛けて大剣を振り下ろした。

振り下ろしたその衝撃が、一直線にブラック・マジシャンに向かって飛んでいく。

「甘いぜ、拓夜くん！！」

その瞬間、亨のスター・ダストがブラック・マジシャンの前に攻撃から庇う様に飛び込んできた。

「確かに、その『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果は強力だ。……だが、俺のスターダストの能力は、その上をいく！！」

「ッ！？」

「『スターダスト・ドラゴン』の効果発動！！　このカードをリリースし、カードを破壊する効果の発動を無効にして破壊する！！『ヴィクテム・サンクチュアリ』！！」

スター・ダストの体が星屑の粒子となり、Ｄ－ＥＮＤが放った衝撃を受け止めた。

「なにっ！？」

そして受け止めた衝撃がＤ－ＥＮＤ自身へと跳ね返り、Ｄ－ＥＮＤは破壊された。

「くっ！？俺のＤ－ＥＮＤが……」

「よし、Ｄ－ＥＮＤを破壊できた！次のターンで一気に攻める！」

「そうはさせない！！」

拓夜は手札のカードを発動させた。

「装備魔法『再融合』を発動！」

【再融合】
［装備魔法］
８００ライフポイントを払う。自分の墓地から融合モンスター１体を選択して自分フィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。このカードが破壊された時、装備モンスターをゲームから除外する。

「俺のライフを８００ポイントを払う事で、墓地の融合モンスター１体をこのカードに装備させる！蘇れ、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００　→　７２００

【西条　亨　】
ＬＰ／　４３５０

再びフィールド上にＤ－ＥＮＤが現れる。

「Ｄ－ＥＮＤ、もう一度効果を発動だ！！　ブラック・マジシャンを破壊しろ！！」

再びブラック・マジシャンに刃が向けられる。

「ブラック・マジシャンッ！？」

亨の叫びも虚しく、ブラック・マジシャンは破壊された。

【西条　亨　】
ＬＰ／　４３５０　→　１８５０

「よし、この流れなら……！！」

（このデュエル、もらった！！）

拓夜は心の中でそう思い、小さくガッツポーズをとる。

「俺のターンは終了だ！さぁ亨さんのターンだ！」

「そのターンエンド時に、墓地の『スターダスト・ドラゴン』の効果発動！」

「えっ！？」

「自身の効果でリリースし、墓地に送られたターンのエンドフェイズ時、墓地にあるこのカードをフィールド上に特殊召喚する！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！！」

再び亨のフィールドに現れたスター・ダスト。

拓夜は少し曇った表情をみせたがそれは直ぐに消え、落ち着いた表情へと変わる。

「スターダストが戻って来ようが、俺の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の敵じゃない！ターン終了だ！」

「随分と余裕が出たな拓夜くん？　デュエルは1ターン先に何が起きるか分からない……いくぜ、俺のターン！」

亨はデッキに指を添えて、力強くカードをドローした。

キィィィイン……！！

ドローしたカードが黄金色に輝く軌跡を描く。

「っ！？……なっ！？」

それを見て驚く拓夜を余所に、亨はドローしたカードを見て「よし！」と頷く。

「いくぜ……拓夜くん！ここからが俺の本気のデュエルだ！！」

「ッぅ！？」

見えない覇気が拓夜を襲う。
それに気圧されまいと亨を見る拓夜だったが、その亨を見て驚いた。

「亨さん……その目は……！？」

亨の右目は蒼色に淡く輝いていた。

【光の護封剣】
カウント×１

「墓地の光属性モンスター『マジシャンズ・ヴァルキリア』と、闇属性モンスター『魔導戦士ブレイカー』をゲームから除外！」

「っ！？」

亨は墓地の光と闇、２体のモンスターをゲームから除外し、手札から混沌の力を持つ魔術師を召喚した。

「いでよ『カオス・ソーサラー』！」

【カオス・ソーサラー】
星６／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体をゲームから除外する事ができる。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「『カオス・ソーサラー』！？……そのカードを今ここで引くのか！？」

「『カオス・ソーサラー』の効果発動！拓夜くんのモンスター『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を除外せよ！！」

ソーサラーの放った魔術がＤ－ＥＮＤに炸裂し、眩い光に包まれた

Ｄ－ＥＮＤはその姿を消した。

「Ｄ－ＥＮＤ！！」

「これで拓夜くんのフィールドはがら空きになった……バトル！『スターダスト・ドラゴン』で拓夜くんにダイレクトアタック、響け！シューティング・ソニック！」

スター・ダストの口から強烈なブレスが放たれた。
スター・ダストの攻撃は拓夜を直撃し、ライフポイントを大幅に削った。

【西条拓夜】
ＬＰ／７２００　↓　４７００

【西条　亨　】
ＬＰ／　１８５０

「くぅっ！？」

（不味い…本当に１ターンで戦況を塗り変えられた…！！）

「俺のターンは終了だ！」

（このままじゃやられる……このターンのドローで、この戦況を覆す事ができるカードを引かないと……）

「俺のターン、ドロー！」

拓夜はカードをドローして、手札とフィールドを確認する。

（亨さんのフィールドには、破壊耐性を持つ『スターダスト・ドラゴン』と、除外効果を持つ『カオス・ソーサラー』……それに、『光の護封剣』で俺の攻撃は封じられている……このままじゃジリ貧だ）

「俺は墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』の効果発動！」

「っ！？」

拓夜は墓地にあるディアボリックガイをゲームから除外して、デッ

キからもう1体のディアボリックガイを守備表示で特殊召喚した。

「墓地のディアボリックガイをゲームから除外し、デッキからもう1体のディアボリックガイを特殊召喚する！」

「まさかそんな手段でモンスターを出してくるとはな……」

「そして俺は、手札から速攻魔法『緊急テレポート』を発動！」

【緊急テレポート】
［速攻魔法］
自分の手札またはデッキからレベル3以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時にゲームから除外される。

「『緊急テレポート』は、自分の手札またはデッキからレベル3以下のサイキック族モンスター1体を特殊召喚する！俺はデッキから、チューナーモンスター『クレボンス』を特殊召喚！」

【クレボンス】
星２／闇属性／サイキック族
ＡＴＫ　１２００
ＤＥＦ　４００
［チューナー・効果］
このカードが攻撃対象に選択された時、８００ライフポイントを払う事でそのモンスターの攻撃を無効にする。

「チューナーモンスター！？」

「レベル６の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』に、レベル２の『クレボンス』をチューニング！」

拓夜のフィールドのモンスターが１つになり、シンクロモンスターが現れた。

「葉月、お前の力を貸してくれ！！シンクロ召喚、闇に堕ちろ！『ダーク・エンド・ドラゴン』！」

【ダーク・エンド・ドラゴン】
星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２６００

ＤＥＦ　２１００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
１ターンに１度、このカードの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

「『ダーク・エンド・ドラゴン』の効果発動！攻・守を５００ポイントダウンし、相手フィールド上のモンスター１体を墓地へ送る！」

【ダーク・エンド・ドラゴン】
ＡＴＫ　２６００→２１００
ＤＥＦ　２１００→１６００

「何だとっ！？」

「『スターダスト・ドラゴン』は破壊耐性を持っているが、墓地に送る効果に対しては無力！」

ダークエンドの口から放たれた漆黒のブレスを浴び、スターダスト

は墓地へと送られてしまった。

「スターダスト……」

「『スターダスト・ドラゴン』を墓地に送ったついでに、『カオス・ソーサラー』も道連れにしてやる！手札から魔法カード『地割れ』を発動！」

【地割れ】
［魔法カード］
相手フィールド上の攻撃力が一番低い表側表示モンスター1体を破壊する。

亨のフィールドには『カオス・ソーサラー』しか存在していなかった為、否応なしに『カオス・ソーサラー』は破壊された。

「亨さんのフィールドにある『光の護封剣』で、俺は攻撃する事ができない……俺は伏せカードを1枚セットして、ターン終了！」

亨のターン。
亨はデッキからカードを力強く引き抜いた。

「俺のターン、ドロー！」

【光の護封剣】
カウント×２

（……デッキよ、俺の想いに答えてくれたのか！！）

ドローしたカードを確認すると、亨は自然と笑みを浮かべる。

「俺は『金華猫』を召喚！」

【金華猫】
星１／闇属性／獣族

ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　２００
［効果・スピリット］
このカードは特殊召喚できない。召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。このカードが召喚・リバースした時、自分の墓地に存在するレベル１のモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。このカードがフィールド上から離れた時、この効果で特殊召喚したモンスターをゲームから除外する。

「『金華猫』の効果発動！俺の墓地からレベル１のモンスターを特殊召喚する、来い『救世竜セイヴァー・ドラゴン』！」

【救世竜セイヴァー・ドラゴン】
星１／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［チューナー・効果］
このカードをシンクロ素材とする場合、「セイヴァー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

亨のフィールドにモンスターが２体並ぶ。

「そんなレベル1のモンスター2体だけで……一体何を？」

「更に、リバースカードオープン！永続罠『リビングデッドの呼び声』！」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「『リビングデッドの呼び声』の効果により、『スターダスト・ドラゴン』を墓地より特殊召喚する！！」

亨のフィールドに再び舞い戻った『スターダスト・ドラゴン』。

亨は力の限りの声を出して、シンクロ召喚を行った。

「レベル８『スターダスト・ドラゴン』とレベル１『金華猫』に、レベル１『救世竜セイヴァー・ドラゴン』をチューニング！」

スターダストと金華猫の星が、巨大化したセイヴァー・ドラゴンに取り込まれていく。

「そんな!?『スターダスト・ドラゴン』をシンクロ素材にするなんてっ!?」

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らしだす！光指す道となれ！」

カッ…!!!!!

辺り一面を眩い光が照らしだす。

「シンクロ召喚、光来せよ！『セイヴァー・スター・ドラゴン』！

！」

【セイヴァー・スター・ドラゴン】
星１０／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３８００
ＤＥＦ　３０００
［シンクロ／効果］
「救世竜セイヴァー・ドラゴン」＋「スターダスト・ドラゴン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
相手が魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし、相手フィールド上のカードを全て破壊する。１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター１体の効果を無効化できる。また、無効化したモンスターに記された効果をこのカードの効果として１度だけ発動できる。エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」１体を特殊召喚する。

亨のフィールドに、聖なる輝きを放つ竜が光来した。

「セイヴァー…スター…ドラゴン…っ！？」

「『セイヴァー・スター・ドラゴン』の効果発動！相手モンスターの効果を無効化し、エンドフェイズまでそのモンスターと同じ効果を得る！サブリメイション・ドレイン！！」

セイヴァー・スターが大きく翼を広げると、拓夜のフィールドのダークエンドの体から光の粒子が溢れ出し、それをセイヴァー・スターが吸収する。

「ダークエンドっ！？」

【ダーク・エンド・ドラゴン】
ＡＴＫ　２１００→２６００
ＤＥＦ　１６００→２１００

「これでこのターン『セイヴァー・スター・ドラゴン』は、『ダーク・エンド・ドラゴン』と同じ効果を得た！セイヴァー・スターよ、ダークエンドの能力を発動しろ！！」

【セイヴァー・スター・ドラゴン】
ＡＴＫ　３８００→３３００
ＤＥＦ　３０００→２５００

セイヴァー・スターが放った光に包まれ、拓夜のダークエンドは姿を消した。

ダークエンドが墓地に送られた事により、拓夜のフィールドには1枚のリバースカードだけとなった。

「バトル！『セイヴァー・スター・ドラゴン』で、拓夜くんにダイレクトアタック！シューティング・ブラスター・ソニック！！」

轟ッ！！

セイヴァー・スターが拓夜目掛けて光となって襲いかかる。

「ぐわぁぁあ！！！？」

【西条拓夜】

ＬＰ／　４７００　→　１４００

【西条　亨】
ＬＰ／　１８５０

「くっ！？……ライフが逆転された……！？」

（強い！？……この人は……一体……！？）

「俺はターンを終了する……そしてエンドフェイズ時、『セイヴァー・スター・ドラゴン』の効果発動！」

「っ！？」

「『セイヴァー・スター・ドラゴン』はエンドフェイズ時、エクストラデッキに戻る、そして墓地の『スターダスト・ドラゴン』を特殊召喚させる！」

セイヴァー・スターと入れ替わる形で、墓地からスターダストが特殊召喚された。

「スターダスト……」

拓夜は自分のデッキを見つめる。

（俺は亨さんみたいに、ドローしたカードを光らせる事もできなければ、ましてやカードと契約を交わしている訳でもない……）

拓夜はデッキトップに指を添え

（でも……俺だって、自分のデッキを信じる気持ちは誰にも負けるつもりはない！）

「俺のターン、ドロー！！」

カードをドローした拓夜は自分の場の伏せカードを発動させた。

「俺はこのカードで勝機を掴む！装備魔法『薔薇の刻印』を発動！」

【薔薇の刻印】
［装備魔法］
自分の墓地に存在する植物族モンスター1体をゲームから除外して発動する。このカードを装備した相手モンスター1体のコントロールを得る。自分のエンドフェイズ時に、装備モンスターのコントロールを相手に移す。自分のスタンバイフェイズ時に存在モンスターのコントロールを得る。

「俺は墓地から植物族モンスター『キラー・トマト』を除外し、亨さんの『スターダスト・ドラゴン』に装備させる！」

スターダストの額に薔薇の刻印が施され、コントロールが移された。

「何っ！？」

「そして『スターダスト・ドラゴン』をリリースし、『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚！」

【邪帝ガイウス】
星６／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　２４００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード１枚を選択して、ゲームから除外する。除外したカードが闇属性モンスターだった場合、相手ライフに１０００ポイントのダメージを与える。

「『邪帝ガイウス』の効果発動！このカードがアドバンス召喚に成功した時、フィールド上のカード１枚をゲームから除外する！」

「何っ！？」

「今、亨さんは『光の護封剣』によって守られている……俺はその『光の護封剣』を除外する！」

邪帝が放った黒い邪悪なエネルギーが、護封剣を粉々に打ち砕いた。

「これで亨さんを守るカードは、その1枚の伏せカードのみとなった！いけ、ガイウス！亨さんにダイレクトアタックだ！」

邪帝の手から再び黒い邪悪なエネルギーが放たれる。

（こいつが決まれば、俺の勝ちだ！）

邪帝の攻撃が迫り来るその時、亨は場の伏せカードを発動させた。

「俺は最後まで諦めない！！　リバースカードオープン！！『和睦の使者』を発動！」

【和睦の使者】
［罠カード］
このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは0になる。このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

「このカードによって、俺が受ける戦闘ダメージはこのターン、全て0になる！」

「く！？……止めを刺しきれなかったか……俺はターン終了！」

「……」

亨はフィールドを見渡した。

拓夜のフィールドには『邪帝ガイウス』のみ、自分のフィールドにはカードが1枚も残っていない。

そして、互いの手札は0枚。

勝負はこのターン、亨がドローするカードに掛かっていた。

「……拓夜くん」

「……はい」

「恐らく……このターン、俺がドローするカードで勝負が決まる……！」

「……はい！」

「……このデュエルは俺から君に持ち掛けた事から始まったデュエルだが、君とのデュエルなら……勝っても負けても悔いはない！」

「えっ？」

「君は強い……今まで数々のデュエリストとデュエルしてきたけど、君みたいな強いデュエリストはそういなかった」

「……俺もです、亨さん……俺も、あなたみたいな強いデュエリストはそう見た事がない」

「……そうか、それじゃ……いくぜ、俺達のラストターンだ！」

「はい！受けて立ちます！亨さん！」

「俺のターン、ドロー！！」

亨はドローしたカードを確認し、それを発動させた。

「魔法カード『貪欲な壺』を発動！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からカードを5枚選択してデッキに戻し、デッキをシャッフルする。その後、デッキからカードを2枚ドローする。

「『貪欲な壺』！？　まさかここで手札増強カードを引き当てるなんて……！？」

「俺は墓地から『スターダスト・ドラゴン』『ジャンク・ウォリアー』『ジャンク・シンクロン』『デブリ・ドラゴン』『執念深き老魔術師』をデッキに戻し、シャッフルする！」

亨はそれらのカードをデッキに戻し、シャッフルした後

「そして、デッキからカードを2枚ドロー！！」

カードをドローした亨には迷いが無かった。

亨はドローした1枚のカードを早速発動させる。

「手札から魔法発動『洗脳－ブレインコントロール』！」

【洗脳－ブレインコントロール】
［魔法カード］
８００ライフポイントを払い、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターのコントロールを得る。

【西条拓夜】
ＬＰ／　１４００

【西条　亨　】
ＬＰ／　１８５０　→　１０５０

「ブレインコントロールの効果で、拓夜くんの『邪帝ガイウス』のコントロールを得る！」

「っそんな！？」

ガイウスは拓夜の下を離れ、亨のフィールドに移動した。

「ガイウスで攻撃されたら……俺の……ッ！！」

拓夜が力なくうなだれようとした時、亨は自分の手札に向かって何やら話しかけていた。

「わかってる、頼りにしているからな」

「……亨さん……何を？」

「俺は『邪帝ガイウス』をリリース！」

「えっ！？」

亨の予想外の行動に驚く拓夜。

亨はガイウスをリリースすると、残った最後の１枚の手札から自分のパートナーを召喚した。

「コイツで決める！現れよ、『ブラック・マジシャン・ガール』！！」

【ブラック・マジシャン・ガール】
星６／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　１７００
【効果】
自分と相手の墓地にある「ブラック・マジシャン」と「マジシャン・オブ・ブラックカオス」１体につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。

「『ブラック・マジシャン・ガール』！？」

「マジシャン・ガールの攻撃力は、墓地に眠る『ブラック・マジシャン』の数だけ攻撃力３００ポイントアップする！」

【ブラック・マジシャン・ガール】
ＡＴＫ　２０００→２３００

「いくぜ、拓夜くん……『ブラック・マジシャン・ガール』の攻撃！黒・魔・導・爆・裂・波！！」

マジシャン・ガールの杖から黒い閃光が放たれる。

「うわぁあっ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　１４００　→　０

【西条　亨　】

LP／　1050

こうして、2人の西条のデュエルが終わった。

※

ライフが0になると、拓夜の腕に装着されていたデュエルディスクが消滅した。

一瞬、その事に驚いた拓夜だったが

「!?……そっか、もう、時間なんだ……」

デュエルディスクだけでなく、自分の足元が光の粒子になって消滅していく事に気付き、拓夜は悟った。

「亨さん、楽しいデュエルでした。……夢なのが、本当に惜しい位に」

「……拓夜くん」

足元から体にかけて粒子になっていく拓夜。

亨は残された時間が僅かしかないと思い、

「拓夜くん！！」

「ッ！？」

「今度は、一緒にデュエルをしよう！夢なんかじゃない、現実で、一緒に！！」

「……はい！！　その時は、宜しくお願いします！！」

最後には光の粒子となって、亨の前から姿を消した拓夜だったが、彼の表情は最後まで笑顔だった。

※

「……っ、あれ！？」

拓夜が目を覚ますと、そこは見慣れた自分の部屋の中だった。

いつの間にか眠っていたのか、部屋の電球やテレビの電源は点きっぱなしで、カーテンの隙間からは朝日が射し込んでいた。

「……いつの間にか、寝ちまったのか……ん？」

そこでふと、拓夜は机の上に置いてある自分のデッキに気付いた。

「……あれ？　何だこの状況？」

思わず呟く拓夜。

机の上には、デッキが置いてあるだけでなく、敷かれたデュエルフィールドの紙の墓地ゾーンにも、デッキからカードが置かれていた

のだ。

これはまるで……

「……あれ？　昨日、誰かとデュエルをしたっけ？」

思い出そうにも何故か全く思い出せない拓夜。

「ん～～。ま、いっか」

大きく背伸びをしてから自室を後にする拓夜。

拓夜は全く覚えていないが、部屋に残されたカードは覚えている。

これは拓夜がＯＣＧ研究会に入る前の、拓夜の知らない物語……。

番外編【夢】（後書き）

今回の話を閲覧して頂き、本当にありがとうございます。

この話はちょいとアニメみたいなネタというか、あんなリズミカルな流れのデュエルが書きたいなぁ・・・と思い、え？

いつもアニメっぽいですか？

いつもリアリティないですか？

それは僕の力量不足ですね、はい！

スイマセン・・・

さて、本編の更新ですが、仕事の都合により遅れております。

誠に申し訳なく思っておりますが、なにとぞ宜しくお願いします。

今回のような番外編の話を読んでみたいと思われた方、ここをこうした方がいいのではないか？と思われた方は、ご意見をお待ちしておりますので、どしどし書いてください。

それでは、今回はこの辺で・・・

失礼しました。

戦いの火蓋（前書き）

とりあえず出来上がってる分を・・・

戦いの火蓋

※

東区の河原にはＯＣＧ研究会のメンバーと、北区のデュエリストチーム【フィアーズ】のリーダー、月影陽一が向き合っていた。

差し出されたその手と、月影の表情を見比べながら、拓夜は言う。

「俺を……チーム【フィアーズ】に……！？」

その言葉を聞いて月影は口元に歪めたような笑みを浮かべる。

「ああそうだ。お前の事はソイツ等が主催していたデュエル大会の時から見ていた。お前は間違いなくデュエルの天才だ！　だが可哀相になァ……。お前は自分の実力の半分も引き出せていない……」

一歩、また一歩近づきながら話す月影。

すると、両者の間に割って入り、白石が月影の前に立ちふさがった。

「あ？」

「ふぅん……月影と言ったな？　悪いがお前が出る幕はない。帰れ」

「はァ？」

意味が分からない。とでも言いたげな月影。

すると、拓夜の隣に立っていた成瀬は拓夜の腕を掴み、自分に引き寄せながら言った。

「拓夜さんは、フィアーズには入りません！私も拓夜さんも、ＯＣＧ研究会の人間です！」

「なにッ！？」

「そうだぜぃ月影。わざわざ目の前で、仲間を勧誘しに来るなんざ、俺たちを侮辱しに来ているようなもんだぜぃ？」

結締も前へと進み、指をパキパキと鳴らしながら口元を吊り上げる。
その仕草や表情からしてリアルファイトに発展しそうな空気を漂わせる結締。
しかし、月影は「ちょ、タンマ！タンマ！」と結締に制止を呼び掛ける。

「マジな拳は勘弁な？　俺ってこう見えてパシフィストだし？」

「……西条ちゃん、パシフィストって何ぜよ？」

「平和主義者って事」

一呼吸おいて月影はタバコの火を用意していた携帯灰皿を使い、吸い殻を捨てた。

「ハァ～ァ。んだよ……先に取られちまってたか……」

「取られた……って言い方は、違います」

拓夜は目の前に立つ月影を真っ直ぐに見つめて言い放った。

「俺は、自分の意志でＯＣＧ研究会に入ったんだ。この人達と一緒に、さっきみたいに楽しいデュエルがしたい。そう思って、入ったんです。取られたなんて言い方は、違います！」

「……」

拓夜の言葉を聞き、月影は軽く溜め息を吐き出した。

「ハァ……今日の所は、これ位にしておくか……」

月影はそう呟くと、ＯＣＧ研究会のメンバーの一人一人の顔を順に眺めていく。

すると、一人の人物を見つけて

「お、アンタって……マナちゃんか？」

「へ、私！？」

いきなり名を尋ねられ、キョトンとなるマナは

「えと、そうだけど……」

「ククッ、ヤッパリそうかァ！　いやァ、ネットとかの画像で見るより、実際の方が滅茶苦茶カワイイじゃねぇか！　あ、実は俺、マナちゃんのファンです」

そう言い右手を差し出す月影。

いきなり馴れ馴れしく話してきた月影だったが、自分のファンと言われては、ほんの少しは嬉しく思う。

とりあえずファンの期待に応える為、マナは月影との握手に応じてみた。

すると……。

「ど、どうも……って、キャッ!?」

「ウハーーッ!!　胸デカーッ!!　最高だなァ!!　マナちゃんの体はよォ!!」

あろうことか、月影は握手したマナを自分に引き寄せて、その体を抱き締めたのだ。その行動にＯＣＧ研究会の一同は一瞬、呆気に取られてしまった。

「イヤッ、辞めて!!　放してよ!!」

「ククッ、良いケツてんじゃねェかって痛だだだッ!!!?」

マナを抱き締め、舐め回すように弄る月影の腕が、亨によって彼の背中へと捻り上げられる。

「痛ェっつぅの!!　くッ!!」

「さいじょおっ!!」

腕を振り解いた月影は、メンバー等から少し離れて、自分を痛めつけた亨を睨みつけた。

「……月影、お前……マナに何してくれてんだ……！！」

「ククッ、西条亨か……そう熱くなんなよ？」

その亨の声は恐ろしく低く、どす黒い程重たい念が込められていた。

今まで亨のそんな声や表情を見たことがない拓夜に成瀬、そして葉月は、思わず亨から目を離せず、動く事もできなかった。

「どうだマナちゃん？　俺の女にならねぇか？　俺なら毎日、お前を楽しませてやれるぜ？」

「絶対に嫌ッ！！　私はさいじょおじゃなきゃ嫌だもん！！」

亨の後ろに隠れながら、マナは拒絶の言葉を出した。

しかし、月影はへこたれる素振りを見せず、今度は葉月に狙いを定

める。

「チッ、じゃあそこの茶髪の可愛い子ちゃんはどうだ？　俺の女になって、一緒にチームをやらねぇか？」

葉月が狙われた事に憤りを感じた白石は葉月の前に立ち、両手を広げて

「美少女は、誰にも渡さん！！」

しかし、肝心の葉月はマナと同じく、亨の背後に身を隠しながら

「誰がアンタなんかに！！」

「……」

結果、白石はただ一人だけ虚しく手を広げて立っているだけであった。

「あらら……じゃ、西条拓夜を捕まえてる、その黒髪ツインテールのおチビちゃん？　お前はどうだ？」

今度は葉月から成瀬に目をつける月影。

ここまで来ると、コイツはただナンパをしに来ただけみたいに思えてくる。

「お断りします！！」

ピシャリと言い切る成瀬。

目を付けた人物等すべてから拒絶された月影。

白石と結締、そして亨に拓夜の４人は、月影を取り囲むように立ち並ぶ。

「ふぅん……覚悟は良いか、月影？」

「今更謝っても、もう収拾はつかないぜぃ？」

「アンタみたいな最低なヤツ、俺は絶対に許さない！！　俺は絶対に、アンタ達のチームには入らない！！」

「そう言う事だ、月影。諦めるんだな……！！」

「ちょいちょい待てや、ＯＣＧ研究会の諸君？」

月影は囲まれながらも動じる様子は見せず、その態度を崩すことなく口を開く。

「ヤッパこのやり方にゃ無理があるかァ……。あ、ちょいちょい待てって？　そんな拳を振り翳さなくても、俺たちデュエリストにゃ、デュエリストのやり方ってのがアンだろ？」

「デュエリストの……やり方……？」

月影の発言に、思わず拓夜は尋ねてしまった。

「お、食いついて来たなァ、西条拓夜？　俺たちはデュエリストだろ？　だったら、デュエルでケリを付けねぇか？」

※

夕方

ＯＣＧ研究会兼、西条亨宅ではメンバー全員が集合し、ミーティングを行っていた。

７条の個室に７人の人間が入ると、異様に部屋が狭く感じるのは気のせいではない。

「なぁ、何で俺の部屋が事務所扱いなんだよ？」

「西条ちゃん、今はそんな事を話している場合じゃないぜぃ？」

亨の愚痴にも似た質問を結締は普通に流した。

「とりあえず今は、来週の土曜日にチーム【フィアーズ】と対戦するメンバーを選出しないと」

葉月の言葉にメンバー全員の表情が引き締まる。

チーム【フィアーズ】とのデュエル。

なぜそうなったのか？

フィアーズのリーダー、月影陽一が提案したデュエル。

その内容としては、ＯＣＧ研究会とフィアーズがデュエルをし、負けた方が勝ったチームの言うことを必ず聞く。という内容だった。

普通に考えればムチャクチャな内容である。

下手をすれば、もし負けてしまったら、ＯＣＧ研究会は消滅してしまうかもしれない。

普通ならば、そんなアンティルールのデュエルなど、確実な勝算がない限り受ける訳がない。

しかし、あの時のメンバー全員は、月影陽一からの挑発的な行動や言葉にかなり頭に血が登っていた為、二つ返事でそれを承諾してしまったのだ。

『俺たち【フィアーズ】が負けたら、お前等の言うことを絶対に聞いてやるよ。　だが、俺たちが勝った場合……西条拓夜を俺たちのチームに入れる。それだけじゃないぜェ、マナちゃんは俺の女になってもらうからなァ！！』

メンバー全員の脳裏に、月影が言い放った一言が蘇る。

経緯にやや後悔しながらも、メンバー全員はミーティングを再開した。

まずは葉月が、自分の知っているフィアーズに関する情報を報告する。

「フィアーズってチームは、あの月影ってヤツを含めて、たった３人しかいないの」

「たった……３人だけ！？」

拓夜は人数を聞き、つい驚いた声をあげる。

「少数精鋭チームって事よ。それについては、アタシ達が入る前のOCG研究会にも言える事だけどね？」

「少数精鋭……ですか。つまり今回、フィアーズとのデュエルに参加できる人数は、必然的に3名となってしまいますね？」

「そういう事になるわね。相手3人の内、一人のデュエルは皆も既に観てると思うケド……」

「……棗、絵里香だっけ？」

「そう、アンタとデュエルしたあの棗も、フィアーズの一人よ」

拓夜は以前、OCG研究会主催のデュエル大会で棗とデュエルし、それに勝利した。

しかし、あの時に勝てたからと言って、再び勝てるとは限らない。

「……気を引き締めてかなきゃな……！！」

「たくやっ！！　その通りなんだよ！！」

拓夜の呟きに鬼気迫る表情で立ち上がるマナ。

「もし負けちゃったら私もたくやも、あの変態のものにされちゃうんだもん！！　負ける事は許されないんだよ！！」

「そうっすね、でもマナさん……俺は最初から、負けるつもりはないですよ？」

「そうです！私達は、絶対に負けません！！」

拓夜に続き、成瀬も意気込みを露わにする。

その様子を見ていた白石は

「ふぅん……ならば今回のデュエル、拓夜に成瀬……お前達が出場しろ！」

いきなりの白石からの言葉だったが、拓夜に成瀬の二人は、その言葉に即座に反応した。

「はい！！　やらせて貰います！！」

「私もです！！」

二人の意気込みに、他のメンバーは頷く事で承認した。

残るはあと一人のメンバーだ。

「ここは西条ちゃんが出場するっきゃないでしょう？」

結締は亨を見ながら話しだす。

「マナちゃんが狙われてんだ。ここは西条ちゃんが出て、一発デカいのをお見舞いしてやるのが流れってモンだぜぃ？」

「さいじょお……！」

「ふぅん……当然だな」

「そうっすね、亨さん！　一緒にやりましょう！！」

「マナさんを守る騎士（ナイト）様です！！」

「え……っ！？」

結締の提案に、マナだけでなく、白石や拓夜、成瀬もが賛成する。

（マナさんを守る……騎士……）

しかし、それを聞いた葉月は、胸の奥が締め付けられるような痛みを感じながら、黙っていた。

「……なら、やらせて貰うぜ？　拓夜くん、それに成瀬さん！！
絶対に勝つぞ！！」

「「はいっ！！」」

出場メンバーが決定した。

残りのメンバーが応援する中、葉月だけはその心境が複雑だった。

※

夕方……。

北区の地下街にあるカードショップのドアが開く。

そこに姿を現したのは、チーム【フィアーズ】のリーダー、月影陽一だ。

「お～～ッス、って臭ッ！？　滅茶苦茶タバコ臭ッ！！」

店内に入った瞬間、月影の視界はニコチンのスモークに覆われる。

思わず月影は一歩二歩と後退り、

「こりゃァ無理だ……帰るか……」

きびすを返して、その場から離れようとした。

店内で棗絵里香と乙女の激しいリアルファイトを繰り広げていた如月結衣は、いきなり来て帰ろうとする月影を見つけ、

「陽一サマッ！！　お待ち下さいましッ！！」

と叫びながら、光の速さで月影に飛びついた。

「陽一サマ、何故に来て早々と帰られてしまうんですの？　ハッ！？　もしや、あの初心者に負けたヘボが目に入ったからですのね！？」

「目に入ったのは、ニコチンだっつぅの……」

如月は月影の腰に、ガッシリと手を回してホールドしている為、月影はその場から動く事ができなかった。

如月は月影に引っ付くと、接着剤でも付いているのかと疑いたくなる程に離れようとしない。

したがらない。

昔からこの調子なので、何をやっても無駄だと悟った月影は、そのまま如月と近くの椅子に腰を下ろした。

「リーダー、一体どこに行ってきたの？」

如月とリアルファイトを展開していた棗は、着崩れた服を簡単に整えながら月影に尋ねる。

「アァ……」

月影は大股を開き、ぐったりと背もたれに掛かりながら口元をニヤリと吊り上げた。

「例の西条拓夜と会ってきた。アァ……ついでにＯＣＧ研究会のマナちゃんにもなァ」

「んマッ!?　陽一サマッ!!　私という伴侶が御座いますのに、どうしてあんなボインなんかに……!!」

「いつリーダーがアンタの伴侶になってんのよ……?」

如月からの発言を右→左へと聞き流しながら、月影は話を続けた。

「西条拓夜はもう既にＯＣＧ研究会のヤツらに捕られていた……コイツは予想外だったがな……!!」

「でも……」

「だからと言って、それだけで何もせずに帰って来られる陽一サマではないですわよね?」

棗は如月の反対側に座り、大股を開きながら座る月影に寄り添うように腰を下ろす。

そんな棗に対抗しようと如月は更に月影にベッタリと密着し、月影は両サイドの華の肩をを抱え、自分に引き寄せる。

「ククッ、アァ……そうだ。この俺がなァんもせずに、ただ帰る訳ァねェだろ……！！」

月影の口元に凶悪な笑みが浮かび上がる。

「デュエルだ……！！　ＯＣＧ研究会とのデュエルで西条拓夜を奪い、マナを俺の女にする！！　ククッ、略奪、強奪……楽しみだなァ……！！」

「……分かった」

「あのボインを引き込む事には賛成しかねますが……陽一サマの為なら……！！」

北区の地下街、そのとある一角のカードショップにて、月影陽一の高らかな笑い声が響き渡っていた。

幻影の一撃　（前書き）

仕事の合間を縫ってちょくちょく書いていたら、文章表現が結構グダグダに・・・

読みにくかったらスイマセン

幻影の一撃

※

東区の河川敷にて、ＯＣＧ研究会のメンバーとチーム【フィアーズ】のメンバーが向かい合っていた。

時刻は夕方。

夕焼け空の下、彼ら腕にはそれぞれにデッキがセットされた決闘盤が装着されている。

チーム【フィアーズ】のリーダー、月影陽一は一歩前へ踏み出し、ＯＣＧ研究会の西条拓夜とマナを見ながら

「ククッ……。よく逃げずに来たなァ、二人とも……！！」

「逃げる訳がない……！！」

月影に言われて拓夜は、言い返す。

「自分の未来が掛かっているんだ。ここで逃げたら、俺は一生の負け犬だ。だから戦う……俺は自分で、自分の未来を掴み取るんだ！！」

「…拓夜さん……」

拓夜の言葉にＯＣＧ研究会のメンバーは皆、頼もしい視線を拓夜に向ける。

それを見た月影陽一は「チッ」と軽く舌打ちをした。

どうやら口を使っての揺さぶりは思ったより期待できそうにない。

今のＯＣＧ研究会は強固なる意志の塊とも言えるだろう。

「チーム【フィアーズ】。俺達の準備はいつでもＯＫだぜ！ＯＣＧ研究会の一番手は、この俺だ！！　さぁ、まず最初に俺とデュエルをする相手は誰だ！？」

拓夜は闘志を宿した瞳で前へと進み出る。

そんな拓夜を見て、チーム【フィアーズ】のリーダーである月影は、「ククッ」と軽い笑みを浮かべながら

「棗ェ！！」

呼ばれた棗絵里香は前に進み、拓夜の正面に対峙する。

「……棗…絵里香……アンタが俺の相手か……！？」

「そう……今回は絶対に負けない。西条拓夜、覚悟しなさい……！！」

第一戦を飾るデュエリストが決定した。

西条拓夜　対　棗絵里香

このデュエルは棗にとって、拓夜へのリベンジが目的だった。

棗自身、拓夜を自分達のチームに迎える事については、そんなに抵抗は無かったが、心残りはあった。

それがリベンジ。

二人は決闘盤を構え、

「覚悟……か。上等じゃねぇか！棗さん、悪いが返り討ちにさせてもらうぜ！」

「……絶対に倒す……！！」

一触即発状態の二人を置いて、両陣営の残りメンバー等はそれぞれ距離をとり、二人のデュエルを見守る事になった。

拓夜に棗は決闘盤に付いている機能、オートシャッフルでデッキを混ぜ、手札を5枚揃える。

互いの視線が交錯した瞬間、それが合図となり二人のデュエルが開始された。

「「デュエル！！」」

※

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／　８０００

【後攻】棗絵里香
ＬＰ／　８０００

「先攻は頂いた！俺のターン！」

先攻を奪取した拓夜はデッキからカードをドローし、手札に加える。

「俺はモンスター1体をセットし、ターン終了だ！」

拓夜のターンはエンド宣言をし、自分の手札を確認する。

（今フィールドにセットしたモンスターは、『墓守の偵察者』……その守備力は２０００と高く、更に自身のリバース効果で、デッキから新たな【墓守】を特殊召喚できる、優秀な壁モンスターだ！）

【墓守の偵察者】
星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１２００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
リバース：自分のデッキから攻撃力１５００以下の「墓守」という名のついたモンスターカード１枚を特殊召喚する。

（コイツが棗さんの攻撃でリバースし、新たな偵察者を特殊召喚したら、手札からチューナーの『深海のディーヴァ』を召喚し、デッキからもう１体のディーヴァを特殊召喚！　一気に２体のシンクロ召喚だぜ！！）

【深海のディーヴァ】
星２／水属性／海竜族
ＡＴＫ　２００
ＤＥＦ　４００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分のデッキからレベル３以下の海竜族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

（さぁ、掛かって来い！！）

拓夜は意気揚々と棗の出方を窺う。

そして迎えた棗のターン、彼女が繰り出した戦術とは……。

「私のターン、ドロー」

シュバッ！！

鮮やかでキレのあるドローを魅せる棗。

棗は6枚の手札の中から1枚のカードを掴み取り

「フィールド魔法『竜の渓谷』を発動」

【竜の渓谷】
［フィールド魔法］
1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で以下の効果から1つを選択して発動する事ができる。
●自分のデッキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。
●自分のデッキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。

棗の使用したフィールド魔法のテキストを決闘盤がスキャンし、ソリッドヴィジョンが作動する。

拓夜に棗の二人だけでなく、ＯＣＧ研究会のメンバーやチームフィアーズのメンバー等の周りの風景が、夕日色に染まる空の渓谷へと変化した。

「竜の……渓谷……？」

「このカード効果により私は手札を1枚、『ドラグニティ－ファランクス』を捨て……デッキからレベル4以下の【ドラグニティ】……『ドラグニティ－ドゥクス』を手札に加える」

【ドラグニティ－ファランクス】
星２／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１１００
［チューナー・効果］
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

【ドラグニティ－ドゥクス】
星４／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１５００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたカードの数×３００ポイントアップする。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

棗は『竜の渓谷』の効果で手札からファランクスを捨て、デッキか

らドゥクスを回収した。
更に棗は手札に手を伸ばし……

シュバッ！！

「チューナーモンスター『ドラグニティ－ブランディストック』を召喚」

【ドラグニティ－ブランディストック】
星１／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　６００
ＤＥＦ　４００
［チューナー・効果］
このカードがカードの効果によって装備カード扱いとして装備されている場合、装備モンスターは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。

棗のフィールドに小型のドラゴンが召喚される。

（手札に加えたドゥクスを召喚しないだと……？）

不思議に思う拓夜だったが、棗は構わずにプレイを続ける。

「私はフィールドのブランディストックを墓地へ送り……『シュバッ！！』手札から『ドラグニティアームズ－ミスティル』を特殊召喚！」

【ドラグニティアームズ－ミスティル】
星６／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２１００
ＤＥＦ　１５００
［効果］
このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を墓地へ送り、手札から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。

棗のフィールドに黄色い甲冑のような鱗の竜戦士が召喚される。

「ミスティルの効果発動、特殊召喚に成功した時、墓地の【ドラグニティ】のドラゴン族モンスター1体を装備する……私は墓地の『ドラグニティ－ブランディストック』を装備！」

【ドラグニティアームズ－ミスティル】
ＡＴＫ　２１００
ＤＥＦ　１５００
（『ドラグニティ－ブランディストック』装備）

ミスティルにブランディストックの力が宿る。

棗はバトルフェイズへと突入した。

「バトルフェイズよ！ミスティルで、貴方のセットモンスターに攻撃！」

ミスティルの攻撃により、拓夜のセットモンスター『墓守の偵察者』は破壊された。

「ぐっ！？　偵察者のリバース効果発動だ！！　デッキからもう１体の『墓守の偵察者』を守備表示で特殊召喚！！」

拓夜のフィールドに再び偵察者が現れる。

（いきなり攻撃力２１００には驚いたが、まだ俺のフィールドには偵察者が残っている……！！　次のターン、手札のディーヴァと偵察者で、シンクロ召喚だ！！）

拓夜が戦略を練る中、棗は更にバトルを続行していく。

「……西条拓夜、貴方……何を安心しているの？」

「ッ！？」

「まだ私のバトルフェイズ中よ？　『ドラグニティ－ブランディス

トック』を装備したモンスターは、2回攻撃をする事ができるのよ。
貴方、知らなかった？」

「なん……だと……ッ！？」

拓夜の驚愕の表情とは逆に、棗はうっすらと口元に笑みを浮かべながら第二の攻撃宣言を行った。

「ミスティル、もう一度……偵察者に攻撃！」

シュバッ！！

ミスティルの手に持つ剣が、拓夜の偵察者を切り刻む。

結果、拓夜のフィールドには何も居なくなってしまった。

「私はこのまま、ターンエンドよ……！！」

棗のターンが終了し、拓夜のターンに移行する。

現在、拓夜のフィールドにカードは1枚もなく、棗のフィールドには2回攻撃が可能な『ドラグニティアームズ－ミスティル』が立ちはだかる。

「ぐっ……俺のターン！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００

【棗絵里香】
ＬＰ／８０００

拓夜はカードをドローし、手札を確認する。

※現在の拓夜の手札
・【深海のディーヴァ】
・【おろかな埋葬】
・【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】

・【融合】
・【ワン・フォー・ワン】
・【ダンディライオン】

（『おろかな埋葬』を引いたか……これなら墓地に『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を送って、シンクロ召喚に繋げられる……ん？）

拓夜は試行錯誤する中、もう一つの戦術を見いだした。

（あれ……？よく見たらこの手札……シンクロだけじゃない、まだ他にも色んな可能性があるじゃねぇか！？）

気付くと何だかとてもワクワクしてくる。

棗のモンスターには驚かされたが、こうして見ると何だかちっとも怖くない。

拓夜は可能性を秘めた手札から、その一手を切り出した。

「いくぜ！　手札の魔法カード『おろかな埋葬』を発動！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター１体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「この効果で俺は、デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を墓地へ送る！　そして墓地に送られたディアボリックガイのモンスター効果を発動！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地のディアボリックガイを除外し、デッキからもう1体のディアボリックガイを特殊召喚！更に、チューナーモンスター『深海のディーヴァ』を召喚！」

拓夜のフィールドにディアボリックガイとディーヴァが並ぶ。

「ディーヴァの効果発動！　コイツが召喚に成功した時、デッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚する！　俺はデッキから、もう1体のディーヴァを特殊召喚！！」

更にディーヴァが増え、拓夜のフィールドには一気にモンスターが3体並んだ。

「いくぜ！レベル6『D－HERO　ディアボリックガイ』に、レベル2『深海のディーヴァ』をチューニング！！」

拓夜のそれぞれのモンスターが星となり、光の柱に昇華する。

「屈強なる戦士の魂よ、団結する思いを、更なる高みに昇華せよ！！　シンクロ召喚、燃えたぎれ『ギガンティック・ファイター』！！」

【ギカンティック・ファイター】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　１０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードの攻撃力は墓地に存在する戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする。このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター１体を選択し自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

拓夜のフィールドに巨大な戦士が参上した。

「更に手札の魔法カードを発動！『融合』！！」

【融合】
「魔法カード」
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「『融合』……！？」

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』と、フィールドの水属性モンスター『深海のディーヴァ』を融合！！」

拓夜のそれぞれのモンスターが一つになり、新たなモンスターが誕生する。

「来い！！　氷結のヒーロー！！　アブソルートＺｅｒｏ！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】
星８／水属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［融合・効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「『ギカンティック・ファイター』は、墓地の戦士族モンスター１体につき、攻撃力を１００ポイントアップする！」

【ギカンティック・ファイター】
ＡＴＫ　２８００　↓　３０００
ＤＥＦ　１０００

拓夜のフィールドに並ぶ強力モンスター達。
高攻撃力の『ギカンティック・ファイター』。

そして、反則クラスの破壊能力を秘めた『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』。

（……つ、強い……！！）

と、棗は感じた。

前回、デュエルした時に、棗は拓夜を初心者だと舐めきった態度でデュエルをし、敗北した。

そして今……。

前回の時に比べ、ものの数ヶ月で拓夜は成長した。

棗は思う。

何が拓夜を此処まで強くしたのか？

そんな拓夜の目は闘志に満ち溢れていた。

熱く、燃えたぎるような視線が交差し、拓夜はバトルフェイズへと突入する。

「いくぜ……棗さん!!　『ギカンティック・ファイター』で、『ドラグニティアームズ－ミスティル』に攻撃!!」

ズゴゥッ!!

棗のモンスターは破壊され、棗はその超過ダメージを受けた。

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【棗絵里香】
ＬＰ／　８０００　→　７１００

「くッ!?　……やられた!?」

「まだだぜ?　いけッ!アブソルートＺｅｒｏで、ダイレクトアタック!!」

更に追撃として、アブソルートＺｅｒｏの一撃が棗を襲う。

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【棗絵里香】
ＬＰ／　７１００　→　４６００

「くッ……！！」

大幅にライフ差が開き、拓夜は得意になって喜びを露わにする。

「へへ……。どうだ棗さん！？　なかなか効いただろ！？　俺はこのまま、ターンを終了だ！！」

ターンを終了した拓夜。

一気に開いたライフ差、そしてボードアドバンテージに、ＯＣＧ研

究会のメンバーはそれぞれに盛り上がりを見せる。

「凄いです！拓夜さん！」

「ふぅん……やるな、拓夜め……」

「あぁ、戦闘破壊耐性を持つ『ギカンティック・ファイター』。そして最悪破壊効果のチートＺｅｒｏ様……並みなら、相手にしたくないフィールドだぜぃ……！！」

盛り上がりを見せるＯＣＧ研究会のメンバー。

しかしそれとは逆に、チーム【フィアーズ】のメンバーである如月結衣は、どこか苛立たしげに地団太を踏みながら

「チッ、何をやっていますの棗さん！？　そんな初心者に、先制ダメージを受けるなんて……！！」

「ククッ、まァカリカリしなさんな……如月」

金切り声をあげる如月の隣で、フィアーズのリーダーである月影陽

一は不敵な笑みを浮かべながら話す。

「棗のヤツが先制ダメージをもらうのは仕方ねェよ……西条拓夜はもう初心者と呼べる範疇を超えている……それはデュエルをしている棗自身が、よォく身に染みてるみたいだぜェ？　棗の表情を見てみなァ……」

「？」

月影に言われて、如月はデュエルを行う棗の顔を確認した。

「……笑って……ますの……？」

棗は自分では気付いていなかった。

自身の口元が、うっすらとだが笑みを浮かべている事に……。

「珍しい事もあるんですのね？　デュエル中は淡白で能面のように

無表情だった棗さんが、まさか笑うなんて……」

如月は本当に珍しいモノを見るかのような目で、しばらくの間、棗の表情を窺った。

※

「……私のターン、ドロー！」

棗のターンに移行し、デュエルが再開される。

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【棗絵里香】
ＬＰ／　４６００

半分近く開いたライフ差。

そして拓夜のフィールドに並ぶ強力モンスター達。

（ギカンティックにアブソルートＺｅｒｏ……確かに厄介な相手だわ。……でも、このカードなら……！！）

棗は早速、手札のカードに手を伸ばし、プレイを開始する。

「手札の魔法カード『ブラックホール』を発動！」

【ブラックホール】
［魔法カード］
フィールド上に存在する全てのモンスターを破壊する。

「『ブラックホール』だとッ！？」

「この効果で、フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

棗の発動した『ブラックホール』が見事に炸裂し、拓夜のフィールドはがら空きになってしまった。

「これが……元・禁止カードの力……ッ！？」

冷や汗を一筋垂らしながら、拓夜は棗の出方を窺う。

そして棗は

「フィールド魔法『竜の渓谷』の効果発動！　手札の『ドラグニティ－アキュリス』を捨て、デッキからレベル３の『ドラグニティ－レギオン』を手札に加える！」

棗は更にデッキから【ドラグニティ】のカードをサーチする。

そして

シュバッ！！

「手札の『ドラグニティ－ドゥクス』を召喚！　その効果を発動！」

棗のフィールドに彼女の主力モンスター『ドラグニティ－ドゥクス』が召喚された。

「ドゥクスが召喚に成功した時、墓地からレベル３以下のドラゴン族の【ドラグニティ】を装備する！　墓地から『ドラグニティ－ブランディストック』を装備する！」

【ドラグニティ－ドゥクス】
ＡＴＫ　１５００　↓　１９００
ＤＥＦ　１０００
（『ドラグニティ－ブランディストック』装備）

ドゥクスにブランディストックの力が宿り、更に自身の効果も相ま

って、攻撃力が上昇する。

「ドゥクスは場の【ドラグニティ】の数だけ、攻撃力を２００ポイントアップする。更に私は手札から、永続魔法『竜繰術』を発動！」

【竜繰術】
［永続魔法］
「ドラグニティ」と名のついたモンスターを装備した、自分フィールド上のに存在するモンスターの攻撃力は５００ポイントアップする。また、１ターンに１度、手札から「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を装備カード扱いとして自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体に装備する事ができる。

「このカード効果で、私のフィールドに存在する【ドラグニティ】を装備したモンスターの攻撃力を、更に５００ポイントアップする！」

【ドラグニティ－ドゥクス】

ＡＴＫ　１５００　→　２４００
ＤＥＦ　１０００
（『ドラグニティ－ブランディストック』装備＆『竜繰術』効果）

更なる力を得たドゥクス。
その姿に拓夜は思わず言葉を無くす。

「……ぁ……ぅ……ッ！？」

「行くわよ、西条拓夜……受けた痛みは、倍返し！！」

棗は現在持てる全ての力を込めて、怒涛のバトルフェイズへ突入する。

「ドゥクス！！　ダイレクトアタックよ！！」

ドゥクスの攻撃力２４００が拓夜に炸裂した。

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００　↓　５６００

【棗絵里香】
ＬＰ／　４６００

「ぐぁッ！？」

「まだよ？　ブランディストックを装備したドゥクスは、もう一度だけ攻撃する事ができる！！　切り刻め！！」

シュバッ！！

ドゥクスの鋭い一撃が、拓夜のライフを更に奪う。

【西条拓夜】
ＬＰ／　５６００　↓　３２００

【棗絵里香】

ＬＰ／　４６００

「ぐぅッ！？」

「拓夜さんッ！？」

一気にライフを削られた拓夜。

思わず声をあげる成瀬だが、拓夜は鋭い視線で棗のフィールドを見つめた。

（強い……ハンパねぇ位強い……！！　前に勝てたのって、よほど奇跡だったんか？）

棗のフィールドに立ちはだかる『ドラグニティ－ドゥクス』。

その攻撃力は２４００。

しかも脅威の２回攻撃。

生半可な壁モンスターでは、文字通り壁にすらならないだろう。

不安が拓夜の中に集う中、棗は

「私はターンエンド」

ターンを終了した棗。

拓夜のターンに移行したが、フィールドの状況は逆転してしまっている。

拓夜のフィールドはがら空き状態。

更に棗のフィールドには、攻撃力が２４００にまで上昇した『ドラグニティ－ドゥクス』が。

「……拓夜さん……！！」

成瀬は拓夜を心配する気持ちから、両手を握り合わせながら彼の名を呟いた。

「……拓夜くんが心配か？　成瀬さん……」

成瀬の隣に立つ亨が話しかける。

成瀬は顔を俯かせながら、握り合わせる手を、更にギュッと握り締める。

「……はい。　拓夜さんの手札は2枚……それにフィールドには、モンスターもなければ魔法・罠カードもありません……逆転できる可能性が、余りに低すぎます……！！」

成瀬は冷静に状況を見つめながら言葉を発した。

拓夜のフィールドには何もなく、手札も十分と言える枚数ではない。

それに対し、棗のフィールドには高攻撃力の『ドラグニティ―ドゥクス』。

更にフィールド魔法『竜の渓谷』の効果により、手札の不要なカードは必要な【ドラグニティ】に交換できてしまう。

ライフアドバンテージも、ボードアドバンテージも、現在拓夜は全てにおいて不利な状況だった。

しかし……

「フッ、成瀬さん……ソイツはどうかな？」

「……え？」

亨の発言に、成瀬はキョトンとしながら顔をあげる。

「拓夜くんの彼女である君が諦めてしまってどうする？　拓夜くんを見てみるんだ」

亨に促されるように、成瀬は拓夜の方に顔を向けた。

「……え？　……拓夜さん……！！」

拓夜の表情は笑顔だった。

どこかぎこちない笑顔ではなく、心から楽しむかのような笑顔。

「君が思ってる程、拓夜くんはまだ諦めてなんかいないって事だ…
…もしかしたら、今では自分が賭けの対象にされている事すら忘れ
ているかもな？」

「……亨さん……」

「　さぁ、成瀬さん！拓夜くんを一緒に応援しようぜ！！」

「……はい、そうですね！！　拓夜さん、頑張って下さーーーい！
！」

成瀬の声援が響き渡る。

拓夜は彼女の声を聞き、デッキトップに指を添える。

「花穂……あぁ！！　やってやるぜェエ！！　俺のターーーン！！」

拓夜は愛する者からの声援を、更なる自身の力に変えて……。

デッキから、希望という名のカードを引いた。

※

デッキからカードをドローした拓夜。

その手札は……。

・【ダンディライオン】
・【ワン・フォー・ワン】
・【貪欲な壺】

拓夜はドローしたカードを確認するや、巻き返しのプレイを開始する。

「行くぜ、棗さん！　俺の力……魅せてやるよ！！」

「ッ！？」

「手札から、『貪欲な壺』を発動！！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「墓地のモンスターを5枚デッキに戻し……」

※【デッキに戻したカード】
？【E・HERO　アブソルートZero】
？【ギガンティック・ファイター】
？？【深海のディーヴァ】
？【D－HERO　ドグマガイ】

「そしてデッキから、カードを2枚ドロー！！」

デッキからカードをドローした拓夜。

更に……

（【融合】に、【E・HERO　エアーマン】か……！！）

「更に手札の魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！！」

【ワン・フォー・ワン】

［魔法カード］

手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「手札のモンスターカード『ダンディライオン』を捨て、デッキからレベル1モンスター『サイバー・ヴァリー』を特殊召喚！！」

【ダンディライオン】

星３／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚の為のリリースはできない。

【サイバー・ヴァリー】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［効果］
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを１枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。
●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。
●このカードと自分の手札１枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード１をデッキの一番上に置く。

「墓地に送られた『ダンディライオン』の効果だ！　『綿毛トークン』２体を特殊召喚！」

拓夜のフィールドに、計3体のモンスターが並ぶ。

「そしてヴァリーの第二の効果を発動！　自分フィールド上の『綿毛トークン』１体と、ヴァリー自身をゲームから除外し、デッキからカードを2枚ドロー！！」

更に手札を増強する拓夜。

現在、拓夜のフィールドには『綿毛トークン』が1体守備表示で存在しているだけだったが、成瀬は応援していた声がいつの間にか止まってしまっていた。

成瀬だけではない。

ＯＣＧ研究会のメンバーも。

デュエルの相手である棗や、チーム【フィアーズ】のメンバーも。

皆が皆、拓夜の繰り出すプレイングに魅入っていた。

「……あれが拓夜くんの凄い所だ」

唖然とする成瀬の隣で亨は話し出す。

「追い込まれてからの凄まじいドロー加速に手札交換……しかもそれが、必ず次のプレイに繋がっている……！！　それこそが、拓夜くんの持つ、最強にして最大の武器！！」

思い出して欲しい。

前回の拓夜と結締とのデュエルを。

拓夜は迷いを吹っ切った瞬間、凄まじいまでの勢いでドロー加速し、『ミスト・ウォーム』をシンクロ召喚するまでに至った。

そして今回も……！！

「拓夜くんの想いに、デッキが答えてくれている……今の拓夜くんは、誰にも止められない！！」

拓夜はヴァリーの効果でドローしたカードを確認する。

（『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』に、『ハーフ・シャット』!?）

手は決まった。

拓夜は迷う事なく、今の自分が持てる最高のプレイを繰り出した。

「行くぜ!!　『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚!!　その効果を発動!!」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
星４／風属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から一つを選

択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

「デッキから【ＨＥＲＯ】と名のつくモンスター、『Ｄ－ＨＥＲＯ ドグマガイ』を手札に加える！！」

ドグマガイを手札に加えた拓夜。

そして、拓夜は手札から

「棗さん、コイツで決めるぜ！！　魔法カード『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクス

トラデッキから特殊召喚する。

「『融合』ッ！？」

棗の調べでは、拓夜の融合モンスターでの主力カードは、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』である事は分かっている。

もしかしたら、先ほどのドロー加速で手札が揃ったのだろうか？

【西条拓夜】
ＬＰ／３２００

【棗絵里香】
ＬＰ／４６００

棗は計算する。

仮にもし、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が召喚され、エアーマンの２体と戦闘を行ったにしても、４６００のライフは削りきる事はできない。

“これで決める”といった言葉から一瞬、自分の負けを予測してしまったが、よくよく考えれば大した事はない。

しかし……

「フィールドのエアーマン！そして手札からは、ダイヤモンドガイとドグマガイの3体を融合し……！！」

「……なに……ッ！？」

自分の予測が外れた事に躊躇う棗。

拓夜の融合素材を聞き、デュエルを観戦していた結締は思わず「まさかッ！？」と声をあげる。

「融合召喚！！　これが、新たな俺の切り札だ！！　いでよ、『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリティニー』！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリティニー】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター×３
このカードが融合召喚に成功したターン、このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。融合召喚に成功したこのカードは、１度のバトルフェイズ中に３回攻撃する事ができる。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

拓夜のフィールドに結締から託されたカード。

『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリティニー』が召喚された。

紅く染まりあがる紅蓮のボディ。

その体に纏う凄まじいオーラ。

「なッ、一体何ですの!?　あのモンスターはッ!?」

「……トリティニー……だと?」

怪訝な顔でトリティニーを見つめるチーム【フィアーズ】。
拓夜は自身のプレイを続行する。

「トリティニーが融合召喚に成功したターン、コイツの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる！！」

「なッ！？」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリティニー】
ＡＴＫ　２５００　→　５０００
ＤＥＦ　２０００

「こ、攻撃力が……５０００！！！？」

「トリティニーは幻影のヒーロー、それ故、相手へのダイレクトアタックはできない……だが、１度のバトルフェイズ中に３回攻撃する事ができる！！」

「さッ！？　３回攻撃！？」

「今、棗さんのフィールドには、攻撃力２４００の『ドラグニティ－ドゥクス』のみ……このままじゃ１回の攻撃しかできない……だがな」

拓夜は残された最後の手札を翳し、希望の1枚を発動させた。

「このカードでッ！！　速攻魔法『ハーフ・シャット』を発動！！」

【ハーフ・シャット】
［速攻魔法］
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。

「この効果を『ドラグニティ－ドゥクス』に発動させる！！　『ハーフ・シャット』の効果を受けたモンスターは、このターンのエンドフェイズ時まで、攻撃力が半分になり、戦闘では破壊されなくなる！！」

【ドラグニティ－ドゥクス】

ＡＴＫ　１９００　↓　２４００　↓　１２００
ＤＥＦ　１０００

『ハーフ・シャット』の効果を受け、棗の『ドラグニティ・ドゥクス』は攻撃力が減少した。

しかしそれ以上に、棗の顔色がグングンと青ざめいくのが分かる。

（嘘……でしょ……！？）

「バトルフェイズに入る！！　トリティニーで、ドゥクスに攻撃！！」

ズガガガァッ！！

【西条拓夜】
ＬＰ／　３２００

【棗絵里香】
ＬＰ／　４６００　↓　８００

戦闘の超過ダメージを受ける棗。

棗は信じられなかった。

信じたくなかった。

今回の拓夜とのデュエルは、自ら進んで挑んでいった。

それは前回のデュエルのリベンジが込められていた。

前回のデュエルの敗因は、予測計算ではまだライフは残っているという安堵感や油断から敗北した。

そして今回も……。

「まだトリティニーの攻撃は残っている!!　コイツでトドメだァア!!」

拓夜の攻撃宣言が高らかに響き渡る。

トリティニーの拳がドゥクスに炸裂し、そこから生じる凄まじい戦闘の余波をその身に受けて。

「……また……私の……」

棗絵里香は、その膝を地面に付けた。

【西条拓夜】
ＬＰ／３２００

【棗絵里香】
ＬＰ／８００→０

※

「やったな！！　拓夜ちゃん！！」

「さすが、拓夜さんです！！」

「ふぅん……見事だったぞ、拓夜！！」

「やるじゃない、拓夜！！」

「おめでとう、たくや！！」

「よくやったな、拓夜くん！！」

ＯＣＧ研究会のメンバーがそれぞれに拓夜を出迎える。

初戦を貴重な白星で飾った拓夜。

全三戦の内、勝ち点１を取ったＯＣＧ研究会は、チーム【フィアーズ】との勝負に王手を掛けたのだ。

「ちょッ！？　みんな……って痛い！！　そんなもみくちゃにしたらマジで痛いって！！」

痛いと言いながらも笑顔の拓夜。

それだけ、チームの勝利に貢献できた事への喜びが大きいのだ。

拓夜は結締の前に立ち、一枚のカードを取り出した。

「結締さん、このカード……『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリティニー』。こ

のカードのおかげで、勝つ事ができました！」

拓夜が取り出したトリティニーのカード。

このカードは前回、拓夜が結締から託されたカードだ。

『コイツも【融合】の一つの可能性だ……使いこなしてみな？』

結締の脳裏にあの時の風景が蘇る。

「ああ……最高に決まってたぜぃ、拓夜ちゃん！こりゃあ同じ【HERO】使いとして、最大のライバルを作っちまったかな？」

「ッ！？」結締が言うと、拓夜はピタリと体の動きを止めた。

そして……。

ポタッ……ポタッ……

「お、おい……拓夜ちゃん!?　どうしたんよ急に!?」

拓夜の様子に慌てふためく結締。

拓夜は思わず俯き、声を震わせながら

「いや……だって、超嬉しいんっすよ……だって、結締さん……」

「な、泣くなよ拓夜ちゃん!?」

「結締さん……俺の事、ライバルだって……ＯＣＧ研究会に入ってから、俺……同じ【ＨＥＲＯ】使いの結締さんに……憧れてて……目標にして、……それが何か、やっと認めて貰えた気がして……！！」

「……拓夜さん……」

「……拓夜ちゃん」

込み上げる熱い想いが涙となって現れる。

種類は違えど、同じ【ＨＥＲＯ】使いの先輩にして、最強の【ＨＥＲＯ】使いと呼ばれる結締。

その結締から、最大のライバル宣言をされたのだ。

彼らを目標とし、走り続けてきた拓夜にとって、結締からのこの言葉は、何物にも代え難い、最高の誉め言葉だった。

「あ～～、結締くん泣かせた～～！」

「ちょ、マナちゃん違うって！！……あ～～拓夜！！」

拓夜の肩に手を置き、結締は自身の考えつく言葉を口にしてみた。

「まだこれからだぜぃ？今ようやく、俺と同じ位置に並んだんだ…拓夜ちゃん、一緒に更に高みを目指して、頑張ろうぜぃ！！」

「結締さん……はい！！　俺も負けませんよ！！」

更なる自信を身に付けた拓夜。

その傍らでは成瀬が暖かい目で、拓夜の姿を見つめていた。

※

「よォ、棗ェ……またまた豪快に負けちまったなァ。ちょいと惜しかったなァ？」

「すいません……リーダー」

拓夜とのデュエルに敗れた棗を出迎える月影。

攻める訳でもなく、貶す訳でもなく、月影はありのままの棗を受け入れる。

そんな月影の隣からヒョコッと顔を覗かせるのは如月だ。

「でも結局、負けは負けなんですのよ？　これでわたくし達チーム【フィアーズ】は、残す所残り全部のデュエルに勝たなくならねば

なりませんから……」

月影とは違い如月は、棗に冷ややかな言葉を返す。

「うっさい、結衣は黙ってなさいよ……！！」

「まぁ！！まぁまぁまぁ……棗さん？そんな口を聞いても宜しいのでしょうか？」

「ッ！？」

「初戦を黒星で迎えた事は、わたくし達は残り全てのデュエルを勝たなければならなくなりましたわ。オマケにアチラさんは調子づいて勢いに乗って……」

「だから……それは悪かったって思ってるわよ」

「ま、別に棗さんが勝とうが負けようが、このわたくしと陽一サマが勝てば全て問題なしなんですけどね？」

「ぐ……ッ！！」

悔しさの余り奥歯を噛み締める棗。

そんな棗の脇をすり抜け、二番手となる如月は狡猾な笑みを浮かべていた。

幻影の一撃　（後書き）

さて、今回のデッキレシピは【ドラグニティ】です。

と、言いたい所ですが・・・

ぶっちゃけドラグニティは現在、販売されているストラクチャーデッキを3箱買えば、そこそこ戦える。

実際に今回使用したデッキもモデルはストラクチャーデッキだからね。

ハッキリ言って載せるまでも無い・・・

あ、作中で登場したブラホはストラクチャーの中に入ってないからね？

知ってますか、はい、スイマセン。

僕が作中でデュエルを書く時は、実際に登場人物等が使用するデッキを作って、カードをプレイさせながら作ります。

つまりはデッキ作りから始まるのです。

当然、その為にはカードが必要です。

【ドラグニティ―ファランクス】・・・

あれ？

僕、三枚持っていたのに、一枚しか見つからないよ？

あれ？

なんかスプレンディットヴィーナスも、三枚あったのに何故か二枚しかない？

あれぇえ！！？

うっわ、マジで凹むわぁあーーーーー！！？？

ですの！！　（前書き）

みつからない・・・

みつからない・・・

ファランクスがみつからない・・・

そしてヴィーナスもみつからない・・・

どこいったコンチクショォオオオ！！！

ですの！！

※

ＯＣＧ研究会とフィアーズ。

両者のチームの第二回戦が始まろうとしていた。

ＯＣＧ研究会からは成瀬花穂が、そしてフィアーズからは如月結衣が前へ進み出る。

「初めまして、わたくし、如月結衣と申しますの。以後お見知りおきを……」

短いスカートの裾を軽くつまみ上げて挨拶をする如月。

言葉だけなら上品にも聞こえるが、彼女から放たれる卑しい雰囲気が、それを打ち消している。

「成瀬花穂です。今回のデュエル、勝たせてもらいます！！」

意気込む成瀬。

それもその筈、今回のデュエルに成瀬が勝利すればその瞬間、ＯＣＧ研究会側の勝利が確定するのだ。

刃は敵の喉元に突きつけている状態。

この大事な一戦に勝利し、拓夜にマナを月影陽一の手から守り抜く。

そんな気合い十分の成瀬の発言を聞き、如月はクスクスと小刻みに笑う。

「成瀬さん？　余り調子に乗った発言は慎まれた方がよろしいかと……」

「っ？」

「“弱く”見えますわよ？」

「……なッ！？」

如月はそう言うと、成瀬から距離をとり、デュエル開始位置に立つ。

成瀬は込み上げる憤りを抑えながら、自分も所定の位置に着いて、決闘盤を構えた。

「陽一サマ……見ていて下さいまし！」

「絶対に負けません……！！」

瞬間、如月に成瀬の二人はデッキからカードを五枚引き抜き、同時に叫んだ。

「「デュエル　（ですの）！！」」

※

【先攻】如月結衣
ＬＰ／　８０００

【後攻】成瀬花穂
ＬＰ／　８０００

「わたくしの先攻ですの、ドロー！」

如月はデッキからカードをドローし手札を確認すると、その表情がニヤリと歪んだ笑みになる。

「わたくしはモンスターをセットし、リバースカードを1枚セット……そして」

次々にカードをセットする如月。

如月は手札から1枚のカードを取り出し、発動させた。

「魔法カード『光の護封剣』を発動しますわ！」

【光の護封剣】

［魔法カード］
相手フィールド上に存在するモンスターを全て表側表示にする。このカードは発動後、相手のターン数えて3ターンの間フィールド上に残り続ける。このカードがフィールド上に存在する限り、相手フィールド上に存在するモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

シュカカカッ！！

成瀬のフィールドに『光の護封剣』が突き刺さる。
これにより成瀬は3ターンの間、モンスターの攻撃宣言を封じられてしまった。

「このカード効果は言わなくても当然知っていらっしゃいますわよね？」

「3ターンの間、私の攻撃を封じるカード……」

成瀬の返事を聞き、如月は手札で口元を隠しながら

「私のターンは終了ですの」

如月のターンが終了し、成瀬のターンに移行する。

「私のターンです！」

デッキからカードをドローした成瀬は、ドローしたカードを早速発動させた。

「如月さんが何を企んでいるかは知りませんが、このカードで『光の護封剣』を破壊します！　手札から速攻魔法『サイクロン』を発動します！」

【サイクロン】
［速攻魔法］
フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

成瀬のフィールドに突き刺さる『光の護封剣』を『サイクロン』が破壊した。

「これで私は攻撃をする事ができます！」

「……フフフ」

口元を隠し、小さく笑う如月だったが、成瀬はその事に気付かない。

成瀬は早速、自分のプレイを開始していく。

「最初から飛ばしていきます！　私の墓地にモンスターが存在しない時、この子は手札から特殊召喚する事ができます！　お願い、『ガーディアン・エアトス』！！」

【ガーディアン・エアトス】
星８／風属性／天使族

ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを３体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

「初手に来ていたのか！花穂の『ガーディアン・エアトス』！！」

「流石、成瀬さんのフェイバリットカードね！頼もしいわ！」

デュエルを観戦する拓夜に葉月の二人は、成瀬のエアトスを見て盛り上がる。

「更に私は、手札から『アームズ・ホール』を発動します！」

【アームズ・ホール】

［魔法カード］
自分のデッキの一番上のカード１枚を墓地へ送って発動する。自分のデッキ・墓地から装備魔法カード１枚を手札に加える。このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

「デッキの一番上のカードを墓地へ送って……私はデッキから装備魔法『ビッグバン・シュート』を手札に加えます！」

成瀬のデッキから『ネクロ・ガードナー』が墓地へ落ち、デッキから『ビッグバン・シュート』のカードを手札に加えた。

「そして『ビッグバン・シュート』を、エアトスに装備します！」

【ビッグバン・シュート】
［装備魔法］
装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。このカードがフィールドから離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

『ビッグバン・シュート』を装備したエアトスは攻撃力が上昇し、貫通効果を得た。

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００　↓　２９００
ＤＥＦ　２０００
（『ビッグバン・シュート』装備）

「よし、これなら花穂のエアトスは守備表示モンスターを攻撃しても、相手にダメージを与えられる！！」

成瀬はメインフェイズを終了し、バトルフェイズへと突入した。

「行きます！エアトスで、如月さんの守備モンスターに攻撃です！フォビドゥン・ゴスペル！！」

エアトスの持つ剣から、凄まじい衝撃波が放たれる。
如月の守備モンスターはダメージステップに入り、裏側表示から表側表示になった。

「わたくしのモンスターは『マシュマロン』ですの。このカードは戦闘によっては破壊されない子なんですのよ？」

「でも、私のエアトスには『ビッグバン・シュート』が装備されています！その効果で、如月さんには戦闘ダメージを受けてもらいます！！」

【如月結衣】
ＬＰ／　８０００　→　５６００

【成瀬花穂】
ＬＰ／　８０００

「あら、やりますわね……！！」

先制ダメージを与えた成瀬。
しかし、如月も只では終わらない。
「しかし、わたくしの『マシュマロン』も、効果を発動致しますの！」

【マシュマロン】
星３／光属性／天使族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　５００
［効果］
裏側表示のこのカードを攻撃したモンスターのコントローラーは、ダメージ計算後に１０００ポイントダメージを受ける。このカードは戦闘によっては破壊されない。（ダメージ計算は適用する）

「裏側表示の『マシュマロン』を攻撃したプレイヤーに、１０００ポイントのダメージを与えますの。さぁ、食らいなさいな」

【如月結衣】

ＬＰ／　５６００

【成瀬花穂】
ＬＰ／　８０００　→　７０００

「くッ！？　でもダメージはたかだか１０００……痛くも痒くもないです！」

「フフフ……」

手札で口元を隠す如月に不安を抱きながら、成瀬はメインフェイズ２へと移行する。

「私はリバースカードを１枚セットして、ターン……「ならばその瞬間……このカードを発動させてもらいますの！」

成瀬のエンドフェイズ、如月は自分の場に伏せてあった１枚のカードを発動した。

「永続罠、『ウィジャ盤』を発動ですの！！」

【ウィジャ盤】
［永続罠］
相手ターン終了時に「E」「A」「T」「H」の順に「死のメッセージ」カードを手札またはデッキからフィールド上に出す。全てのカードが自分フィールド上に揃った時、勝利が決定する。途中1枚でもフィールドから離れると、これらのカードは全て墓地に送られる。

ドンッ！！

如月の背後にアルファベットが書かれた巨大な四角い石盤が出現する。

「『ウィジャ盤』ッ！？」

「そう……『ウィジャ盤』とはそもそも、霊魂と意志疎通をする為

の降霊術の道具ですの……。言わば西洋版のコックリさんと言った所でしょうか……」

「うぅ……」

如月が話していると、石盤のとある文字が光り、その文字が如月の頭上に浮かび上がる。

「先ずは【D】から……そして成瀬さん、貴女のエンドフェイズ時、次の文字が記されますの」

如月はデッキから次の文字カードを取り出し、フィールド上に出現させる。

ドンッ！！

「……今度は……【E】……？」

「そう……。【D】【E】【A】【T】【H】……成瀬さんのターンが終了する度に、これらの文字がフィールドに現れ、文字が全て揃った時……」

【D】【E】【A】【T】【H】

「……DEATH……!?」

「そう、つまりはDEATH（敗北）ですの!!」

※

「何だよ……あのカード!?　あんな勝利方法って……!!」

拓夜は如月のフィールドに浮かぶ【D】【E】の文字を見ながら驚愕を露わにする。

「あるんだよ、拓夜ちゃん……遊戯王カードってのは、ただ相手のライフを0にすりゃ勝ちって訳じゃねぇんだ」

結締は拓夜の隣に立ち、話を続ける。

「ありゃ特殊勝利型のデッキだな……あの如月の背後にある『ウィジャ盤』、もしくは『死のメッセージ』カードのどれか1枚でもフィールドから離さない限り、成瀬ちゃんは負ける……！！」

「そんなッ！？」

「しかしあの如月って子、言葉巧みに上手く『ウィジャ盤』を発動してきたわね……」

結締に変わり、今度は葉月が自分の意見を口にする。

「成瀬さんは『サイクロン』を『光の護封剣』に使わされたと言っても良いわね……。あのまま『光の護封剣』が無かったら、間違いなく『ウィジャ盤』は発動時に破壊されていたわ……！！」

「加えて『サイクロン』は今や準制限カード、デッキに2枚までだ……。成瀬ちゃんのデッキには、『サイクロン』は後1枚……引き当てれるか？」

険しい表情で成瀬を見守るＯＣＧ研究会のメンバー。

まさか相手チームに、特殊勝利型のデッキを使う者がいるとは思ってもみなかった。

「くッ！？　だったら、文字が揃う前に、如月って奴のライフを０にすれば……！！」

「ふぅん……そう簡単に行くまい」

拓夜の発言に今度は白石が答える。

「そんな事は如月の奴も、当然警戒している筈だ……。恐らく『光の護封剣』以外にも、成瀬の攻撃を封じるカードがデッキに多数投入されているだろう」

「ロックデッキ、って訳だぜぃ」

拓夜は背中に冷や汗が流れるのを感じながら、視線を成瀬に向ける。

きっと成瀬も、自分と同じ気持ちになっているだろう。

「花穂……！！」

拓夜は祈る気持ちで、成瀬を見つめていた。

「……さいじょお」

「ああ……」

マナは亨の腕にしがみつきながら、どこか怯えた声で亨に話す。

「あの『ウィジャ盤』が出てから、かほのデッキから聞こえるの…

…カード達の苦しむ声が……」

マナはこちら側の人間ではない。

ここは違う、デュエルモンスターの世界【精霊界】の住人だ。

恐らくカードを通して、成瀬のデッキのモンスター達の声を聞いたのだろう。

マナもどこか顔色が悪く、表情は青ざめていた。

「……今は、成瀬さんを信じるしかない」

亨は自分にしがみつくマナを支えながら、話を続ける。

「このデュエル……全ては成瀬さんのデッキを信じる気持ちに掛かっている……頑張れ、成瀬さん」

緊張感が包む中、成瀬と如月のデュエルは、更なる死闘を繰り広げていく。

ですの！！　（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

なかなか皆様の期待に沿えるような展開にできず、申し訳なく思っております。

文章力が乏しいです。はい・・・

さて、今回は成瀬と如月のデュエルですが、今回のデッキレシピは成瀬のデッキを掲載しようと思います。

【成瀬エアトス】４２枚

※モンスター１８枚

エアトス　３
異次元の生還者　３
異次元の女戦士　２
サイバー・ヴァリー　３
霞の谷のファルコン　３
A・ジェネクス・バードマン　３
ネクロ・ガードナー

※魔法１６枚

サイクロン　2
次元の裂け目　3
アームズ・ホール　3
ビッグバン・シュート　2
団結の力
魔導師の力
D・D・R　2
墓守の使い魔　2

※罠8枚

異次元からの帰還
奈落　2
幽閉　2
因果切断　2
大火葬

まだ僕自身がデッキ構築下手糞なんで、これ入れても意味ねぇだろ？ってのがあったら教えて欲しいです。

次元の裂け目を使いますが、あえて帝は入れません。

いれたら普通に次元帝だし、成瀬はエアトスを使ってナンボなんで。

下級アタッカーは霞の谷のファルコン。

相手モンスターにビッグバンを装備し、ファルコンの効果でビッグバンを手札に戻し、相手モンスターを異次元にシュートします。

そしてなぐる。

次元の裂け目と墓守の使い魔との共用で、相手の攻撃を一方的に封じる事ができます。

地味にやらしいデッキですね？

成瀬「私のデッキを見て、思った事があったらどんどん仰って下さい！！　私もエアトスも、もっともっと強くなってみせますから！！」

成瀬　ＶＳ　如月　（前書き）

更新が遅れたこと、ホントにスイマセン（汗

成瀬　VS　如月

※

「え……『ウィジャ盤』！？」

如月のデュエルフィールドを見ていたチーム【フィアーズ】の棗は、如月が発動させた『ウィジャ盤』を見て、信じられないとでも言いたげな声をあげる。

「どういう事？　何で結衣は……いつものデッキを使ってないの？」

「ありァ俺が渡したデッキだ」

棗の問いに答える様に、月影陽一は棗の隣に立った。

「如月の相手をしているおチビちゃん……あいつァ大会の時から除外デッキを使ってやがった……となりゃ、除外を相手に如月自身のデッキじゃ相性が悪い……」

「確かに……勝てなくはないかもだけど……苦戦は免れない……！」

月影はポケットからタバコを取り出し、火を点けながらタバコの煙をクパァと吐き出した。

「今回の如月が使ってるデッキ……ありゃ俺が組み上げたデッキを渡してある。そう心配そうな顔すんなよ棗ェ？　このデュエル、おチビちゃんにゃ悪いが……負けて貰おうかァ」

黒く大きなサングラス越しに、月影の鋭い視線が光る。

隣に立つ棗はそれ以上、特に何か言うわけでもなく、デュエルフィールドを見つめていた。

※

【如月結衣】

ＬＰ／　５６００
【成瀬花穂】
ＬＰ／　７０００

ライフポイントでは優位に立つ成瀬だが、その表情は険しかった。

現在、如月のターンがプレイされた。

如月の背後には巨大な石盤、もとい『ウィジャ盤』が……、そこに浮かび上がる【Ｄ】【Ｅ】の文字が、成瀬の表情を険しくさせる。

「では、わたくしのターン、ドローですの！」

如月はデッキからカードをドローし、

（わたくしのフィールドには戦闘破壊されない『マシュマロン』がいるとはいえ……このままでは格好の的ですわね。あの『ガーディアン・エアトス』に攻撃され続けたら、『死のメッセージ』が全て揃う前に、わたくしのライフが保ちそうにありませんし……）

成瀬のフィールドには『ビッグバン・シュート』を装備した『ガーディアン・エアトス』の姿がある。

貫通効果持ちの攻撃力２９００とは、おいそれと馬鹿に出来ない数値だ。

（先ずはあのエアトスを封じる事が先決……。幸い、わたくしの手札は満たされておりますの……ここは！！）

如月は手札１枚を掴み取り、プレイを開始した。

「わたくしは永続魔法『平和の使者』を発動致します！」

【平和の使者】
［永続魔法］
お互いに表側表示の攻撃力１５００以上のモンスターは攻撃宣言を行う事ができない。自分のスタンバイフェイズ毎に１００ライフポイントを払う。払わなければこのカードを破壊する。

「この効果でわたくしも成瀬さんも、攻撃力１５００以上のモンスターの攻撃を封じさせて頂きますの」

「ぅ……やっぱり、攻撃をロックするカードを……！！」

成瀬のフィールドのエアトスは攻撃力２９００。

『平和の使者』が存在する限り、攻撃力を行う事はできない。

「更にわたくしは、モンスターをセット。ターンを終了しますわ」

「わ、私のターンです！　ドロー！」

成瀬のターンに移行し、デッキからカードをドローする。

（……駄目、『サイクロン』じゃない！！）

ドローしたカードは罠カード『次元幽閉』。
相手攻撃モンスターをゲームから除外するカードだ。
しかし、このカードを引いても相手が攻撃してこなければ意味はない。
如月は見たところ、『ウィジャ盤』を使ってのロックデッキ。
攻撃を仕掛けてくるモンスターは殆ど入っていないだろう。
このまま何も出来ずにターンを費やしては、残り3枚の『死のメッセージ』カードが揃い、敗北してしまう。
それまでに成瀬は、何としても『ウィジャ盤』のカードを破壊する為の『サイクロン』を引き当てたかった。
（私のデッキに『サイクロン』は2枚……その内の1枚は、『光の護封剣』に使ってしまいました……）
残る『サイクロン』は1枚。
このまま何もせずに、ターンを終了するか？

（……そんな事……できる筈ありません！！）

成瀬の瞳に闘志が宿る。

（拓夜さんは諦めずに、勝利を掴み取りました！！　私だけ……勝負から降りる真似はしたくないです！！）

そして成瀬は今現在、自分に出来る事をこなしていく為……

少しでも勝機の可能性を掛けて……

「私は、『異次元の生還者』を召喚します！！」

【異次元の生還者】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００

ＤＥＦ　２００

［効果］

自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードがゲームから除外された場合、このカードはエンドフェイズ時にフィールド上に特殊召喚される。

「『異次元の生還者』？　……そんなモンスターを召喚しましても、貴女の『ガーディアン・エアトス』同様、攻撃する事ができませんので意味がないのでは？」

少し呆れた口調で言う如月だったが、成瀬は臆する様子を見せずに言い切った。

「意味がないかどうか……そんな事、やってみなければ分かりません！！　私は絶対に、最後まで諦めません！！　私のターンは終了です！！」

堂々と言い切る成瀬に、如月はやや怪訝な顔をしながらもカード効果を発動していく。

「ま、良いでしょう。精々足掻いて下さいな……とりあえず、貴女のエンドフェイズに、3枚目の『死のメッセージ』が浮かび上がりますの」

ドンッ！！

【D】【E】【A】

残すカードは2枚。

成瀬は浮かび上がる文字を見て、奥歯を噛み締めた。

※

空は夕闇に染まり、西の空に太陽が沈む。

フィールドに不気味に浮かび上がる『死のメッセージ』。

デュエルを観戦していた白石は心霊物が苦手な為に、如月のフィールドに浮かぶ『ウィジャ盤』を見て、微妙に足を震わせていた。

「遂に『死のメッセージ』が三枚……花穂、頑張ってくれ……！！」

絞り出すように声をあげる拓夜。

その拓夜の発言を聞き、亨は

「まだ手はある！！」

「と、亨さん……」

拓夜の隣に亨が立つ。

「確かに『ウィジャ盤』から放たれるプレッシャーは相当なモノだ。相手をすれば、着実に訪れる死の宣告に冷静な判断が追い付かなくなる事もある」

「……その気持ちは分かります。俺が花穂の立場だったら……きっと、相当に焦ります」

残す『死のメッセージ』は2枚。

つまり、許された自分のターンは僅か2回という事になる。

「だが、成瀬さんは諦めていない……そこに勝機がある！！」

「ど、どういう事なんすか？」

諦めなければ勝機はある。

確かにそうなのだが、その具体策が分からない。

拓夜は尋ねると、亨にしがみつくマナが代わりに答える。

「永続罠カード『ウィジャ盤』は、『死のメッセージ』という魔法カードを次々と並べていくんだよ……つまり、あのいけ好かない女の魔法・罠カードゾーンは、それだけ圧迫されるって意味だね！」

「その分、ターンが経つにつれて如月さんのフィールドは出せるカードが限られてくる。ロックデッキならば、成瀬さんの召喚するモンスターは攻撃出来ずとも、効果ならば発動する事は出来る筈だ！」

亨にマナは、真剣な眼差しでフィールドを見つめる。

「さいじょお……かほのデッキ、最初は苦しそうだったけど……今は……」

「ああ、俺にも聞こえる。成瀬さんの想いに、デッキが応えようとしているのがな！」

※

【如月結衣】
ＬＰ／５６００

【成瀬花穂】
ＬＰ／７０００

「では、わたくしのターン、ドローですの！」

如月のターンに移り、如月はカードをドローする。

対峙する成瀬のフィールドには、『ビッグバン・シュート』を装備した『ガーディアン・エアトス』に『異次元の生還者』が。

そしてリバースカードが1枚。

（デュエル大会の時から成瀬さんのデッキは拝見しておりましたが……見た所、デッキの中身は大して変わってない様子ですわね）

如月は成瀬のフィールドを見て予測する。

（恐らく……成瀬さんのデッキには【帝】は入っておりませんの。ま、それはそれで好都合なのですが……念には念を。　いずれ『死のメッセージ』で死に逝く運命ですが、ライフも削らせてもらいますの！！）

如月は思考を中断し、プレイングを開始する。

「スタンバイフェイズ、わたくしは『平和の使者』の維持コストを払いますの」

【如月結衣】
ＬＰ／　５６００　→　５５００

【成瀬花穂】
ＬＰ／　７０００

「そして……わたくしはモンスターを反転召喚！『ステルス・バード』のモンスター効果を発動致します！」

【ステルス・バード】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　７００
ＤＥＦ　１７００
［効果］
このカードは１ターンに１度だけ裏側守備表示にする事ができる。
このカードが反転召喚に成功した時、相手ライフに１０００ポイン

トダメージを与える。

「『ステルス・バード』！？」

「このモンスターが反転召喚に成功した時、相手ライフに１０００ポイントのダメージを与えますの！」

【如月結衣】
ＬＰ／５５００

【成瀬花穂】
ＬＰ／７０００　→　６０００

「くぅぅ……っ！？」

地味にライフが削られる成瀬。

この地味なダメージ、長期戦になればなる程、後々に厄介な事になってくる。

今は大したダメージに感じなくとも、後半には痛烈なダメージに変わる。

「……ロックだけじゃなく、バーンまで……！？」

「精々、もがき苦しみなさいな。わたくしは『ステルス・バード』のもう一つの効果を発動しますの。1ターンに1度、『ステルス・バード』は裏側守備表示にする事ができますのよ？」

再びセットされる『ステルス・バード』。

「わたくしのターンは終了ですわ」

如月はターンの終了宣言をし、続いて成瀬のターンに移行する。

「私のターン、ドロー！」

ドローしたカードを確認する成瀬は、そのカードを

「私は手札から、『サイバー・ヴァリー』を召喚します！！」

【サイバー・ヴァリー】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［効果］
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを１枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。
●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。
●このカードと自分の手札１枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード１をデッキの一番上に置く。

成瀬のフィールドに、『ガーディアン・エアトス』『異次元の生還者』『サイバー・ヴァリー』が並ぶ。

「『サイバー・ヴァリー』のモンスター効果を発動します！！　この子と『異次元の生還者』をゲームから除外して、私はデッキからカードを2枚ドローします！！」

成瀬のフィールドから『異次元の生還者』と『サイバー・ヴァリー』がゲームから除外され、成瀬はデッキからカードを2枚ドローした。

「何をやっても無駄ですのよ？　頼みの綱の『サイクロン』は引けたんですの？」

撃てるのなら撃ってみろ。

余裕の笑みで言う如月に、成瀬は

「……『サイクロン』は引いてません。私はこのまま、ターンを終了します」

「あら？　まぁまぁまぁ成瀬さん！　2枚ドローしながらもキーカードを引けてませんの！？　無駄な足掻きとは正にこの事ですわね」

如月はそう言いながら、４枚目となる『死のメッセージ』カードをデッキから取り出した。

ドンッ！！

【D】【E】【A】【T】

「残す文字は後1枚……次の成瀬さんのターンが終了した瞬間、成瀬さんの敗北が確定しますの！」

不敵な笑みを浮かべる如月。

しかし、成瀬は諦める事なく、自ターンの最後のプレイを行う。

「私のターンのエンドフェイズ、ゲームから除外された『異次元の生還者』の効果を発動します！」

成瀬のフィールドの空間が裂け、そこから『異次元の生還者』が現れた。

「表側表示の『異次元の生還者』が除外されたターンのエンドフェイズ時、除外されたこの子は、持ち主のフィールドに戻ります！」

成瀬のフィールドに並ぶ『ガーディアン・エアトス』と『異次元の生還者』。

しかし、如月はそんな成瀬を鼻で笑った。

「そんなモンスターがフィールドに戻った所で、わたくしの『ウィジャ盤』が止められるとは思いませんが……？」

「……それはどうでしょうか？」

「ッ！？」

成瀬の発言に如月の目が大きく見開かれる。

「確かに私は、“『サイクロン』は引けなかった”とは言いましたが……何も“キーカードが引けなかった”とは言ってません！！」

「なッ！？」

成瀬の力ある発言を聞き、如月はこのデュエルで初めて動揺する仕草を見せた。

「花穂！！」

成瀬の様子に思わず声を出して期待する拓夜。

「如月さん、確かに……私に残されたターンは僅か1ターンですが、1ターンも残されていれば、十分です！！」

「くッ！？」

「崩してみせます！！　私に向けられた、死の宣告を！！」

※

【如月結衣】
ＬＰ／　５５００

【成瀬花穂】
ＬＰ／　６０００

「わたくしのターン、ドローですの！」

迎えた如月のターン、ドローフェイズからスタンバイフェイズ。

自分フィールド上の魔法・罠カードゾーンには5枚のカードが揃っていた。

【ウィジャ盤】
【死のメッセージ　Ｅ】
【死のメッセージ　Ａ】

【死のメッセージ　T】
【平和の使者】

（スタンバイフェイズ……ここで『平和の使者』の維持コストを払う訳にはまいりませんわね……。このままですと、次の成瀬さんのターンに、最後のメッセージカードを出す事ができませんの……！！）

如月は決闘盤から永続魔法『平和の使者』を取り出し

「わたくしのターンのスタンバイフェイズ、この『平和の使者』のコストは払わず、破壊します！」

取り外した『平和の使者』を墓地へ送る如月。

これで今まで攻撃が出来なかったモンスター達が動ける様になった。

そしてスタンバイフェイズからメインフェイズ。

「わたくしは『ステルス・バード』を反転召喚し、成瀬さんに１０

００ポイントのダメージを差し上げますわ！！」

「くぅッ！？」

【如月結衣】
ＬＰ／　５５００

【成瀬花穂】
ＬＰ／　６０００　→　５０００

「そして再び『ステルス・バード』の効果により、表示形式を裏側守備表示に……」

再びセットされる『ステルス・バード』。

如月は手札を確認する。

（『平和の使者』が無くなった今……成瀬さんからすれば次のターンが攻め入る最大のチャンス……逆を言えば、わたくしにとって正念場となりますわね……）

如月のフィールドにモンスターは2体。
裏側守備表示の『ステルス・バード』と、守備表示の『マシュマロン』のみ。

（成瀬さんの『ガーディアン・エアトス』に装備されている『ビッグバン・シュート』が厄介ですが、持ちこたえれない訳では御座いませんし……ここはこのまま）

「わたくしはターンを終了致しますの。成瀬さん、最後に悪あがき出来るのなら、好きなだけ存分にどうぞ？」

挑発的な言葉を交えてのエンド宣言。

そして、最後となる成瀬のターンが始まった。

「……私のターン、ドロー！」

成瀬は希望の光を宿らせた瞳で、如月のフィールドに浮かぶ『ウィジャ盤』を見つめる。

（これが決まれば……『ウィジャ盤』は破壊できます！！　ですが、もし何らかの手段で阻害されたら……私は……）

成瀬は手札の1枚のカードを掴み

（でも、ここで弱気になってちゃいけません！信じればカード達が、きっと答えてくれるんです……！！）

「いきます、如月さん！！」

起死回生の一手となるプレイを開始していった。

「手札の『A・ジェネクス・バードマン』の効果を発動します！私のフィールド上に存在するモンスターを手札に戻す事で、手札のこの子は、特殊召喚する事ができます！」

【Ａ・ジェネクス・バードマン】
星３／闇属性／機械族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　４００
［チューナー・効果］
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を手札に戻して発動する。このカードを手札から特殊召喚する。この効果を発動するために手札に戻したモンスターが風属性モンスターだった場合、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。この効果で特殊召喚したこのカードはフィールドから離れた場合、ゲームから除外される。

「私はフィールドの『ガーディアン・エアトス』を除外！そして、『Ａ・ジェネクス・バードマン』を特殊召喚です！」

成瀬の『ガーディアン・エアトス』は『ビッグバン・シュート』を装備していた為、手札に戻る事なく除外され、エアトスと入れ替わる形でバードマンが現れた。

「バードマン？　エアトスを除外してまで特殊召喚した割には、些か頼りなさげですわね？」

挑発的な言葉を放つ如月に、ＯＣＧ研究会のメンバーはそれぞれに息を呑む。

「慌てる事ないですよ、如月さん……！！　いきます！！　レベル４『異次元の生還者』に、レベル３『Ａ・ジェネクス・バードマン』をチューニング！！」

「なッ！？　まさか、チューナーでしたのッ！？」

成瀬の行動に驚く如月。

如月だけではない。

残るチーム【フィアーズ】のメンバーも、皆が皆、成瀬のとった行動に思わず目を見開いた。

（大会時には、成瀬さんは一度もシンクロ召喚はしていなかった…
…迂闊でしたわね……！！）

緊張感に包まれる中、フィールドに赤く黒ずんだ花弁が無数に吹き荒れる。

「別に『サイクロン』が引けなくても、まだ可能性がある限り、私は諦めません！！　シンクロ召喚！！　お願い、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！」

【ブラック・ローズ・ドラゴン】
星７／炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２４００
ＤＥＦ　１８００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。１ターンに１度、自分の墓地に存在する植物族モンスター１体をゲームから除外する事で、相手フィールド上に存在する守備表示モンスター１体を攻撃表示にし、このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を０にする。

成瀬のフィールドに黒薔薇竜、『ブラック・ローズ・ドラゴン』が

現れた。

「ブラック・ローズ……ッそうか！！　ブラック・ローズの効果ならッ！！」

成瀬のブラック・ローズを見て、拓夜は歓喜にも似た声をあげる。

その間にフィールドは、赤黒い花弁が更に勢いを増し、吹き荒れる。

「私は『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果を発動します！　この子がシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊する事ができます！！」

「まさか……その様な粗暴な手段を使われるなんて……ッ！？」

この効果でフィールド上の全てのカードを破壊。

即ち、文字通りフィールドはリセットされ、そうなれば残り1ターンだろうが何だろうが『ウィジャ盤』は消滅する。

成瀬は高らかに、自分フィールドのブラック・ローズに指示を出し

た。

「お願い、『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！　死の呪縛を解き放って！！　ブラック・ローズ・ガイル！！」

成瀬の想いに応えるように、ブラック・ローズは体を大きく仰け反らせ、けたたましい雄叫びを放つ。

しかし……。

バキンッ！！

「ッ！？」

成瀬は一瞬、何が起きたか理解できなかった。

成瀬だけではない。

拓夜も、思わず目を見開いて

「な、何だ……ッ!?」

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』の……効果が消えた？　そんな……一体……!?」

フィールドを埋め尽くすかの如く無数に吹き荒れていた花弁は砕け散り、成瀬のフィールドのブラック・ローズは力無くうなだれていた。

「どうして……どうしてブラック・ローズの効果が発動しないの?」

「ふぅ……全く、一瞬ヒヤリとさせられましたケド……詰めがチョロ甘でしてよ?」

「ッ!?」

不敵な笑みを浮かべながら凛と立つ如月は、手札から一枚のカードを取り出し、成瀬に見せつけた。

「わたくしは『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果にチェーンして、手札からこのカード効果を発動しましたの。『エフェクト・ヴェーラー』ですの！」

【エフェクト・ヴェーラー】
星１／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［チューナー・効果］
このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター１体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手ターンのメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

如月は『エフェクト・ヴェーラー』のカードを手札から墓地に送り

「『エフェクト・ヴェーラー』はメインフェイズ時、手札から墓地へ送る事で相手効果モンスターの効果を無効にしますの。『サイク

ロン』が引けなくとも、その他の破壊手段を考慮すれば……自ずと対策はできましてよ？」

「そ……っ、そんな……」

成瀬の瞳から光が消えた。

『サイクロン』も引けない。

自分の場の伏せカードは無意味に残った『奈落の落とし穴』。

フィールドには効果を無効化された『ブラック・ローズ・ドラゴン』のみ。

通常召喚権は残されているが、手札にモンスターは『異次元の女戦士』のみ。

とてもこの状況を打開できるとは思えない……。

「……ぅぅ……」

「これ以上、打つ手がないのでしたら、さっさとサレンダーなさいな」

如月からの投降の呼びかけに、成瀬は更にどん底に落とされた気持ちになる。

「そんな……花穂……何か手はないのかよ……！？」

デュエルフィールドを見つめる拓夜達、ＯＣＧ研究会のメンバー等にも重たい空気が流れる。

フィールドに立つ成瀬の表情を見て、拓夜の中に悔しさが込み上げる。

「結締さん……何か……何か方法はないっスか？」

「拓夜ちゃん……」

「このままじゃ……花穂が……」

「……」

結締は何も言わなかった。

いや、言えなかったとの表現が正しいだろう。

口では言えない変わりに拳を強く握りしめる結締。

結締だけではない。

その気持ちは、他のＯＣＧ研究会の皆も同じだった。

※

成瀬が硬直してから2分が経過していた。

その間にも如月は対戦者である成瀬に対し、執拗に言葉責めを繰り返していた。

「全く……いつまで待たせる気ですの？　打つ手がないのでしたら、さっさとサレンダーされる事をお勧めしますわよ？　まぁ、そのままターンを終了して頂いて結構ですが……。そうなれば当然、貴女のエンドフェイズに『ウィジャ盤』の『死のメッセージ』が全て揃

い、貴女が敗北する事に代わりありませんが……」

如月の言葉が成瀬の頭の中に流れ込む。

サレンダー？

敗北？

認めたくない自分がいる。

だが、いくら頭の中で否定した所で、現実は変わらない……。

「……私は……」

ようやく絞り出した声。

成瀬の声は震えていた。

「……『異次元の女戦士』を……召喚します……っ！！」

【異次元の女戦士】
星４／光属性／戦士族
ＡＴＫ　１５００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、相手モンスターとこのカードをゲームから除外する事ができる。

『異次元の女戦士』を召喚した成瀬。
その行動を見守るＯＣＧ研究会のメンバー。

「ハァ？……女戦士……？　気でも狂いましたの？　そんなモンスターを召喚した所で、貴女の敗北は変わりませんのよ？」

鼻で笑うどころか、思わず失笑する如月。
だが……

「……確かに……意味はないです……」

「意味がないのでしたら……何故……」

「でも……結果……私が負ける事に変わりはなくても……それでも……」

成瀬は俯かせた顔をあげ、その目に悔しさを滲ませた涙を浮かべながら、その気持ちをぶつけた。

「それでもっ！！　私だけ何もしないのは、嫌なんです！！」

「っ！？」

自分の敗北を悟った成瀬。

だがしかし、そこで自分がとるべき行動は何か？

「バトルです！！　『異次元の女戦士』で、守備表示の『マシュマロン』に攻撃です！！」

『異次元の女戦士』の剣が、如月の『マシュマロン』に突き刺さる。

「この瞬間、女戦士の効果を発動します！！　女戦士と戦闘を行ったモンスターとこの子を、ゲームから除外します！！」

除外された『マシュマロン』と『異次元の女戦士』。

フィールドに残されたモンスターは2体。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』！！　裏側守備表示の『ステルス・バード』に攻撃です！！　ブラック・ローズ・フレア！！」

ガコォッ！！

如月のフィールドにいたモンスターは全て消滅した。

だが……それは同時に、成瀬のターンのバトルフェイズが終了した事になった。

「……成瀬……花穂……ッ」

「私は……バトルフェイズを終了します……」

成瀬の目から一滴の涙が流れ落ちる。

このターン、自分が出来うる手は全て打った。

だが、結局は……

「……私は……ターンを……終了します……ッ」

如月の『ウィジャ盤』を打ち砕く事なく、成瀬は最後のターンを終了してしまった。

「……同じ質問を繰り返しますが……」

如月はどこか神妙な面持ちで口を開く。

「このターン……結局わたくしの『ウィジャ盤』を破壊するに至らなかった訳ですが……何故、あの様な無駄な足掻きを？」

如月の言う無駄な足掻き。

それは成瀬が『ブラック・ローズ・ドラゴン』の効果を阻害された後のプレイだ。

如月は成瀬にサレンダーを呼び掛けたが結局、成瀬はサレンダーをする事なく、自分のプレイを貫いた。

如月にはその事が理解できなかった。

「……確かに……如月さんからしたら、私の行動は理解できないかもしれません……でも、私に……サレンダーは許されません」

「……」

「私は……拓夜さんやマナさんを守りたくて……チームの為に、こ

の舞台に立ったんです！　例えその結果が、今回の様に敗北だったとしても、私自身が進んで出たデュエルです！　皆さんは私を応援してくれました！　そんな皆さんの期待を裏切るような……サレンダーはできません！！　私自身が、サレンダーしたくありません！！」

「……そう、ですか……」

成瀬の思いを聞き、如月はそっと瞳を閉じる。

そして、デッキから一枚のカード……最後の『死のメッセージ』カードを取り出し

「……少しだけ、理解できた気がしますわ……ですが、このデュエルは……」

ドンッ！！

【D】【E】【T】【A】【H】

遂にフィールドに5枚のメッセージカードが出揃った。
その瞬間、成瀬の敗北が確定した。

※

「陽一サマ、こちらのデッキ……お返し致しますわ」

如月は先程まで使用していたデッキを月影に手渡す。

月影はデッキを受け取ると、黒く大きなサングラスを指でかけ直しながら

「クックッ、ご苦労だったなァ……」

「いえいえ、陽一サマが用意してくれたデッキのお陰ですわ……でも……」

如月はチラッと視線だけを後ろに向ける。
そこにはＯＣＧ研究会のメンバーに囲まれ、励まされる成瀬の姿があった。

「でも……もし、もう一度だけ成瀬さんとデュエルする機会があるのでしたら……わたくしも自分のデッキで、もう一度デュエルしたいですわね。それこそ、勝ち負け関係なしに……」

「……」

最後に教えられた気がする。

デュエルを通して、デュエルの本質を。

自分には無く、成瀬にはあった気構え。

デュエルでは勝ちはしたものの、如月の心は複雑ながらも気持ちが良い感じがした。

「ともかくこれで勝利条件は五分（ごぶ）になった訳だ……最後は、俺だな……ククッ」

如月の気持ちを知って知らずか、月影は不敵な笑みを浮かべて足を進める。

「後はこの俺が勝てば……西条拓夜にマナを俺のモノにする事ができる……ククッ、そうなりゃようやく完成する……俺が追い求める、理想のチームがなァ……！！」

※

「スイマセン、皆さん……負けちゃいました」

ペロッと舌を出し、ぎこちない笑顔で謝る成瀬。

その目尻には小さな涙の跡が残っていた。

「カッコ良かったぜ、花穂……！」

「ふぅん……成瀬よ、惜しかったな。負けはしたが……だが……」

「成瀬ちゃんの熱い気持ちは、ちゃんと俺達にも伝わってきたぜぃ」

拓夜、白石、結締の三人はそれぞれに励ましの言葉をかける。

今の成瀬には、皆からの温かい言葉がとても嬉しく感じた。

すると、奥から西条亨が腕に決闘盤を装着しながらやってきた。

「亨さん……。あの……スイマセン、私が……負けちゃったばかりに……」

亨の真剣な表情を見て、再び俯く成瀬。

すると、その成瀬の頭の上に優しく手が置かれた。

「……ぇ？」

「よく頑張ったな、成瀬さん……」

成瀬が顔をあげると、そこには真剣ながらも優しさを帯びた面持ちの亨が立っていた。

「……後は俺に任せろ」

亨は手を放し、月影が待つフィールドに足を進める。

その姿を、マナに葉月はハラハラしながら見ていた。

「……亨さん……」

彼の背中を見て、葉月は以前、成瀬が亨に言った言葉を思い出す。

『マナさんを守る、騎士（ナイト）様です！』

このデュエルで亨が負ければ、拓夜にマナはＯＣＧ研究会から離れる。

つまり、いつも亨の隣に立っていたマナが消えるという事だ。

そうなれば、今度あの人の隣に立つのは自分だ。

立ちたい。

一緒に居たい。

しかし

（でも……そんな事……亨さんは望んでない……）

葉月は胸が締め付けられる想いを堪えながら、大きく息を吸い込んだ。

「ーーーーッ！！　亨さーーーーんッ！！」

「っ！？」

葉月の声に皆が驚き、一斉に葉月に振り返る。

恥ずかしさや照れなどどうでも良かった。

ただ、これだけは言いたかった。

「負けるなッ！！」

確かに、亨が負ければマナは居なくなる。

だけど、それによって悲しむ亨の顔は見たくない。

余りにも短い言葉。

だが、そこに込められた想いは大きい。

「……烏丸さん……」

亨は葉月に返事をする代わりに、右の拳を空へと突き上げた。

そしてＯＣＧ研究会の存続を掛けた、フィアーズとの最後の決戦が始まる。

成瀬　ＶＳ　如月　（後書き）

この作品を読んで頂き、本当にありがとうございます。

今回は更新が遅れてしまい、そのことに関しては皆様にご迷惑をお掛けしました。

さて、次回の更新なのですが、少しお話があります。

下手をすれば、次の更新が今年最後の更新になっちゃいます。

どういう事かと言いますと、仕事のほうでとある資格を取得しなければならなくなりました。

その試験日が、来年の１月。

普段の生活でも、あまり勉強ができていないので、今回ばかりはちょいと真剣です。

その辺りはご了承ください。

なお、今月末が次話の更新予定日と考えておりますので、誠に勝手な都合ではありますが、なにとぞ、宜しくお願いします。

太陽　（前書き）

おはようございます。

こんにちは。

こんばんは。

はじめまして。

おひさしぶり。

この小説を執筆させて頂いているあちゃべです。

この度はこの小説を読んで頂き、本当にありがとうございます。

前回、お話しました通り、今回の投稿が今年最後の投稿になります。

無事、試験を終えたら、また続けていくつもりですので、その時はまた宜しくおねがいします。

さて、では本文をどうぞ・・・

太陽

※

夜空にはどんよりとした雲がかかり、辺りは漆黒の闇に包まれていた。

道端に建てられた電灯の灯り。

更に街のネオンや夜空の月の光に照らされ、東区の河原には二人のデュエリストの影が大きく伸びていた。

西条亨に月影陽一の二人だ。

ＯＣＧ研究会とチーム【フィアーズ】。

両陣営の最後のデュエルが始まろうとしていた。

それぞれ二人の背後、やや離れた位置にはそれぞれの陣営のメンバーが、息を呑んで事の成り行きを見守っている。

そんな中、月影は不敵な笑みを浮かべながら

「お～お～、随分と熱烈な声援を受けてるじゃねぇか、西条亨よォ……クックッ」

「フッ、焼き餅か？」

「ンな訳ねぇだろ……。潰しがいがあるってモンだァ。期待を一身に受け、目の前でボッコボコに潰されるザマを見せ付けてやる舞台が整った訳だ！！　覚悟は良いかァ！？　西条ォ……！！」

あからさまな挑発行為。

しかし、亨はそれを鼻で笑った。

「フッ、随分とよく喋る口だな？」

「ァア！？」

亨は決闘盤を構え、視線を真っ直ぐに月影に向ける。

そして正面から、堂々の布告をした。

「月影、お前の持てる力を全てぶつけて来な！！　俺のデッキ（仲間）が粉砕してみせるぜ！！」

「ククッ、面白い……！！」

両者、互いに立ち位置に到着し、決闘盤を構える。

「やれるモンなら、やってみろ……西条ォ亨ゥ！！」

「……いくぞ！！」

『デュエル！！』

激しい闘志がぶつかり合い、西条亨と月影陽一のデュエルが始まった。

※

【先攻】月影陽一
ＬＰ／　８０００

【後攻】西条亨
ＬＰ／　８０００

「いくぜェ！！　先攻はこの俺だァ！！」

先攻を奪取した月影は勢い良くカードをドローする。

「クックッ、まずは……モンスター1体をセット！伏せカード1枚をセット！」

ヴィン、ヴィン……

月影のフィールドにソリッドヴィジョンが映し出され、カード2枚が伏せられる。

「俺のターンは終了だァ……さぁ西条亨ゥ！！　掛かって来いやァ！！」

守備モンスターを残し、ターンを終了した月影。

亨は挑発的な言葉に動じる事なく、自分のターンを開始する。

「俺のターン、ドロー！」

ドローカードを横目で確認した亨。

その口元には笑みが。

「フッ……、いくぜ、相棒！！」

亨はそう呟くと、自分のプレイを開始していく。

そして早速、ドローしたカードを発動した。

「手札より、魔法カード『召喚師のスキル』を発動！！」

【召喚師のスキル】
［魔法カード］
自分のデッキからレベル５以上の通常モンスターカード１枚を選択して手札に加える。

「この効果で、俺はデッキから『ブラック・マジシャン』のカードを手札に加える！！」

『ブラック・マジシャン』を手札に加えた亨。

そして……

「更に手札より、魔法カード『古のルール』を発動！！」

【古のルール】
［魔法カード］
自分の手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

亨の発動していくカードに月影だけでなく、周りは思わず目を見開く。

「チッ……、ソッコーで来るかよ……！！」

亨は手札から、彼の信ずるカードを手に取り

「現れよ！　『ブラック・マジシャン』！！」

始まった亨のターン。

早速、彼のエースモンスターがフィールドに特殊召喚された。

【ブラック・マジシャン】
星７／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００

そして亨はそのままバトルフェイズへと移行する。

「バトル！『ブラック・マジシャン』で、月影のセットモンスターに攻撃！！」

月影のセットモンスターは『ブラック・マジシャン』の攻撃により、蒸発した。

すると、月影はニヤリと口端を吊り上げる。

「ククッ、この瞬間……戦闘破壊された『クリッター』の効果が発動するぜェ」

【クリッター】
星３／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　６００
［効果］
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える。

「『クリッター』の効果により、俺ァデッキから攻撃力１０００のモンスター、『太陽の神官』を手札に加えるぜェ……！！」

デッキから『太陽の神官』を取り出し、手札に加える月影。

「『太陽の神官』だと？　……ッ！？」

（まさか……奴のデッキは……ッ！？）

亨の表情が更に引き締まる。

このままターンを終えてしまえば次のターン、間違いなく『ブラック・マジシャン』が破壊されてしまう。

亨はバトルフェイズを終了し

「俺はリバースカードを2枚セットし、モンスター1体をセット！ターンエンド！！」

※

【月影陽一】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　８０００

「俺のターン！！」

ライフポイントの変動がないまま月影のターンに移行する。

現在、月影のフィールドにはリバースカードが1枚のみ。
対して亨のフィールドには、彼の総称とも言えるモンスター『ブラック・マジシャン』に、セットモンスター1体。
そして2枚のリバースカード。

（ククッ……ッ！！　奴がどんな罠を仕掛けてようが、このカードの前では無力だァ……ッ！！）

月影は手札の1枚のカードに手を伸ばし、

「先ずはコイツを食らいなァ！！　手札より、『大寒波』を発動！！」

【大寒波】
［魔法カード］
メインフェイズ1の開始時に発動する事ができる。次の自分のドローフェイズ時まで、お互いに魔法・罠カードの効果の使用及び、発動・セットはできない。

バキッパキャパキャ……！！

フィールド上に伏せてある互いの魔法・罠カードが凍り付く。

亨は凍り付く自分の魔法・罠カードを見て、驚きの声をあげる。

「こッ……これは！？」

「『大寒波』……。このカードの発動後、次の俺のターンが訪れるまで……互いに魔法・罠をプレイする事ァできねェ！！」

「なにッ！？」

月影は亨の反応を見て、ククッ……！！　と、笑みを浮かべた。

「西条ォ亨ゥ……！！　お前のエースモンスターはショボいんだよ！　効果を持たないバニラモンスターなんざ、デッキに入れるだけ無駄だぜェ？」

月影の発言に、ピクリと亨の眉がつり上がる。

そんな様子を知らずにか、月影は侮辱するような発言を続けた。

「ブラマジァ攻撃力も最上級にしちゃァ２５００止まり……効果もない……更にァ『大寒波』により、テメェはリバースカードは愚か、手札からも魔法・罠も使えねェ！！」

「……貴様……ッ！！」

「証明してやんよ！！　テメェの時代は終わりだ！！　テメェを倒し、西条拓夜にマナちゃんを俺のチームに加え、俺達のチームが最強になってやる！！」

その表情と言葉に凄みと勢いを増し、月影はプレイを続ける。

「いくぜェ！！　相手フィールドにのみモンスターが存在する時『太陽の神官』は、手札から特殊召喚する事ができる！！」

【太陽の神官】
星５／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「赤蟻アスカトル」または「スーパイ」１体を手札に加える事ができる。

月影のフィールドに『太陽の神官』が守備表示で特殊召喚された。

「そして俺ァ、チューナーモンスター『赤蟻アスカトル』を召喚！！」

【赤蟻アスカトル】
星３／地属性／昆虫族
ＡＴＫ　７００
ＤＥＦ　１３００
［チューナー・効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在するレベル５のモンスター１体を選択して特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、そのターンのエンドフェイズ時に墓地へ送られる。

「……『赤蟻アスカトル』……やはり……ッ！！」

「クックッ……、いくぜェ！！　レベル５『太陽の神官』に、レベル３『赤蟻アスカトル』をチューニング！！」

月影のモンスター達が夜空に舞い、一つになる。

「太陽昇りし時、全ての闇を照らしだす！　降り注げ光よ！」

カッ……！！

夜空に一点の眩い光が照らされる。

「シンクロ召喚！！　いでよ、『太陽龍インティ』！！」

【太陽龍インティ】
星８／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２８００
［シンクロ／効果］
「赤蟻アスカトル」＋　チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを破壊したモンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。フィールド上に存在するこのカードが破壊された場合、次のターンのスタンバイフェイズ時、自分の墓地に存在する「月影龍クイラ」１体を特殊召喚する事ができる。

月影のフィールドに一つの太陽が生まれた。

夜空を照らす不気味な光。

その太陽から四つの赤き龍の首が生え、亨に対して威嚇するかのような雄叫びをあげた。

ゴゴゴゴゴゴ……！！

「……やはり、太陽龍か……ッ！！」

「ククッ、流石に知ってやがるか……。そう、俺のデッキァ【インティ・クイラ】！！　天地創造のデッキだァ！！」

月影の頭上に現れし『太陽龍インティ』。

白石はフィールドを見つめながら

「ふぅん……月影め、まさか【インティ・クイラ】を使うとはな……！！」

「あの……白石さん、その【インティ・クイラ】って、一体何なん

です？」

成瀬が白石の言葉に質問をする。

「【インティ・クイラ】とは、奴のデッキの総称とも言えるモンスターの事だ。……『太陽龍インティ』、そしてまだ現れてはいないが、『月影龍クイラ』……。その2体のモンスターが、互いに互いを補い、相手を倒すデッキだ……！！」

「互いに……互いを補う？」

「ああ、成瀬よ……お前の使う【次元エアトス】が相手をすれば、何ら驚異ではないのだが……」

「……つまり、墓地依存の効果……ですね」

成瀬の答えに白石は頷く。

「うむ……だが、それだけではない……！！」

「えッ！？」

白石はフィールドを見つめながら、険しい表情で

「西条め……奴のモンスターにどう立ち向かう……！？」

白石等が話している間に、月影はバトルフェイズへと突入する。

「ククッ……！！　覚悟は言いかァ？　西条ォ！？」

「くッ！？」

「『太陽龍インティ』よ！！　ヤツのブラマジを攻撃せよ！！」

ズゴゥッ！！

「グァッ!?　『ブラック・マジシャン』!!」

【月影陽一】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　８０００　→　７５００

亨の『ブラック・マジシャン』は『太陽龍インティ』の攻撃を受け、破壊された。

「ククッ!!　バニラモンスターなんざ雑魚の雑魚!!　頼みの綱のリバースカードを封じりゃ、テメェなんざ虫けらなんだよ!!　俺のターンは終了だァ!!」

亨のエースモンスターを破壊し、得意になる月影。

そして、『大寒波』が適用された亨のターンが訪れた。

「くッ……俺のターン！！」

カードをドローし、手札とフィールドを交互に確認する。

（俺の手札やリバースカードは、奴の使った『大寒波』によって魔法・罠が使えない……！！　それに、『太陽龍インティ』の攻撃力は３０００。あの攻撃力に勝てるモンスターは、俺の手札にはない……ここは）

亨は歯を食いしばりながら

「俺はこのまま、ターンを終了する……！！」

「オィオィ、何だ何だよ何ですかァ！？　新たな壁モンスターも出せないってか？」

亨の行動を嘲る月影。

「そんな……亨さん！？」

拓夜は亨の行動が、信じられないとでも言うような、驚愕の表情でいた。

「無理もないぜぃ……！！　西条ちゃんは『大寒波』によって、魔法・罠を封じられている……。まだ西条ちゃんのフィールドに、１体の壁モンスターがいるだけマシだぜよ」

「む、結締さん……」

「あの月影って野郎……！！　ありゃ西条ちゃんのデッキを事前に調べて、対策を練ってやがったな……！！」

「……亨さん……！！」

拓夜の中に不安が募っていく。

拓夜だけではない。

いつの間にか、ＯＣＧ研究会のメンバーには、重苦しい空気が流れていた。

※

「俺のターンだ！！　ドロー！！」

【月影陽一】
ＬＰ／８０００

【西条亨】
ＬＰ／７５００

月影のターン。

彼のフィールドには攻撃力３０００の『太陽龍インティ』が。

そして１枚のリバースカード。

「とりあえずインティが1体でも出りゃァ、テメェの魔法・罠なんざ怖かねェ！！　たとえそのリバースが神宣だったにしてももう遅ェ！！　それにテメェのデッキにァ、幽閉に奈落が入ってねぇのは調査済みだかんなァ！！」

「……！！」

「チューナーモンスター『スーパイ』を召喚！！」

【スーパイ】
星1／地属性／悪魔族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　１００
［チューナー・効果］
フィールド上に存在するこのカードがカードの効果によって墓地へ送られた時、自分のデッキから「太陽の神官」1体を特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力は倍になり、このターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。

月影のフィールドに鬼の面のモンスターが現れた。

更に……

「リバーストラップ！！『リミット・リバース』を発動！！」

【リミット・リバース】
［永続罠］
自分の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「『リミット・リバース』により、俺ァ墓地より『太陽の神官』を特殊召喚する！！」

月影のフィールドに再び現れた『太陽の神官』。

高速でモンスターを展開する月影は、『太陽の神官』と『スーパイ』に手を翳し

「ククッ！！　いくぜェ！！　レベル５『太陽の神官』に、レベル１『スーパイ』をチューニング！！」

月影の２体のモンスターが再び夜空に舞い、一つになる。

「闇に月満ちる時、魔の轟が聞こえだす！　死へと誘え！！」

カッ……！！

「シンクロ召喚！！　いでよ、『月影龍クイラ』！！」

【月影龍クイラ】
星６／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
「スーパイ」＋　チューナー以外のモンスター１体以上

このカードが攻撃対象に選択された時、攻撃モンスターの攻撃力の半分だけ自分のライフポイントを回復する。フィールド上に存在するこのカードが破壊された場合、自分の墓地に存在する「太陽龍インティ」1体を特殊召喚する事ができる。

月影のフィールドに『月影龍クイラ』がシンクロ召喚された。

月影のフィールドに浮かぶ太陽と月。

それらから発せられる不気味な光が夜空に浮かび、一層の恐怖感が漂う。

「ククッ……！！　クイラの召喚に何の罠も発動しねぇか……？まかさとァ思うが、その2枚の伏せカード……ブラフか？」

「ッ！？」

月影の言葉に亨の目が大きく見開かれる。

その様子に月影は呆れながらも盛大に笑った。

「は？　マジ？　オイオイ……何だ何だよ何ですかァ！？　警戒した俺、馬鹿みてェじゃん！？　まぁ良い、それならそれで、ちゃっちゃと決着（ケリ）つけてやんぜェ！！」

バトルフェイズに突入する月影。

「まずは『月影龍クイラ』！！　西条亨の守備モンスターに攻撃しろォ！！」

ズゴゥッ！！

『月影龍クイラ』の攻撃が亨の守備モンスターを破壊した。

「くッ！？　戦闘破壊された『見習い魔術師』のモンスター効果を発動！！」

【見習い魔術師】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　８００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１つ置く。このカードが戦闘によって破壊された場合、自分のデッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を自分フィールド上にセットする事ができる。

「『見習い魔術師』の効果により、デッキから、レベル２以下の魔法使い族モンスター１体をセットする！　俺はデッキから、もう１体の『見習い魔術師』をセット！！」

亨のフィールドに、２体目の『見習い魔術師』がセットされる。

「チッ……、リクルーターだったか……！！　次ッ！！　『太陽龍インティ』で攻撃だァ！！」

続いて『太陽龍インティ』が、亨の『見習い魔術師』に攻撃し、破壊する。

そして再び『見習い魔術師』の効果が発動された。

「『見習い魔術師』の効果発動！！　デッキからレベル2の魔法使い族モンスター『シンクロ・フュージョニスト』をセットする！！」

デッキから『シンクロ・フュージョニスト』をセットした亨。

月影のバトルフェイズが終了した今、亨のフィールドにモンスター数の変動はなかった。

その事に月影は軽く舌打ちしながら

「チッ……リクルーターってのァ予想外だったが……。まァいい、俺ァターンを終了すんぜ！」

月影のターンが終了し、亨のターンへと移行する。

「フッ……、月影。随分と余裕が出てきたようだな？」

「ァア？」

亨の言葉に反応する月影。

亨の表情は、自信に満ち溢れていた。

「お前のモンスターが攻撃してくれたおかげで、俺も舞台が整った……さぁ、覚悟は良いか？」

「何ッ！？」

亨の発言に、それまで重かった空気のＯＣＧ研究会のメンバーに、表情の変化が訪れる。

「さいじょお！！」

「亨さん！！」

ほとんど同時に声をあげるマナに葉月。

「あ……（汗）」と互いに思う中、亨の反撃が始まった。

「いくぜ、俺のターン！　ドロー！！」

カードをドローし、亨は早速、プレイを開始する。

「『シンクロ・フュージョニスト』を反転召喚！」

【シンクロ・フュージョニスト】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　６００
［効果］
このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、自分のデッキから「フュージョン」または「融合」と名のついた魔法カード１枚を手札に加える。

『見習い魔術師』の効果でセットされた『シンクロ・フュージョニスト』が反転召喚される。

更に

「そして俺は、手札よりチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！！」

【ジャンク・シンクロン】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　５００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

亨のフィールドにチューナーモンスターが召喚された。

「チューナーモンスターだとッ!?」

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動!!　召喚に成功した時、墓地に眠るレベル2以下のモンスター1体を守備表示で特殊召喚する!!　来い、『見習い魔術師』!!」

亨のフィールドに『ジャンク・シンクロン』『シンクロ・フュージョニスト』『見習い魔術師』の計3体のモンスターが並ぶ。

その瞬間、亨は伏せてあった2枚のリバースカードの内、その1枚を発動した。

「この瞬間、俺はコイツを発動する!!　リバースカードオープン!!!　『停戦協定』!!!」

【停戦協定】
［罠カード］
フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターを全て表側守備表示にする。この時、リバース効果モンスターの効果は発動しない。フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター1体につき５００ポイントダメージを相手ライフに与える。

「て……『停戦協定』だとッ！？」

「このカードはフィールド上の効果モンスターの数だけ、相手ライフに５００ポイントのダメージを与える！！」

「糞ッ！！」

現在、フィールド上に互いの効果モンスターの数は計５体。

５　×　５００　＝　２５００

【月影陽一】

ＬＰ／　８０００　→　５５００

【西条亨】

ＬＰ／　７５００

効果ダメージにより、一気にライフが逆転した。
更に亨は、自分のプレイを続けていく。

「レベル2の『見習い魔術師』と『シンクロ・フュージョニスト』に、レベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！！」

ヒュンヒュン……カッ……！！

それぞれのモンスターの星（レベル）が交わり、新たなモンスターが現れる。

「集いし魔石が、新たな魔術を紡ぎだす！　光指す道となれ！！」

「ッ！？　コイツァ！？」

「シンクロ召喚！！　穿て、『アーカナイト・マジシャン』！！」

【アーカナイト・マジシャン】
星７／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　１８００
［シンクロ／効果］
チューナー　＋　チューナー以外の魔法使い族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを２つ置く。このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。また、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを１つ取り除く事で、相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

亨のフィールドに現れし『アーカナイト・マジシャン』。
すると、『アーカナイト・マジシャン』の周りに２つの光の球が浮かび上がった。

「『アーカナイト・マジシャン』がシンクロ召喚された時、自身に魔力カウンターを２つ置く。　アーカナイトは、自身の魔力カウンター１つにつき、攻撃力が１０００ポイントアップする！！」

【アーカナイト・マジシャン】
ＡＴＫ　４００　↓　２４００

DEF　1800
（『魔力カウンター』×　2）

「チィッ！！　だが……テメェのアーカナイトの能力は、それだけじゃねぇ……！！」

「フッ、そう……だがその前に、シンクロ素材として墓地に送られた『シンクロ・フュージョニスト』の効果を発動する」

「ァア？」

亨は決闘盤に取り付けられたデッキに手を伸ばし

「『シンクロ・フュージョニスト』がシンクロ素材として墓地へ送られた時、デッキから【融合】または【フュージョン】と名のついた魔法カードを手札に加える事ができる！　俺はデッキから『ミラクルシンクロフュージョン』を手札に加える！」

『ミラクルシンクロフュージョン』を手札に加えた亨は、更に勢い

を増してプレイを続ける。

「そして『アーカナイト・マジシャン』の効果を発動！！　自身の魔力カウンターを１つ取り除き、お前の『月影龍クイラ』を破壊する！！」

【アーカナイト・マジシャン】
ＡＴＫ　２４００　↓　１４００
ＤＥＦ　１８００
（魔力カウンター２　↓　１）

亨のアーカナイトの周りに浮かぶ２つの魔石の内の１つが、月影の『月影龍クイラ』目掛けて発射された。

「貫け！！　アクセル・シュート！！」

「チィッ……だがなァ、そう簡単にヤラセるかよォオ！！」

月影は『アーカナイト・マジシャン』の効果にチェーンし、手札か

ら1枚のカードを取り出した。

「手札の『エフェクト・ヴェーラー』の効果を発動！！　コイツでテメェのアーカナイトの効果を無効化すんぜェ！！」

「何ッ！？」

【アーカナイト・マジシャン】
ＡＴＫ　１４００　↓　０
ＤＥＦ　１８００
（魔力カウンター１　↓　０）

【エフェクト・ヴェーラー】
星１／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［チューナー・効果］
このカードを手札から墓地へ送り、相手フィールド上に表側表示で存在する効果モンスター１体を選択して発動する。選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。この効果は相手ターンのメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

月影は手札から『エフェクト・ヴェーラー』を墓地へ送り、『アーカナイト・マジシャン』の効果を無効化にした。

「ククッ！！　残念だったなァ、西条ォ！？　『アーカナイトマジシャン』の効果が決まってりゃ、俺のモンスターを一掃できたのになァ！！」

してやったり、と笑う月影。

しかし

「やるじゃないか月影。確かにこれで、俺のアーカナイトでは為す術がなくなった……だが、それで『アーカナイト・マジシャン』を完全に封じたと思ったら、大間違いだぜ？」

「ッ！？　なに……！？」

不敵な笑みを浮かべる亨に対し、月影は先程、亨が手札に加えたカードを思い出した。

「ーーーーッ!?　テメェ、まさか!!」

「フッ、いくぜ!!　手札より『ミラクルシンクロフュージョン』を発動!!」

【ミラクルシンクロフュージョン】
［魔法カード］
自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「このカードはフィールドか墓地から決められたモンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とした融合モンスターを、特殊召喚する!!　フィールドからは『アーカナイト・マジ

シャン』！！　そして墓地からは、『ブラック・マジシャン』を除外……！！」

亨のそれぞれのモンスターが除外され、新たなモンスターが現れる。

「融合召喚！！　『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』！！」

【覇魔導士アーカナイト・マジシャン】
星１０／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　２８００
［融合／効果］
魔法使い族シンクロモンスター　＋　魔法使い族モンスター
このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。このカードが融合召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを２つ置く。このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。１ターンに１度、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを１つ取り除く事で、以下の効果を発動する。
●フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。
●自分のデッキからカードを１枚ドローする。

亨のフィールドに更なる力を得たアーカナイトが現れた。

「覇魔導士……だとッ！？」

月影は『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』を見て、思わず背中に冷や汗を垂らす。

（何だ……あのモンスターはッ！？）

「『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』が融合召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを２つ置く。アーカナイトの攻撃力は、自身に乗っている魔力カウンターの数だけ、攻撃力を１０００ポイントアップさせる！！」

【覇魔導士アーカナイト・マジシャン】
ＡＴＫ　１４００　↓　３４００
ＤＥＦ　２８００
（魔力カウンター　２）

攻撃力が月影のどのモンスターよりも上回ったアーカナイト。
亨はメインフェイズを終了し、バトルフェイズへと移行する。

「バトル！！　『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』で、『月影龍クイラ』に攻撃！！」

亨のアーカナイトが、クイラに向けて杖を構える。
その杖の先端から、膨大な魔力の砲撃が放たれた。

「ディバイン・バスター！　シュート！！」

ズゴゥッッ！！

アーカナイトの攻撃がクイラに決まる瞬間、

「チィッ！！　だがこの瞬間、『月影龍クイラ』のモンスター効果を発動！！」

「ッ！！」

「クイラが攻撃対象に選択された時、攻撃モンスターの攻撃力の半分のだけ、自分のライフを回復する！！　テメェのアーカナイトの攻撃力は３４００！！　よって俺のライファ、１７００ポイント回復する！！」

【月影陽一】
ＬＰ／　５５００　↓　７２００

【西条亨】
ＬＰ／　７５００

ライフは回復したものの、攻撃力ではアーカナイトを下回るクイラは破壊された。

【月影陽一】
ＬＰ／７２００　→　６３００

【西条亨】
ＬＰ／７５００

「……バトルフェイズを終了し、メインフェイズ……『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』の効果を発動する！！」

【覇魔導士アーカナイト・マジシャン】
ＡＴＫ　３４００　→　２４００
ＤＥＦ　２８００
（魔力カウンター　２　→　１）

「自身の魔力カウンターを１つ取り除き、『太陽龍インティ』を発動する！！」

アーカナイトの効果がインティに炸裂し、月影のフィールドには無意味に残された『リミット・リバース』のみとなった。

「ククッ！！　やってくれるじゃねェか……西条ォ……！！」

「俺はターンを終了する！！　さぁ月影、お前のターンだ！！」

※

デュエル開始から一進一退の攻防を繰り広げる月影に亨。

一瞬は歓喜の声をあげたＯＣＧ研究会のメンバーも、今では生唾を飲み込み、二人のデュエルを見守っていた。

「……惜しい、まさかアソコで『エフェクト・ヴェーラー』を使われるなんて……！！」

「うん……正直、認めたくないけど……あの月影ってヤな奴……「強いですわよ」

葉月とマナの会話に割り込むチーム【フィアーズ】の如月。

如月と棗の二人は、葉月やマナの隣に立ち、フィールドを見つめながら得意気に話した。

「仮にも陽一サマは、北区のデュエリストチームの頂点に位置する御方……。あれ位やってのけて、当然ですのよ」

「むしろ、あの西条亨はよくリーダーに食らいついてる方よ」

自慢気に語るフィアーズの二人。

しかし、それに負けずとマナは懸命に亨の実力を話し出す。

「でも、さいじょおは負けないもん!!　どんな相手だって、さいじょおは最後まで絶対に諦めないもん!!　たとえ神が相手だって、さいじょおは最後まで立ってたんだから!!」

「……はぁ？　かみ？　意味が分かりませんの」

「足掻くだけ、無駄よ……。リーダーに負けた奴は、皆……似たような事ばかり言ってたわ」

「くぅぅ……っ！！　とにかく、私は最後までさいじょおを信じるんだから！！」

マナの態度にヤレヤレと肩で息をつく如月。

それと同時にふと、ある事が疑問に浮かぶ。

（それにしましても、陽一サマは何でこんな幼稚なデカ乳女をチームに……。いえ、それよりも……このデカ乳女、先程『かみ』とか仰ってましたが……一体……？）

※

【月影陽一】
ＬＰ／　６３００

【西条亨】
ＬＰ／　７５００

訪れた月影のターン。
彼のフィールドにモンスターはなく、無意味に残された『リミット・リバース』のみ。
そして手札は2枚。

「ククッ！！　俺のターン！！　ドロー！！」

月影のターンのドローフェイズが終了し、スタンバイフェイズ。
その瞬間、月影の頭上の空から青く不気味な光が灯された。

「ククッ！！　このターンのスタンバイフェイズ、前のターンに破壊された『太陽龍インティ』のモンスター効果を発動！！」

「ッ！？」

「陽が沈む時、月はまた登る……。『太陽龍インティ』が破壊された次のターン、墓地に眠る『月影龍クイラ』を特殊召喚する！！」

ゴゴゴゴゴ……！！

再び月影のフィールドに現れし『月影龍クイラ』。

その効果を聞き、成瀬は「まさか！？」と声をあげる。

「まさか、白石さんが仰ってた……互いに互いを補う能力っていうのは……！！」

「お前の予測通りだ、成瀬よ」

白石は腕を組み、険しい表情でフィールドを見つめながら

「『太陽龍インティ』が破壊されれば、墓地から『月影龍クイラ』が復活する。　だがその逆も然り……！！　『月影龍クイラ』を破壊すれば、墓地から『太陽龍インティ』が復活する！！」

「そんな……！！　それなら本当に除外しない限り、無限に復活す

る事になるじゃないですか！？」

「確かにそうだ……。しかし一見、揃えば無敵に見えるこの【インティ・クイラ】だが、除外以外にも弱点はある！！」

「えッ！？」

「だが西条の奴が、その鍵となるカードを引けているかどうかが……！！」

白石に成瀬が話している間に、月影はメインフェイズに移り、プレイを開始する。

「俺ァ『アポカテクイル』を召喚！！」

【アポカテクイル】
星４／光属性／雷族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
［効果］

自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、フィールド上に表側表示で存在するこのカードのレベルは5として扱う。フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、自分の墓地に存在する「太陽の神官」1体を選択して特殊召喚する事ができる。

月影のフィールドにモンスターが召喚される。

更に月影は手札に手を伸ばし

「ククッ!!　一気に攻めんぜェ!!　手札から『死者蘇生』を発動だァ!!」

【死者蘇生】

［魔法カード］

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「再び蘇れ！！　『太陽龍インティ』！！」

ゴゴゴゴゴ……！！

月影のフィールドに『太陽龍インティ』が特殊召喚された。

一気に3体のモンスターが並ぶ月影のフィールド。

それを見た亨の頬に、一筋の汗が流れ落ちる。

「ククッ！！　俺のインティやクイラの前じゃ、例えテメェのリバースカードがミラフォだろうが何だろうか問題ねぇ！！」

「……くッ！！」

「覚悟は良いかァ！？　西条ォ！？　バトルだァア！！」

バトルフェイズに突入する月影。

亨のフィールドには、魔力カウンターが1つ乗った『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』に、1枚のリバースカードのみ。

最初に動いたのは、まず『太陽龍インティ』からだった。

「インティ！！　奴のモンスターに攻撃だァア！！」

ドシュゥ！！ドシュゥ！！ドシュゥ！！ドシュゥ！！

インティの４つの龍の口からそれぞれに熱線が放たれた。

そして亨は、険しい表情で

「くッ！？　リバースカードオープン！！　『聖なるバリアー ミラーフォース－』！！」

【聖なるバリアー ミラーフォース－】

［罠カード］

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

亨の伏せてあった罠カード『聖なるバリアー ミラーフォース ー』が炸裂し、月影のモンスターは全て破壊された。

しかし、亨の表情は晴れず、苦虫を潰したかのような表情をしている。

それに対し月影は

「クク……ッ！！　ヤッパりミラフォだったか……！！　見事、俺のモンスターを全滅させた……と、言いたいが……甘ェんだよォオ！！」

「ッ！！」

月影の言葉に勢いが増す。

「ミラフォの効果で破壊され、墓地へ送られた『月影龍クイラ』の効果ァ！！　墓地の『太陽龍インティ』を特殊召喚する！！　更にミラフォの効果で破壊された『アポカテクイル』の効果ァ！！　墓地の『太陽の神官』を特殊召喚する！！」

再び月影のフィールドに現れし『太陽龍インティ』、そして『太陽の神官』。

亨がミラーフォースで全滅させたフィールドに、瞬時に現れる月影のモンスター達。

「バトル続行だァ……『太陽龍インティ』よ！！　西条の覇何たらアーカナイトに攻撃しろォオ！！」

ズボウッ！！

【月影陽一】
ＬＰ／　６３００

【西条亨】
ＬＰ／　７５００　→　６９００

亨の『覇魔導士アーカナイト・マジシャン』は月影の『太陽龍インティ』に破壊された。

がら空きになる亨のフィールド。

「オラァア！！　『太陽の神官』で、ダイレクトアタックだァア！！」

「ぐッ！？」

【月影陽一】
ＬＰ／　６３００

【西条亨】
ＬＰ／　６９００　→　５９００

先制のダイレクトアタックを決められた亨。

月影は苦悶の表情を見せる亨に薄ら笑いをしながら

「ククッ！！　良いザマだなぁ……西条ォよォ」

「……やるな、月影……ッ！！」

「テメェのフィールドはがら空き、手札も僅か二枚……次のターンにテメェがどう出るのか、ゆっくり見学させてもらうぜェ？　俺のターンは終了だァ！！」

※

葉月は目の前の光景が信じられなかった。

あの時、あのデュエル大会の時に自分は西条亨とデュエルをし、敗北した。

あの時のリベンジはまだ着いていないが、自分の中では西条亨が圧される姿なんか想像できなかった。

（……亨さん……！！）

月影のフィールドには攻撃力３０００の『太陽龍インティ』と、攻撃力１０００の『太陽の神官』が。

それに対し、亨のフィールドは何もない。

これから亨のターンが始まる所だが、葉月はハラハラしながら亨を見つめていた。

（……負けるな……お願いだから、負けないでよ……亨さん！！）

※

劣勢で迎えた亨のターン。

ドローフェイズに入り、亨はデッキからカードをドローした。

「俺のターン、ッドロー！！」

亨はドローしたカードを確認し

（……ッよし！！　『闇の誘惑』！！）

「まずは手札より、魔法カード『闇の誘惑』を発動！！」

【闇の誘惑】
［魔法カード］
自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

「ほぅ、ドローカードか……」

「俺はデッキからカードを2枚ドローし……手札の闇属性モンスター『レアル・ジェネクス・コーディネイター』をゲームから除外する！！」

【レアル・ジェネクス・コーディネイター】
星2／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２００

ＤＥＦ　１００
［チューナー・効果］
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、手札からレベル３以下の「ジェネクス」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

『レベル・ジェネクス・コーディネイター』を除外し、亨は更に手札に手を伸ばす。

「そして手札から、魔法カード『貪欲な壺』を発動！！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを５枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「まァたまたドローカードか……」

「俺は墓地のモンスターを5枚デッキに戻し……！！」

【デッキに戻したカード】
？覇魔導士アーカナイト・マジシャン
？ジャンク・シンクロン
？シンクロ・フュージョニスト
？？見習い魔術師

「そしてデッキから……カードを2枚ドロー！！」

デッキからカードを2枚ドローした亨。

彼がとった行動は

「……リバースカードを3枚セット、モンスターをセットし、ターン終了だ」

※

「……オィオィ、何だ何だよ何ですかァ！？　あんだけ散々ドローしといて、結局は守備を固めただけかァ！？　テメェのドローを見てる限りじゃァ、西条拓夜の方がドローは強ェな！！　後輩よりもドローが弱ェえなんザ、ヤッパおしまいだわ。　テメェの時代はなァア！！」

自分のターンに移り、デッキからカードをドローする月影。

ドローしたカードを目で確認すると

（……チッ、モンスターじゃねェか……。まぁ良い、このままインティと神官で叩く！！）

「バトルフェイズ！！　『太陽龍インティ』！！　西条亨の守備モンスターに攻撃だァア！！」

月影の『太陽龍インティ』が、亨の守備モンスターに襲いかかる。

「フッ、迂闊だぜ？　月影！」

「ッ！？」

それまで影を作っていた亨の表情が一変する。

それは、自信に満ちた瞳。

「『太陽龍インティ』の攻撃は、このカードで防ぐ！　リバースカードオープン！！　『魔法の筒』！！」

【魔法の筒】

［罠カード］

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、相手のライフポイントにそのモンスターの攻撃力分ダメージを与える。

インティの４つの口から放たれた熱線を、『魔法の筒』を通して月影に反射された。

ズガガガガッッ！！

「なッ、何だとォオ！？」

【月影陽一】
ＬＰ／　６３００　→　３３００

【西条亨】
ＬＰ／　５９００

月影のライフが一気に削られる。

「どうした月影？　顔色が悪いみたいだぜ？」

「ギギ……ッッ！！　調子に乗ってんじゃねェぞ！！　まだ俺の攻撃は終わってねェ！！　『太陽の神官』で、その守備モンスターを攻撃だァア！！」

『太陽の神官』が亨のモンスターを攻撃し破壊した。

「フッ、戦闘破壊された『ジャイアントウィルス』のモンスター効果を発動するぜ」

【ジャイアントウィルス】
星２／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１００
［効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手に５００ポイントのダメージを与える。さらにデッキから同名カードをフィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。その後デッキをシャッフルする。

【月影陽一】
ＬＰ／　３３００　→　２８００

【西条亨】
ＬＰ／　５９００

「『ジャイアントウィルス』が戦闘破壊された時、相手に５００ポイントのダメージを与え、デッキから同名カードを特殊召喚する！！」

亨のフィールドに2体の『ジャイアントウィルス』が攻撃表示で並ぶ。

「どうした月影？　戦術に冷静さが欠けてるぜ？」

「くッ！！　うるせェ！！　俺は伏せカードを1枚セット！」

月影はバトルフェイズを終了し、メインフェイズへ移行する。

そして魔法・罠カードゾーンに1枚のカードをセットした。

「糞がッ！！　流石にしぶといじゃねェか。　だが……テメェのその悪足掻きも何時まで保つかなァ？　このままじゃテメェは間違いなくジリ貧に終わるぜェ？　ククッ！！」

月影の表情、言葉に込められた重圧。

その雰囲気がフィールドを包み込み、夜の闇と一体化して、更なる重圧となって亨に襲いかかる。

しかし、亨も負けてはいない。

例えどんな不利な状況だろうと、今の自分にできる戦術を貫き通している。

「俺ァこのまま、ターンを終了すんぜ！！　西条ォ亨ゥ……、まぁそろそろ諦めろや、テメェは俺に負ける運命なんだよォ！！」

「運命？　フッ、生憎と俺は、そんな運命を辿る積もりはないぜ？」

亨は自分のターンに移り、デッキトップに指を添える。

「確かに月影、お前の言う通り……俺はこのままじゃジリ貧に終わるだろう。だが、俺は諦めない！　俺はこのデュエルに勝ち、仲間を必ず守ってみせる！！」

「……さいじょお！！」

「亨さん……！！」

亨の言葉に拓夜にマナが反応する。

「このドローに、俺はデュエリストとしての誇り（プライド）を全て掛ける！！　行くぞッ！！」

亨の意気込みにＯＣＧ研究会のメンバー全員が気持ちを一つにして、彼の名を叫んだ。。

「西条ちゃん！！」

「亨さん！！」

「亨さん！！」

「西条ォオ！！」

「さいじょお！！」

「亨さん！！」

仲間からの熱い気持ちを一身に受け、亨は自分の全力のターンを開始した。

「俺の……ッ！！　タァーーーンッ！！」

キィィィ……ン……

亨がドローしたその瞬間、月影は思わず体が硬直した。

（なッ……何だ……今の輝きはッ！？）

額から、背中から、尋常じゃない位の汗が流れ落ちる。

月影は思わず自分の目を疑った。

確かに見えたのだ。

亨がドローしたカードが、金色に光り輝いたのを。

そして、カードをドローした亨と目が合った瞬間……

ドドドドド……ッ！！

（なッ！？　何だこのプレッシャーはッ！？）

言葉を発そうにも上手く口が開かない。

体を動かそうにも手足が震えて言うことを聞かない。

月影はこのデュエルが始まって初めて、西条亨に恐怖を感じた。

気がつくと亨の右の瞳の色が、黒色から蒼く澄んだ瞳の色へと変色していた。

「月影、魅せてやるよ……今の俺の出せる、全力のデュエルをな！！」

※

【月影陽一】
ＬＰ／２８００

【西条亨】
ＬＰ／５９００

始まった亨のターン。

現在の月影のフィールドには

【モンスターゾーン】
太陽龍インティ
太陽の神官

【魔法・罠ゾーン】
伏せカード１枚

そして亨のフィールドには

【モンスターゾーン】
ジャイアントウィルス2体

【魔法・罠ゾーン】
伏せカード2枚

亨の手札にはドローしたカードが1枚のみ。

亨は全力のプレイの一枚目を発動していく。

「さぁ行くぜ!!　まず一枚目!!　リバースカードオープン!!
罠カード『異次元からの帰還』を発動!!」

【異次元からの帰還】
［罠カード］
ライフポイントを半分払う。ゲームから除外されている自分のモン

スターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

【月影陽一】
ＬＰ／２８００

【西条亨】
ＬＰ／５９００→２９５０

亨は『異次元からの帰還』を発動し、その効果を発動する。

「このカードは俺のライフポイントを半分払い、ゲームから除外されているモンスターを、可能な限り全て特殊召喚する!!」

「なッ!?　何だとォオ!?」

亨は自分の除外されているモンスター3枚を取り出し

「いでよ！！　『アーカナイト・マジシャン』！！　『レアル・ジェネクス・コーディネイター』！！　そして、『ブラック・マジシャン』！！」

ドドドドド……ッ！！

亨のモンスターゾーンが一気に埋め尽くされる。

全て攻撃表示で並ぶ亨のモンスター達。

更に亨は、自分の場に伏せてあったもう1枚のカードを発動する。

「そして2枚目！！　リバースカードオープン！！　罠カード『生命力吸収魔術』を発動！！」

【生命力吸収魔術】

［罠カード］

フィールド上の全ての裏側守備表示モンスターを表側表示に変更する。この時、リバース効果は発動しない。自分はフィールド上の効果モンスター1体につき、ライフを４００ポイント回復する。

「このカードは、フィールド上の効果モンスターの数だけ、俺のライフを４００ポイント回復する！！　今のフィールドには、効果モンスターは６体！！　よって俺は２４００のライフを回復する！！」

【月影陽一】
ＬＰ／　２８００

【西条亨】
ＬＰ／　２９５０　→　５３５０

ライフポイントを回復した亨は、月影に向かって言い放った。

「月影、お前言ったよな？　俺の『ブラック・マジシャン』が雑魚だと……」

「ッ！？」

「確かに『ブラック・マジシャン』は効果を持たない通常モンスターだ。　だがな！！　どんなカードだろうと、そのカードに秘めら

れた可能性を引き出してやるのが、決闘者（デュエリスト）だ！！」

「ヒィッ！？」

「今、それをお前に魅せてやる！！　レベル７『ブラック・マジシャン』に、レベル２の『レアル・ジェネクス・コーディネイター』をチューニング！！」

「なッ！？　テメェのエースを、シンクロ素材にするだと！？」

『ブラック・マジシャン』と『レアル・ジェネクス・コーディネイター』、２体のモンスターの星が一つになる。

「黒き機神の名において命ずる……絶対強者よ、我が下へ集え！！」

……カッ！！

「シンクロ召喚！！　起動せよ！！　『レアル・ジェネクス・クロキシアン』！！」

【レアル・ジェネクス・クロキシアン】
星９／闇属性／機械族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
「ジェネクス」と名のついたチューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するレベルが一番高いモンスター１体のコントロールを得る。

亨のフィールドにブラックメタルの装甲を纏った、機関車の様なマシンが出現した。

「なッ……何だ……コイツはッ！？」

「『レアル・ジェネクス・クロキシアン』の効果を発動する！！
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上のレベルが一番高いモンスターのコントロールを得る！！」

「なッ……何だとォオ！？」

現在、月影のフィールドにはモンスターは2体。

【太陽龍インティ】星8
【太陽の神官】星5

このままでは月影の『太陽龍インティ』は、亨のコントロール下に置かれてしまう。

月影は舌打ちし、『レアル・ジェネクス・クロキシアン』の効果にチェーンする形で、自分の場に伏せてあった1枚の伏せカードを発動した。

「チィッ！！　俺の『太陽龍インティ』はゼッテーに渡さねェぞ！！　トラップ発動！！　『デストラクト・ポーション』！！」

【デストラクト・ポーション】
［罠カード］
自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

「『デストラクト・ポーション』は、自分のモンスター1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分だけ、俺のライフを回復する！！　俺は『太陽龍インティ』を破壊！！」

ズガァッ！！

月影の『太陽龍インティ』は爆発し、破壊され墓地へ送られた。

【月影陽一】
ＬＰ／　２８００　→　５８００

【西条亨】
ＬＰ／　５３５０

自分のモンスターを破壊する月影の行為に対し、亨は心が痛んだ。

「月影……お前……ッ！！」

「テメェに俺のエースは、指一本触れさせねェ！！　それにな、『太陽龍インティ』は破壊されて墓地へ送られたんだ……。次のターン、墓地のインティの効果によって、墓地から『月影龍クイラ』が復活する！！　破壊なら何だって良いんだよ！！　それが俺にとって、優位に働くならなァ！！」

豪語する月影。

しかし、亨は一瞬だけ、どこか悲しげな表情を見せた。

「……月影、お前のモンスターが泣いてるぜ？」

「ククッ！！　カードに涙も糞もネェよ……！！」

『太陽龍インティ』を破壊によって守った月影は、少し余裕が持て

たつもりでいた。

しかし、現実は非情である。

亨の言い放った一言が、月影の安堵を粉々に打ち砕いた。

「クロキシアンの効果は対象をとらない効果だ……。インティがお前のフィールドから消えた今、お前の『太陽の神官』が、俺のコントロール下に置かれる」

「なッ！？」

『太陽の神官』が亨のフィールドに移動する。

亨のフィールドには、計5体のモンスターが並んだ。

【太陽の神官】
ＡＴＫ　１０００

【アーカナイト・マジシャン】
ＡＴＫ　４００

【レアル・ジェネクス・クロキシアン】
ＡＴＫ　２５００

【ジャイアントウィルス】
ＡＴＫ　１０００

【ジャイアントウィルス】
ＡＴＫ　１０００

その攻撃力の合計は５９００。

【月影陽一】
ＬＰ／　５８００

【西条亨】
ＬＰ／　５３５０

月影のフィールドに壁となるモンスターはいない。

伏せカードもない。

このターン、亨のモンスター達の一斉攻撃が決まれば、月影は敗北してしまう。

「ぅ……嘘……だろ……ッ！？」

目の前の突きつけられた現実に、思わず月影は一歩後ろへ後ずさる。

しかし、亨はこのまま終わらせなかった。

「月影……最後に魅せてやる……本物の【太陽】をな！！」

「太陽……だと……！？」

月影には亨が何を言っているのか意味が分からなかった。

【太陽】？

インティの事か？

しかし、仮に『太陽龍インティ』だとしても、亨のモンスターゾーンは埋め尽くされている。

新たなインティのシンクロ召喚など、出来る筈もない。

ならば亨の言う【太陽】とは、一体何なのか？

月影はそこで、亨の手に握られた一枚のカードが目に入った。

「……ま、まままさか……そのカードは……ッ！？」

驚愕の眼差しで怯える月影。

その表情を見て、拓夜は隣に立つ結締に尋ねてみた。

「本物の太陽って……結締さん、亨さんは一体何を「拓夜！」

拓夜の質問を聞き終える前に、結締はフィールドを見つめながら真剣な表情で言った。

「西条ちゃんから目を離すな……来るぜぃ、２体目の【神】がな！

！」

※

亨は一枚の手札を漆黒の雲が覆う夜空に翳した。

「『ジャイアントウィルス』２体、そして『アーカナイト・マジシャン』の魂を天に捧げ……！！」

カッ！！

ゴゴゴゴゴ……！！

カッ！！　カッ！！　カッ！！

夜空を覆う漆黒の暗雲から何本もの眩い光の柱が東区中に突き刺さる。

（な……何だ……この光は！！）

怪奇現象にも似た光景を目の当たりにし、月影は視線を空から離せずにいた。

月影だけではない。

ＯＣＧ研究会のメンバーだけでなく、フィアーズのメンバーも皆が皆、空から降り注ぐ光から目を離せずにいた。

「ばッ……馬鹿な……この光……真夜中に太陽が出現したとでもいうのか！！！？」

声を荒げる月影。

亨は夜空に翳した１枚のカードを、

（……月影！！　お前の中に巣喰う狂気の闇ーーー【神】の降臨によって打ち砕く！！）

「出でよーー…『ラーの翼神竜』！！」

カッッッ！！！！

ゴゴゴゴゴゴ……！！！！！

暗雲と言う名の闇を引き裂き、天より現れし幻神獣。

その一角を担う太陽の神。

黄金の巨大な二翼。

黄金の巨大な肢体。

黄金の巨大な掻ぎ爪。

黄金の巨大な嘴。

そして、額に輝く蒼く澄んだ結晶（クリスタル）。

夜空を太陽の光で照らす、まごう事なき神が、西条亨の手によりその姿を現した。

【ラーの翼神竜】
星１０／神属性／幻神獣族
ＡＴＫ　？
ＤＥＦ　？
［効果］
このカードは特殊召喚できない。このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター３体をリリースして召喚しなければならない。このカードの召喚は無効化されない。このカードが召喚に成功した時、このカード以外の魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。このカードが召喚に成功した時、ライフポイントを１００ポイントになるように払う事で、このカードの攻撃力・守備力は払った数値分アップする。また、１０００ライフポイントを払う事で、フィールド上のモンスター１体を選択して破壊する。

「……凄い……これが……ラー……！！」

神から放たれる威光を浴び、思わず呟く拓夜。

そして葉月は、ＯＣＧ研究会のメンバーの中で初めて神をその目にし、その黄金に輝く姿から目を離せずにいた。

（これが……世界に三枚しか存在しないと言われる……幻の……！）

「『ラーの翼神竜』！！　その力を開放せよ！！」

【月影陽一】
ＬＰ／　５８００

【西条亨】
ＬＰ／　５３５０　→　１００

亨のライフが一気に残り１００ポイントに減少する。

その事に皆が驚きの声をあげると、亨はその訳を話し出した。

「ラーは三幻神の中でもじゃじゃ馬でな……ラーの攻撃力・守備力は、残りライフを１００ポイントになるように払い、払った数値分だけ、攻撃力・守備力をアップする！！」

【ラーの翼神竜】
ＡＴＫ　？　↓　５２５０
ＤＥＦ　？　↓　５２５０

「こッ……攻撃力５２５０だとッ！！」

月影はただただ、力無く立ち尽くすのみだった。
そして亨はバトルフェイズへと突入し

「いくぞ……『太陽の神官』で、月影にダイレクトアタック！！」

【月影陽一】
ＬＰ／　５８００　↓　４８００

自身のモンスターからダイレクトアタックを受けたにも関わらず、
月影はただただ唖然としていた。

そして遂に、亨のフィールドに降臨した【神】が動き出す。

「神（ラー）の攻撃！！」

『ラーの翼神竜』はその黄金の翼を羽ばたかせ、光輝く夜空に舞い上がる。

その瞬間、ラーの黄金の体を紅蓮の炎が包み込み、その姿をある形へと移し替えた。

その姿とはーーーー

「燃ゆる魂の業火！！　この神の一撃に込める！！」

「ーーーーッ！！」

紅蓮の炎を纏った『ラーの翼神竜』は月影の頭上に舞い降りた。

そして

「不死鳥ーゴッド・フェニックス！！！！」

カッッ！！！！

不死鳥となったラーの一撃が月影に裁きの火柱となって襲い掛かった。

「グァァアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

【月影陽一】
ＬＰ／　４８００　→　０

太陽　（後書き）

とりあえず、予定としてはこの話で今年の更新は終わりです。

誠に勝手な都合で、本当に申し訳なく思っております。

試験勉強しながらでも、この作品の下書きは息抜きの合間にちょくちょく書いていくつもりですので、連載を辞める訳ではありませんので、勘違いだけはしないで下さい。

さて、では今回の作中に登場した【西条亨】のデッキを紹介したいと思います。

デッキタイトル
【俺の相棒】４４枚

［モンスター］２２枚

ラーの翼神竜
オベリスクの巨神兵
ブラック・マジシャン　２
クイック・シンクロン
魔導戦士ブレイカー　２
ジャンク・シンクロン　２

見習い魔術師　3
ジャイアントウィルス　3
クリッター
シンクロ・フュージョニスト
執念深き老魔術師
レアル・ジェネクス・コーディネイター
メタモルポット
ダンディライオン　2

［魔法］14枚

古のルール　2
召喚師のスキル
貪欲な壺
闇の誘惑
ミラクルシンクロフュージョン
シンクロキャンセル
調律　2
ディメンション・マジック
ブラック・ホール
精神操作
死者蘇生
黒・魔・導

［罠］8枚

生命力吸収魔術
正統なる血統

魔法の筒　2
聖なるバリアー ミラーフォース ー
停戦協定
リビングデッドの呼び声転生の予言

［エクストラデッキ］
アーカナイト　2
覇ーカナイト
スターダスト
ジャンク・ウォリアー
ジャンク・デストロイヤー
ジャンク・アーチャー
ニトロ・ウォリアー
レアル・ジェネクス・クロキシアン
残り6枚はお好きにドゾ

ハッキリ言って、殆どネタです。

しかし、意外とリクルーターが多く、案外壁モンスターには困りません。

初手の手札に被ったら涙目ですが……。

このデッキ、アーカナイトがポンポン出ます。

見習いから繋いでフュージョニスト、そしてジャンク・シンクロンを召喚。

そこからは小説の内容通りに展開できます。

そして意外に役に立つのがコチラ！！

【シンクロキャンセル】

これはフィールド上の表側表示のシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻す魔法カードですが、基本的な使い方としてはアニメみたいに自分のシンクロモンスターに使って素材を特殊召喚します。

その素材を利用して、神召喚の生け贄にするもよし！！

はたまた相手シンクロモンスターをエクストラデッキに戻すだけでもよし！！

相手によっては刺さります。

勝手も負けても相手と自分が楽しいデュエル。

それがヤッパリ一番です！

皆様からの感想、お待ちしてます！

別にラーいらねぇとか言わないで下さいね？

一度、マジで弟のリチュアデッキにラーの攻撃力７４００で焼き尽くしましたからｗ

夢は諦めなければ、マジで叶う事が、神を使って身に染みました。

Next stage

※

俺がデュエルを初めて知ったのァ高校生に入ってすぐだった。

それまでカードゲームなんざ興味なかったし、むしろガキ共の玩具としか見ていなかった。

俺はカードゲームをしているヤツ等が低弱なヤツ等に見えて仕方なかった。

俺ァ中学生時代は北区じゃァ名の知れた不良だった。

気に喰わないヤツは直ぐに捕まえてボコッたし、欲しい物があったら、俺が一言周りの連中に声をかけりゃァそれは直ぐに俺の下に集まった。

俺の言う事は絶対だ。

俺の存在はこの世界の王だ。神だ！

そぅ、思い込んでいた……。

あの頃の俺ァ、世間を知らない、社会を馬鹿にしたガキだったんだ……。

「よーし！僕のターンだ！ドロー！」

あれは俺が高校2年の夏休み前の頃だった。

不良学生生活を満喫していた俺ァ、休み時間にァ教室に居る事ァ殆どなかったが、何故かこの頃は特に何かがしたい訳でもなく、教室の自分の席で気だるそうにしていた。

「ダイレクトアタック！」

「うわっ！？　ちくしょ……負けた」

普段、クラスの連中とは連まない俺だからか、普段の教室内の休み時間なんざ、連中がどう過ごしているか知らなかった。

さっきから机を合わせて何やらカードゲームをしていやがる連中の声が、やけに耳に入ってきた。

（チッ……ウゼェ……）

カードゲームなんざ、ガキ共のする遊びじゃねェか。

気だるく感じていた現状にイライラしていた俺ァ席を立ち上がり、
カードゲームをしていやがる連中の所へ向かい

「……おィ、テメェ等」

「あっ、つ……月影くん……」

「さっきからゴチャゴチャうるせェんだヨ……何してやがんだ？
ァア？」

「ヒィッ！？　ご、ごめんなさい！！」

俺にビビった糞共が慌ててカードを片付けようとしたその時だった
……。

「……ん？　何だァ、コイツァ？」

糞共が片付けているカードの中に、ついつい気になった二枚のカードを拾い上げた。

そのカードこそ

「あっ！？　そのカード……！！」

「ほぉ～。【太陽龍インティ】と……【月影龍クイラ】？」

太陽に月、ねェ……。

「クックッ！！　おィおィ、カードにも俺と同じ様な名前のヤツがあんのかよ？　なかなか面白れェじゃねェか」

「え、あ……うん」

俺の反応が予想外だったのか、糞共は呆気にとられて俺の事を見ていた。

月影陽一。

【月影】＝【月影龍クイラ】

【陽一】＝【太陽龍インティ】

気になった俺ァ、呆気にとられている糞共の一人に尋ねてみた。

「なァ、俺ァカードの事なんざ分からねェから聞くケドさ……この二枚のカードは強ェエのか？」

「え……？」

またまた俺の質問が意外だったのか、糞共の一人はキョトンとした表情で俺を見てきやがった。

「オィ、どうなんだよ？」

「え、あ……うん。強いよ。　その二枚のカードが揃ったら、対策しないとかなり強いよ」

「ほぉ～。強ェエのか……ククッ！！」

その時だ……、あの時の俺ァ、自分でも信じられない発言をした。

「なぁ、俺にカードを教えろよ？　コイツ等は強ェエんだろ？　どんだけ強ェエんか教えろよ」

「え？」

「え、じゃねェよ？　この俺が教えろって言ってんだ！！　分かり易く、早く教えろ！！　あ、そうそう。　このインティにクイラ、もう俺のモンだからな？」

「ぇえっ！？」

心のどこかでは退屈してたんだ。
新たな刺激が欲しかったんだ。

だからだろうな、カードを教えろなんて……。

カードを知り、デュエルを知り、俺ァ新しい自分に気付いた。
いや、新しい道を知ったと言う発言が正しいか。

デュエルモンスターズをやり始めて知った事だが、どうやらデュエルってのァ金になるらしい。

テレビ番組でトリティニーグループがスポンサーのデュエル番組。
そこにァデュエルのプロがいる。

他にもデュエルの大会で賞金が出たり、プレミアが付くカードが手には入ったりするらしい。

「何だよ……案外、カードってのァ馬鹿に出来ねェじゃねェか……
ククッ！！」

俺もいつか、プロになりてェ。

その為にァ【力】が必要だ。

誰にも負けない、圧倒的な力が！！

デュエルを始めた俺ァまず、片っ端からデュエルを申し込んだ。

どいつもこいつも雑魚だった。

俺ァ負けなしだった。

棗絵里香と如月結衣とは、その過程で出会った。

俺が北区でデュエルした相手の中で、最も苦戦した二人だ。

「俺の目的は単純だ……。デュエルで、カードで最強になる事だ！！　テレビとかネットじゃ、プロがどうとか、大会がどうとか、何たら研究会がどうとか騒いでやがるが、俺ァそいつ等をまとめて全部ぶっ叩く！！　だが、俺一人じゃァ流石に厳しい部分もある……。そこでだ、お前達二人の力を貸して欲しい。俺が作るチームに入っ

てくれ！！　そして俺が、俺達が最強になる！！」

「……面白そうね。　その話、乗ったわ」

「陽一サマの為でしたら、喜んで力になりますわ。　むしろデュエルでの支えだけでなく、陽一サマの私生活の支えにもなって……、あら？　陽一サマ？　どちらに行かれましたの？　って！？　ちょっとわたくし一人を置いていかないで欲しいんですの！！」

こうして俺達のチームが完成した。

北区の連中を圧倒的な力で完封し、まずは北区の頂点に立った俺達ァ、北区の連中から恐れられていた。

ついたチーム名が【恐怖】

つまりは【フィアーズ】だ。

※

「グァァアアアアアア……！！！！」

「よッ、陽一サマァア！！」

「リーダーッ！？」

神の一撃を受けた月影陽一は、けたたましい悲鳴をあげながら地面に膝をついて倒れた。

ゴバウッ！！

不死鳥と化したラーはその姿を消し、最後にフィールドに立っていたのは西条亨であった。

棗絵里香に如月結衣の二人は倒れた月影の下へと走り、必死になって呼びかけていた。

「陽一サマッ！！　陽一サマッ！！」

「リーダーッ！！　起きてよ！！　リーダーッ！！」

二人がいくら呼びかけようが、月影からの返事はない。
目も開けず、体も動かさず、指先一つも動かさない月影の姿に、棗に如月の二人は同時に西条亨を睨みつけた。

「くッ！？　よくもリーダーをッ！！」

「西条亨ッ！！　一体、陽一サマに何をしましたのッ！！」

二人の月影に対する気持ちが言葉の矢となり、亨を貫く。

亨はゆっくりと一歩、二歩と前へと進み出し

「神の攻撃は、相手のライフを削るだけじゃなく、相手の精神にもダメージを与える。　今夜一晩は、目を覚まさないだろう」

「……っそれが、神のカードの力ですの……っ！？」

亨は棗と如月の前に立つと、腕を組み

「ところで、このデュエルが始まる前に、そちら側から持ち掛けてきたアンティルールがあった筈だ」

「っ！？」

「くッ！？」

亨の言うアンティルール。

それは月影が持ち掛けた事だ。

フィアーズが勝てば、西条拓夜にマナを自分達のチームに引き込もうという内容。

そしてＯＣＧ研究会が勝てば

「俺達が勝てば、お前達に好きな命令をする事ができる……だったが、さて……どうするか」

「ーーーーッ！！」

「くッ！！」

悔しそうに俯く棗と如月。

まさか自分達が負けるとは思ってなかった。

まさか自分達のリーダーが負けるとは思ってなかった。

「ん～～、そっちは俺達の仲間を引き込もうとしたんだもんな～～。コッチもそうしようかな～～？」

「ッ！？　……それだけは！！」

「お待ちなさい、棗さん！？」

棗が言おうとした所を如月が止め、キッと亨を睨みながら立ち上がる。

「わたくし達はデュエルに敗れましたの。敗者は勝者の命令には絶対に従わなければならない……！！　例え、結果がどうであれ……

わたくし達はこの現実を受け入れなければなりませんの……」

「……結衣」

如月は一歩前へ進み、亨の正面に立つ。

そして

「西条亨ッ！！　フィアーズから誰かを引き抜くというのであれば、このわたくしを引き抜きなさい！！　決して、陽一サマや棗さんには手出しはしないで下さいましッ！！」

「ゆ、結衣……！？」

「陽一サマは最強のデュエリストチームをお作りになられる御方、まだ陽一サマの夢は、始まったばかりですの！！　本当は惜しいのですが、陽一サマを傍で支えていく役目は、棗さんに任せますわ。陽一サマの夢を……守って、叶えて下さいまし……！！」

「な、何を言っているのよ結衣！？　リーダーは言ってたじゃない！！　俺達が最強になるんだって！！　俺達の中に結衣も入ってなきゃ、それはリーダーの夢にはならないわよ！！」

「でも、そんなことを言われましても……わたくし達は……」

「あ、あの～、何かしんみりとした空気の中、悪いけどさ？　まだ引き抜くなんて確定してないからな？」

亨がどこか気まずく言った一言に、棗に如月の二人は「へ？」と、目を丸くする。

「聞いた所、月影にも夢があるんだろ？　なら、お前達二人は月影の夢を仲間としてしっかりと支えてやってくれ」

「……それが、西条亨……あなたの言うアンティ、という事で宜しいんですの？」

如月は最後の確認の意味で亨に尋ねる。

棗は不安げな瞳で、亨を見つめていた。

「ああ、それがアンティで構わない。　その高みを目指していくのが、俺達デュエリストだ。　その途中で再び俺達と戦う事になるかもしれないが、俺達も更なる高みを目指すぜ？」

亨の発言に、後ろから成り行きを見ていたＯＣＧ研究会のメンバーは「やっぱりな」といった表情で、それぞれに頷いた。

「……本当に、宜しいんですの？　陽一サマが目を覚ませば、もしかしたら再びあなた方にデュエルを申し込まれるかもしれませんわよ？」

「フッ、それでも良いさ。　月影に宜しく言っておいてくれ」

亨はそう言うと、仲間の所へと向かって行った。

その背中を見て、如月は思わずポツリと呟いた。

「……ふぅ、かないませんわね」

「……結衣」

「普通に考えれば、陽一サマの出したアンティルールは横暴と言われてもおかしくない内容でしたのに……。　それを、何のお咎めもないなんて……」

「むしろ、リーダーの夢を応援してくれてたし……」

「思い知らされましたわ。　ＯＣＧ研究会……あのチームには、わたくし達には無い何かを持っている」

遠い何かを見つめる瞳で、如月はＯＣＧ研究会のメンバーを見つめる。

そんな如月に

「……なら、作れば良いと思う」

「……棗さん」

「あのチームにあって……自分達に無い何かを、私達で見つければ良いと思う。　きっとそれが、リーダーの夢にも繋がっていく」

「……そう、ですわね」

二人の前には皆に囲まれ、それぞれに笑いあうＯＣＧ研究会の姿が。

きっと変われる。

自分達は、前へ進める。

もう【恐怖】なんて名前はいらない。

棗に如月の二人は、その胸に新たな風を吹かせていた。

※

フィアーズとのデュエルが過ぎ、一週間が経った頃……。

「葉月ーー！！　一緒に帰ろーー！！」

放課後の教室に烏丸葉月を訪ねて、隣のクラスから桜朱美が顔を出した。

「朱美……」

「ほら、この間言ってたじゃん？　駅前の新作スイーツを食べに行こうってさ！」

桜朱美の話を聞いて烏丸葉月は、ああ……そういえばそんな事を昨日言ってたわね、と思い出した。

「クレープやケーキなんか食べてさ、日頃の鬱憤を晴らそうよ！」

意気揚々と誘う桜の話を聞いていた結城雅一は、一緒に話していた西条拓夜を肘でつつきながら

「拓夜ちゃん、拓夜ちゃん！！」

「ん？」

「どうやら烏丸さん、隣のクラスの桜さんと一緒に駅前のスイーツを食べに行くみたいだけどさ、俺達も混ざっていかないか？」

葉月に気がある結城は、少しでも葉月に近付きたい為に拓夜に尋ねてみる。

「ん～～、俺はパス」

「なっ！？」

「だって俺は花穂を待たせてるし」

「くっ！！　このリア充めェエ……！！　ふんッ！！」

「痛ッ！？」

拓夜に嫉妬した結城は、その憤りを拓夜の足を踏みつけるという行動で表現した。

「なら拓夜ちゃんの彼女も一緒で良いからさ！！　頼むから一緒に来てくれよ！？」

「悪いけど結城、俺はもうアイツのそう言った事に関わるのは辞めにしたの。ぜってーに俺がロクな目に遭わないから」

「この薄情者ッ！！」

結城の発言をスルーする拓夜は、荷物の鞄を肩に担ぎ

「結城、俺にばっか頼らないでさ……勇気だして自分から話して行けよ？　でないとアイツだって、お前の事を見てくれないぞ？」

「なん……だと……！！！？」

拓夜はそれだけ言うと、結城に手を振って教室から出て行った。

「チックショウ！！　こうなりゃ、当たって砕けろだ！！」

確かに拓夜の言うことにも一理ある。

自分から動かなければ、愛しの君が振り返ってくれる訳がない！！

結城は勇気を振り絞って、二人の所へと向かった。

※

「う～～ん……」

烏丸葉月は迷っていた。

友人の桜朱美と一緒にスイーツ巡りもしたい。

しかし、今の葉月の頭の中にはそれと同じ位に、とある人物に会いたかった。

（どうしよう……別に朱美の言うスイーツは、明日でも行けるのよ

ね……でも）

でも、頭に浮かぶ人物とは、いつでも会えるという訳ではない。

今日は西条亭宅にて、ＯＣＧ研究会のミーティングがあるのだ。

塾もなく、ＯＣＧ研究会のミーティングが重なる日は、葉月にとっては滅多にない。

そのミーティングに出れば自ずと、気になる人物に会える。

その事を踏まえて、頭の中でスイーツとＯＣＧ研究会を天秤に掛けると、ゴトッと一瞬で天秤が傾き、結果が出た。

「朱美、悪いけど今回は「お～～い！　烏丸さん！　桜さん！」

葉月の言葉を途中で遮るタイミングで、結城雅一が二人に話しかけてきた。

結城は二人の前に立つと

「聞こえたぜ？　駅前のスイーツを食いに行くんだろ？　俺も一緒

しても良いかな？　俺もスイーツ大好きなんだよ！！」

「ん？　結城か……どうする葉月？　アタシは別に構わないけどさ？」

桜は結城の狙いを知っていた。

結城が葉月の事が好きだという事も知っていたし、彼に頼まれて葉月を誘い、一緒にカラオケにも行った事がある。

確かその時に気恥ずかしさから西条拓夜を誘ったが、第七祭がどうとかで断られたっけ？

そんなこんなで桜は、結城が自分達に同行する事には承諾をした。

すると葉月の口からは

「あ、あの～悪いんだけどさ、朱美……今回はアタシ、パス」

「え？」

「なっ！？」

葉月から拒否の発言に思わず硬直する結城。

「今日はさ、アタシ……どうしても外せない用事があるのよね～～。だからさ、また今度って事で」

じゃね、と言いながら教室から出て行く葉月。

取り残された桜に結城は、いや、特に結城はショックの余りに

「そ、そんな……！？　一体どういう事だ……！？　俺が入り込んだから、烏丸さんは……！！」

「ちょ、落ち着きなって結城！？」

その場で崩れ落ちる結城を見て、桜は葉月の事を考える。

教室を出て行く時の葉月の表情の奥には、女の自分だからこそ解る何かがあった。

第七祭の時に西条拓夜に振られて、一時期は落ち込んできたが、最近になって彼女の表情に前以上の明るさが戻ってきたようにも思う。

（外せない用事……まさか……！？）

気になった桜は結城の首根っこを掴み

「ほら、結城！！　いつまでボサっとしてるのさ！？　アタシ等も行くよ！！」

「へ？　行くってどこに……？」

「決まってんじゃん！！」

桜は教室の窓から、校庭を嬉しそうに走る葉月を目で追いながら

「追けるんだよ！！　葉月の跡をさ！！」

※

烏丸葉月は校門を出て、その足を西条亨宅へと向けて進み出す。

これから西条亨宅にてＯＣＧ研究会のミーティングがある訳なのだが、葉月はそのまま一直線に西条亨宅へと向かう訳でなく、その途中にあるスーパーマーケットに寄っていった。

そして鞄から、今日の広告チラシを取り出して買い物かごを掴み、目的の商品を次々と品定めしていく葉月の表情は真剣だった。

自分の中で気になるあの人に少しでも自分を見てもらいたい気持ちから、葉月はこのスーパーマーケットに寄ったのだ。

しかし照れや気恥ずかしさが混じり、なかなか素直にそれを口に出す事ができない。

「う～～ん、肉は挽き肉の方が良いのかな？」

色々と献立を考えながら店内を歩く葉月。

その後を追けて、桜朱美に結城雅一の二人はゴクリと生唾を飲み込みながら、葉月の様子を伺っていた。

「烏丸さん……大事な用事って、買い物の事だったのか？　んなもん俺が荷物を持ってあげたのに……」

「……」

そんな二人の様子に気付く事なく、葉月は店内を物色していく。

一通り店内を周り終えた葉月の買い物かごの中は、結構な量の食材が入っていた。

（うわっ、結構な量になっちゃった……何気に重たいし……）

そんな事を思いながらレジで清算し、ビニール袋の中に買った食材を詰めていく葉月。

「と、とにかく……これで亨さんの「へ？　俺が……何？」

「えっ？」

ついつい口から出た名前に、後ろからいきなり声をかけられた葉月は後ろを振り向くと、そこには

「奇遇だな烏丸さん。烏丸さんもここで買い物してたんだな」

「へ、な、なな何でアンタがここに居るのよ！？」

そこにはＯＣＧ研究会の先輩でもあり、最近気になるその人、西条亨が立っていた。

「おぃおぃ、仮にも俺は先輩。　ま、でも呼び方は何だっていっか」

「あぅ……」

言葉遣いを指摘され反省する葉月だったが、それでも頭の中はパニックだ。

「そ、それよりも何でここに……？」

「あぁ、今日これからミーティングがあるだろ？そのお茶請けの菓子を買いに来てたんだ。そっちは？　晩御飯の買い物か？」

「えっ！？」

自分の買い物について聞かれた葉月は、どう答えようか迷った。

本当は亨の為に、自分に振り向いて欲しくて買った食材だ。

名付けて手料理大作戦だったのだが、本人を目の前にしてそんな事を言える葉月ではない。

そんなこんな考えて、葉月が出した答えは

「こ、これは……そう！マナさん！」

「……マナ？」

「そうよ！　前にマナさんが私の料理を食べたいって言ってたから、今日ミーティングに行くついでに、私が料理をしようかなって……か、勘違いしないでよ！　これはマナさんの為であって、べ、別に亨さんの為とか、亨さんに食べてもらいたいとかじゃないんだから！　他に理由なんてないんだから！」

しどろもどろに言う葉月だったが、亨は口元に「フッ」と笑みを浮かべ

「そうか、悪いな烏丸さん。なら今夜の料理は、俺も手伝うよ」

「へ？」

「マナの為にこれだけの食材を用意してくれたんだろ？　ありがとな。手伝ってやる事しかできないから、俺も……って、お～～い？　烏丸さん？」

まさかまさか、こんな形で亨と一緒に台所に立てるとは思ってなか

った。

葉月は亨に顔を見られないように背中を向け、夢心地に浸りながら「ふにゃ～～～～」とアヘ顔を作っていた。

「なッ……何なんだよこれはァッ！！」

「ゆ、結城！　落ち着いて！？」

商品棚の陰で葉月の様子を伺っていたら、葉月は自分の知らぬ、知り合いらしき人物と親しげに話しているではないか。

これには結城だけでなく、桜も驚きを隠せなかったが、ある程度予測通りだった。

「一体誰なんだよアイツは！？」

「まさか葉月……あの男に会うのが目的だったとか……？」

「そんなッ！？」

桜がポツリと呟いた言葉にショックを受ける結城。

悔しいが、確かにそうかもしれない。

何故なら、あんなにもアヘ顔の葉月なんて、学校では見たことがない。

結城がその場に崩れ落ちていると

「あ、二人が移動するよ!?　って結城!!　男だろ!?　シャキッとしろ!!」

桜に引っ張られながら、結城の心は上の空だった。

※

「ただいま～」

「お、お邪魔します」

西条亨と烏丸葉月の二人が西条亨宅に着くと、部屋の奥からマナに結締、白石の三人がそれぞれに言葉で出迎えた。

葉月が部屋に入ると、パソコンの前に座っている結締の横にいたマナが、亨が持っていたビニール袋を見て

「遅いんだよ、さいじょお！　さいじょおの帰りが遅いから、冷蔵庫の奥にあったプリンは、私が美味しく食べちゃったんだよ！」

「なっ！？　お前食ったのか！！　ぬぁあ……っ、大事に隠してた最後のプリンが……」

「ところでさいじょお、さいじょおが持ってる袋の中はなに？　飛び出してる大根は、流石にお菓子とは言えないんだよ」

マナは亨が持つ袋を覗いてげんなりした。

お菓子を期待していた為に、ある意味当然の反応でもある。

「早とちりするなマナ。これは烏丸さんが、お前の為に料理を作ってくれる為の食材だ」

「えっ！？　本当！！」

「なにっ！？」

亨の言葉に反応するマナに白石。

マナは嬉しさの余り、葉月の手をガッシリと掴み、目をキラキラさせながら

「ありがとう！はづき！　はづきは凄く偉い子だよ！！」

「は、はは……ども……」

「ふぅん……、西条よ」

「ん、どうした？白石」

「今夜の俺の家の食材なのだが、生憎と材料がなくてな……すまないが、俺も今夜ここで夕食を一緒にしても良いか？」

明らかに葉月の手料理が食べたいが為の発言をする白石。

「別に良いけど、飯は自分でコンビニでも行って買ってこいよ？」

「馬鹿者がァア！！　それではまるで意味がないだろうがァア！！」

「グェッ！？」

思いっきり的を外した発言をした亨に、白石のフライングニーキックが炸裂した。

「ならば西条よ！！　俺とデュエルだ！！　勝った方が、美少女の手料理を食べれるというルールで、この俺とデュエルをしろォオ！！」

「は？　ちょっ！？　待て白石！？　俺はまだ何もーー」

言うが早く、白石は決闘盤とデッキを用意して亨を引きずりながら外に出ていった。

まるで嵐のようなやり取りを目の当たりにした葉月は、ただ唖然とするしかなかった。

※

東区の街中の一角で、結城雅一と桜朱美の二人は肩で息をしながらうなだれていた。

スーパーマーケットで烏丸葉月と見知らぬ男、もとい西条亨を追おうと外に出たは良いが、葉月は亨の車に乗り、そのまま東区の街中へと消えていった。

車の速度に追いつこうと必死になって走ったは良いが、亨の車は偶然にも一度も信号に捕まる事なく走り去ってしまったのだ。

今回の収穫は、葉月の知り合いに気になる男がいる？という事だけであった。

「ちっくしょぉ……一体何なんだよ、あの野郎は……！！　桜さん、アイツの事で何かしらないか？」

「葉月の事でそこまでは知らないわよ。　でもまぁ、葉月の事で知

らない事があるのは当然じゃん？」

桜は足を組み、ベンチに座りながら

「仮にあの男が、結城の知らない葉月の別の学校の友人だったとしてよ？　結城にだって、葉月の知らない人間関係を持ってるでしょ？」

「そりゃ、まぁ……けどさ！」

「誘ったアタシが言うのも何だけど、これ以上の詮索は止めにしましょ？　結城が本当に葉月を想っているなら……ね？」

「……ちくしょぉ……」

冷えた風が東区の街を吹き抜ける。

結城の想いは、訪れる冬の乾いた風に乗って流れていった。

※

結締智恭は西条亨宅のパソコンのキーボードを軽快に弾きながら

「葉月ちゃん、拓夜ちゃんに成瀬ちゃんの二人は来ないのか？」

白石直也と西条亨が出ていった先を唖然としていた葉月は、ハッと我に返り

「いえ……そんな事は聞いてないケド……？」

「ふ～～ん、おかしいぜぃ？　何時もならもうとっくに着いてる頃の時間なんだが……どこで油を売ってるんだか」

「……」

一人、ＯＣＧ研究会のサイトの更新をこなす結締の話を聞いて、葉

月が時間を確認すると、夕方の6時を過ぎた頃であった。
確かにこの位の時間には、拓夜に成瀬の二人はここに到着していてもおかしくない時間だ。
学校から西条亨宅まで、片道十五分程で歩いてでも到着する。

「……何やってんだか」

どうせきっと、二人でイチャイチャしているのだろう。
そう思った葉月は買い物袋を持ち、台所へと向かうのであった。

※

西条拓夜に成瀬花穂の二人は現在、西条亨宅とは離れた、東区の北の方に位置する神社の前に来ていた。
別に二人は、この神社にお参りに来た訳ではない。
原因は二人の前に立つ少女、北区のデュエリストの如月結衣に連れ

て来られたのだ。

「如月さん、何だよ話って？」

拓夜は神社の鳥居にもたれ掛かる如月に尋ねた。

「わざわざ花穂の携帯に連絡して……どうやって花穂の番号を知ったんだよ？」

「別に……。今のご時世、他人の携帯番号という情報は人伝でも簡単に手に入れる事ができますのよ？　というより、わたくしは成瀬さんだけを呼び出した筈ですが、何故あなたまで一緒に？」

「それは、私がお願いしたんです。　如月さんの目的が分かりませんでしたし」

成瀬の言葉に如月は「ま、どちらでも良いですケド……」と言いながら成瀬の前に立つ。

「わたくしの用件はただ一つ。成瀬さん、わたくしとデュエルをして欲しいんですの」

「え？」

「は？」

如月の用件について疑問に思う二人に対し、如月は二人分の決闘盤を鞄から取り出しながら

「一週間前のわたくしとのデュエル……。実はあの時に使用した【ウィジャ盤】は、わたくしのデッキではありませんの」

「そうなんですか！？」

「どういう事だ？」

「簡単な話ですの。あの時の陽一サマはチームが勝つ事を優先に、相手の苦手とする……或いは相手が余り経験した事がないデッキを用意して、それをわたくしに託されましたの」

「……そう、だったんですか」

「……」

如月は成瀬に決闘盤の一つを差し出した。

そして

「あなた方とのデュエルを経て、わたくしにも感じる所がありましたの。成瀬さん……今度はチームどうのこうの関係なしに一人のデュエリストとして、わたくしの挑戦を受けて下さいません？」

「……花穂」

成瀬は差し出された決闘盤と如月の顔を交互に見比べる。

如月の表情は、決意に満ちていた。

成瀬は以前、月影陽一が用意したデッキに敗北した。

理由はどうであれ、自分は負けた。

しかし、まさか相手からデュエルの再戦を申し込まれるとは思って

なかった。

しかも以前に比べ、如月からはトゲトゲしさが余り感じられなくなった気がする。

成瀬はその事が純粋に嬉しかった。

そして成瀬は、差し出された決闘盤を掴み

「分かりました。如月さん……私で良ければ、喜んで相手します！」

「……フフ、ありがとう……と言うべきなのでしょうね。成瀬さん、覚悟して下さいまし！！　今日のわたくしは強いですわよ？」

Ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ　（後書き）

※人物紹介※

【西条拓夜】

東区第七高等学校に通う三年生。

実家は東区の商店街にあるおもちゃ屋さん「サプライズ」。

幼なじみである烏丸葉月の誘いでデュエルを始める事から物語は始まる。

デュエルに関しては、初心者とは思えないデッキ構築やプレイングで葉月の度肝を抜くなど、そのデュエル戦術（タクティクス）は天才レベル。

恋愛に関しては鈍感。

主人公補正ですね。

烏丸葉月と成瀬花穂との三角関係は、成瀬を選ぶ形で終結する。

キッチリとした性格をしており、それは整頓された彼の部屋模様や本編の文化祭での事で分かるだろう。

また、クラスでは人柄かまとめ役になる事が多く、文化祭では見事にクラスメイトをまとめ上げ、喫茶店を切り盛りしていた。

使用するデッキは【Ｄ－ＨＥＲＯ】にシンクロや融合を混ぜ合わせたデッキ。

途中、自分のデッキに自信が持てずに先輩の結締智恭に相談するが、彼の独特なアドバイスにより更なる強さを手に入れた。

代表するカードは

【Ｄｒａｇｏｏｎ－Ｄ　ＥＮＤ】

成瀬　ＶＳ　如月　再び　（前書き）

またまた合間に完成した分を投稿させてもらいます。

しかし、勉強がマジで難しい（涙）

法令やら医療やら・・・

人体基本構造や先天性障害・感染症・免疫異常

消化器・循環器の疾患、呼吸器・泌尿器・内分泌器、骨格・感覚器・神経系・筋の疾患・・・

もう頭の中がぐっちゃぐちゃ。

成瀬　ＶＳ　如月　再び

※

東区の北の外れに位置する神社にて、対峙する二人のデュエリストの姿があった。

成瀬花穂に如月結衣。

二人の腕には、自分のデッキがセットされた決闘盤が装着されていた。

成瀬と共にいた西条拓夜は、二人のデュエルを見守る為に、二人からやや離れた位置に移動する。

（如月さんの話だと、前に花穂とデュエルした時は、本当の自分のデッキではないと言っていたな……一体、どんなデッキなんだ……！？）

拓夜が思うと同時、成瀬に如月の二人はデュエル開始の宣言をした。

「いきます！」

「参りますわ！」

『デュエル！！』

【先攻】成瀬花穂
ＬＰ　／　８０００

【後攻】如月結衣
ＬＰ　／　８０００

二人のデュエルが始まった。

先攻を取った成瀬は、デッキからカードをドローし、先攻プレイを開始する。

「先攻は私からです！　ドロー！　永続魔法『次元の裂け目』を発動します！」

【次元の裂け目】
［永続魔法］
このカードが表側表示で存在する限り、墓地へ送られるモンスターは墓地へ行かず、ゲームから除外される。

ソリッドヴィジョンが作動し、二人の上空に、次元の亀裂が走り、亜空間が生まれた。

「このカードがフィールド上に存在する限り、互いに墓地へ送られるモンスターは全て、ゲームから除外されます！」

「早速きましたわね……！！」

「そして私は、モンスター1体をセットして、ターンを終了します！」

場に永続魔法『次元の裂け目』と、セットモンスター1体を残してターンを終了する成瀬。

そして、後攻の如月のターンが訪れた。

「いきますわよ、わたくしのターン！　ドローですの！」

カードをドローした如月は手札を確認する。

（初手のままでしたら、成瀬さんの永続魔法『次元の裂け目』で詰んでおりましたが……良いカードを引けましたわ！！）

如月は口元にうっすらと笑みを浮かべ、自分のプレイを開始する。

「わたくしはモンスターカード『ライトロード・マジシャン　ライラ』を召喚ですの！」

【ライトロード・マジシャン　ライラ】
星４／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　２００

［効果］
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードを表側守備表示に変更し、相手フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。この効果を使用した場合、次の自分のターン終了時までこのカードは表示形式を変更できない。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを3枚墓地に送る。

如月のフィールドにライラが召喚された。

成瀬は如月の召喚したモンスターに、思わず驚きの声をあげる。

「ラ、ライトロードッ！？」

「な、何だ……その、ライトロードって？」

拓夜は知らないモンスターな為、如月のモンスターを不思議そうに見つめる。

「ライトロードは、全てが光属性で統一された、様々な種族のモン

スター達の総称です……！！　その中でも共通している効果が、墓地肥やしです！！」

「……どういう事だ……！？」

成瀬の簡潔な説明を聞き、怪訝な表情を作る拓夜。

すると、

「外野は黙ってなさいな？　見ていれば分かる事ですの……」

如月は拓夜にピシャリと言い放つと、ライラの効果を発動した。

「『ライトロード・マジシャン　ライラ』のモンスター効果を発動しますの！　攻撃表示のこのカードを守備表示に変更する事で、相手フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊いたしますの！」

如月は、自分と成瀬の上空にある『次元の裂け目』を指差し

「まずは『次元の裂け目』！」

バリィッ！！　と、豪快な音と共に、成瀬の発動した永続魔法『次元の裂け目』が破壊された。

「くッ！？」

「これで墓地にモンスターを肥やす事ができますの。　でもまぁ、おかげでライラは守備表示……。　このターンの攻撃は出来ませんが……」

如月はそう言うと、手札から1枚のカードを掴み

「新たにモンスターを特殊召喚すれば、問題ないんですの！　手札より魔法カード『おろかな埋葬』を発動ですの！」

【おろかな埋葬】

［魔法カード］
自分のデッキからモンスターカード1体を墓地へ送る。その後、デッキをシャッフルする。

「この効果でデッキから『ライトロード・ビースト　ウォルフ』を墓地へ……そしてデッキから墓地へ送られた、ビースト　ウォルフの効果を発動しますの！」

「ッ！！」

【ライトロード・ビースト　ウォルフ】
星４／光属性／獣戦士族
ＡＴＫ　２１００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードは通常召喚できない。このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「ビースト　ウォルフがデッキから墓地へ送られた時、このカード

を特殊召喚しますの！」

如月のフィールドに、攻撃力２１００のパワーモンスターが特殊召喚された。

「なッ！！　何て効果だ……！！」

如月は口元に笑みを浮かべ、バトルフェイズへと突入した。

「バトル！　ビースト　ウォルフで、成瀬さんのセットモンスターに攻撃しますの！」

バコォッ！！と豪快な音と共に、ビースト　ウォルフの攻撃が成瀬のセットモンスターに炸裂した。

「くぅッ！！　戦闘破壊された『異次元の女戦士』のモンスター効果を発動します！」

【異次元の女戦士】
星４／光属性／戦士族
ＡＴＫ　１５００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、そのモンスターとこのカードをゲームから除外する事ができる。

「『異次元の女戦士』を戦闘破壊した、『ライトロード・ビースト　ウォルフ』を、ゲームから除外します！」

「やはり除外ですのね……！！」

成瀬に如月は女戦士とビースト　ウォルフのカードを除外した。
そしてバトルフェイズを終了した如月はメインフェイズに移り

「わたくしは伏せカードを１枚セットして、ターン終了ですの！
そしてエンドフェイズ時、ライラのモンスター効果を発動しますの

！」

如月はデッキの上から3枚のカードを掴み

「ライラが表側表示でエンドフェイズを迎えた時、デッキの上から3枚のカードを墓地へ送りますの」

如月はそう言い、3枚のカードを墓地へ送った。

【墓地へ送られたカード】

『ライトロード・モンク　エイリン』
『聖なるバリアー ミラーフォース ー』
『ライトロード・ビースト　ウォルフ』

「あら？　墓地へ送られたカードの中にビースト　ウォルフがございましたの。よってこのカードを特殊召喚ですの！」

「なッ！？」

再び如月のフィールドに現れた『ライトロード・ビースト　ウォルフ』。

そして如月のターンが終了し、成瀬のターンに移る。

「私のターンです！　ドロー！」

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　８０００

【如月結衣】
ＬＰ　／　８０００

カードをドローした成瀬は、如月のフィールドを確認する。

攻撃表示で『ライトロード・ビースト　ウォルフ』

守備表示で『ライトロード・マジシャン　ライラ』。

そして１枚の伏せカード。

自分のフィールドには何もない状態だが、成瀬は臆する事なく、自分のプレイを開始した。

「いきます！　手札の装備魔法『ビッグバン・シュート』を発動し、如月さんの『ライトロード・ビースト　ウォルフ』に装備します！」

【ビッグバン・シュート】
［装備魔法］
装備モンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードがフィールド上から離れた時、装備モンスターをゲームから除外する。

『ライトロード・ビースト　ウォルフ』
ＡＴＫ　２１００　↓　２５００
（『ビッグバン・シュート』装備）

『ビッグバン・シュート』を装備したウォルフは攻撃力が２５００になった。

「花穂!?　一体なにをやってるんだ!!　何で相手モンスターの攻撃力を増やしているんだ!?」

成瀬のとった行動の意味が理解出来ない拓夜。

しかし、対する如月の表情は険しい目つきでいた。

「拓夜さん、大丈夫ですよ?　私はこの子を召喚します!　『霞の谷のファルコン(ミスト・バレー)』!」

【霞の谷のファルコン】
星４／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　１２００
［効果］
このカードは、自分フィールド上に存在するカード１枚を手札に戻さなければ攻撃宣言をする事ができない。

成瀬のフィールドに『霞の谷のファルコン』が召喚された。

「ファルコン？　花穂は一体なにを……？」

成瀬の行動に不思議に思った拓夜だが、成瀬は

「バトルフェイズに入ります！」

「ッ！？」

「そしてファルコンの効果を発動します！　この子は自分フィールド上のカード１枚を手札に戻さなければ、攻撃宣言をする事が出来ません！」

「なッ！？　何ですって！？　まさか……！！」

如月は驚きの表情で目を見開いた。

「そのまさかです！　ファルコンの効果で、私は如月さんのモンス

ターに装備した装備魔法『ビッグバン・シュート』を手札に戻します！」

成瀬のフィールドの装備魔法『ビッグバン・シュート』が手札に戻された。

そして、『ビッグバン・シュート』を装備していた如月のモンスター『ライトロード・ビースト　ウォルフ』は、『ビッグバン・シュート』の効果により除外された。

「くッ……！？」

「いきます！ファルコンで、如月さんの『ライトロード・マジシャン　ライラ』に攻撃です！」

成瀬のファルコンが、守備表示のライラに攻撃しようとしたその時

「そのモンスターの攻撃は、このカードで防ぎますの！　永続罠、発動！　『ライトロード・バリア』ですの！」

【ライトロード・バリア】
［永続罠］
自分フィールド上に表側表示で存在する「ライトロード」と名のついたモンスターが攻撃対象になった時、自分のデッキの上からカードを2枚墓地へ送る事で相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

ライラの周りにバリアが展開され、ファルコンの攻撃を防いだ。

「このカードはデッキの上から2枚のカードを墓地へ送る事で、私の【ライトロード】への攻撃を無効にするカードですの！」

【墓地へ送られたカード】

『ソーラー・エクスチェンジ』
『リビングデッドの呼び声』

「……やりますね、流石です……！！」

成瀬はバトルフェイズを終了し

「私はリバースカードを1枚セットして、ターン終了です！」

※

「……すげぇ……！！」

拓夜は成瀬と如月の二人のデュエルを見ていて、思わず言葉を無くしていた。

先ずは如月のモンスター【ライトロード】。

成瀬は墓地肥やしだと言っていたが、確かにそうだと思う。

エンドフェイズ毎にデッキからカードを墓地に送ったり、カード効果やコストによりデッキからカードを墓地へ送ったり……。

あまつさえ、デッキからカードを墓地へ送られて、効果を発揮するモンスターもいるではないか。

恐らくウォルフ以外にも、墓地に送られる事で何らかのメリットがあるカードが【ライトロード】の中にはあるのだろう。

そういう意味では、確かに除外デッキの成瀬とは相性は悪い。

前回のデュエルでの月影陽一の判断も納得できる気がする。

「……花穂」

拓夜が見つめる中、成瀬に如月のデュエルは進んでいった。

※

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　８０００

【如月結衣】
ＬＰ　／　８０００

迎えた如月のターン。

如月はデッキからカードをドローしてフィールドを見つめる。

自分のフィールド上には、守備表示で『ライトロード・マジシャンライラ』が1体。

そして永続罠『ライトロード・バリア』が発動している。

対する成瀬のフィールドには、攻撃力2000の『霞の谷のファルコン』。

そして1枚の伏せカードが。

（わたくしのライラは効果を発動してから、まだ1ターン経過しておりませんの……このターン、ライラを攻撃表示にして効果を発動する事はできない……ですが）

如月はドローしたカードに目を移し

（先ずはこのカードから……！！）

「手札から魔法を発動しますの！『光の援軍』！」

【光の援軍】
［魔法カード］
自分のデッキの上からカードを3枚墓地へ送って発動する。自分のデッキからレベル4以下の「ライトロード」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「このカードは、デッキの上から3枚のカードを墓地へと送る事で、デッキからレベル4以下の【ライトロード】を手札に呼び寄せますの！」

如月はそう言い、デッキから3枚のカードを墓地へと送った。

【墓地へ送られたカード】
『ライトロード・ウォリアー　ガロス』
『ライトロード・ハンター　ライコウ』
『奈落の落とし穴』

「そしてわたくしは、レベル3のモンスター『ライトロード・サモナー　ルミナス』を手札に……！！」

ルミナスを手札に加えた如月は、手札の別のカードに手を伸ばし

「そして……『ライトロード・パラディン　ジェイン』を召喚しますの！」

【ライトロード・パラディン　ジェイン】
星４／光属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
［効果］
このカードは相手モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が３００ポイントアップする。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを2枚墓地に送る。

如月は『ライトロード・パラディン　ジェイン』を召喚し

「バトルですの！　パラディン　ジェインで、『霞の谷のファルコン』に攻撃！」

ファルコンに向かって、剣を振り上げるパラディン　ジェイン。

「なッ！？　パラディン　ジェインの方が、花穂のモンスターよりも攻撃力が低いのに……ッ！！　まさか！？」

「そのまさかですの……「やらせません！！」

如月がダメージステップに入る直前、成瀬は自分の場に伏せたカードを発動した。

「如月さんのモンスター、パラディン　ジェインの攻撃宣言時に、私はこのカードを発動します！　罠カード『次元幽閉』です！」

【次元幽閉】
［罠カード］
相手攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

如月のパラディン　ジェインは亜空間に呑み込まれ、フィールドからその姿を消した。

「パラディン　ジェインは、自身が攻撃するダメージステップ時に、攻撃力を３００ポイントアップさせる効果があるのは、既に承知です！」

「くッ！？　厄介ですわね……！！」

自分のモンスターが悉く除外されていく事に焦りを感じる如月。

しかし、負けたくない。

自分が苦手とする相手に勝ってこそ、初めて得られる達成感。

前回の成瀬とのデュエルは、自分の実力で勝った気にはなれなかった。

だからこそ、勝ちたい。

今度は自分のデッキで、自分の力で、成瀬に勝ちたい。

如月の胸に秘める思いが熱くなる。

「わたくしはバトルフェイズを終了し、ターンを終了しますの。そしてエンドフェイズ……ライラのモンスター効果を発動しますの！」

如月はライラの効果により、デッキから3枚のカードを墓地へと送る。

【墓地へと送られたカード】

『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』
『ソーラー・エクスチェンジ』
『貪欲な壺』

（【ライトロード】が墓地に落ちた……！！）

如月は墓地の【ライトロード】と名のついたモンスターを確認する。

『ライトロード・モンク　エイリン』
『ライトロード・ウォリアー　ガロス』
『ライトロード・ハンター　ライコウ』
『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』

（これで、ようやく墓地に4体の【ライトロード】が揃いましたの……後は、あのカードを引くだけ！！）

如月の瞳に力が宿る。

そして成瀬のターンに移り、成瀬はデッキからカードをドローした。

「いきます！　私のターンです！　カード、ドローッ！！」

デッキからカードをドローした成瀬は早速、手札のカードに手を伸ばし

「装備魔法『ビッグバン・シュート』を発動します！　このカードを、如月さんの『ライトロード・マジシャン　ライラ』に装備します！」

如月のライラに『ビッグバン・シュート』が装備された。

【ライトロード・マジシャン　ライラ】
ＡＴＫ　１７００　↓　２１００
（『ビッグバン・シュート』装備）

「ッ！？　しまった！！」

（墓地に送られる【ライトロード】ばかりに気を取られて、そのカードの存在を忘れて……ッ！！）

続いて成瀬は手札のドローしたカードに手を伸ばし

「私の墓地にモンスターが存在しない場合、手札のこの子は、特殊召喚する事ができます！　お願いッ！！」

カッッ！！！！

成瀬のフィールドに、無数の純白の羽が舞い落ちる。

無数に舞い落ちる羽の中から、成瀬のデッキのエースが姿を現した。

「来て！　『ガーディアン・エアトス』！！」

【ガーディアン・エアトス】
星８／風属性／天使族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地に送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを３体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

「そして私は、手札から装備魔法『魔導師の力』をエアトスに装備させます！　エアトス！受け取って！」

【魔導師の力】
［装備魔法］
自分のフィールド上の魔法・罠カード1枚につき、装備モンスターの攻撃力と守備力を５００ポイントアップする。

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００　↓　３５００
（『魔導師の力』装備）

エアトスに『魔導師の力』が装備された事で、エアトスの攻撃力が上昇した。

更に

「更に私は、エアトスの効果を発動します！　自身に装備されたカードを墓地へ送る事で、相手の墓地から3枚まで、モンスターを除外する事ができます！」

「なッ！？　何ですって……！！」

エアトスが女神の聖剣を空に翳すと、如月の墓地のモンスターが移し出された。

如月の墓地を確認した成瀬は

「やっぱり、墓地に【ライトロード】が揃ってましたね……！！」

「くッ！？」

拓夜は如月の墓地を見て、思わず言葉を無くしていた。

（……いつの間に、あんなに墓地に……！？　これが、【ライトロード】の……！？）

しかし拓夜は気付いていない。

墓地に【ライトロード】が揃った時の、真の意味を……。

成瀬は如月の墓地から

「私が選択するのは、『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』と、『ライトロード・ウォリアー　ガロス』と、『ライトロード・モンク　エイリン』の3枚です！」

「……それが、妥当ですわね……！！」

如月の墓地から3枚の【ライトロード】が除外され、エアトスの攻撃力は更に５００ポイントアップした。

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　３５００　↓　２５００
（『魔導師の力』↓　墓地）

ＡＴＫ　２５００　↓　４０００
（『ガーディアン・エアトス』効果）

「バトルフェイズに入ります！　そして、『霞の谷のファルコン』の効果です！　装備魔法『ビッグバン・シュート』を手札に戻して、如月さんの『ライトロード・マジシャン　ライラ』をゲームから除外します！」

「……ッ！？」

ライラが除外され、如月のフィールドには永続罠『ライトロード・バリア』のみとなった。

そして、如月に成瀬のモンスターが襲いかかる。

「ファルコンで、如月さんにダイレクトアタックです！」

【成瀬花穂】
ＬＰ／　８０００

【如月結衣】
ＬＰ／　８０００　→　６０００

「くッ！？」

「まだです！　お願い、エアトス！　如月さんに、ダイレクトアタック！」

エアトスの攻撃が炸裂し、如月のライフは一気に半分以下に減少した。

【成瀬花穂】
ＬＰ／８０００

【如月結衣】
ＬＰ／６０００　→　２０００

「や、やりますわね……！！」

「私のターンは終了です！」

成瀬のターンが終了し、如月のターンに移行する。

如月はカードをドローして、状況を確認した。

自分のフィールドにはモンスターはなく、永続罠『ライトロード・バリア』のみ。

そして墓地に【ライトロード】と名のつくモンスターカードは、『ライトロード・ハンター　ライコウ』1体のみ。

（正直、分が悪いにも程がありますわね……でも、わたくしも負けてられませんの……！！）

如月は手札のカード1枚に手を伸ばし、口元にうっすらと笑みを浮かべる。

（いきますわよ……成瀬さん！！）

※

結締智恭は西条亨宅のパソコンを使い、自分達が運営するサイトの更新をしていた。

何やら途中に白石直也が西条亨を引きずりながら部屋から出て行ったり、烏丸葉月が料理している最中にマナがおかずをつまみ食いし過ぎて叱られてたりと騒がしい中、何とか今月の更新ノルマを達成した結締は、軽く一息つきながらサイトに宛てられたメールを確認する。

「おぉぅ……、今日も皆からの応援メッセージがどっさりだぜぃ」

幾通もの応援メッセージに感激する結締は、一つ一つのメッセージをこまめに読んでは返信している。

ヒーローは皆からの期待を裏切らない！という結締ならではの性格だ。

次々とメッセージを読んでは返信を繰り返していた結締だが、ふと、キーボードを弾く指がピタリと止まる。

パソコンの画面には【招待状】とのメッセージタイトルが。

「ん……どれどれ？」

何気なしにメールを開く結締。

するとそこには、結締にとって驚くべき内容が記されていた。

「トリティニーグループから？……こッ……これは……！！」

現在、西条亨宅には旧ＯＣＧ研究会メンバーは自分とマナだけが残っている。

白石に亨は外に出て行ったきり、まだ帰ってはいない。

（こりゃぁ……俺だけじゃ決められないぜよ。　西条ちゃんに白石さんに話をしねぇと……）

結締は携帯電話を取り出し、真剣な表情で各人に連絡をとりだした。

※

【成瀬花穂】
ＬＰ／　８０００

【如月結衣】
ＬＰ／２０００

如月のターン。

デッキからカードをドローした如月は、ドローしたカードを横目で確認し、

（ッ！？　揃いましたわ！！）

【如月の状況】
手札…４枚

モンスターカードゾーン…なし

魔法・罠カードゾーン
『ライトロード・バリア』

【成瀬の状況】
手札…２枚

モンスターカードゾーン

『ガーディアン・エアトス』
『霞の谷のファルコン』
魔法・罠カードゾーン…なし

（ライフポイントが残り２０００なのが惜しい所なのですが、もう後には引けませんの！！）

如月は気持ちを奮い立たせ、自分のプレイを開始した。

「いきますわよ、成瀬さん！！　先ずは手札の速攻魔法『異次元からの埋葬』を発動しますの！！」

【異次元からの埋葬】
［速攻魔法］
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、そのカードを墓地に戻す。

「ッ！？　そのカードは！！」

「この効果によって、ゲームから除外されているわたくしのモンスター、『ライトロード・パラディン　ジェイン』、『ライトロード・ビースト　ウォルフ』、『ライトロード・マジシャン　ライラ』を墓地に戻しますの！！」

如月の除外されていたモンスターがそれぞれ墓地へ戻された。

そして如月は、その表情に確固たる自信の笑みを浮かべ

「これで……ようやく条件が整いましたの」

「ッ！？　まさかッ！？」

驚きの表情を浮かべる成瀬を前に、如月は手札のカード1枚を掴み取り

「わたくしの墓地には、先程除外から墓地に戻した【ライトロード】3体に加え、『ライトロード・ハンター　ライコウ』の計4体……！！」

如月の雰囲気の変化に対し、西条拓夜は目を離す事ができなかった。

「このカードは、わたくしの墓地に４種類の【ライトロード】が揃っている場合、手札から特殊召喚する事ができますの！！　これがッ！！　わたくしの最強モンスター！！」

ズドドドドド……ッ！！

「ッ！？」

「こッ、コイツは……ッ！？」

如月のフィールドに君臨せし聖なる竜。

如月は背を伸ばし、対峙する成瀬に向かって堂々と言い放った。

「『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』……、今ここに推参ですの！！」

【裁きの龍】
星８／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２６００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に「ライトロード」と名のついたカードが４種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。１０００ライフポイントを払う事で、このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを４枚墓地へ送る。

「『裁きの龍』のモンスター効果を発動しますの！！　ライフポイントを１０００払う事で、フィールド上のこのカード以外のカードを全て破壊しますの！！」

「ッ！？」

「なッ！？　何だよそのメチャクチャ効果はッ！！」

【成瀬花穂】

ＬＰ／　８０００

【如月結衣】
ＬＰ／　２０００　→　１０００

瞬間、『裁きの龍』から眩い光が発せられ、三人の視界をホワイトアウトさせる。

カッッ！！！！

「ジャッジメントですの！！」

ズドドドドド……ッ！！

刹那、凄まじい轟音もとい爆音が響き渡る。

成瀬に拓夜の二人の視界が戻ると、フィールド（そこ）には如月の『裁きの龍』を除いた全てのカードが破壊されていた。

つまり、成瀬のフィールドは一瞬でがら空きになってしまったのだ。

「くっ、この状況だけは……避けたかったのに！！」

呟く成瀬を余所に、如月は更に自分の手札からプレイを続けていく。

「突破口は開きましたの！！　更に手札より、『ライトロード・サモナー　ルミナス』を召喚ですの！！」

【ライトロード・サモナー　ルミナス】
星３／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
１ターンに１度、手札を１枚捨てる事で自分の墓地に存在するレベル４以下の「ライトロード」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを３枚墓地に送る。

如月のフィールドにルミナスが召喚された。
そして如月は早速、ルミナスのモンスター効果を発動する。

「ルミナスの効果！！　手札１枚を墓地へ送る事で、墓地からレベル４以下の【ライトロード】１体を特殊召喚しますの！！　わたくしは手札より『ライトロード・プリースト　ジェニス』を墓地へ送り、墓地へ送ったジェニスを守備表示で特殊召喚！！」

【ライトロード・プリースト　ジェニス】
星４／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　２１００
［効果］
「ライトロード」と名のついたカードの効果によって自分のデッキからカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、相手ライフに５００ポイントダメージを与え、自分は５００ライフポイント回復する。

如月のフィールドに出揃う3体のモンスター。

攻撃力３０００の『裁きの龍』。
蘇生効果を持つ『ライトロード・サモナー　ルミナス』。
効果ダメージとライフ回復効果を持つ『ライトロード・プリースト　ジェニス』。
如月は反撃のバトルフェイズを開始した。

「バトルフェイズに突入ですの！！　先ずはルミナスでダイレクトアタック！！」
「くっ！？」

【成瀬花穂】
ＬＰ／　８０００　→　７０００

【如月結衣】
ＬＰ／　１０００

「そしてわたくしの最強モンスター、『裁きの龍』の攻撃ですの！！　ジャッジメント・ドライヴ！！」

「キャァア！！」

【成瀬花穂】
ＬＰ／７０００　↓　４０００

【如月結衣】
ＬＰ／１０００

「花穂っ！？」

一気にライフの半分を失った成瀬。
如月はバトルフェイズを終了し、

「わたくしはこのままターンを終了しますの……そしてエンドフェイズ時、ルミナスと『裁きの龍』のモンスター効果が発動しますの！！」

「……ッ！！」

「先ずは『裁きの龍』から、エンドフェイズ時にデッキの上からカードを４枚墓地へ送りますの」

【墓地へ送られたカード】

『ライトロード・バリア』
『ネクロ・ガードナー』
『ソーラー・エクスチェンジ』
『裁きの龍』

「そしてルミナスも同じく、デッキからカードを3枚墓地へ……」

【墓地へ送られたカード】

『ライトロード・マジシャン　ライラ』
『死者転生』
『創世の預言者』

「そしてジェニスのモンスター効果ですの。【ライトロード】の効果でデッキからカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、相手ライフに５００ポイントダメージを与え、わたくしはライフポ

イントを５００回復しますの」

【成瀬花穂】
ＬＰ／４０００→３５００

【如月結衣】
ＬＰ／１０００→１５００

「くぅ……ッ！！」

「わたくしのターンは終了ですの」

怒涛とも言える如月のターンが終了した。

拓夜は思わず唖然としてしまった。

（何だよ……あの『裁きの龍』ってヤツの効果は……！！）

ライフポイントを１０００払う事で、自身を除いたフィールド上の

カードを全て破壊する効果に、拓夜は戦慄した。

つまりは毎ターン、ライフポイントが１０００を上回っていれば、フィールドは『裁きの龍』が制圧している様なものなのだ。

「あれが……【ライトロード】の、切り札……！！」

拓夜の中に、熱い何かが込み上げてくる中、成瀬のターンが開始された。

「私のターンです！　ドロー！！」

カードをドローして手札が三枚となった成瀬。

そして一瞬だが拓夜をみて、成瀬は自分に言い聞かせる。

（拓夜さん、……拓夜さんの戦術、使わせて頂きます！）

「いきます！！　如月さん、覚悟して下さい！！」

「ッ！？」

その瞳に闘志の光を宿し、成瀬はプレイを開始した。

「先ずは手札から、魔法カード『精神操作』を発動します！！」

【精神操作】
［魔法カード］
このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

「私は、如月さんの『裁きの龍』のコントロールを得ます！！」

「なッ！？」

『精神操作』によりこのターン、如月の『裁きの龍』はエンドフェイズ時まで成瀬のコントロール下に置かれる。

自分の切り札のコントロールを奪われ、如月は首から冷や汗が流れ落ちた。

「花穂のライフは３５００、ここで『裁きの龍』の効果を発動すりゃ、如月さんのフィールドはがら空きになる！！　いいぞ、花穂！！」

「くッ！！」

拓夜は自分ならこうするであろう戦術を予測し、成瀬のプレイに歓喜の声をあげる。

しかし

「いいえ、拓夜さん。私はこのターン、『裁きの龍』の効果は発動しませんよ？」

「えっ！？」

「花穂……？」

成瀬の解答に疑問に思う拓夜に如月。

成瀬は「見ていて下さい」と拓夜に言い、自分のプレイを続行する。

「そして私は『サイバー・ヴァリー』を召喚します！！」

【サイバー・ヴァリー】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［効果］
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを１枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。
●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。
●このカードと自分の手札１枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード１をデッキの一番上に置く。

「『サイバー・ヴァリー』の効果を発動します!!　私のフィールドの『裁きの龍』と、『サイバー・ヴァリー』をゲームから除外して、デッキからカードを2枚ドローします!!」

『裁きの龍』と『サイバー・ヴァリー』の2体が除外され、成瀬はデッキからカードを2枚ドローした。

「これで如月さんの切り札1体は封じました!!　そして私は、リバースカードを1枚セットして、ターンを終了します!!」

※

【成瀬花穂】
ＬＰ／　３５００
手札　２枚
フィールド
リバースカード　１枚

【如月結衣】
ＬＰ／　１５００

手札　0枚
フィールド
『ライトロード・サモナー　ルミナス』
『ライトロード・プリースト　ジェニス』

「わたくしのターン、ドローですの！！」

如月のターンが開始される。

現在、成瀬のフィールドにはリバースカードが1枚のみ。
如月にとっては一気に追い込むチャンスだ。

（わたくしのジャッジメントを退けられた事は痛手でしたが……、
まだわたくしのフィールドにはルミナスが残っておりますの。これ
はチャンスですの！！）

如月は意気込み、早速ルミナスの効果を発動した。

「わたくしのターン、ルミナスのモンスター効果を発動しますの！

！　手札を1枚墓地へ送り、墓地のレベル4以下の【ライトロード】、『ライトロード・ビースト　ウォルフ』を特殊召喚しますの！！」

如月がコストとして手札を墓地へ送ったその瞬間、

「それを待っていたんです！！」

「っ！？」

「えっ！？」

成瀬は如月のルミナスの効果にチェーンし、自分の場に伏せてあった1枚のカードを取り出した。

「お互いのライフが減少した今、如月さんは必ず攻めてくる事や、この状況でルミナスの効果を使用するは読めてました！！　ですが、攻める気持ちは如月さんだけじゃありません！！」

「っ！？」

「リバース罠、発動です！！　『大火葬』！！」

【大火葬】
［罠カード］
相手が墓地のモンスターを対象にするカードを発動した時に発動する事ができる。お互いの墓地のモンスターを全てゲームから除外する。

「この効果で互いの墓地のモンスターを、全て除外します！！」

「そんなッ！？」

『大火葬』の効果により、成瀬と如月の墓地のモンスターが全てゲームから除外された。

これによりルミナスの効果は空振りに終わり、如月はモンスターの特殊召喚に失敗した。

「くッ！？　やってくれますわね……ッ！！」

如月はメインフェイズを終了し、躍起になりながらバトルフェイズへと突入する。

「このままでは終われませんの！！　バトルッ！！　ルミナスで、成瀬さんにダイレクトアタックですの！！」

【成瀬花穂】
ＬＰ／３５００　→　２５００

【如月結衣】
ＬＰ／１５００

「ぅっ！！」

「そしてエンドフェイズ時、ルミナスのモンスター効果を発動しますの！！　デッキの上から、カードを３枚墓地へ！！」

【墓地へ送られたカード】

『ライトロード・エンジェル　ケルビム』
『ライトロード・エンジェル　ケルビム』
『魔轟神獣ケルベラル』

「更に【ライトロード】の効果で、デッキからカードが墓地へ送られた為、ジェニスの効果が発動しますの！！　成瀬さんに５００ダメージを与え、わたくしのライフを５００ポイント回復しますの！！」

【成瀬花穂】
ＬＰ／　２５００　→　２０００

【如月結衣】
ＬＰ／　１５００　→　２０００

「わたくしのターンは終了ですの！！」

ライフが並び、成瀬のターンが訪れる。

「私のターンです！　ドロー！！」

カッ……！！

如月は思わず目を見開いた。

成瀬がデッキからカードをドローした瞬間、彼女の背中から純白の翼が広がったように見えたのだ。

（い、今のは……一体……？）

「如月さん、良いデュエルでした」

突然、成瀬が如月に話しかける。

その言葉はまるで

「“でした”？　まさか成瀬さん……このターンで……ッ！？」

「はい、このデュエル……私は全力で勝ちに行きます！　覚悟ッ！！」

成瀬はメインフェイズへと移り、ドローした自身のエースを特殊召喚した。

「現在私の墓地には『大火葬』の効果によってモンスターは存在しません！　『ガーディアン・エアトス』は、自分の墓地にモンスターが存在しない時、手札から特殊召喚できます！　お願い、エアトス！！」

成瀬のフィールドに現れし、彼女を守護するエースモンスター、『ガーディアン・エアトス』。

「そんなッ！？　このタイミングで……エアトスッ！？」

「更に私は、手札の装備魔法『ビッグバン・シュート』と、『団結の力』をエアトスに装備します！　エアトス、受け取って！！」

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００　↓　３７００

（『ビッグバン・シュート』『団結の力』装備）

エアトスの攻撃力が爆発的に上昇する。

輝く女神の聖剣を掲げ、エアトスは如月のフィールドのモンスター、ルミナスに狙いを定めた。

「これが私の全力です！！　エアトスで、ルミナスに攻撃です！！
フォビドゥン・ゴスペル！！」

「くッ！？　ァァアアッ！！」

エアトスの放つ凄まじい斬撃がルミナスを破壊する。

その超過ダメージは、如月のライフを一気に奪っていった。

【成瀬花穂】
ＬＰ／　２０００

【如月結衣】
ＬＰ／　２０００　→　０

「この勝負、私とエアトスの勝利です！！」

東区の北はずれの神社にて成瀬と如月の、二人の長いデュエルが終了した。

成瀬　ＶＳ　如月　再び　（後書き）

登場人物紹介

【烏丸葉月】

東区第七高等学校に通う三年生で、西条拓夜のクラスメイトでもあり幼なじみ。

どこか強気な物言いをする癖があるが、それは自分が本当に気を許した相手にしかしない。

しかし中々自分の気持ちを素直に言い表す事ができず、つい発する言葉は本心の裏側だったりする（ツン？）。

以前は拓夜に恋心を寄せていたが、拓夜が成瀬を選んだ事により彼女の恋は終わった……。

かに思えたが、最近はＯＣＧ研究会の先輩である西条亨が気になる様子。

しかし、西条亨にはマナというパートナー（居候？）が居る為、彼女の恋の道は常に険しい茨の道である。

整った顔立ちで、明るく親しみやすい性格から、クラスだけでなく学校中で人気があり、噂では葉月ファンクラブなるものが存在しているらしい。

第七祭にて友人の桜朱美等と行ったバンドにより、学校内でその知名度を更に上昇させた。

が、本人はあまり気にしておらず、その事に関する描写が書かれていないのはそのためでもあったり・・・・・。

容姿としてのキャラクターモデルは、電撃文庫の作品【とある魔術の禁書目録】に登場する御坂美琴である。

残念ながら葉月さんは電撃使い（エレクトロマスター）ではなく、ブラックフェザー使いですので、ビリビリは出せません。

ツンツンはしますが…。

使用デッキは【ＢＦ】。

インチキ効果も大概にしろッ！！と言ってはいけません。

ちなみに烏丸葉月の名前の由来としては

【ＢＦ】↓　黒い鳥

黒い鳥　↓　カラス

カラスは黒い鳥だし、丁度ブラックフェザーあるじゃん？

です。

代表カードは

【ＢＦ―アーマード・ウィング】

さて、今回の話を書く上で悩んだのが【ライトロード】の効果ですね・・・

毎ターン墓地を肥やす効果。

自分達が実際にデュエルをすれば、何のカードが落ちたのか直ぐに分かりますが、小説として読む分にはそれを書かない事には、何が

落ちたのかが分かりません。

それを表現するのに頑張ったつもりですが、分かりづらかったらゴメンなさい。

ちなみにご期待に添えれたでしょうか？

「ジャッジメントですの！」

う～ん・・・、もっとジャッジメントを活躍させたかったけど、アイツの効果が2回発動しちゃったら大抵ゲームセットだからなぁ・・・。

やっぱライロ強ェや・・・。

最後の一枚（前書き）

溜まってた分を一気に公開していきます。

勉強してるのかって？

やってますよ！

最後の一枚

※

「すいませんっ！！　遅くなりました！！」

「お邪魔します！」

西条亨宅に慌てた様子で西条拓夜に成瀬花穂の二人が入り込む。

二人が部屋にあがると、結締智恭の陽気な声が出迎えた。

「お二人さん、遅いぜぃ？　二人でイチャつくのは良いけど、時間はちゃんと厳守だぜぃ？」

「だからイチャついてなんか……って」

言い返そうとした拓夜だったが、目の前の光景に思わず口が止まる。

「うわぁ！　すごい唐揚げの数です！！　部屋中がすごくいい匂いに包まれてます！！」

「つうか、どうしてこんなに唐揚げが……？」

テーブルの上には山盛りの唐揚げが。

拓夜の疑問に白石直也は鼻を鳴らしながら、得意気に答えた。

「ふぅん、この唐揚げはそんじょそこらの唐揚げではない。　美少女の愛がギッシリ詰まった、究極にして至上最高の唐揚げだッ！！」

何故か白石が言うと、彼の背後に『ドドドド……ッ！！』という効果音が聞こえてくるのは気のせいだろうか？

ＯＣＧ研究会のメンバーが全員揃った事で、目の前の料理を待ちきれないマナが涎を垂らしながら

「ねぇ、さいじょお、さいじょお！！　みんな揃ったんだから、もう食べても良いよね？　っていうかもう私は待ちきれないから食べちゃいただきムシャバクモゴフミャ！！」

「ちょっ！？　ちゃんと全部喋ってから食べなさい！！　その食べ方はお行儀が悪いっていつも言ってるだろ！！」

マナが食べ始めた事をきっかけに、それぞれのメンバーはキチンと「いただきます」と言ってから食事を始めた。

皆が料理を食べる中、今回の料理を作った本人である烏丸葉月はドキドキしながら皆の感想を待っていると、マナの口から早速

「うんっ！！　スッゴく美味しいんだよ！！」

「フヌォォオッ！！　美味いッ！！　美少女のッ！！　美少女の手料理を食べる事ができるとはァア！！　俺は今、猛烈に感激しているッ！！　美少女よ！！　今後も俺の為に毎日手料理を作り続けデボラッ！？」

白石は全てを言い終える前に葉月の肘打ちを横腹にくらい、そのまま撃沈した。

「ごめんなさい白石さん。私、がっつく人って苦手なの」

「グヌゥゥ、む……無念、と、言いたいが、そんなハッキリと物申す所もまた良い！！」

「白石さん、クドいぜよ」

「美味しいよ、はづき！！　さいじょおの作る唐揚げとはまた違った味付けがたまらないね！！　さいじょおもそう思わない？」

隣に座る亨に尋ねるマナ。

しかし、亨の前のテーブルには、味付け用の大根おろしが入った器が置かれているだけだった。

「あ、そっか。　さいじょおは白石くんとのデュエルに負けたから、晩御飯は抜きなんだったね」

「ぐッ……皆いいな……美味しそうに食べてさ……って言うか、あのデュエルは無効だろ白石！！　よくよく考えりゃ、あのデュエルの勝敗に俺が従う義理はねぇじゃねぇか！！」

「ふぅん、何を言っても敗者の戯言。　今更聞く耳など持たぬわ！！」

「いいや、異議ありだね！！」

ヒートアップする亨に白石。

唐揚げを頬張る成瀬は葉月特製の唐揚げを堪能しながら二人の話を聞いて、とりあえず仲裁に入った。

「とりあえず亨さんに白石さん、今は食事の席ですから喧嘩は外でしてください」

「うっ！？・・・す、スイマセン」

『ピンポーン……』

亨が謝ると、突如玄関の呼び鈴が押された。

突然の来客に皆が不思議な顔をする中、亨は立ち上がり「あ、来た来た」と玄関に向かう。

そんな彼の背中を見ていた葉月は、近くにあった小皿に自分の唐揚

げを少しだけ分けてあげる事にした。

（何よ……、亨さんが食べてくれないなんて、意味がないじゃない）

建前上はマナに食べてもらうという事だが、本心は違う。

とにかく一口でも食べて、美味しいと言ってもらいたい。

そう思うと思わず口元がニヤけてしまいそうになるが、何とか抑えて冷静を装う葉月。

すると、玄関から戻ってきた亨は

「んむ、うめぇ！　保険かけといて、宅配頼んで正解だったぜ！」

「あーーッ！！　さいじょお、それ『アオキーズピザ』！！」

「え？」

葉月が振り返ると、そこにはピザの箱を抱えて美味しそうにピザを頬張る亨が立っていた。

「ム、西条よ……！　貴様、デュエルの後に誰と電話していたかと思えば、まさかデリバリーだと！？」

「ムシャムシャ……。何年来の付き合いだと思ってんだ白石！　おっと、動くなよマナに白石！　お前達はその唐揚げでも食べてなさい！　その間に俺はこのピザで……って、あれ？烏丸さん？　どうかしたのか？」

葉月は亨の話を聞いて思わず肩が震えだした。

つまりは何だ。

亨は今回、自分の手料理を食べるつもりはなく、自分で用意したピザを食べるつもりでいるらしい。

（私の努力って、一体……何なのよッ！！）

葉月はスッと立ち上がり、亨からピザの箱を取り上げた。

「あッ！？　ちょっ！？　烏丸さん！？」

「何よこんなの！　言ってくれれば料理だって分けてあげたのに！！　アンタは今夜はご飯抜き！！　このピザも、私達が貰うから、アンタはそこに座ってなさい！！」

「え？　ちょっ！？　は、はい…」

亨は葉月が何故こんなにご立腹なのか理解できず、部屋の隅にチョコンと正座して、目で拓夜に訴えた。

（拓夜くん、烏丸さんって一体どうしたの？）

（分からないっす。とりあえず亨さん、今は葉月のほとぼりが冷めるまで、大人しくしていた方が……）

「・・・亨さんも、案外とデリカシーがないです・・・」

ポツリと呟く成瀬だが、その言葉は亨には届かず。

一人、部屋の隅でちょこんと座る亨は結局、葉月が不機嫌な理由が分からぬまま、皆の食事を眺めている事しかできなかった。

※

夕食を食べ終えたメンバーは、今度こそミーティングを開始した。

結締は早速、パソコン画面に表示された一通のメールをメンバーに見せる。

「コイツは今日の夕方に届いたメールだぜぃ。　タイトルが『招待状』っつーから、気になって開けてみたらビックリぜよ」

一同が画面を覗き込むと、そこには

「えっ！？　これって……ッ！！」

「ふぅん、トリティニーグループからだな。　この度、トリティニーグループが主催するプロデュエル大会、【トリティニー・チャンピオンシップ】そこにＯＣＧ研究会を推薦し、大会に参加せよ……か」

白石が文面を読み上げると、その事について拓夜が質問した。

「あの、【トリティニー・チャンピオンシップ】って一体、何なんすか？」

「拓夜さん、知らないんです？　このトリティニーグループが主催するプロデュエル大会は毎年、年に一度だけ開かれる、全国規模の大会なんですよ？」

「大会参加選手は、その年に活躍したプロデュエリストや、各大会を優勝したアマチュアの実力者が出場してくるわ。　トリティニーグループ主催の番組なんかに、よく話題になってるわよ」

葉月に成瀬が説明し、拓夜は初めて、この大会の概要を理解した。

つまりは

「……って事は、この大会で優勝したチーム……デュエリストが」

「そうだ。　優勝者こそ、名実共に最強のデュエリストという事になる」

亨は腕を組みながら、真剣な眼差しで拓夜に成瀬、そして葉月を見つめた。

三人は彼の瞳に宿った力に吸い込まれそうになりながら、ゴクリと唾を飲み込む。

「どうするぜよ、西条ちゃん？」

「もちろん出場だ。この大会は拓夜くん達にとって、良い経験になるだろう」

結締は「ＯＫ」と答え、携帯電話を取り出してトリティニーグループに出場の旨を伝えだした。

「予め説明しておくぞ。　この大会は各チームが一戦毎に代表選３名を用意し、先に２勝したチームの勝利となり、勝ち進んでいくトーナメント方式だ」

「今回の大会は、拓夜くんに成瀬さん、烏丸さんの三人を主体に進めていく。　今までに色々な大会に出場した烏丸さんはともかく、拓夜くんに成瀬さんはそういった経験が浅い。　いろんな奴とデュエルしてみな？　それが絶対に、自分の力になるぜ？」

亨の話を聞いて、拓夜は体が震えだした。

「ふぅん、どうした拓夜？　怖じ気づいたか？」

「いえ、違いますよ……白石さん」

拓夜には分かっていた。

この体の芯から湧き上がる衝動によって疼く自分の体が震えている事に。

そこに在るのは恐怖なんかではなく、純粋な喜びである事に。

「俺……今、すっげー楽しみなんすよ！　今日、ここに来る前に感

じた……あの感覚と一緒なんだ！」

今日、ここに来る前に見た成瀬と如月とのデュエル。

そこには自分の知らない戦術があり、自分の知らないカードがあり、自分の知らなかったデュエルが繰り広げられていた。

他にもある。

結締とのデュエルの時もそうだ。

大会での天野とのデュエルもそうだ。

棗とのデュエルもそうだ。

世の中には、まだまだ自分の知らないデュエルがある。

世の中には、まだまだ自分の知らないカードがある。

「試したい……今の俺が、全国に通用するのか！！　そして勝ちたい！！　俺は一番に、そうさ！　俺はデュエルで、一番になりたい！！！」

拓夜の意気込みに皆が頷く。
すると、出場登録を終えた結締が戻り

「よぅし、そんじゃ……大会出場を記念して、皆での写真を1枚撮るぜぃ」

「おい、結締……お前、どっから俺のデジカメを持ち出したんだよ？　あまり人の部屋を漁らないでくれ……」

「西条ちゃん、細かい事はこの際なしだぜぃ」

写真を撮る事に乗り気になったメンバーは部屋の一角に集まり、それぞれに

「さいじょお、さいじょお！ほら、もっと寄って！」

「し、白石さん！場所とりすぎです！」

「痛ッ！？　結締さん！　俺の足踏んでる！」

「仕方ないぜよ、拓夜ちゃん？　つぅか、もうすぐでシャッターが落ちるぜぃ？　5…4…3……」

皆が騒ぐ中、デジカメのシャッターのタイマーが進んでいく。

それぞれに敷き詰め合うメンバーに若干ひいていた葉月だったが

「烏丸さん！　ほら、もっとコッチ来いって！」

「あ、ちょっ！？」

端にいた葉月を真ん中へと引っ張る亨。

その瞬間に、台に置かれたデジカメのシャッターが光り、記念の写真が出来上がった。

隣同士に座り、互いに笑いあう拓夜に成瀬。

葉月に近付こうとし、興奮する白石を押さえる結締。

そんな2人を見て、亨に寄り添いながら笑うマナ。

そして亨に引っ張られ、顔を真っ赤にした葉月。

だが、この時は知る由もなかった。

皆で撮ったこの一枚の写真が彼らにとって、最後の一枚になるとは知らずに……。

最後の一枚（後書き）

【登場人物紹介】

成瀬花穂

東区第七高等学校に通う一年生。

西条拓夜とは彼が右手を骨折し、病院に来院した事がきっかけで知り合う。

当時は足首を骨折し、リハビリ目的で入院をしていたが、拓夜との出会いがきっかけで彼と親しくなっていく。

そして遂に恋人同士になった。

非常に丁寧な言葉遣いで、よく語尾には「～です」や「～ます」がつく。

その丁寧な口調から放たれる鋭い一言は、富士急ハイランドでの事……。

滅びのバーストストリームこと白石直也を一蹴する威力を持つ。

「何しにここに来たんですか？」

「グァァアアッッ！！！？」

長く艶やかな黒髪をツインテールにした髪型で、身長も約１５０センチと小柄な体型。。

外見的なキャラクターモデルは【けいおん】に登場する、中野梓である。

しかし残念ながら成瀬は日焼けする事はあってもギターは弾けないのであしからず。

口調に関してのモデルキャラクターは【テイルズ　オブ　ヴェスペリア】に登場する、エステルである。

しかしエステルは満月の子であるが、成瀬は普通の子なのであしからず。

使用デッキは【次元エアトス】。

拓夜と一緒に買ったガーディアン・エアトスが、まんま彼女のエースカードである。

作中では西条亨の神（オベリスク）の攻撃をその身に受け、成瀬への精神ダメージ

を全て守護（ガーディアン）する活躍をみせた。

カウントダウン　（前書き）

しかし・・・

今回の新パック「すとーむおぶらぐなろく」だっけ？

六武衆強化されすぎだろ！！

カウントダウン

※

三上市にあるトリティニーグループ本社横には、巨大なドームが建てられている。

このドームの中は広大なデュエルフィールドが設立されており、三上市のシンボルの一つとして数えられている。

このドームの前に一台のバスが停車し、ドアが開く。

その中からは大勢の人が降り、その団体は皆おなじ方向に向かい、それぞれに進んでいく。

その団体の中に西条拓夜に成瀬花穂、烏丸葉月の三人の姿があった。

バスから降りた拓夜に成瀬は目の前のドームを見上げ、感嘆の声を漏らす。

「ここが……トリティニードーム……デュエリストの聖地と呼ばれる場所……！」

「凄いです……、というより、まだ実感が湧かないです……今から私たちは、あそこでデュエルをするんですよね？」

「そうだな。　けど、やっぱり楽しみだよ！　一体どんなデュエリストがいるのか、めちゃくちゃワクワクするぜ！」

今日はこのトリティニードームにて、デュエリストの頂点を決める一大イベントが開催される。

世界に名を轟かせる大企業トリティニーグループが主催する【トリティニー・チャンピオンシップ】。

この大会は、その年に活躍した全国のデュエリストが集い、己のデュエリストとしての腕を競い合う場である。

拓夜達は今回、この大会に見学しに来た訳ではない。

出場選手として来たのである。

「俺さ、ＯＣＧ研究会に入れて良かったってつくづく思うよ。　入らなかったら俺達、こんな凄い場所でデュエルなんて出来なかっただろうし」

「そうですね。　第七祭で亨さんが私たちをＯＣＧ研究会に誘ってくれたから、今の私たちが在るんです。　今回、私たちはＯＣＧ研究会として参加しますから、下手なデュエルはできませんね」

この大会には、ＯＣＧ研究会にもお呼びが掛かった。

そして先輩達は、後輩に良い経験をしてもらいたいとの事で、拓夜達に参加する様に言ってきたのだ。

今回、三人はＯＣＧ研究会として出場する。

ＯＣＧ研究会はデュエリストの中ではかなり有名なチームである為に、今大会ではかなり注目されるだろう。

その名にのし掛かる重圧。

拓夜はそこまで頭が回ってない様で、大会の事に目を輝かせていたが、成瀬は多少不安であった。

二人が話していると、葉月は二人の前に立ち

「とりあえず、アタシ達も行くわよ？　どうやら亨さん達は先に会場に着いたみたいだから」

葉月はそう言うと、一人先に歩き出した。

拓夜に成瀬も、葉月の後を追うように進み出す。
拓夜達の頂点への挑戦が、始まろうとしていた。

※

「うわぁぁあああッ！！」
「ギャァアッ！！」

とある一室に警備員の男二人の悲鳴が響き渡る。
その二人の男は床に倒れ込み、白目を向いて気絶していた。

「何だ……世界に名を轟かせる大企業の割には、警備はずさんだな……。しかし、お陰でこちらとしては好都合だ」

そう呟く一人の男は、部屋に用意されていた椅子に座り、目の前に映された多数のモニターに視線を向ける。

細身の体に白のスーツ。
白の手袋をはめた右手で頬杖をしながら、男は胸元から小型無線機を取り出して話しだした。

「こちらＲ１。　トリティニードーム管制室の奪取に成功した。Ａ３、そちらの準備はどうだ？」

無線で話すＲ１と名乗る黒髪の男の耳には、Ａ３より「こちらも準備は整いました」との報告が入る。

「…そうか、ありがとう」

Ｒ１はそう言うと、目の前のモニターの一つを睨みつけ、凶悪な笑みを浮かべる。

「クックック……トリティニーグループ社長、早乙女一馬……！！」

Ｒ１が睨みつけるモニターには、ドーム内で用意された席に座るトリティニーグループ代表取締役社長の早乙女一馬氏が映されていた。

「せいぜい今の内に、社長気分を味わうが良い……。もうすぐだ、もうすぐこの私が、貴方をその椅子から引きずり降ろしてあげますよ！！」

その瞳に憎悪の炎を灯すＲ１は一人、管制室で不気味な笑い声をあげていた。

※

ドームの中の観客席は満席状態だった。

溢れんばかりの熱気がドーム内を包み込み、冬の時期とは思えない位に暑かった。

ドームの中央天井に取り付けられた四面大型液晶画面には、トリティニーグループ代表取締役社長の早乙女一馬が映し出されている。

現在、トリティニー・チャンピオンシップの開会式の最中で、社長

挨拶が始まった所だ。

ドーム内中央には今大会に出場する参加チーム、計８チームが並び、皆が皆、闘志に満ちた表情をしていた。

その８チームの中に並ぶ一つのチーム、ＯＣＧ研究会。

先頭から順番に白石、亨、葉月、拓夜、成瀬、結締と並んでいる。

葉月は自分の前に立つ亨の背中をつついて

「ねぇ、亨さん。マナさんが居ないけど、どこに行ったのよ？」

「ん？　あぁ、あいつならちゃんとここに居るよ」

「ここって……、どこよ？」

辺りを見渡す葉月だったが、マナの姿はどこにも見当たらない。

首を傾げる葉月だったが、亨が言うのだからきっとこの中のどこかに居るのだろうと思い、深く考えない事にした。

（きっと売店かどこかに行って、食べ歩きでもしてるんじゃないかしら？　マナさんの事だし……）

そんな風に思っていると、いつの間にか社長挨拶は終わってしまったのか、葉月の耳にＭＣの声が入ってきた。

『デュエリスト諸君、待たせたわね！　ワタシが今大会で進行役を任された中島よ！　ではまず、天井の画面に注目なさい！』

「なッ！？　何だ……あの覆面を被ったオカマ口調のオッサンは！？」

「ふぅん、拓夜よ……あの人の前では余り下手な言葉は慎んだ方が良い。　中島さんは三柱付属大学の理事長でもあり、トリティニーグループの幹部の一人だ」

「えッ！？　……あんな怪しいオカマが……ッ！？」

画面にはそれぞれトーナメント表が映し出されており、そこに各チームの名前がスロットのように次から次へと回っていく。

『じゃあ今回の大会ルールを簡単に説明するわよ？　試合は各チーム、代表三人が一人ずつデュエルを行い、先に2勝したチームの勝利となるわ。　なお、試合がサドンデスに持ち込まない限り、一度デュエルした選手はその試合中に再度デュエルする事はできないから注意ね？』

「えと……結締さん、どういう事なんです？」

「あ～、つまりは……。　例えば最初に成瀬ちゃんがデュエルに勝って、次に拓夜ちゃんがデュエルに負けたとする。　つまりは一勝一敗、本来なら次に葉月ちゃんが三戦目をやらなくちゃいけないのに、そこでまた拓夜ちゃんか成瀬ちゃんがデュエルをするってのは駄目なんだぜぃ。　この二人は既にデュエルをやっちまってるからな」

「なるほど…納得しました」

『さぁて、それじゃ早速いくわよぅ！！　栄えある第一回戦目の組み合わせ、ルーレット……ドォンッ！！』

中島が言うと、一回戦目の枠にそれぞれのチーム名が表示される。

そこには

『決まったわね！　第一回戦は、チーム【ライトニング】に【ＯＣＧ研究会】よッ！！』

画面に大きく映し出される【ライトニング】に【ＯＣＧ研究会】。

「早速、俺達の出番か……。　へへ、燃えてきたぜ！！」

「相手はチーム……【ライトニング】？　どこのチームなんです？」

「……」

初戦に当たり、意気込む拓夜。

他のチームはそれぞれの控え室に戻り、試合会場にはチーム【ライトニング】と【ＯＣＧ研究会】だけが残った。

「花穂、葉月……俺が一番最初にデュエルして良いか？」

「拓夜さん……私は構わないですよ」

「良いけど拓夜、負けたら承知しないわよ？」

二人からの合意を得て、会場中央に用意されたデュエルゾーンへと向かう拓夜。

決闘盤が装着された腕には彼の信ずるデッキが納められている。

（楽しみだ、むちゃくちゃワクワクする……！！）

拓夜が指定位置に着くと、反対側から相手チームの【ライトニング】の一人がやってきた。

ふくよかなお腹をし、タキシード服に身を包む、ちょび髭をはやしたジェントルマンスタイルのオッサンだった。

『用意が出来たわね？　それじゃ、【トリティニー・チャンピオンシップ】第一回戦！　チーム【ライトニング】ＶＳ【ＯＣＧ研究会】

！　デュエル、スタートォオ！！』

中島の迫力ある開幕宣言と同時に、二人のデュエリストは手札を5枚ドローし、同時に叫んだ。

「いくぜッ！！」

「フン……」

「「デュエルッ！！」」

※

白石に結締、そして亨の三人は、試合会場に成瀬と葉月を残して、先に自分たちに用意された控え室に戻っていた。

控え室に用意されたテレビのスイッチを点けると、画面には試合会場の様子が映し出される。

三人は椅子に座り、画面に注目した。

「お、俺達の先鋒は拓夜ちゃんか」

「ふぅん、相手は【ライトニング】の……誰だ、あのデブは？」

「大会資料ぐらい読めよ白石、あのデブはチーム【ライトニング】の……福田光輝（ふくだこうき）だとさ」

亨が言うと、白石は亨の腕に装着された決闘盤をみて尋ねてきた。

「そうか……。所で西条よ、先程からマナの姿が見られんのだが……もしやマナは既に、お前のデッキに？」

「あぁ、朝からマジシャン・ガールもやる気満々でな。家を出る時から、デッキに入ってるよ」

「そうか……」

「おいおい、お二人さん？　始まるぜぃ、拓夜ちゃんの試合がな！」

『さぁ、始まったわね！！　【トリティニー・チャンピオンシップ】その第一回戦！！　昨年度もこの大会に出場していたチーム【ライトニング】に、今大会が初出場となるチーム【ＯＣＧ研究会】！！』

結締が言うと画面には中島の実況の下、拓夜の先攻が始まる所であった。

『チーム【ライトニング】の先鋒は福田光輝選手よ！　ちゃっかりタキシードなんか着ちゃってるけど、その引き締まった服からはみ出す二重顎がメタボリックシンドロームを物語ってるわね！　対する【ＯＣＧ研究会】は、新メンバーで登場よ！！　東区第七高等学校三年生の、西条拓夜選手ッ！！　ん～、若くてピチピチしたお肌がたまらないわね！！　食べちゃいたい！！』

※

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／　８０００

【後攻】福田光輝

ＬＰ／　８０００

「先攻はもらった！俺のターン！」

先攻プレイを開始する拓夜は手札を六枚に揃え、カードを一枚掴み取る。

「まずはコイツだ！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

拓夜のフィールドにダイヤモンドガイが召喚された。
拓夜は早速、ダイヤモンドガイの効果を発動する。

「ダイヤモンドガイの効果！デッキの一番上のカードは……よし、通常魔法『死者蘇生』だ！　このカードは墓地へ送られ、次の俺のターンに効果を発動する事ができる！」

拓夜の墓地に『死者蘇生』のカードが落ちた。

ふと気になった拓夜は対峙する対戦相手、福田光輝を見ると、彼は自分を見ておらず、天井に設置されている画面を見つめていた。

「……なぁ、福田…さん？今は俺のターンなんだから、ちゃんと俺のプレイを見てなくても良いのかよ？」

「……少年、私はこのデュエルに納得がいかないのだよ」

「？」

福田は画面に表示されているそれぞれのチーム名と、参加メンバーの名前を見て尋ねてきた。

「【ＯＣＧ研究会】と言えば、我々デュエリストの中でもカリスマ的存在……そのメンバーは白石直也、結締智恭、そして西条亨……この三人のハズだが？　私はこの三人とのデュエルを期待していたのだが」

福田は拓夜をキツイ目つきで睨みながら、鼻から大きく溜め息を吐いた。

「フゥ……。西条は西条でも、少年は西条亨ではなく……西条拓夜？　誰だねチミは？　私は君なんかお呼びじゃないのだよ？　西条は西条でも、西条亨を出したまえ」

「なッ！？」

福田の話を聞いて、拓夜は頭を殴られたような錯覚を覚えた。

福田の後ろに控えるチーム【ライトニング】の二人のメンバーを見ても、福田と同じような視線で自分を睨みつけてくるではないか。

（なんだよ……それ……ッ！？）

周りの観客席に座る大勢の観客達。

しかし、その人数の割に合わない位、発せられる声援は余りにも小さすぎた。

「……拓夜さん」

「相手が言うのも、無理はないわね……あのチーム【ライトニング】や周りの連中は、【ＯＣＧ研究会】の先輩達の姿しか見えていない……拓夜やアタシ達は、眼中にないって訳ね……！！」

葉月の言葉を聞き、拓夜はようやく福田の言うことを理解した。

彼らや観客達は楽しみにしていたのだろう。

特にチーム【ライトニング】に至っては、【ＯＣＧ研究会】とのデュエルが決まり、亨や白石、そして結締とデュエルをすることに心躍らせた事だろう。

しかし、実際にはどこの馬の骨とも知らない、無名の自分達が相手だった。

その気持ちは観客達も同様に落胆しただろう。

つまりは無名の自分達はこの場にはお呼びではないという事だ。

（けど……なら……魅せてやれば良いじゃねぇか！！）

拓夜はその瞳を力を込めて、対峙する福田に言い放った。

「福田さん、アンタが言うのも分かるけど……今の対戦相手はこの俺だ！！　あまり遠くばっか見てると、目の前の大きな壁に押しつぶされるぜ？」

「ふん、チミ達は【ＯＣＧ研究会】の新メンバーといったな？　だ

が、相手が西条亨でないと分かった時から、既に私の勝利は決まっておる」

余裕な態度を見せる福田だが、拓夜はもう周りの状況に流される事はなかった。

拓夜は更に手札から

「そいつはどうかな？　そんなの、やってみなくちゃ分からないぜ？　魔法カード『おろかな埋葬』を発動！　デッキから『ダンディライオン』を墓地へ送る！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスターカード1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００

効果
このカードが墓地へと送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

「『ダンディライオン』が墓地へ送られた時、フィールドに『綿毛トークン』２体を守備表示で特殊召喚する！」

拓夜のフィールドには三体のモンスターが並んだ。

ダイヤモンドガイに、トークンが二体。

そして拓夜は、更に手札からカードを一枚掴み取り

「チーム【ライトニング】！　よく見てろよ？　これが俺の力だッ！！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』と、『綿毛トークン』二体をリリースし、現れよッ！！　『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』！！」

「ッ！？　ドグマガイだとッ！？」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３４００
ＤＥＦ　２４００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを含むモンスター３体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。この特殊召喚に成功した場合、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時に相手ライフを半分にする。

拓夜のフィールドに一ターン目から君臨した最高攻撃力の【Ｄ－ＨＥＲＯ】。

これには流石に舐めた態度をとっていた福田も思わず目を見開いた。

「バックに伏せカードを一枚セットして、ターンエンド！！」

拓夜のターンが終了し、福田のターンに移行する。

「ドグマガイか……、ドグマガイなだけに予想外だ。　私のターンッ！！」

福田がデッキからカードをドローし、スタンバイフェイズへ移る。

その瞬間、拓夜のドグマガイの効果が発動する。

「おっと、福田さんのスタンバイフェイズに、ドグマガイのモンスター効果を発動するぜ！　相手ライフを半分にする！　ライフ・アブソリュート！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【福田光輝】
ＬＰ／　８０００　→　４０００

『ドグマガイの効果が見事に炸裂したわねッ！！　福田選手は開始早々、ライフに大きな差が開いてしまったわ！！』

「ふん、問題ない……。これ以上開始早々と、少年の思い通りにはさせない！」

喋る度にたぷんと揺れる二重顎。

福田はタキシードの蝶ネクタイを直し、自身のプレイを開始する。

「いくぞ少年！私はモンスターをセットし、伏せカードを三枚セット！」

次々と自分の場にカードをセットする福田は、ニヤリと笑みを浮かべ

「私のターンは終了だ！」

福田がエンド宣言をした瞬間、拓夜は自分の場に伏せてあった一枚のリバースカードを掴み取り

「そのエンドフェイズ時、俺はこのカードを発動するッ！！　速攻魔法『スケープ・ゴート』！！」

【スケープ・ゴート】
［速攻魔法］
このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。自分フィールド上に「羊トークン」（獣族・地・星１・攻／守０）４体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

拓夜のフィールドに４体の『羊トークン』が守備表示で特殊召喚された。

『ふむ、福田選手のエンドフェイズ時に『スケープ・ゴート』ね……。これで拓夜選手のフィールドは５体のモンスターで埋め尽くされたわねッ！！』

福田のターンが終了し、続いて拓夜のターンに移行する。

「いくぜ、速攻で決めてやるッ！！　俺のターン、ドローッ！！」

デッキからカードをドローした拓夜は、ドローしたカードを早速発動した。

「魔法カード『ハリケーン』発動！！　コイツで全ての場の伏せカードを手札に戻すぜ！！」

【ハリケーン】
［魔法カード］
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

拓夜の発動した『ハリケーン』が炸裂し、福田の場に伏せてあった魔法・罠カード三枚は手札に戻されてしまった。

「なッ！？　『ハリケーン』だとッ！？」

「これで福田さんのフィールドには、裏側守備表示のモンスターが一体……、このターンで決めるぜ！！」

「なッ、何を……ッ！？」

焦る福田に、拓夜は引導となるプレイを始めていく。

その為の一枚目の手札を掴み、拓夜は今の自分に出来る渾身のプレイを行った。

※

会場にて第１回戦となるデュエルが行われている最中、管制室のモニターをジッと見つめ、薄ら笑う一人の男がいた。

通信で【Ｒ１】のコードで呼ばれた白いスーツを着た男はスラッと伸びた細い足を組み、椅子にもたれ掛かりながら片手にワインを持って嗜んでいた。

「開幕式に間に合わなかったのは多少インパクトに掛けるが、舞台は充分すぎる程に整った…！！」

Ｒ１と呼ばれる男がワインを一口、口に含むと、モニターに映るデュエリスト『西条拓夜』が

『これで福田さんのフィールドには、裏側守備表示のモンスターが一体……、このターンで決めるぜ！！』

「ほぅ…、もう決着を着けるか。　思ったより早かったな……だがその分、私の計画が早まるだけの事……」

Ｒ１は左耳に取り付けてある無線機のスイッチを押した。

「こちらＲ１だ。予定より早く決着が着きそうだ。プランＢへ移行しろ」

『こちらＡ３、もう既にプランＢへの移行は済ませてあります。後はＲ１様の計画したプラン通りに、事を運ぶだけでございます…』

無線機越に仲間からの応答を聞いたＲ１は軽く笑いながら薄暗い室内の天井を仰ぎ見る。

「流石だな、Ａ３……。君は本当に優秀だよ」

『お褒めの言葉、誠ありがたい…！！』

無線機による通信を終えたＲ１は席を立ち、

（もう直ぐだ……、もう直ぐでこの世界は変わる！！　その引き金を引くのは、西条拓夜……君だよ。ククククク……！！）

薄暗い管制室内に一人、不気味な笑みを浮かべるＲ１。

歪んだ笑みでモニターを見つめる彼の左目は、一点の闇を象徴するかのような赤紫色に輝いていた。

カウントダウン　（後書き）

【登場人物紹介】

白石直也

ＯＣＧ研究会の一人で、非常に大きな体格をした巨漢。

言動一つ一つが威圧的であり、その物言いはどこぞのキャベツ頭の社長を彷彿させる。

デュエルの腕前は、作中では最強クラスのドラゴン使い。

ちなみにＯＣＧ研究会のメンバーは皆、どこかおかしい。（神引き的な意味で）

そんな彼が使用するデッキは単純ながらに圧巻。

【青眼の白龍】と【レッドアイズ・ダークネス・メタル・ドラゴン】を使い、更には【一族の結束】により火力を底上げしての一斉攻撃が、彼のバトルスタイルだ。

一瞬でも壁が崩れた相手は、瞬く間にライフを奪われていくだろう。

単純効果ほど、カードゲームは強いといった言葉を具現化したようなデッキである。

ちなみにＯＣＧ研究会の後輩、烏丸葉月が気になっているが、普段の大きな態度でなかなか接する事ができずにスルーされ続けている。

同じＯＣＧ研究会の結締智恭からは、よくその事でおちょくられている。

果たして、そんな彼の苦労が報われる日は来るのだろうか？

崩壊　（前書き）

連続投稿3話目です。

1996

崩壊

※

三上市にあるトリティニードーム内では現在、トリティニーグループが主催するデュエル大会、【トリティニー・チャンピオンシップ】が開かれていた。

会場内では開幕戦となる第一試合、西条拓夜ＶＳ福田光輝のデュエルが行われている。

そんな二人のデュエルの様子を、【ＯＣＧ研究会】に用意された選手控え室にて西条亨、白石直也、結締智恭の三人がモニター越しに観戦していた。

すると、亨のデッキにカードとして入っていたマナこと『ブラック・マジシャン・ガール』が

『ねぇ……さいじょお、さいじょお』

どこか不安そうに呼ぶマナに、亨は腕に装着した決闘盤に収められているデッキ、その中にいるマナに答えた。

「どうしたマナ？」

『あのね…近くに感じるの。精霊界の力を……』

「ッ！？」

『なんだかとても息苦しいんだよ……まるで、あの……邪神の雰囲気にも似た……』

「なッ！？」

マナの言葉に思わず目を見開く亨。

そして同時に、昔、自分達が経験した出来事を思い出した亨は頭を振った。

（…邪神、だと？　バカな、アイツ等は消滅した筈じゃぁ……ッ！？）

『でも、確かに感じるんだよ……』

パニックになりそうな思考で亨は立ち上がる。
すると、隣に座っていた白石が尋ねてきた。

「どうした西条よ、急に立ち上がって？」

「あ、あぁ……トイレに行ってくる」

亨はそう告げ、部屋を出ていった。

「西条ちゃん、何だって？」

「ふぅん、トイレだそうだ……」

白石は亨が出て行った先を見つめ、何とも言えない違和感を感じていた。

※

西条亨は部屋を出ると、険しい表情のまま会場の廊下を走った。

彼の右目の瞳は、蒼く澄んだ瞳に変色している。

（なる程な…！！　確かにマジシャン・ガールが言うように、神に似た力を感じる…ッ！！）

精霊界の力を行使する事でようやく感じる事ができた亨は、謎の力が感じられる場所へと向かい、全力で走っていく。

途中、関係者以外立ち入り禁止と書かれた札があっても関係なかった。

進むと同時に、亨は感じられる重圧以外に、この会場の異様な雰囲気に思わず足を止めた。

自分は関係者以外立ち入り禁止のラインを越えてきている。

しかし、そこからは一切の人の気配がしない。

会場からの観戦者たちの声援は聞こえてはくるが、それ以外の人の声が一切聞こえてこない。

「ハァッ、ハァッ…ど、どういう事だ？　誰もいない？」

現在、この会場には全国規模のデュエル大会が繰り広げられている。本来ならばここには大会関係者各員が、大会運営に関わる裏方の仕事や、テレビ局関係者が居てもおかしくなかった。

いや、居なければならない筈なのだ。

しかし、亨が見る限りでは自分以外に人の気配はせず、ここに着くまでに誰ともすれ違わなかった。

「一体…何が…？」

亨は呟きながら廊下の角を曲がると、一つの部屋の前にたどり着いた。

その部屋の入り口上には【管制室】の表記がされている。

（…ここに誰かいなけりゃ、確実におかしい）

しかし

（でも、この部屋からなんだよな…俺が感じる重圧は……ッ！！）

亨は静かに深呼吸をし、ゆっくりと音を立てないように静かにドアノブに手をかける。

「……ッ『ゴキャッ！！』」

「ガァッ！？」

その直後、亨の後頭部を凄まじい衝撃が襲った。

一瞬、何が起きたのか理解できなかったが、亨は崩れた姿勢のまま背後から蹴飛ばされ、管制室の中に転がった。

「ウゥ……ッ！！『バチィッッ！！』

「ア゛ア゛ア゛ッッ！！！！」

首元に激しい痛みが生じ、その衝撃が一瞬に全身に痺れわたる。

床に横たわり、全身に麻酔でも打たれたかのように力なく倒れる西条亨。

そんな彼を見下ろしながら、黒いサングラスで目元を隠す一人の赤毛の女は、「ふぅ」と軽く一息ついた。

「ラドルフ、油断しすぎよ？」

「作戦中はコードネームで呼ぶように指示した筈だ、Ｔ２」

「大丈夫よ、この男には最大威力でスタンガンを首元に刺したのよ？　意識なんてぶっ飛んでるわよ。ラドル…あ、Ｒ１」

コードネーム【R1】ことラドルフと呼ばれた男は、T2を眼圧だけで黙らせた。

それだけ、ラドルフから発せられる赤紫色の左目が恐怖に感じられたのだ。

「ふむ…しかし、予期せぬ来訪者が現れたものだ」

ラドルフは床に倒れた亨を見てニヤリと笑みを浮かべる。

「思わぬ収穫だよ、まさか私の前に西条亨が現れるとはな」

「えッ!?　この男が…精霊界を救った、三英雄の一人……!!」

驚くT2を余所に、ラドルフは亨の腕に装着された決闘盤に手を伸ばす。

「三英雄の中でも彼にしか扱えない、世界に三枚しか存在しない伝説の神のカード、後々の手間が省けたよ」

亨の腕に装着された決闘盤。
そこに収められたデッキを取り外そうとするラドルフだったが

「…やはり決闘盤にはロックが掛けられているか」

「どうする、Ｒ１？　このままコイツも一緒に連れて行く？」

尋ねるＴ２にラドルフは「いや…」と呟き、ゆっくりと立ち上がる。

「もう時間がない。三幻神のカードを回収できないのは残念だが、
今は現状の作戦を優先する。それに…」

二人は管制室を出て廊下を歩きながら

「神を扱う者が減ると思えば好都合だ。この作戦が成功すれば、こ

の世界に神を従えるのは私だけとなるッ！！」

ラドルフにＴ２は会場から出ると、外に用意されていたキャンピングカーに乗り込んだ。

二人が搭乗すると、キャンピングカーはゆっくりとトリティニードームから離れていく。

ラドルフは窓から見えるトリティニードームを眺めながら

（これで条件は全てクリアーした。　さらばだ、早乙女に西条……後はこの私が世界を導いてあげよう）

その瞬間、トリティニードームから地響きする位の轟音が響き渡ったと同時、どす黒い煙と凄まじい勢いで燃え広がる炎が見えた。

それはトリティニードームが崩壊した瞬間でもあった。

※

～数分前～

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【福田光輝】
ＬＰ／　４０００

現在、拓夜のターンのメインフェイズ１。

拓夜のフィールドには攻撃表示で『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』と、守備表示で『羊トークン』が四体並んでいた。

対する福田のフィールドには、裏側守備表示でモンスターが１体存在するのみ。

拓夜はこのターンで決着をつける為、手札から１枚のカードを取り出した。

「『羊トークン』三体をリリースし、来いッ！！　『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１９００
ＤＥＦ　６００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、相手フィールド上に存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに１体のみ装備する事ができる。このカードの攻撃力は、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードが自分フィールド上で表側表示で存在する限り、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果は無効化される。

「ぶッ…Ｂｌｏｏ－Ｄッ！？」

拓夜の特殊召喚したモンスターを見て、驚愕の表情を作る福田。

「Ｂｌｏｏ－Ｄのモンスター効果だ！　１ターンに１度、相手モンスター１体を吸収するッ！！」

拓夜がそう言うと、Ｂｌｏｏ－Ｄは福田の守備モンスターを自身の血色の翼に取り込んだ。

「これで福田さんのフィールドはがら空きだ！！　このまま叩くッ！！」

「ヒィッ！？」

バトルフェイズへと突入する拓夜。

まず動いたのはＢｌｏｏ－Ｄだ。

「バトルッ！！　Ｂｌｏｏ－Ｄでダイレクトアタック！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【福田光輝】
ＬＰ／　４０００　→　２１００

「ウァァアッ！？」

「コイツで決める！！　ドグマガイッ！！」

拓夜が言うとドグマガイは右手の大剣を構え、戦闘体勢に入る。

攻撃力３４００のドグマガイの一撃が決まれば、このデュエルは拓夜の勝利だ。

「アハッ、凄いです！拓夜さん！」

「相手が弱すぎなだけよ」

それぞれに余裕な態度で成り行きを見つめる成瀬に葉月。

「ダイレクトアタックだ！！　デス・クロニクル！！」

「うわぁぁあああッ!?」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【福田光輝】
ＬＰ／　２１００　→　０

『決まったァア!!　先攻開始から僅か3ターンでの決着!!　新メンバーと言えど、やはり実力は本物ね!!　【ＯＣＧ研究会】の名は伊達じゃないッ!!　第一試合に王手をかけたのは、チーム【ＯＣＧ研究会】!!』

ワァァア!!

会場中から拍手喝采が湧き起こる。

それだけ、無名だった拓夜のプレイが観客達に評価された証だった。

「へへ、どうだ？　チーム【ライトニング】！」

「ぐぬぬ…ゆ、油断した……ッ！！」

その瞬間

『カチッ』と何かのスイッチが入ったような音が聞こえた。

拓夜が不思議に思い、辺りを見渡したその時

バゴォォオオオッ！！

ズガァッ！！　ドゴォオッ！！

突如鳴り響く轟音。

爆発するドーム内の電子機器。

会場中は一瞬の内に大パニックに陥ってしまった。

「キャァアッ！！」

「な、何ッ！？」

「花穂ッ！！　葉月ッ！！　大丈夫かッ！？」

急ぎ、デュエルフィールドから二人の下へ駆けつける拓夜。

「大丈夫か、二人共！？」

「た、拓夜さんッ！！」

「一体どうしたってのよ？」

激しく揺れる建物内。

天井にぶら下がる照明は激しい揺れに耐えきれずに落下し、けたたましい炸裂音をあげる。

更には会場中の至る所から黒い煙が立ち込めてきて、会場内の視界を徐々に奪っていく。

そして異様に熱く感じる熱気。

大パニックに陥るこの騒動。

拓夜は震える成瀬を抱き締めながら、思わず呟いた。

「……まさか……爆弾テロ……ッ！？」

拓夜の呟いたその一言で、成瀬に葉月は震え上がるしかなかった。

爆発した電光掲示板。

燃え盛るドーム内。

『会場の皆さん！！　落ち着きなさい！！　慌てず、非常口から順番に避難するのよッ！！』

アナウンスで中島が必死になって避難誘導を開始する。

すると次の瞬間、これまでに一番激しい爆発音が鳴り響き、ドーム

を激しく振動させた。

「う、うわぁぁあああッ！？」

「キャァアッ！！」

「ママーッ！！　ママーッ！！」

辺りから聞こえてくる悲鳴の数々に、拓夜達三人はその場から動く事ができなかった。

恐怖で足が竦み、動かす事ができない。

真っ赤に染まる紅蓮の炎が更なる恐怖を煽り立てて、声すら発する事もできない。

三人がその場で立ち竦んでいると、背後から

「何やってんだ三人共ッ！！」

「拓夜ッ！！　成瀬ッ！！　美少女ッ！！　コッチだ！！」

「む、結締さんッ！！　白石さんッ！！」

拓夜達三人は結締と白石に駆け寄り、状況を尋ねた。

「結締さん、一体これはッ！？」

「拓夜ちゃん、説明は後だ！！　今はここから避難する事を考えろ！！」

そう言い、走り出す結締を追いながら皆は頷き、走り出した。

すると途中で葉月が疑問に思った事を口に出す。

「ねぇ、亨さんに、マナさんは！？」

尋ねられた白石だったが、白石に結締も二人の行方は分からなかった。

自分達が最後に見たのは、彼がトイレに行くと言い、部屋から出ていった姿だけなのだ。

「あの二人の事は分からん！！　だが、今は自分達の事だけを考えろッ！！」

「そ、そんな…ッ！？」

ドームから抜け出した五人は振り返ると、もう言葉が出て来なかった。

空の色は紅蓮。

舞い上がる火の粉。

立ちのぼる黒煙。

そして所々から吹き荒れる炎。

自分達はつい先程まで、あの炎の中にいたのだ。

「…何だよ…これは……ッ」

成瀬を抱き締める腕に力が入る。

「一体、何なんだよ……ッ！？　どうして……ッ」

突然の爆発。

突然のテロ。

だが、拓夜の問いかけに答えてあげられる者はいなかった。

※

『さいじょお、起きてッ！！　さいじょおッ！！』

徐々に視界がクリアになっていく。

体にも徐々に力が戻っていく。

『さいじょおッ！！』

「ぅ…ま、マジシャン・ガール……ッ！？」

亨が目を開けると、目の前は瓦礫の山と炎の壁だった。

「なッ！？　これは…ッ！？」

驚いて体を起こす亨だったが、力が完全に戻ってはおらず、直ぐに地に膝をついてしまう。

「一体……何が……」

『さいじょおが気絶しちゃってる間に、火事がおきたんだよ！！デッキから抜け出そうにもロックが掛かってて、私は外に出られなかったし、さいじょおはいくら呼んでも全然起きないし！！』

「くッ…そうか、あの時…俺は後ろから襲われて…」

徐々に記憶も戻っていく亨だったが、現実はそんな猶予はなかった。

「熱ッ！？　って…周りは火の海か……逃げ場はない、のか……？」

これだけの火災にスプリンクラーが作動していない事を考えると、故障か…或いはハッキングされ、作動しないようにされていたかもしれない。

とりあえず亨は部屋の火の気がない場所へ移動した。

「糞ッ！！　廊下の先も火が回ってやがる…」

『…さいじょお』

「もう…俺はここまでなのか……」

亨が決闘盤のロックを解除すると、デッキの中から一枚のカードがピンク色に輝きだし、亨の前に浮かび上がる。

そのカードは徐々に姿を変え、一人の女性、マナことブラック・マジシャン・ガールになった。

「火の手も、もう俺達を取り囲んでいる。こうなったら強行突破に出るしかない……！！」

「そんなッ！？　危ないよ、さいじょお！！」

「危ないのはどこに居ても一緒だ。とにかく、前に進まなきゃ……道は開けない！！」

「…ッ！！」

亨が前に進もうとすると、急にマナは亨の手を取り、自分に引き寄せた。

「ッ！？　どうした、マジシャン・ガール？」

「さいじょお、一つだけあるの。さいじょおが脱出できる方法が」

「マ…マジシャン・ガール……？」

さいじょおがって何だ？

“が”って何だ？

それはどういった意味なのか？

“さいじょおが”って、お前自身はどうなんだ？

亨の脳裏には、マジシャン・ガールの口から聞きたくない言葉が鮮明に予測できてしまった。

「さいじょおは、私の世界を救ってくれた恩人だし…凄く感謝してるの」

「マジシャン・ガール……」

「さいじょおは、私が初めてコッチに来た時に、凄く親切にしてくれた。　コッチの世界に来て、最初に会ったのがさいじょおで、私、本当に良かったって思ってる」

「……」

「本当に、本当に……感謝してるの。　だから、今度は……私の番」

「お……おい、マジシャン・ガール……」

マナがポツリと呪文を呟くと、亨の体が淡いピンク色の魔力に包まれる。
亨の足は徐々に床から離れ、次第にその体は宙に浮かぶ形となった。
すると、更に建物が激しく揺れだし、天井や壁が途端に崩れだした。

「まさか……ッ！？　おい、マジシャン・ガールッ！！　今すぐこの術を解けッ！！　マジシャン・ガールッッ！！！！」

彼女に近付こうにも自分の体は宙に浮かび、マナの魔法によってか、思うように動けない。
俯くマナは、顔をあげて亨を見つめる。

「ッ……今度は、私がさいじょおを助けるね！」

笑顔だった。

彼女は目尻に涙を溜めながら、必死に笑顔を作った。

「ふざけるなッ！！　俺だけ助かっても意味はないッ！！　お前も一緒にーーーーッ！！」

「……大好きだよ、さいじょお……だから……」

「ーーーーマッ！！！！……

亨の視界が急速にホワイトアウトする。

消え行く視界の中で、マジシャン・ガールの顔を見た亨だったが、やはり

彼女の表情は笑顔だった。

2024

※

気が付くと亨は、トリティニードームの外にある広場に立っていた。

辺りには大勢の人だかりが出来ており、聞こえてくる声はどれも阿鼻叫喚な悲痛な声だった。

辺りを見渡して思う。

「……マジシャン・ガールは……？」

辺りには見知らぬ顔、顔、顔、顔、顔……。

いつも隣で笑ってくれていたマナこと、マジシャン・ガールの姿が見当たらない。

そして目の前には倒壊し、激しく燃え上がるトリティニードームが。

「……嘘……だろ……ッ！？」

亨は今、自分の身に起きた現実を理解したくなかった。

すると

「西条ちゃーん！！」

「西条ォオ！！」

「亨さんッ！！」

「亨さん！！」

「無事だったんですね！！」

「…ッ…みんな……」

西条亨の無事を発見したＯＣＧ研究会のメンバー５人は、それぞれに走りながらやって来た。

結締智恭。

白石直也。

西条拓夜。

成瀬花穂。

烏丸葉月。

（……いない……ッ！！）

彼らの中に、マナはいない。

その現実（こと）が亨に更なる衝撃を与えた。

「西条ちゃん、無事だったんだな！！　いやぁ心配したぜよ！！」

「どこに行ってたんすか、亨さん？」

それぞれに彼の身を案じた発言をする仲間達。

しかし、何度見渡しても、そこにはマナの姿はいない。

亨は今も轟々と燃え上がるトリティニードームを見上げながら、白石に尋ねた。

「……なぁ…白石……」

「ふぅん、どうした？」

亨は藁にも縋る気持ちだった。

「……マナを……見なかったか？」

もしかしたら、マナも既に脱出し、先に白石達と会っているかもしれない。

もしそうだとしたら、疲弊したマナは先に介抱してもらえてるかもしれない。

最後の希望のつもりで尋ねた一言だった。

しかし、現実は現実（無情）だった。

「マナ？　俺達はまだ見てないぞ。　お前と一緒に居たのではなかったのか？」

「ーーーーッッッ！！！？？？」

居た。

そう、確かに一緒に居た。

ついさっきまで、あの轟々と燃え盛る炎の中に。

「……行かないとッ」

「待て、西条ッ!?　どこに行くつもりだ!?」

「離せ白石ッ!!　あの中にッ、まだあの中にマナが居るんだッ!!」

「なッ!?」

「えッ!?」

「嘘ッ!?」

「へッ!?」

「そッ、そんなッ!?」

亨の放った一言に信じられない様な表情になるメンバー5人。

しかし、だからと言って彼をこのまま行かせる訳にはいかなかった。

「待てよ西条ちゃん!?　だとしても今あの炎の中に行くのは危険だッ!!」

「そうッすよ!!　死ぬつもりッすか!?」

「離せッ!!　離せよテメェ等ッ!!　マナがッ!!　俺はまだ、アイツにーー」

「駄目ッ!!　亨さんッ!!」

背後から白石が亨を羽交い締めにし、前からは葉月が亨を必死になって押さえつけた。

しかし、それでも……。

まだ俺は、マジシャン・ガールに……。

マジシャン・ガールを……。

アイツを……。

しかし、次の瞬間。

ゴゴゴゴゴ……ッ！！

バキッ、メキャメキャッ！！

ゴガガガガガ……ッ！！

凄まじい地響きが鳴り響く。

そして同時に、亭の目の前でトリティニードームは完全に崩壊した。

「ッッ！！！！」

言葉にならない。

気持ちが爆発する。

「ァァァァァァァアアアアアァァァアアアアアッッ！！　マナァァァァァアアアァァアアアアアアッ！！　ゥ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛ア゛！！！！」

亨は大粒の涙を流しながら、愛しい者の名を狂いながら叫んだ。

もう、彼女との思い出を築きあげる事はできない。

亨の中で、マジシャン・ガールとの思い出の積み木が崩壊した。

崩壊　（後書き）

【登場人物紹介】

結締智恭

特徴ある口調で話し、常におちゃらけた印象を与える人物。

しかし、あながちその印象は間違っていない。

その雰囲気や言動から、ＯＣＧ研究会の中ではムードメーカー的なポジションに位置する。

デュエルの腕は、作中では【最強のＨＥＲＯ使い】と称される程の実力を持つ。

仲間意識が強く、迷える後輩（拓夜）にデュエルを通して、デュエリストとしての自信をつけさせた。

彼の使用するデッキは、融合を主軸とした【Ｅ・ＨＥＲＯ】デッキ。

様々な属性とＨＥＲＯの融合、更には究極の融合魔法【超融合】により、どんな相手ともオールマイティーに戦う事ができる。

その効果によって、自信を取り戻した拓夜を瞬殺した。

そういう意味では負けず嫌いな性格とも読み取れる。

様々な【ＨＥＲＯ】のカードが存在するが、その中でも彼が最も信頼を置くカードは【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス】。

これまでに何度も彼の窮地を救った、ヒーローである。

揺るぎない決意　（前書き）

連続投稿４話目！

※

烏丸葉月は夕暮れに沈んだ空を、教室の窓から見上げていた。

紅く染まる夕焼け空を見つめる度に、葉月の耳にあの時の西条亨の悲痛な叫びが蘇る。

「ーーーーッ」

思い出す度に、あの時の亨の表情が鮮明に脳裏に映し出される。

ボロボロに崩れた表情から叫ばれる、彼の本心の叫び。

その叫びの大きさこそ、彼の彼女に対する愛情の大きさなんだと思うと、思わず目を反らしたくなる衝動にからかわれる。

件の西条亨は現在、検査入院という形で東区総合病院に入院している。

彼が入院してからまだ一日しか経っていないが、やはり彼の様子が気がかりだった。

とにかく、先ずは病院に行ってみよう。

そう思った葉月が振り返ると、そこには西条拓夜に成瀬花穂の二人が立っていた。

「…拓夜、それに…成瀬さん」

「病院に行くんだろ？」

「今の葉月さんの様子を見れば、一目瞭然ですから……。私達も、ご一緒しても良いです？」

「……うん、お願い」

でないと……もし亨と顔を合わせても、一体何を話せば良いかが分からない。

葉月は鞄を持ち、二人の仲間の顔を見つめながら

「……行こう、みんな」

三人はそれぞれの想いを胸に、教室を後にした。

※

葉月たち三人は病院に到着し現在、とある病室の前に立ち並んでいた。

その病室の札には【西条亨】の名が表記されていた。

「……」

ドアノブに手を掛けるが、何故か手が震えてしまい、その手が言うことを聞かない。

葉月は自分に言い聞かせた。

（大丈夫……大丈夫……ッ）

彼がどんな表情をしていても受け入れよう。

彼がどんな言葉を話すとしても受け入れよう。

自分にそう言い聞かせた葉月は、ゆっくりと病室のドアを開いた。

ドアを開き、病室の中に入る三人。

しかし

「……あれ？」

「亨さん、どこにもいらっしゃらないです…」

病室はガラリとしており、そこに西条亨の姿はなかった。

病室の札にはまだ【西条亨】の名が表記されている事から、まだ退院した訳ではないだろう。

「…これは……亨さんの……」

ただ一つだけ、ベッドの上に置いてあった決闘盤。

決闘盤の中には彼のデッキが収められていた。

「あ、ちょっとスイマセン！」

「どうされました？」

拓夜は廊下に出て、すれ違った看護士に尋ねてみた。

「この病室の…西条亨さんって今、どこに居るか分かりますか？俺達、面会に来たんですけど…見当たらなくて」

「えッ！？　病室に居ないんですかッ！？」

拓夜の話を聞いて驚く看護士。

「まだ外を出歩く許可がドクターから出てないのに……」

「ッ！？」

看護士の話を聞いて驚く三人。

看護士の話が本当なら、彼は病院から無断で抜け出した事になる。

「そんな…亨さん、一体どこに……」

呟く成瀬の隣で、葉月は彼のデッキが収められた決闘盤を手に取る。

「……まさか……ッ！！」

「あっ、葉月さん！？」

葉月は西条亭の決闘盤を抱えながら、病室から駆け出ていった。

「は、葉月!?　どこに行くんだよッ!?」

思わず呼び掛ける成瀬に拓夜の声を振り切って、葉月は東区の街並みの中を走って行った。

※

無我夢中に走る葉月の行く先は一つだった。

東区の町外れにあるアパートの二階。

ＯＣＧ研究会事務所にして、西条亭の部屋でもあるその部屋。

彼のデッキが収められた決闘盤を握り、階段を駆け上がった葉月は、勢い良く部屋のドアを開けた。

「ハァッ、ハァッ、ハァッ……ッ」

鍵が掛かってなかった事から一瞬、亨が部屋に戻っているのではないかと思ったが、部屋にあがっても彼の姿を見る事はなかった。

「本当に…一体、どこに行ったのよ……」

葉月の中には、彼が他にどこに行くアテがあるのか予想ができなかった。

もしかしたら結締か白石の所か？　とも思ったが、彼らの所へ行ったのなら、自分達に連絡が入ってもおかしくない。

その連絡がない事から、彼らの所へは現れてはいない事になる。

「……ハァ、何か私…一人で走り回って……何やってんだろ」

成果が上がらない事に思わず溜め息が出てしまう。

ベッドに腰掛け、俯く葉月。

すると、部屋の隅から葉月を呼ぶ声が聞こえてきた。

『お姉ちゃん、葉月のお姉ちゃん！』

「ッ！？」

思わず顔をあげて辺りを見渡す葉月。

すると、部屋の隅に置かれた一つのデッキに気が付いた。

「……まさか、あの時のッ！？」

葉月はそのデッキを手に取り、一番上のカードをめくると、そこには

「……ウィンダ……やっぱり」

『お姉ちゃんが来てくれて良かったよぉ！　お兄ちゃん、帰ってきても凄く上の空で、全然話をしてくれないし！』

「ッ！？　やっぱり…亨さんは一度帰ってきてたんだ」

葉月のとりあえずの予想は当たっていた。

しかし、どうやら入れ違いになってしまったらしい。

『昨日、お兄ちゃんや、お姉ちゃんが大変だったのは知ってるよ。ガールのお姉ちゃんの事も……』

「？　ガールの…お姉ちゃん？」

それは誰だろう？　と思いながら、ウィンダのカードを持ちながら再びベッドに腰掛ける葉月。

『ガールのお姉ちゃんが居なくなって、何とかお兄ちゃんを励ましたり、慰めようとしても…私じゃ駄目だったんだ。私はまだ修行不足で、ソッチには行けないし…』

「え、ちょ、ちょっと待ってよ!?」

葉月は一瞬、頭の中が訳が分からなくなった。

ウィンダが言っているのは恐らく、昨日の【トリティニー・チャンピオンシップ】での爆発事件の事だろう。

ウィンダの話の中で、お兄ちゃんというのは西条亨の事で間違いない。

葉月のお姉ちゃんは私自身だ。

では、ガールのお姉ちゃんとは誰なのか?

昨日の爆発事件で、件の西条亨はマナを亡くした。

そして、ウィンダの話では“ガールのお姉ちゃんが居なくなって”と言っていた。

これらのパーツを当てはめて行くと、ガールのお姉ちゃんはマナと言うことをになる。

「ねぇ、ウィンダ……ガールのお姉ちゃんって、マナさんの事よね?」

『…マナさん？　うん、そうだよ。　正確には私と同じ、精霊界出身のブラック・マジシャン・ガールだけどね』

「ーーーーッ！？」

ブラック・マジシャン・ガール？

それは遊戯王カードの一つじゃないのか？

マナさんが、ブラック・マジシャン・ガール？

亨さん？　ウィンダ？

精霊界？

聞けば聞くほどに訳が分からなくなる。

そして同時に思う事は、自分はそれだけ、彼の…西条亨の事を知らないのだという事実だった。

葉月はベッドに寝転がり、ウィンダのカードを顔の横に並べた。

『お兄ちゃん、部屋を出ていく時…凄く思い詰めてた表情（かお）してた。

葉月のお姉ちゃん、お兄ちゃんを助けてあげて！　今、お兄ちゃんの事を頼めるのは、お姉ちゃんしかいないの！』

「……ウィンダ」

葉月は目を閉じて、彼の事を考える。

私が知ってる西条亨。

ＯＣＧ研究会の一人で、この世界で唯一、神のカードを扱える最強クラスのデュエリスト。

優しく、頼れる先輩。

ちょっと抜けた所もあるけど、どこか憎めない人。

常に後輩の私達を気に掛けてくれて、私達の成長に繋がるという理由で、大会の参加を決めるとか、凄く大切にしてくれてるんだという事も分かる。

でも、それは現在の西条亨だ。

彼の昔を、私は知らない。

どんな人だったんだろう。

マナさんとは、どう知り合ったんだろう。
ウィンダとは、どう知り合ったんだろう。

「ウィンダ…、今の私が行っても、あの人を本当に理解してあげれるか分からない」

『……そんな…』

「だから教えて。　あなたの知ってる、西条亨を。どこまで出来るか分からないけど……私は、本当の意味で…あの人の支えになりたいから！」

※

一台のキャンピングカーの中に複数のノートパソコンを立ち上げて、液晶画面を不敵な笑みで見つめる一人の男がいた。

黒いサラサラした髪に、白いスーツを着こなし、スラッと長い足を組みながらその男、ラドルフは、画面に表示されたグラフを見ながら

「ククククク…ッ、予想通りだ。昨日の爆弾事件により、トリティニーグループの株価が一気に暴落している。　更に……」

ラドルフはもう一台のノートパソコンを横目で見やり

「昨日の爆弾事件を恐れてか、トリティニーグループが主催する様々なデュエル大会は中止をやむおえず……、これによりトリティニーグループの世間からの信用はがた落ちだ。そうなれば我々の行動範囲が格段に広がる」

ラドルフが笑っていると、彼の正面の椅子にに座っていた赤髪の女性が、退屈そうに頬杖をつきながら

「ねぇ、ラドルフ？」

「どうした、Ｔ２？」

「もう、今は作戦時間じゃないんだし、Ｔ２じゃなくて、ちゃんと

ツィスカって名前で呼んでよ」

ツィスカと名乗った女性は体を乗り出し、対面に座るラドルフに迫る。

「トリティニードームの爆破は成功したし、私の担当するトリティニーグループの株の一斉買い占めも終わったし、何か他に私がやる事ないの？」

「そう慌てる事はない。次の行動に移るには、アンドレーの作業が終了してからだ」

「え～、アンドレーの作業まだ時間が掛かるし……暇だなぁ」

ボヤくツィスカ。

ラドルフはそんな退屈そうにするツィスカを見て

「ならお前がアンドレーの作業を手伝えば良い。そうなれば作業効率も上がり、次のプランに移れるんだが？」

「やだ、面倒くさい」

即答するツィスカに、ラドルフは軽く溜め息を吐いた。

「お前は仕事がしたいのか、したくないのか…どっちなんだ？」

※

葉月はウィンダから亨の昔の話を聞いていた。

昔、と言っても彼がまだ自分と同じ、高校生の頃の話である。

精霊界。

デュエルモンスターズが暮らす、自分達から見たら異世界。

その精霊界に訪れた邪神という神々の災厄。

その災厄を打破する為に精霊界からマジシャン・ガールが派遣された事。

その時に彼女が初めて出逢った人物が、西条亨だった事。

邪神達との戦い。

どれもこれも、端から聞いたら信じられない内容ばかりだった。

しかし、葉月はそれをすんなりと聞き入れる事ができた。

その理由としては、確かに聞こえるウィンダの声。

そして、いつしかマナが言っていた『魔法』という単語。

そして何より、彼の全てを受け入れようと決めた、葉月自身の揺るぎない決意。

「そうなんだ…、亨さんにマナさん…、結締さんに白石さん…、精霊界の三英雄か……」

『お姉ちゃん、私の話……信じてくれるの？』

「当たり前よ。　ウィンダだって、亨さんの事が大好きなんでしょ？」

『うん！！』

どこか照れる様に答えるウィンダの声を聞いて、葉月は体を起こし、ウィンダのカードと亨の決闘盤を持って、玄関へと向かった。

「なら、一緒に行こう。　亨さんの所に！」

『お姉ちゃん……、うんッ！！』

互いに頷き、玄関の戸を開ける葉月。

外に出ると、そこで鍵を持った白石と鉢合わせた。

「ム、誰かと思えば……」

「し、白石さん…！？」

葉月は白石が鍵を握っている事に気が付き、尋ねてみた。

「白石さん、その鍵って……」

「ふぅん、西条の部屋の鍵だ。　アイツに頼まれてな」

アイツに頼まれて？

もしかして、と思い、葉月は

「白石さん、亨さんに会ったの？　居場所を知ってるなら教えて！」

「悪いが美少女の頼みと言えど、それは聞けない。　今はアイツをそっとしておいてやれ」

そう言い、亨の部屋の鍵を掛ける白石は、そのまま足を帰路に向ける。

「ッ！！　ちょっと、待ちなさいよ！！」

「まだ西条の居場所を聞くつもりか？　悪いが、今回ばかりは美少女といえど……ム？」

白石が振り返ると、決闘盤を装着して構える葉月の姿があった。

「…何の真似だ？」

「精霊界の三英雄の一人…白石直也！！　私とデュエルよ！！　私が勝ったら教えろなんて言わないわ！！　連れて行ってもらうわよ！！！　亨さんの所へ！！！」

「…『精霊界の三英雄』だと？　美少女よ、どこでその言葉を…」

尋ねる白石だったが、既に葉月はバトルモードへ突入した瞳をしていた。

（……仕方あるまい）

白石は一呼吸おいて、決闘者としての表情で葉月と対峙した。

「ふぅん、良いだろう……美少女と言えど手加減はせんぞ！　戦(や)るからには、全力で来るがいいッ！！」

揺るぎない決意　（後書き）

【登場人物紹介】

マナ

西条亨宅に居候する女の子。

その正体は西条亨たちが暮らす世界とは違う、別の世界から来た、精霊界の住人である【ブラック・マジシャン・ガール】。

その正体を知らないのはＯＣＧ研究会の中では烏丸葉月だけである。

かなりの大食らいで、亨宅の食費の半分以上はマナが消費している。

よく人の名を呼ぶ時は、大半はひらがなで明記されている為、アホの子と見られがちだが、実は滅茶苦茶かしこい子。

※1

亨とアメリカに行く際、英語が読めず、言えずで悩む亨に、非常に饒舌な口調で英会話し、それまでマナに威厳を持っていた亨のプライドを粉々にマインドクラッシュさせた。

彼女が使用するデッキは、精霊界での友達を集めた【お友達デッキ】。

デッキに足りない分のカードは、亨のカードを使って補っている。

たまに亨がデュエルする時に、自分がカード（ブラック・マジシャン・ガール）となって、一緒に戦う事もある。

これは常に一緒にいたいという、彼女なりの気持ちを現した行動である。

ちなみにキャラクターモデルとしての外見は、まんま【遊☆戯☆王デュエルモンスターズ】のブラック・マジシャン・ガールだが性格面のモデルは【とある魔術の禁書目録】に登場するインデックスである。

※1の描写は、後に番外編小説として掲載予定

最強の龍使い（前書き）

今回も連続投稿になります。

これはその第１話目です。

最強の龍使い

※

夕方。

西条亨宅の近くを流れる河原にて、烏丸葉月と白石直也の二人が決闘盤を装着し、対峙していた。

二人の表情は穏やかとは言えず、二人の間にはそれぞれの闘志がぶつかり合い、火花を散らしている。

「ふぅん、美少女よ。先攻なり後攻なり好きに選ぶが良い…」

白石は腕を組みながら、先輩としての配慮ある発言をする。

白石の発言に対し、葉月は迷うことなく答えた。

「…私は後攻を選ぶわ」

「ふぅん、良かろう…」

二人はデッキトップに指を添え、互いに同時にデュエル開始の宣言をした。

『デュエルッ！！』

【先攻】白石直也
ＬＰ／　８０００

【後攻】烏丸葉月
ＬＰ／　８０００

「ならば俺が先攻させてもらうぞ、ドローッ！！」

デッキからカードを手札に加えた白石は、手札の中から一枚のカードを発動させた。

「魔法カード『調和の宝札』を発動する！！」

【調和の宝札】
［魔法カード］
手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー1体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「このカードは、手札の攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー1体を捨てる事により、俺はデッキからカードを2枚ドローする事ができる。　手札よりチューナーモンスター『伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）』を捨て、カード2枚ドローッ！！」

『伝説の白石』が墓地へ送られ、デッキからカードを2枚ドローする白石。

「この瞬間、手札より墓地へ送られた『伝説の白石』の効果が発動される！」

【伝説の白石】
星１／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　２５０
［チューナー・効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」１体を手札に加える。

「『伝説の白石』が墓地へ送られた時、デッキより『青眼の白龍』１体を手札に加える！」

デッキから『青眼の白龍』のカードを手札に加えた白石は、更に手札から魔法カードを発動する。

「更に俺は『トレード・イン』の魔法カードを発動！！」

【トレード・イン】
［魔法カード］
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。自分のデッキ

からカードを2枚ドローする。

「手札よりレベル8の『青眼の白龍』を墓地へ送り、デッキからカード2枚ドローッ！！」

更に手札交換をする白石は準備が整ったのか、彼のデッキの主軸となるカードを発動させた。

「ゆくぞッ！！　手札より永続魔法『未来融合ーフューチャー・フュージョン』を発動ォ！！」

【未来融合ーフューチャー・フュージョン】
［永続魔法］
自分のデッキから融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、エクストラデッキから融合モンスター1体を選択する。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に選択した融合モンスターを自分フィールド上に特殊召喚する（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された

時このカードを破壊する。

「俺が融合するのは、『F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）』！！　その融合素材となるカードはドラゴン族モンスター5体！！　よって俺は、5体のドラゴン族モンスターをデッキから墓地へ送るッ！！」

【デッキから墓地へ送られたカード】

『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』×2

『真紅眼の飛竜』×2

『ミンゲイドラゴン』

次々とデッキからカードを墓地へ送る白石に、葉月は奥歯をギッと噛み締める。

「更に俺は永続魔法『一族の結束』を発動！！」

【一族の結束】
［永続魔法］
自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が１種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在するその種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。

「『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』を召喚！！」

【仮面竜】
星３／炎属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１１００
［効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

白石のフィールドに現れたドラゴンのリクルーター。
だが、白石は更に先攻プレイを続けていく。

「そしてフィールドの『仮面竜』をゲームから除外し、手札より『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚するゥッ！！」

カッ！！

ズドドドド……ッ！！

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】
星１０／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２４００
［効果］
このカードは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター１体をゲームから除外する事で特殊召喚する事ができる。１ターンに１度だけ、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

白石のフィールドに現れし、真紅の眼を輝かせる闇の竜。

白石のエースモンスターの一つ。

白石は早速、ダークネスメタルドラゴンの効果を発動した。

「レッドアイズのモンスター効果だッ！！　手札か墓地より、このカード以外のドラゴン族モンスターを特殊召喚させるッ！！　墓地より我が呼び掛けに応えよッ！！　『青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）』ッ！！」

カッ！！

ゴゴゴゴゴ……ッ！！

【青眼の白龍】
星８／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２５００

白石のフィールドに並ぶ二体のエース。

一つは闇を司り、一つは光を司る。

真紅眼に青眼。

白石は僅か1ターン目にして、最高クラスのモンスターを展開してきた。

「俺のフィールドのドラゴン族モンスターは、永続魔法『一族の結束』の恩恵により、攻撃力が８００ポイントアップする」

『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』
ＡＴＫ　２８００　→　３６００

『青眼の白龍』
ＡＴＫ　３０００　→　３８００

「攻撃力が…３０００を超えたッ！？」

「ふぅん、どうした美少女よ？　俺のドラゴンを前に臆したか…ッ！？」

「上等よ！！　それぐらいでなくちゃ、張り合いがないわ！！」

葉月の反論に白石は軽く笑みを浮かべ

「リバースカードを1枚セットし、ターンエンドだ。　…さぁ来い、美少女よ！！」

白石のターンが終了し、後攻の葉月のターンへ移行する。

「私のターンッ、ドローッ！！」

デッキからカードをドローする葉月。

すると、制服のスカートのポケットに入れていたウィンダが注意を呼び掛けた。

『気をつけて、お姉ちゃん！！　相手は精霊界の三英雄の一人……私の世界じゃ、最強クラスのデュエリストだよ！？』

「分かってるわよ！　精霊界云々とか関係なしに、あの人はコッチでも最強クラスの実力者なんだから！　油断なんかしてらんないわ！」

葉月は手札を確認し、続いて白石のフィールドを確認する。

白石のフィールドには、永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』に『一族の結束』、そして一枚の伏せカード。

モンスターは『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』に『青眼の白龍』。

どれも攻撃力３０００を上回る高火力モンスターだ。

（あんな攻撃力…まともになんか相手してられない！！　だったら無難に、戦闘破壊されないアーマード・ウィングで…ッ！！）

「手札の永続魔法を発動！『黒い旋風』よ！！」

【黒い旋風】
［永続魔法］

自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが召喚された時、自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

「そして私は『ＢＦ－黒槍のブラスト』を召喚するわ！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１７００
ＤＥＦ　８００
［効果］
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値分だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「黒槍のブラストの召喚成功により、私の場の永続魔法『黒い旋風』の効果を発動！　ブラストより低い攻撃力を持つ【ＢＦ】を手札に加える！　私はデッキから『ＢＦ－そよ風のブリーズ』を手札にッ！！」

そよ風のブリーズを手札に加えた事により、ブリーズは自身のモンスター効果を発動する。

「そよ風のブリーズは、魔法効果によってデッキから手札に加わった時、特殊召喚する事ができる！　チューナーモンスター『ＢＦ－そよ風のブリーズ』を特殊召喚ッ！！」

【ＢＦ－そよ風のブリーズ】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１１００
ＤＥＦ　３００
［チューナー・効果］
このカードが魔法・罠・効果モンスターの効果によって自分のデッキから手札に加わった場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。このカードをシンクロ素材とする場合、「ＢＦ」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

葉月のフィールドに非チューナーとチューナーのモンスターが並んだ。

そして葉月がシンクロ召喚を行おうとした瞬間

「甘いぞ、美少女よッ！！　俺の前に低レベルモンスターを並べる事が、如何に愚かな振る舞いであるか、その身に味わえッ！！　リバースカードオープンッ！！　『無力の証明』！！」

【無力の証明】
［罠カード］
自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊する。このカードを発動するターン、自分フィールド上に存在するモンスターは攻撃する事ができない。

轟ッ！！

ズガガガガガッ！！

「キャァアッ！？」

凄まじい衝撃が葉月のモンスターを襲い、一瞬の内に葉月のモンスターは全て破壊された。

「この罠カードは、俺の場にレベル7以上のモンスターが存在する場合に発動する事ができる。　その効果は、相手フィールド上のレベル5以下のモンスターを、全て破壊するッ！！」

「なッ！？　私のブラストに…ブリーズが……ッ！？」

「ふぅん、シンクロ召喚には…チューナーと非チューナーのモンスターが必要だ。　しかし、大抵の場合それらのモンスターは低レベルモンスターが大多数を占める。　最初に言っておくぞ、美少女よ…」

「……ッ！！」

ゴゴゴゴゴ……ッ！！

白石から圧倒的な覇気が発せられる。
白石は全てを粉砕せんばかりの眼圧で言い放った。

「俺には…生半可なシンクロ召喚は通用しないぞッ！！」

「くッ！？」

葉月の頬を嫌な汗が流れ落ちる。
このままでは自分のフィールドはがら空きだ。
このまま次のターンを迎えれば、確実に待っているのは敗北の二文字。

「私は…ッ伏せカードを2枚セットして、ターンエンド！！」

※

「ふぅん、俺のターンッ！！　ドローッ！！」

【白石直也】
ＬＰ／　８０００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　８０００

迎えるは白石のターン。

彼のフィールドには、永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』に『一族の結束』が。

そして彼の下に君臨する二頭のドラゴン。

『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』に『青眼の白龍』。

『未来融合－フューチャー・フュージョン』
（１ターン経過）

「美少女よ、がら空きのフィールドでターンを終了した事を後悔さ

せてやる…、手札より『真紅眼の飛竜（レッドアイズ・ワイバーン）』を召喚ッ！！」

【真紅眼の飛竜】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズ時に、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分の墓地に存在する「レッドアイズ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「更に俺は『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果を発動する！！　手札、または墓地のドラゴン１体を特殊召喚する！！　手札よりチューナーモンスター『デルタフライ』を特殊召喚ッ！！」

【デルタフライ】
星３／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１５００

ＤＥＦ　９００
［チューナー・効果］
１ターンに１度、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択してレベルを１つ上げる事ができる。

白石のフィールドにチューナーモンスターが召喚された。

「『デルタフライ』のモンスター効果を発動する！！　俺の場の『デルタフライ』以外のモンスター１体のレベルを１つ上げる！！
『真紅眼の飛竜』のレベルを４から５へッ！！」

『真紅眼の飛竜』
星４　↓　星５

モンスターが存在しない葉月を相手にしても、白石は容赦なく自分のプレイを貫いていく。

「行くぞ、レベルが５となった『真紅眼の飛竜』に、レベル３の『デルタフライ』をチューニングッ！！」

白石の場のモンスターが星となり、新たなモンスターが顕現する。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいいッ！！」

カッ…ッ！！

「シンックロ召喚！！　焼き尽くせ、『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン】
星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
チューナー　＋　チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示

モンスターを全て破壊する。このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

白石のフィールドに並ぶ超大型モンスター。

『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』
ＡＴＫ　３６００

『青眼の白龍』
ＡＴＫ　３８００

『レッド・デーモンズ・ドラゴン』
ＡＴＫ　３８００

「レッド・デーモンズッ！？」

「ふぅん、この3体のモンスターの攻撃が決まれば、美少女の敗北は確定となる…ゆくぞッ！！」

白石はバトルフェイズへ突入し、怒涛の攻撃を開始する。

「レッド・デーモンズよッ！！　ダイレクトアタックだッ！！　アブソリュート・パワーフォース！！」

ズゴゥッ！！

「キャァアッ！？」

【白石直也】
ＬＰ／　８０００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　８０００　→　４２００

（いっ、一撃が…デカすぎるッ！！）

たったの一撃にライフを半分近く減らされる葉月。

そして

「次だッ！！　レッドアイズよ、美少女にダイレクトアタックッ！！」

「そうはさせないわよッ！！　速攻魔法、発動！！『スケープ・ゴート』！！」

【スケープ・ゴート】
［速攻魔法］
このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。自分フィールド上に「羊トークン」（獣族・地・星１・攻／守０）４体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

ポポポポンッ！！

葉月のフィールドに４体の『羊トークン』が守備表示で特殊召喚された。

「『スケープ・ゴート』だと？　ふぅん、俺のレッド・デーモンズの時に何も発動しなかったのは、レッド・デーモンズの効果…デモン・メテオを警戒しての事か…ッ！！」

「この私が、不用意にダイレクトアタックを受けると思ったら、大間違いよッ！！」

白石は軽く笑みを浮かべ、バトルフェイズを続行させる。

「ふぅん、流石は美少女だ…。レッドアイズよ、トークンに攻撃ッ！！　続いてブルーアイズもだッ！！」

轟ッ轟ッッ！！

白石の二体のモンスターの攻撃が、葉月の『羊トークン』の数を二体に減らす。

「俺のターンは終了だ！！　美少女よ、俺の最強モンスターを前に、貴様がどう抗うか…魅せてみろッ！！」

「……ッ！！」

白石はターンを終了し、葉月のターンへと移行する。

『…お姉ちゃん…大丈夫？』

「平気よ……って言ったら嘘になるけど、でも…私達だって負けてられないわ！！　ウィンダ、行くわよ！！」

『うんッ！！』

葉月はデッキトップに指を添え、精神を集中させる。

負けない。

負けたくない。

自分はこのデュエルに勝ち、あの人の元に辿り着く！！

「私のターン、ドローッ！！」

カードをドローした葉月は、横目に確認し

「行くわよ！！『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚！！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
［効果］
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「蒼炎のシュラの召喚が成功した事で、永続魔法『黒い旋風』の効果発動！！　デッキから、蒼炎のシュラよりも攻撃力が低い、『Ｂ Ｆ－月影のカルート』を手札に加えるわ！！」

デッキから月影のカルートを手札に加えた葉月。

（カルート？　仮にもし蒼炎のシュラで攻撃し、ダメージステップ時に月影のカルートの効果を使用した所で、その攻撃力は３２００…ッ！！　俺のドラゴンの攻撃力には、まだ足りないぞ…！？）

不思議に思う白石だったが、葉月がとった行動とは

「バトルよッ！！　蒼炎のシュラで、レッドアイズに攻撃よ！！」

「何ッ！？」

自分の予想した行動とは違う葉月の行動に驚く白石。

「ダメージステップ時に、手札の『ＢＦ－月影のカルート』の効果を発動！！」

【ＢＦ－月影のカルート】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

「月影のカルートを手札から墓地へ送る事で、私の蒼炎のシュラの攻撃力を１４００ポイントアップさせる！！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
ＡＴＫ　１８００　→　３２００

「無駄だッ！！　美少女が攻撃する俺の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の攻撃力は３６００！！　３２００程度の攻撃力では敗れはせんぞッ！！　迎撃しろ、レッドアイズッ！！」

白石が言った瞬間、葉月は手札からもう一枚のカードを取り出した。

「甘いのはソッチよ！！　月影のカルートの効果にチェーンして、私はもう一枚の月影のカルートの効果を発動！！」

「なッ…何ィイ！？」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
ＡＴＫ　１８００　↓　３２００　↓　４６００

攻撃力が４６００へと跳ね上がった蒼炎のシュラは、白石のエースモンスターの１体、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を撃ち破った。

ズガァッ！！

「ヌォオ…ッ！？」

【白石直也】
ＬＰ／　８０００　→　７０００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　４２００

蒼炎のシュラが相手モンスターを破壊した事で、その効果が発動される。

「蒼炎のシュラの効果！！　自分のデッキから、攻撃力１５００以下の【ＢＦ】１体を、効果を無効にして特殊召喚する！！　来なさい！！　『ＢＦ－疾風のゲイル』！！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】

星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　４００
［チューナー・効果］
自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

葉月のフィールドに並ぶ蒼炎のシュラに疾風のゲイル。
葉月はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ２へ移行する。

「白石さんの場には、今は『無力の証明』はないッ！！　行くわよ！！　レベル４の『ＢＦ－蒼炎のシュラ』に、レベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング！！」

葉月の二体のモンスターが交わり、彼女のエースモンスターが飛翔する。

「黒き旋風よ！！　天空へ駆け上がる翼となれ！！」

カッ！！

「シンクロ召喚！！　舞い上がれ、『ＢＦ－アーマード・ウィング』！！」

【ＢＦ－アーマード・ウィング】
星７／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１５００
［シンクロ／効果］
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで０にする。

攻撃表示でシンクロ召喚されたアーマード・ウィング。
葉月はその瞳に力を宿し
「私はリバースカードを1枚セットして、ターンエンドよ！！」
※
「俺のターン、ドローッ！！」
【白石直也】
ＬＰ／７０００
【烏丸葉月】
ＬＰ／４２００
白石のターンに入り、デッキからカードをドローした白石は、葉月のフィールドを見つめる。

彼女のフィールドには戦闘破壊されず、更には戦闘ダメージを０にする『ＢＦ－アーマード・ウィング』が。

永続魔法『黒い旋風』に、二枚の伏せカード。

（ふぅん…残った手札を全て消費させる程の全力のプレイング…！　流石は美少女だ…この俺に攻めるのを躊躇わせるとはな…！！）

しかし、彼も負けてはいられない。

「スタンバイフェイズ、俺の場の永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』の効果を発動！！」

「ッ！！」

「発動より２ターンが経過した…俺はエクストラデッキより、『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を融合召喚するゥ！！」

ドドドドド…！！

【Ｆ・Ｇ・Ｄ】
星１２／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　５０００
ＤＥＦ　５０００
［融合／効果］
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。ドラゴン族モンスター５体を融合素材として融合召喚する。このカードは地・水・炎・風・闇属性モンスターとの戦闘によっては破壊されない。（ダメージ計算は適用する）

白石のフィールドに降臨した最強のドラゴンモンスター。
その攻撃力は５０００。
更に

「『Ｆ・Ｇ・Ｄ』も、永続魔法『一族の結束』の効果により、攻撃力を８００ポイントアップさせる！！」

【Ｆ・Ｇ・Ｄ】
ＡＴＫ　５０００　→　５８００

「いくら攻撃力を底上げしても無駄よ！！　私のアーマード・ウィングは戦闘では破壊されず、私への戦闘ダメージも０にする効果があるわ！！」

「ふぅん…確かに…だが所詮はその程度の防御手段、この俺の前には無意味だッ！！」

「ッ！？」

「手札より速攻魔法『禁じられた聖杯』を発動ォ！！」

【禁じられた聖杯】
［速攻魔法］
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は４００ポイントアップし、効果は無効化される。

「このカードは選択したモンスターの攻撃力を４００ポイントアップする代わりに、効果を無効化させる事ができる！！　対象は美少女のアーマード・ウィングだッ！！」

『ＢＦ－アーマード・ウィング』
ＡＴＫ　２５００　↓　２９００
（効果無効化）

「そんなッ！？　アーマード・ウィング！！」

アーマード・ウィングはその効果故に、戦闘では無類の強さを誇っていたが、その効果が無効化されてしまっては、白石のパワーを受けきる事はできない。

「ふぅん、バトルフェイズに入らせてもらうぞッ！！　ファイブ・ゴッドよ、アーマード・ウィングを消し炭にしろッ！！」

白石の『F・G・D』が動く。
その瞬間、葉月は自分の場に伏せてある二枚の伏せカードの内、その一枚を発動した。

「やらせないわよッ!!　リバースカード、『ゴッドバード・アタック』を発動!!」

【ゴッドバード・アタック】
［罠カード］
自分フィールド上の鳥獣族モンスター1体をリリースする。フィールド上のカード2枚を破壊する。

葉月は『ゴッドバード・アタック』の発動コストとしてアーマード・ウィングをリリースした。

「『ゴッドバード・アタック』だとッ!?」

「このカードは私の場の鳥獣族モンスター1体をリリースして、フィールド上のカードを2枚破壊する！！　破壊するのは、白石さんの場の永続魔法『未来融合ーフューチャー・フュージョン』と、『一族の結束』！！」

ズゴゥッ！！　バコォッ！！

破壊された白石の『未来融合ーフューチャー・フュージョン』と『一族の結束』。

「ヌォッ！？　おのれ…ッ！！」

「未来融合が破壊された事で、白石さんの『F・G・D』も破壊されたわ！！」

「ふぅん…だがまだこのターン、『青眼の白龍』に『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の攻撃が残っている…いくぞッ！！」

攻撃力３０００の白石の二体のモンスター。

この攻撃が通ってしまえば、残りライフ４２００の葉月は敗北してしまう。

「ブルー・アイズよ!!　ダイレクトアタックだッ!!　滅びのバースト・ストリーム!!」

白石のブルー・アイズが凄まじいエネルギーを一点に凝縮させる。

『お姉ちゃんッ!?』

「大丈夫よウィンダ、私はまだ負けないわ!!　リバースカード、オープン!!　『ＢＦ－バックフラッシュ』!!」

【ＢＦ－バックフラッシュ】
［罠カード］
自分の墓地に「ＢＦ」と名のついたモンスターが5体以上存在する場合、相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「ム…ッ！？」

「このカードは私の墓地に5体以上の【ＢＦ】が存在して、相手が直接攻撃をしてきた場合に発動する事ができる！！　相手フィールド上のモンスターを、全て破壊するッ！！」

「なッ…何だとッ！？」

葉月の墓地には既に、五体以上の【ＢＦ】が眠っていた。

「行きなさい！！　カルート！！　ゲイル！！　ブラスト！！　シュラ！！　アーマード・ウィング！！」

ズゴゥッ！！　ズガァッ！！

「ヌォォオッ！？」

葉月の発動した『ＢＦ－バックフラッシュ』の効果により、白石のフィールドはがら空きとなってしまった。

「やったわ！！」

『凄いよ、お姉ちゃん！！』

「ヌゥゥ…俺のモンスターも、魔法も罠も…全て破壊するとは……美少女よ、なかなかやるな…！！」

がら空きにされた自分のフィールドを眺めて不適な笑みを浮かべる白石に、葉月は気を引き締めた。

「俺はこのままターンを終了するが、俺はこのターン…通常召喚を行っていない」

白石はそう言うと、墓地から二枚のカードを取り出した。

「ッ！？　そのカードはッ！？」

「墓地の『真紅眼の飛竜』二体の効果を発動するッ！！　通常召喚を行わずにターンを終了するエンドフェイズ、墓地のこのカードを除外する事で【レッドアイズ】と名のつくモンスターを墓地より特殊召喚するゥ！！」

白石は墓地の三枚ある内、二枚の『真紅眼の飛竜』を除外し

「現れよッ！！　『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！！」

ゴゴゴゴゴ……ッ！！

白石のフィールドに現れし、二体の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』。

葉月はそのフィールドに思わず唖然となった。

「ターンエンドだ…！！」

自分のターンのエンド宣言をする白石。

葉月は崖っぷちに立たされた気持ちで自分のデッキを見つめた。

（嘘…でしょ……ッ！！）

自分の場にはモンスターはなく、手札も０枚。

唯一残されているカードは、永続魔法『黒い旋風』のみ。

【白石直也】
ＬＰ／７０００

【烏丸葉月】
ＬＰ／４２００

ライフポイントはまだ半分近く残されているが、白石を相手にした場合、半分なんてライフは、在って無い様なものだ。

（この引きに…全てが掛かっている…！！）

尋常じゃない位の汗が溢れ出す。

ドローをしようとする手が震え、動かない。

この状況を打開する為のカードを引けなければ、自分は負ける。

その重圧が、葉月の心を圧迫する。

このデュエルで負けてしまえば、もしかしたら自分は、あの人に二度と会えなくなってしまうかもしれない。

（そんなの……ヤダ……でも…）

『お姉ちゃん！！』

「ッ！？」

葉月が疑心暗鬼に陥る中、ウィンダの声が葉月を現実へと引き戻す。

『諦めないでお姉ちゃん！！　自分のデッキを信じて！！』

「…ウィンダ」

『お姉ちゃんが諦めちゃったら、そこまでなんだよ！？　お兄ちゃんは、どんな状況でも絶対に諦めたりしなかった！！』

「…亨さん……ッ！！」

『お兄ちゃん、言ってたよ……どんな強大な相手でも、最後までデッキ（仲間）を信じてた！！　だから邪神にも、自分の中に巣くう恐怖という闇にも勝てたんだって！！　だからっ、だから…ッ！！』

デッキを信じる。

（…そうよね、亨さん…口うるさい位に言ってたじゃない）

ウィンダの激励に、自然と手の震えは治まっていた。

葉月はデッキトップに指を添え

「ウィンダ、ありがとう…大丈夫。　私は…もう、大丈夫だから…！！」

『お姉ちゃん…』

葉月の中に巣くう恐怖という名の闇。

それが消えた。

今なら自信を持って、カードを引く事ができる。

そうさせたのは、今の自分のパートナーであるウィンダや、自分が追い求める西条亨のおかげでもあった。

「いくわよ白石さん！！　私の本気のデュエル…魅せてあげるわ！

！」

※

（美少女の雰囲気が変わった…？）

白石は葉月の様子の変化に眉をピクリと動かした。

自分のエンドフェイズに『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』を特殊召喚した時には青ざめた表情をしていたが、今ではデュエル開始当初よりも表情が輝いている。

「ふぅん…、本気のデュエルか…、望む所だッ！！」

「いくわよ、私のターン！！　ドローッ！！」

葉月が信じ、ドローしたカードとは

「魔法カード『貪欲な壺』を発動！！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「この効果で私は、墓地から5体のモンスターをデッキに戻して、デッキから、カードを2枚ドローする！！」

「ッ！？　この土壇場で『貪欲な壺』を引き当てただとッ！？」

※
【『貪欲な壺』でデッキに戻したモンスター】

『ＢＦ－月影のカルート』×2
『ＢＦ－疾風のゲイル』
『ＢＦ－蒼炎のシュラ』
『ＢＦ－そよ風のブリーズ』

モンスターをデッキに戻し、カードを2枚ドローした葉月は、今の自分にできる本気のデュエルを繰り広げていく。

（…これならッ！？）

「このカードは、相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、リリースなしで召喚する事ができる！！『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚！！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００
［効果］
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

葉月のフィールドに攻撃力２０００の暁のシロッコが召喚に成功した事で、永続魔法『黒い旋風』の効果が発動される。

「『黒い旋風』の効果！！　私はデッキから、『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に加えて、自身の効果により、特殊召喚！！」

葉月のフィールドに並ぶ暁のシロッコに疾風のゲイル。

「ヌゥゥ…ッ！？」

「疾風のゲイルのモンスター効果を発動よ！！　１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする！！　白石さんのレッドアイズ１体の能力を半分にッ！！」

ビュォオオ…ッ！！

『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』
ＡＴＫ　２８００　↓　１４００
ＤＥＦ　２４００　↓　１２００

「おのれ…ッ、俺のモンスターを弱体化させるとは…ッ！！」

「これで2体の内、1体は下級モンスター並みの能力になった！
このターンで白石さんのモンスターを全滅させてみせる！！」

「なんだとッ！？」

葉月の宣言に思わず目を見開く白石。

「レベル5の『ＢＦ－暁のシロッコ』に、レベル3の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニング！！」

葉月の2体のモンスターが交わり、レベル8のシンクロモンスターが姿を現した。

「シンクロ召喚！！　闇へと誘え！！『ダークエンド・ドラゴン』！！」

【ダークエンド・ドラゴン】
星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　２１００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外の闇属性モンスター１体以上
１ターンに１度、このカードの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンし、相手フィールド上に存在するモンスター１体を墓地へ送る事ができる。

ズドドドド……ッ！！

「ダークエンドだとッ！？」

「ダークエンドのモンスター効果を発動！！　１ターンに１度、攻

守を５００ポイント下げる事で、相手モンスター１体を墓地へ送る！！　対象は、ゲイルの効果を受けていない、もう１体の『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』！！」

ズゴゥッ！！

ゴゴゴゴゴゴ……ッ！！

『ダークエンド・ドラゴン』
ＡＴＫ　２６００　↓　２１００
ＤＥＦ　２１００　↓　１６００

葉月のダークエンドの効果が炸裂し、白石のフィールドにはステータスを半分にされた『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』１体のみとなった。

そして葉月は、ようやく傾いたデュエルの流れを確実なものにする為、バトルフェイズへと突入する。

「バトル！！　『ダークエンド・ドラゴン』で、『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』に攻撃！！」

ズゴゥッ！！

「グォオッ！？」

【白石直也】
ＬＰ　７０００　→　６３００

【烏丸葉月】
ＬＰ　４２００

「私は、リバースカードを１枚セットして、ターンエンド！！　どう、白石さん？　これが私の本気のデュエルよ！！」

ターンのエンド宣言をする葉月。

白石は再びがら空きにされた自分のフィールドを見やり、軽く鼻を鳴らした。

「ふぅん、流石は美少女だ…」

しかし、白石も負けてはいられない。

「美少女には美少女の信念がある様に、この俺もまた、西条（友）との約束があるッ！！　この俺とて負けられぬのは同じ！！　ゆくぞッ、俺のターンッ！！　ドローォッ！！」

【白石直也】
ＬＰ／　６３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　４２００

デッキからカードを力強くドローする白石は、墓地から1体のモンスターを取り出した。

「俺のターンのスタンバイフェイズ、墓地に眠る『ミンゲイドラゴン』のモンスター効果を発動させる！！」

【ミンゲイドラゴン】
星２／地属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　２００
［効果］
ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する場合、このカードは２体分のリリースとする事ができる。自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードを表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果は自分の墓地にドラゴン族以外のモンスターが存在する場合には発動できない。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

白石のフィールドに小型のドラゴンが特殊召喚された。

「『ミンゲイドラゴン』はスタンバイフェイズ時にフィールドにモンスターが存在せず、墓地のモンスターがドラゴン族のみの場合、墓地から特殊召喚できる。　だが、『ミンゲイドラゴン』の効果はそれだけではない…！！」

「……ッ！？」

「『ミンゲイドラゴン』は、ドラゴン族モンスターをアドバンス召喚する際、２体分のリリースとする事ができる！！」

白石はそう言うと、ドローしたカードを空に翳した。

「ッ！？　まさか…そのカードはッ！！」

『ミンゲイドラゴン』は２体分のリリースとされフィールドから離れ、白石のフィールドに、彼の絶対の信頼を寄せる最強のドラゴンが光臨した。

「来いッッ！！　『青眼の白龍』ッッ！！」

ズドドドド……ッ！！

白石のフィールドに光臨せし、攻撃力３０００の最上級ドラゴン。

（くッ！？　上級モンスターのオンパレードじゃない！！）

葉月は思う。

西条亨。

結締智恭。

白石直也。

（やっぱり……強い……ッ！！）

過去に亨とデュエルをして。

前に拓夜に結締とのデュエルを見て。

そして今、白石とデュエルをして感じた事は、やはり強いという事だ。

激しい攻防を繰り広げていく中、葉月に白石のデュエルは更なる火花を散らしていく。

最強の龍使い（後書き）

【登場人物紹介】

西条亨

『頂を目指す者』の前作『決闘者の道』に登場した主人公。

現在は東区にてＯＣＧ研究会を立ち上げ、仲間と共に大学生活を満喫している。

ＯＣＧ研究会のメンバーが濃い性格をしている為、よく彼等の行動に振り回される立場にある。

何だかんだで損な役回りになる事が多いが、結果、本人も楽しんでいる為プラマイ０である。

そんな彼のデュエルの腕前は作中最強クラス。

デュエル中に気持ちが高ぶると、右の瞳が淡い蒼色に変色する。

これはマナの暮らす精霊界の神の加護を受けた証であり、瞳の色は神の額にあるクリスタルと同じ色をしている。

そんな彼の信ずるカードは【ブラック・マジシャン】。

幼い頃、初めて当たったレアカードである。

そしてもう一つ。彼の信ずるカードは【スターダスト・ドラゴン】。

前作にて、ウィンの彼への想いが込められた、大切なカードである。

そして、カードとなって力を貸してくれるマナこと【ブラック・マジシャン・ガール】。

決して万能と呼べる効果を持つ訳ではないが、様々なカードを駆使して活躍させている。

「どんなカードにも、秘められた可能性がある!!　それらを引き出してやるのが俺達、デュエリストだ!!」

黒羽竜に込められた想い　（前書き）

連続投稿2話目です。

なんか主人公が拓夜じゃなくて葉月になってきちゃった？

黒羽竜に込められた想い

※

西条亨が行方を眩ませた。

彼に会いたい一心で、亨の所在を突き止めようと必死になって東区中を探し回る烏丸葉月。

その途中、精霊界のガスタの巫女　ウィンダから彼の昔の話を聞いた葉月は、白石直也と遭遇する。

どうやら白石は亨の行方を知っているとの事だった。

そして現在、葉月は東区の町外れにある西条亨宅の前にて、白石との激しいデュエルを繰り広げていた。

葉月は白石から亨の情報を聞き出す為に、自分からデュエルを仕掛けていったのだ。

対する白石はそれに応じ、自分は亨との約束を守る為に全力で迎え撃つ。

それぞれが持てる力をフルに使い、一進一退の攻防を繰り広げる二人のデュエルは現在、白石のターンのバトルフェイズへと突入する所であった。

【白石直也】
ＬＰ／６３００

［手札］
１枚

［モンスター］
『青眼の白龍』

［魔法・罠］
なし

【烏丸葉月】
ＬＰ／４２００

［手札］
０枚

［モンスター］
『ダークエンド・ドラゴン』
（攻守５００ポイントダウン）

［魔法・罠］
『黒い旋風』
伏せカード１枚

「ふぅん、バトルフェイズに入る！！　ブルーアイズよッ！！」

バトルフェイズに突入した白石は、高らかに攻撃を指示する。

「美少女の『ダークエンド・ドラゴン』を粉砕せよ！！　滅びのバァースト・ストリィームッ！！」

ズゴゥッ！！

「キャッ！？　くっ、ダークエンド……ッ！！」

【白石直也】
ＬＰ／　６３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　４２００　→　３３００

自分フィールドの唯一のモンスターを失った葉月だったが、その表情は諦めていなかった。

「これがブルーアイズの力だッ！！　美少女よ、まだ抗うかッ！？」

「当然よッ！！　私は会いに行く！！　このデュエルに勝って、亨さんに！！」

「……ッ」

葉月から放たれる気迫に思わず言葉が詰まる白石。

彼の心境もまた、複雑だった。

（何故だ…美少女よ、貴様が追い求める西条は…今……ッ！！）

ギッと奥歯を噛み締める白石は、自分の迷いを振り払うように手を薙払いながら

「俺のターンは終了だッ！！」

「私のターン、ドローッ！！」

葉月のターンに移り、デッキからカードをドローした葉月は、先のターンに伏せた1枚のリバースカードを発動した。

「リバースカードオープンッ！！　罠カード『活路への希望』！！」

【活路への希望】
［罠カード］
自分のライフポイントが相手より１０００以上少ない場合、１０００ライフポイントを払って発動する事ができる。お互いのライフポイントの差２０００ポイントにつき、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

【白石直也】
ＬＰ／　６３００

【烏丸葉月】

ＬＰ／　３３００　→　２３００

「このカードは、私のライフが相手より１０００以上少ない時に、ライフを１０００払って発動する事ができる！！　そして、相手とのライフ差２０００ポイントにつき、デッキからカードを1枚ドローする！！」

「俺のライフは６３００、美少女のライフは発動コストによって２３００…ッ！！」

「そのライフ差は４０００！！　私はデッキから、カードを2枚ドローッ！！」

ライフ差を利用し、更に手札を補充した葉月。

3枚となった手札から葉月は1枚のカードを掴み、本気のプレイを繰り広げていく。

「手札の魔法カード『ダーク・バースト』を発動するわ！！」

【ダーク・バースト】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を手札に加える。

「この効果により、私の墓地から攻撃力１５００以下の闇属性モンスター、『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に加える！！」

「ヌゥ…ッ！？」

「そして私は、『ＢＦ－暁のシロッコ』を召喚ッ！！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００
［効果］
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。

選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

「暁のシロッコは、相手フィールドにのみモンスターが存在する場合、リリースなしで召喚することができる！！」

「ヌゥ…、２体目のシロッコ…ッ！！　更に美少女のフィールドには、永続魔法『黒い旋風』がある…ッ！！」

「ええ、私は『黒い旋風』の効果を発動するわ！！　デッキから暁のシロッコよりも攻撃力が低い『ＢＦ－大はいのヴァーユ』を手札に加える！！」

大はいのヴァーユを手札に加えた葉月。

葉月がプレイの一つ一つを行う度に、白石の旗色が徐々に悪くなる。

「そして手札の『ＢＦ－疾風のゲイル』のモンスター効果！！　自

分フィールド上に、疾風のゲイル以外の【ＢＦ】が存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる！！　来なさい、ゲイルッ！！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　８００
［チューナー・効果］
このカードは、自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のつくモンスターが表側表示で存在する場合、手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、フィールド上のモンスター１体の攻撃力と守備力を半分にする事ができる。

葉月のフィールドに並ぶ暁のシロッコに疾風のゲイル。

「くッ！？　またゲイルを…ッ！！」

「疾風のゲイルのモンスター効果を発動！！　１ターンに１度、相手フィールド上のモンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする！！　対象は…『青眼の白龍』ッ！！」

白石のエース『青眼の白龍』を指差す葉月。

そして疾風のゲイルは、白石の『青眼の白龍』に容赦なくその効果を浴びせた。

『青眼の白龍』
ＡＴＫ　３０００　↓　１５００
ＤＥＦ　２５００　↓　１２５０

「おのれ…ッ、ブルーアイズをよくもッ！！」

ライフポイントでは優位に立つ白石だったが、ボードアドバンテージは明らかに葉月が圧していた。

白石が歯噛みする最中、葉月は自身のエクストラデッキから1枚のカードを取り出し、見つめる。

このカードは自分がまだＯＣＧ研究会に入る前、彼らが主催する東区デュエル大会で優勝した時に手に入れたカード。

思えばこの時に初めて、西条亨と直(じか)に対面し、話をし、そしてデュエルをした。

葉月にとってこのカードは、自分と彼を繋ぐ大切な絆（カード）なんだと気付かされる。

「……」

『…お姉ちゃん？』

今、このカードを出しても、大したアドバンテージは取れないだろう。

しかし、今の自分の気持ちは……。

「ウィンダ…私たちの想いを、この翼に乗せるわ…」

呟いた葉月はその瞳に希望の光を宿しながら

「いくわよ！！　レベル５の『ＢＦ－暁のシロッコ』に、レベル３の『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニングッ！！」

カッ！！　カッ！！　カッ！！

コォォォオ…ッ！！

葉月のモンスターが宙を舞い、それぞれの星（レベル）が一つになる。

「黒き疾風よ！！　秘めたる想いを、その翼に現出せよ！！」

…カッ！！

「シンクロ召喚！！　舞い上がれ、『ブラックフェザー・ドラゴン』！！」

【ブラックフェザー・ドラゴン】

星８／闇属性／ドラゴン族

ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２６００
［シンクロ／効果］
チューナー　＋　チューナー以外のモンスター１体以上
自分がカードの効果によってダメージを受ける場合、代わりにこのカードに黒羽カウンターを１つ置く。このカードの攻撃力は、このカードに乗っている黒羽カウンターの数×７００ポイントダウンする。１ターンに１度、このカードに乗っている黒羽カウンターを全て取り除く事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力を黒羽カウンターの数×７００ポイントダウンし、ダウンした数値分のダメージを相手ライフに与える。

ゴゴゴゴゴ……ッ！！

葉月のフィールドに現出せし黒羽竜、『ブラックフェザー・ドラゴン』。

仰々しく広げる漆黒の翼。

長くたなびく白銀の尾。

彼女達の想いを宿したかの様に輝く、紅の瞳。

自分と彼を繋ぐ絆のカード。

「『ブラックフェザー・ドラゴン』…だとッ!?」

「このカードには私達の想いが込められている、絆のカードッ!!
私達の絆の力、魅せてあげるわ!!」

バトルフェイズへと突入する葉月は、ありったけの想いを言葉に乗せて

「バトルよッ!!　『ブラックフェザー・ドラゴン』で、『青眼の白龍』に攻撃!!　ノーブル・ストリーム!!」

ズボァアッ!!

【白石直也】
ＬＰ／　６３００　→　５０００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　２３００

「グォオ…ッ！？」

「どう？　これでブルーアイズの2体目を撃破よ！！　私はカードを1枚セットして、ターンエンド！！」

※

（グゥゥ……ッ！！）

白石は声に出さずとも、腹の底から唸った。

（この俺が圧されているだと？　…有り得ん、この俺が…ッ、この……）

白石の手札は1枚、チューナーモンスター『伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）』であった。

フィールドはがら空き。
手札もその1枚のみ。

対する葉月のフィールドには、彼女の亨への想いが宿った『ブラックフェザー・ドラゴン』が君臨していた。

戦況はいつの間にか、葉月が優位に立っていた。

しかし、だからといってこのままおめおめと引き下がる訳にもいかない。

（この俺が…勝つッッ！！）

「負けられぬのはこの俺とて同じ！！　俺がこのデュエルを制し、この俺がお前達を……ッ！！　くッ、俺のターン！！　ドロォーッ！！」

溢れ出る感情を押し殺し、デッキからカードをドローした白石は、ドローしたカードを早速発動してきた。

「魔法カード『調和の宝札』を発動する！！　手札の『伝説の白石』を墓地へ捨て、デッキからカードを2枚ドローする！！」

【調和の宝札】
［魔法カード］
手札から攻撃力１０００以下のドラゴン族チューナー１体を捨てて発動する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

【伝説の白石】
星１／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　２００
［チューナー・効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」１体を手札に加える。

『伝説の白石』を捨て、デッキからカードを２枚ドローする白石。
そして『伝説の白石』が墓地へ送られた事により、その効果が発動される。

「墓地へ送られた『伝説の白石』のモンスター効果により、デッキから最後の『青眼の白龍』を手札に加えるッ！！」

『青眼の白龍』を手札に加えた白石。
そして白石は手札の中から1枚のカードを掴み取り

「魔法カード『死者転生』を発動する！！　コストとして手札の『青眼の白龍』を墓地に送り…ッ！！」

【死者転生】
［魔法カード］
手札1枚捨てて発動する。自分の墓地に存在するモンスター1体を手札に加える。

「そして墓地より『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』のカードを手札に加えるッ！！」

「手札に加えたばかりのブルーアイズを…早速墓地に…？　それにレッドアイズを手札に…ッ！！」

葉月は白石のプレイを観察し、表情を引き締める。

白石の手札は2枚。

1枚は不明だが、もう1枚は先ほど手札に加えた『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』だ。

（あの1枚の手札が下級のドラゴン族モンスターだったら…『レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン』の効果が発動して、再びドラゴンが展開されちゃう…ッ！！　そうなったら、今の私には…打つ手がない…ッ！！）

思わず身構えする葉月だったが、そんな葉月を前に白石は葉月の心理を見透かしたかの様に

「ふぅん、確かに美少女が想像する展開に持っていく事はできた…だがッ俺は敢えてその選択は捨てるッ！！」

白石の発言に思わず面食らう葉月は、怪訝な面持ちで白石に尋ねた。

「ど、どういう事よッ！？　そっちにだって、負けられない理由があるんでしょ！？　なら何で、確実に勝てる選択をしないのよ！？　それとも何？　哀れみのつもり！？　馬鹿にしないでよ！！　私だってーーー」

「違ァうッ！！」

「ッ！？」

白石の怒声の一言が葉月を黙らせる。

「貴様こそ俺を馬鹿にするなよ？　では逆に問おう、何故そのカードなのだ？」

白石は葉月のフィールドに君臨する唯一のモンスター『ブラックフェザー・ドラゴン』を指差し、質問する。

「そのカードをシンクロ召喚する時、他のシンクロモンスターをシンクロ召喚する選択だってあった筈だ……。美少女よ、同じ言葉をそのまま返すぞ？　貴様とて負けられぬ理由があるのなら、何故に確実に勝てる選択をしない？」

白石の言葉に葉月は自分の前に立ち、漆黒の翼を大きく広げる『ブラックフェザー・ドラゴン』を見上げる。

「……このカードは、私にキッカケを与えてくれた…。　私にとって、亨さんとの初めての思い出が詰まった、意味のあるカード！！　このカードは言わば、今の私がッ、戦う理由そのものよ！！」

葉月の想いが込められた、葉月の大切な一枚。

それを意味のないなど、絶対に言わせない。

「…俺も同じだ」

「え？」

「今から出すモンスターは俺にとって、俺の信ずる最後の切り札にして、この俺の魂そのものだ！！　それぞれのカードに込められた想いは違えども、それぞれのカードに寄せる想いは同じ！！　美少女よ、覚悟せよッ！！」

白石はそう言うと、手札から1枚のカードを取り出し、空高く翳した。

「魔法カード『龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）』を発動するゥ！！」

【龍の鏡】
［魔法カード］
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「墓地に眠りし、ブルーアイズの魂を今ここに交えんッ！！　融合召喚ッ！！」

カッッ！！

「爆誕せよッ！！『青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）』！！」

【青眼の究極竜】
星１２／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　４５００
ＤＥＦ　３８００
［融合］
「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

ズゴゴゴゴゴ……ッ！！

「あ…究極竜（アルティメットドラゴン）！？」

「このカードが、俺の信ずる最強の一枚ッ！！　互いの信ずる一枚での死闘、そしてこのカードがッ！！　美少女…いや、烏丸葉月への想いを伝える一撃となるッ！！」

「……白石さん…ッ！！」

己の想いを募らせた一撃。

白石はバトルフェイズへと突入し、高らかに叫えた。

「行けぇ、ブルーアイズよッ！！　俺の想いよッ！！　美少女の元へとッ！！　アルティメット・バァーストォオ！！」

究極竜の三ツ首の先端に凄まじいエネルギー（愛）が込められる。

ゴゴゴゴゴ……ッ！！

そして究極竜の一撃が『ブラックフェザー・ドラゴン』に放たれようとした瞬間

「……ごめんなさい、白石さん」

「ッ！？」

「気持ちは凄く嬉しいけど…私は…あの人に会いたいからッ！！」

葉月は言うと同時に、自分の場に伏せられていた一枚のカードを発動した。

そのカードとは

「リバースカードッオープン！！　『サンダー・ブレイク』！！
手札の『ＢＦ－大旆のヴァーユ』をコストに、フィールド上のカード１枚を破壊する！！」

【サンダー・ブレイク】
［罠カード］
手札を１枚捨て、フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。選択したカードを破壊する。

ピシャッ！！　カッ！！　バチィイッ！！

葉月が発動した『サンダー・ブレイク』は、白石の想いが募った『青眼の究極竜』（愛）を討ち貫き、破壊（ブレイク）した。

ズゴゥッ！！

「ヌァァアアッ！？」

『青眼の究極竜』が破壊された白石にはこのターン、為す術はなかった。

「ア…究極竜が……ッ！！」

白石のターンが終了し、葉月は自分のターンを開始する。

「私のターン、ドローッ！！」

【白石直也】
ＬＰ／　５０００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　２３００

デッキからカードをドローした葉月は、自分の墓地からヴァーユのカードを取り出し、効果を発動する。

「墓地の『ＢＦ－大旆のヴァーユ』のモンスター効果、発動ッ！！」

【ＢＦ－大旆のヴァーユ】
星１／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　０
［チューナー・効果］
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードをシンクロ素材とする事はできない。このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の「ＢＦ」と名

のついたモンスター1体をゲームから除外し、そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついたシンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

「このカードと、墓地の『ＢＦ－アーマード・ウィング』をゲームから除外し、レベル8の【ＢＦ】をエクストラデッキから特殊召喚する！！　来なさいッ！！　『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』！！」

【ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド】
星8／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
「ＢＦ」と名のついたチューナー　＋　チューナー以外のモンスター2体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する、このカードの攻撃力よりも低い守備力を持つモンスター2体まで選択して破壊する事ができる。この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事はできない。また、相手のターンに1度だけ、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターは戦闘では破壊されない。

ビュォオオ……ッ！！

葉月のフィールドに並ぶ2体のシンクロモンスター。

『ブラックフェザー・ドラゴン』。

そして『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』。

白石のライフは残り５０００。

この2体の攻撃が決まれば、葉月の勝利が確定する。

「…やるな、美少女よ……」

葉月の2体のモンスターを前に白石が呟く。

「……白石さん」

「ふぅん…今回の敗因は、俺の精神の未熟さ故のもの……。　何を躊躇う？　この俺をデュエルで倒すのだろう？」

白石の言葉を聞き、葉月はギュッと拳を握り締める。

そう…私はこのデュエルに勝って、亨さんに会いに行くッ！！

「バトルよッ！！　シルバー・ウィンドで、白石さんにダイレクト・アタック！！」

【白石直也】
ＬＰ／　５０００　→　２２００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　２３００

「グォオオッ！！」

「これで決めるッ！！　『ブラックフェザー・ドラゴン』ッ！！」

葉月の『ブラックフェザー・ドラゴン』が大きく羽ばたき、白石の上空に舞い上がる。

「私とウィンダの想い、この一撃に込めるッ！！　ノーブル・ストリーム！！」

ズゴゥッ！！

「グォオオァアッ！？」

【白石直也】
ＬＰ／　２２００　→　０

【烏丸葉月】
ＬＰ／　２３００

長く激しい戦いを制したのは、烏丸葉月。
そしてウィンダの二人であった。

※

『……凄い…』

葉月のスカートのポケットの中にカードとして入っているウィンダは、デュエルが終了したと同時にポツリと呟く。

『凄いよ、葉月のお姉ちゃん！！　あの三英雄の一人に勝っちゃったんだよ！！』

「…それは違うわよ」

はしゃぐウィンダとは対照的に、葉月は冷静に答える。

「勝たせてもらっただけよ…、やってみて思ったわ。私の実力は…まだ三英雄には及ばない」

『…お姉ちゃん』

葉月とて、はしゃぎたい気持ちもあった。

しかし、今はそれどころではない。

過程はどうあれ、結果として白石とのデュエルに勝利したのだ。

デュエル開始前、葉月は白石にこう言った。

私が勝ったら、居場所を教えろなんて言わない。連れて行ってもらうわよ!!　亨さんの所へ!!

そう、これで彼の下へ連れて行ってもらえる。

葉月は地に膝をつく白石の前に立ち

「約束よ…！！　今すぐに、私を亨さんの所へと連れて行きなさい！！」

「ヌゥゥッ…しかし…」

素直に首を縦に振らない白石。

白石にも、亨との約束があるのだ。

それを何かとは言わない白石だったが、彼も彼なりに迷ってはいた。

しかし葉月からしたら、自分はアンティルールに則り、勝利したのだ。

亨との約束がどうであれ、白石には自分との約束を守って貰わなければならない。

葉月は悪戯な可愛らしい笑みを浮かべ、白石に話しかけた。

「白石さん。　私がデュエルに勝ったんだから、私との約束、今すぐに亨さんの所に連れて行くって約束を、ちゃんと守ってくれない

とね？」

「しかし……」

葉月は含みのある笑顔のまま、地に膝をつける白石の頭を撫で撫でしながら

「ヌッ！？」

「白石さん。　何度も同じ事を言わせないでくれる？　いい加減にしないと、そろそろ本気でブチ切れるわよ？」

白石の背筋に悪寒が電流のように痺れわたる。

葉月に惚れている手前、下手に彼女を不機嫌にさせたくない白石。

しかし、亨との…

いやしかし、美少女との…

目まぐるしく回る思考に追い付けず、冷や汗を垂れ流す白石に、彼

女は告げる。

烏丸葉月は、こう告げる。

「亨さんの所に連れて行ってちょうだい。　ちゃんと連れて行ってくれれば褒めてあげる」

黒羽竜に込められた想い　（後書き）

はい、今回の話は如何でしたでしょうか？

今回は白石はプレイングに妥協して敗北といった形になりましたが、今回のデュエルで感じた事がございましたら、どんな些細な言葉でも良いので、感想をお願いします。

しっかし、アニメＧＸでは困った時の【強欲な壺】でしたけど、この作品は困った時の【貪欲な壺】ですな（汗

って、書いてる本人が言っちゃあ駄目だろ！？

三上市（はじまり）　（前書き）

今月１２日に職場の町内で催される駅伝大会に参加する事になりました。

１月の試験の合間に、丁度いい息抜きになるかな？と、思ってましたが…

日にちが経つにつれ増えていくのは溜め息ばかり。

運動もせず、タバコばっか吸っていた体が悲鳴をあげてます。

やっぱ日ごろの運動っていうのは凄く大事なんだなって実感しました。

三上市（はじまり）

※

西条拓夜に成瀬花穂の二人は東区の公園のベンチに座り、本日何度目かの溜め息を吐いた。

烏丸葉月と一緒に三人で、西条亨の見舞いに病院へ向かったは良いが、肝心の亨は病室から姿を消し、葉月は病室に置いてあった決闘盤（デュエル・ディスク）を抱えてどこかへと走り去ってしまった。

自分達も後を追おうとしたが、病院から出た時には葉月の姿はなかった。

葉月の携帯に電話を入れても応答してもらえず。

次にＯＣＧ研究会の先輩である結締智恭や、白石直也の携帯に電話をしてみたが、二人とも携帯の電源が切ってあるのか、電波が届かないのか繋がらない始末だ。

「何か…俺たち二人、置いてけぼり喰らってないか？」

溜め息混じりに呟く拓夜に、成瀬は携帯電話を取り出し

「こうなったら…」

「ん？　何か手掛かりでもあるのか？」

「拓夜さん、少し待ってて貰えますか？」

成瀬は拓夜にそう言うと、ボタンを操作して電話を始めた。

葉月に結締、そして白石や亨の携帯には電話が繋がらない為、成瀬の電話相手が気になる拓夜だったがその時、電話が繋がったらしく、成瀬が口を開いた。

「あ、もしもし？　如月さんです？　ちょっとお尋ねしたい事がありまして……」

※

烏丸葉月を後部座席に載せた白のフィットが走る。

揺れる車内から見える景色には、トリティニーグループを総称する三本の長々とした塔（タワー）が見えた。

「あれ…トリティニータワー？　って事はここって三上市？　ちょっと白石さん！？　本当に亨さんはこの街にいるの！？」

尋ねる葉月をバックミラー越しに見やり、運転する白石は

「そうだ…、ここ三上市は西条とマナにとって、思い出が残る街だからな」

「…マナさん…か…」

なる程、と葉月は納得する。

しかし、それと同時に思う事もあった。

「白石さん、ここで良いわ」

「？　美少女よ、まだ西条の所へは距離があるぞ？　こんな道の途中で」

「良いから！！」

白石はヤレヤレと軽く息をついた。

最近になって分かってきたが、葉月は一度言い出したらなかなか頑固なようだ。

白石は近くのコンビニに停車すると、葉月は後部座席から降りた。

「ありがと白石さん、ここまでで良いわ」

「ここまで？　帰りはどうするつもりだ？」

空は夕焼けから徐々に夜に変わりつつある。

もう少しすれば、完全に夜になる時間帯だ。
そんな夜中に、しかも葉月にとっては見知らぬ土地で一人にさせる訳にはいかない。
白石はそんな親切心から葉月を呼び止めたが、葉月からの返事は

「大丈夫よ、亨さんと一緒に帰るから！」

「……ふぅん」

白石は軽く笑みを浮かべ、車を前へと進ませる。

「分かった…が、気をつけろよ？」

「ええ…心配してくれて、ありがと」

葉月はそう言うと、亨のデッキが納められた決闘盤を鞄に仕舞い込み、進み出す。

自分の足で進んでいこう。

彼が見てきた景色を、私も見ていこう。

彼が想う場所を、私も感じよう。

葉月はその為に、途中で車を停めるように白石に言ったのだ。

ある程度進むと、制服のスカートのポケットに入れてある『ガスタの巫女　ウィンダ』が話し掛けてきた。

『お姉ちゃん！この近くに昔、お兄ちゃんが使ってた学生寮っていう所があるよ！』

「決まりね、ウィンダ。　行ってみましょう」

※

第七デュエル高等学校学生寮。

現在、葉月の前に建っている学生寮の門に、その名の札が掛けられている。

「…第七デュエル高等学校、はは…私が通う学校の名前そっくりじゃない」

妙な所で親近感を覚える葉月に、ウィンダが話す。

『葉月のお姉ちゃん、ここがお兄ちゃんとガールのお姉ちゃんが一緒に住んでいた所。そして』

「そして亨さんとマナさんが、初めて出逢った場所……」

聳える学生寮を見上げ、葉月は思う。

「…あの二人の物語は、ここから始まったのね」

『うん、でも…ここにはお兄ちゃんの気配が感じられないから、お

兄ちゃんはここには居ないね』

「…そっか」

次の場所へと向かう為、歩き出す葉月はウィンダに尋ねる。

「ウィンダ、他に亨さんの思い出の場所ってわかる？」

『う～ん、前にガールのお姉ちゃんが言ってた河原かな？　何でもそこで、ばーべきゅうってのをやったって言ってたよ！』

「河原…？」

葉月は携帯電話を開き、インターネットの地図検索で三上市の河原の位置を確認する。

「ここかしら？　三上川…きっとこの橋の所ね」

『そうと決まれば、れっつごーッ！！』

※

北区の駅前に並ぶ商店街の一角。

その中にあるファミレスに、拓夜に成瀬の二人は窓際の席に並んで座っていた。

「で、成瀬さん。　お聞きしたい事って何ですの？」

二人の対面に座り、優雅にメロンソーダを飲みながら如月結衣が尋ねた。

「実は、亨さんの事なんです」

「亨さん？　あの西条亨の事ですの？　確か今は入院していらっしゃる筈では？」

「え、何で北区のアンタがその事を知ってんだ？」

如月の発言に疑問に思った拓夜は思わず突っ込んだ。

「わたくしの情報網をメロンソーダの様に甘くみてはいけませんの。先日の【トリティニー・チャンピオンシップ】で起きた爆弾テロはニュースで大々的に取り上げられておりましたし、わたくしも気になって北区のデュエリストを使って色々と調べていたんですの」

ずずずぃっ、とメロンソーダを一気に飲み干す如月は、空いたグラスを除ける。

「北区総動員かよ！？　すげぇな…」

「まぁ、未だに北区ではわたくしが所属するチーム【フィアーズ】の影響力は大きいんですの。それもこれも全て、陽一サマが動きやすくする為のわたくしなりの努力の賜物ですの」

自慢気に言う如月に、成瀬はコーヒーを一口飲み込んで

「そんな如月さんに、お願いがあります」

「？」

成瀬の隣に座る拓夜は、まさかと思い

「もしかして、北区のデュエリスト達に…？」

「はい。　実は今、亨さんが病院から抜け出されて行方不明なんです。如月さん、その権限で…私たちと一緒に亨さんを探すのを手伝ってくれませんか？」

※

三上市を流れる三上川。

その上に建てられた橋の上に一人の男が立っていた。

西条亨である。

亨は夜の三上市を橋の上から眺めながら思い出していた。

高校時代の自分を。

「…あの時は、半信半疑だったんだけどな…」

夏休みに入る数日前、亨はいつも通り学校に通う途中で鳥の糞が頭に直撃するというアクシデントに見まわれた。

急いで学生寮に戻ると、机の上に置いてあったデッキが光だし、そこからマナが現れた。

自分を精霊界から来たブラック・マジシャン・ガールだと言い張るマナ。

最初こそ疑ったが、自然とすぐにお互いに打ち解ける事ができた。

「あの時からだよな…。　アイツを守るって決めたのは…」

一緒にスーパーに買い物に行った帰り、マナを追ってきた精霊界の敵とデュエルをした。

デュエルによって傷つく彼女を放ってはおけなかった。

デュエルに勝利し、約束した。

彼女と、彼女の世界を救ってみせると。

「あの時は…凄く嬉しかったな…」

自分が立つ橋の下を流れる三上川、その河川敷にて、クラスの皆とバーベキューをした。

当然マナもそれに参加し、一躍クラスで人気者になった。

肉ばかり焼いていて結局、料理を食べる事ができなかった自分に、マナは自分の為に料理を残しておいてくれた。

マナが持ってきた皿の上の料理が半分程なくなっていたけど、その時すごく嬉しかったのを覚えている。

「…他にも、いっぱいあるよな…」

亨の目頭が熱を帯びる。

いつの間にか、亨の両目からは涙が流れ落ちていた。

数え出せばキリがない。

自分とマナの思い出。

この街には、夜の闇を照らすネオンの数以上に、自分とマナの思い出が存在しているのだ。

「……何でだよ……ッ！！」

橋の手すりを掴む手に力がこもる。

「何でッ…お前だけ消えちまうんだよ…ッ！！」

私は、ブラック・マジシャン・ガールって言います。

うん、こちらこそ！よろしくなんだよ、さいじょお！

初めて買ってもらっちゃった！このお洋服、一生の宝物にするね！

私は、さいじょおが良い！さいじょおでなきゃヤダ！

さいじょお

ねぇ、さいじょお？

さいじょお！

「……ッ！！」

俯き、嗚咽を堪えながら体を奮わせる亨。

今の彼は無気力だった。

初めはマナを奪った爆弾テロを憎んだ。

マナを失った事による虚無感と沸々と沸き上がる憎悪の闇。

あの時、トリティニードーム内で襲われた時、薄れゆく意識の中で聞こえてきた女の声。

「…ラドルフ…ッ！！」

恐らくその人物が、今回の爆弾テロ事件の首謀者に違いない。

憎い…

マナを奪ったラドルフが憎い…ッ！！

しかし、それ以上に愛する者を失った事による虚無感が大きかった。

「でも…俺は……ッ」

コツ、コツ、コツ……

自分しか居ない三上橋の上に聞こえてくる足音。

亨は流れる涙を拭い、横目で足音のする方を確認する。

すると、そこには

「……ッ！？」

夜道を照らす街灯に照らされるその姿。

茶髪の肩までの長さの髪を靡かせ

東区の第七高等学校の制服を身に纏い

頬をほんのりと朱に染めながら、白い吐息を吐くその少女

烏丸葉月がそこに立っていた。

「……見つけた…！！」

「…烏丸…さん…？」

※

烏丸葉月の前に立つ西条亨。

探し求めていた彼の顔を見た葉月は思わず、一瞬だが衝撃をうけた。

亨の深い悲しみに満ちた瞳。

しかし、臆してはいけない。

自分は彼に会い、彼を理解したく、彼の支えになる為にここに来たのだ。

一歩、また一歩と、葉月は亨に歩み寄る。

「…何故、君がここに居る?」

「そんなの…亨さんを探しに来たに決まってるでしょ」

葉月は更に近く、亨の前に立つ。

「病院から勝手に居なくなるし、電話しても繋がらないし、他の人もなかなか教えてくれないし、心配したじゃない！」

真剣な面持ちの葉月に、亨はうっすらと目を細くする。

「そうか…すまなかった」

そうポツリと呟く亨の言葉からは覇気が感じられない。

亨の言葉はそこで止まってしまった。

（……亨さん）

白石が言っていた、今はそっとしておいてやれ、という言葉の意味がようやく理解できた葉月。

しかし、尚更だと葉月は思う。

亨の前に立つ葉月は彼の隣に場所を移し、彼と同じように三上市の街並みを眺めた。

「ウィンダから聞いたわ。この街で…亨さんとマナさんが出逢った事も。この街に、亨さんとマナさんの思い出がいっぱい詰まっている事も…」

「……」

「この街に来て、色々と見て回って…二人の思い出がそこら中にあるんだって思うと…私も悲しく思う」

「……」

「それと同時に分かるよ…二人がどれだけ、互いに寄り添い合ってきたかが…だから、今の亨さんの気持ちも、理解してるつもり」

葉月が言うと、隣に立つ亨に少しの変化が見られた。

変化といっても、葉月が自分の思いを口に出したように、彼もまた、ポツリとだが口を開きだしたのだ。

「俺の全ては……アイツの為に在ったんだ」

「……」

「アイツを守る為に…アイツの世界を守る為に…俺は今まで生きてきた。どんな時でも、一緒にいたいって言う…アイツの願いを叶えてやりたかった」

話す亨の声が震える。

「このＯＣＧ研究会だってそうさ……デュエルを通じて…アイツが色々な奴と交流を持てるように立ち上げた……でも、もう……マナはいない」

亨の目から再び涙が流れ落ちる。

「アイツが居なくなってしまったら……俺は……何の為に……ッ！！」

亨の話を聞いて思わず胸が締め付けられそうになる葉月。

彼の言葉の一つ一つから、葉月が想像してた以上にマナへの想いが込められている事に改めて気付かされる。

すると、彼の口から葉月にとって信じられない言葉が飛び出してきた。

「俺のデュエルは…全てアイツの為に在った……でも、アイツが居ないんじゃ……俺はその意義を見いだせない……」

「……」

「俺はもう……デュエリストを辞める、ＯＣＧ研究会も、…俺は……降りる」

「…え…ッ！？」

※

西条拓夜に成瀬花穂の二人が北区の駅前で待つ事数分。

駅前通りを行き交う人々の向こうに、一台の黒塗りの車が停車した。

「如月さんはここで待つように言ってたけど、そんな早く情報が集まるもんなのか？」

「それは分からないです…でも、今は信じて待ちましょう」

拓夜に成瀬の二人が話していると、二人の前に一人の男が立った。

細身の長身に、黒くウェーブがかった髪。

黒い大きなサングラスをかけて、厚手の黒いコートを羽織るその男は、拓夜を見るなりニヤリと笑みを浮かべた。

「ククククッ、久しぶりだなァ…西条拓夜ァ？」

「ッ！？」

「なッ!?　あ、アンタは……月影陽一ッ!?」

「おぃおぃ、そんな警戒すんなヨ…別に取って食う様な真似はしねェよ」

月影はそう言うと、一枚の紙をコートの内ポケットから取り出して、拓夜に渡した。

「ほらよ、お前達はこの情報が欲しかったんだろ?」

「これは……?」

「ッ!?　これ、亨さんの情報ですよ拓夜さん!?」

「結衣のヤツに頼まれて仕方なくだ……それに、俺ァ西条亨の奴に借りがあるかんなァ、勝手に消えて貰っちゃァ困る訳だ」

「……本当に、それだけが理由か?」

拓夜は思わず身構えながら月影に尋ねた。

この男は前に一度、理不尽なアンティルールのデュエルをＯＣＧ研究会に持ち掛けてきた。

そのデュエルには何とかＯＣＧ研究会が勝利したものの、あれから直ぐに月影が改心したとは思えなかった。

「この情報をダシに、また俺達を引っ掻き回すつもりじゃないのか？」

「おぃおぃ、俺って余程信用ねェのな」

そう言う月影の表情は言葉とは裏腹に、ニヤニヤと楽しんでいるように見える。

「さっきも言ったろぅ？　結衣に頼まれたからだ。友達から頼まれたって、言ってやがったなァ…」

「……如月さん」

「まぁ、とにかくそう言う事だ。その紙に書かれた情報を信じるか信じないかは、お前達の自由だぜェ？　じゃな」

そう言うと月影は二人に背を向けながら去っていった。

後に残された拓夜に成瀬の二人は、とりあえず紙に記された亨の情報を確認してみる事にした。

「……亨さん、今は……」

「……三上市、に居るみたいです」

二人の行き先は決まった。

拓夜に成瀬の二人は同時に頷き、その足を目的地へと向けて進み出した。

※

「ＯＣＧ研究会を…降りるって…！？」

西条亨が呟いた一言に衝撃を受けた烏丸葉月は、思わず確認するかのように尋ねる。

「降りるって…どういう事？」

「…そのままの意味だ」

淡白に。

さらりと口にする亨は、葉月を見る事なく言葉を続けた。

「後の事は結締や白石に任せるつもりだ……俺はもう、デュエリストも…ＯＣＧ研究会も…辞める」

「ッ！？」

余りにも簡単に口にする亨に対し、葉月はそれまで抑えていた感情が爆発した。

「……亨さん、アンタ…本気でそんな事を言ってるの？」

返事もなく、ただ黙って頷く亨に葉月は言う。

「そんなの無責任よッ！！　マナさんが居なくなって、悲しい気持ちは分かる！！　私だってそうだもの！！　でもそれと、アンタがデュエリストを辞める事や、ＯＣＧ研究会も辞める事にはならないじゃない！！」

「……ッ」

「言っとくけど、もうＯＣＧ研究会ってのは、単なるデュエリストチームじゃないの！！　この名前には、全国のデュエリストからの夢や希望が詰まってる！！　私だってその一人よ！！　みんなが見てる！！　みんなが期待してるのよ！？　もうアンタ一人の、単なるチームという括りに収まりきらないのよ！！」

「…だから、後の事は結締や白石に任せると…」

「じゃあ私の気持ちはどうなるのよッ！？」

溢れる感情が止まらない。

葉月は必死になって訴えた。

自分の想いを、感情の赴くままに、懸命に。

「私がＯＣＧ研究会に入ろうと決意したのは、アンタが…亨さんがいたからッ！！」

「…ッ」

「東区のデュエル大会で初めて会って、デュエルをしてくれた！！　負けて悔しかったけど、凄い嬉しかった！！　旅行の時だって、気をかけてくれて、本当に嬉しかった！！　お風呂でのぼせた時も、みんなで一緒になって看病してくれて、その後も私とデュエルしてくれて、申し訳ない気持ちもあったけど、凄い楽しかった！！」

「烏丸さん……」

「湖で言ったじゃない！！　“俺を目標とするなら、その気持ちに応えよう”って！！　あの日から私の中でアンタの存在が大きくなっていった！！　アンタが居たから、私もＯＣＧ研究会に入った！！　だから私は…私はアンタを目標にしたし、アンタを好きになる事ができた！！」

「……ッ！！」

自分の気持ちの全てをぶちまけた葉月に、亨の目が大きく見開かれる。

「私は西条亨が大好きになった！！　だから同じように、アンタの事が大好きだったマナさんの気持ちも分かる！！　マナさんは絶対に、アンタのそんな選択は認めない！！　絶対に！！」

葉月は自分の発言に対し、マナの言葉として被せた。

亨の話を聞いて思った。

きっと、いや、絶対にそうだ。

マナがこの場に居たら、絶対に自分と同じ事を言うだろうと。

「ぐッ……ッ！？」

亨の拳が強く握られ、小刻みに震える。

きっと亨も心の奥では分かっているのだろうと葉月は思う。

しかし、認められないのだ。

マナを守れなかった罪悪感。後悔。悲しみ。

葉月は鞄の中に入れてあった彼のデッキが収められた決闘盤を取り出し、亨に押し付ける。

「アンタは諦めちゃ駄目なの！！　ＯＣＧ研究会としてだけじゃないわ！！　精霊界の皆だって、きっとそう思ってる！！　アンタの背中には、アンタが思ってるよりもずっと、ずっと大きな夢が、皆からの夢や希望が寄せられているのよ！！」

「……夢…希望……」

亨は押し付けられた決闘盤を手にとり、揺れる瞳で自分のデッキを見つめる。

（……重い…ッ）

デッキを手にする手が、腕が震える。

重いと言っても、質量が重いの意味ではない。

このデッキには、先に葉月が述べたように全国からの、そして精霊界からの皆の想いが込められている。

そして何より、このデッキには組み上げた時の、自分の想いも重なり合わされている。

デッキを一枚めくる。

（……ブラック・マジシャン……）

そしてもう一枚

（……スターダスト・ドラゴン……）

一度は置き去りにしたデッキ（仲間）。

しかし、カード（仲間）達から発せられる輝きは亨に訴えかける。

こう訴えかける。

「…やっぱり…俺は逃げてたんだな…」

亨はデッキを決闘盤に収め、それを左腕に装着する。

そして再び、腕に装着した決闘盤を見つめながら

「烏丸さんの言った通りだ…自分では気付かなかった…いや、忘れていた…このデッキに込められた想いを」

「重たいよね、辛い時だってあるよね…前までは、その重さはマナさんと分かち合ってきたんだよね……」

一歩二歩と彼に寄る葉月は、真っ直ぐに亨を見つめる。

そして言う。

自分の願いを。

「だけど今度は…私が一緒になって支えていくから……ッ！！」

話す途中で葉月は、自分に覆い被さる温もりに思わず言葉を詰まらせた。

亨が自分を引き寄せ、抱き締めたのだ。

自分の真横に彼の横顔が並ぶ。

重なる胸に、彼の心音が自分にも伝わる。

自分を抱きしめる腕が震えているのが体で感じられる。

突然の出来事に葉月は慌てて腕をバタバタとさせながら

「えッ！？　ちょっ、と、亨さんっ！？」

「すまない…少しの間でいい……」

震える口調で呟くように話す亨は、葉月を抱きしめる腕に更に力を強くする。

「少しの間でいいから……こう…させてくれ……！！」

トリティニードームが崩壊した時に一緒に崩れた彼の心。

同時に失った彼の愛する者。

本当に辛かったのだろう、本当に悲しかったのだろう。

しかし、彼が今、自分を抱きしめる事で少しでも彼の心の悲しみが払拭されるのであるならば。

「……うん…！！」

葉月も彼の背中に手を回し、自分に引き寄せる。

少し背伸びする格好だが、苦にはならない。

互いに抱きしめ合う体に、亨が耳元で呟いた。

「…ありがとうッ……烏丸さんッ……本当に……ッ！！」

栓が抜けたかのように涙を流し、声をあげる亨。

それと同時に、葉月は決意する。

私がこの人の支えになると。

この人が感じる苦しみや悲しみを、自分も一緒になって感じようと。

三上橋の上で、葉月に亨にとって、新たな思い出の１ページがここに刻まれた。

※

西条拓夜に成瀬花穂の二人が三上市に到着し、西条亨の行方を追っていると途中に自分達の知る、聞き慣れた声が聞こえてきた。

三上川に沿って伸びる堤防。

その少し先に掛けられた橋の上には、二人の人影が見受けられる。

「この声……」

ふと足を止めて、その人影を見つめる拓夜に成瀬の二人は、聞こえてきた声でその人影が誰なのかが確信する。

「ああ、間違いない…葉月だ！」

「行きましょう、拓夜さん！」

拓夜に成瀬の二人は走りだした。

橋に近付くにつれて、人影の輪郭（シルエット）がはっきりと映される。

橋の上で向かい合うその二人、烏丸葉月に西条亨。

目的の人物をようやく見つける事に成功した二人は、橋に差しかかって声をかけようとしたその時だ。

「葉づ……ッ！？」

「きゃぁぁ…ッ大胆です…！！」

二人の目の前で互いに抱き合う葉月と亨。

その二人の様子から察するに、今の自分達二人はお邪魔だろうと感じた二人は、それぞれに微笑みながらその場を後にした。

三上市（はじまり）　（後書き）

このお話を読んでくださり、本当にありがとうございます。

デュエル以外のパートだと、なかなかその時々のキャラクターの心理や風景の描写を表現する事が出来ず、読みづらいかな？と自分で不安になります。

読みづらければ、こうした方が良いのでは？というアドバイスがございましたら、是非ご意見をください。

さて、まえがきにも記した１２日の駅伝大会。

僕はアンカーで走る事になりました。

その距離、３．３キロメートル。

数字ではたったの【３】ですが、実際に走ると死にます。

まぁそれは僕の日ごろの運動不足が祟ったせいですが…

とにかく練習として、雨天の日と仕事が夜勤の日以外は、毎晩走ってきました。

本番が３．３キロなので、練習では３．５キロを走りました。

走り続けて３週間…、喫煙者なので体力は全然ありませんが、それでも出来る限り頑張りたいと思います。

もう絶対にマラソンしたくない。

そう思いました。

革新（前書き）

今回も二話続けての連続投稿になります。

駅伝も終わり、いよいよ本格的に試験勉強に勤しまなければ・・・！

いろいろ誘惑があって大変ですわ

※

トリティニードーム爆破テロから一週間が過ぎた。

現在、三上市に聳え立つトリティニータワー横に在ったトリティニードームは解体工場が進み、重機が休む間もなく動き続けている。

そんな様子が一面に記された朝刊を広げて、西条亨は自宅のアパートにて読みふけっていた。

爆破テロの首謀者は未だに不明。

尚、事件当日にトリティニー・チャンピオンシップに来場していたトリティニーグループ代表取締役社長、早乙女一馬氏の遺体は見つかっておらず、以前として警察は遺体の捜索を続けているらしい。

記事には爆破テロの首謀者は不明とあるが、西条亨はその人物に心当たりがあった。

ラドルフ・ルベナンス

彼の部屋のパソコン画面に映る一人の男の顔写真。

その開かれたページには、ラドルフ・ルベナンスという名前の肩書きに、こう記されていた。

「…まさか、トリティニーグループの副社長だったとはな…！！」

その画面には朗らかな笑みで映るラドルフの顔が。

この甘い仮面（マスク）の下では、奴はどんな顔をしているのか？

今の自分が警察に、ラドルフが犯人だと述べても無駄だと感じた。

相手は世界に名を轟かせる大企業のトップ。

おそらく向こうは綿密な計画を仕立てての犯行に及んだ為、一般市民一人の言葉など、いとも容易くあしらうだろう。

「…俺は…どうすれば…ッ」

一度は心が死んだ自分は、ＯＣＧ研究会の後輩の烏丸葉月によって救われた。

しかし、マナを失った事への復讐の炎は消える事はなかった。

どうすれば良いのか？

どうすれば自分は前へと進めるのか？

亨の心は見えない巨大な壁に覆われている気分だった。

すると、彼の携帯電話に一本の着信が入った。

おもむろに携帯電話を手に取り画面を見ると、そこには信じられない名前が表記されていた。

「ッ！？　そんな…ッ、まさか…ッ！？」

※

終業のチャイムが鳴り響く。

本日最後の授業が終了し、生徒達は帰宅する者や部活動、それぞれの時間に勤しむ。

そんな中、鞄に荷物を詰め込んで席を立つ一人の少女、烏丸葉月は鼻歌混じりに教室を出ようとしたその時、隣のクラスの友人である桜朱美が廊下から声をかけてきた。

「葉月！　一緒に帰ろ？」

「朱美…うん、途中までなら良いわよ」

そう答え、廊下を歩く二人の少女。

桜は葉月の返事を聞いて、ふと尋ねてみた。

「やけにご機嫌じゃん？　何か良いことでもあった？」

「えっ！？　何で？」

「何で？　って、そのニヤニヤした顔はナニよ？　何かあったんでしょ？　アンタも分かりやすい性格してるからね～」

「えっ！？　そっそそそんな事…ッ」

葉月はそう言いながら、これからの自分の予定を思い浮かべてみる。

今日はこれから西条亨宅へと向かう事になっている、週に一度の集会の日なのだ。

彼に会える。

その事実がやはり、気持ちを浮き足立たせている。

「ほら、またにやけてんじゃん」

「はぅっ！？」

前にも葉月のこんな表情を見たことがある桜は、悪戯に笑みを浮かべて

「まぁしょうがないか、これから男の所に行くんでしょ？　そりゃご機嫌な訳よ」

「へ？　な、何で朱美が亨さんの事を…？」

「あ、亨さんって言うんだ？　へ～、ほ～ぅ」

「あッ朱美！！　アンタ、カマ掛けたわねッ！？」

「なかなか面白そうな話じゃん？　また今度聞かせてもらうわ！」

ニヤニヤしながら手を振り、一目散に駆け出していく桜。

葉月はやられたーッ！！　と奥歯を噛み締めながら、下駄箱で立ち尽くしてした。

※

西条亨宅の室内に集まるＯＣＧ研究会メンバー。

結締智恭。

白石直也。

西条拓夜。

成瀬花穂。

そして、烏丸葉月。

「って、何で肝心のアイツがいないのよッ！？」

「そんないきり立つなよ葉月ちゃん？　西条ちゃんはチョイと用事でな、今日は帰って来ないぜよ？」

「ンなッ！？」

「ふぅん…、そう落ち込む事はないぞ美少女よ。お前には、この俺がついている」

「さ、ミーティングを始めましょ」

「……」

白石を自然な流れでスルーした葉月。

ミーティングが始まり、結締は用意していた鞄の中から一枚のプリントを取り出した。

「今日集まってもらったのは、全員で意見を統一したかったからだぜぃ…まずはこの紙を見てくれぃ」

結締が取り出した紙を覗き込む拓夜に成瀬、そして葉月。

「これ…行方不明者一覧リストって…？」

「結締さん、これは一体何なんです？」

「コイツはこないだのトリティニードーム爆破テロの時に、逃げ遅れて無事が確認されていない人の一覧だぜぃ」

「主にリストアップされている者は、大会参加者や主催者側スタッフが殆どだ…。よく見てみろお前たち、その中に見覚えのある名前はないか？」

白石の言葉に三人は一人一人の名前を真剣にチェックしていく。

すると、一人の人物名の所で視線が止まった。

「う…嘘だろ…ッ！？」

「何で…亨さんの名前がここに載っているんです？」

「デタラメよこんなのッ！！　亨さんはちゃんと生きてる！！　その事は、私が保証できるもの！！」

「落ち着け、美少女よ」

白石が宥める中、結締はリストを手に取り、事の詳細を説明しだした。

「確かに葉月ちゃんの言う通り、西条ちゃんは無事だぜぃ。でも、このリストを作成した奴らがこの事を知らなかったとしたら？」

「……結締さん、どういう事なんです？」

「西条ちゃんは俺や白石さんには教えてくれたが、大会当日…何者かに襲われたらしいぜよ」

「ッ！？」

「その中で唯一聞いた名前が…『ラドルフ』。実はこの名前なんだが…トリティニーグループの副社長と同じ名前なんだぜぃ？」

「えッ！？」

「このリストを作成したのは他でもない、トリティニーグループだ…。恐らく、奴らは西条は既に死んでいると思い込んでいたのだろう」

「何よ…それ…ッ！？」

拓夜達三人にとって、二人の話す内容は信じられない出来事だった。

二人の話をまとめれば、犯人はトリティニーグループの人間なのに、会社はその事実を知らないという事になる。

「結締さん…そのラドルフって奴は副社長なんですよね？　トリティニーグループの社長は、一体何をやってるんすか？」

「拓夜ちゃん、朝刊は読んでないのか？」

結締は鞄から今朝の朝刊を取り出し、拓夜に渡す。

「トリティニーグループの社長さんは爆破テロに巻き込まれて、現在行方が分からないんですよ？」

「拓夜、アンタ…ニュース見てないの？」

成瀬に葉月の二人から言われてぎこちなく誤魔化し笑う拓夜。

拓夜は頭の中で一度、これらの情報を整理してみる事にした。

「えっと…つまり今回の事件の黒幕は、このラドルフって人の仕業…で、社長が居なくなったからトリティニーグループの実質上のトップは、このラドルフって人になるんだよな」

「ふぅん…その通りだ」

「で、この人が調査した結果…情報操作というか思い込みで、亨さんは行方不明扱い…と」

「結締さん、白石さん…これらの情報から、私達はどうすれば良いんです？」

成瀬が今後の自分達の在り方について結締と白石に尋ねる。

「成瀬ちゃん、最初に言った筈だぜぃ？　俺たちの中での認識を統一するってな」

「実はお前たちが来る少し前に、トリティニーグループから連絡が入ってな…、これから向こうの役員が話しがあるという事でこちらに来る事になっている」

「えッ！？」

「そうだったんですか！？」

拓夜に成瀬が驚きの声をあげていると、玄関からチャイムの音が鳴り響いた。

タイミングからして、件のトリティニーグループからの者だろう。

結締はそれぞれのメンバーの顔をぐるりと見渡しながら

「来やがったか…皆、あっちからの質疑応答は俺や白石さんに任せろ、皆が話す時は、俺たちに上手く口を合わせてくれぃ」

結締の言葉に頷く三人。

そして、結締が玄関の戸を開けると、そこに立っていたのは

「ウフッ、初めまして…」

柔和な笑みを浮かべる赤い髪をした女性。

スラリと伸びる長足に、スーツ越しにも分かる引き締まったボディライン。

セクシーに露出した胸の谷間。

微かに香る香水と共に、見る者を魅了するかのような声で、その女は名乗った。

「トリティニーグループ副社長の秘書を勤める、ツィスカ・ベルセリオスよ。宜しく、ＯＣＧ研究会」

※

重苦しい空気に包まれるＯＣＧ研究会事務所兼、西条亨宅。

部屋の真ん中に置かれたテーブルを挟む形で結締に白石、そしてツィスカが座っていた。

拓夜達三人は部屋の壁際に並んで座り、唾を飲み込みながら事の成り行きを見守る。

まず口を開いたのは結締であった。

「いやしかし、副社長も粋な計らいをしてくれたぜよ。まさかこんな美人の秘書さんをコッチに寄越してくるなんてな」

「あら、結締くんったらお上手ね？」

「いやいや、かえって緊張しちまうぜぃ」

含みのある笑みを浮かべながら話す結締にツィスカ。

そこに白石が話に入ってくる。

「ふぅん、ツィスカと言ったな？　電話では今回、俺達に重要な話しがあると言っていたが、その内容は何だ？」

「あら、白石くんは目上の者に対する言葉遣いがなってないわね？今の内に直した方が良いわよ？」

ぐぬぬ…と白石が唸る中、ツィスカは話しを本題へと持ち込んだ。

「あなた達も知ってると思うけど、トリティニードームの爆破テロによって、トリティニーグループは深刻な問題を抱えているの」

「社長…、早乙女一馬社長が爆破テロに巻き込まれて、行方不明だってニュースでやってたぜぃ？」

「ええ…それにあなた達、ＯＣＧ研究会のリーダーでもある西条亨くん。そして、ＯＣＧ研究会の会長の中島氏も爆破テロに巻き込まれて、同じく行方不明…」

「……ッ」

「現段階でのトリティニーグループの最高責任者であるラドルフ副社長は、その事を遺憾にかんじてるわ」

結締たちの気持ちを知って知らずか、ツィスカは淡々と言葉を続けていく。

拓夜は話を聞きながら思わず拳を握り締めて、その表情を険しくしていた。

「組織のトップがいなくなるというのはその組織にとって、壊滅を意味するのと同じ…。ラドルフ副社長はこれを期に、トリティニーグループの現体制を革新する考えを表明したわ」

「体制の革新…だと？　ツィスカよ、その具体的な内容は何だ？」

「フフ…白石くん、そう慌てないでもらえる？」

ツィスカはそう言うとリモコンを操作し、テレビのスイッチを点けた。

するとそこには

『私は、トリティニーグループ副社長であり、現段階では社長代理として指揮を執らせてもらっている…ラドルフ・ルベナンスだ』

テレビ画面に映し出されるラドルフの姿に驚く一同。

どうやら丁度、トリティニーグループの運営指針についての記者会

見が開かれた所であった。

『今でこそ世界にその名を轟かせる大企業トリティニーグループだが…昔はまだしがない一企業だった。　しかし、ある遺跡の発掘により…我が社は力を得た!!　そう、その力とは即ち…【神のカード】!!』

「ッ!?」

『今や世界中で栄える遊戯王カードは、その三枚の神のカードによって繁栄し、我が社は企業として大成功を納めてきた!!』

するとテレビ画面が切り替わり、トリティニードーム爆破事件の映像が映し出される。

『しかし、いつの世も絶えず争いは無くならない…皆(みな)も周知の通り、先のトリティニードーム爆破事件により、我が社の代表である早乙女一馬社長が、この事件に巻き込まれて行方不明となった。　それだけではない…先に述べた三枚の神のカードを唯一使いこなす事ができる人物、西条亨氏も同じく、この事件に巻き込まれた…ッ!!』

「……ッ！！」

『実に嘆かわしい事件だ…。我が社のシンボルとなる神も、大切な人も、どこの馬の骨とも知れぬ者によって一気に失ってしまったのだから…！！』

テレビ画面を見つめる一同の表情が険しくなる。

拓夜は思わず、震える拳を振り上げて立ち上がりたかった。

しかし、それはできない。

隣には唇をギッと噛み締め、同じように気持ちを堪える葉月の姿が目に入ったからだ。

テレビに映る画面はラドルフに切り替わり、彼の言葉が続いていく。

『我が社のシンボルを失った事で、我が社は経営にも信頼にも大きな支障をきたす事になった。そこで私はこれを期に、トリティニーグループの体制の革新を行う事を宣言する！！』

テレビ画面に映るラドルフの表情が不敵な笑みに変わる。

『カードによって栄えた我が社のソリッドウィジョンシステム…これをカードのみならず他の事業へも展開し、世界中に科学の発展を推進していく。この技術をカードのみに使用するというのは、私から見れば愚の骨頂…宝の持ち腐れだ』

そして次にラドルフは、世界中のデュエリストにとって衝撃的な発言をした。

『それに伴い、我が社は遊戯王カードの製造を一時中断する。　そしてトリティニーグループのカード部門であるＯＣＧ研究会は、私の権限によって解体…以後、新たな部門を設立し、事業を展開させていく』

「なッ！？」

ＯＣＧ研究会の解散？

その言葉が衝撃となり、一同を凍り付かせた。

『これについての正式な辞令は一週間後に行う。　それまでに私の方で、我が社の管理体制の見直しをし……』

プツン、とテレビの電源が切られる。

凍りつくＯＣＧ研究会一同を前に、ツィスカは卑しい笑みを浮かべて言い放った。

「聞いての通り、理解してもらえたかしら？」

「……ッ」

「ＯＣＧ研究会はこれでオシマイ。この事務所も、トリティニーグループから資金援助してるからここも解体…文字通りの意味よ」

ツィスカの、そしてラドルフの言葉は、ＯＣＧ研究会にとって崩落を意味していた。

※

ツィスカが帰り、数秒後の出来事。

「一体…何なんだよ…ッ！！」

ダンッ！！

と、部屋の中央に設置されたテーブルが激しく揺れる。

テーブルを殴りつけた拓夜は憤りながら、呑気に座る結締に怒鳴りつけた。

「何なんだよ、あのツィスカって女は！？　ラドルフって奴は！？　ＯＣＧ研究会を解散！？　何で好き勝手に言わせたままでいたんですか！？　何か一言…亨さんは生きているって言ってやっても良かったんじゃないんですかッ！？」

「まぁとりあえず落ち着け、拓夜ちゃん」

結締は拓夜の態度に臆する事なく、飄々とした態度で話し出す。

「まさかカード部門を閉鎖なんてのは、流石に俺も予想外だったぜよ」

「ふぅん…やり方こそ横暴だが、トリティニーグループの技術力を持ってすれば、カード以外の他の事業にも容易く展開できるだろう…。ラドルフの言う事にも、一理ある」

「ちょっ…、アンタ等は一体どっちの味方なんだよ!?」

「拓夜、落ち着きなさいよッ!!」

憤る拓夜を押さえつける葉月。

そんな拓夜を見て、代わりに成瀬が結締と白石の二人に尋ねた。

「あの、私からも良いです?」

「ふぅん…成瀬よ、何だ？」

「ラドルフ副社長の仰る通りなら、私達に残された時間はもう一週間しかありません。　結締さん、白石さん…私達は一体…これからどうすれば良いのでしょうか？」

「成瀬ちゃん、考え方が後ろめいてるぜぃ？」

結締は立ち上がり、ズボンのポケットから携帯電話を取り出した。

「残された時間は後一週間？　違うだろ？　まだ一週間もあるんだぜぃ？　そんだけあれば、何とでも出来るぜよ？」

「ッ！？」

ニカッと笑みを浮かべる結締。

そんな結締は拓夜たち三人に言う。

「可愛い後輩を守るのは、俺達先輩の役目だぜぃ。　俺や白石さん、そして…西条ちゃんを信じろ！　俺達の居場所は、そしてカードに賭けるデュエリスト達の想いは、そう簡単に壊れないって事を教えてやるぜぃ！」

※

ラドルフがトリティニーグループのカード部門の廃止を声明して３日が経った。

即ち、デュエリストにとってのカウントダウンが残り４日となってしまった現在、トリティニーグループ副社長兼、社長代理のラドルフ・ルベナンスはテレビ局にいた。

報道番組の収録に、ゲストとして招かれた為である。

司会の男が隣に座るラドルフに早速、今回のカード部門廃止について尋ねてきた。

「しかしラドルフ社長代理…今回、トリティニーグループカード部門の閉鎖、及びＯＣＧ研究会の解散を打ち出しましたが、なぜそのような辞令を？　遊戯王カードは、今や世界中で盛んに行われているゲームで、世界中の人々から今も注目を集めていらっしゃるのに

？」

「ふむ…我が社が別事業に着服する事は以前に述べた筈だが、カード部門を一時中断する理由としてはそれだけではない。　忘れた訳ではあるまい…、トリティニードーム爆破事件の事を…」

ラドルフは足を組み、仰々しい素振りで話しを続ける。

「その日トリティニードームでは、デュエルキングの称号を賭けたトリティニー・チャンピオンシップが開催されていた。　我が社にとってはデュエルと、デュエリストの繁栄を祝う歴とした記念すべき日であった……しかし、事件は起きた」

「あの一件以来、トリティニーグループは他の場所でのカード大会の開催を一斉に規制しましたよね？」

「当然だろう？　狙われたのはトリティニーグループ代表に、ＯＣＧ研究会のリーダー…纏めればトリティニーグループそのものだという事だ。もし他のデュエル大会でも、同じよいな手口で事件が起きた場合、起きてからでは済まされないからな」

「なる程、市民の安全を考えての発言だった訳ですね」

「その通りだ…ユーザー無くしては、企業は成り立たないからな…」

ラドルフを中心に話しが進む中、番組は華僑を迎えて締めに入る所であった。

長テーブルに優雅に座るラドルフは、チラッと視線をスタッフ側に配置されたカメラモニターに目を向ける。

カメラモニターに映る自分の顔を見て、ラドルフは思わず口元がにやけてしまいそうになった。

（ククク…誰も気付く筈がない…ここまでのシナリオが、この俺の計画だという事が）

様々な仮面を被り続け今尚、仮面の奥底の本性で世の中を嘲り笑うラドルフ。

ここまでは順調、計画通り。

もう誰も自分を邪魔する者もいない。

建て前では爆破事件という要因を使ったが、ラドルフからすればＯＣＧ研究会を潰す、いや、精霊界の三英雄を無力化させたかったのだ。

（私の計画での不穏分子はあの三人…、ＯＣＧ研究会さえ無力化すれば、神を持つ私の前に……ん？）

内心で嘲笑っていると突如、番組スタッフの裏方達がざわつきだした。

ラドルフは何事かと表情を険しくし、カメラモニターに目を向けるとそこには

『うっしッ！！　回線が繋がったみたいだぜぃ！？』

『ふぅん…意外と簡単にできたな』

『なぁ結締、もうこれはアッチに映像が届いているのか？』

……なん…だと……ッ！？

ラドルフの思考が一瞬、硬直してその瞳が大きく見開かれる。

テレビ局の回線をジャックし、番組映像に割り込む三人の男。

ラドルフは思わず席を立ち、唸るように呟いた。

「…なぜ…いきている…ッ！？」

※

「やった！！」

「割り込みに、無事成功しました！！」

「どうだ、ラドルフ！！」

西条亭宅兼、ＯＣＧ研究会事務所では、拓夜に成瀬、そして葉月の三人がテレビを観ながら歓喜の声をあげた。

ツィスカが訪れ、ラドルフが声明を発表したあの日から、結締に白石の二人はやる事があると言い部屋から出て行った。

そして今日、突如三人の携帯電話にそれぞれにメールが入ったのだ。

『ＯＣＧ研究会事務所に集合し、１８時にチャンネルの１０を開くように』と。

拓夜達は指示された通りにテレビを点けると、トリティニーグループについての番組でラドルフが出演していた。

そして今、目の前のテレビモニターには画面を両断する形で、ラドルフにＯＣＧ研究会の先輩三人の姿が映し出されている。

ラドルフからも三人の姿が確認できたのか、その表情は驚愕していた。

そんなラドルフの表情を拝む事ができた拓夜は、とてもスカッとした気分であった。

テレビモニターに映るラドルフが、唸るように尋ねる。

『…何の真似だ？　ＯＣＧ研究会…ッ！！』

『何の真似？　おぃおぃ、そりゃこっちの台詞だぜぃ？』

『ふぅん…随分と好き勝手にやってくれたな、ラドルフ』

険しい表情のラドルフ。

結締に白石が言う中、一歩前に進み出た西条亨がラドルフに言い放つ。

『ラドルフ…残念だったな、俺はこの通り生きている。俺達はトリティニーグループを、決闘者の魂を、お前の好きになんかさせはしない！！』

『フン、行方不明者の一人が戻った所で…我が社の方針に変更はない。西条亨、君が戻った所でも無駄なのだよ』

冷静を装い対応するラドルフ。

しかし、その仮面の奥底は憤慨していた。

『確かに、俺一人が現れた所で…お前には無力かもしれない。だがな、この方ならどうだ？』

『ッ！？』

テレビモニターに映る亭に結締、白石が退くと、奥から車椅子に乗った一人の男が現れた。

そしてその車椅子を押す覆面を被った人物。

テレビ局の会場にて、カメラモニターを観ていたラドルフは徐々にその表情を青ざめさせていく。

その車椅子に乗った人物とは、その車椅子を押す覆面を被った人物とは。

ラドルフは震える口調で、その二人の人物の名を呟いた。

『なッ…中嶋…それに…早乙女ッ一馬…社長…ッ！？』

車椅子に座るその男、早乙女一馬は、真っ直ぐにラドルフを見つめ

る。

悲しむでもなく、哀れむでもなく、憤るでもなく、侮蔑するでもなく。

感情を読み取れない瞳で、モニター越しにラドルフを見つめる早乙女一馬は、その口を開いた。

『…ラドルフ君、君はもう、ここまでだ』

革新（後書き）

読みづらいですかね？

書いていると、自分の頭の中では映像としてその時の台詞や描写が映し出されているのですが、それをいざ文章に置きなおすとこれがまた難しい。

なかなか納得のいく表現が出来ずで四苦八苦。

とりあえず、今回は続きでもう一話投稿しましたので、宜しくお願いします。

革新？　（前書き）

連続投稿二話目です。

間違えてこの話を読まれてしまった方、スイマセン

一話前から読み直して下さい。

革新？

※

テレビ局の回線をジャックし、モニター越しにラドルフ・ルベナンスの前に現れたＯＣＧ研究会。

そしてラドルフからすれば、死んでいたと思っていた早乙女一馬社長に西条亨がそこに居た。

この映像は家庭のテレビ画面を独占しただけでなく、街の至る所のモニターにもハックし、映像が生中継で流出していた。

テレビ局スタッフが突然の出来事に驚き、番組監督に訴えかける。

「監督、チャンネルを全て乗っ取られてます！！　切り替えが効きません！！」

「…このままで良い」

監督は色の濃いサングラス越しに、瞳を輝かせながら言う。

「このまま映像を流し続けろ…トリティニーグループ、その貴重なスキャンダルだ。この期を逃したら、次はないぞ…ッ！！」

視点は変わり、早乙女一馬社長と行動を共にするＯＣＧ研究会。

西条亨。

結締智恭。

白石直也。

そして、怪しげな覆面を被った三柱付属大学の中島理事長。

早乙女社長は目の前に用意されたカメラモニター越しに、青ざめた表情のラドルフに話しかけた。

「ラドルフ君…積もる話しは山ほどあるが、まず最初に聞こう。トリティニーグループのカード部門の閉鎖、及びＯＣＧ研究会の解体。これによりトリティニーグループに何のメリットがある？」

トリティニーグループはカードにより、世界的に大成功を納めて発展してきた。

トリティニーグループにとってカードとは、一緒に歩み続け、成長した友なのだ。

モニター越しに唸るラドルフは、険しい表情に切り替わり意見を述べる。

『新事業への拡大の為です。カードにおけるバーチャルリアリティ、ソリッドヴィジョンシステムは、カードに留まる規模のものではないと考えます。他にも様々な使い道はある…！！』

「君は市場調査の報告書には目を通したのかい？　トリティニーグループは自分達の力だけでここまで来れたのだと思っているなら、それは大きな間違いだよ？」

『無論、社長の仰有る言葉も理解できますよ。　その言葉は我が社にだけ当てはまるものではない…ユーザー在ってこその企業であると』

ふぅ…と、早乙女社長は軽い溜め息を吐いた。

「やはり、君は理解していないみたいだね。残念だよ」

『…何だと?』

「顧客が在ってこそ成り立つ企業、確かにそれは間違いない。だが、それだけでは駄目なのだよ！　顧客のニーズ！　顧客が必要とする要求を受け入れ、提供してこその企業なのだ！！」

『ッ！?』

「君はトリティニーグループを支持する顧客の声を聞いたのか?その大多数が、トリティニーグループのカード部門を、ＯＣＧ研究会を必要としている声を?」

『…それはッ』

ラドルフの頬に一筋の汗が流れ落ちる。

奥歯を食いしばり、苦悶の表情のラドルフに、早乙女社長は言う。

「顧客が今求めているのは、カードにおける新たな発展と未来、その歴史だ！　君の言う事業は、そんな顧客達の意見を潰してまで優

先しなければならないのかね？」

早乙女社長の言葉に圧されるラドルフは最早、言葉が出て来なかった。

早乙女社長の言う言葉は正論なのだ。

理不尽に正論が勝るには、その正論を覆す程の前例が必要だ。

しかし、長いトリティニーグループの歴史の中には、早乙女社長の言う正論を覆す前例が存在しない。

それだけトリティニーグループは企業と市場にて絶対の信頼関係を持って成り立ってきたのだ。

『…私は…我が社の為を思い…ッ』

「君の言いたい事も分かる。　確かにソリッドヴィジョンシステムはトリティニーグループの誇りでもあり、広告塔だ。　それをカード以外の分野に着手しようと考えるのは、実に良い案だと私も思う。
だが、やり方が横暴すぎたな…ラドルフ副社長？」

完全に呑み込まれたラドルフ。

そんなラドルフは悟った。

もう自分は此処までなのだと。

（何故だ…何故、早乙女が生きている？　いや、それよりも何故…あの西条亨が生きている…ッ！？）

トリティニードームの管制室にて、秘書のツィスカが亨にスタンガンを撃ち込んだ所は目の前で見た。

そしてその後、亨は爆発に巻き込まれて死亡した筈ではないのか？

それに早乙女社長の言葉から出てきた“横暴すぎたな”という言葉。

明らかにバレている。

自分がトリティニードームを爆破した主犯である事が、確実にバレている。

恐らく情報源は早乙女社長の隣に立つ西条亨だろう。

（どうやって生き延びたかは知らないが、ツィスカめ…ッ、だから作戦中はコードネームで呼ぶように言っておいたのに…ッ！！）

今の自分の立場は正に、断崖絶壁に立たされた窮地の状態だ。

もう、後には退けない。

そんなラドルフは最後の手段として、俯く顔をあげてモニターに映る早乙女社長とＯＣＧ研究会のメンバーを真っ直ぐに睨む。

『横暴…ですか、早乙女社長。　貴方がそう仰有るならそれで結構…ですが、私にも此処まで社を引っ張ってきた意地があります』

ラドルフの視線、その左目の瞳の色が濃い赤紫色に変色する。

「…ラドルフ君、その目は…ッ！？」

『早乙女社長…トリティニーグループらしく、ここはデュエルで決着を着けるというのはどうでしょう？　私とＯＣＧ研究会の西条亨とデュエルをし、トリティニーグループの未来を決めるのです』

「なに？」

『私が勝った場合、貴方には社長の椅子を降りてもらう事になる…。私が負けた場合、私はどこへやらなりとも消えましょう』

現在ラドルフは番組の収録中であり、この早乙女社長やＯＣＧ研究会とのやり取りも全て収録中の出来事である。

つまりラドルフが放ったこの一言は、メディアを通じて全国に一斉に知れ渡った事になる。

この一言はトリティニーグループにとって、前代未聞の出来事でもあった。

それは即ち、

クーデター。

※

西条亨や結締智恭、そして白石直也が通う三柱付属大学の理事長室に、トリティニーグループ代表取締役社長、早乙女一馬に大学理事

長の中島、そしてＯＣＧ研究会の全メンバーが揃っていた。

西条拓夜に成瀬花穂、烏丸葉月の三人はその面子を前に緊張し、カチコチに固まりながら座っていた。

そんな三人の様子に軽い笑みを浮かべた早乙女社長は、穏やかな物腰で

「そんなに緊張しなくても良い。もっとリラックスしてくれたまえ」

柔和な笑みを浮かべる早乙女社長だが、拓夜はぎこちない笑みで心の中で「無理です！！」と叫んでみた。

対面している人物も人物だが、この理事長室という空間も自分達を包み込む緊張感に厚みをかけている。

早乙女社長はそんな拓夜達の様子を察知したものの、話しを進めていく。

「君達がＯＣＧ研究会の新しいメンバーだね？　自己紹介が遅れた事を先ずは詫びよう。　私は早乙女一馬、トリティニーグループの代表取締役社長を任されている」

「西条拓夜です」

「成瀬花穂です」

「烏丸葉月です」

三人の名前を聞いて頷く早乙女社長。

そして早乙女社長の隣に座る中島は軽く咳払いをし

「ワタシは中島よ、拓夜ちゃんのデュエルの活躍は、大会の時にしっかりと拝見させてもらったわ！　なかなか強いじゃないの！」

「にゃ～、何か中島さんが言うとこの場の緊張感が台無しだぜぃ…ブボォッ！？」

拓夜達の後ろに立つ結締が呟くと、中島はテーブルの上に置いてあったガラスの小物を結締のおでこにクリーンヒットさせた。

「結締ちゃん？　ワタシに対してのそんな発言はナッスィングよ？」

結締が沈んで軽く鼻で息を鳴らす中島は、再び拓夜達に視線を戻して話を始める。

「とりあえずラドルフ副社長には困ったものだわ…あんな横暴な発言、普通じゃ認められるものじゃないわね」

「でも、社長さんはラドルフ副社長からのデュエルを受けたんですよね？」

中島の発言を聞き、成瀬が口を開く。

「早乙女社長…何故あのようなデュエルを受けたんです？　中島理事長が仰有るように、あの場でそれを承諾するなんて…何か考えがあってなのでしょうか？」

成瀬からの質問に早乙女社長は軽く瞳を閉じる。

「…このトリティニーグループがまだ創業したての頃、私とラドルフは世界中の遺跡を調査していた。元々トリティニーグループは、そういった考古学の会社だったのだよ」

うっすらと瞳を開く早乙女社長は、まるで遠い昔を懐かしむような瞳で話を続ける。

「その当時はまだトリティニーグループは小さな小さな会社…今でこそ大企業だが、その当時は中小企業でもなく…ぽっと出の若輩者の集まりだった…。私がこのトリティニーグループを立ち上げ、最初に同士として入社してくれたのがラドルフ…彼と私は、最初は二人で力を合わせて、会社を大きくしていった。そして遂に、遺跡からとある三枚のカードを発見する…」

「…それが、神のカード」

「その通りだよ烏丸くん。そしてその三枚の神のカードを元に、私達はオフィシャルカードゲームを作り上げた」

全員が黙って早乙女社長の話に耳を傾けていた。

拓夜達からすれば、この早乙女社長の話はトリティニーグループの歴史という、とても貴重な話に思えた。

「オフィシャルカードゲームは世界的に大成功を収め、トリティニーグループは瞬く間に大企業へと登りつめた。　その間にも私と彼との間に何もなかったと言えば嘘になる…。何度も意見の衝突も起きたが、互いに目指す夢や目標、その志しだけは間違いなく同じだった」

だが、ラドルフはクーデターという暴挙に出た。

「だが…彼はそこまでの野心家ではなかったハズだ…。私が知らなかっただけというのであれば、先ずは彼のそんな部分も理解してあげたい…それが、トリティニーグループの代表取締役社長としての、彼の友人としての、私の心構えだ」

「…社長」

「そんな私の勝手に、君達ＯＣＧ研究会を巻き込んでしまった事には本当に申し訳なく思っている…頼む、君達の力を…私に貸してくれないだろうか？」

深々と頭を下げる早乙女社長に、拓夜達は思わず動揺した。

まさか社長自ら、自分達に対してこんなにも頭を下げられるとは思ってなかった。

すると

「…社長、頭を挙げて下さい」

「…西条、亨くん」

「俺は…ラドルフが行った爆破テロで、大切な人を失いました…今、俺がここに立つのは…ラドルフに対する、復讐心です」

「…そんな、亨さんッ！？」

「葉月さん！！」

思わず椅子から立ち上がりそうになる葉月だが、それを隣に座る成瀬が抑える。

亨はそんな葉月を一瞬だけ見やり、早乙女社長に自分の気持ちを打ち明けた。

「だけど…復讐心だけでは駄目なんだと、そんな気持ちだけでデュエルをしても駄目なんだと、思います」

「……」

「ある人から言われました…。ＯＣＧ研究会は、もう一個人のチームなんかじゃない…皆の期待が、夢が、願いが寄せられたチームなんだと。俺がもし、復讐心だけに捕らわれてデュエルをしたら、そんな皆からの期待を裏切る事になる。それにアイツも、きっとそんな事は望んでなんかいない…」

「……亨さん」

亨の話を聞き葉月だけでなく、他のメンバーも彼の言葉の端に存在する一人の少女の事を思い出していた。

「…西条亨くん、ならば君はどうする？」

「戦います」

早乙女社長のその言葉に対し、答えが決まっていたかのように亨は即座に答えた。

「俺がラドルフと戦います。　ラドルフとのデュエルに勝って、デュエリスト達の未来を切り開く！　それがアイツの夢でもあり、俺の夢にも繋がる事を信じて！」

亨の決意にＯＣＧ研究会の皆が頷く。

それは皆が皆、同じ決意を露わにした事と同じだった。

※

ＯＣＧ研究会の皆が退室し、三柱付属大学の理事長室には中島と早乙女社長の二人だけが残されていた。

湯のみに注がれたお茶を一口、口に含んだ早乙女社長はポツリと言葉を漏らした。

「…強いな、彼らは」

「…社長」

「西条亨くんの話では、大切な人を失ったと聞いた…なのに彼らは、戦おうとしてくれる」

「社長、でもそれは社長の為だけじゃないわ…あの子達は、この世界のデュエリストの未来の為に戦おうとしてくれてるの」

「デュエリスト達の…未来…か」

「ええ、その未来の為には社長、アナタという人が無くてはならないの。今までのように…」

「しかし…ラドルフ副社長は一体…、何故ＯＣＧ研究会にデュエルを？　デュエリストとしてのキャリアならば、ＯＣＧ研究会の彼らの方が上なのに？」

何か策があるのではないかと、つい疑ってしまう。

しかし、中島は早乙女社長ほどの不安は感じてはいなかった。

中島は理事長室の窓から見える空を見上げながら

「大丈夫よ、社長」

「…中島くん」

「あの子達は強いわ。信じてあげて…！！」

そう、中島は知っている。

西条亨、結締智恭、白石直也の三人が過去に激戦を潜り抜けた、精霊界の三英雄という事を。

彼らだけではない。

大会の時に見た、西条拓夜のポテンシャルを。

成瀬花穂、烏丸葉月も同様に、その実力は亨たちから送られた報告書を通して知っている。

だが何よりも、デュエルの腕前どうのこうのよりも。

彼らが力の源がマナの、マジシャン・ガールの気持ちを汲んでの団結力であるという事を知っている。

中島の言葉には、どこか信じさせる不思議な力、確信があった。

※

三上市の中央位置に聳え建つトリティニーグループ本社。

通称、トリティニータワーの周囲には多くの報道陣が詰め掛けていた。

その理由としては先日行われたトリティニーグループ副社長のラドルフ・ルベナンスが言い放った事実上のクーデター。

その内容はラドルフがＯＣＧ研究会とデュエルをし、自分が勝った場合に自分が社長となりトリティニーグループを取り仕切っていくとの事だ。

今日がそのＯＣＧ研究会とラドルフのデュエルが行われる日である。

トリティニーグループ本社の入り口には多くの取材陣が集い、各所にてアナウンサーが自社のカメラに向かって次々に報道をしていく。

「こちらトリティニーグループ本社前です！ご覧のように此処には多くの報道陣が集合しております！トリティニーグループ副社長、ラドルフ・ルベナンス氏がクーデターを宣言してから、全国各地でデュエリスト達によるラドルフ氏への非難が強まっております！…あッ！？　ご覧下さい！！　今、トリティニータワーの頂上にラドルフ氏の姿が確認されました！！　どうやらもう直ぐ、ラドルフ氏とＯＣＧ研究会とのデュエルが始まるようです！！　ではこれより、カメラを上空に回したいと思います！！」

※

結城雅一は自宅にてボーっとしながらテレビを観ていた。

日曜日の昼からのテレビ『笑って良いと思うよ－特集号－』だ。

月曜日から金曜日にかけて、今やお茶の間の定番として放送されているこの番組は、とりあえず観たい番組が無い時に観るには打ってつけであった。

「ん？　何だこりゃ？」

結城がテレビを観ていると急に臨時ニュース速報が入り、番組が勝手に切り替わってしまった。

「なぁッ！？　タモさんがッ！？」

思わずチャンネルを他の局に切り替えるが、どこも同時に臨時ニュース速報に切り替わっており、結城は思わず唖然となった。

『トリティニーグループ副社長、ラドルフ・ルベナンス氏とＯＣＧ研究会のデュエルが、もう間もなく始まる頃です』

「何だよ…またこのニュースか」

ふぅ、と軽く溜め息を吐く結城。

カードを使って会社の命運を分ける？

結城はそのやり方に呆れていた。

「でも…ま、俺もちっちゃい頃はやってたからな…遊戯王カード」

呆れてはいたが、その言葉の奥にはどこか懐かしむ感情が読み取れる。

すると結城はふと、テレビ画面に映る人物に思わず視線が釘付けになった。

「かッ！？　烏丸…葉月…！？」

それだけではない。

画面には烏丸葉月の名前と共に顔写真も映されていた。

「それに…拓夜ちゃんまで…！？」

見間違えるはずがない。

二人とも自分のクラスメートなのだ。

画面にはＯＣＧ研究会のメンバー紹介と表示されており、葉月に拓夜の二人はその中に表示されていた。

「何で…こんな所に二人の名前が……あッ！？」

そして結城は同じ画面の中で、ある人物を発見する。

「…西条…亨…ッ！？」

確かこの男は以前、東区のスーパーで葉月と親しげに話をしていた男だ。

結城の頭の中で葉月とこの男の関係が次々に組みあがっていく。

しかし、葉月がカードをする姿など想像できなかった。

「……俺も、観てみるか」

この西条亨という男がどんな男なのか。

結城は自分の目で確かめる為に、テレビの前でどっしりと構えた。

※

トリティニータワーの頂上では突風が吹き荒れていた。

白いスーツに身を包み、サラサラした黒髪を靡かせるラドルフ。

その表情は不敵な笑みを浮かべ、不気味な赤紫色に輝く左の瞳の先には、トリティニータワー上空を飛び、此方に向かってくる一機のヘリコプターがあった。

左目の力を通して感じる、ヘリコプターの中の精霊界の力。

（…間違いない、あの中に西条亨がいる！！）

そのヘリコプターがけたたましい音をたてながら自分の目の前に着地する。

そしてドアがスライドされ、中から西条亨が、そしてＯＣＧ研究会の面々と早乙女一馬社長が姿を現した。

「よく逃げずに此処まで来たな…西条亨」

「…ラドルフ…ッ！！」

二人の腕には決闘盤が装着されている。

亨は早速、決闘盤をデュエルモードに変形させ、その闘志を露わにした。

「もう不要な言葉は要らない…ラドルフ！！　デュエルだ！！　決着をつけよう！！」

「良いだろう…！！」

ラドルフも決闘盤をデュエルモードへと変形させ、互いに構える形になる。

（西条亨…貴様が操る神を、私の神によって薙ぎ倒すッ！！）

二人の間に激しい闘志という名の突風が渦巻く。

そして二人は同時に、デュエル開始の宣言をした。

『デュエル！！』

革新？　（後書き）

この話を読んで下さり、ありがとうございます！

さて、まずは近況をお話します。

前回の投稿時にお話した駅伝大会ですが、無事に走りきる事ができました。

３．３キロの距離を、１２分５０秒で。

チームとしての順位は、男性チームの中で

１７チーム中、７位。

そして僕が走った区間での、僕自身の順位は、

１７チーム中、６位。

いや、ホント、頑張った！

駅伝終わった事で気が抜けて、帰りの足でモンハン買っちゃって、

そのまま友達誘って狩りに行こうかとしたけど、

皆、用事があって誰一人捕まえられず・・・

結局まだ狩りやってない。

自分で勉強の誘惑素材を購入してどないすんねんッ！！

さて、小説に関してですが、いよいよ１２月の半ばに入り、試験日が近づいてきました。

年内の更新は次回でマジで終了です。

あ、

でも番外編・・・

時間的に無理だな（涙）

よし、決めた。

次話（二話分）だけ書いて、今年は終了！

それ以降は試験終了まで更新なし！

ホント、勝手気ままな僕でスイマセン！

ラドルフ　ＶＳ　西条亨　（前書き）

一気に寒くなりました。

皆さんは体調管理はできているでしょうか？

なかなか布団から出るのが辛い時期になりましたが、メリハリをつけて規則正しい生活を送りましょう。

しっかり睡眠をとって、翌日の英喜を養いましょう。

それが、健康に繋がる第一歩です。

え？　急にどうしたって？

べ、別に僕が風邪を引いた訳じゃないですよ！

本当ですよ！

ただ職業柄、日々の健康には気を使っているだけですよ？

本当ですよ！

ラドルフ　ＶＳ　西条亨

※

遂に始まった二人のデュエル。

西条亨　対　ラドルフ・ルベナンス

トリティニータワー頂上にて対峙する両者の間には、それぞれの闘志がぶつかり合い、激しい火花を撒き散らす。

西条亨の後ろには残りのＯＣＧ研究会のメンバーに、トリティニーグループ社長の早乙女、そして中島が西条亨を見守っている。

この一戦にはトリティニーグループの、そして決闘者達の未来が掛かっている。

もし西条亨が敗北してしまえばトリティニーグループはラドルフのものとなり、この世界からカードが消えてしまう。

決闘者達の未来の為、そして何より、ここには居ないマナの想いに応える為。

西条亨は決闘盤を構えてラドルフの前に立つ。

「舞台は整った…どうだ西条、今の気分は？」

不敵な笑みを浮かべながら尋ねるラドルフ。
そんなラドルフに西条亨は臆することなく言い放った。
「俺のデッキには、皆の想いが込められている！その想いに応える為に、俺は全力でお前を倒す！」
「…良いだろう」
ラドルフも決闘盤を構え、自分も今回のデュエルに掛ける意気込みを放った。
「ならば私が貴様達の想いを断ち切ってやろう！」
（神の力でなッ！！）
ラドルフの左目が赤紫色に変色し、不気味な輝きを放つ。
そのラドルフの力に呼応するかの様に、西条亨の右目も蒼く澄んだ

瞳の色へと変色した。

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

辺りを重苦しい緊張感が包み込む。

西条亨にラドルフは、互いに手札を揃え、同時に言い放った。

「いくぞッ！！」

「来いッ！！　西条ッ！！」

『デュエルッ！！』

※

【先攻】ラドルフ
ＬＰ／　８０００

【後攻】西条亨
ＬＰ／　８０００

「先攻は私が戴く！私のターンッ！！」

デッキからカードをドローしたラドルフは、６枚の手札の中からカードを掴み取り

「私はモンスター1体をセットし、伏せカードを2枚セットする！」

ラドルフのフィールドにそれぞれのカードがセットされる。

一通りの行動を終えたラドルフは口端を吊り上げ、「フッ」と軽く笑みを浮かべながら

「私のターンは終了だ」

「俺のターン、ドローッ！！」

ラドルフがターンを終了した事で、西条亨のターンへと移行する。
ラドルフのフィールドには裏側守備表示モンスターが1体。
そしてバックには伏せカードが2枚。
危険な香りが漂う中、亨は手札を確認して、そのプレイを開始した。

「魔法カード『闇の誘惑』を発動!!」

【闇の誘惑】
［魔法カード］
自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

「このカードはデッキからカードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する!まずはデッキから、カード2枚ドローッ!!」

デッキから2枚のカードをドローした亨は、手札の中から1枚のカードを掴み取る。

「そして手札の闇属性モンスター『ブラック・マジシャン』をゲームから除外する！！」

「ッ！？」

初手に自身のエースモンスターを除外した事に一瞬、驚きの表情をするラドルフ。

「更に手札より『召喚師のスキル』を発動！！」

【召喚師のスキル】
［魔法カード］
自分のデッキからレベル5以上の通常モンスターカード1枚を選択して手札に加える。

「このカードは、デッキの中からレベル５以上の通常モンスター１体を手札に加える！俺はこのカードを手札に加えるぜ！」

デッキからカードを手札に加えた亨のそのカードを見て、ラドルフは再び驚愕した表情になる。

「貴様ッ…そのカードは…ッ！？」

「そして手札より『古のルール』を発動！！」

【古のルール】
［魔法カード］
自分の手札からレベル５以上の通常モンスター１体を特殊召喚する。

「この効果により、手札のレベル５以上の通常モンスター１体を特殊召喚する！」

亨が手札に加えたカード。
それは

「白石！早速お前の力を借りるぜ！出(いで)よ、『青眼の白龍』ッ！！」

【青眼の白龍】
星８／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２５００

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

「良しッ！！よくぞ出した西条ォッ！！」

「『青眼の白龍』だと？貴様…そのカードは、白石直也のカードではないのか！？」

亨が特殊召喚した『青眼の白龍』を見て、思わず尋ねるラドルフ。

「言った筈だラドルフ！このデッキには、仲間からの想い（カード）が込められているとなッ！！」

「くッ！？」

（だとすれば、今の西条亨のデッキには白石直也の『青眼の白龍』だけではなく…他の奴らのカードも入っているという事かッ！？）

白石のエースを特殊召喚した亨は早速、バトルフェイズへと突入した。

「バトル！！『青眼の白龍』で、ラドルフのセットモンスターに攻撃！滅びのバースト・ストリームッ！！」

轟ッ！！

『青眼の白龍』の攻撃が炸裂し、ラドルフの守備モンスターは破壊された。

「ならば破壊された『極星獣タングリスニ』のモンスター効果を発

動させて貰おう」

【極星獣タングリスニ】
星３／地属性／獣族
ＡＴＫ　１２００
ＤＥＦ　８００
［効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分フィールド上に「極星獣トークン」（獣族・地・星３・攻／守０）２体を特殊召喚する。

「このカードが戦闘破壊され墓地へ送られた時、私のフィールドに『極星獣トークン』２体を特殊召喚する！」

ボンッ、ボムッ！！

ラドルフのフィールドに守備表示で特殊召喚された２体の『極星獣トークン』。

そのカードに怪訝な表情を作る亨は

（極星？…何だ、あのカードは…俺の知らない…）

「俺は、モンスター1体をセットし、ターンエンド！」

※

二人のデュエルはトリティニータワー上空を旋回するテレビ局のヘリコプターによって、全国に放送されていた。

次第に空に暗雲が立ち込める中、ラドルフのターンが開始される。

「私のターン、ドローッ！！」

【ラドルフ】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　８０００

現在、ラドルフのフィールドには『極星獣トークン』が守備表示で２体。

そして２枚の伏せカード。

対する西条亨のフィールドには裏側守備表示のモンスター１体に、白石のエースモンスター『青眼の白龍』の姿が。

（『青眼の白龍』…その攻撃力は最高クラスの３０００。しかし…神には及ばない！！）

「ゆくぞ西条！私はチューナーモンスター『極星獣グルファクシ』を召喚ッ！！」

【極星獣グルファクシ】
星４／光属性／獣族
ＡＴＫ　１６００
ＤＥＦ　１０００
［チューナー・効果］
相手フィールド上にシンクロモンスターが表側表示で存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「西条よ、貴様に魅せてやろう！私の持つ、神のカードをッ！！」

「なにッ！？」

【神のカード】

その言葉に驚きの声をあげる亨を前に、ラドルフは暗雲が立ち込める空に向かい言い放つ。

「レベル３の『極星獣トークン』２体に、レベル４『極星獣グルファクシ』をチューニングッ！！」

ヒュンヒュン…ヒュンッ！！

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

ラドルフのモンスターの星がそれぞれ暗雲の中に吸い込まれていく。

「星界の扉が開くとき、古の戦神がその魔鎚を振り上げん。大地を揺るがし轟く雷鳴と共に現れよ！」

カッッ！！！！

「シンクロ召喚！　光臨せよ、『極神皇トール』！！」

【極神皇トール】
星１０／地属性／獣戦士族
ＡＴＫ　３５００
ＤＥＦ　２８００
［シンクロ／効果］
「極星獣」と名のついたチューナー　＋　チューナー以外のモンスター２体以上
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効化できる。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星獣」と名のついたチューナー１体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、相手ライフに８００ポイントダメージを与える。

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

ピシャッ！！

ズゴウッ！！

カッッ！！

暗雲を裂き、轟く雷鳴と共に天より現れし極神皇。

その巨大な体躯に西条亨だけでなく、ＯＣＧ研究会のメンバーや早乙女社長に中島は、唖然とその姿を見上げた。

「シンクロモンスターの…神だとッ！？」

「そう、貴様の持つ【三幻神】が精霊界の神とするならば、私の持つ【三極神】は…人間界の神ッ！！」

「ッ！？」

ラドルフの左目の瞳の色が、一層強い輝きを放つ。

「私は北欧神話を調べ、スウェーデンやノルウェー等、各地の遺跡を調査していた…そして見つけたのだ!!　この【三極神】のカードをなッ!!」

「三極神…だとッ!?」

（その言葉が本当なら…奴の神は、『極神皇トール』の他に、後2枚もの…ッ!!）

カッ!!と目を見開いたラドルフは、そのままバトルフェイズへと突入する。

「『青眼の白龍』と言えど、神の前には無力ッ!!『極神皇トール』よ、西条の『青眼の白龍』に攻撃ッ!!　サンダー・パイルッ!!」

ズガガァッ!!

「ぐッ!?　ブルーアイズッ!?」

【ラドルフ】

ＬＰ／　８０００

【西条亨】

ＬＰ／　８０００　→　７５００

ビリビリッ！！

『青眼の白龍』が破壊された衝撃が現実のものとなり、西条亨を襲う。

それが神のカードの力でもある。

神のカードによって敗北した者が意識を失うというのは、この事からきているのだ。

「くッ！？」

「どうだ西条、私の神の力は？　私のターンは終了だ！」

※

ラドルフのフィールドに『極神皇トール』が光臨し、西条亨のターンに移る。

現在、西条亨のフィールドには裏側守備表示のモンスターが1体。

手札の3枚のカードを確認し、キッとラドルフの『極神皇トール』を見上げる。

「どうした西条、私の神の前には為す術もあるまい！」

亨の現在の手札の3枚のカード。

『E・HERO　ネオス』に、『バスター・ブレイダー』のカード。

そして『ネクロ・ガードナー』。

確かにこのままでは守備を固める他、何もできない。

しかし、彼は諦めない。

「行くぜ、俺のターンッ！！　ドローッ！！」

ドローしたカードを確認する亨は、即座にそのカードをセットした。

「リバースカードを1枚セットし、ターンエンド！」

「フッ、やはり何も出来ないか…」

カードを1枚セットしただけでターンを終えた亨。

その様子を鼻で笑うラドルフ。

西条亨を見守るＯＣＧ研究会のメンバーは、ハラハラしながら事の成り行きを見守っていた。

「亨さん…何か策はあるのでしょうか？」

「亨さんを信じようぜ花穂…あのデッキには、俺たち皆の力が合わさってるんだ！」

「そうよ成瀬さん！拓夜の言うとおりよ！それに亨さんだって、絶対に何か策があるから、たったあれだけのプレイでターンを終えたに決まってるわ！」

皆が皆、西条亭を信じていた。

そんな皆の期待を一身に背負いながらターンを終了した西条亭。

そしてラドルフのターンに移行し、ラドルフはデッキからカードをドローした。

「私のターン、ドローッ！！　フハハハハハッ！！　行くぞ西条よ！私は『極星霊ドヴェルグ』を召喚ッ！！」

【極星霊ドヴェルグ】
星１／地属性／戦士族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
このカードが召喚に成功したターン、自分は通常召喚に加えて１度だけ「極星」と名のついたモンスター１体を召喚する事ができる。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが墓地へ送られた時、自分の墓地から「極星宝」と名のついたカード１枚を選択して手札に加える。

「『極星霊ドヴェルグ』が召喚に成功したターン、【極星】と名のついたモンスター1体をもう一度召喚する事ができる！私は『極星霊リョースアールヴ』を召喚ッ！！」

【極星霊リョースアールヴ】
星４／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１２００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する事ができる。選択したモンスターのレベル以下の「極星」と名のついたモンスター1体を手札から特殊召喚する。

ラドルフのフィールドに『極神皇トール』の他に、2体の【極星霊】が召喚された。

「『極星霊リョースアールヴ』の効果発動ッ！！　選択した自分フィールド上のモンスターのレベル以下の【極星】モンスターを、手札から特殊召喚する！私が選択するカードは『極神皇トール』ッ！！」

『極神皇トール』のレベルは１０。
つまりラドルフは、手札からレベル１０以下の【極星】モンスターを特殊召喚する事ができるのだ。
ラドルフは最後の１枚の手札を翳し
「私はレベル５のチューナーモンスター『極星霊デックアールヴ』を特殊召喚ッ！！」

【極星霊デックアールヴ】
星５／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「極星」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える事ができる。

「【極星】のチューナー…まさかッ！？」

ラドルフのフィールドに計４体のモンスターが立ち並ぶ。
左目の輝きを更に増しながら、ラドルフは己のプレイを開始する。

「ククク…魅せてやろうッ！！　２体目の神をッ！！　レベル１の『極星霊ドヴェルグ』と、レベル４の『極星霊リョースアールヴ』に、レベル５『極星霊デックアールヴ』をチューニングッ！！」

ヒュンッヒュンヒュンッ！！

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

「星界より生まれし気まぐれなる神よ！！　絶対の力を我らに示し世界を笑え！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！　光臨せよ、『極神皇ロキ』！！」

【極神皇ロキ】
星１０／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　３３００
ＤＥＦ　３０００
［シンクロ／効果］
「極星霊」と名のついたチューナー　＋　チューナー以外のモンスター２体以上
１ターンに１度、自分のバトルフェイズ中に相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する事ができる。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星霊」と名のついたチューナー１体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する罠カード１枚を選択して手札に加える事ができる。

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

ラドルフのフィールドに立ち並ぶ２体の神。

『極神皇トール』。

そして、『極神皇ロキ』。

2体の神を前に、西条亨はギッと奥歯を噛み締め、気を引き締めた。

「フハハハハッ！！　どうだ西条よ！　2体の神を前にした気分は！？」

「く…ッ！！」

「フン…臆して言葉すら出ぬか…まぁ良い、バトルフェイズに入るッ！！」

バトルフェイズに突入したラドルフ。

まず最初に動いたのは『極神皇ロキ』だった。

「『極神皇ロキ』で、西条亨のセットモンスターに攻撃！！　ヴァニティバレッド！！」

ズズズズ…ズゴゥッ！！

『極神皇ロキ』の指先から強烈な魔弾が発射される。

「ッやらせない！！　リバースカード、オープン！！『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！！」

【聖なるバリアー ミラーフォース ー】
［罠カード］
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「この効果で、貴様の神を全て破壊するッ！！」

「よしッ！！　ナイスだ西条ちゃん！！」

ミラーフォースの発動によりＯＣＧ研究会から喜びの声があがる。

しかし、

「無駄だ…ッ！！　『極神皇ロキ』の効果発動！私のバトルフェイズ中に相手が魔法・罠カードを発動した時、その発動を無効にし破壊する！」

「なにッ！？」

バリィッ！！

亨の発動したミラーフォースは砕け散り、『極神皇ロキ』の攻撃が亨の守備表示モンスターを破壊した。

ズドンッ！！

「くッ…戦闘破壊された『メタモルポット』のリバース効果、発動！」

【メタモルポット】
星２／地属性／岩石族
ＡＴＫ　７００
ＤＥＦ　６００
［効果］
リバース：自分と相手の手札を全て捨てる。その後、お互いはそれ

ぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

「互いの手札を全て捨て、デッキからカードを5枚ドローする！」

それぞれの手札を捨て、カードを5枚ドローした亨にラドルフ。

「フッ、貴様の手札を満たす為に用意したモンスターみたいだが、おかげで私の手札も満たされた！バトルフェイズを続行させる！『極神皇トール』よ！！　西条へダイレクトアタックッ！！」

がら空きとなった西条亨のフィールドに、『極神皇トール』が襲いかかる。

「喰らえッ！！　サンダー・パイルッ！！」

「そうはさせないッ！！　墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動ッ！！」

【ネクロ・ガードナー】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　６００
ＤＥＦ　１３００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

ガキィィッッ！！

『ネクロ・ガードナー』の幻影が現れ、『極神皇トール』の一撃をガードした。

「墓地の『ネクロ・ガードナー』を除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする！！」

「そうか…『メタモルポット』の効果で、手札から墓地に…ッ！！」

何とかダイレクトアタックを防ぐ事に成功した西条亨を見て、成瀬はホッと一息ついた。

「良かった…私の託した一枚が、役に立ちました！」

「フッ、たった一度の攻撃を防いだだけで、いい気になるなよ西条？　私はカードを1枚セットし、ターンを終了する！」

※

「いくぜ、俺のターンッ！！」

【ラドルフ】
ＬＰ／　８０００
手札４枚

［フィールド］
『極神皇トール』
『極神皇ロキ』

［魔法・罠］
伏せカード３枚

【西条亨】
ＬＰ／７５００
手札６枚

迎えた西条亨のターン。
デッキからカードをドローした亨は、早速ドローしたカードを発動した。

「手札より魔法カード『ハリケーン』を発動！フィールド上の魔法・罠を全て手札に戻す！」

【ハリケーン】
［魔法カード］
フィールド上の魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「くッ！？」

『ハリケーン』が炸裂し、ラドルフのフィールドの伏せカードは全て手札に戻された。

更に亨は手札のカードに手を伸ばし

「そして俺はこのカードを発動するッ！！『手札抹殺』！！」

「なッ…なにィッ！？」

【手札抹殺】
［魔法カード］
お互いの手札を全て捨て、それぞれ自分のデッキから捨てた枚数分のカードをドローする。

「このカードは互いの手札を全て捨て、その後、捨てた枚数分のカードをドローする！」

「小癪な真似を…ッ！！」

『手札抹殺』の効果によりラドルフは7枚のカードを。

そして亨は4枚のカードを捨て、デッキからドローした。

「『手札抹殺』によって墓地へ送られた『ダンディライオン』の効果発動！フィールドに『綿毛トークン』2体を、守備表示で特殊召喚する！」

【ダンディライオン】
星3／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星1・攻／守0）2体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

ポム、ポムッ！！

西条亨のフィールドに2体の『綿毛トークン』が出現した。

更に

「そして同じく、『手札抹殺』の効果で墓地に存在する『グローアップ・バルブ』の効果発動！」

【グローアップ・バルブ】
星１／地属性／植物族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１００
［チューナー・効果］
自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

「デッキトップのカード１枚を墓地へ送り、このカードを墓地から特殊召喚する！」

亨のデッキの一番上のカードが墓地へ送られ、フィールドに攻撃表示で『グローアップ・バルブ』が特殊召喚された。

「レベル１の『綿毛トークン』１体に、レベル１『グローアップ・バルブ』をチューニングッ！！」

西条亨の２体のモンスターのレベルが１つになる。

「集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！」

カッッ！！

「シンクロ召喚、希望の力！　シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』！」

【フォーミュラ・シンクロン】
星２／光属性／機械族
ＡＴＫ　２００
ＤＥＦ　１５００
［シンクロ／チューナー・効果］
チューナー　＋　チューナー以外のモンスター１体

このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを1枚ドローする事ができる。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

「フォーミュラ…フッ、そんな雑魚モンスターで、私の神を倒せる筈はない」

西条亨のフィールドに現れし『フォーミュラ・シンクロン』。
亨は早速、シンクロ召喚に成功した『フォーミュラ・シンクロン』の効果を発動した。

「このカードがシンクロ召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする！」

デッキからカードをドローした亨は、そのカードを見て「良し！」と呟く。

「チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚ッ！！」

【デブリ・ドラゴン】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　２０００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とした場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

「『デブリ・ドラゴン』の効果発動ッ！！　召喚に成功した時、墓地から攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！！　蘇れ、『ダンディライオン』！！」

西条亨のフィールドに『綿毛トークン』、『フォーミュラ・シンクロン』、『デブリ・ドラゴン』、『ダンディライオン』の計４体が並ぶ。

「レベル１の『綿毛トークン』と、レベル３の『ダンディライオン』に、レベル４『デブリ・ドラゴン』をチューニングッ！！」

西条亨のモンスターが１つになり、彼のエースモンスターの内、１体が飛翔する。

「集いし願いが、新たに輝く星となる…光指す道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』ッ！！」

【スターダスト・ドラゴン】
星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
チューナー　＋　チューナー以外のモンスター１体以上

「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「スターダスト…しかし神の前では力不足が否めないな？」

「まだだッ！！　レベル８の『スターダスト・ドラゴン』に、レベル２『フォーミュラ・シンクロン』をチューニングッ！！」

「シンクロモンスター同士の…シンクロ召喚…だと？」

「行くぞ…アクセルシンクロッ！！」

西条亨の『スターダスト・ドラゴン』、そして『フォーミュラ・シンクロン』が眩い光に包まれる。

「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く…光さす道となれ！！」

カッッ！！

「アクセルシンクロ！！　生来せよ、『シューティング・スター・ドラゴン』！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】
星１０／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３３００
ＤＥＦ　２５００
［シンクロ／効果］
シンクロモンスターのチューナー１体＋「スターダスト・ドラゴン」以下の効果をそれぞれ１ターンに１度ずつ使用できる。
●自分のデッキの上からカードを５枚めくる。このターンこのカードはその中のチューナーの数まで１度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。
●フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。
●相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

西条亨のフィールドに生来せし『シューティング・スター・ドラゴ

ン』。

そのモンスターの登場に若干の驚きを見せたラドルフだったが、その攻撃力を確認して失笑する。

「攻撃力３３００…フッ、ようやく私の神『極神皇ロキ』と並んだか…。しかし」

「ラドルフ…さっきから神、神、神と五月蝿いぜ？」

「…なに？」

西条亨の発言に対し、思わず眉をピクリと釣り上げて反応するラドルフ。

そんなラドルフに対して、亨は堂々と言い放った。

「確かにお前の【三極神】は強力だ…だが俺はこのターンで、お前の神２体を倒す！！」

「ッ！？」

ラドルフは西条亨の言い放った言葉に目を大きく見開かせた。

「やれるものなら…やってみろ…！！」

「手札より『ミラクル・フュージョン』を発動！！」

【ミラクル・フュージョン】
［魔法カード］
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「このカードはフィールドか墓地から、決められたモンスターをゲームから除外し、そのモンスターを融合する！結締、お前の力を借りるぜ！！」

「おうッ！！」

亨は墓地から2枚のカードを取り出し

「墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』と、『バスター・ブレイダー』をゲームから除外！！　騎士の力を解放せよ！！！」

カッッ！！

「融合召喚！！　『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト』！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト】
星７／光属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１０００
［融合／効果］
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋　戦士族モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、融合素材とした「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」以外のモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは０になる。

西条亨のフィールドに騎士の力を宿したネオスが現れた。

「フッ、何を出すかと思えば…たったの攻撃力２５００程度のモンスターか」

「甘いぜ、ラドルフ！」

「俺のネオスを舐めるなよ副社長さん！！　ネオス・ナイトの攻撃力は、ネオスと融合したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする！！」

「なにッ！？」

「そう、ネオスと融合したモンスターは攻撃力２６００の『バスター・ブレイダー』！！　よってネオス・ナイトの攻撃力は、１３００ポイントアップする！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト】
ＡＴＫ　２５００　↓　３８００

「攻撃力…３８００だとッ！？」

ネオス・ナイトの攻撃力増加に驚くラドルフ。

ラドルフのフィールドには『極神皇トール』に『極神皇ロキ』の２体のみ。

西条亨のフィールドには『シューティング・スター・ドラゴン』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト』のみ。

【ラドルフ】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　７５００

西条亨は早速、バトルフェイズへと突入した。

「バトルッ！！　行け、ネオス・ナイト！！　『極神皇トール』に攻撃！！　ラス・オブ・ネオス・スラッシュ！！」

ズガァッッ！！

「ぬぅぅッ！？」

見事『極神皇トール』を両断し、破壊したネオス・ナイト。

「ネオス・ナイト！！　続けて『極神皇ロキ』に攻撃！！」

「なにッ！？　なぜもう一度攻撃を…！？」

「副社長さん、俺のネオスを舐めるなよと言った筈だぜぃ？　ネオス・ナイトは1度のバトルで、2回攻撃する事ができる！！」

「な…ッ！？」

ズガガァッッ！！

ネオス・ナイトの攻撃を受けて、ラドルフの神2体は破壊された。

これにより、ラドルフのフィールドにはモンスターは全て消え去ってしまった。

「凄ぇ…ッ！！」

「アハッ！！　亨さん、本当に相手の神を2体も倒してしまいました！」

「それにまだ、亨さんには『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃が残っている！」

拓夜達がはしゃぐ中、亨は『シューティング・スター・ドラゴン』に指示を出す。

「ラドルフ！これで貴様のフィールドはがら空きになった！『シューティング・スター・ドラゴン』の効果発動！！　デッキの上からカードを5枚めくり、その中のチューナーモンスターの数だけ、『シューティング・スター・ドラゴン』は攻撃する事ができる！！」

「なッ！？」

亨はデッキトップに指を添え、念じる。

（マジシャン・ガール…俺に力を…！！）

「まず1枚目ッ！！　チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』！！」

「ッ！？」

「2枚目ッ！！　『魔導戦士　ブレイカー』！！　3枚目ッ！！　チューナーモンスター『クイック・シンクロン』！！」

「くッ！？」

「4枚目ッ！！『調律』！！　そして5枚目ッ！！　チューナーモンスター『ＢＦ－疾風のゲイル』！！」

『ジャンク・シンクロン』
『魔導戦士　ブレイカー』
『クイック・シンクロン』
『調律』
『ＢＦ－疾風のゲイル』

チューナーモンスターは3体。

「3体のチューナーモンスターにより、『シューティング・スター・

ドラゴン』はこのターン、３回の攻撃ができる！！」

「なッ…何だとッ！？」

『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃力は３３００。

この攻撃力のダイレクトアタックが３回も決まれば、西条亨の勝利が確定する。

「行けッ『シューティング・スター・ドラゴン』！！　ラドルフにダイレクトアタック！！　スターダスト・ミラージュ！！」

「フッ、流石はＯＣＧ研究会の一人…だが、私はこの程度では倒れはせんよ！」

ラドルフはそう言うと、７枚の手札の中から１枚のカードを取り出し

「手札の『バトルフェーダー』の効果を発動する！！」

【バトルフェーダー】
星１／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　０
ＤＥＦ　０
［効果］
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

ラドルフのフィールドに『バトルフェーダー』が特殊召喚された。

「貴様の『シューティング・スター・ドラゴン』の直接攻撃宣言時、このカードを手札から特殊召喚し、貴様のバトルフェイズを終了させる！！」

「くッ！！」

ラドルフの『バトルフェーダー』により強制的にバトルフェイズを終了させられた西条亨。

このターンで決着をつけるつもりでいたのだが、目論見が崩された

からと言って気は抜けない。

「リバースカードを3枚セットし、ターンエンド！」

「そのエンドフェイズ時、貴様に破壊された『極神皇トール』に『極神皇ロキ』の効果が発動される！」

「ッ！？」

ラドルフは墓地の【極神皇】2体を手に取り

「【極神皇】が相手によって破壊され墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、【極神皇】のシンクロ召喚に必要な【極星】チューナーを墓地から除外する事で、特殊召喚する事ができる！！」

「なッ…何だとッ！？」

「私は墓地のチューナーモンスター『極星獣グルファクシ』と、『極星霊デックアールヴ』を除外し…蘇れ、『極神皇トール』！！『極神皇ロキ』！！」

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

再びラドルフのフィールドに蘇った2体の【極神皇】。
自身の効果により特殊召喚された事で、【極神皇】達はそれぞれの効果が発動する。

「【極神皇】が自身の効果で特殊召喚した時、秘められた効果が発動される！まずは『極神皇トール』の効果だ！相手ライフに８００ポイントのダメージを与える！」

「うぁッ！！」

【ラドルフ】
ＬＰ／ ８０００

【西条亨】
ＬＰ／ ７５００ → ６７００

「くッ！？」

「そして『極神皇ロキ』の効果…墓地に在る罠カード１枚を手札に加える！　私は墓地より『天罰』の罠カードを手札に加えよう」

西条亭の使った『手札抹殺』の効果で墓地に送られた『天罰』のカードを手札に加えたラドルフ。

西条亭はターンの終了を宣言した為、ラドルフのターンへと移行した。

※

「私のターンッ、ドローッ!!」

【ラドルフ】
ＬＰ／８０００
手札　８枚

［フィールド］

『極神皇トール』
『極神皇ロキ』
『バトルフェーダー』

【西条亨】
ＬＰ／　６７００
手札　０枚

［フィールド］

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト』
『シューティング・スター・ドラゴン』

［魔法・罠］
伏せカード３枚

迎えたラドルフのターン。

手札が満たされた状況で、ラドルフは左目の赤紫色の輝きを更に激しく光らせる。

「西条亨、貴様が『メタモルポット』や『手札抹殺』を使ってくれたおかげで、私の手札に最高神を召喚する為の駒が揃った！」

「ッ！！」

「今、魅せてやろう…！！　魔法カード『精神操作』を発動！！」

【精神操作】
［魔法カード］
このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

「貴様のネオス・ナイトのコントロールを頂くぞ！そして私は、チューナーモンスター『極星天ヴァルキュリア』を召喚！！」

【極星天ヴァルキュリア】
星２／光属性／天使族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　８００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にこのカード以外のカードが存在しない場合、手札の「極星」と名のついたモンスター2体をゲームから除外して発動する事ができる。自分フィールド上に「エインヘリアル・トークン」（戦士族・地・星４・攻／守１０００）２体を守備表示で特殊召喚する。

「また【極星】のチューナーを…まさかッ！？」

「フハハハハッ！！　これで条件は全てクリアした！！　レベル1の『バトルフェーダー』と、レベル7の『E・HERO　ネオス・ナイト』に、レベル2『極星天ヴァルキュリア』をチューニング！！」

ヒュン、ヒュン…ッ！！

ラドルフのモンスターの星が暗雲に呑み込まれ、そこから一本の眩く巨大な光の柱が降り注ぐ。

「北辰の空に在りて、全知全能を司る王よ！今こそ星界の神々を束ね、その威光を示せ！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！！　天地神明を統べよ！！　最高神、『極神聖帝オーディン』！！」

【極神聖帝オーディン】
星１０／光属性／天使族
ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　３５００
［シンクロ／効果］
「極星天」と名のついたチューナー　＋　チューナー以外のモンスター２体以上
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。このカードはエンドフェイズ時まで魔法・罠カードの効果を受けない。また、フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時に自分の墓地に存在する「極星天」と名のついたチューナー１体をゲームから除外する事で、このカードを墓地から特殊召喚する。この効果で特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

『極神皇トール』

『極神皇ロキ』

そして『極神聖帝オーディン』。

遂に3体の【三極神】がラドルフのフィールドに出揃った。

「フハハハハッ！！　圧巻だろう？　貴様は私の神々によって消えるのだよ！！」

「くッ！？」

（この威圧感…あの時、トリティニードームでマジシャン・ガールと感じた力と同じ…ッ！！）

亨の背中から嫌な汗が滝の様に流れ落ちる。

3体の【三極神】を前に西条亨だけでなく、ＯＣＧ研究会だけでなく、テレビで中継を観ている者達も、思わずその姿に言葉を無くしていた。

「先ずは『極神聖帝オーディン』の効果を発動する！エンドフェイズ時まで、魔法・罠カードの効果を受けない！　インフルエンス・オブ・ルーン！」

『極神聖帝オーディン』の周りに光のバリアが張られる。

「そして『極神皇トール』の効果発動!!　相手フィールド上のモンスターの効果を無効にする!!」

「なにッ!?」

「これで準備は整った…バトルフェイズに入らせてもらうぞ!!」

ドドドドド…ッ!!

「『極神聖帝オーディン』よ!!　西条の『シューティング・スター・ドラゴン』に攻撃ッ!!　ヘヴンズジャッジメント!!」

ズガガァッ!!

「グぅッ!?　『シューティング・スター・ドラゴン』ッ!!」

【ラドルフ】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　６７００　→　６０００

『シューティング・スター・ドラゴン』を破壊された西条亨のフィールドには、壁となるモンスターは居なかった。

ラドルフのフィールドに攻撃力が３０００を上回る『極神皇トール』に『極神皇ロキ』の２体の攻撃が残されている。

残りライフが６０００の亨がこれを受ければ、ＯＣＧ研究会の敗北となってしまう。

「続けッ！！　『極神皇ロキ』よ！！　西条にダイレクトアタック！！　ヴァニティバレッド！！」

「そうはさせない！！　リバースカード、オープン！！　速攻魔法『スケープ・ゴート』を発動！！」

【スケープ・ゴート】
［速攻魔法］

このカードを発動する場合、自分は召喚・特殊召喚・反転召喚する事はできない。自分フィールド上に「羊トークン」（獣族・地・星１・攻／守０）４体を守備表示で特殊召喚する。このトークンはアドバンス召喚のためにはリリースできない。

（恐らく奴はこのカードの発動に対して必ず『極神皇ロキ』の効果を使ってくる！！）

「無駄だッ！！　『極神皇ロキ』の効果を発動！！　私のバトルフェイズ中に発動する魔法・罠カードの発動を無効にし、破壊する！！」

（やはり…だが、これで…ッ！！）

バキィッ！！

西条亨が発動した『スケープ・ゴート』は破壊され、『極神皇ロキ』のダイレクトアタックが炸裂した。

「ヴァニティバレッド！！」

バリバリバリッ！！

「ゥ゛ア゛ア゛ア゛ア゛ッッ！！！！」

「と、亨さん！！」

【ラドルフ】
ＬＰ／８０００

【西条亨】
ＬＰ／６０００→２７００

神の攻撃は現実のものとなる。

西条亨はラドルフの神『極神皇ロキ』のダイレクトアタックを受け、体中から黒い煙をあげながら膝をついた。

「ぐゥッ…ぅぁ…ッ！！」

「これで終わりだ…西条亨！！　神の魔鎚によって死ぬが良い！！
『極神皇トール』の攻撃ッ！！　サンダー・パイルッ！！」

ブォンッ！！

『極神皇トール』が手にした魔鎚、ミョルニルを大きく振り上げる。

「西条ちゃん！？」

「西条ォオ！！」

「亨さんッ！！」

「危ないです！！」

「ッ！！」

その時、一人の少女が膝をつく西条亨の下へ駆け出しだ。

「亨さんッ！！　しっかりしてッ！！」

「ぅ…」

（ま…マジシャン…ガール…？）

亨の霞む視界が徐々に晴れると、そこに居た少女に気がついた。

「ッ！？　か、烏丸さん…！？」

「シャキッとしなさいよ！！」

一瞬、マジシャン・ガールと葉月が重なって見えてしまったらしい。

気がつくと自分に向けて、ラドルフが『極神皇トール』で攻撃宣言をしてきた。

『極神皇トール』の振り上げた魔鎚が、勢い良く自分に向けて振り降ろされる。

「…この時を待っていた…！！」

「ッ！？」

「厄介だったのが『極神皇ロキ』の効果だ…だが、ロキの効果は１ターンに１度…もう『スケープ・ゴート』に効果を発動した為に、

このカードは防げばしない！！　リバースカード、オープン！！
罠カード『次元幽閉』を発動！！」

【次元幽閉】
［罠カード］
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。そのモンスター1体をゲームから除外する。

「この効果により貴様の『極神皇トール』を、ゲームから除外する！！」

「なッ！？　私の神を…ッ！！」

ズズズズズ…ッ！！

『次元幽閉』が炸裂し、ラドルフの神が一角『極神皇トール』はゲームから除外された。

「ふぅ…全く、ヒヤヒヤさせやがるぜぃ」

「ぬぬぬ…ッ！！　美少女に駆け寄って貰えるとは…おのれ西条ッ！！」

「良しッ！！　まずは神1体を攻略した！！」

「私が託した『次元幽閉』が、役に立ちました！！」

『極神皇トール』の除外に喜ぶＯＣＧ研究会。

それに対してラドルフは、憤りを露わにしながら

「よくも…私の神を…ッ！！　伏せカードを3枚セット！！　次のターンで葬ってやる！！　ターン終了だ！！」

※

自宅のテレビでデュエルを観ていた結城雅一の表情は険しかった。

遊戯王のルールが分からないからではない。

自分の観ていた番組が中継され、デュエルが放送されたからでもない。

問題は画面に移る2人の人物の姿だ。

西条亨に烏丸葉月。

「…何でだよ…ッ」

自分には分からない。

何故、葉月が西条亨と一緒に居るのかが。

自分からすれば、このデュエルの勝ち負けで会社が潰れようが存続しようが、どうでも良かった。

西条亨が膝をつき、そこに必死になって葉月が駆け寄った姿を観て、結城は胸が苦しくなった。

同時に自分の中に、黒い靄が溢れてくるのを感じる。

「アイツさえ居なければ…！！」

そう、アイツさえ

西条亨さえ居なければ、自分は葉月ともっと沢山の時間を過ごせる筈だ。

なら、負ければ良いではないか。

このデュエルに西条亨が負ければ、トリティニーグループはカード販売を中止し、この西条亨が所属するＯＣＧ研究会を解体すると言っていたではないか。

このデュエルで西条亨が負ければ…。

「…負けちまえ、お前なんか…」

ラドルフ　ＶＳ　西条亨　（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の西条亨のデッキは少し変わった仕様になりました。

今までに登場した仲間のカードを使い、更にはその派生カードを使用するといった、まさに仲間と一緒に戦うという意味で書かせて頂きました。

対するラドルフは、神さまデッキです。

どれも一癖のあるシンクロモンスターですが、基礎ステータスが高いので相手からすれば脅威です。

漫画やアニメは、映像や声、そして何よりキャラクターや描写の動きがある為に見ていて楽しめますが、小説はそうはいきません。

文章を読んで、そこから頭の中にその時の描写を想像しながら楽しむものです。

僕の文章表現能力はまだまだ乏しいので、なかなか上手く各描写が読み手の皆様に伝わらないかもしれませんが、ご了承願います。

今回の話を読んで思った事、又、こうした方が良いのでは?というご意見がございましたら、ドシドシ書いて下さい。

皆様の沢山のご意見、ご要望をお待ちしております。

それでは今日はこの辺りで筆を置かせて貰います。

失礼しました。

未来への一撃（前書き）

無事、筆記試験が終了しました。

まだ合否の通知は届いておりませんが、なにはともあれ一件落着。

早速、更新していきたいと思います。

大変長らくお待たせしました。

未来への一撃

※

トリティニーグループ副社長のラドルフ・ルベナンスは、北欧神話の伝承や遺跡を調べる為に、ノルウェーやスウェーデン、デンマークやアイスランドを巡っていた。

トリティニーグループは今でこそカード開発事業により成功を納めてきたが、そのカード開発を行うキッカケとなったのは、ある遺跡から発見された3枚のカードからだった。

俗に言う【三幻神】のカードである。

トリティニーグループは当初、遺跡発掘等の考古学系の会社であった。

カード開発事業に成功した今も、トリティニーグループは遺跡調査に力を入れてきた。

三幻神のカードを発見できたように、また新たな発見があるかもしれないからだ。

ラドルフは従者のアンドレーと一緒に、ある遺跡内部に居た。

地下に通じる階段を降りていくにつれ、暗くなる視界を松明の灯りが照らす。

なかなか火が消えない事から、案外通気性が良い造りになっているようだ。

2人が暫く進むと、広く開けた空間に出た。

部屋の中央には台座があり、四隅の壁には神話か何かをモチーフにした彫刻が彫られている。

「ここは…？」

「ラドルフ様、ご覧下さい！中央の台座に、何かが…？」

「む…！？」

二人が確認すると、そこには六枚のカードが安置されていた。

「ラドルフ様…これは？」

「…間違いない、あの時と同じだ…！！」

ラドルフの脳裏に蘇るのは、初めて三幻神のカードを発見した時の事だ。

あの時は自分と早乙女社長の二人だったが、今はそんな事はどうでも良かった。

遺跡を巡る事で、こうして新たな発見ができた。

ラドルフは純粋に、その事が嬉しかった。

「やはり、三幻神のカードだけでなく…世界にはまだ、我々が知らないカードがこうして眠っているのかも知れないな」

「やりましたな、ラドルフ様！」

「ああ、早速この事を社長に報告しよう！　我々は…ッ！？」

ラドルフが言いかけると同時、台座に安置されていた六枚の内、三枚のカードからどす黒いオーラが溢れ出した。

ドドドドド…ッ！！

「なッ！？」

「い、一体…何が？」

どす黒いオーラを放つ三枚のカードが宙に浮かぶ。

ラドルフ達二人は、その怪奇現象にただ唖然と立ち尽くしていた。

するとラドルフの頭の中に、誰かの声が流れ込んできた。

『待ちわびたぞ、私達の器となる者を…』

「ッ！？　何だ…どこから！？」

突然の事で動揺するラドルフ達は、自分達に話しかけてくる声に戸惑い一歩、二歩と後ずさる。

すると、宙に浮かぶ三枚のカードから溢れる黒いオーラが無数の触手となり、二人の体を逃がすまいと締め付けた。

「ヒッ！？」

「コレは…ッ！？　ぐッ！？　体が…動けない！！」

『逃がしはしない…ようやく手に入れた器だ。繋がった事で感じるぞ、貴様の中の闇が』

頭の中に響く声にハッとなるラドルフ。

まさか、いや、しかし…。

ラドルフは信じられなかった。

もしかすると今、頭の中に響く声の主は、目の前のカードから発せられているかもしれないのだ。

「まさかッ…そんな非科学的な事が…ッ！？」

『気に入ったぞ、貴様の闇が。私達が貴様に力をやろう。その力で、貴様が心の奥底で憎む社長とやらを消すが良い…だがそれとは別に、私達の目的を果たす為に、貴様の体を使わせてもらうぞ』

ズズズズズ…ッ！！

「うあああああああ…ッ！！」

黒いオーラがラドルフやアンドレーの中に流れ込む。
するとラドルフは自分の中に、ある違和感を覚えた。
まるで自分の人格の中に、別の誰かが存在しているみたいな。

（何…だ…この、感じは…ッ！？）

『フハハハハハッ！！これで私と貴様は完全にリンクした！貴様が好き勝手せぬ様、私の部下から監視を付けさせて貰うぞ？』

薄れゆく意識の中、隣には既に倒れている従者のアンドレーの姿が。
そしてふと、前を向くと、そこには何時の間に立っていたのか、紅く長い髪の美女が立っていた。

（だ…駄目だ…私の意識が…呑み込まれる…）

『ツィスカよ、聞いての通りだ。この器が私達の新たな体だ…』

「ハッ、おめでとうございます…邪神アバター様」

『フハハハハッ！！　始まるぞ、私達の復讐が！！　その時を楽しみにしているが良い、西条ォッ！！』

※

【ラドルフ】
ＬＰ／８０００

【西条亨】
ＬＰ／２７００

トリティニータワー頂上にて繰り広げられるラドルフと西条亨のデュエル。

現在、西条亨のターンに移行した所である。

状況は亨にとって、かなり分が悪い状況だった。

現在、自分は手札は１枚もなく、フィールドにはモンスターもいない。

１枚のリバースカードが伏せられているだけだった。

「どうした西条？貴様のターンだぞ？」

対するラドルフのフィールドと亨のフィールドでは、まるで天と地程のアドバンテージの差があった。

［モンスター］

『極神聖帝オーディン』

『極神皇ロキ』

［魔法・罠］

伏せカード　×３

この圧倒的状況差に「くッ！？」と、歯を食いしばる亨だったが、その眼は諦めていなかった。

このデュエルで負けてしまったら、トリティニーグループの命運だけでなく、自分に期待してくれる多くのデュエリスト達の未来までもが閉ざされてしまう。

「俺はまだ諦めない！俺のターンッ！！」

デッキからカードをドローした亨は、そのカードを確認する。

（『沼地の魔神王』のカード…！！）

『沼地の魔神王』を引き当てた亨だったが、彼の手札はその1枚のみ。

このままでは意味がない。

しかし、彼の場には1枚の伏せカードがあった。

亨はそのカードを手に取り

「烏丸さん！今度は君のカードを借りるぞ！」

「ええ！」

「リバースカード、オープンッ！！『活路への希望』！！」

【活路への希望】
［罠カード］
自分のライフポイントが相手より１０００ポイント以上少ない場合、１０００ライフポイントを払って発動する事ができる。お互いのライフポイントの差２０００ポイントにつき、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「このカードは、俺のライフが相手より１０００ポイント以上少ない場合に発動できる！ライフを１０００払う事で、お互いのライフ差２０００ポイントにつき、デッキからカードを1枚ドローする！」

【ラドルフ】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　２７００　→　１７００

「貴様とのライフ差は６３００！！　よって俺は、デッキからカードを3枚ドローッ！！」

3枚のドローで手札を強化させた亨は、更にその中からカードを発動させていく。

「更に、手札より『貪欲な壺』を発動！！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「墓地のモンスターカードを5枚デッキに戻し、カードを2枚ドローッ！！」

（※デッキに戻したカード）

『シューティング・スター・ドラゴン』
『フォーミュラ・シンクロン』
『メタモルポット』
『ダンディライオン』
『デブリ・ドラゴン』

更にデッキからカードを2枚ドローした亨は、『フッ』と口元に笑みを浮かべる。

「行くぜラドルフ！！　手札の『沼地の魔神王』のモンスター効果、発動！！」

【沼地の魔神王】
星３／水属性／水族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１１００
［効果］
このカードを融合素材モンスター１体の代わりにする事ができる。その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。また、このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから「融合」魔法カードを手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

「このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから『融合』を手札に加える！」

デッキから『融合』の魔法カードを手札に加えた亨。

そしてラドルフの場に伏せられた3枚のリバースカードに目を向ける。

（奴は前のターン、『極神皇ロキ』の効果で『天罰』のカードを手札に加えていた…恐らく奴のあの3枚の伏せカードの中に、『天罰』が伏せられているに違いない…『沼地の魔神王』の効果に発動されなくて、助かったぜ）

内心でホッと一息つく西条亨。

そして亨は5枚の手札の中から1枚のカードを掴み

（すまない…お前には『天罰』の囮になってもらうぞ）

「チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚ッ！！」

【デブリ・ドラゴン】
星4／風属性／ドラゴン族

ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　２０００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とした場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

西条亨のフィールドに『デブリ・ドラゴン』が再び召喚された。

「『デブリ・ドラゴン』の効果発動!!　召喚に成功した時、墓地の攻撃力５００以下のモンスターを、攻撃表示で特殊召喚する！来いッ『沼地の魔神王』!!」

「無駄だ西条ッ!!　私は貴様の『デブリ・ドラゴン』の効果にチェーンし、カウンター罠『天罰』を発動!!」

【天罰】
［カウンター罠］
手札を１枚捨てる。効果モンスターの発動と効果を無効にし、その

モンスターを破壊する。

「レベル7のシンクロ召喚には、フィールド上のカードを全て破壊する『ブラック・ローズ・ドラゴン』がいるからな…貴様の思い通りにはさせないッ！！」

ラドルフは『天罰』のコストとして、手札から『極聖天ヴァルキュリア』を墓地へと送った。

そして『天罰』の効果により、西条亨の『デブリ・ドラゴン』は破壊されてしまった。

「『ブラック・ローズ・ドラゴン』が貴様の逆転の一手だったのであろうが、私には通用しない！」

「…フッ、ソイツはどうかな？」

「ッ！？」

亨の不敵な笑みにドクンッ！！と、ラドルフの心臓が跳ね上がる。

「お前が『天罰』のカードを使う事は読めていた…実際、俺がお前の立場だったとしてもそうしていただろう…だが、おかげでこのターン、俺は遠慮なくこのカードを使う事ができる！」

「くッ！？　私を…弄んだのかッ！？　状況的に私が圧倒している中で…ッ！！」

「フッ、行くぜ！！　手札の魔法カード『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』と『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を融合！！」

「亨さん！それって…ッ！？」

亨の融合するカードを聞き、思わず拓夜は喜びの余り身を乗り出した。

「ああ、拓夜くん！君の最強モンスターを使わせてもらうぜ！！融合召喚ッ！！『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［融合／効果］
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

西条亨のフィールドに、拓夜の最強モンスター『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が守備表示で特殊召喚された。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』ッ！？　確か…ソイツの効果は…ッ！！」

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動！！　このターンのバトルフェイズを放棄する代わりに、相手モンスター１体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！！」

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が右手の巨大な大剣を構え、『極神皇ロキ』に向けて突き立てる。

「この力で、貴様の『極神皇ロキ』を破壊するッ！！　インビンシブル・Ｄッ！！」

ズゴゥッッッ！！

「ぐあぁっ！？」

【ラドルフ】

ＬＰ／　８０００　→　４７００

【西条亨】
ＬＰ／　１７００

「やったぜ！！　俺の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が、神を倒した！！」

『極神皇ロキ』が破壊され、ライフに大ダメージを受けたラドルフ。
その目つきは鋭く、険しく、西条亨をギッと睨みつける。

「おのれッ…よくも私の神を、一度ならず二度までも…ッ！！」

「リバースカードを１枚セットし、ターンエンド！」

※

【ラドルフ】

ＬＰ／　４７００

【西条亨】

ＬＰ／　１７００

迎えたラドルフのターン。

彼のフィールドには攻撃力４０００の『極神聖帝オーディン』が光臨していた。

その背後には、２枚の伏せカードが。

対する西条亨のフィールドには、守備表示で『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が存在し、１枚の伏せカード。

「私のターンッ！！　ドローッ！！」

デッキから力任せにカードをドローしたラドルフは、ギッと奥歯を噛み締めた。

（何故だ…何故、私がこうも不安に感じるのだ…？）

自分のフィールドには攻撃力４０００の『極神聖帝オーディン』がある。

そして西条亨のライフは残り１７００。

手札にモンスターはなく、ドローでモンスターを引き当てる事ができなかったが、自分の場に伏せてあるカードを使えばダイレクトアタックを決める事ができ、勝利が確定するのだが…。

だが、対峙する西条亨の眼からは、明らかに自分を圧す何かがあった。

（くッ…何を恐れる必要がある、私には神がついている！！）

頭を振りながら自分に言い聞かせたラドルフは、自分のプレイを開始した。

「バトルフェイズに入るッ！！　『極神聖帝オーディン』よ！！運命に仇なす竜戦士『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に攻撃せよッ！！　ヘヴンズジャッジメント！！」

バリバリバリバリッ！！

ズゴゥッッ！！

『極神聖帝オーディン』の攻撃により戦闘破壊された『Ｄｒａｇｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』。

これで西条亨のフィールドにモンスターはなくなり、伏せカード１枚のみとなった。

「西条、このターンで貴様を確実に葬り去ってやる！！　リバースカードを発動！！　『ミョルニルの魔鎚』！！」

【ミョルニルの魔鎚】

［罠カード］

自分フィールド上に表側表示で存在する「極神」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。このターン、選択したモンスターは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。

「『ミョルニルの魔鎚』…？」

「このカードは【極神】に対してのみ発動する事ができる！！　選択するのはもちろん、『極神聖帝オーディン』！！　このターン、オーディンは一度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる！！」

「ッ！？」

一度目の攻撃で『極神聖帝オーディン』は『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を攻撃した。

そして二度目の今、『極神聖帝オーディン』は西条亨に向けて、手にした杖を構える。

「死ねェエ西条ォオッ！！　ヘヴンズジャッジメントッ！！」

「甘いぜラドルフ！！　リバースカード、オープンッ！！　罠発動！！　『奇跡の残照』！！」

【奇跡の残照】

［罠カード］

このターン、戦闘によって破壊され自分の墓地に送られたモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召

喚する。

「このカードは、このターンに戦闘破壊されたモンスター1体を復活させる！蘇れッ『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

「なにィイッ！？」

守備表示で特殊召喚された『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に驚くラドルフ。

「くッ！？　何度蘇生しようが、我が神の力には及ばんわ！！　攻撃だ、『極神聖帝オーディン』！！」

再びオーディンの攻撃が炸裂し、破壊された『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』。

ラドルフはこのターンで決着をつける事が出来なかった為か、険しい表情のまま

「私のターンは終了だッ！！」

※

トリティニータワー内部の頂上へと続くエレベーターが上へと進む。

その中には卑しい笑みを浮かべる一人の女性、ツィスカ・ベルセリオスが立っていた。

彼女の隣にはぐったりと倒れ込み、意識を失っている一人の男、ラドルフの従者であるアンドレーの姿があった。

エレベーターはゆっくりと頂上に向かい登っていく。

ツィスカは手にした携帯端末で、頂上で行われているデュエルを観ていた。

「ラドルフったら、神のカードを使ってもこの程度の実力しかないの？」

彼女の中でラドルフに対する評価が改められる。

邪神の言いつけで彼と行動を共にしていたが、ラドルフが勝たねば邪神の思惑通りに事が運ばない。

下手をすれば自分にそのとばっちりが来る。

「ま、念には念を…ね」

ツィスカの着ているスーツの上着、その胸の内ポケットに入っている三枚のカード。

その三枚のカードから凄まじい闇のエネルギーが自分に流れ込んでくる。

（ぁん…邪神様…もう少しの辛抱ですわ）

チン…

エレベーターが頂上に着き、その扉が開かれる。

そしてツィスカの目の前で、ラドルフと西条亨のデュエルの決着が着こうとしていた。

※

「俺のターン、ドローッ！！」

【ラドルフ】
ＬＰ／４７００

【西条亨】
ＬＰ／１７００

西条亨のターンが始まり、デッキからカードをドローした。

西条亨のフィールドにカードは１枚もなく、手札もドローしたカード１枚のみ。

対するラドルフのフィールドには『極神聖帝オーディン』と、１枚の伏せカードが。

ラドルフは険しい目つきで、西条亨を睨み付けていた。

彼の中に巣くうほんの少しの不安という闇。

それが前のターンから徐々に大きくなって、自分の平常心を蝕んでいく。

（何故だ…なぜ、私は恐れているのだ…ッ！？）

自分の場には神が、『極神聖帝オーディン』がいるのだ。

仮に破壊されても墓地には『極星天ヴァルキュリア』が2体存在している為、後2回の蘇生が可能である。

何より除去された後の相手からの攻撃を防ぐ為に、自分の場には『聖なるバリアーミラーフォース－』が用意してある。

抜かりはない筈なのだ。

なのに何故か、ラドルフはいつの間にか西条亨に対して恐怖していた。

（恐れているとでも言うのか…西条亨に？　神を従えるこの私がッ！！）

『違う、それは間違っているぞ、ラドルフ…』

（ッ！？）

ラドルフの頭の中に、いつしか流れ込んできた闇の声が聞こえる。

『思い上がるなよ？　貴様如きが神を扱えるのは、私の力が在ってこそだ…そぅら、始まるぞ…西条亨の攻撃が』

「ヒッ！！」

ラドルフの様子に気付く事なく、西条亨はドローフェイズからスタンバイフェイズへと移行し

「墓地の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果を発動する！！
墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』をゲームから除外し、『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』を墓地より特殊召喚する！！」

「なッ！？　なんだとッ！？」

ドドドド…ッ！！

墓地より現れし拓夜の最強モンスター。

ラドルフの体中から夥しい程の汗がゲリラ豪雨の如く流れ出す。

（れ、冷静になれ…仮に奴の効果が発動したとしても、私にくるダメージは４０００…となれば、私のライフはまだ７００も残っている！！）

【ラドルフ】
ＬＰ／　４７００

【西条亨】
ＬＰ／　１７００

（７００ものこれば、まだ私にも勝機はある…！！）

先を読むラドルフ。

しかし次の亨が放った一言に、ラドルフの思惑は全て粉々に打ち砕かれた。

「ラドルフ、覚悟は良いか？」

「なッ…貴様なんぞに…ッ！！」

西条亨はドローしたカードを翳す。

そのカードを見てラドルフは、ギョッと大きく見開いた。

「装備魔法、『団結の力』を発動！！」

【団結の力】

［装備魔法］

自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体につき、装備モンスターの攻撃力・守備力は８００ポイントアップする。

「このカードは装備したモンスターの攻撃力を８００ポイントアップする！！　装備対象は、貴様の神！！　『極神聖帝オーディン』！！」

「なにッ！？」

『極神聖帝オーディン』
ＡＴＫ　４０００　→　４８００

攻撃力が４８００に上昇したオーディン。

そんなオーディンに向かい、西条亨のフィールドの『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』は大剣を構える。

「ま…まさか…そんな…ッ！！」

ラドルフは歯をガチガチと震わせながら一歩、また一歩と後退る。

もし、ここで『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果が『極神聖帝

オーディン』に炸裂すれば、自分は４８００ものダメージを受け、敗北してしまう。

自分の場に伏せられた罠カードも、相手が攻撃してこなければ意味がないものばかりだ。

（有り得ん…状況は【三極神】を召喚した私が有利だった筈…何故だ…何故…ッ！！）

「これで終わりだ、ラドルフ！！　『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が高く飛び、右手の大剣を大きく振り上げる。

「この一撃に、全てのデュエリスト達の想いを込める！！　Ｄ－ＥＮＤの効果発動！！　『極神聖帝オーディン』を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！！」

ズガガガガッ！！！！

「グアアアアアッ！！」

【ラドルフ】
ＬＰ／４７００→０

【西条亨】
ＬＰ／１７００

自身の総称たる『極神聖帝オーディン』は破壊され、ライフを失ったラドルフ。

この瞬間、デュエリスト達の未来に可能性という名の栄光の道が切り開かれた。

※

決着。

ラドルフ対西条亨のデュエルは、仲間からの力を授かった西条亨の勝利に終わった。

これによりトリティニーグループはカード部門廃止を中断。

これまで通りの体制に戻り、デュエリスト達の未来が切り開かれた事になる。

トリティニータワー頂上にてガクリと膝をつき、虚ろな瞳で空を見上げるラドルフ。

彼の左目は通常の色に戻っており、もう彼からは精霊界の力は感じられなかった。

「やったぁあ！！」

「亨さんが、勝ちました！！」

「やったぜ西条ちゃん！！」

「ふぅん…当然の結果だ」

「亨さん…！！」

それぞれに喜び合うＯＣＧ研究会。

亨はガクリとうなだれるラドルフに歩み寄り、声をかけた。

「…ラドルフ」

「……」

「…？　ラドルフ？」

話しかけても反応がない事に不思議に思った亨は、ラドルフの肩を軽く揺らしてみる。

「ラドルフ？　おい、ラドルフ！？」

「……」

ドサッ…

「ッ！？」

その瞬間、ラドルフの体は力無く倒れた。

ラドルフからは既に生気が感じられず、唇の色が青紫色へと変色していた。

「ラドルフッ！？」

「話しかけても無駄よ」

「ッ！？」

西条亨が顔をあげると、そこには黒いスーツを着た朱髪の女性が立っていた。

ツィスカ・ベルセリオスである。

ツィスカは生気を失ったラドルフを一瞥し、つまらなさそうに口を開いた。

「所詮はこの程度の実力しかないのね。せっかく邪神様”が力を与えて下さったのに、それを全然生かしきれてないなんて…。」

「なッ…邪神…だと…ッ！？」

ツィスカの口から出た言葉に驚愕する西条亨。

彼だけでなく結締智恭や白石直也、烏丸葉月や中島も驚きの表情を

していた。

「神を扱う者が敗北した末路は…西条亨、貴方なら知ってるでしょう？」

「馬鹿なッ…邪神は俺達が…」

「倒したはず？　でも貴方なら分かるわよね？　精霊界の力を操る事ができる貴方になら、私の中に居る…邪神様の力の鼓動が」

「…ッ！！」

キッと表情を引き締める西条亨。

確かに彼には感じた。

ラドルフが操っていた力、恐らくそれはこの女によって操られていたのだろうという事も。

西条亨が険しい表情でツィスカを睨む。

そんな西条亨の表情を見て、ツィスカは含みのある笑みを浮かべながら

「フフフ…そんな身構えなくても大丈夫よ？　今はまだ、貴方達とは戦わないわ」

そう言うとツィスカは上着のポケットから小さな何かの塊を取り出し、上空に放り投げた。

一同が何かと不思議に思ったその瞬間

カッッッ！！！！
パァアンッ！！

「うッ！？」

「うわッ！？」

「きゃっ！！」

「ぐっ…スタングレネードだと！？」

鼓膜を破るような衝撃音と視界を潰す眩い閃光が、一瞬に辺りを包み込む。

一同が怯む中ツィスカはそっと、西条亨に囁いた。

「今はまだ、束の間の平穏を堪能してなさい…フフフ、じゃあね…ＯＣＧ研究会」

※

視界が戻るとそこにはツィスカの姿は無かった。

トリティニーグループ社長である早乙女に、中島は三上市の総合病院にラドルフとアンドレーを搬送し、ベッドに横たわるラドルフの姿を看ていた。

そしてしばらくして

「……ぅっ、し…社長…」

「ッ！！　気がついたか、ラドルフくん」

意識を取り戻したラドルフは辺りを見渡す。
どうやら病院の中であると理解したラドルフは、隣のベッドで今も昏睡しているアンドレーを見つめながら、震える口調で話し出した。

「…私は彼に…西条亭に負けたんですね」

「…ああ」

「…容態が回復し次第、私は約束通りに消えますよ…それよりも、なぜ貴方がこんな所に居るんです？　全てを失った私を笑いに来ましたか？」

「ラドルフッ！！　アナタッ…！！」

ラドルフの皮肉めいた発言に立ち上がる中島を、早乙女は手を翳して制止をかける。

「…笑いはしない」

「フッ、嘘でも結構…だが」

「笑いはしない！」

「ッ！？」

早乙女社長の声が病室中に響き渡る。

「経緯は不純なれど、君は最後には正々堂々と戦った！！　君は君の持てる全ての力を出して、正々堂々と西条くんと戦ったじゃないか！！　そんな…そんな君の姿勢に対し、私は決して笑いなどしない！！」

ラドルフの瞳が大きく見開かれる。

肩を小刻みに震わせ、目頭が熱くなるのを感じながら、ラドルフは口を開く。

「…社長、ッ…私は…」

「ラドルフ…私はこれからもトリティニーグループを指揮し、デュエリストの未来の発展に繋ぐ為に、また一から頑張るつもりだ…だから、君にも協力してもらいたい」

「…ッ！？」

「世間からの建て前…当然、君には副社長職は降りてもらう。だが、君には私専属の秘書となり、私を支えて貰いたい！」

早乙女の言葉に思わず言葉が詰まるラドルフ。

自分はＯＣＧ研究会とのデュエルに負けた。

その時の公約として、敗北した自分はトリティニーグループから消えるつもりでいた。

しかし、早乙女社長はそれを認めなかった。

逆に協力して欲しいと、今までクーデターを引き起こした張本人に対して申し出てきたのだ。

隣に立つ中島が何も言わない所を見ると、早乙女社長がこう言うという事をある程度分かっていたのかもしれない。

「…社長、貴方は…自分が何を言っているのか…分かっているのですか？」

「ああ」

「もし…私がその条件を呑めば、再び寝首を掛かれるやもしれない

のですよ？」

「大丈夫だ、私は君を信じている」

迷う事なくハッキリと応える早乙女社長に対し、ラドルフは呆れかえってしまった。

真っ直ぐな瞳でラドルフを見つめる早乙女社長。

ラドルフはやれやれと、降参の意味で溜め息を吐いた。

「フッ、やれやれ…ウチの社長はとんだお人好しだ…」

そう呟くラドルフの瞳からは、一筋の涙が流れ落ちた。

※

「ありがとう、皆…皆のカードのおかげで、何とか勝つ事ができた」

トリティニーグループ内部の会議室にて、ＯＣＧ研究会は集まっていた。

西条亨はそう言うと、他のメンバーにそれぞれのカードを返していく。

「ふぅん…俺のブルーアイズが先陣を切る姿は熱かったぞ、西条」

「俺のネオスをしっかり活用してくれちまって、西条ちゃんも中々ヒーローじゃん！」

「皆さんはそれぞれのエースばかり渡すものですから、おかげで私が託したサポートカードが活躍して、嬉しかったです！」

「私の託した『活路への希望』が、本当に希望に繋がったんだもの…凄く嬉しかった！」

それぞれにカードを手渡され、感想を言うメンバー。

そして最後に西条亨は、西条拓夜の前に立った。

「…亨さん」

「ありがとう、拓夜くん。君の信じるエースモンスター『Ｄｒａｇｏｏｎ　ＤｒＥＮＤ』に、本当に助けられたよ」

カードを受け取った拓夜はどこか誇らしげに、そして目一杯、喜びを露わにしながら

「俺…本当に嬉しかった！俺の託したカードでフィニッシュを飾れて、本当に…めちゃくちゃ興奮しました！！」

「ふぅん…ならば、これから打ち上げだ！！　俺達の勝利を記念して、祝賀会を開くぞ！！」

白石の案に皆が賛成し、それぞれに揚々と外へと足を運ぶ。

その途中、西条亨は立ち止まり、窓の外に見える三上市の街を眺めた。

それと同時に、デュエル後にツィスカが放った一言が脳裏をよぎる。

「…束の間の平和、か」

「亨さん、どうしたのよ?急に立ち止まったりして」

西条亨の様子が気になり、彼に寄ってくる烏丸葉月は不思議そうな表情で西条亨の顔を覗き込む。

「皆、もう行っちゃうわよ?亨さんも早くしないと!」

「あ、あぁ…」

そう言い亨の腕を引っ張る葉月の表情は、どこか嬉しそうな笑顔を作っていた。

そんな葉月の表情を見て、亨は自分の気持ちに言い聞かせる。

(束の間なんかに…させはしない…!!　この子達の笑顔を守る為にも…そうだろ、マジシャン・ガール…)

きっとこの場にマジシャン・ガールがいたら、きっと微笑みながら頷いてくれる。

そんな気がした。

未来への一撃（後書き）

この小説を読んで戴き、本当にありがとうございます。

いやはや、本当に通知が怖い。

仕事が終わって家に帰ると、ポストの中を覗くのが怖い。

とりあえず今の所は通知は届いておりません。

答え合わせはやってないです。なんか現実逃避したくてやってません。

さて、話は変わって今回のお話。

西条亨が勝ちました。

ＯＣＧ研究会のメンバーから託されたカードを使っての勝利。

結束の力、もとい団結の力が決め手！

少し狙って書きました。

ラドルフ編も終わり、物語はいよいよ終盤に突入していきます。

これからも応援、よろしくお願いします。

また、今回の話で思ったこと等があれば、どしどしご意見を下さい。

よろしくお願いします。

もう一つのOCG研究会

※

冬の冷たい風が吹き付けるこの時期。

東区に在る東区第七高等学校の三階にある西条拓夜に烏丸葉月が通うクラスでは、朝一番から大騒ぎであった。

「何だよ拓夜！見てたぜテレビ！」

「お前、遊戯王カードやってたのな！しかしまさかテレビに出るとは思わなかったぜ！」

主に男子学生が拓夜に集まり、次々に質問が飛び出してくる。

教室に入った途端の矢継ぎ早の質問にたじろぎながらも、拓夜はありのままに素直に応えた。

「いや、まあその…」

「いつからあのチームに入ったんだよ？」

「ちょっと前にだよ、まだ俺は新人で初心者だし」

「そう言えばお前の彼女も一緒だったよな？成瀬ちゃんだっけ？」

「ああ、花穂も一緒にやってる」

「一緒にって言えば、烏丸さんも一緒にチームに入ってるなんて知らなかったぜ！」

「へ？」

葉月の名前が出て、ふと気になった拓夜は、教室の中にできたもう一つの人混みに注目する。

そこには女子の集団で中心の葉月を取り囲むように、隣のクラスの桜朱美を筆頭に、葉月を質問責めにしていた。

「ちょっと葉月！まさかアンタがテレビに出たなんてビックリよ！」

「葉月さん、カードゲームやってたのね…知らなかった」

「う…だからあれは…その…」

顔を真っ赤にし、しどろもどろになる葉月は女子達の気迫に圧されて口をパクパクさせていた。

拓夜が遊戯王カードを始めたキッカケは、葉月からの誘いを受けた事から始まった。

その時に葉月は、自分が遊戯王カードをやっている事は学校では他言無用だと言っていた。

しかし、先のトリティニーグループの命運を掛けたデュエルはテレビで全国に報道され、ＯＣＧ研究会のメンバー紹介として堂々と名前と顔が映ってしまっていたのだ。

そのデュエルはニュースにも取り上げられ、今やＯＣＧ研究会は全国にその名を轟かせる一大スターとなってしまったのだ。

こうなれば最早、秘密もへったくれもない。

それだけならまだ葉月もどうにか対処できたのだ。

しかし、桜朱美の口から放たれた次の一言が、葉月の冷静さを崩落させる。

「そういえば葉月、テレビで副社長さんとデュエルやってたのが、アンタの好きな人なんでしょ？」

「ちょッ！？」

『なッ！？　なにィィイイ！！！！』

桜朱美のその言葉に葉月だけでなく、女子達だけでなく、主にクラスの男子生徒等が食いつく様に反応する。

「確か…前にアンタが言ってた亨さん、って人だよね？」

「ちょ、ちょっと朱美！勝手な事を言わないでよ！」

桜朱美の発言に慌てふためく葉月。

そんな様子の葉月を見てた男子生徒等は、憤りを露わにしながらその怒りの矛先を拓夜へと向ける。

「う…嘘だァアア！？」

「ヲイッ！！拓夜ァア！！　その話は本当なのか！？」

「嘘だよな？嘘だと言ってくれ拓夜！俺達のアイドル！天使！女神の葉月ちゃんが…なぁ？」

「うぉッ！？　ちょ、落ち着けお前ら！！」

責めよってくる男の肉厚を押し返しながら、拓夜は葉月と亨の関係を考えてみる事にした。

マナという最愛のパートナーを失った亨は以前住んでいた街、三上市に行方を眩ませた。

自分と成瀬の二人が亨の所在を突き止め、その場所に向かうと、そこには既に葉月が亨と話をしていた。

そこで葉月と亨の二人は、互いに抱きしめ合って…

「……あ」

「あ…ッて何だァア！！」

「まさか、まさかまさか…まさかまさかまさかッ！？」

「うぁぁああッ！？」

拓夜の反応に泣き出す者や、その場で崩れ落ちる者までもが現れた。

それだけ殆どの男子生徒等は葉月の事が好きだったという証でもある。

当の本人、もとい葉月は桜朱美や女子達の恋愛話の質問、更には男子達からの阿鼻叫喚な叫びに耳を塞ぎ

「もうッ！！　嫌ァァアア！！」

顔を真っ赤にし、一目散にと教室から飛び出して行った。

※

昼休み。

朝の騒動も少しは落ち着きを見せ、拓夜は自分の席に座りお弁当を食べていた。

途中、成瀬花穂からメールが届き、内容を見てみると

「ハハ…花穂もやっぱ朝は大変だったんだ」

どうやら成瀬も朝一番では自分達と同じ様な目に逢ったらしい。

お弁当を食べ終えると、友人の結城雅一が話し掛けてきた。

「拓夜ちゃん」

「ん、結城…どうした?」

振り向くとそこには、神妙な面持ちで立つ結城の姿があった。

普段はおちゃらけた態度をとっている結城が、この様な雰囲気で話し掛けてくるなんて滅多にない。

「…ちょっと、一緒に屋上まで来てくれないか?」

※

東区の郊外にあるアパートの二階。

ＯＣＧ研究会事務所にして西条亨の部屋でもあるその部屋に、結締智恭と白石直也が訪れていた。

「覚えていない…だと？」

まるで信じられないといった表情で尋ねる亨に、結締は神妙な面持ちで応える。

「さっきラドルフに会ってきて、あの星界の三極神について尋ねてみたが、アレは遺跡内部で発見したカードで間違いないみたいだぜぃ…だが、ツィスカについては、従者のアンドレーっておっさんはおろか、ラドルフ本人でさえ覚えがないって言いやがる」

「ふぅん、以前ツィスカがこの事務所に来た時に、奴は副社長秘書だと名乗っていた…しかし、トリティニーグループのデータベースには、ツィスカの存在は確認できなかった」

「…つまり、ツィスカという人物は…最初から居なかった事になる、

という事か」

ラドルフとのデュエル決着後に現れたツィスカ・ベルセリオスからは確かに昔、自分達が倒した筈の邪神の力が感じられた。

つまり、邪神は消滅していなかった事になる。

「まだ…俺達と邪神との決着は、ついていないという事になるのか」

「ふぅん…しぶとい奴だ」

「あの場で邪神が逃げた事を考えるに、奴はまだ完全に復活した訳じゃなさそうだぜぃ？」

「ああ…恐らく邪神は、ラドルフの持つ三極神の力を利用して、復活を目論んでいたに違いない…そしてこれも推測だが、ツィスカという女は…ラドルフの仲間という訳ではなく、邪神の下部といった存在なんだと思う」

「ま、そう考えるのが妥当だぜぃ」

「それで、西条よ…これからどうするつもりだ？」

白石からの今後の方針について尋ねられ、亨は静かに両目を閉じ、

ゆっくりと瞼を開く。

瞼が開かれた彼の右目は、蒼く澄んだ瞳の色へと変色していた。

「精霊界の力を通して、俺はツィスカの…邪神の場所を突き止める事ができる。結締、白石…悪いが後の事を頼まれてくれないか？」

※

「それで結城、話ってなんだ？」

屋上に場所を移した拓夜に結城の二人。

結城は冬の乾いた冷たい風を浴びながら、ゆっくりと口を開いた。

「拓夜ちゃんに葉月さん、そんで拓夜ちゃんの彼女が、あのＯＣＧ研究会ってチームに入ってるのを…こないだのテレビで知った」

「……」

「ちょっと前にさ…スーパーで葉月さんが、テレビでデュエルをしてた西条亨って奴と…親しげに話してるのを見ちまってさ…俺が葉月さんの事が好きなのは、拓夜ちゃんも知ってるだろ?」

「…あ、あぁ」

「前に拓夜ちゃん、言ったじゃん? 俺から葉月さんにアピールしていかなきゃ、葉月さんは俺を振り向かないって」

「……」

拓夜は結城のこんな真剣な姿を見るのは初めてだった。

いつもおちゃらけた態度で、周りの場を和ませる愉快な人物と印象していた為に、どうも先程から結城の言葉、口調の一つ一つに驚かされてしまう。

「あれから俺も頑張って葉月さんにアピールしてきたけどさ…駄目なんだよ、俺じゃ…葉月さんは…葉月さんの気持ちは、ずっとアイツの方ばかり向いてる!」

アイツというのは、恐らくＯＣＧ研究会の先輩である西条亨の事な

のだろう。

今朝の教室で桜朱美が言った

『葉月の好きな人ってのは、あの西条亨って人なんでしょ？』

という発言に、大多数の男子生徒は騒ぎ立てたが、結城はただ黙って俯いていた。

落ち込みの気持ちもあるのだろうが、それは既にある程度の事実を悟っていたからなのかもしれなかった。

「……結城」

「拓夜ちゃん…、一生のお願いだ！葉月さんとの恋愛事に関わりたくないのは承知で頼むッ！！　俺を…俺を、西条亨って奴に会わせてくれッ！！」

※

本日の授業が全て終了し、生徒達の足はそれぞれの帰路に向けて歩き出す。

拓夜に成瀬の二人は、寄り道しがてら西区のオープンカフェに来ていた。

「そうですか…葉月さん、色々と大変な目に遭ってたんですね」

今日の葉月に関する恋愛話を聞いてもらい、拓夜は軽く溜め息を漏らす。

「しかしまぁ、結城の奴からの頼みは…流石に断りきれなかったな…」

「確か、亨さんに会わせて欲しいという事でしたよね?結局、どういう風に話が纏まったんです?」

注文してあったコーヒーを軽く口に含みながら、成瀬は興味津々にと尋ねてきた。

どうやら女子というのは、他人の恋愛話が大好きな様だ。

「１９時頃に、東区の公園に来てもらう様にメールは送ったけど…もうそろそろだな？花穂は何だ、二人の話を聞きに行きたいのか？」

興味津々に尋ねられた為、拓夜はもしかしたら成瀬は様子を見に行きたいのかと思い、尋ねてみた。

しかし、成瀬からの返事は

「いえ、そこまでするのは返って野暮ってものです。まぁ結果がどうなるのかは気になりますけど…」

「…そっか」

拓夜も注文してあった紅茶を飲み、軽く息をつきながら気持ちを改める。

「よし、花穂！久しぶりにカードショップに寄ってみようぜ？互いに１パック買って、レアカードの種類での勝負をしよう！」

「アハ、それ久しぶりですね！良いですね、行きましょう拓夜さん！」

※

結城雅一は東区の公園のベンチに腰を降ろし、ソワソワしていた。

先程から何度も視線を公園出入り口に向けては、また俯き…の繰り返しである。

（まだ…来ねぇみたいだな…）

昼休みに拓夜に頼み、西条亨なる人物をこの公園に来てもらう様に依頼した。

返事は直ぐに返ってきたらしく、拓夜に１９時に公園で待つように言われた。

そして現在、時刻は１９時を過ぎて2分が経過した頃であった。

（約束の時間がちょい過ぎたか…西条亨って奴は、時間にルーズな

奴なんだな）

結城は西条亨がどの様な人物なのか知らない。

自分が知らない相手を想像するときは大抵の場合、相手を嫌な人物に位置付けてしまう。

自分の恋敵ならば尚更である。

しかし、結城の心情には当然、不安も混じっていた。

今の自分は一人だ。

もし西条亨が数人の共を連れて来た場合、自分は真っ直ぐに意見を言える自信がない。

一度不安が生じると、瞬く間に心理状態が脆くなっていく。

（一体…どんな奴なんだよ…）

そう思っていると、公園の脇に一台の車が停車し、一人の男が降りてきた。

「ッ！！」

その人物に結城は見覚えがあった。

見間違える筈がなかった。

件の西条亨である。

亨は結城の姿を確認すると、こちらに向かって歩き出す。

そんな亨を結城は威嚇するような視線で出迎えた。

「君が…拓夜くんの言っていた、結城雅一くん…で良いのかな？」

険しい表情で頷く結城とは対照的に、亨は温和な表情で言葉を続けた。

「寒い中、待たせてすまない。結城くんはホットコーヒーかお茶…どっちが良い？」

「え…？」

そう言う亨の手にはコンビニの袋にコーヒー缶とお茶のペットボトルが入っていた。

結城にとって早速、予想外の会話が飛んできた。

早速本題に入ろうかと思った矢先に、飲み物について尋ねられた結城は、険しい表情から戸惑いの表情に変化しながらホットコーヒーを受け取った。

「俺に何の話かする前に、場所を変えて暖房の効いた車の中にしないか？待ってる間、寒かっただろ？」

「…ここで良い」

自分に気を利かせた対応を取る亨にぶっきらぼうに答えると、亨は自分の隣に座り、お茶を一口飲み込んだ。

「…アンタが、ＯＣＧ研究会ってチームの…西条亨？」

「ああ…それで結城くんは、俺に話があるって聞いたけど？」

遂に本題について話を振られた結城は、缶コーヒーを持つ手に力を加えなから、息を大きく吸い込んだ。

心臓の鼓動が早くなる。

寒さと緊張で手先が震える。

結城は意を決して

「…アンタは…葉月さんの事を…どう想ってる!?」

※

拓夜に成瀬の二人は、西区の駅前にあるカードショップに来ていた。

それぞれにカードを1パック購入し、店内の端にある遊戯コーナーで、二人同時にパックを開けた。

「拓夜さん、行きますよ！」

「あぁ、受けて立つぜ！」

ビリッとパックを破り、それぞれ同時にパック内容を公開する。

パックの中にはカードが5枚。

成瀬のカードの中には、ウルトラレアのカードが入っていた。

「うげッ！？　花穂…お前マジかよ？」

「フフ…どうです拓夜さん！私の買ったパックには、ウルトラレアの『ガーディアン・オブ・オーダー』がありました！拓夜さんのパックの中に、ウルトラレア以上のレアリティのカードが無い限り、拓夜さんは負けてしまいますよ？」

得意気に言う成瀬に対し、拓夜は恐る恐る自分の購入したパックの中身を確認する。

「…くッ！！　ウルトラレア以上のカードが…無ェ…」

「アハッ☆じゃあ今回は、私の勝ちです！」

無邪気な笑顔で喜ぶ成瀬は、嬉しそうに鼻歌混じりに

「じゃあ拓夜さんには、何をしてもらおうかな～？」

「お、お手柔らかにお願いします…」

二人がそんなやり取りをしていると店の戸が開き、新たな客が来店してきた。

男四人、女二人の集団だった。

店員がいらっしゃいませと対応すると、その集団の一人の男は、店内に響き渡る位の大きな声でこう言い放った。

「皆！俺はＯＣＧ研究会のリーダー、西条亨だ！」

その男の言葉に店内に居合わせた他の客や店員は、思わずその男達

の集団に注目した。

拓夜に成瀬も思わず反応してしまい、西条亨と名乗る男の顔を確認する。

確かになんとなく、微妙に、ほんの少し顔つきが似ていると言えば似ているが、拓夜は思わず呟いた。

「…誰だアイツ？」

拓夜の呟いた声が聞こえたのか、西条亨と名乗るその男は拓夜に向かい、堂々と言い放った。

「おいおい、坊主はこの俺の事を知らないみたいだな？ついこないだテレビに出て、トリティニーグループ副社長のラドルフと激しいデュエルを繰り広げたのは、そう！！　この俺だァ！！」

「…は？」

拓夜に成瀬は思わずあんぐりと口を開けてしまった。

この俺は西条亨と名乗ってはいるが、明らかに別人である。

誰だお前?と、声を大にして言いたかった。

すると、周りの客はＯＣＧ研究会と名乗る集団に群がり、それぞれに黄色い声をあげて盛り上がりを見せた。

「うわぁ…凄い！本物だァ！！」

「あのッ！！サインください！」

「写真、一緒に撮ってもらっても良いですか?」

それぞれの盛り上がりを見せる偽物のＯＣＧ研究会。

そんな様子を見て、成瀬は拓夜にしか聞こえない位の声で話しかけた。

「チームが有名になれば、こういった人も出てくるんですね…何だか、残念です」

「そうだな…それにあの時は、俺達は有名になりたいから戦ったんじゃない…亨さんは、決闘者の未来の為に戦ったってのに…こんなの、あまり気分は良くないな」

そう言いＯＣＧ研究会と名乗る集団を見やる拓夜。

恐らく西条亭?を始めとして、人数を考慮するにそれぞれの偽物メンバーも揃っているのだろう。

すると、そのメンバーの中の一人の男が自分達の方に歩み寄ってきた。

拓夜達は余り相手にしたくなかったが、その男は成瀬に近付くなり、テーブルの上に広げてあったカードを拾い上げ

「ヘェ…『ガーディアン・オブ・オーダー』、結構なレアカードじゃん?」

「あっ、私が当てたカード…!?」

その男はカードと成瀬を交互に見比べ、ニヤリと賤しい笑みを浮かべながら

「お嬢ちゃん、このカード…俺達ＯＣＧ研究会に寄付してくれねェか?」

「お断りします！そのカードを返して下さい！」

成瀬が男からカードを取り返そうとすると、男は軽快な動きで成瀬の手から逃れ

「ンな連れねェ事いうなよ、他の連中を見てみな？」

その男が指差す先には、偽物のＯＣＧ研究会の連中にカードを譲る客の姿があった。

中には自分の宝物です！と言い、連中にそのカードを渡す子供まで居るではないか。

拓夜に成瀬は、その光景がとても異様に思えた。

「俺達は近い内に大会に出場する事になっていてな、その為に皆からの協力が必要なんだよ、だからさお嬢ちゃん…このカード、俺達に譲ってくれねェか、大切に使ってやっからサ？」

「嫌と言った筈です！返して下さい！」

成瀬と男のやり取りを聞いて、更にもう一人の男が近付いてくる。

「結締さん、どうしたんスか？」

「おう、この女が中々に頑固でなァ…」

拓夜は結締と呼ばれたその男の名にピクリと反応した。

（結締…さんだって？）

拓夜の中で、怒りの感情が沸々と煮えたぎる。

結締智恭。

世間では最強のＨＥＲＯ使いと称される、最強クラスの決闘者の一人だ。

以前、拓夜が結締とデュエルした際、結締はその実力を遺憾なく発揮し、見事勝利した。

初対面の時はどうあれ、今では同じＨＥＲＯ使いとして拓夜は結締を尊敬し、目標になっていた。

だからこそ、この連中の行為が許せない。

更には自分の彼女に対する嫌がらせ。

だからこそ、拓夜は鞄の中から自分のデッキを取り出し、偽物の結締の前に立った。

「ア？何だ坊主？坊主も俺達にデッキを譲ってくれるのか？」

「…そんな訳、あるわけねえだろッ」

拓夜は成瀬を庇うように立ち、結締と呼ばれた男に対して言い放った。

「なぁ、結締さん…だっけ？俺とデュエルしろよ？」

「ア？」

「俺が勝ったら、そのカードを花穂に返してもらう！それだけじゃない、皆から巻き上げたカードを、全員に返してもらうぜ！」

拓夜のその発言に対し、結締と呼ばれた男は表情を険しくしながら

「巻き上げたって…ヲィ、坊主…人聞きの悪ィ事を言ってんじゃ…ー！」

「どうなんだ結締さん？ＯＣＧ研究会の癖に、俺なんかとはデュエルできないんですか？」

挑発染みた拓夜の言葉に反応したその男は、やや退け腰になりながら

「ッ！？　坊主…この俺が誰だか分かってて言ってんのか？　ＯＣＧ研究会にして、最強のＨＥＲＯ使いの、結締様だぞ？」

「相手が最強だからこそ言ってるんだ…それとも、最強のＨＥＲＯ使いは、一般決闘者からのデュエルの申し込みは受けられませんってか？それだけ負けるのが怖いんですか？」

「くッ！？　上等じゃねェか…！！」

結締と呼ばれた男は懐から自分のデッキを取り出し、躍起になって拓夜に言いつける。

「なら坊主の言うように、相手になってやんぜ！！　ただし、俺が勝ったら…坊主のデッキは回収させてもらうからなァ！！」

譲れない気持ち

※

西区の駅前に在るカードショップ内は異様な盛り上がりを見せていた。

店内の一角に設置されたデュエルスペースに、西条拓夜と結締と呼ばれた男が対峙する。

結締と呼ばれた男の仲間らしき人物等が集まり、それぞれに賤しい笑みを浮かべて拓夜に成瀬を睨みつける。

「結締、こんな学生如きに遅れをとるんじゃねェぞ！」

「分かってる、ＯＣＧ研究会のデュエルを見せてやンゼ！」

ＯＣＧ研究会のデュエル。

その言葉に反応し、周りのギャラリー達は熱い声援を送る。

「結締さん！頑張って下さい！」

「スゲーッ！！　ＯＣＧ研究会のデュエルが見れるなんて、夢みたいだ！！」

ギャラリー達の声援を受けた結締と呼ばれた男は、自信満々の笑みでテーブルの上に自分のデッキを取り出した。

「坊主…このＯＣＧ研究会の結締にデュエルを申し込んだ事…後悔させてやんぜ！！」

「…それはコッチの台詞だ」

対する拓夜の表情は険しい。

自分の所属するチームの名を勝手に使われた事への憤り。

自分の彼女へ手を出された事への憤り。

そして自分が目標とする人物の名を語る輩が、最低な行為を働いた事への憤り。

様々な感情が入り混じる拓夜を、そんな拓夜の気持ちを、後ろで成瀬は理解していた。

（拓夜さん…頑張って…！！）

拓夜もデッキをテーブルの上に用意し、二人のデュエルの準備が整った。

結締と呼ばれた男は腕を組み、自信満々に拓夜に告げる。

「坊主、先行は譲ってやる」

「…じゃあ、遠慮なくやらせて貰うぜ！！」

互いに手札となるカードを五枚ドローした二人は、同時にデュエル開始の宣言をした。

『デュエル！！』

※

烏丸葉月は東区の住宅街を歩き、帰宅している途中である。

学校帰りの途中、自分の通う塾に立ち寄った葉月は、進学する大学についての相談を終えてきたのだ。

「う～、寒い…」

夕方を過ぎると気温の低下と共に、吹き抜ける風の冷気がより一層に冷たさを増す。

コートを羽織り、マフラーを風に靡かせながら、葉月は今朝の学校での出来事を思い出していた。

学校に到着して早々に、葉月はテレビに出ていた事で話題にされた。

それによって遊戯王カードをやっていた事がバレる事は、葉月自身ある程度は予想していた。

その為の辻褄合わせとして、ある程度の回答も頭の中に用意はしてきた筈だったのだが、いかんせん…

世の中、何事も上手く事が運ばないものである。

隣のクラスの友人である桜朱美の一言で、自分の頭の中にあった予定会話が全て崩壊してしまった。

「朱美め…何であそこで亨さんの名前を出すのよ…！！」

不意に言われた、『あのデュエルしてた人が、アンタの好きな人なんでしょ？』に、周りだけでなく自分までもが大混乱に陥った。

奥手な気持ちが大きくなり、溜め息が白い息となって大きく吐き出される。

「ハァ…明日学校、行き辛いなぁ」

きっと明日もその事で話のネタにされるのだろうと思うと、溜め息ばかり出てしまう。

そんな気持ちで住宅街を進み、東区の公園前の道に差し掛かると、目の前に見知った一台の車が停まっている事に気が付いた。

「あれっ？これって…亨さんの車…」

何度か乗せてもらった事がある為に、見間違える事はなかった。

なぜ、こんな所に彼の車が停まっているのだろうと不思議に思っていると、葉月の耳に知り合いの声が聞こえてきた。

「アンタは…葉月さんの事を、どう想ってる！？」

「えっ？」

自分の名前が出てきた事に驚き、声のした方を向くと、そこにはベンチに腰掛けるクラスメートの結城雅一と、ＯＣＧ研究会の先輩である西条亨の姿があった。

（ゆ、結城くんに…亨さんッ！？　一体何なのよ…この組み合わせは！？）

自分の中では有り得ない人物の組み合わせに驚いた葉月は、思わず

二人に見えない位置に移動し、植木の陰から二人の会話の内容を窺った。

※

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／８０００

【後攻】結締？
ＬＰ／８０００

始まった二人のデュエル。

拓夜はデッキからカードをドローし、先攻のプレイを開始する。

「俺の先攻、ドロー！！『ＤｰＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚し、効果を発動！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「デッキの一番上のカードを確認し、それが通常魔法カードなら墓地に送り、次のターンにその効果を発動する事ができる！デッキの上のカードは…良し、通常魔法『トレード・イン』のカードだ！」

通常魔法『トレード・イン』のカードを墓地へ送った拓夜は、残りの手札の中から一枚のカードを取り出し、場に伏せた。

「リバースカードを一枚セットして、ターン終了だ！」

「なら、俺のターンだぜェ！！　ドロー！！」

結締と名乗る男のターンが開始される。
結締?は拓夜の召喚したモンスターを見て、小馬鹿にするような態度で話しだす。

「ダイヤモンドガイねェ…何だよ、坊主もＨＥＲＯ使いの端くれかァ?どうせこの結締様が考案してネットに掲載した【Ｄ－ＨＥＲＯ】のデッキレシピを真似て作っただけじゃねェだろうなァ?」

「…ッ!?」

ピクリと、拓夜のこめかみにうっすらと血管が浮かび上がる。
そんな拓夜の様子に気付く事なく、結締?は自分のプレイを開始した。

「いくぜェ…!!　手札の魔法カード『ダーク・フュージョン』を発動!!」

【ダーク・フュージョン】

［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、悪魔族の融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にならない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「ダーク…フュージョン…？」

「手札の『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』と、『Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ』を融合し、『Ｅ－ＨＥＲＯ（イービル）　インフェルノ・ウィング』を融合召喚ッ！！」

【Ｅ－ＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング】
星６／炎属性／悪魔族
ＡＴＫ　２１００
ＤＥＦ　１２００
［融合／効果］
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
このカードは「ダーク・フュージョン」による融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊したモンスターの攻撃力か守備力の高い方の数値分のダメージを相手ライフに与える。

自分の知らない新たなＨＥＲＯを召喚する結締?に、拓夜は警戒する。

「早速バトルフェイズに入らせてもらうぜェ!インフェルノ・ウィングで、ダイヤモンドガイに攻撃ッ!!」

「くッ!?」

攻撃力が１４００のダイヤモンドガイは破壊され、墓地へと送られた。

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００　→　７３００

【結締?】
ＬＰ／　８０００

「ヒャハッ!!　ダイヤモンドガイは戦闘破壊によって墓地に送られた…この瞬間、インフェルノ・ウィングのモンスター効果を発動

！！」

「ッ！？」

「インフェルノ・ウィングがモンスターを破壊し墓地に送った時、破壊されたモンスターの攻撃力か守備力の高い方の数値分のダメージを、相手ライフに与える！！」

戦闘破壊されたダイヤモンドガイは攻撃力が１４００、守備力が１６００。

つまり拓夜はその効果により高い数値分、守備力分のダメージを受ける事になる。

「な…なにッ！？」

「ヒャハッ！！　喰らいなァ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　７３００　→　５７００

【結締？】
ＬＰ／　８０００

「くッ！？」

「どうだ坊主、この結締様のＨＥＲＯの力は？リバースカードを一枚セットして、俺様のターンは終了だ！」

※

結締？のターンが終了し、拓夜のターンへと移行する。

ライフポイントにも差が開き劣勢となった拓夜を見て、成瀬はハラハラしながら拓夜のプレイを見守っていた。

（拓夜さん…いつにも増して、何だか…怖いです）

成瀬は拓夜のデュエルの腕前を信じていた。

拓夜ならばこのデュエルに負ける事は無いだろうと思う。

しかし、成瀬の心配は別の所にあっあ。

相手は拓夜の目標とする人物の名を語った卑劣な決闘者だ。

余り口には出さないが拓夜は内心、かなり憤慨しているに違いない。

そんな拓夜を救うには…。

そう思うと成瀬の手は携帯電話を握り、ある人物に急いでメールを送った。

「俺のターン、ドロー！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／５７００

【結締？】
ＬＰ／８０００

デッキからカードをドローした拓夜はメインフェイズへと移り、前のターンにダイヤモンドガイの効果で墓地へ送られた『トレード・イン』の効果を発動する。

「墓地の『トレード・イン』の効果だ！デッキからカードを二枚ドローする！」

更にデッキからカードを二枚ドローし、手札を満たした拓夜。

（この手札なら、幾らでも挽回できる…でも…）

手札を確認し、様々な戦略を練る拓夜だが、心は黒い靄が渦巻いていた。

（このデュエル、何か…楽しくない…）

自分の相手が結締の名を語る誰とも知れない相手だからか。

自分の彼女に嫌がらせをした相手だからか。

自分に対し、癇に障る発言をしてきたからか。

周りのギャラリーが、相手は本物のＯＣＧ研究会ではないのに、本

物と勘違いして思い込んでいるからか。
様々な要因が渦巻き、拓夜は今までになく、このデュエルが楽しく感じなかった。

「どうした坊主、手札補充したのに何も打つ手がねェのか？」

「ッ！！　アンタなんかに言われなくても…ッ！！手札より『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
［魔法カード］
手札から「ＤＩＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚を捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「手札の『ＤＩＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を捨てて、カードを２枚ドロー！更に手札より、『おろかな埋葬』を発動する！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター１体を選択して墓地に送る。その後デ

ッキをシャッフルする。

「この効果でデッキから『ダンディライオン』を墓地に送る！そして墓地に送られた『ダンディライオン』の効果発動！『綿毛トークン』２体を、守備表示で特殊召喚！」

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためのリリースはできない。

拓夜のフィールドに『綿毛トークン』２体が守備表示で特殊召喚される。

「そして墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』のモンスター効果を発動！墓地のこのカードを除外し、デッキから２体目のディアボリックガイを特殊召喚する！来い、ディアボリックガイ！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　８００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』に『綿毛トークン』２体、計３体のモンスターが拓夜のフィールドに立ち並ぶ。

「この坊主…、一気にモンスターを３体も…ッ！？」

「行くぜ！【Ｄ－ＨＥＲＯ】を含む３体のモンスターをリリースし、俺は『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を特殊召喚する！現れよ、ドグマガイ！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
星８／闇属性／戦士族

ＡＴＫ　３４００
ＤＥＦ　２４００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを含むモンスター3体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。この特殊召喚に成功した場合、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時に相手ライフを半分にする。

拓夜のフィールドに攻撃力３４００のドグマガイが特殊召喚された。

「どうだ!?　ドグマガイの攻撃力なら、アンタのモンスターなんか…」

「ドグマガイ?そう簡単にやらせるかよォ!!　坊主のドグマガイの特殊召喚時に、俺様はこのカードを発動するぜェ!!『奈落の落とし穴』だァ!!」

【奈落の落とし穴】
［罠カード］
相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

「なにッ！？」

「コイツで坊主のドグマガイは破壊され、ゲームから除外される…残念だったな？」

拓夜は悔しそうに歯噛みしながらドグマガイを除外した。

そして手札を確認する拓夜は、己のプレイングの杜撰（ずさん）さにショックを受ける。

（しまった…手札に『サイクロン』のカードがあったじゃないか！！　何をやってんだ、俺は…ッ！！）

「どうした坊主、もう終いか？」

拓夜の様子を楽しむかのように嘲笑う結締？。

拓夜は舌打ちしながら

「チッ…モンスター1体をセットして、リバースカードを1枚セッ

ト、ターンエンド！！」

※

「ヒャハハッ！！　俺様のターン、ドローッ！！」

結締？のターンに移り、カードをドローした結締？は、ドローしたカードを確認すると、気色の悪い声で笑う。

「ヒャハァッ！！　良いカードを引いたぜェ！！　手札より2枚目の『ダーク・フュージョン』を発動ォ！！」

「ッ！？」

「手札の『E・HERO　スパークマン』に、『E・HERO　クレイマン』を融合し、『Eー(イービル)HERO　ライトニング・ゴーレム』を融合召喚だァ！！」

【EーHERO　ライトニング・ゴーレム】

星６／光属性／悪魔族
ＡＴＫ　２４００
ＤＥＦ　１５００
［融合／効果］
「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン」
このモンスターは「ダーク・フュージョン」の効果による融合召喚でしか特殊召喚できない。フィールド上に存在するモンスター１体を破壊する事ができる。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

結締？のフィールドに２体目の闇融合モンスターが現れる。
そして結締は早速、融合召喚したライトニング・ゴーレムの効果を発動した。

「ライトニング・ゴーレムの能力、フィールド上のモンスター１体を破壊する！！　坊主の守備モンスターを破壊だァ！！」

「くッ！？」

ライトニング・ゴーレムの効果により、拓夜のフィールド上に唯一存在した裏側守備表示のモンスターが破壊された。

「破壊された『ダンディライオン』の効果だ！！『綿毛トークン』2体を、守備表示で特殊召喚する！！」

『ダンディライオン』の効果により、何とか壁となるモンスターを特殊召喚する事に成功した拓夜。

「チッ、往生際が悪ィな坊主…！！」

「『綿毛トークン』の攻守は0、それにトークンは戦闘破壊されても墓地へは送られない為、アンタのインフェルノ・ウィングで殴られたって、ダメージは…」

「アァマァい！！」

拓夜の言葉を遮り、バトルフェイズに突入する結締？。

「確かに坊主の言うとおりだが、この結締様のインフェルノ・ウィングは、戦闘した際の貫通効果も持ってんだよォ！！」

「なッ！？」

「バトルだァ！！　インフェルノ・ウィングで、トークンに攻撃！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　５７００　→　３６００

【結締？】
ＬＰ／　８０００

「ぐぅぅ…ッ！？」

「続いてライトニング・ゴーレムで、残ったトークンにも攻撃！！」

再び壁となるモンスターを全て失った拓夜。

ライフポイントにも大きな差が開いてしまい、拓夜はたった一つのプレイングミスで、一気に窮地に立たされてしまった。

「俺様のターンは終了だ…大した事ねェなァ、坊主」

「……ッ！！」

拓夜は無性にイライラしていた。

もし前のターンに、先に『サイクロン』を使用して、相手の『奈落の落とし穴』を破壊していれば、こうまでライフにダメージを受ける事はなかった。

怒りに任せた自分の杜撰なプレイングで、こんなにも悔しい思いをする羽目になった自分に対しての苛立ち。

拓夜の後ろに立ち、デュエルを見守る成瀬には、拓夜の今の気持ちが痛い程に伝わっていた。

（拓夜さん…私は、拓夜さんを信じていますッ！！　だから、自分の気持ちに負けないで…！！）

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　３６００

【結締?】
ＬＰ／　８０００

拓夜のターンが訪れ、現在拓夜のドローフェイズ。

拓夜は自分の手札を確認しながら、ギッと奥歯を噛み締めた。

※
［西条拓夜の手札］
『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』
『沼地の魔神王』
『闇の誘惑』

（このドローに…全てが掛かっている…！！）

自分のフィールドにはモンスターはなく、伏せカードが2枚。

『サイクロン』に『リビングデッドの呼び声』だ。

手は無い訳ではないが、下手をすれば次の相手ターンに再び返り討ちに合うかもしれない。

相手は最強のＨＥＲＯ使いの結締の名を名乗るだけあり、やはりそれなりに強い。

拓夜の中に葛藤と共に、不安という闇が募っていく。

（どうすれば良い…俺は…）

「どうした坊主、サッサとカードをドローしやがれ！！」

自分の優位に乗じて結締？が拓夜を煽る。

「坊主がターンを開始しねェならこのデュエル、この結締様のーー」

「ん？　俺が何だって？」

「…へ？」

結締？が話している最中（さなか）、店の入り口から２人の男が姿を現した。

その２人の男はギャラリーを掻き分け、デュエルを行う拓夜に結締？の前に立つ。

「あッ…あアッあアンタは…ッ！？」

2人の男の姿を見て、それまで強気な姿勢だった結締？は見る見る内に青ざめた表情へと変貌する。

結締？だけではなく、彼らの仲間達も同じように、怯えた表情を露わにしていた。

「ふぅん…何だ、拓夜がデュエルをしていたのか？」

「成瀬ちゃんが急いで来てくれってメールが入ったから来てみたけど…拓夜ちゃんに成瀬ちゃん、こりゃ一体なんの騒ぎだにゃ？」

「もぅ、お二人とも…来るのが遅いです！」

登場した“本物の”ＯＣＧ研究会のメンバーに言葉をなくす偽物達。

偽物達だけでなく拓夜や、周りを囲むギャラリー達までもが思わず唖然としていた。

「結締さん…それに、白石さん…どうしてここに…？」

「ああ、ついさっき成瀬ちゃんから直ぐに来い、ってメールが入ったんだぜぃ」

「何事かと思って来てみれば、拓夜は誰とデュエルをしている？」

「ヒィッ！？」

結締に白石だけでなく、拓夜に成瀬だけでなく、周りを囲むギャラリー達の視線が結締？達に集中する。

他の偽物達は急ぎ逃げ出そうとするが、それをギャラリー達がバリケードを作り、阻止する。

デュエルテーブルに着く結締？は、ただ怯えてガチガチと歯を鳴らしていた。

「…なぁ？」

「ビクゥッ！？」

拓夜に話し掛けられ、ビクッと両肩を跳ね上げる結締?。

「アンタ…本当の名前って、一体なに?」

尋ねられてもだんまりを決め込む結締?。

(ヤバい…ヤバい…ヤバ過ぎるッ!!　ってか、拓夜に成瀬って名前…まさかこの坊主と嬢ちゃんも、本物かよヲイッ!!　俺達ァとんでもねェ奴らを相手にしてたって事かよォ!!)

冷や汗が滝の様に流れ落ちる結締?達。

「まぁ…ここまで来てアンタの名前なんかどうでも良いや…待たせたな、俺のターンだ」

拓夜は相手の偽物達の表情を見て気持ちが晴れたおかげか、とても気持ち良くカードをドローした。

西条拓夜の本気の反撃が、今始まる。

※

「俺のターン、ドローッ！！」

デッキからカードをドローし、拓夜の反撃のターン。

拓夜はドローしたカードとフィールド、手札を確認し、確信する。

「行くぜ…これが本物のッＯＣＧ研究会のデュエルだ！！　『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚し、効果を発動！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
星４／風属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、次の効果から１つを選択して発動

する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

「エアーマンの効果で、デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を手札に加える！！　更に手札より『沼地の魔神王』の効果発動！！」

【沼地の魔神王】
星３／水属性／水族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　１１００
［効果］
このカードを融合素材モンスター１体の代わりにする事ができる。その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。また、このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから「融合」魔法カードを手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

「手札のこのカードを墓地へ送り、デッキから『融合』の魔法カードを手札に加える！！　更にこの瞬間、永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動！！」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「リビングデッドの効果により、墓地より『ＤＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を特殊召喚する！！」

拓夜のフィールドに並ぶエアーマンにダイヤモンドガイ。

このままでは、相手のインフェルノ・ウィングにライトニング・ゴーレムには届かない。

相手の結締?は、確信していた。

西条拓夜が、このままで終わる筈がないと。

「行くぜ…手札の魔法カード『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「フィールドのエアーマンとダイヤモンドガイ、そして手札のダッシュガイの3体を融合！！」

「ヒィッ！？」

「現れよッ！！　『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー』！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター×３
このカードが融合召喚に成功したターン、このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。融合召喚に成功したこのカードは、１度のバトルフェイズ中に3回攻撃する事ができる。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

拓夜のフィールドに結締から譲り受けた切り札、【Ｖ・ＨＥＲＯ】が現れた。

「トリニティーは融合召喚に成功したターン、攻撃力が倍になる！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】
ＡＴＫ　２５００　↓　５０００

「こっ、攻撃力５０００ッ！？」

「更に手札より、速攻魔法『ハーフ・シャット』を発動！！　対象は、インフェルノ・ウィング！！」

【ハーフ・シャット】
［速攻魔法］
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。

「『ハーフ・シャット』の効果を受けたモンスターはこのターン、バトルでは破壊されず、攻撃力が半分になる！！」

【ＥｌＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング】
ＡＴＫ　２１００　↓　１０５０

相手モンスターの攻撃力が半分になり、拓夜は反撃のバトルフェイズへと突入する。

「バトルッ！！　『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー』で、『ＥｌＨＥＲＯ　インフェルノ・ウィング』に攻撃ッ！！」

「ギャァアッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　３６００

【結締？】
ＬＰ／　８０００　↓　４０５０

一気に相手ライフの半分近くを奪う拓夜。
更に続けて、拓夜はトリニティーで攻撃宣言をする。

「『ハーフ・シャット』の効果で、アンタのインフェルノ・ウィングは破壊されない!!　トリニティーでもう一度、インフェルノ・ウィングに攻撃だ!!」

「なッ!?　いっ一度の戦闘で、2回も攻撃を…ッ!?」

【西条拓夜】
ＬＰ／　３６００

【結締?】
ＬＰ／　４０５０　→　１００

残りライフが１００となった結締?。

かろうじて生き延びたかと思った結締?に、拓夜は死の宣告を告げた。

「誰が2回攻撃だと言った？トリニティーは3体の融合モンスターだ…つまりコイツは、3回攻撃が可能なモンスターだ！！」

「ッ！？」

「終わりだ、偽物！！　トリニティーの攻撃！！」

自分の憧れの人物の名を語り、悪質な行為を働く偽物に対し。

人物の彼女に絡んで、嫌がらせをしてきた偽物に対し。

人物の誇るデッキに「真似したのか？」と馬鹿にしてきた偽物に対し。

拓夜は今の全ての自分の想いを注ぎ、最後の一撃を見舞った。

【西条拓夜】
ＬＰ／　３６００

【結締？】
ＬＰ／　１００　→　０

※

「どうなんだ!?　答えろ西条亨!!　アンタは葉月さんを、どう想ってるんだ!!」

「…烏丸さんを?」

自分を呼び出し、いきなり葉月について尋ねる結城雅一に対し、亨は微かに瞼を細くした。

最初は結城がいきなり何を言ってきたのか分からなかったが、彼の表情や雰囲気から、彼の葉月に対する想いが感じられた。

「そうか、君は…烏丸さんの事が…」

「そうだよ!!　俺は葉月さんが大好きなんだ!!　でも、俺がどれだけアプローチしても…葉月さんの気持ちは常に、アンタに向けられて…でもッ、諦めきれなくてッ!!　だからッ…」

「…君は、凄いな」

亨からの予想外の言葉に瞳を大きく開く結城。

そんな結城に、亨は今の自分の素直な気持ちを言葉に出した。

「凄いよ…君は烏丸さんとの為に、誰とも知れない俺に会いに来た…そんな事、並大抵の覚悟がないと…行動に現せない」

それ程、結城の気持ちが葉月に対して本気だというのが分かる。

彼が本気だからこそ、自分もまた、彼に対し本気で話さねばならない。

「…数週間前に起きたトリティニードーム爆破事件…俺の好きだった人は、その事件に巻き込まれて…命を亡くした」

「ぇッ!?」

いきなり何を話し出されたか分からなかった結城だが、亨の真剣な表情を見て耳を傾けた。

「その時はショックだった…目の前のもの全てが絶望に感じた…俺の今までの全ては、アイツの為にあったから…本当に、全てを亡くした気分だったよ」

「……」

「でも、そんな俺を励ましてくれた子がいた…それが烏丸さんだった。彼女の支えで俺は…再び立ち上がる事ができたし、彼女の支えで俺は、あのデュエルに立って、戦う事ができた。彼女は俺の、大切な恩人だ」

「…恩人、本当に…それだけなのかよ？」

そんな言葉で結城は納得できなかった。

そんな単語一つで、自分の葉月に対する想いは消えない。

諦めきれない。

「アンタだって気付いてんだろ！！　その葉月さんの気持ちはずっとアンタに…アンタに……ッ」

結城は握る缶コーヒーを変形する位にまで強く握り締めながら

「今日…俺がアンタに会おうと思ったのは、自分なりのけじめを着けたかったから…西条亨！！　ハッキリと答えろ！！　アンタは、葉月さんが好きなのか、そうでないのか！！」

結城は問う。

「さっきも言ったけど、彼女の気持ちは、ずっとアンタに向けられている…アンタはそんな、葉月さんの気持ちに応えるつもりはあるのか！？」

結城が願いつつも決して叶えられない望み。

本当は自分がそうで在りたかった夢を、他の何者かに明け渡すという重み。

そうして、西条亨は一言だけ告げると、首を縦に振った。

「…ッ、やっぱり俺は…アンタが大嫌いだ」

亨の返事を聞いた結城は苦笑いして、呟いた。

※

烏丸葉月は公園の植木の陰に隠れながら、彼らの会話を聞いていた。

まだ距離が離れている為、彼らの会話は断片的にしか聞き取れない。

しかし、何となく分かった。

なぜ接点がない結城雅一に西条亨がこの場に居合わせて、話しているのか。

その理由が分かってしまった。

誰を巡って。

誰のために。

葉月はブンブンブン！と勢い良く首を横に振る。

（ううう…）

葉月は背中を預けた植木の幹の前から動けなかった。

顔が赤くなるのが鏡を見なくても分かる。

西条亨のあんな台詞を聞いて、次に会った時にはどんな顔をして会えば良いというんだろうか。

最後の西条亨の台詞。

（どうしよう…私…ッ、ああもう！この気持ち、どうすれば良いのよ、あの馬鹿！）

葉月は溜め息をついた。

赤くなった顔が元に戻るまで、どれくらいの時間が掛かるのか予想もできなかった。

※

拓夜がデュエルに勝利し、偽物達は客から入手したカードをそれぞれに謝りながら返していた。

その様子を満足げに見ていた拓夜に成瀬だったが、結締に白石はそれぞれに難しい表情をしていた。

「結締よ、今回の件…お前はどう思う？」

「ん～、コイツ等の単なる悪ふざけで済めばとは考えてるぜぃ…白石さんは？」

「ふぅん…俺もそうであると願たい、だが…」

言葉を詰まらせる白石。

皆が居るこの場で、ここから先を口に出しても良いのかという気持ちが、白石の表情に陰をつくる。

「とりあえず、今回の件は西条ちゃんに報告だけしておくぜぃ？」

結締の言葉に白石は頷く。

すると結締は、それまでの表情が無かったかのように朗らかな笑顔に変わり、客達の輪の中へと入っていく。

「さァて皆、カードは返してもらったか？　今日は大サービスだぜぃ！何と、白石さんが皆の為にカードパックを買ってくれるらしいぜよ！！」

「なにッ！？　貴様ァ！！　勝手な事をーー」

白石も輪に加わり、店内は一段と盛り上がりを見せる。

拓夜に成瀬はその様子を眺めながら、実感した。

ＯＣＧ研究会というチーム。

その名に寄せられる、皆からの憧れを。

その想いを。

ちなみに

結局、白石は本当に何十人分もの要望に応え、カードを買わされる羽目になってしまった。

譲れない気持ち　（後書き）

今回の話はいかがでしたでしょうか？

タイトルは『譲れない気持ち』

西条拓夜からすれば、自分の目標とする人物や、彼女を守りたい気持ち。

西条亨からすれば、自分を想ってくれる人物を愛しむ気持ち。

それぞれの描写から掛け合わせてみました。

話は変わり、アニメの遊戯王５Ｄｓ…あ、６Ｄｓね。

ついにＺ－ＯＮＥとのデュエルが始まりました。

遊星は仲間から託されたカードで、強大な敵に立ち向かう…

って、あれ？

なんか僕、そんな話を書いたような…

迫る闇

※

後期の授業日数も残り少なく、東区第七高等学校は卒業式の準備に取り掛かっている。

冬の乾いた風が吹き荒ぶ中、体育館の中は暖房によって乾いた空気に包まれていた。

本日の授業も終了し、体育館の中には終業式の打ち合わせや準備に取り組む生徒達だけが残っており、その生徒達の中には成瀬花穂の姿もあった。

打ち合わせや準備と言っても、大まかな確認だけである。

去年の卒業式の段取りをそれぞれの担当が確認するだけの集まり。

大抵の生徒は、たったそれだけの為に貴重な放課後の時間を取られるため、自ら率先してこの取り組みに参加する生徒は少ない。

しかし、成瀬は違った。

成瀬は現在、今年卒業する西条拓夜と恋人同士の関係にある。

別に彼が卒業しても会えなくなる訳ではないのだが、同じ学校で一緒に過ごす時間が減るというのは辛い思いがあった。

拓夜だけではなく、烏丸葉月にも同じ事が言える。

葉月には学校生活で良くお世話になった。

勉強を教えて貰ったりもしたし、一緒に遊んだりもした。

上級生との付き合いが多い分、成瀬にとって今回の卒業生達には一生の思い出に残るものにして欲しかった。

「これまで通り、卒業式の内容はプリントに記された通りに進めたいと思います」

今回の集まりのリーダーが、最後に何か意見はないかと尋ねてくる。

プリントに記された内容は、殆どが去年と一緒のプログラムだった。

別に成瀬自身、今回の卒業式に特別な内容を期待していた訳ではない。

しかし、日頃からお世話になった拓夜や葉月に対して、何かしてあげたいという気持ちもある。

（…ダメもとでも一度だけでも良いから、お話しだけしてみましょうか）

そう思うと成瀬は手を上げて、自分の希望を口に出した。

※

西条拓夜が自宅前の交差点に差し掛かると、目の前の異様な光景に大きく目を見開いた。

自宅前に子供達がワラワラと集まっているのだ。

「な…何だ…あの集団は…ッ！？」

子供達の集団の奥には何やらゲームセンターで見かけるエアホッケーのゲーム機らしき機材が置かれている。

そんなゲームセンターのような機材など、我が家には無かった筈だが…

と、拓夜は思いながら交差点を渡り、帰宅する。

家に入る際に子供達の集団を横目で確認するが、子供達に阻まれてそれが何なのかが分からない。

気になる拓夜であったが、とりあえず屋内に入ると

「おぅ拓夜、お帰り」

「拓夜ちゃん、帰ってくるのが遅いぜよ」

「ただいま父さん、結締さ……って、は!?　何で結締さんが家に居るんスか!?」

レジにて拓夜を出迎える父親と結締に、主に結締の存在に驚く拓夜を、当の本人もとい結締は、何食わぬ顔で

「また成瀬ちゃんとイチャついて来たんか?あ~羨ましいぜぃコノヤロー」

「ち、違いますよ!?　って、それよりもどうして結締さんが家に…それに外には何か機械が置いてあるし…?」

視線を外に向けると子供達の集団が。
その集団に取り囲まれる形で置かれた、まるでエアホッケーのような大きさの機械。
拓夜がその事について尋ねると
「あれはだな、トリティニーグループから貸し出してもらったんだ」
「トリティニーグループから？」
父親の言葉に首を傾げる拓夜に、今度は結締が説明を始めた。
「トリティニーグループは遊戯王カードの発展の為に、新たな取り組みを始めたんだぜぃ。トリティニーグループの売りは何と言っても、決闘盤やソリッドヴィジョンシステム…拓夜ちゃん、決闘盤が市場ではいくらの値段で出回っているか、知ってるかにゃ？」
「え？…確か、数万円は」
「そう…扱う機械部品が高価なせいで、値段はどうしても万単位は超えちまう…ある程度、自分で収入を得ている奴ならともかく、小さいお子様達にゃあ手も出せない値段だぜぃ？」

「た、確かに…」

「早乙女社長は、遊戯王カードの幅広い年層での広がりを求めている。そんで開発されたのが、ソレなんだぜよ」

結締に拓夜は一緒に外に出て、子供達が注目するその機械の前に立った。

「これがトリティニーグループの新開発商品のデュエルテーブルだぜぃ」

よく見るとソレはエアホッケーのゲームではなく、デュエルフィールドが組み込まれた機械だった。

拓夜は前にも、このデュエルテーブルを見たことがある気がした。

「これ…まさか、結締さん達が通う大学の…」

「そうそう、あのドーム全体に使われたデュエルフィールドな。アレを応用して小型化し、尚且つ余計な部分を取り除いて出来たのが、このデュエルテーブルだぜぃ。この大きさならゲーセンにも配置で

きるし、こういったカードショップなんかにも置く事ができる。ワンコインで1マッチ分のデュエルができるから、お子様ウケにゃあ持ってこいな訳だぜぃ！」

「…凄ぇ」

拓夜はそれ以外の言葉が出てこなかった。

決闘盤の開発だけに留まらず、更にそこからの幅広い年齢層への顧客の獲得。

一つの商品に、これほどまでの狙いが込められているとは、拓夜は考えた事が無かった。

実際、目の前にしたデュエルテーブルでは、東区の子供達が集まって、デュエルテーブルを利用してデュエルを行っている。

集まった子供達の表情は、どれも楽しそうな笑顔ばかりであった。

「今日、俺が拓夜ちゃんの家に来たのは、このデュエルテーブルを営業する為だにゃ～、ここはその第一歩だぜぃ」

「…トリティニーグループは決闘盤だけじゃなくて…これも全国に？」

「当然だぜぃ。カードにおける発展と交流…それがマナちゃんの願

いでもあり、西条ちゃんや白石さん、そして俺達、ＯＣＧ研究会の願いでもある訳だからな！」

ニカッと白い歯を見せて無邪気に笑う結締。

拓夜はそんな結締を素直に、格好いいなと思った。

※

烏丸葉月は胸をドキドキさせながら、東区の郊外に在るＯＣＧ研究会事務所兼、西条亨宅の前に立っていた。

ドアの前に立ち、大きな深呼吸を何度も繰り返す。

「だ、大丈夫…、大丈夫…」

何度も口に出しては自分に言い聞かせる。

（普段通りに接すれば良いだけよ…そう、普段通りに…）

葉月の脳裏に蘇るあの日の出来事。

塾の帰りに公園で、偶然聞いてしまった西条亨の言葉。

今、思い返しただけでも自分の顔が真っ赤になっていくのが分かる。

「うぅ…ッ」

駐車場には西条亨の車が停まっている。

彼が今、この部屋に居るのは間違いない。

今日は特にＯＣＧ研究会が集まる日ではないのだが、葉月は帰宅途中に無意識にこちらに来ていた。

話のネタとしては、自分の進学先についてでも話そうか、などと考えてはいたが、いざドアの前に立つと緊張からか、なかなか後一歩が踏み出せない。

「と、とにかくッ…行くわよ、私！！」

意を決した葉月はそう言うと、勢い良くドアを開けた。

「こ、こんにちはッ！！」

玄関を上がり部屋に入ると、そこに居たのは

「ム、誰かと思えば…美少女か。どうした？」

部屋の中には机の上に書類を広げて、デスクワークに勤しむ白石直也の姿だけであった。

「…あれ？白石さんだけ？…亨さんは？外に車があったから、今日は居るのかなと思ったんだけど…」

「ふぅん、西条の奴は中島理事長と一緒に外に出ている…何だ、美少女は西条に何か用があったのか？」

走らせるペンを止めて大きく背伸びをしながら、白石はガックリと首を落とす葉月に尋ねた。

「ぅぅ…何か本人が居なくてホッとした様な…残念な様な…」

「ム？…何のことだか分からんが、俺で良ければ話を聞くが？」

「え、だ、大丈夫よ…大した事じゃないし…ちょっと、寄り道しがてらって感じで来ただけだから」

ぎこちない笑みを浮かべる葉月に、白石は「そうか…」と呟くと、再び書類とにらめっこをしながらペンを走らせた。

「ところで、白石さんは何を書いてるの？」

「これは今度のトリティニーグループが主催するデュエル教室に関する企画書だ。今はその企画内容の点検を…ム、これでは手順が…」

真剣な眼差しで仕事に専念する白石を初めて見た葉月は、その姿に少し戸惑った。

普段ならば「ふぬぉおッ！！美少女よォオ！！」と壊れる白石なのだが、今回はそんな素振りすら見せないからだ。

それだけ、現在着手しているデュエル教室のプラン作成に集中しているのだろう。

（…なんか、邪魔かな？それに亨さんも居ないし…）

帰ろ。

葉月がそう思った時、部屋の中から葉月を呼び止める声が聞こえた。

『お姉ちゃん！』

「っ！？　って、ウィンダか」

葉月が声のする方を向くと、そこには『ガスタの巫女ウィンダ』の

カードが置かれていた。

葉月はウィンダのカードを拾い上げ、カードと会話を始めた。

『お姉ちゃん、散歩に連れてって！最近お兄ちゃん忙しくて、余り外に連れてってもらえてないんだ』

「ええ…構わないけど…」

散歩に連れて行く。

それはウィンダのカードを持って、外を出歩くという事で良いのだろう。

しかし、このウィンダのカードは西条亨のカードだ。

本人の了承も得ず、勝手に持ち出しても良いのだろうか？と葉月が悩んでいると

「構わんだろう」

白石が葉月とウィンダの会話を聞いていたのか、西条亨の代わりに

返事をする。

「西条の奴には俺から伝えておく。ウィンダは美少女と一緒に楽しんでこればいい」

「え、え…ちょっと待ってよ！？」

葉月は慌てて、驚きを露わにしながら白石に尋ねた。

「白石さんも…ウィンダの声が、聞こえるの？」

「ふぅん…当然だ。美少女は知っていると思うが、俺や西条、そして結締の3人はウィンダ達の世界に行った事があるからな…ある程度の奴等の声は聞くことができる」

「……」

そういえば以前、白石とデュエルした時に自分はウィンダと会話しながらデュエルを行っていた。

あの時は頭の中が西条亨の事でいっぱいだった為に、余り気にはならなかったが、あのデュエルで白石が変に言ってこなかった理由は

そういう事だったのか、と思った。

「じゃあ行こっか、ウィンダ」

『うん！アタシ、今日はお姉ちゃんの家にお泊まりしたい！』

「別に構わないわよ。でもちゃんと亨さんに言っておかないとね？」

「お泊まりだとッ！？　ウィンダよ、美少女の家に泊まっても良いのはこの俺だグボォッ！！？？」

いきなり暴走した白石を回し蹴りで去なした葉月は、笑顔でウィンダと一緒に部屋を出て行った。

やはり、白石はいつも通りの白石であった。

※

南区の廃工場の錆び付いた扉が軋む。

ギギギ…、と重たい音を立ててドアが開かれると、そこから西条亨が出てきた。

「すまない中島さん、どうやら逃げられたみたいだ」

「ん～、これで今日だけでも17件目よ。西条ちゃん、貴方の身体は大丈夫なの？」

廃工場の外で待っていた三柱付属大学の理事長、中島は、西条亨の様子を見て心配する。

「焦る気持ちも分かるけど、このままじゃ西条ちゃんの身体が保たないわよ？」

「でも…邪神（ヤツ）を放っておく訳には…」

「なら尚更じゃないかしら？もしかしたら、こうやって貴方を消耗させるのが、向こうの手口なのかもしれないし」

西条亨に中島は、早朝から夜にかけてずっとこの調子であった。

精霊界の力を通じて西条亨は邪神の居場所をある程度は感知する事ができた。

しかしそれは邪神も同じ様で、西条亨の接近を感知しては逃げ、感知しては逃げの繰り返しであった。

「結締からの報告も入ってる…少しずつだが、確実にヤツの影響が顕れているんだ…焦るなって言う方が…痛ッ！？」

西条亨の頭に中島の拳骨が炸裂した。

「大人の言うことを聞きなさい！！　分からない様なら、もう１４発は叩き込むわよ？」

「ちょっ、そんな拳に息を吹きかけないで下さいよ！？　分かりました、分かりましたから！！」

西条亨は自分の頭をさすりながら後ずさる。

あのまま自分が何かを言えば、中島は容赦なく拳骨をぶちかますだろう。

西条亨が納得したのを確認すると、中島は西条亨を自分の車に乗せ、東区へと帰って行った。

※

烏丸葉月に成瀬花穂の2人は、夜の東区の住宅街を歩いていた。

まだ時刻は18時を過ぎた辺りだが、冬の時期のこの時間は日が暮れるのが早い。

葉月は西条亨宅からの帰宅途中に、成瀬花穂は学校帰りの途中に互いに出会い、一緒に途中まで帰る事になった。

「へぇ、OCG研究会の偽物ねぇ…そんなヤツらも居るんだ」

「でも、拓夜さんがデュエルで勝ってくれたおかげで、無事に収集がつきました！」

「なんだか…聞けば聞くほど拓夜のヤツ、どんどん強くなってるわね」

先日、西区のカードショップに現れたＯＣＧ研究会の偽物の話をする成瀬。

そんな成瀬の話を聞いた葉月は、鞄の中に入っている自分のデッキに視線を落とす。

『お姉ちゃん今、デュエルがしたいって思ったでしょ？』

「っ！？」

ビクッと肩を跳ね上げる葉月。

コートのポケットの中に入れてあるウィンダが突如話しかけてきた為に、一瞬だが驚いてしまった。

「アンタ…読心術でも使える訳？」

「え、読心術ですか？　流石に私は無理ですけど…」

「えっ！？　ああゴメン！！　別に成瀬さんに言った訳じゃないの！！」

どうやら成瀬は自分に言われたと勘違いしたらしい。
今でも不思議そうに首を傾げながら葉月を見ている。

（ちょっとウィンダ！アンタの声って、成瀬さんには聞こえないの？）

『みたいだね…まだ私は人間界に具現化できてないから、まだ全ての人に声が届く訳じゃないみたい…』

自分1人でウィンダと話しているなら別に構わないが、第三者からすれば自分は可笑しな人に見えるのだろう。

葉月がそんな事を思い1人唸っていると、隣で歩く成瀬の足がピタリと止まった。

「どうしたの、成瀬さん…ッ！？」

葉月も立ち止まり、成瀬を見ると、成瀬は驚きに満ちた表情で固まっていた。

「あ…あの人は…！？」

『お姉ちゃん！アレ！！』

「ッ！？」

ウィンダに言われて辺りを確認する葉月。

すると、いつの間にか自分達の前に1人の女性が立っていた。

朱色の髪を靡かせ、卑しい笑みを浮かべるその女。

葉月達は見間違える筈がなかった。

「アンタは…ツィスカ・ベルセリオス！？」

「あら？　私の事を覚えていてくれて光栄だわ」

クスクスと不気味に笑うツィスカに、葉月は成瀬を庇う様にしてツィスカを睨み付ける。

ツィスカ・ベルセリオス。

葉月に成瀬の中では、彼女はラドルフの秘書を務めている者としか知らなかった。

トリティニーグループにクーデターを仕掛けた主犯格の仲間。

その情報しか葉月達は知らなかった。

葉月や成瀬にとって、ラドルフ達は敵。

そのイメージから、葉月は険しい表情で一歩、二歩と引き下がる。

「フフフ…そんなに警戒しなくても良いわよ?私はちょっと、その子に用があるだけッ!!」

ドカッ!!

「ぐっ!?」

「っ葉月さん!?」

ツィスカは葉月に体当たりをすると、口端を歪ませながら笑う。

「フフフ…精霊のカード、これで邪神様の復活に近付いた」

『お、お姉ちゃんっ！！』

「ウィンダ！？　ちょっと、アンタ！！　そのカードを返しなさいよ！！」

葉月の上着のポケットからウィンダのカードをかすめ取ったツィスカ。

自分に対し、今にも飛びかかって来そうな葉月に対して、ツィスカはどこからか決闘盤を取り出し、葉月に投げ渡した。

「そんなにこのカードが返して欲しいのなら、私とデュエルしましょう？私に勝てたら、このカードは返してあげるわ」

ツィスカからのデュエルの申し込みに、葉月は即座に反応した。

言われるが直ぐに、決闘盤を装着し、鞄からデッキを取り出してセットする葉月。

「上等ッ！！」

「葉月さん、待って下さい！！」

そんな葉月を見て静止の声をかける成瀬。

成瀬はツィスカという女性に対して不気味に感じていた。

まるで狙っていたかの様に、葉月からカードを取り上げ、デュエルをするにまで事を運んだツィスカ。

成瀬はこれが、罠ではないかと考えていた。

「危険です！誰か、助けを呼んだ方がーー」

「助けを呼んでる間に、あの子（ウィンダ）が連れてかれちゃうわよ！！　それに私がデュエルで勝てば、全て解決する話よ！！」

葉月は冷静ではなかった。

今の葉月には、何を言っても聞き入れてくれないだろうと思った成瀬は、ポケットから携帯電話を取り出した。

『お姉ちゃん、助けて！！』

「フフフ…、準備は良いかしら？」

「ウィンダ、待ってなさい！！　こんな相手、一瞬で蹴りをつけてやるわ！！」

夜の闇に包まれた東区にて、葉月とツィスカのデュエルが幕を切った。

ツィスカ

※

その日の夜、東区の商店街に在るおもちゃ屋『サプライズ』に住む少年、西条拓夜は、自室にて自分のデッキ調整を行っていた。

自分の中で、どんどん結締に対する憧れが強くなる。

今まではＯＣＧ研究会の先輩としか見ていなかった。

しかし、ＨＥＲＯデッキ使いの先輩としてデュエルを引き受けてくれた日を境に、拓夜の中では結締が目標になっていた。

「凄いな…あの人達は」

思わずポツリと呟く。

結締だけでなく、西条亨や白石直也にも言える事だが、同じＯＣＧ研究会の人間でも、あの三人は格が違う気がする。

デッキを組み上げながら思わず溜め息が出てしまいそうになる。

「おっと、自分一人で勝手に悄げてても仕方ないよな。あの人達はあの人達、俺は俺だ…」

机の上いっぱいに広がるカード達。

「この中から、世界に一つだけの…俺だけのデッキにするんだ。そして…」

瞳を輝かせながら一枚一枚のカードを集め、組み上げる拓夜。

そして遂にデッキの調整を終えた拓夜は、決意を新たに。

「できた…俺の、新たなデッキ!!　このデッキで俺は、あの人達とデュエルしてェ!!」

そして勝ちたい。

結締、並びにＯＣＧ研究会の先輩達三人。

拓夜の目標は、先輩達三人をデュエルで倒す事。

「早速デュエルしたいけど、もう外は暗いし…また明日にでも…ん？」

窓の外の景色を見ていると、机に置いてあった携帯電話の着信音が鳴る。

拓夜はおもむろに携帯電話を手に取り、受話器を耳に当てた。

「もしもし、花穂？」

『拓夜さんっ、助けて下さい！！』

※

東区の住宅街は夜の闇に包まれ、街灯の灯りが三人の人影を長く伸ばす。

不気味に笑うツィスカ・ベルセリオス。

対峙する烏丸葉月、そして拓夜に連絡を終えた成瀬花穂。

ツィスカはまた、どこからか決闘盤を取り出すと、自分の腕に装着した。

「さ、始めましょう？」

余裕の笑みが、かえって不気味さを増す。

そんなツィスカに対し、葉月はデッキトップに指を添えて

「速攻で終わらせる！！　行くわよ、私のターン、ドローッ！！」

葉月がカードをドローした事により、葉月にツィスカ、二人のデュエルが始まった。

【先攻】烏丸葉月
ＬＰ／　８０００
【後攻】ツィスカ
ＬＰ／　８０００

デッキからカードをドローした葉月の行動は早かった。
六枚の手札の中から、一枚のカードを掴んだ葉月は

「『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』を召喚！」

【ＢＦ－精鋭のゼピュロス】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１６００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を手札に戻して発動する。このカードを墓地から特殊召喚し、自分は４００ポイントダメージを受ける。「ＢＦ－精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

「そして手札より、チューナーモンスター『ＢＦ－疾風のゲイル』を特殊召喚ッ！！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　４００
［効果・チューナー］
自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

葉月のフィールドに精鋭のゼピュロス、そして疾風のゲイルの２体のモンスターが並ぶ。

「レベル４の『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』に、レベル３『ＢＦ－疾風のゲイル』をチューニングッ！！」

葉月の２体のモンスターの星が一つになり、彼女のエースモンスターが登場した。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれ！シンクロ召喚！『ＢＦ－アーマード・ウィング』！！」

【ＢＦ－アーマード・ウィング】
星７／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　１５００
［シンクロ／効果］
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで０にする。

葉月のフィールドに現れたアーマード・ウィング。

対するツィスカは余裕の表情を崩す事なく、不敵な笑みを浮かべ続けている。

「アーマード・ウィングは、戦闘では破壊されないモンスターよ！！私のターンは終了よ！！」

（私の手札には『ダーク・バースト』がある！この効果で、墓地のゲイルを使い回す！！）

葉月のターンが終了し、ツィスカのターンへと移行する。

ツィスカは葉月のモンスターを見て、クスリと笑った。

「何がおかしいのよ？」

「フフフ…何が出てくるかと思えば、薄汚いカラス？天空を舞うには、少し奢りが過ぎるんじゃないかしら？」

「アンタ…喧嘩売ってんの？」

こめかみをヒクリとさせる葉月を見ても、ツィスカは余裕の笑みを崩す事なく、自分のターンを開始した。

「フフ…私のターン、ドロー。手札の『シャドウ・リチュア』のモンスター効果を発動するわ」

【シャドウ・リチュア】
星４／水属性／海竜族
ＡＴＫ　１２００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード１枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。また、手札からこのカードを捨てる事で、自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式魔法カード１枚を手札に加える。

「『シャドウ・リチュア』を手札から捨てる事で、私はデッキから儀式魔法『リチュアの儀水鏡』を手札に加える」

デッキから儀式魔法を手札に加えたツィスカ。

葉月は聞き慣れない【リチュア】というカードに対し、警戒する。

「そして儀式魔法『リチュアの儀水鏡』を発動するわ」

【リチュアの儀水鏡】
［儀式魔法］
「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。手札・自分フィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならない。また、墓地に存在するこのカードをデッキに戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す。

「儀式の生け贄として、私は手札の『シャドウ・リチュア』をリリースするわ。『シャドウ・リチュア』は、水属性の儀式召喚の為のリリース1体分として補う効果も持ってるの…」

ツィスカの手札から2枚目の『シャドウ・リチュア』がリリースされた。

そして

「深海の底よりお出でなさい、『イビリチュア・マインドオーガス』！！」

【イビリチュア・マインドオーガス】
星６／水属性／水族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［儀式／効果］
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。このカードが儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計５枚まで選択し、持ち主のデッキに戻す。

ドドドドド…ッ！！

ツィスカのフィールドに降臨せし『イビリチュア・マインドオーガス』。

葉月に成瀬は、自分達の知らないモンスターの儀式召喚に驚き、戸惑っていた。

すると

『嘘…イビリチュアって、エリアちゃん？エリアちゃんだよね！？お願い、返事をして、エリアちゃん！！』

ツィスカに捕らわれたウィンダが、必死になってツィスカの召喚したモンスターに呼び掛ける。

しかし、ツィスカのモンスター『イビリチュア・マインドオーガス』からの返事はない。

「…ウィンダ、アンタの…友達なの？」

「フフフ…、よく分かったわね？でも、何を言っても無駄よ。貴女のお友達は、私がじっくりと調教してあげた甲斐があって今ではすっかり、純粋な邪神様の奴隷…このデュエルが終わったら、貴女もたっぷりと可愛がってあげるわ」

「ッそんな事、させるもんですか！！」

ツィスカの言葉に憤る葉月。

「アンタに勝って、ウィンダだけじゃない！ウィンダの友達も一緒に返してもらうわよ！！」

意気込む葉月だが、ツィスカはそんな葉月を「はいはい」と軽くあ

しらう。

「私に勝てたら、ね？まだデュエルの途中よ？」

ツィスカはそう言うと、マインドオーガスに手を翳し、効果を発動した。

「『イビリチュア・マインドオーガス』の効果発動、このカードが儀式召喚に成功した時、お互いの墓地のカードを合計5枚まで選択して、デッキに戻す…ソウル・リターン！」

「なっ！？」

マインドオーガスの効果が炸裂し、葉月の墓地に眠る計2枚のカード。

『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』に『ＢＦ－疾風のゲイル』のカードはデッキに戻されてしまった。

「くっ！？　私の墓地が…がら空きに…！！」

「でも、ツィスカという人のモンスター、『イビリチュア・マインドオーガス』の攻撃力は２５００、まだ葉月さんのフィールドには、戦闘では破壊されない『ＢＦ－アーマード・ウィング』が残っています！」

フィールドの状況を見て言う成瀬だが、ツィスカは小馬鹿にしたような口調で言い放った。

「確かにお嬢ちゃんの言うとおりだけど、忘れてないかしら？私はまだ儀式召喚をしただけで、まだ通常の召喚権は残っているのよ？」

「ッ！？」

「フフフ…チューナーモンスター『深海のディーヴァ』を召喚、そして効果を発動するわ！」

【深海のディーヴァ】
星２／水属性／海竜族
ＡＴＫ　２００
ＤＥＦ　４００
［効果・チューナー］
このカードが召喚に成功した時、自分のデッキからレベル３以下の海竜族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「『深海のディーヴァ』の効果により、私はデッキからレベル1の海竜族モンスター『氷結界の輸送部隊』を特殊召喚」

【氷結界の輸送部隊】
星1／水属性／海竜族
ＡＴＫ　５００
ＤＥＦ　２００
［効果］
自分の墓地に存在する「氷結界」と名のついたモンスター2体を選択して発動する。選択したモンスターをデッキに戻し、お互いにデッキからカードを1枚ドローする。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ツィスカのフィールドに出揃う3体のモンスター。
そのモンスター達の星（レベル）の合計は…

「ッ！？　まさかッ！？」

「フフフ…レベル1の『氷結界の輸送部隊』と、レベル6の『イビ

リチュア・マインドオーガス』に、レベル２『深海のディーヴァ』をチューニング！」

１＋６＋２＝９

「絶望を送ってアゲルわ…シンクロ召喚！お出でなさい、『氷結界の龍　トリシューラ』！」

【氷結界の龍　トリシューラ】
星９／水属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２７００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の手札・フィールド上・墓地のカードをそれぞれ１枚までゲームから除外する事ができる。

ドドドドド…！！

「ト…トリシューラ…ッ！！」

「そんな…！？」

ツィスカのフィールドに顕現せし絶望、トリシューラ。

その三つ首の眼光の内、二つが赤く光る。

「トリシューラの効果を発動するわ。このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手のフィールド、手札、墓地のカードを1枚ずつ除外する事ができる」

葉月のフィールドには『ＢＦ－アーマード・ウィング』のみ。

墓地にはカードが存在せず、手札の数は４枚。

「先ずは薄汚いカラス…アーマード・ウィングを除外」

ズゴゥッ！！

「そして貴女の手札…貴女から見て、１番右側の手札を除外」

「くっ！？　極北のブリザードが…ッ！！」

フィールド、そして手札からカードを除外された葉月の場はがら空きだった。

そんな葉月を相手に、ツィスカは容赦なくバトルフェイズへと突入する。

「覚悟は良いかしら？トリシューラでダイレクトアタック！」

「くっ！？　キャァアア！！」

「は、葉月さん！？」

【烏丸葉月】
ＬＰ／　８０００　→　５３００

【ツィスカ】
ＬＰ／　８０００

ダイレクトアタックを受けてライフを大幅に減らされる葉月。
その表情は、険しい表情から焦りの表情へと変わっていた。

（ヤバい…この人、強い…ッ！！）

「フフフ…私はカードを1枚伏せて、ターンエンド」

※

西条亨は一人、東区の商店街を歩いていた。
東区に入った所で中島の運転する車から下ろされ、真っ直ぐに帰るように言われたのだ。

「ったく、中島さん…送ってくれるなら、せめて家の前まで送って行ってくれても…」

別件の仕事が入った、と言い中島はそのままどこかへと行ってしまい、現在西条亨は一人である。

「…もうこんな時間だったのか、そりゃ中島さんもああ言う訳だ」

携帯電話に表示された時計の時刻は１９時を回っていた。

早朝の５時から外に出ていた為に、結構な時間と距離になっていた。

「とにかく今日は帰って…ッ？」

帰って休もうとする西条亨だったが、その考えは消えた。

その理由は

（この気配は…まさかッ、邪神が…東区（ここ）にッ！？）

思わず辺りを見渡す西条亨。

すると、1人の少年の姿が目に入った。

西条拓夜である。

拓夜はどこか慌てた様子で、西条亨とは反対側の道を走っていた。

「拓夜くん！」

「ッ！？　と、亨さん！！」

呼ばれて気付いたらしく、拓夜は慌てた様子で西条亨の前に走る。

「どうしたんだ？なんか切羽詰まった感じがするんだが？」

「ッ…亨さん、力を貸して下さい！花穂と…葉月がーーッ！！」

※

【烏丸葉月】
ＬＰ／　５３００

【ツィスカ】
ＬＰ／　８０００

夜の冷たい風が吹き荒ぶ。

ライフポイントが劣勢で迎えた葉月のターン。

葉月のフィールドにはモンスターも魔法も罠もなく、更には墓地にもカードが１枚も無い状況であった。

対するツィスカのフィールドには『氷結界の龍　トリシューラ』に、１枚のリバースカード。

（トリシューラの効果が痛い…それだけじゃないわ。あのリチュアの儀式モンスター『イビリチュア・マインドオーガス』…次は気を付けないと）

冷静になるように自分に言い聞かせる葉月。

葉月の後ろに立つ成瀬は、葉月と対峙するツィスカが怖かった。
柔和な笑み、とも取れなくはないが、ツィスカから放たれる雰囲気は他を圧倒する何かがあった。

「こそ泥みたいな真似する割には、なかなかやるじゃない？」

「こそ泥だなんて、解釈を間違えないでもらえるかしら？私は堂々と貴女からカードを奪うつもりでいるの。それより、サッサと貴女のターンを始めなさい」

「…ッ、行くわよ！私のターン！！」

カードをドローした葉月。

ドローした葉月は手札を確認し、キッとツィスカのトリシューラを睨む。

「このカードで…『ＢＦ－蒼炎のシュラ』を召喚ッ！！」

【ＢＦ－蒼炎のシュラ】
星４／闇属性／鳥獣族

ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１２００
［効果］
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

葉月のフィールドに蒼炎のシュラが召喚される。

このまま攻撃をしても、攻撃力１８００の蒼炎のシュラでは、ツィスカのトリシューラには勝てない。

しかし

（でも私の手札には、月影のカルートがある！カルートの効果を使えば、シュラを攻撃力は３２００になる！）

葉月が意気込んだその時、ツィスカが動いた。

「フフフ…【ＢＦ】には手札から墓地に送る事で、効果を発揮するカードがあったわね？」

「ッ！？」

「私のトリシューラを前に、低レベルモンスターを召喚したのがその証拠…私は貴女のモンスターの召喚に対して、このカードを発動するわ！罠カード『狡猾な落とし穴』を発動！」

【狡猾な落とし穴】
［罠カード］
フィールド上に存在するモンスター2体を破壊する。自分の墓地に罠カードが存在する場合、このカードは発動できない。

「このカードはフィールド上のモンスター2体を破壊する罠カード。貴女のモンスター『ＢＦ－蒼炎のシュラ』と、私のフィールドの『氷結界の龍　トリシューラ』を破壊するわ」

ズゴゥッ！！
バコォッ！！

「そんなッ！？」

モンスターを召喚してしまった葉月に手は残されていなかった。

葉月の手札は3枚。

『ダーク・バースト』
『BF－月影のカルート』
『貪欲な壺』

そんな葉月は、こう言うしかなかった。

「…ッ、ターン…エンド」

「あら、もうオシマイ？速攻で私を倒すんじゃなかったの？」

「く…ッ！！」

歯を食いしばる葉月。

そして不安が募る成瀬。

そんな2人を見て、楽しむように、ツィスカは自分のターンを開始しながら話す。

「フフフ…不思議だわ。こんな実力しかない雑魚が何故、精霊のカ

ードを持っているのか。まあ、おかげで精霊のカードを回収し易くて助かるけれど……ッ！？」

カードをドローしたツィスカ。

しかしドローしたと同時、それまで余裕な態度でいたツィスカだが、急にその表情が強張った。

（この気配…西条亨か。チッ、もうこちらに向かっているみたいね…）

「どうやらゆっくりできる時間が無くなったみたい…場所を移しましょ？」

ツィスカはそう言うと右手を翳し、パチンと指を鳴らす。

その瞬間、

「むぐぅッ！？」

「ッ！！　成瀬さん！？」

葉月が成瀬の方を向くと、そこにはどこからか現れた数人の男が、成瀬の口元にハンカチを当てていた。

背後から取り押さえられ、ハンカチを口元に覆われた成瀬は、次第に抵抗する力を失ったのか、ガクッとその場に倒れ込んでしまった。

「なッ、何なのよアンタ達はッ！？　ン〝ン〝ッ！？　ン〝ーーッッ」

同様に、葉月も背後から男達によって羽交い締めにされ、口元にハンカチを押し付けられてしまう。

抵抗すればする程、息遣いが荒くなる。

（何、この匂い…まさか…クロロホルム…と…亨さん…）

恐らく成瀬も同じものを嗅がされたのだろう。

次第に力が入らなくなった葉月は、トロンと虚ろな表情になり、遂

には意識を失ってしまった。

『お姉ちゃん！？　お姉ちゃん！！』

「ああもう、ウルサいわ、ねッ！」

「痛っ！！」

自分の上着のポケットに入る『ガスタの巫女　ウィンダ』のカードを指で弾く。

「痛い思いをしたくなかったら、黙ってなさい？」

男達は意識を失った葉月と成瀬を抱え、ツィスカの前に並ぶ。

ツィスカは左目を赤紫色に輝かせながら、男達に命令を下した。

「撤収するわよ？　プランＡ－３を使い、ポイントＤに集合。無事にその２人を連れて来れたら、ご褒美をア・ゲ・ル」

※

西条亨と西条拓夜の2人は、東区の住宅街を走っていた。

拓夜の下に入った、成瀬からの助けてとの電話。

そして、西条亨が感知した邪神の気配。

拓夜と亨の2人は、成瀬に葉月の2人の姿を探してはいるが、一向に見つからなかった。

「ハァッ、ハァッ…畜生、どこに居るんだよ!花穂から連絡があった場所は、ここで間違いない筈なのに!!」

「……」

膝に手をつき、息を切らせる拓夜。

西条亨の表情は険しく、力みすぎて震える程に、強く拳を握りしめていた。

（…俺は今まで、何をやってきたんだ！！）

隣で必死になって、自分の大切な彼女を探す拓夜を見て、西条亨は自分を殴りたくなる位の衝撃を受けた。

（こうなる事を未然に防ぐ為にッ、俺は…！！）

「亨さん…どうしよう？花穂が…花穂が…！！」

「…拓夜くん」

拓夜の気持ちが痛い程に理解できる。

自分の大切な存在が奪われた衝撃。

それに伴う理性の崩壊。

西条亨は一度経験している。

トリティニードームにて、自分の大切な存在が奪われた出来事。

その時の自分と今の拓夜が、西条亭には重なって見えた。

西条亭は再度、邪神の気配を辿る為に、右目の瞳に精霊界の力を込める。

すると、右目に宿る精霊界の力を通じて、今の自分達が立っている場所から、精霊界の風の力を帯びた魔力の流れが見えた。

（…ッ!?　この感じ、まさか…ウィン!?）

その魔力の流れは住宅街の奥へと続いており、それはまるで、コッチに自分達がいるぞ!という道標にも見えた。

「…拓夜くん、分かったよ。2人の居場所が」

「ッ!?　本当ですか!?」

西条亭の言葉に思わず顔をあげる拓夜。

そんな拓夜の懇願する瞳を見つめながら、西条亭は言う。

僅かでも良い。

僅かな希望を信じて。

「行こう、拓夜くん！自分達の手で、大切な人を取り戻すんだ！」

再臨、全ての元凶

※

南区は他の地区と比べ生産・製造業が盛んな地区である。

一角には工場が並び建ってはいるが、その中でも正式に稼働している工場は、全体の約６０％程しかない。

残りの約４０％は、建造されながらも使われていない工場だ。

建てられた当初は工業発展区域として、全ての工場のラインが稼働し、無数に登る煙突から煙が出ない日は無いとまで言われる位に製造業、生産業が栄えていた。

しかし、オイルショックや金融危機、バブルが弾けてから続く現代には、会社側にとっては全てのラインを稼働させる程の仕事量が無くなってしまった。

コスト削減、人員削減、経費削減。

ありとあらゆる物を削った結果、大規模なリストラが発生。

しかし、一度建てた工場を解体するには、また大量の金が必要になってくる。

しかし、会社側は解体させる程の金はなく、目の前の仕事に注ぎ込

む金で手一杯であった。

そんな理由から、南区には廃工場の数が、他の地区に比べて圧倒的に多かった。

そんな廃工場の内、一つだけ明かりが灯る工場があった。

その工場は普段、誰も出入りする事がない工場な為、社員の誰かが夜勤をしている訳ではない。

工場の中には、2人の少女が鎖で繋がれ、天井から吊されていた。

烏丸葉月に、成瀬花穂の2人である。

2人の手首には手錠が填められており、手錠の鎖にクレーンのフックが掛けられる格好で、2人は天井から吊される形になっていた。

「…ん…ここは…？」

意識が戻り、視界が徐々に鮮明になっていく葉月は、鎖で吊された現状を確認した。

「あたし…そっか、デュエルの途中で、変な奴らに襲われて…ッ、成瀬さん！成瀬さん、しっかりして！」

隣で同じように吊される成瀬に、必死に呼び掛ける葉月。

すると、葉月の呼び掛けに目を覚ました成瀬が、葉月に気付き返事を返した。

「ぅぅ…葉月さん？」

「良かった…意識が戻って」

「あの…ここは一体？」

成瀬に葉月は辺りをぐるりと見渡してみる。

薄暗い照明のせいでハッキリとは見えないが、どこかの工場である事は伺えた。

「どこかの工場みたいだけど…ッ！？　そういえば、ウィンダは！？　ウィンダはドコ！？」

「ウィンダって…葉月さん、それは一体何なんです？」

「…亨さんの…カードよ」

葉月が奪われた『ガスタの巫女　ウィンダ』。

元は西条亨の持つカード。

自分がそのカードを持ち出した事で、まさか敵に奪われる事になるなんて、その時は予想していなかった。

「あのツィスカって女が言うには、そのカードは特別なカードなの！悪用されたら…ッ」

「そう…だったんですか…でも、私も持ってないですし…恐らく、ツィスカが持ってるとしか…」

「…そんな…」

何をやっているのだろう、と葉月は思った。

先日、公園で西条亨の気持ちを偶然聞いてしまい、舞い上がったは良いが…。

結局、西条亨のカードを奪われ、更には自分達も捕まってしまうと

は。

こんなでは彼に迷惑を掛ける一方ではないか。

それと同時に葉月の中に不安が募っていく。

自分達はこれからどうなるのだろう?と。

助けも呼べない。

逃げ出す事もできない。

そんな事を考えていると、自分達が捕まっている工場の扉が、重たい音を立ててゆっくりと開かれた。

そこに現れたのは…

「フフフ…目は覚めたかしら?」

「…ツィスカ…ベルセリオスッ!!」

「あら怖い、そんな顔して睨まないでよ?」

ギギギギ…バタンッ!!

ガチャッ!!

重たい音を立てて、再び扉が、鍵が閉まる。

不敵な笑みを浮かべるツィスカの手には、葉月が探し求めていたカードが…。

『お姉ちゃん!!』

「ウィンダッ!!　くっ、ちょっとアンタ、この鎖…サッサと外しなさいよ!?」

体をくねらせて叫ぶ葉月に、ツィスカはクスクスと笑う。

「デュエルの続きよ!!　だからサッサとーー」

「あ～悪いケド、お嬢ちゃんとデュエルをしている暇はないみたいなの…」

ガンッ!!　ガンッ!!

金属でできた出入り口の扉が激しく揺れる。

そして扉の外から

「花穂ッ！？　葉月ッ！？　居たら返事をしろォッ！！」

「拓夜さん！！」

「…拓夜…」

成瀬にとって、待ち望んでいた声が聞こえた。

ツィスカは扉の方に向き直り、不敵な笑みから一変。

険しい表情に変貌し、低く重たい声で言った。

「どうやらもう追い付いたみたいね…」

（追跡が早すぎる…どうして…？）

※

南区の唯一明かりが灯った廃工場の入り口前。

そこには西条拓夜に西条亨の2人の姿があった。

拓夜は入り口の扉を力任せに低くが、扉は鍵が掛けられているのか微動だにしない。

「糞ッ!!」

拓夜は舌打ちすると、今度はその扉に向かって、助走をつけた体当たりを見舞う。

ガンッ!!　ガンッ!!

「花穂ッ!?　葉月ッ!?　居たら返事をしろォッ!!」

「拓夜さん!!」

「ッ、亨さん!!　やっぱり、花穂達はこの中に…ッ!?」

探し人からの返事が聞こえた拓夜は、思わず亨の方を振り向いた。
振り向いたと同時、拓夜は亨の右目を見て驚いた。
蒼く澄んだ瞳。
しかし、それは今まで見たどの瞳の色よりも、亨の、彼自身の怒りの念が込められているように感じた。

「と…亨さん…？」

「拓夜くん、少し離れていろ」

亨はそう言うと、自分の腕に装着してあった決闘盤に

「顕れよッ『ブラック・マジシャン』！！」

ドンッ！！

亨の決闘盤に『ブラック・マジシャン』のカードがセットされ、ソリッドヴィジョンとして彼の隣に映し出された。

しかし、それはソリッドヴィジョンと呼ぶには、余りにもリアルだった。

ソリッドヴィジョンとして映し出された筈である『ブラック・マジシャン』。

彼からも亨と似た、怒りにも似た感情的な雰囲気を拓夜は感じた。

（亨さん…そして、ブラック・マジシャン…）

どこかで、いつしか見た事があるような光景に思わず言葉が詰まる拓夜。

そんな拓夜を知ってか知らずか、亨はポツリと呟いた。

「…本当は…こんな力の使い方は、したくなかったんだがな」

亨はそう言うと、キッと目の前の扉を睨み付ける。

この扉越しに、確かに感じる邪神の気配。

そして、西条亨は言い放つ。

自分の信ずるエースに向かって、
こう言い放つ。

「やれ、『ブラック・マジシャン』ッ！！」

黒・魔・導

カッッ！！

その瞬間、凄まじい閃光に包まれた扉は激しい爆発と共に、木っ端微塵に吹き飛んだ。

※

突如起きた爆発に驚いた葉月に成瀬は、思わず悲鳴と同時に目を逸らした。

至近距離からの爆発を受けたツィスカはコンクリートの床に打ちつけられ、体を震わせながらぎこちない動作で立ち上がる。

「チッ、やってくれるじゃない！！　ッ！？」

立ち上がる動作の途中、ツィスカの目は大きく見開かれる。

爆発の向こうから眼前に迫る人影。

その人物、西条亨はツィスカの手から『ガスタの巫女　ウィンダ』のカードを取り上げると、そのままの勢いで更にツィスカを突き飛ばした。

「ぐぅッ！？」

「と、亨さん！！」

『お兄ちゃん！！』

葉月やウィンダにとって願い、待ち望んだ人物の登場と同時、西条拓夜は走り、成瀬と葉月を縛る鎖とクレーンを操作し、２人を解放する事に成功した。

「2人とも、大丈夫か！？」

「拓夜さん！！」

解放された葉月に成瀬の2人はそれぞれの想いを寄せる相手の元へと向かう。

「花穂…無事で良かった…！！」

「拓夜さんなら来てくれるって、信じてました…！！」

無事を確かめ合うべく抱き締め合う2人。

そんな2人を見て葉月は、顔を赤らめ、ほんのちょっぴり期待しながら

「と、亨さん…」

「……」

しかし、残念ながら亨は葉月を一瞬だけ見やり、無事が確認できると

「…ツィスカ、いや…邪神…いい加減に姿を現したらどうなんだ？」

「くッ…西条亨ッ…！？　邪神様ッ！？　しかし、まだお力は完全に…！！」

膝をつき、苦悶の表情を見せるツィスカ。

すると、ツィスカの左目が憎悪に満ちた赤紫色へと変色し、辺りに激しい地響きが鳴り響く。

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

「きゃっ！？」

「うわっ！？」

「な、なに！？」

突然の現象に困惑する拓夜に成瀬、そして葉月。
そして、亨に睨み付けられるツィスカの体に異変が起きた。

「ゥゥウッ…ァァア〝ア〝ア〝」

ツィスカの体から溢れるように吹き出される黒い障気。
その障気はツィスカから全て抜き出ると、密集、集結し、次第に人の型を作り上げていく。

「な…なんだよ…アレは…ッ！？」

「アレが…前に亨さん達が話してくれた…邪神…！？」

「……」

その黒い靄の塊は、ある人物の姿を形作る。

その姿に、拓夜達3人は衝撃を受けた。

「う…嘘だろ…！？」

「そんな…あの姿は…」

「と、亨さん…ッ！？」

邪神は西条亨の姿形を象り、陽炎の如く体の所々を揺らめかせながら。

真っ直ぐに。

真っ直ぐに、西条亨と対峙した。

※

遂に邪神がその姿を現した。

その姿は誰がどう見ても、西条亨その者だった。

ただ唯一の相違点を挙げるならば、邪神の方は肌の色がやや褐色気味だという事。

全体的な雰囲気が、ダークだと言えば良いだろうか。

そんな邪神に対し、後ろに後輩の3人を庇うようにして立つ西条亨は、険しい表情のまま口を開いた。

「またこうして対面する事になるなんてな…」

「ククク…全く、貴様は厄介な奴だよ、本当に…！！」

邪神が口を開く度に、周囲の空気が重たく感じられる。

邪神から放たれる威圧感。

怒り、憎しみ、悲しみ、絶望、虚無…

様々なマイナスの感情が力となって、その場の空気の重みがズシッと増す。

「邪神…貴様がラドルフを操っていたのか？」

「ククク…、人間界の神を扱える力を貸してやったというのに、結局はその力に溺れていった。あの人間は全く使い者にならなかった」

邪神の発言に拓夜達は衝撃を受けた。

そして初めて知った。

実はラドルフはこの邪神に操られて、トリティニーグループにクーデターを起こしたという事を。

そして根本を辿ればこの邪神の仕業で、マナは命を失ったのだという事を。

亨は感情を剥き出しにしながら

「貴様は…俺からどれだけの大切な者を奪えば気が済むんだッ！？」

「逆に言わせて貰おうか？貴様こそ、どれだけ私の邪魔をすれば気が済むのだ？」

そう言うと、亨と邪神の2人は同時に決闘盤を構える。

「ククク…、口で言い争っても埒があかぬのは承知か…やはり、私と貴様は戦う運命にある様だな？」

ズドドドド…ッ！！

亨と邪神の両者の間に激しい火花が飛び散る。

邪神は醜悪な笑みを浮かべたまま、隣で膝をつくツィスカに言い放つ。

「ツィスカよ」

「…ハッ」

「私は西条と決着をつけて来る。雑魚の掃除は任せたぞ？」

邪神がそう言うと、亨と邪神の足元に黒い魔法陣の様な模様が浮かび上がる。

その魔法陣から眩い光が迸り、両者の体を包み込む。

「ククク…我々が戦うには、この場所は殺風景極まりない。場所を移させて貰うぞ？」

邪神がそう言うと、２人を包む光が更に激しさを増していく。

「ッ…待って、亨さん！！」

「は、葉月ッ！？」

「葉月さん！？」

葉月は飛び出し、亨の肩に触れたその瞬間。

辺りは一瞬、眩い光に包まれた。

光が収まり、拓夜に成瀬が気がつくとそこには。

亨と邪神、そして葉月の姿はなかった。

※

「き…消えた…？」

「亨さんに葉月さんは…一体、どちらに…？」

突然起きた不可解な現象に思考が追い付かない拓夜に成瀬。

２人が唖然としていると、２人の前にツィスカ・ベルセリオスが立ちはだかった。

「西条亨に、あのお嬢ちゃんの事を心配している暇があると思って？」

「ッ！！」

ツィスカは決闘盤を装着し、妖美な笑みで拓夜を視界に捉える。

「確か、西条拓夜…だったわね？西条亨によってＯＣＧ研究会に誘われ、チームに入会。使用するデッキは【Ｄ－ＨＥＲＯ】…」

「そうか…アンタが副社長秘書としてやって来た時に、俺達の情報

を…！？」

拓夜の問いに肯定の意味を持ってクスリと笑うツィスカ。

そして決闘盤を構えるツィスカに対し、拓夜も決闘盤を構えた。

「拓夜さん！気を付けて下さい！あのツィスカという人のデッキは
ｌｌ」
「待ってくれ、花穂！！」

成瀬の発言に対して拓夜はストップをかける。

「悪いけど花穂、そっから先は言わないでくれ」

「拓夜さん…どうして…？」

成瀬は拓夜の言っている意味が理解できなかった。

ツィスカの使うデッキは【リチュア】という儀式召喚をしてくる事や、その効果により墓地のカードをデッキに戻し、墓地アドバンテ

ージを稼ぐ事に特化したデッキである。

それらの情報を事前に拓夜に伝えておけば、ツィスカと戦う上で有効な戦略を練る事ができる。

しかし、拓夜はそれを拒んだ。

それは何故か？

「花穂、確かに事前にアイツのデッキ構成を知っていればその分、俺は優位に戦えるかもしれない…でも、俺は…正々堂々と戦いたい！！」

「拓夜さん…」

「きっと結締さんに白石さん…そして、亨さんだって…きっとそうする筈だ」

そう言う拓夜の背中を見つめる成瀬は、何となくだが拓夜の気持ちが分かった気がした。

拓夜の決闘者としての目標は、ＯＣＧ研究会の先輩達三人だ。

あの三人を倒そうと考えるのならば、それは彼らと同じ条件で、勝ち進まなければならない。

決闘者として、勝ち進まなければならない。

「…わかりました。拓夜さん、私は拓夜さんを信じています！」

成瀬の言葉に頷く拓夜。

そんな2人を見て、ツィスカは鼻で笑う。

「はいはい…イチャついたり、信じたりするのは勝手だけど…邪神様の命令に従い…西条拓夜、覚悟なさい」

ツィスカは言う。

その左目に邪神の力を宿しながら、ツィスカは言う。

「今日の私は、手加減できなくてよ？」

※

東区、西区、南区、北区。

それぞれの道が重なり合う唯一の交差点。

そこには全ての地区の発展と向上を願う意味を込めて、一本の大きなタワーが建造されていた。

交差点わ行き交う人々、そのタワーを登る人々は注目する。

そのタワー上空に浮かぶ、赤紫色に描かれた巨大な魔法陣。

その魔法陣の上には、三人の人影が見えた。

西条亨、烏丸葉月、そして邪神。

「ククク…この都市の上空が、我々の決着をつける為の舞台だ…！！」

「……」

「ッキャァアア！！　なにッ！？　何なのよここは！？」

葉月は突然切り替わった光景に思わず腰を抜かし、亨の足元にしがみつく。

三人の体は宙に浮かぶ魔法陣によって支えられているのだ。

地上からの高さ、およそ約１０００メートル。

命綱なしに、いきなりその高さに連れて来られては、殆どの者はまず驚くだろう。

「烏丸さん、大丈夫だ」

「…ぅぅ」

半分涙目で彼を見上げる葉月。

そんな葉月に、亨は安心するように言った。

「俺のそばから離れるな。俺が君を守ってみせる！」

「／／／」

葉月はその言葉に思わず顔を逸らしてしまった。

置かれた状況の怖さもあって下は向けないが、葉月は反射的に体ごと彼の足元に密着させ、表情を見られないようにする。

真っ赤に染まりあがった表情を隠しながら、コクリと頷く葉月。

亨はそれを見て、邪神に向き直り、言い放つ。

「邪神!!　決着をつけよう!!　俺達の因縁に!!」

「ククク…、望む所だッ西条ォオ!!」

西条亨に西条拓夜。

互いに守りたい信念を賭けて。

2人のデュエルが、今始まる。

再臨、全ての元凶　（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、先月の末に受けた筆記試験ですが、その通知が届き…

見事、合格しました！　やったな、俺！

しかし、筆記に合格した後には実技試験が控えております。

三月の第一週が試験日です。

気は抜けません。

拓夜　ＶＳ　ツィスカ

※

南区の廃工場。

そこには成瀬花穂を庇う様にして立ち、構える西条拓夜と、不敵な笑みを浮かべるツィスカの姿があった。

互いに決闘盤にセットされたデッキから手札を5枚ドローし、同時に言い放つ。

「行くぜ！！」
「潰してアゲル」

『デュエルッ！！』

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／　８０００

【後攻】ツィスカ
ＬＰ／　８０００

「俺の先攻、ドローッ！」

先攻を奪取し、カードをドローする拓夜は手札を確認し…

（相手がどんなデッキだろうと…俺は、俺のデュエルを貫く！）

「俺は、ダイヤモンドガイを召喚し、効果を発動！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

拓夜のフィールドに先陣として、ダイヤモンドガイが召喚される。

「ダイヤモンドガイの効果により、デッキトップのカードを確認する！…くっ！？　デッキトップのカードは『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』…このカードはモンスターな為、デッキボトムに戻る…」

拓夜はディアボリックガイのカードをデッキの一番下に戻した。

そんな拓夜を見て、ツィスカは小馬鹿にする様に笑う。

「ププ…意気込んだ割には、デッキが応えてくれてないみたいね？」

「ソイツは違う！」

「っ！？」

「ちゃんと俺のデッキは、俺の期待に応えてくれている！まだ俺のターンは始まったばかりだ！手札より永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』を発動！！」

【未来融合－フューチャー・フュージョン】
［永続魔法］
自分のデッキから融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、エクストラデッキから融合モンスター1体を選択する。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に選択した融合モンスターを自分フィールド上に特殊召喚する（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「俺が指定する融合モンスターは『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー』！よって俺はデッキから、3枚の【ＨＥＲＯ】を墓地に送る！」

※墓地へ送られた融合素材

『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』
『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』
『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』

拓夜のデッキから3枚の【ＨＥＲＯ】が墓地へ送られる。

更に拓夜は手札のカードに手を伸ばし

「そして手札より『デステニー・ドロー』を発動！」

【デステニー・ドロー】
［魔法カード］
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚を捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』を捨てて、カードを２枚ドロー！」

更に墓地を肥やす拓夜に対し、ツィスカは不敵な笑みを更に濃くし、成瀬は祈る思いを強くする。

「カードを１枚セットして、ターンエンド！」

「フフフ…私のターン！」

拓夜のターンが終了した事で、ツィスカのターンへと移行する。

ツィスカは決闘盤を操作し、拓夜の墓地に置かれたカードを確認する。

（墓地には４体のモンスター。頑張って貯めたのだろうけど、私には墓地戦術は通用しないわよ？）

手札を確認し、戦術を定めたツィスカは、そのプレイを開始する。

「絶望を送ってアゲル…手札の『シャドウ・リチュア』のモンスター効果を発動するわ！」

【シャドウ・リチュア】
星４／水属性／海竜族
ＡＴＫ　１２００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード１枚で儀

式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。また、手札からこのカードを捨てる事で、自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式魔法カード1枚を手札に加える。

「『シャドウ・リチュア』を手札から捨てる事で、私デッキより儀式魔法『リチュアの儀水鏡』を手札に加える…そして手札より『リチュア・アビス』を召喚！」

【リチュア・アビス】
星2／水属性／魚族
ＡＴＫ　８００
ＤＥＦ　５００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから「リチュア・アビス」以外の守備力１０００以下の「リチュア」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「『リチュア・アビス』の効果発動！召喚に成功した時、デッキからこのカード以外の守備力１０００以下の【リチュア】1体を手札に加える！私は守備力１０００の『シャドウ・リチュア』を手札に加える！」

手札を補給、入れ替えを行うツィスカ。
拓夜は相手がどの様な戦術を繰り出すのか、真剣な眼差しでツィスカを見つめる。

「行くわよ…儀式魔法『リチュアの儀水鏡』を発動！」

「ッ！！」

【リチュアの儀水鏡】
[儀式魔法]
「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。手札・自分フィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならない。また、墓地に存在するこのカードをデッキに戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す。

「私は儀式召喚の生け贄として、手札の『シャドウ・リチュア』のモンスター効果を発動！『シャドウ・リチュア』は水属性の儀式モ

ンスターを特殊召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚の為のリリースとして使用する事ができる！」

ツィスカは手札の『シャドウ・リチュア』を儀式の生け贄として墓地へ送り…

「フフフ…深海の淵よりお出でなさい！儀式召喚ッ『イビリチュア・マインドオーガス』！」

【イビリチュア・マインドオーガス】
星６／水属性／水族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［儀式／効果］
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。このカードが儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計５枚まで選択し、持ち主のデッキに戻す。

ツィスカのフィールドに現れし『イビリチュア・マインドオーガス』。

儀式召喚に成功したマインドオーガスは、その効果を発動する。

「フフフ…『イビリチュア・マインドオーガス』の効果！」

「ッ！？」

「このカードが儀式召喚に成功した時、互いの墓地のカードを5枚まで選択して、デッキに戻す！」

「なッ！？」

拓夜の墓地のモンスターカード、計4枚が宙に浮かび、デッキへと戻ってしまった。

これで拓夜の墓地には、既に効果を使った『デステニー・ドロー』1枚のみとなってしまった。

（葉月さんも、この効果にやられたんです…拓夜さん、気を付けて下さい…恐らくツィスカさんは、このままでは終わりません！）

ツィスカは拓夜の墓地のカードをデッキに戻すと、更に手札からカ

ードを発動させていく。

「更に私は手札より、3枚目の『シャドウ・リチュア』の効果を発動！デッキから2枚目の『リチュアの儀水鏡』を手札に加えるわ！」

3枚目となる『シャドウ・リチュア』を手札から墓地へ送り、デッキから『リチュアの儀水鏡』を手札に加えたツィスカ。

「そして私は再び、『リチュアの儀水鏡』を発動！私の場の『イビリチュア・マインドオーガス』と、『リチュア・アビス』を儀式の生け贄に捧げるわ！」

ツィスカの場のモンスター2体が激しい渦に包まれる。

そして、その渦の中から現れたのは…

「深海の淵に潜みし絶望の鬼よ…かの者の魂を喰らい尽くせ！！」

轟ッ！！

「お出でなさい！『イビリチュア・ソウルオーガ』！！」

【イビリチュア・ソウルオーガ】
星８／水属性／水族
ＡＴＫ　２８００
ＤＥＦ　２８００
［儀式／効果］
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。１ターンに１度、手札から「リチュア」と名のついたモンスター１体を捨てる事で、相手フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

ツィスカのフィールドに顕現せし『イビリチュア・ソウルオーガ』。

拓夜に成瀬は、ソウルオーガから放たれる邪気に、思わず怯みそうになる。

ツィスカは自分に残された手札１枚をチラッと確認し

「フフフ…まだソウルオーガの能力は使わないわ。そんな雑魚の魂は不味いだけだし」

「ソウルオーガの…能力？」

拓夜に成瀬が怪訝な表情を作る中、ツィスカはバトルフェイズへと突入する。

「行くわよ…ソウルオーガで、ダイヤモンドガイに攻撃！」

グボゥッ！！

ソウルオーガの激しい攻撃を受け、拓夜のダイヤモンドガイは破壊された。

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００　→　６６００

【ツィスカ】
ＬＰ／　８０００

「くっ！？　ダイヤモンドガイ…！！」

「フフフ…私のターンは終了よ」

※

三柱付属大学の理事長室にて、ＯＣＧ研究会の結締智恭に白石直也は、中島理事長に報告書を提出していた。

「中島さん、今回のデュエルテーブルの営業回りの報告書だぜぃ」

「ふぅん…理事長、デュエル教室の件だが、俺の方からの手直しはしておいた」

「悪いわね２人とも。新しい豆が入ったから、一緒に気分転換にコーヒーでも飲んでいかない？」

２人から報告書を受け取った中島は、労いの意味を込めて２人をコーヒーに誘う。

「ふぃ～、有り難いぜぃ」

「ふぅん…今度はどんな豆なのか、楽しみではあるな」

2人がホッと一息ついた瞬間、東区の空が赤紫色に淡く光りだした。

「ムッ！？」

「ッ！？　白石さん！中島さん！アレを見るぜよ！！」

結締に言われ、窓から見える空模様を見ると、空には赤紫色に輝く巨大な魔法陣の様なものが展開されていた。

「まさか…アレは…ッ！！」

「間違いないぜぃ、ありゃあ邪神の奴だ！！」

「何ですって！？」

ピシャッ！！

カッ！！

赤紫色の光に当てられた暗雲が光り、所々に稲妻が地表へと突き刺さる。

「邪神の奴…こりゃ誰かとデュエルしてやがるな？」

「ふぅん…奴の相手なんぞ、西条に決まっている！」

「そんなッ！？　西条ちゃんは家に帰った筈じゃ…」

2人の発言に驚く中島。

確かに自分は西条亨を東区に降ろした。

しかし、その後も彼が家に帰らずに捜索を続けていたとしたら？

（…あり得るわ）

彼の性格ならば、自分自身が納得するまで続けるだろう、と中島は思う。

すると、結締に白石の2人は

「中島さん！俺達も行くぜよ！！」

「頼む、理事長！俺達を西条の元へと連れて行ってくれ！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　６６００

［手札］
３枚

［フィールド］
モンスター

なし

未来融合－フューチャー・フュージョン
（1ターン経過）
リバースカード1枚

【ツィスカ】
ＬＰ／８０００

［手札］
1枚

［フィールド］
モンスター
イビリチュア・ソウルオーガ

始まった拓夜のターン。

拓夜のフィールドにモンスターはなく、1ターンが経過した『未来融合－フューチャー・フュージョン』に1枚のリバースカード。

（ソウルオーガの攻撃力は２８００…生半可なモンスターじゃ、太刀打ちできない…！！）

「俺のターン、ドローッ！！」

拓夜はカードをドローしソウルオーガに対する打開策を練る。

拓夜に成瀬はツィスカのモンスター、ソウルオーガの能力は知らない。

しかし、手を拱(こまね)いているだけでは、前に進めない。

攻める気持ちを強く。

（戦って、戦って、戦い抜いて…初めて勝利を掴む事ができる。そうだろ、結締さん！）

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
星４／風属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名

のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

「エアーマンの効果発動！このカードが召喚に成功した時、デッキから【ＨＥＲＯ】１体を手札に加える！俺はデッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を手札に加える！」

デッキからＢｌｏｏ－Ｄのカードを手札に加えた拓夜。

「更に手札より、魔法カード『おろかな埋葬』を発動！デッキからドグマガイを墓地に！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター１体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を墓地に送った拓夜。

「そして手札の魔法カード『戦士の生還』を発動！」

【戦士の生還】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択して手札に加える。

「この効果により、墓地の戦士族モンスター『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を手札に加える！」

ドグマガイのカードを手札に加えた拓夜は、キッとツィスカを睨む。

「行くぜツィスカ！！　これが俺の、ッ最強モンスターだ！！　魔法カード、発動『融合』！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札のＢｌｏｏ－Ｄと、ドグマガイを融合し、現れよ…究極の【Ｄ】！！」

轟ッ！！

「融合召喚ッ！！　降臨せよッ『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族

ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［融合／効果］
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

手札を全て使い切る程の怒涛の展開。

西条拓夜の信ずる最強モンスターにして、最上位の【Ｄ】。

『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が、その姿を現した。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』ですって！？」

「拓夜さん！凄いです！」

「行くぜツィスカ！！『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動！！　このターンのバトルを放棄し、相手モンスター１体を破壊する！！　貫けッ『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

ズゴゥッ！！

【西条拓夜】
ＬＰ／　６６００

【ツィスカ】
ＬＰ／　８０００　→　５２００

「くッ！？　なかなか激しいじゃない…！！」

ソウルオーガが破壊され、ライフにダメージを負うツィスカ。
拓夜は漲る闘志を拳にグッと握り締める。

「俺のターンは終了だ！！」

「凄いです…拓夜さん」

成瀬は思う。

葉月と拓夜の違い。

それはシンクロ召喚と融合召喚。

基本、シンクロ召喚とはフィールドと墓地からモンスターをチューニングし、強力な効果を秘めたシンクロ召喚をする事ができる。

しかし、そのいずれもが封じられたら？

逆に融合召喚には、フィールドや墓地が満たされていなくても、手札から融合召喚する事ができる。

どちらも一長一短にして、強力なモンスター達。

今回拓夜は葉月にはできなかった、融合召喚だからこその展開を魅せてきた。

成瀬は思う。

成瀬は信じる。

成瀬は期待する。

西条拓夜は、このデュエルに勝てると。

「『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』がこのタイミングで出てくるのは予想外だったけど…私を甘く見ない事ね」

ツィスカの左眼が赤紫色に光輝く。

「私のターン、ドローッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／６６００

［手札］
なし

［モンスター］
Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ
Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン

［魔法・罠］
未来融合－フューチャー・フュージョン
リバースカード１枚

【ツィスカ】

LP／　５２００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

始まるツィスカのターン。
デッキからカードをドローしたツィスカは早速、手札の中から1枚のカードを掴み取る。

「魔法カード『サルベージ』を発動！！」

【サルベージ】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を手札に加える。

「このカードは私の墓地から、攻撃力１５００以下の水属性モンスター2体を手札に加える事ができる！私は墓地の『シャドウ・リチュア』２体を手札に加える！」

手札に2体の『シャドウ・リチュア』を手札に加えたツィスカ。

そしてツィスカは墓地に置かれた『リチュアの儀水鏡』に手を伸ばす。

「そして墓地の儀式魔法『リチュアの儀水鏡』の効果を発動するわ！」

「ッ！？　墓地で効果が発動できる儀式魔法だと！？」

「墓地の儀水鏡をデッキに戻す事で、墓地に眠る【リチュア】の儀式モンスター1体を手札に加える…私は墓地の『イビリチュア・マインドオーガス』を手札に加える！」

『リチュアの儀水鏡』をデッキに戻し、『イビリチュア・マインドオーガス』を手札に加えたツィスカ。

「更に墓地に眠る、もう1枚の『リチュアの儀水鏡』の効果を発動するわ。儀水鏡をデッキに戻し、墓地の『イビリチュア・ソウルオーガ』を手札に加える！」

更に手札を補給するツィスカ。

（初手にあれだけ手札を消費したのに…手札がもう5枚に！？　このツィスカって奴…強い…！！）

「手札の『シャドウ・リチュア』の効果！このカードを墓地へ送り、デッキより『リチュアの儀水鏡』を手札に加える！そして儀式魔法『リチュアの儀水鏡』を発動！」

ツィスカは儀水鏡を発動し、手札の2枚目の『シャドウ・リチュア』をその生け贄に捧げる。

「『シャドウ・リチュア』を儀式の贄とし、深海の淵に潜みし絶望の鬼よ…かの者の魂を喰らい尽くせ！！」

轟ッ！！

「お出でなさい！『イビリチュア・ソウルオーガ』！！」

ズドドドド…ッ！！

再びツィスカのフィールドに降臨せし深淵の鬼獣、『イビリチュア・ソウルオーガ』。

「今回は出し惜しみはナシよ。『イビリチュア・ソウルオーガ』の効果を発動！！」

「ッ！？」

「1ターンに1度、手札の【リチュア】と名のつくモンスターを捨てる事で、相手フィールド上のカード1枚をデッキに戻す！」

ツィスカは残りの手札2枚の中から1枚のカードを掴み取る。

「フフフ…手札の『イビ【リチュア】・マインドオーガス』の魂を喰らい、その力を高めなさい…ソウルオーガ」

グシャッ！！

「Ｄ－ＥＮＤッ！？」

マインドオーガスの魂を吸収したソウルオーガは、拓夜の『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に向けて、強烈な一撃を見舞った。

ソウルオーガの効果を受けた『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』はエクストラデッキに戻され、拓夜のフィールドからその姿を消した。

「マインドオーガス…確か葉月さんが言ってた、ウィンダって子のお友達…」

成瀬はツィスカのプレイにより墓地に送られた『イビリチュア・マインドオーガス』に心を痛める。

（ウィンダちゃんのお友達を…生け贄にするなんて…酷いです…！

！）

「フフフ…これで坊やの最強モンスターは消えた。バトルフェイズよ！ソウルオーガで、エアーマンに攻撃！」

「くッ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／　６６００　→　５６００

【ツィスカ】
ＬＰ／　５２００

反撃を受けた拓夜のフィールドのモンスターは全て去なされてしまった。

「フフフ…私はリバースカードを１枚セットして、ターンエンドよ」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　５６００

［手札］
なし

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
未来融合－フューチャー・フュージョン
リバースカード１枚

【ツィスカ】
ＬＰ／　５２００

［手札］
なし

［モンスター］
イビリチュア・ソウルオーガ

［魔法・罠］
リバースカード１枚

ツィスカのターンが終了し、拓夜のターンへと移行する。

「俺のターンッドロー！！」

デッキからカードをドローした拓夜は、エクストラデッキから1枚のカードを取り出す。

「スタンバイフェイズ、永続魔法『未来融合ーフューチャー・フュージョン』の効果を発動！！　発動より2ターンが経過した今ッ、その融合モンスターを特殊召喚する！！」

拓夜はエクストラデッキから取り出したそのカードを、力強く決闘盤に叩きつけた。

「融合召喚ッ！！　コイツが俺の切り札だ！！『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー』！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】

星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター×３
このカードが融合召喚に成功したターン、このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。融合召喚に成功したこのカードは、１度のバトルフェイズ中に３回攻撃する事ができる。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

拓夜のフィールドに結締から譲り受けた切り札。

『Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー』が参上した。

「トリニティーの効果発動！！　コイツが融合召喚に成功したターン、元々の攻撃力が倍になる！！」

「悪いケド…坊やの融合召喚に対して、罠発動！！『狡猾な落とし穴』！！」

【狡猾な落とし穴】
［罠カード］
フィールド上に存在するモンスター2体を破壊する。自分の墓地に罠カードが存在する場合、このカードは発動できない。

「このカードはフィールド上のモンスター2体を破壊する罠カード…私のモンスター『イビリチュア・ソウルオーガ』と、坊やの『V・HERO　トリニティー』を破壊するわ」

ズゴゥッ!!
バゴゥッ!!

ツィスカの発動した『狡猾な落とし穴』により、拓夜の切り札『V・HERO　トリニティー』に『未来融合－フューチャー・フュージョン』は破壊された。

それにより拓夜のフィールドには、1枚のリバースカードのみとなってしまった。

「フフフ…坊やのモンスター達は調べ尽くしてあるわ。これで坊や

の主力モンスター達は全て潰した」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべるツィスカ。

そんなツィスカに対し、拓夜は

「…確かに俺の主力は悉くやられたさ。だが、お陰でアンタのフィールドもがら空きになった！！」

「ッ！！」

ツィスカのフィールドにはモンスターはない。

拓夜のフィールドにもモンスターはない。

ツィスカのフィールドには魔法・罠はない。

しかし拓夜のフィールドには1枚のリバースカードが伏せられている。

ツィスカの手札はない。

しかし拓夜の手札は1枚ある。

「アンタに教えてやる…たった1枚のカードからでも、そこから様々な希望が繋ぎ合わさっていく事を!!　リバースカードオープン!永続罠『リビングデッドの呼び声』!!」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスターカード1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「蘇れ、『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』!!」

拓夜のフィールドにエアーマンが特殊召喚され、その効果が発動される。

「エアーマンの効果により、デッキから【ＨＥＲＯ】と名のつくカード『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を手札に加える!そして手札の魔法カード『トレード・イン』を発動!!」

【トレード・イン】
［魔法カード］
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「手札のレベル８モンスター『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を捨て、カード２枚ドロー！更に手札より『貪欲な壺』を発動！！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを５枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「墓地のモンスター５枚をデッキに戻し、カード２枚ドロー！」

［墓地に戻したカード］

Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ　×２
Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ
Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ
Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー

次々と手札を入れ替え、補充する拓夜。

その拓夜の奇跡的なデッキ回し、ドロー加速にツィスカだけでなく、デュエルを見守る成瀬も思わず唖然とする。

「まだだ！！　手札より『ワン・フォー・ワン』を発動！！　コストとして手札より『ダンディライオン』を墓地に送る！！」

【ワン・フォー・ワン】
［魔法カード］
手札からモンスター１体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル１モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族

ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためのリリースはできない。

「そしてデッキからレベル１モンスター『サイバー・ヴァリー』を特殊召喚する！」

拓夜のフィールドに並ぶ４体のモンスター。

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
サイバー・ヴァリー
綿毛トークン　×２

拓夜はまだ続ける。

１枚のカードから始まり、繋がる絆を更に魅せつける。

「『サイバー・ヴァリー』の第２の効果を発動！！　自身と綿毛トークン１体を除外し、カード２枚ドロー！！」

「こっ…この坊や…ッ、一体…！？」

2枚の手札を確認して、拓夜はニヤリと笑みを浮かべる。

「行くぜ…ツィスカ！このターンで決めるッ！！　手札より魔法発動ッ『融合』！！」

「ッ！？」

「フィールドのエアーマン、そして手札の『沼地の魔神王』を融合し、凍てつく英雄を降臨させる！！」

轟ッ！！

「来いッ！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】

星８／水属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

拓夜のフィールドに最強クラスの【ＨＥＲＯ】、アブソルートＺｅｒｏが融合召喚された。

だが、拓夜はまだ渾身のプレイを続けていく。

「このカードが…貴様に引導を渡すカードだ！！『死者蘇生』を発動ッ！！」

【死者蘇生】
［魔法カード］

自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「この効果によりツィスカ！貴様の墓地から『イビリチュア・ソウルオーガ』を、俺のフィールドに特殊召喚させる！！」

ズドドドド…ッ！！

拓夜のフィールドに並ぶ強力なモンスター達。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』
『イビリチュア・ソウルオーガ』
『綿毛トークン』

【西条拓夜】
ＬＰ／　５６００

【ツィスカ】
ＬＰ／　５２００

「アブソルートＺｅｒｏは、俺のフィールドの水属性モンスターの数だけ、攻撃力を５００ポイントアップさせる！！」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』
ＡＴＫ　２５００　→　３０００

「う…嘘でしょ…ッ！？」

ツィスカの頬に嫌な汗が流れ落ちる。

自分の場には壁となるモンスターはいない。

このまま拓夜のフィールドのモンスターの総攻撃を受ければ、自分のライフは…。

「これが…拓夜さんの力…」

成瀬は味方ながらも拓夜のプレイには驚かされてばかりだった。

1枚のリバースカードから始まり、残った手札1枚を利用しての凄まじいドロー加速。

以前、亨が拓夜のプレイを見て言っていた事がある。

このドロー加速こそが、拓夜の最大の武器であると。

引きつったツィスカの表情を見て、拓夜は言い放つ。

「バトルフェイズに入る！アブソルートＺｅｒｏッ！！　ソウルオーガッ！！」

拓夜のフィールドの2体がそれぞれに構え、狙いをツィスカに定める。

「ヒッ！？」

思わず後退るツィスカ。

その瞬間、拓夜の2体のモンスターの攻撃がツィスカに炸裂した。

【西条拓夜】
ＬＰ／　５６００

【ツィスカ】
ＬＰ／　５２００　→　０

※

南区の廃工場群の一角に、一機のヘリコプターが不時着する。

そのヘリコプターのパイロット、中島理事長は不時着するなり大きな溜め息をつく。

「ふぅ、じゃねぇぜよ中島さん！？　何だってこんな所に不時着を！？」

「結締ちゃん、あんな雷が降り注ぐ中をヘリで飛び回るなんて無茶よッ！！　自分達から避雷針にでもなるつもりなのッ！？」

「ンな事を言ったって、ここまで飛んで来れたんだ！！　西条ちゃんの所まで頼むぜぃ！！」

機内でギャーギャー騒ぐ2人を余所に、同乗する白石は窓の外を眺める。

「…ム？　あれは…拓夜に成瀬ではないか？」

白石が窓から見える工場を見ていると、一つの工場から拓夜と成瀬が出て来る姿が見えた。

2人は自分達が乗るヘリコプターに気付き、こちらに駆け寄ってくる。

白石はドアを開け、拓夜に成瀬を出迎えた。

「どうしたというのだ？何故お前たちがここに？」

「白石さん！？　それに結締さんに…中島理事長まで！？」

機内に乗る3人の顔ぶれに驚く拓夜達。

成瀬は自分達の事情を説明した。

「そうか…ツィスカを倒したのだな」

「はい！拓夜さんが頑張ってくれました！」

「ところで成瀬よ、お前が持っているソレは何だ？」

白石は成瀬が持つ決闘盤が気になり、尋ねてみる。

拓夜とツィスカのデュエルに決着がつくと、そこにはツィスカの姿はなかった。

ただ、唯一その場に残されていたのが、成瀬が持つ決闘盤にデッキだった。

成瀬は決闘盤に収められたデッキをギュッと、大事そうに抱えながら

「このデッキには、葉月さんが言ってた…ウィンダって子のお友達が入ってるんです。だから…その…」

ウィンダの友達。

その言葉に白石は「そうか…」と、軽く笑みを浮かべる。

「ならば、ソレはお前が大事に持っていてやれ」

「白石さん…はい！」

「それよりも結締さん、亨さんと葉月がッ！！」

拓夜は結締に、亨と葉月の2人が邪神と共に消えてしまった事を言おうとした。

結締は拓夜の言った、葉月という名前に一瞬、驚いた表情を見せた。

「何てこったい…まさか葉月ちゃんまで…拓夜ちゃん、とりあえず西条ちゃんに葉月ちゃんの居場所はコッチで分かってる。空を見てみ？」

「空…ですか？」

「ッ！？　な…何だよ、あれ…！？」

2人が空を見上げると、そこには赤紫色の巨大な魔法陣が広がっていた。

その魔法陣の光に当てられた雲からは、無数に雷が至る所に落雷していた。

「あの魔法陣の上に、西条ちゃんと葉月ちゃんが居るのは間違いないぜぃ…なぁ、中島さん！本当に何とかならないのかよ！？」

「無茶だって、さっきから言っているでしょ！？だいたいーーッ！？　白石ちゃん、貴方…一体何を」

中島が話している途中、白石は操縦桿をグッと握り、中島から無理やり席を奪う。

「ふぅん…西条だけならず、“美少女”までもが居るというのならば話は別だ！！　拓夜ッ！！　成瀬ッ！！　サッサとヘリに乗り込め！！」

白石に言われヘリに乗車する2人は、とりあえず白石に大切な事を聞いてみる事にした。

「ところで白石さん…ヘリの操縦はできるんですか？」

「ふぅん…任せておけ。今回が初めてだ！！」

白石はそう言いながらヘリを徐々に離陸させていく。

無免許で初操縦の白石から逃げようにも、ヘリは既に結構な高さまで上昇しており、飛び降りる事ができない。

皆が皆、白石に絶望を感じながらも、白石は一点を目指して操縦する。

「フヌォォオオッ！！　待っていろ美少女よッ！！　この俺がッ！！　いぃま助けてやるぞぉお！！」

拓夜　ＶＳ　ツィスカ　（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、３月から禁止・制限・準制限が改定されます。
手持ちのデッキも色々と見直さなければなりません。

月の書やカルートの制限化により、現在の僕がモデルとして組んである烏丸葉月デッキは殆どが壊滅です。

今回を機に、色々と変えてみようかな?手持ちのデッキを…

さて、小説内に登場したリチュアデッキですが、モデルはシンクロリチュア。
弟のデッキがこれに当てはまります。

僕自身もまた、リチュアのデッキは組んであるのですが、僕のリチュアデッキは【リチュアＨＥＲＯ】と呼ばれるもので、デッキ内容が拓夜と被る部分が多々あります。

ですから弟の【シンクロリチュア】をモデルとさせてもらいました。

まぁ、実際に小説内での拓夜戦ではシンクロしてませんでしたが（笑

今回の話を読んでご意見、ご感想が御座いましたら、遠慮せずにメッセージをお願いします。

それでは、失礼しました。

邪神　VS　神　（前書き）

今回は後書きに、邪神戦に挑む西条亨のデッキモデルを掲載してみたいと思います。

邪神　VS　神

※

上空に浮かぶ魔法陣。

その魔法陣の上に立ち、邪神と西条亨の2人は因縁の対決を迎えようとしていた。

2人の闘志がぶつかり合い、その影響からか空を覆う暗雲からは無数の雷が地上へと降り注ぐ。

亨にしがみつく烏丸葉月は、怯えた瞳で亨に対峙する邪神を見やる。

ゾミッッ！！

「ッ！？」

一瞬。

たった一瞬目が合っただけで、全身から夥しい程の冷や汗が流れ出す。

見かけは西条亨その者だが、中身が根本的に違う。

怖い。

葉月は純粋に、邪神に恐怖感を抱いていた。

思わず亨にしがみつく力が強くなる。

亨は葉月の様子に気付き、上着のポケットから1枚のカードを渡した。

「烏丸さん…コレを」

「これ…ウィンダのカード」

手渡された『ガスタの巫女　ウィンダ』のカードと、亨の顔を交互に見比べる葉月。

そんな葉月に、亨は安心させる様に笑顔で話しかけた。

「俺が君を守るように、ウィンも力を貸してくれる…だから君は安心して、俺の傍についていろ」

『お姉ちゃん、お兄ちゃんを信じて！』

「…亨さん、ウィンダ…」

2人に励まされ、コクリと頷く葉月は、亨を掴むてに再び力を込め直す。

不安や恐怖からの、怯える気持ちからの力ではない。

この人なら、大丈夫だと。

西条亨なら、信じられるという想いを込めての力。

「ククク…西条よ、そろそろ始めさせて貰うぞ！」

2人の様子を嘲笑いながら、邪神はデッキから手札となるカードを5枚引き抜いた。

そして亨も、手札を5枚ドローし、邪神との対決に挑む。

「今度こそ西条、貴様を倒し…混沌の世界を作り上げてみせる！！」

「そんな事はさせはしないッ！！　行くぞ邪神！！　デュエルだ！！」

西条亨　ＶＳ　邪神

２人の因縁のデュエルが、今始まる。

※

【先攻】邪神
ＬＰ／８０００

【後攻】西条亨
ＬＰ／８０００

遂に２人のデュエルが始まった。

邪神はデュエル開始と同時にデッキに手を伸ばし、先攻のプレイを

開始する。

「ククク…先攻は私だ。私のターンッ！！」

デッキからカードをドローした邪神は細く微笑み、手札のカードに手を伸ばす。

「私はモンスターをセットし、カードを1枚セット…ターンエンドだ」

モンスター、魔法・罠を1枚ずつセットしてターンを終了した邪神。

そして亨のターンへと移行する。

「俺のターンッ、ドロー！！」

デッキからカードをドローした亨。

彼の脳裏には、過去に邪神とデュエルをした時の記憶が蘇っていた。

（神の召喚には、３体のリリースが必要…ならば、壁（リリース要員）となるモンスターを確実に叩くッ！！）

「手札より『おろかな埋葬』を発動！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター１体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「この効果で、デッキから『ダンディライオン』を墓地に送る！そして墓地へ送られた『ダンディライオン』の効果発動！フィールド上に『綿毛トークン』２体を守備表示で特殊召喚する！」

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００

ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

亨のフィールドに『綿毛トークン』が２体、守備表示で特殊召喚された。

そして亨は

「そして俺は、チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚！」

【デブリ・ドラゴン】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１０００
ＤＥＦ　２０００
［効果・チューナー］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。この

カードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

「『デブリ・ドラゴン』が召喚に成功した時、墓地に眠る攻撃力５００以下のモンスター１体を、効果を無効にして特殊召喚する！蘇れ、『ダンディライオン』！！」

僅か手札消費２枚で、フィールドのモンスターゾーンを４つも埋める亨。

そして

「更に、レベル１の『綿毛トークン』１体と、レベル３の『ダンディライオン』に、レベル４『デブリ・ドラゴン』をチューニング！！」

亨のモンスター達の星が束ねられ、彼のエースの１体が飛翔する。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光り差す道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！！　飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』！！」

【スターダスト・ドラゴン】
星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

亨のフィールドに舞い降りし星屑の龍、『スターダスト・ドラゴン』

。

「シンクロ素材として墓地へ送られた『ダンディライオン』の効果により、俺のフィールドに『綿毛トークン』2体が、再び守備表示で特殊召喚される！」

再び『綿毛トークン』2体が守備表示で特殊召喚され、亨のモンスターゾーンには計4体のモンスター（トークン含む）で埋め尽くされた。

「ククク…スターダストか。変わらんな、貴様は…」

「バトル！！　スターダストで、奴のセットモンスターを攻撃！！
シューティング・ソニック！！」

ズゴゥッ！！

スターダストの一撃が炸裂した。

しかし邪神は口端をニヤリと吊り上げ、亨のプレイを嘲笑う。

「ククク…貴様が攻撃したモンスターは『魂を削る死霊』だ！」

【魂を削る死霊】
星３／闇属性／アンデット族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　２００
［効果］
このカードは戦闘によっては破壊されない。魔法・罠・効果モンスターの効果の対象になった時、このカードを破壊する。このカードが相手プレイヤーへの直接攻撃に成功した場合、相手はランダムに手札を１枚捨てる。

「『魂を削る死霊』は、戦闘では破壊されない…西条よ、貴様のスターダストでは役不足だ」

邪神のフィールドに無傷で健在する『魂を削る死霊』。

このターン結局、亨は邪神の壁を崩す事は出来なかった。

「くっ…俺のターンは終ーー」

「ならば貴様のエンドフェイズ時、リバースカード発動『終焉の焔』！！」

【終焉の焔】
［速攻魔法］
このカードを発動する場合、自分は発動ターン内に召喚・反転召喚・特殊召喚できない。自分フィールド上に『黒焔トークン』（悪魔族・闇・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。（このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためのリリースはできない）

ボゥ、ボワッ…

邪神のフィールドに『黒焔トークン』２体が守備表示で特殊召喚される。

「これで奴のフィールドには3体のモンスターが…ッ！！」

「ククク…、これで生け贄は揃った。西条よ…貴様に再び恐怖の根源を叩き込んでやろう。私のターンッ！！」

互いにライフの変動がないまま、邪神のターンへと移行する。

【邪神】
ＬＰ／　８０００
［手札］
５枚

［モンスター］
魂を削る死霊
黒焔トークン　×２

【西条亨】
ＬＰ／　８０００
［手札］
４枚

［モンスター］

スターダスト・ドラゴン
綿毛トークン　×３

モンスターが３体用意された邪神のターン。
邪神は手札から１枚のカードを掴み取り、決闘盤に叩き付けた。

「まずは下準備だ…永続魔法を発動！『冥界の宝札』！」

【冥界の宝札】
［永続魔法］
２体以上のリリースを必要とするアドバンス召喚に成功した時、デッキからカードを２枚ドローする。

「このカードは２体以上のリリースを要するモンスターのアドバンス召喚に成功した時、デッキからカードを２枚ドローする事ができる…更に手札より、『封印の黄金櫃』を発動！」

【封印の黄金櫃】
［魔法カード］
自分のデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時にそのカードを手札に加える。

「ククク…このカードはデッキからカードを1枚選択し、ゲームから除外する。そして発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時、そのカードを手札に加える」

邪神は『封印の黄金櫃』の効果により、デッキから1枚のカードを抜き取った。

「ッ！！　そのカードは…！！」

「ククク…私が除外するのは、史上最強の神ッ！！『邪神アバター』だ！！」

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

亨達の上空に浮かぶ暗雲から、黒い太陽が姿を現した。

その黒い太陽は徐々に、徐々に。

ゆっくりと邪神のフィールドに降下していく。

「なっ…何よ、あの巨大な黒い塊はッ！？」

「あれが…『邪神アバター』だ…！！」

「ッ！！」

夜空に不気味に浮かぶ黒い太陽。

それが2ターン後、邪神の手札に加わってしまう。

亨に葉月は表情を険しくし、邪神を睨みつける。

「さぁ…待たせたな、今こそ…神が復活する瞬間を魅せてやろうッ！！　『魂を削る死霊』と、『黒焔トークン』2体をリリースッ！！」

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

カッ！！　ピシャッ！！

激しい地響きと共に、更に降り注ぐ雷の雨。

そして遂に、邪神のフィールドに恐怖の根源たる象徴が姿を現した。

「森羅万象、全てを恐怖で薙払えッ！！　出よ、『邪神ドレッド・ルート』！！」

【邪神ドレッド・ルート】
星１０／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　４０００
［効果］
このカードは特殊召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター３体をリリースした場合のみ通常召喚する事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外のフィールド上のモンスターの攻撃力・守備力は半分になる。

ドドドドド…ッ！！

遂にその姿を現した三邪神が一角、『邪神ドレッド・ルート』。

その巨大な体躯、剛腕、巨爪、巨角。

見る者全てを恐怖へと陥れるかのようなその姿、威圧に、亨や葉月は必死になって堪える。

「クハハハハッ！！　どうだ西条、久しぶりに対面したドレッド・ルートは？」

「くッ、出来れば二度と会いたくなかったがな…！！」

「ドレッド・ルートはどうやら違うみたいだぞ？貴様を潰したくて、潰したくて…この瞬間（とき）を待ちわびていたようだ！クハハハハッ！！」

【スターダスト・ドラゴン】
ＡＴＫ　２５００　↓　１２５０

ＤＥＦ　２０００　→　１０００

ドレッド・ルートから放たれる恐怖の根源に当てられたスターダストの能力が半減する。

スターダストは力無くうなだれ、地に膝をついてしまった。

「ッ!?　スターダスト!!」

「どうしてッ!?　なんで亨さんの『スターダスト・ドラゴン』のステータスが、半減しているのよ!?」

「そうか、小娘は知らなかったのだな?良いだろう、教えてやる…これぞ『邪神ドレッド・ルート』の力の総称…即ち【恐怖の根源】!ドレッド・ルートが表側表示で存在する限り、このカード以外のモンスターの攻撃力・守備力は半分となるッ!!」

「なッ!?　なによ…その滅茶苦茶な効果は…!!」

葉月は思う。

自分が持つ『ＢＦ－疾風のゲイル』も似たような効果を持つが、その効果がどれほど強力な効果なのかも理解している。

理解しているからこそ、ドレッド・ルートの効果が恐怖に感じた。

自分以外のモンスターの能力を半減し、尚且つ自分は圧倒的攻撃力４０００を誇る神。

ほぼ全てのモンスターは、ドレッド・ルートには太刀打ちできない。

半減した中で４０００という数値を超えるには、最低８０００の攻撃力が必要なのだ。

普通では、まず無理である。

「そんな相手に…どうやって勝てば良いのよ…！？」

「ククク…感じるぞ小娘。貴様から溢れる恐怖が…」

「烏丸さん！大丈夫だ！俺を信じろ！！」

亨に引き寄せられ、思わず頷く葉月。

そして遂に、邪神の攻撃が始まる。

「ククク…『邪神ドレッド・ルート』の召喚成功により、私は永続魔法『冥界の宝札』の効果で、デッキからカードを2枚ドローする。

行くぞ西条よッ！！　バトルだ！！」

遂にバトルフェイズへと突入する邪神。

「『邪神ドレッド・ルート』で、西条の『スターダスト・ドラゴン』を攻撃ッ！！　フィアーズ・ノックダウン！！」

グシャッ！！
ズゴゥッッ！！

【邪神】
ＬＰ／　８０００

【西条亨】
ＬＰ／　８０００　→　５２５０

「ぐぅッ、ァァアアッ！？」

「キャァァアアッ！！」

スターダストは破壊され、その衝撃が2人を襲う。

「クハハハハッ！！　どうだ、神の力は？私のターンは終了だ！！」

※

バリバリバリバリ…ッ！！

東西南北の地区が交わる唯一の交差点、その上空の空を一機のヘリコプターが旋回する。

旋回する、というよりは行き詰まっているという表現が正しいのだろう。

ヘリコプターを操縦する白石直也は、苛立たしげに操縦桿を操作し、雄叫びをあげていた。

「ヌォォオオッ!!　何故だ!!　何故これ以上、上空に飛べないのだ!?」

「そりゃあ白石さんが操縦桿を引かないからだぜぃ」

白石の叫びに結締が呆れた口調で呟く。

更には成瀬や拓夜までも

「それにこんな場所で真上に飛んだら、あの魔法陣にぶつかるッスよ?」

「白石さん、魔法陣の外側に出て、そこから上空に飛ばないと!」

「えぇい…そんな事は分かっておるわ!!　ただ、魔法陣の外側は雷が馬鹿みたいに降って…こ、怖いだろうがッ!?」

「だからソレはアタシが最初に言ってたじゃない!!」

中島が会話に交わり、機内はギャーギャーと、外の雷以上にヒートアップする。

拓夜に成瀬、そして結締は、溜め息しか出なかった。

※

西条亨と烏丸葉月の前に立ちはだかる邪神。

その邪神のフィールドには、恐怖を根源とするドレッド・ルートが降臨していた。

【邪神】
ＬＰ／　８０００

［手札］
４枚

［モンスター］
邪神ドレッド・ルート

［魔法・罠］
冥界の宝札

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

［手札］
４枚

［モンスター］
綿毛トークン　×３

「クハハハハッ！！　この『邪神ドレッド・ルート』の前では、如何なるモンスターも無力だ！！」

高らかに笑う邪神。

しかし、亨の瞳はまだ諦めてはいない。

「俺のターンッ、ドロー！！」

キィィィイ…ッ！！

デッキからカードをドローした亨。

その瞬間、彼にある変化が訪れた。

それは…。

「邪神…神を召喚した事で良い気になっている様だが、忘れていないか？今の俺のフィールドにも、3体のモンスターが揃っている事をッ！！」

「ッ！？」

亨の言葉にピクリと反応する邪神、そして葉月。

2人が亨の顔を見ると…

「と、亨さん…その瞳の色…！？」

「貴様ッ、まさかこのタイミングで…ッ！？」

蒼く澄んだ右目の瞳。

そして、ドローして引き当てた1枚のカード。

亨はその1枚を空に翳し、高らかに宣言する。

「神の相手には、神で挑むッ！！　フィールドの『綿毛トークン』3体をリリースし、現れよッ！！『オベリスクの巨神兵』！！」

【オベリスクの巨神兵】
星１０／神属性／幻神獣族
ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　４０００
［効果］
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター3体をリリースして召喚しなければならない。このカードの召喚は無効化されない。このカードが召喚に成功した時、魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。このカードは特殊召喚した場合エンドフェイズ時に墓地へ送られる。自分フィールド上のモンスター2体をリリースする事で、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃宣言できない。

カッッ！！
ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

西条亨のフィールドに降臨せし神。

『オベリスクの巨神兵』。

遂に、【神　対　神】　の構図が整った。

「これが…亨さんの持つ2体目の神…オベリスク！！」

「まさか神を召喚してくるとはな…しかし、我がドレッド・ルートの効果！恐怖の根源は、貴様の神も例外ではない！！」

『オベリスクの巨神兵』
ＡＴＫ　４０００　↓　２０００
ＤＥＦ　４０００　↓　２０００

「そんなッ！？　神が相手でも…ドレッド・ルートの効果が適用されちゃうなんて！？　このままじゃ、オベリスクが…！！」

「その小娘の言うとおりだ西条…！！　三幻神と言えど、ドレッド・ルートにはかなわない！！」

ニヤリと笑みを浮かべる邪神。

しかし、亨も同じく、ニヤリと笑みを浮かべる。

「フッ…、ソイツはどうかな？」

「ッ！？」

「確かに、今のオベリスクは貴様のドレッド・ルートにより、力が半減されている…だが、神に秘められた力は別だ！！」

神に秘められた力。

それを発動する為に、亨は渾身のプレイを開始する。

「手札より魔法カード！『ワン・フォー・ワン』を発動！」

【ワン・フォー・ワン】

［魔法カード］

手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「このカードは手札のモンスター1体を墓地へ送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する！俺は手札の『グローアップ・バルブ』を墓地へ送り、デッキから『チューニング・サポーター』を、守備表示で特殊召喚する！」

【チューニング・サポーター】
星1／光属性／機械族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードをシンクロ素材に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

亨のフィールドに『チューニング・サポーター』が守備表示で特殊召喚された。

更に

「そして、墓地に送られた『グローアップ・バルブ』のモンスター効果を発動！」

【グローアップ・バルブ】
星１／地属性／植物族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１００
［効果・チューナー］
自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

「デッキの一番上のカードを墓地へ送り、墓地のこのカードを特殊召喚する！蘇れッ『グローアップ・バルブ』！！」

デッキトップのカードを墓地へ送り、亨のフィールドに『グローアップ・バルブ』が特殊召喚された。

これにより、亨のフィールドには神を含め、３体のモンスターが並んだ。

『オベリスクの巨神兵』
『チューニング・サポーター』
『グローアップ・バルブ』

「今こそ、オベリスクの最大級の効果を発動する！自分フィールドのモンスター２体をリリースする事で、相手フィールドのモンスターを、全て破壊するッ！！」

「ぐぅッ！？」

オベリスクの両手から『チューニング・サポーター』、『グローアップ・バルブ』の２体の力が吸収される。

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

【ソウルエナジーＭＡＸ】

「行くぜ、オベリスクッ！！　ゴッド・ハンド・インパクト！！」

ズゴゥッッ！！
カッッ！！

瞬間、大気が揺れ、辺りに凄まじい衝撃波が広がった。
邪神のフィールドに君臨していたドレッド・ルートはオベリスクの効果を受けて消し飛び、消滅した。

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

「凄い…、これが…神の力…！！」
「ぐぅッ…、おのれ西条ォ…！！」
「この効果を使用したターン、オベリスクは攻撃宣言をする事はできない。俺のターンは終了だ！！」

※

カッッ！！
ズゴゥッッ！！

大気をも揺るがす程の振動が響き渡る。

空に浮かぶ魔法陣の下を旋回するＯＣＧ研究会が乗るヘリコプターは、突発的な振動に機体を大きく揺さぶられた。

「うわぁあぁあ！？」

「キャァアアッ！？」

「ぬぅうッ！？」

機体を立て直し、何とかヘリコプターを飛ばす白石。

「な…何だったんだ…今のは…？」

「大気が…揺れたんでしょうか…？」

拓夜に成瀬の２人は窓の外から見える魔法陣を見上げる。

そこに移るのは、今も淡く赤紫色に輝く巨大な魔法陣。

そして、先の衝撃波によって周りを取り囲む雷雲は振り払われ、そこには夜空が見えた。

オベリスクが放ったゴッド・ハンド・インパクトによって、街を襲う雷雲は消滅したのだ。

「ッ！！　白石さん！！　今なら雷を恐れる事はないぜぃ！！　西条ちゃんの所へと突っ走れェエ！！」

「ヨシッ！！　任されたァア！！」

結締の合図により、操縦桿を野生の感で操作し、ヘリコプターを爆進させる白石。

ＯＣＧ研究会を乗せたヘリコプターは、邪神とデュエルを行う亨の元へと突き進む。

※

【邪神】
ＬＰ／８０００

［手札］
４枚

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
冥界の宝札

【西条亨】
ＬＰ／５２５０

［手札］
２枚

［モンスター］
オベリスクの巨神兵

「おのれ…まさか『邪神ドレッド・ルート』を破壊するとはな…！！」

邪神は表情を険しくし、対峙する亨を睨み付ける。

ドレッド・ルートが破壊された邪神のフィールドには、モンスターがない。

そして迎えた邪神のターン、邪神はデッキからカードをドローし、そのプレイを開始する。

「私のターンッ、ドロー！！」

（『封印の黄金櫃』１ターン経過）

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

上空に現れし黒い太陽が更に高度を下げる。

「ククク…次のターン、『封印の黄金櫃』の効果で除外された最強の神『邪神アバター』が、私の手札にやって来る。その時が貴様の最後だ…西条！！」

「ッ！！」

「私は手札より『レッド・ガジェット』を召喚する！！」

【レッド・ガジェット】
星４／地属性／機械族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　１５００
［効果］
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

邪神のフィールドに歯車モンスター、『レッド・ガジェット』が召喚され、効果が発動される。

「このカードが召喚に成功した時、デッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える…ククク！！」

デッキから『イエロー・ガジェット』のカードを手札に加えた邪神。

「ガジェットだと…くッ！？」

「私はカードを2枚セットし、ターンエンド…さぁ、西条よ。今が攻め時だぞ？　ククク…！！」

『レッド・ガジェット』を召喚し、2枚の伏せカードを用意してきた邪神。

最後の挑発的な言葉が、亨の思考にノイズを走らせる。

（奴は、俺のフィールドに神がいる事を分かっていながらも、攻撃力の低い『レッド・ガジェット』を召喚してきた…）

亨は邪神のプレイを自分に置き換え、その真意を図る。

（恐らく、奴の伏せた2枚のリバースカード…どちらか片方は、場

の『レッド・ガジェット』を守る為のカード。そしてもう1枚は…
次のターンに、神を降臨させる為のキーカード！！）

ならば、亨がとるべき手段とは？

「俺のターンッ、ドロー！！」

デッキからカードを手札に加えた亨は、そのカードを確認し

（…来たッ！！）

「俺は『魔導戦士　ブレイカー』を召喚！！」

【魔導戦士　ブレイカー】
星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１６００
ＤＥＦ　１０００
［効果］

このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを1個乗せる（最大1個まで）。このカードに乗っている魔力カウンター1個につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。また、魔力カウンターを1個取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する。

亨のフィールドに『魔導戦士　ブレイカー』が召喚された。

「ブレイカーの効果発動！このカードが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを1つ乗せる！魔力カウンターが1つ乗ったこのカードの攻撃力は、３００ポイントアップする！」

『魔導戦士　ブレイカー』
ＡＴＫ　１６００　↓　１９００
（魔力カウンター×１）

ブレイカーの持つ剣に力が宿る。

そして亨は、ブレイカーの第2の効果を発動した。

「更に、ブレイカーのもう1つの効果を発動！マナブレイク！ブレイカーに乗っている魔力カウンターを1つ取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード1枚を破壊する！」

『魔導戦士　ブレイカー』
ＡＴＫ　１９００　↓　１６００
（魔力カウンター×０）

邪神の場には3枚の魔法・罠カードが在る。
1枚は永続魔法『冥界の宝札』

そして、2枚の伏せカード。

（今、俺が最も警戒しなければならないのが…次の奴のターンでの、新たな神の降臨！！　どれが…そのキーカードなんだ！？）

険しい目つきで邪神のフィールドを睨み付ける亨。

この効果の具合によっては、今後の展開に大きな影響が及ぼされる。

狙いを外す訳にはいかない。

「俺が破壊するのは…、右側のカード！！　行け！『魔導戦士　ブレイカー』！！」

ブレイカーが剣の切っ先を亨が指差すカードに向けて狙いを定める。

その瞬間、邪神が動いた。

「クハハハハハッ！！　ならば私は、貴様のモンスター効果に対し、罠発動！『威嚇する咆哮』！！」

【威嚇する咆哮】
［罠カード］
このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

皮肉にも邪神が発動したカードは、亨が破壊の対象として選んだカードであった。

「このカードは、このターンの相手の攻撃宣言を封じるカード…これで貴様の神も、雑魚も、攻撃宣言はできない…ククク…！！」

（は…外した…ッ！？）

血の気が引くような感覚に襲われる亨は、ギッと奥歯を噛み締めて手札を確認する。

残された手札は2枚。

（どうする…このターン、俺のモンスターの攻撃は封じられた。今の俺に出来る事は…！？）

「…亨さん…ッ！！」

その時、亨を掴む葉月の手が、彼の手と重なった。

「烏丸さん…！！」

「私は…亨さんを信じてる！亨さんなら、あんな奴には負けないっ

て…私は信じてる！」

真っ直ぐな瞳で亨を見つめる葉月。

手を握られる感触で分かる。

小刻みに震える葉月の手。

本心はきっと、怖いのだろう。

だが、葉月は信じてると言った。

真っ直ぐに、自分を信じてると言ってくれた。

一瞬だが、亨にはそんな彼女が、マナと重なって見えた。

（烏丸さん…）

以前、葉月は亨に対してこう言った。

『アンタは諦めちゃ駄目なの！！　ＯＣＧ研究会としてだけじゃないわ！！　精霊界の皆だって、きっとそう思ってる！！　アンタの

背中には、アンタが思ってるよりもずっと、ずっと大きな夢が、皆からの夢や希望が寄せられているのよ！！』

そうだ。

自分は諦めてはいけない。

それを教えてくれたのは他でもない、烏丸葉月であり。

彼女を守る為に、そして彼女だけでなく、皆の笑顔を守る為に、自分は今ここに立っているのだ。

（そうだ…俺は諦めちゃいけない！！　たとえ無駄な足掻きだとしても、今の俺に出来る…最善の手段、それは…ッ！！）

「リバースカードを1枚セットし、ターンエンド！！」

※

「私のターン…ッ、ドロー！！」

邪神のターンへと移行し、そのスタンバイフェイズ。

邪神は空に手を翳し、高らかに笑い口を開く。

「クハハハハッ！！　私のターンのスタンバイフェイズ時、『封印の黄金櫃』の効果で除外されていた最強の神ッ『邪神アバター』が手札へと加わる！！」

ズズズズ…ッ！！

ゴゴゴゴゴゴ…！！

空に浮かぶ不気味な黒い太陽はその姿を1枚のカードに変え、邪神の手札に納まった。

険しい目つきで対峙する亨が見つめる中、邪神は手札のカードへと手を伸ばす。

【邪神】
ＬＰ／　８０００

［手札］
５枚

［モンスター］
レッド・ガジェット

［魔法・罠］
冥界の宝札
伏せカード　×１枚

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

［手札］
１枚

［モンスター］
オベリスクの巨神兵
魔導戦士　ブレイカー

［魔法・罠］
伏せカード　×１枚

「手札より『イエロー・ガジェット』を召喚し、そのモンスター効果を発動させる！」

【イエロー・ガジェット】
星４／地属性／機械族
ＡＴＫ　１２００
ＤＥＦ　１２００
［効果］
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

「その効果により、デッキから『グリーン・ガジェット』を手札に加える！更に私は永続罠『血の代償』を発動！」

【血の代償】
［永続罠］
５００ライフポイントを払う事で、モンスター１体を通常召喚する。この効果は自分のメインフェイズ及び相手のバトルフェイズのみ発動する事ができる。

【邪神】
ＬＰ／　８０００　→　７５００

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

「『血の代償』の効果により、私は５００のライフポイントと引き換えにもう一度、モンスターを通常召喚する事ができる！私はライフを５００ポイントを払い、『グリーン・ガジェット』を通常召喚！」

【グリーン・ガジェット】
星４／地属性／機械族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　６００
［効果］
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

「『グリーン・ガジェット』が召喚に成功した事により、私はデッキから『レッド・ガジェット』を手札に加える！クハハハハハッ！

！　これで再び、３体の生け贄が揃った！！」

邪神のフィールドに揃いし、３体の歯車モンスター達。

そして遂に、邪神は手札に舞い込んだ最強の神を取り出し、高らかに夜天に翳した。

「私は再び、永続罠『血の代償』の効果を発動する！！」

【邪神】
ＬＰ／　７５００　→　７０００

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

「ライフを５００ポイント払い、手札の神を降臨させる！！　私はフィールドの『レッド・ガジェット』『イエロー・ガジェット』『グリーン・ガジェット』の３体をリリースッ！！」

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

邪神のフィールドに、再び黒き太陽が浮かび上がる。

その黒き太陽はその姿を変え、あるモンスターの姿へと変貌した。

「森羅万象、時は来たれり…心の闇よ！！今こそ具現し、絶対恐怖を魅せ付けろッ！！　出よ、『邪神アバター』！！」

【邪神アバター】

星１０／闇属性／悪魔族

ＡＴＫ　？

ＤＥＦ　？

［効果］

このカードは特殊召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースした場合のみ通常召喚する事ができる。このカードが召喚に成功した場合、相手ターン数えて2ターンの間、相手は魔法・罠カードを発動できない。このカードの攻撃力・守備力は、フィールド上に表側表示で存在する「邪神アバター」を除く、攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力＋１００ポイントの数値になる。

ゴゴゴゴゴゴ…ッ！！

「『邪神アバター』…ククク…ッ！！　則ち、私自身の攻撃力・守備力は、『邪神アバター』以外の攻撃力が一番高いモンスターの攻撃力＋１００ポイントの数値となる！！」

現在、フィールド上で最も攻撃力が高いモンスター、それは…

「そう、西条よ…貴様の神『オベリスクの巨神兵』の攻撃力＋１００ポイントの数値が、『邪神アバター』のステータスとなる！！」

『邪神アバター』
ＡＴＫ　？　↓　４１００
ＤＥＦ　？　↓　４１００

「なに…あの姿…まるで、オベリスクの闇みたい…！？」

「くッ！？」

アバターの召喚が成功した事で、圧倒的不利に立たされた亨。

「ククク…、『邪神アバター』の召喚成功により、永続魔法『冥界の宝札』の効果を発動!!　デッキからカードを2枚ドローする!!」

更に手札を補充する邪神。

世界の命運を分けた2人の戦いは、更に熾烈を極めていく。

邪神　ＶＳ　神　（後書き）

この話を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、こちらが今回の話でモデルとしている西条亨のデッキです。

あくまでモデルですので、記載されていないカードが作中に登場する場合がございます。

ご了承ください。

【決闘者の魂】
４０枚

【モンスター２３枚】

ブラック・マジシャン
ブラック・マジシャン・ガール
カオス・ソーサラー
カオス・ソーサラー
見習い魔術師
見習い魔術師
見習い魔術師
魔導戦士ブレイカー
水晶の占い師
エフェクト・ヴェーラー
エフェクト・ヴェーラー
執念深き老魔術師

レアル・ジェネクス・コーディネイター
チューニング・サポーター
チューニング・サポーター
チューニング・サポーター
ダンディ・ライオン
ジャンク・シンクロン
ジャンク・シンクロン
デブリ・ドラゴン
デブリ・ドラゴン
クイック・シンクロン
クイック・シンクロン

【魔法13枚】

ハリケーン
調律
調律
地獄の暴走召喚
地獄の暴走召喚
地獄の暴走召喚
シンクロ・キャンセル
精神操作
ディメンション・マジック
ワン・フォー・ワン
おろかな埋葬
死者蘇生
貪欲な壺

【罠４枚】
聖なるバリアーミラーフォースー
リビングデッドの呼び声
リミット・リバース
リミット・リバース

【エクストラデッキ１５枚】
スターダスト・ドラゴン
レアル・ジェネクス・クロキシアン
ジャンク・ウォリアー
ニトロ・ウォリアー
アーカナイト・マジシャン
ドリル・ウォリアー
ジャンク・バーサーカー
ジャンク・アーチャー
ジャンク・デストロイヤー
フォーミュラ・シンクロン
シューティング・スター・ドラゴン
ＴＧ・ハイパー・ライブラリアン
Ａ・Ｏ・Ｊ－カタストル
氷結界の龍　ブリューナク
氷結界の龍　トリシューラ

【サイドデッキ】
オベリスクの巨神兵
ラーの翼神竜
ドッペル・ウォリアー

激流葬
奈落の落とし穴
奈落の落とし穴
調律
次元幽閉
次元幽閉
次元幽閉
異次元からの埋葬
異次元からの帰還
ライトロード・ハンター　ライコウ
ライトロード・ハンター　ライコウ

デッキコンセプトは、地獄の暴走召喚でチューサポを特殊召喚。
ジャンク・デストロイヤーで3破壊＋3ドローが狙いです。

見習い魔術師とシンクロ素材を使い分ける事で、アーカナイトをシンクロ召喚する事もできます。

っていうか、今回の小説で最初にスターダストをシンクロ召喚したとき、スターダストじゃなくてトリシューラを出していれば勝負は決まっていたんじゃね？

なんて言ってはイケマセン！！

そんな事したら、邪神さん、泣いちゃうよ？

お兄さんとの約束だ！！

さて、来月の第一週の日曜日に、遂に実技試験が始まります。

これに合格しなければ、資格取得になりません。

誠にかってながら、試験が終了するまで、小説の更新は出来ません。

勉強する時間を下さい。

勝手都合なのは重々承知しておりますが、試験終了後、更新は再開するつもりです。

この小説を読んで下さっている方々には、深くお詫び申し上げます。

邪神　VS　神　？（前書き）

～あらすじ～

数年の歳月を経て、遂に対峙した西条亨に邪神。

舞台は東西南北、全てが交わる道のうえに建てられた一本の塔。

その塔の遥か上空。

夜空に浮かぶ赤紫色をした不気味な魔法陣。

その魔法陣の上に立ち、西条亨に烏丸葉月の二人は、邪神との激しいデュエルを繰り広げていた。

邪神　VS　神　？

※

【邪神】
ＬＰ／　７０００

［手札］
６枚

［モンスター］
邪神アバター

［魔法・罠］
冥界の宝札
血の代償

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

［手札］
１枚

［モンスター］
オベリスクの巨神兵
魔導戦士　ブレイカー

［魔法・罠］
伏せカード　×1枚

邪神のフィールドに、最強の神『邪神アバター』が遂に降臨した。

アバターの姿は、その場で最も攻撃力の高いモンスターの姿へと変貌する。

つまり、アバターは西条亨のフィールドに君臨する神、オベリスクの姿へとその身を移し替えていた。

「クハハハハッ！！　邪神アバターの攻撃力は、貴様のオベリスクよりも１００ポイント高い数値となる！！」

『邪神アバター』
ＡＴＫ　？　↓　４１００
ＤＥＦ　？　↓　４１００

「何て効果なの…これじゃあ、どんなに攻撃力を底上げしても、絶対にアバターには勝てないじゃない！？」

亨の傍らでデュエルを見ていた葉月は、アバターの効果に驚愕する。

しかし、『邪神アバター』の効果はそれだけではない。

「ククク…『邪神アバター』が召喚に成功した事により、【絶対神の領域】が展開される!!　アバターが召喚されてから2ターンの間、相手は魔法・罠カードの発動は許されない!!」

「相手は…って事は…!?　自分は一方的に魔法や罠が使えるって事!?　そんなのーー」

「これが【神】の効果だ!!　ククク…どうした西条?先程から黙ってばかりで?」

邪神はニヤニヤと笑みを浮かべる。

『邪神アバター』を召喚できた事に、更に自信や勢いをつけてきた邪神は、亨を侮辱する。

「貴様もよく知っているだろう、私自身…則ち、最強の神『邪神アバター』の効果を?貴様が如何なる強力なモンスターを召喚した所で、私には通用しない!!　ククク…!!　やはり貴様は昔から変

わらない。仲間が居なければ、貴様如きが私にかなう筈がないのだ！！」

「…言いたい事は、それだけか？」

「…なに？」

静かな声だった。

亨から発せられた声は、呟く程度の小さな声だった。

しかし、葉月や邪神には、その声はハッキリと聞こえた。

「言いたい事はそれだけか、と言ったんだ！！」

「ッ！？」

亨の気持ちが爆発したかのような怒声が響き渡る。

「確かに『邪神アバター』の効果、【絶対神の領域】は強力だ…。だがッ、俺は決して諦めない！！　どんなに強力な【神】が相手だろうと、仲間（カード）の絆を信じてる！！　これがッ、その1枚だ！！」

亨はそう言うと、先のターンに伏せた魔法・罠カードゾーンのカードを発動させた。

「リバースカード、オープン！！『ディメンション・マジック』！！

【ディメンション・マジック】
［速攻魔法］
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。

「『ディメンション・マジック』は、俺のフィールドに魔法使い族モンスターが存在する時に発動できる！モンスター1体をリリースし、手札から新たな魔法使い族モンスターを特殊召喚する！！」

亨のフィールドの『魔導戦士　ブレイカー』がリリースされる。

「新たな魔法使い族モンスターだと…！？」

「亨さん…まさかっ！？」

亨は残った最後の手札1枚を掴み取り

「現れよッ！！　最上級魔術師『ブラック・マジシャン』！！」

【ブラック・マジシャン】
星7／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２１００

西条亨のフィールドに現れし、最上級魔術師『ブラック・マジシャン』。

「ここに来て…『ブラック・マジシャン』のカードだと…ッ!?」

「『ディメンション・マジック』の効果により、邪神ッ!!　貴様の『邪神アバター』を破壊する!!　行けッ!!『ブラック・マジシャン』!!」

亨の合図と共に高く跳躍した『ブラック・マジシャン』は、『邪神アバター』に向けて手にした杖を構える。

そして、杖から放たれた最上級魔術、黒・魔・導により『邪神アバター』は爆散し、消滅した。

ズゴゥッ!!
バリバリバリッ!!

「グァァアアッ、きッ…貴様ァア!!」

「凄い…神を…倒した…!!」

邪神のフィールドから神（アバター）が消えた。

これにより邪神のフィールドにはモンスターは無く、魔法・罠ゾーンにカードが存在するのみとなった。

「ぐッ！？　ゥヴ…ッ！！　西条、貴様…ッ！！　一度ならず二度も…【邪神】を…！！　だが、『邪神アバター』の効果【絶対神の領域】は受けてもらうぞッ！！」

ドンッッ！！

亨の周りの空気が急に重たく感じられるようになった。

アバターの効果が発動し、亨はこれから2ターンの間は、魔法・罠の発動ができなくなってしまった。

「これで西条よ…貴様は2ターンの間、魔法・罠は発動できない！！」

「確かに…それだけを聞けば強力な効果に聞こえるが…邪神、フィールドを見てみるんだな！」

【邪神】
ＬＰ／７０００
［手札］
６枚

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
冥界の宝札
血の代償

【西条亨】
ＬＰ／５２５０
［手札］
０枚

［モンスター］
オベリスクの巨神兵
ブラック・マジシャン

［魔法・罠］
なし

「貴様のフィールドには壁となるモンスターはいない！だが俺のフィールドには、『オベリスクの巨神兵』に『ブラック・マジシャン』がいる！！」

邪神は既にこのターン、モンスターの召喚権を使用している。

このままターンを終えれば、次の亨のターンでモンスターの総攻撃が決まる。

魔法・罠は使えずとも、三幻神と最上級魔術師を揃えた亨は、強気な姿勢でいられた。

だが

「それがどうした？」

「ッ！？」

「！！」

強気な姿勢で挑む亨に対し、邪神は不敵な笑みで迎え撃つ。

「貴様のその態度が成せる理由は、三幻神に最上級魔術師が在るが

故にだ…だが、それら全てを消し去ってしまった場合、貴様はその強気な姿勢を保てるのかな？」

「なにッ！？」

邪神はそう言うと、手札から1枚のカードを掴み取り

「私はフィールドの永続罠『血の代償』の効果を発動する！！」

【邪神】
ＬＰ／　７０００　→　６５００

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

「私のライフを５００払う事で、モンスター1体を通常召喚する！手札より『レッド・ガジェット』を召喚し、その効果を発動！！」

邪神のフィールドに2体目の『レッド・ガジェット』が召喚された。

その効果により、デッキという名の歯車が回りだす。

「『レッド・ガジェット』が召喚に成功した事により、デッキから『イエロー・ガジェット』を手札に加える！そして、手札に加わった『イエロー・ガジェット』を、永続罠『血の代償』の効果を使用し、再び召喚ッ！！」

【邪神】
ＬＰ／　６５００　→　６０００

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

レッドに続き、イエローが召喚される。

『イエロー・ガジェット』が召喚された事で、再びその効果（歯車）が回る。

「『イエロー・ガジェット』の効果により、私は『グリーン・ガジェット』をデッキから手札に加える！そして再び、永続罠『血の代償』の効果発動！！」

【邪神】
ＬＰ／　６０００　→　５５００

【西条亭】
ＬＰ／　５２５０

「ライフを５００払い、手札の『グリーン・ガジェット』を召喚ッ！！！」

ドンッ！！
ドンッ！！
ドンッ！！

瞬く間に邪神のフィールドに展開されるモンスター。

１度はがら空きにしたフィールドが、一気に3体のガジェットで埋められたのだ。

これには流石に亨だけでなく、デュエルを見ていた葉月も唖然となる。

「嘘でしょ？また…3体のモンスターが…！！」

「そして『グリーン・ガジェット』の効果により、デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加える。ククク…！！　まさか私に、こうも早く3体目の神を召喚させるとはな。思ってもみなかったぞ？」

「ッ！？」

3体目の神。

邪神の口から発せられたその言葉に、亨や葉月の心臓がドクンッ！！と跳ね上がる。

「3体目の神…まさかッ、もう既に手札の中にッ！？」

「ククク…！！　貴様を狂気と絶望の闇に落としてやろう！！　いくぞ……ッ！？」

バリバリバリバリ…！！

邪神が手札の1枚を掴んだその時。

けたたましいエンジンとプロペラ音をたてながら、一機のヘリコプターが両者の間を横切った。

「西条ちゃん!!」
「葉月さん!!」
「亨さん!!」
「フヌォオッ!!美少女よォオ!!」
「2人共、無事みたいよ!!」

ヘリの窓から顔を出し、それぞれに声をあげるOCG研究会のメンバー達。

ヘリが魔法陣の上に着陸すると、それぞれのメンバーは2人のもとに駆け寄ってきた。

「ッ!?　みんな…!!」

「遂に邪神の野郎がおっぱじめやがったみたいだな!西条ちゃん、状況はどうなってる?」

それぞれにフィールドを確認するメンバー達。

邪神のフィールドには3体のガジェットモンスター。

そして亨のフィールドには『オベリスクの巨神兵』に『ブラック・マジシャン』が。

「ククク…仲間が集った所で、私のする事には変わりはない!!いくぞ!!　永続罠『血の代償』の効果を発動!!」

【邪神】
ＬＰ／５５００　↓　５０００

【西条亨】
ＬＰ／５２５０

「『レッド・ガジェット』、『イエロー・ガジェット』、『グリーン・ガジェット』の3体をリリースッ!!」

ゴゴゴゴゴ…!!

邪神の3体のモンスターが、突如フィールドに渦巻く黒い渦に吸い込まれていく。

そしてその闇の渦の中から、遂に3体目の【邪神】が姿を現した。

「森羅万象、殺戮の狂気に踊り狂え！！　出よ『邪神イレイザー』！！」

【邪神イレイザー】
星１０／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　？
ＤＥＦ　？
［効果］
このカードは特殊召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースした場合のみ通常召喚する事ができる。このカードの攻撃力・守備力は、相手フィールド上に存在するカードの枚数×１０００ポイントの数値になる。このカードが破壊され墓地へ送られた時、フィールド上のカードを全て破壊する。自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを破壊する事ができる。

ゴゴゴゴゴ…！！

遂に姿を現した3体目の神『邪神イレイザー』。
イレイザーから発せられる闇の奔流が辺りを包み、亨達は思わず身構える。

「くッ！！　これが…邪神ッ！？」

「前に亨さんが話してくれた、精霊界の…。亨さんの持つ三幻神と、対を成す存在…あの『邪神イレイザー』は、どういった効果が…！？」

「ククク…『邪神イレイザー』の攻撃力・守備力は、相手フィールド上のカード１枚×１０００ポイントの数値となる…！！」

【西条亨】
［モンスター］
オベリスクの巨神兵
ブラック・マジシャン

［魔法・罠］
なし

「よって、イレイザーのステータスは２０００となる！！」

【邪神イレイザー】
ＡＴＫ　？　↓　２０００
ＤＥＦ　？　↓　２０００

「攻撃力２０００？だけど、亨さんのフィールドには攻撃力２５００の『ブラック・マジシャン』や、攻撃力４０００の『オベリスクの巨神兵』がいるんだ！！　そんな攻撃力なんかの神なんかｰｰ」

「ククク…西条拓夜よ、その軽薄な考えは貴様の決闘者としての底が知れるぞ？」

拓夜の発言を小馬鹿にする邪神。

思わずムキになる拓夜であったが、その時、亨の表情が視界に入った。

「…っ！！」

「と…亨さん…？」

険しい表情で『邪神イレイザー』を見つめる亨。

それ程、イレイザーの効果が強力なのだろうか？

不思議に思う拓夜を余所に、邪神はデュエルを続行させていく。

「いくぞ！！『邪神イレイザー』の効果を発動！！　自分自身を破壊する！！」

「なっ！？」

「えっ！？」

「自分自身を破壊！？　いったい、どういう事なんです！？」

イレイザーの効果に驚く拓夜に葉月、そして成瀬。

イレイザーは体から大量の血を巻き上げ、再びフィールドに現れた黒い渦の中へと沈んでいった。

しかも、それだけではない。

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

「なっ！？　なんで亨さんのモンスター達まで！？」

フィールドに現れた黒い渦は、亨のフィールドの『オベリスクの巨神兵』に『ブラック・マジシャン』までもを巻き込み、文字通り全てのフィールドのカードを消滅させてしまったのだ。

互いの全てのフィールドのカードを破壊した邪神は、ニヤリと狡猾な笑みを浮かべる。

「『邪神イレイザー』が破壊され墓地へ送られた時、フィールド上に存在する全てのカードを破壊する！！　その名の如く、全てを抹殺（イレイザー）する力だ！！」

邪神はそう言うと、手札から1枚のカードを取り出し

「私はリバースカードを1枚セットし、ターンエンド…さぁ、西条よ…貴様のターンだ！ククク…！！」

※

【邪神】
ＬＰ／　５０００

［手札］
４枚

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
伏せカード１枚

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

［手札］
なし

［モンスター・魔法・罠］
なし

邪神のターンが終了し、亨のターンへと移行する。

手札も、モンスターも、魔法も、罠もないこの状況。

「さぁ、どうした西条？貴様のターンだぞ？ククク…！！」

挑発的にクイクイッと人差し指を動かす邪神。

亨は、くっ…と、奥歯を噛み締めながらデッキトップにゆっくりと指を添えた。

「どうしたというのだ、西条め…」

「何か様子が変だぜぃ…」

亨の様子に気付く仲間達。

後から到着したメンバー等は知らないのだ。

今の亨に置かれた状況が。

「なぁ葉月、亨さん…どうしたんだ？」

「今、亨さんは…『邪神アバター』の効果によって、２ターンもの間…魔法・罠が発動できない状況なのよ」

葉月の説明を聞き、驚きに満ちた表情になる仲間達。

今、互いのフィールドには壁となるモンスターはいない。

つまり、先にモンスターを召喚し、ダイレクトアタックを決める事が出来れば、デュエルの流れは大きく変わる。

しかし、亨に置かれた状況は過酷なものであった。

手札もないこの状況では、このドローに全てが掛かっていると言っても過言ではない。

しかし、『邪神アバター』の効果によって、魔法・罠の使用が禁じられている。

たった１枚のカードからモンスターを召喚するには、このドローで下級モンスターを引き当てるしかないのだ。

「魔法・罠が…使えないだって！？」

「そんな…上級モンスターを召喚しようものでしたら、１枚のカー

ドからですと、大抵は魔法カードに頼らなければなりません。仮に、相手を迎撃する罠カードを引いたとしても、使う事はできない…それらを封じられたとなっては…」

不安に思う拓夜に成瀬。

「でも…」

しかし、葉月は違った。

その瞳には不安の色はなく、確固たる信念が宿っていた。

「でも、大丈夫だと私は信じる!!　あの人は、こんな所では終わらないって、私は信じてる!!」

「その通りだ、美少女よ!!」

「信じるって事は、口で言うほど簡単じゃないぜぃ…誰だって1人じゃ不安に感じてしまう事だってある。だが、西条ちゃんには俺たち仲間がいる!!　仲間の想いという力がある!!」

結締の言葉に何かを感じた拓夜に成瀬。

（仲間を信じる気持ち…！！）

（そうです！亨さんが不安に思うなら、私たちが支えてあげれば良いんです！！）

そう感じた2人の口からは、仲間（亨）を応援する言葉となって発せられた。

「フン…。想いが募れば募る程、期待に応えられなかった時の絶望は大きくなる。そこから生まれてくる闇がプレッシャーというのだ。西条よ、貴様はこの闇（プレッシャー）に耐えられるかな？」

邪神からの問いかけに対し、亨はピクリと反応する。

「闇？それは違うぞ…邪神！」

「っ！？」

「お前には、みんなからの声援がプレッシャーという闇に聞こえるかもしれないが、俺は違う！！　この声援こそが、希望へと繋がる一筋の光になる！！　俺はそう信じてる！！」

亨の言葉を鼻で笑う邪神。

「待たせたな…俺のターンッ、ドロー！！」

シュバッ！！

仲間からの想いが募ったドローカード。

仲間達がゴクリと息を飲み込む。

亨はドローカードを確認し、口端をニヤリと上げ、

「これが…皆の想いを繋ぐ1枚になる…！！　俺はモンスター1体をセットし、ターンエンド！！」

亨がエンド宣言をした瞬間、邪神が動いた。

「ならばそのエンドフェイズ時、速攻魔法『終焉の焔』を発動！！」

【終焉の焔】
［速攻魔法］
このカードを発動する場合、自分は発動ターン内に召喚・反転召喚・特殊召喚できない。自分フィールド上に『黒焔トークン』（悪魔族・闇・星１・攻／守０）を２体守備表示で特殊召喚する。（このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためのリリースはできない）

ボゥ…！！
ボワッ！！

邪神のフィールドに再び、『黒焔トークン』２体が守備表示で特殊召喚される。

「ククク…！！　どの道、貴様がモンスターで攻撃をして来ようが、結局私にはダメージは入らなかった訳だ…。では、私のターンに入らせてもらうぞ？」

不敵な笑みを浮かべる邪神。

西条亨と邪神。

二人の因縁の戦いは更なる激しさを増し、終盤へと突入する。

邪神　ＶＳ　神　？（後書き）

この作品を読んで下さり、誠にありがとうございます。

本当は２話分で西条亨と邪神のデュエルを終わらせるつもりだったのですが、下書きの段階でページ数が結構イッちゃいまして・・・。

三分割での構成とさせていただきます。

さて、話は変わりますが・・・時代は変わるものです。

僕が初めて遊戯王カードを始め、デュエルを行ったのが中学２年生の頃。

当時は生贄召喚の概念がなく、高攻撃力のカードを召喚して殴るというのがデュエルの主流でした。

人食い虫がめちゃくちゃ強く感じられた時期ですｗ

生贄１体での高火力、デーモンの召喚や、罠カードの効果を永続的に無効化する人造人間サイコショッカー。

その頃はお小遣いも貰っておらず、そういった強力カードを使う友人達が凄く羨ましかった事を今でも覚えてます。

そして様々な効果モンスターが生まれ、様々な強力なデッキが生まれ、遊戯王カードは次第にカオスの時期に突入します。

カオス期に５７３は自重したのか、禁止カードという概念が生まれ、

様々な制限が課せられた中で、遊戯王カードは５７３という会社と決闘者と一緒に成長していったのです。

そして時代は、シンクロ召喚に突入します。

そして次は、シンクロ召喚からエクシーズ召喚に！！

・・・着いていけるかな、俺？

カットビングできるかな、俺？

さて、変な話はここまでにして、

実技試験、終了しました。

結果発表は今月の２９日。

ぁぁぁぁぁぁ・・・。マジで怖い

邪神よりも怖いや

三英雄を継ぎし者（前書き）

東北地方太平洋沖地震にて、多くの死傷者や行方不明者が出ました。

更には原発による被害も重なり、今回の事件で世界中のメディアが日本を見ています。

被災した方々に、少しでも支援を。と思い、僕も身近な募金に協力しました。

ほんの些細な、当事者たちからすれば、そんな事？と思われるかもしれません。

ですが、ほかに出来る事といえば、僕の場合はこの小説を更新する事。

少しでも読んで、楽しんで頂ければとの想いを込めて書きました。

不謹慎かもしれませんが、よろしくお願いします。

三英雄を継ぎし者

※

「私のターンッ、ドロー！！」

【邪神】
ＬＰ／　５０００
［手札］
５枚
［モンスター］
黒焔トークン　×２
［魔法・罠］
なし
［手札］
なし
［モンスター］

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

裏側守備表示　×1体

［魔法・罠］
なし

始まった邪神のターン。

デッキからカードをドローした邪神は、手札に眠る1枚のカードを見つめ、狡猾な笑みを浮かべる。

「ククク…！！　【邪神】カードは全て使い果たしたが…西条よ、まさかこれで終わりだとは思ってないだろうな？」

「ッ！？　【邪神】のカードは、世界には3枚しか存在しない筈…！？　まさか…他にも神のカードが…！！」

「いいや…神ではない。だが…このカードは、神を崇める人々の至高なる魂が宿るカードだ。今、それを魅せてやろう！！　『黒焔トークン』2体をリリースッ！！」

邪神はそう言うと、手札のそのカードを天に翳した。

カッッ！！

「来たれ！！『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』！！」

【Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ】
星１０／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［効果］
このカードは、このカードの効果でしか特殊召喚できない。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、次のターンのスタンバイフェイズ時に手札を１枚捨てる事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

ゴゴゴゴゴ…！！

邪神のフィールドに降臨せし、絶対神の守護者。

絶対神。

則ち、『邪神アバター』の守護者。

「こ、このカードは…ッ！？」

「ククク…。古代エジプトにおいて、太陽とは最高神として崇められていた…。太陽とは幾らその姿を地に沈めようが、また再び登（蘇）る様に、このカードもまた、その力を宿している！！」

太陽の力。

その言葉に、亨や葉月。

ＯＣＧ研究会のメンバー達は、以前戦った月影陽一の『太陽龍インティ』を思い出した。

「いくぞ、バトルフェイズに入らせてもらおう！！『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』で、西条のセットモンスターに攻撃！！　ソーラーフレア！！」

ゴゥッ！！

『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』の放った強力な一撃が、亨の場のセットモンスターを破壊した。

「くッ！！　戦闘破壊された『見習い魔術師』のモンスター効果を発動！！」

【見習い魔術師】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　８００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上で表側表示の魔力カウンターを乗せる事ができるカード１枚に魔力カウンターを１個乗せる。このカードが戦闘によって破壊された場合、デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を選択して自分フィールド上にセットする事ができる。

「このカードが戦闘破壊された場合、デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体をセットできる！俺はデッキから、２枚目の『見習い魔術師』をセットする！！」

「よし、何とか壁モンスターを残せれたぜぃ！」

「チィ…、リクルーターだったか。私はカードを1枚セットし、ターンエンド！！」

「俺のターンッ、ドロー！！」

【邪神】
ＬＰ／５０００

【西条亨】
ＬＰ／５２５０

邪神のターンが終了し、亨のターンへと移行する。

デッキからカードをドローした亨は、そのカードを確認した後、邪神のフィールドに君臨する『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』を見上げる。

（ヤツのモンスターの攻撃力は３０００…それに、ヤツが言っていた太陽の力。まさかとは思うが…）

「…俺はこのターン、何もしない！ターンエンドだ！！」

「何もしない？ククク…、何も“できない”の間違いではないのか？」

亨の言葉を冷やかし、否定する邪神は自分のターンに移り、カードをドローした。

「私のターンッ、ドロー！！　このターンで西条よ、貴様に架けられていた『邪神アバター』の効果は消える。だが、私のフィールドに『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』が在る限り、貴様には敗北の未来しか残されていない！！」

「そんな事はない！！　例え俺に残された未来が、敗北しかないというのなら、俺たちで！新たな未来を切り開いてみせる！！」

「フン…出来るのならやってみろ！手札より『レッド・ガジェット』を召喚！！」

【レッド・ガジェット】
星４／地属性／機械族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　１５００
［効果］

このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

「『レッド・ガジェット』が召喚された事で、デッキより『イエロー・ガジェット』を手札に加える！行くぞッ！！　西条ォ！！」

モンスターを召喚し、バトルフェイズへと突入する邪神。

「『レッド・ガジェット』で、貴様の場にセットされた『見習い魔術師』を攻撃！！」

ズガッ！！

「くッ！！　戦闘破壊された『見習い魔術師』の効果により、俺はデッキから、３枚目の『見習い魔術師』をセットする！！」

「次だ！！『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』で、再び『見習い魔術師』に攻撃！！　ソーラーフレア！！」

ズゴゥッ！！

「『見習い魔術師』の効果発動!!　デッキから『水晶の占い師』をセットする!!」

このターン、何とか邪神の攻撃を退けた事にホッと胸を撫で下ろす仲間達。

「これで貴様のリクルーターは消えた。次のターンで仕留めてやろう!私のターンは終了だ!!」

※

【邪神】
ＬＰ／５０００

［手札］
４枚

［モンスター］
Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ

レッド・ガジェット
［魔法・罠］
伏せカード　１枚

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０
［手札］
１枚
［モンスター］
裏側守備表示　１体
［魔法・罠］
なし

邪神のターンが終了し、迎えた亨のターン。

「行くぜ！俺のターンッ！！」

デッキに指を添えて、亨は自分のデッキに強く念じる。

（このターンで、デュエルの流れを変えてみせる！！）

「ドローッ！！」

シュバッ！！

デッキからカードをドローした亨は、そのカードと1枚の手札を確認し、

「邪神…覚悟は良いか？」

「ッ！？」

邪神は亨の言葉に思わず、眉間にシワをよせる。

逆に仲間達は彼の発言に、それぞれテンションが盛り上がっていった。

今まで邪神の猛攻に堪え忍んだ亨の反撃が、遂に始まった。

「モンスターを反転召喚！『水晶の占い師』！そのリバース効果を発動する！！」

【水晶の占い師】
星１／水属性／魔法使い族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　１００
［効果］
リバース：自分のデッキの上からカードを２枚めくり、その内１枚を選択して手札に加える。残りはデッキの一番下に戻す。

『水晶の占い師』の効果により、亨のデッキの上から２枚のカードがめくられる。

『貪欲な壺』

『クイック・シンクロン』

「この効果で、デッキからカードを２枚めくり、その中から１枚のカードを選択して、手札に加える！！　俺が選ぶのは、魔法カード

『貪欲な壺』！！」

『貪欲な壺』のカードを手札に加えた亨は早速、そのカードを発動させた。

「そして手札に加えた『貪欲な壺』を発動！！　墓地のモンスター5体をデッキに戻し、シャッフル！」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

［デッキに戻したカード］

スターダスト・ドラゴン
ダンディライオン
デブリ・ドラゴン
見習い魔術師　×2

「そしてデッキから、カードを2枚ドローッ！！」

デッキからカードを2枚ドローした亨は、更に怒涛のプレイを魅せ付ける。

「チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！！」

【ジャンク・シンクロン】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　５００
［効果・チューナー］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「『ジャンク・シンクロン』が召喚に成功した時、墓地に眠るレベル２以下のモンスター１体を、守備表示で特殊召喚する！蘇れ、『

チューニング・サポーター』！！」

【チューニング・サポーター】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ　１００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードをシンクロ素材に使用する場合、このカードはレベル２モンスターとして扱う事ができる。このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

亨のフィールドに『水晶の占い師』、『ジャンク・シンクロン』、『チューニング・サポーター』の３体が並ぶ。

「シンクロ召喚が狙いか？しかし、そんな低レベルのシンクロ召喚では、私の『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』にはかなわない…！」

亨の場に揃ったモンスターを鼻で笑う邪神。

しかし、これで終わる亨ではなかった。

「まだだ！！『チューニング・サポーター』が特殊召喚された事により、俺は手札の速攻魔法『地獄の暴走召喚』を発動する！！」

「ッ！！　そのカードは…ッ！？」

【地獄の暴走召喚】
［速攻魔法］
相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力１５００以下のモンスター１体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

「このカードは攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚に成功した時に発動する事ができる！そのモンスターと、相手の場のモンスター１体との同名カードを、可能な限り全て特殊召喚する！！来いッ『チューニング・サポーター』！！」

ドドドド…ッ！！

『地獄の暴走召喚』の効果により、デッキから残り2体の『チューニング・サポーター』が特殊召喚される。

それにより、亨のフィールドは一気に5体のモンスターで埋め尽くされた。

「くッ…『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』は自身の効果でなければ、特殊召喚はできない…！！　ならば私は、墓地より『レッド・ガジェット』を全て特殊召喚する！！」

【邪神】
ＬＰ／　５０００

［モンスター］
Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ
レッド・ガジェット　×３

［魔法・罠］

伏せカード　×１

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

［モンスター］
水晶の占い師
ジャンク・シンクロン
チューニング・サポーター　×３

互いのフィールドにモンスターが出揃った。

そして、亨の反撃が始まる。

「『チューニング・サポーター』はシンクロ素材となる時、任意でレベルを１か２に変更する事ができる！！　行くぞ！！　レベル１の『水晶の占い師』と『チューニング・サポーター』２体、そしてレベルが２となった『チューニング・サポーター』１体に、レベル３の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！！」

亨の場のモンスター達が跳躍し、それぞれの星（レベル）が一つになる。

1＋1＋1＋2＋3＝8

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます！光さす道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！！　粉砕せよ！！『ジャンク・デストロイヤー』！！」

【ジャンク・デストロイヤー】
星８／地属性／戦士族
ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　２５００
［シンクロ／効果］
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

亨のフィールドに怒号の魔神『ジャンク・デストロイヤー』が召喚された。

邪神はそのモンスターのシンクロ召喚に、驚きのあまり思わず声をあげた。

「『ジャンク・デストロイヤー』だとッ!?」

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動!このカードをシンクロ素材とした、チューナー以外のモンスターの数まで、フィールドのカードを破壊する事ができる!!」

今回、亨がシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数は4体。

『水晶の占い師』
『チューニング・サポーター』×3

「その数は4体!! よって邪神!貴様のフィールドの『Ｔｈｅ ｓｕｐｒｅｍａｃｙ ＳＵＮ』と、3体の『レッド・ガジェット』を破壊する!!」

「グゥッ!?　きッ…貴様ァアッ!!」

亨の繰り出した展開（コンボ）に、拓夜に成瀬、そして葉月の3人は開いた口が塞がらなかった。

驚きや嬉しさが混じり、3人はそれぞれに声をあげる。

「『ジャンク・デストロイヤー』…凄い効果です!」

「これが決まれば、邪神のモンスターは全滅だぜ!!」

「亨さん、やっちゃええ!!」

「行け、『ジャンク・デストロイヤー』!!　タイダル・エナジー!!」

『ジャンク・デストロイヤー』から溢れる闘志が、巨大な波となって邪神のモンスターを襲う。

「チィッ、そうはさせんぞ西条!!　貴様のモンスターも道連れにしてくれる!!　罠発動!!『奈落の落とし穴』!!」

【奈落の落とし穴】
［罠カード］
相手が攻撃力１５００以上のモンスターを召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。そのモンスターを破壊しゲームから除外する。

「このカードで、貴様の『ジャンク・デストロイヤー』を破壊するッ！！」

「だが、『ジャンク・デストロイヤー』の効果も受けてもらうぞッ！！」

ズゴウッ！！

ガガガガガ…ッ！！

互いの効果が炸裂し、フィールドは巨大な爆発に包まれる。

互いのフィールドにはカードはない。

そして亨は、シンクロ素材として墓地へ送られた『チューニング・サポーター』の効果を発動した。

「3体の『チューニング・サポーター』がシンクロ素材として墓地へ送られた為、俺はデッキからカードを3枚ドローする！」

デッキからカードを3枚ドローし、手札を5枚へと増強させた亨。

そして、がら空きの邪神のフィールド。

亨は今こそ、このチャンスを逃さない。

「手札より、魔法カード発動！！『死者蘇生』！！　この効果により、墓地に眠るモンスター1体を復活させる！！」

「な、なにッ！？」

【死者蘇生】
［魔法カード］
自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動す

る。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

亨は自分の墓地から1枚のカードを取り出した。

そして、そのカードを力強く、自分フィールド上に特殊召喚させた。

「現れよ…！！『オベリスクの巨神兵』！！」

【オベリスクの巨神兵】
星１０／神属性／幻神獣族
ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　４０００
［効果］
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター３体をリリースして召喚しなければならない。このカードの召喚は無効化されない。このカードが召喚に成功した時、魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。このカードは特殊召喚した場合エンドフェイズ時に墓地へ送られる。自分フィールド上のモンスター２体をリリースする事で、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃宣言できない。

西条亨のフィールドに復活せし神。

オベリスクの巨神兵。

その姿に邪神は思わず目を見開き、動揺を露わにした。

「ここに来て…神を召喚しただとッ！？」

「すげぇ…！オベリスクの攻撃力は４０００！今なら邪神に、大ダメージを与える事ができる！！」

「流石だぜぃ、西条ちゃん！！」

「ふぅん…行けェッ、西条ォオ！！」

オベリスクの拳が大きく振りかぶる。

「覚悟はいいか、邪神ッ！！」

「ッ！！」

そして、西条亭の強烈な一撃が邪神に炸裂した。

「神の攻撃（オベリスク）！ゴッドハンド・クラッシャー！！」

バゴォォオオッ！！！！

「グァァア〝ア〝ア〝ッッ！！！！」

【邪神】
ＬＰ／５０００→１０００

【西条亭】
ＬＰ／５２５０

※

神の強烈な一撃を受け、ライフに大ダメージを受けた邪神は大きく吹き飛ばされ、魔法陣の床の上を一回、二回、三回とバウンドする。

その姿にＯＣＧ研究会の仲間達は、歓喜の声をあげた。

「決まった！！」

「やったぜぃ西条ちゃん！！」

「あの邪神を相手に、一気にライフを４０００も削るなんて…！！」

「あの邪神の吹き飛び様…見ていてスカッとしたわ！ナイスよ、西条ちゃん！！」

「…あれが、神の一撃…！！」

成瀬は思う。

自分は以前、西条亨とデュエルをした事がある。

そして、自分も邪神と同じように、亨の神の一撃を受けた。

しかしあの時は、今回の様な衝撃はなかった。

意図的に亨が精霊界の力を加減したのか？

或いは壁となった『ガーディアン・エアトス』が助けてくれたのか？
或いはその両方か？
いずれにせよ、成瀬は今回の神（オベリスク）の攻撃に戦慄した。

「グハッ！！　ゲホッ、ゲホッ…カッ…やってくれるじゃないか…西条ォ」

邪神はゆっくりと起き上がり、血走った眼球をギョロリと動かす。

「まさか私のライフを一気に４０００も削るとはな…だが、おかげで貴様の死が、一歩近付いたようだぞ？」

「…ッ、そのカードは！？」

不気味な笑みを浮かべる邪神は、手札の中から1枚のカードを掴み、それを見せる。

「私のフィールド上にカードが存在しない時にダメージを受けた時、

手札の『冥府の使者ゴーズ』の効果が発動される…！！」

【冥府の使者ゴーズ】
星７／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　２７００
ＤＥＦ　２５００
［効果］
自分フィールド上にカードが存在しない場合、相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。
●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」（天使族・光・星７・攻／守？）を１体特殊召喚する。このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。
●カード効果によるダメージの場合、受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

「私のフィールドにカードが存在しない場合にダメージを受けた時、『冥府の使者ゴーズ』は手札から特殊召喚する事ができる！今こそ開け…冥府の扉！！　現れよッゴーズ！！」

邪神のフィールドに『冥府の使者ゴーズ』が特殊召喚された。

更に

「そして、私が戦闘ダメージを受けてゴーズを特殊召喚した事により、受けたダメージと同じ攻撃力・守備力を持つ『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚する！！」

【冥府の使者ゴーズ】
ＡＴＫ　２７００
ＤＥＦ　２５００

【冥府の使者カイエントークン】
ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　４０００

ゴゴゴゴゴゴ…！！

邪神のフィールドに揃いし冥府の使者。

ゴーズ、そしてカイエン。

大ダメージを受けたにも関わらず、邪神は不敵な笑みを浮かべた。

「くっ！？　油断していた…まさかそのカードを手札に温存していたとはな…！！」

「ククク…神は特殊召喚されたエンドフェイズ時に墓地へと送られる。つまり、次のターンで西条よ！貴様のフィールドに壁となるモンスターはなくなり、私のターンがやってくるのだ！！　それが何を意味しているのかが、分かるな？」

邪神のフィールドに並ぶ冥府の使者たちを前に、亨は残った４枚の手札を確認し、迎撃する構えをみせた。

「俺は、リバースカードを２枚セットし、ターンエンドッ！！」

「ククク…そのエンドフェイズ時、貴様の神は墓地へ送られる…！」

ズズズ…ッ！！

『オベリスクの巨神兵』が墓地へと送られ、邪神のターンへと移行

した。

【邪神】
ＬＰ／　１０００

［モンスター］
冥府の使者ゴーズ
冥府の使者カイエントークン

［魔法・罠］
なし

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
伏せカード　×２枚

「私のターン、ドローッ！！　そしてスタンバイフェイズ時、墓地に眠る『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』の効果を発動する！！」

【Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ】
星１０／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［効果］
このカードは、このカードの効果でしか特殊召喚できない。フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、次のターンのスタンバイフェイズ時に手札を１枚捨てる事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

「手札を１枚墓地に送る事により、このカードは墓地から特殊召喚する事ができる！私は手札１枚を贄とし、墓地より『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』を特殊召喚！！」

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

邪神のフィールドに蘇りし崇高なる神の守護者。

計３体の大型モンスターを並べた邪神。

対する亨のフィールドには2枚のリバースカード。

両者の間に火花が飛び散る。

そして、

「バトルだ!!『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』でダイレクトアタック!!　喰らえッ西条ォ!!　ソーラーフレア!!」

轟ッ!!

『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』の強烈な一撃が、西条目掛けて放たれた。

「そうはさせない!リバースカード、オープン!!『聖なるバリア―ミラーフォース―』!!」

【聖なるバリア―ミラーフォース―】
［罠カード］

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「なにッ！！　ミラーフォースだとッ！？」

「ミラーフォースは、相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！！」

ズガガガガガッ！！

ズドォオ！！

「ぬァアッ！？」

聖なるバリアが『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』の攻撃を跳ね返し、邪神のフィールドのモンスターを全て破壊した。

再びがら空きとなった邪神のフィールド。

何時しかデュエルの流れは、ライフアドバンテージもボードアドバンテージも、西条が圧していた。

「ふぅん…この局面でミラーフォースか。邪神からすれば、このダメージは大きいぞ！！」

モンスターを全て失った邪神は、キッと亨を睨みつける。

「おのれ…ッ、私はまだこのターン、通常召喚はしていない！モンスター1体をセットし、ターンエンドだ！！」

※

邪神のターンが終了した。

因縁の対決は、刻一刻と終わりの時を迎えようとしていた。

【邪神】

ＬＰ／　１０００

［モンスター］
裏側守備表示　×1体

［魔法・罠］
なし

【西条亨】
LP／5250

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
伏せカード　×1枚

「行くぞ、俺のターン！！」

亨のターンのドローフェイズ。

「ドローッ！！」

デッキからカードをドローし、スタンバイフェイズへと移る。
すると、邪神は自分の墓地から1枚のカードを取り出し、効果を発動した。

「貴様のターンのスタンバイフェイズ時、先のターンに破壊された『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』の効果が発動する!!
私の手札1枚を代償に、このカードを墓地より特殊召喚する!!」

ドドドドド…ッ!!

再び邪神のフィールドに降臨した『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』。

「ッ!!　まさか、相手ターンにでも発動できる効果だったとはな…!!」

「ククク…!!　これこそが私（神）の為せる業だ。さぁ、『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』を前にどう出る?」

ライフに差はあれど、強力なモンスターを特殊召喚した邪神は強気な姿勢でいられた。

だが、強気な姿勢を貫くのは邪神だけではない。

亨は3枚の手札から、1枚のカードを取り出し、

「…チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚ッ！！」

【ジャンク・シンクロン】
星3／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１３００
ＤＥＦ　５００
［効果・チューナー］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

亨のフィールドに2体目の『ジャンク・シンクロン』が召喚された。

「このカードが召喚に成功した時、墓地のレベル2以下のモンスターを守備表示で特殊召喚する事ができる！蘇れ、『見習い魔術師』！！」

【見習い魔術師】
星2／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　４００
ＤＥＦ　８００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上で表側表示の魔力カウンターを乗せる事ができるカード1枚に魔力カウンターを1個乗せる。このカードが戦闘によって破壊された場合、デッキからレベル2以下の魔法使い族モンスター1体を選択して自分フィールド上にセットする事ができる。

亨のフィールドに並ぶ『ジャンク・シンクロン』に『見習い魔術師』。

「フン…、シンクロ召喚か？」

「レベル2の『見習い魔術師』に、レベル3の『ジャンク・シンクロン』をチューニングッ！！」

亨の2体のモンスターのレベル（星）が一つになる。

「集いし想いが、新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！出よッ『ジャンク・ウォリアー』！！」

【ジャンク・ウォリアー】
星５／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１３００
［シンクロ／効果］
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

「『ジャンク・ウォリアー』だと？」

亨の召喚したモンスターに怪訝な表情を作る邪神。

自分の場には先のターンに手札に加えた『イエロー・ガジェット』が裏側守備表示で。

そして攻撃表示で『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』。

（『ジャンク・ウォリアー』の攻撃力は２３００…私の『イエロー・ガジェット』は戦闘破壊できても、『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』は倒せない…。奴め、一体なにを企んでいる？）

「フン…、その場しのぎのシンクロ召喚か？だとしたら西条よ、貴様はーー」

「その場しのぎのシンクロ召喚か？だとしたら西条よ、貴様はーー」

「その場しのぎ？なにを言ってるんだ邪神。俺はこのターンで、勝負を決める！！」

「ッ！？」

亨の発言に思わず目を見開く邪神。
亨はこのターンで決着をつける為、更に手札に手を伸ばす。
「邪神、貴様の操る『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』の効果は確かに強力だ。だが、それは墓地へ送られた場合の話！」
「ッ！！」
「墓地に眠る光属性モンスター『チューニング・サポーター』に、闇属性モンスター『ジャンク・シンクロン』をゲームから除外し、手札より『カオス・ソーサラー』を特殊召喚する！！　出よ『カオス・ソーサラー』！！」
【カオス・ソーサラー】
星６／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分の墓地の光属性と闇属性モンスターを１体ずつゲームから除外して特殊召喚する。フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体をゲームから除外する事ができる。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

亨のフィールドに現れし、混沌を司る魔術師『カオス・ソーサラー』が特殊召喚された。

「なッ！？　そのカードは…！！」

「『カオス・ソーサラー』の効果発動！！　このターン、自身の攻撃を封じる代わりに、モンスター1体をゲームから除外する！！対象は『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』だ！！」

亨の指差す先には『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』が。

『カオス・ソーサラー』は両手に貯えた混沌の力を解放し、邪神の『Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ』に叩き込んだ。

「グァアア！！　ッ貴様ァア！！　よくも！！」

「バトル！！『ジャンク・ウォリアー』で、奴のセットモンスター

に攻撃!!　スクラップ・フィスト!!」

ガコォオッ!!

「ヌゥウ…!!」

『ジャンク・ウォリアー』の攻撃により、邪神の『イエロー・ガジェット』は破壊された。

再びがら空きとなった邪神のフィールド。

「ククク…このターンで決める、ねぇ…。確かに貴様は私の場のモンスターを一掃はしたが、このターンで決着をつけるには根本的に手数が足りないな？」

生き延びた邪神は多少の安堵感からか、自身から流れる冷や汗を感じながらも挑発的に笑みを浮かべる。

「貴様のターンが終了すれば、まだ私にも反撃の手札はある…失策だったな。このターンで決着をつけれなかった理由が、貴様の最大の敗因となるのだ！！　覚悟は良いか、西条ォオ！！」

自分のデッキに手を伸ばす邪神。

ハラハラしながらデュエルを見守るＯＣＧ研究会の仲間達。

その時、

「…何を勘違いしている」

「ッ！？」

亨のその言葉が、邪神の手を止める。

亨のその言葉が、仲間達に希望を齎す。

「まだ、俺のバトルフェイズは終了してない！！」

「亨さん！！」

その言葉に、邪神は彼の場に伏せられた1枚のリバースカードに気がついた。

（あの伏せカード…確か、ミラーフォースと一緒に伏せた…ッ、まさか!?）

「ああ、そのまさかだ…このカードで、全てを終わらせる!!」

亨が手にした1枚のリバースカード。

それは

「リバースカード、オープン!!　永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動ッ!!」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスターカード1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモ

ンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「このカードは、自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する事ができる！」

「追撃の罠だとッ！？　貴様…まさかッ、神を…ッ！！」

亨が墓地から選び出した最後のカード。

それは…。

「墓地に眠りし黒魔族の魂よ…我が呼びかけに応えよ！出よッ『ブラック・マジシャン』！！」

【ブラック・マジシャン】
星７／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２１００

「来たァア！！　西条ちゃんの『ブラック・マジシャン』！！」

「ふぅん…これが決まれば、このデュエル！俺たちの勝利だ！！」

「『ブラック・マジシャン』…」

葉月は悟った。

何故、『ブラック・マジシャン』のカードなのか。

以前、亨はトリティニードームにて、最愛の女性を失った。

その女性はマナこと、マジシャン・ガールだ。

あの時に彼女を守れなかった自分への憤り、後悔、悲しみ、絶望、虚無…。

その事件の元凶たる相手が邪神。

そして今、その最後の瞬間（ときぎ）。

しかし、それは何も、彼だけに限った話ではないのだ。

彼女の師匠たる『ブラック・マジシャン』も、彼と同じ気持ちなのだろうと感じた。

「『ブラック・マジシャン』だとッ！？　貴様ッ…！！」

「この一撃で、俺たちの因縁を全て断ち切る！！　行くぞッ！！『ブラック・マジシャン』の攻撃！！」

カッッ！！

「グゥァァアア！！！！」

『ブラック・マジシャン』の攻撃が邪神へと炸裂した。

凄まじい爆発に巻き込まれ、邪神のライフは０となった。

【邪神】
ＬＰ／　１０００　→　０

【西条亨】
ＬＰ／　５２５０

※

『ブラック・マジシャン』の攻撃が邪神に炸裂し、閃光が迸り、辺りは一瞬の眩い光に包まれる。

その眩しさに思わず目を閉じる仲間達。

そして、視界が徐々に回復し様子を伺うと、そこには一つの球状の黒い靄が浮いていた。

亨とのデュエルに敗れた邪神は、人の形を形成できない程に衰弱してしまったのだ。

「…やった…ハハ、やったぁ!!　邪神を倒したんだ!!」

「流石です!」

「これで、一連の事件は片付いたって訳ね!」

拓夜に成瀬、そして葉月の3人はそれぞれに喜びの声をあげる。

しかし、拓夜たち3人とは対照的に、先輩たち3人の表情は険しか

った。

「まだだッ！！」

「拓夜ちゃんたち、気を抜くのは早いぜぃ…！！」

「えっ？」

結締に言われて気を引き締め直す拓夜たち。

すると、拓夜たちの頭の中に、邪神の声が流れ込んできた。

『おのれ…！！　私が完全に力を取り戻していれば…貴様なんぞに遅れはとらなかった…！！』

その声は耳から聞こえてくるのではなく、直接頭に響き渡るような不思議な感覚だった。

「ふぅん…、何とでも言うがいい。既に貴様と西条との勝敗は決した！」

「仮にも神サマともあろう存在が、負け惜しみだなんて情けないぜよ？」

『くっ、貴様らァ…！！』

白石や結締に言われ、憤りを露わにする邪神。

そんな邪神の前に、亨は『ブラック・マジシャン』と共に立ちはだかる。

『ブラック・マジシャン』は杖の先を邪神に突きつけた。

『ぐッ！？』

「終わりだよ、邪神…お前は、俺たちの大切な仲間を傷付けすぎた」

『……』

亨の右の瞳が蒼く澄んだ色へと変色する。

「消えろ…今度こそーー」

『…まだだ』

亨が邪神にトドメを刺そうとしたその時だった。

『まだッ、終わりではないッッ！！！』

轟ッ！！

最後の力を振り絞った邪神。

その力は闇の衝撃となり、至近距離で受けた亨は大きく吹き飛ばされた。

「ぐぁッ！？　往生際が悪いぞ！！」

『まだ私は死ねないッ！！　まだ死にたくないッ！！　こんな所でッ、消えてたまるかァア！！』

邪神の気持ちに呼応するかのように、球状の黒い靄から無数の触手が飛び出した。

「ッ！？」

無数の触手はそれぞれ一直線に凄まじい勢いで飛び出し、ＯＣＧ研究会の仲間達を襲う。

「拓夜ちゃん！！　危ないッ！！　ぐぁッ！？」

「結締さん！？」

「逃げろッ、成瀬！！　ヌォオッ！？」

「白石さん！！」

結締と白石が後輩２人を庇い、触手に絡め捕られてしまった。

絡め捕った触手は、勢いよく引き戻され、２人は邪神に取り込まれてしまった。

しかし、その間にも邪神は手を緩めない。
今度は唖然となって腰を抜かしている葉月へと、狙いを定めたのだ。

「キャァァアア！！」
「くっ…！！」

邪神に吹き飛ばされた衝撃で、打ち突けられた体を起こした亨だが、葉月を助けに行こうにもここからでは間に合いそうになかった。
拓夜に成瀬の2人も、白石や結締が犠牲になったショックから、その場を動けずにいた。

中島に至ってはヘリコプターに逃げ込み、私は美味しくないわよ！！と、ドアをバタンと閉める始末だ。
無数の触手が葉月を絡め捕ろうとしたその時、

「ウィンッ！！」
『任せて、お兄ちゃん！！』

ガキィィイ！！

その瞬間、葉月の上着のポケットに入っていた『ガスタの巫女　ウィンダ』のカードが光り、葉月の前方に風の盾を作り上げたのだ。
「ウィンダ…ッ！？　ありがとう…助かったわ！！」

『えへへ！私だって、やれば出来るんだよ？』

亨から託されたウィンダのカードに守られ、ホッと一息つく葉月。
しかし、これで終わる邪神ではなかった。

『ォォォオオオオッッ！！！！』

ガキィィイ！！
ガキィィイ！！
ガキィィイ！！
ビキッ！！　パキパキ…ッ！！

「ウソッ!?　ウィンダの盾が…!!」

『ごめん、お姉ちゃん!!　邪神の攻撃が強すぎて…ッ!!　もう、保たない…!!』

「そんな…!?」

バキャア!!

遂に盾を破った邪神。

そして、触手は狙いを葉月へと定めて再び襲い掛かった。

『お姉ちゃん!!　逃げて!!』

「くッ!?　烏丸さん!!」

叫ぶウィンダ。

しかし、足が言うことを聞かない。

目を閉じ、耳を塞ぎ、しゃがみ込み、丸くなる葉月。

「ーーッ！！」

しかし、葉月が触手に絡め捕られる事はなかった。

葉月が恐る恐る目を開くと、そこには

「ーーッ、…あれ…って、と…亨さん！？」

そこには、体を張って葉月を守る亨の姿があった。

彼の肢体には無数の触手が巻き付き、亨は体の自由が奪われていた。

「そんな…アタシを庇って…！？」

「…無事か？　烏丸さん…良かった…ッッ！！」

触手に絡め捕られた亨は、そのまま引き戻され、白石や結締と同じく、邪神に吸収されてしまった。

「そんな…ッ、嫌ァア！！」

『クハハハハッッ！！　溢れる…力が無限大に溢れてくるのが分かるッ！！　これが精霊界三英雄の力かッ！！』

白石、結締、西条亨の3人を吸収した邪神。

それまで球状の黒い靄の姿だった邪神は、力を取り戻した途端、再び闇の西条亨の姿を形作る。

『もともと西条亨は精霊界の力を宿していた…。更に、白石や結締といった最強クラスのデュエリスト達をも取り込んだ今の私は、最早神すらも超越した存在となった！！』

高らかに笑う邪神。

葉月はペタリと、魔法陣の床に座り込み、ガクリとうなだれてしまった。

（…私のせいだ…）

下唇をギュッと噛み締めるその表情に、涙が溜まる。

（私を庇ったせいで…亨さんが…）

想えば想う程、自分という人間が小さく見えてしまう。

彼を想うようになってから、自分は彼に頼りっぱなしだった。

その結果、彼は自分を庇い犠牲になった。

どんどんと、気持ちが闇の奥底に沈みそうになる。

すると

「なに悄げてんだよ、葉月！」

「しっかりして下さい！葉月さん！」

突然、掛けられた言葉でハッとなった葉月が顔をあげると、そこには

「拓夜…それに、成瀬さん…！」

「なにも庇ってもらったのは、お前だけじゃない。俺や花穂だって、結締さんや白石さんに守ってもらったんだ！」

「それはつまり、私たちは託されたんです。自分たちの代わりに、あの邪神を倒して欲しいっていう願いなんだと、私は思います！」

『お姉ちゃん、私も2人の意見に賛成するよ！』

「…ウィンダ」

座り込む葉月に、拓夜と成瀬の2人は手を差し伸べる。

「俺たちの大切な仲間が奪われたんだ。だったら、俺たちの手で取り戻すんだ！！」

拓夜の言葉が胸に染み渡る。

（…そうよ、拓夜の言うとおりよ！それに…私はあの人に誓ったじゃない！私が亨さんの…支えになるって！！）

だったら、こんな所でへこたれている場合じゃない。

ガシッと、２人の手に掴まった葉月は立ち上がる。

その表情は一人の凛とした女性の表情でもありながら、一人のデュエリストとしての表情でもあった。

「ありがとう、２人共。カッコ悪い所を見せちゃったわね」

「一緒に戦いましょう、葉月さん！」

「俺たちの手で、邪神を倒すんだ！！」

３人が決闘者として目覚めたその時。

『話は終わりか？三英雄の意志を継ぐ者たちよ』

邪神は腕を組み、拓夜たちを赤紫色の瞳で睨みつけた。

『三英雄亡き今こそ、私はこの世界を破壊と混沌に満ちた世界に作り替えてみせる…だが、その為には…不穏分子である貴様等を始末する必要があるみたいだな！！』

邪神は決闘盤を構える。
そして拓夜たち3人も同じく、決闘盤を構えて邪神と対峙する。

『この際だ…貴様等3人まとめて葬ってやる…！！』

「アナタの思い通りにはさせません！！」

「アンタを倒して、大切な仲間を取り戻してみせる！！」

「行くぞ、邪神！！　俺たち3人とデュエルだ！！」
『ククク…！！　圧倒的な力の差を見せ付けてやろう…！！』

邪神。

そして、三英雄の意志を継ぐ者たち。

両者の戦いが今、幕を切った。

三英雄を継ぎし者（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、いよいよ次回は1対3の変則デュエル。

僕に上手く書きこなす事が出来るのだろうか？

今回の邪神ＶＳ西条編でのご意見、感想、お待ちしております。

決戦　（前書き）

劇場版『遊☆戯☆王－超融合～時を越えた絆－』

ＤＶＤ＆ＢＤ化決定！

発売日／２０１１年６月１５日（水曜日）

価格　／ＢＤ：７１４０円
／ＤＶＤ：６０９０円

初回仕様／・書きおろしオリジナルスリーブ
／・２０Ｐブックレット

内容　／いずれも「本編映像４９分（２Ｄ）＋（３Ｄ）」入り。

決戦

※

精霊界の三英雄を取り込んだ邪神。

それに立ち向かうべく、邪神に挑む三人の決闘者。

成瀬花穂。

烏丸葉月。

そして、西条拓夜。

1対3の変則デュエル。

それぞれ決闘盤を構え、手札を用意する。

全ての舞台は整った。

今、三人にとってかつてない戦いが始まった。

『ククク…、先攻は私がもらう。私のターンッ!!』

【真・邪神】
ＬＰ／　８０００
【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

先攻の邪神のプレイが開始されると同時、拓夜たち３人の足下に黒い魔法陣が展開された。

「なっ、これは…！？」

『それは貴様等のライフが繋がった証…運命共同というやつだ。貴様等の内一人でも倒れれば、それは貴様等の敗北（死）になる。ククク…』

死。

その言葉に脅しをかける邪神であったが、拓夜たち３人には通用しなかった。

それぞれが凛とした姿勢でその瞳に闘志を宿し、自分に挑んでくる。

言葉での揺さぶりは、今はまだ効果が薄いと判断した邪神は、先攻のプレイを開始した。

『手札よりフィールド魔法【Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ】を発動！』

【Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ】
［フィールド魔法］
このカードがフィールド上に存在する限り、自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに発動する事ができる。自分のデッキから「Ｓｉｎ」と名のついたカード3枚を選択し、相手はその中からランダムに1枚選択する。相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、残りのカードをデッキに戻してシャッフルする。

ズズズズズ…！！

フィールド魔法の発動により、辺りの景色が一変した。

全て闇が染み込んだような、異様な景色。

その景色に拓夜たちが目を奪われている中、邪神は

『【Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ】はドローフェイズ時、通常のドローを行う代わりに［Ｓｉｎ］と名のつくカードを手札に加える事ができる…！』

「［Ｓｉｎ］？聞かない名前のカードです…！」

「油断できないって訳ね…！」

そして邪神は、デッキの中から１枚のカードを取り出した。

『私はデッキから【究極宝玉神　レインボー・ドラゴン】を除外し…現れよッ【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】！！』

【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】
星１０／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　４０００
ＤＥＦ　０
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分の手札・デッキから「究極宝玉神　レインボー・ドラゴン」１体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。このカードが表側表示で存在する限り、自分の表側表示モンスターは攻撃宣言できない。フィールド魔法が表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

ズドドドド…ッ！！

邪神のフィールドに特殊召喚された【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】。

その圧倒的攻撃力のモンスターの登場に、拓夜たちは驚きを隠せなかった。

「レインボー・ドラゴン!?　確か…そのカードは、結締さんの！」

「おかしいです！【究極宝玉神　レインボー・ドラゴン】は、フィールドか墓地に［宝玉獣］が揃わなければ、特殊召喚できない筈じゃ…。それなのにどうして!?」

『勘違いするなよ成瀬とやら。この［Ｓｉｎ］モンスターは、その素材となるモンスターの対の存在…言わば光と闇。その光の力（素材）が強力なほど、闇となる［Ｓｉｎ］も強くなる』

狡猾な笑みを浮かべる邪神。

葉月は拓夜と成瀬の２人に、注意を呼びかけた。

「2人とも、注意して!!　コイツのデッキは、さっき亨さんとデュエルした時のデッキじゃないわ!!」

『ほぅ、烏丸葉月…その事に気付いたか。その通り。このデッキは、今までに私が取り込んだ決闘者の最強カードが詰め込まれた、別次元の領域(デッキ)となっている!このレインボードラゴンもその1つ…。貴様等のよく知る結締が使用するカードだ!』

邪神の言葉に衝撃を受ける三人。

その言葉が本当ならば結締だけでなく、他のOCG研究会の先輩たちのカードも使われるやもしれないのだ。

『私はカードを2枚セットし、ターンを終了する』

邪神のターンが終了し、拓夜たちのターンへと移行する。

すると、成瀬が前へ出て、2人に

「拓夜さん、葉月さん。最初は私にやらせて下さい!」

「成瀬さん!?」

「花穂…」

2人は成瀬の申し出に一瞬、戸惑いはしたが、直ぐに納得した。

「わかった。先陣は花穂に任せる…けど、気を付けろよ！ヤツは俺たちにとって、未知の力（カード）を使ってくる！」

「無茶だけはしないで…良いわね？」

「はい！！」

成瀬は力強く頷き、邪神と対峙する。

『ククク…先ずは成瀬か。来い、相手になってやる』

「行きます！私のターンです、ドローッ！！」

遂に始まったＯＣＧ研究会のデュエル。

先鋒の成瀬。

デッキからカードをドローした成瀬は早速、手札から1枚のカードを取り出した。

「私たちの墓地にモンスターが存在しない時、天空よりその守護者が降臨します！お願い、【ガーディアン・エアトス】！！」

【ガーディアン・エアトス】
星８／風属性／天使族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［効果］
自分の墓地にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地へ送る事で、相手の墓地に存在するモンスターを3体まで選択し、ゲームから除外する。この効果でゲームから除外したモンスター1体につき、エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

成瀬のフィールドに彼女のエース【ガーディアン・エアトス】が攻撃表示で特殊召喚された。

「早速きた！！【ガーディアン・エアトス】！！」

「殆どの場合、1～2ターン目には、自分の墓地にはモンスターはいない。成瀬さん、流石ね！」

「更に、手札の魔法カード【アームズ・ホール】を発動します！」

【アームズ・ホール】
［魔法カード］
自分のデッキの一番上のカード1枚を墓地へ送って発動する。自分のデッキ・墓地から装備魔法カード1枚を手札に加える。このカードを発動するターン、自分は通常召喚する事はできない。

「このカードは、デッキの一番上のカードを墓地へ送る事で、デッキから装備魔法カードを手札に加える事ができます！私はデッキから【魔導師の力】を手札に加えます！」

成瀬はデッキの一番上のカードを墓地へ送り、デッキから【魔導師の力】を手札に加えた。

「リバースカードを3枚セットして、装備魔法【魔導師の力】を発

動します！エアトス、受け取って！」

【魔導師の力】
［装備魔法］
装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚につき５００ポイントアップする。

「このカードを装備したモンスターの攻撃力・守備力は、私たちの魔法・罠カード１枚につき５００ポイントアップします！」

現在、成瀬の魔法・罠カードゾーンには計４枚のカードがある。

「よって、エアトスの攻撃力は２０００ポイントアップです！」

【ガーディアン・エアトス】
ＡＴＫ　２５００　↓　４５００
ＤＥＦ　２０００　↓　４０００
（【魔導師の力】効果）

「凄い…！！　一気に邪神のモンスター【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】の攻撃力を上回ったわ！！」

「やるじゃないか、花穂！！」

成瀬のプレイを絶賛する2人。

しかし邪神は、だからどうした？と言わんばかりに、失笑する。

『フッ…』

「バトル！【ガーディアン・エアトス】で、【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】に攻撃です！フォビドゥン・ゴスペル！！」

成瀬のエアトスが女神の聖剣を構え、突撃する。

その時、邪神は自分の場に伏せてあった1枚のカードを発動した。

『爆発力は認めよう…だが、迂闊だな。罠発動！【Ｓｉｎ　Ｃｌａｗ　Ｓｔｒｅａｍ】！！』

【Ｓｉｎ　Ｃｌａｗ　Ｓｔｒｅａｍ】
［罠カード］
自分フィールド上に「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択して破壊する。

『このカードは自分の場に［Ｓｉｎ］と名のつくモンスターが存在する時に発動でき、相手モンスター１体を破壊する！消え去れ、天空の守護者【ガーディアン・エアトス】！！』

ズゴゥッ！！

「キャァア！！」

凄まじい衝撃波により、成瀬のエースである【ガーディアン・エアトス】は破壊されてしまった。

しかも成瀬はこのターン、【アームズ・ホール】の効果によって通常召喚ができない。

「ごめんね…エアトス…私のターンは終了です」

『所詮はその程度の実力。私のターンッ！！　ククク…私はフィールド魔法【Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ】の効果を発動する！！』

【真・邪神】
ＬＰ／　８０００

［モンスター］
Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン

［魔法・罠］
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード　１枚

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
伏せカード　３枚

邪神はデッキから3枚のカードを取り出し

『【Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ】はデッキから［Ｓｉｎ］と名のつくカードを3枚選び、その中から相手がランダムに1枚選択する。そして選択したカードが私の手札に加わる…さぁ、成瀬花穂よ。選べ…貴様たちの未来を！』

「…私は、真ん中のカードを選びます！」

成瀬が指定したカードを手札に加えた邪神。

そして

『私は【終末の騎士】を召喚！』

【終末の騎士】
闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１２００

［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから闇属性モンスター1体を選択して墓地に送る事ができる。

『【終末の騎士】が召喚に成功した時、デッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る事ができる。私はデッキより【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】を墓地へ送る！』

デッキからカードを墓地へ送った邪神はメインフェイズを終了し、バトルフェイズへと突入した。

『ゆくぞ！！【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】で、成瀬花穂へダイレクトアタック！！　喰らえッ、オーバー・ザ・レインボー！！』

ズボォアッッ！！！

レインボー・ドラゴンの口から、七色に輝く破壊光線が放たれた。

この一撃をまともに受ければ、成瀬たちＯＣＧ研究会のライフは一気に４０００も削られ、成瀬は重傷を負ってしまう。

「成瀬さんッ！？」

「花穂ッ！！」

「そうはさせません！罠カード【次元幽閉】を発動します！！」

【次元幽閉】
［罠カード］
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「このカードは相手攻撃モンスター1体を、ゲームから除外します！よって【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】は、除外です！！」

ズズズズ…ッ！！

邪神の操る【Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン】は亜空間に呑まれ、除外された。

『チィ…ッ』

「よし！」

「良いわよ、成瀬さん！」

「迂闊なのは邪神！アナタのほうです！」

『フン…たかだか一回の攻撃を防いだからといって、いい気になるな！【終末の騎士】でダイレクトアタック！！』

続けて【終末の騎士】が剣を振り上げて成瀬に突撃する。

「迂闊と言ったはずです！リバースカード【ディメンション・ウォール】を発動します！！」

【ディメンション・ウォール】

［罠カード］

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。この戦闘によって自分が受ける戦闘ダメージは、変わりに相手が受ける。

「このカードは、私が受ける戦闘ダメージを邪神、アナタに跳ね返します！」

『なにッ！？　ぐぁッ！？』

【真・邪神】
ＬＰ／　８０００　→　６６００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

振り降ろされた【終末の騎士】の攻撃は亜空間に呑まれ、邪神自身に跳ね返った。

「凄いじゃないか、花穂！！」

「邪神を相手に、先制ダメージを与えれたわ！」

邪神の攻撃を避わした事でテンションが上がる拓夜たち。

『フン…この程度のダメージなんぞくれてやる。だが［Ｓｉｎ］モンスターはなにも、レインボー・ドラゴンだけではない！！』

「ッ！！」

邪神はメインフェイズ２へと移行し

『私はデッキの【青眼の白龍】を除外し…現れよッ！！【Ｓｉｎ青眼の白龍】！！』

【Ｓｉｎ　青眼の白龍】
星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２５００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分のデッキから「青眼の白龍」１体をゲームから除外した場合に特殊召喚できる。「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。このカードが表側表示で存在する限り、自分の表側表示モンスターは攻撃宣言できない。フィールド魔法が表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

ズドドド…ッ！！

邪神のフィールドに現れし、闇に堕ちたブルーアイズ。

「【青眼の白龍】…！！　そのカードは白石さんの…ッ！！」

『ククク…！！　成瀬花穂よ、このカードは【Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ】の効果で貴様が選び出したカードだ。この状況は、貴様が選んだ未来の姿なのだよ？』

邪神は不敵な笑みを浮かべ、残された手札１枚をセットした。

『カードを１枚セットし、ターンエンドだ。さあ、次の相手は烏丸葉月か？それとも西条拓夜か？』

人差し指を挑発的にクイクイッと動かす邪神。

「よし、なら今度は俺がーー」
「待って！！」

拓夜が名乗りをあげようとするのを葉月が止める。

「拓夜、今回のは私に譲ってちょうだい！」

「葉月…わかった。頼んだぜ！」

「気を付けて下さい。やってみて思いました…やはり、邪神は強いです。一瞬の油断が命取りです！」

「ええ、わかってるつもりよ…！！」

今度は葉月が前に立ち、邪神と対峙する。

『ククク…次の相手は烏丸葉月か』

「行くわよ！私のターン、ドローッ！！」

【邪神】
ＬＰ／　６６００
［モンスター］
Ｓｉｎ　青眼の白龍
終末の騎士
［魔法・罠］
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード　２枚

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
伏せカード　１枚

始まったＯＣＧ研究会、葉月のターン。

デッキからカードをドローした葉月は、今の自分にできる渾身のプレイを開始する。

「【ＢＦ－暁のシロッコ】を召喚ッ！！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２０００
ＤＥＦ　９００
［効果］
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

葉月のフィールドに暁のシロッコが召喚された。

「暁のシロッコは、相手フィールドにのみモンスターが存在する時、手札からリリースなしで召喚する事ができる！」

暁のシロッコを召喚した葉月は、そのままバトルフェイズへと突入する。

「バトルッ！！　暁のシロッコで【終末の騎士】に攻撃！！」

『馬鹿の一つ覚えだな…以前、白石に言われた事をもう忘れたのか？』

邪神はニヤリと笑みを浮かべると、自分の場の2枚ある伏せカードの内、その1枚を発動した。

『この私を前に低レベルモンスターを召喚する事が、如何に愚かな振る舞いであるか…その身に味わえ！！　リバース罠【無力の証明】を発動！！』

【無力の証明】
［罠カード］
自分フィールド上にレベル7以上のモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上に表側表示で存在するレベル5以下のモンスターを全て破壊する。このカードを発動するターン、自分フィールド上に存在するモンスターは攻撃する事ができない。

轟ッ！！

ズガガガガッ！！

邪神の発動した罠カード【無力の証明】が炸裂し、葉月のモンスター【ＢＦ－暁のシロッコ】が破壊されてしまった。

「くッ！？　そのカードは…！！」

『以前、貴様が白石とデュエルをした時に喰らったはずだ。ククク…取り込んだ白石からの記憶により、烏丸葉月よ。貴様の戦略は丸裸だ』

「ゴクリ…ッ、葉月が…丸裸…ッ！！」

「拓夜さん…あからさまに葉月さんでイヤらしい想像をしてますよね？考えてる事がだだ漏れですよ？ちょっと、私とお話ししましょうか？」

後ろから拓夜の悲鳴が聞こえてきたが、葉月は構うことなく自分のプレイを続けていく。

「フフ…、私の思った通りね！」

『なに…？』

「アンタ、言ったわよね？今まで取り込んだ決闘者のカードを使ってるって。私が以前に受けた事のあるカードに、何も対策してないと思ったワケ？」

葉月はそう言うと、手札から1枚のカードを取り出し

「私は手札の【ＢＦ－流離いのコガラシ】のモンスター効果を発動！！」

【ＢＦ－流離いのコガラシ】
星６／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　２３００
ＤＥＦ　１６００
［効果・チューナー］
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。また、このカードをシン

クロ素材としたシンクロ召喚に成功した時、相手は魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事ができない。

「このカードは、私のフィールドで［ＢＦ］が効果破壊された時、手札から特殊召喚する事ができる！来なさいッ、流離いのコガラシ！！」

『ッ！？　カード破壊効果による特殊召喚だと！？』

ドンッ！！

葉月のフィールドに参上せし、流離いのコガラシ。

葉月は暁のシロッコと入れ替わる形で、今度は流離いのコガラシで攻め込んだ。

「バトルは続行よ！！　コガラシで【終末の騎士】に攻撃！！」

ズバズバッ！！

『ヌゥ…ッ！！』

【真・邪神】
ＬＰ／　６６００　→　５７００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

更に邪神のライフに差をつけたＯＣＧ研究会。

葉月は「良し！！」とガッツポーズをとり、喜びを露わにした。

「私はカードを2枚セットして、ターンエンド！」

葉月のターンが終了した。

そして迎える邪神のターン。

【邪神】

ＬＰ／　５７００

［モンスター］
Ｓｉｎ　青眼の白龍

［魔法・罠］
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード　１枚

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

［モンスター］
ＢＦ－流離いのコガラシ

［魔法・罠］
伏せカード　３枚

（くッ、思った以上になかなかやる…精霊界三英雄の意志を継ぐ者たち…！油断できないのは私も…か）

これまでに成瀬と葉月を相手にして、邪神は２人の実力を素直に認める事にした。

恐らくは残る一人、西条拓夜も…。

しかし、認めたからといって、負ける訳にはいかない。

（私の手札は0…この状況で次に西条拓夜の攻撃を凌ぐのは困難…ならばッ！！）

『私のターン、ドローッ！！』

デッキからカードをドローした邪神は、そのカードを確認してニヤリと笑みを浮かべる。

（ククク…神をも超越した今の私は、思い通りのカードを引き当てる事ができる！！）

『バトルフェイズに入る！！【Ｓｉｎ　青眼の白龍】で【ＢＦ－一流離いのコガラシ】に攻撃！！　滅びのバースト・ストリームッ！！』

轟ッ！！

流離いのコガラシに目掛けて、【Ｓｉｎ　青眼の白龍】が攻撃する。

「無駄よ！！　ダメージステップ時に、手札のカルートの効果を発動！！」

【ＢＦ－月影のカルート】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１０００
［効果］
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

「手札のカルートを墓地へ送る事で、戦闘を行う［ＢＦ］の攻撃力を、エンドフェイズ時まで１４００ポイントアップさせる！」

『くッ！？』

【ＢＦ－流離いのコガラシ】
ＡＴＫ　２３００　↓　３７００

ＤＥＦ　１６００
（【ＢＦ－月影のカルート】効果）

ズバズバッ！！

【真・邪神】
ＬＰ／　５７００　→　５０００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

月影のカルートの効果により攻撃力を上昇させた流離いのコガラシの反撃によって、邪神の操る【Ｓｉｎ　青眼の白龍】は返り討ちに遭い、戦闘破壊された。

「ブルーアイズッ、撃破！！」

邪神のモンスターを返り討ちにし、葉月は舞い上がる気持ちを、再びガッツポーズを作ることで喜びを露わにする。

「やりました！」

「良し、さすが葉月だぜ！！」

だが

『ククク…！！　一見、正しかったように見えた今の攻撃（反撃）…、だがそれは、大いなる間違い！！』

ドクンッ！！

邪神の不気味な表情に葉月たちは心臓が縮むのを感じた。

『ありがとう、烏丸葉月。おかげで私のデッキ最強カードを召喚する為の条件が整った！！』

邪神は墓地から1枚のカードを取り出し

『このカードは私の［Ｓｉｎ］モンスターが破壊され、墓地へ送られた時に発動できる。私の命（ライフ）を半分払う事で、手札または墓地から【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】を特殊召喚するッ！！　ヌゥォォオオオ…ッ！！』

【真・邪神】
ＬＰ／　５０００　→　２５００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

グォォオオ！！

【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】
星１２／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　５０００
ＤＥＦ　５０００
［効果］

このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン」以外の「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、ライフを半分払う事でのみこのカードを手札または墓地から特殊召喚できる。「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。フィールド魔法カードが表側表示で存在存在しない場合このカードを破壊する。このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

邪神のフィールドに巨大な暗黒の渦が現れ、その中から巨大な黄金の鱗を煌めかせる龍【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】が顕現した。

「攻撃力…５０００ッ！！」

「嘘だろッ！？」

「こッ…このモンスターは…！？」

トゥルース・ドラゴンの姿に驚きを隠せない拓夜たち。

『ククク…！！　このモンスターこそ、万物の理を司る存在！！

トゥルース・ドラゴンはこう言っている。お前たちは世界には必要ないと！！』

トゥルース・ドラゴンから放たれる威圧に、拓夜たちはキッと表情を引き締める。

現在、邪神のターンのバトルフェイズ。

拓夜たちＯＣＧ研究会のフィールドには、月影のカルートの効果で攻撃力が上昇した【ＢＦ－流離いのコガラシ】のみ。

『バトル続行だッ！！【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】で、烏丸葉月のモンスターに攻撃！！』

トゥルース・ドラゴンの口から全てを焼き尽くす暗黒の炎が放たれた。

「葉月ッ！？」

「確かにそのモンスターには太刀打ちできないけど、でもそれは戦闘での話！！　罠発動【ゴッドバードアタック】！！」

【ゴッドバードアタック】
［罠カード］
自分フィールド上の鳥獣族モンスター1体をリリースする。フィールド上のカード2枚を破壊する。

葉月のフィールドの【ＢＦ－流離いのコガラシ】が炎を纏い、邪神のフィールドに舞い上がる。

「このカードは私の場の鳥獣族モンスター1体をリリースして発動する！そしてアンタの【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】と、その1枚のリバースカードを破壊する！！」

「効果破壊なら、確かにあの強力モンスターを倒せます！！」

「良しッ！！」

葉月の発動したカードに表情を明るくする拓夜たち。

しかし

『その選択は誤りだな、烏丸葉月！！　罠発動【スターライト・ロ

ード】！！』

【スターライト・ロード】
［罠カード］
自分フィールド上に存在するカードを2枚以上破壊する効果が発動した時に発動する事ができる。その効果を無効にし破壊する。その後、「スターダスト・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

ゴバウッ！！

邪神の発動した【スターライト・ロード】が、葉月の【ゴッドバードアタック】を打ち消した。

「そんな…！！　そのカードはッ、亨さんの…！？」

『そう、このカードは複数枚のカードを破壊する効果を無効にし破壊する…そして、私のフィールドに【スターダスト・ドラゴン】を特殊召喚する！！』

ゴゴゴゴゴ…！！

邪神のフィールドに星屑の粒子が集い、その中から1体のモンスターが飛翔した。

『現れよッ【スターダスト・ドラゴン】！！』

【スターダスト・ドラゴン】
星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

邪神のフィールドに現れし西条亨のモンスター【スターダスト・ドラゴン】。

その姿に拓夜たち、主に葉月は言葉を失った。

そんな葉月に対し、邪神は取り込んだ亨の記憶を読み取り、

『ククク…残念だったな烏丸葉月。皮肉にも貴様のカードを阻止したのが、貴様の想い人のカードだとはな？　以前にもこのカードを使われたみたいだが、今度はなにか手はあるのか？』

「ウゥ…」

『貴様のカード効果に対し、西条亨のカードがそれを打ち消した…。烏丸葉月よ、それは西条亨が貴様を拒絶した事を意味する！その意味が分かるな？』

「…うそよ…そんなの……！！」

葉月の脳裏に浮かぶのは東区の公園でのこと。

そこで、偶然にも立ち聞きしてしまったクラスメートの結城雅一と西条亨の会話。

その時の、彼が言った言葉…。

『聞きたくなかったか？知りたくなかったか？だが、真実は常に残

酷だ！そしてこれが現実！烏丸葉月よ、貴様の発動した想い（カード）は、西条亨（想い人）によって阻害され、打ち砕かれるのだ！！』

バトルを続行させる邪神。

壁となるモンスターが居なくなったＯＣＧ研究会のフィールドに、葉月にとって認めたくない一撃が放たれる。

『【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】よ！！　烏丸葉月に真実を見せつけてやれ！！　ダイレクトアタックだ！！』

「いやぁあああああッッ！！！！」

ズゴォオオアアッッ！！！！

【真・邪神】
ＬＰ／　２５００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　８０００　→　３０００

「葉月ッ！！」

「葉月さんッ！？」

凄まじい衝撃を直に受けた葉月は吹き飛ばされ、その華奢な体を魔法陣の床に打ちつけた。

「うぅ…っ…」

ボロボロな体。

学校の制服もスカートも所々やぶけ、擦りむいた皮膚からは血が流れる。

葉月は痛かった。

体もそうであるが、何よりも心が痛かった。

彼の事は信じている。

信じてはいるが、葉月の心は深い闇の奥底に沈んでいくような…。

別に誰がどう言おうが、本来ならば先の一言程度では何とも思わない。

しかし、相手（邪神）の容姿が問題だった。

自分の想い人である人物の姿を模し、彼と同じ声で語り、彼と同じカードを使い、自分を拒絶する。

「うそよ…っ、あの人は…私を…っ」

目頭が熱を帯び、涙が溢れ出す。

『烏丸葉月…いや、烏丸さん。消えてくれないか？大丈夫、一瞬で楽にしてあげるよ』

邪神は亨の口調を真似ながら言うと、2体目のモンスターで構える。

そう、亨のモンスター【スターダスト・ドラゴン】で。

「くッ！？　やめろォオ！！」

「葉月さん！！」

『【スターダスト・ドラゴン】で、烏丸さんに攻撃。消え去れ…シューティング・ソニックッ！！』

カッッ！！

拓夜に成瀬が叫ぶ。

迫り来るスターダストの攻撃。

葉月にはそれらの様子が、スローモーションに感じた。

（拓夜…成瀬さん…ウィンダ…ごめん、私…もぅ…ッ！？）

ズゴゥッ！！

その瞬間、葉月の真横を風の衝撃が突き抜けた。

スターダストの放った一撃は葉月に直撃する事なく、その攻撃は虚

空へと向けて逸れていったのだ。

予想外の出来事に拓夜たちだけでなく、邪神までもが唖然としてしまった。

『はずした、だと…ッ!?』

（馬鹿なッ!?　私は確かに【スターダスト・ドラゴン】で、烏丸葉月を狙ったハズ…!!）

「亨さんだ…」

拓夜はポツリと口にした。

初めはまさかと思った。

しかし、口に出す事でそれは確信にかわる。

「間違いない!!　今のは亨さんの、葉月を守りたいって気持ちなんだ!!　俺たちだけじゃない、今もあの人たちは、俺たちと一緒に戦ってくれてるんだ!!」

きっと結締のレインボー・ドラゴンや、白石のブルーアイズも内心は同じだったに違いない。

自分たちの仲間に対する攻撃。

向けたくなくても、向けなければならない矛先。

本当に辛かったのだろう。

『バカな…ッ!?　今のスターダストは、私の配下に在るハズ…!!』

「立て葉月!!　アイツの言葉になんか惑わされるな!!　真実は違う。お前を拒絶なんかしたりしない!!　亨さんは、絶対にそんな人じゃない!!」

「そうです!!　だから葉月さん!!　立ち上がって下さい!!」

葉月はぎこちない動作ながらも、ゆっくりと、ゆっくりと立ち上がる。

服や体はボロボロだ。

しかし、心は先程までとは違った。

「…ありがとう、みんな…！！」

『くッ！？　どこまでも私の邪魔をするかッッ！！　三英雄どもめ…！！　だが、ライフダメージは受けてもらうぞ！！』

【真・邪神】
ＬＰ／　２５００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　３０００　→　５００

形式的にダイレクトアタックを受けたＯＣＧ研究会。

その残りライフは後僅かな５００。

『私はカードを1枚セットし、ターンエンド！！』

【真・邪神】
ＬＰ／　２５００

［モンスター］

Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン
スターダスト・ドラゴン

［魔法・罠］
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
伏せカード　１枚

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　５００

［モンスター］
なし

［魔法・罠］
伏せカード　２枚

邪神のターンが終了し、ＯＣＧ研究会のターンが訪れる。

成瀬、葉月が終了し、いよいよ西条拓夜のターンが始まる。

※

「行くぜ、俺のターンッ、ドロー！！」

遂に迎えた拓夜のターン。

自分たちの場にはモンスターはなく、邪神のフィールドには攻撃力５０００の【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】に亨の【スターダスト・ドラゴン】が。

『ククク…西条拓夜、貴様がどう足掻こうが無駄だ！！　貴様たちのライフは残り僅か５００…そして、私のフィールドには最強モンスターが出揃っている！！』

「だからどうした！！」

得意気に語る邪神に対し、拓夜はハッキリと告げる。

「いくらお前のモンスターが強力だろうと、俺は１人で戦ってる訳じゃない！！　花穂や葉月が繋いでくれた希望（カード）が残されている！！」

拓夜たちＯＣＧ研究会のフィールドには、２枚の伏せカードが在った。

成瀬と葉月がそれぞれに託した、１枚ずつのカード。

「仲間の力があるんだ！！　お前なんかには、絶対に負けない！！」

『フン…威勢が良いな？ならば西条拓夜、貴様のデュエルを魅せてみろ！』

「ああ、言われなくても魅せてやるぜ！！　手札から【トレード・イン】を発動！！」

【トレード・イン】
［魔法カード］
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「手札のレベル８のモンスター【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】を捨て、デッキからカード２枚ドロー！！　更に俺は、手札より【オーバー・デステニー】を発動！！」

【オーバー・デステニー】
［魔法カード］
自分の墓地から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択する。選択したモンスターのレベルの半分以下の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を自分のデッキから選択し特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは、このターンのエンドフェイズ時に破壊される。

「このカードは、墓地の［Ｄ－ＨＥＲＯ］１体を選択して発動する！選択したモンスターの半分以下のレベルの［Ｄ－ＨＥＲＯ］を、デッキから特殊召喚する！」

拓夜の墓地には、レベル８の【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】のみ。

「墓地のドグマガイのレベルは８！よって、デッキから【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】を特殊召喚する！現れろッ、ダイヤモンドガイ！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００

［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

拓夜のフィールドに、彼の切り込み隊長的存在、ダイヤモンドガイが守備表示で特殊召喚された。

『ダイヤモンドガイか…フッ、仮に魔法カードが墓地へ送られても、その効果を発動できるのは次のターン。だが、私は貴様たちには次はくれてやるつもりはない。せめてもの情けだ。効果を使いたければ使うが良い』

「なら、遠慮なしに効果を使わせてもらう!!　ダイヤモンドガイの効果発動!!　デッキの一番上を確認し、それが通常魔法カードなら墓地へおくる!!」

拓夜はデッキの一番上のカードをめくると、それは…

「デッキの一番上のカードは【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】！！　コイツはモンスターな為、デッキの一番下に戻る…」

『ククク…ッ！！　ダイヤモンドガイの効果も無駄に終わった訳だ…』

「いいや、無駄じゃない。おかげで助かったぜ！手札より【デスティニー・ドロー】を発動！！」

【デスティニー・ドロー】
［魔法カード］
手札から「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚を捨てる。自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「このカードは、手札の［Ｄ－ＨＥＲＯ］1枚を捨てる事で、デッキからカードを2枚ドローできる！俺が今回、コストとするのは【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】！！」

拓夜はディアボリックガイのカードをコストとして墓地へ捨て。

そして、デッキからカードを2枚ドローした。

「ダイヤモンドガイの効果で、危うく2枚目のディアボリックガイが手札にくる所だったぜ！邪神、アンタには感謝しないとな？」

『チィ…ッ』

手札を入れ替え、デッキを巧みに回す拓夜。

準備を整えた拓夜は、遂に攻める動きに入る。

「葉月ッ！！　お前が伏せてくれたカード、早速つかわせてもらうぜ！！」

「ええ！！」

葉月が伏せたカード。

それは

「リバースマジック、発動！！【おろかな埋葬】！！　この効果で、デッキから【ダンディライオン】のカードを墓地へ送る！！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

【ダンディライオン】
星3／地属性／植物族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星1・攻／守0）を2体守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためのリリースはできない。

拓夜の墓地に【ダンディライオン】のカードが置かれ、その効果が発動する。

「そして【ダンディライオン】の効果ッ、フィールド上に【綿毛トークン】2体を、守備表示で特殊召喚する！！」

ポム、ポムッ！！

これでフィールドにはダイヤモンドガイと綿毛トークン2体、計3体のモンスターが並んだ。

「俺はモンスター3体をリリースし、来いッ！！【Ｄ－ＨＥＲＯ Ｂｌｏｏ－Ｄ】！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ Ｂｌｏｏ－Ｄ】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ １９００
ＤＥＦ ６００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在するモンスター3体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。１ターンに1度、相手フィールド上に存在するモンスターを装備カード扱いとしてこのカードに1体のみ装備する事ができる。このカードの攻撃力は、装備したモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードが自分フィールド上で表側表示で存在する限り、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果は無効化される。

拓夜たちＯＣＧ研究会のフィールドに、血色の翼を広げしダークヒーロー【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】が特殊召喚された。

『そッ、そのモンスターは…ッ！！』

「Ｂｌｏｏ－Ｄは、相手フィールドのモンスター効果を全て無効にし、モンスター1体を吸収できる！！　お前の【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】が如何に強力なモンスターだろうと、吸収しちまえば怖くはない！！」

「上手いです、拓夜さん！！　相手の強さを、見事に坂手にとるなんて！！」

成瀬が喜びの声をあげたと同時、邪神は舌打ちしながら1枚の伏せカードを発動した。

『貴様…ッ、私の【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】を吸収するつもりかッ！？　だがッ、そうはさせんぞ！！　永続罠【スキルドレイン】を発動！！』

【スキルドレイン】
［永続罠］
１０００ライフポイントを払って発動する。このカードがフィール

ド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

【真・邪神】
ＬＰ／２５００→１５００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／５００

『このカードは発動時にライフを１０００ポイント払う事で、フィールド上の効果モンスターの効果を無効化する！！』

邪神の発動した【スキルドレイン】が炸裂し、拓夜のモンスター【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】も効果が使用できなくなってしまった。

「げっ！？　マジかよ…！！」

「拓夜のＢｌｏｏ－Ｄでも、通用しないなんて…ッ！！」

『ククク…諦めろ、西条拓夜。貴様では、私を倒す事はできない…見ろ！』

【真・邪神】
ＬＰ／　１５００

［モンスター］
Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン
スターダスト・ドラゴン

［魔法・罠］
Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
スキルドレイン

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　５００

［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ

［魔法・罠］
伏せカード　１枚

『私のフィールドには最強の攻撃力を誇る【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】がいる！カード効果で破壊しようものなら、【スターダスト・ドラゴン】がそれを阻止し、尚且つ、頼みの綱の効果モンス

ターの効果は、【スキルドレイン】によって封じられている！』

「くっ…確かに、厳しい状況です…！！」

ライフも拓夜たちＯＣＧ研究会は残り僅かに５００。

『運命を受け入れろ…西条拓夜。貴様たちの未来は無きに等しいのだと。私が世界を作り上げた暁には、貴様たちを私に楯突くおろかな反逆者として、未来永劫語り継いでやろう！』

自らの勝利を悟り、高らかに笑う邪神。

険しい表情を作る葉月に成瀬の２人。

だが、拓夜は

「なに言ってんだ邪神？お前、さっき亨さんとのデュエルで言われたことをもう忘れたのか？」

『…なに？』

ヤレヤレ、といった感じに溜め息をつく拓夜に、邪神だけでなく葉月や成瀬までもがキョトンとした表情になる。

「例え俺たちに残された未来が、敗北しかないというのなら、俺たちで！新たな未来を切り開いてみせる！！　ってな？それにさ、こんなピンチの状況から逆転できたら、それって無茶苦茶カッコイイじゃねぇか！！　考えただけでワクワクするぜ！！」

「拓夜…」

「拓夜さん…」

『フン…馬鹿にはプレッシャーは感じないのか？』

「花穂も葉月も、なにそんな難しい顔してんだよ？俺は決めたんだ。亨さんたちみたいに、諦めなかったら必ず道は切り開ける。だったら、楽しまなきゃ損じゃん？それに、俺がＯＣＧ研究会に入った理由は、楽しいデュエルがしたいからだ！」

皆が皆、拓夜の言葉に驚かされた。

邪神は呆れた表情だったが、葉月や成瀬に至っては

「そう…ですね。うん。拓夜さんの言うとおりです！」

「それに気持ちが沈んだままじゃ、良いプレイなんてできないし…拓夜！思い切り楽しみなさい！！」

拓夜の言葉によって目が覚めた葉月に成瀬。

そして、拓夜の望む楽しいデュエル。

それが…

「ああ、行くぜ！これが俺の…俺たちＯＣＧ研究会のデュエルだ！！　手札より魔法カード【戦士の生還】を発動！！」

【戦士の生還】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する戦士族モンスター１体を選択して手札に加える。

「この効果で、墓地にある戦士族モンスター【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】を手札に加える！そして、魔法カード発動、【融合】！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「フィールドのＢｌｏｏ－Ｄと、手札のドグマガイを融合し…来たれ、最後のＤッ！！【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［融合／効果］
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター1体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード1枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

ドドドド…ッ！！

拓夜のフィールドに現れし、彼の最も信頼を寄せるモンスター【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】が、遂に姿を現した。

『無駄だ！！　いくらそれが貴様の最強モンスターだろうと、今の私は倒せない！！』

「【スキルドレイン】で効果を封じたからって、えらく強気だな？忘れてないか？俺は１人で戦ってるんじゃない…花穂や葉月、みんなと一緒に戦ってるんだ！！」

そう、これは拓夜と邪神だけのデュエルではない。

「花穂！！　今度はお前が用意してくれたこの伏せカード、使わせてもらうぜ！！」

「はい！！　お願いします、拓夜さん！！」

成瀬が残した1枚。
それは

「リバースマジック、発動!!【巨大化】!! コイツを【Ｄｒａｇｏｏｎ Ｄ－ＥＮＤ】に装備する!!」

【巨大化】
[装備魔法]
自分のライフポイントが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。自分のライフポイントが相手より上の場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

「このカードはライフが相手よりも下の場合、装備モンスターの元々の攻撃力を倍にする!!」

【真・邪神】
ＬＰ／ １５００

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／ ５００

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
ＡＴＫ　３０００　↓　６０００
ＤＥＦ　３０００
（【巨大化】効果）

『こッ、攻撃力がッ…私の【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】を上回っただとッ！？』

６０００という圧倒的攻撃力に、流石の邪神も冷静ではいられなくなった。

「更に、手札の速攻魔法【ハーフ・シャット】を発動！！　対象は、【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】ッ！！」

【ハーフ・シャット】
［速攻魔法］
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで半分になる。

【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】
ＡＴＫ　５０００　↓　２５００
ＤＥＦ　５０００
（【ハーフ・シャット】効果）

「【ハーフ・シャット】を受けたモンスターはこのターン、バトルで破壊されない代わりに、攻撃力が半分になる！！」

攻撃力が半減した邪神の【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】。

攻撃力が倍加した拓夜の【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】。

（馬鹿なッ…、そんな馬鹿な事…ッ！！）

冷や汗を滝のように流しながら一歩、二歩と後ずさる邪神。

そんな邪神を前に、【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】は右手の巨大な大剣を大きく振り上げた。

「邪神…、覚悟して下さい！！」

「この結果こそが真実よ！！」

「バトルッ！！　行けェェエエッッ！！【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】ォオッッ！！！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】が大剣を振り下ろし、その剣圧が凄まじい衝撃波となって【Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン】に直撃した。

「「「アルティメット・Ｄ・バーストォオオッッッ！！！」」」

ズガガガガガガガ…ッ！！

【真・邪神】
ＬＰ／　１５００　↓　０

【ＯＣＧ研究会】
ＬＰ／　５００

『ヌォォオオオオッッ！！！！　ばッッ、馬鹿ナァア！！！！　神をも超越したこのッッ私がァアアアァァ……ッッ』

仲間の力を信じ、

仲間を思いやり、

自分の信念を貫き通す。

激しい戦いを制したのは、そんな強い心を宿した拓夜たちＯＣＧ研究会であった。

決戦　（後書き）

この話を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の邪神のデッキは【Ｓｉｎ】です。

っていうか、話の流れがまるで劇場版を彷彿させるようなイメージで書かせてもらいました。

まだ劇場版を御覧になっていない方。

本ッッ当に申し訳ない！！

今回のデュエルでは、アニメのような流れ、描写を意識しましたので、そこらへんのご意見を頂けると嬉しいです。

まぁ普通に【Ｓｉｎ】デッキを組もうと思ったら、僕の中では【地縛Ｓｉｎ】にするか、歯車街を組み込ませた【Ｓｉｎ街】ですね。

今回のデュエルでは、登場させるＳｉｎモンスターはＯＣＧ研究会の先輩達だけに絞らせてもらいました。

はじめは虹龍でなく、サイバー・エンドを召喚した内容だったんですけどね？

ストーリーや、これまでに登場したキャラクターや使用カードを鑑みて、虹龍になりました。

他にも作成裏話は多々あるのですが、結構多いので書ききれない…

（汗

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

今後とも、よろしくお願いします。

決着。それから～（前書き）

ようやく更新ができました…

最近仕事が忙しくて…

決着。それから～

※

決着。

西条拓夜たちＯＣＧ研究会の攻撃を受けた邪神は、絶叫と共にその姿を散らしていく。

西条亨の姿形を真似ていた邪神だったが、結果として元の黒い球状の靄へと姿が戻っていた。

宙に漂う力を無くした邪神。

そして魔法陣の床には、邪神に取り込まれた先輩たち3人の姿が在った。

それぞれ床に倒れていた3人であったが、次第に意識が戻ったようで、ゆっくりと体を起こす。

すると

「結締さん！白石さん！」

「亨さん！」

「皆さん、無事だったんですね！」

拓夜に葉月、そして成瀬の３人は嬉しさの余り、無事だった３人の先輩たちの胸に飛び込んだ。

「うぉっ！？　拓夜ちゃん！？　びっくりするぜよ…」

「生きてたんスね！！　結締さん！！」

「白石さんも無事で、本当に良かったです！！」

「ふぅん…当然だ。この俺が簡単にくたばるとでも思ったか？」

普段と変わりない言葉に安心する２人。

そして

「亨さんっ！！」

葉月もまた感極まり、想い人の胸へと飛び込んだ。

「烏丸さん、拓夜くん、成瀬さん…心配かけたな。すまない…そして助かったよ。ありがとう！」

先輩陣を代表して礼を述べる亨に、拓夜に成瀬は笑顔で応えた。

葉月に至っては、抱き締める腕に力を入れてくる始末だ。

それほど、３人の無事が嬉しいのだ。

そんな葉月をあやすように撫でながら、亨は宙に浮かぶ球状の黒い靄…邪神をキッと睨み付ける。

「っ！？　コイツ…まだ消滅してなかったのか！？」

拓夜は亨の視線の先に浮かぶ邪神を見て、表情を険しくする。

しかし、邪神からは何も言葉は発せられなかった。

それだけ邪神の力が低下している証なのだ。

そんな邪神に代わり、拓夜の言葉には亨が答えた。

「ヤツに取り込まれて初めて知ったが…邪神とは人々の負の感情が募った存在だ。つまり、この世界に俺たち“人”が存在する限り、邪神は消滅しない…！！　仮にこの場で倒したとしても、第二、第三の新たな邪神が生まれ…悲劇は繰り返される」

「そ、そんな…！？」

「このままじゃ、今回の繰り返しになってしまいます！なにか方法は無いのでしょうか！？」

拓夜や成瀬が声をあげるのも無理はなかった。

もし亨が言った事が本当ならば、邪神は永遠に消滅しないということになる。

人間という強欲な生物が存在し続ける限り、ずっと…。

すると、亨はしがみつく葉月を引き離し、一歩、二歩と邪神の前へと歩み寄った。

「大丈夫だよ成瀬さん…。方法が…ない訳じゃない…！！」

亨はそう言うと、

「亨さん…ッ、まさか!?」

拓夜や成瀬、そして葉月は思わず目を見開いた。

彼がとった行動。

それは

「ああ…。邪神を…俺の中に封印する!!」

ズボォッ!!

亨は球状の黒い靄、つまりは邪神の中に右手を突き刺した。

その瞬間、彼の中に夥しい勢いで邪神が吸収されていく。

凄まじい勢いで身体(からだ)に入り込む邪神に、亨は苦痛の表情で声になら

ない声をあげた。

次第に薄れてゆく意識の中に、仲間たちからの自分を呼ぶ声が微かに聴こえてくる。

大丈夫だよ。

そう呟いたと同時。

彼の意識は、暗闇の奥底へと沈んでいった。

※

気がつくとそこは不思議な空間の中だった。

辺り一面、真っ白で何もない空間。

西条亨はゆっくりと起き上がり、目の前に浮く黒い靄を真っ直ぐに見据えた。

『ここは貴様の深層世界…。今の貴様の意識は、暗闇の奥底に眠った状態にある』

黒い靄、つまりは邪神から発せられた言葉に亨は、そうか…と呟く。

『どういうつもりだ貴様？自ら私を取り込むとは…。これでは自分から、私に身体を明け渡した事と何ら変わりないぞ？』

「心配いらない。俺はお前に身体を渡す為に、取り込んだ訳じゃない」

亨は真っ直ぐに、揺るぎない瞳で邪神を見つめながら、こう言い放った。

「俺はお前と話しをする為に取り込んだんだ」

『はなし？』

「ああ…。お前は拓夜くんたちとデュエルをして、なにを感じた？」

『フン…、なにを聞いてくるかと思えば…』

「お前の存在の根元となるのは俺たち、人間の心の負の感情だ。それは誰の心にもある感情…つまりは、お前はある意味においては、永遠に存在し続けることになる」

『そうだ…例えこの場で消滅しようが、人々の心の闇が募った時、私は再び復活する。人々の心の闇が、私に力を与える』

邪神は黒い靄を揺らめかせながら、

『人々の心の闇は、常に誰かと争われる事で増大する。デュエルもそうだ。競い、勝利し、敗北し、妬み、恨み、憎み、勝ちに渇望し、永遠と繰り返される…デュエルは、私にとってはこれ以上にない馳走となる』

「…確かに、お前の言うとおり…デュエルでは、誰かに勝ちたいという気持ちは強く顕れる。だが…デュエルは、そんな気持ちだけで行われるものじゃない！」

亨は左眼に精霊界の力を宿しながら、言葉に力を込めて言い放った。

「最初に聞いたはずだ。お前は拓夜くんたちとのデュエルで、なに

を感じたか?と。拓夜くんは言ったはずだ!楽しいデュエルがしたいと!」

『……』

「デュエルでは、確かに勝ちたいという欲望が強く顕れる事がある!だが拓夜くんたちは、その事はキチンと理解してやっている!キチンと理解しているからこそ、やって互いに、楽しいデュエルができる事を目標にしている!」

互いにやって、楽しいと思えるデュエル。

邪神は拓夜たち三人を相手にし、敗北した。

自分の悲願を潰してくれた相手に対し、楽しいと素直に思えるだろうか?

『フン…口で言うのは簡単だ。だが、貴様の言うそのデュエルは、万人に受け入れられるものではない…』

「そんな事は分かっている。言っただろう?拓夜くんたちは、その事をキチンと理解していると!競い合う時は、誰だって勝ちたいさ…勝てば嬉しい思いはするだろう。負ければ悔しく感じるだろう。だけど…それが人間なんだ!!　勝てばそれが自信となり、更なる高みを目指す!!　負けたらそれを期に、もう一度頑張ろうと思う糧となる!!　それらがの気持ちが、俺たち人間を成長させるんだ

！！」

亨の言った事はなにも、デュエルだけに言える事ではない。

例えば野球においては、その日の試合でバッターがホームランを打ったとしよう。

恐らくそのバッターは、今回のホームランに自信を持ち、次の打席でも頑張ろうという気持ちになるだろう。

逆にピッチャーにおいてはホームランを打たれた為に、ショックは受けるだろうが…。

次はホームランを打たせないように気を引き締め直すだろう。

嬉しい事。

悲しい事。

そういった感情を身体で覚える事で、人間は成長していく事ができるのだ。

「俺も今回の事で、色々と知る事ができた。邪神…お前の言う負の感情でも、人間は成長していく事ができるんだと！三幻神が光（正）の心を総称するなら、三邪神は闇（負）の心を総称する…。それが俺たち、人間なんだって…思った」

亨はそう言うと、邪神に対して右手を差し伸べた。

『…なんの真似だ?』

「邪神…この俺と契約しろ」

『…契約、だと?』

亨からの契約。

予想外の誘いに、邪神は思わず尋ねた。

「ああ…俺との契約内容は単純かつ明解だ。俺と共に、見届けろ」

『…見届ける?』

「拓夜くんたちが目標とする、互いにやって、互いに楽しいと思えるデュエル。デュエルとは、こんなにも素晴らしいんだなって、思えるような…拓夜くんたちだけじゃない。俺もそうだ!だからお前が俺の中で、それをしっかりと見届けてくれ!」

『…愚かな。この私と契約だと?隙あらば、私は貴様の身体を乗っ

取るやもしれんのだぞ？』

「心配はいらない。俺は…お前を信じる事にした。お前の総称する負の感情だって、俺たち人間なら、誰しもが持っている当たり前の感情なんだ」

『…私を…信じる、だと…？』

邪神は、真剣に自分と向き合う彼から何かを感じ取ったのか、黒い靄の身体は徐々に、その陰を薄めていった。

徐々に、徐々に…。

今にも消えそうな邪神に、亨は

「ッ！？　邪神…！！」

『五月蠅い…私は力を消耗しているのだ…だから、今は休ませろ』

邪神の意識が眠りにつこうとしている為か、邪神側の白い空間が徐々に黒く染まっていく。

『貴様との契約…しかと見届けさせてもらう…せいぜい、私を失望させてくれるなよ…』

邪神はそう呟くと、彼の中で静かに眠り始めた。

しかしその声は、いつもの相手を脅すような声色ではなかった。

亨は邪神のその声色の変化を感じ、笑顔で頷いてみせた。

※

中島理事長が操縦する自家用ヘリコプターが東区の上空に向けて進む。

そのヘリコプターの中は、重苦しい空気に包まれていた。

ＯＣＧ研究会のメンバーたちの視線は、現在１人の人物に集中していた。

後部座席にて葉月の介抱を受ける西条亨に、である。

邪神をその身体に宿した亨は、そのまま意識を失ってしまったのだ。

「葉月…亨さんの様子はどうだ？」

彼の枕元で看病を続ける葉月に拓夜は訪ねるが、葉月は首を横に振った。

「クソッ！！　せっかく邪神を倒したと思ったのに…！！　なんで亨さんが犠牲にならなくちゃいけないんだよッ！？」

「拓夜ちゃん、少し落ち着け」

苛立たしげに声をあげる拓夜に、結締が声をかけた。

「釈然としない気持ちは、拓夜ちゃんだけじゃねェぜよ。それに…西条ちゃんはなにも、考えなしに邪神と接触した訳じゃないはずぜい？」

「結締さん…それは一体、どういう事なんです？」

考えなしに邪神と接触した訳じゃない。
その言葉に、成瀬が疑問をもった。

「さあな…。俺もそこまでは分からないぜよ」

「分からないって…結締さん!!　もし亨さんの意識が戻らなかったら…!!」

「ふぅん…しかし、西条の奴は邪神に対抗する力…精霊界の力を持っている。拓夜よ、落ち着けと言われなかったか?そんなに取り乱しているのはお前だけだぞ?美少女を見てみろ?」

拓夜は白石に言われ、彼の枕元で今も必死になって看病している葉月を見た。

「大丈夫…」

葉月はポツリと呟いた。

「あの時…亨さんは大丈夫だって言ってた。だから…私は信じる。ちゃんと…帰ってくるって…」

横たわる彼の手を握り、葉月は自分に言い聞かせた。

大丈夫。

そう、きっと大丈夫。

彼は今までに、そう言ってきた時は、ちゃんと約束を守るってきたから。

葉月はそうやって自分に言い聞かせ、気持ちを強く持っていた。

※

邪神が眠りについた事で、辺りは完全に暗闇に包まれてしまった。

ここは西条亨の意識の奥底…深層心理の奥底の世界。

だったはずだった。

「進んでもずっと闇の世界か…気が滅入るな」

歩みを止めて亨はポツリと呟いた。

邪神と契約はできた。

しかし、契約できたからといっても直ぐに意識が戻る訳ではなかった。

「…やっぱり、人の体に複数の力を宿すのは…予想以上に負荷がかかるのかな…？」

これまでに契約し、共に闘ってきた精霊界の仲間達。

ブラック・マジシャン

ウィン

マジシャンズ・ヴァルキリア

魔導戦士　ブレイカー

そして…

それぞれ皆の顔を思い浮かべていると、そこである変化がおきた。

暗闇だった世界が、突如、別の景色に変わったのだ。

「…ここは？」

辺りをぐるりと見渡してみる。

自分の周りには一面の花畑。

その向こう側には、どこまで続くやも知れぬ大きな川。

「おいおい…まさか…ここって…！？」

そこから先は自分でも考えたくはなかった。

しかし、自分の意に反して、足は川の方に向けてゆっくりと進んでいく。

（邪神と契約したばかり…拓夜くんたちを見届けると言ったばかりなんだけどな…）

まさか自分がお星様になって見届ける事になるなんて、思ってもみなかった。

（…けど、それも…）

色々と考えている間にも、足は川に向けて進んでいく。

すると、そんな彼を呼び止めるかのように、1人の女性の声が聞こえてきた。

『……ょお』

「……っ！？」

その声が聞こえたと同時、彼の前にはいつの間にか1人の女性が立っていた。

その女性の登場に、彼の足は自然と止まっていた。
その女性の登場に、彼の顔は驚きに満ちていた。
その女性の登場に、彼の瞳から思わず涙がこぼれ落ちた。
その女性はそんな彼の顔を見て、以前と変わらない笑顔で

『こうやって会うのは、久しぶりだね？さいじょお』

「…マジシャン・ガール」

※

突如、亨の目の前に現れたマジシャン・ガール。

久しぶり。

その言葉に亨は涙を拭い、彼女と同じように笑顔で答えた。

「ああ…久しぶりだな。マジシャン・ガール」

マジシャン・ガールは亨の隣に立ち、彼の顔を見上げるようにして

『さいじょおの事、ずっと見てたよ。辛い思いをさせちゃったね…』

「ああ…。だけど、こうして…また会えた」

2人は川のほとりに座り、お互いのいろいろな事を話した。

「そっか…やっぱり、この川を越えると」

『うん。完全に御陀仏なんだよ、さいじょお』

「となると、川を渡ってない俺はまだ死んでいないって事になるんだな」

『そうだね』

「なぁ…お前は、どうなんだ?」

『え?』

亨は真剣な表情でマジシャン・ガールを見つめた。

自分はまだ死んではいない。

それは理解した。

しかし、マジシャン・ガールはどうなのか？

今、こうして自分の隣にいるマジシャン・ガールは…？

『私は…。私も、まだ死んだ訳じゃないんだよ』

「…そうか。良かった…」

死んだ訳じゃない。

その言葉を聞いて安堵した亨。

しかし次の言葉で

「だったらマジシャン・ガール、俺と一緒に」

『死んだ訳じゃないけど…私は、現実世界には帰る事ができないんだ』

「……え？」

『さいじょおには、魂の帰るべき身体が残ってる。でも…私の身体はもう…』

「…嘘…だろ…ッ」

亨の身体は現在、ヘリの中で仲間たちによって保護されている。

しかし、マジシャン・ガールは違う。

トリティニー・ドーム爆破事件に巻き込まれ、彼女の身体は既に…。

亨は認めたくなかった。

死んだと思っていた最愛の女性に、偶然ながらもようやく出会える事ができたのに…。

まただ。

あの時みたいに、また自分だけ助かって、彼女は取り残されてしまう。

「そんなの…俺は認めない…ッ！！」

亨は立ち上がり、隣に座るマジシャン・ガールに手を差し伸べた。

「ようやく会えたのに、またお前だけが取り残されるなんて、俺は絶対に認めない！！　お前だって、現実世界（アッチ）に帰りたくないのかよ！？　俺はお前と一緒にいたい！！　だから、一緒に帰ろうぜ！？」

『だから…それは無理なんだよ。帰りたくても…私の身体はもう…』

「…くッ！！」

余りの悔しさに、奥歯をギッと噛み締める。

今にも亨の心は、再び壊れそうな位に亀裂が走っていた。

そんな彼は俯き、悔しさから声を震わせて

「だったら…俺も、ずっとここに残る」

『…さいじょお？』

「お前だってずっと1人で、寂しかったんだろ？辛かったんだろ？俺だってそうだった…。ようやく会えたのに…でもッ、俺がお前と一緒にここに残れば…！！」

『…さいじょお、なにを言ってるの？』

「俺は邪神と契約した時、拓夜くんたちを見届けると言った。でもそれは、ここからでも見届ける事はできる。マジシャン・ガール…。一緒に帰る事ができないなら、俺と一緒にここに残ってーーッ！？」

バチィンッ！！

話す最中の亨の顔が横に吹き飛ばされた。

それが、マジシャン・ガールが彼に平手打ちをした事だと気付くには、一瞬の時間がかかった。

突然、ビンタされた亨は驚きの余り、言葉が出てこなかった。

『さいじょお…それ以上言ったら、私は本気でさいじょおを嫌いになるよ…！！』

「…マジシャン・ガール」

『さいじょおは、残された人たちがどんな思いをするのか、分かってるでしょ！？　自分自身が経験しちゃったこと、もう忘れちゃったの！？』

「……」

『さいじょおには、現実に帰りを待ってる仲間たちがいるの！！　さいじょおが帰らなかったら、それだけ多くの仲間たちの期待を裏切ることになるんだよ！？　さいじょおが帰って来なかったら、結締くんや白石くんは何て言うか想像できる！？　たくやや、かほは、どれだけ悲しむか理解できる！？　はづきが、どれだけの涙を流すか、さいじょおは分かってるの！？　分かっててそんな事を言ってるの！？』

「…ッ！！」

亨はショックだった。

マジシャン・ガールは、そんな彼を真剣に叱った。

余りにも軽はずみな発言。

余りにも軽薄な発言。

マジシャン・ガールは彼を想うからこそ、叱る。

真剣に。

彼の為を想い。

『たくや達をここで見届ける？それは、現実から逃げてるのと変わりないんだよ、さいじょお！！』

亨は俯き、反省した。

自分自身の軽薄な言葉が原因に、マジシャン・ガールにこんな事を言わせてしまったこと。

それがどれだけ、周りの人を悲しませる事になるのか。

思慮が全く足りていなかった。

「…そう、だな。ごめん、マジシャン・ガール…俺、すごく反省してる」

『うん。だけど…さいじょお、謝る相手を間違えてるんだよ？』

「ああ…（現実世界に）戻ったら、みんなにちゃんと謝らないとな」

亨はそう言うとマジシャン・ガールに背を向け、

「ありがとう、マジシャン・ガール。おかげで目が覚めたよ」

『うん…。行ってらっしゃい、さいじょお』

マジシャン・ガールに見送られ、亨はもと来た道を歩み返す。

すると、彼の後ろからマジシャン・ガールが

『さいじょお!!』

「…？」

『心配してくれて、ありがと！私は大丈夫だよ！私はいつだって、さいじょおと一緒だから！だから、さいじょおは…さいじょおの進むべき道を行って！』

マジシャン・ガールに見送られ、力強く頷く亨。

もう、彼の心に迷いはなかった。

彼は進む。

こんな自分を待ってくれる、最高の仲間たちの所へ。

※

東区の上空を飛ぶ中島のヘリコプターの機内にて。

「…っ、…？」

亨が目覚めて最初に視界に入ったのは、両目から大粒の涙を流す烏丸葉月の顔だった。

葉月からこぼれた涙が頬に当たり、その感触が、自分は戻ってきた事を強く認識させる。

「…烏丸さん」

「…っ、この馬鹿ッ！！」

葉月からの開口一番の言葉がこれだった。

葉月のその言葉に反応し、ＯＣＧ研究会の仲間たちがそれぞれに詰め寄ってくる。

「アタシが…ッ、みんながッ、どれだけ心配したと思ってるのよッ！！」

葉月の顔は真っ赤だった。

目頭も真っ赤に充血していた。

そんな目からは今も、大粒の涙が次々に溢れていた。

「烏丸さん…みんな、心配かけて、ごめん」

「西条ちゃん。ごめんだけで済むと思ってるのか？」

「そうっスよ！葉月だけじゃなく俺たちだって、めちゃくちゃ心配したんスから！」

「でも、意識が戻って…本当にっ…良かったです…っ！！」

「ふぅん…西条よ。美少女が貴様の為に、ずっと付きっきりで看ていたのだぞ！？　貴様だけ美味しいポジションを取りよって！！羨ましすぎるわ！！　ええい、意識が戻ったというのなら、その場所を俺と代われッ！！　って、結締ッ、貴様なにをする！？　離せェ！！」

「白石さん、空気を読もうぜぃ…」

結締によって押さえつけられた白石。

メンバー達はそんな白石を自然にスルーしながら話を進めていた。

「そういえば亨さん、邪神はいったい…どうなったんスか？」

「こうやって意識が戻ったという事は、無事に封印ができたんです？」

「…いや、封印はしていない。そして…消滅もしていない」

彼の答えに首を傾げるメンバー達。

すると、そんな彼の変化に一番に気付いたのは葉月だった。

「ッ!?　亨さん…その眼…!!」

亨の両の瞳。

左眼…蒼く澄んだ色をした精霊界の力。

右眼…赤紫色をした三邪神の力。

それぞれの瞳の色の変化に驚いたメンバー達に

「邪神は…俺たちに力を貸してくれる事になった。今は俺の意識の奥底で、眠っている」

「そんな…もしまた邪神が目覚めて、ラドルフみたいに、亨さんの身体を乗っ取ったりしたら…」

「大丈夫だよ拓夜くん。…俺は邪神のことを信じることに…って。何て顔してるんだよみんな…。俺のこと、信じられないか?」

安心させるつもりではにかむ亨。

しかし、そう簡単に不安は拭いきれるものではない。

自分が嬉しい思いをした感情よりも、嫌な思いをした感情の方が根強く残るものなのだ。

しかしその時、成瀬の服のポケットに入っていた【リチュア】のデッキが、黄金色に光りだした。

「花穂…それは…！？」

「これはウィンダちゃんのお友達が入ったデッキです。邪神に洗脳されていたらしいんですけど…放っておけなくて…。でも、亨さん。この光は…いったい？」

「言っただろう？邪神も力を貸してくれるって。今のは、束縛から解放された光だよ」

亨のその言葉を聞いて、拓夜に成瀬の二人はそれぞれに

「ったく、しょうがないっスね。亨さんが信じるってんなら、俺も信じてみます」

「信じる事というのは、難しい事だって、前に結締さんが言ってました。でも、私はこのＯＣＧ研究会は…皆さんが信じあっているからこそ成り立っているんだと思います。ですから、私も信じます！」

「拓夜くん…成瀬さん…！」

「今更だぜぃ、西条ちゃん」

「ふぅん…、今回は美少女の涙に免じて、俺も信じてやる」

「結締…白石…！」

すると、彼の両頬に葉月の手が、そっと…添えられた。

「アンタ…なんでそんなにっ…無茶ばっかりするのよ？」

泣きながら震える声で、葉月は言う。

「１人で体張って…、１人で無茶して…っ、下手したらさっきだってっ、意識が戻らなかったかもしれないのに…なんで？なんでアンタは…っ！！」

亨は眼を閉じ、ごめん。と小さく呟いた。

意識の奥底で、マジシャン・ガールに言われて。

そして今、自分のことをこんなにも心配してくれた仲間たちに囲まれて。

亨は改めて、自分の不甲斐なさを実感した。

「本当に…ごめん。もう、心配させるような真似はしない。約束する」

「…っ、アタシは…ーーッ!!」

その瞬間、葉月の中に誰かの声が響き渡った。

その誰か、の声に、葉月は驚きの余り、一瞬だったが言葉が詰まる。

『…はづき』

（ぇ…ま、マナ…さん…ッ!?）

『さいじょおが凄く迷惑をかけて、ゴメンね。さいじょおって、こんな事ばっかり言うけど、嘘は絶対につかないよ。だから…はづきも、さいじょおを信じて。そして…さいじょおを支えてあげて。さいじょおは優しいから。きっと、さいじょおは…はづきの気持ちにも、ちゃんと応えてくれるよ？』

（…マナさん）

『…さいじょおを、よろしくね！』

彼を通して、マジシャン・ガールの言葉を受け取った葉月は、唇をギュッと噛み締めた。

彼女に認められた。

彼女から託された。

様々な感情が入り混じり、葉月は再び、目に大粒の涙を浮かべる。

「ーーーーッ」

声にならない喜びの気持ちが、涙となって溢れ出す。

いきなり再び泣きだした葉月に亨だけでなく、周りのメンバー達もつい困惑してしまった。

「え、ちょ…烏丸さん？」

「西条ちゃん、いい加減、女の子を泣かせすぎだぜぃ」

「結締っ、別に俺はそんなつもりじゃ…」

「亨さん…葉月は一度泣き出したら、なかなか泣き止みませんから。覚悟しといた方が良いッスよ？」

「拓夜くん…、覚悟って…なにを…？」

「決まっているッ！！　西条よ、美少女をこんなに泣かせよって！！　再びあの川を渡る覚悟はできているのだろうなァア！？」

「えっ！？　ちょ、白石！？　そんな指をボキボキ鳴らせて…ちょっ、こっち来んな！？　恐い、めっちゃお前恐っ！？　せっかく向こうでマジシャァァアア〝ア〝ア〝ッッ！！」

亨の絶叫が東区の空に響き渡る。

彼には不憫ではあるが、これが非日常から日常へと戻ったのだと実感させられる。

永かった邪神との戦いも、西条亨の悲鳴をもって、その幕を降ろした。

決着。それから～（後書き）

この小説を読んでくださり、本当にありがとうございます。

今回の話ではデュエルは無しです。今後の展開へ繋げるための内容となっています。

最近は暗い内容？シリアスな内容の話ばかりでしたので、次回からは少しコメディを取り入れたいとおもっています。

それにしても皆さん、リチュア・エリアルが気になっている様ですね？

感想に結構その事が書かれていて、ビックリしました。

それだけ皆様がこの小説で楽しんでもらえているのだなと思い、一人にやにやしてました。

話は変わって、資格試験…

無事に合格できました！！

応援してくれた皆さま、本当にありがとうございます！！

挑戦（前書き）

う〜ん…

頭の中で出来ている各話の構成を考えながら、ストーリーを書くのは難しいなぁ…

挑戦

※

東区第七高等学校の体育館では、放課後に残った生徒たちがそれぞれの作業に追われていた。

ステージには数人の生徒たちが上がり、天井にロープを通して看板を吊り上げている。

「どう、成瀬さん！位置はズレてない？」

「はい！大丈夫です！」

その看板には卒業式の文字が大きく書かれていた。

ここ最近。

集まった二年生以下の生徒会や学級委員等が放課後に残り、こうして卒業式の準備に取り組んでいるのだ。

この学校の一年生である成瀬花穂は、自らこの卒業式の準備に参加していた。

三年生で恋人同士の関係である西条拓夜。

そして、彼を通して知り合い、現在は同じＯＣＧ研究会の仲間でもある烏丸葉月。

二人にとって、この卒業式は一生に残る大切な思い出になって欲しい。

その気持ちから、成瀬は今もこうして放課後に残り、その準備に取り組んでいるのだ。

看板を吊り終えたメンバーの中から、この集まりのリーダーの女性が、成瀬の方へと寄ってきた。

「そうそう…この間、成瀬さんが提案してくれたあの話しなんだけど、学校側からＯＫが出たわよ」

「ほ、本当ですか！？」

「ええ、あとは向こうの人たちへの交渉だけなんだけど…」

「それなら、私に任せて下さい！」

成瀬は胸を張って言う。

「私が言い出した事ですし…。それに私も、ＯＣＧ研究会の人間ですから！」

※

夕方。

西条拓夜は自宅の部屋で、デッキをいろいろと編集しながら過ごしていた。

この頃の高校三年生は学校の過程が終了し、残す登校は卒業式のみの状態なのだ。

そんなこんなで過ごしていると、部屋のドアがノックされ、ガチャリと開かれた。

そこから彼の母親が顔を覗かせ、封筒を手に持ち

「拓夜～？アンタに渡すの忘れてたわ。今日の昼に、アンタ宛てに郵便が来ていたわよ」

「え？俺に…？」

封筒を手渡した母親が部屋を出ていくと、とりあえず拓夜は送られてきた封筒を確認した。

「いったい何の封筒だよ…って！？　と…トリティニーグループから！？」

なぜ世界にその名を轟かす大企業から自分に！？

宛先に驚いた拓夜は封を開けると、中には一枚の用紙と券が封入されていた。

その券を手に取り、拓夜は信じられない気持ちで呟いた。

「こ…これって…っ！？」

先ずは誰かに話を聞いてもらおう！

そう思った拓夜は立ち上がり、封筒を手に。

そして、ＯＣＧ研究会の先輩たちの所へと向かう為に準備を始めた。

※

西条亨宅、兼ＯＣＧ研究会事務所には結締智恭と白石直也の二人が来ていた。

机の上には幾束もの資料が積み上げ、広げられており、それを囲む彼らの表情は引きつりながらも真剣そのものである。

「ふぅん…。これがトリティニーグループから依頼されていた、デュエル教室に扱う資料と日程だ」

「お…多すぎだぜぃ…」

「白石…確かに俺は邪神の跡を追う時に『後のことは頼まれてくれないか？』とは言ったが…」

「俺がデュエルテーブルの営業周りしてる間に…白石さん、後先考えなさ過ぎだぜよ？」

「ええいッ！！　うぅるっさいッ！！　仕方ないだろう！！　中島

理事長が言うには、全国各地で美少女たちがこの俺を待っているというのだぞっ！？」

「そんなの嘘に決まってるじゃねェかッ！！」

「嘘かどうか、行かねば分からぬだろうがァッ！！」

言い合う二人に挟まれ、亨は思いっきり溜め息をついた。

手元の資料や日程表には、もう既に来週から向かう事になっている。

ともあれば、デュエル教室の会場を貸してくれる業者とも既に話はついているのだろう。

更には参加人数の規模からして、今からキャンセルなど出来る筈がない。

それだけ多くの人たちが、ＯＣＧ研究会のデュエル教室に興味を持ってくれているということなのだ。

「二人とも…ここで言い合ったって、もう取り返しはつかないんだし。これからの事を話し合わないか？」

「西条ちゃん…」

「ふぅん…さすが西条だ。話しが分かるではないか！」

「任せた俺が言うのも何だが…。白石、次は流石に勘弁してくれよ？」

「ふぅん、心得た」

何とかこの場の雰囲気は沈静化したが、次なる問題が残されている。

三人の前に積み上げられた、もはやタワーのような資料。

「とにかく、資料の日程毎の分別だけは今日中に終わらせないとな…」

「徹夜確定だぜぃ…」

「ならば早速始めるとしよう」

三人が作業に取り掛かろうとした時、玄関のインターホンの音が部屋に鳴り響いた。

（こんな忙しい時に…）

二人に作業を進めるように言った亨は、溜め息混じりに来客者を出迎えた。

「ハァ…。はい、どちら様ですか？」

ドアを開けるとそこには…。

「あ、突然お邪魔してスミマセン！」

「成瀬さん？…もしかして、一人で？」

そこには走って来たのか、息を切らせる成瀬の姿があった。

「今日は拓夜くんと一緒じゃないのかい？」

「はい…。実は、拓夜さんや葉月さんには内緒で、先輩方に大切な…お願いがありまして…！」

※

その頃…。

烏丸葉月は、自宅近所のスーパーマーケットに来ていた。

手にした買い物かごの中には、これから夕飯を作るであろう食材がギッシリと詰まっている。

レジを済ませ、買い物かごの中に入った商品を鼻歌混じりに袋に詰め込む葉月。

「～♪前に亨さん、魚料理が好きだって言ってたから、奮発しつ鱈(タラ)を買っちゃった♪」

どうやらこれから彼の家へ向かい、夕飯を作る気でいるらしい葉月。

「突然でびっくりするだろうけど、きっと喜んでくれる…よね？」

本来なら事前に話をつけておかなければならない事なのだが、全くお構いなしの葉月。

（マナさんに託されたこの想い…ちゃんと繋いでみせるんだから！！　頑張れ、わたし！！）

やけにやる気満々な葉月。

今の彼の事情を全く知らない恋する乙女の葉月は、浮き足立つ足取りで彼の家へと向けて進み始めた。

※

「な、なんです？この大量の用紙は…！？」

部屋に上がった成瀬は口をあんぐりと開けた。

下手をすれば自分の身長と同じくらいにまで積み上げられたデュエル教室の資料の束の山。

「ほら白石さん、成瀬ちゃんまで呆れてるぜよ？」

「ヌゥゥ…ッ、仕方ないだろう！それだけ多くのだなーー」

「あの…亨さん、コレはいったい…何なんです？」

流石にこの部屋の状況が気になった成瀬は何事かと尋ねてきた。

「ああ…実は…」

・　・　・　・　・

「と、言うわけだぜぃ…。白石さんが馬鹿みたいに仕事を引き受けるモンだから」

「結締、貴様ァッ！！　まだ言うかァ！！」

「本当の事だから言うんだぜぃ？」

後ろで再び言い争う二人に、亨は溜め息をつきながら

「そういう訳で、来週に向けて資料の分別をしている最中なんだ」

「そう…なんですか…。あの…差し出がましいかも、なんですが…」

おずおずと手を挙げる成瀬に首を傾げる先輩たち三人。

「これらの資料はパソコンにデータとして残されているんです？もし残されているんでしたら、当日に必要枚数だけ印刷して、用意したほうが効率が良いような…。それにあまり長いこと紙を出していたら、用紙が痛んでしまいますし…」

成瀬の意見に三人は思わず手に相槌を打った。

「「「それだッッッ！！！」」」

「って、もしかして皆さん今更ながら気付いたんですか！？」

頼れるようでどこか抜けている三人であった。

・・・・・

成瀬の案を採用した三人は一時作業を中断する。

人数分のお茶を用意し、亨は成瀬に用件を尋ねた。

「ところで成瀬さん。拓夜くんや烏丸さんには内緒の話って？」

「はい、実は…」

※

西条拓夜と烏丸葉月は、一緒に西条亨宅、兼ＯＣＧ研究会事務所に向かっていた。

拓夜が走って向かっている最中、偶然にもスーパーから出て来た葉

月と居合わせた為でもある。

そんな拓夜の両手には、ズッサリ…と大きく膨らんだ買い物袋が下げられていた。

「～♪」

「なぁ葉月…、せめて片方は持ってくれよ。メッチャ重たいんだけど…」

「なに言ってんのよ？男なんだから、それぐらいで文句言わない！」

「…理不尽だ」

盛大な溜め息を漏らす拓夜とは裏腹に、葉月は陽気な足取りで鼻歌混じりだ。

そんな葉月の手には、拓夜宛てに届いた封筒が。

「でもまさか、アンタに“こんなモノ”が届くなんてね～。アンタはいったいどうするつもりなのよ？」

「…分からない」

両手にズッシリと買い物袋を下げた拓夜は呟く。

「正直、戸惑ってる…実力もある葉月じゃなく、何で俺なんだろう？…って。嬉しい気持ちもあるし…不安な気持ちも半々でさ」

「だから、亨さんたちに聞きに？」

「ああ…。誰かに聞いて欲しくて、誰かにアドバイスが欲しくてさ」

そっか…と、感傷に浸りながら頷く葉月。

「葉月は？」

そんな葉月に、今度は拓夜が尋ねた。

「こんな大量の買い物して亨さんの所に行く途中だったんだろ？なにしに行くつもりだったんだ？」

「なにって…それは…その…何か、最近忙しいみたいだし…料理でも、作ってあげよかな…って／／／」

「へぇ…葉月が料理を…」

「なによ、その意外そうな顔は？まえにアンタも、私の作った唐揚げを食べた事あるでしょ？一通りの料理なら、私にだって出来るんだからね！」

「え、いや別にそう言いたい訳じゃねぇんだ。たださ、こうして俺が荷物を運んでんだからさ、何か俺にも食わせてくれよ？」

「はあ？アンタなに言ってんの？アンタの分なんて用意してないわよ？」

アンタの分なんて用意してない。

拓夜はその言葉に反論する気持ちをグッと堪えた。

自分は今、両手の袋にの中に、葉月が今夜の夕食で亨と食べるであろう食材が詰め込まれている。

結構な量だ。

仮に全ての食材を使うにしても、軽く四人分くらいの量はあるだろう。

その中から自分の食べる分がない、ということは…

「俺の分がない、って…お前…どれだけがっつくつもりだプギャッ!?」

言わないつもりだったが、つい口に出てしまった。

「アンタね、私が普段から大食らいみたいに言わないでくれる?蹴るわよ?」

「け…蹴ってから…言うな」

※

「という事なんです。…亨さん、白石さん、結締さん。何とか都合をつけて貰えないでしょうか?」

拓夜が葉月に蹴飛ばされた頃、西条亨宅では成瀬が先輩たち三人に話の概要を伝えた所であった。

「ふぅん…なる程な、美少女たちの卒業式か。成瀬よ、なかなか粋な計らいをするではないか？西条よ、俺たちのデュエル教室の日程はどうなっている？」

成瀬から手渡された用紙を見ながら白石が亨に確認をとる。

「…その日は夕方から他県でのデュエル教室が予定されている」

「そんな…でも、先輩方もそれぞれに事情があるんですもんね…」

日程が重なってしまった事に悄げる成瀬。

「でも…」

でも。

亨のその言葉に成瀬はハッと顔をあげた。

「なにも出られない訳じゃない。成瀬さんの要件が済み次第、急いでデュエル教室に向かえば、時間は何とかなるだろう」

「ふぅん…、俺もそれを言おうと思ってた所だ」

先輩たちからの許可が降りた。

成瀬はその事に表情を明るくし、喜びの声をあげた。

「ほ、本当ですか!?　ありがとうございーー」

「だが…」

「成瀬ちゃん。西条ちゃんや白石さんが良くても、悪いが俺は参加できないぜぃ」

喜んだのも束の間。

結締の参加できないとの言葉に成瀬は衝撃を受けた。

「そんな…今回の件は、結締さんが居ないと…」

「悪ぃ…俺はその日、中島理事長から、トリティニーグループが企画する実習に参加ように言われてんだ」

「そんな…認めたくない、と言っても…もう、遅いんですもんね…」

一度は花のように咲いた笑顔が再び萎れる。

「…三人揃わないのが残念ですが、私の方から学校へは伝えておきます」

「ホント、すまないぜぃ…成瀬ちゃん」

すると、再びインターホンの音が部屋に鳴り響いた。

「なんか今日は来客者が多いな…。はい、どちらさま?」

亨は思わずそんな事をボヤきながら玄関の戸を開ける。
そこには…

「あ、こんばんは！」

「お…お邪魔…します…っつか、荷物おかせて…！！」

「か、烏丸さん！？　それに、拓夜くん！？」

バタンッ！！
ガチャッ！！

予期せぬ来訪者に、亨はとっさにドアを閉め、施錠した。
ドア越しには葉月と拓夜の声が聞こえてくる。

「ふぅん…西条よ、そんな慌てた様子で…。いったい誰が来ていたのだ？」

「成瀬さん！！　今すぐにその書類を片付けるんだ！！」

「えっ!?」
「拓夜くんと烏丸さんの二人が来た!! その書類に書かれた内容は、あの二人には内緒なんだろ!?」
「は、はい…っ痛!?」
「うェっ!?」
「ンなっ!?」
「ちょっ!?」

成瀬が慌てて自分が用意した書類を片付けようとしたその時。
立ち上がる際に足を滑らせた成瀬は、机に積まれたデュエル教室の山のような資料に向かって転んでしまったのだ。

ブワッ!!

バラズザザザァァ……!!!!

「ギャァアアア！！　お、俺の部屋が紙まみれにィイ！？」

「ってか、成瀬ちゃんは大丈夫か！！　見事にプリントの束に埋もれて、顔だけひょっこりと出ているぜぃ！？」

「ふぅん…凄まじい光景だ…！！　まさかプリントと成瀬で床一面が埋め尽くされるとはな…！！」

「ふきゅ～（☆×☆）…」

阿鼻叫喚な図に仕上がった亨の部屋。

そして中の事情は知らずに、けたたましくドアを打ち付ける葉月。

「ちょっと、亨さん！？　なにやってるのよ？　早く開けなさいよ！！」

「ちょっ…マジでっ…荷物おかせて…！！」

※

ここは西条亨宅、兼ＯＣＧ研究会事務所である。

そして拓夜や葉月が座っているのは、紙の上である。

同じく亨や白石、結締に成瀬も、座っているのは紙の上である。

つまりは辺り一面は紙で敷き詰められている訳である。

「ドアを開けたと思ったらいきなりドアを閉めちゃうし…、鍵まで掛けちゃうし…、ようやく部屋に入れたと思ったら、こんな惨状だし…ッ、アンタ達、いったい何やってたのよ！？」

葉月に問い詰められ、ビクゥッ！！　っと肩を跳ね上げる四人。

白石や結締、そして成瀬の三人はササッと亨の背後に回り、彼を盾にした。

「お、おいッ！？　オマエ等！？」

（葉月ちゃんの相手は、西条ちゃんに任せるぜよ！）

（むぅぅ…、俺は美少女を相手に口で勝てる気がしない…！！）

（亨さん！頑張ってください！！）

そんな彼らの前に、ご立腹の葉月が徐々に迫ってくる。

「亨さん…何でいきなりドアを閉めちゃうわけ？」

「いや…それは…っ、流石にこんな部屋の状況を見せたくはないだろ？っていうか、拓夜くん達はどうしてここに？」

葉月からの尋問を拓夜にパスする事で、何とかこの状況を避わそうとする亨。

そんな拓夜は、葉月の買い物を冷蔵庫の中に片付けながら

「いや、俺はちょっと相談に乗ってもらいたい事があって来たんですけど、途中で葉月に捕まって…」

「拓夜、捕まったってヒト聞きの悪い風に言わないでくれる？で、亨さん、この状況はいったいどういう訳よ？ちゃんと訳を聞かせてもらうわよ！」

話が再び振り出しに戻った。

（く…ッ！？）

「…これは、来週からのデュエル教室で使う資料だよ。まあ白石が印刷を急ぎすぎて、こんな状況になっちゃったけど…」

こんな状況＝神に埋もれた部屋。

葉月や拓夜は呆れてしまい、ヤレヤレと溜め息を吐いた。

「ところで拓夜ちゃん。さっき相談があるって言ったが、どうかしたのか？」

話を切り替える為に結締が拓夜に話を振った。

「あ、はい…実は、今日の昼にこんなのが届いて…」

葉月は拓夜宛てに寄せられた封筒を亨に手渡した。

中を開けてみると、そこには

「こ、これって…！！」

「拓夜ちゃん、やるじゃねぇか！！」

「ふぅん…、トリティニーグループが主催するプロリーグの招待状か！！」

「えっ！？　拓夜さん…プロになるんですか！？」

封筒の中身に驚きを隠せない四人。

「いや…プロになるかはまだ分からない。って言うか、何で俺なんだろうって…逆に不思議で」

自分がプロリーグに誘われる理由が分からない拓夜。

そんな拓夜に、結締が何かを思い出したかのように答えた。

「そうか…あの時の！トリティニー・チャンピオンシップ！あれに出場した拓夜ちゃんのデュエルが評価されたに違いないぜぃ！」

「そうだな…やったじゃないか拓夜くん！これは拓夜くんの実力が認められたという証だよ？」

「おめでとうございます！拓夜さん！」

祝いの言葉を投げかける成瀬だが、拓夜は困った表情を作っていた。

「拓夜、アンタ…どうしたの？嬉しくないの？」

「プロになれば、拓夜くんが目指す楽しいデュエルをする奴だっているし、何より全員がかなりの実力者だ。きっと拓夜くんにとって、良い勉強にもなると思うよ？」

葉月や亨に言われ、拓夜は迷いの口をようやく開いた。

「亨さんの言うことも分かるんスけど…でも、何で俺なんだろう…って。例えば大会で活躍したとかだったら、葉月とか先輩たちとか

の方が、キャリアはあるし…。それに、そんな実力者たちの中に放り込まれても…自分の実力を発揮できるかどうか…不安、なんです。でも、参加してみたい自分もいて…それでも、さっきの事が引きずっちゃって…」

拓夜は真剣に自分の心境を語った。

このプロリーグへの招待状は、自分の人生における分岐点である事は何となく分かる。

ただし、先に拓夜自身が述べたように期待と不安が入り混じり、答えが見つからないのだ。

以前、拓夜は結締とのデュエルの時に、自信がない事を指摘され、克服した。

しかし、今回のはまた少し違う。

仲間との協力もあり、邪神も倒せた。

北区最強チームのフィアーズにだって、仲間たちと一緒に勝てた。

しかし、思う。

自分なんかが“プロ”で良いのだろうか?と…。

プロ。

それは本来ならば、先輩たちである彼らがそう呼ばれるべきではないのか？

確かにトリティニー・チャンピオンシップに出場し、自分は勝った。

だが…。

「…俺、ホント…どうして良いか…。出たいけど…でも…」

その時

不意に白石が立ち上がり、拓夜の前に立った。

「ふぅん…何を躊躇う必要がある？何を恐れる必要がある？拓夜よ…以前、結締の奴に言われなかったか？自信を持てと！」

「ッ！？」

白石に言われ、ハッとなった拓夜は結締を見る。

彼は真剣な眼差しで自分を見、ただ黙っていた。

「そうです拓夜さん！初めてＯＣＧ研究会とデュエルした後、車の中で拓夜さんは言いました。“デュエルで一番になりたい”と…」

「白石さん…花穂…！！」

拓夜は目を閉じ、これまでの事を色々と思い返した。

ＯＣＧ研究会に入り、様々なデュエリストに出会った。

そして、様々なデュエルを見てきた。

様々なデュエルを経験してきた。

そうしてたどり着いた答えは、先ほど成瀬が述べた“デュエルで一番になる”という答えだ。

もちろん“楽しいデュエル”が前提だ。

ワクワクするような…

自分だけでなく

相手だけでなく

周りも全てが見て、驚いて、興奮するような…

そんな激しく、熱いデュエルを繰り広げ…
その中で、自分は一番になりたい！！

「ふぅん…拓夜よ、何か見えてきたようだな」

「…はい」

拓夜は頷く。
開いたその瞳には、先ほどまであった迷いという濁りは消えていた。

「白石さんや、花穂に言われて…何となくだけど、挑戦しなきゃ…
楽しいデュエルなんて出来やしない。ましてや、一番になんか…なれやしない！！」

拓夜の発言に、周りのメンバー等は微笑みながら頷いた。

「俺…決めた」

拓夜は立ち上がり、手にした一枚の券を掴み、宣言する。

「俺は、プロリーグに出場する!!　そして、プロリーグで…優勝してみせる!!」

「拓夜よ、よくぞ言ったァ!!」

白石は熱く吼えると、自分のデッキを取り出し、拓夜と対峙する。

「ならばッ、この俺とデュエルをしろッ!!」

プロ宣言をした拓夜を前に、白石は全身から凄まじい覇気を発する。

「これは貴様自身の試練と思え!!　プロの世界では、一瞬の油断が命取りとなる。プロになるという言葉は、口にするだけならば簡単だ。ならば次は、行動(デュエル)で示してみろッ!!」

白石からの熱き挑戦。

拓夜もそれに負けじと、白石に対して言い放った。

「はい！臨む所です！白石さん、俺とデュエルをして下さい！！」

「ふぅん…加減はせんぞッ、全力で来るが良いッ！！」

白石　ＶＳ　拓夜

二人の熱き戦いが今、始まろうとしていた。

挑戦（後書き）

この小説を読んで下さり本当にありがとうございます。

さて、次回は白石と拓夜のデュエルです。

なんか感想にあった「成瀬とリチュアって…」とか、「結締にも恋愛フラグを…」とかですが…

スイマセン。

今回の話では出せませんでした。

逆に考えてみて下さい！

“今回の話では”…という事は…

後は言わなくても分か（ｒｙ…

最近は仕事が半端なく忙しくなってきて、なかなか更新が進まず、申し訳なく思っております。

ですが、遅れた分…

皆さまが読んで、楽しめるような内容・展開を作り上げていくつもりですので、どうかよろしくお願いします。

それでは、今日はこのあたりで筆を置かせてもらいます。

失礼しました。

拓夜　ＶＳ　白石　（前書き）

ルールを守って楽しくデュエルしましょう。

拓夜　ＶＳ　白石

※

空が夕闇に沈もうとしていたその頃…。

東区の郊外にある西条亨宅、兼ＯＣＧ研究会事務所の前にて、白石直也と西条拓夜が対峙していた。

並々ならぬ闘志を発する二人を、結締智恭と成瀬花穂は真剣な面持ちで見守る。

ちなみに、西条亨と烏丸葉月の２人は来ていない。

部屋中に散らばったデュエル教室の資料を先に片付けるのだそうだ。

「ふぅん…拓夜よ！！　貴様がプロになると言うのであれば、この俺を乗り越えて行けェッ！！」

「言われなくても！！　臨むところだ！！」

ドドドドド…ッ！！

拓夜のプロデュエリストへの道を示す為の熱き戦い。

そのゴングが鳴り響いた。

『デュエルッ！！』

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／８０００

【後攻】白石直也
ＬＰ／８０００

「俺のターンッ、ドロー！！」

先攻を奪取した拓夜は早速、そのプレイを開始する。

「手札の魔法カード【トレード・イン】を発動！！」

【トレード・イン】
［魔法カード］
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「手札のレベル８のモンスター【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】を墓地に捨て、カードを２枚ドロー！！　モンスター１体をセットし、カードを１枚セット！！」

それぞれモンスターとリバースカードを１枚ずつセットする拓夜。

「ターンエンド！！」

「ふぅん…この俺に対して、様子を見るような行動に出るとは…ッ！！　一気に蹴散らしてくれるわッ！！　俺のタァーンッ！！」

白石のターンが開始され、カードをドローする。

「拓夜よ、覚悟するがいいッ！！　この俺の圧倒的火力を、魅せつけてくれる！！　手札の永続魔法【未来融合ーフューチャー・フュージョン】を発動ォ！！」

【未来融合ーフューチャー・フュージョン】
［永続魔法］
自分のデッキから融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、エクストラデッキから融合モンスター1体を選択する。発動後2回目の自分のスタンバイフェイズ時に選択した融合モンスターを自分フィールド上に特殊召喚する（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「俺が融合するのは【F・G・D（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）】！！　その融合素材はドラゴン族モンスター5体！！　よって俺は、デッキから5体のドラゴンを墓地へ送るッ！！」

※墓地へ送られたカード
?:レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
?:レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
?:真紅眼の飛竜
?:真紅眼の飛竜

?:ミンゲイドラゴン

「初手に未来融合…こりゃあ白石さん、熱血１００％だぜぃ…！！」

白石のプレイングに対して結締が呟く。

「更に俺はッ、手札より魔法発動ォ！！【ハリケーン】！！」

【ハリケーン】
［魔法カード］
フィールド上の魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「この効果によりフィールド上の魔法・罠を、全て手札に戻すッ！！」

「ッ！？」

白石のハリケーンが炸裂し、未来融合と拓夜の場の伏せカードが手

札に戻されてしまった。

「そして俺は再び【未来融合－フューチャー・フュージョン】を発動ォ！！　当然、俺が融合するのは【Ｆ・Ｇ・Ｄ】ッ！！」

再び未来融合を発動した事で、白石の墓地に計１０体のモンスターが墓地へと送られた。

※墓地へと送られたカード

？デルタフライ
？真紅眼の飛竜
？伝説の白石
？伝説の白石
？伝説の白石

「墓地に送られた3体の【伝説の白石（ホワイト・オブ・レジェンド）】のモンスター効果を発動する！！　デッキより【青眼の白龍】３体を手札に加えるッ！！」

【伝説の白石】

星１／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３００
ＤＥＦ　２５０
［効果・チューナー］
このカードが墓地へ送られた時、自分のデッキから「青眼の白龍」
１体を手札に加える。

「一気に…ブルーアイズを…3体も手札にッ！？」

速攻で墓地肥やしと手札補充を行う白石に、拓夜は思わず息を呑む。

「フハハハハッ！！　これで俺の手札は満たされた！！　拓夜よッ
！！　魅せてやろう！！　我が最強のしもべの美しき姿をッ！！」

白石はそう言うと、手札から1枚のカードを取り出し

「手札より【融合】を発動ォ！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札のブルーアイズ3体の魂を、今こそ1つに交えん！！　融ッ合召喚ッ！！」

ドドドドド…ッ！！

「爆誕せよッ！！【青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン）】！！」

【青眼の究極竜】
星12／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　４５００
ＤＥＦ　３８００
［融合］
「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」＋「青眼の白龍」

白石のフィールドに爆誕せし究極竜、アルティメット・ドラゴン。
その登場に拓夜だけでなく、デュエルを観戦する成瀬や結締までもが度肝を抜かされた。

「ア…アルティメット…ドラゴンッ！？」

「そんなッ！？　まだ白石さんのターンが始まって、最初のターンですよ！？」

「白石さん…殺る気７００％だぜぃ…！！」

圧倒的攻撃力４５００を誇るモンスターを前に、拓夜は表情を引き締める。

「行くぞッ！！　バトルフェイズ！！」

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

青眼の三つ首から強大なエネルギーが一点に凝縮される。

「アルティメット・ドラゴンで、拓夜の守備モンスターを攻撃ッ！！　アルティメット・バァーストォオ！！！！！」

「ッッ！！！？」

轟ッ！！

究極竜の放った一撃により、拓夜のセットモンスターは跡形もなく消滅してしまった。

「くッ！？　戦闘破壊された【キラー・トマト】のモンスター効果を発動！！」

【キラー・トマト】
星４／闇属性／植物族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１１００
［効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッ

キから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター1体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「このカードが戦闘破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター1体を、攻撃表示で特殊召喚する！！　来いッ【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　１４００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに1度しか使用できない。

拓夜のフィールドにダイヤモンドガイが特殊召喚された。

「ふぅん…後続を残したか。ならば俺はこのターンのエンドフェイ

ズ時、墓地の【真紅眼の飛竜】２体の効果を発動する！！」

【真紅眼の飛竜】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　１６００
［効果］
通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズ時に、自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、自分の墓地に存在する「レッドアイズ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「通常召喚を行っていないターンのエンドフェイズ時、墓地の【真紅眼の飛竜】をゲームから除外する事で、レッドアイズと名のつくモンスター１体を墓地より特殊召喚する！！　蘇れッ！！【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】！！」

ドンッ！！　ドンッ！！

【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】
星１０／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　２８００

ＤＥＦ　２４００
［効果］
このカードは自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター１体をゲームから除外する事で特殊召喚する事ができる。１ターンに１度だけ、自分のメインフェイズ時に手札または自分の墓地から「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

白石のフィールドに現れし、２体の【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】。

究極竜。

そして、真紅眼２体。

その圧倒的な展開に、拓夜は思わず見とれていた。

「ターンエンドだ…！！　拓夜よ、この俺のモンスターを前に、貴様がどのようなデュエルをするのか…魅せてみろッ！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００
［手札］
５枚
［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ
［魔法・罠］
なし

【白石直也】
ＬＰ／　８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
青眼の究極竜
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
［魔法・罠］
未来融合－フューチャー・フュージョン

圧倒的な展開を魅せつけた白石のターンが終了した。

そして迎える拓夜のターン。

拓夜のフィールドには、攻撃力１４００のダイヤモンドガイのみ。

拓夜はカードをドローする為に、デッキトップに指を添える。
よく見るとその指は、微かに震えていた。

「拓夜ちゃん…」

「拓夜さん…」

「どうした、拓夜よ？俺のドラゴンを前に臆したか？」

無理もない。

仮にもし、このまま白石の布陣を崩す事ができなければ、次の白石のターンで更にドラゴンが展開され、拓夜は一気に終わるだろう。

しかし…。

「俺がビビる？そうじゃない…！！　楽しいんだ！！　どうやったら白石さんのモンスターを倒せるか？どうやったらこの状況から逆転できるか？」

拓夜は言う。

自分の前に立ちはだかる、白石直也という試練に対して、ハッキリと言う。

「このドローで、更に逆転できる可能性が増えるんだ！！って思うと、スッゲーわくわくする！！」

「ふぅん…、武者震いというヤツか。面白い…！！」

拓夜の意気込みに対し、白石は笑みを浮かべながら腕を組み、気を引き締める。

「行くぜッ！！　俺のターンッ！！　ドローォオ！！」

気合い一閃。

拓夜がドローし、引き当てたカード。

それは…。

（…ッ！！　よし！！）

「手札の魔法カード【増援】を発動！！」

【増援】
［魔法カード］
デッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加え、デッキをシャッフルする。

「この効果で、デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を手札に加える！！　そして、フィールドのダイヤモンドガイの効果を発動！！」

ダイヤモンドガイの効果を発動し、デッキトップに指を添える拓夜。

「デッキの一番上のカードを確認し、それが通常魔法カードなら墓地へ送る！！　…よし！！　一番上のカードは、通常魔法【融合回収（フュージョン・リカバリー）】だ！！」

【融合回収】のカードを墓地へと送った拓夜。

「そして【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】を召喚し、効果発動！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン】
星４／風属性／戦士族
ＡＴＫ　１８００
ＤＥＦ　３００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカードを除く「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、フィールド上の魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して手札に加える。

「エアーマンが召喚に成功した時、このカード以外の［ＨＥＲＯ］の数だけ、フィールドの魔法・罠カードを破壊する！！　俺のフィールドには【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】がいる！！　よって俺は、白石さんの場の永続魔法【未来融合－フューチャー・フュージョン】を破壊する！！」

「ム…ッ！？」

ズゴゥッ！！

白石の発動していた未来融合が破壊された。

「行くぜ、白石さん！そっちが、ブルーアイズ３体の魂を交えるなら、俺は［ＨＥＲＯ］３体の魂をぶつけてやる！！　手札の魔法カード【融合】を発動！！」

白石に負けずと、拓夜も手札から【融合】の魔法カードを発動した。

「フィールドのダイヤモンドガイとエアーマン！！　そして、手札の【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】の魂を１つにッ！！」

カッッ！！

「融合召喚ッ！！　現れよッ！！【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】

！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　２５００
ＤＥＦ　２０００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター×３
このカードが融合召喚に成功したターン、このカードの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。融合召喚に成功したこのカードは、１度のバトルフェイズ中に３回攻撃する事ができる。このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事はできない。

拓夜のフィールドに、結締から譲り受けた新たなる切り札【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】が見参した。

「トリニティーだとッ！？」

「ブルーアイズの３体融合に対抗するにぁあ、ＨＥＲＯの３体融合ってか…！？　熱いねぇ…！！　やるじゃねぇか、拓夜ちゃん！！」

「【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】の効果発動！！　コイツが融合召喚に成功したターン、攻撃力は倍になる！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】
ＡＴＫ　２５００　↓　５０００
ＤＥＦ　２０００

爆発的な攻撃力を得たトリニティー。
拓夜は反撃のバトルフェイズを開始する。

「バトル！！　トリニティーで、白石さんの１体目のレッドアイズに攻撃ッ！！」

ズゴゥッ！！

「グォオッ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【白石直也】
ＬＰ／　８０００　→　５８００

白石のレッドアイズ１体目が破壊された。

「トリニティーは３回攻撃できるＨＥＲＯだ！！　続けてもう１体のレッドアイズに攻撃ッ！！」

ズドンッ！！

「ヌゥゥウッ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００

【白石直也】
ＬＰ／　５８００　→　３６００

「3打目ッ！！　トリニティーで、究極竜に攻撃ッ！！　トリニティー・クラッシュ！！」

バコォオッ！！

「ヌ〝ァ〝ァ〝ア〝ァ〝！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００

【白石直也】
ＬＰ／３６００　→　３１００

【青眼の究極竜】までもが破壊され、白石のフィールドはがら空きになってしまった。

ライフにも大きな差が広がり、デュエルの流れは一気に拓夜に傾いた。

「どうだ、白石さん！！　けっこう効いただろ！？」

してやったり！と、喜びを露わにする拓夜。

そんな拓夜を見て、成瀬は開いた口が塞がらないでいた。

それはまるで、信じられないものを見たかのような…。

思わず口から

「…凄い…です…」

白石のフィールドには、圧倒的な攻撃力を誇るドラゴンが3体も並んでいたのだ。

それを拓夜は効果破壊ではなく、戦闘破壊によって打ち砕いてみせた。

恐らく昔の拓夜のままでは、白石を相手にここまでのデュエルを魅せる事はできなかった筈だ。

成瀬自身、今の自分に白石を相手にしろと言われた所で、この様な展開に持っていける自信はない。

だが、拓夜はそれを見事に実現した。

それこそが、このデュエルに対する拓夜の想い。

それこそが、今までに培ってきた、拓夜の決闘者としての経験。

今の拓夜は、成瀬にとって無敵のヒーローのように感じられた。

拓夜なら、きっとこの勝てる。

拓夜なら、必ずプロになれる。

拓夜なら、絶対に一番になれる。

「拓夜さん…凄く、格好いいです！！」

白石を圧倒した拓夜はバトルフェイズを終了し、メインフェイズ２へと移る。

「リバースカードを１枚セットして、ターンエンド！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　トリニティー】
ＡＴＫ　５０００　↓　２５００

DEF　2000

※

【西条拓夜】
LP　8000
［手札］
2枚
［モンスター］
V・HERO　トリニティー
［魔法・罠］
伏せカード　1枚

【白石直也】
LP／3600
［手札］
3枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

モンスターも魔法も罠もない状況で始まった白石のターン。

「俺のタァーンッ、ドローォオ！！」

威圧感溢れる白石のドロー。

彼もまた、拓夜と同様に諦めてはいなかった。

カードをドローした白石はそのカードを確認すると、

「ふぅん…拓夜よ、貴様のプロに掛ける熱き想い！！　確かにそれは本物のようだ。ならば、ここからは互いに持てる力を全て出し切ろうではないかッ！！」

「ええ！！　臨む所です！！」

拓夜からの返事を、力ある笑みで頷く白石。

そんな彼は持てる力全てを出し切る為の、その第1枚目を発動する。

「手札より魔法カード【死者蘇生】を発動ッ！！」

【死者蘇生】
［魔法カード］
自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「蘇生の対象として選ぶのは、【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】ッ！！」

ドンッ！！

白石のフィールドにレッドアイズが特殊召喚された。

白石は早速、蘇生したレッドアイズの効果を発動する。

「【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】の効果により、墓地に眠るドラゴン族モンスター1体を特殊召喚するッ！！　蘇れッ！！【青眼の究極竜】ッ！！」

ドドドドド…ッ！！

「また…究極竜がッ！？」

白石のフィールドに並ぶ【青眼の究極竜】に【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】。

拓夜のフィールドにモンスターは、効果が切れた【Ｖ・ＨＥＲＯトリニティー】のみ。

攻撃力では、白石のドラゴンの前にはかなわない。

「ふぅん…拓夜よ、貴様に魅せてやる！！　ブルーアイズの究極にして、真の姿をッ！！」

「ッ！？」

ブルーアイズの真の姿。

白石のその言葉に反応し、拓夜の胸が熱くなる。

白石は手札から1枚のカードを掴み取り、天高く掲げた。

「フィールドの【青眼の究極竜】をリリースしッ！！　ブルーアイズよ！！　お前の本当の力を魅せつけてやれッ！！」

カッッ！！

「光臨せよッ！！【青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニングドラゴン）】ッ！！」

【青眼の光龍】
星１０／光属性／ドラゴン族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　２５００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「青眼の究極竜」１体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。このカードの攻撃力は、自分の墓地のドラゴン族モンスター１体につき３００ポイントアップする。また、このカードを対象にする魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする事ができる。

白石のフィールドに光臨せし、史上最強の龍。
全身から放たれる神々しい威光。
夕闇の空から降り注ぐ光の柱から降り立つその姿は、光龍の神聖さを際立たせていた。

「なっ…何だ、あのモンスターは…ッ!?」
「あれが…ブルーアイズの、本当の姿…!!」

拓夜に成瀬は、その姿に目を奪われていた。
そんな拓夜を、結締の言葉が現実に引き戻す。

「拓夜ちゃん!!」
「ッ!!」
「油断すんなよ?白石さんの【青眼の光龍】は、下手すりゃ神をも超えるモンスターだぜぃ?」
「ッ!?」

神をも超える。

その言葉に拓夜の表情が引き締められた。

「【青眼の光龍】は、墓地のドラゴン族モンスターの数だけ、攻撃力を３００ポイントアップさせる！！　俺の墓地には、ドラゴン族モンスターは１１体！！」

※白石の墓地モンスター

?:青眼の究極竜

?:レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン

?:青眼の白龍

?:青眼の白龍

?:青眼の白龍

?:伝説の白石

?:伝説の白石

?:伝説の白石

?:デルタフライ

?:ミンゲイドラゴン

?:真紅眼の飛竜

「よって、シャイニングドラゴンの攻撃力は、３３００ポイントアップ！！」

【青眼の光龍】
ＡＴＫ　３０００　↓　６３００
ＤＥＦ　２５００

「こッ…攻撃力６３００ッ！？」

圧倒的攻撃力を魅せつける白石は、怒涛のバトルフェイズへと突入する。

「行くぞッ！！　まずはレッドアイズ！！　拓夜の【Ｖ・ＨＥＲＯトリニティー】に攻撃ッ！！　ダークネス・メガフレァアッ！！」

ドゴォオオッ！！

「うわっ！！　くッ…！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００→７７００

【白石直也】
ＬＰ／３６００

白石のレッドアイズの攻撃で、拓夜のモンスターは破壊された。

そんな拓夜のフィールドには、１枚のリバースカードのみ残されていた。

「ふぅん…これで貴様のフィールドには、壁となるモンスターは消えた。受けてみろッ！！【青眼の光龍】の攻ッ撃ッ！！」

ゴゴゴゴゴ…ッ！！

シャイニングドラゴンの口元に、聖なる光の粒子が一点に凝縮されていく。

このままではマズい。

そう判断した拓夜は、自分の場に伏せてある1枚のリバースカードを掴みとった。

「ッ！？　リバースカードオープンッ！！　永続罠【リビングデッドの呼び声】を発動！！」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

「この効果で、墓地の【キラー・トマト】をー！」

「ふぅん…甘いぞ拓夜ッ！！」

「ッ！？」

拓夜が墓地からカードを取り出そうとした直後、白石の声が割り込

んだ。

「俺は貴様のリビングデッドにチェーンし、手札より速攻魔法【サイクロン】を発動するッ！！」

【サイクロン】
［速攻魔法］
フィールド上の魔法または罠カード1枚を破壊する。

「そして、貴様のリビングデッドを破壊ッ！！」

ズガァッ！！

「くっ！？」

拓夜の守りの要として伏せていた【リビングデッドの呼び声】が破壊された。

これでは白石のシャイニングドラゴンの攻撃に対し、後続モンスターを呼び出す事ができない。

「俺を甘く見るなよ？この俺に、その様な小細工は通用しないッ！！　行けェ！！　ブルーアイズよッ！！　シャイニング・バァーストォオッ！！！！」

カッッ！！

白石が攻撃宣言した直後。

シャイニングドラゴンの口から眩い光のエネルギーが、一瞬にして解き放たれた。

解き放たれたその一撃は拓夜を貫き、少し遅れて爆発音が鳴り響いた。

ズドドドドド…ッ！！

「ッ！？　うわあぁあぁあぁあッッ！！！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／　７７００　→　１４００

【白石直也】
ＬＰ／　３６００

ソリッドヴィジョンとはいえ、シャイニングドラゴンの攻撃を受けた拓夜は全身から一気に血の気が引いた。
それだけ、シャイニングドラゴンの一撃が凄まじかったのだ。

（俺のライフが…一気に１４００に…ッ！？　たったの一撃で、ライフを逆転された…！！）

拓夜の中から余裕が消えた。
今まではワクワクするような、楽しい、と言えるだけの気持ちの余裕があった。
しかし、頬を伝う汗からは、寒気しか感じられない。

胸の動悸からは、焦りしか感じられない。

そんな拓夜を前に、白石は

「俺のターンは終了だ！！　さぁ、拓夜よ！！　貴様の全力を魅せてみろッ！！」

「くっ！？」

自分のターンが訪れ、拓夜は腕に装着された決闘盤を見つめる。

（ヤバい…やっぱ、白石さんも半端ねぇくらいに強い…！！）

以前に烏丸葉月と西条亨のデュエルを観て。

以前に結締智恭とデュエルをして。

そして今回、白石直也とデュエルをして。

ＯＣＧ研究会、その総称たる３人の決闘者は、やはり強かった。

（俺にも…できるだろうか…？）

あの３人のように、強くなる事ができるだろうか？

（でも…強くならなきゃ…駄目なんだ！！　プロになって、１番になるには…）

１番になるには…。

楽しいデュエルをするには？

ワクワクするようなデュエルをするには？

何よりもまず

（強くならなきゃ、何も始まらねぇじゃんかよッ！！）

窮地に追い込まれた拓夜が見いだした答え。

それは、勝利への渇望。

「頼んだぜ…俺のデッキ！！」

そう呟いた拓夜は、デッキトップのカードを力強く握る。

このドローで、白石を倒す為に。

白石が魅せたように、自分の力を全て出し切る為に。

拓夜の勝利への渇望のターンが、今はじまる。

「俺のターンッッ！！　ドローォオッッ！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ　１４００
［手札］

3枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

【白石直也】
ＬＰ／３６００
［手札］
1枚
［モンスター］
青眼の光龍
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
［魔法・罠］
なし

始まった拓夜のターン。

このデュエルでの勝利を望む拓夜の手札に舞い込んだカード。

それは…。

「ッ！？」

（よし…！！　このカードならイケる！！）

拓夜の口元が不敵に笑みを浮かべる。

「行くぜ、白石さん!!　そのカード（青眼の光龍）が白石さんの魂（最強モンスター）なら、俺の魂（最強モンスター）で倒してみせる!!」

拓夜の雰囲気が変わった事を察知した白石。

この状況を打破する手札でも揃ったのだろうか？

しかし、それならばそれで

「ふぅん…面白いッ!!　魅せてみろ、拓夜ッ!!」

「…行くぜ、前のターンにダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた【融合回収】の効果発動!!」

【融合回収】
［魔法カード］

自分の墓地に存在する「融合」魔法カード1枚と、融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える。

「この効果で、墓地にある融合召喚に使用した【融合】の魔法カードと、その内の融合素材モンスター1体を手札に加える。俺が手札に加えるモンスターは【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】！！」

【融合】と【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】のカードを手札に加えた拓夜。

更に…。

「そして魔法カード【戦士の生還】を発動！！」

【戦士の生還】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択して手札に加える。

「コイツで、墓地の【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】を手札に加える

！！　これで、俺の手札は整った…！！」

手札を補充し、拓夜の最強モンスターを召喚する為の召喚条件が整った。

自分の全ての力を出し切る為の、その1枚を。

拓夜は力を込めて発動した。

「手札より、魔法発動！！【融合】ッ！！」

「ッ！！」

「手札の【Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ】と【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】の2体を融合し…来たれ、最強のＤッ！！」

カッッ！！

「融合召喚ッ！！　現れよッ！！【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】ッ！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ　３０００
ＤＥＦ　３０００
［融合／効果］
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

ドドドドド…ッ！！

血色の二翼を大きく広げ。

右の手には全てを切り裂く巨大な剣。

左の手には全てを葬（ほふ）る巨大な竜の顎。

そして胸には全てを威圧せんかの如く、竜の眼光を輝かせ。

全てを終焉へと誘う、最強にして最後のＤ。

拓夜の最強にして、拓夜の最も信頼するモンスター。

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】が参上した。

「【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】…しかも、攻撃表示…だと…？」

「ああ…コイツが俺のデッキ、最強のモンスターだ！！　コイツに秘められた力で、白石さん！！　アンタを倒すッ！！」

怪訝な表情を作る白石に拓夜はそう宣言すると、

「【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】の効果ッ発動ォ！！　このターンのバトルを放棄する代わりに、相手モンスター１体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手に与える！！」

白石のフィールドには、攻撃力６３００を誇る【青眼の光龍】。

そして、攻撃力２８００の【レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン】がいる。

【西条拓夜】
ＬＰ／　１４００
【白石直也】
ＬＰ／　３６００

このターンで決着をつけようものならば、拓夜の選択肢はひとつ。

「俺が破壊の対象として選ぶのは…ッ【青眼の光龍】！！」

拓夜はビシッと、白石の【青眼の光龍】を指差した。

この効果が決まれば、白石のシャイニングドラゴンは破壊され、一気に６３００ものダメージを与える事ができるのだ。

「これが決まれば、拓夜さんの勝利です！！」

はしゃぐ成瀬の隣では、結締が険しい表情で見つめていた。

そして同じく

白石も険しい表情で、拓夜のプレイを見ていた。

「行けッ【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】！！　【青眼の光龍】を破壊しろッ！！　インビシンブル・Ｄ！！」

Ｄ－ＥＮＤの左手。

竜の顎から、全てを破壊する光線が放たれた。

その一撃は白石の【青眼の光龍】に直撃し、大爆発を起こした。

チュドゴォォオオ…ッ！！

直撃した手応えを感じた拓夜は喜びの余り、拳をグッと握り

「これで白石さんのシャイニングドラゴンは破壊され、白石さんに６３００のダメージが入った！！　このデュエル、俺のｰｰ」

「ふぅん…悪くない戦術だが、相手が悪かったな？」

「…えっ！？」

白石の言葉に拓夜だけでなく、成瀬も同じように動揺した。

【白石直也】
ＬＰ／３６００　↓　３６００
［手札］
１枚
［モンスター］
青眼の光龍
レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン
［魔法・罠］
なし

「なッ！？　なんで…！？【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】の効果は、決まったはずなのに…！？」

白石のフィールドに未だ君臨する【青眼の光龍】。

白石は、動揺する拓夜に向かって言い放った。

「言ったはずだ！！　この俺に、小細工は通用しないとッ！！【青眼の光龍】の効果ッ、シャイニング・フレア！！　このカードを対象とする魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にする事ができるッ！！」

「そんな…ッ！？」

「力で圧せそうにない相手には効果で対処する…それは間違いではない。だが、今回のようにそれが通用しない場合、貴様はどう対応する？」

「…ぅ…っ！？」

言われた拓夜は、視線を手札に落とす。

【ゾンビキャリア】
【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
【異次元からの帰還】

（ぅっ！？　この手札じゃ…）

自分にはまだ召喚権は残されている。

しかし、頭の中でいくらシュミレートをしても、次のターンで白石が…。

打つ手がない。

そんな状況に、拓夜は手札を握る手に力が入る。

何もできない。

その現実が、悔しさが、拓夜の体を震わせる。

「俺は…ッ……」

奥歯をギッと噛み締め

悔しさから震える拓夜は

「……ターン…ッ……エンド」

「…ふぅん、ならば…俺のターンッ！！」

拓夜のターンが終了し、白石のターンが訪れる。

拓夜のフィールドには、攻撃表示での【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】のみ。

「バトルッ！！【青眼の光龍】よッ！！【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】に攻撃ッ！！」

白石の攻撃宣言。

そして、【青眼の光龍】の攻撃が【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】に炸裂し

「ぐっ！！　ぁぁあああああッッ！！？？」

【西条拓夜】
ＬＰ／１４００　↓　０

【白石直也】
ＬＰ／３６００

凄まじい爆発と共に、拓夜のモンスターが消えていく。

白石直也と西条拓夜のデュエル。

2人のデュエルは、白石の勝利に終わった。

※

西条拓夜は敗北した。

地に膝をつき、放心する拓夜。

「……」

そんな拓夜の前に、彼の対戦相手だった白石が立つ。

「ふぅん…何を呆けている？拓夜よ、今のデュエルで、お前には何が見えた？」

「…俺が…見えた…もの…」

白石とのデュエル。

その最中、拓夜はある気持ちに気付いていた。

楽しいデュエルをする為には？

ワクワクするようなデュエルをする為には？

そして何より、プロで1番になる為には？

「…俺は…悔しかった…！！　持てる力を出し切っても…白石さんに、勝てなかった…！！」

悔しい。

それは、特別な者しか感じる事ができない感情。

本気で、真剣に、真面目に物事に取り組んだ者にしか、決して得る

ことのできない感情。

「悔しい…か。ならば拓夜よ、次にお前はどうする？」

白石は言う。

まるで自分が経験したことがあるかのように、白石は拓夜に言う。

「お前の経験してきたデュエル道など、まだ入り口だ。世界には、まだ未知のデュエルがある。見えるはずだ…果てなく続く、闘いのロードがッ！！　なのにお前は、ここで立ち止まるのか？」

白石に比べれば、確かに自分はまだまだ経験は浅い。

それに、まだ自分の知らないカードが、デュエルがあるのも事実だ。

そして、自分に示されたプロという道。

しかし、自分は白石に負けた。

だからといって、ここで…

「立ち止まるもんかっ！！」

拓夜は立ち上がる。

そうだ、こんな所で立ち止まるわけにはいかない。

自分の夢は、デュエルで1番になること。

そのデュエルの中でワクワクするような、互いにやって、楽しいと思えるようなデュエルをする事だ。

拓夜の瞳に、再び輝きが戻る。

「そうだ！己がデュエルを、己のデッキを信じて進めッ！！」

白石は豪語する。

真剣に、拓夜の為を想い、拓夜の力になると信じて。

「負けを恐れれば、立ち止まるしかない。負けて勝てッ！！　西条

拓夜ッ！！」

「はいッ！！」

力強く頷く拓夜。

もう大丈夫だ。

拓夜ならばきっと、己が夢を叶えることができる。

白石は満足そうに笑みを浮かべ、高笑いしながら帰っていった。

拓夜　ＶＳ　白石　（後書き）

この小説を読んで下さり、本気にありがとうございます。

さて、今回の話はいかがでしたでしょうか？

拓夜　ＶＳ　白石

今回の話を書くにあたって僕が意識したことは、“経験”です。

拓夜と白石には、大きな違いがあります。

使うデッキとか、そういったことではなく、もっと根元からの違い…

人生における経験。

デュエルしてきた経験。

白石は拓夜に比べれば、人生やデュエルの先輩として、様々な経験をしてきております。

そして、拓夜はこれからの人生として、進むべき道を決めました。

プロになる、という道です。

その道は果てなく厳しい道です。

口では、プロになる！というのは簡単です。

今回の白石は、プロになるという道の険しさと厳しさを、デュエルをもって拓夜に教えた、とも取れます。

教え導く存在。

それが、僕の中でのＯＣＧ研究会の先輩たち三人のイメージです。

それが上手く伝わればな…、と思います。

今回の話で思ったことや、疑問に感じたこと等ございましたら、ご意見の方をよろしくお願いします。

それでは、今回はこの辺りで…

失礼しました。

受け継ぎし力、新たなる目覚め

※

東区の駅前には大勢の人が行き交っている。

駅前の大通りに入り、中町を少し行った先に、一件のおもちゃ屋が建っている。

その名は「サプライズ」。

今日も沢山の子供たちが一階の店内で賑わう中、二階の窓から顔を覗かせて街並みを眺める一人の青年がいた。

窓枠に肘をつき、小難しい表情を作るその青年、西条拓夜は、先日のデュエルの事を思い返していた。

自分が所属するＯＣＧ研究会の先輩、白石直也との本気のデュエル。

拓夜は白石の召喚した【青眼の光龍】の効果が分からなかった事により敗北した。

その際、白石に言われた言葉…。

（己がデュエルを、己が信じた道を進めッ！！）

自分の信ずる、自分だけのデュエル…。

自分の信ずる最強モンスター【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】。

それを活かす為の、速攻の融合戦術。

それが自分の信ずるデュエル。

それが白石には通用しなかった。

敗因は分かっている。

ならばそれを克服する為に、自分がとるべき行動とは何か？

すると、拓夜の部屋のドアがノックされ、一人の少女が入ってきた。

「拓夜さん、入りますよ？」

「ああ、どう…ぞ…ッ！！」

ひょっこりとドアの隙間から顔を覗かせたのは、拓夜の彼女である成瀬花穂であった。

背中まで届く位の黒く長い髪を翻しながら、やや大きめの襟元が開いた白いセーターを可愛く着こなす。

セーターの裾からはデニムのショートパンツ。

そこから伸びる華奢な太もも、膝やや上までの黒のニーソックス。

振り向いた拓夜は、成瀬のその絶対領域に思わず見とれてしまっていた。

「……」

「拓夜さん、どうかしたんです？」

「い、いやっ…何でもない！！」

自分の彼女に見とれていた拓夜は気を取り直し、改めて成瀬を出迎えた。

「いらっしゃい、花穂。で…早速なんだけど、例のモノは持ってきてくれたのか？」

「はい。ちゃんと用意してきてますよ。どうぞ！」

成瀬から手渡されたモノ。

それは…

「ヴァリアブルブック…サンキューな、花穂！」

「いえ、私はそれらの本は全部読んでありますから…」

ヴァリアブルブック。

それは遊戯王カードのカタログ本である。

トリティニーグループが出版するこのヴァリアブルブックには、今までに販売されてきた遊戯王カードが全て掲載されているのだ。

拓夜は今の自分に足りないモノを補う為に、成瀬にこの本を依頼したのだ。

今の拓夜に足りないモノとは、すなわち…

「俺は前の白石さんとのデュエルは、カードの効果を知らなかった

から負けたんだ。だったら、この本を読んで…俺はデュエルについての足りない知識を補う！」

「拓夜さんはプロになるんですから。プロがデュエル中に…なっ、何だあのカードは！？　とか言ったら、みっともないですから！」

「だよな…」

成瀬の言葉に受け答えしながら、拓夜はヴァリアブルブックを開き、早速その内容に目を通していく。

「ぉぉ…スゲー！！　沢山カードが載ってるぜ…！！　おっ、こんなカードまであるんだ！！」

まるでサンタクロースからプレゼントが貰えた子供みたく瞳を輝かせる拓夜。

そんな拓夜を成瀬は鞄からとあるデッキを取り出して呼び止めた。

「あの～拓夜さん、私からもお願いがあるんですが…？」

「？」

成瀬からのお願い。

いったい何なのか不思議に思った拓夜は、ヴァリアブルブックの件もあるので、二つ返事で答えた。

「なんだ？この本のお礼もあるし、何でも言ってくれ！」

何でも言ってくれ！

拓夜のその言葉を待ってました！！　と言わんばかりに、その瞬間、成瀬の眼光が鋭く光る。

「はい。実は、このデッキなんですけど…」

そう言い、拓夜の前にデッキを広げる成瀬。

拓夜は目の前に広げられたカードを見て、思わず声を出した。

「これって…っ!?　確か、ツィスカって奴が使ってた…!!」

「はい…リチュアです。亨さんが邪神を沈静化させた事で、その呪縛から解かれたみたいで…せっかくですから、私が使わせて貰おうと思って!」

「確か…リチュアって、儀式召喚が主体のカードたちだよな?」

「そうです!ですが…私は儀式関係のカードは持ってなくて…。ですから、拓夜さんのお店で、儀式関係のカードを買ってもらおうと思って!」

「へぇ…わざわざ俺ん家の店で買ってもらおう……え?買って“もらおう”?」

だれに?

え、まさか…?

と言いたげな拓夜を察して、成瀬はニッコリと微笑みながら頷いた。

「拓夜さん。そのヴァリアブルブック…見ての通り、一冊や二冊じゃないんですよ?ここまで運んでくるのに、かなり重たい荷物をか弱い女の子が一人で運んできたんです。拓夜さんは優しい人だって、

私は信じてますから！そんな私の労力を労うようなことを、拓夜さんは体を張って応えてくれるって、私はちゃんと理解してるつもりです！」

「ちょっと待て！？　それだと俺は体は張っても、俺の財布は萎んじまう！！」

「大丈夫ですよ、拓夜さん。私はその事も、ちゃんと理解してるって言ったじゃないですか！」

何が何でも拓夜にカードを買ってもらう気でいる成瀬に、拓夜は軽く溜め息をついた。

「なんかお前…強引な所が葉月にソックリになってきたな…」

「葉月さんには、いつもお世話になってましたから！」

何をどう吹き込まれたかは知らないが、とどのつまり、この二人の関係の主導権はどうやら成瀬にあるみたいだ。

きっと何を言ったところで、成瀬は自分の意見をのらりくらりと避わし、我を押し通すに違いない。

自分への対処方として余計な情報を与えた葉月を恨めしく思う最中、

成瀬は拓夜を引っ張って店へと向かい突き進む。

「ささ、行きましょう！拓夜さん！」

「うぅ…っ、ぇえい！！　こうなったらやけっぱちだ！！　花穂の好きな分だけ買ってやる！！」

結局、

買い物終了後の拓夜の財布の中には、十円玉が三枚しか残らなかった…。

※

烏丸葉月は西条亨宅へ遊びに来ていた。

言い方を変えれば押し掛けにきていた。

しかし、部屋の中には現在、烏丸葉月ただ一人だけである。

ベッドに寝転がる葉月は天井を見上げながら、溜め息混じりに呟い

た。

「…遅い」

二時間ほど前…。

初めは一緒に過ごし、色々と話を聞いてもらったりしていたのだが、その途中で彼の携帯電話に一本の着信が入り…

「今度の仕事（デュエル教室）の打ち合わせが入ったから仕方ないってのは分かるケド…」

ぷくぅっと頬を膨らます葉月。

ただ待っているだけではつまらない。

待っている間に、彼の部屋を色々と漁ろうかともしたが、それは道徳心が押さえて直ぐに止めた。

やる事がない為、結局は彼のベッドの上で待ちぼうけ…。

「なるべく早くに帰ってくる、って言ったのに…ああッもう！！」

『そんなにカリカリしないの、葉月のお姉ちゃん！良い女は、そういう気持ちをぐっと堪えて、健気に待ってあげる人の事を言うんだよ？』

「いッ！？　って、なんだウィンダか…急に話し掛けてきて、びっくりさせないでよ」

突然聞こえてきた声、カードの精霊であるウィンダの声に驚いた葉月は、部屋の隅に置かれたデッキの中から、彼女のカードを抜き取った。

「でもアンタ、良い女は健気に待つって言ったケド…どこでそんな言葉を覚えてくるのよ？」

『え？だって、ガールのお姉ちゃんはいつもそうやって、お兄ちゃんを待ってたし…え、世間じゃ違うの？』

「いや、違わないんだろうけど…」

さも当然のように尋ねてくるウィンダに、葉月はなる程…と納得した。

恐らくウィンダが言うように、マナことマジシャン・ガールも今の自分と同じように、こうして彼の帰りを待っていたに違いない。

それをずっと見てきた故の発言なのだろう。

しかし、彼女は彼女。

自分は自分だ。

恥ずかしい話、ただじっとして待つなど、自分にはできない。

「でも私には無理ね…ただじっとして待つなんて」

『えぇ～、それじゃあお姉ちゃん、良い女じゃなくなっちゃうよ？』

「フッ、まだまだ甘いわねウィンダ…。私くらいの女になるとね、“良い女”なんてレベルはとうに越えている訳よ」

『おぉ！！　……あ、お兄ちゃん。帰ってきた』

「“良い女”を越えた女…そう、私は“最高の女”なの！！」

「は？最高に…イイおんな…？」

「そう！行動力がある中に相手を尊重、思いやる気持ちを持つ私は、まぁ自分で言うのも何だけど最高に良い女だと思うわ！そこで私は

閃いた!!　亨さんはきっと、仕事で疲れて帰ってくるから、帰ってきた時にご飯とかお風呂とか用意してあると、凄く喜ぶと思うのよ!?　どぅ、ウィンダ?アンタもそう思わない?」

『うん。良いと思うケド…お兄ちゃんはどう思う?』

「ああ…俺は別に構わないよ」

「でしょ!?　だったら亨さん、ご飯にする?それともお風……」

くるっと振り返った所で葉月は止まった。

それと同時に彼女の全身から夥しい勢いで脂汗が噴き出してくる。

顔は気恥ずかしさから真っ赤っかだ。

「ってッッ!!　何でアンタがここに居るのよーーーッッ!!」

「いや、だってここ俺の部屋だし」

恐らく自分が熱を入れて語っていた時に帰ってきたのであろう、西条亨はどこか気まずそうに頭をポリポリと掻いていた。

あんな台詞は本人がいないからこそ言える台詞であって、本人に聞かれたとなっては葉月の頭はパニックだ。

どことなく、互いに恥ずかしさや照れから、気まずい空気が漂う。

変に緊張してしまった葉月。

そんな葉月の緊張を解そうと、亨は思い付いた事を口にしてみた。

「でも烏丸さん。ご飯や風呂も良いけど、もう一つ！最高に良い女に足りないモノがある」

「…え？」

思わずキョトンとなる葉月を前に、亨は真剣な表情で

「こういったシチュエーションの時は、裸エプロンで出迎えながら、…ねぇアナタ、ご飯にする？お風呂にする？それとも……ワ・タ・シ？ってな感じに」

「そんな恥ずかしい真似なんて出来るかぁぁああ！！」

「そげぶっ！？」

葉月の見舞った平手打ちが炸裂し、亨は見事なトリプルアクセルを決めながら着地失敗した。

そんな二人の様子を見ながら、ウィンダはヤレヤレと肩をすくめた。

※

拓夜や成瀬。

葉月や亨たちがそんなこんなしていた頃…。

カランカランッ…！！

夕暮れ。

東区の外れにある神社の鐘が鳴る。

神社の境内の前には、どこか思い詰めた表情をしていた結締智恭の姿があった。

敷地内には彼一人、両手を合わせて静かに目を閉じている。

５分…１０分が過ぎた頃、結締はようやく顔をあげた。

顔をあげたその表情は、まだどこか悩ましげな雰囲気を帯びていた。

「……」

何も言葉を発する事もなく、その場をあとにしようとしたその時、
彼の背後から

「もし、そこの御方…」

急に呼び止められた結締は歩みを止め、顔だけ声のした方を振り向いた。

そこには、いつの間に立っていたのであろうか。

黒く長い艶やかな髪。

聴くものの気持ちを和らげるかのような、透き通った声。

端整な顔から成る落ち着いた雰囲気の笑顔。

白、赤を基準とした綺麗な巫女装束を身に着けた、一人の女性が立っていた。

「お客様…ここの所、毎日のようにこの神社に通われておりますが…何かお悩みでも？」

「……」

「わたくしで宜しければ、お話をお聞き致しますよ？」

ニコリと微笑むその女性に一瞬だが見とれていた結締。「…ここに通ってるのをって知ってる？…ってか、だれ？」

自分で口にして結締は思う。

毎日？見られてた？自分の知らない場所で？

もはやプライバシーもへったくれもあったもんじゃない。

尋ねられた巫女装束の女性は、整った笑顔を崩すことなく、綺麗な動作で一礼した。

「申し送れました。わたくしは高円寺楓と申します。この神社で巫女を勤めております」

「何だ…ここの神社の人か」

どうやら怪しい人物でない事にホッと一息ついた結締は、気を取り直して高円寺楓に尋ねてみた。

「いやしかし、まさかこの神社にこんな美人な巫女さんがいるなんて知らなかったぜよ。そんで巫女さん、俺の悩みを聞いてくれるんだったよな？」

「ええ、わたくしで宜しければ…」

「実は彼女募集中でな…ちょうど巫女さんみたいな美人さんを探してた所なんだぜぃ」

「えっ…！！」

愛想笑いしながら茶化す結締。

それに対し、楓は本気に受け止めてしまった様で、途端に顔を真っ赤にしてしまった。

「そんな…っ、いきなり…困ります…！！」

「あぁあちょっ、今のは半分は冗談のつもりで聞いただけで、マジで受けられてもこっちも困るっつーか…！？」

「…冗談？アナタ様は冗談で女性を口説かれる方なのですね…！！」

「い〝っ！？　違ッ…だからアレはダメ元で聞いてみただけで、まかさそんな初々しい反応されるたァ思ってなかったからであって…ってか、それはソレ、これはコレ！！　今から俺が真剣に悩んでた事を話すから！！　だからそんなジト目で見ないで欲しいぜぃ」

思わずあたふたとする結締。

すると、彼の慌てふためく様子が可笑しかったのか、楓はそれまでの表情から一転し、クスリと可愛らしい笑みを浮かべた。

「フフフ…、分かっておりますよ」

「へ？」

「アナタ様は誰かの為に、毎日お祈りを掲げるような優しい方…。わたくしの方も、少しおちゃらけてみました」

テヘ、と軽く舌を出すその仕草に結締は呆気にとられてしまった。

そんな結締に楓は

「お茶を用意して参ります。其方の椅子に掛けてお待ち下さいませ」

「ぁ、ああ…」

そう言い建物の奥へと消えていく楓を見ながら、結締はポツリと呟いた。

「な～んか調子が狂うぜぃ…」

いつもならば、自分が相手を茶化して会話の流れを掴んでいく筈が、どうも楓には通用しない。

むしろ一杯食わされた気分だ。

しかし、それにしても…と、結締は思う。

「…結構な、いや…かなりの美人さんだったな」

なにはともあれ、自分の悩みを聞いてくれるらしい。

結締は楓に言われた敷地内の長椅子に腰掛け、夕焼けの東区の空を仰ぎ見た。

※

「ところで烏丸さん、新しいデッキを作ってみないか？」

「デッキ？」

話は唐突だった。

二人してお茶を飲みながら会話していた最中、亨が葉月に提案してきたのだ。

「なによ急に…、いったいどうしたって訳？」

「ああ、実は…ウィンの事なんだが」

「ウィンダ…？」

亨はそう言うと、以前に葉月と対戦した事のある【ガスタ】のデッキを取り出した。

「俺や結締、そして白石の三人は、もう何日かしたらデュエル教室の関係で中々ここには帰って来れなくなる。そうなると、ここにはウィン一人だけが残されてしまう」

「え、でも…途中には帰って来るんでしょ？落ち着いた休みとかで帰って来れるのって、いつ頃になるの？」

「全国を周り終えるのに半年はかかる…」

「そんなに…っ」

白石が無闇やたらと仕事を引き受けてしまったが為の事情である。

「だから烏丸さん。このデッキを、君に託そうと思っている」

「…えっ！？」

亨の言った言葉の意味を理解するのに、葉月は一瞬の時間が掛かった。

デッキを託す？

誰に？

私に？

「で、でも…そのデッキは…っ、というより、亨さんが持ち歩けば良いじゃない！？　そうすれば、ウィンダだって一人ぼっちじゃなくなる訳だし…」

「まぁそうなんだが、これはウィンからの提案なんだよ」

「ウィンダから…？」

葉月は視線をウィンダのカードに向ける。

ウィンダは自分で言うのが恥ずかしいのか、代わりに亨が代弁して話した。

「君は、ウィンの声を聞く事ができる数少ない人だ。今までウィンは、俺を通してでしか話す事ができなかった。けど、君は違う。烏丸さんは、この人間界での…ウィンにとっての初めて言葉を交わす事ができた人なんだ。だから、烏丸さんにはウィンの友達として、受け入れて欲しい」

そう言い、亨は葉月に向けてガスタのデッキを差し出した。

差し出されたデッキを見つめながら、葉月は思う。

そして思った事を、肝心のウィンダ自身に尋ねた。

「…ウィンダ。アンタはそれで良いの?亨さんからの言葉は聞いたわ。けど私は、アンタの口からちゃんと聞けなきゃ、納得しない」

『…お姉ちゃん』

どう言えば良いのか悩むような声をあげるウィンダに、葉月は安心させるような口調で優しく語りかけた。

「ウィンダ…別に私は怒ってる訳じゃないのよ？大丈夫。だから、アンタの素直な気持ちを話してくれない？」

『…私は……』

葉月の言葉から、彼女の想いを感じたウィンダは、徐々に、徐々にと、自分の気持ちを打ち明けた。

『私は…お姉ちゃんと一緒に居たい。その…お兄ちゃんとも一緒に居たいけど、でも…お姉ちゃんも、お兄ちゃんと同じくらい好きだから…だから…！！』

「…そう」

ウィンダの口から聞くことができた、彼女の本心。

葉月はそう呟くと、ウィンダのカードが組み込まれたデッキを受け取り

「じゃあウィンダ、改めて…これからもよろしくね！！　頼りにしてるわよ！！」

「お姉ちゃん…っ、うんっ！！」

新たな力（デッキ）を手に入れた葉月。

すると、そんな葉月の前に亨から1枚のカードが差し出された。

「烏丸さん。ウィンダのことを、よろしく頼む」

「ええ。けど…なに、そのカード？」

亨が差し出す1枚のカードを見て尋ねる葉月。

ウィンダの他にも、まだ自分に預けるカードでもあるのだろうか？

「ウィンの事でのお礼って訳じゃないが…烏丸さんにはこのカードも受け取って欲しい」

どうやら自分に預けるのではなく、お礼としての気持ちらしいそのカード。

葉月は首を傾げながらそのカードを受け取った。

「いったい何のカードを……っ！？　と、亨さんっ、このカードは…！！」

受け取ったカードを見て、葉月は思わずそのカードを亨に突き返した。

しかし、伸ばしたその手に握られたカードを、亨は受け取ることなく、静かに首を横に振った。

「何でこのカードなのよっ！？　だってこれは、亨さんのーーー」

「良いんだ烏丸さん。そのカードは、ウィンを扱う君に持っていて欲しい。ガスタの風の力を、そのカードを通して…君に託すよ」

やんわりとした口調の中に秘められた、彼の固い想い。

ここ何日かの交際を通じて知ったが、こうなった亨は自分にも負けず劣らずの頑固な部分がある。

恐らく自分が何を言ったところで、彼はこのカードを自分に渡すのだろう。

「…分かった。分かったわよ」

葉月はやれやれとした口調で引き下がる。

そして手にしたガスタのデッキと、1枚のカードをギュッと握り

「じゃあ遠慮なく、このカードは私が使わせてもらうわ。絶対に亨さんよりも、上手に使いこなしてみせるんだから！！」

そう言う葉月に亨は微笑みながら頷く。

すると、葉月にある変化が訪れた。

葉月の手に握られたガスタのデッキが、淡い緑色に光り輝きだしたのである。

「えっ！？　な、なによコレ！？」

突然の現象に驚く葉月。

しかし、それとは対照的に亨は落ち着いた素振りで葉月に話し始めた。

「…それは烏丸さん、ウィンから君への想いの輝き（ちから）だよ」

「想いの…！？」

「ああ。君も、俺や結締や白石と同様…、精霊界の加護を得たデュエリストって事さ」

※

同時刻…。

拓夜の店でカードを揃えた成瀬は、拓夜の部屋でカードを選び合わせていき、遂にデッキを完成させた。

「私のリチュアデッキ、完成です！！」

喜びの声をあげる成瀬の手には、４２枚のデッキが。

元々このリチュアデッキは、ツィスカが使っていたデッキである。

一つのデッキとしては組みあがっていたのだが、成瀬は一度このデッキを解体した。

そのまま使用しては、それはツィスカの戦術となってしまうからだ。

邪神の呪縛から解放された今、リチュアたちは自分の手で組んでみたい。

組みあげたこのデッキで、拓夜が目指すような…

互いにやって、互いに楽しいと思えるようなデュエルをしたい。

その一心で組みあげたのだ。

「やったな花穂！！」

「はい。カードが揃ったのも、拓夜さんのおかげです！！　ありがとうございます！！」

成瀬がデッキを作った事で、それを手伝った拓夜も彼女と同様に嬉しく思っていた。

財布のダメージはかなりデカいが、彼女の笑顔でそれは直ぐに帳消しだ。

そんな拓夜は意気揚々と自分のデッキを取り出し

「花穂、デッキがでっきた事だし、俺とデュエルしようぜ？」

「……」

（うぁぁぁ…やっちまったぁぁぁ…ッッ！！）

拓夜の問い掛けに無反応な成瀬。

拓夜は自分の言った低レベルのギャグに、心底後悔した。

「花穂、とりあえず俺とデュエルをーー」

「ーーーぃ」

「……花穂？」

再度話し掛ける事で、拓夜は成瀬の異常に気付いた。

自分と話していない。

ボソボソと呟く彼女の口調は、まるで手にしたリチュアのデッキと話しているかのような。

「…花穂っ！！」

「っ！！　きゅ、急に大きな声を出さないで下さい！びっくりするじゃないですか！？」

「正気に戻ったか…。びっくりするのはこっちだって。話しかけても上の空だしさ。ところで今、花穂は誰かと話していたみたいだったけど…誰と話していたんだ？」

「えっ！？」

誰と話していたのか？

拓夜からの問い掛けに、成瀬は思わず目を丸くして答えた。

「まさか…拓夜さんにも、今の声が聞こえてたんです？」

声？

なんだそれは？と、拓夜は思ったが、やはり…と思うところもあった。

「いや、俺には誰かの声とかは聞こえてこないけど…まさかな、って思っただけさ」

「…なんだか拓夜さん、落ち着いてますね」

そんな雰囲気の拓夜に、成瀬は自分の感情を素直に吐露した。

「このデッキが完成してからずっと…私の頭に女の子の声が響いてくるんです。それでさっき、その声とお話ししてたんですが…」

「デッキから声…ねぇ。すっげーじゃん花穂！！　それが本当なら、亨さんとマナさんみたいなさ、精霊界のデュエルモンスターと話せる、選ばれた人間って事だろ！？」

「選ばれた人間って…大袈裟ですよ」

「大袈裟じゃねぇって！！　でさ、いったい花穂は何のカードと話していたんだ！？」

まるで無邪気な子供のように、純粋に嬉しそうに尋ねる拓夜に、花穂はどこか照れながら1枚のカードを取り出した。

「えと…はい、この子です。【リチュア・エリアル】って言うんですよ？」

「へぇ、女の子のモンスターか…結構カワイイのじゃんか！！　でさでさ、花穂はそのエリアルって子と、何を話していたんだ！？」

「拓夜さん、女の子同士の話しの内容を聞いてくるなんて、デリカシーがないですよ？」

「う〝っ！？」

そんな事を言われてしまっては…と硬直する拓夜。

そんな拓夜を見て、クスクスと笑いながら成瀬は、冗談ですよ、と言葉を繋げた。

「エリアルちゃん、どうやら会いたい子がいるみたいなんです。ですから、デュエルを誘ってくれた拓夜さんには申し訳ないんですが…これからその子の所へ連れて行ってあげても良いでしょうか？」

「会いたい子…？まぁ俺は別に良いけどさ。エリアルが言うその子って…誰なのか知らないし、それにその子って、今はドコにいるのか場所は分かるのか？」

「はい。大丈夫ですよ！ウィンダって言う子なんですけど…私にはちゃんと、心当たりがありますから！！」

成瀬が大丈夫、と言うのであれば、本当に大丈夫なのだろう。

場所や人物が特定できているのであれば話は早い。

「よし、じゃあ行くか！っと、俺も一緒に行っても良いかな？」

「もちろんです！というか、拓夜さんも知ってる方の所ですよ？」

「へ？そうなの…？」

「ふふ…じゃあ暗くならない内に、出発しましょう！」

成瀬に誘導されるがままに外に出た拓夜たち。

エリアルが会いたいというウィンダの元へと向かう途中…

「ところで拓夜さん。今更なんですが…」

「ん、なに？」

今更？

いったい何の話しだろうか？

拓夜が首を傾げると

「デッキがでっきたって…寒いです」

しっかりと聞いていやがった。

「ちょっ！？　ホントに今更だなヲイッッ！！」

※

亨からガスタのデッキを譲り受けた葉月は、彼と一緒にガスタデッキの編集を行っていた。

葉月は一度、彼が扱うこのデッキとデュエルをした事がある。

その為か、ガスタの特徴をある程度は把握していた。

そしてガスタの長所を活かしながらも、彼とは違う、自分なりの戦術を詰め合わせていく。

完成は早かった。

テーブルの上には、完成した葉月オリジナルのガスタデッキが置かれている。

「ふぅ…ざっとこんなモンね！」

「ハハ…まさかガスタにＢＦを入れるなんて、如何にも烏丸さんらしいチョイスだね」

「良いじゃない。私はずっとＢＦで戦ってきたんだから！それにガスタは鳥獣族もいるし、ＢＦのサポートカードも入るし！」

完成させたデッキに対して自分の考察を述べる葉月。

そんな葉月に口を挟むように、デッキに入っていたウィンダが

『お兄ちゃんと、お姉ちゃんの力が合わさったんだもん！今のガスタ（わたし）は無敵なのだァ！！』

「当然よ！！」

『ちなみに、２人のカードが混ざり合って出来たんだから…言わば、私たち（このデッキ）は、お兄ちゃんとお姉ちゃんの間に産まれた新生児！！　とも読みとれるね』

「ブッッ！！　ちょ、ウィンダ！？　アンタいきなり何いってるのよ！？」

「ハハハッ、面白い事を言うな」

「亨さんまでッッ、もう！！　鉄拳制裁！！」

「おっと、同じ手は二度くらうか！！」

悪戯な笑みで葉月を冷やかす亨。

すると、玄関のインターホンが鳴り、亨は葉月から逃げるように玄関へと向かった。

「あ、コラァッ！！　待ちなさいよ！！」

「ハハ…ッと、はい？どちら様？」

葉月からの猛攻をひょいひょいと避わしながら玄関の戸を開いた亨。

すると

ガチャリ

「なんだ…どこに行くかと思えば、やっぱ亨さんトコ『バキャ！！』の〝ッッ！！」

「たっ、拓夜さん！？」

避けられた葉月の拳は亨をすり抜け、開いたドアの向こうに立っていた拓夜の顔面に直撃した。

今日の拓夜はトコトン、ツイテナイようである。

※

「本ッッ当、ゴメンッ！！」

亨宅のベッドに横たわる拓夜に、葉月は何度も謝っていた。

「亨さんが避けるから、つい当たっちゃった！！　亨さんが避けるから！！」

「ちょ、なんか原因が俺みたいな言い方を…ッ！！　あ～拓夜くん、ごめん。大丈夫か？」

自分にも非はあると思い、謝罪する亨に、拓夜はゆっくりと起き上がり

「別に良いッスよ…って、それよりも亨さん！亨さんがウィンダってカードの持ち主なんスか？」

「ウィンダ？」

拓夜の口から出てきたウィンダの名に、亨は不思議に思い尋ねてみた。

「どうして拓夜くんが、ウィンの事を？」

「それが聞いて下さいよ！！　実は花穂のやつ、カードの声が聞こえるようになったんスよ！！」

「っ！？　成瀬さんが…？」

まるで自分の事のように嬉しそうに話す拓夜。

亨や葉月の視線は、言われて照れている成瀬へと向かう。

「実は…このデッキを完成させてから、この子の声が聞こえるようになったんです」

そう言い成瀬は、１枚のカードを取り出し、亨と葉月の２人に見せた。

「【リチュア・エリアル】…ッ、リチュア！？　成瀬さん、そのカードたちって、ツィスカが使ってたカードたちじゃない！？」

「はい。あの戦いの後に、白石さんが私に持っているように…って」

はにかみながら言う成瀬から、カードを受け取った亨。

そんな彼の表情は、どこか懐かしむような…。
そんな彼の両の瞳は、淡く蒼色と赤紫色のオッドアイへと変色していた。

「…久しぶりだな、エリア。元気にしてたか？」

『はい、お兄さん。その節は皆さんにも御迷惑をかけました～』

「「ッッ！！？？」」

2人の会話に拓夜だけでなく、葉月も驚きの表情を作った。

「今の声…私にも聞こえた…！！」

「俺にもだ…花穂との時は、何も聞こえなかったのに…！！」

『それは、お兄さんが精霊界の力を使ってくれているからです～。
そちらのお二人のとは、一度デュエルでお会いしましたね。こうして話す日がくるなんて、思ってもみなかったです～！』

どこか丁寧な口調ながらもおっとりとした雰囲気を漂わせる声に…。

それだけでなく、カードの声を初めて聞くことができた拓夜は、感動の余り

「スゥッッゲェエエ！！　な？な？ちゃんとカードが喋ったんだぜ！？　スゲーだろ葉月！！」

「って言うか、成瀬さんのカードなのに…なんでアンタがそんなにはしゃいでんのよ？」

賑やかな拓夜に微笑みつつ、亨はエリアルのカードを成瀬に返しながら

「成瀬さんは、エリアの事でここに？」

「はい。この子がウィンダって子に会いたいって…。前に葉月さんが、そのカードは亨さんのカードだ、って仰ってましたから」

なるほど、と亨は頷く。

しかし

「成瀬さん、それに拓夜くん。残念だけど、今の俺はウィンのカードの所持者じゃない」

「え？」

亨ではない？

では、現在の所持者はいったい…？

すると、不思議がる成瀬と拓夜の前に、葉月がフフンと鼻を鳴らしながら

「成瀬さんの探しているウィンダは…ここよッ！！」

どや顔でウィンダのカードを見せる葉月に、亨が補足説明をした。

「見ての通り、今のウィンの所持者は俺ではなく、烏丸さんなんだ」

「ぇッ！？　葉月も精霊のカードを持ってんのかッ！？」

その事実にショックを受け、ズーンと落ち込む拓夜。

「あ～ぁ…三人の中で精霊のカードを持ってないのは俺だけか…」

「うわっ暗っ！？」

「そんなに落ち込むことはないよ、拓夜くん」

ベッド上で頭を垂れる拓夜の肩に手を置き、亨は拓夜を励ました。

「精霊のカードを持ってなくったって、君のカードに対する想いは、ちゃんと伝わっている。そういう意味では、精霊のカードの所持云々は、大した問題じゃないさ。だから、そう落ち込むことはないんだよ？」

「亨さん…」

良い言葉を言う亨であるが、拓夜は思わずこう思った。

精霊のカード云々よりも、それらの力を統べる亨が言っても、あまり説得力はない…と。

※

いつにも増して、西条亨宅は華やかであった。

カードの精霊を含むとはいえ、一つの部屋に女の子が４人。

そして野郎は２人。

それぞれが新たに所持者となった事で、互いのデッキの話しで盛り上がる葉月と成瀬。

それに便乗して、互いのマスターとなった葉月と成瀬の事で色々と話すウィンダにエリアル。

そんな彼女らを余所に、野郎二人組の西条ズは部屋の片隅で佇んでいた。

「なんか…アッチはアッチで話しに盛り上がっているけど、女って

よくアソコまで長話が続くな～って思う時があるんスよ」

「ああ…それは同意見だ。前にマジシャン・ガールから聞いたんだが…マジシャン・ガールや葉月さん、そして成瀬さんの三人が遊びに行った事があって、半日くらいしてかな…帰ってきたマジシャン・ガールに聞いてみたんだ」

「聞いてみた…って？」

「三人でどこか楽しい場合でも行ってきたのか？って…そしたら何て答えたと思う？」

拓夜は首を傾げて悩んだ。

あの三人が揃って遊びに行ける場所とは？

半日もの間、遊んで過ごせる場所とは？

ゲームセンターか？

それならば半日もの時間を過ごそうものなら、一気に大金を消費してしまうだろう。

それに、そんな金を大量消費するような場所に行く事を、マナの保護者的存在の亨が許すだろうか？

ならばカラオケか？

マナはどうかは知らないが、成瀬は歌うことが余り得意ではないらしい。

葉月は学祭でライブをする位なので、カラオケは問題ないが…。

それならばボーリングか？ビリヤードか？卓球か？テニスか？

というか、あの三人はそこまでスポーツウーマンだったか？

それか、三人揃ってウィンドウショッピングか？

これなら有り得る！！

何か女の子だ、ってイメージが持てるし、実際に自分も成瀬のそれに付き合った事もある。

きっとこれに違いない！！

「ん～～～、買い物かなぁ？何か俺の中で、あの三人がウィンドウショッピングしてる、みたいなイメージが」

「残念、ハズレだ」

「え゛」

どうやら不正解だった。
拓夜は悩みながら

「じゃあいったいドコに…？」

「ファミレス」

ファミレス？

亨の口から出た解答に、拓夜は思わず目を丸くした。

「ファミレス？…って、まさか半日もの間、ファミレスで飯を…ッ！？」

「いや、そうじゃなくて…」

「？」

「初めはファミレスで昼飯を食べてただけだったらしいんだ…。だが、食べ終わってからずぅぅぅーーーーーーっっと、おしゃべりだけしてたらしい」

「…は？」

「帰ってきたのが夕方の６時半…だから最低６時間はおしゃべりで過ごしてた事になる」

「ま…マジかよ…ッ！？」

６時間もの間、おしゃべりだけで過ごす。

拓夜にはそんな時間もの間、トークだけで過ごせる自信はない。

というか、世の中の男性の大半が無理だと言うであろう。

これは女性だからこそ、成せる業なのだろうか。

「って言うか、３人で半日もおしゃべりが続くんなら…今の花穂たち女性陣の人数は４人！！　…って事は…！！」

「ああ…下手をすればもっと長い時間、トークを続けるかもしれない…！！」

その瞬間、拓夜に電流が走る。

このまま彼女等に話しを続けさせては、話しが終わる頃には日付が

変わってしまうやもしれない！！

何とか話しを切り上げる方法は…！？

そう思った拓夜の行動は速かった。

拓夜は部屋の中央を陣取り、今もなお楽しげにトークする４人に向かって

「なぁ花穂、葉月！！　デュエルしないか！？」

「は？…デュエル？」

「別に良いですケド…拓夜さん、急にどうされたんです？」

急ぐような、慌てた雰囲気の拓夜を不思議に思う成瀬。

「いや、ホラ…花穂も葉月も、エリアルやウィンダといった精霊のカードを手に入れたんだろ？精霊同士のデュエルが見たいなぁ…って、思ってさ！？」

拓夜に言われて、最初はキョトンとしながら見つめあう成瀬と葉月の二人。

だったが、次第に二人の表情は可愛い女の子の表情から、決闘者の顔つきへと変化していく。

「確かに…拓夜の言うとおり、それはそれで中々面白そうじゃない！！」

「丁度いい機会です。新しく組んだエリアルの力…葉月さんで挑戦してみます！！」

拓夜に促され、闘志を露わにする二人。

成瀬花穂（エリアル）ＶＳ　烏丸葉月（ウィンダ）

二人の戦いが、今はじまる。

精霊合戦！？　成瀬　ＶＳ　葉月　（前書き）

最近スラムダンクにハマって、ＤＶＤをレンタルして観てました。

湘北ＶＳ海南戦のラスト１０秒…

そして三井の「…バスケが…したいですっ！！」

久しぶりにマジ泣きしました。

精霊合戦！？　成瀬　ＶＳ　葉月

※

夕方。

太陽が地平線に半分埋まり、空が茜色に染まる東区の郊外。

西条亨宅の前には、決闘盤を装着し、対峙する２人の決闘者がいた。

亨から新たに力を受け継いだ、烏丸葉月。

想い、慈しむ気持ちから、新たな力に目覚めた、成瀬花穂。

その２人のデュエルを、西条拓夜と西条亨の２人は、真剣な表情で見守っていた。

「葉月さん、準備は宜しいです？」

「いつでもオッケー！！　やるわよ、ウィンダ！！」

『うんっ！！』

「私たちだって！お願い、エリアル！！」

『任せて下さい～♪』

両者の準備は整った。
そして同時に、デュエル開始のゴングが鳴り響いた。

「「デュエルッ！！」」

【先攻】烏丸葉月
ＬＰ　／　８０００
【後攻】成瀬花穂
ＬＰ　／　８０００

「先攻は貰うわ！！　私のターン、ドローッ！！」

先攻を奪取した葉月は、手札となる６枚のカードを確認する。
そして…

「私は、モンスター1体をセット！リバースカードを3枚セットして、ターンエンドッ！！」

（っ！？　あの葉月さんが…初手から守備を固めてきた…！？）

葉月のとった行動（プレイ）が成瀬には意外に思え、思わず目を丸くした。

今までの葉月のデュエルは、ＢＦによる速攻型のデュエルが主だった。やはり今回、デッキが変わった事によるプレイングの変更なのだろうか？

「さぁ、成瀬さん！掛かってらっしゃい！」

「っ！！　いきます、私のターンッ！！」

自分のターンを開始する成瀬は、自分に言い聞かせる。

（いくら葉月さんが戦術を変えてこようと、私は…私のデュエルを…！！）

「私は、モンスター1体をセットして、リバースカードを2枚セッ

トします！！」

成瀬も守備モンスターを召喚し、守備を固めてきた。

「ターンエンドです！」

「…互いに守備モンスターとリバースカード。両者睨み合い…ってトコッスかね？」

2人のデュエルを観ていた拓夜は、隣に立つ亨に意見を窺ってみた。

先輩のデュエル考察を聞き、デュエル戦術（タクティクス）の向上に繋げようという、拓夜なりの思惑でもある。

そんな拓夜の意を知って知らずか、亨は自分の意見を口にした。

「ああ。だが…あの2人は、まだ自分たちが試した事のないデッキでデュエルをしている。どこまで自分が想い描いたデュエルが貫けるか…。そして、どこまで勝ちに貪欲になれるのか…！！　そこが、勝負の分かれ目になる…！！」

成瀬のターンが終了した事で、葉月のターンへと移行する。

「私のターン、ドローッ!!　モンスター1体をセットして、ターンエンドッ!!」

（っ!?　…また守備を固めた!?）

葉月の行動（プレイ）一つ一つが、自分の予想と外れる事に驚く成瀬。

このターンこそは攻めてくるものばかりと考えていたのだが…

「葉月さん…守ってばかりじゃ、私のライフを削る事はできませんよ?」

「そんな事、言われなくたって分かってるわよ!さぁ、掛かってらっしゃい成瀬さん!!」

葉月のターンが終了し、成瀬のターンが訪れる。

どうやら葉月は、今使用しているガスタのデッキの特長を掴んでいるらしい。

葉月の性格ならば、守備を固めるような戦術は性に合わないとか言って、攻める姿勢を魅せてくるイメージを持っていたのだが…。

（…どうやら、考えを改めないとイケない様です）

成瀬は今一度、互いのフィールドの状況を確認してみる事にした。

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
裏側守備表示　×２
［魔法・罠］
リバースカード　×３

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
裏側守備表示　×１

［魔法・罠］
リバースカード　×２

（葉月さんの方はどうか分かりませんが…私の方は、準備は整いました！お願い…エリアルっ！！）

「いきますっ！！　私のターンッ！！」

デッキからカードをドローした成瀬は、遂に攻めの姿勢へと転ずる。

「まずは、モンスターを反転召喚です！！　お願い…【リチュア・エリアル】ッ！！　そのリバース効果を発動します！！」

【リチュア・エリアル】
星４／水属性／魔法使い族
ＡＴＫ／１０００
ＤＥＦ／１８００
［効果］
リバース：自分のデッキから「リチュア」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

成瀬の裏側守備表示のモンスター、【リチュア・エリアル】が反転

召喚された事で、そのリバース効果が発動される。

「この子がリバースした時、私のデッキから［リチュア］と名のつくモンスター1体を手札に加える事ができます！私はデッキから…【リチュア・アビス】を手札に加えます！そして、手札に加えた【リチュア・アビス】を召喚です！！」

【リチュア・アビス】
星2／水属性／魚族
ＡＴＫ／　８００
ＤＥＦ／　５００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキから「リチュア・アビス」以外の守備力１０００以下の「リチュア」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

「召喚に成功した【リチュア・アビス】のモンスター効果です！このカード以外の守備力１０００以下の【リチュア】1体を、デッキから手札に加える事ができます！私はデッキから【シャドウ・リチュア】を手札に加えます！！」

「…動き出したわね、成瀬さん…！！」

次々とカードの効果を発動していく成瀬。
そして成瀬は、手札から鍵となるカードを発動した。

『葉月さん、覚悟して下さい～♪』

「いきますっ！！　手札より、儀式魔法【リチュアの儀水鏡】を発動します！！」

【リチュアの儀水鏡】
［儀式魔法］
「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。手札・自分フィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならない。また、墓地に存在するこのカードをデッキに戻す事で、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す。

「フィールドの【リチュア・エリアル】と、【リチュア・アビス】をリリースして…！！」

巨大な鏡が成瀬のフィールドに出現し、その中に成瀬のモンスター

が入っていく。

そして、その鏡の中に写し出されたモンスターとは…！！

「儀式召喚っ！！　お願い、【イビリチュア・ガストクラーケ】！！」

【イビリチュア・ガストクラーケ】
星６／水属性／水族
ＡＴＫ／２４００
ＤＥＦ／１０００
［儀式／効果］
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。このカードが儀式召喚に成功した時、相手の手札をランダムに２枚まで確認し、その中から１枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

バリィィンッ！！

儀水鏡を砕き、その中から儀式モンスター【イビリチュア・ガストクラーケ】が出現した。

「早速きたわね…儀式召喚！！」

「はい！では早速です！！　【イビリチュア・ガストクラーケ】のモンスター効果を発動します！！」

「っ！？」

「この子が儀式召喚に成功した時、相手の手札を2枚まで確認し、その中から1枚を選択してデッキに戻します！！」

「…くッ！？」

葉月の手札は2枚目。

「さぁ葉月さん、その2枚の手札を見せてもらいます！！」

［葉月の手札］
ガスタの巫女　ウィンダ
ガスタの交信

（葉月さんの手札に、モンスターは1体…でしたらっ！！）

「私が選択するのは…【ガスタの巫女　ウィンダ】です！！」

葉月の手札からカードがデッキに戻された。

成瀬のフィールドには儀式モンスター【イビリチュア・ガストクラーケ】。

対する葉月のフィールドには、2体の裏側守備表示モンスターが。

そこで成瀬は、自分の場に伏せてある2枚のリバースカードの内、1枚のカードを掴み取り

「リバーストラップ、発動ですっ！！　【狡猾な落とし穴】！！」

【狡猾な落とし穴】
［罠カード］
フィールド上に存在するモンスター2体を破壊する。自分の墓地に罠カードが存在する場合、このカードは発動できない。

「このカードは、私の墓地に罠カードが存在しない場合に発動する事ができ、モンスター2体を破壊します！！　葉月さんの場の2体

の、裏側守備表示のモンスターを破壊しますっ！！」

ズゴゥッッ、バゴォッッ…！！

葉月のフィールドの2体の裏側守備表示モンスターが破壊された。

「よしっ！！　花穂の罠カードが効いた！！　これで葉月の場のモンスターは全滅だッ！！」

「フッ…ソイツはどうかな？」

「ッ…ぇ？」

デュエルを観戦しながら不敵な笑みを浮かべる亨。

そのたったの一言に、拓夜は思わず目を見開いた。

「やってくれたわね、成瀬さん！！　けどね…私だって、ただやられるだけじゃないのよッ！！　破壊されて墓地に送られた【ガスタ・ガルド】の効果発動！！」

【ガスタ・ガルド】
星３／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　５００
ＤＥＦ／　５００
［チューナー・効果］
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル２以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、デッキからレベル２以下の【ガスタ】を特殊召喚する事ができる！！　出番よっ！！　ウィンダッ！！」

【ガスタの巫女　ウィンダ】
星２／風属性／サイキック族
ＡＴＫ／１０００
ＤＥＦ／　４００
［効果］
このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する事ができる。

葉月のフィールドに彼女のパートナー的存在。
【ガスタの巫女　ウィンダ】が守備表示で特殊召喚された。

『ウィンダ、颯爽と登〜場〜ォ☆』

（葉月さんの壁モンスターを全て破壊したつもりでしたが…そぅ上手くはいかないみたいですね）

成瀬は一呼吸おき、バトルフェイズへと突入した。

「行きますっ！！【イビリチュア・ガストクラーケ】で、【ガスタの巫女　ウィンダ】に攻撃です！！」

成瀬のガストクラーケの攻撃がウィンダに炸裂し、破壊した。

ズドンッ！！

「くッ！！　ウィンダの効果よ！！　ウィンダが相手の攻撃で破壊され墓地へ送られた時、デッキからガスタのチューナー1体を特殊

召喚できる！！【ガスタ・イグル】を特殊召喚ッ！！」

【ガスタ・イグル】
星１／風属性／鳥獣族ＡＴＫ／　２００
ＤＥＦ／　４００
［チューナー・効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからチューナー以外のレベル４以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

新たな壁モンスターとして【ガスタ・イグル】が守備表示で特殊召喚された。

（先ほどからリクルーターが多い…そう簡単に、ダメージを与えさせないデッキみたいです…！！）

自分なりに葉月が扱うガスタの特徴を捉え、策を張り巡らせる成瀬。

「…ターンエンドです！！」

「行くわよッ！！　私のターンッ！！」

成瀬のターンが終了し、自分のターンを開始する葉月。

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
ガスタ・イグル
［魔法・罠］
リバースカード　×３

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
イビリチュア・ガストクラーケ
［魔法・罠］
リバースカード　×１

互いのライフの変動がないまま迎えた葉月のターン。

葉月はドローしたカードを確認すると、ニィ…っと口元に笑みを浮かべた。

「そろそろコッチもやるわよ!?　リバースカード、オープンッ!!【風霊術ー「雅」】を発動!!」

【風霊術ー「雅」】
［罠カード］
自分フィールド上に存在する風属性モンスター1体をリリースし、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。選択した相手のカードを持ち主のデッキの一番下に戻す。

「このカードは、私の場の風属性モンスターをリリースする事で、相手のカード1枚をデッキボトムに戻す!!　行きなさいッ!!イグルッ!!」

ビュォオオ…ッ!!

「くっ!?　ガストクラーケが…っ!!」

葉月の【ガスタ・イグル】がリリースされ、成瀬の儀式モンスター

【イビリチュア・ガストクラーケ】がデッキの一番下へと戻された。

「これで成瀬さんのフィールドは、リバースカード1枚のみ!!
手札より【ガスタの静寂　カーム】を召喚ッ!!」

【ガスタの静寂　カーム】
星4／風属性／サイキック族
ＡＴＫ／１７００
ＤＥＦ／１１００
［効果］
1ターンに1度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体をデッキに戻す事で、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

葉月のフィールドにカームが召喚された。

カームの召喚に対し、何らアクションを見せない成瀬を見て、葉月はカームの効果を発動した。

「カームの効果を使うわ!!　1ターンに1度、私の墓地に眠る「ガスタ」と名のつくモンスター2体をデッキに戻す事で、カードを1枚ドローできる!!」

［葉月の墓地］
ガスタの希望　カムイ
ガスタ・ガルド
ガスタの巫女　ウィンダ
ガスタ・イグル
風霊術ー「雅」

「墓地のウィンダと、イグルをデッキに戻して…カードドローッ！！」

デッキからカードをドローした葉月は、反撃のバトルフェイズへと突入する。

「バトルッ！！　カームで、成瀬さんにダイレクトアタック！！」

「きゃっ！！」

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００

【成瀬花穂】
ＬＰ／　８０００　→　６３００

「…先制ダメージを与えたのは、やはり烏丸さんか…！！」

「リクルーターでモンスターを展開して、チャンス時に攻める…あれがガスタか…！！」

先制ダメージを与え、勢いに乗った葉月は、自信溢れる表情で

「ターンエンド！！」

※

「そう…ですか。後輩の方が、プロに…」

「ぁぁ…その為に何かしてやりたい、って気持ちはあるんだけど…なかなかその機会がない、って言うか何て言うか…」

神社の椅子に座りながら夕闇の空を仰ぎ見て、結締智恭は高円寺楓に話していた。

拓夜のプロリーグ出場の記念。

その祝杯。

同じ先輩でも白石直也は、デュエルによって拓夜に激励を送った。

自分も西条亨も、拓夜にはまだ何もしてやれてないが、亨には成瀬から持ち掛けられた企画がある。

しかし、自分はそれに参加する事はできない。

トリティニーグループの研修に参加しなければならないからである。

先輩として、自分だけが何もしてやれてない。

自分だけが。

結締はその事で悩み、せめて…プロになって、拓夜がデュエルで1番になる夢を叶えられるように。

そんな願いを込めて、ここ数日の間、東区の神社に通っていたのだ。

「今の俺には…こうやって祈ってやる位しかできないぜよ…他にも何かしてやりたい、って気持ちはあるんだけどなぁ…」

溜め息混じりに話す結締の隣に座る楓。

そんな楓は、用意したお茶を少し喉に通して

「大丈夫…」

「へ？」

「祈る事しかできない…確かに、そうかもしれません。ですが、アナタ様のその祈りは、きっと届きます」

ニッコリと。

柔らかい笑みで、楓は結締に話していく。

「人を思いやる心…それが、人を突き動かす動力源にもなります。アナタ様のその祈りは、とても純粋で、綺麗です」

だから、きっと大丈夫。

楓はそう言うと立ち上がり、一歩二歩と前へ進む。

「今度は、その気持ちを…アナタ様なりの行動に現してみて下さい。あ、出来たら…の話しですよ？」

「へへ…ありがとさん！な～んか少し話せただけで、気持ちが大分楽になったぜぃ」

結締はそう言って立ち上がり、その足を帰路に向ける。

「また、宜しければお話しを窺います」

「ああ、また来させてもらうぜぃ…あ、そうそう。巫女さんにコイツを渡しておくぜぃ」

結締はそう言うと、楓の手に1枚のカードを手渡した。

「これは…名刺？結締智恭様、と仰るのですね？」

結締様…ともう一度、楓はそう呟くと、結締は手を振りながら帰っていった。

それを笑顔で見送る楓。

結締の表情は、神社に来ていた当初よりも、明るい表情へと変わっていた。

※

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
ガスタの静寂　カーム
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　６３００
［手札］
３枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×１

迎えた成瀬のターン。

先制ダメージを受けたものの、成瀬の気持ちはビクともしていなかった。

むしろ、自分の手札や相手フィールドの状況を確認し、闘志を焚きあげる勢いである。

「行きます！私のターンです！！　ドローッ！！」

ドローし、カードを手札に加えた成瀬は、反撃のプレイを開始する。

「魔法カード【儀式の準備】を発動します！！」

【儀式の準備】
［魔法カード］
自分のデッキからレベル7以下の儀式モンスター1体を手札に加える。その後、自分の墓地から儀式魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

「この効果で、デッキからレベル6の儀式モンスター【イビリチュア・マインドオーガス】を手札に加え、墓地の儀式魔法【リチュアの儀水鏡】を手札に加えます！」

手札を補充する成瀬は、次に自分の場に伏せてあった1枚のリバースカードを発動した。

「続いて、リバーストラップ発動です！！【儀水鏡の瞑想術】！！」

【儀水鏡の瞑想術】
［罠カード］
手札の儀式魔法カード1枚を相手に見せ、自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついたモンスター2体を選択して発動する。選択

した墓地のモンスターを手札に戻す。

「このカードは、手札の儀式魔法を相手に見せる事で、墓地のリチュア2体を手札に戻す事ができます！私の手札には、【儀式の準備】によって手札に加えた儀式魔法【リチュアの儀水鏡】があります！　よって私の墓地から【リチュア・アビス】と【リチュア・エリアル】の2体を回収します！！」

みるみる内に手札を7枚にまで補強した成瀬。

そんな成瀬は、更に葉月を追い込む為のプレイングを披露する。

「更に、手札の【ヴィジョン・リチュア】の効果発動です！！」

【ヴィジョン・リチュア】
星2／水属性／海竜族
ＡＴＫ／　７００
ＤＥＦ／　５００
［効果］
水属性の儀式モンスターを儀式召喚する場合、このカード1枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。また、手札からこのカードを捨てる事で、自分のデッキから「リチュア」と名の

ついた儀式モンスター1体を手札に加える。

「この子を手札から墓地に捨てる事で、デッキからリチュアの儀式モンスター1体を手札に加える事ができます！デッキから儀式モンスター【イビリチュア・ガストクラーケ】を手札に加えます！！」

（ガストクラーケ！？　確かアイツの効果は…手札を…！！）

「そして私は【リチュア・アビス】を召喚して、効果を発動します！！」

成瀬のフィールドに再び【リチュア・アビス】が召喚された。

「この子が召喚に成功した時、デッキから守備力１０００以下の「リチュア」を手札に加える事ができます！よって、デッキから2枚目の【ヴィジョン・リチュア】を手札に加えます！！」

次々とデッキを回転させる成瀬。

「これで準備は整いました…！！　行きます！！　手札より儀式魔

法【リチュアの儀水鏡】を発動です！！」

遂に儀式魔法を発動してきた成瀬に、葉月は思わず身構える。

「手札のエリアルちゃんと、フィールドの【リチュア・アビス】をリリースして…っ！！　お願いっ！！【イビリチュア・マインドオーガス】！！」

【イビリチュア・マインドオーガス】
星６／水属性／水族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２０００
［儀式／効果］
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。このカードが儀式召喚に成功した時、お互いの墓地に存在するカードを合計５枚まで選択し、持ち主のデッキに戻す。

成瀬のフィールドにエリアルの儀式進化態【イビリチュア・マインドオーガス】が儀式召喚された。

『本気でいきますよ…葉月さん！！』

「マインドオーガスッ！？　確か…その効果って…！！」

「はい。葉月さんも一度体験した事がありますから、覚えているみたいですね…！！【イビリチュア・マインドオーガス】の効果です！！　この子が儀式召喚に成功した時、墓地のカードを合計5枚まで選択して、デッキに戻します！！」

マインドオーガスの効果が炸裂し、それぞれの墓地のカードが宙に浮かび上がる。

「今回、私がデッキに戻すのは…このカードです！！　ソウル・リターン！！」

［成瀬が選択したカード］
狡猾な落とし穴
儀水鏡の瞑想術
リチュア・エリアル
ガスタ・ガルド
ガスタの希望　カムイ

スボボボボッ！！

成瀬の選択したカードがデッキに戻されてしまい、葉月の墓地からモンスターカードが消えた。

「くっ！？」

「続いて、手札より【サルベージ】を発動です！！」

【サルベージ】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を手札に加える。

「このカードは、私の墓地に眠る、攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を手札に加える事ができます！！　墓地に眠る【ヴィジョン・リチュア】と【リチュア・アビス】の２体を、手札に加えます！！」

墓地からモンスターを回収。

再び手札を増強した成瀬は、その勢いを荒ぶる大海の如く、更に激しさを増していく。

「まだです！！　手札より【シャドウ・リチュア】のモンスター効果を発動します！！　この子を手札から墓地に送る事で…！！」

【シャドウ・リチュア】
星４／水属性／海竜族
ＡＴＫ／１２００
ＤＥＦ／１０００［効果］
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、このカード１枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。また、手札からこのカードを捨てる事で、自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式魔法カード１枚を手札に加える。

「デッキから【リチュアの儀水鏡】を手札に加える事ができます！！」

デッキから２枚目の【リチュアの儀水鏡】を手札に加えた成瀬は早速、そのカードを発動した。

「行きますっ！！【リチュアの儀水鏡】発動です！！」

「っ！！」

「手札の【ヴィジョン・リチュア】の効果により、儀式召喚1体分のリリースとして扱い…お願いっ！！【イビリチュア・ガストクラーケ】！！」

ドンッ！！

成瀬のフィールドに再び【イビリチュア・ガストクラーケ】が儀式召喚された。

そしてガストクラーケが儀式召喚された事で、その効果が発動される。

「【イビリチュア・ガストクラーケ】の効果！！　相手の手札2枚を確認して、その内の1枚をデッキに戻します！！　さあ葉月さん！！　手札を見せて下さい！！」

葉月の手札は現在2枚。
葉月は再び、成瀬にその手札を晒した。

［葉月の手札］
ガスタの交信
ＢＦ－疾風のゲイル

（疾風のゲイルっ！？　やはり葉月さんは…ＢＦをデッキに組み込んでいましたか…！！）

（こうも相手に手札を晒さないといけないなんて…ッ！！）

葉月は思わず奥歯をギッ…っと噛み締めた。
ここでゲイルをデッキに戻されては、相手の攻撃力（パワー）を奪えない。
それを見越してか、成瀬は案の定…

「効果でデッキに戻すのは…【ＢＦ－疾風のゲイル】です！！」

疾風のゲイルがデッキに戻されて、再び手札が1枚となってしまった葉月。

そして成瀬は、遂にバトルフェイズへと突入した。

「バトルです!!【イビリチュア・ガストクラーケ】で、葉月さんのモンスター【ガスタの静寂　カーム】に攻撃です!!　アクア・スパイク!!」

バシャアッ!!

「くッ!?　カームが…ッ!!」

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００　↓　７３００

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　６３００

カームが破壊された事で、葉月のフィールドから壁となるモンスターが消えた。

（チャンスです！！）

「お願いっ、エリアル！！【イビリチュア・マインドオーガス】で、葉月さんにダイレクトアタック！！　メイルシュトローム！！」

ズゴゥッ！！

葉月に向かって巨大な水柱が襲い掛かる。

葉月の場にはモンスターはないが、リバースカードは2枚ある。

しかし、葉月はそのいずれも発動する事なく、ダメージを受けた。

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　７３００　↓　４８００

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　６３００

「くッ！？　やるじゃない…成瀬さんにエリアル…！！」

「葉月さんこそ…まだまだお二人の力はこんなものじゃないでしょう？私はターンエンドです！！」

※

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　４８００
［手札］
１枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　６３００
［手札］
２枚
［モンスター］
イビリチュア・マインドオーガス
イビリチュア・ガストクラーケ
［魔法・罠］
なし

迎えた葉月のターン。

デュエルの流れは、成瀬に傾いていた。

葉月の手札は【ガスタの交信】1枚のみ。

このカードは、墓地に［ガスタ］が2枚溜まっていなければ発動できない。

しかし、今の葉月の墓地にいるガスタは【ガスタの静寂　カーム】のみ。

2枚のリバースカードも、葉月にとって今は発動トリガーが引けない状態だ。

葉月はゆっくりとデッキトップに指を添えて

（リチュア…やっぱり強いわね!!　私の手札や墓地をこうも引っ掻き回してくるなんて…おかげでガスタのデュエルがやりにくいったらありゃしない!!）

『お姉ちゃん…だからって、諦めた訳じゃないよね?』

自分のデッキに眠るウィンダが語りかけてくる。

「当然ッ！！　誰に向かって言ってるワケ？　行くわよ…私のターン、ドローッ！！」

葉月が引いたカード。

それは…

「ッ！？　私はモンスター1体をセットして、ターンエンド！！」

壁モンスターを引き当てる事ができた葉月は、守備表示で出してターンを終了した。

「あの葉月が…防戦一方に…！！　デッキが違うからなんだろうけど、何か違和感があるな…」

自分の中のイメージとは違う葉月。

成瀬が最初に感じた疑問も、やはり拓夜も感じていた。

「墓地封じ…そして手札のピーピング…なかなか嫌らしい効果を持っているな、リチュアは…」

「ええ。まだツィスカが使っていた頃…俺も葉月も、あの効果に苦戦しましたからね…！！　花穂は見事に、ツィスカ以上に葉月を苦しめてますよ。葉月の立場が俺だったら…って思うと、思わずゾッとするぜ…！！」

拓夜の意見には亨も頷く事で同意した。

そして、いま苦しいであろう葉月を見つめ

（ここが正念場だ…烏丸さん。気を付けるんだ…！！）

葉月のターンが終了した事で始まる成瀬のターン。

「行きます！！　私のターンッ！！」

デッキからカードをドローした成瀬は、手札を確認し…

「私は【マンジュ・ゴッド】を召喚して、効果発動です！！」

【マンジュ・ゴッド】
星４／光属性／天使族
ＡＴＫ／１４００
ＤＥＦ／１０００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスターまたは儀式魔法カード１枚を手札に加える事ができる。

成瀬のフィールドに【マンジュ・ゴッド】が召喚された。

「この子が召喚に成功した時、儀式モンスターか儀式魔法カード１枚を手札に加える事ができます！！　私はデッキから【イビリチュア・ソウルオーガ】を手札に加えます！！」

ソウルオーガを手札に加えた成瀬は、すぐさまバトルフェイズに入った。

「バトルです！！【イビリチュア・ガストクラーケ】で、葉月さんの守備モンスターに攻撃です！！　アクア・スパイク！！」

ダメージステップに入り、葉月のセットされたモンスターがリバースした。

そのモンスターとは…

「リバースされた【ガスタの希望　カムイ】のリバース効果、発動ッ！！」

【ガスタの希望　カムイ】
星２／風属性／サイキック族
ＡＴＫ／　２００
ＤＥＦ／１０００
［効果］
リバース：自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する。

「カムイの効果で、デッキからガスタのチューナー1体を特殊召喚する!!　来なさいッ【ガスタ・ガルド】!!」

葉月のモンスター【ガスタの希望　カムイ】は破壊され、そのフィールドに【ガスタ・ガルド】が守備表示で特殊召喚された。

「ガスタ…本当に後続が絶えないデッキですね…!!　次です!!【マンジュ・ゴッド】で、【ガスタ・ガルド】に攻撃です!!」

バコォッ!!

「くッ!?　戦闘破壊され墓地に送られたガルドの効果発動!!　自分のデッキから、レベル2以下のガスタを特殊召喚する!!　もう一度、出番よっ!!　ウィンダ!!」

続いて守備表示で現れたのは【ガスタの巫女　ウィンダ】。

『ジャカジャ～ン☆ウィンダ、華麗に参上!!』

「次です!!　お願いエリアル!!【イビリチュア・ソウルオーガ】で、ウィンダちゃんに攻撃です!!」

『え…？』

ウィンダの前に立ちはだかるエリアルことマインドオーガス。

『ちょっ…エリアちゃんっ…待ってまっ…！？』

『手加減無用です～♪』

『ぁ痛ッ！？』

ぽこっ…っと杖で叩かれ、ウィンダは破壊された。

「戦闘破壊され墓地に送られたウィンダの効果よ！！　デッキから、ガスタのチューナー1体を特殊召喚する！！　2枚目の【ガスタ・ガルド】を特殊召喚！！」

再び葉月のフィールドに現れしモンスター【ガスタ・ガルド】。

結局、このターンで成瀬は葉月に対して、ダメージを与える事が出来なかった。

「その後続を呼ぶ効果…結構やらしいですね」

「…人のこと言える？」

どっちもどっち、な事を言い、成瀬はターンを終了した。

「ターンエンドです！！」

「じゃあ、私のターンね…ッドロー！！」

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　４８００
［手札］
２枚
［モンスター］
ガスタ・ガルド
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【成瀬花穂】

ＬＰ　／　６３００
［手札］
３枚
［モンスター］
イビリチュア・マインドオーガス
イビリチュア・ガストクラーケ
マンジュ・ゴッド

それぞれの状況を確認し終えた葉月は

「行くわよ…！！　永続罠発動！！【リミット・リバース】！！」

【リミット・リバース】
［永続罠］
自分の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。このカードがフィールドから離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「【リミット・リバース】は、私の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を、攻撃表示で特殊召喚する事ができる！！　来な

さいッ！！【ガスタ・ガルド】！！」

葉月の墓地から【ガスタ・ガルド】が特殊召喚された。

これで葉月のフィールドには、【ガスタ・ガルド】が2体並んだ。

（チューナー同士をを揃えた所で…葉月さん、いったい何を…！？）

「そして、手札より魔法カード【ハリケーン】を発動！！」

【ハリケーン】
［魔法カード］
フィールド上の魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「この効果で、フィールドの魔法・罠全てを、手札に戻す！！」

【ハリケーン】が炸裂し、全ての魔法・罠カードは持ち主の手札に戻された。

「【リミット・リバース】が私の手札に戻った事で、その効果によって蘇生していた【ガスタ・ガルド】は破壊される！！」

「ガルドが破壊され…フィールドから墓地に？　ッ！？　まさか！？」

「ええ、成瀬さんの思った通りよ！フィールドから墓地に送られた【ガスタ・ガルド】の効果発動！！　デッキからレベル２以下のガスタを特殊召喚する！！　来なさいッ！！【ガスタの巫女　ウィンダ】！！」

『今回３度目の登場ォ☆ウィンダでっす！！』

葉月のフィールドに再びウィンダが現れた。

「気合い入れてくわよ、ウィンダ！！　レベル２の【ガスタの巫女　ウィンダ】に、レベル３の【ガスタ・ガルド】をチューニング！！」

ウィンダとガルド。

２体のモンスターが宙に飛び上がり…

「集いし祈りが、悠久の風を紡ぎだす。光さす道となれッ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！　行くわよっ【ダイガスタ・ガルドス】！！」

【ダイガスタ・ガルドス】
星５／風属性／サイキック族
ＡＴＫ／２２００
ＤＥＦ／　８００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外の「ガスタ」と名のついたモンスター１体以上
１ターンに１度、自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター２体をデッキに戻す事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して破壊する。

葉月のフィールドにシンクロモンスター【ダイガスタ・ガルドス】が現れた。

（ウィンダちゃんが…上に乗っただけ…）

「ウィンダ、早速やるわよ!!【ダイガスタ・ガルドス】の効果発動!!　1ターンに1度、墓地のガスタ2枚をデッキに戻す事で、相手モンスター1体を破壊する!!」

葉月は自分の墓地から【ガスタの静寂　カーム】と【ガスタの巫女　ウィンダ】をデッキに戻し

「まずは【イビリチュア・ガストクラーケ】を破壊ッ!!」

『とぉ☆』

バリバリバリッ!!

ガルドスの効果が炸裂し、ガストクラーケは破壊された。

「ガストクラーケッ!?」

「更に手札より【ガスタの交信】を発動！！」

【ガスタの交信】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する「ガスタ」と名のついたモンスター2体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、相手フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する。

「この効果で、墓地の【ガスタ・ガルド】と【ガスタの巫女　ウィンダ】をデッキに戻して、成瀬さんの【イビリチュア・マインドオーガス】を破壊する！！」

「うっ！？」

先ほどの仕返し、と言わんばかりに、ダイガスタ・ガルドス（ウィンダ）はイビリチュア・マインドオーガス（エリアル）を杖で

『えへ☆エリアちゃん、覚悟はいいよね？』

『ウィンちゃん。暴力は駄目ですよ～？』

『聞っこえなーい！！』

ぽこっ…っと今度はマインドオーガス（エリアル）を叩き、破壊した。

これにより、成瀬のフィールドには【マンジュ・ゴッド】1体のみとなった。

「バトルよッ！！【ダイガスタ・ガルドス】で、【マンジュ・ゴッド】に攻撃！！」

『とっつげきぃイ☆』

ズガガッ！！

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　４８００

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　６３００　→　５５００

「くぅ…っ、やりますね、葉月さん…！！」

【マンジュ・ゴッド】が破壊され、成瀬のフィールドはがら空きになってしまった。

「リバースカードを2枚セットして、ターンエンド！！」

※

葉月のターンが終了し、成瀬のターンが訪れた。

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　４８００
［手札］
なし
［モンスター］
ダイガスタ・ガルドス
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　５５００
［手札］
３枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

「さすがですね、葉月さんとウィンダちゃん…ですが、私たちだって負けてられません！！　リチュアの底力を、魅せてあげます！！　私のターン、ドローッ！！」

成瀬は引き当てたカードを確認し、その表情に力ある笑みを浮かべた。

（拓夜さん…拓夜さんの力、お借りします！！）

「墓地にある儀式魔法【リチュアの儀水鏡】の効果を使います！！」

「ッ！？　墓地でも効果が使えるっていうの！？」

「はい。【リチュアの儀水鏡】には、隠された力が秘められています。墓地にあるこのカードをデッキに戻す事で、墓地の［リチュア

」と名のつく儀式モンスター1体を手札に戻す事がでるんです！！」

成瀬はカード効果を説明し終えると、墓地から1枚のカードを掴み取った。

「儀水鏡をデッキに戻して、墓地の【イビリチュア・マインドオーガス】を手札に加えます！！　そして墓地にある、もう1枚の儀水鏡も、効果を使います！！　儀水鏡をデッキに戻して、墓地から【イビリチュア・ガストクラーケ】を手札に加えます！！」

様々な場所から手札を補強する成瀬のリチュア。

更に

「手札より【リチュア・アビス】を召喚です！！　この子が召喚に成功した時、デッキから守備力１０００以下の［リチュア］1体を手札に加えます！！　私が手札に加えるのは…【シャドウ・リチュア】です！！」

デッキから【シャドウ・リチュア】を手札に加えた成瀬。

更に

「そして、手札の【シャドウ・リチュア】を墓地へ捨てる事で、デッキから【リチュアの儀水鏡】を手札に加えます！！」

巧みにデッキを操る成瀬に、対峙する葉月は思わず息を呑んだ。

「そして、手札より儀式魔法【リチュアの儀水鏡】、発動です！！私のフィールドの【リチュア・アビス】と、手札の【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】をリリースし…！！」

（ッ！？　ディアボリックガイですって…！！）

「最上級儀式モンスターを降臨させます！！　お願いッ！！【イビリチュア・ソウルオーガ】！！」

【イビリチュア・ソウルオーガ】
星８／水属性／水族
ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／２８００
［儀式／効果］

「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。１ターンに１度、手札から「リチュア」と名のついたモンスター１体を捨てる事で、相手フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を選択して持ち主の手札に戻す。

ゴゴゴゴゴ…！！

成瀬のフィールドにリチュアの最強儀式モンスター【イビリチュア・ソウルオーガ】が降臨した。

「攻撃力、守備力とも…２８００ッ！？」

高い…

そう思った矢先、成瀬はソウルオーガの効果を発動した。

「ソウルオーガの効果を使います！！　手札の［リチュア］１体を墓地へ捨てる事で、相手フィールドの表側表示のカード１枚をデッキに戻します！！」

「バッ…バウンズッ！？」

「手札の【イビ“リチュア”・ガストクラーケ】を捨てて、葉月さんの【ダイガスタ・ガルドス】をデッキに戻します！！」

ズゴゥッ！！

ソウルオーガの効果が炸裂し、葉月のフィールドからモンスターが消えた。

「バトルです！！　ソウルオーガで、葉月さんにダイレクトアタック！！　タイダルカノンッ！！」

「少しでもダメージを抑えるッ！！　永続罠【リミット・リバース】を発動！！」

成瀬の攻撃宣言時、葉月は【リミット・リバース】を発動した。

「この効果で、墓地の攻撃力１０００以下のモンスター１体を特殊召喚する！！　来なさいッ【ガスタ・ガルド】！！」

そして攻撃表示ではあるが、壁として現れし【ガスタ・ガルド】。

「バトルは続行です！！　ソウルオーガで、【ガスタ・ガルド】に攻撃です！！」

ズボァッ！！

「キャァッ！！」

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　４８００　↓　２５００

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　５５００

【ガスタ・ガルド】は戦闘破壊され、葉月は大ダメージを受けた。

「【ガスタ・ガルド】の効果…ッ、フィールドから墓地に送られた時、レベル２以下の［ガスタ］を特殊召喚する…ッ、ウィンダッ！！」

葉月のデッキから【ガスタの巫女　ウィンダ】が守備表示で特殊召喚された。

『呼ばれて飛び出て、ウィンダ推参☆』

「あとひと息です…！！　ターンエンド！！」

成瀬のターンが終了し、葉月のターンへと移行する。

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　２５００
［手札］
なし
［モンスター］
ガスタの巫女　ウィンダ
［魔法・罠］
リバースカード　×１

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　５５００

［手札］
2枚
［モンスター］
イビリチュア・ソウルオーガ
［魔法・罠］
なし

「…いよいよ大詰めだな」

デュエルを観戦していた亨がポツリと呟く。

「そう、ッスね…ここから葉月のターンだけど…守備を固めるだけじゃ、ソウルオーガの効果でその布陣を崩されるだけだ。かと言って、葉月の手札は0…このドローで、葉月が何か打開できるカードを引かないと……葉月は負ける！！」

「ああ…だが…」

亨はこれからターンを開始する葉月を見つめる。

葉月の表情は、闘志に満ち溢れていた。

ウィンダも同じく…。

「まだ…何が起きるか分からない。頑張れ…烏丸さん」

※

葉月のターン。

葉月はゆっくりと、デッキトップに指を添えた。

その時、ウィンダが葉月に振り返り

『聞こえた？お姉ちゃん…お兄ちゃんの声』

「…ええ。聞こえた」

頑張れ…烏丸さん。

初めてだった。

想い人から応援されるなんて。

あの人と知り合ってから、初めて応援された。

頑張れ。

たったその一言だけでも、自分はもっと頑張れる。

力がどんどん溢れてくる。

今の葉月は、気持ちでは誰にも負ける気がしなかった。

「俄然やる気が湧いてきたわよ！！　行くわよウィンダ！！」

『うんっ！！』

「私のターンッ、ドローッ！！」

シュバッ！！

鮮やかにカードをドローした葉月は、そのカードを確認し

（…来たッ！！）

「チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚ッ！！」

【デブリ・ドラゴン】
星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／１０００
ＤＥＦ／２０００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚された効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

葉月のフィールドに【デブリ・ドラゴン】が召喚された。

「【デブリ・ドラゴン】の効果発動！！　このカードが召喚に成功した時、墓地の攻撃力５００以下のモンスター１体を、効果を無効

にして特殊召喚する！！【ガスタの希望　カムイ】を特殊召喚ッ！！」

続けて【ガスタの希望　カムイ】が特殊召喚される。

これで葉月のフィールドにはウィンダ、デブリ、カムイの3体のモンスターが並んだ。

「ウィンダ、準備は良い？」

『合点承知ノ助！！』

うん、と葉月は頷き、力いっぱいの笑みで

「レベル2の【ガスタの希望　カムイ】と【ガスタの巫女　ウィンダ】に、レベル4の【デブリ・ドラゴン】をチューニングッ！！」

葉月の場のモンスターの星が宙に舞い、一点の星になる。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光さす道となれ…ッ！！」

カッッ！！

「それって…葉月っ！？」

「っ！？　まさか…っ！！」

成瀬だけでなく、拓夜までもが驚きに満ちた表情を作る中…。

葉月は、想い人から譲り受けた大切な1枚を召喚した。

『ガスタの風の力を、そのカードを通して…君に託すよ』

「シンクロ召喚ッ！！　飛翔せよ【スターダスト・ドラゴン】！！」

【スターダスト・ドラゴン】

星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

葉月のフィールドに顕現せし、西条亨より託されし風の力【スターダスト・ドラゴン】。

葉月の召喚したスターダストを見上げ、拓夜は思わず

「なッ…何で葉月が…亨さんの【スターダスト・ドラゴン】を…！？」

「…俺が託したんだ」

「…ぇ？」

「ガスタの力を烏丸さんに託した時に、な？」

「……」

対峙する両者のモンスター。

葉月の【スターダスト・ドラゴン】。

成瀬の【イビリチュア・ソウルオーガ】。

成瀬はスターダストの登場に一瞬、驚きはしたものの、直ぐに冷静になり状況を確認する。

「ですがっ、スターダストの攻撃力は２５００!!　私の【イビリチュア・ソウルオーガ】の方が上です!!」

「それはどうかしら?」

「っ!?」

葉月の自信に満ちた笑みが、成瀬の懸念を吹き飛ばす。

そこで成瀬は、葉月の場に伏せられていた1枚のリバースカードに気がついた。

（あのカードは…葉月さんが1ターン目から伏せていたカード…っ!?）

「リバースカード、オープンッ!!【シンクロ・ストライク】!!」

【シンクロ・ストライク】
［罠カード］
シンクロ召喚したモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで、シンクロ素材にしたモンスターの数×５００ポイントアップする。

「このカードは、シンクロモンスターのシンクロ召喚に使用したシンクロ素材の数だけ、エンドフェイズまでその攻撃力を５００ポイントアップさせる!!【スターダスト・ドラゴン】に使用したシンクロ素材は3体!!」

［シンクロ素材］
デブリ・ドラゴン
ガスタの巫女　ウィンダ
ガスタの希望　カムイ

「よって、スターダストの攻撃力は１５００ポイントアップする!!」

【スターダスト・ドラゴン】
ＡＴＫ／２５００　→　４０００
ＤＥＦ／２０００

「攻撃力…４０００ッ！？」

爆発的に攻撃力を上昇させたスターダスト。
そして葉月は、反撃と言わんばかりにバトルフェイズへと突入した。

「バトルッ！！【スターダスト・ドラゴン】で、【イビリチュア・ソウルオーガ】に攻撃ッ！！　響け、シューティング・ソニック！！」

ズドンッッ！！

「キャァッ！！」

【烏丸葉月】

ＬＰ　／　２５００

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　５５００　↓　４３００

スターダストの一撃により、成瀬のソウルオーガが破壊された。

これにより、成瀬のフィールドは再びがら空きの状態になり、２人のデュエルは一進一退の激しい攻防を繰り広げていた。

（まさか…こんなに早くソウルオーガがやられるなんて…っ、予想外です！！）

（今の私にやれる手は尽くした…後は、自分自身を…っ、スターダストを信じるのみ！！）

一歩も引かない両者のデュエルに、拓夜や亨は多くを語らない。

それだけ成瀬と葉月、２人のデュエルに見入ってしまっていたからだ。

２人のデュエルはいよいよ、クライマックスへと突入する。

※

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　２５００
［手札］
なし
［モンスター］
スターダスト・ドラゴン
［魔法・罠］
なし

【成瀬花穂】
ＬＰ　／　４３００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

激しい攻防を繰り広げる葉月と成瀬。

葉月のスターダストが、成瀬のソウルオーガを破壊し終えた今。
葉月に対抗せんとばかりに闘志を燃やす、成瀬のターンが始まる。

「…私のターン」

デッキトップを握る指圧が強くなる。
葉月は亨からガスタを引き継いだばかりか、更には風の力【スターダスト・ドラゴン】をも受け継いでいた。
だが、自分だって…負けない。
負けたくない。
自分は葉月と同じように、リチュアを引き継いだ。
更に葉月と同様に、自分には拓夜の力…【ＨＥＲＯ】の力をも受け継いでいる。
今度は、自分の番だ。
前の葉月とのデュエルでは、葉月に対して有効な手を決める事ができず、無惨に敗北した。
もう、あんなのは嫌だ。

だから今度こそ、自分はこのデュエルに勝ちたい。

葉月に勝ちたい！！

その想いから、成瀬は自然とカードを握る指に力が入る。

それだけ、成瀬はこのデュエルに対して、真剣なのだ。

全ての激情を内に秘め、今…

成瀬のターンが始まる…！！

「ドローッ！！」

シュバッ！！

鮮やかにカードをドローした成瀬。

３枚となった手札を確認した成瀬はこのターン、賭け（勝負）に出た。

「手札の魔法カード【強欲なウツボ】を発動します！！」

【強欲なウツボ】
［魔法カード］
自分の手札から水属性モンスター2体をデッキに戻し、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「このカードは、手札の水属性モンスター2体をデッキに戻す事で、カードを3枚ドローする効果を持っています！！　私は手札の水属性モンスター【ヴィジョン・リチュア】と【イビリチュア・マインドオーガス】をデッキに戻して…！！」

手札を2枚をデッキに戻した成瀬は、デッキトップ3枚のカードを掴み取り

「カードを3枚っ、ドローッ！！」

手札を入れ替え、その3枚を確認し終えた成瀬の行動は早かった。

「私は墓地に眠る【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】の効果を使います！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／　８００
ＤＥＦ／　８００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地に眠るこの子を除外する事で、デッキからもう１枚のディアボリックガイを、特殊召喚します！！　来て、ディアボリックガイ！！」

成瀬のフィールドに現れし、拓夜から譲り受けたカード【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】。

「［Ｄ－ＨＥＲＯ］…あれは、拓夜くんの…？」

「ええ、花穂がデッキを組んでる時に、このカードなら入るんじゃないかな？って。丁度2枚余ってたし」

「…なる程」

特殊召喚されたディアボリックガイ。

更に成瀬は、手札から1枚のカードを掴み取り

「そして手札の儀式魔法【リチュアの儀水鏡】を発動します！！フィールドのレベル6モンスター【D－HERO ディアボリックガイ】をリリースして、【イビリチュア・マインドオーガス】を儀式召喚します！！」

ドドドドド…ッ！！

成瀬のフィールドに、エリアルの儀式進化態である【イビリチュア・マインドオーガス】が儀式召喚された。

「今回、マインドオーガスの効果で、墓地のカードはデッキに戻し

ません！！　葉月さん、このターンで決着をつけます！！」

「ッ！？」

堂々と宣言する成瀬に、葉月は思わず目を見開いた。

現在、互いのフィールドにはモンスターは1体ずつ。

【スターダスト・ドラゴン】。

そして【イビリチュア・マインドオーガス】だ。

互いの攻撃力は２５００と互角。

このままバトルを行ったとしても、互いのモンスターは相殺され、ライフを削る事はできない。

（どうやって決着をつけるつもり…？仮に新たなモンスターを通常召喚しても、私のライフはまだ２５００も残ってる。残された手札１枚で…成瀬さんは何を…！？）

懸念する葉月。

そして成瀬は、そんな葉月の懸念を吹き飛ばす切り札を、手札から

発動した。

「これがッ、私の切り札です！！　魔法カード【ミラクル・フュージョン】を発動します！！」

【ミラクル・フュージョン】
［魔法カード］
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「【ミラクル・フュージョン】ですって…ッ！？」

「このカードはフィールドか墓地から、決められたモンスターをゲームから除外し、そのモンスターを融合します！！　墓地の【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】と【ヴィジョン・リチュア】をゲームから除外っ！！」

カッッ！！

「融合召喚っ！！　氷結の英雄【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】
星８／水属性／戦士族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２０００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

成瀬のフィールドに現れし、氷結の英雄（ヒーロー）【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】。

「アブソルートＺｅｒｏは、自分以外の水属性モンスターの数だけ、攻撃力を５００ポイントアップします！！　私の場には、水属性モンスター【イビリチュア・マインドオーガス】がいます！！　よって、アブソルートＺｅｒｏの攻撃力は、５００ポイントアップです！！」

「…ッ！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】
ＡＴＫ／２５００　→　３０００
ＤＥＦ／２０００

勝敗は決した。

成瀬の場には、攻撃力２５００と３０００のモンスターが２体。
対する葉月の場には、攻撃力２５００のモンスターが１体のみ。

「行きます…バトルですッ！！」

トドメのバトルフェイズを開始する成瀬。

２人のデュエルは、勝ちたい気迫、執念に勝る成瀬の勝利に終わった。

※

デュエルを終えた2人を、拓夜と亨の2人は拍手で迎え入れた。

「2人とも、よく頑張ったな…！！」

「ああ。観ていて、色々と参考になったぜ！！　…あれ…花穂？」

2人の声をかける男性陣だったが、悔しさを露わにする葉月とは違って、成瀬はどこか上の空だった。

「…わたし…勝ったん…ですか？」

「ぇ？」

「そうよ、最後にあれだけの気迫で攻撃してきたのを…。ついさっきの事なのに、もう忘れちゃったわけ？」

「…！！」

ここに来て、成瀬は一つの壁を乗り越えた。

葉月とは入院生活から知り合った。

それまで幾度か彼女とデュエルをしてきたが、今までに葉月に勝てた試しがなかった。

それが今。

ようやく。

「今回は負けちゃったけど、次は今回みたいにはいかないわよ？」

「ぁ……っっ！！　はい！！　返り討ちにしちゃいます！！　ぁ～葉月さんにこうやって、一度言ってみたかった～！！」

「なっ！？　なんですってぇーーッ！！　あ、コラ！？　成瀬さん、待ちなさいよーッ！！」

走り回る成瀬と葉月。

そんな2人の様子を微笑ましく見つめる拓夜の前に、亨が立った。

「拓夜くん。君にも渡すモノがあるんだ」

「へ？」

そう言って亨は、上着のポケットから一つの封筒を差し出した。

それを受け取った拓夜は封を破り、中身を取り出してみた。

「…ッ！？　カード！！　ぇ、でも…これって…！？」

「それは…今度プロになる拓夜くんへの、俺からの贈り物さ。あ、中に白石からのもあるからな？何か前のデュエルの時に渡しそびれたって」

「…すげぇ。こんなにも…！！」

封の中には様々なカードが入っていた。

そのカードを見つめる拓夜の瞳は、純粋にキラキラと輝いていた。

「亨さん！！　ありがとうございます！！　お礼って訳じゃないッ

スけど…俺と、デュエルをして下さい！！」

この新カードを組み込んで、今の自分の力を試したい！！

その勢いから拓夜は、亨にデュエルを申し込んだ。

しかし…

「あ～すまない、拓夜くん。残念だけど、今の俺は君とはデュエルできない」

「ぇ…！？」

デュエルを断られた。

その事実に、拓夜はショックを受け、その理由を尋ねた。

「何で…！？」

「いや、その…言いにくいんだけど、烏丸さんにガスタとスターダストをあげた時に、自分のデッキの中からカードを結構な数を使っちゃってさ…デッキ枚数が根本的に足りないんだ」

「んなッ！？」

いや～ごめんごめん。

たはは…と、愛想笑いをする亨に、拓夜はガックリと肩を落とした。

「自分のデッキからカードを…って、亨さん。気前良すぎッスよ」

結局、デュエルはできなかった。

そんな気前良すぎる彼の性格を恨めしく思う一方で、拓夜はそんな彼の事もやはり好きだった。

自分たち、成瀬や葉月に対する愛情。

それが純粋に伝わってくるからだ。

新たな力を手にした拓夜たち三人。

彼ら三人の物語は、それぞれの新たな局面へと向かう。

［今回、拓夜が手に入れたカード］
＊レッド・デーモンズ・ドラゴン
＊大地の騎士ガイアナイト
＊Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション
＊スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン
＊地天の騎士ガイアドレイク

精霊合戦！？　成瀬　ＶＳ　葉月　（後書き）

白石「ふぅん…今回、出番が全くと言って良いほど無かった、この白石で送ってやる」

Q．拓夜にカードを送ったのは良いけど、なんでレモンとスカノヴァ？

A．ハッ、なに…簡単な事だ。
ヤツはデュエルで１番になるのが夢なのだろう？デュエルで１番…即ち、デュエルキングこそがッ、拓夜の目指すべき目標という事になる！！
キング（王者）には、その風格に見合ったモンスターこそ相応しい…と思ったまでだ。
なに？ヤツには既に強力なモンスター【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】がいる、だと…？
ふぅん…“知ったことか！！”

Q．今回、白石さんは全くといって良いほど登場しませんでしたが、何をしていたんですか？

A．ム、この俺のプライベートを知りたいというのか？
ふぅん…、物好きなヤツめ…
その日の俺は、朝から多忙だった。

初音〇クの着ボイスで爽やかな朝を迎え、午前中はランニング５?をこなす。
途中、犬の散歩をする近所の麗しき美女の尻を眺めつつ、目の保養もこなすこの俺に隙はない。
なに?
それではストーカーだと?
ふぅん…“知ったことか!!”

Q.結締さんは、新たな恋愛フラグが立っているのに、白石さんはなぁぁぁんにもなし?

A.なにィィイッ!?
結締のヤツがッ…恋愛フラグだとォォオオッ!?
ヌゥゥ…おのれ…ッ!!
れれれ冷静になれ…ッ、俺には美少女がいるではないか!!
そうだ!!　美少女への愛がある限り、俺はまだ終わりではないッ!!

なに?
美少女はもう西条のヤツと……

ふぅん…“知ったことか!!”

しかし…結締のヤツに恋愛フラグだと？
相手はいったい誰だ…ッ！？
こうしてはおれん…とにかく結締に連絡だッ！！

Ｔｒｒｒ…Ｔｒｒｒ…Ｔｒｒｒ…

『ガチャ』

むっ、結締ッ！！　貴さｍ…

『お掛けになった電話は、電波の届かない場所にあるか…電源が入っていない為…』

むっ、むぅっ、結締ェェェエエッッ！！！！

番外編「れっつ、すぴーく、いんぐりっしゅ☆」（前書き）

今回の話は、東区デュエル大会の時期に遡ります。

拓夜たちが、白石や結締が主催するデュエル大会に参加していた頃の、西条亨とマナの話です。

番外編「れっつ、すぴーく、いんぐりっしゅ☆」

※

西条亨はアパートの自室でＤＶＤを観ていた。

英語版、日本語字幕の『ハリー○ッターと秘密の○○』だ。

テレビからは普段、全く聞き慣れない英会話が聞こえてくる。

昔、学校の英語の授業を真面目に受けていなかったせいなのだろうか…

字幕が無かったら絶対にテレビの中のコイツ等が何を喋っているのか分からない。

「いや、違うな…」

西条亨は呟く。

「仮に英語の授業を真面目に受けていたにしても…字幕無しでコイツ等が何を喋っているのかが分からないに決まってる！！無理無理無理っ！！」

テレビのスイッチを切り、床に寝転ぶ西条。

そんな西条は「はぁ…」と心底、落ち込みながら溜め息を漏らした。

「何で俺なんだよ…中島さん」

誰に聞くでもない。

西条は部屋の天井を見つめながら、今に至る経緯を思い出していた。

デュエルフィールドが完成して、その起動実験をしていた最中のこと。

西条は突如、理事長である中島から理事長室に呼び出された。

理事長室に向かい、どうしたのか尋ねると、中島理事長は「西条ちゃん、アメリカに行きなさい！理事長命令よ！！」と、急展開に話を進められてしまった。

何でもアメリカにいる中島理事長の友人で、どこぞの会社の社長がデュエルフィールドについて、話をしたいとの事らしい。

で、なぜか西条がそれに選ばれてアメリカに行く事になった訳で、後は成り行きで彼の相方ことマジシャン・ガールも一緒にアメリカに行く事になった訳だが…

「はぁ…」

アメリカ行きの事を考えれば考えるほど、気分がとても憂鬱になってくる。

西条は本日、何度目か分からない位に溜め息を吐き続けた。

・

・

・

・

・

そうして、しばらくの間寝転がっていると、バンッ!!っと部屋のドアが勢い良く開けられた。

「さいじょお、ただいまー!!」

「あ～、お帰り」

「あれ?どしたの、さいじょお?何か元気ないね?」

ドアの向こうからトテトテと歩み寄ってくる相方のマナことブラック・マジシャン・ガール。

西条は寝転がりながらマジシャン・ガールを見ると「うぉっ!?」と驚き、目を閉じた。

（あ、あぶねぇ…危うくコイツのスカートの中が見える所だった…前に結締の奴がコイツのスカートの中を覗いたのがバレて、顔をおもいっきり蹴飛ばされていたからな…危うく二の舞になる所だったぜ！）

買い物袋を両手いっぱいに抱えているマジシャン・ガールは、そんな西条の心境に気付く事なく「？」と首を傾げ、その場に座り込んだ。

「ねぇ、さいじょおさいじょお、英語の勉強はもう終わったの？」

マジシャン・ガールからの問い掛けに西条は起き上がり、手元に置いてあった英語の辞書を手に取りながら

「まだ、ってか無理っ！！分からねぇよ全然」

難しい顔をしながら辞書を開く西条。

辞書の中は西条にとって未知の言葉がギッシリと詰まっており、見れば見る程に頭がクラクラしてきそうだった。

「まぁ今更英語を勉強した所で全部マスターできる訳じゃねぇケドさ、それでもヤッパ…話せなくても少しは理解しとかねぇとな」

「うん、そうだね！さいじょおは偉いね！そうやってちゃんと自分から進んで修行するんだもんね！」

まるで他人事の様に言うマジシャン・ガールに、西条は呆れる様にして言った。

「お前な…分かってんのか？俺だけじゃなくてお前も一緒にアメリカに行くんだぞ？」

「うん、分かってるよ」

「アメリカと日本じゃ言葉が違うんだぞ？ＥｎｇｌｉｓｈだぞＥｎｇｌｉｓｈ！？」

「ＹＥＳ！（うん！）」

「…ＹＥＳ位なら分かるか…所でお前さ、英語は出来るのか？英語で喋れる所喋ってみ？」

西条の問い掛けにマジシャン・ガールは笑顔で答えた。

「Ｉ　ｄｏｎ'ｔ　ｍｉｎｄ，ｂｕｔ　ｃａｎ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｗｈａｔ　ｉ　ｓａｙ　ｉｍｍｅｄｉａｕｌｙ？（別に良いけど、さいじょお解る？そんな直ぐに）」

「…は？」

西条は目の前が真っ白になった。

「ちょ、ちょっと待て！？」

西条は何とか気を持ち直し、信じられないものを見る様な目で、マジシャン・ガールに尋ねた。

「な…何でお前っ、そんな饒舌に喋れるんだよっ！？」

「え、何でって…さいじょお、不思議に思わなかった？」

「…何を？」

マジシャン・ガールはやれやれとした素振りを見せ、キョトンとしている西条に説明を始めた。

「いい？私は精霊界のデュエルモンスターで、ここは私からしたら異世界で、人間界なんだよ？」

「ぅ…！？」

「人間界には人間界の言語がある様に、精霊界にも精霊界の言語が

あるの。私からすれば精霊界の言語に比べたら…こっちの人間界の言語のが簡単かな?まぁ日本語に慣れてたら確かに英語は小難しく感じるかもね、英語はその主語や述語の単語単語でその意味合いを当てはめて話していけば良いけど、日本語だとその順序が逆でも意味合いとしては通じる所があるよね?」

マジシャン・ガールが説明している最中(さなか)、西条は更にズーーーンと落ち込んでいく。

「ちょっとさいじょお、ちゃんと聞いてるの?」

「ハハハ…、って事はなんだ…お前って実は凄っごい賢い奴で、アメリカなんて行った日にゃ俺だけ何を喋っているか解らずに一人置いてけぼりな訳なんだな?」

生気が抜け出す勢いで凹みに凹む西条は机にうつ伏せでぶつぶつと呟いた。

「え?さ、さいじょお…しっかりしてよ!?　さっきまでの勉強に励むさいじょおはどおしちゃったの?」

「何かなぁ…うん、男として自信なくしたって感じで…」

周りにどよ~んとした暗い雰囲気を漂わせる西条に、マジシャン・ガールは西条の後ろから西条を抱き締めながら囁いた。

「大丈夫だよさいじょお…頑張った分だけ、無駄な事なんてないんだよ?私も協力するから、一緒に英語を頑張ろ?私、物事に一生懸命になって取り組むさいじょおが大好きだよ!」

「マジシャン・ガール…そうだな、頑張った分だけ無駄にはならない…か」

「そうだよ、私もそうやってお師匠サマの厳しい魔術とかも習ってきたんだもん!頑張れば、さいじょおも出来るよ!!」

「いや、魔術は俺にゃ無理だろっ!?」

※

空港には大勢の人で溢れかえっていた。

西条亨とマジシャン・ガールの二人は空港のメインゲートを通ると、先に到着していた覆面レスラーが被るようなマスクをした、巨漢でオカマ口調で話す中島理事長に出迎えられた。

「西条ちゃーん!!マナちゃーん!!こっちよぉー!!」

「ぅわっ！？　なんだアリャ…！！」

西条は周りの視線を気にし、他人のフリをして顔を背けるが、隣を歩くマジシャン・ガールは素直に

「店長さん！こんにちわー！！」

と元気に挨拶してくれた為に、西条はガックリと肩を落とした。

（ぁぁぁ…マジシャン・ガールの奴、んな素直に反応するんじゃありませんっ！！　痛い、周りからの視線が痛いっ！！　あの変なオカマとアイツ等は知り合いなんだ～って視線がザクザク刺さって痛いんです！！）

西条の気持ちなどいざ知らず、中島理事長とマジシャン・ガールは互いに握手を交わし

「店長さん！今日はよろしくお願いしまぁす！」

「いいのよぉマナちゃん！悪いわね、わざわざアナタまで一緒させちゃって」

「そんな事ないですよ店長さん！私、アメリカに行くのスッゴい楽

しみなんです！！」

はじゃぐマジシャン・ガールに西条は軽く溜め息を吐き、観念して自分も中島理事長に挨拶をした。

「マナ、今の中島さんは店長じゃなくて理事長だって前に説明しただろ？理事長、今日はよろしくお願いします」

頭を下げる西条に、中島は「西条ちゃん、よろしくね！」と、ウィンクしながら答えて

「じゃ、ジェットに乗り込むわよ？2人ともついてらっしゃい！」

中島はそう言うと二人を先導して歩いていく。

そんな中島に誘導されながら、マジシャン・ガールはウキウキしながら西条に話しかけた。

「さいじょおさいじょお！私、ひこーきって初めてだよ！！」

楽しそうに話すマジシャン・ガールに、西条はふと思った事を尋ねてみた。

「あっち（精霊界）には飛行機はないのか？」

「ん～、あるにはあるケド…乗ったことはないね。あれだよね？人間界のひこーきには機内食ってのがあって、食べ放題なんでしょ？」

マジシャン・ガールの放った一言に西条は呆れた様に溜め息を吐いた。

「結局お前は…食い物が目当てなだけなんだな…」

「残念だけどマナちゃん。今回乗るジェットには機内食はないのよ」

中島は後ろを振り返り、申し訳なさそうにマジシャン・ガールに謝った。

「えぇ～、そんなぁ～っ！？」

「あれ？でも飛行機なら距離とかによって、大抵の奴なら機内食はある筈なんじゃ…？」

「そうよね、普通はそうなのよ西条ちゃん！でも今回は無いのよ！」

そう言うと中島はピタッと通路の真ん中で止まり、『関係者以外立ち入り禁止』の文字が書かれた扉をガチャリと開ける。

「さ、ここから行くわよ！」

澄ました顔で中に入る様に促す中島に、西条やマジシャン・ガールは慌てて

「いやいやいや！？　俺達そこ入れないでしょ！？」

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫よぅ！！　この先を抜ければ、一気に滑走路に出ちゃうんだからぁ！！」

「いやいやいや！？　だからパスポートは！？　それにアメリカ行きの航空券を買ってないし！？」

至って当然の反応を見せる西条に中島は「もぅ、仕方ないわねぇ…」と言い、近くを通りかかった空港の従業員に声をかけた。

「ねぇえ、ちょっとソコのアナタ？」

「はい？何で…っ！？　こ、これは中島様っ！？」

「頼んでおいたアタシのジェット、ちゃんと準備できてるぅ？」

「勿論で御座います！！　ご指示通り、こちらのゲートを出て直ぐの所にご用意してあります！！」

「そぅぉ、アリガト」

「はっ！！」

中島と従業員とのやり取りを見て唖然とする西条とマジシャン・ガールの二人。

中島はそんな2人を見て「ほら、2人とも…早く行くわよ?」と言い、2人の手を引いて行った。

※

扉をひとつ、ふたつと潜り抜ける。

西条とマジシャン・ガールの目の前には広大なアスファルトの大地に、轟音が鳴り響く飛行機のエンジン音。

吹きすさぶ風に流れる上空を漂う雲。

そして

「2人とも、あれがアタシ達の乗るジェットよ！！」

中島が指差す先には、一機の小型のジェット機が用意されていた。

「えっ！？」

「あれ…ですか？」

2人は唖然とその機体を見つめた。

その機体は全体的に丸みを帯びたシルエットに淡いピンク色のカラー。

ウィングは大小含めて左右に4枚ずつ装着されており、ジェットの前方となる顔の部分には両サイドに丸く黄色いライトが設置されていた。

その姿形はまるで…

「中島さん…あのジェット機のシルエットって…！？」

「ふふぅん、どぅお？マイカーならぬマイジェットを独自にカスタマイズした、モデル『救世竜ーセイヴァードラゴン』スタイル！！
ナカジマ使用よ！！」

大きく仰け反り、自慢するかの様に言う中島に、西条はすかさず

「いやいやいやいやいやっ!?　ちょっ、待って下さいよ!!　な、何?何なんですか一体!?『救世竜ーセイヴァードラゴン』モデルって!?　は?あれって何!?　中島さんの私物なの!?」

慌てふためく西条。

とは対照的に、隣でナカジマジェットを見つめるマジシャン・ガールは

「キャャァアアッ!!スゴいスゴいッ!!店長さん!あのひこーき、とっても良いと思いますっ!!」

「ふふぅん、そぉでしょ!?　流石はマナちゃん!!　美的センスが違うわね!」

「さいじょおも見てみて!!あれスッゴい良く出来てるよ!!本物のセイヴァードラゴンみたい!!」

「エェェッ!?そうかなぁ…?」

「うん、まさしく本物なんだよ!!」

「いやいやいやっ!?　本物なワケないから!!　仮にもし本物だったら…ナニ?あれに乗ってくって事は…俺達アレだぞ!?　アイ

ツにチューニングされて、終いにゃシンクロ召喚だぞッ！？」

「さいじょお、何を言ってるのかサッパリなんだよ？」

※

中島ジェットは速かった。

それはもうとにかく速かった。

西条たちは気がつくと、いつの間にかアメリカの大地に立っていた位に速かった。

「ヲィッ！！　ちょっと待て！！　なんか途中かなりはしょり過ぎてて、描写がおかしな事になってるぞ！？」

「…？さいじょおさいじょお、誰に向かって喋ってるの？」

「さ、着いたわよ2人共！ここが、今回のデュエルフィールドの件で依頼が入った会社…ユナイテッド・イーグルよ！」

「……」

西条の訴えかける視線を余所に、中島理事長は話を進めていく。

「この会社の社長は、アタシの大学時代からの友人でね…ちょうど彼も仕事で行き詰まってるみたいだったから、少しそれに関する話しをしてあげよう、って事になったのよ」

三人の前に聳え立つ大きな門。

レンガ造りの外壁は、この会社の歴史を物語っており、どこかレトロな雰囲気を漂わせながらも威厳に満ちた造りになっていた。

正門を潜った先に広がる広大な中庭。

中央の噴水には、恐らくこの会社の社長を象った等身大の銅像が建てられている。

「この銅像の人物が、ユナイテッド・イーグルの社長であり、今回アタシ達が会うことになっているダニエルよ」

「この人が…（どことなくオ〇マ大統領に似てる…）」

「へぇ〜、しゃちょー位の偉い人になると、こうやってお人形さんが作って貰えるの？」

「いや、それはまた違うと思うぞ…」

マジシャン・ガールのどこかズレた質問にガックリと肩を落とす西条。

すると、三人の背後から「ＨＡ，ＨＡ，ＨＡ，ＨＡ，ＨＡ～！！」と、漫画的な笑い声が聞こえてきた。

三人がその声の聞こえてきた方を振り向くと、そこには

「ｃｕｔｉｃｌｅ－ｇｉｒｌ、ユーは中々オモシロい事を言いますネー☆」

「あっ！？　さいじょお、見てみて！お人形さんが喋ってるよ！！」

「馬鹿、マジシャ…じゃなかった、マナ！！　アレは本物だ！！」

「西条ちゃんも、指を差さないの！フンッ！！」

「ぁ痛ッ！？」

ゴチッと西条に拳骨を見舞った中島理事長は、現れた本物の依頼者に挨拶を交わした。

「ゴメンナサイねダニエル。出会い頭早々に失礼しちゃったわね？」

「ノンノン、ワタシはコレっぽっちも気にしてナイですヨ☆それにしても久しぶりデース、Ｍｒ．ナカジマ！！」

「思ったよりも元気そうじゃないの！安心したわダニエル！」

久しぶりに会う友人との対面に盛り上がる中島理事長とダニエル。

西条とマジシャン・ガールは、完全に置いてきぼりだった。

「なぁ、マナ…」

「うん？どしたの、さいじょお？」

親しげに中島理事長と話すダニエルを訝しむような目で見つめながら、西条は今の自分の心境を吐露した。

「あのダニエルって人…カタコトだけど普通に日本語で話してるじゃん？」

「だね。さいじょおが頑張って英語を勉強してきた意味がなかったね」

「うぉぉおお…！！　俺の努力って何だったんだぁ…！！」

ズーーーンと落ち込む西条であったが、そんな彼の様子に気付いたダニエルが、西条に手を差し伸べた。

「元気出して下サイ☆それよりも遥々アメリカまで来て下サリ、凄く感謝してマース！！　ワタシはこの会社の社長で、ダニエルと言いマス☆」

「ダニエルさん…！！　申し送れました。俺はトリティニーグループカード部門の、ＯＣＧ研究会に所属しています。西条亨と言います。お会いできて光栄です、ミスター！」

「Ｏ…ＯＣＧ研究会ッ！！　ソレは本当デースかッ！？」

西条が名乗る途端に、ダニエルの表情が変わった。

黒人でショートボブ、タラコ唇で絵に描いたようなダンディなイメージだったダニエルのイメージが、彼の名を聞いた途端に無邪気な子供のような表情に変わったのである。

「Ｍｒ．ナカジマ！！　ビッグサプライズとはこの事だったのデスね！！」

ダニエルのテンションの変化に着いていけず、唖然とする西条とマジシャン・ガール。

そんな彼らの視線をキャッチしてか、中島は西条とマジシャン・ガールの２人に補足説明をした。

「言ってなかったわね…ダニエルはＯＣＧ研究会の大ファンなのよ。だ・か・ら、西条ちゃんにマナちゃんを連れてきたって訳！」

「は、はぁ…」

「Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ☆Ｍｒ．ナカジマ！！　今日は何てｖｅｒｙｈａｐｐｙな日なんＤＡ☆」

テンションが上々なダニエルは、次にマジシャン・ガールの手をとった。

「ｃｕｔｉｃｌｅ－ｇｉｒｌ。アナタもようこそ、お越し下さいマシタ」

「ぇと…初めまして、ダニエルさん！私は、西条マナと言います！」

「Ｏｈ～☆まさかｃｕｔｉｃｌｅ－ｇｉｒｌも、あのＯＣＧ研究会の…！？」

「ＹＥＳ☆」

「最ッッ高にＨＡＰＰＹデース！！　神よ、ワタシは今日という日に感謝しマース！！」

もはやテンションが上々どころか、超カットビングするダニエル。

そんなダニエルに、中島理事長は

「喜ぶのも良いケド、ダニエル。そろそろお仕事の話しをしない？」

中島から言われた途端、はしゃぐ子供のような表情から一転、キリッとしたビジネスマンの表情へと切り替わるダニエル。

「ＯＫ、ではワタシのオフィスへと案内しマース」

※

ダニエルに案内された三人は、大学の屋内にある彼のオフィスへと連れられてきた。

長椅子に座り、対面に腰を下ろしたダニエル。

彼の表情は真剣だった。

「マズ…Ｍｒ．ナカジマに来てもらった理由から話さなければなりませんネ…」

ダニエルはそう呟き、今の彼の現状を淡々と語りだした。

ダニエルはアメリカでも有数の大企業、その社長を務めるバリバリのビジネスマンである。

彼の経営する会社は、アメリカでも有名なゲーム機のメーカーであり、何年か前は日本でもよくその名を耳にし、爆発的な支持を得ていた。

しかし、ゲーム業界の競争は厳しい。

ゲーム業界の他社も、ダニエルの会社に負けじと必死になり、様々なハードを開発し、それに対応した人気ソフトを獲得していった。

ハードが良くても、ビッグタイトルとなるソフトのメーカーと契約する事ができずにいたダニエルの会社は、徐々に売り上げが低迷。

大規模なリストラを起こさない限り、社の存続が危ぶまれる状態にまで陥ってしまったのだ。

「そこでワタシは、ジャポーンのトリティニーグループに着目しマシタ…かのソリッド・ヴィジョンシステムを有効に使い、今や世界に名を轟かせる大企業。そして何よりも、遊戯王カードというビッグタイトル！！…ワタシはトリティニーグループと共同して、新たなゲームソフトの開発を考えてマース」

「ダニエル…トリティニーグループと協定を結ぶ事で、トリティニーグループにはどんなメリットがあるか…アナタなりの考察を聞か

せて貰えないかしら？」

「マズ、トリティニーグループにとってアメリカにおける企業拡大の足掛かりになると考えマス。海外でその技術を展開していく事は、トリティニーグループにとって悪くない案だと思いマスが？更にはゲームソフトをトリティニーグループが…ハードをユナイテッド・イーグルで！今後のゲーム業界への介入にも繋がりマース！」

ダニエルの案を聞き、中島は「そうね…」と相槌をうつ。

しかし

「残念だけど、ダニエルの案はスンナリと上層部に通りそうに無いわね」

「Ｗｈａｔ’ｓ！？」

「今やトリティニーグループは、世界に名を轟かせる大企業よ。もう既に、アメリカにおけるシェアも視野に入れてあるって、副社長が前に言ってたわ。あの敏腕副社長が言うんだから、もう既に他社との会談が進んでいるでしょうね…」

「ソンナ…バカな…ッ！？」

ダニエルはガックリとうなだれてしまった。

それだけ、藁にも縋る気持ちで今日と言う日を待ち望んでいたのだ

ろう。

自分が仕事を見つけてこなければ、部下達の明日はない。

ダニエルの両肩には、多くの社員の運命が課せられているのだ。

「ワタシは…トリティニーグループが開発したデュエルフィールド…アレを使って、アメリカの多くの子供たちに笑顔を与えたかったんデス。子供たちの笑顔をみる為の…それが…こんなにも…難しいだなんて…！！」

「ダニエルさん…」

ダニエルには、多くの部下達の未来が課せられている。

だが、それと同じく、多くの子供たちの笑顔を望んでいた。

多くの子供たちの笑顔、それは西条も同じだった。

デュエルにおける交流と発展、その未来。

それが、ＯＣＧ研究会の夢でもあり、目標なのだ。

「中島さん…ダニエルさんにチャンスを与えてやって下さい…！！」

「西条ちゃん…？」

「西条ボーイ…！！」

「子供たちの笑顔の為…それは俺たち、ＯＣＧ研究会の目標でもあります。同じ目標を掲げるダニエルさんの力に、俺はなりたい。お願いします、中島さん！！　この件で、副社長に一度掛け合って貰えないでしょうか？」

「私も…さいじょおと同じ気持ちなんだよ、店長さん！」

「マナちゃんまで…」

ダニエルは思わず目を丸くした。

まさかＯＣＧ研究会のメンバーに、こうして助力してもらえるとは思ってもみなかったからである。

しかし、これはチャンスだ。

「Ｍｒ．ナカジマ！！　お願いしマス！！」

腕を組み、大きく鼻で息をする中島。

「ぁあもう、分かったわよ！何かアタシ１人が悪者みたいじゃない！」

中島のその言葉を聞き、ダニエルに再び笑顔が戻った。

すると

「でもダニエル、１つだけ…条件があるわ」

「条件…デスカ？」

中島の繰り出した条件とは…？

「…ダニエル。ここにいる西条ちゃんと、デュエルをして頂戴…！！」

「ッ！？」

中島の出した条件。

それはダニエルと西条とのデュエルであった。

「アナタ達２人のデュエルで…ワタシに熱い魂をぶつけて頂戴ッ！！」

「中島さん…」

「ナルホド…流石トリティニーグループ。物事の解決には、デュエ

ルで決着を…オモシロい案デスね！！」

腹をくくったのか、ダニエルは立ち上がると、デスクの引き出しを開けて、中からデッキを取り出した。

「西条ボーイ、ワタシとデュエルをして下サーイ！！　ユーを倒し、ワタシはこのプロジェクトを何としても成功させマース！！」

スイッチが入ったダニエルの表情は、まさに決闘者そのものであった。

「…さいじょお」

「……」

自分の会社の存続を救う為。

そして自国の子供たちの笑顔の為。

ダニエルの瞳には、様々な想いが宿った闘志に満ちていた。

「西条ボーイ、準備が出来たら正門へ来て下サーイ。そこでワタシ達の真剣勝負をシタイと思いマース！！」

※

アメリカのゲーム会社、ユナイテッド・イーグル社の社長とデュエルをする事になった西条。

準備が出来たとの事で、先に部屋から出て行った中島理事長とダニエル。

部屋には西条とマジシャン・ガールの2人が残っていた。

机の上には、彼の39枚のデッキが置かれている。

「でもまさか…アメリカまで来て、デュエルをする事になるなんて、思ってもみなかったね」

「ああ…そうだな…」

デュエルをする事になり、どこか楽しそうに話すマジシャン・ガールとは対照的に、西条の声のトーンは低い。

「…どうしたの、さいじょお?」

「…迷ってるんだ。このデュエルに…」

自分の顔を覗き込むマジシャン・ガール。

西条は机の上に置かれたデッキを見つめながら、今の自分の心境を語った。

「ダニエルさんは社の存続を賭けて、死に物狂いで俺に挑んでくるだろう…そのダニエルさんの決闘（想い）は、子供たちの笑顔の為でもあるんだ…。俺だって、そんなダニエルさんを応援したい。だが……」

マジシャン・ガールには、西条の気持ちが理解できた。

たった数分の間だが、西条はダニエルの人間性が好きになったのだろう。

彼の掲げる夢を、西条自身も一緒になって応援したい気持ちも分かる。

マジシャン・ガールは、そんな西条の言葉を

「まさか、さいじょお…負けるつもりでいるの？」

「……」

西条は頷くでもなく、首を横に振るでもなく、顔をあげ、どこか虚ろな瞳で呟いた。

「分からない…そういう選択肢も有りかな？って思ってたけど、でも…ダニエルさんを応援したい気持ちもあるのに、俺の中で…デュエルに勝ちたいって気持ちもあるんだ…！！」

「…決闘者としての、魂だね」

自分がデュエルに負ければ、ダニエルはその夢へのチャンスを掴む事になるだろう。

だがしかし、おめおめと負ける事が嫌な自分もいる。

様々な感情の板挟みになり、今の西条は悩んでいた。

マジシャン・ガールは、そんな西条の気持ちがとても理解できた。

契約しているからではない。

永年、一緒に過ごしてきたからではない。

彼の事が好きだからこそ、彼の立場になって、自分ならきっとこう思う。じゃあ、さいじょおなら？と…。

そんな彼の心境を理解していたマジシャン・ガールは彼の隣に寄り添い、そっと手を握った。

「さいじょお。これだけは忘れないでね…！」

マジシャン・ガールは言う。

「さいじょおは優しいから、そうやってダニエルさんの事を励ましたい気持ちも分かるよ。でも、デュエルは…妥協はしちゃ駄目だと思うの。相手が真剣なら、尚更なんだよ？」

「マジシャン・ガール…」

真剣な面持ちで、自分の彼に対する思いを伝えたマジシャン・ガールは、その姿を一枚のカードに変えた。

（相手が真剣なら、尚更…か）

真剣勝負。

決闘（デュエル）とは、己が誇りと誇りの、魂のぶつけ合いなのだ。

そこに、妥協という言葉は入ってはならない。

「ありがとう、マジシャン・ガール。お陰で吹っ切れた…！！」

西条はカードに姿を変えたマジシャン・ガールにそう言うと、３９枚のデッキに彼女を投入した。

これでデッキの準備はできた。

そして何より、心の準備ができた。

西条は自分の信ずるデッキを手に、ダニエルが待つ正門へと向かった。

・
・
・

「…来マシタね、西条ボーイ…！！」

正門で待つダニエルと中島理事長の前に現れた西条。

中島から決闘盤を借りたダニエルは、腕に装着して西条に言い放った。

「さあ、始めまショウ☆」

「ダニエルさん…ああ！！」

西条も決闘盤を装着し、戦闘態勢に入る。

そして、西条亨　ＶＳ　ダニエルの決闘（決闘）が始まった。

『デュエル！！』

番外編「れっつ、すぴーく、いんぐりっしゅ☆」（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

今回は番外編小説という事で、本編の時間軸から言えば過去の話になります。

本編の続きを期待していて下さった方々、本当に申し訳ありません。

後一話分だけ、デュエルパートが残っておりますので、どうかお付き合いお願いします。

さて、過去分の内容でありますので、久々にマナが登場しました。

自分でも書いていて、マナは話のネタが尽きないキャラになってます（笑）

いつも夜、寝る前に、登場キャラ達が好き勝手会話するイメージをしながら就寝につくのですが、これが結構キャラが壊れてます（汗）

その中でもマナが我侭を言う→西条が振り回される→でも何だかんだで西条も楽しい。

というのがパターンですかね？

とにかく僕が言いたいのは、久しぶりにマナが出せれて嬉しかった！という事です。

今回の話を読んで、文章表現がこうしたら良いとか、ここは良かった、というご意見が御座いましたら、どしどし感想をお願いします。

上記の事に限らず、その他ご意見でも何でもＯＫです。

それでは今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

失礼しました。

番外編「西条　ｖｓ　ダニエル」（前書き）

さて、今回も番外編となります。

はたしてダニエルが使うデッキは何か！？

そして、勝負の行方は…！？

番外編「西条　ｖｓ　ダニエル」

※

三柱付属大学の理事長、中島と共にアメリカのゲーム会社、ユナイテッド・イーグルに向かった西条亨とマジシャン・ガール。

そこでは自社の存続、そして子供たちの笑顔を願うダニエルの思いを聞くことができた。

中島は、そんなダニエルの願いをデュエルを通して、自分にぶつけてみろと言う。

そうして、西条亨とダニエル。

２人のデュエルが今…！！

【先攻】西条　亨
ＬＰ／８０００

【後攻】ダニエル
ＬＰ／８０００

「いくぜ、ダニエルさん！俺のターン、ドローッ！！」

デッキからカードをドローした西条の、先攻ターンが始まった。
手札を確認し終えた西条は、その中の1枚に手を伸ばし

「魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！」

【ワン・フォー・ワン】
［魔法カード］
手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「このカードは、手札のモンスター1体を墓地へ送る事で、手札またはデッキから、レベル1のモンスター1体を特殊召喚する！手札の『ダンディライオン』を墓地に送り、デッキから『チューニング・サポーター』を特殊召喚ッ！！」

【チューニング・サポーター】
星1／光属性／機械族
ＡＴＫ／　１００
ＤＥＦ／　３００
［効果］
このカードをシンクロ召喚に使用する場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地へ送られた場合、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

西条のフィールドに、小さな愛らしい機械人形『チューニング・サポーター』が特殊召喚された。

「更に、墓地に送られた『ダンディライオン』のモンスター効果を発動！」

【ダンディライオン】
星３／地属性／植物族
ＡＴＫ／　３００
ＤＥＦ／　３００
［効果］
このカードが墓地へと送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」（植物族・風・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

西条のフィールドに、２体の綿毛トークンが守備表示で特殊召喚された。

「『ダンディライオン』は墓地に送られた時、フィールドにトークン２体を特殊召喚する。更に俺はチューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』を召喚ッ！！」

【デブリ・ドラゴン】

星４／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／１０００
ＤＥＦ／２０００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。このカードをシンクロ素材とする場合、ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

「『デブリ・ドラゴン』が召喚に成功した時、墓地に眠る攻撃力５００以下のモンスター１体を、効果を無効にして特殊召喚する！蘇れ、『ダンディライオン』！」

西条の墓地から特殊召喚された『ダンディライオン』。

僅か１ターン目から、西条のモンスターカードゾーンは５体と埋め尽くされた。

対峙するダニエルはただ唖然とし、西条のプレイを見ている事しかできなかった。

「いくぞ…！！　レベル１の『チューニング・サポーター』と、レベル３の『ダンディライオン』に、レベル４『デブリ・ドラゴン』をチューニングッ！！」

1＋3＋4＝8

西条のそれぞれのモンスターが宙を舞い、その力（レベル）を一つにする。

（ダニエルさん…アナタの願いは、このカードと共に…このデュエルで叶えてみせる…！！）

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光指す道となれ！！」

カッ！！

「シンクロ召喚！飛翔せよ、『スターダスト・ドラゴン』ッ！！」

【スターダスト・ドラゴン】
星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

西条のフィールドに飛翔せし、星屑の竜。

「更に、再び墓地に送られた『ダンディライオン』の効果により、綿毛トークン2体が特殊召喚される…！！」

【西条のフィールド】
スターダスト・ドラゴン
綿毛トークン　×4

西条は妥協しなかった。

デュエル開始前に、彼のパートナーから言われた一言が、彼の気持ちを奮い立たせたのだ。

「Oh…！！　流石は西条ボーイ…この展開力はいつ見ても興奮しマース☆」

「ダニエルさん…。シンクロ素材として墓地に送られた『チューニング・サポーター』の効果により、デッキから、カードを1枚ドロー！リバースカードを1枚セットして、ターンエンド！」

西条のターンが終了した事で、ダニエルのターンへと移行する。

（やはり西条ボーイは生粋のデュエリスト…今回のデュエルでは、ワタシに勝利を譲るかもと一瞬でも考えマシタが…どうやらそんな事は無い様デスね…！！）

「最初からＭＡＸデスね、西条ボーイ！ワタシも、Ｆｕｌｌｐｏｗｅｒで挑みマース！ワタシのターンッ！！」

ダニエルのターンが始まった。

デッキからカードをドローしたダニエルは

「ワタシはモンスター1体をセットし、更にリバースカードを2枚セットしマース！」

攻撃姿勢を魅せてきた西条に対し、ダニエルは堅実に守備を固めてきた。

（焦る必要はあーりません。じゃぽんの言葉には、動かざるコト山のゴトシとありマース☆）

「ワタシのターンは終了デス！」

ターンの終了宣言をするダニエルの表情は、自信に満ちていた。

言うなれば、掛かってこい！と言っている様にも見える。

「フ…、いくぜ！俺のターンッ！！」

自分のターンに移り、カードをドローする西条。

【西条　亨】
ＬＰ／８０００
［手札］
４枚
［モンスター］
スターダスト・ドラゴン
綿毛トークン　×４
［魔法・罠］
リバースカード　×１

【ダニエル】
ＬＰ／８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
裏側守備表示　×１
［魔法・罠］
リバースカード　×２

「手札の魔法カード『闇の誘惑』を発動！」

【闇の誘惑】
［魔法カード］
自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

「この効果により俺は、デッキからカードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する…！！」

デッキからカードを2枚ドローした西条は、手札の1枚を掴み

「俺が除外するカードは『ブラック・マジシャン・ガール』！」

「Ｗｈａｔ‘ｓ！？　そのカードは、西条ボーイのフェイバリットカードの1つな筈デハ…！？」

（マジシャン・ガール…今はそこで出番を待ってくれ…！！）

ダニエルが驚く中、手札交換を終えた西条は、バトルフェイズへと突入する。

「バトル！『スターダスト・ドラゴン』で、ダニエルさんのセットモンスターに攻撃！響けッ、シューティング・ソニック！！」

ズゴゥッ！！

スターダストの一撃がダニエルの守備モンスターに炸裂し、破壊した。

「この展開は予測通りデース☆戦闘破壊されたワタシのモンスター『ＸＸ（ダブルエックス）－セイバー　エマーズブレイド』のモンスター効果を発動しマース！」

【ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド】
星３／地属性／昆虫族
ＡＴＫ／１３００
ＤＥＦ／　８００
［効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル４以下の「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「エマーズブレイドが戦闘破壊された時、ワタシのデッキからレベル４以下の【Ｘ－セイバー】を特殊召喚する事ができるのデース！カモン☆『Ｘ－セイバー　エアベルン』！」

【Ｘ－セイバー　エアベルン】

星３／地属性／獣族
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／　２００
［効果・チューナー］
このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに１枚捨てる。

「【Ｘ－セイバー】…ッ！！」

ダニエルの扱うモンスター群を見て、西条は思わず目を見開いた。

Ｘ－セイバーシリーズは、登場当時こそクセが強い効果のモンスターが多く、日本では一部のカードを除いて余り使われていなかったカード達だ。

しかし、海外版のカードで登場した、新たなＸ－セイバーシリーズが海外では猛威を奮い、一気に環境のトップクラスに躍り出たシリーズなのだ。

西条自身、その事は聞いたりはしていたが、未だこのシリーズとデュエルした経験がない為に、彼の心臓はドクンッ、と跳ね上がった。

「海外のトップクラスのデッキが相手か…流石にダニエルさんも本気、って訳だ…！！」
（マジシャン・ガールに活を入れてもらって助かった…下手なデュエルをしたら、それこそ本当にダニエルさんに失礼だったな…）

自分にとって未知の相手に、西条は決闘者として胸が熱くなってきた。

「リバースカードを1枚セットして、ターンエンド！」

「デハ、ワタシのターン！ドローッ！！」

ダニエルのターンに移り、彼の扱う【Ｘ－セイバー】が動き出した。

「じゃぽんの言葉には、速きコト風のゴトシ…と有りマース！手札のマジックカード『ワン・フォー・ワン』を発動しマス！」

【ワン・フォー・ワン】
［魔法カード］
手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。手札またはデッキからレベル1モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「ワタシの手札からモンスターカード『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を墓地へ送り、デッキより『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』を特殊召喚しマース☆」

【ＸＸ－セイバー　レイジグラ】
星1／地属性／獣戦士族

ＡＴＫ／　２００
ＤＥＦ／１０００
［効果］
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。

ダニエルのフィールドにカメレオンの戦士、レイジグラが特殊召喚された。

「レイジグラが特殊召喚された事で、そのモンスター効果発動デェッス☆このカードが召喚ｏｒ特殊召喚された時、墓地の【Ｘ－セイバー】を手札に加える事ができマース☆」

そう言い、ダニエルが手札に加えたカードは…

「ワタシは『ワン・フォー・ワン』のコストで墓地へ送った…『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を回収しマース！」

（…上手い！手札コストをモンスター効果で補ってきた…！！）

「そして手札の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』は通常召喚はできマセンが、ワタシのフィールドに【Ｘ－セイバー】が2体以上存在する場合のみ、手札から特殊召喚する事ができるのデース！」

現在、ダニエルのフィールドには『Ｘ－セイバー　エアベルン』に『ＸＸ（ダブル・エックス）セイバー　レイジグラ』がいる。

フォルトロールの召喚条件は、容易に満たされていた。

「カモン☆『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』！」

【ＸＸ－セイバー　フォルトロール】
星６／地属性／戦士族
ＡＴＫ／２４００
ＤＥＦ／１８００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターが表側表示で２体以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、自分の墓地に存在するレベル４以下の「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

ダニエルのフィールドにフォルトロールが攻撃表示で特殊召喚された。

「そしてフォルトロールの効果を発動しマース☆フォルトロールは１ターンに１度、墓地のレベル４以下の【Ｘ－セイバー】１体を特殊召喚する事ができマース☆」

「なにッ！？」

「カモン☆『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』！」

次々とモンスターを展開していくダニエル。

その数は、既に４体のモンスターが出揃っていた。

［ダニエルのモンスター］
ＸＸ－セイバー　フォルトロール
Ｘ－セイバー　エアベルン
ＸＸ－セイバー　レイジグラ
ＸＸ－　エマーズブレイド

ゴゴゴゴゴ…！！

ダニエルから放たれる凄まじい熱意。

口調が雰囲気を茶化しているようにも感じられるが、彼の展開は西条にとって、鬼気迫るものがあった。

頬から一滴の汗が流れ、思わず息を呑む程だ。

「参りマス…レベル６の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』に、レベル３の『Ｘ－セイバー　エアベルン』をチューニング☆」

6＋3＝9

ダニエルの2体のモンスターが高く跳躍し、その力（星）を1つにする。

「今こそ集え、円卓の騎士！漲るＰｏｗｅｒを解放せヨッ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！　カモン☆『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』！！」

【ＸＸ－セイバー　ガトムズ】
星９／地属性／獣戦士族
ＡＴＫ／３１００
ＤＥＦ／２６００
［シンクロ／効果］
チューナー＋地属性モンスター１体以上
自分フィールド上に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体をリリースして発動する。相手の手札をランダムに１枚捨てる。

ドンッッ！！

赤いマントを翻し、重鈍な甲冑を身に纏うＸ－セイバーの総司令、ガトムズが参上した。

「攻撃力が…３１００のモンスター…！！」

「西条ボーイ、驚くのはまだ早いデスよ？ワタシはガトムズのモンスター効果を発動しマース☆自分フィールドの【Ｘ－セイバー】１体をリリースする事で、相手の手札１枚をランダムにデストロイしマース☆」

「ッ！？」

「ワタシは『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』をリリースし、西条ボーイの真ん中の手札をポイしマース☆」

西条の手札は３枚。

西条は指定された手札の１枚『マジシャンズ・ヴァルキリア』のカードを墓地へと送った。

「くっ…！！」

「更にワタシはこの瞬間、リバーストラップを発動しマス！『ガトムズの緊急指令』デース！！」

【ガトムズの緊急指令】
［罠カード］
フィールド上に「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、自分または相手の墓地に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター2体を選択して発動する。選択したモンスター2体を、墓地から自分フィールド上に特殊召喚する。

「このトラップはワタシのフィールドに【Ｘ－セイバー】が存在する時に発動デキ、その効果は、墓地の【Ｘ－セイバー】2体を特殊召喚しマース☆」

「ッ！？」

ダニエルのフィールドには『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』に『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』の2体が存在している。

ダニエルはここから更に、モンスターを展開しようというのだ。

「墓地よりカモン☆『Ｘ－セイバー　エアベルン』！！『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』！！」

ダニエルのフィールドに、シンクロ素材として墓地に送られた2体のモンスターが蘇った。

「レイジグラが特殊召喚された事デ、墓地の【Ｘ－セイバー】1体を手札に加える効果を発動しマース☆ワタシは墓地の『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』を回収ッ！！」

墓地よりフォルトロールを手札に加えたダニエル。

「そして手札のフォルトロールは、ワタシのフィールドに【Ｘ－セイバー】が2体以上存在する場合に、特殊召喚できマス！カモン☆フォルトロォーゥル！！」

ダニエルのフィールドにフォルトロールが特殊召喚され、西条のフィールドと同じく、ダニエルのフィールドにも計5体のモンスターで埋め尽くされた。

【西条のモンスター】
スターダスト・ドラゴン
綿毛トークン　×4

【ダニエルのモンスター】
ＸＸ－セイバー　ガトムズ
ＸＸ－セイバー　レイジグラ
ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド
ＸＸ－セイバー　フォルトロール
Ｘ－セイバー　エアベルン

圧倒的な展開力。

西条も1ターン目に、計5体のモンスターを揃えた。

しかし、その内容は幾分か守備的なものに過ぎない。

だが、ダニエルは違った。

ダニエルの展開は守備的な西条とは違い、攻撃的な姿勢だ。

「じゃぽんの言葉にはこう有りマース…攻める時は比のゴトシ…！！」

「ダニエルさん…火の間違いだぜ…ソレは…！！」

「Ｏｈ…ミステイク…！？　ｂａｄ、余裕で居られるのも今の内デースよ、西条ボーイ！バトゥルッ！！」

遂にバトルフェイズへ突入するダニエル。

その先陣を斬ったのは

「『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』デ、西条ボーイのフェイバリットカードの1『スターダスト・ドラゴン』にＡｔｔａｃｋデース！！」

剛腕を振るい、ガトムズがスターダストに特攻する。

「フッ…迂闊だぜ、ダニエルさん！！」

「Ｗｈａｔ＇ｓ！？」

不敵な笑みを浮かべる西条。

その彼は、自分の場に伏せてあった2枚のカードの内、1枚を発動した。

「リバースカード、オープン！！『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！！」

【聖なるバリアー ミラーフォース ー】

［罠カード］

相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「ミ…ッ、ミラーフォース！？」

「このカードは、相手攻撃モンスターを全て破壊する！！　俺のモンスターを全滅させる為に、全て攻撃表示で特殊召喚した事が裏目に出たな！！」

『やった☆これで社長さんのモンスターは、全て破壊なんだよ！』

除外ゾーンからデュエルを観ていたマジシャン・ガールは、思わず喚起の声をあげる。

しかし

「甘いデスよ、西条ボーイ…ワタシの本気を、ナメて貰ってハ困りマース！！　西条ボーイのミラーフォースにカウンターし、リバーストラップ『盗賊の七つ道具』を発動しマース☆」

【盗賊の七つ道具】
［カウンター罠］
１０００ライフポイントを払う。罠カードの発動を無効にし、それを破壊する。

【西条　亨】
ＬＰ／８０００

【ダニエル】
ＬＰ／８０００　↓　７０００

（カウンター罠…ッ！？）

「『盗賊の七つ道具』は１０００ライフを払う事デ、罠カードの発動を無効にし破壊しマース…西条ボーイの発動したミラーフォース

は読めていマシタ！！」

バリィッ…！！

西条の発動した『聖なるバリアーミラーフォース―』の発動が無効となり、粉々に砕け散った。

それにより、ダニエルの攻撃は有効となり…

「行きなサーイ、ガトゥムズ！スターダストにＡｔｔａｃｋデース☆」

ズバババ…ッ！！
ズゴゥッツ！！

「ぐぅ…っ！？」

【西条　亨】
ＬＰ／８０００　↓　７４００

【ダニエル】
ＬＰ／７０００

散りゆくスターダスト。
そして残りのダニエルのモンスター達が、西条の綿毛トークンたちを襲う。

「残りの４体のモンスターデ、西条ボーイのトークンにＡｔｔａｃｋデース☆」

ボボボボンッ！！

一気に壁となるモンスター達を失った西条のフィールドには、リバースカードが１枚のみ。

「ワタシはバトルフェイズを終了し…参りマス！レベル１の『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』と、レベル３の『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』に、レベル３の『Ｘ－セイバー　エアベルン』をチューニングッ！！」

１＋３＋３＝７

ダニエルのモンスター達が再び高く跳躍し、その力（星）を一つにする。

「今こそ集え、円卓の騎士！ｃｒｏｓｓのｐｏｗｅｒがｒｅｖｏｌ

ｕｔｉｏｎ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！カモン☆『Ｘ－セイバー　ソウザ』！！」

【Ｘ－セイバー　ソウザ】
星７／地属性／戦士族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／１６００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外の「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体以上
自分のメインフェイズ時に、自分フィールド上に存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体をリリースする事で、以下の効果から１つを選択してエンドフェイズ時まで得る。
●このカードがモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。
●このカードは罠カードの効果では破壊されない。

ダニエルのフィールドに現れたソウザ。

更に

「そしてワタシは『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果を発

動しマース！この効果によって、ワタシの墓地から【Ｘセイバー】１体を特殊召喚できマス！カモン☆『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』！！」

再びダニエルのフィールドに特殊召喚されたレイジグラ。

レイジグラが特殊召喚された事で、そのモンスター効果が発動される。

「レイジグラの効果デス！特殊召喚に成功した時、墓地から【Ｘセイバー】１体を手札に加えマース…！ワタシは墓地の『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』を回収デース☆」

次々と多彩なコンボを決めるダニエル。

ただその流れを見ている事しかできなかった西条に、ダニエルは容赦しなかった。

「そして『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』の効果デース！ワタシのフィールド上の【Ｘセイバー】、『ＸＸ－セイバー　レイジグラ』をリリースし、西条ボーイの手札１枚をランダムにポイしマース☆」

「く…ぅっ！？」

「西条ボーイの手札ハ２枚…左側の手札をポイしなサーイ…！！」

西条は指定された手札、『見習い魔術師』のカードを墓地へと送った。

「ラストに、ワタシはリバースカードを1枚セットして、ターンエンドゥ☆」

※

【西条　亨】
ＬＰ／７６００
［手札］
1枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×1

【ダニエル】
ＬＰ／７０００
［手札］
2枚
［モンスター］
Ｘ－セイバー　ソウザ

ＸＸ－セイバー　ガトムズ
ＸＸ－セイバー　フォルトロール
［魔法・罠］
リバースカード　×１

ダニエルのターンが終了した頃には、西条のアドバンテージはズタボロであった。

５体もいたモンスターは全滅。

更には反撃の決め手の筈だったミラーフォースは無効化され、３枚あった手札は１枚にまで減らされていた。

（…強い…！！）

と、西条は思った。

純粋に強い。

彼自身、ここに至るまでに様々なデュエルを経験してきた。

しかし、今回の対戦者であるダニエルは、飛び抜けて強く感じる。

それ程、彼が今回のデュエルに対して本気だという証しでもあるのだと、西条は思う。

『どうしょぅ、さいじょお…あの社長さん、スッゴく強いんだよ…！！』

（ああ…まさかこれほどの実力者だったなんてな…世界は広いな、ホント）

『なに悠長なこと言ってるの！？　このままだとさいじょお、ヤバいんだよ！！』

ダニエルのプレイングに感心する西条を叱咤するマジシャン・ガール。

だが、西条は何も諦めた訳ではない。

「そう言うなって。相手がこんなにも強いんだ…。こんな状況、デュエリストなら燃えない訳がない…！！」

西条はそう言うと、デッキトップに指を添えた。

「行くぜ、ダニエルさん！！　俺のっ、タァーンッ！！」

西条の反撃（ターン）が始まった。

彼がデッキから引き当てたカード。

それは…

（…よしっ！！）

「チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚ッ！！」

【ジャンク・シンクロン】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／１３００
ＤＥＦ／　５００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

西条が引き当てたカード、それは『ジャンク・シンクロン』のカードであった。

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動！このカードが召喚に成功した時ーー」

「シンクロ召喚デスか？そうハさせまセーン！カウンタートラップ『セイバー・ホール』を発動しマース！！」

【セイバー・ホール】
［カウンター罠］

自分フィールド上に「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にし破壊する。

「このカードはワタシのフィールドに【Ｘ－セイバー】が在る時に発動デキ、モンスターの召喚を無効にしマース！！」

ズゴゥッ！！

「くっ！？」

西条の召喚した『ジャンク・シンクロン』が無効となり、破壊された。

召喚権を使用した西条は、絶対絶命のピンチを迎えてしまった。

「西条ボーイには酷デスが、ワタシは目的の為なら徹底的にやりマース！！」

「……カードを1枚伏せて、ターンエンド…！！」

「参りマス…ワタシのターンッ！！」

西条の反撃は成らず、ダニエルのターンに移行する。

ダニエルは宣言した通り、容赦なくプレイを開始した。

「マズは『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の効果カラ発動しマース！！　この効果で墓地カラ『Ｘ－セイバー　エアベルン』を特殊召喚しマース☆」

ダニエルのフィールドにエアベルンが攻撃表示で特殊召喚された。

更に

「そして手札より、『ＸＸ－セイバー　ガルセム』を召喚しマース☆」

【ＸＸ－セイバー　ガルセム】
星４／地属性／獣族
ＡＴＫ／１４００
ＤＥＦ／　４００
［効果］
フィールド上に存在するこのカードがカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスター１体を手札に加える。このカードの攻撃力は、自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターの数×２００ポイントアップする。

エアベルンに引き続き、『ＸＸ－セイバー　ガルセム』が現れた。

「ガルセムは、ワタシのフィールド上の【Ｘ－セイバー】1体につき、攻撃力を２００ポイントアップしマース→→」

【ダニエルのモンスター】
Ｘ－セイバー　ソウザ
Ｘ－セイバー　エアベルン
ＸＸ－セイバー　ガトムズ
ＸＸ－セイバー　フォルトロール
ＸＸ－セイバー　ガルセム

「ワタシの【Ｘ－セイバー】は5体！よってガルセムの攻撃力は、１０００ポイントアップデース☆」

【ＸＸ－セイバー　ガルセム】
ＡＴＫ／１４００　↓　２４００
ＤＥＦ／　４００

圧倒的な物量差。

ダニエルはラストターンのつもりで、西条にバトルを仕掛けてきた。

【西条　亨】

ＬＰ／７４００

【ダニエル】
ＬＰ／７０００

「バトルフェイズ！！　エアベルンで、西条ボーイにダイレクトアタァック！！」

「ぐぁ…っ！！」

【西条　亨】
ＬＰ／７４００　→　５８００

【ダニエル】
ＬＰ／７０００

「手札が０なおかげで、エアベルンの効果は意味が無いデスね…デスが、続けてフォルトロールで、ダイレクトアタックデース！！」

「っそうはさせない！！　リバースカード、オープンッ！！『リビングデッドの呼び声』を発動！！」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスター

を破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

（リビングデッド！？　まさか墓地のスターダストを…？）

「この効果で俺は、墓地のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！！　俺が蘇らせるのは…来いッ！！『見習い魔術師』！！」

【見習い魔術師】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ／　４００
ＤＥＦ／　８００
［効果］
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、フィールド上で表側表示の魔力カウンターを乗せる事ができるカード１枚に魔力カウンターを１個乗せる。このカードが戦闘によって破壊された場合、デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を選択して自分フィールド上にセットする事ができる。

西条のフィールドに壁として現れたのは、『スターダスト・ドラゴン』ではなく『見習い魔術師』であった。

「Ｗｈａｔ’ｓ！？『見習い魔術師』…デスが、攻撃は続行デース！！」

ダニエルの『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』の一撃が炸裂し、

『見習い魔術師』は破壊された。

【西条　亨】
ＬＰ／５８００　↓　３８００

【ダニエル】
ＬＰ／７０００

「戦闘破壊された『見習い魔術師』の効果ッ！！　デッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を、裏側守備表示でセットする！デッキから、２体目の『見習い魔術師』をセット！！」

大ダメージは受けはしたものの、壁となるモンスターをセットする事に成功した西条。

「ナルホド…『見習い魔術師』は手札カラ墓地に送られていマシタか。デスがこのターン、ワタシがやるべき事は変わりないデース！！　続けてガルセムでＡｔｔａｃｋデス！！」

ズバババッ！！

「『見習い魔術師』の効果だ！デッキから3体目の『見習い魔術師』をセット！！」

「Ｎｅｘｔ！！『ＸＸ－セイバー　ソウザ』で、『見習い魔術師』にＡｔｔａｃｋデース！！」

ズガガッ！！

「くっ…『見習い魔術師』の効果で、『執念深き老魔術師』をセット！！」

【執念深き老魔術師】
星２／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ／　４５０
ＤＥＦ／　６００
［効果］
リバース：フィールド上の相手モンスター１体を破壊する。

（老魔術師：確かそのリバース効果ハ、相手モンスター１体の破壊…デスが、この物量差なら１体如きの破壊など、痛くも痒くもありまセーン…！！）

「Ｎｅｘｔ！！『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』で、裏側守備表示の『執念深き老魔術師』にＡｔｔａｃｋデース！！」

ズバババッ！！

『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』が、裏側守備表示の『執念深き老魔術師』に攻撃し、リバース効果が発動された。

「この瞬間、リバースした『執念深き老魔術師』の効果発動！相手モンスター1体を破壊する！俺が破壊の対象に選ぶのは…『ＸＸ－セイバー　フォルトロール』！！」

ズズズズズ…！！

フォルトロールが破壊されたダニエル。

しかし、ダニエルの余裕な態度は変わらない。

ライフでも、ボードアドバンテージでも、現在は自分が圧倒的に優位なのだ。

「今さらフォルトロールを破壊した所デ、ワタシのＶｉｃｔｏｒｙは変わりまセーン！ワタシのターンは終了デス☆」

※

【西条　亨】
ＬＰ／３８００
［手札］
なし
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×１

【ダニエル】
ＬＰ／７０００
［手札］
２枚
［モンスター］
Ｘ－セイバー　ソウザ
ＸＸ－セイバー　エアベルン
ＸＸ－セイバー　ガトムズ
ＸＸ－セイバー　ガルセム
［魔法・罠］
なし

辛くもダニエルのモンスター１体を撃破した西条であったが俄然、窮地に立たされている事に変わりはなかった。

手札もなく、モンスターもなく…

残されたのは、たった１枚のリバースカードのみ。

ダニエルはこの状況に、勝利を確信していた。

その確信から、様々な欲が胸中に溢れ出してくる。

あのＯＣＧ研究会に勝てる！

このデュエルに勝てば、トリティニーグループと契約できるチャンスがくる！

そうなれば、自分の会社を守れる！

興奮し、鼻息が荒くなるダニエルを前に、西条はギッと奥歯を噛み締め、デッキトップに指を添えた。

西条は考える。

如何にして、この状況を打破するかを考える。

出来ない事はないのだ。

残り２５枚のデッキの中には、この状況を覆す事ができるキーカードが３枚眠っている。

それらの内、いずれか１枚を引き当てる事が出来れば、まだこのデュエルの勝敗は分からない。

デュエル開始前の西条は、ダニエルの会社の事しか頭になかった。

しかし、今は違う。

予想以上のダニエルの強さ、もとい執念に、西条自身の決闘者としての魂に火が着いていた。

今の西条は会社やら仕事やらと関係ない。

ただひたすらと強敵に立ち向かうべく、己の魂を燃やし尽くす一人の決闘者であった。

『これがラストターンになるか…さいじょおの引き（ドロー）に、全てが掛かってる…！！』

（ああ…ダニエルさんは強い。なら、今の俺に出来る事…それは…！！）

今の自分に出来る事。

「最後まで諦めず、俺の仲間達（デッキ）を信じる事…！！」

「無駄デスよ、西条ボーイ…この状況でカードをドローした所デ、Ｙｏｕの手札ハ1枚…そしてリバースカードが1枚のみ…一体それだけのカードで、何が出来るというのデースか？」

「分からないぜ、ダニエルさん…おこがましいかもしれないケド…決闘者として教えてやるぜ！！　デュエルというのは、たった1枚のカードからでも、様々な奇跡を呼び起こす事が出来る事をッ！！」

「…大きく出マシタね…！！」

西条の力ある発言にダニエルは気付かなかったが、自分の頬にはいつしか、一滴の汗が滴り落ちていた。

「行くぜ…俺のターンッ!!　ドローッ!!」

シュバッ!!
キィィィ…!!

鮮やかにカードをドローした西条。

彼の動作の一つ一つが、ダニエルにはスローモーションのように感じた。

ドクンッ、ドクンッ…!!

ドローしたカードをゆっくりと捲り、それを目にした西条。

真剣な眼差し。

引き締めた口元。

そして引き締めた口元は、ダニエルにとって不敵な笑みへと変わった。

「ッ！？　まさか…！！」

「フッ…来たか…！！」

『反撃開始なんだよ、さいじょお！！』

「ああ。ダニエルさん…いくぜ！！　これが俺の全力だ！！　手札より魔法カード『調律』を発動！！」

【調律】
［魔法カード］
自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

「Ｗｈａｔ' ｓ！？　…『調律』！？」

「このカードは、デッキから【シンクロン】と名のついたチューナー1体を手札に加え、その後デッキトップのカードを墓地へ送る！俺が手札に加えるのは…『ジャンク・シンクロン』！！」

『ジャンク・シンクロン』のカードを手札に加えた西条。

更に『調律』の効果により、デッキトップのカード『ブラック・マジシャン』が墓地へと送られた。

「そして俺は、チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚ッ！！」

西条のフィールドに、2体目の『ジャンク・シンクロン』が召喚された。

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動！このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル2以下のモンスター1体を、効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！蘇れッ『チューニング・サポーター』！！」

西条の墓地より『チューニング・サポーター』が特殊召喚された。

「何が来るかと思えば…そのカードデスか。そのままシンクロ召喚をしようにも、そのレベル合計は4！レベル4のシンクロモンスターには、この状況を打開出来るカードは存在しまセーン！」

先の展開を読み、安堵の息をつくダニエル。

相手はあのＯＣＧ研究会なのだ。

もしかしたら本当に…とも思ったが……

「フッ…それはどうかな？」

「ッ！？」

ドクンッ！！

西条のその発言に、ダニエルの心臓が跳ね上がった。

そして同時に気付く。

彼の場に伏せられていた、１枚のリバースカードを…。

「まさか…そのリバースカード…ッ！？」

「その通り。いくぜ！！　速攻魔法、発動！！『地獄の暴走召喚』！！」

【地獄の暴走召喚】
［速攻魔法］
相手フィールド上に表側表示でモンスターが存在し、自分フィールド上に攻撃力１５００以下のモンスター１体が特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。その特殊召喚したモンスターと同名モンスターを自分の手札・デッキ・墓地から全て攻撃表示で特殊召喚する。相手は相手自身のフィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、そのモンスターと同名モンスターを相手自身の手

札・デッキ・墓地から全て特殊召喚する。

「このカードは攻撃力１５００以下のモンスターの特殊召喚に成功した時に発動する事ができる！そのモンスターと、相手の場のモンスター１体の同名カードを、可能な限り全て特殊召喚する！！　来いッ『チューニング・サポーター』！！」

ポム！！ポム！！

西条のフィールドに、デッキから2体の『チューニング・サポーター』が特殊召喚された。

「ならばワタシは…『ＸＸ－セイバー　ガルセム』を１体、特殊召喚しマース！！」

ダニエルは『ＸＸ－セイバー　ガルセム』を特殊召喚した。

【西条のモンスター】
ジャンク・シンクロン
チューニング・サポーター　×３

【ダニエルのモンスター】
Ｘ－セイバー　ソウザ
Ｘ－セイバー　エアベルン

ＸＸ－セイバー　ガトムズ
ＸＸ－セイバー　ガルセム　×２

（『地獄の暴走召喚』…！！　まさかそのカードを用意シテいたなんテ、予想外デース…！！）

ダニエルの思惑は外れた。

今が逆転の時。

そう判断した西条は、今の自分にできる最高のプレイを開始する。

「行くぞ、お前たち！！　レベル１の『チューニング・サポーター』と、効果によってレベルが２となった『チューニング・サポーター』２体に、レベル３『ジャンク・シンクロン』をチューニングッ！！」

１＋２＋２＋３＝８

西条のそれぞれのモンスターが跳躍し、その力（星）を一つにする。

「集いし闘志が、怒号の魔神を呼び覚ます！光さす道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！！　粉砕せよ！！『ジャンク・デストロイヤー』！！」

【ジャンク・デストロイヤー】
星８／地属性／戦士族
ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／２５００
［シンクロ／効果］
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊する事ができる。

西条のフィールドに破壊の権化『ジャンク・デストロイヤー』がシンクロ召喚された。

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！！　このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材となったチューナー以外のモンスターの数まで、フィールド上のカードを破壊する！！」

「Ｗｈａｔ’ｓ！？」

「シンクロ素材となった『チューニング・サポーター』は３体！！
行けェ！！『ジャンク・デストロイヤー』ッ！！　タイダル・エナジー！！」

ズゴゥッ！！　バゴゥッ！！　グシャッ！！

『ジャンク・デストロイヤー』の効果が炸裂し、ダニエルのフィールドから『Ｘ－セイバー　ソウザ』『Ｘ－セイバー　エアベルン』『ＸＸ－セイバー　ガトムズ』の３体が破壊された。

（ワタシの【Ｘ－セイバー】が消えた事デ、ガルセムの攻撃力が…ッ！？）

【ＸＸ－セイバー　ガルセム】
ＡＴＫ／１４００　↓　２４００↓　１８００
ＤＥＦ／　４００

ダニエルの２体の【ＸＸ－セイバー　ガルセム】の攻撃力が２４００から減少した。

「そして、シンクロ素材として墓地へ送られた３体の『チューニング・サポーター』の効果により、デッキからカード３枚をドローッ！！」

デッキから３枚ものカードをドローした西条。

彼の反撃は止まらない。

３枚となった手札から、１枚のカードを掴み取り

「墓地に眠る光属性モンスター『マジシャンズ・ヴァルキリア』と、闇属性モンスター『ブラック・マジシャン』を除外し…混沌の力を解放せよ！！　出(いで)よ『カオス・ソーサラー』！！」

【カオス・ソーサラー】
星６／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ／２３００
ＤＥＦ／２０００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する光属性と闇属性のモンスターを１体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択してゲームから除外する事ができる。この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

西条のフィールドに顕現せし、混沌の魔術師『カオス・ソーサラー』。

ダニエルはただ、唖然とする事しかできなかった。

「バトル！！『ジャンク・デストロイヤー』で、１体目の『ＸＸ－セイバー　ガルセム』に攻撃！！　デストロイ・ナックル！！」

ズゴゥッ！！

【西条　亨】
ＬＰ／３８００

【ダニエル】
ＬＰ／７０００　↓　６４００

ダニエルのフィールドから【Ｘ－セイバー】が減った事で、『ＸＸ－セイバー　ガルセム』の攻撃力が更に減少する。

【ＸＸ－セイバー　ガルセム】
ＡＴＫ／１４００　↓　１６００
ＤＥＦ／　４００

「続いて『カオス・ソーサラー』で、残ったガルセムに攻撃！！
カオス・フレア！！」

ボバァッ！！

【西条　亨】
ＬＰ／３８００

【ダニエル】
ＬＰ／６４００　→　５７００

『やったね！さいじょお！！　社長さんのモンスターを、ぜんぶ倒しちゃったんだよ！！』

「リバースカードを２枚セットして、ターンエンド！」

「……！！」

ダニエルは開いた口が塞がらなかった。

自分の場には、５体のモンスターが出揃っていたのだ。

勝利を確信していた。

誰が見ても自分の勝ちだと、皆そう思ったであろう。

しかし、西条はやり遂げた。

自分に対して宣言した通り、本当に奇跡を起こしてしまったのだ。

【西条　亨】ＬＰ／３８００
［手札］
なし
［モンスター］

ジャンク・デストロイヤー
カオス・ソーサラー
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【ダニエル】
ＬＰ／５７００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

（ガッデム…！！　まさか…こんな事になるなんて…！！）

夢なら覚めてくれ！と叫びたかった。

しかし、これは現実なのだ。

（ワタシに…この状況を覆す事が可能なカードを引き当てる事ができるのでショウか…？）

それまで余裕だった気持ちが、今度は倍以上のプレッシャーとなってのし掛かる。

いつの間にかカードをドローしようとする手が、小刻みに震えていた。

「ダニエルさん！！」

「ッ！？　西条ボーイ…」

そんなダニエルに、西条から大きな声が掛けられた。

「諦めちゃ駄目だ！ダニエルさん！！　アナタの夢は、こんな所で終わらせてはいけない！！　絶対に！！」

「西条ボーイ…！！」

今は敵である西条が、まさか自分を応援してくれるなんて。

皮肉…とは思えなかった。

それだけ彼の瞳は、純粋な色をしていたからだ。

（おかしな人デスね、西条ボーイは…。対戦相手を応援するなんて…、これが会社同士の売り上げ争いとかデシたら、普通じゃ考えられまセーン…）

しかし

（Ｂｕｔ…西条ボーイの言葉には、不思議と力が在りマース…何だか少し、肩の荷が降りた気がしマース…！！）

「西条ボーイ…Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ☆ならばワタシも、西条ボーイが信じた様に、自分のデッキを信じてみマース！」

ダニエルの表情に力が戻った。

そして、ダニエルの渾身のターンが始まった。

「参りマス…ワタシのターンッ！！　ドローッ！！」

カードをドローしたダニエルは、３枚となった手札から1枚を掴み

「このカードはワタシの墓地に【Ｘ－セイバー】が2体以上存在シ、フィールドにモンスターが居ない時、手札から特殊召喚する事ができマース！カモン☆『ＸＸ－セイバー　ガルドストライク』！！」

【ＸＸ－セイバー　ガルドストライク】

星５／地属性／獣戦士族

ＡＴＫ／２１００

ＤＥＦ／１４００
［効果］
自分の墓地に「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターが2体以上存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

ダニエルのフィールドに赤きマントを翻し、ガルドストライクが颯爽と現れた。

「そして『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』を召喚デス☆」

ガルドストライクに続き【Ｘ－セイバー】のリクルーター、エマーズブレイドが召喚された。

（ガルドストライクの攻撃力は２１００…そして、エマーズブレイドの攻撃力は１３００…これでは、俺のモンスター達は倒せないぞ、ダニエルさん…！！）

攻撃力の不足を懸念する西条。

しかし、ダニエルには手札が1枚残されていた。

「西条ボーイ！コレがワタシの、逆転の一手デース！マジックカード『セイバー・スラッシュ』を発動しマース☆」

【セイバー・スラッシュ】
［魔法カード］
自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｘ－セイバー」と名のついたモンスターの数だけ、フィールド上に表側表示で存在するカードを破壊する。

「このカードは、ワタシのフィールドの【Ｘ－セイバー】の数だけ、フィールド上の表側表示のカードを破壊しマース☆」

ダニエルのフィールドに【Ｘ－セイバー】は2体。
そして、西条のフィールドには『ジャンク・デストロイヤー』と『カオス・ソーサラー』の2体が。

「ワタシが破壊の対象とスルのは、西条ボーイのモンスター2体デース！！」

「なにっ！？」

ズバババババ…ッ！！

ダニエルの発動した『セイバー・スラッシュ』が炸裂し、西条のモンスターは全て破壊されてしまった。

西条に残されたのは、2枚のリバースカードのみ…。

【西条　亨】
ＬＰ／３８００
［手札］
なし
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【ダニエル】
ＬＰ／５７００
［手札］
なし
［モンスター］
ＸＸ－セイバー　ガルドストライク
ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド
［魔法・罠］
なし

（西条ボーイのリバースも気になる所デスが…、ココは勝負所デス☆）

「バトルフェイズに入りマース！マズはガルドストライクで、西条ボーイにダイレクトアタック！！」

「…ッ！！」

【西条　亨】
ＬＰ／３８００　→　１７００

【ダニエル】
ＬＰ／５７００

（…通った…ッ！？）

西条の場に伏せられていた2枚のリバースカード。

そのいずれもが発動する事なく、ダニエルの攻撃が決まった。

これには攻撃したダニエル自身が一番驚いていた。

（ワタシの攻撃に対して、何かカウンターを仕掛けて来ると思っていマシタが…どうやら西条ボーイと言えど、そこまで引き（ドロー）の運は持ち合わせて無かったみたいデスね…！！）

「Ｎｅｘｔ！！　エマーズブレイドで、西条ボーイにダイレクトアタック！！」

「ぐぅ…ッ！！」

【西条　亨】
ＬＰ／１７００　→　４００

【ダニエル】
ＬＰ／５７００

残す所あと僅かなライフにまで追い込まれた西条。

（西条ボーイ…Ｙｏｕのお陰で、ワタシは此処までのプレイをする事が出来マシタ…！！）

「さあ、西条ボーイ！Ｙｏｕのターンデース！ＯＣＧ研究会の底力、魅せて下サーイ！！」

「…ダニエルさん…！！」

ダニエルはそう口にした後、思わず吹き出しそうになってしまった。

（どうやらワタシも、西条ボーイに感化されたみたいデース。まさか対戦相手に、そんな言葉を掛けるなんて…思っても見ませんデシタ…！！）

ダニエルのターンは終了した。

そして迎えた西条のターン。

『さいじょお…分かってる？』

（ああ、このターンで…このデュエルの勝敗が決する…！！）

問題は西条のターン、このドローに全てが掛かっている。

しかし、諦めない。

ダニエルに言われたように、ＯＣＧ研究会として…。

そして、一人の決闘者として…！！

今、西条のラストターンが始まる。

「俺のターン…ッ！！　ドローッ！！」

※

【西条　亨】
ＬＰ／　４００

［手札］
１枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×２

【ダニエル】
ＬＰ／５７００
［手札］
なし
［モンスター］
ＸＸ－セイバー　ガルドストライク
ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド
［魔法・罠］
なし

西条のターンが始まった。

デッキからドローし、引き当てた希望（手札）。

そして、自分の場に伏せられた２枚のカード（鍵）。

「いくぜ、ダニエルさん！！　手札より魔法カード『死者蘇生』を発動！！」

【死者蘇生】
［魔法カード］
自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「…『死者蘇生』…ッ！？」

「今再び蘇れ…混沌の魔術師！！『カオス・ソーサラー』！！」

ドンッ！！

西条のフィールドに混沌を司る魔術師『カオス・ソーサラー』が蘇生された。

「『カオス・ソーサラー』の効果発動！！　このターン、自身の攻撃を封じる代償として、モンスター1体をゲームから除外する！！
対象は…『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』！！」

「ンなッ！？」

ドシュゥ…ッ！！

『カオス・ソーサラー』の効果が炸裂し、後続展開の要であるリクルーター『ＸＸ－セイバー　エマーズブレイド』が除外された。

これによりダニエルはこのターン、後続モンスターを呼び出す事が出来なくなった。

「更にッ！！　リバースカード、オープン！！『異次元からの帰還』を発動！！」

【西条　亨】
ＬＰ／　４００　↓　２００

【ダニエル】
ＬＰ／５７００

【異次元からの帰還】
［罠カード］
ライフポイントを半分払う。ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

「このカードは発動時にライフを半分払う事で、ゲームから除外されたモンスターを、可能な限り全て特殊召喚するッ！！」

このデュエル中で西条が除外したモンスター。

それは…！！

「現れよッ『ブラック・マジシャン』！！『ブラック・マジシャン・ガール』！！『マジシャンズ・ヴァルキリア』！！」

ドドドドド…ッ！！

一気に展開されたモンスター達。

西条亨。

その彼が最も信頼する魔術師達が、彼の下へと集結した。

【西条のモンスター】
ブラック・マジシャン
ブラック・マジシャン・ガール
マジシャンズ・ヴァルキリア
カオス・ソーサラー

「ア…アンビリーバブル…！！」

ダニエルは自分が不利なのにも関わらず、その姿に魅了されていた。

やはり、彼は期待に応えてくれた。

ＯＣＧ研究会、西条亨。
やはり彼は、本物の決闘者であった。

「これが…俺のデュエルだ！！　ダニエルさん！！」

「……ッ！！」

言葉が見つからない。

今のダニエルは、西条の魔術師達に釘付けだった。

「バトル！！『ブラック・マジシャン』で、『ＸＸ－セイバー　ガルドストライク』に攻撃！！　黒・魔・導　（ブラック・マジック）！！」

バリバリバリ…ッ！！
ズゴゥッ！！

【西条　亨】
ＬＰ／　２００

【ダニエル】
ＬＰ／５７００　→　５３００

『ブラック・マジシャン』の放った魔術が『ＸＸ－セイバー　ガルドストライク』を捉え、炸裂した。

がら空きとなったダニエルのフィールドに、残りの魔術師達が追撃する。

「『マジシャンズ・ヴァルキリア』で、ダイレクトアタック！！

そしてこの瞬間…！！　リバースカード、オープン！！『マジシャンズ・サークル』を発動！！」

【マジシャンズ・サークル】

［罠カード］

魔法使い族モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。お互いに自分のデッキから攻撃力２０００以下の魔法使い族モンスター１体を選択し、それぞれ自分のフィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する。

「『マジシャンズ・サークル』は、互いのデッキから攻撃力２０００以下の魔法使い族モンスター１体を、攻撃表示で特殊召喚する！！　現れよ！！『久遠の魔術師ミラ』！！」

【久遠の魔術師ミラ】

星４／光属性／魔法使い族

ＡＴＫ／１８００

ＤＥＦ／１０００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上にセットされたカード１枚を選択して確認する。この効果の発動に対して、相手は魔法・罠カードを発動する事はできない。

『マジシャンズ・サークル』の効果により、西条のフィールドに『久遠の魔術師ミラ』が特殊召喚された。

しかし、ダニエルのフィールドには…

「ワ…ワタシのデッキには…マジシャンのカードは…！！」

ダニエルのデッキに魔法使い族モンスターは１枚も存在しなかった。

壁となるモンスターを召喚できなかったダニエルに、西条の『マジシャンズ・ヴァルキリア』が攻め入った。

「行け、『マジシャンズ・ヴァルキリア』！！　ダニエルさんにダイレクトアタック！！　マジック・イリュージョン！！」

カッッ！！

「うッ！？」

【西条　亨】
ＬＰ／　２００

【ダニエル】
ＬＰ／５３００　→　３７００

「続け！！『久遠の魔術師ミラ』！！　ダニエルさんに攻撃だ！！
　シャイニング・フォース！！」

キィィイイ…！！

「Ｎｏｏｏｏ…ッ！？」

【西条　亨】
ＬＰ／　２００

【ダニエル】
ＬＰ／３７００　→　１９００

残りライフ１９００となったダニエル。

そして

「いくぞ、マジシャン・ガール……！！」

『うん！！』

西条亨　ＶＳ　ダニエルの勝負。

その最後の攻撃宣言が。

西条の声が高らかに響き渡った。

「『ブラック・マジシャン・ガール』の攻撃ッ！！　黒・魔・導・爆・裂・破　（ブラック・バーニング）！！」

「Ｏｈ……ッ！！　Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ……ッッ！！！！」

【西条　亨】
ＬＰ／　２００

【ダニエル】
ＬＰ／１９００　→　０

※

デュエルに敗北したダニエルは膝をつき、うなだれた。

自分はデュエルに負けた。

それは、仕事の取引失敗を意味していたのと同じであった。

「…ダニエルさん…」

「ｈａ…ｈａｈａ…終わった…ワタシは…」

前に立つ西条。

自分は彼に負けた。

しかし、恨みは自然とない。

それ以上に、ダニエルは取引失敗による事実で、頭が真っ白になっていたのだ。

（終わった…ワタシの会社は…子供たちの笑顔は…）

「良い…デュエルでシタ…西条ボーイ…！！　流石…ＯＣＧ研究会デース…」

「…！！」

顔をあげたダニエルの目からは、涙が零れていた。
それだけ、彼がこのデュエルに賭ける想いが真剣だったのだ。

「ワタシの事は…気にしなくて大丈夫デスよ☆また…新しい仕事を見つけて…いくだけデスから…」

ニコッと微笑むダニエル。
しかし、明らかにその微笑みは強がりだった。
そうして、その場から立ち去ろうとするダニエルに

「ダニエルさん…何か、勘違いしていませんか？」

「ッ！？」

西条の言葉に、ダニエルはピタリと足を止めた。

「勘違い…？ｈａｈａ…西条ボーイは何を言ってーー」

「確かに…今回のデュエルでは俺が勝ちました。でも、今回のデュエルを提案した中島理事長がどう言っていたか…覚えてますか？」

「……ッ！？」

「『アナタ達2人のデュエルで、アタシに熱い魂をぶつけて頂戴』…アタシはそう言った筈よ、ダニエル？」

そう言い、ダニエルの前に中島理事長が立った。

「誰も…西条ちゃんに勝て！なんて言ってないわ。というか、途中本当に勝ちそうだったんだもの！ビックリしちゃったわよ！」

「Ｍｒ．ナカジマ…！！」

呆気に取られるダニエルの肩に手を置く中島理事長は、ウィンクを一発、ばちこーん☆と決めた。

「アナタの熱い気持ちは、ビンビン感じたワ♂トリティニーグループを代表して、この中島が…ユナイテッド・イーグルの協同を取り持ってみせるわ！！」

「Ｍｒ．ナカジマ…Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ…Ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ　ｖｅｒｙ　ｍａｔｃｈ！！」

がっしりと握手を交わした2人の漢たち。

そして数年後、トリティニーグループとの協同に成功したユナイテッド・イーグルは、ある一台のマシンを開発した。

そのマシンこそ、ネットワークを通じて全世界共通して遊べるデュエルマシン【デュエルターミナル】なのである。

番外編「西条　ｖｓ　ダニエル」（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の内容は如何でしたでしょうか？

ダニエルの使用デッキは【Ｘ－セイバー】でした。

皆様は予想できていたかな？

初めはダニエルの口調から、原作通りの会長が扱うトゥーンにしようか悩んでいました。

友人のＴさんとも相談した結果…

「Ｘ－セイバーとかどうかな？海外で活躍したデッキだし、今回の舞台は海外という内容だし」

「いいな！それ！」

というやり取りがあって、決定しました。

トゥーンじゃなくてガッカリ…という方には、本当にスイマセン。

デュエル中の内容は、互いのデュエリストの各場面における心境を意識して書きました。

そしてデュエル内容も、白熱した展開になったカナ？どうだろう、不安だ…

しかし、【Ｘ－セイバー】を組んでみましたが、やはり強い…！！

ガチでＴＵＥＥＥＥＥＥＥＥＥ！！

弟のリチュアと対戦しましたが、圧勝っした。

うん。このデッキは余り使う事はないだろう…

何か強すぎるデッキ（真・六武衆とかＢＦ）は友達とやる時には余り使いたくない性分なんですよ、僕。

皆さんはどうですか？

さて、今回の話を読んで何か思った事があれば、どしどしとご意見をお願いします。

どんな些細な事でも構いません。

皆様からのお言葉、お待ちしております！

それでは、今回はこの辺りで筆を置かせてもらいます。

失礼しました。

失礼なヤツ（前書き）

お久しぶりな更新でございます。

最近仕事や用事が立て込み、なかなか更新できずで切羽詰まってます（汗

それにしても最近僕自身…デュエルが出来てないなぁ

失礼なヤツ

※

卒業式を明日に控えた今日。

西条拓夜は机の上に自分のデッキを広げながら唸っていた。

ＯＣＧ研究会の先輩たちから新たに譲り受けたカード。

それらとデッキを見つめ、脳内で様々な戦略を練り上げる。

そんな彼の片手には、彼女である成瀬花穂から借りたヴァリアブルブックがあった。

「ガイアドレイク…ってのは、シンクロモンスター同士の融合モンスターか…」

譲り受けた中の１枚である『地天の騎士　ガイアドレイク』を見つめながら、如何にしてこのモンスターを融合しようか悩む拓夜。

そういえばこのカードをくれた西条亨も、シンクロモンスターの融合をしていた。

あれは確か『覇魔導師　アーカナイト・マジシャン』だったか？

そんな事を思い浮かべながら、拓夜はヴァリアブルブックをパラパラとめくっていく。

すると、ある1枚のカードが目に入った。

「…波動竜騎士…ドラゴなんたら…へぇ、コイツもシンクロモンスターの融合で…！！」

それに融合素材はドラゴン族のシンクロモンスターと、戦士族。

ドラゴン族のシンクロモンスターは丁度、白石直也からの『レッド・デーモンズ・ドラゴン』があるし、更に言えば戦士族モンスターは、自分の扱うDたちで補える。

あれ？これ、イケるんじゃね…？

そう思った拓夜の行動は早かった。

確か自分の店に、この波動竜騎士何たらは単品で売っていた筈だ。

拓夜はヴァリアブルブックと財布を持ち、どたどた～！！っと部屋から飛び出した。

・　・　・　・　・

西条拓夜の父親である西条茂雄は、今日も変わらない1日を迎えよ

うとしていた。

開店前のこの時間は、店内の掃除と商品のチェックから始まる。

最近、息子の拓夜がプロデュエリストになるとか。

更にはトリティニーグループからレンタルしてあるデュエルテーブル。

これらあってか、店の売り上げは頗る上々であった。

だからなのか、昔はかったるそうにしていた開店前の掃除も、今では鼻歌混じりに上機嫌な位に楽しんでいる。

雑巾を持ち、タバコを吹かしながらリズミカルに店内を拭き回る４５歳の茂雄。

すると、自宅へと続く階段から、何やら慌ただしい足音が聞こえてきた。

振り返るとそこには、息子の拓夜が真剣な表情で飛び出してきた。

「なんだ拓夜か。珍しいな、お前がこんな時間に起きているなんてな」

「うん！ちょっとね！」

慌てた様子の拓夜は曖昧な返事をすると、レジ裏の棚から遊戯王カ

ードのファイルを取り出して、パラパラっとめくりだした。

「なんだ…欲しいカードでもあるのか？」

「うん！はどう何たら！」

「は？」

息子の言ってる言葉が理解できない４５歳の茂雄は、それ以上構う事なく掃除を続けるのであった。

そして、１枚のカードに夢中な拓夜は、遂に念願のカードを見つけ

「あった！！　波動竜騎士　ドラゴ何たら！！」

見つけたは良いが、コレは店の商品だ。

いくら自分の家だからといって、勝手に持ち出して良い訳がない。

小さい頃、それで父親に物凄く怒られた事がある。

そんなこんな過去から、拓夜は商品のバーコードを読み取り、レジに表記された金額を確認した。

「…っ！？　三百円か…」

まあこの値段だろうと、ある程度の予測はついていた。

そして拓夜は財布を取り出し、自分の所持金を確認しようとした瞬間、思わぬ事態が彼を待ち受けていた。

「た…っ、足りねぇ…！！」

財布の中身は三十円。

根本的な部分から、拓夜は色々と足りていなかった。

そういえば先日、成瀬にカードを買ってあげてからそのままに…

……。

こうなれば、拓夜に残された手段はただ１つ。

拓夜はある決意を胸に、揚々と掃除をする父親の前に立った。

※

西条亨、結締智恭、そして白石直也の三人は東区の駅前にあるモクドナルドで、朝モックを堪能しながらだべっていた。

「いよいよ明日からデュエル教室か…確か講義内容は…【エクシーズ召喚】、だっけ？」

モックシェイクをずずぃっと吸い込む亨が、早速話題を振ってきた。

「ふぅん…同レベルのモンスターをオーバーレイし、エクストラデッキからエクシーズモンスターを召喚…か。しかし、俺のブルーアイズの敵ではない！その事を全国に広めに行くのだな！」

「違う！！　途中まで合ってたのに、何で白石のブルーアイズ自慢に話しが変わるんだよ！？」

「なにっ！？　俺のブルーアイズが間違っていたとでも言うのか…ッ！！」

今回の仕事は白石が引き受けてきた筈なのだが、どこでどう内容を履き違えたというのだろうか？

白石は余りのショックに、マフィンからレタスをポトリと落とした。

「おぃおぃ、白石さん頼むぜぃ…。で、確か明日だったよな？拓夜ちゃんや葉月ちゃん達の卒業式は…」

話題が拓夜たちの話しに変わり、白石の目の色が変わった。

「その通りだ結締よ！聞いたところによれば、どうやら明日の卒業式には、美少女の御両親は出席できないらしい…ならば！！　この俺が行かねばなるまいッ！！」

「いや、意味が分からん…何で白石が親御さんとして出席する必要があるんだよ？」

「ふぅん…馬鹿め！まだ分からないのか西条よ？仕方ない、教えてやろう…！！」

フフン、と小馬鹿にするような息遣いで、白石は熱く語り出した。

・
・　・　・
・

いいか？

卒業式というのは、送る側と送られる側とでは、まるで意味が違うのだ。

今回美少女は送られる側という立場にあるが…美少女が高校生活三年間で、あの学校にいったいどれ程の思い入れが出来たのか…！！

想像つくまい…ッ！！

楽しかったこと…

辛かったこと…

泣いたこと…

笑ったこと…

そしてこのッ！！　俺のこと…ッ！！

あの学校には、そんな美少女の愛に満ちた思い出が、びっっっしりと詰まっているのだ…！！

当然…式の最中に美少女の中では、それらの思い出が蘇り、切ない涙を流すだろう…！！

主に俺との思い出で、その涙はより愛しさを増すであろう…ッ！！

卒業証書を受け取るその手は、きっと震えているだろう…！！

しかしッ！！

しかしだッ！！

卒業証書を涙ながらに受け取った美少女は振り返り、そして見つけるのだ…！！

親御さんたちの中で、ただ一人ッ！！

美少女の為だけに、美少女の為を想い、拍手を送るこの白石直也という存在をなッ！！

この俺の姿を見つけた瞬間…

美少女の感動値はピークに達する筈だ…間違いない。

そして美少女は走りだす。

本来ならば、指定された自分の席に戻らなければならない所を、一心不乱になってまで美少女は走りだす！！

そして飛び込むのだ…！！

高校生活三年間…美少女にとって、真に自分を支え続けてくれた、愛しい男の…そうッ！！

俺の胸元へと美少女は飛び込んでくるのだァア！！

『白石さん…ッ！！』

『美少女よ…！！』

涙ながらに抱きついてくる美少女を、俺は逞しい腕を美少女の背中に回し、互いにがっしりと抱きしめ合うのだ…！！

『…泣いているのか？』

『…確かに卒業するのは悲しいし辛い…でも、私…気付いちゃったの。この涙は、今日という日を…この学校を卒業する私を、最後までちゃんと見届けに来てくれた、白石さんへの嬉しさからくる涙なんだ…って！！』

『…美少女よ…』

『…白石さん…』

そして俺と美少女。

二人の唇がゆっくりと……

・　・　・　・　・

「…というシナリオだ。どうだ西条に結締よ？この完璧かつ、天才的頭脳から成せる脅威の……ム！？」

ここまで熱く語る白石はふと気付く。

そして回りを見渡す。

確かに自分の対面の席には亨と結締の二人が座って、自分と一緒にいた筈なのだが…

当の二人は、いつの間にか自分の前から姿を消していた。

「…フッ、西条めが。美少女を取られた悔しさで、この俺から逃げ出したか…！！　フハハハハハ…ッ！！」

何かおかしいが、これが白石直也なのだ。

どこか満足げな白石は高笑いと共に、モックシェイクを一気に飲み干すのであった。

※

白石の妄想話しを途中で抜け出してきた亨と結締は、東区の駅前通りをぶらついていた。

それぞれの口からはヤレヤレと、白石に対する溜め息が漏れる。

「しかし…白石の執着は凄いな…」

「流石の俺でも参ったぜよ…。ありゃ葉月ちゃんも対応に困る訳だぜぃ」

前々から葉月に対してアプローチを仕掛ける白石だったが、ことごとく粉砕・玉砕してきている。

それでもなお、葉月にアタックしていく姿勢は大したものではあるのだが…

「まぁ白石さんの話しはいいや。で、西条ちゃん的にゃあどうなんよ？」

「へ？」

急に話を振られた亨は、キョトンとなっていた。

そんな亨に、結締はニヤニヤとイヤラシい笑みを浮かべながら

「あれだけ白石さんに葉月ちゃんが迫られてんだ。内心、穏やかじゃないんじゃねぇのか？」

「……結締」

結締の言葉に、亨は思わず目を見開いた。

「どうなんよ、西条ちゃん…葉月ちゃんにゃあ、ちゃんと自分の気

持ちを伝えたのか？」

「…いや、まだ。彼女の好意に…甘えてるだけだな…」

自分からは何も言っていない。

だから白石が葉月に迫ろうが、自分は何も言えない。

亨はそう思っているのだろう、と結締は彼の言葉から察した。

確かにそうかもしれない。

自分の気持ちを打ち明けていない時に、人の色恋沙汰に首を突っ込めば、お前には関係ない！で終わってしまう。

しかし、それは違うだろう…と結締は思う。

「なぁ、西条ちゃん。俺達ぁ明日から多忙で、なかなかコッチにゃあ帰って来れない…それは分かってるんだよな？」

「ああ…それは」

「だったら、早いこと勝負を決めろ。いつまでも女からの好意に甘えてる男なんざ、カッコ悪いぜぃ？」

「…結締……」

亨はいつになく驚いていた。

まさか結締から、こんな真面目話しが聞かされるなんて思ってもみなかったからである。

夕べ何か賞味期限でも切れたものでも食べたのだろうか？

亨は結締を見て、ポカーンとしていた。

「そんな西条ちゃんにゃあ、今から葉月ちゃんに会って来い！！…って言いたいが…西条ちゃん、これから予定とかある？」

「え…まぁこの後、その烏丸さんと一緒にカードを買いに行く約束はしてあるけど…」

先日、葉月にガスタとスターダストを譲った亨は、その際に自分のデッキから何枚かカードを出していた。

そうなれば自然と、亨のデッキ枚数が足りなくなるのは明白である。

そんな彼に対するお礼のつもりなのか、葉月から亨に、カードを買いに行く事を約束されたのだ。

「それだッ！！　西条ちゃん、その時に葉月ちゃんに言うんだ！！」

「ぇえッ！？」

「良いな?絶対だぜぃ!!　それじゃ、お邪魔虫はここらで退散するぜぃ…!!」

「ぁ、おいっ!?　結締…!!」

結締は言うだけ言うと、路地裏へと姿を消していった。

1人取り残された亨は、妙なプレッシャーに悩まされるばかりであった。

※

「駄目だ」

その言葉に拓夜は思わず聞き直した。

「えっと…と、父さん。今、なんと…」

「駄ァ　目ェ　だァ　!!　と言ったんだ。なんで三百円くらい自分で払わないんだ、お前は?」

財布の中身がスッカラカンな拓夜が頼った相手とは、父親である西条茂雄であった。

拓夜の財布事情など知る由もない父親は、当然尋ねてくる。

「財布の中身が足りないのか？全く…何にそんな使ったんだ？」

「…花穂に…カードを買ってあげたら…つい」

なんだ、成瀬ちゃんにか…と納得する父親。

これはこれで、物わかりが良い父親で助かった！と思った拓夜は

「え、じゃあ買ってくれるのか！？」

「馬鹿いえ！！　それとこれとは話しは別だ！！　今お前なんかに金を使ったら、俺のタバコが買えないだろうがッ！！」

そう言って自分の財布を広げる父親の所持金は、六百円であった。

「最近のタバコは高いんだ。だから悪いが、カードは買ってやれん…！！」

「くッ！？　タバコなんて身体に悪いモンに、金を使うなよな…」

父親に頼んでも駄目だった。

ならば次に頼れるのは、母親である智恵子しかいない。

「カードはやっても良いが、タバコだけは絶対にやるなよ？」

「やらねえよッ！！　ハァ…仕方ない。母さんにお小遣い、前借りするか…三百円」

そう呟き、トボトボと店の奥に消えていく拓夜に、父親の茂雄は

「あ～いま母さんな、美容院の予約が入ってるって、近所の佐藤さんトコと一緒で居ないぞ？」

「ンなッ！？」

最後の望みを絶たれた拓夜は、劇画ショックな表情で固まった。

※

時刻は昼の十二時を過ぎた頃…。

西区の駅前にあるカードショップには、西条亨と烏丸葉月の姿があった。

彼のデッキからカードを譲って貰った手前、彼に御礼という意味＋デートという意味合いを込めて、葉月から誘い出した事から始まった。

そんな葉月はどこか上機嫌に、店に並ぶカードを漁りながら鼻歌混じりである。

「～♪ところでさ、亨さんは今度はどういった具合のデッキにするの？」

「……」

「スターダストは私が貰っちゃったから…やっぱブラマジ一直線？それともまた別のデッキ？」

「……」

「まぁ…私からしたら、亨さんが別のデッキを使ってるトコは想像つかないわね…それか、今組み込んでるシンクロンの種類を増やすとか？」

「……」

楽しげに話す葉月の言葉が、右の耳から入って左へと抜けていく。
亨の頭の中では、先に結締から言われた言葉が渦巻いていた。

（烏丸さんを…モノにしろ…ったって…）

確かに結締に言われたように、葉月が白石からアプローチされている姿を見るのは嫌だった。
かと言って、今ここで言うのか？
いやいや、だって今は買い物中だし…
じゃあいつ話しを切り出せば良いんだよ？

（な…悩む…！！）

マナの時は、もうお互い一緒に居るのが当たり前になっていた為に、自然と一緒に暮らしていた。
しかし、それはよくよく考えれば在る意味で幻想（ファンタジー）だ。
しかし、今回は違う。
現実（葉月）を見なければ、向き合わなければならない。

（なんか…変に緊張する…前はこんな事なかったのに…結締のヤツ…！！）

結締からあんな真剣な顔して、色恋沙汰を聞かされるなんて思ってもみなかった。

本当に彼は一体どうしたというのだろうか？

「……ねぇ、ちょっとアンタ。私の話し聞いてるの？」

「…えっ！？」

気がつくと自分の前には、ムスッとした葉月の顔があった。

今の今まで彼女の事を考えていた亨は、気恥ずかしさから思わず一歩後退した。

「えっと…何のカードか？だっけ？」

「そう！！　っていうか、聞いてたなら少しは返事しなさいよ？」

「あぁ…ごめん。色々と考え事があって」

亨はそう言うと葉月を誤魔化す為に、カードファイルを漁りだした。

葉月の事を考えていたなどと言える訳がない。

「でも…今はこれといった欲しい物はないかな」

それもそうか、と葉月は今更ながらに思った。

彼はＯＣＧ研究会の人間だ。

ともあれば、大半のカードは所持しているだろう。

「もう昼も過ぎたし、何か御飯でも食べに行こうか？」

「あ、ちょっと待ってよ！？」

ここで買う物はない、と言わんばかりに亨は店を後にする。

先に店を出て待つ亨だったが、葉月は納得いかない所があった。

自分は彼のデッキ（魂）から大切なカードを譲り受けた。

だからこそ今回の買い物で、彼への恩返しができるカードをあげたかった。

（こうなったら…意地でも…ッ！！）

そう思った葉月は、店の棚に架けてあった一枚の商品（カード）を手に取り、レジへと駆け込んだ。

※

東区の昼下がり。

グレーのスーツを着た一人の男が駅から出て来た。

歳は二十になる頃だろうか…長身でやせ細ったその男は、ふぅ…と溜め息をついた。

「今はここに住んでいると聞いたんだが…」

東区駅前の街並みを見渡して呟く。

そんな彼は、上着の内ポケットに入れてあるデッキに手を添え、キッと目つきを鋭くする。

（もうすぐプロリーグが開催される…！！　僕は今度こそ…ッ！？あの二人は…！！）

並々ならぬ闘志を秘めた瞳。

すると、彼の耳にある二人の男の声が聞こえてきた。

「ったく、まだモクドナルドで食ってたのかよ…白石さんの腹はいったいどうなってんのか、一度解剖してみたいぜぃ…」

「ふぅん…俺の胃はブラック・ホールで出来ている。そしてブラック・ホールで吸収した栄養は身体を巡り、ホワイト・ホール（肛門）から排出されるのだ！！」

「うわっ…下ネタは余り使わない方が良いぜよ白石さん。使うと使った分だけ、白石さんの品格が暴落していくぜぃ？」

「結締よ…この俺くらいの男となると、下ネタという言葉は下品ではなく、上品になるのだ。凡人が使ってこその下ネタ＝下品…だがしかし…ムッ！？」

「どうしたぜよ白石さん、急に立ち止まって…おっ！？」

白石と結締は、駅から出て来た男に目が止まった。

その男も二人に気付き、只ならぬ闘志を宿した瞳で二人に近付いてくる。

そして、白石と結締に対峙するかのように、その男が前へ立った。

「まさか君たち二人から現れるなんて…探しに行く手間が省けたよ…！！」

「ふぅん…誰かと思えば、広太郎か」

「広太郎ちゃん、久しぶりだぜぃ！つか、こんな所で会うなんてな！」

「……」

気さくに広太郎という男に話す二人だったが、広太郎本人は無粋な表情のまま

「もうすぐプロリーグが開催される…当然、君たち二人と、西条亨にも招待状が届いている筈だ…僕は今度こそ、君たちには負けない！！」

「わざわざ宣戦布告に来た、って訳か…相変わらず生真面目だねぃ、広太郎ちゃんは」

「三年前のプロリーグ…決勝の舞台で僕は西条亨に負けた。その次の年では、今度は決勝で白石直也に負けた…更にその翌年には、決勝で結締智恭…お前に負けた…！！」

過去、彼等に敗北という苦渋を飲まされた広太郎。

そんな彼は、今度こそ！という気持ちを露わにしながら

「だが、今回の僕は今までと違う！！　今度こそ僕はお前たちを倒し、優勝してみせる！！」

「…ふぅん、結構な事だ」

「…随時と余裕な言いぐさだな白石。だがー」

「あ～広太郎ちゃん…悪いけど俺たち三人は、今年のには出場はしないぜよ」

「ッ！？」

出場しない。

結締からの言葉に、広太郎は衝撃をうけた。

「出ない…だと…ッ！？」

「俺たちは明日から、トリティニーグループが主催するデュエル教室に出席せねばならん。今年のプロリーグに出場できる程、俺たちは時間にゆとりはない」

「…デュエル…教室…だと…ッ！？」

広太郎は目の前が真っ暗になりそうだった。

彼等に負けて以来、自分は死に物狂いで努力し、様々な大会に出場し、経験を積み、実力をつけてきた。

自分は強くなった。

それは打倒、ＯＣＧ研究会という明確な目標があったからこそだ。

だが、いざ話しをしてみれば、肝心の彼等は大会に出場しないというではないか。

それでは、これまで自分が積み重ねてきた努力は…

「デュエル教室…そんなふざけたモノのせいで…！！」

「ふざけた？広太郎ちゃん、言葉にゃ気を付けた方が良いぜよ？」

「俺たちＯＣＧ研究会のスローガンは、デュエルを通して多くの人達に楽しんで貰う事だ。今回のデュエル教室は、デュエル初心者が多く集い、新たなデュエルを身に付け、そしてデュエルの楽しさを覚えてもらう為の企画だ。もしこの場に西条のヤツが居たならば、憤慨しているだろうな…」

「くっ…なら白石ッ、結締ッ！！　今ここで僕とデュエルをしろッ！！」

広太郎は必死だった。

倒すべき相手が出場しないとなると、最早彼等とデュエルができる場所というのは限られてくる。

広太郎の目標は、ＯＣＧ研究会の三人を倒す事。

ならばこそ、彼等を倒せる機会は今しかない！！

そう判断した上での挑戦であった。

「随分と唐突だな広太郎よ。生憎だが…今の俺たちは、デッキを持ち合わせていない」

「くっ！？　どこまで人をおちょくるつもりだ…！！」

「ンなもん、アポ無しで来る広太郎ちゃんが悪いぜよ。だがまぁ…今の広太郎ちゃんの飢えを満たす事のできる相手なら、紹介してやれるぜぃ？」

ＯＣＧ研究会に対する勝利を渇望する広太郎。

そんな彼に、結締が紹介する人物とは…？

※

西条拓夜は自室のパソコンを使い、真剣な表情で液晶をのぞき込んでいた。

画面にはトリティニーグループが主催するプロリーグについて映し出されている。

過去のプロリーグには、いったいどのような決闘者が出場してきたのか？

知る事もまた、デュエルを勝つ上での重要要素なのだという事に、拓夜は気付いていた。

「これは三年前の出場者リスト…ッ！？　亨さんが…優勝！？」

自分の知っている名前が載っており、尚且つそれが優勝者である事に驚く拓夜。

「二年前には白石さんが…そして去年は…結締さんが優勝…か」

道理で、と拓夜は思った。

あの人たちの強さは、同じチームに居る自分でさえも実感できる。

自分の目標はプロリーグでの優勝であるが、ＯＣＧ研究会の先輩三人を倒す事もまた、目標なのだ。

「…今回のプロリーグに出場して優勝すれば、俺はあの人たちと同じ地位になれる…って訳か」

だが、同じ地位では満足できない。

やはり自分は、あの人たちに勝ちたい…！！

あの三人がプロリーグ経験者であり、優勝者であるなら尚更だ。

意気込む拓夜であったが、そこである事に気が付いた。

「そういえば…亨さんの時も白石さんの時も…そして結締さんの時もだけど…」

彼等三人の時の、プロリーグ決勝の対戦相手。

「叶（かのう）広太郎…この人、三年連続で準優勝か…」

三年連続でＯＣＧ研究会の先輩たちに負けているとはいえ、毎回準優勝という実績。

もしかしたら、彼が優勝していた年もあったかもしれない。
恐らく今年のプロリーグにも出場してくるだろう…。

「…叶広太郎…要チェック、だな…！！」

今年は先輩たち三人は出場しない代わりに、自分がプロリーグに出場する事になっている。
もし自分が勝ち進んだとしたら、この叶広太郎と対戦する可能性は高い。

「いったい…どんな決闘者なんだろ、この人…」

どんな決闘者で、どの様なデュエルをするのか。
考えただけでも、拓夜はワクワクしてきた。

「あ〝あ〝あ〝…ッッ！！　デュエルしてェエ！！」

すると、拓夜の携帯電話に一本の着信が入った。
開くとそこには、結締の名前が表記されていた。

「結締さんから…？ハイ、もしもし…」

『おーっす拓夜ちゃん。実はちょうど拓夜ちゃんの店に来ているんだけどさ、会って欲しい奴が居るんだ』

「え、会って欲しい奴…？」

『とりあえず来てくれや。じゃな！』

「え、あ、ちょっと…！？」

一方的に電話を切られてしまった為に深く聞き出す事ができなかったが…。

とにかく結締は、一階の店に来ているらしい。

余り待たせてはいけないと思い、拓夜は急いで部屋を後にした。

※

「来た来た…拓夜ちゃん、こっちだぜぃ！」

店に顔を出すと、外に設置してあるデュエルテーブルの前に、結締

と白石、そしてもう一人、見知らぬ男の姿があった。
誰だろうと思い、とりあえず彼等の前に立つ拓夜に、白石が話しだした。

「広太郎よ。お前のデュエルの相手は、この拓夜だ」

「え、何の話しなんスか？」

突然デュエルの相手だとか言われて呆気にとられる拓夜を前に、広太郎はどこか納得がいかないといった表情であった。

「こんな子供に、僕の相手が務まるものか…！！　僕は結締や白石と、デュエルで決着がつけたいだけなんだ！」

（こんな子供…だと！？）

見知らぬ男（広太郎）の発言に、拓夜のこめかみがピクリと反応する。

「だから俺たちァデッキを持ってないっちゅーの！！　だけど広太郎ちゃん、拓夜ちゃんを舐めてると、痛い思いをするかもしれないぜぃ？」

「ふん…どこの馬の骨とも知れない輩なんかに、僕が苦戦するなん

て…断じて有り得ないね！！」

「ぁ〝？」

どこの馬の骨？

断じて有り得ない？

初対面にも関わらずズケズケと物言うこの男に、拓夜のボルテージがヒートアップしていく。

「だいたい結締！お前が『西条』なんて言うから、僕はてっきり西条亭とデュエルができると思ったのに…よほど君は、人の神経を逆撫でるのが上手いみたいだ」

「ア〝ンタもなァッ！！」

ブチィッ！！

流石の拓夜も、遂には堪忍袋の尾が切れた。

「さっきから何なんだアンタはッ！？　人の爛に障る事ばかり言いやがって！！　そんなに自分が強いのかよ！？　どこの誰とも知れない、この俺に負けるのが恐いのか！？　ァ〝ア〝！？」

マジギレした拓夜を目の当たりにした白石や結締は、思わず言葉を無くした。

いつものからかいがいのある拓夜が、こうも豹変するとは予想外だったからだ。

「おい、アンタ…！！　俺とデュエルしろよ…！！　そんなに自分が強いってんなら、デュエルで証明してみせろよ！！」

「ふぅ…君とのデュエルは、余り乗り気じゃないんだけどね…」

拓夜の殺気立つ視線を受け、広太郎は上着の内ポケットからデッキを取り出した。

「一瞬でケリをつけてあげるよ…！！」

「絶対に倒してやる…！！」

「……」

「……」

とりあえず広太郎と拓夜のデュエルが成立はした。

が、

この不穏な空気だけは、白石や結締にとって予想外な事であった。

（なんかピリピリムードになっちまったが…さて、拓夜ちゃん。拓夜ちゃんがあれからどれだけ成長したのか、見せてもらうぜぃ…！！　って！？）

「あ、ちょ、白石さん！？　待て待て待て待てッ！！　ドコ行く気ぜよ！？」

「はっ離せ結締ッ！？　今日の拓夜は何か怖いぞ！！　俺はこんな不穏な空気は苦手なのだぁあ！！」

「逃がすかっての！！　広太郎ちゃんを連れてきた責任は、ちゃんと白石さんにもとってもらうからなぁあ！！」

外野でギャーギャー騒ぐ二人を余所に、ＯＣＧ研究会の西条拓夜と、プロデュエリストの叶広太郎。

二人のデュエルが、今始まる。

失礼なヤツ（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

今回の話は、前半は白石の妄想大爆発。

後半は拓夜の怒りが大爆発、といった内容に仕上げさせてもらいました。

今回初登場となる叶広太郎というキャラクターは、プロデュエリストという設定です。

次回はプロ相手に、新たな力を手にした拓夜がどう立ち向かうのか？を焦点にあてて、話を進めていこうかと思います。

それにしても書いてて思いました…

もし、実際にこの叶広太郎みたいな人が目の前に現れたら…

・・・・・

うん、絶対に嫌だ

西条拓夜の新たなる切り札（前書き）

暑い…

めっさ暑い…

夏は嫌いです。でも逆に冬は好きです。

だって単純な考えですが、冬みたく寒かったら服を厚着すれば、割と大丈夫なんですよ、僕。

けど、暑いって…

服を脱いでも暑いじゃないですか？

でも夏といえば海、プール、川、そして水着ッ！！の女の子たちッ！！

これだけは好きですねｗ

西条拓夜の新たなる切り札

※

東区商店街にあるおもちゃ屋サプライズ。

店の前の通りには、交差した視線から火花を散らす二人の決闘者の姿があった。

ＯＣＧ研究会の西条拓夜と、プロデュエリストの叶広太郎である。

相手を一瞥し、溜め息をつく広太郎とは対照的に、拓夜は険しい目つきで広太郎を睨んでいた。

自己紹介もせず、散々自分をコケにしてくれた広太郎に拓夜はマジギレしていた。

逆に広太郎本人は全くと言って良いほど自覚がなく

「先攻は譲るよ。せいぜい頑張ってくれ」

と吐き捨てる始末である。

明らかに拓夜を舐めていた。

「ほざいてろ、三下…ッ！！」

「ふん…このプロデュエリストである僕に対して三下呼ばわりとは…どうやら君は、相手の力量をわきまえてないみたいだ」

「アンタがプロだろうが何だろうが関係ないッ！！　俺はアンタを倒す…！！」

「聞き飽きたよ、君のソレは…さっさとターンを始めろ」

ブチブチィッッ！！

拓夜の中で、理性という名の糸が二本切れた。

「やってやろうじゃねぇかッ！！　いくぜ！！」

「ふぅ…」

『デュエルッ！！』

【先攻】西条拓夜
ＬＰ／　８０００

【後攻】叶広太郎
ＬＰ／　８０００

西条拓夜と叶広太郎、二人のデュエルが始まった。

先攻を奪取した拓夜はデッキトップを掴み、鬼気迫る勢いでカードを引いた。

「オレのターンッ、ドロー！！　俺はモンスター1体をセットし、リバースカードを2枚セット！！」

計三枚のカードをセットする拓夜。

「ターンエンド！」

「ふん…大層な事を言う割には、守備に徹するなんてね…君の実力の程が伺えるよ」

拓夜のプレイを鼻で笑う広太郎。

しかし、デュエルを観戦する結締や白石は違った。

（拓夜ちゃんが初手に守備モンスターを…となると）

（ふぅん…恐らくアレは、俺の時と同じくリクルーターである『キラー・トマト』か…）

拓夜のターンが終了した事で、広太郎のターンへと移行する。

「僕のターン、ドロー！…仕方ないから、君に見せてあげるよ。プロのデュエルというモノを！僕は手札から『インヴェルズの魔細胞』を特殊召喚！」

【インヴェルズの魔細胞】
星１／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ／　０
ＤＥＦ／　０
［効果］
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスターのアドバンス召喚以外のためにはリリースできず、シンクロ素材とする事もできない。

広太郎のフィールドに、てんとう虫の様な姿をした悪魔『インヴェルズの魔細胞』が特殊召喚された。

「このモンスターは僕のフィールドにモンスターが存在しない場合、手札から特殊召喚できる。更に『インヴェルズの魔細胞』をリリース…！！」

広太郎のモンスター『インヴェルズの魔細胞』が渦に呑まれ…

「アドバンス召喚！いくぞ…！！『インヴェルズ・モース』！」

【インヴェルズ・モース】
星６／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ／２４００
ＤＥＦ／　０
［効果］
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功した時、１０００ライフポイントを払う事で、相手フィールド上に存在するカードを2枚まで選択して持ち主の手札に戻す。

ズズズ…ッ！！

広太郎は『インヴェルズの魔細胞』をリリースし、『インヴェルズ・モース』をアドバンス召喚した。

「ふん…この瞬間、アドバンス召喚に成功した『インヴェルズ・モース』の効果を発動！」

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００

【叶広太郎】
ＬＰ／８０００　→　７０００

得意気に鼻を鳴らす広太郎が、モースの効果を説明しようとした瞬間…

「ライフを１０００ポイント払う事で、相手フィールドのカードを２枚までバウンズする…だろ？」

「ほぅ…このカード効果を知っていたのか…」

（拓夜ちゃん…！？）

拓夜は広太郎が説明する前に、自らがカード効果を言い放った。

これにはデュエルを観戦する結締や白石が一番驚いていた。

今までの拓夜ならばカード効果に疎かった為、相手が発動するカード一枚一枚に反応し、驚いていた。

だが、ここまでクレバーな拓夜は初めて見た。

結締や白石は知らないが、拓夜は成瀬から貰ったヴァリアブルブックを読み、更にはインターネットを駆使して様々なカードについて調べ上げていた。

様々なカードを知る事によって、情報というアドバンテージを得る。

知る事もまた、デュエルに勝つ事へ繋がると、拓夜は学習していた。

「知っているのなら話しは早い。『インヴェルズ・モース』の効果により、僕は君の裏側守備表示モンスターと、右側のリバースカードを選択する！さぁ、手札に戻るんだ！」

「……」

『インヴェルズ・モース』の効果が炸裂し、拓夜のモンスターと一枚のリバースカードが手札に戻された。

これにより、拓夜のフィールドには一枚のリバースカードのみ残った状態になった。

「メインフェイズを終了し、バトルフェイズに入る！『インヴェルズ・モース』で、生意気な坊主にダイレクトアタック！」

「くっ！？　誰が…生意気だって…！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００　↓　５６００

ダイレクトアタックを受けた拓夜のライフが大きく減少する。

「俺は西条拓夜って名前があるんだ！！　人を馬鹿にするのもいい加減にしろッ！！」

「君の方こそ、僕にだって叶広太郎という名前があるんだ。人の事をとやかく言う前に、自分から言葉遣いを直したまえよ」

「…叶…！？」

叶広太郎。

その名前はどこかで聞いたような…？と、疑問に思う拓夜を前に、広太郎はメインフェイズ２へと移行し

「ふぅ…僕はカードを一枚セットして、ターンエンドだ。さっさとターンを始めろ、劣化西条」

「ッ！？　誰が劣化だ！！　西条は西条でも、俺は亨さんとは違う！！　劣化でも何でもない、西条拓夜という一人の決闘者だ！！」

「拓夜ちゃん、落ち着け！！」

「拓夜よ！！　ヤツの口車に乗せられるな！！　お前は自分のプレイに集中しろッ！！」

「…くッ！！」

結締や白石に言われ、歯を食いしばる拓夜。

イライラする。

目の前の広太郎に対し、激しい憎悪が込み上げてくる。

しかし、怒りに任せてのプレイはできない。

以前、ＯＣＧ研究会の偽物とデュエルをした時、怒りに任せた杜撰なプレイで、自分の首を絞めた事がある。

その経験からか、拓夜は憤慨しながらも、頭のどこかではデュエルに冷静だった。

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００
［手札］
５枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　１枚

【叶広太郎】
ＬＰ／７０００
［手札］
３枚
［モンスター］

インヴェルズ・モース
［魔法・罠］
リバースカード　1枚

「俺のターンッ！！　ドローッ！！」

拓夜のターンが始まった。

広太郎のフィールドには上級モンスター『インヴェルズ・モース』がいる。

しかし、拓夜の手札にはそれを攻略する手だては幾らでも在った。

「手札より魔法カード『おろかな埋葬』を発動！！」

【おろかな埋葬】
［魔法カード］
自分のデッキからモンスター1体を選択して墓地へ送る。その後デッキをシャッフルする。

「この効果で、デッキから『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を墓地へ送る！そして、墓地のディアボリックガイの効果発動！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】

星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／　８００
ＤＥＦ／　８００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地にあるこのカードを除外する事で、デッキから二枚目のディアボリックガイを特殊召喚する！来いッ！！　ディアボリックガイ！！」

拓夜のフィールドに『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』が守備表示で特殊召喚された。

更に拓夜は手札を掴み

「そして、チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を召喚！」

【ゾンビキャリア】
星２／闇属性／アンデット族
ＡＴＫ／　４００
ＤＥＦ／　２００
［効果・チューナー］手札を１枚デッキの一番上に戻して発動する。墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場

合ゲームから除外される。

拓夜のフィールドに召喚されしチューナーモンスター。

これで舞台は整った！と言わんばかりに、拓夜は握り拳を空に翳し

「行くぜ！レベル６の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』に、レベル２のチューナーモンスター『ゾンビキャリア』をチューニングッ！！」

拓夜のモンスターの力（星）が一つになり、拓夜にとって新たな力が解放される。

「王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見よッ！！」

「ムッ！？　拓夜よ…まさか…ッ！？」

６＋２＝８

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！　焼き尽くせッ！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン】
星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／３０００
ＤＥＦ／２０００
［シンクロ／効果］
チューナー　＋　チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

グゴゴゴゴゴ…ッ！！

拓夜のフィールドに顕現せし、白石から譲り受けた熱き情熱。
紅蓮魔龍『レッド・デーモンズ・ドラゴン』。

その登場に、デュエルを観戦していた白石は興奮し、結締は大きく目を見開いた。

「レッド・デーモンズ…それは白石のカードの筈…ッ！？　なぜ君がそのカードを…！！」

白石が所持していた筈のカードを扱う拓夜に対し、広太郎は怪訝な表情をつくる。

拓夜はそんな広太郎の表情を気に留めることなく、バトルフェイズへと突入した。

「バトルッ！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』で、『インヴェルズ・モース』に攻撃ッ！！　アブソリュート・パワーフォース！！」

ズゴゥッ！！

「うっ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００

【叶広太郎】
ＬＰ／７０００　→　６４００

モンスターを破壊され、微弱ながらダメージを受けた広太郎。

よし！と意気込む拓夜であったが、それがどうした？と言わんばかりの表情で、広太郎は鼻で笑った。

「ふん…その程度かい？」

「…俺はリバースカードを一枚セットして、ターンエンド！」

拓夜の反撃（ターン）が終了し、続いて広太郎のターンへと移行する。

「僕のターン、ドロー！」

デッキからカードをドローした広太郎は、引き当てたカードを確認し、不敵な笑みを浮かべる。

「…ッ、これは良いカードを引いた…！！」

「ッ！？」

「君が白石のレッド・デーモンズを召喚した事には驚いたが、所詮はそれだけに過ぎない」

広太郎は得意気に語りながら、手札から引き当てたカードを発動していく。

「プロとは常に勝利を模索し、それを実行していく者を指す。だから僕は容赦はしない…！手札より魔法カード『悪夢再び』を発動！！」

【悪夢再び】

［魔法カード］

自分の墓地に存在する守備力０の闇属性モンスター２体を選択し手札に加える。

「このカードは、僕の墓地に眠る“守備力０の闇属性モンスター２体”を選択し、手札に加えるカード！僕はこの条件に当てはまる『インヴェルズ・モース』と『インヴェルズの魔細胞』を手札に加える！！」

「…ッ！！」

墓地の２体のモンスターを回収した広太郎。

拓夜はその行動（プレイ）に、冷や汗が一つ流れた。

「そして手札の『インヴェルズの魔細胞』は、僕のフィールドにモンスターが存在しない時、手札から特殊召喚する事ができる…！！『インヴェルズの魔細胞』を、特殊召喚！」

再び広太郎のフィールドに『インヴェルズの魔細胞』が特殊召喚された。

更に

「そして『インヴェルズの魔細胞』をリリースし…！！『インヴェルズ・モース』を、アドバンス召喚ッ！！」

ドンッ！！

広太郎のフィールドに『インヴェルズ・モース』がアドバンス召喚された。

モースがアドバンス召喚に成功した為、広太郎は早速、その効果を発動していく。

「『インヴェルズ・モース』の効果発動！！　このカードが【インヴェルズ】と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した時、１０００ライフを払う事で、相手フィールド上のカードを2枚まで手札に戻す！」

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００

【叶広太郎】
ＬＰ／６４００　→　５４００

「くっ！？」

「僕が選ぶのは君のレッド・デーモンズと、先ほど伏せた右側のリバースカード！」

『インヴェルズ・モース』の効果が炸裂し、再び拓夜のカードはバウンズされてしまった。

これにより拓夜のフィールドには壁となるモンスターはなく、一枚のリバースカードのみという状況になってしまった。

「まるで1ターン前と同じ状況だな…改めて、君の実力の程が窺えるよ…」

侮蔑するような視線を向ける広太郎は、容赦なくバトルフェイズへと突入した。

「バトルフェイズだ！『インヴェルズ・モース』のダイレクトアタック！」

広太郎の『インヴェルズ・モース』が拓夜へと襲い掛かった瞬間、拓夜が動いた。

「前と同じ…だと？ソイツは違うぜ！リバーストラップ『Ｄ－フォーチュン』を発動！！」

【Ｄ－フォーチュン】
［罠カード］
相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。自分の墓地に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、バトルフェイズを終了する。

拓夜は1ターン目から伏せてあったカード『Ｄ－フォーチュン』の効果を発動した。

「この効果で、墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』を除外し、このターンのバトルフェイズを強制的に終了させる！！」

すんでのところで広太郎の攻撃を避わした拓夜に、思わず広太郎は舌打ちした。

「チッ…無駄なあがきを…！！」

「ふぅん…なる程な。前のターン、拓夜の墓地には【Ｄ－ＨＥＲＯ】が存在していなかったが為に『Ｄ－フォーチュン』は発動できなかった訳か…」

「墓地は“第二の手札”と言われる位に重要なポジションだぜぃ…このターン、広太郎ちゃんは盲目だったな…！！」

デュエルを観戦する二人が評価を下す中、広太郎はメインフェイズ2へと移行し

「一度の攻撃を防いだからといって、いい気になるなよ…劣化西条。僕はリバースカードを一枚セットして、ターンエンド！」

広太郎のターンが終了し、拓夜のターンへと移る。

【インヴェルズ】。

それが叶広太郎の操るデッキ。

拓夜はこれまでの広太郎のプレイや、その関連カードの情報を観察していった。

自分が知る中で【インヴェルズ】は闇属性の悪魔族で統一されたモンスター群。

更にはその殆どのモンスターの守備力が０であり、先ほどみたく『悪夢再び』の恩恵が強い。

下手をすれば毎ターン、アドバンス召喚から誘発する効果によって、ボードアドバンテージが奪われてしまう。

（伊達にプロを名乗っちゃいないな…ムカつくけど、認めるしかない…厄介な強敵だ…！！）

しかし、だからといって自分は負けるつもりはない。

拓夜はデッキトップに指を添え、広太郎の戦術を打開する為のプレイを模索する。

「俺は…負けない…！！　行くぜ！俺のターンッ！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００
［手札］
５枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

【叶広太郎】
ＬＰ／５４００
［手札］
２枚

［モンスター］
インヴェルズ・モース
［魔法・罠］
リバースカード　２枚

拓夜のターンが始まった。

カードをドローし、手札を五枚揃えた拓夜は、今の手札から織り成す事ができる渾身のプレイを開始する。

「墓地に眠る『ゾンビキャリア』の効果発動！手札一枚をデッキトップに戻す事で、墓地のこのカードを特殊召喚する！来い！『ゾンビキャリア』！」

手札一枚をデッキトップに戻し、先陣を切って現れたのはチューナーモンスターである『ゾンビキャリア』だった。

「そして俺は『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』を召喚ッ！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／１４００
ＤＥＦ／１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデ

ッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は1ターンに1度しか使用できない。

続いて現れたのは、拓夜にとっての良き相棒『D－HERO　ダイヤモンドガイ』。

ダイヤモンドガイの召喚に対し、広太郎は何の反応もしなかった為、拓夜は早速ダイヤモンドガイの効果を発動した。

「ダイヤモンドガイの効果発動!!　デッキトップのカードをめくり、それが通常魔法カードなら墓地へ送り、次のターンにその効果を発動できる!!」

拓夜はそう言うと、デッキトップのカードをめくり、それを公開した。

「デッキトップは…通常魔法『終わりの始まり』だ!!」

「なにッ!?」

「ふぅん…やるようになったな、拓夜め…!!」

「先に『ゾンビキャリア』の効果で、デッキトップを操作していた

からな…これなら安心して、ダイヤモンドガイの効果を使えるって訳だぜぃ」

結締と白石の二人は、拓夜のプレイに感心していた。

以前の拓夜は、ここまでな冷静なデュエルはできていなかった。

様々な経験を経て、己を研鑽していったからこその今の拓夜。

目の前で直に感じ取れる後輩の成長に、二人は感無量だった。

「行くぜ…！！　レベル４の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』に、レベル２の『ゾンビキャリア』をチューニングッ！！」

拓夜のモンスター二体の力（星）が一つになり、更なる力が解放される。

４＋２＝６

「来たれ、歴戦の勇士よ！栄光の架け橋を駆け抜けろッ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！『大地の騎士ガイアナイト』！！」

【大地の騎士ガイアナイト】
星６／地属性／戦士族
ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／　８００
［シンクロ］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上

拓夜のフィールドにデュエルモンスターズの歴戦の勇士『大地の騎士ガイアナイト』が推参した。

そしてメインフェイズを終え、拓夜のバトルフェイズへと突入する。

「行けッ、ガイアナイト！！『インヴェルズ・モース』に攻撃！！
アース・スパイラル・シェイバー！！」

ズボァッ！！

「…ふん」

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００

【叶広太郎】
ＬＰ／５４００　→　５２００

微弱ながらも広太郎のライフを削り、モンスターを破壊した拓夜。

「良し！」

「何をシンクロ召喚するかと思えば…何の効果も持たないガイアナイト？そんなクズカードをデッキに入れているなんて…拍子抜けするね…全く…」

「ナメるなよ…このカードは、亨さんから譲り受けた、俺の大切なカードなんだ！！　クズなんて二度と呼ばせない！！　リバースカードを一枚セットして、ターンエンド！」

「呼ばせたくないんだったら、せいぜい足掻いてみるんだな…僕のターン！」

広太郎のターンが始まった。

広太郎のフィールドにはモンスターはないが、リバースカードが二枚伏せられている。

そして広太郎は伏せてある二枚の内、一枚のカードを掴み

「行くよ…トラップ発動！『侵略の波紋』！！」

【侵略の波紋】
［罠カード］
５００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するレベル４以下の「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００

【叶広太郎】
ＬＰ／５２００　↓　４７００

「このカードはライフを５００払う事で、墓地のレベル４以下の【インヴェルズ】１体を復活させる！蘇れ…『インヴェルズの魔細胞』！！」

ドンッッ！！

再び『インヴェルズの魔細胞』が広太郎のフィールドに特殊召喚された。

「そして『インヴェルズの魔細胞』をリリースし…来いッ！！『インヴェルズ・ギラファ』！！」

【インヴェルズ・ギラファ】
星７／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／　０
［効果］
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体をリリースして表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして、このカードのアドバンス召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して墓地へ送り、自分は１０００ライフポイント回復する事ができる。

グゴゴゴゴ…ッ！！

広太郎のフィールドにレベル７の最上級悪魔『インヴェルズ・ギラファ』がアドバンス召喚された。

「リリース１体で…レベル７のモンスターを…！？　それが『インヴェルズ・ギラファ』の効果か…！！」

「そう。ギラファは本来ならばリリース２体を要する最上級モンスター。しかしこのカードは【インヴェルズ】と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚する際、１体のリリースで召喚する事ができる！！」

更に広太郎は、アドバンス召喚に成功した『インヴェルズ・ギラフ

ァ』の効果を発動する。

「そして『インヴェルズ・ギラファ』の効果発動！このカードが【インヴェルズ】と名のついたモンスターをリリースして、アドバンス召喚に成功した時、相手フィールドのカード１枚を墓地へ送り、僕はライフを１０００ポイント回復する！」

『インヴェルズ・ギラファ』の右手のバスターが、拓夜のガイアナイトに照準を定める。

「くっ…！？」

「僕が選択するのは、そのクズカード…『大地の騎士ガイアナイト』だ！！」

ズゴゥッ！！

ボバァァッ！！

「ガイアナイトッ！？」

拓夜のガイアナイトはギラファの効果により、墓地へ送られてしまった。

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００

【叶広太郎】
ＬＰ／４７００　↓　５７００

ライフポイントを回復した広太郎は、がら空きとなった拓夜のフィールドに襲い掛かる。

「これで君の壁（モンスター）は消え、残されたのは１枚のリバースカードのみ…バトル！！『インヴェルズ・ギラファ』で、劣化西条にダイレクトアタック！！」

ズドンッッ！！

「ぐぅ…ッ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／５６００　↓　３０００

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００

ダイレクトアタックを受け、ライフ差が大きく広がってしまった。

「…口で言う割には、君の実力は大した事ないね。さて…と、僕はバトルフェイズを終了してメインフェイズ…」

広太郎は拓夜を小馬鹿にしながら

「手札から魔法カード『おろかな埋葬』を発動！この効果で僕は…デッキから『インヴェルズの斥候』のカードでも墓地へ送っておこうか」

デッキから『インヴェルズの斥候』のカードを墓地へ送った広太郎。

そして再び、彼の口から嫌みが零れた。

「それにしても…君は本当に西条の劣化だね。彼と同じ性なのに…君は弱い」

「…アンタはその減らず口、どうにかならないのか？こんな不愉快なデュエル……アンタにとって、人の嫌みを言うのは楽しい事なのかよ？」

「ふん…不愉快なのは僕だってそうさ。本来なら僕は、結締や白石や西条亨と…つまりは歴代のデュエルチャンピオンとデュエルがしたくて、ここまで来たんだ。だのに…対戦相手は西条の劣化である君で、てんで弱い」

不満をぶちまける広太郎。

自分の望むデュエルが実現しなかった事への腹いせいからくる嫌み。

聞いていて拓夜は、ほとほとに呆れてしまった。

「なぁ…アンタはそうやって、あの三人の背中を追っかけてるつもりかもしれないけどさ」「？」

「今の相手は、この俺だッ！！　今のアンタはプロとしての…いいや、人としての常識がなっちゃいないぜ！！」

「ふぅん…全くだ」

「テレビコマーシャル知らないかにゃ～？『ルールやマナーを守って、楽しくデュエル』って」

拓夜だけでなく、結締や白石にまで言われる始末。

しかし、それでも広太郎はへそを曲げたままだった。

「ふん…口だけなら何とでも言える。君のその言葉は、僕に勝ってから証明してみせるんだな！」

「当たり前だ。俺は勝つ…！！　アンタみたいなヤツなんかに、絶対に負けるもんかッ！！」

「ッ！？」

拓夜の気迫に一瞬、気圧される広太郎だったが、直ぐにそれを鼻で笑う。

「ふん…僕のターンは終了だ。さて…劣化西条、君のターンだ。そこまで言うんだ…せめて僕のライフを、自分と同じ位に近づける程のデュエルを魅せてみろ」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／３０００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　１枚

【叶広太郎】

LP／5700
［手札］
1枚
［モンスター］
インヴェルズ・ギラファ
［魔法・罠］
リバースカード　1枚

「行くぜ、俺のターンッ！！」

拓夜のターンが始まった。

デッキからカードをドローした拓夜は早速、墓地に手を伸ばし

「前のターン、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られた『終わりの始まり』の効果を発動する！」

【終わりの始まり】
［魔法カード］
自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができる。自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「この効果で俺は、カード3枚ドロー！！」

一気に手札を六枚まで補充した拓夜。

彼の本当の実力を、広太郎は知らない。

ならば、それを見せてやる！

拓夜は今の自分にできる最高のプレイをする為、手札の１枚のカードに手を伸ばす。

「お望み通り魅せてやるぜ！！　これが俺の…本気のデュエルだ！！　まずは手札の『沼地の魔神王』の効果発動！！」

【沼地の魔神王】
星３／水属性／水族
ＡＴＫ／　５００
ＤＥＦ／１１００［効果］
このカードを融合素材モンスター１体の代わりにする事ができる。その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。また、このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから「融合」魔法カードを手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

「手札のこのカードを捨てる事で、デッキから『融合』を手札に加える！更に手札より『ミラクルシンクロフュージョン』を発動！！」

【ミラクルシンクロフュージョン】

［魔法カード］
自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材とするその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。また、セットされたこのカードが相手のカードの効果によって破壊され墓地へ送られた時、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

「フィールドか墓地の融合素材モンスターをゲームから除外し、シンクロモンスターを融合素材としたモンスターを、特殊召喚する！墓地の『沼地の魔神王』と、『大地の騎士ガイアナイト』を除外…！！」

拓夜の墓地のモンスターが除外され、彼の新たな力が吹き荒れる。

「歴戦の勇士よ！真の力を解放し、大地を穿ち、天を貫けッ！！
融　合　召　喚　ッ！！」

カッッ！！

「駆け抜けろッ！！『地天の騎士ガイアドレイク』！！」

【地天の騎士ガイアドレイク】
星１０／地属性／獣戦士族

ＡＴＫ／３５００
ＤＥＦ／２８００
［融合／効果］
「大地の騎士ガイアナイト」＋効果モンスター以外のシンクロモンスター
このカードは効果モンスターの効果の対象にならず、効果モンスターの効果では破壊されない。

ドンッッ！！

拓夜のフィールドに、最強の力を宿した地天の騎士が登場した。

「ガイアドレイク…？」
（ふん…クズカードが融合したからといって…ただ攻撃力が増えただけじゃないか…）

「これが…アンタが散々、効果がないクズカードと称したガイアナイトの真の姿だ！！　だが…まだこれで終わりじゃないぜ？」

拓夜はそう言うと、自分の場に伏せられていた１枚のリバースカードを掴み

「リバーストラップ『異次元からの帰還』を発動！！」

【異次元からの帰還】
［罠カード］
ライフポイントを半分払う。ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

【西条拓夜】
ＬＰ／３０００　→　１５００

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００

「このカードは発動時にライフを半分払う事で、ゲームから除外されたモンスターを、可能な限り全て特殊召喚するッ！！」

拓夜は除外されたカードを掴み

「来いッ！！　２体の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』！！『ゾンビキャリア』！！『大地の騎士ガイアナイト』！！」

【拓夜のモンスター】
地天の騎士ガイアドレイク
大地の騎士ガイアナイト
Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ　×２

ゾンビキャリア

一気にモンスターを展開する拓夜。

これにはそれまで軽口だった広太郎も、思わず見入ってしまった。

「行くぜ…！！　レベル６の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』に、レベル２の『ゾンビキャリア』をチューニング！！」

拓夜のモンスター達の力（星）が一つになり、再び彼の熱き魂が顕現する。

「王者の鼓動、今ここに列を成す。天地鳴動の力を見よッ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！　焼き尽くせッ！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

グゴゴゴゴ…ッ！！

「ここで…レッド・デーモンズ…ッ！！」

「更に、墓地の『ゾンビキャリア』の効果発動！！　手札1枚をデッキトップに戻し、このカードを特殊召喚！！」

拓夜は五枚の手札の中から一枚をデッキトップに戻し、『ゾンビキャリア』を特殊召喚した。

「レベル6の『D－HERO　ディアボリックガイ』に、レベル2の『ゾンビキャリア』をチューニング！！」

拓夜のモンスター達が再び交わり、屈強な戦士の魂が現れる。

「集え！！　屈強たる戦士の魂よ！！　全てを粉砕する一撃（力）を解放せよ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！『ギガンティック・ファイター』！！」

【ギガンティック・ファイター】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／１０００

シンクロ／効果
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードの攻撃力は墓地に存在する戦士族モンスターの数×１０
０ポイントアップする。このカードが戦闘によって破壊され墓地に
送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター１体を選択し自分フ
ィールド上に特殊召喚する事ができる。

ドドドドド…ッ！！

続いて拓夜のフィールドに現れたのは、荒ぶる戦士の魂を宿す『ギ
ガンティック・ファイター』。

圧巻、と言わざるをえない。

拓夜のフィールドには、彼の新たなる力を総称するモンスター達が
出揃ったのだ。

【拓夜のモンスター】
地天の騎士ガイアドレイク
大地の騎士ガイアナイト
レッド・デーモンズ・ドラゴン
ギガンティック・ファイター

「『ギガンティック・ファイター』は、墓地の戦士族モンスターの
数だけ、攻撃力を１００ポイントアップさせる…！！」

【ギガンティック・ファイター】
ＡＴＫ／２８００　→　３１００
ＤＥＦ／１０００

「これが…今の俺が出せる全力だ…！！」

「……！！」

広太郎にとって、この展開は予想外であった。

自分の場には、攻撃力２６００の『インヴェルズ・ギラファ』と、一枚のリバースカードのみ。

（僕のライフを近付けてみろ、とは言ったけど…ここまでやるとはね…！！）

【西条拓夜】
ＬＰ／１５００

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００

下手をすれば自分はやられるのではないか？

そう思えてきてしまう。

（だが…僕はプロだ…！！　プロには、プロの意地がある…！！）

キッ…と拓夜を見据える広太郎。

そして、拓夜の攻撃（バトルフェイズ）が始まる。

「バトルッ！！　先ずは『ギガンティック・ファイター』からだ！！『インヴェルズ・ギラファ』に、攻　撃　ッ！！」

グォォオオ…！！

『ギガンティック・ファイター』が拳を大きく振りかぶり、『インヴェルズ・ギラファ』に突撃する。

「まさか…劣化如きがここまでやるなんて、正直驚いたよ…！！」

広太郎の眼差しが変わった。

それまで小馬鹿にした雰囲気から一変し、その表情は真剣そのものになったのだ。

そして、自分の場に伏せてある一枚のカードを掴み…！！

「だが…まだ詰めが甘い！！　速攻魔法『侵略の一手』を発動！！」

【侵略の一手】
［速攻魔法］
自分フィールド上に表側表示で存在する、アドバンス召喚に成功した「インヴェルズ」と名のついたモンスター1体を手札に戻して発動する。自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「この効果により、アドバンス召喚に成功している【インヴェルズ】1体を手札に戻し、僕はデッキから、カードを1枚ドローする！！」

唯一、壁として残っていた上級モンスター『インヴェルズ・ギラファ』を手札に戻した広太郎は、効果によってカードを一枚ドローした。

「…！？　だがこれで…アンタのフィールドはがら空きになった！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／１５００
［手札］
４枚

［モンスター］
地天の騎士ガイアドレイク
大地の騎士ガイアナイト
レッド・デーモンズ・ドラゴン
ギガンティック・ファイター
［魔法・罠］
なし

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００
［手札］
３枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

「この物量差なら…アンタの５７００のライフじゃ、受けきれないぜ！！」

勝利を確信した拓夜は、攻撃の巻き戻しが発生した状況から

「いけッ！！『ギガンティック・ファイター』！！　叶ってヤツにダイレクトアタックだ！！」

「っ！？　待て、拓夜ちゃん…ッ！！」

「相手は、曲がりなりにもプロだ…何も考えず、フィールドをがら空きにする訳がない…！！」

拓夜とは違い、結締や白石はこの状況に警戒した。

それは、永年の経験からくる直感であった。

「あの二人が言うように…僕が何の策もなく、場をがら空きにするとでも思っているのかい？」

「っ！？」

「やはり、君は西条の劣化だな…！！　手札の『バトルフェーダー』の効果を発動する！！」

【バトルフェーダー】
星１／闇属性／悪魔族
ＡＴＫ／　０
ＤＥＦ／　０
［効果］
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「このカードは、相手が直接攻撃を宣言した際に手札から特殊召喚でき、バトルフェイズを終了させる！」

ドンッ！！

広太郎の手札から『バトルフェーダー』が守備表示で特殊召喚された。

「…ッ！！」

（まさか…『バトルフェーダー』の効果を有用に発動する為に…ワザとモンスターを手札に…！！）

広太郎の狙いに気付いた時には遅かった。

このターンのバトルフェイズは終了してしまい、結局、拓夜は広太郎にダメージを与える事が出来なかったのだ。

「常に相手の先を読み、自分の戦略に相手を引きずり込む…それがプロだ…！！」

口は悪いが、やはり実力は相当なものだ。と拓夜は改めて実感した。

そんな拓夜の頬に、焦りからくる汗が流れ落ちる。

「…リバースカードを1枚セットし、ターンエンド。そしてエンドフェイズ時…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』の効果で、ガイアナイトは破壊される…！！」

西条拓夜　ＶＳ　叶広太郎

二人のデュエルは、更に熾烈を極めていく。

※

拓夜が広太郎とのデュエルを繰り広げている中、亨は自分の気持ちとのデュエルを繰り広げていた。

葉月との買い物を終えた亨は、彼女を連れて駅前のカフェに来ていた。

対面に座り、楽しげに話しをしている葉月に、亨は相槌をうって話しを聞いてはいるが…

（ど、どう…言えば良いんだ…！？）

葉月に会う前、結締に言われた言葉が引っかかり、亨はいつも以上に緊張していた。

（烏丸さんをモノにしろ…って…！！）

いきなり好きだ！とでも…

いやいや、そんな話しの流れじゃないし…

じゃあそんな雰囲気になるように、自分から話しを持っていくか？

いやいや、そんな雰囲気って…どう会話を切り出せば良いんだ？

（わ…わからない…）

考えれば考える程に頭の中が真っ白になっていく。

結局、亨は自分の気持ちを言い出せないまま、ズルズルと時間だけが過ぎていくのだった。

※

【西条拓夜】
ＬＰ／１５００
［手札］
３枚
［モンスター］
地天の騎士ガイアドレイク
レッド・デーモンズ・ドラゴン
ギガンティック・ファイター
［魔法・罠］
リバースカード　１枚

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００
［手札］
２枚
［モンスター］
バトルフェーダー
［魔法・罠］
なし

拓夜のターンが終了し、広太郎のターンへと移行する。

前のターンで決着をつけるつもりでモンスターを展開した拓夜であったが、その攻撃は失敗に終わった。

（恐らく劣化西条は、自分の攻撃が失敗した反動でショック状態の筈…攻めるなら…今だ…ッ！！）

そう判断した広太郎は、自分のターンを開始する。

「僕のターン、ドロー！…ッ！？」

ドローしたカードを確認し、広太郎はニヤリと薄気味悪い笑みを浮かべる。

「良いカードを引いた…！！　今の僕の墓地に、闇属性モンスターは３体…！！」

広太郎はそう呟くと、ドローしたカードを翳し

「このカードは、僕の墓地にある闇属性モンスターが３体の場合のみ、特殊召喚する事ができる…！！　来いッ！！『ダーク・アームド・ドラゴン』！！」

【ダーク・アームド・ドラゴン】
星７／闇属性／ドラゴン族

ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／１０００
［効果］

このカードは通常召喚できない。自分の墓地に存在する闇属性モンスターが3体の場合のみ、このカードを特殊召喚する事ができる。自分の墓地に存在する闇属性モンスター1体をゲームから除外する事で、フィールド上のカード1枚を破壊する事ができる。

ズズズズ…！！
ドドドドド…！！

広太郎のフィールドに、凶悪モンスター『ダーク・アームド・ドラゴン』が出現した。

「ダーク・アームド…ッ！？　確か…ソイツの能力は…！！」

「ふんッ…劣化である君でも知っているだろう？このモンスターの強力な効果を！」

得意気に鼻を鳴らす広太郎は早速、『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動させた。

「早速だが…『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動！墓地の闇属性モンスター1体を除外する事で、フィールド上のカード1枚を破壊する！まず破壊の対象とするのは…『ギガンティック・ファイター』！」

広太郎は墓地の『インヴェルズ・モース』を除外し、拓夜の『ギガンティック・ファイター』を破壊した。

「くっ！？」

「続けてもう一度『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果を発動する！墓地の『インヴェルズの魔細胞』を除外し…『レッド・デーモンズ・ドラゴン』を破壊！」

ズゴゥッ！！

拓夜のフィールドから『レッド・デーモンズ・ドラゴン』が破壊され、消滅した。

これにより拓夜のフィールドには『地天の騎士ガイアドレイク』に、一枚のリバースカードのみとなってしまった。

「僕の墓地には、闇属性モンスターがあと1体残っている…！！このまま君のフィールドに侵略する！！『ダーク・アームド・ドラゴン』の効果発動！」

広太郎は興奮し、『ダーク・アームド・ドラゴン』の三回目の効果を発動した。

「墓地の『インヴェルズの斥候』を除外し、劣化西条のフィールドから…『地天の騎士ガイアドレイク』を破壊する！いけっ！！『ダーク・アームド・ドラゴン』！！」

ダーク・アームドの剛腕から放たれた黒い魔球が、拓夜のガイアドレイクを襲う。

だが…

「これで劣化西条、君のフィールドはがら空ーー」

「甘ぇよ…ッ！！」

バチィィイ…！！

なんと、ガイアドレイクがダーク・アームドの効果を弾き飛ばしたのだ。

「なッ！？」

「なぜ？って顔をしてるな…叶、だっけ？アンタはガイアドレイクの効果を知らないのか？」

「ガイアドレイクの…効果、だと…！？」

呆気にとられる広太郎に、拓夜は鋭い視線を突き刺し、言い放つ。

「『地天の騎士ガイアドレイク』は…“効果モンスターの効果対象にならず、効果モンスターの効果では破壊されない”！！」

「なッ！？」

「おかしいと思わなかったのか？前のターン“俺のレッド・デーモンズの効果が発動したのにも関わらず、攻撃宣言していないこのカードが、なんで破壊されなかったのか？”って…」

「ッ！？」

広太郎は自分のミスにショックを受けた。

（プロであるはずの僕が、カード効果を知らない事によってミスを犯したなんて…ッ！！）

広太郎にとって『大地の騎士ガイアナイト』は、効果を持たないクズシンクロモンスターだと思い込んでいた。

しかし、ガイアナイトがシンクロ融合モンスターへと昇華した所で、大した効果は無いだろうと勝手に思い込み、ろくにカードテキストを読まなかったのだ。

ただ「攻撃力３５００か、ふん…まぁまぁだな」と思った程度。

西条拓夜を舐めていた。

劣化西条だと、馬鹿にしていた。

今回のは、自らの驕りや慢心から招いた、ある意味において罰なのだ。

「相手が使うカードには、どんなカードだろうと細心の注意を払えよ…それがプロなら、尚更…じゃないっすかね？」

劣化、劣化と呼んでいた拓夜が、デュエル開始前にも増して強大な相手に思えてくる。

広太郎は「ちぃっ！！」と大きく舌打ちし

「破壊の対象にできないのであれば…僕は君のリバースカードを破壊する…！！」

ズゴゥッ！！

リバースカードが代わりに破壊されたが、それでも拓夜は強気でいられた。

ガイアドレイクの効果が判明してからの、広太郎の狼狽えよう。

あれでは、今の手札にはガイアドレイクを攻略できるカードがない！と、顔で語っているようなものだ。

そんな拓夜の読みはドンピシャに当たった。

広太郎は片や手札を覗き込み、片やフィールドを観察し、真剣に打開策を練っていく。

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００
［手札］
２枚
（インヴェルズ・ギラファ）
（サイクロン）
［モンスター］
ダーク・アームド・ドラゴン
バトルフェーダー
［魔法・罠］
なし

広太郎の頬を、嫌な汗が滝のように流れ落ちる。

（ぐ…っ！？　ここで『インヴェルズ・ギラファ』の召喚は有り得ない…！！　僕とした事が…プロである僕が…こんな初歩的なミスを…！！）

鋭い視線が多角方から、広太郎を貫く。

西条拓夜。

結締智恭。

白石直也。

三人からの視線に、そしてこれ以上となない策が練れない現状に堪えきれず、広太郎の口から零れたのは…

「た…っ、…ターン…エンド…ッ…！！」

※

「ふぅん…広太郎はかなり苦しい状況になったな…！！」

そう呟いたのは白石。

「ヤツは完璧主義者だ…それ故に、自分が思い描いた通りの展開を

阻止された時、受ける衝撃は常人以上に大きい…！！」

「広太郎ちゃんのデッキが俺達との時と変わってなけりゃ、そのデッキ趣向はある程度見えてくるぜぃ。多分、広太郎ちゃんのデッキは…モンスター効果によってボードアドバンテージを取る事に特化させたタイプだぜぃ…！！」

「そして魔法・罠は…【インヴェルズ】を特殊召喚させる為のカードで固められている…よって、魔法・罠でのモンスター除去は無いと言っても良いだろう…！！」

拓夜には聞こえない位の声で話す二人。

そして迎えた拓夜の進撃（ターン）。

「俺のターンッ…ドローッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／１５００
［手札］
４枚
［モンスター］
地天の騎士ガイアドレイク
［魔法・罠］
なし

【叶広太郎】
ＬＰ／５７００
［手札］
２枚
［モンスター］
バトルフェーダー
ダーク・アームド・ドラゴン
［魔法・罠］
なし

デッキからカードをドローした拓夜。

そのカードは前のターン、『ゾンビキャリア』の効果によってデッキトップに戻した『キラー・トマト』。

しかし、拓夜の手札には更なる力（切り札）への布石が眠っていた。

拓夜が手札から掴み取った一枚のカード。

それは…！！

「いくぜ…！！　魔法カード『死者蘇生』を発動！！」

【死者蘇生】
［魔法カード］
自分または相手の墓地に存在するモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「この効果により、墓地のモンスター1体を特殊召喚する！来いッ！！『レッド・デーモンズ・ドラゴン』！！」

ドンッ！！

拓夜のフィールドに蘇りし、レッド・デーモンズ。

更に

「そしてチューナーモンスター『深海のディーヴァ』を召喚ッ！！」

【深海のディーヴァ】
星2／水属性／海竜族
ＡＴＫ／　２００
ＤＥＦ／　４００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分のデッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「ディーヴァが召喚に成功した事により、そのモンスター効果を発動する！デッキからレベル3以下の海竜族モンスター1体を特殊召喚する事ができる…来いッ！！　ディーヴァ！！」

拓夜のフィールドに、二体目の『深海のディーヴァ』が特殊召喚された。

「チューナーを場に2体…？何をするつもりだ…！？」

不可思議に思う広太郎。

しかし、デュエルを観ていた結締や白石は違った。

「拓夜ちゃん…まさか…っ！？」

「ふぅん…！！　受け取れぇっ！！　拓夜ァア！！　この俺からの、熱き情熱をッ！！」

白石が吼える中、拓夜は瞳を閉じる。

感じる。

このデュエルに勝ちたいという、自分の熱き魂が脈打つのを。

相手はプロだ。

そして自分は、今期からプロリーグへと参戦する。

このデュエルは、そんな自分に勢いをつかせる為の…！！

「…高ぶるぜ…！！　このデュエルに勝ちたいっていう、俺の決闘者としての魂が…！！」

その瞬間、拓夜の右拳が紅蓮の炎に包まれる。

それはまるで、今の拓夜の気持ちを具現させたような…

拓夜は叫ぶ。

拓夜は吼える。

「レベル８の『レッド・デーモンズ・ドラゴン』に、レベル２のチューナーモンスター『深海のディーヴァ』２体を…“ダブルチューニング”ッ！！」

グゴゴゴゴ…！！

２体のディーヴァが紅蓮の炎の輪となり、気高く吼えるレッド・デーモンズを包み込む。

「王者と悪魔、今ここに交わる…！！　荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよッッ！！！！」

カッッ！！！！

「シンッ、クロ召喚ッ！！紅蓮の魂ッ、『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』！！」

【スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン】
星１２／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／３５００
ＤＥＦ／３０００
［シンクロ／効果］
チューナー２体＋「レッド・デーモンズ・ドラゴン」
このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナーの数×５００ポイントアップする。このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

拓夜のフィールドに顕現せし、白石から譲り受けた紅蓮の魂『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』。

その姿はまるで、今の拓夜の気持ちを具現させたような…。

荒々しくも、純粋な熱い魂を持った。

そんな印象があった。

そして、二人のデュエルは…

西条拓夜の新たなる切り札（後書き）

この話を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、広太郎の使用デッキはインヴェルズです。

このデッキの動きは、帝とよくにております。

しかしインヴェルズにはリリースする上での制限が課せられている為、帝の方が使いやすさがありますね。

その分、インヴェルズには帝に劣らない程に、優秀なボードアドを確保できる効果があります。

バウンズ、墓地へ送る、破壊…

え？帝でもできる？

似てるって言ったじゃん。

インヴェルズの長所を挙げるとすれば、帝のように召喚成功時の効果によるボードアドバンテージのとり易さ。

そして、闇属性の悪魔族である事が挙げられます。

モンスターレベルもバラけており、同じ悪魔族のチューナーと組ませる事で、普段なら入らないような癖のある強力なシンクロモンスターもエクストラデッキに投入する事ができます。

例）《天刑王　ブラック・ハイランダー》　《デーモン・カオス・キング》など

まぁこのデッキの弱点としては、生け贄封じの仮面や、アンデット・ワールドみたく、リリースに制限のかかるカードでしょうかね。

さて、今回の内容はあえて中途半端な場面で終わらせました。
まぁ訳としては、今後の展開への布石なのですが…

最近更新が遅れてます（汗）

言い訳するつもりはありませんが、ただ一言。

すいません。がんばります。

あ、二言になっちゃった…

それぞれの決意　（前書き）

6月だというのに猛暑日の連続です。

ジメジメした空気が体から離れず、風呂に入っても汗が止まる事を知りません。

まぁ何が言いたいかって言うと…

あーーーーーーつぅーーーーーーーーーーーいいいいい！！！！！

それぞれの決意

※

「そんな事があったのですか…」

高円寺楓はそう呟くと、神社の敷地内に置いてある椅子に座る結締智恭にお茶を渡した。

「まさか…というか、正直驚いたぜよ。拓夜ちゃんがあそこまで強くなっていた事に…！」

結締の脳裏に蘇るのは、ほんの数時間前の出来事だ。

ＯＣＧ研究会の後輩である西条拓夜と、プロデュエリストの叶広太郎のデュエル。

フィールドに『スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン』と『地天の騎士ガイアドレイク』を揃えた拓夜は、二体のモンスターの攻撃で広太郎のモンスターを全て破壊した。

そして広太郎のターンに移ったは良いが、広太郎は何もできなかった。

そして、拓夜のモンスター達による総攻撃で、広太郎のライフは尽

きた…。

「わたくしは…デュエルは詳しくないので、差し出がましいかもしれないのですが…後輩の成長を直に見られるという事は、喜ばしい事なのではないのでしょうか？」

楓は結締の顔を覗き込みながら、不思議そうな表情で尋ねてきた。

確かに、楓の言うことは分かる。

実際にそう思えて、嬉しく感じる自分がいる。

しかし…

「…巫女さんの言うことは最もだぜぃ…。でも、そうじゃない自分も居んだ…何つぅか、こう…ドキドキするっつぅか…」

「ドキドキ？結締様…まさかソチラの性癖に…！？　わたくしは別に、結締様が殿方をどう思われようとーー」

「ちょッ！？　違う違う違ぁあう！！　そっちのドキドキじゃなくて、決闘者としての高ぶりだぜぃ！！」

何やら勘違いをする楓にあたふたしながら、結締は話しを続けた。

「どんどん強くなってく拓夜ちゃんを見て、俺もうかうかしてられねぇ…ってな感じでさ。拓夜ちゃんを相手に、こんなに拓夜ちゃんとデュエルしたいって思ったのァ初めてだぜぃ…！！」

「それが結締様の…決闘者としての気持ち、なんですね」

後輩の事を、そして自分の気持ちを話す事に、結締はこの雰囲気が好きだった。

自分の話しを真摯に聞いてくれるこの楓。

初めて会ってからまだ長くはないが、実は毎日のように彼女に話し（会い）に来ていた。

「前に巫女さんと話した時、巫女さん言ってたじゃん？」

「？」

「今度はその気持ちを、俺なりの行動に現してみ？って…俺…決めたぜよ…！！」

結締は東区の空を見上げて立ち上がる。

夕暮れに染まりつつも澄んだ空は雲一つなく、まるで今の結締の気持ちを表しているかのような…。

楓の瞳には、そう映った。

※

結局、西条亨は烏丸葉月に言うことができなかった。

食事を終えた二人は、現在、東区の駅前を一緒に回ってる。

夕方に葉月は美容院を予約してあるらしく、それまでの時間を一緒に過ごしてほしいらしい。

ご飯を食べている時もそうだったが、今日の葉月はよく喋る。

今も彼の隣に立ち、卒業したら友人達と一緒に卒業旅行に行くとはしゃいでいる。

「初めは海外でハワイとか言ってたんだけど、流石に私たちって、まだ高校生じゃない？まだそんなにお金だって持ってる訳じゃないし」

「卒業旅行か…良いね。烏丸さん達は一体どこに？」

「富士急はＯＣＧ研究会の旅行で行ったから、今度はディズニーランドに行く事になったのよ！」

どんなアトラクションに乗ろうかとか、パレードは絶対に観たいなど…。

葉月は考えるだけでも楽しいのだろう、そんな雰囲気が伝わってくる。

話しを聞いていて、亨はふと疑問に思った。

葉月と拓夜は同級生だ。

ならば拓夜も一緒に旅行に行くのだろうか？

拓夜にはプロリーグが控えているが、まだ期間はある為大丈夫だが、ふと気になった。

「ところで拓夜くんも一緒に行くのか？」

「え、拓夜？…というか、今回の旅行は友達同士って言っても、女友達だけよ？あ、なに？亨さんでも少しは気になる？」

葉月は何を思ったのか、ニヤニヤしながら亨の横腹を肘でつついた。

「もし旅行先で、私が他の男子に取られるとか気になったんでしょ？うりうり！」

「ちょっ！？　そうじゃな…ぅぅ」

そんなつもりで聞いた訳ではないのだが、本人の口からそんな事を言われると、逆に意識していまう。

言葉に詰まった彼を見て、葉月はそれまでの明るい表情から一変し、どこか悲しげな瞳に変わった。

「ねぇ…ホントにどうしちゃったの？今日のアンタ、何か変よ？」

「ぇ？」

「カードショップの時からそう…心ここに在らずっていうか。ずっと考え込んでるみたいだった…」

「っ！？　それは…」

それはずっと、葉月の事を考えていたから。

と言える筈もなく…。

「なんか、私が振り回しちゃったせいで…迷惑…だったよね？」

葉月はそうポツリと呟いた。

カードショップでの事だって、彼はカードを沢山持っている筈なのに、無理に付き合わせてしまった感がある。

更には、彼は明日からデュエル教室の為に、今日だって多忙な筈なのだ。

それを自分の美容院の待ち時間にまで付き合わせてしまっている。

食事の時だって、彼から誘ってくれたは良いが、本当は明日からの事で色々と悩んでいたのかもしれない。

だからずっと、難しい表情ばかりだったんだろう…と、葉月は思う事で自分を納得させた。

そうだとしたら今日はもうこれ以上、自分の時間に付き合わせる訳にはいかない。

何か言いたそうな顔をする亨に、彼が口を開く前に、葉月はバッグの中に入れてあった一枚のカードを取り出し

「はい。これは今日の私からの気持ち…！」

「烏丸さん、聞いてく…っ！？これは…『ブラック・マジシャン・ガール』のカード…！？」

葉月が渡してきたカードに一瞬目を見開く亨。

「カードショップの時に言ったけど…私には、アンタはそのカードで…決闘者としていて欲しい。他のカードを使ってる姿が私にはや

っぱり、想像つかないし…」

葉月はそう言うと、くるりと彼に背を向けた。

「今日はありがとう…そして、ゴメンね。無理に付き合わせちゃって…もう直ぐ美容院の予約時間だし、私…そろそろ行くね？」

「か、烏丸さん…！！」

慌てて呼び止める亨だったが、彼の静止を振り切って、葉月は街中へと消えて行った。

亨はショックだった。

そして同時に、まただ…と後悔した。

マジシャン・ガールの時もそうだった。

そして今回も同じだ。

自分の事ばかり考えすぎていて、相手の事をちっとも思いやれていなかった。

（何回…同じ事を繰り返すんだ…俺は…ッ！！）

悔しくて、悲しくて…

見上げた空は微かに夕暮れに染まりつつ…

涙に滲む空は、彼の心を表しているかのようだった。

（最低だ…俺は…）

※

自室にて、西条拓夜は机の上に自分のデッキを広げ、そして同時に

「ふぅ…」

とやりきった様な深い溜め息を一つ吐いた。

ぱりぽり…

「それにしても、あの叶広太郎って人…どこかで見たことある名前だと思ったら、まさか前年度のプロリーグ準優勝者だったなんて…」

デュエル前にインターネットを使い、調べ、自分で要チェックだと言っていたのに…。

ぽりぽり…

自分の記憶力に若干呆れつつ、もう一度溜め息をつく拓夜に

「ふぅん…しかし、良くやったな拓夜バリモシャ…『地天の騎士ガイアドレイク』は、ヤツの扱う【インヴェルズ】のメタカードだなモシャモシャバリモシャ…」

「ちょっ!?　白石さん、さっきから何かぽりぽり音がすると思っていたら、それ俺のポテトチップスじゃないッスか!?」

勝手に他人(ひと)の部屋を漁り、おやつを遠慮なく食べる白石は、拓夜からの言葉を気にする事なく更にポテチに手を伸ばす。

「バリバリモシャモシャ…ゴクンっ!!　しかしどうだ?お前から見て、広太郎は決闘者としてどう映った?む?この棚の奥にある菓子パンは何だ…?」

「ちょ、人の意見は完全無視ですか?つうか、人の部屋の棚を勝手に開けないでもらえます?って、あ〝…ちょっ!!　駄目だって、それは俺の好きなメロンパン!?」

「モシャモシャ…拓夜よ、広太郎はどうだった?はむっ、モグモグ

…ふん！！」

「のわっ！？　重っ！！」

白石に押さえつけられ、自分のおやつを食べられる拓夜は、彼の下敷きになりバタバタしながら、広太郎の事を考える。

デュエルが終わった後、広太郎は素直に拓夜に頭を下げた。

デュエル中は相手を非難ばかりする広太郎だったが、デュエルが終わり、冷静さを取り戻したあの時が、彼の本当の姿なんだろうと今にして思う。

そして、別れ際に彼が放った言葉…

『ＯＣＧ研究会の先輩たちから譲り受けた力（カード）…それを見事に使いこなしているみたいだね。だが、次は負けない…！！　大会で君とデュエルする事になったら、覚悟するんだな。今日のデュエルを期に、僕はもっと強くなってみせる…！！』

負けた事を次に活かす姿勢には共感できる。

そして純粋に腕を磨き、更なる高みを目指す姿勢こそ、決闘者としての貫禄が見られた。

「…今回のデュエルは、亨さんから貰ったガイアドレイクのおかげで勝てた…！！　でも、今回勝ったからといっても、あの人はもっと強くなっていると思う…！！」

「ふぅん…ならば拓夜よ、お前はどうする？」

「決まってる…！！」

拓夜は拳を握り締め、キッと表情を引き締める。

「だったらそれ以上に、俺も強くなれば良いだけッスよ！俺は絶対に、優勝してみせる…！！」

「ふぅん…その意気だ、拓夜！！」

「はい…！！　けどッ…そのッ前に…ッ！！」

言葉だけで聞けば美しい師弟愛な会話である。

かと言って状況は違う。

ギュッと握り締めた拳をプルプルと震わせながら…

「いい加減に俺から降りてくれないッスか、白石さん！！　ハッキリ言ってめちゃくちゃ重たいっつうのッ！！」

「ふぅん、まだ甘いな拓夜よ…モシャモシャ。この俺をモシャ…退かせたくばモグモグ…ゴクンっ！！　他に貴様が持っているお菓子を、この俺に全て譲るのだな！！あ、ちなみにお前のメロンパンは中々美味だったぞ…！！」

「なぁあっ！？　おっ…俺のメロンパンが…っっ！？」

結局、白石が帰った頃には拓夜の部屋からは食料という食料が全て消えていた。

もう絶対に、白石だけはこの部屋に入れないようにしよう。

拓夜は夕暮れに染まりつつある空に、そう誓った。

※

『あ、お姉ちゃん。おかえり～！』

葉月が家に着いたのは夕方を過ぎて１９時になる頃だった。

部屋に入ると、精霊のカードであるウィンダの溌剌とした声が出迎えてくれる。

しかし…

「うん、ただいま…」

返事をする葉月の声からは、どことなく覇気が感じられない。

そんな葉月の様子を知らずか、ウィンダはウキウキしながら

『あ、前髪が少しだけ短くなったのかな?あと何だか、髪が前よりも艶やかになってる!』

「うん…美容院でストパーと色をつけたからね…」

『前もだけど、今回のもスッゴく可愛いよ!いいな~、わたしもお姉ちゃんみたいにオシャレしたいな~』

「…ウィンダだって、今のままでも充分に可愛いわよ」

『え、ほんと!?』

葉月に可愛いと言われ満更でもない様子のウィンダ。

そんな彼女の様子に微笑みつつ、葉月は部屋のベッドの上にゴロンと寝ころんだ。

枕に顔をうずめ、軽く息を一つ吐く。

そんな葉月の脳裏には、今日を一緒に過ごした亨との出来事が浮かんでいた。

（ホントに…どうしちゃったのよ…アイツ…）

カードショップで一緒に買い物をしている最中から様子がおかしかった。

まるでいつも以上にぎこちないというか、緊張していたような…。

きっと明日からのデュエル教室の事で、頭がいっぱいだったのだろう。

仕事熱心な真面目な人、とも読み取れなくはないが…

（でも…もっと私に構ってくれても良いじゃない…！！）

何となく気まずい雰囲気は葉月も感じていた。

きっと亨もそうだったに違いない。

あの雰囲気に我慢できず、自分は逃げ出した。

予約の時間までには、まだ大分時間はあった。

しかし、嘘をついた。

離れていく自分を追いかけてきてくれると、心のどこかに期待して…

しかし…

（追いかけてきてもくれなかった…）

明日は卒業式だ。

そして同じく、明日からは亨たちはデュエル教室で殆ど会えなくなる。

このままで良いのだろうか？

枕から顔をあげ窓越しに見上げた夜空は、雲がないにも関わらず、星が一つも見えない。

それはまるで、今の不安に満ちた葉月の気持ちを表しているかのようだった。

※

東区の駅前広場にあるベンチに座り、西条亨は本日何度目かも分からない位の溜め息をついた。

俯く姿勢からは、行き交う人達の様々な声が聞こえてくる。

今の落ち込んだ気持ちをほぐすには、気分転換で外の空気を…と思ってやってきたは良いが、それでも気分は晴れてこない。

（なにやってんだろ…俺は…）

失笑しながら亨は、今日一日の出来事を思い出していた。

朝は白石から、葉月との壮絶な妄想話しを聞かされ…

外に出たら今度は結締から葉月との関係を押され…

その時からだろう。

今まで何気なく接する事ができた相手（葉月）を、いつも以上に異性として意識してしまった。

そして直後に葉月と会い、一緒に過ごしている間…

亨はずっと、緊張していた。

どうやって告白すれば良いか？

どのタイミングで？

どんな台詞で？とあれこれ考えている内に、彼女を不安にしてしまった。

我ながら情けない、と自傷する。

「もう…残された時間は少ないんだ…」

今日という日付が変われば、自分はデュエル教室で全国を回らなければならないし、葉月は卒業旅行に行ってしまう。

そうなれば、彼女と会える時間というのは限られてくる。

亨の胸の内に、焦りと不安が徐々に広がっていく。

すると彼の頭に、ある声が響き渡ってきた。

『ククク…随分と揺らいでいるな、西条…』

（…ッ！？　邪神…！！）

『私は貴様と契約し、貴様の深層心理の奥底にいるのだ。つまりは貴様の考えている事が、契約した私に筒抜けなのだよ…！』

（ぅ…っ！？）

『先ほどからあの小娘の事ばかり考えているようだが…精霊界の三英雄と言えど、女事には為す術がないか？ククク…』

まさか恋愛事に邪神からからかわれるとは思ってもみなかった。

亨の顔は、自分でも分かる位に赤面していた。

（…為す術が無い訳じゃないさ…！！）

ギュッと拳を握り締め、亨は邪神に話す。

（これは…俺の男としての度胸の問題なんだ。だから、俺がもっと…烏丸さんに対して堂々と…自分の気持ちを伝えれば良いだけなんだ…！！）

『ほぅ…』

気持ちを伝えるだけ。

しかし、それを実践するとなると、並大抵の覚悟では足りない。

それは先ほど、彼女と一緒に過ごしている間に嫌という程実感した。

『では主よ、私から一つアドバイスが御座います！』

（っ！？　ブラック・マジシャン…！？）

邪神との会話を聞きつけてか、同じく彼と契約しているブラック・マジシャンが、やけにハイテンションで会話に入り込んだ。

『やはり女性に告白をする時には、手ぶらというのは私の黒魔道に反します…！！　ここは一つ、何か贈り物をするというのは如何でしょうか？』

『ククク…黒魔導云々はともかく、なかなか上出来なアイデアではないか…』

『フッ…我が主の為ならば、粉骨砕身でサポートする…それが私の決めた道なのだ…！！』

何やら勝手にヒートアップする二人の会話から離れた亨は、軽く溜め息をつき考える。

確かに、何か贈り物…プレゼントをしながらというのはアリだと思う。

だが何を送れば良いのか？

（……っ！？　そういえば…！！）

すると亨は何かを思い出したのか、ポケットから一枚のカードを取り出した。

そのカードは『ブラック・マジシャン・ガール』。

これは今日、葉月が別れ際にくれたカードだ。

確かあの時、葉月はこう言っていた。

“アンタはそのカードで…決闘者としていて欲しい。”

決闘者として…。

「…やっぱり、俺にはこの方法しか思い付かないや…」

亨の気持ちは固まった。

ならば、その気持ちを今度は行動に顕すのみだ。

もちろん、決闘者として…！！

ふと気付くと

そんな彼の気持ちを察したのか、彼女がくれた『ブラック・マジシャン・ガール』の絵柄がいつも以上に笑顔になっているような…

そう、感じた。

卒業デュエル

※

その日は朝から、いつもと様子が違った。

クラスメートとの何気ない会話。

しかし、その会話の奥底に含まれる感情には、期待や不安といった様々な感情が詰まっていた。

今日は、東区第七高等学校の卒業式だ。

教室に集まり、全員で集まる顔というのは今日で最後という事になる。

それぞれに集まり、式に参加するまでの時間を各々に過ごす生徒達は、その殆どが同じ思いをしていた。

烏丸葉月も例外ではない。

高校生活三年間があっという間に感じ、笑顔を作って会話をしていても胸の内は淋しさを覚えていた。

そんな葉月の心境を察したのか、彼女の友人である桜朱美は

「ちょっと葉月?アンタ早速涙目になってんじゃないの?そんなん

じゃ、式の最中なんてハンカチ…いや、バスタオルがいくらあっても足りないんじゃない？」

「ちょ、まだ泣いてないわよ！？　って言うか、朱美のクラスは隣でしょ？何でウチのクラスに普通に馴染んでるのよ？」

「まあ堅苦しいのはナシ！アタシからすれば、自分のクラスに居るよりかは、こうやってアンタと話してる方が楽しいし…それが今日で最後なんだもん」

「朱美…！！」

友人からのありがたい言葉に胸が熱くなる葉月。
思わずうるっときてしまった。

「おや、葉月ぃ？アンタ…今のアタシの言葉に感動して、また目頭に涙を浮かべちゃって～、やっぱアンタは可愛いわ！」

「だ、誰が…！！　それにまだ、私は泣いてなんかないんだから！！」

「そうやって強がる姿も良いわ！！　ああもうっ！！　我慢できない！！　乳揉ませなさい！！　乳っ！！　おっぱい！！」

「ちょっ！？　胸は関係ないでしょうが！！　オヤジか、アンタはっ！？」

「ちぃぃ～ちぃぃ～！！　葉月のまな板を、私の手で肉まんに変え

てあげる～！！」

「こっ！？　こっち来るなぁ！！」

最後の高校生活だというのにはじゃぎ回る葉月たち。

迎撃され撃沈する朱美を眺めながら、結城雅一は西条拓夜と話していた。

「良いなあ、桜さん…葉月さんの乳に迫れて…」

「お前も行けば良いじゃんか結城。高校生活最後に、悔いを残さない為にさ？」

「ば、バッカヤロウ！！　もしそれが出来たら、拓夜ちゃんなんかと話している訳ないだろ！！」

「ヲイ、酷い言われようだな…。って言うか、お前が葉月に迫って行ったら、確実に返り討ちに遭いそうだけどな…」

高校生活最後。

その言葉を聞いて、結城は表情に少し影を作りながら、拓夜に尋ねた。

「なぁ…葉月さんさ。あれから…アイツと上手くやってんのかな？」

アイツ。

誰とは言わないが、拓夜にはそれが誰の事かは明確だった。

「まぁ…亨さんとは上手くいってるんじゃないのか？何だかんだでよく会ってるみたいだし」

「…なら…良いんだけどよ…」

結城の脳裏には、ある出来事が蘇っていた。

それは公園での出来事…。

拓夜に頼み、亨と二人きりで会う事に成功した結城は、彼に率直に尋ねた。

葉月の事を、どう思っているのかを…。

そして、彼の口から出た言葉（答え）は…。

「って言うか、何だよ結城。お前ってば未練タラタラだな」

「うっせぇ！」

拓夜の言葉が結城を現実へと引き戻す。

これ以上、拓夜から葉月の事でからかわれないようにする為か、結城は別の話題を拓夜に振ってみる事にした。

「ところで拓夜ちゃん。拓夜ちゃんは卒業したら、プロデュエリストになるんだろ？」

「ああ…！！まだプロデュエリストって訳じゃないけど…今期のプロリーグで、俺は絶対に優勝してみせるぜ！！」

周りが卒業ムードの中、異彩の熱血オーラを発する拓夜は微妙にクラスから浮いていた。

「まあ拓夜ちゃんの事は応援してるけどさ…まだ俺は拓夜ちゃんのデュエルの実力を知らないんだよな～。まだ一回もデュエルしてる所を見た事ないし？」

「俺の実力か…」

結城に言われて、う～んと唸る拓夜。

よくよく考えてみると、今の自分の実力はどの程度なのだろうか？

同じＯＣＧ研究会の中での戦績は…。

×　拓夜　＝　葉月　〇

葉月とはＯＣＧ研究会に入る前のデュエルでかなり負け越しているし…でも、今なら負けねぇ！

×　拓夜　＝　成瀬　〇

そう言えば花穂とは、ＯＣＧ研究会に入ってからは一度もデュエルしてないよな…今相手をすると、エアトスの除外デッキとデュエルする事になるのか…ぅぅ…勝てる気がしねぇ…！！

×　拓夜　＝　結締　〇

結締さんとのデュエルは、俺の完敗だったな…。今の俺の倒すべき目標の一人だ…！！　次は絶対に勝つ！！

×　拓夜　＝　白石　〇

白石さんは普段の態度は最低レベルだけど、デュエルの腕は最高レベルだ。あの時のデュエルは、俺がカード効果を知らないって理由で負けたけど、次は絶対に勝つ！！

×　拓夜　＝　マナ　〇

そういえばマナさんともデュエルをやったよな？マナさんのデッキ

は、ライフをどんどん回復して、【エンシェント・ホーリー・ワイバーン】の高火力で叩くデッキだ。あの時は見事にマナさんに振り回されたぜ…！！

（あれ…？そういえば俺…まだ亨さんとは一度もデュエルをやってないな…でも）

※　自身の記憶にないだけで拓夜は一度、精霊界で亨とデュエルし、負けています。

ここまで考えて、拓夜はある事実に気付く。

（あれっ！？　よくよく考えると、俺ってかなり負け越してる？負けてるよねぇ？）

う～ん　と唸り、歪な表情を作る拓夜を見て、結城は彼の気持ちを悟った。

「拓夜ちゃん…もしかして…よ」

「強いわよ」

結城の言葉を遮ったのは…。

「負けっぱなしだったのは昔の話し。今のコイツは、かなり強くなってる。私が保証する…！！」

「葉月さん…！？」

二人の会話を聞きつけたのか、朱美を追っ払った葉月は二人の間に入ってきた。

「葉月…良いのかよ？自分からカードの話題に入ってきて」

以前、拓夜がカードを始めたばかりの頃、葉月は拓夜にカードの話題は振るなと忠告してきた。

だが…

「別に良いわよ。私がＯＣＧ研究会で、カードをやってるって事はクラスの皆も知ってる事だし」

あの時と今とでは状況が違う。

今にして思えば、それだけ多くの時間をカードと一緒に過ごしてきたという事になる。

「それよりも拓夜、アンタはもっと自信を持ちなさいよ。確かに昔

は、私にボッコボコにやられてた初心者だったけど、今は違うでしょ？」

「葉月…」

確かにそうだ。

初めは沢山負けた。

けど、その負けをバネにし、自分は大きく成長してきた筈だ。

その証拠に、昨日はプロデュエリストである叶広太郎にも勝てたのだ！

「そうだな。一番になる…それが俺の夢であり、目標なんだ…！！」

拓夜は席の上に立ち、大きく息を吸い込んだ。

「～～っ！！　みんなっ！！　聞いてくれっ！！」

拓夜の大声での発言に、それまで各々で話していたクラス中の声がピタリと静まる。

「俺は卒業したら、プロリーグに出場する。だが俺は、ただ出場す

るだけでは終わらせない！！」

拓夜は右手の人差し指をピッと挙げ、堂々の宣言をした。

「俺は必ず優勝する！！　デュエルの世界で、一番になってみせる！！」

「頑張れよ拓夜ァ～！！」

「俺たち全員で応援してるぜ～！！」

「優勝賞金で、クラス会を開きなさいよ？」

「優勝したらサインくれよ！あ、今の内にサイン貰っておくか？」

「拓夜くんがデュエルする時、絶対にテレビ見るからね！」

いつの間にか、クラス中で拓夜コールが沸き起こっていた。

今日は卒業式の筈なのに、それまでの雰囲気が一気に消しとんでしまった。

「拓夜ちゃん…言ったからには、もう後には退けないぜ…大丈夫なのか？」

「大丈夫だ結城。俺は絶対に…勝つ！！」

ちなみに…

担任が最後の日を胸に学年の廊下を歩いてきた時…

自分のクラスだけ沸き起こる拓夜コールにビクッと驚いたのは、拓夜たちは知らない。

※

結締智恭はその日、東区の駅前広場に来ていた。

馴れないスーツ姿にローファを履き、ベンチにどっしりと腰を降ろした結締は、朝モックのベーコンエッグマフィンに大きくかじりついた。

亨や白石は居ない。

今日は中島理事長から、ある研修に参加するように言われている。

隣に置いた鞄から見える資料には、アナウンサーという単語が…。

ゴクンっ!!　とマフィンを飲み込んだ結締は、澄み渡った空を見上げてポツリと呟いた。

「ふぃ～、もうすぐ１０時半…まだ来ないのかよ…電車が来ちまうぜぃ…」

視界の端に移る時計棟の時間を確認し、辺りをぐるりと見渡す。

どうやら誰かを待っているらしいのだが、その待ち人は一向に姿を現さない。

結締の中に焦りがどんどん広がっていく。

今日は拓夜たちの卒業式でもあり、ＯＣＧ研究会は今日からデュエル教室の為、全国を回る事になっている。

しかし、今日は自分はデュエル教室には参加できない。

それもこれも中島理事長から出席する様に言われた今回の研修に参加しなければならないからだ。

別に結締は、今日のデュエル教室に参加できない事を悔やんでいる訳ではない。

悔やんでいる理由は別にあるのだ。

それは数日前、成瀬からＯＣＧ研究会の先輩たちに頼まれた、ある出来事…。

それに参加できない事が、かなり悔しがった。

焦りに不安と怒りが入り混じり、結締は激しく地団太を踏む。

「くっそぉぉ…このままじゃ、俺の考えた作戦が台無しになっちまう…！！」

自分の考えたとある作戦のタイムリミットは１０時４０分。

残りあと僅か5分…。

（早く来い、早く来い、早く来い、早く来い、早く来てくれ、来て下さい、お願いします、お願いしてんだろこんちくしょぉぉおお！！）

ズドドドド…！！

結締の地団太は通行人が思わずビクッとするほど、激しくなっていた。

※

卒業証書、授与。

卒業生等三年生がそれぞれに名を呼ばれステージに立ち、校長先生から卒業証書を手渡される。

その姿を一年生である成瀬花穂は、涙ながらに見つめていた。

『三年D組、西条拓夜』

名を呼ばれ、返事をする拓夜に気付き、成瀬は彼の背中を見つめる。

彼には本当に感謝していた。

高校に入ってから少しして、自分は家の階段で足を踏み外し、その際に足首を骨折した。

心配症な父親が押し切り、成瀬は入院生活を送る羽目になった。

入院して直ぐは、クラスの友人達がちょくちょく顔を見せてくれたが、次第にその回数は減っていった。

寂しいし、退屈だった。

しかし、そんな自分の心の隙間は、デュエルモンスターズが埋めてくれた。

カードを触っているだけでも、充分な満足感があった。

しかし、そうなるとデュエルをしてみたくなってしまう。

当時のデッキを持ち、病院内を散歩していた時に、成瀬は一枚のカードが無くなっている事に気が付いた。

そのカードは、初めて当たったホログラフィックレアのカードだ。

デッキに入れていないカードとは言え、大切な仲間（カード）をどこかに落としてしまったのだ。

その時はまだ足の状態が完治しておらず、僅か数百メートルを進むだけでも大変だった。

焦りと後悔から、目頭に涙が浮かぶ。

その日に通った場所を再確認している途中に出逢ったのが、西条拓夜だ。

彼が自分の落とし物を拾って渡してくれた事を、成瀬は今でもハッキリと覚えている。

カードの話しから意気投合し、早速デュエルをしてくれるとなった時には、成瀬は本当に嬉しかった。

拓夜とデュエルをし、彼の紹介で葉月とも知り合い、更には自分の通う高校の先輩だと知り、成瀬の心はこの二人に惹かれていった。

その日を境に、リハビリも積極的に行うようになり、気持ちが明るくなった。

気持ちが明るくなるだけで、世界が変わる。

そう気付かせてくれたのはデュエルモンスターズや、西条拓夜のおかげなのだ。

退院し、彼と一緒に二人きりで初めて登校し、成瀬はどんどん拓夜が好きになっていった。

彼は、自分の世界を変えてくれた人だから。

彼は【Ｄ－ＨＥＲＯ】の名の如く、成瀬の運命を変えてくれたヒーローなのだ。

もし、あの時拓夜と出逢わなければ、間違いなく今の自分はいない。

成瀬にとってのヒーロー。

それが、西条拓夜なのだ。

（拓夜さん…！！）

目を閉じれば、彼との思い出が沢山蘇る。

喫茶店でのデート。

一緒に買い物にも行った。

文化祭も一緒に過ごしてくれた。

ＯＣＧ研究会にも、彼を通して一緒に入る事ができたし、旅行にも行けた。

ツィスカに誘拐された時、真っ先に駆け付けてくれた。

彼からは本当に…。

長かったようでとても短い間だったが、彼からは本当に、沢山の思い出を貰えた。

沢山の思い出を分かち合えた。

そんな彼が今日、この学校を卒業する。

成瀬は大好きな拓夜に、何かお礼がしたいと考え、ある企画を持ち出した。

それは、ある意味ＯＣＧ研究会ならではの…。

これからプロリーグへと挑戦する、彼ならではの…！！

（拓夜さん…葉月さん…お二人には、本当に感謝しています。ですから、これから起こる企画は…私からの、卒業記念です…！！）

※

校長先生の大変ありがたい長話もようやく幕を引くかな～と思った頃には、かなりの時間が経過していた。

最後だから話しはしっかりと聞いていよう、と最初は思っていたのだがいかんせん。

そんな顕著な気持ちは話しが脱線し、ただの武勇伝に変わった頃にはもう校長（ハゲ）の話しはどうでもよくなっていた。

高校生活最後だというのに欠伸をかみ殺して、目をしぱしぱさせている西条拓夜は、ふぅ…と軽く溜め息をついた。

どうやら他の生徒たちも同じ気持ちなのだろう。

中には既に夢の世界にトリップしている生徒までいる始末だ。

（はぁ…なんで校長の話しって、長くなるんだろうな？普段生徒と接する機会が少ないから、こういう場でしか一方的にしか話せないんかな？）

どちらにせよ、生徒たちにとっては良い迷惑である。

ちなみに…視界の端に写る葉月は、ピシッとした姿勢を貫いていた。

どこまでも生真面目な奴だな、と思っていると、ようやくハゲの話しが終わったらしく、かなり自己満足げにステージから下りていった。

結局、拓夜は高校生活最後のハゲの話しを聞かずして終わった。

正直、何を話していたのか全く覚えていない。

ああ…長かったような卒業式も、もう終わりか…

などと思っていると、急に体育館内がざわついた。

校長の話しが終わった途端に気がゆるんだのか？と思った拓夜は、ふとステージに立つ人物を見てギョッとなる。

『ふぅん…マイクの感度は良好なようだ…ゴホンッ！！　美少女よ、そして拓夜に成瀬、更には多くのモブキャラ達よ。卒業、おめでとう…と、言いたいが…甘いぞ！！　この俺を前にして、簡単に卒業できると思うな！！』

『し、白石さん！？　私はまだ卒業じゃないです！それよりも、今日は真面目にやって下さい！』

そこにはいつの間に現れたのか、ＯＣＧ研究会の先輩である白石直也と、成瀬花穂がステージに立っていたのだ。

なぜ白石が卒業式に来ているのか理解できない拓夜たち。
唖然とする拓夜たちに構う事なく、白石はマイクを握り、豪語する。
『ふぅん…可愛い後輩の頼みならば仕方ない。今日はこの学校の一年生である成瀬から頼まれて来た…。その内容とは、【卒業デュエル】だッ！！』
卒業デュエル。
その言葉に館内がひときわ大きくざわついた。
校長の退屈な話しを聞かされた後の、予期しないこのイベントに、生徒たちは異様な興奮を覚えたのだ。
『拓夜、そして美少女よッ！！　お前たちが代表だ。ステージへ上がれ！！』
名指しをされた拓夜に葉月は、全校生徒に注目されながらステージへと登る。
そして拓夜は早速、成瀬に尋ねた。
「花穂っ！？　これは一体どういうことなんだよ！？　いつの間に

こんな企画を…！？」

「…私は…この高校生活で、拓夜さんや葉月さんに、凄く感謝しています。言葉では言い表せない位…凄く…！！」

「…成瀬さん…」

そう。

この企画は、成瀬から拓夜や葉月への感謝の現れ。

「お二人は、ＯＣＧ研究会のメンバーです。ですから、ＯＣＧ研究会ならではの…祝い方をと思いまして、今回の企画を提案しました」

成瀬の気持ちに熱くなり、思わず涙が浮かびそうになる拓夜たち。

そして…。

『そう、ＯＣＧ研究会ならではの…それは即ち、デュエルッ！！
お前たち２人には、それぞれに相応しい相手を用意してある…その相手は…！！』

パチンッ！！　と白石が指を鳴らすと同時。

体育館の扉の奥から、一人の男が現れた。

その男の名は…！！

「っ！？　と、亨さん…！？」

「っ！？」

西条亨の登場に、拓夜は驚きの声をあげる。

葉月は目を見開きながら、此方に歩み寄ってくる彼の顔をジッと見つめていた。

「おい…あの人、どっかで見たことないか？」

「あっ、アレじゃない！？　トリティニーグループの副社長と、デュエルしてた人よ！！」

「星界の三極神のカードを、倒した人か…！？」

結構な有名人だったんだと気付かされる亨であったが、今は照れたりしている気分ではなかった。

ステージに上がり白石と共に立ち、拓夜と葉月を見つめる。

「まさか亨さんが、俺たち2人の相手かよ…！？　…へへ、上等じ

ゃねえか！！」

燃えてきたぜ！と言わんばかりに興奮する拓夜に、成瀬が静止の声をかける。

「拓夜さん。そんなに慌てては駄目ですよ？」

『ふぅん…落ち着け、拓夜よ。言った筈だ…お前たち2人、それぞれに相応しい相手を用意してあるとな！！』

それぞれに。

それは　1　対　2　のような変則デュエルということではなく、1対1のデュエルということになる。

では、亨の対戦相手は誰なのか？

（やってみてぇ…！！　亨さんとのデュエルを…！！）

拓夜が期待する眼差しを彼（本人）に向ける中、亨は

「烏丸さん。俺が君の相手だ…！！」

「がーーーんっ！？　俺じゃねえのか…！！」

ガクッと肩を落とす拓夜。

その隣では、葉月は亨を…。

そして、亨は葉月を真っ直ぐに見つめる。

「…白石さんが出てきたから、アンタが来る事も何となくだけど予測がついてた…」

「…だろうな」

「……」

葉月はどこか気まずく感じていた。

昨日、彼とはギクシャクしながら過ごしていた。

そしてその雰囲気に堪えきれず、自分は逃げ出した。

心のどこかで、このギクシャクした状態は、時間が経てば自然と治まっていくだろうと思っていた。

だが、それは逆だった。

今、本人と対峙して、葉月は何を話して良いか分からなかった。

昨日の話題に触れるべきか？

すると昨日とは対照的に、良い倦ねる葉月に亨が話しかけてきた。

「予想していたなら話は早い…烏丸さん。デュエルの前に、君に言っておかなければならない事が三つある…！！」

「ぇ…？」

そう言うと亨は、ペコリと葉月に対して頭を下げた。

突然の事に、思わずキョトンとなる葉月に

「昨日はすまなかった。君は何も悪くないのに、不快な思いをさせてしまった…！！」

「亨さん…ぅぅん、私はもう…これっぽっちも気にしてないわよ！」

彼の方から謝ってくるとは思わなかったが、そのおかげか、葉月の気持ちはかなり軽くなった。

彼女だけでなく、その気持ちは亨も同じだったようで、彼の表情にも次第に笑顔が戻りだす。

「今のが一つ目。そして二つ目…このデュエル、お互い持てる力を全て出し合おう！手加減はナシだ！！」

「当たり前よ！！　それに…私にとって、東区のデュエル大会の時のリベンジにもなるし…！！　全力で行くわよ、亨さん！！　今度こそ、アンタに勝つ！！」

葉月にも熱が入ったらしく、二人の間に決闘直前の独特の空気が漂いだす。

「そして三つ目…このデュエルが終わったら……いや」

「？」

「この話しはデュエルが終わってからにしようか。今は…目の前のデュエルに集中だ…！！」

亨の言葉に肯く葉月。

互いに気持ちは準備ＯＫ。

すると、そんな葉月に成瀬が

「では葉月さん。コレを受け取って下さい！」

「コレって…！？　私のデッキじゃないの！！　確か家に置いてき

てあった筈なのに…！？」

「葉月さんのお母様に言って、勝手ながらお部屋に上がらせてもらいました。今日はそのデッキが無いと、話しになりませんし…」

『ふぅん…拓夜よ。今の内にお前にも渡しておこう…！！』

そう言って白石は拓夜に彼のデッキを手渡した。

『今朝、お前の部屋に忍び込んだら…お前が居なかったのでな。俺が部屋を捜索し、無事にそのデッキを発見したという訳だ…！！』

「えっ！？　ちょっ！？　忍び込んだ…って、俺の親に話しをしてから部屋に入ったんじゃないんスか！？」

『馬鹿め…この俺がただ普通に登場したのでは、インパクトに欠けるだろうが…！！　ちゃんと二階の西側の窓にガムテープを貼って、軽く叩き割ってから入らせてもらった』

「泥棒ッスよそれ！？　洒落になんないって！！」

つい先日、白石を部屋に入れないと誓ったばかりなのに…。

崩れ落ちる拓夜を余所に、話しは進む。

館内は一気に、デュエルを待ち望む雰囲気になっていたのだ。

これには以前、テレビに出てデュエルをしていた亨の影響が大きかった。

生徒たちからすればテレビに出た有名人である西条亨と、学校のアイドルの烏丸葉月とのデュエル。

主に葉月がデュエルする姿が見たいが為の空気だった。

葉ー月！！　葉ー月！！　葉ー月！！　葉ー月！！
葉ー月！！

館内に一斉に沸き起こる葉月コール。

既にオーディエンスは準備ＯＫだ。

残るは…！！

『ふぅん…西条、そして美少女よ。準備は良いか？』

「ああ…！！」

「ええ…！！」

互いに肯く二人。

『ーーっ！！　只今より、ＯＣＧ研究会による東区第七高等学校、烏丸葉月と西条亭による…卒業デュエルを開始するぅ！！』

司会（白石）の合図（コール）により、互いにデュエルポジションに着いた葉月に亭。

今、両者のデュエルが始まる。

※

「ハァッ！！　ハァッ！！　ハァッ！！…」

東区の商店街を駆け抜ける結締。

手にはモクドナルドの紙袋を持ち、馴れないスーツ姿で息を切らしながら、結締は一目散に走り抜ける。

待ち人が到着した頃には、タイムリミット残り１分前だった。

待ち人に荷物を預け、そのままある場所へと向かって…。

「西条ちゃんや…ッ！！　白石さんに…ッ！！　どう言われようが

…ッ構わねえッ！！」

今の自分の気持ちは、ただひたすらな一途な思い。

「俺はッ…俺がァ…ッ！！　拓夜ちゃんを…ッ！！」

片手にはモクドナルドの紙袋。

もう片手には己の信ずるデッキを手に、結締は商店街を抜け、東区一番の下り坂に差し掛かった。

卒業デュエル（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、物語はいよいよ卒業式に突入しました。

僕が考える構成でいえば、残す所の話数もあと僅かです。

フィナーレに相応しいデュエルを繰り広げられるよう、精一杯頑張りますので、応援よろしくお願いします。

西条亨　ｖｓ　烏丸葉月　（前書き）

卒業デュエル第1回戦。

残す話数も少なくなってきました。

これまで以上に白熱したデュエルを展開していくつもりですので、

応援よろしくお願いします。

西条亨　ｖｓ　烏丸葉月

※

成瀬が企画した卒業デュエル。

その第一回戦が行われようとしていた。

体育館の中央にて対峙する二人の決闘者、西条亨と烏丸葉月。

そして、今回の企画の司会進行を務める白石直也と成瀬花穂はマイクを手にし…

『ふぅん…準備は整ったようだな、西条！そして美少女よ！』

「ああ…！！」

「ええ…！！」

デュエルポジションに着き、互いにデッキに手を伸ばし、手札を５枚ドローする。

全校生徒が亨と葉月に注目する中、成瀬はマイクを握り、大きく息を吸い込んだ。

『それでは、第一回戦！亨さんと葉月さんの、デュエルを開始します！』

成瀬の開始宣言により、亨と葉月は同時に言い放つ。

「いくぞ…！！」

「全力全開…！！」

「「デュエルッ！！」」

【先攻】西条亨
ＬＰ　／　８０００

【後攻】烏丸葉月
ＬＰ　／　８０００

亨と葉月、二人のデュエルが始まった。

生徒たちからの歓声の中、亨が先攻プレイを開始する。

「俺の先攻、ドロー！『魔導騎士ディフェンダー』を召喚！」

【魔導騎士ディフェンダー】

星４／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／２０００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大１つまで）。フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターが破壊される場合、代わりに自分フィールド上に存在する魔力カウンターを、破壊される魔法使い族モンスター１体につき１つ取り除く事ができる。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

亨のフィールドに、巨大な盾を構えた魔導騎士が召喚された。

「このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを１つ置く…！」

【魔導騎士ディフェンダー】
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／２０００
（魔力カウンター　×１）

「カードを１枚セットし、ターンエンド！」

亨のターンが終了し、葉月のターンへと移行する。

「行くわよ…私のターン、ドロー！　チューナーモンスター『ＢＦ－東雲のコチ』を召喚！」

【ＢＦ－東雲のコチ】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　７００
ＤＥＦ／１５００
［チューナー・効果］
このカードは特殊召喚した場合シンクロ素材とする事はできない。

初手にチューナーモンスターを召喚した葉月は、更に手札に手を伸ばし…！

「更に手札より、『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／１７００
ＤＥＦ／　８００
［効果］
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「黒槍のブラストは、私のフィールドにブラスト以外の【ＢＦ】が存在する時、手札から特殊召喚する事ができる！」

葉月のフィールドに並ぶ東雲のコチと黒槍のブラスト。

そして、葉月は早速…！

「行くわよ！レベル４の『ＢＦ－黒槍のブラスト』に、レベル４の『ＢＦ－東雲のコチ』をチューニングッ！！」

葉月のモンスター二体の星（力）が一つになり、彼女の想いを乗せた漆黒の羽が宙を舞う。

「黒き疾風よ！！　秘めたる想いを、その翼に現出せよ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！舞い上がれ！！『ブラックフェザー・ドラゴン』！！」

【ブラックフェザー・ドラゴン】

星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／２６００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分がカードの効果によってダメージを受ける場合、代わりにこのカードに黒羽カウンターを１つ置く。このカードの攻撃力は、このカードに乗っている黒羽カウンターの数×７００ポイントダウンする。１ターンに１度、このカードに乗っている黒羽カウンターを全て取り除く事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力を黒羽カウンターの数×７００ポイントダウンし、ダウンした数値分のダメージを相手ライフに与える。

ブォォオオ…！！

辺り一面に漆黒の羽を巻き上げ、葉月の『ブラックフェザー・ドラゴン』が姿を現した。

「そのカードは…っ！！」

「ええ…。あの時、私が初めて亨さんから貰ったカードよ…！！」

どこか懐かしむような表情を見せる亨に、葉月は早速バトルフェイズへと突入した。

「行くわよ！『ブラックフェザー・ドラゴン』で、『魔導騎士ディフェンダー』に攻撃！ノーブル・ストリーム！！」

ズボァッ！！

『ブラックフェザー・ドラゴン』の放つ強烈なブレスが、亨のモンスターを襲う。

「くっ！？　だがこの瞬間、俺の『魔導騎士ディフェンダー』の効果を発動させる！」

【魔導騎士ディフェンダー】
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／２０００
（魔力カウンター　×1→0）

「魔法使い族モンスターが破壊される代わりに、魔力カウンターを１つ取り除く事で、破壊を無効にする！」

「でも、戦闘ダメージは受けて貰うわよ！」

【西条亨】
ＬＰ　／　８０００　→　６８００

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００

ワァァアア…！！

葉月が先制ダメージを与えた事で、会場中が湧き上がる。

「…飛ばしてきたな、烏丸さん…！！」

「今更アンタを相手に、力の出し惜しみなんて、出来るもんですか…！！　私はカードを１枚セットして、ターンエンド！」

『ふぅん…ここまでは美少女が圧しているようにも見えるが…』

『はい…ダメージは与えれても結局、亨さんのモンスターを破壊する事ができませんでした…』

司会並びに実況を務める白石と成瀬は、それぞれに初ターンでの感想を漏らした。

『西条のヤツが、その事をどう活かすか…！！　それだけで、デュエルの流れは大きく変わるだろう…！！』

白石が言うと同時、亨のターンが始まった。

「俺のターン、ドロー！」

【西条亨】
ＬＰ　／　６８００
［手札］
５枚
［モンスター］
魔導騎士ディフェンダー
［魔法・罠］
リバースカード　１枚

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
ブラックフェザー・ドラゴン
［魔法・罠］
リバースカード　１枚

デッキからカードをドローした亨は、手札・フィールドを確認し、今の自分にできる最善の一手を開始する。

「俺は…『魔導戦士　ブレイカー』を召喚！」

【魔導戦士　ブレイカー】
星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／１０００
［効果］
このカードが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを１個乗せる（最大１個まで）。このカードに乗っている魔力カウンター１個につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。また、魔力カウンターを１個取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する。

『魔導騎士ディフェンダー』に続き、彼のフィールドに『魔導戦士　ブレイカー』が現れた。

「『魔導戦士　ブレイカー』の効果発動！このカードが召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを１つ乗せ、攻撃力を３００ポイントアップする！」

【魔導戦士　ブレイカー】
ＡＴＫ／１６００　↓　１９００
ＤＥＦ／１０００
（魔力カウンター　×１）

亨のモンスターの召喚に、リバースカードを発動しない葉月に対し、亨は容赦なく攻め入る。

「更に！『魔導戦士　ブレイカー』の第二の効果を発動！マナブレイク！！　自身に乗った魔力カウンターを１つ取り除く事で、フィールド上の魔法・罠カード１枚を破壊する！」

ズゴゥッ！！

【魔導戦士　ブレイカー】
ＡＴＫ／１９００　↓　１６００
ＤＥＦ／１０００
（魔力カウンター　×０）

ブレイカーの効果が炸裂し、葉月のフィールドに伏せてあったリバースカード、『ＢＦ－バックフラッシュ』が破壊された。

（…くっ！？　でも、まだ私のフィールドには『ブラックフェザー・ドラゴン』がいる…！！　そう簡単に…）

「そして俺は、手札より速攻魔法『ディメンション・マジック』を発動！」

「なっ！？」

【ディメンション・マジック】
［速攻魔法］
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが表側表示で存在する場合に発動する事ができる。自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。

「このカードは、自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合に発動する事ができる。モンスター1体をリリースし、手札から、新たな魔法使い族モンスターを特殊召喚する！俺は『魔導騎士ディフェンダー』をリリースし…！！」

亨の『魔導騎士ディフェンダー』がリリースされた。

そして、彼のフィールドに現れた魔法使い族モンスターとは…！！

「現れよ、我が最強のしもべ…！！『ブラック・マジシャン』！！」

【ブラック・マジシャン】
星7／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２１００
魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

「このタイミングで出てくるって言うの…！？『ブラック・マジシャン』…！！」

亨のフィールドに現れし『ブラック・マジシャン』の登場に、葉月は気を引き締めた。

「『ディメンション・マジック』の効果発動！フィールド上のモンスター1体を破壊する！」

ガキィッ！！
ズゴゥッ！！

葉月の『ブラックフェザー・ドラゴン』が鎖に締め上げられ、大爆発を起こし、破壊された。

「『ブラックフェザー・ドラゴン』っ！？」

唯一のモンスターを失った葉月。

壁となるモンスターが消えた今、亨は容赦しなかった。

「バトル！『魔導戦士　ブレイカー』で、烏丸さんにダイレクトア

タック！」

バトルフェイズに突入した亨は早速、『魔導戦士　ブレイカー』で葉月に切りかかる。

「く…っ！！　手札の『ＢＦ－熱風のギブリ』の効果発動！！」

【ＢＦ－熱風のギブリ】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　０
ＤＥＦ／１６００
［効果］
相手が直接攻撃を宣言した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、このカードの元々の攻撃力・守備力をエンドフェイズ時まで入れ替える事ができる。

「このカードは相手の直接攻撃宣言時に、手札から特殊召喚する事ができる！来なさい！熱風のギブリ！！」

ガキィッ！！

守備表示で特殊召喚された『ＢＦ－熱風のギブリ』が、『魔導戦士　ブレイカー』の攻撃を受け止めた。

「…っ！？　やるな、烏丸さん。だが、次の一撃は受けきれないぜ！？『ブラック・マジシャン』で、熱風のギブリに攻撃！！　黒・魔・導！！」

ズゴゥッ！！

『ブラック・マジシャン』の攻撃には耐えきれず、熱風のギブリは破壊された。

「くぅ…っ！？」

「リバースカードを1枚セットして、ターンエンド…！！」

亨のターンが終了した。

【西条亨】
ＬＰ　／　６８００
［手札］
１枚
［モンスター］
ブラック・マジシャン
魔導戦士　ブレイカー
［魔法・罠］
リバースカード　×２枚

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

（…やっぱり、強い…！！）

葉月は奥歯を噛み締め、フィールドの状況を確認する。

現在、自分のフィールドにはモンスターはなく、亨のフィールドには二体のモンスターが出揃っている。

明らかにボードアドバンテージは、亨が優位だった。

（着実にこちらのアドバンテージを奪ってから攻撃を仕掛けてくる…！！　でも…だからと言って…！！）

デッキトップに手を伸ばす葉月は、その瞳に更なる闘志の炎を宿す。

「そう簡単に…やられるもんですかっ！！　私のターン、ドロー！！」

デッキからカードをドローした葉月は、そのカードを確認して不敵な笑みを浮かべた。

（…来たっ！！）

「このカードは、私のフィールドにカードが存在しない時に、手札から特殊召喚する事ができる！来なさい！『ＢＦ－逆風のガスト』！！」

【ＢＦ－逆風のガスト】
星２／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　９００
ＤＥＦ／１４００
［効果］
自分フィールド上にカードが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手モンスターが自分フィールド上に存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターを攻撃する場合、その攻撃モンスターはダメージステップの間攻撃力が３００ポイントダウンする。

葉月のフィールドに『ＢＦ－逆風のガスト』が特殊召喚された。

「そして私は、チューナーモンスター『ＢＦ－極北のブリザード』を召喚！！」

【ＢＦ－極北のブリザード】
星２／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／１２００
ＤＥＦ／　０
［チューナー・効果］
このカードは特殊召喚できない。このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

続けて葉月のフィールドに現れたのは、チューナーモンスターの『ＢＦ－極北のブリザード』。

「極北のブリザードの効果発動！！　このカードが召喚に成功した時、墓地のレベル４以下の【ＢＦ】を特殊召喚する事ができる！墓地から『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚！！」

効果により特殊召喚されし黒槍のブラスト。

葉月のフィールドに逆風のガスト、極北のブリザード、黒槍のブラストの計三体のモンスターが並んだ。

「…来るか、シンクロ召喚…ッ！？」

葉月の並ぶモンスターに警戒の意を見せる。

しかし、葉月は…。

「その前に、さっきのターンの仕返しよッ！！　手札より罠カード『デルタ・クロウ－アンチ・リバース』を発動！！」

【デルタ・クロウ－アンチ・リバース】
［罠カード］
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。相手フィールド上にセットされた魔法・罠カードを全て破壊する。また、自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが3体存在する場合、このカードは手札から発動する事ができる。

「ッ！？　そのカードは…ッ！？」

「このカードは、私のフィールドに【ＢＦ】が存在する場合のみ発動でき、相手フィールドのセットされた魔法・罠カードを全て破壊する！！」

ズドドンッ！！

葉月の発動した『デルタ・クロウ－アンチ・リバース』が炸裂し、亨のリバースカードが全て破壊されてしまった。

（『魔法の筒』と『闇の幻影』が破壊された…！？　コイツは想定外だ…！！）

『ふぅん…まさか手札から罠カードを発動するとはな…流石は美少女だ。西条の奴を相手に、一歩も引いていない…！！』

白石が感嘆の声を漏らす中、葉月はフィールドのモンスター達に手を翳し…。

「行くわよ！！　レベル２の『ＢＦ－逆風のガスト』とレベル４の『ＢＦ－黒槍のブラスト』に、レベル２の『ＢＦ－極北のブリザード』をチューニング！！」

葉月のモンスター達が宙を舞い、その星（力）が一つに交わる。

「吹きすさべ嵐よ！鋼鉄の意志と光の速さを得て、その姿を昇華せよ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚ッ！！『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』！！」

【ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド】
星８／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／２０００
［シンクロ／効果］
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、フィールド上に表側表示で存在する、このカードの攻撃力よりも低い守備力を持つモンスターを２体まで選択して破壊する事ができる。この効果を発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。また、相手ターンに１度だけ、このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターは戦闘では破壊されない。

ビュォオオ…！！

渦巻く嵐を切り裂き、その名から漆黒の刀を手にした『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』が姿を現した。

「シルバー・ウィンドの効果発動！！　このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力よりも低い守備力を持ったモンスターを２体まで選択し、破壊する！！」

亨のフィールドには、守備力２１００の『ブラック・マジシャン』と、守備力１０００の『魔導戦士　ブレイカー』のみ…。

「行きなさい！シルバー・ウィンド！！」

ズシャァッ！！
ズバゴゥッ！！

「くっ！？『ブラック・マジシャン』…ッ！！」

シルバー・ウィンドの効果が炸裂し、今度は亨のフィールドががら空きとなってしまった。

見事に逆転を決めた葉月に対し、デュエルを観戦する生徒達から拍手喝采が沸き起こる。

「この効果を使用したターン、バトルフェイズは行えない…どう、亨さん？私はこれで、ターンエンド！」

「…やるな、烏丸さん…！！」

手札を全て使い切る程の全力のプレイに、流石の亨も冷や汗が流れ落ちた。

「…流石、としか言わざるを得ないな…葉月のヤツ…！！」

怒涛の追い上げを魅せる葉月に、拓夜は自分なりの評価を下した。

もし自分なら、あの状況で亨をここまで追い込めただろうか？

できるか？と言われると、素直に頷く事はできない。

それだけ拓夜にとって、今の葉月のプレイは魅力的だった。

だが…。

（けど…油断するなよ葉月。亨さんは…ただでやられる人じゃない…！！）

※

【西条亨】

ＬＰ　／　６８００

［手札］

１枚

［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
なし
［モンスター］
ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド
［魔法・罠］
なし

葉月のターンが終了し、亨のターンへと移行する。

フィールドはがら空き。

対する葉月のフィールドには、攻撃力２８００のシルバー・ウィンドが…。

（あのモンスターは【ＢＦ】と名のつくモンスターを１度だけ戦闘から守る効果を持っている…だが…！！）

「俺のターン、ドローッ！！」

デッキからカードをドローした亨の行動は早かった。

「俺はモンスターをセットし、リバースカードをセット！ターンエンド！」

それぞれにカードをセットし、ターンを終了する亨は、明らかな守備の姿勢を見せた。

館内からは熱烈な葉月コール。

そして今現在、あの西条亨を圧しているという状況が、葉月の気持ちを浮き足立たせる。

「ガンガン行くわよ！！　私のターン！」

ドローし、引き当てたカードは上級モンスターの『ＢＦ－天狗風のヒレン』。

上級モンスターを召喚するには、場のモンスター１体をリリースしなければ召喚できないが、このカードは通常召喚向きのカードでない。

葉月はこのまま、亨の守備モンスターを叩く事にした。

「バトルよ！シルバー・ウィンドで、守備モンスターに攻撃！」

シルバー・ウィンドが亨のフィールドに攻め入った瞬間、亨が動いた。

「甘いぜ、烏丸さん！トラップ発動！！『聖なるバリアー ミラーフォース－』！！」

【聖なるバリアー ミラーフォース－】
［罠カード］
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「ミラーフォースッ！？」

「このカードは、相手攻撃モンスターを全て破壊する！！」

しまった！？　と、声をあげた時にはもう遅かった。

葉月の『ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド』は、『聖なるバリアー ミラーフォース－』の効果によって破壊されてしまった。

「くっ…！？」

現在、葉月の手札は『ＢＦ－天狗風のヒレン』の１枚のみ。

このターン、もう何も打つ手がない葉月は、悔しそうに歯噛みしながらエンド宣言をした。

そして迎えた亨のターン。

「俺のターン、ドローッ！！」

葉月のターンを凌ぎ、亨の反撃が始まった。

【西条亨】
ＬＰ　／　６８００
［手札］
１枚
［モンスター］
裏側守備モンスター　１体
［魔法・罠］
なし

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００
［手札］
１枚
［モンスター］
なし

［魔法・罠］
なし

「フッ…お互い満身創痍だな、烏丸さん…このままじゃ、お互いに望むデュエルができない」

「…？」

亨はそう告げると、不敵な笑みを浮かべながら

「このターンで仕切り直しとさせてもらう！リバースカードを1枚セットし、モンスターを反転召喚！『メタモルポット』のリバース効果を発動！！」

【メタモルポット】
星2／地属性／岩石族
ＡＴＫ／　７００
ＤＥＦ／　６００
［効果］
リバース：自分と相手の手札を全て捨てる。その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローする。

『メタモルポット』が反転召喚された事により、そのリバース効果が発動した。

「コイツの効果で互いに手札を全て捨てた後、手札が5枚になるようにドローする…！！」

「…このタイミングで…手札補充…！！」

亨と葉月は手札を全て墓地へ捨て、カードを5枚ドローした。

そして亨は、新たに補充できた手札の中から1枚のカードを掴み…。

（また…お前の力を貸してくれ…！！）

「俺は…『メタモルポット』をリリースし…！！」

『メタモルポット』がリリースされる。

そして、彼の場に現れたモンスターとは…！！

「現れよ！『ブラック・マジシャン・ガール』！！」

【ブラック・マジシャン・ガール】

星６／闇属性／魔法使い族

ＡＴＫ／２０００

ＤＥＦ／１７００

［効果］

お互いの墓地に存在する「ブラック・マジシャン」「マジシャン・オブ・ブラックカオス」1体につき、このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。

亨のフィールドに現れたモンスター。

それは、彼の信ずるしもべの一人である『ブラック・マジシャン・ガール』だった。

葉月はそのカードの登場に、大きく目を見開いた。

「亨さん…そのカード…っ！？」

「ああ…あの時、君が渡してくれたカードだ。君とこのカードが気付かせてくれたんだ。俺自身の気持ちを…！！」

「亨さん…」

「だが、デュエルはデュエルだ。容赦はしないぜ？」

「と、当然っ！！」

感傷に浸るのも良いが、今はデュエル中だ。

気を引き締め直す葉月を見て、亨は軽く笑みを浮かべた。

「『ブラック・マジシャン・ガール』は、墓地の『ブラック・マジシャン』の数だけ、攻撃力を３００ポイントアップする…！！」

【ブラック・マジシャン・ガール】
ＡＴＫ／２０００　↓　２３００
ＤＥＦ／１７００

そして、バトルフェイズに突入した亨は、葉月のがら空きのフィールドに容赦なく攻め入った。

「行くぞ、マジシャン・ガール！！　烏丸さんに、ダイレクトアタック！！　黒・魔・導・爆・裂・破！！」

「キャァアっ！！」

【西条亨】
ＬＰ　／　６８００

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　８０００　↓　５７００

ライフに大ダメージを受けた葉月は、よろめく姿勢を何とか持ちこたえた。

『あれれ…さいじょお、少しやりすぎちゃったかな？』

（いいや…烏丸さんがこのままで終わるとは思えない…。何か来る…！！）

亨の予感は的中した。

ダメージを受けた葉月は、墓地から1枚のカードを取り出し

「やってくれるわねマナさん…！！　でもこの瞬間…私は墓地から、天狗風のヒレンの効果を発動！！」

【ＢＦ－天狗風のヒレン】
星５／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　０
ＤＥＦ／２３００
［チューナー・効果］
このカードが墓地に存在し、相手モンスターの直接攻撃によって自分が２０００ポイント以上の戦闘ダメージを受けた時、自分の墓地に存在する「ＢＦ」と名のついたレベル３以下のモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターとこのカードを墓地から特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。「ＢＦ－天狗風のヒレン」の効果はデュエル中に１度だけしか使用できない。

「私が２０００ポイント以上のダイレクトアタックを受けた時…墓

地のこのカードと、レベル3以下の【ＢＦ】1体を選択して、特殊召喚する事ができる！来なさいッ…天狗風のヒレン！熱風のギブリ！」

ドン、ドンッ！！

一気に二体ものモンスターを召喚した葉月。

亨はバトルフェイズを終了させ、メインフェイズへと移行し

「一気に2体ものモンスターを…フッ、俺はカードを2枚セットし、ターンエンド！」

※

【西条亨】
ＬＰ　／　６８００
［手札］
2枚
［モンスター］
ブラック・マジシャン・ガール
［魔法・罠］

リバースカード　×3枚

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　５７００
［手札］
５枚
［モンスター］
ＢＦ－天狗風のヒレン
ＢＦ－熱風のギブリ
［魔法・罠］
なし

亨のターンが終了し、葉月のターンへと移行する。

「私のターン、ドローッ！！」

葉月がドローし、引き当てたカード。

それは…！！

『さぁ、お姉ちゃん！あたし達も、反撃開始だよ！』

（ウィンダ…！！　ええ、そうね！私たちの力、亨さんとマナさんに魅せつけてやるわよ！！）

『ガスタの巫女　ウィンダ』のカード引き当てた葉月は、彼女からの声援に力を宿す。

「行くわよ、亨さん！！　私はレベル３の『ＢＦ－熱風のギブリ』に、レベル５の『ＢＦ－天狗風のヒレン』をチューニング！！」

葉月のモンスター達が宙を舞い、新たに輝く星が生まれた。

「集いし願いが、新たに輝く星となる…！光さす道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！飛翔せよ！！『スターダスト・ドラゴン』！！」

【スターダスト・ドラゴン】
星８／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２０００
［シンクロ／効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。この効果を適用したターンのエンドフェ

イズ時、この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

葉月のフィールドに降臨せし星屑の竜、スターダスト。

星屑の粒子を煌めかせるその姿に、館内は感嘆の声に包まれる。

「ここでスターダストか…！！」

「そして手札より魔法カード『死者転生』を発動！！」

【死者転生】
［魔法カード］
手札を1枚捨てて発動する。自分の墓地に存在するモンスター1体を手札に加える。

「この効果で私は、手札の『ＢＦ－蒼天のジェット』を墓地へ送り…墓地に眠る、黒槍のブラストを手札に加える！そして、手札の『ＢＦ－空風のジン』を召喚！！」

【ＢＦ－空風のジン】
星１／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　６００
ＤＥＦ／　５００
［チューナー・効果］

このカードの攻撃力以下の守備力を持つ、フィールド上に表側表示で存在するモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

葉月のフィールドに、サムライの衣服を纏った小柄なカラスが召喚された。

「まだよッ！！　更に手札より『死者蘇生』を発動！！」

【死者蘇生】
［魔法カード］
自分または相手の墓地に存在するモンスター1体を選択して発動する。選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「この効果で私の墓地から、蒼天のジェットを特殊召喚！！」

【ＢＦ－蒼天のジェット】
星１／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　１００
ＤＥＦ／　８００
［効果］
戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から墓地へ送って発動する。自分フィールド上に存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターはその戦闘では破壊されない。

葉月のフィールドに出揃うモンスター達。

●スターダスト・ドラゴン
●ＢＦ－空風のジン
●ＢＦ－蒼天のジェット

それらのモンスターに、亨やマジシャン・ガールの目が大きく見開かれる。

『さいじょお、これって…っ!?』

（…風の力を託すとは言ったが…まさか…!!）

「行くわよ!!　レベル１の蒼天のジェットに、レベル１の空風のジンをチューニング!!」

驚きに満ちた表情を作る亨を前に、葉月は今の自分に出来る…。

今の自分が信じる力（プレイ）を魅せつける。

「集いし願いが、新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ!!」

カッッ!!

「シンクロ召喚！希望の力！！　『フォーミュラ・シンクロン』！！」

【フォーミュラ・シンクロン】
星２／光属性／機械族
ＡＴＫ／　２００
ＤＥＦ／１５００
［シンクロ／チューナー・効果］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体
このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚する事ができる。

葉月のフィールドに登場せし、シンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』。

このモンスターの登場に成瀬だけでなく、拓夜だけでなく、白石までもが思わず唖然となった。

「『フォーミュラ・シンクロン』の効果により、私はデッキからカードを１枚ドローする！！」

カードをドローし、葉月はゆっくりと瞳を閉じる。

そして手札のウィンダが、葉月を更なる高みへと昇華させる為に…。

『お姉ちゃん…自分の気持ちを信じて。ここからお姉ちゃんが召喚する為に必要なのは、カードだけじゃ駄目なの。カードや、自分自身や、相手に対する純粋な想い…！そこから見えてくる筈だよ？お姉ちゃんの…お姉ちゃんだけの世界が…！！』

カードに対する想い。

デュエルを始めて、ＯＣＧ研究会を知った。

本当に楽しそうにデュエルをする彼らを見て、私はカードが凄く好きになれた。

自分自身の想い。

私は、今このデュエルを…心のどこかで待ちわびていた。憧れの人とのデュエル…そして、それに勝ちたいという自分の本心。

相手に対する想い。

私は、ＯＣＧ研究会に入ってから…ずっとこの人を見てきた。相手を気遣う優しさ、正直な所、そして…そばに居るだけで、安心させてくれるような、そんな雰囲気を持ったこの人を…私は好きになった。

そんな人が、今私と本気のデュエルをしてくれている。

なら私は、今の私が出せる全ての力を、この人にぶつけたい…！！

それが、この人と私の…交わりし道なんだと信じて…！！

今の葉月には、全てが静寂に感じた。

全ての時が止まったかのような、不思議な感覚だった。

『今だよ、お姉ちゃん！これが…お姉ちゃんだけの明鏡止水…』

「ええ…私にも見えたわ。あの人と…私の交わる道が…！！」

カッッ！！　と目を開いた葉月に迷いは無かった。

「行くわよ！！　クリア・マインド…！！」

葉月は自分の場のモンスターに手を翳し、力の限り声をあげる。

「レベル８の『スターダスト・ドラゴン』に、レベル２のシンクロチューナー『フォーミュラ・シンクロン』をチューニングッ！！」

カッッ！！

その瞬間、葉月の場の二体のモンスターが光の粒子となり、辺りが眩い光に包まれる。

「集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く…光さす道となれ！！」

カァッッ！！

「アクセルシンクロッ！！　招来せよ！！『シューティング・スター・ドラゴン』！！」

【シューティング・スター・ドラゴン】
星１０／風属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／３３００
ＤＥＦ／２５００
［シンクロ／効果］
シンクロモンスターのチューナー１体＋「スターダスト・ドラゴン」以下の効果をそれぞれ１ターンに１度ずつ使用できる。
●自分のデッキの上からカードを５枚めくる。このターンこのカードはその中のチューナーの数まで１度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。
●フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。
●相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、

相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

コォォオオ…ッ！！
ドドドドド…ッ！！

葉月の想いに呼応し、招来せし『シューティング・スター・ドラゴン』。

そのモンスターの登場に、亨は葉月を見て微笑んだ。

「亨さん、これが…今の私の全力よッ！！」

「まさか…このモンスターを呼び出すなんて思ってもみなかったよ…！！」

決闘者として気を引き締め直した葉月は、バトルフェイズへと突入する。

「行くわよ、亨さん！！私はーーッ！？」

ドクンッ！！

瞬間、葉月の心臓が異常な位に跳ね上がった。

なにもこのデュエルに賭ける本気（気持ち）は葉月だけではない。

彼もそうなのだ。

葉月が亨と目が合った時、それに気付いた。

蒼く澄んだ色をした右の瞳。

そして赤紫色に変色した左の瞳。

オッドアイになった時こそ、彼の正真正銘の本気なのだ。

葉月がバトルフェイズに突入したと同時、先に動いたのは亨だった。

「確かに…君が『シューティング・スター・ドラゴン』を召喚した事には驚いたよ。それが君の本気なのだという気持ちも、熱い位に伝わってきた…なら、次は俺の番だ！！」

亨はそう言うと、自分の場に伏せてある三枚のリバースカードの中から、一枚のカードを発動した。

「リバースカード、オープン！！『マジカル・シルクハット』！！」

【マジカル・シルクハット】

［罠カード］
相手のバトルフェイズ中に発動する事ができる。自分のデッキからモンスター以外のカード2枚を選択する。その2枚をモンスター扱い（攻／守０）として、自分フィールド上に存在するモンスター１体と合わせてシャッフルし裏側守備表示でセットする。デッキから選択して特殊召喚した2枚のカードはバトルフェイズ終了時に破壊される。

「このカードは、デッキからモンスター以外のカードを2枚選択し、モンスター扱いとして俺のフィールドに特殊召喚する。そして、俺の場のモンスター1体と合わせてシャッフルし、裏側守備表示でセットする！！」

亨はデッキから『マジシャンズ・サークル』と『闇の誘惑』を取り出し、自分の場の『ブラック・マジシャン・ガール』と合わせてシャッフルした。

そして三体のシルクハットが現れ、亨の場に三体の壁モンスターとして、葉月の前に立ちふさがった。

「マナさんを戦闘から守る為の策…？でも、その場しのぎにしかならないわ！！『シューティング・スター・ドラゴン』で、真ん中のシルクハットに攻撃ッ！！　スターダスト・ミラージュ！！」

葉月の攻撃宣言により、『シューティング・スター・ドラゴン』が亨のシルクハット（カード）に狙いを定める。

その狙いは的確だった。

真ん中のシルクハットこそ、マジシャン・ガールのカードだったのだ。

だが…！！

「フッ…ソイツはどうかな？」

「ッ！？」

ドクンッ！！　と再び、葉月の心臓が跳ね上がる。

亨は二枚となったリバースカードの内、一枚に手を伸ばし…！！

「俺はこの瞬間、永続罠『血の代償』の効果を発動する！！」

【血の代償】

［永続罠］

５００ライフポイントを払う事で、モンスター１体を通常召喚する。

この効果は自分のメインフェイズ及び、相手のバトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。

【西条亨】
ＬＰ　／　６８００　→　６３００

【烏丸葉月】
ＬＰ　／　５７００

「このカードは、ライフを５００ポイント払う事で、モンスター１体を召喚する事ができる…！！」

「…新たな壁モンスターを出して、守備を固めるつもり…！？」

葉月が懸念する中、亨は手札の一枚に手を伸ばす。

「いいや…俺が呼び出すのは、只の壁モンスターではなく……！！」

神。

「モンスター扱いとなっているシルクハット三体をリリースし…ッ！！」

カッッ！！

カッッ！！

カッッ！！

瞬間、館内に衝撃が走る。

大地を砕き、天を貫く強大な体躯。

轟音なる地響きと共に姿を現したのは…！！

「これが…今の俺の本気だ！！　現れよッ、『オベリスクの巨神兵』！！」

【オベリスクの巨神兵】
星１０／神属性／幻神獣族
ＡＴＫ／４０００
ＤＥＦ／４０００
［効果］
このカードを通常召喚する場合、自分フィールド上のモンスター３体をリリースして召喚しなければならない。このカードの召喚は無効化されない。このカードが召喚に成功した時、魔法・罠・効果モンスターの効果は発動できない。このカードは魔法・罠・効果モンスターの効果の対象にできない。このカードは特殊召喚した場合エ

ンドフェイズ時に墓地へ送られる。自分フィールド上のモンスター2体をリリースする事で、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃宣言できない。

ズドドドド…！！

西条亨のフィールドに顕現せし幻神獣が一角、『オベリスクの巨神兵』。

まごう事なき神の召喚に、館内の人たちは言葉を無くし、ただただ巨大な神の姿を眺めあげていた。

『…うそ…』

『あ…相手ターンに…神を召喚するだと…ッ！？』

「これが…亨さんの…本気…ッ！！」

成瀬や白石、そして拓夜も唖然となっていた。

『お姉ちゃん…まさか…お兄ちゃんが神を呼び出すなんて…』

「…予測する方が…無理な話だって…！！」

流石の葉月も、これには唖然となる他なかった。

そんな葉月を、亨の呼びかけが葉月を現実に引き戻す。

「…烏丸さん」

「ッ!?」

「さぁ、君ならどう攻略する?君の実力は、まだそんなものじゃない筈だ…!!」

力が隠る言葉に、葉月は気を引き締め直す。

「…上等じゃない!! 相手が精霊界の三英雄で、しかもそのモンスターが神!! やってやろうじゃないの…!!」

西条亨 VS 烏丸葉月

二人のデュエルは、更なる熾烈を極めていく。

西条亨　ｖｓ　烏丸葉月　（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

さて、今回の話はいかがでしたでしょうか？

彼から引き継いだカードを更なる高みに昇華する事ができた葉月。

それを迎え撃たんとする彼の本気＝神。

アニメや漫画のような流れる展開を意識して書きましたので、読み手としてどう感じたかの感想を頂けると有難いです。

さて、二人のデュエルは前編と後編の二部作です。

今回前編が終了しましたが、ちょいと飛ばしすぎたかな？

っていうか、次のデュエルがこの話以上に盛り上げないといけないのか…！？

うぉぉ…！！自分でハードル上げてしもたぁ～（汗）

烏丸葉月

※

西条亨　ＶＳ　烏丸葉月。

東区第七高等学校の体育館で行われた、ＯＣＧ研究会による卒業デュエル。

その二人のデュエルに立ち並ぶ二体のモンスターに、館内は騒然となっていた。

【西条亨】
ＬＰ／６３００
［手札］
１枚
［モンスター］
オベリスクの巨神兵
［魔法・罠］
血の代償
リバースカード　×１枚

【烏丸葉月】
ＬＰ／５７００
［手札］
３枚
［モンスター］

シューティング・スター・ドラゴン
［魔法・罠］
なし

現在、烏丸葉月のターンのバトルフェイズだ。

相手ターンに神を召喚するという類を見ないプレイを魅せつけた亨は、葉月を挑発するかのように不敵な笑みを浮かべる。

「さぁ、どうした烏丸さん？俺のオベリスクに攻撃を仕掛けてこないのか？」

「亨さんも冗談キツいぜ…！！　葉月の『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃力は３３００…！！　神に攻撃した所で、返り討ちに遭うだけだ…！！」

デュエルを観戦する拓夜は、二人のデュエルに興奮しながら呟く。

そして、観戦しながら同時に思う。

自分なら、西条亨の神を相手にどう戦うのかを…。

「くッ！？　…バトルフェイズを終了して、メインフェイズ…！！」

バトルフェイズを終了した葉月はメインフェイズ２に移り、三枚の手札を確認する。

●ＢＦ－黒槍のブラスト
●ガスタの巫女　ウィンダ
●リビングデッドの呼び声

このターン、葉月はもう既に通常召喚をしてしまったが為に、手札のモンスターを壁として出す事はできない。

「私は…リバースカードを1枚セットして、ターンエンド！！」

手札を一枚伏せて、ターンを終了した葉月。

そして遂に、西条亨のターンが始まった。

「行くぜ…！！　俺のターン、ドローッ！！」

デッキからカードをドローした亨は、手札から

「『熟練の黒魔術師』を、召喚！」

【熟練の黒魔術師】
星４／闇属性／魔法使い族
ＡＴＫ／１９００
ＤＥＦ／１７００

［効果］
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分または相手が魔法カードを発動する度に、このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大３つまで）。魔力カウンターが３つ乗っているこのカードをリリースする事で、自分の手札・デッキ・墓地から「ブラック・マジシャン」１体を特殊召喚する。

「更に俺は永続罠『血の代償』の効果を発動する！」

【西条亨】
ＬＰ／　６３００　→　５８００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　５７００

「ライフを５００ポイント払う事で、モンスター１体を召喚する事ができる！俺は『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を召喚！」

【クルセイダー・オブ・エンディミオン】
星４／光属性／魔法使い族
ＡＴＫ／１９００
ＤＥＦ／１２００
［効果・デュアル］
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、このカードは効

果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く事ができる。この効果で魔力カウンターを置いたターンのエンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は６００ポイントアップする。

『血の代償』の効果により、更にモンスターを展開してきた亨に、葉月の頬から冷や汗が流れ落ちる。

「更に再び、『血の代償』の効果を発動！ライフを５００ポイント払う事で、『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を、再度召喚扱いとする！」

【西条亨】
ＬＰ／　５８００　→　５３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　５７００

再度召喚扱いとする事で、デュアル効果を得た『クルセイダー・オブ・エンディミオン』に、亨は早速…。

「そして『クルセイダー・オブ・エンディミオン』の効果発動！１ターンに1度、魔力カウンターを乗せる事ができるカードに魔力カウンターを乗せ、このカードの攻撃力を、エンドフェイズまで６０

0ポイントアップさせる！！」

【熟練の黒魔術師】
ＡＴＫ／１９００
ＤＥＦ／１７００
（魔力カウンター　×１）

【クルセイダー・オブ・エンディミオン】
ＡＴＫ／１９００　→　２５００
ＤＥＦ／１２００

着々と準備を整える亨を前に、葉月は落ち着くように自分に言い聞かせる。

（『シューティング・スター・ドラゴン』には、除外する事で相手の攻撃を無効にする能力が秘められている…！！　他の二体の攻撃は痛いけど、まだ勝機はある…！！）

葉月がそう思う中、亨はバトルフェイズへと突入する。

「バトル…！！『オベリスクの巨神兵』で、『シューティング・スター・ドラゴン』に攻撃ッ！！」

（やっぱり…オベリスクから動いた…！！）

亨の攻撃宣言と共に、オベリスクの剛腕が大きく振り上げられる。

そして、葉月はその攻撃に対し…！！

「『シューティング・スター・ドラゴン』の効果発動ッ！！　このカードは相手が攻撃宣言をした時、このカードをゲームから除外する事で、そのモンスターの攻撃を無効にする！！」

「葉月は、亨さんの神の攻撃を無効化させるのが狙いか…！！」

拓夜が声をあげたと同時、オベリスクは除外しようとするシューティング・スターを鷲掴みにした。

「えッ！？」

「甘いぜ…烏丸さん。神の攻撃から逃れられると思うな…！！　神は、対象をとる魔法・罠・効果モンスターの効果を受けない！！」

「そんな…ッ！？」

『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃を無効にする効果は、相手攻撃モンスターを対象に取る効果である。

よって、効果対象を取らないオベリスクには通用しなかった。

「これで『シューティング・スター・ドラゴン』は逃げられない…！！『オベリスクの巨神兵』！！　ゴッドハンド・クラッシャー！！」

ズドンッッ！！

「キャァァアアッ！！」

【西条亨】
ＬＰ／　５３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　５７００　→　５０００

神の一撃により、葉月の『シューティング・スター・ドラゴン』は破壊された。

そして、壁となるモンスターを失った葉月のフィールドに、残った二体のモンスターが襲い掛かる。

「まだ俺には、２体のモンスターの攻撃が残っている…行けッ！！『熟練の黒魔術師』！！『クルセイダー・オブ・エンディミオン』！！　烏丸さんにダイレクトアタック！！」

【西条亨】
ＬＰ／　５３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　５０００　→　３１００　→　６００

「くぅぅ…っ！！」

一気に大ダメージを受けた葉月。

ライフにも大きな差が広がり、葉月は一気に窮地に立たされてしまった。

『これは…美少女にとって、かなりマズい展開になったな…！！』

『葉月さんからすれば、シューティング・スターで一気に流れを自分に向けたかったんだと思います…ですが』

それを神の召喚によって阻まれた。

『確かに、西条のヤツが操る神は強力だ。だがどんなカードにも、必ず弱点がある…！！　それを美少女が見つける事ができるか…！？』

神の一撃により、盛り上がりをみせる館内のギャラリー達。

「俺のターンは終了だ…！！」

「くっ…！！　流石にキツい…！！」

歯を食いしばり、肩で大きく息をする葉月。

葉月は今、尋常じゃない程のプレッシャーを感じていた。

それは目の前に君臨する神から…

目の前で自分とデュエルをする亨から…

圧倒的なライフ差から…

周りが自分を見る目から…

様々な要因が重なり、葉月は今までに感じた事のない重度のプレッシャーに圧されていた。

（こんな所で…終わりたくない…！！）

デュエル開始前、彼と交わした言葉。

互いに持てる力を、全て出し切ろう！

本気のデュエル…！！

（これが…あの人の…本気…！！）

葉月は目を閉じ、大きく息を吸い込んで深呼吸をする。

そうする事で、先ずは自分の気持ちを落ち着かせようとしているのだ。

今の自分は、神を倒そうと戦略を練っている。

そういえば、彼はどうだったのだろうか？

星界の三極神や、邪神という神を相手にしてきた彼は、どんな気持ちでデュエルをしていたのだろうか？

今の自分と同じように、プレッシャーに悩まされていたのか？

もしそうだとすると、彼と自分は同じなんだなと思えてくる。

「クス…！」

もし、そうだとしたら…。

彼と自分は、同じ気持ちを共有している事になる。

彼と同じ気持ちを感じる事が出来る事が嬉しい。

そう思うと、今までのし掛かってきたプレッシャーが途端に軽くなった。

仕舞には笑みまで零れるくらいだ。

そして彼は、どんな窮地に陥っても決して諦める事はしなかった。

葉月の笑みを見て、亨は不思議そうな表情をしていた。

（…笑ってる？）

「そうよね…これ位の事で諦めたりしたら、駄目だよね…！！」

ゆっくりと目を開ける葉月の瞳には、迷いや不安はなかった。

「行くわよ、亨さん！私の本気は、まだこんなもんじゃないんだから！！」

※

【西条亨】
ＬＰ／　５３００
［手札］
なし
［モンスター］
オベリスクの巨神兵
熟練の黒魔術師
クルセイダー・オブ・エンディミオン
［魔法・罠］
血の代償
リバースカード　×１枚

【烏丸葉月】
ＬＰ／　６００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×１

「私のターンッ、ドローッ！！」

葉月のターンが始まった。

デッキからカードをドローした葉月だが、まだ今の劣勢を覆せるようなカードは揃っていない。

葉月は手札を二枚掴み…。

「モンスターをセットして、リバースカードを1枚セット！ターンエンド！」

『ふぅん…やはり美少女は守備に徹してきたか…！！』

『それが無難です…！！下手にモンスターを攻撃表示で召喚したら、亨さんのモンスターに一網打尽にやられちゃいます…！！』

守備を固めてターンを終了した葉月。

そして迎える亨のターン。

「俺のターン、ドロー！！　まずは『クルセイダー・オブ・エンディミオン』の効果発動！『熟練の黒魔術師』に魔力カウンターを1つ乗せ、攻撃力を６００ポイントアップする！！」

【熟練の黒魔術師】
ＡＴＫ／１９００
ＤＥＦ／１７００
（魔力カウンター　×２）

【クルセイダー・オブ・エンディミオン】
ＡＴＫ／１９００　→　２５００
ＤＥＦ／１２００

「バトル！！『熟練の黒魔術師』で、烏丸さんのセットモンスターに攻撃！！」

ズゴゥッ！！

亨のモンスターの攻撃が炸裂し、葉月のモンスターが破壊された。

「くっ…、戦闘破壊された『ガスタの巫女　ウィンダ』の効果発動！！」

【ガスタの巫女　ウィンダ】
星２／風属性／サイキック族
ＡＴＫ／１０００
ＤＥＦ／　４００
［効果］
このカードが相手モンスターの攻撃によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから「ガスタ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚する事ができる。

「…ウィン！？」

「ウィンダが戦闘破壊された時、デッキから…【ガスタ】のチューナー1体を特殊召喚する！来なさい！『ガスタ・ガルド』！！」

【ガスタ・ガルド】
星3／風属性／鳥獣族
ＡＴＫ／　５００
ＤＥＦ／　５００
［チューナー・効果］
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキからレベル2以下の「ガスタ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

葉月のフィールドに『ガスタ・ガルド』が守備表示で特殊召喚された。

「リクルーターか…相手にするとコレほど嫌らしい効果はないな…！！　次だ！『クルセイダー・オブ・エンディミオン』で、『ガスタ・ガルド』に攻撃！！」

ズドンッ！！

「戦闘破壊された『ガスタ・ガルド』の効果よ！デッキから『ガスタ・イグル』を守備表示で特殊召喚！！」

【ガスタ・イグル】
星1／風属性／鳥獣族

ＡＴＫ／　２００
ＤＥＦ／　４００
［チューナー・効果］
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキからチューナー以外のレベル４以下の「ガスタ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

続けて現れたのは『ガスタ・イグル』だ。

「『オベリスクの巨神兵』で、『ガスタ・イグル』を攻撃ッ！！」

ズドンッッ！！

「くぅぅ…！！　戦闘破壊された『ガスタ・イグル』の効果発動！！　出番よ、ウィンダ！！」

『ガスタ・イグル』の効果により、葉月のフィールドに２枚目の『ガスタの巫女　ウィンダ』が、守備表示で特殊召喚された。

『ウィンダ、華麗に参上☆』

結局このターン、葉月を倒す事ができなかった亨は、その口元に小さな笑みを浮かべた。

「フッ…まさか君に託したカードに、決着を阻まれるとはな…！！」

「あの時に言った筈よ！アンタよりも上手く使いこなしてみせるって…！！」

『ふぅん…辛くも美少女は、何とか凌いだか…！！』

『ガスタたちの守備能力は高いですから。流石に亨さんと言えど、攻めきれなかったみたいです…！！』

亨の攻撃を凌いだ事により、館内からはホッとした息があちこちから聞こえてくる。

「俺はターンエンドだ。さぁ、烏丸さん…ウィン。掛かって来い！」

「勝負を決めれなかったからって、そう慌てる事ないわよ、亨さん！行くわよ、私のターン！！」

葉月のターンが始まり、デッキからカードをドローする。

【西条亨】
ＬＰ／５３００
［手札］
１枚

［モンスター］
オベリスクの巨神兵
熟練の黒魔術師
クルセイダー・オブ・エンディミオン
［魔法・罠］
血の代償
リバースカード　×1枚

【烏丸葉月】
LP／　600
［手札］
2枚
［モンスター］
ガスタの巫女　ウィンダ
［魔法・罠］
リバースカード　×2枚

ドローしたカードを確認し、葉月は

「手札より魔法カード『貪欲な壺』を発動!!」

【貪欲な壺】
［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「この効果で、墓地のモンスターを5枚デッキに戻して…カードを2枚ドローする！！」

［デッキに戻したカード］
ＢＦ－孤高のシルバー・ウィンド
ＢＦ－熱風のギブリ
ＢＦ－極北のブリザード
ガスタ・イグル
ガスタ・ガルド

それぞれのカードをデッキに戻した葉月は、カードを2枚ドローした。

そして…！！

「『ガスタの巫女　ウィンダ』をリリースし、『ＢＦ－暁のシロッコ』をアドバンス召喚！！」

【ＢＦ－暁のシロッコ】
星５／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／２０００
ＤＥＦ／　９００
［効果］
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードはリリースなしで通常召喚す

る事ができる。１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力の合計分アップする。この効果を発動するターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃する事ができない。

葉月のフィールドに『ＢＦ－暁のシロッコ』が召喚された。

「亨さん、今の内に宣言するわよ！！　私はこのターンで…神を倒す！！」

「ッ！？」

大胆にも宣言する葉月に館内はヒートアップし、更なる歓声が沸き起こった。

「…来い、烏丸さん…！！」

「手札のこのカードは、他の【ＢＦ】が自分フィールド上にいる時、手札から特殊召喚する事ができる！『ＢＦ－黒槍のブラスト』を特殊召喚！！」

葉月のフィールドに魔法カード『死者転生』の効果で手札に加わった『ＢＦ－黒槍のブラスト』が特殊召喚された。

「なるほど…暁のシロッコのモンスター効果か…！！」

「けど、その前に…リバーストラップ発動！！『ブラック・リターン』！！」

【ブラック・リターン】
［罠カード］
「ＢＦ」と名のついたモンスター１体が特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。選択した相手モンスターの攻撃力分だけ自分のライフを回復し、そのモンスターを持ち主の手札に戻す。

「このカードは【ＢＦ】が特殊召喚に成功した時に発動する事ができ、相手フィールドのモンスター１体を手札に戻し、戻したモンスターの攻撃力分だけ、自分のライフを回復する！！」

「…ッ！？」

「私が選択するのは…『熟練の黒魔術師』！！」

ビュォォオ…！！

葉月の発動した『ブラック・リターン』が炸裂し、亨の『熟練の黒魔術師』は手札に戻されてしまった。

【西条亨】
ＬＰ／　５３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　６００　→　２５００

「オベリスクを手札に戻せないのは辛いけど…でも、このまま叩く！！　暁のシロッコの効果発動！！　私のフィールドの【ＢＦ】１体に、他の全ての【ＢＦ】の攻撃力を集結させる！私は『ＢＦ－黒槍のブラスト』に、暁のシロッコの攻撃力を上乗せさせる！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
ＡＴＫ／１７００　→　３７００
ＤＥＦ／　８００

攻撃力を底上げしてきた葉月は、その瞳に闘志を宿し…！！

「バトルよ！！　黒槍のブラストで『オベリスクの巨神兵』に攻撃ッ！！　デス・スパイラルッ！！」

グォォオオ…！！

ガキィィイッ！！

黒槍のブラストの一撃が、オベリスクを襲う。

「黒槍のブラストの攻撃力は３７００…だがそれでは、俺のオベリスクを倒す事はできないぜ！？」

「そんな事は百も承知よ！！　私は手札から『ＢＦ－月影のカルート』の効果発動！！」

【ＢＦ－月影のカルート】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／１４００
ＤＥＦ／１０００
［効果］
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地に送る事で、そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

「手札のカルートを墓地へ送る事で、戦闘を行う黒槍のブラストの攻撃力を、更に１４００ポイントアップする！！」

【ＢＦ－黒槍のブラスト】
ＡＴＫ／１７００　↓　３７００　↓　５１００
ＤＥＦ／　８００

「ッ！！　攻撃力…５１００ッ！？」

「行っっけぇぇえええっっ！！！！！」

ズボォァア！！！！！

【西条亨】
ＬＰ／５３００　→　４２００

【烏丸葉月】
ＬＰ／２５００

グォォオオォォォ…！！

ズズズズズ…グシャァッ！！

【ＢＦ】の結束の力により、亨の操る神『オベリスクの巨神兵』は破壊された。

「神（オベリスク）…撃破ッ！！」

ワァァアアアア…！！

神を倒した事で、異様なヒートアップを見せる館内のギャラリー達。

『暁のシロッコ…ＢＦがパワーのインフレを総称する一枚だな…！！』

『ですが、ここで亨さんの神を倒したのは大きいですよ！！　さすが葉月さんです！！』

館内で沸き起こる葉月コール。

「私はこれで、ターンエンド！」

※

【西条亨】
ＬＰ／４２００
［手札］
２枚
［モンスター］
クルセイダー・オブ・エンディミオン

［魔法・罠］
血の代償
リバースカード　×１枚

【烏丸葉月】
ＬＰ／　２５００
［手札］
なし
［モンスター］
ＢＦ－暁のシロッコ
ＢＦ－黒槍のブラスト
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

葉月のターンが終了し、亨のターンに移行する。

「やるな…烏丸さん。君は見事、神を打ち破った…！！　だが、俺たちのデュエルは…まだここからだ！！」

「っ！！」

亨のこの発言が、只の強がりでない事を葉月は理解していた。

前回の彼とのデュエルで、亨は神を使う事なく自分を圧倒した。

神など使わなくても、この人の強さは折り紙付きなのだ。

「行くぞ…！！　俺のターンッ！！」

デッキからカードをドローした亨は、そのカードを…。

「チューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！！」

【ジャンク・シンクロン】
星３／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／１３００
ＤＥＦ／　５００
［チューナー・効果］
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

亨のフィールドにチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』が現れた。

「『ジャンク・シンクロン』の効果発動！！　このカードが召喚に成功した時、墓地のレベル２以下のモンスターを特殊召喚する！！『メタモルポット』を守備表示で特殊召喚！！」

亨のフィールドに計三体のモンスターが並ぶ。

「レベル２の『メタモルポット』に、レベル３の『ジャンク・シンクロン』をチューニング！！」

亨のモンスター達の力（星）が一つになり、新たな力が呼び覚ます。

「集いし想いが、新たな力を呼び覚ます！光さす道となれ！！」

カッッ！！

「シンクロ召喚！！　いでよ、『ジャンク・ウォリアー』！！」

【ジャンク・ウォリアー】
星５／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／２３００
ＤＥＦ／１３００
［シンクロ／効果］
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

亨のフィールドに現れし『ジャンク・ウォリアー』。
亨は更に…！！

「永続罠『血の代償』の効果発動！！」

【西条亨】
ＬＰ／４２００　→　３７００

【烏丸葉月】
ＬＰ／２５００

「ライフを５００ポイント払う事で、手札のモンスター１体を召喚する！来い『熟練の黒魔術師』！！」

更に並ぶ亨のモンスター達。

彼のフィールドには計三体のモンスターが揃ったのだ。

●クルセイダー・オブ・エンディミオン
●ジャンク・ウォリアー
●熟練の黒魔術師

対する葉月のフィールドにはモンスターは二体。

●ＢＦ－黒槍のブラスト

●ＢＦ―暁のシロッコ

「更に『クルセイダー・オブ・エンディミオン』の効果により、『熟練の黒魔術師』に魔力カウンターを１つ乗せ、攻撃力を６００ポイントアップさせる！」

【熟練の黒魔術師】
ＡＴＫ／１９００
ＤＥＦ／１７００
（魔力カウンター　×１）

【クルセイダー・オブ・エンディミオン】
ＡＴＫ／１９００　→　２５００
ＤＥＦ／１２００

更にモンスターの攻撃力を底上げする亨。

『ふぅん…西条のヤツめ、徹底的だな…！！』

『それだけ、亨さんは葉月さんを強敵なんだって認めているんだと思います…！！』

神を失っても尚、西条亨は戦う。

「バトルッ！！『クルセイダー・オブ・エンディミオン』で、『ＢＦ－暁のシロッコ』に攻撃ッ！！」

ズゴウッ！！

「くっ！？」

【西条亨】
ＬＰ／３７００

【烏丸葉月】
ＬＰ／２５００　→　２０００

攻撃力の上昇した『クルセイダー・オブ・エンディミオン』の一撃が、葉月の暁のシロッコを捉えた。

「続けて『熟練の黒魔術師』で、『ＢＦ－黒槍のブラスト』を攻撃ッ！！」

ズボァア！！

「…ッ！！」

【西条亨】
ＬＰ／３７００

【烏丸葉月】
ＬＰ／２０００→１８００

二体のモンスターを失った葉月には、壁となるモンスターが全て消えた。

そして亨のフィールドには、まだ攻撃を残した『ジャンク・ウォリアー』の攻撃が残っている。

「烏丸さんのライフは残り１８００…この一撃で決める！！『ジャンク・ウォリアー』！！」

「ッ！？」

トドメの一撃。

西条亨の、この卒業デュエルに対する葉月への一撃（想い）を…！！

・・・・・

明確な気持ちに気付いたのは先日だった。

結締に言われた言葉…

『どうなんよ、西条ちゃん…葉月ちゃんにゃあ、ちゃんと自分の気持ちを伝えたのか？』

そして先日、彼女に言われた言葉…。

『私には、アンタはそのカードで…決闘者としていて欲しい。』

そして、仲間（カード）達から言われた言葉…。

『何か贈り物をしてみては…？』

そうだ…自分は決闘者。

ならば俺は決闘者として、彼女にデュエルという最高の時間をプレゼントしようではないか。

それが俺の、決闘者としての答えだ…！！

・

・　・

・　・　・

「烏丸さんにダイレクトアタック！スクラップ・フィスト！！」

亨のモンスター『ジャンク・ウォリアー』の渾身の一撃が放たれた。

この一撃を受ければ、葉月のライフは0となり、このデュエルが終わる。

「…まだよ…！！」

「っ！？」

「こんな楽しいデュエル…まだ終わらせたくない！！　終わらせない！！　私は今度こそ、アンタに勝ってみせる！！　リバーストラップ『リビングデッドの呼び声』を発動！！」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスターカード1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

葉月は、自分の場に唯一残っていたカード『リビングデッドの呼び声』を発動した。

「このカードは、私の墓地からモンスター1体を、攻撃表示で特殊召喚させる！招来せよッ『シューティング・スター・ドラゴン』！！」

「なにっ！？」

ドドドド…！！

葉月の場に降臨せし『シューティング・スター・ドラゴン』に、亨は『ジャンク・ウォリアー』の攻撃を思わず中断してしまった。

「くっ！？　…バトルを中断する…！！」

（まさかここで『シューティング・スター・ドラゴン』を召喚するとは…ッ！！）

予想外の出来事に面食らう亨は、メインフェイズ２へと移行し…

「カードを１枚伏せて、ターンエンド…！！」

※

【西条亨】
ＬＰ／　３７００
［手札］

なし
［モンスター］
ジャンク・ウォリアー
熟練の黒魔術師
クルセイダー・オブ・エンディミオン
［魔法・罠］
血の代償
リバースカード　×２枚

【烏丸葉月】
ＬＰ／１８００
［手札］
なし
［モンスター］
シューティング・スター・ドラゴン
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声

亨の攻撃を防いだ葉月。

そのフィールドには、彼女の新たな切り札である『シューティング・スター・ドラゴン』の姿があった。

神を倒した葉月は勢いに乗る。

「私のターン、ドローッ！！　そして『シューティング・スター・ドラゴン』の効果発動！！」

「っ！？」

「デッキの上からカードを5枚めくり、その中のチューナーモンスターの数だけ、シューティング・スターは攻撃する事ができるッ！！」

葉月はそう言うと、デッキの上からカードを五枚つかみ、公開して見せた。

●活路への希望
●ＢＦ－銀盾のミストラル
●ブラック・バック
●ＢＦ－流離いのコガラシ
●ＢＦ－そよ風のブリーズ

「チューナーは3体！！　よってこのターン、シューティング・スターは3回の攻撃が可能となる！！　バトルよッ！！」

土壇場での3回攻撃を可能とした葉月のポテンシャルに、亨は思わず唖然となった。

「行くわよ、『シューティング・スター・ドラゴン』！！『熟練の黒魔術師』に攻撃ッ！！　スターダスト・ミラージュ！！」

ズドドドンッッ！！

「ぐぅ…っ！？」

【西条亨】
ＬＰ／　３７００　→　２３００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　１８００

『熟練の黒魔術師』を破壊され、ダメージを受けた亨。

しかし、葉月の攻撃は続く。

「次ッ！！『クルセイダー・オブ・エンディミオン』に攻撃よッ！！」

ズドドドンッッ！！

「ぐぁ…っ！？」

【西条亨】
ＬＰ／　２３００　→　９００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　１８００

「亨さんと葉月のライフが…逆転した…ッ！！」

『まさか…亨さんがここまでやられるなんて…！！』

『西条の奴にとって、神を打ち破られた事が大きな痛手となったようだ…逆に美少女は、神を倒した事で勢いを増してきている…！！』

亨のフィールドにモンスターは『ジャンク・ウォリアー』のみ。

そして葉月の『シューティング・スター・ドラゴン』は、あと一回の攻撃が残っている。

この一撃が決まれば…！！

（亨さん…この勝負、もらった！！）

「この一撃で決めるッ！！『シューティング・スター・ドラゴン』！！『ジャンク・ウォリアー』に攻撃ッ！！スターダスト・ミラージュ！！」

葉月の攻撃宣言。

勝利を確信した葉月。

しかし、拓夜はあるカードに注目していた。

それは、亨の場に伏せられた、二枚のリバースカード…

（この一撃がそう簡単に入るとは思えない…あのリバースカード…！！）

そして葉月の攻撃宣言時、亨は…！！

「くっ…俺は決闘者だ。この状況で望みがまだ残されている限り、俺は最後まで諦めないッ！！リバースカード・オープン！！『奇跡の軌跡　（ミラクルルーカス）』を発動！！」

【奇跡の軌跡】
［罠カード］
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。相手はデッキからカードを1枚ドローする。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は１００ポイントアップし、1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃する事ができる。そのモンスターが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。

亨は先のターンに伏せた『奇跡の軌跡』を発動した。

「このカードは、相手がデッキからカードを1枚ドローし、エンド

フェイズ時まで、俺のモンスター1体の攻撃力を1000ポイントアップする…！！」

【ジャンク・ウォリアー】
ＡＴＫ／２３００　↓　３３００
ＤＥＦ／１３００

亨の『ジャンク・ウォリアー』の攻撃力が上昇し、葉月の『シューティング・スター・ドラゴン』の攻撃力と並んだ。

「攻撃力は…互角…ッ！！」

デッキからカードをドローした葉月を見て、亨は叫ぶようにして声を発した。

「迎え撃てッ！！『ジャンク・ウォリアー』！！　スクラップ・フィスト！！」

「貫けッ！！　スターダスト・ミラージュッ！！」

カッッ！！
カッッ…ッ！！

ズゴォォォオオ…ッ！！

互いのモンスター同士の攻撃が炸裂し、両者のモンスターは破壊された。

全てのモンスターを失う形となったが、亨は見事に葉月の攻撃を避わしたのだ。

このターンで仕留め損なった葉月は、すぐさま戦略を練り直す。

二枚となった手札から織り成す、これから先の展開のイメージを浮かべながら、葉月は動く。

（互いのライフが少ない今…下手な行動はできない…！！）

どんな状況であれ、最後まで油断できない。

相手はそれ程までの実力者なのだ。

互いのライフは、もう手が届く所まで来ている。

ならば、今の自分が取るべき行動は…！？

「…私は…カードを1枚セットして、ターンエンド…！！」

※

【西条亨】
ＬＰ／９００
［手札］
なし
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
血の代償
リバースカード　×１枚

【烏丸葉月】
ＬＰ／１８００
［手札］
１枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

「俺のターン、ドローッ！！」

気合い一閃、亨のターンが始まった。

ドローし、引き当てたカードは『地獄の暴走召喚』。
今現在では使いどころが無いカードであるが、彼の瞳は闘志に満ちていた。

【西条亨】
ＬＰ／９００
【烏丸葉月】
ＬＰ／１８００

『ふぅん…下手をすればこのターンで勝負が決まるな…！！互いのライフは、下級モンスターの一撃で決着が着く位にまで競り合った…そして今、二人のフィールドにはモンスターがいない…！！』

『つまりそれは、先にモンスターを引き当てて、召喚した方が勝つ、という事です？』

『そういう事だ…だがもし今、西条の奴が引き当てたカードがモンスターならば…この勝負…！！』

ゴクリ…と館内の全てが息を飲む。
白石等の解説を聞き、葉月は尋常じゃない位に心臓が揺れていた。
心音が体を破り、外にまで聞こえてきそうな…。

そんな中、亨は葉月の気持ちを察してか、口元に軽く笑みを浮かべた。

「ッ！？」

「…残念だが俺が引き当てたカードは、モンスターじゃない…」

そう言い亨は敢えて1枚の手札を公開した。

そのカードは…

「『地獄の暴走召喚』…」

ホッと胸を撫で下ろす葉月。

彼の手札は『地獄の暴走召喚』のみ。

これならばこのターン、亨は手札からモンスターを召喚する事はない。

葉月だけでなく、デュエルを観戦するギャラリー達からも安息の声が漏れてくる。

だが…

「ッ！！　気をつけろ、葉月ッ！！」

「っ！？　拓夜…！！」

「確かに亨さんは、モンスターを引けなかった！！　だが、よく見てみろ！！亨さんの場には、まだリバースカードが残っている！！」

「…ッ！？」

拓夜の言葉に会場中が一斉に一点に集中する。

亨の場に伏せられた、１枚のリバースカードに…。

「フ…拓夜くん。君の読み通りだ…。行くぜ、烏丸さん…！！」

「ッ！！」

亨はそう言うと、その１枚のリバースカードを発動させた。

「リバースカード、オープン！！『正統なる血統』！！」

【正統なる血統】
［永続罠］
自分の墓地に存在する通常モンスター１体を選択し、攻撃表示で特

殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

「墓地に眠りし黒魔族の魂よ…我が呼び掛けに応えよッ！！」

亨が呼び出した相棒（モンスター）、それは…！！

「いでよッ！！　我が最強のしもべ…『ブラック・マジシャン』！！」

ドドドドド…ッ！！

西条亨のフィールドに現れし、最上級魔術師『ブラック・マジシャン』。

その登場に、葉月を応援するギャラリー達は一気に青ざめた表情になった。

「ここで…『ブラック・マジシャン』ッ！？」

「烏丸さん、君のフィールドにモンスターはいない…！！　この『ブラック・マジシャン』の一撃で、このデュエルに決着をつける！！」

凄まじい覇気が亨から発せられる。

この一撃で、このデュエルの決着がつく。

「行けッ！！『ブラック・マジシャン』！！　黒・魔・導　ッ！！」

バリバリバリバリ…ッッ！！！！

『ブラック・マジシャン』の持つ杖の先端に、凄まじい魔力が集中する。

そして、その魔力が葉月に向けて解き放たれた。

ズボォァア！！

『この一撃で決まるかッ！？』

『…ッ！！』

眼前に迫る彼の一撃。

葉月にはそれが、スローモーションに見えた。

彼の本気のデュエル、その本気の一撃。

葉月は眼前にして思う。

やはり、彼は強かったと…。

だが…。

「こんな所で、終われないのよッ！！」

「ッ！？」

「アンタがこのターンで、モンスターを召喚するのは読めていたわ！でも、私だってまだ、戦える！！　こんな楽しいデュエル、絶対に私が勝ってみせる！！」

葉月はそう腹の底から叫び

「リバースカード、オープン！！『フェイク・フェザー』！！」

【フェイク・フェザー】
［罠カード］
手札から「ＢＦ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、相手の墓地に存在する通常罠カード1枚を選択して発動する。このカードの効果は選択した通常罠カードの効果と同じになる。

「このカードは、手札の【ＢＦ】を墓地へ送って発動する！そうする事で『フェイク・フェザー』の効果は、アンタの墓地の罠カード1枚と同じ効果になる！！」

葉月は手札の『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』を墓地へ送り、亨の墓地から1枚の罠カードを選択した。

彼がこのデュエル中で使用した罠カード。

それは…

「烏丸さん…ッ、まさか！？」

「そう、私が選ぶのは…『聖なるバリア－ミラーフォース－』！！」

葉月の発動した『フェイク・フェザー』が『聖なるバリア－ミラーフォース－』となり、『ブラック・マジシャン』の攻撃を跳ね返した。

「ミラーフォースの効果は、使ってるアンタが一番良く知っているでしょ？」

「っ！！」

バキャッ！！

ズドドドド…ッ！！

「『ブラック・マジシャン』ッ！？」

『ブラック・マジシャン』は破壊され、亨のフィールドからその姿を消した…。

「……ッッ！！」

「どぉ、亨さん？私を前と同じだと思ったら、大間違いよ！！」

ワァァアア…ッ！！

葉月の反撃に館内が一斉に湧き上がる。

このターン、亨は打つ手が無くなった。

『流石は美少女だ…！！　西条のモンスターを、しかも奴のカードを使って撃破するとはな！！　美少女の奴も、確実に強くなっている…！！』

『…亨さんのカードを使い、というのが葉月さんらしいです。それだけ亨さんと同じ気持ちで、このデュエルに望んだんだっていう事の顕れなんです…きっと…！！』

亨のターンは終了した。

そして今、このデュエルの…

葉月のラストターンが始まる！！

※

「私の…ッ、タァーンッ！！」

葉月のターンが始まった。

互いにモンスターもなく、魔法・罠を使い切ったこの状況で、葉月が引き当てたカードとは…！？

『ここで美少女がモンスターを引き当てれば、美少女の勝ちだ…！

！』

白石の言葉にギュッと唇を瞑る葉月。

彼女の視界には、うっすらと嬉し涙が浮かんでいた。

そして、意を決した葉月は…！！

「私は…ッ、チューナーモンスター『ＢＦ－疾風のゲイル』を召喚ッ！！」

【ＢＦ－疾風のゲイル】
星３／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／１３００
ＤＥＦ／　４００
［効果・チューナー］
自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

『ゲイルか…これで美少女と西条のデュエルも、ようやく終わるな…！！』

「え…ッ！？」

葉月のフィールドに攻撃力１３００のモンスターが召喚された。
このモンスターの攻撃が決まれば、このデュエル…。
しかし

「……」

ざわざわ、と館内のギャラリー達の声が一際大きく感じられる。
ゲイルを召喚した葉月は俯き、その華奢な身体を奮わせていた。

「…烏丸さん？」

『む…美少女は一体…どうしてしまったというのだ？』

『…葉月さん』

葉月の不可解な行動の真意を、デュエルを観戦していた拓夜は、何となくだが理解できた。

「…葉月、終わらせたくないんだろ？」

「…っ！！」

拓夜のその言葉にピクリと葉月の肩が反応する。

「お前の好きな人との、限界を超えた本気のデュエル…！！　楽しいんだよな？だから、まだこのデュエルを終わらせたくないんだろ？まだ亨さんと一緒に、デュエルをしていたいんだろ？」

拓夜の言葉は的中していた。

そうなのだ。

確かにこのデュエルには勝ちたい。

しかし、ここで自分のモンスターの攻撃が通れば、夢のようだった楽しい時間が終わってしまう。

白石の『これで美少女と西条のデュエルも、ようやく終わるな…！！』という言葉で、葉月は怖くなってしまった。

そしてできる限り長く、彼と同じ時間を共有したいという願いから、葉月はプレイを続行できなくなってしまったのだ。

「……」

しかし、いつまでもそうは言ってられない。

亨は、そんな葉月の気持ちを汲んだ上で、今の自分の想いを口にした。

「…烏丸さん。拓夜くんが言ったように、君がそう思ってくれているのなら、俺にとってこれほど嬉しい事はないよ」

自分の気持ちが嬉しく感じる。

その言葉に、葉月は俯けた顔を徐々にあげる。

「だが…勘違いしてはいけない。俺たちのデュエルは、この一回だけじゃないだろう？」

「…亨さん」

「このデュエルは終わりじゃない。始まりなんだ！」

「始…まり…？」

「ああ…俺はそう思っている。俺たちは、デュエルを通じて出会った。そこからお互いに、様々な出来事があり、そして今がある。だが…このデュエルが終わったからといって、俺たち二人の関係が終わる訳じゃない」

「…ッ！！」

「逆に俺はこのデュエルを経て、もっと沢山の時間を君と過ごしたいと思った！！　これから先もずっと、君と共に進みたい…！！これは俺の決闘者としての…いいや、俺個人の想いだ…！！」

「…亨さん…っ！！」

彼からの精一杯の気持ちが、自分の中に伝わってくる。

溢れる想いが涙となり、葉月の頬を伝う。

彼は望んでいる。

このデュエルの終わりを…。

彼は望んでいる。

このデュエルから始まる、二人だけの物語を…！！

ならば、彼からの気持ちを応えるには…！！

「烏丸さん…君からの返事を…聞かせてくれ」

「……私は……！！」

彼からの気持ちに応えるには…。

葉月は涙を拭い、キッと前を見据える。

そこには西条亨が、真剣な眼差しで自分を見つめていた。

応えよう、彼からの気持ちに。

決闘者として、私からもメッセージを送ろう。

「…っ！！　私は墓地の『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』のモンスター効果を発動！」

【ＢＦ－精鋭のゼピュロス】
星４／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／１０００
［効果］
このカードが墓地に存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を手札に戻して発動する。このカードを墓地から特殊召喚し、自分は４００ポイントダメージを受ける。「ＢＦ－精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

「このカードが墓地にある時、自分フィールド上のカード１枚を手札に戻す事で、墓地からこのカードを特殊召喚する事ができる！私はフィールドの『ＢＦ－疾風のゲイル』を手札に戻し…『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』を、特殊召喚っ！！」

【西条亨】

ＬＰ／　９００

【烏丸葉月】
ＬＰ／　１８００　→　１４００

葉月のフィールドに『ＢＦ－精鋭のゼピュロス』が現れる。

更に

「そして…手札のゲイルは、私のフィールドにこのカード以外の【ＢＦ】がいる時、手札から特殊召喚する事ができる！『ＢＦ－疾風のゲイル』を特殊召喚っ！！」

続いてゲイルが特殊召喚され、葉月のフィールドには2体のモンスターが出揃った。

彼は願う。

このデュエルから始まる、二人だけの物語を…。

そして自分も願う。

このデュエルから紡がれる、二人の絆を…。

「レベル４の精鋭のゼピュロスに、レベル３の疾風のゲイルをチューニングッ！！」

葉月のモンスター達が宙を舞い、その想いが一つに交わる。

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となれッ！！　シンクロ召喚ッ……！！」

カッッ！！

彼の気持ちに応えたい。

ならばその想いは、このカードと共に羽ばたこう。

「来なさいッ！！『ＢＦ－アーマード・ウィング』！！」

【ＢＦ－アーマード・ウィング】
星７／闇属性／鳥獣族
ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／１５００
［シンクロ／効果］
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。このカードが攻撃したモンスターに楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。相

手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力をこのターンのエンドフェイズ時まで0にする。

葉月のフィールドに現れし天空への架け橋『BF－アーマード・ウィング』。

「バトルッ!!　アーマード・ウィングで……」

彼に言われて気付かされた自分の本当の願い。

それは、これからもずっと彼と共に……。

「亨さんに…攻　撃　ッ　!!」

葉月の攻撃宣言と共に、アーマード・ウィングの攻撃が亨に炸裂した。

西条亨　VS　烏丸葉月

二人の本気のデュエルは、烏丸葉月の勝利に終わった。

【西条亨】

LP／　900　→　0

【烏丸葉月】

ＬＰ／１４００

烏丸葉月（後書き）

『納得…いかぁぁぁあああん…ッッ！！？』

デュエルが終了すると同時に、白石は大声で絶叫した。

二人のデュエルの結末は、葉月の勝利に終わった。

それは白石にとって喜ばしい結果なのだが、今回に限っては別だ。

結果はともあれ、内容が問題なのだ。

デュエル中、亨は葉月に対してこう告げた。

『このデュエルは終わりじゃない。始まりなんだ！』

そして、今回のデュエルは葉月の手で終わりを迎えた。

それは葉月が、今回のデュエルを終えて、彼と共に進みたいという意思を示した事と同じなのだ。

『西条よッ！俺は絶対に認めんぞッ！！』

『し、白石さん！？　ちょっ、落ち着いてくださいっ！！』

成瀬に抑えられる白石だったが、館内はすでに白石の言葉に触発され…

「そうだ、そうだぁあ！！」
「おれ達も二人の関係を認めないぞぉお！！」
「俺の…いや、俺達の葉月ちゃんを返せぇえ！！」

『ええぃッ！！　こうなれば…ッ！！　全国の美少女を愛でる会の友よッ！！今こそ憎っくき怨敵を叩き潰すぞッ！！』

ォォォォオオオオオ…ッ！！
ドドドドドド…ッ！！

暑苦しい位に騒ぎ立てる男子生徒達は、白石と共に徒党を組んで、亨に向かって襲いかかっていった。

「うわっ！？」

一気に窮地に立たされた亨は、突然の事で唖然とする葉月の腕を掴み

「行くぞ、烏丸さん！」

「え、い、行くったってドコに…！？」

「今は話している時間はないさ！とにかく、一緒に走ろう！」

「あ、ちょっ！？」

戸惑う声をあげながらも、葉月はとても嬉しそうな表情をしていた。

手を繋ぎ、一緒になって体育館から飛び出していく姿を、拓夜と成瀬の二人は微笑みながら見送って行った。

「ったく、白石さんや葉月好きの奴ら…ホントにあの二人を追っかけていきやがった…」

まさか卒業式にこんな愉快な構図を見る事ができるなんて思ってもみなかった。

そして、亨と葉月。二人の熱いデュエルを見る事ができて、拓夜はこれ以上ないという位に興奮していた。

しかし、そんな興奮している拓夜とは対照的に、隣に立つ成瀬をオロオロしながら…

「ど、どうしましょう…！？」

「なに焦ってるんだよ花穂？」

「拓夜さんはもっと自分の心配をして下さい！葉月さんの次は、拓

夜さんが白石さんとデュエルをする予定でしたのに…！！」

「なッ！？」

成瀬の話を聞いて、拓夜はショックを受けた。

肝心の対戦相手である白石は、現在絶賛追跡中で出て行ってしまったのだ。

そうなれば自分の対戦相手は…？

「おぃ…そりゃねぇだろ…！！」

がっくりと肩を落とす拓夜の様子を見て、館内に残っていた生徒達にもどよめきが起きた。

「対戦相手が出て行っちゃったみたいだぞ？」

「え、じゃあ拓夜くんのデュエルはどうなっちゃうの？」

ざわざわする館内。

すると、バンッ！！という大きな音と共に、体育館の扉が勢いよく開かれた。

「心配する事ぁ無いぜよ、西条拓夜！！」

開かれた扉から現れた男の姿に、一同は唖然となった。

グレーのスーツ姿で、腕には何故か決闘盤。

そして何故か頭からモクドナルドの紙袋を被り、その男が醸し出す雰囲気は紛れもない変質者であった。

そんな変質者は疲れているのか、肩で息をしながらビシッと拓夜を指さして

「お前さんの相手は、白石さんじゃぁ役不足だぜぃ…そう、拓夜ちゃんの相手はこの俺、天才ヒーロー【モスクド仮面】ぜよッ！！」

最後の卒業デュエル。　拓夜ｖｓモスクド仮面

※

東区第七高等学校の体育館は騒然となっていた。

本日は卒業式で、成瀬花穂が企画した卒業デュエルで、大いに盛り上がりを見せていたまでは良かった。

そこまでは企画した成瀬にとって、予定通りに事が運んでいた。

しかし、西条亨と烏丸葉月のデュエルが終了した途端、白石の暴走により成瀬の立てた綿密なプランは総崩れになったのだ。

「次の対戦者である白石さんが居なくなるなんて…正直予想外です…」

「し、白石さん…絶対に俺との事を忘れてやがる…」

成瀬の隣で、彼女と同様にガックリと肩を落とす西条拓夜も、大きな大きな溜め息をついた。

せっかく後輩の成瀬が企画してくれた卒業デュエルが、下手をすればここで打ち切りとなってしまうかもしれないのだ。

先の亨と葉月のデュエルでテンションが上がっていただけに、この

落胆は大きかった。

それには館内の生徒達（ギャラリー）も同感なようで、先のデュエル中の盛り上がりが嘘のように、不穏な空気に包まれている。

すると…。

「待たせたな、西条拓夜ァ！！」

バンッ！！と勢いよく体育館の扉が開かれる。

そこにはモクドナルドの紙袋を被った怪しげな人物が、堂々と仁王立ちで立っていたのだ。

「拓夜ちゃんの卒業デュエルにゃあ、白石さんじゃ役不足だぜぃ…。拓夜ちゃん、この天才ヒーロー【モスクド仮面】が相手だぜぃっ！！」

いきなりの不審者の登場に、館内は更に唖然とした空気に包まれる。

しかし、成瀬はその声には聞き覚えがあった。

（この声…もしかしてでなくても、あの人しか居ないです…！！）

彼女の脳裏に浮かぶのは、ＯＣＧ研究会の先輩であり、凄く頼れるＨＥＲＯ使い。

確か以前、彼は今回の卒業デュエルには参加できないと聞いていた為に残念であったが、そんな彼が白石の代わりとして拓夜とデュエルをしてくれるとなると…。

（白石さんの代役としてなら、お釣りが出る位です…！！）

自分の中で先輩達の評価を

モスクド仮面＝西条＝マナ≫≫≫≫超えられない壁≫≫≫≫白石

と改めながら、成瀬はこのサプライズに乗っかる事にした。

のだが…

「１１０っと…あ、もしもし、ポリスメンっすか？変な紙袋を被った変質者が卒業式に乱入してきてーー」

「ちょっ！？　拓夜ちゃん、待て待て待て待てっ！！　そりゃ洒落にならねーぜよ！？」

「た、拓夜さん！？　警察へはちょっと待って下さい！！」

変質者の登場に対して即座に通報するという優等生ぶりを発揮する

拓夜を、成瀬は必死になって食い止めた。

「拓夜さん、待って下さい！拓夜さん、自分の対戦相手を警察に突き出す気ですか！？」

「は…？俺の…対戦相手？」

拓夜は訝しむ表情で、入り口に立つモスクド仮面と名乗る人物を見やる。

モスクド仮面は、とりあえず通報されなかった事にホッと胸を撫で下ろして早速、腕に装着した決闘盤を掲げる。

「さぁ、拓夜ちゃん！俺が確かめてやんぜぃ！拓夜ちゃんがこの半年で、どれだけ強くなったのかをなァ！！」

「…っ！！」

思わず条件反射で身構える拓夜は、警戒心を露わにしながら…

「あのモスクド仮面って奴…俺の事を知ってるみたいだけど…いったい何者なんだ…！？」

「え？」

「モスクド仮面！そのモクドナルドの紙袋を取ったらどうなんだ！！　正体を現せ！！」

（た、拓夜さん！？　まさか本気で…モスクド仮面が誰なのか分かってないんですか～っ！？）

素で問い質す拓夜を見て吹き出しそうになるのを必死で堪える成瀬を余所に、拓夜とモスクド仮面は互いにヒートアップしていく。

「フッフッフ…この俺の正体をしりたければ、デュエルで俺に勝つ事だぜぃ！！」

「え、別に無理して正体を知りたい訳じゃないし…そこまで…」

「ちょ、ちょい待て拓夜ちゃん！？　ここまで引っ張っておいて、そりゃないぜよ！？　普通ならここは、やってやるぜ！ってなって、デュエルが始まるタイミングだぜぃ！？」

どうも会話のテンポを崩され、調子が出ないモスクド仮面。

すると、成瀬が拓夜に

「…拓夜さん。唐突ですが…拓夜さんの夢は、いったい何です？」

「いったい…って……っ！？」

成瀬に言われ、彼女の目を見て、拓夜は思わず目を見開いた。
成瀬が自分を見る目が、いつになく真剣だったからだ。

「俺は…デュエルで一番になる…！！　その為に、今期のプロリーグで…俺は絶対に優勝してみせる！！」

拓夜は体育館中に響き渡る位の大きな声で、堂々の宣言をした。

「俺や花穂、そして葉月が所属するＯＣＧ研究会…その先輩三人。亨さんや白石さん、そして今はここに居ないけど…結締さんは、歴代のデュエルチャンピオンだ…！！　今期のプロリーグを優勝する事で、俺はあの人達とようやく同じ位置に立つ事ができる…！！」

同じ位置に立つ。

そして、正々堂々と真正面からぶつかり合い…！！

「そして勝つ！！　あの人達に勝って、俺は本当の意味で…一番を目指す！！」

皆が皆、拓夜の言葉に聞き入っていた。

たかがカードゲーム、と思うかもしれない。
所詮はゲームだと。
しかし、考えてみて欲しい。
彼はまだ、今、高校を卒業したばかりの青年だ。
この歳でここまで明確な人生の目標を持った者が、果たして全国にはどれ位いるのだろうか？
明確な意志を宿した、飽くなき向上心を宿す決闘者…西条拓夜。
館内で佇む生徒達は、皆が皆、拓夜に見入っていた。

「それが拓夜さんの夢であり、目標…なら私は、あのモスクド仮面さんとのデュエルを推します！」

拓夜が堂々と言い切ったように、成瀬もまた、堂々と拓夜に告げる。

「拓夜さんは知らないでしょうが…私は知っています。あのモスクド仮面さんは見た目こそ変質者ですが、デュエルの実力は本物です。拓夜さんには失礼ですが…モスクド仮面さんは、私が知る中で最強のヒーロー使いです…！！」

「っ最強のヒーロー使い！？　でもそれは…その唯一の称号は…結

締さんだけのものじゃ…！？」

「確かに…先代デュエルチャンピオンの結締さんは、その実力から【最強のヒーロー使い】という二つ名があります。ですが、モスクド仮面さんがこのデュエルに賭ける想いは本物です…！！　あのモスクド仮面さんに勝てないようでは、拓夜さんが…プロリーグで勝ち抜ける筈がありません！！」

自分の彼女にピシャリと言われ、少なからず拓夜はショックを受けた。

しかし、拓夜はそんな成瀬の心情を理解している。

成瀬は冗談でもそんな事は言わない。

それだけ自分の事を想っての発言なんだというのを、拓夜は理解している。

「…花穂がそれだけ言うんだ。あのモスクド仮面って奴の実力は…相当なモンなんだろうな…！！」

再度、入り口に立つモスクド仮面を見やる拓夜は、成瀬に言われた事でハッキリと見えた。

彼から溢れんばかりに発せられる、トップクラスのデュエリストのみが発する威圧的なオーラ。

どうやらモスクド仮面の方は、スイッチが入ったようだ。

（改めて言われて感じるぜ…！！　このハンパない威圧感…！！
このモスクド仮面って奴…強い…っ！！）

拓夜の頬から冷や汗にも似た感触の何かが垂れ落ちる。

それと同時に、自分の手足が震えているのが分かる。

怖い？

いや、違う！

これは武者震いだ。

「へへ…楽しくなってきたぜ…！！」

拓夜はステージから降り、体育館中央に向かってゆっくりと歩き出す。

それと同時に、モスクド仮面も彼と対峙する形で、中央に向かって進む。

全校生徒達に囲まれるようにして向き合う二人の決闘者達。

西条拓夜、そしてモスクド仮面。

「アンタが何者かは知らないが…このデュエル、全力でやらせてもらうぜ…！！」

「当然だぜぃ…！！　だが…拓夜ちゃん、言葉だけじゃ足りねぇ…本気ってからには、デュエルで示せっ！！　それが決闘者だ…！！」

ドドドドド…ッ！！

両者の間で熱い火花が散る。

そして二人の決闘は、成瀬の宣言によって始まった。

『それでは、西条拓夜　ＶＳ　モスクド仮面…デュエル、スタートです！！』

「行くぜ…！！」

「来い…拓夜…！！」

「「デュエルッ！！」」

※

西条拓夜とモスクド仮面、二人のデュエルが始まった。

先攻を奪取した拓夜は早速、自分のターンを開始し、カードをドローする。

「俺の先攻、ドローッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／８０００

【モスクド仮面】
ＬＰ／８０００

六枚となった手札を確認する拓夜の脳裏に浮かぶのは、先のデュエル…。

葉月と亨の二人が繰り広げた、本気のデュエル。

自分もあんなデュエルがしてみたい。

してみたいだけじゃない…勝ちたい！

そんな拓夜の願いに、彼の仲間（デッキ）はしっかりと応えてくれていた。

（今の俺のデッキには…皆から貰ったカードが入って、戦術の幅が格段に広がった…！！　この手札なら…イケるッ！！）

そう意気込む拓夜は早速、手札の一枚に手を伸ばし…！！

「魔法カード『融合』ッ！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「っ！？」

初手に融合の魔法カードを発動した拓夜は、新たな力を存分に使い回していく。

「手札のディアボリックガイと、ダッシュガイを融合し…！！　現れろッ！！」

カッッ！！

「融　合　召　喚　ッ！！『Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション』！！」

【Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター×２
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体と、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。選択した相手モンスターの攻撃力・守備力はエンドフェイズ時まで、選択した自分のモンスターの攻撃力分ダウンする。

ドドドドド…ッ！！

拓夜のフィールドに新たな幻影の戦士、アドレイションが顕れた。

（アドレイションのカードを手に入れていたか…！！）

モスクド仮面は拓夜の召喚したモンスターを見て、被っていた紙袋の下から微かに覗かせる口元を引き締める。

「更に俺は、モンスターをセット！先攻の最初のターンは、攻撃をする事はできない…俺はこれで、ターン終了だ！！」

ワァァアア…！！

拓夜の融合召喚に盛り上がりを見せるギャラリーの生徒達。

そんなアウェイの中で訪れるモスクド仮面のターン。

「『Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション』か…【ＨＥＲＯ】の融合モンスターの中でも、比較的楽な融合素材から召喚する事ができる強力モンスター…」

モスクド仮面はそう呟き、デッキトップに指を添える。

「そして融合素材とした2体の【ＨＥＲＯ】…やるな、拓夜ちゃん…！！　だが、俺も負けてられないねぃ…！！　俺のタァーン！！」

デッキからカードをドローし、モスクド仮面のターンが始まった。

「拓夜ちゃんが初手から融合してきた様に、俺もここは融合だ…！！」

「っ！？」

「手札の『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

拓夜と同様に、初手に融合を使用してきたモスクド仮面に、拓夜は思わず目を見開く。

「手札のネオスと、ネクロダークマンを融合…ッ！！」

モスクド仮面の手札からそれぞれ二体のモンスターが交わり、強力な戦士が参上した。

「融　合　召　喚　ッ！！　来いッ！！『E・HERO　ネオス・ナイト』！！」

【E・HERO　ネオス・ナイト】
星7／光属性／戦士族

ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１０００
［融合／効果］
「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」＋戦士族モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、このカードの融合素材とした「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」以外のモンスターの攻撃力の半分の数値分アップする。このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは０になる。

ドドドドド…ッ！！

モスクド仮面のフィールドに、騎士の力を宿したネオスが参上した。

「ネオスだって…ッ！？　そのカードは…む」

「結締さんの…って言いたいのか？拓夜ちゃん、世の中は広いんだぜぃ…何も拓夜ちゃんが知ってる使用者だけが、そのカードの持ち主って訳じゃないぜよ？」

「…ぅ…！！」

確かにそうだ、と思う。

しかし、今はデュエルに集中だ。

「ネオス・ナイト…確か、その効果は…！！」

「あぁそうだ…ネオス・ナイトは、ネオスと融合した戦士族モンスターの攻撃力の半分の数値分、攻撃力を上昇させる…！！」

ネオスと融合したのは『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン』。

よってネオス・ナイトは、ネクロダークマンの半分の攻撃力分だけパワーアップする。

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト】
ＡＴＫ／２５００　→　３３００

「攻撃力…３３００…！？」

「これで拓夜ちゃんのモンスター『Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション』の攻撃力を上回った…！！　行くぜぃ！！」

バトルフェイズへと突入するモスクド仮面は、高らかに攻撃を宣言した。

「ネオス・ナイトで、拓夜ちゃんのモンスター『Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション』に攻撃ッ！！　ラス・オブ・ネオス・スラァーッシュッ！！」

斬ッ！！
ズドォォオ…！！

「くっ！？　打点２８００のモンスターが…こうも簡単に…！？」

『Ｖ・ＨＥＲＯ　アドレイション』を容易く討ち取られてしまった拓夜。

しかし、そんな拓夜にモスクド仮面の更なる攻撃が襲い掛かる。

「ネオス・ナイトは自身の効果故に、相手に戦闘ダメージを与える事は出来ない…だがネオス・ナイトは、１度のバトルで２度の攻撃ができる！！　行けェッ！！」

「っ！？」

ネオス・ナイトは更に、拓夜の場にセットされたモンスターを攻撃し、破壊した。

斬ッ！！
ズドォォオ…！！

「くっ！？　戦闘破壊されたのは、『キラー・トマト』だ…！！」

【キラー・トマト】
星４／闇属性／植物族
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１１００
［効果］
このカードが戦闘によって墓地へ送られた時、デッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。その後デッキをシャッフルする。

「『キラー・トマト』はバトルで破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスターを、特殊召喚する！現れろ…ダイヤモンドガイッ！！」

拓夜のフィールドに、新たな壁モンスターとして『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』が特殊召喚された。

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「リクルーターから【Ｄ－ＨＥＲＯ】を呼び出したか…！！」

ネオス・ナイトで拓夜のモンスターを一掃するつもりであったモスクド仮面の目論見は外れた。

やられても尚、次の一手に備える拓夜のプレイングに、モスクド仮面は言葉に出さずとも、内心では拓夜を賞賛していた。

「バトルフェイズを終了し、メインフェイズ…カードを1枚セットし、ターンエンドだぜぃ！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ
［魔法・罠］
なし

【モスクド仮面】
ＬＰ／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

ライフを無傷で乗り越え、拓夜のターンが訪れた。

現在モスクド仮面の場には、攻撃力３３００のネオス・ナイトがいる。

あの攻撃力に太刀打ちするには…

（あのネオス・ナイトを相手に、パワーで挑むのはちょいと厳しいぜ…それに、今の俺の手札には、あのモンスターを倒す手段がない…！！）

手札を確認しながら、様々な戦略を練る拓夜。

（このドローで…！！）

「行くぜ、俺のターンッ！！」

デッキからカードをドローした拓夜は、そのカードに希望を見出す。

「良し…！！　良いカードを引いた！！」

「ッ！？」

「手札より魔法カード『精神操作』を発動！！」

【精神操作】
［魔法カード］
このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールを得る。このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

拓夜は早速、引き当てたカードである『精神操作』を発動した。

「この効果で俺はエンドフェイズまで、アンタのネオス・ナイトのコントロールを得る！『精神操作』でコントロールを得たモンスターはこのターン、攻撃する事は出来ず、リリースする事もできない…！！」

「拓夜ちゃんが『精神操作』を使った…？ッ！？」

モスクド仮面や成瀬は、拓夜のこの戦術に見覚えがあった。

『精神操作』から相手強力モンスターを奪取し、そして…！！

「そして俺は、『サイバー・ヴァリー』を召喚ッ！！」

【サイバー・ヴァリー】
星１／光属性／機械族
ＡＴＫ／　０　ＤＥＦ／　０
［効果］
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。●このカードが相手モンスターの攻撃対象になった時、このカードをゲームから除外する事で自分はデッキからカードを１枚ドローし、そのバトルフェイズを終了する。●このカードと自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択しゲームから除外する。自分のデッキからカードを２枚ドローする。●このカードと自分の手札１枚を選択してゲームから除外する。自分の墓地のカード１枚をデッキの一番上に置く。

拓夜のフィールドに現れたのは、攻守０の『サイバー・ヴァリー』だ。

「『サイバー・ヴァリー』の第二の効果、発動！！　このカードと、俺の場のモンスター１体をゲームから除外する事で、デッキからカードを２枚ドローする！！」

「ッ！！」

拓夜が除外するモンスターとは…？

「勿論、俺が除外するモンスターは…ネオス・ナイト！！」

拓夜は『サイバー・ヴァリー』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス・ナイト』を除外し、デッキからカードを２枚ドローした。

『出ました！！拓夜さんの、ヴァリーによる除外ドロー！！』

「～っ！！　分かっていても、やられると結構ツラいぜぃ…！！」

モスクド仮面のネオス・ナイトを除外でき、拓夜は更に勢いに乗る。

「更に、フィールドのダイヤモンドガイの効果発動！！　１ターンに１度、デッキの一番上のカードを確認し、それが魔法カードの場合なら墓地へ送り、次のターンにその効果を発動できる…！！」

拓夜はダイヤモンドガイの効果で、デッキトップのカードをめくり、公開した。

「デッキの上のカードは…良しッ！！　通常魔法『終わりの始まり』だ！！」

「なにっ！？」

拓夜の強運に度肝を抜かされるモスクド仮面。

紙袋の中では、その頬に冷や汗が一つ流れていた。

「ネオス・ナイトが除外された事で、アンタの場はがら空きだ…！！　バトルッ！！」

バトルフェイズへと突入する拓夜は、高らかに攻撃宣言をした。

「ダイヤモンドガイで、モスクド仮面にダイレクトアタック！！ダイヤモンドナックル！！」

モスクド仮面にダイヤモンドガイの拳が襲い掛かる。

「ネオス・ナイトを除去した所までは良かったが…詰めが甘いぜぃ！！」

「っ！？」

「永続罠、発動！！『正統なる血統』！！」

【正統なる血統】
［永続罠］
自分の墓地に存在する通常モンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上に存在しなくなった時、このカードを破壊する。

モスクド仮面は拓夜の攻撃宣言時に、自分の場の伏せカード『正統なる血統』を発動した。

「このカードは、墓地に眠る通常モンスター1体を、攻撃表示で特殊召喚する！…蘇れ、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』ッ！！」

ドンッ！！

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス】
星７／光属性／戦士族
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
ネオスペーシアンからやってきた新たなるＥ・ＨＥＲＯ。ネオスペーシアンとコンタクト融合する事で、未知なる力を発揮する！

「…ネオスッ！？」

拓夜とダイヤモンドガイの前に立ちはだかる光のヒーロー、ネオス。

「俺のこのデッキは…ネオスの、ネオスによる、ネオスの為のデッキ！！　拓夜ちゃん…お前は俺のネオスを相手に、どう戦う？」

「く…っ！？」

ギリッと歯を食いしばる拓夜。

このままバトルを続行させれば、拓夜のダイヤモンドガイが間違いなく返り討ちにあう。

「…バトルを終了し、リバースカードを1枚セット…！！」

拓夜のターンは終了したが、彼は内心焦っていた。

やはり自分の知る中では、最強のヒーロー使いは結締しか存在しない。

しかし、今目の前でデュエルを繰り広げるモスクド仮面という変質者も成瀬の言うとおり、結締に負けない位に強い。

（…さっきからモスクド仮面って奴、上級モンスターを自在に召喚してきやがる…！！　やっぱコイツ…ただ者じゃない…！！）

（今は拓夜ちゃんの攻撃を防げたが…次のターンからが本当の勝負になりそうだぜぃ…！！　こりゃ俺も、気ぃ引き締めてかなきゃならねぇ…！！）

互いに火花を散らす中、二人のデュエルは更なる熾烈を極めていく。

※

「俺のタァーン！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

【モスクド仮面】
ＬＰ／　８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス
［魔法・罠］
正統なる血統

拓夜のターンが終了し、モスクド仮面のターンへと移行する。

デッキからカードをドローしたモスクド仮面は、早速拓夜のフィールドに攻め込んだ。

「このまま叩くぜぃ！！　ネオスで拓夜ちゃんのダイヤモンドガイに攻　撃　ッ！！　ラス・オブ・ネオスッ！！」

ズゴゥッ！！

「うぐっ！？　ダイヤモンドガイ…！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　８０００　↓　６９００

【モスクド仮面】
ＬＰ／　８０００

ネオスの攻撃により、ダイヤモンドガイを失った拓夜は、このデュエルで先制ダメージを受けてしまった。

「だがこの瞬間、俺の罠が発動する！！『リグレット・リボーン』！！」

【リグレット・リボーン】
［罠カード］
自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。そのモンスター1体を自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。この効果で特殊召喚したモンスターは自分のエンドフェイズ時に破壊される。

「このカードはこのターン、戦闘破壊されたモンスター1体を、守備表示で特殊召喚する！蘇れ…ダイヤモンドガイッ！！」

拓夜のフィールドに再び蘇りしダイヤモンドガイ。

何とか壁モンスターを残した事で、館内からは安堵の息が洩れる。

「ダイヤモンドガイを残したか…俺はこのままターンエンド！」

モスクド仮面のターンが終了し、拓夜のターンが始まる。

「俺のターン、ドローッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　６９００
［手札］
３枚
［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ
［魔法・罠］
なし

【モスクド仮面】
ＬＰ／　８０００
［手札］
３枚
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス
［魔法・罠］
正統なる血統

デッキからカードをドローした拓夜は、ドローしたカードを確認する。

そこから手札、フィールド、墓地。

様々な状況を一瞬で判断し、今の自分にできる最高のプレイを開始

する。

その為の第一手として、拓夜は墓地のカードに手を伸ばした。

「墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ』の効果発動！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダッシュガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１０００
［効果］
自分フィールド上のモンスター１体をリリースする事で、このターンのエンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。この効果は１ターンに１度しか使用できない。このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になる。このカードが墓地に存在する場合、１度だけドローフェイズ時にドローしたモンスターカードをお互いに確認し特殊召喚する事ができる。

「ダッシュガイが墓地に存在する場合１度だけ、ドローフェイズでドローしたモンスターを、特殊召喚する事ができる！俺は…チューナーモンスター『ゾンビキャリア』を特殊召喚ッ！！」

【ゾンビキャリア】
星２／闇属性／アンデット族
ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　２００
［効果・チューナー］
手札を１枚デッキの一番上に戻して発動する。墓地に存在するこの

カードを自分フィールド上に特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたこのカードは、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

拓夜のフィールドに、チューナーモンスターが特殊召喚された。

「更に、墓地のディアボリックガイの効果発動！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ】
星６／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／　８００
［効果］
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。自分のデッキから「Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ」１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「墓地のこのカードをゲームから除外する事で、デッキからもう１体のディアボリックガイを、特殊召喚する！来い！ディアボリックガイッ！！」

更に拓夜のフィールドにモンスターが特殊召喚される。

そんな拓夜のフィールドには、計３体のモンスターが並んでいた。

●Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ
●Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ
●ゾンビキャリア

拓夜の布陣を見て、モスクド仮面は口元を引き締める。

「行くぜ…！！　レベル６の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』に、レベル２の『ゾンビキャリア』をチューニングッ！！」

拓夜の二体のモンスターの力（星）が一つになり、紅連の炎が辺りを包む。

「王者の鼓動、今ここに列を成す！天地鳴動の力を見ろッ！！」

カッッ…！！

「シンクロ召喚ッ！！　焼き尽くせ『レッド・デーモンズ・ドラゴン』ッ！！」

【レッド・デーモンズ・ドラゴン】
星８／闇属性／ドラゴン族
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２０００
［シンクロ／効果］

チューナー　＋　チューナー以外のモンスター1体以上
このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

ドドドドド…ッ！！

拓夜のフィールドに、灼熱の炎を撒き散らしながら現れし紅連魔竜『レッド・デーモンズ・ドラゴン』。

攻撃力３０００のモンスターを召喚した拓夜だが、彼は手を緩めない…！！

「更に、墓地の『ゾンビキャリア』の効果発動！！　手札1枚をデッキトップに戻す事で、墓地のこのカードを特殊召喚する！！」

拓夜は二枚の手札の内、一枚をデッキトップに戻し、『ゾンビキャリア』を特殊召喚した。

「そしてこの瞬間、ダイヤモンドガイの効果を発動！！　デッキの一番上のカードを確認し、それが魔法カードなら墓地へ送り、次のターンにその効果を発動させる！！」

そう言い拓夜がデッキからめくったカードは…

「デッキトップのカードは、通常魔法『トレード・イン』だ！！
このカードは墓地へ送られ、次の自分のターンに発動できる…！！」

デッキをまるで自在に操る拓夜の戦術に、生徒達は唖然となっていた。

「そして前のターン、ダイヤモンドガイの効果で墓地へ送られた『終わりの始まり』の効果発動！！」

【終わりの始まり】
［魔法カード］
自分の墓地に闇属性モンスターが7体以上存在する場合に発動する事ができる。自分の墓地に存在する闇属性モンスター5体をゲームから除外する事で、自分のデッキからカードを3枚ドローする。

「この効果で俺は、カードを3枚ドローッ！！　そしてフィールドの『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』に、『ゾンビキャリア』をチューニングッ！！」

拓夜の二体のモンスターの力（星）が一つになり、気高き騎士の魂が参上する。

「来たれ、歴戦の勇士よ！栄光の架け橋を駆け抜けろッ！！」

カッッ…！！

「シンクロ召喚ッ！！『大地の騎士ガイアナイト』！！」

【大地の騎士ガイアナイト】
星６／地属性／戦士族
ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／　８００
［シンクロ］
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上

拓夜のフィールドに参上せしガイアナイト。

彼のフィールドには、ＯＣＧ研究会の先輩たちから託されたそれぞれのカードが出揃った。

「…レッド・デーモンズにガイアナイトか…やるじゃねぇか、拓夜ちゃん…！！」

「強がってられるのも今の内だ、モスクド仮面！！　アンタのネオスじゃ、俺の２体のモンスターに勝てない！！」

言い放つ拓夜を前に、モスクド仮面は言葉の端に、どこか余裕を含ませていた。

意気込む拓夜は、そんなモスクド仮面の様子を警戒しながら、バトルフェイズへと突入する。

「行くぜッ！！　レッド・デーモンズで、ネオスに攻撃ッ！！」

グゴゴゴゴ…ッ！！

全てを粉砕せんと、レッド・デーモンズの右拳に破壊の炎が宿る。

そして遂に、その拳がネオスに向けて叩き付けられた。

「アブソリュート・パワー・フォースッ！！」

ガキィィイイ…！！

バリバリバリ…ッ！！

「なにッ！？」

驚きの声をあげたのは拓夜の方だった。

なんと、攻撃力では勝るレッド・デーモンズの一撃を、ネオスが受け止めたのだ。

その事に驚く拓夜に、モスクド仮面は手札から一枚のカードを取り出した。

「なァにをそんなに驚いている？」

「ッ！？」

「俺の場にリバースカードが伏せられてなかったから油断してたか？何も効果を発動できるカードってのァ、フィールドのカードだけとは限らないぜぃ…！！」

「そ、そのカードは…ッ！？」

モスクド仮面が手札から発動したカード。

それは…

「ダメージステップ時、手札の『オネスト』の効果を発動ッ！！」

【オネスト】
星４／光属性／天使族
ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１９００
［効果］

自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

「このカードを手札から墓地へ送る事でこのターン、ネオスはバトルする相手モンスターの攻撃力の数値分、パワーアップする！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス】
ＡＴＫ／２５００　→　５５００
ＤＥＦ／２０００

『オネスト』の恩恵を受け、ネオスの攻撃力は一気に拓夜のレッド・デーモンズを上回った。

「しまっ…！！」

「行けッ！！　ネオスッ！！」

ズボォァア！！

結果、拓夜のレッド・デーモンズは返り討ちにあい、拓夜が戦闘ダ

メージを受けてしまった。

【西条拓夜】
ＬＰ／　６９００　→　４４００

【モスクド仮面】
ＬＰ／　８０００

「くっ…レッド・デーモンズ…ッ！？」

「さぁ、こっからどうするぜよ、拓夜ちゃん！！」

一気にライフを半分近く失った拓夜は、ギッと奥歯を噛み締めた。

（強い…！！　だが、今の段階で制限カードである『オネスト』を使わせれたのは大きい…！！）

モンスターはやられても、直ぐに次の戦略を練る拓夜。

「…俺はモンスターをセット、リバースカードを１枚セットして、ターンエンド！！」

思わぬ強敵、モスクド仮面を前に、拓夜は緊張と共にこの状況を楽

しんでいた。

どうやってネオスを倒そうか？

如何にしてモスクド仮面にダメージを与えようか？

（へへ…考えただけで…ワクワクしてきたぜ…！！）

西条拓夜とモスクド仮面。

二人の激闘は続く。

拓夜　ｖｓ　結締　本気の決闘

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　４４００
［手札］
２枚
［モンスター］
大地の騎士ガイアナイト
裏側守備表示　×１枚
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

【モスクド仮面】
ＬＰ／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス
［魔法・罠］
正統なる血統

西条拓夜　ｖｓ　モスクド仮面。

二人のデュエルは徐々に激しさを増していき、拓夜がライフを半分

近くにまで減らしていた。
様々な効果を駆使してデッキを回す拓夜であったが、その攻撃を悉く阻止されていた。
思わぬ強敵であるモスクド仮面を前に、気持ちが高ぶっていく拓夜。
そして拓夜のターンが終了し、モスクド仮面のターンが訪れた。

「行くぜぃ、俺のターンッ！！」

デッキからカードをドローしたモスクド仮面は、ドローしたカードを見て、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。

「へへ…何だ。お前も拓夜ちゃんと戦いたいってか？」

引き当てたカードに語るモスクド仮面は、自分の決闘盤にそのカードをセットした。

「なら、一緒に戦おうぜぃ！！『カードエクスクルーダー』を召喚ッ！！」

【カードエクスクルーダー】
星３／地属性／魔法使い族

ＡＴＫ／　４００　ＤＥＦ／　４００
［効果］
相手の墓地に存在するカード１枚を選択しゲームから除外する。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

モスクド仮面のフィールドに、幼く愛らしい雰囲気の魔法少女が元気に飛び出した。

『やぁ～～ってやるでしぃ！！』

「…ッ！？」

ザワ…ッ！？と、モスクド仮面が『カードエクスクルーダー』を召喚してから、館内の空気が急にざわつきだした。

それは戦略的に考えて、何故そんな低ステータスモンスターを召喚したのか？という訳ではない。

それは紙袋を被った怪しい男が、可愛らしいモンスターを召喚したから、という訳ではない。

「いま…喋ったよな…？」

館内の誰かがポツリと、そう呟いた。

「ああ…やってやるでし…って…！？」

「お、俺も聞こえたぞ！！」

「ウソッ！？　あの女の子のカードから！？」

「でも…確かに…ッ！？」

次第にどよめきが大きくなっていく中、召喚されたカードエクスクルーダーはどこか得意気になりながら、無い胸をぐぐぃ～っと張って

『ふっふ～ん、どうやらみんな、あたちのびぼーに酔いしれていやがるんでしね！』

「エクスクルーダー、それは７００パーセント有り得ないぜよ」

『むっ！？　むすぢめ！！　７００パーセントってどういう意味でしかっ！！』

「…ぇ？」

カードエクスクルーダーの声を聞き、拓夜は思わず耳を疑った。

「いま…なん…つった…ッ！？」

むすぢめ…？

まさか、あのモスクド仮面の正体って…！？

「そのまんまの意味だぜぃ。まだマナちゃんみたく、ナイスバディにもなってないお前の体じゃ、夜中に一人で満足できないぜよ」

『むすぢめ、分かってないでしね…世の中には、あたちみたくロリを求めている紳士がごまんと居るんでしよ？』

「ごまんとじゃなく、ごく一部の変態という名の紳士の間違いだぜぃ。っていうかな、そんな極一部のニーズに応える程度じゃ、マナちゃんには程遠いぜよ？お前はまだ、井の中の蛙って奴だぜぃ」

『カエルッ！？　確かにあたちの髪は緑色でしが、カエルと一緒にするなんて酷いでし！！　あんまりでし！！』

動揺する拓夜やギャラリー達を余所に、カードエクスクルーダーとモスクド仮面の二人は、互いにムキになって言い合っていた。

すると、憤るエクスクルーダーは手にしたステッキを、拓夜に向けてビシッ！！　っと指した。

『ちょっと、そこの凡人っ！！』

「ぼ…凡人…？」

『凡人の目には、あたちはどう映っているでし？あたちの、ぷりてぃきゅぅ～～とな姿に、ワンターンキルでし！！』

えっへん！！　と、無い胸を張るカードエクスクルーダー。

そんな様子に、拓夜は頬をポリポリと掻きながら

「まぁ、可愛いっちゃ可愛いけど…」

『けどはいらないでし。ほぅら、どうでしかむすぢめ？あの凡人には、あたちはとぉ～っても、ぷりてぃきゅぅ～～とにーー』

「けど、ちょっと五月蝿い」

『な〝ァっ！？』

五月蝿いと言われて、ガックリと崩れ落ちるカードエクスクルーダー。

「悪いな…今は俺と結締さんとのデュエル中なんだ…！！」

「そうだぜぃ…！！　お喋りも良いけど、場をもう少し弁えて……ッ！？　拓夜ちゃん、ちょっと待てっ！！」

何かを思い出したのか、モスクド仮面は急にあたふたしながら、言い訳をし始めた。

「俺は結締じゃあ無ぇ！！　謎の天才ヒーロー、モスクド仮面だぜぃ！！」

「いや、そんなビシッと仮面ライダーの変身ポーズを決めても…そこのエクスクルーダーが、アンタを結締って呼んでたし」

「なにッ！？」

『確かに言ってましたし、モスクド仮面さんも…むすぢめって呼ばれて、普通に話してましたし…皆さんも、そう聞こえてましたよね？』

うん。

館内の生徒達全員が同時に頷いた。

「な〝ッ！？」

「結締さん…なんですよね？俺は…遠回しなデュエルよりも、結締さん！！　アンタと堂々と戦いたいッ！！」

「…拓夜ちゃん」

拓夜からの宣告にモスクド仮面は、被っていたモクドナルドの紙袋に手をかけ、ゆっくりと外していく。

そして、遂に紙袋が外された。

「…結締さん…！！」

「ったく…こんなに早く正体がバレるたぁ思って無かったぜよ」

私は最初から気付いてました、と言おうとしたが、成瀬はそれを止めた。

それは拓夜の表情に、ある変化が訪れたのに気付いたからである。

（拓夜さん…相手が結締さんだって分かってから、あんなに楽しそうな表情…ちょっとだけ、結締さんに嫉妬しちゃいそうです…）

拓夜の表情がみるみる内にイキイキしてきたのを見た成瀬は、マイクを手に握り締め

『拓夜さん、結締さん…ここからがお二人の、本当の戦いです！準備は宜しいです？』

「ああ！！」

「いつでもＯＫだぜぃ！！」

互いに闘志を剥き出しにする拓夜と結締。

そして二人のデュエルは、第二ラウンドへと突入した。

【西条拓夜】
ＬＰ／　４４００
［手札］
２枚
［モンスター］
大地の騎士ガイアナイト
裏側守備表示　×１枚
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

【結締智恭】
ＬＰ／　８０００
［手札］
２枚
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス
カードエクスクルーダー
［魔法・罠］
正統なる血統

西条拓夜　ｖｓ　結締智恭、二人のデュエルが再開された。

デュエルは結締が『カードエクスクルーダー』を召喚した所から始まる。

「カードエクスクルーダー、いつまで凹んでるぜよ？」

『う、うるちゃい！うるちゃい！！　うるちゃいっ！！　むすぢめはあたちよりも、ガールの姉ちゃんの方が良いんでし…あのおっぱいの方が…』

「まぁおっぱいに関しちゃ否定しねぇが、エクスクルーダー。頭を切り替えろ…今のこの状況は、お前さんの力が必要だぜぃ…！！」

『ふぇ？』

「お前さんの事ァ、世界中の誰よりも頼りにしてるぜよ…！！」

世界中の誰よりも

世界中の誰よりも

頼りにしてる…。

世界中の誰よりも…。

エクスクルーダーの中で、結締の言葉が響き渡る。

結締が、自分を頼ってくれた。
それだけの事が、彼女にとって最大の喜びだった。

『うぅ～っ！！　愛と勇気のレボリューションでしぃ！！　やぁ～ってやるでしぃ！！』

「っし！！　いくぜぃ…『カードエクスクルーダー』の特殊効果、発動！！」

「っ！？」

「『カードエクスクルーダー』は1ターンに1度、相手の墓地のカード1枚を除外できる…拓夜ちゃんの墓地から、魔法カード『トレード・イン』を除外！！」

「なにッ！？」

『たぁ☆』

カードエクスクルーダーの効果が炸裂し、拓夜の墓地の『トレード・イン』が除外された。

「そのトレード・インのカードは、ダイヤモンドガイの効果で墓地に送られたカード…元となるカードが墓地に無けりゃ、次のターンにその効果を発動する事はできないぜぃ…！！」

「く…っ！？」

手札補充のカードを除外され、拓夜のアドバンテージは徐々に崩されていく。

「だが…結締さんのモンスターは攻撃力２５００のネオスと、攻撃力４００のカードエクスクルーダー…俺のガイアナイトには、勝てないぜ！！」

とは言うものの、拓夜はこの先の展開を危惧していた。

結締ならば、たとえ攻撃力が不利な状況だろうが、容易く討ち取ってしまうだろう…と。

「ヒーローってのァ、期待を裏切らない…！！　手札より『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「っ！？」

「フィールドのネオスと、カードエクスクルーダーを融合し…！！」

結締の場の二体のモンスターが一つになり、新たなヒーローが見参する。

「融　合☆召　喚　ッ！！　大地を砕け！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】
星６／地属性／戦士族
ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００
［融合／効果］
「Ｅ・ＨＥＲＯ」＋地属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。このターンのエンドフェイズ時まで、選択したモンスター１体の攻撃力を半分にし、このカードの攻撃力はその数値分アップする。

グゴガッ！！
ズドドドド…ッ！！

結締のフィールドから大地を割き、そこからガイアが参上した。

相手よりも攻撃力の低いモンスターを召喚した為か、館内の生徒達からはどよめきが沸く。

「ガイアの攻撃力は２２００…だがコイツは融合召喚に成功した時、相手モンスターの攻撃力を半分にし、その数値分だけ自分をパワーアップする事ができる！！」

結締は拓夜のフィールドに存在する『大地の騎士ガイアナイト』を指差し

「行け、ガイア！！　拓夜ちゃんのガイアナイトの力を奪え！！」

【大地の騎士ガイアナイト】
ＡＴＫ／２６００　↓　１３００
ＤＥＦ／　８００

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア】
ＡＴＫ／２２００　↓　３５００
ＤＥＦ／２６００

結締の『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』に攻撃力の半分を奪われた拓夜のモンスター『大地の騎士ガイアナイト』は、力無くうなだれてしまった。

「ガイアナイトッ！？」

「これで攻撃力の心配な無くなった…いくぜぃ、バトルッ！！」

遂にバトルフェイズに突入した結締。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』で、『大地の騎士ガイアナイト』に攻撃ッ！！　コンチネンタルハンマーッ！！」

グゴガゴガッ！！
ズドンッッ！！

「ぐァ…ッ！？　ガイアナイト…！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　４４００　→　２２００

【結締智恭】
ＬＰ／　８０００

拓夜の懸念は的中した。

結締は攻撃力の差など、難なく突破してきたのだ。

ライフにも大きな差が開き、拓夜は圧倒的不利に立たされた。

（くッ…！！　やっぱこの人は…期待を裏切らない…！！）

確かに不利な状況に立たされた拓夜であったが、気持ちには余裕があった。

そのせいか自然と口元は笑みを浮かべ、瞳は闘志に満ち溢れている。

「…どうやらその目…拓夜ちゃんは、まだ諦めた訳じゃないみたいだな？」

「ったり前ッスよ…結締さん！流石は先代デュエルチャンピオン…だからこそ、倒し甲斐があるってもんだぜ！！」

「っ！！」

熱血が入る拓夜に、結締は自分の心が踊っている事に気付いた。

そうだ。

拓夜が自分とのデュエルを望んでいたように、自分もまた、拓夜とのデュエルを望んでいた。

「その言葉…期待しているぜぃ！俺はリバースカードを1枚セットして、ターンエンド！！」

結締は最後の手札1枚を魔法、罠カードゾーンにセットし、ターンを終了した。

そして迎えた拓夜のターン…。

「いくぜ…俺のターン…ッ」

【西条拓夜】
ＬＰ／　２２００
［手札］
２枚
［モンスター］
裏側守備表示　×１体
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

【結締智恭】
ＬＰ／　８０００
［手札］
なし
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア
［魔法・罠］
リバースカード　×１枚

デッキトップに指を添える拓夜の表情は、とても楽しそうな笑顔だった。

そして今、大勢の生徒達が見守る中…。

拓夜の反撃（ターン）が始まった。

「ドローッ!!　俺は、モンスターを反転召喚!!『イービル・ソーン』!!」

【イービル・ソーン】
星1／闇属性／植物族
ＡＴＫ／　１００　ＤＥＦ／　３００
［効果］
このカードをリリースして発動する。相手ライフに３００ポイントダメージを与え、自分のデッキから「イービル・ソーン」を2体まで表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚した「イービル・ソーン」は効果を発動する事ができない。

拓夜のフィールドに棘の実が成った植物「イービル・ソーン」が生えた。

「『イービル・ソーン』の効果発動!!　このカードをリリースして、相手に３００ポイントのダメージを与える!!」

ボバッ！！
ズビビビビビ…ッ！！

【西条拓夜】
ＬＰ／　２２００

【結締智恭】
ＬＰ／　８０００　→　７７００

「のぁっ！？　微々たるダメージだが…『イービル・ソーン』の効果はそれだけじゃねぇ…！！」

「更に、リリースした『イービル・ソーン』の効果により、デッキから同名カード２枚を特殊召喚する！！　２体の『イービル・ソーン』を、特殊召喚！！」

拓夜のフィールドに、２体の『イービル・ソーン』が攻撃表示で特殊召喚された。

更に拓夜は手札を掴み

「そして俺は、ダイヤモンドガイを召喚！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ】
星４／闇属性／戦士族

ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１６００
［効果］
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する時、自分のデッキの一番上のカードを確認する事ができる。それが通常魔法カードだった場合そのカードを墓地へ送り、次の自分のターンのメインフェイズ時にその通常魔法カードの効果を発動する事ができる。通常魔法カード以外の場合にはデッキの一番下に戻す。この効果は１ターンに１度しか使用できない。

拓夜のフィールドに、２体目の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』が召喚された。

モンスターをフィールドに揃えた拓夜は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべながら

「俺のフィールドにモンスターは３体…！！　これで条件は整ったぜ…！！」

「っ！？」

拓夜の言葉を聞いて、結締はゾクリと悪寒が走った。

拓夜が操る【Ｄ－ＨＥＲＯ】の最上級モンスター達は、共通して三体のリリースを要するモンスターだ。

そして今、拓夜のフィールドには丁度三体のモンスターが並んでいるのだ。

（今ここで…『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』か、『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』が来るのはマズい…！！　Ｂｌｏｏ－Ｄならまだどうにか出来るが…もしドグマガイなら…今の俺にぁ打つ手が無い…動くなら、今だ…ッ！！）

「やらせねぇぜよ、拓夜ちゃん！！　リバースカード『ヒーロー・ブラスト』を発動！！」

【ヒーロー・ブラスト】
［罠カード］
自分の墓地に存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた通常モンスター１体を手札に加える。そのモンスターの攻撃力以下の相手フィールド上表側表示モンスター１体を破壊する。

「このカードは、墓地に眠る【Ｅ・ＨＥＲＯ】の通常モンスター１体を手札に加える事で、そのモンスターの攻撃力よりも低い数値を持つ相手モンスターを破壊する！！　墓地のネオスを手札に戻し、ダイヤモンドガイを破壊ッ！！」

「な…ッ！？」

「大方、Ｂｌｏｏ－Ｄかドグマガイのどちらかだったんだろうが…そう簡単にゃあやらせねぇぜよ」

ズドンッッ！！

ダイヤモンドガイが破壊され、拓夜のフィールドのモンスターの数が二体に減った。

拓夜の目論見を突破した結締はニヤリと笑みを浮かべると、ふと、ある事に気がついた。

（っ！？　何だ…拓夜ちゃんの…あの目は…！？）

拓夜の表情は訝しむ所か、その逆で、まだまだ余裕の表情であった。

「そう簡単にやらせてくれるって、最初から思って無いッスよ、結締さん！俺のモンスターを破壊してくる事くらい、最初から読んでいた…！！」

「ッ！？」

自分の行動を読まれていた事に衝撃を受ける結締。

そして拓夜は、自分の場に伏せてある一枚のリバースカードを掴み取った。

「このカードが、逆転の一手だ！！　リバーストラップ『リビングデッドの呼び声』を発動！！」

【リビングデッドの呼び声】
［永続罠］
自分の墓地からモンスターカード1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「この効果で、墓地のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！！　蘇れ…ダイヤモンドガイ！！」

「くっ！？」

拓夜のフィールドにダイヤモンドガイが復活した。

これでは、自分が発動した『ヒーロー・ブラスト』が無駄に終わったようなものだ…と、結締は奥歯をギリッと噛み締めた。

（やられた…！！　まさか拓夜ちゃんに、言葉の駆け引きで出し抜かれるなんてな…！！）

「ダイヤモンドガイの効果発動！！　デッキの上のカードは…！？　あちゃ～！！　罠カードか…」

ダイヤモンドガイの効果で罠カードをデッキボトムへと戻した拓夜。

そして今、拓夜の反撃が始まる。

「気を取り直していくぜ…！！　フィールドの『Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ』と、２体の『イービル・ソーン』をリリースし…！！」

拓夜の三体のモンスター達が巨大な渦に呑み込まれる。

そして、彼が召喚したモンスターとは…

「来いッ！！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』！！」

【Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ】
星８／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／３５００　ＤＥＦ／２４００
［効果］
このカードは通常召喚できない。自分フィールド上に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを含むモンスター３体をリリースした場合のみ特殊召喚する事ができる。この特殊召喚に成功した場合、次の相手ターンのスタンバイフェイズ時に相手ライフを半分にする。

ドドドドド…ッ！！

拓夜のフィールドに現れし最上級のD、ドグマガイ。
その攻撃力に、館内の生徒達は盛り上がりを見せていた。

「スゲーぜ拓夜！」

「先代のチャンピオンに、本当に勝っちまうんじゃねぇのか！？」

「拓夜くん！ガンバレー！」

皆からの熱い声援を己の力（自信）に変え、拓夜はバトルフェイズへと突入した。

「バトル！！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』で、『Ｅ・ＨＥＲＯガイア』に攻撃ッ！！　デス・クロニクル！！」

ズガァッ！！

「のぁっ！？」

【西条拓夜】
ＬＰ／　２２００

【結締智恭】

ＬＰ／７７００　→　６４００

自分の唯一のモンスターを破壊され、結締のフィールドはがら空きとなってしまった。

更には結締の手札は『ヒーロー・ブラスト』の効果で回収した『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』の一枚のみ。

状況は一転し、一気に拓夜の優位に傾いたのだ。

ワァァアアア…！！

「どうだ、結締さん！！」

「…へへ、やるじゃねぇの…拓夜ちゃん…！！」

状況は優位に立ったが、油断はできない。

相手は結締智恭…

精霊界の三英雄にして、先代デュエルチャンピオンなのだ。

拓夜はバトルフェイズを終了し、メインフェイズへと移行。

「リバースカードを一枚セットして、ターンエンド！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／　２２００
［手札］
なし
［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声
リバースカード　×１枚

【結締智恭】
ＬＰ／　６４００
［手札］
１枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

拓夜のターンが終了し、結締のターンへと突入した。

手札はたったの一枚のみ。

モンスターもなく、リバースカードもないこの状況。

（ハッキリ言って、超ピンチだぜぃ…！！）

対する拓夜のフィールドには、攻撃力３５００のドグマガイが降臨していた。

ドグマガイを相手に、今は守備に回るしか方法はない。

「…俺のターン、ドローッ！！」

結締がカードをドローし、スタンバイフェイズに入った瞬間、拓夜のドグマガイの効果が発動する。

「この瞬間、俺のドグマガイの効果発動！！　コイツが特殊召喚に成功した次のターンのスタンバイフェイズ時、相手ライフを半分にする！！　ライフ・アブソリュート！！」

「ぬぁ〝あ〝あ〝ッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／２２００

【結締智恭】
ＬＰ／　６４００　→　３２００

一気に結締のライフ半分を奪った拓夜に、歓声が沸き起こる。

『拓夜さんのドグマガイの効果が決まって、結締さんもライフが厳しくなってきました…！！』

「厳しいねぃ…俺はモンスターをセットして、ターンエンド！！」

結締はモンスターをセットだけして、ターンを終了した。

このデュエルで、初めて結締が守備に徹した瞬間であった。

「っし！！　この流れなら…！！」

この流れなら、結締に勝てる！！

そう思った拓夜は、すかさず自分のターンを開始する。

「俺のターン、ドローッ！！　このままバトルフェイズに突入だ！！　ドグマガイで、結締さんの守備モンスターに攻撃ッ！！　デス・クロニクル！！」

ズバッ！！

ドグマガイの攻撃が炸裂し、結締の守備モンスター『E・HERO アイスエッジ』が破壊された。

「くっ…！？」

「俺はこのまま、ターンエンド！！」

ターンを終了した拓夜は、思わず右の拳でガッツポーズをとる。

自分が倒したいと、超えたいと目標にしていた人物を、追い詰める事が出来たからである。

『状況は…拓夜さんが押してきました…！！』

実況をする成瀬や、デュエルを観戦する生徒達にも、流れが傾いてきている事を感じていた。

しかし、デュエルの流れを感じながらも、成瀬は真剣な眼差しで結締を見ていた。

（結締さんが…このままで終わる筈がありません…！！　拓夜さん、気を付けて下さい…！！）

「強く…なったなぁ…拓夜ちゃん」

自分のターンに移り、結締はポツリと口を開いた。

その言葉の背景には、彼にとって様々なデュエルの思い出が込められている。

以前…。

彼とデュエルをした時には、少なくとも自分には余裕があった。

彼に自信をつけさせる為に買って出たデュエルだが、その時は自然と負ける気がしなかった。

だが、今はどうだろうか？

以前は自分に在った余裕な気持ち…。

今回に限っては、そんな気持ちは微塵の欠片も無かった。

例えライフが８０００だろうが１００００だろうが、気を抜いたら一瞬でやられる…！！

相手を過大評価していたのは何も拓夜や成瀬だけでなく、自分もそうなのだ。

「北区のチーム『フィアーズ』や、白石さんとのデュエル…そんでもって、広太郎ちゃんとのデュエルを経て…俺は渇望したぜよ…拓夜ちゃんとのデュエルを…！！」

「…え？」

「ハハッ！！　なに驚いた顔をしてる？　俺だって決闘者だぜぃ…決闘者なら、強い相手と戦いたいって思うのァ当然の事だぜよ！」

「…結締さん…！！」

結締の気持ちを聞き、拓夜は感無量だった。

自分が倒したいと願う相手からの賛辞の言葉に、拓夜も堂々と応える。

「俺もッス！！　俺も…結締さんと戦いたかった…！！　そして今、こうして戦っている…俺は絶対に、このデュエルに勝つ！！」

「それは俺も同じだぜぃ…いくぜ、西条拓夜！！　俺ァこの引きで、奇跡を起こす！！」

「ッ！？」

そして勝つ！！

結締の気迫が拓夜に直撃し、拓夜は思わず息を呑んだ。

「俺のターン…！！　ドローッ！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　２２００
［手札］
１枚
［モンスター］
Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声
リバースカード　×１枚

【結締智恭】
ＬＰ／　３２００
［手札］
２枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

シュバッ！！っと鮮やかにカードをドローした結締は、引き当てたカードを確認して、その瞳をギラつかせる。

「拓夜ちゃん…！！“このターンでデュエルが終わるかどうか”…足掻いてみせろ…！！」

「ッ！？」

結締の言葉に、拓夜の頬から冷や汗が一つ垂れ落ちた。

（結締さんの手札は…『ヒーロー・ブラスト』の効果で手札に加えた『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』と、引き当てたカードのみ…！！）

一体、何のカードを引き当てたのか？

懸念する拓夜を前に、結締は引き当てた奇跡のプレイを開始する。

その第一手として、結締は墓地のカードに手を伸ばし

「先ずはコイツからだ！！　墓地に眠る、ネクロダークマンの効果発動！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン】
星５／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１８００
［効果］
このカードが墓地に存在する限り１度だけ、自分はレベル５以上の

「E・HERO」と名のついたモンスターをリリースなしで召喚する事ができる。

「ネクロダークマンが墓地にある時に1度だけ、手札の【E・HERO】をリリースなしで召喚する事ができる…！！　現れろ、ネオスッ！！」

【E・HERO　ネオス】
星7／光属性／戦士族
ATK／2500　DEF／2000
ネオスペーシアンからやってきた新たなるE・HERO。ネオスペーシアンとコンタクト融合する事で、未知なる力を発揮する！

結締のフィールドに、彼のエースモンスターであるネオスが召喚された。

ネオスの登場に、拓夜は気持ちを引き締め直した。

「…ネオス……？」

（俺のフィールドには、攻撃力3500のドグマガイが居るのに…わざわざ攻撃力の劣るネオスを、攻撃表示で召喚した…！？）

このまま戦闘を行えば、確実にネオスがやられる。

ならば何か策があるのだろうか？

（まさか『オネスト』…！？　いや、『オネスト』のカードは既に使用され、墓地にある為に使えない…なら、何か他に方法が…？）

険しい表情を作る拓夜を見て、結締はニヤリと笑みを浮かべ、残った一枚の手札を構えた。

「こいつが…俺の切り札だぜぃ！！　魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！！」

「なッ！？」

【ミラクル・フュージョン】
［魔法カード］
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「墓地のネクロダークマンと、アイスエッジを除外…！！　融　合　召　喚　ッ！！」

カッッ！！！！

「現れろッ！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ】
星８／水属性／戦士族
ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
［融合／効果］
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の水属性モンスターの数×５００ポイントアップする。このカードがフィールド上から離れた時、相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

結締のフィールドに現れし氷結のヒーロー、アブソルートＺｅｒｏ。

ネオスと並ぶその布陣に、拓夜は「まさか…ッ！？」と声をあげた。

「そのまさかだぜぃ、拓夜ちゃん。ここまで来れば、嫌でも俺の考えが分かるだろう…？」

アブソルートＺｅｒｏはフィールドから離れた時に、相手モンスターを全滅させる効果を持つ。

まずアブソルートＺｅｒｏでドグマガイに自爆特攻すれば、アブソ

ルートＺｅｒｏは破壊されて拓夜のフィールドのモンスターが全滅する。

そうなれば、残ったネオスの一撃が決まり、拓夜は…！！

「それじゃ、早速いくぜぃ…！！　アブソルートＺｅｒｏで、ドグマガイに攻撃ッ！！」

ズガガッ！！
ズドンッ！！

攻撃力で勝るドグマガイに攻撃したアブソルートＺｅｒｏは破壊された。

「そして、破壊されたアブソルートＺｅｒｏの効果！！　相手フィールドのモンスターを、全て破壊する！！」

ピキィィ…！！
ガラガラガラ…。

アブソルートＺｅｒｏの効果で凍り付けになったドグマガイは、そのまま氷塊となって崩れ落ちた。

【西条拓夜】
ＬＰ／２２００

【結締智恭】
ＬＰ／３２００→２７００

「ドグマガイ…ッ！！」

「これで拓夜ちゃんのモンスターは消えた…。この一撃で終わりだぜぃ、西条拓夜…！！」

「…ッ！！」

結締の言葉に重みが増す。

そして遂に、結締の攻撃宣言が下された。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』で、ダイレクトアタック！！　ラァァッ！！　オォブッ！！　ネェオォオスッ！！」

ズドンッ！！

ネオスが地を蹴り、拓夜に向かって勢い良く突き進む。

この一撃が決まれば、拓夜は…！！

『拓夜さんッ！！』

思わず彼の名を叫ぶ成瀬。

そして彼女と同じく、館内の生徒達からもどよめきの声が次々とあがった。

「このデュエル、俺の勝ちだぜぃ…！！」

結締がそう呟いた瞬間…

「…ッ、リバースカード、オープン！！『異次元からの帰還』を発動！！」

【異次元からの帰還】
［罠カード］
ライフポイントを半分払う。ゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り自分フィールド上に特殊召喚する。エンドフェイズ時、この効果によって特殊召喚されたモンスターを全てゲームから除外する。

【西条拓夜】

ＬＰ／２２００　→　１１００

【結締智恭】
ＬＰ／２７００

「ッ…！？」

「このカードはライフを半分払う事で、ゲームから除外されている俺のモンスターを、全て特殊召喚する！！　来いッ！！『Ｄ－ＨＥＲＯ　ディアボリックガイ』『ゾンビキャリア』『サイバー・ヴァリー』！！」

ドン、ドン、ドンッ！！

ネオスの攻撃を遮るかのように、拓夜の三体のモンスターが集結した。

「ッ…バトルは中断だ、ネオスッ！！」

結締の言葉に足を止めたネオスは宙返りし、彼のフィールドへと着地する。

そして結締は、拓夜のフィールドに現れた三体のモンスター達を見つめた。

（…やっぱり…戦闘を中断してきたか…！！）

「まさかこの攻撃を防がれるとは思って無かったぜよ…だが、『異次元からの帰還』の効果で特殊召喚されたモンスターは、エンドフェイズ時に再びゲームから除外される…！！　ここでわざわざ無理に攻撃する必要は無い…」

「……」「恐らくその『異次元からの帰還』は、次の拓夜ちゃんのターンに使う切り札だったんだろうが…ここで使わなきゃ負けていたからな…残念だったな」

「くぅ…ッ！！」

拓夜に残されたのは、発動済みの『リビングデッドの呼び声』、そして手札の一枚のカードのみ。

「次の拓夜ちゃんのターン、この状況を打開するカードを引けるか否か…！！」

それで全ての決着が着く。

息が荒くなる拓夜を見つめながら、結締は自分のターンの終了を宣言した。

「俺のターンはこれで終わりだ…」

そしてエンドフェイズにより、『異次元からの帰還』の効果で特殊召喚された拓夜の三体のモンスター達は、全てゲームから除外された。

※

【西条拓夜】
ＬＰ／１１００
［手札］
１枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声

【結締智恭】
ＬＰ／２７００
［手札］
なし
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス
［魔法・罠］

なし

結締のターンが終了し、拓夜のターンが訪れた。

「っ……！！」

『…拓夜さん…』

自分のターンを開始しようとデッキに手を伸ばす拓夜。

しかし、その手は震え、デッキに指を添えてから引き抜く事が出来なかった。

このドロー（引き）に、このデュエルの勝敗が全て掛かっているのだ。

結締に勝ちたいという気持ちはある。

しかし、その自分の気持ち以上に、対峙する結締から発せられるプレッシャーに、拓夜は気圧されていた。

結締も前のターン、自分と同じ様に苦しい状況だった筈だ。

手札がネオスだけで、場にはモンスターもリバースカードも無い状況だったのだから…。

しかし、彼は堂々としていた。

なぜそんなにも、堂々とできるのか？

考えれば考える程、拓夜の思考は疑心暗鬼という暗闇の中に包まれていく。

（俺にも…結締さんみたいに…奇跡を引き起こせるのか…？）

すると、そんな拓夜に対して

「…拓夜ちゃん、楽しいか？」

「む…結締さん…」

「俺は楽しいぜ…！！　初めは俺のペースで勝てると思っていたこのデュエルも、拓夜ちゃんは見事に俺の攻撃を阻止し、反撃してきた…！！　互いが互いに持てる全ての力を出し切ってのデュエル…！！　今の俺の心臓は、張り裂けそうな位にバクバクしてるぜぃ！！」

結締はこのデュエルを心の底から楽しんでいる。

自分だって、結締とのデュエルを心待ちにしていたのだ。

楽しいに決まっている…！！

しかし、今の拓夜の気持ちは楽しさよりも、不安という気持ちの方が大きかった。

「確かに、誰だって不安に思う事はあるぜよ…けどな、その不安を勇気に変えて…どんなに困難な状況からでも抗っていくからこそ、人は前へと進めるんじゃねぇか？希望を見いだせるんじゃねぇか？」

「……」

「人生だって、デュエルだってそうだ…！！　一歩前へ踏み出す勇気こそが大切なんだ…！！　その勇気（ドロー）を振り絞って、最後まで戦ってみせろ！！　うだうだ考えてるだけじゃ、自分の可能性を自ら閉ざすだけだぜぃ？」

「結締さん…」

確かに、結締の言う通りだ。

誰だって前へ進まなければ、次という展開（チャンス）は訪れない。

更には、以前に白石から言われた言葉…。

（己がデュエルを、己のデッキを信じて進めッ！！）

そして、いつも亨が口癖のように言っていた言葉。

（自分の仲間（デッキ）を信じる事で、きっとその想いに仲間達（カード）は応えてくれる…！！）

先輩達からの言葉に、拓夜の中で無くしかけていた大切な気持ちが蘇る。

それは、デュエルを楽しむ心。

絶対に勝ってやるという気持ち。

仲間（デッキ）を信じる気持ち。

このいずれかが欠けては駄目なのだと、この時拓夜は改めて実感した。

「そう…ッスね…ハハ…なにやってたんだろ、俺…今までの経験、全然活かしきれてなかったじゃん」

そう呟く拓夜の表情は変わっていた。

純粋なまでの瞳に宿す、揺るぎない闘志。

この瞬間から、拓夜の中で何かが弾けた。

「そうだよ…もしこのドローで、この状況から逆転できるかと考え

るだけでも、スッゲーわくわくするじゃねぇか！！」

拓夜の完全復活に成瀬だけでなく、館内の生徒達から熱い声援が送られてくる。

その声援を力に変えて…。

「結締さん…ここからだぜ！！　俺たちの本当のデュエルは！！」

「ああ…来い、拓夜ァ！！　お前の本気を魅せてみろ！！」

西条拓夜　ＶＳ　結締智恭

二人のデュエルは、いよいよ決着へと向けて進み出す。

拓夜　ｖｓ　結締　本気の決闘（後書き）

この小説を読んで下さり、本当にありがとうございます。

一進一退の攻防を繰り広げる二人のデュエルも、終に終盤に突入です。

此れまでに様々なデュエルを経験してきた拓夜はこのデュエルで、楽しいデュエルとは何かというのを自分の中で知りました。

それをこれからどう活かしていくのか？

そして、結締とのデュエルの決着は…！？

次回、頂を目指す者…最終回です。

頂を目指す者（前書き）

俺は忘れない…

皆がくれた贈り物、最高の時間を…！！

だから、俺は全力で挑む。

それが俺の…西条拓夜のデュエルだ！！

頂を目指す者

※

【西条拓夜】
ＬＰ／１１００
［手札］
１枚
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声

【結締智恭】
ＬＰ／２７００
［手札］
なし
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス
［魔法・罠］
なし

西条拓夜　ＶＳ　結締智恭。

結締が圧倒する中、拓夜はこの状況に希望を見出していた。

デュエルを楽しむ気持ち。

自分のデュエルを貫く意志。

そして、仲間（デッキ）を信じる心。

それら決闘者にとって、大切な魂に気付かされた拓夜は諦めない。

自分の場にモンスターは無く、手札はたったの一枚というこの状況でも、拓夜は溢れんばかりの闘志を燃やしながら、自分のターンを開始した。

「行くぜ…！！　俺の本当のデュエルを魅せてやる！！　俺のターンッ！！」

デッキからカードをドローした拓夜が引き当てた運命（カード）。

それは…。

「…！！　手札より魔法カード『貪欲な壺』を発動！！」

「っ！？」

【貪欲な壺】

［魔法カード］
自分の墓地からモンスターカードを5枚選択し、デッキに加えてシャッフルする。その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「この効果で、俺は墓地のモンスター5体をデッキに戻し…カードを2枚ドローッ！！」

（この土壇場で…手札補充カードを引き当てただと…ッ！？）

［デッキに戻したモンスター］
●イービル・ソーン　×3
●レッド・デーモンズ・ドラゴン
●Ｄ－ＨＥＲＯ　ダイヤモンドガイ

デッキから二枚のカードをドローし、手札という可能性を三枚に広げた拓夜の瞳は輝いていた。

吹っ切れた事で、心からデュエルを楽しむ拓夜は、更に手札に手を伸ばし…。

「更に、魔法カード『闇の誘惑』！！」

【闇の誘惑】
［魔法カード］
自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後手札の闇属性モン

スター1体をゲームから除外する。手札に闇属性モンスターがない場合、手札を全て墓地へ送る。

「デッキからカードを2枚ドローし、手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する！」

更にデッキからカードを二枚ドローした拓夜は、手札の闇属性モンスター『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を除外した。

「そして手札より、魔法カード『戦士の生還』を発動する！！」

【戦士の生還】
［魔法カード］
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択して手札に加える。

「この効果で、墓地の戦士族モンスターである『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』を手札に加える…！！　更に手札の『沼地の魔神王』の効果発動！！」

【沼地の魔神王】
星3／水属性／水族
ＡＴＫ／　５００　ＤＥＦ／１１００
［効果］

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。
その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。
また、このカードを手札から墓地に捨てる事で、デッキから「融合」魔法カードを手札に加える。その後デッキをシャッフルする。

「このカードを手札から捨てる事で、デッキから『融合』の魔法カードを手札に加える…！！」

デッキから融合を手札に加えた拓夜を見て、結締だけでなく、成瀬だけでなく、デュエルを観戦する生徒達だけでなく…。

その場に居た全ての者達が、拓夜のプレイに見入っていた。

土壇場で凄まじいドロー加速を魅せつける拓夜を前に、結締は開いた口が塞がらなかった。

（……そういや…前に西条ちゃんが言ってたっけか…！！）

このドローこそが拓夜の最大の強みであり、最大の武器である。と…

結締の頬に冷や汗にも似た滴がこぼれ落ちると同時に、彼のその表情はどこか楽しそうな…。

そんな結締の表情を見て、拓夜は力強くこう言った。

「結締さん…行くぜ、コレが俺の全力…俺のデッキ、最強モンスターだ！！」

「っ！？　まさか…！！」

「手札より『融合』を発動！！」

【融合】
［魔法カード］
手札またはフィールド上から、融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する。

「手札の『Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ』と、『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を融合…！！」

拓夜の手札から、二体のモンスターが一つとなり、彼のフィールドが激しい爆発を起こす。

「来たれ…究極にして、最後の【Ｄ】！！　融　合　召　喚　ッ！！」

カァッッ！！！！

「現れろッ！！『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』ッ！！」

【Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ】
星１０／闇属性／戦士族
ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００
［融合／効果］
「Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ」＋「Ｄ－ＨＥＲＯ　ドグマガイ」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。１ターンに１度だけ相手フィールド上のモンスター１体を破壊してそのモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。この効果を使用したターン、バトルフェイズを行う事ができない。このカードが自分のターンのスタンバイフェイズ時に墓地に存在する場合、墓地の「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたカード１枚をゲームから除外する事でこのカードを特殊召喚する事ができる。

ズドドドド…ッ！！

遂に現れし拓夜の最強モンスター『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に、結締は思わず声をあげた。

「んなっ！？　ここで『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』だとォ…ッ！？」

血色の両翼を大きく広げ。

全てを粉砕せんばかりの左の竜の顎。
万物の理を両断する右の大剣。
雄々しきその姿に館内の生徒達は、魅了されるかのように騒然となっていた。

「俺…あのモンスター…見たことある…！！」
「お前もか？俺もどこかで…？」
「私、思い出した！！　あのラドルフって副社長の、神を倒したモンスターよ！！」
「そうだ！！　俺も思い出したぜ！！【星界の三極神】を倒したモンスターだ！！」

すげぇ…！！
頑張って、拓夜くん！！
いけぇ！！　Ｄ－ＥＮＤ！！

拓夜の召喚した『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に館内の生徒達はヒートアップし、更なる盛り上がりをみせる。

「結締さん…貴方の最強モンスターが『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス』であるように…俺の信ずる最強モンスターこそ、この『Ｄｒａｇｏｏ

ｎ　Ｄ－ＥＮＤ』だ！！」

「くっ…！？」

土壇場でのＤ－ＥＮＤの召喚に結締がたじろぐ中、拓夜の反撃が始まった。

「早速行くぜ！！『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動！！　このターンのバトルを放棄する代わりに、相手モンスター１体を破壊する…！！　対象は…ネオスッ！！」

「…！！」

ビシッとネオスを指差す拓夜。

そして、遂に『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』が始動する。

左の竜の大顎を開き、その矛先をネオスへと向けた瞬間…！！

「粉砕せよ！！　インビシンブル・Ｄ！！」

ズゴウゥッ！！

ボバァアアッ！！

「ネオスッ！？　ぐぁぁあああ…！！」

【西条拓夜】
ＬＰ／　１１００

【結締智恭】
ＬＰ／　２７００　→　２００

竜の大顎から放たれた凄まじいエネルギーがネオスに直撃し、大炎上を起こした。

「ネオス、爆殺ッ！！」

ワァァアアア…！！

『Ｄ－ＥＮＤの効果が決まった事で、結締さんのライフが後僅かになりました！！』

「く…ぅ…！！」

逆転に次ぐ逆転に、拓夜は「よっしゃァア！！」と大きくガッツポーズをとる。

現在、自分のフィールドには『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』のみ

だが、結締のフィールドには何もない状況…。

「やってくれるじゃねぇの、拓夜ちゃん…！！　やっぱデュエルってのは、こうでなくっちゃな…！！」

一気に窮地に立たされた結締であるが、彼はそれでもこの状況を楽しんでいた。

拓夜のターンが終了した事で自分のターンが訪れた結締は

「だが、まだ俺は諦めねぇぜよ！！　俺のターン、ドローッ！！　モンスターをセットして、ターンエンド！！」

モンスターを引き当て、壁としてセットする結締に、拓夜は心を弾ませる。

（さすが結締さん…ここ一番のドローで、確実にモンスターを引き当ててる…！！）

「俺のターン、ドローッ！！」

結締のターンが終了し、拓夜のターンが始まる。

デッキからドローした拓夜は、早速『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』

の効果を発動した。

「もう一度『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果だ！！　このターンのバトルを放棄し、結締さんのセットモンスターを破壊ッ！！」

スドンッ！！

「くっ…！！」

結締のセットモンスター『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』を破壊した拓夜は、手札の一枚を掴み

「リバースカードを１枚セットし…！！　ターンエンド！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／１１００
［手札］
なし

［モンスター］
Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声
リバースカード　×１枚

【結締智恭】
ＬＰ／２００
［手札］
なし
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
なし

最強のヒーロー使いと称される結締を、あと一歩という所まで追い詰めた拓夜。

前のターンからなる逆転に次ぐ逆転劇に、館内は凄まじい熱狂に包まれていた。

「残りライフ…僅か２００、か…」

自分に残されたライフを確認し、ポツリと呟く結締。

しかし、彼の表情は笑っていた。

その理由は、このデュエルを諦めたからではない。

結締は嬉しいのだ。

自分の後輩がここまで成長してきた事が…！！

互いに求めたデュエルで、こうも接戦に持ち込めた事が、純粋に嬉しいのだ。

「盛り上がってきたぜぃ…！！　へへっ…行くぜ、拓夜ちゃん！！」

結締の目は、まだデュエルを諦めていない。

彼から発せられる凄まじい闘気が、それを物語っている。

拓夜は結締の一挙一動に全神経を張り巡らせる中、彼の反撃が始まった。

「俺のターンッ！！　ドローッ！！」

デッキからカードをドローする結締。

一体何のカードを引き当てたのか？

自分のフィールドには、攻撃力・守備力３０００の『Ｄｒａｇｏｏ

ｎ　Ｄ－ＥＮＤ』と、リバースカードが一枚揃っている。

対する結締のフィールドにはモンスターも、魔法・罠もなく、ドローした一枚の手札のみ。

普通ならば拓夜の勝ちは決まったようなものである。

しかし、油断はできない…！！

相手はＯＣＧ研究会にして、精霊界の三英雄…。

そして、先代デュエルチャンピオンなのだ。

下手をすれば、この状況からでも一気に逆転されるかもしれないと思わせる何かを、結締は持っていた。

そして、拓夜がゴクリと息を飲み込んだ瞬間…。

結締の反撃（プレイ）が始まった。

「魔法カード『Ｅ－エマージェンシーコール』を発動！！」

【Ｅ－エマージェンシーコール】
［魔法カード］
自分のデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

「このカードは、デッキから【Ｅ・ＨＥＲＯ】1体を手札に加える事ができる…！！　俺が手札に加えるのは…『Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン』！！」

バブルマンのカードを手札に加えた結締。

拓夜が懸念する中、彼は今の自分が出来る全力を出していく。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン』は、手札がこのカードのみの場合、特殊召喚する事ができる…！！　来い、バブルマン！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン】
星４／水属性／戦士族
ＡＴＫ／　８００　ＤＥＦ／１２００
［効果］
手札がこのカード1枚だけの場合、このカードを手札から特殊召喚する事ができる。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時に自分のフィールド上と手札に他のカードが無い場合、デッキからカードを2枚ドローする事ができる。

結締のフィールドにバブルマンが守備表示で特殊召喚された。

「そして、バブルマンの効果発動！！　バブルマンが特殊召喚した時、俺のフィールドと手札のカードが他に無い場合、デッキからカードを2枚ドローできる！！」

「…なっ！？」

結締の手札は0…そしてフィールドのカードは『E・HERO　バブルマン』のみ。

条件は容易に満たされていた。

「デッキから…カード2枚ドロー！！」

「…ッ！！」

ここにきてハンドアドバンテージを得る結締に、拓夜は言葉を失った。

やはり、彼は転んでも只では起きなかった。

（効果の発動条件の難しいバブルマンを、こうも簡単に…！？　やっぱ、この人は強ェ…！！　一緒にデュエルしてて、最ッ高にワクワクするぜ…！！）

そんな風に拓夜が胸を膨らませていると、結締は

「…拓夜ちゃん…！！」

「っ！？」

不意に真剣な眼差しに切り替わった結締に、拓夜は思わずドキリとする。

「どうやらこのターンが俺たちにとって…ラストターンになるみてぇだ…覚悟は、出来てるか？」

ゾクリ…！？っと、拓夜の背筋に寒気が走る。

これまでにないプレッシャーを放つ結締から、今の発言が嘘ではないのだろうと拓夜は感じた。

この状況から、結締は確実に攻めてくる…！！

ならば自分は決闘者として、彼からの挑戦に、真っ向から挑んでみせる…！！

「ええ…！！　臨むところッスよ…！！　けど…最後に勝つのは、俺です！！」

「…フ」

後輩からの頼もしい返事を聞き、つい笑みが零れてしまう。

以前のデュエルからどこまで成長したのか…！？

先輩として、そして一人の決闘者として…！！

結締は手札のカードに手を伸ばし…！！

「コイツが…最強にして究極の融合だ！！　手札より速攻魔法『超融合』を発動！！」

【超融合】
［速攻魔法］
手札を１枚捨てる。自分または相手フィールド上から融合モンスターカードによって決められたモンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。このカードの発動に対して、魔法・罠・効果モンスターの効果を発動する事はできない。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

「なっ！？　そのカードは…ッ！？」

「『超融合』の発動コストとして、俺ァ手札を１枚、プリズマーを捨てる…！！　そしてその効果により、自分のモンスターと相手のモンスターを融合する…！！　俺のフィールドの『Ｅ・ＨＥＲＯバブルマン』と、拓夜ちゃんの『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の魂を一つに…ッ！！」

「なっ！？」

結締のバブルマンと、拓夜のＤ－ＥＮＤが一つになり、結締のフィールドに闇の奔流が巻き起こる。

グォォオオオ…！！

カァッッ…！！

「融　合　召　喚　ッ！！　来たれ、暗影の戦士！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ』！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ】

星８／闇属性／戦士族

ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

［融合／効果］

「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋闇属性モンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数×１００ポイントアップする。

ズドドドド…！！

結締のフィールドに現れし暗影の戦士、エスクリダオ。

拓夜は自分の最強モンスターが飲み込まれた事に目を見開いたまま、

開いた口が塞がらなかった。

「エスクリダオは墓地の【Ｅ・ＨＥＲＯ】の数だけ、攻撃力を１００ポイントアップさせる…！！」

【Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ】
ＡＴＫ／２５００　→　３１００
ＤＥＦ／２０００

効果により、攻撃力を底上げする結締。

そして対峙する拓夜のフィールドには、『超融合』によって壁となるモンスターはいない。

【西条拓夜】
ＬＰ／　１１００

【結締智恭】
ＬＰ／　２００

このまま結締の攻撃を許せば彼の宣言通り、拓夜の敗北で決着が着く。

「エスクリダオ…今回はお前がフィニッシャーだ！！　バトルッ！

！」

遂にバトルフェイズへと突入した結締。

（拓夜ちゃん…悪ぃが、お前はまだ…俺を超えられない…！！）

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ』で、拓夜ちゃんにダイレクトアタック！！」

エスクリダオが高く跳躍し、拓夜に目掛けて襲い掛かる。

「これでトドメだ！！　ダーク・ディフュージョンッ！！」

『拓夜さん…っ！！』

思わず司会席から身を乗り出す成瀬。

勝利を確信した結締の一撃。

しかし、結締はそこである事に気付いた。

それは、対峙する拓夜の瞳が、依然と輝いたままだったのである。

（……っ！？）

「結締さん…やっぱ、アンタって凄ェよ…！！　どんな状況からでも、こうやって逆転してくるなんて…一緒にデュエルしてて、超ワクワクするぜ！！」

「拓夜ちゃん…！？」

「けど、言った筈だぜ、結締さん！！　最後に勝つのは…この俺だッ！！」

声を張り上げる拓夜は、自分の場に唯一残された最後の一枚のカードを掴み取り

「俺は最後まで、自分の仲間達（カード）を信じる…！！　その気持ちが通じ合えば仲間達（カード）は、その想いに応えてくれるんだ！！　リバースカード、オープン！！　罠カード『Ｄ－フォーチュン』を発動ッ！！」

【Ｄ－フォーチュン】
［罠カード］
相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。自分の墓地に存在する「Ｄ－ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター1体をゲームから除外する事で、バトルフェイズを終了する。

「この効果によって、墓地の『Ｄ－ＨＥＲＯ　Ｂｌｏｏ－Ｄ』を除外し…このターンのバトルフェイズを終了させるッ！！」

「なにぃっ！？」

ガキィィイイ…！！

墓地より現れたＢｌｏｏ－Ｄの幻影が、エスクリダオの一撃を受け止めた。

「よってこのターン、俺のライフポイントは無傷ッ！！　デュエルはまだ終わらないみたいだぜ、結締さん！！」

「く…ぅ…っ！？」

ワァァアアア…！！

大声援に包まれる拓夜。

結締は奥歯をギリッと噛み締めた後、思わず失笑してしまった。

最後の一撃のつもりであった今の攻撃を阻止されたとあっては、もう今の自分には打つ手が無い。

そして悟る。

（本当に…強くなったんだな…拓夜ちゃん…！！）

そう思うと結締は腰に手を当て、どこか吹っ切れたようにして、こう告げた。

「…俺のターンは終了だぜぃ、拓夜ちゃん…！！」

※

【西条拓夜】
ＬＰ／１１００
［手札］
なし
［モンスター］
なし
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声

【結締智恭】
ＬＰ／２００
［手札］
なし
［モンスター］

E・HERO　エスクリダオ
［魔法・罠］
なし

結締のターンが終了し、拓夜のターンへと移行する。
先のターンの結締の攻撃を防いだ事で、二人の間に静寂が訪れる。

「……」

「ほら、どうしたぜよ拓夜ちゃん…お前さんのターンだぜぃ？」

様々な感情が溢れ出す拓夜に、結締は優しい口調で諭す。
拓夜は、今のこの状況がある意味において信じられなかった。
このままデュエルが進めば、自分が目標としてきた先輩に…！！

（…葉月…お前も亨さんとデュエルした時、こんな気持ちだったんだな…！！）

自分達の前にデュエルをした葉月は、少しでも長く彼と一緒の時間を過ごしたいが為に、デュエルが出来なくなってしまった。
その気持ちは、今の拓夜も同じだった。

結締とデュエルをして、逆転に次ぐ逆転劇に心を弾ませて…！！
拓夜にとって結締とのデュエルは、最高に楽しい一時だったのだ。
それが、もう直ぐ終わってしまう。

「…俺のターン、ドローッ！！」

デッキからカードをドローし、己のプレイを開始する拓夜。
確かに、結締ともっとデュエルをしたい。
しかし、自分の目標は、彼に勝つことだ。
彼に勝ち、プロリーグで優勝し、デュエルで一番になる。
それが自分の目標であり、夢なのだ…！！
だから拓夜は進む。
己の未来を切り開く為に…！！
己が目標とする頂を目指す為に、拓夜は戦う…！！

「スタンバイフェイズ…！！　墓地に眠る『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』の効果発動ッ！！」

「っ！！」

「墓地の【Ｄ－ＨＥＲＯ】１体を除外する事で、墓地のこのカードを特殊召喚する！！」

墓地のドグマガイを除外した拓夜は、墓地に眠る自分の最も信じる最強カードを手にし

「今こそ決着の時だッ！！　現れろ…『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！」

ドドドドド…！！

拓夜のフィールドに再び現れし『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』に、館内の生徒達はゴクリと息を飲み込んだ。

皆が皆、悟ったのだ。

このデュエルの決着を…！！

【西条拓夜】
ＬＰ／１１００
［手札］
１枚
［モンスター］

Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ
［魔法・罠］
リビングデッドの呼び声

【結締智恭】
ＬＰ／　２００
［手札］
なし
［モンスター］
Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ
［魔法・罠］
なし

スタンバイフェイズを終え、メインフェイズへと移行した拓夜。

彼の瞳に宿る、飽くなき勝利への渇望。

それを見た結締は彼の成長を感じ、どこか安心するように微笑んだ。

「結締さん…俺…！！」

「皆まで言わずとも、ちゃんと分かってるぜぃ、拓夜ちゃん…デュエルで一番になるんだろ？」

自分の心境を見透かされている事に照れる拓夜。

自分の気持ちを理解して貰えているなら話しは早い。

（ありがとうございます…結締さん…！！　俺はこれで堂々と、貴方を超えて行ける…！！）

手を振りかざす拓夜。

そして遂に、拓夜によって今回のデュエルの終幕が降ろされた。

「行けッ！！『Ｄｒａｇｏｏｎ　Ｄ－ＥＮＤ』！！　エスクリダオを破壊し、結締さんにダメージを与えろッ！！」

インビシルブルー　Ｄ

ズボァアッ…！！！！

Ｄ－ＥＮＤの効果が炸裂し、結締のエスクリダオが破壊された。

【西条拓夜】

ＬＰ／　１１００

【結締智恭】

ＬＰ／　２００　→　０

一進一退の攻防を凌いだ拓夜は遂に、自分の目標とする先輩を倒した。

高校生活最後に、拓夜は己の夢へと一歩前進した。

※

皆がそれを認識するまでに一瞬の時間が掛かった。

一瞬の静寂。

結締のライフが0となり、彼がガクリと膝を地に付けた時。

成瀬の声がマイク越しに、館内に響き渡った。

『勝者…ッ！！　西条拓夜…ッ！！』

デュエル終了の宣言。

拓夜の名を告げられたと同時に、一瞬の間のあいだに溜め込まれた歓声が爆発する。

「やったぜ、拓夜ァア！！」

「アイツ、本当に勝っちまいやがった…！！」

「拓夜くんも、拓夜くんのモンスターもカッコ良かったわよ！！」

皆が盛り上がる中、拓夜は静かに拳を握る事で実感する。

（…勝った…？）

拓夜、拓夜、拓夜、拓夜…！！

館内からの熱烈なコールに、実感が確信へと変わる。

握った拳を見つめる。

その拳は微かに震えていた。

嬉しい、やりきった、達成した…！！

それら喜びの感情が溢れ、体中を駆け巡っているのだ。

「やったんだ…俺…遂に勝てたんだ…ッ！！」

「拓夜さん！！　おめでとうございます！！」

満面の笑みを浮かべると、そこに成瀬が飛び込んできた。
成瀬も自分の勝利を心から喜んでいるようで、とびっきりの笑顔を向けてきた。

「ありがとう花穂…！！　今日のこの舞台を用意してくれて…！！」

「はい…っ！！　えへへ☆拓夜さんからそう言って貰えるだけで、私も頑張った甲斐がありました…！！」

すると、互いに喜び合う二人の前に、デュエルの相手をした結締がゆっくりと近付いてきた。

「結締さん…」

「今回は俺の負けだぜぃ…しっかし、強くなったな…拓夜ちゃん」

「…俺は…」

強くなったな。

その言葉に拓夜は目を閉じ、これまでの様々なデュエルを思い返す。

デュエルを始めたキッカケは、葉月から誘われたから。

初めはただがむしゃらだった。

何度も葉月とデュエルして、自分のプレイングを実感して…。

そして花穂と出会い、新たなカード達を知った。

人それぞれのデッキがあり、その数だけ無数のデュエルがある事に気付いた。

そして、俺と花穂はＯＣＧ研究会に入った。

先輩達とデュエルをして、俺はその強さに憧れた。

ここに来てようやく俺は、決闘者としての目標が見つかった。

それは…

「デュエルで…一番になる…！！」

しかし、その道のりは険しい。

デュエルで一番になる為には、まず自分が強くならなければならない。

世界は広い。

それは東区デュエル大会に出場して、初めて知った。

しかし、自分はそこから様々な経験をした。

先輩達とのデュエル…。

フィアーズとのデュエル…。

ツィスカとのデュエル…。

邪神とのデュエル…。

広太郎とのデュエル…。

他にも様々なデュエルを見て、様々な事を学んだ。

今回の結締とのデュエルだってそうだ。

今自分の力を彼に全てぶつける事で、自分は更なる頂を目指す事ができた。

「結締さん…貴方を倒せた事で、俺はまた…前へと進める…！！」

「ああ、その意気だぜ拓夜ちゃん…！！　常に前へと向かう姿勢こそ、決闘者の在るべき姿…！！　俺ァ今日ここで、拓夜ちゃんとデュエルできた事を誇りに思うぜ…！！」

「結締さん…俺もです…本当に、ありがとうございましたっ！！」

互いに手を取り握手しあう二人に、盛大な拍手が贈られる。

するとそこに、体育館のドアが開かれ…。

「ふぅん…西条よ、美少女たっての願いだ…！！　美少女の事は今しばらく、貴様に預けておくぞ…！！」

「勝手な事言わないで頂戴…！！」

「悪いが白石、ソイツは無理な話しだ…って、え…！？　む、結締…！？」

「なにっ！？　結締だと…ッ！？」

開いたドアからは先のデュエル終了後に飛び出して行った西条亨と烏丸葉月、そして白石直也の姿があった。

三人は拓夜とガッチリ握手をする結締に気付き、頭上にクエスチョンマークを浮かびあげる。

亨や白石の姿を見て、結締は途端に青ざめた表情になった。

「あ…やべっ…！？」

「三人共…今ごろ戻って来たんスか…」

「もぅ、白石さん！！　拓夜さんとのデュエルをすっぽかして行くなんて…！！　約束が違うじゃないですかっ！！」

「むぐぅ…す、すまぬ成瀬…！！　だがあの時の俺は…どうしても西条と美少女の仲をｰｰ」

「言い訳は聞きたくありません。白石さん、前々から準備してた今日の卒業デュエル…白石さんのせいで全部台無しになってしまったんですよ？どう責任を取るつもりなんです？」

後輩である成瀬にトコトン言いくるめられる白石は、途端に小さくなってしまった。

それだけ成瀬から白石に対して放たれる威圧感が凄まじいのだ。

（…花穂の事、絶対に怒らせないようにしよう…！！）

「す、すまなかった…だから成瀬よ、今から拓夜とデュエルするから」

彼氏として、そう固く誓う拓夜なのであった。

「もう手遅れです。というか、今頃になってどの面さげて帰って来たんです？司会や実況も全部放ったらかして…！！　ごめんで済んだら、警察や裁判所なんか要らないんですよ？」

「は、はい…ごめんなさい」ガタガタ
（；д；）

小柄な成瀬よりも更に縮こまる白石。

これには白石を改善させる良い機会なので、白石をフォローする者は誰も現れなかった。

とりあえず話題を変えようと、葉月は拓夜に気になっていた事を尋ねてみた。

「で…結局、私達が出て行っちゃってから拓夜、アンタはどうしてたのよ？」

「ああ…それが、あの後直ぐに結締さんが来てくれてさ！一緒にデュエルしてたんだ…！！」

嬉しそうに話す拓夜の背後では、ビクッと肩を跳ね上げる結締の姿が。

その肩に亨の手がポンッと置かれる。

「結締…お前、今日の研修はどうしたんだよ？確か朝一番に出て行かなくちゃならないんじゃ…」

「だ…大丈夫だぜぃ西条ちゃん…！！　だ…代役を…立てといたか

ら」

「お前…また中島理事長からお仕置きがーー」

「わぁーってる!!　わぁーってるから西条ちゃんっ!!　それ以上は言わないでくれぇぇ…っ!!」

よほど中島理事長からのお仕置きが怖いのか、途端にその場で崩れ落ちる結締。

何だかんだで揃えば賑やかになるこのメンバーの空気に、拓夜は思わず笑みを浮かべた。

そんな彼の前に、

「拓夜くん…」

「…亨さん」

亨は拓夜の前に立ち、彼の顔をジッと見つめた。

彼から溢れ出る闘志が全てを物語っている。

拓夜の目を見て、亨はこれまでの拓夜のデュエルを把握した。

「良い顔付きになったな…どうやら君は、また一段と成長したらしい…!!」

「皆さんのお陰です…！！　皆さんを目標をしてきた事で、俺はここまで来れた…！！」

そう言う拓夜の瞳は凛と輝いている。

「ですが…俺はまだ、こんな所じゃ止まれない…！！　亨さん…俺は貴方とも決着をつけたい！！　亨さんが葉月とデュエルした時みたいに、俺も…亨さんとあんなデュエルがしたい…！！」

熱き闘志をぶつけてくる拓夜に対し亨もまた、胸の奥から熱くたぎる何かに気付く。

（なる程…結締も拓夜くんのこの気持ちに触発されたのか…！！今の拓夜くんは、紛れもない真の決闘者…！！）

思わず自分も拓夜とデュエルしそうになる亨は、上着のポケットから携帯電話を取り出し、時間を確認する。

「ああ…俺もだ。だが…どうやら時間のようだ…！！」

「え…」

彼の言う時間が、いったい何のことか分からない拓夜。
亨は今も成瀬からガミガミと説教をされる白石に

「白石、そろそろ時間だ。今から向かわなければ、もう時間がない…！！」

「ム…もうそんな時間か…？」

「西条ちゃん…この際だ。俺も一緒に行くぜぃ！！」

ＯＣＧ研究会の先輩である三人がこれからドコに向かうと言うのか？
そんな拓夜の疑問に答えるように、成瀬がそれに答える。

「三人はこれから全国に出向いて、デュエル教室を開かれるんです」

「デュエル教室…！？」

そういえば前に広太郎とデュエルをした時に、結締がそんな事を言っていたような…。

「拓夜くん…今直ぐには無理だが、約束するよ。君とのデュエルを…！！」

「ええ…その時までに俺は、今よりもっと強くなってみせる！！仲間達と一緒に…！！」

互いに誓い合う二人の決闘者。

亨達は全ての人達にデュエルの楽しさを広げる為に…。

そして拓夜は、己の夢へと向かい進む為に…。

館内から出て行く三人の先輩を見送りながら拓夜と葉月、二人の卒業デュエルは幕を閉じた。

※

三上市の中央に聳え立つトリティニータワー。

その隣に再建されたトリティニードームを、拓夜はホテルの窓から眺め見ていた。

夜景のネオンが煌めくその幻想的な景色に、拓夜は胸の奥が熱くなっていくのを感じていた。

いよいよ明日が、プロリーグの決勝戦。

耳に当てている電話の受話器からは、彼女である成瀬の声が聞こえてくる。

『いよいよ明日が決勝戦です！私のクラスの皆さんも、拓夜さんの話題で盛り上がってたんですよ！』

「ハハ…ありがとうって伝えといてくれるか？っていうか、俺の話題になるって事は、花穂に負担掛けちまってるよな…悪い」

『…？何で拓夜さんが謝るんです？今や拓夜さんは、学校中で話題の人になってるんですから！私としては、至る所で拓夜さんの話題が聞けて、毎日が楽しいですよ？』

「…そっか」

プロリーグが始まってもう半年が経つ。

プロリーグデビュー開始早々から、拓夜はその実力を遺憾なく発揮し、瞬く間にその名を全国へと知らしめた。

「なら、だからこそ…だな。明日は決勝なんだ…気を引き締めないと…！！」

『確か明日の決闘の相手は…前に拓夜さんがデュエルしたって言う…』

「ああ…。叶…叶広太郎だ…！！」

インヴェルズ使いの決闘者。

広太郎はやはり今年も決闘まで進出してきた。

アドバンス召喚を駆使し、場を圧倒する広太郎は強敵だ。

相手にとって不足はない。

「きっとアイツは、前に戦った時よりも強くなっているに違いない…！！　相手にとって、不足はないぜ…！！」

『フフ…拓夜さんの熱い気持ちが、受話器越しに伝わってきます…！！　拓夜さんはこれから何をされるんです？』

「まぁいつもみたく、デッキ調整だな…！！　全力を出し切る為に…！！」

『じゃあ私は邪魔しない方が良いですね…。拓夜さん！明日はクラスの皆さんと一緒に、応援に行きますから…頑張って下さいね！！』

「ありがとう、花穂。絶対に皆の期待を裏切らないよ…！！」

そう言い電話を終えた拓夜は、テーブルに置かれた自分のデッキを手に取り、一枚一枚確認していく。

最近はこうしてカードに触っている時間が好きになっていった。

一枚のカードから連なる、無限の可能性…。

それらを巧く引き出してやる為に拓夜はその日遅くまで、デッキ調整に励んでいた。

※

その日、拓夜は夢を見た。

それが夢だと認識するのは容易かった。

目が覚めるとそこは、辺り一面がピンク色の靄で包まれた空間。

自分はつい先程まで、ホテルのベッドで眠っていたのだ。

だったら此処は何処だ?

分からない…なら夢に決まってる。

(何だここ?夢にしちゃあ…何だか妙にリアルに意識があるし…それに…)

辺りをぐるりと見渡しながら進む拓夜は、恐れはなかった。

自然と進む足取りが、どこか懐かしくさえ感じてしまう…そんな気持ちだった。

「もしかして…前にも一度見た夢なのか？たま～にあるよな…そういう夢が…っ！？」

そこまで呟いて、拓夜はある事に気付いた。

それまで自分を取り巻くようにしてたピンク色の靄が、徐々に晴れていったのだ。

（…っ！？　誰かいる…！？）

靄が晴れていく事で視界が回復していく最中、自分の正面に誰かが立っている事に気付いた。

一体だれなのか？

思わず警戒する拓夜は、その人影が徐々に此方に近付いてくるのを感じながら、じっと待つ。

「……」

ドクンッ…ドクンッ…ドクンッ…

辺りが静寂なせいか、自分の心臓の音がいつもより大きく頭に響く。

この胸の激しい動悸は何なのか？

怖い…？

いや、違う…！！

（この胸の高鳴りは…まさか…っ！？）

そして遂に、その人物が姿を現した。

見間違える筈は無かった。

やはりそうだ…この胸の高鳴りは、恐怖からくるものではない。

この熱い鼓動は…！！

「やあ、久しぶりだな…拓夜くん」

「…亨さん…っ！？」

まるで自分がここに現れるのを知っていたかのような。

驚く自分とは対照的に亨は早速、自分の腕に装着してある決闘盤を構えた。

「思い出さないか？ここは俺と拓夜くんが、初めて出逢った場所…そして、再びデュエルをしようと約束した場所…！！」

「ぇ…っ！？」

いきなりの事に思わず呆気にとられる拓夜。

しかし、困惑は最初の一瞬だけであった。

「…っ！？　こ、これは…っ！？」

ここに来るまでに四散したピンク色の靄が再び取り巻き、みるみるうちに拓夜の中に取り込まれていったのだ。

「うっ…ぅぁぁあああっ！？」

「怖がらなくて良い…それは、この世界に飛び散った拓夜くんの記憶…以前、ここでデュエルした時の君の記憶なんだ」

「ーーっ！？」

全ての靄、もとい記憶を取り込んだ拓夜は大きく息をつき、その肩を上下に揺らしていた。

そして思い出す。

昔この場所で、何が行われていたのかを。

昔この場所で、自分と彼は何を約束していたのかを。

「ここに迷い込んだ君とデュエルをして、俺たちは互いに約束した。一緒にデュエルを楽しもうと…そして、もう一度デュエルをしようと…！！」

「…そっか、俺だけが忘れてたんだ。文化祭のあの日、亨さんは俺の事を覚えてくれてて…俺に声を掛けてくれたのに…」

「それは仕方ないさ…けど、今はもう思い出しただろう？」

「ええ…！！」

拓夜はそう言うと顔をあげ、頭の中でイメージする。

今の自分の信ずる最高の仲間（デッキ）、最高の切り札（カード）を。

すると、どこから現れたのか、拓夜の腕に決闘盤が装着された。

「この世界では、イメージした通りにデッキが組まれる…でしたよね、亨さん！！」

「ああ…これで互いに準備が出来たようだな…！！」

夢の空間にて対峙する二人の決闘者。

西条拓夜に西条亨。

「今の俺を…卒業式の時と同じだと思ったら、大間違いだぜ？亨さん！！」

「ああ…全力でいくぜ、拓夜くん！！　今こそ俺たちの、本気のデュエルだ！！」

そう言うと、二人は同時に手札を用意し、互いに笑みを浮かべながら

「行くぜ…！！」

「来い、拓夜くん…！！」

夢の世界、約束の場所…。

誰も知らない二人だけの世界にて、西条拓夜と西条亨。

二人のデュエルが始まった。

（亨さん…貴方を倒し、デュエルチャンピオンに…俺はなるッ！！）

『デュエル！！』

頂を目指す者（後書き）

この小説を読んで頂き、本当にありがとうございます。
さて、今回の話をもって『頂を目指す者』は終了です。

小説を個人的な趣味で書き始めたのが今から約3年前かな？
きっかけは些細な思いつきでした。
漫画やアニメの遊戯王シリーズを見て、友達同士でデュエルをしてて

「なんか…オリジナルの遊戯王小説を書きたいな…」

と思ったのが始まりです。
考えるだけなら幾らでも案やキャラクターが出来ました。
しかし、いざ文章を執筆する時になると、上手く文章を繋げていく事が出来ずに何度も挫折しました。

このサイトで書かせて貰って思った事は、やはりプロの小説家は凄いという事です。
小説家だけでなく、アニメやドラマの脚本家も今や尊敬です。

毎週の遊戯王を観てて思うのは、どういう展開にデュエルを持ち込むのか？や、どういうキャラクターが登場し、どう会話を進めていくのか？
どんな世界観？どんな伏線？

それらをどう纏めるのか？と、毎度毎度考えながらずっとアニメを見ています。
創作意欲をチャージする唯一の時間です（笑）

実際にここまで小説を書き終えて、そして自分自身で読み直して驚いたのが、僕の書いた小説が、僕自身の生活に反映しているんだなぁ…という事です。

例を挙げるなら、前に友人のリアル結締くんとデュエルした時に、彼に言われた事…

「今日は拓夜ちゃんデッキ持ってきてる？あれとデュエルしてみたくてさ」

あの時はラストデュエルを執筆中で、デッキが持ち合わせになくデュエルが出来ませんでしたが、凄く嬉しかったのを覚えています。僕だけでなく、他の人にも浸透してるんだって思えた事が、何よりの喜びでした。

さて、僕自身の気持ちはここまでとして…

今回の話は如何でしたでしょうか？
結締との激闘を終えた拓夜は、終にプロリーグで決勝戦にまで上り詰める事ができました。
そしてその前日…

いつか見た夢の世界での再会、そして再戦。
拓夜のデュエルはまだ、始まったばかりだ…！！

というような流れで締め括らせてもらいました。
最後の方になって、僕自身がかなり書くのを躊躇いながら…なせいか、上手く描写が伝わらなかったら申し訳ございません。

最後に…

この小説を通じて出会えた多くの皆様に、心より厚く御礼を申し上げます。
皆様が応援して下さったからこそ、此処まで書き続ける事ができました。
まだまだ若輩の身ではありますが、皆様が掛けてくださった御言葉は、今もずっと僕の胸に刻み込まれております。

それらの言葉を励みに、頑張っていこうとおもいます。

本当に、本当に、ありがとうございました…！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4898j/

頂を目指す者

2011年9月5日12時56分発行